

言葉を“面白狩る”

——広島の古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

高橋 新一 編

はじめに

広島近世古文書の中から、面白い言回しや、辞書に見つかりにくい言葉を探し出し、調べてみます。

近世文書をみていると、解らない言葉が次々と出てきます。すぐに辞書で調べます。電子辞書でたいい用が足りませんが、載せてないときは重い辞書を引張り出してページを繰ります。それでも見つからない言葉があると、色々のやり方で調べるので、手間が掛かります。

以前は、「辞書は何でも載せている」と思っていました。ところが、古文書を読むようになると、捜し物が見つからないことを度々経験するようになりました。考えてみると、これは当然のことで、限られた頁数の辞書に全ての言葉を収録できる訳がない。いや、その前に、大きな言葉の海を相手に全ての言葉が調べ尽されている筈がない……。

また、見つけ出しても、不適切な解説の場合も見られます。辞書の編集者として間違うことがあっても

不思議ではありません。

辞書に載せてない言葉でも、辞書を武器として、古文書をあさり、比較すると、意味が明らかになる場合があります。

古文書は、いわゆる歴史用語だけでなく、〈何でもない言葉〉でも、解らないと正確に理解できません。ここに取上げた言葉は、編者が〈面白い〉と思つたものを調べています。題して、「言葉を〈面白狩る〉」。

これは、二〇〇六年七月から十二月までに、同名のブログに載せたものを再編集したものです。

二〇〇七年一月

高橋 新一

参考辞書

岩波書店『広辞苑』第四版 電子ブック版
小学館『日本国語大辞典』
学習研究社『漢字源』電子ブック版
岩波書店『岩波日本史辞典』CDROM版

難有狩

「(享保三年正月)廿七日、百姓千四五百人程願筋有之、思ひく之手道具相携……御館近所大腰掛迄余程入込候処、望月番五出合候て、大勢罷出候儀難心得、願之儀有之候は聞届可遣由申渡候処、百姓共難有狩」(『広島県史』)

(享保三年(一七一八)一月)廿七日、千四五百人ほどの百姓が、願の筋があると、思い思いの(武器)を手にして押しかけ、御館の近所、大腰掛までだいぶ入り込んだところ、(三次勘定奉行)望月番五が応対に出て、「大勢で罷り出るとはけしからぬことではあるが、何か願の儀でもあるのなら聞き届けて遣す」と申し渡すと、百姓共は難有狩

享保三年、三次支藩領の一揆の緊迫した様子が書かれた文書です。

近世文書では当て字をよく見かけますが、この(難有狩)を見たときは、「なんと、江戸時代の文

書は面白い!」と思いました。これを、当時の人が書けば、(面白狩)とおもしろがる。とても書くのでしょうか。

候半

「余寒甚候所、いよいよ弥、御堅栄被成御凌候半とめでたく存候、愚、無事にくらし申候、御安心可被下候」(『蕪村書簡集』)

余寒の厳しい折柄、ますます御堅栄にお過しのこととおめでたく存じます。わたくしも無事に暮しておりますので、ご安心ください。

蕪村の書簡から、書出しの部分です。「候はん」が「候半」と表記されるのに驚きますが、珍しい例ではなく、手紙ではよく見かける、紋切型の決り文句です。

「心を込めた手紙」は書きにくい。会社などでは、ステレオタイプの通信文は当然のことですが、私信でも、蕪村にならって(決り文句)を遠慮なく使えばよいと思っています。

續

広島藩では、藩財政の窮乏を補うために、「御用銀」という名目で、豪商・豪農などから借り入れて、利息だけを払っていました。罹災するなど、非常の場合には、請願すれば元金を還付することもあったといえます。

次の文書は、御用銀のお下げの願書です。

「私亡父嘉右衛門、先年於平田屋町指上申候御用銀御下ケ之儀、近年度々奉願候処、追々御下ケ被為遣、……右御下ケ被為遣候御用銀を便りニ仕露命を續キ居申候」（安永四年（一七七五）「堀川町覚書」）

私の亡父嘉右衛門が先年平田屋町で差し上げました御用銀をお返しいただくよう、近年たびたび御願しましたところ、少しずつ御下げいただき、……この返していただいた御用銀を便りに露命を續いでおります。

「露命を續キ」というこの文言をどう読むのでしょうか。

【露命】（『現代新国語辞典』）

「文」すぐ消えてしまう露のようにはかない命。

「―を繋ぐ（＝細ぼそと生活してゆく）」

とあります。「露命を」とくれば当然「繋」に続くはずです。ところが、「續」の漢字が使っておりません。すると逆に、この字は「つなぎ」と読むことになります。

「續米銀」（『広島県史』近世）なる言葉もあります。ここには、編集者のつけた「つなぎ」のルビも見られます。

【繋】（『日本国語大辞典』）

「方言」米銭などを各人各戸が出しあう。（岡山・広島・山口）

とあります。「米銀」の文意に合致します。

この「續」の文字は「繋」として使われ、「つなぎ」と読みます。広島県の「地域文字」（特定の地方でのみ通用する文字、笹原宏之『日本の漢字』）かもしれません。

なお、「續」は『大漢和辞典』によると、国字の俗字で「かせ、かせ糸」の説明があるだけです。

時化味

「芝地、或ハ時化味等之場所、新田ニ取立候へは、……」（『地方落穂集』卷六）

芝地（芝の生えている草地）や「時化味」などの場所を、新田に開発したなら

【時化】（『日本国語大辞典』）

海が荒れること。暴風雨のために漁獲が少ないこと。転じて、収入や収穫が少なく不景気なことを。

そういうえば、「しけた顔をするな」とか「しけモクを吸う」といいます。「味」は「地味」でしょう。

【地味】（『漢字源』）

農作物を育てるための、土地の性質のよしあし。土地の肥えぐあい。

すると、「時化味等之場所」とは、「作物のできそうにない土地」の意味だろうと思います。「しけあじ」とでも読むのでしょうか。

給

福山藩天明一揆は、天明六年（一七八六）暮から翌年二月にかけて「十万石残らず惣どう（騒動）に罷出」という、全藩をゆるがす百姓一揆でした。その様子を細かに記した「西備遠藤実記」（『府中市史』）に次の記事があります。

騒動もおさまると、「発頭」の探索が始ります。同心三人が警固四人を召し連れて文蔵の逮捕に向います。

「文蔵が宅へ行給ふ頃は、夜中人定を過る頃也、然に、御同心、御上意の声を掛られければ、文蔵俄に睡を覚し、左社有なん、今宵は夢見も悪敷で、いかにも心定かならず、うつらくとして居たりければ、最早空腹に相成りぬ、乍^{はばかりながら}憚^{はげ}、御役人衆中、暫時御宥免被下度、鳥渡茶漬給度候間、女房共茶漬致せよと申付る声、……文蔵を縄手を以搦捕、福府をさして被帰けり」（西備遠藤実記）

文蔵の家に行かれるころは深夜を過ぎていた

が、同心が「御上意」の声をかけると、文蔵は俄かに目を覚まし、「やはりそうか、今宵は夢見も悪く、うつらうつらしていたので、腹も空いた。御役人衆、しばしお待ちください。ちよつと茶漬を給たにますので。女房、茶漬の用意を」と申し付け、縄手で搦め捕られ、福山に牽かれていった。

事件後まもなく書かれたという「西備遠藤実記」のリアルな記述には驚かされますが、面白い言葉もちよつと気になります。

「鳥渡ちよつと」は勿論、当て字で、「一寸」とも書きま
す。これも当て字です。

「給」を「食べる」の意味で使うことは、今はないので、『広辞苑』には解説がありません。『日本国語大辞典』はこう説明しています。

【食】たぶ。（『日本国語大辞典』）

↓ たべる。（食）

【食】たべる。（『日本国語大辞典』）

「文語」たぶ。「たぶ（賜）」に対する謙譲語。「たまう給」と同じく、本来は「いただく」の意であるが、特に「飲食物をいただく」場合に限

定して用いられる。

拵

弘化四年（一八四七）、安芸国安芸郡蒲刈島で三十
六軒を焼失する大火がありました。

「当島之内三ノ瀬町、去十六日午上刻、百姓又蔵居
宅より出火焼失仕、折節東風強く大火ニ相成、銘
々居宅三拾六軒焼失仕候、早速私共駆付防方取計
候得共、昼中ニて多く農業罷出、漁師共ハ漁拵ニ
罷出、無人ニ御座候て、防方甚以六ヶ敷」（『下
蒲刈町史』）

この島（下蒲刈島）の三ノ瀬町で、去る十六日の
昼前、百姓又蔵の家から出火して焼失しました。
折節東風が強く、住家三拾六軒焼失する大火に
なりました。早速私共も駆け付け、防火の取計
いをしましたが、昼中のこととて、多くは農作
業に、漁師共は「漁拵」に出ており、無人のた
め防火が困難で、

「山拵等之浮所務」（『吹寄青枯集』）

山仕事での雑収入

という用例もあって、「拵」は「稼」と同じだと解ります。確認のため『大漢和辞典』にあたると、

【拵】（『大漢和辞典』）

ロウ 弄の俗字。「邦」はたらく。家業をはげむ。

と説明し、日本語では「家業をはげむ」の意もあるとしています。その内容は「稼」ですが、「かせぎ」と明示して欲しかった。

【拵木】（『広辞苑』）
かせぎ

①紡錘つむでつむいだ糸をかけて巻く「工」字形の器具。かせ。②木のまたで造って傾く物を支え、または高い所へ物を押しあげるのに用いる具。

③紋所の名。拵にかたどったもの。

この「拵」は「木へん」で、探している「手へん」の字ではありません。しかし、「かせ」「かせぎ」と読みます。

拵を「かせぎ」と読むのなら、「稼」の代わりに使おうではないか、ただ、「木へん」はいかにも拙い、手仕事で稼ぐので「手へん」の「拵」こそがふさわしい。「拵」なる使い方は、こうして生れた、

と考えたのですが、どうでしょうか。

この文字、古文書では珍しくないものです。刊本『繪本二島英勇記』にも「奉公拵かせぎ」とあり、「かせぎ」のルビがありました。

半メと五十町里

文化元年（一八〇四）、林英存は、友人五人と長崎に向けて広島を発ちました。二泊目は防州今市。

「鶏の鳴て東雲近きと思ふ折、雨の切々と降来るに起かね遅く立出、半メ至れハ呼坂、過て一里は峠市と云。」（『筑紫道草』）

鶏が鳴いて「夜明けも近い」と思うが、雨がシトシト降るので起き兼ね、宿を遅く立出した。半メ行くと呼坂、そこを過ぎて一里行けば峠市という。

「半メ」とは、聞き慣れない言葉ですが、

【はんめ】（『日本国語大辞典』）

〔方言〕半里。半みち。（岡山県・山口県）

一里は三六町〓三・九二七kmだから、半里はその

半分の一・九六三km、と簡単に計算……できないところがある。

太田南畝は、廿日市から西条四日市まで歩いて、「けふの道、十里半といへれど五十町一里なり」(「小春紀行」)

今日歩いた道は道法十里半というが、五十町を一里とする道である。

と書いています。つまり一里 \parallel 三六町 \parallel 三・九二七kmはなく、一里 \parallel 五〇町 \parallel 五・四五四kmのこと。南畝は、この日、

$$5.454\text{ km} \times 10.5\text{ 里} = 57.267\text{ km}$$

も歩いた計算で、健脚です。

安政六年(一八五九)、長崎に向かう越後長岡藩牧野家の家臣、河井継之助も、

「本郷を立、山へ掛る、惣芸州領、道ニ松の并木ありて、道も好けれども、五十丁ノ、七十二丁、一里ノト云て、路ハすこふる遠、往来ハさみしく、山道故、退屈ニ思」(「塵壺」)

本郷を発って、山道へ掛る。芸州領では全て松の並木があり、道もよいけれども、五十丁や七

十二丁を一里と数えるので、路はすこぶる遠い。往来はさみしく、山道でもあり、退屈する。

と旅日記に書いています。

小泉編『単位の歴史辞典』によると、

「里が行程に用いられるようになってからは、一定の距離単位というより、地域により異なる旅程の区切りになった。そこで地方によりいろいろな里ができ、四十町里、四十八町里、五十町里、六十町里、七十二町里があった。主として嶮阻の度合によるもので、七十二町里は山陽道である。東海道・中山道は三十六町。」

五〇町一里と七十二町一里の違いはありますが、山陽道は平坦な所が多いので、長い「一里」になっていたのでしょうか。

「里」とは距離の単位ではなく、距離感の単位? とは……、計算するのがバカらしくなりました。

「諸街道区々之丁数有之、人馬之勞不同一候ニ付、今度御改正相成候ニ付、御朱印地ヲ始、革田扨居候地等ハ、是迄上筋ニおゐて里程除キニ相成居候得共、当街道ニおゐても左様之分有之候得は悉ク

丁数相加へ、且、五十丁、又ハ七十式丁等ヲ以一里と定来り候分ハ、総て三十六丁一里二積」(明治二年(一八六九)『三原市史』)

諸街道の里程がまちまちで、人馬の労れも同じではないので、今度御改正になった。御朱印地をはじめとして革田の居所など、これまで上筋では里程から除いていたが、当街道でもそのようなことがあれば、全て町数に加え、また、五十丁、または七十二丁等を以て一里と定めていた分は、総て三十六丁を一里として計算し、

との指示を民部省が出したのは、明治二年(一八六九)のことでした。五〇町一里も変な話ですが、里程から除外する地域もあったとは、何のための里程かと言いたくなります。

「明治式巳霜月、朝廷より被仰之趣ハ、諸国海道町々ニて人馬之ツカレ^{ひとかたならざる}一形成ニ付、悉丁数相改、都て三十六丁を壺里之積りニ取しらへ、可差出旨被仰付、依て左之通廿日市与頭善次殿入村被致、兼て六尺五寸定法ニハ候得共、従来之里体と不都合之義も有之、小内含ミを以六尺壺間之積りニ致、如斯ニ御座候、……」(明治二年(一八六九)「佐伯

郡草津村国郡志御用下しらへ書出帖」の付紙)

明治二年(一八六九)十一月、朝廷から、「諸国の海道町々にて、人馬の疲れがまちまちなので、すべて丁数(長さ)を三六町一里として再調査して差出せよ」との指示があり、そのため廿日市与頭善次殿が草津村に入村(再調査されました。従来は六尺五寸一間の定法でしたが、六尺一間で調べました。もともと、今までの里程と大きく相違するのも拙いので、多少の含みを持たせました……。

それまでの五〇町一里を改めて、三六町一里にするだけでなく、六尺五寸一間を六尺一間として里程を改めたということでしょう。

幼少より多病

医師免許の制度のなかった江戸時代でも、広島藩では、寛政六年(一七九四)から、「当人願出ニ、師匠之添書ヲ取、願出可申候」ということで、藩の許可が必要になりました。

「当村医師文礼倅良吉義医師成御願書附

アキ郡矢賀村

覚

一

良吉

当寅式拾七歳

右之者儀、私倅ニ御座候処、幼少より多病ニ御座候て農業等も難仕候ニ附、不得止事御当所山中碩庵様御頼申上、医師修行為仕候処、至極志し宜敷、追々出情仕候ニ附、良仙と改名仕、惣髪ニて本道医業為仕度奉存候間、何卒医師成之儀御赦免被為成下候様奉願上候、右之趣は碩庵様よりも御申出被下候筈ニ御座候間、余は宜敷御執成被仰上可被下候、為其書附差上申候、以上

寅五月

医師文礼

庄屋新兵衛殿
同見習新右衛門殿
与頭衆中

私の倅、良吉(二七歳)は、幼少より多病のため農作業も難しく、やむを得ず御当所の山中碩庵先生にお頼みして、医師を修行させましたとこ

ろ、至極志もよく、努力もしましたので、良仙と改名して、惣髪で本道(内科)医業をさせたいと思いますので、なにとぞ医師成の儀、お許しいただきますようお願いいたします。

この文書を額面通りにとつてはいけません。

「態申遣ス

其村百姓多作倅孝五郎、生得病身農業難相成、依之野坂三益弟子ニ罷成、医師成之儀、願之通聞届候条、此旨相心得、可申聞者也

申正月

佐藤権六印
土屋惣兵衛

市川村庄屋直三郎

同吉蔵
与頭共

孝五郎さんも「生れつき病身で、農業はできないので」医者になりたいとのこと。多くの「医師成願書」を見ましたが、みな「生得病身」です。大ウソとすぐ分ります。

良吉の願書を受付けた庄屋さん、ウソと知りながら、「得と相約申候処、相違無御座候」と割庄屋宛に奥書をしています。安芸郡郡役所も「其村医師文

礼俸良吉義、生得多病農業難出来ニ付、医師成之義願之通り聞届遣し候条」と許可しています。

「本音」と「建前」という言葉がありますが、「農業ができない虚弱体質なので……」と平気でウソの出願理由を書くのは、百姓の子は百姓という建前があるので、許可する側も、ウソと知りながら……ではなく、ウソだという意識もなく処理したのではないか、と思います。騙されるのは現在の私たちだけ。

可成丈け

「病気の節は可成丈け保養を加へ」（『徳川幕府県治要略』）

病気の時には、できるだけ養生を加えという一節があります。

「可成丈け」をどう読めばいいのか、いささか迷います。

「可成」または「成可」なら、「なるべく」（できるだけ）と読むことができます。「成丈」なら、「なるたけ」（できるだけ）と読みます。

これが一緒になって、「可成丈」になると、話がかんがらがつてきます。「可成」に「丈」が付いたので、「なるべく一だけ」なのか。それとも、「成丈」の前に「可」が付いて、「なるたけ一べく」と読むのか。

【成可丈、可成丈】（『日本国語大辞典』）

なるべく一だけ。成丈に同じ。

に軍配が上がりました。

古語辞典によると、「べし」は活用語の終止形に付く、つまり「成」には続くが、「丈」には続かない、とのこと。「飛ぶ」べしはあっても、「空」べしはないですね。つい、「成丈」に迷ってしまいました。

「可成程」という言い回しもよく使われていますが、なるべくほどいまでは死語となっています。

「領主方よりも可成程力を尽し、随分と救之手当仕」
領主方よりもできるだけ力を尽し、随分と救い
の手当をして、

可相触候

御触書は、たいてい、次の文言で終っています。

「此旨町中急度可相触候、以上」

この旨を町中に必ず触れ知らせなさい。

ここで、「可相触候」は、「あいふれるべく」と読むのか、「あいふるべく」なのか、判然としません。

そこで、「古語辞典」で調べてみました。

まず「可」は「活用語の終止形につく。（ラ変形活用語には連体形に付く）」とあります。次に「触（ふれる）」ですが、なんと、載せてありません。しばらくして、「触れる」は口語、文語は「触る」にやと気付きました。

【触る】（『角川古語辞典』）

〔他ラ下二〕 広く告げる。布告する

「触る」は「ラ行下二段活用」で、それは、「触れ触れ触る触る触れ触れよ」と活用しますから、その終止形は「触る」で、これに「べく」（べし）の

連用形で「候」につながるが、続いて「触るべく」となり、「候」で終わります。

「可被相触候」のときは、「らる（被）」は動詞の未然形に付くので、「あいふれらるべく候」になります。

本当は、面倒な文法を持ち出すまでもなく、各自の持っている（日本語センサー）が働いて判定すべきことですが、残念ながら、「食べれる」には拒否反応を示す私の（センサー）も、この場合は動きませんでした。

この（日本語センサー）を鍛えるには、漢文の素読に倣って、子どもの頃に、『奥の細道』全文を暗唱する……というのはどうでしょうか。

当時

近世古文書での使い方と現在の表現では大きくかけ離れた言葉があります。

「当年少将様御七十年之御年賀被為在候二付、当時牢舎等のもの共を始、都て御咎メ中のもの共、此

度格別之御仁恵を以、夫々今日御赦免被成下候、
其外追放出奔者等、当時良民ニ相成候もの……、
追々可被差免候間」(文化九年(一八一二)「横山家
文書」)

今年、少将様(広島藩前藩主浅野重^{しげあきら}晟)の古稀の
祝いとして、当時牢舎等に繋がれている者
や全て御咎め中の者に今日恩赦がおこなわれ
た。そのほか、追放・出奔者など、当時良民に
なっている者も追々と許されるので、……

「当時」の使い方が現在と違います。
今は、言うまでもなく、

【当時】(『広辞苑』)

(過去の)その時。その頃

の意味で使うので、辞書を引くこともしません。と
ころが、辞書をよく見ると、

【当時】(『広辞苑』)

現在。ただいま。

の意味も出ています。上記の例文で、「当時」は、「現
在」と読みかえると意味が通るといふ訳です。

今は「昔」として使われ、昔は「今」を意味する

とは……、ややこしくて面白い話です。

無数

「無数」という言葉も、〈表裏のある言葉〉です。

【無数】(『広辞苑』)

数の限りないこと。数えきれないほど多いこと。

【無数】(『日本国語大辞典』)

多かつたり少なかつたりで定つた数がないこ
と。

ところが、次の用例を見ると、上記以外の意味も
ありそうです。

「胡堂老宇 当村本郷市ニ御座候、以前市立之節は
参詣も多ク賑々鋪繁栄仕候由之处、当時は市立不
申故、参ルものも無数方ニ御座候」(「穴村国郡志
下調書出帳」)

胡堂は当村本郷市にあります。以前は市立のと
きは参詣も多く賑やかで繁栄していたそうです
が、現在は市が立ちませんので、参詣者も「無
数」の方です。

ここで「無数」を文字の通り、「少ない」と理解すると、意味が通ります。

「国々より菜種作り増、大坂表へ積廻、油直段下直ニ可相成処、近年又候猥ニ相成、大坂へ積廻候菜種無数候ニ付油高直ニ候」（『徳川禁令考』）

諸国で菜種を増産し、大坂に廻漕すれば、油の値段は安くなるはずなのに、近年はまたまたいい加減になって、大坂へ廻漕する菜種が「無数」になったため、油が高値である。

「菜種が無数（少ない）」と理解する必要がありません。

近世文書で使用例を調べてみると、「少ない」を意味する「無数」は、それこそ無数にあります。同じ言葉が、あるときは「多い」となり、「少ない」となるので、〈表裏のある言葉〉と勝手に名付けました。

立宿

「頃日、宮嶋市立候ニ付、疑敷者并慰もの之類、若

忍ひ候て此許へ罷越候共、立宿一座之出会も堅仲間敷候」（『堀川町覚書』）

先頃、宮島で市が立ったので、怪しい者や慰者の類が忍んで広島に来るかも知れないが、立宿や一座の出会の間を使わせてはいけない。

ここに「立宿」という言葉がでてきます。『広辞苑』には項目もありますが、『日本国語大辞典』にはありません。

【立宿】^{たちやど}（『日本国語大辞典』）

嫁入りに際して、婚家に入る前に、休息や化粧直しのために立ち寄る家を、九州という語。中宿。

「黄昏に大里へ着ぬ。舟間や久七と云者に立宿し、小舟を買って宵の初刻に赤馬関、紀の国や嘉右衛門へ投宿す。」（『筑紫道草』）

黄昏時に大里（門司）に着き、船間屋久七に立宿し、小舟を雇って宵の初刻（午後七時～九時）に赤馬関（下関）の紀の国や嘉右衛門へ投宿した。

婚礼に無関係のこの用例では、辞書の説明は合いません。しかし、「途中で立ち寄り、一休みする宿」

と考えるなら、二つの用例とも当てはまります。

ついでに、「中宿」を調べると、

【中宿】（『広辞苑』）
なかつど

- ①途中で泊ること。また、旅宿。なかやどり。
- ②江戸時代、宿元のない奉公人が、出替りの時などに宿下がりした家。奉公人の宿。
- ③江戸時代、寝宿のこと。また、男女を密会させた宿。
- ④上方で、遊里の引手茶屋などをいう。
- ⑤婚礼のときに花嫁が婚家に入る前、いったん入って休息する家。

と、多彩です。上記の例は①に当てはまります。

「一座の出会」なる表現も意味深長で、また面白。
い。

買う

前に紹介した資料「筑紫道草」は、次の書き出しから始まります。

「文化元甲子年仲秋、筑紫の方へ向とて、同行五輩に業力二人と、本川より小舟を買ひ、月下に解纜

し、清風に帆を捲、漂平として浮出れば、」（「筑紫道草」）

文化元年（二八〇四）八月、「九州へ行く」と、同行五人と業力ごうりき二人で、広島本川（太田川）から小舟を買ひ、月下に艫綱ともづなを解いて、清風に帆を捲き、風に吹かれて船出をすれば、

「船を買ってどうするの？」と思い、「買う」を辞書に当りました。

【買う】（『広辞苑』）

（「替ふ」と同源。交換する意）①品物や金とひきかえに、自分の望みの品物を得る。⑤人を雇う。

⑧「盗む」の隠語。

「買う」は「雇う」の意味でした。疑問氷解。

一行は旅行中、何回も「小舟を買」っています。

「六反帆の小船、三貫文にて買ひ、水主三人にまかせり。同所月もろともに出しほの此浦過て、夜半竹嶋にて潮を伺ふ」

六反帆の小船を三貫文で雇い、水主三人に任せた。同所を月の出と一緒に出発し、出潮の浦を過ぎて、夜半に竹嶋泊まり、潮待ちをする。

九州からの帰りでも、下関で、

「便船の聞合せしに、折しも絶間なれば、小船を買
んと云に、当所の早船と云有、水主四人にて百式
拾目と云。二日限りて漕着よし。されとも舟路ハ
定かたしと陸地の装ひし、巳の刻過て此家を辞
し、」

便船を問い合わせたところ、丁度適当な便が
ない。それなら小船を雇おうと言え、ここ
には「早船」と言うのがあり、水主四人で百式拾
目、二日で漕ぎ着くと言う。でも「舟路は旅程
が定かでない」と陸路の服装で、午前十時過
びにこの家を出て、

下関のような大きな湊では小船をチャーターしな
くても、定期の便船があったものと思われま

裏入と横間

広島堺町四丁目北側の佐伯屋新右衛門の家が藩に
没収され(闕所)、入札により払下げすることになり
ました。その物件の説明に、

「一表沓間三尺八寸、裏入拾七間五尺六寸、同横間
表同前」(「堀川町覚書」)

とあります。

「表」(表間口)とは、「土地、建物などの正面の
幅」、「裏」とは「家屋の大通に面していない部分」
(『日本国語大辞典』)です。

「裏入^{うらいり}」とは、

「私居宅、表式間三尺六寸五歩、裏入拾六間、但、
建家之入六間御座候」

の用例から「奥行き」のこと、「建家之入」とは建
坪の奥行だと理解できます。

ところが、「横間」の意味がわからない。資料を
探すと、ありました。

「境内 表十間、裡横間十一間、北側裏入二十九間
一尺、南側裏入三十間二尺、坪数三百十二坪二歩
四厘余」(『知新集』延命院地藏堂)

この例では、辺の長さの違う四角形の土地で、「裏
(裡)横間」とは「表」の対辺に当る「裏口」の「間
数」(横幅)だと思います。ために、長方形とみな

して面積を概算すると、

竈 10.5 間 × 竈 29.75 間 = 312.375 坪

で、近い数字ができました。

『広島市史』も、

「城下町の家数改帳についてみると、町筋に表間口をもつ家別にその表間口の間数を書上げ、また奥行・裏横間数を註記している」

と書いています。

得御意

（手紙文などで、「得御意（貴意）」（御意を得る）なるフレーズをよく見かけます。

「御意」「貴意」とは

【貴意】 さい。（『広辞苑』）

あなたの御意見。お考え。御意（ぎよい）。「—を得たくお伺い申し上げます」

ということですが、「得る」が付くと〈面白い〉言葉になります。『広辞苑』は、

【御意を得る】（『広辞苑』）

①お考えをうけたまわる。②お目にかかる。と説明します。

「いづれ近日以参可得貴意候、以上」（蕪村書簡集）
いづれ近日中に参り、お目に掛ります。

は、②にあたります。

「未得御意候得共、一筆致啓上候」

お会いしたこともお手紙を差上げたこともありませんが、お手紙を差上げます。

の意味でしょう。

「右之通被仰渡候間、得と御申談置可被成候、右可得御意如此御座候、以上」

右の通り指示されましたので、しっかりとお伝えください。以上お知らせのため手紙を差上げました。

「右得御意度如此御座候、以上」

右御意を得たく、此の如くに御座候、以上

この二例の「得御意」は、『広辞苑』の説明①「お考えをうけたまわる」から大きく離れて、「同意を

得る」「お知らせする」までシフトした例だと思います。

申値

「当村中原と申所……砂田井手と申所より水分来候得共、水行足り不申、是以百姓共年来難渋仕候二付、孫兵衛発起仕、百姓共申値、新二延宝五巳年新井手溝相調、其後水懸り宜相成、一統相歛申候」
(上瀬野村「文化度国郡志」)

当村の中原という所は、砂田井手(川から取水する灌漑施設)という所より分水してきましたが、水が行き足りず、そのため百姓共は永年難渋していました。そこで、孫兵衛が発案し、百姓どもが申値をして、新たに新井手溝を付けました。その後は水懸りがよくなり、一同喜んでいました。ここで問題になるのは「申値」という言葉です。意味はもう分っています。「相談する」ことです。多くの文例に当たってみても、そのように理解すると納得できます。ただ、どう読むのかが分りません。

「申し」と言う言葉は沢山ありますが、「申値」は『広辞苑』『日本国語大辞典』に見つかりません。漢和辞典に、

【値】(『漢字源』)

まともに当面する。

がありました。「申値」は「申し値^あ」と読むのかも知れません。それなら、「相談する」という意味につながります。ところが、辞書は、

【申合】(『日本国語大辞典』)

身分の高い人の前で口々に言い合う。

と説明しています。「相談する」の意味を持つ言葉は、

【申合】もうしあわせる。

③話し合って取り決める。

に当ります。しかし、次の例文があります。

「双方共堤を高く丈夫にして、少も余分川のかたへ築出し候様に互ニ仕値候故」(郡要集)

双方とも堤を高く丈夫にして、少しでも多く川の方へ築出すように互に仕値^あうので

ここでは「互ニ仕値」は「互いに仕合^{しあ}う」と読む
はずです。

やはり、辞書が何と説明しようと、「申値」は「相談する」ことで、「申しあう」と読むと結論をだしました。

熟与

①「御家中之輩、風儀正敷、文武相励候様二との儀ハ、兼々被仰出、一統相守、忘却可有之様も無之筈之所、弓鉄修行ニ事寄、賭抔取扱筋合、熟与無之出会いたし候輩も有之哉之趣ニ相聞、甚以心得違之事ニ候」（『広島県史』）

御家中の輩は、「風儀正しく文武を励げむように」と今までも指示され、みんな忘れずに守っているはずなのに、弓矢・鉄砲の修行の際に賭事などしている様子、熟与これなき出会（集り）をしている輩もあるとか聞いているが、甚だ心得違いのことである。

「与」は仮名の「と」ですから「熟与」は「熟と」

になります。読みも意味も判然としません。

②「其村々懸り合無之類は、取免メ候事共も在之哉と相聞、甚しくと無之」（『広島県史』）

この文書の「しくと」を漢字表記にすると「熟与」になるのではないかと思います。もともと、「じくと」と濁るかもしれません。しかし、漢字から「じゅくと（熟と）」と読むことにします。

③「何卒此度之御趣意合永久相届候様、下方熟与精々御教導可有之候」

なにとぞ、このたびの御趣意が永久に届くよう、下々へ熟と御教導ください。

④（裁判に際して）「互ニ理屈と存込吟味を願出候事故、裁許の居合熟与不仕」

互に自分が正しいと思ひこんで裁判を願ひ出るので、判決の居り合いが熟としない……

④は「居り合いがしっくりしない」の意味、③は「きちんと御教導してください」、②は「決りからはずれている」、①は「だらしなない？ 出会い」と解釈してはどうでしょうか。

まとめると、「きちんと」に集約されます。今の言葉なら、「じつくりと」に相当するのではないかと思います。

『日本国語大辞典』で、「熟と」を見つけました
が……

【熟^{じゅ}と】（『日本国語大辞典』）

「副」④深く静かに考え込むさまを表わす語。つくづく。つらつら。よくよく。「柳之助は熟^{じゅ}ジッ」と思案している」

どうも違うような気がします。

何反帆

江戸時代、帆船の大きさを示すものに「何反帆」という言い方があります。

「尾道にて船借賃・水主賃并船賄共 但、三反帆一日ニ九分ツ、水主賃一日一人壺匁八分、水主式人、助左衛門船中賄代一日ニ壺匁宛」（『吹寄青枯集』）

「三反帆」とは、木綿布三反（一反は成人一人前の

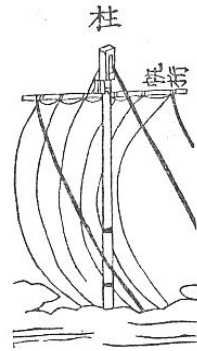
衣料に相当する分量。普通、布では並幅で鯨尺二丈六尺または二丈八尺を使った帆船……とばかり思っていました。これが大間違い。

「十八世紀末までは厚い帆布を織ることができなかった。その代わり、布地二枚を重ねて四子糸と呼ぶ太い糸で刺し子のように縫合させて丈夫にしていた。これを三幅分横につないだものが帆布一反（端）で、その幅は三尺（九十センチ）前後であった。

何反帆という呼称は、この帆布地一反を横につないだ数で、帆の長さには無関係である。一反の幅は、十八世紀後半からは帆を丈夫にするため二尺五寸（七十五センチ）程度と狭くなっているが、：

：右に述べた木綿帆は刺帆と呼ばれ、製作に手間のかかる割には丈夫でなかった。まして帆走専用船となった弁才船では、刺帆の弱さはウィークポイントの一つでもあった。この欠点を解決したのが播州の工楽松右衛門で、彼は天明五年（一七八五）太い木綿糸を使って厚くて丈夫な帆布の製作に成功した。」（石井謙治『和船 一』）

すると、図(和漢三才図会)で、五筋の布が見えますので、五反帆ということになるのでしょう。



つるはん

社倉麦を藩の役人が見分する際の作法として、「御見分之節ハ不及申、支配役之面々致見分候節も、刺・つるはん・升かけ・蕙等御用意可被成置候事」

藩の御役人が御見分の際は勿論、社倉支配役が見分するときでも、刺・つるはん・升かけ・蕙等準備しておくこと。

穀物(社倉麦の見分に必要な道具として、

刺 (米刺。俵の中に挿し入れて米を抜き出し、その品質を検査するのに用いる、斜めにそいで先を尖

らせた竹の筒)

つるはん

升かけ (枀掛・枀搔。枀に盛った穀類を縁と平らにするのに用いる短い棒。斗搔)

蕙 (藁で編んだ敷物)

などが、列举されています。

穀物の検査で「斗搔」といえば、主役は当然、「枀」です。「つるゝ」の付く「枀」を調べると、「つるはん」そのものはありませんが、近い言葉として、

【弦掛枀】 つるかけます。(『日本国語大辞典』)

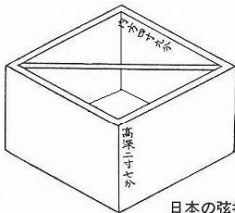
木製の枀の一隅から一隅へ鉄製の棒を対角線にわたしたたもの。京枀の一種で、江戸時代から明治時代にかけて広く用いられた。鉄判枀(かなばんます)。 つるかけ。

【鉄判枀】 かなばんます

金弦をかけた木製の枀。

がありました。この枀は「貸間あり」の枀です。「つるはん」は「弦掛枀」のことに違

ありません。「鉄判枀」ともい



日本の弦掛枀

うので、「弦判」と書くのではないかと思います。

「弦鉄をつける目的は斗概とがいをかけるとき水平にかつ平均に搔きとるためとされているが、技術的に見ればむしろ害がある。あるいは形がゆがまないように補強したものかもしれない。」（小泉袈裟勝『單位の歴史辞典』）

図は弦掛けの一升枡です。

八月に綿入

画家、岡岷山みんざん（広島藩士、岡利源太は、寛政九年（一七九七）八月下旬、都志見（広島県北広島町）遊覧の休暇をもらい、スケッチ旅行に出かけました。

「廿六日……是則加計の郷なり、人家数軒小き町あり、其並ひ八右衛門宅にて今夜の止宿をもふけたりと告、やがて内に入座敷を見るに爰にも火燵をもふけり、座定り暫くして寒さ身にしみて皆々綿入を重ね」（都志見往来日記）

八月二六日、……加計（安芸太田町）の集落で、人家数軒の小さい町もある。その並びの加計八

右衛門（鉄山経営者）宅に今夜の宿を設けたと告げられた。やがて家に入り、座敷を見ると、ここにも火燵こたつを置いている。座について暫くして寒さが身にしみ、皆々綿入を重ね着した。

「八月に寒がつて綿入を着る……」、いくら山間部でも！と調べてみました。

まず、暦。太陽暦に換算するには、【換暦】のサイトで変換してもらうのが便利です。寛政九年八月二六日を「変換」すると、「西暦一七九七年一〇月一五日」と出ました。秋の真つ直中です。

加計の町は、標高は六〇〇mくらい。一〇月一五日平年の平均気温は一四・八度、最低気温は一〇・一度の土地。広島の一月一〇日頃に相当します。

これで「寒がる訳」が多少は理解できましたが、この年は特に寒かったのかも知れませんが、

「寛政九年（一七九七）」と、西暦を気楽に併記することがありますが、これは陰暦を陽

「換暦」 <http://maechan.net/kanreki/>

暦に換算することになるので、【換暦】等で調べる必要があると思いました。例えば、寛政九年十二月十二日は一七九七年ではなく、「西暦一七九八年一月二八日」です。

下地

『広辞苑』は「下地」について、次の説明を先頭に、⑦まで説明しています。

【下地】（『広辞苑』）
したじ

①物事をなすための、また、ある状態になるための基礎となるもの。土台。素地。「―が入っている」（既に酒を飲んでいる）

例文のように、今では、「酒飲み用語」として使われるだけのような「下地」も、昔は多方面に使われていたようです。

「往古より此所にて紙をすき候に冬に至りて楮をあらひ候に、寒中の手業なれば、手足ひぐわれいづれ難儀なる事なり、然るに此所の流にて楮を洗ふ者ハひぐわれ候事なく、下地よりあかぎれのあり

し者といへとも、此流に入れハミな平癒して手足柔になり候故、扱は温泉なるへしと……」（「都志見往来日記」簡賀の湯泉）

昔からここで紙を漉いていましたが、冬になって楮を洗うと、寒中の手仕事なので、手足はひび割れて大変でした。ところが、この流れで楮を洗う者はひび割れることもなく、前からあかぎれのある者でもこの流れに入ればみな治って手足が柔らかになるので、さては湯泉に違いないと……。

「私牛馬屋破損仕申候二付、下地之古柱等取揃柱替仕度奉存候間、右私腰林之内にて本伐御赦免被為成遣候ハ、……」（文化九年（一八一二）「横山家文書」）
私の牛馬屋が破損しましたので、今まで使っていた古柱等も使って柱替えをします。私の腰林（私有林）での用材伐り出しを許可してください。

「居家老軒 但梁式間桁三間 但損建替下地之通藁葺」

居家老軒 但し梁式間桁三間 破損による建替
今まで通りの藁葺わらぶき

「下地」は、「今までの」と訳してもよさそうです。

小尻

「小尻」という、言葉があります。『広辞苑』は

【鐙】

②（「小尻」とも書く）刀の鞘尻さやじりの部分。また、その飾り。

とだけ説明しています。

「厘米御差次納メ之内……前々より御差紙少し宛之小尻り切り合出来仕候節ハ銀上ニ仕来申候」

厘米（雑税の一種）を差紙（米券）で納入する際、：
：以前から、差紙に少しづつの小尻りで切り
合？ができたときは、銀で納入しております。

「右之通相定置候得共、小内小尻少々間違之義有之候二付、」

右のように決めておりますが、内訳で小尻に少々
の間違いがありますので、

「小尻端俵等迄も少しも無間違様御取計可被成候事」
小尻端俵（規定分量に満たない半端な俵）などでも
も少しも間違いのないよう御取り計いください。
い。

「尻」とは、「末。しまい。最後の所」、「小」と
は、「数量が足りないが、ややそれに近い意を表す」
とありますので、「小尻」とは、「端数」のことと考
えると、上の例文が理解できると思います。

三斗俵と端俵

八月一八日「小尻」の記事中に「端俵」がチラと
顔をのぞかせていましたが、「端俵」とは、「規定分
量に満たない半端な俵」のことです。

「糠九石式斗八升 拾八俵 端俵式斗八升 下組」

（吉和村史）

九石式斗八升の糠ぬかを俵詰にして、一八俵と「端俵
式斗八升」になる……という意味です。この場合の
一俵の規定分量は、

(9.28石－0.28石)÷18俵＝0.5石

つまり、五斗俵だと知れます。

今では見ることもなくなった米俵は、「四斗俵」で十五貫(約六〇kg)、一人の男が肩でかつぐことができる標準的な重さだといわれていました。

もともと、広島藩では、

「米俵は三斗入俵と五斗入俵の二種が採用されたが、……年貢米の俵拵えは、元禄四年(一六九二)三斗俵(正味三斗一升五合)に統一され、以後はすべて三斗俵を基準とした。」(『広島県史』)

そうですから、江戸時代、大坂堂島米市場でも三斗俵が規格となっていたのではないかと思います。

大坂登せの菜種の場合は、

「三斗俵、三斗五升、又ハ四斗俵ニ仕立、端俵数々不相成様ニ取計可申」(嘉永二年(一八四九)『広島県史』)

と指示されているので、色々な規格の俵があつたようです、

「端銭」を「はしたぜに」というので、「端俵」は「はしたたわら」と読むのでしょうか。

升廻

菜種の大坂登せについて、藩から次の指示がありました。

「端俵数々不相成様ニ取計可申、俵拵区々相成候ては見取升廻し数々相成、隙取、差問候間」(『広島県史』)

俵に詰めるとき……、端俵の数が多くならないようにしなさい。俵拵えが区々では見取りの升廻しが多くなり、時間も掛り差しつかえるので……

「升廻し」という言葉に初めて出会い、調べてみました。

【ますまわし 升回・升廻】(『日本国語大辞典』)

受渡米について、倉庫内の米の品質や容量を検査すること。

と説明がありました。上の例文にも当てはまります。「まわし 升廻し(米が定量どおり入っているか)を調べるもので、……一艘の船から六俵を抜き取り、その平均

が定量より不足した場合には、請負業者の責任で「差し米(米をたす)」か不足分の代金を支払わなければならない」(HP「あぶくま川データベース」)

「越前国松平兵部太輔様御預所丑ノ御年貢米、当夏江戸御廻米式千三百七拾五俵、但四斗入、貫目升廻シ、上乘殿・私立合請取、四月七日三国湊ニ而船積仕」(HP「福井県文書館資料紹介」)

「御廻米、岩渕河岸着船之上、枅廻之儀、御改正以來御仕法之通、百俵四撰ニいたし、鬺を入、問屋・出役名主・船頭立会之上、四俵撰出し、升廻し改ヲ請」(HP「下部町誌」)

米などの受渡しに際して、品質・数量などの厳重な検査を意味する言葉のようです。

込米

【込米】(『岩波日本史辞典』)

江戸時代、年貢米の俵詰めの際して定量に上乘せして詰める余分米。合米(ごうまい・あわせま

い)とも。定量不足俵があつた場合には全俵数に對して追徴米が賦課されたため、その防止のために込米を加えた。三斗七升詰め俵にも四斗二升詰め俵にも、各一升程度の増量が行われている。

込米は「入米」とも書いてあります(「入米は石二付七升二相究メ候之間」)。その数量は時代により異なりますが、広島藩では、寛文八年(一六六八)に次の触が出ています。

「当御年貢米俵作、只今迄之通、京枅ニて五斗入・三斗入ニ候得は、運送之損徳有之ニ付、五斗俵は京枅を以五斗四升五合入、三斗俵ハ京枅ニて三斗式升七合入ニ被申付候」(『広島市史』)

今年の御年貢米の俵作りは、今まで通り京枅(全国共通の枅)で五斗入と三斗入であるが、運送の損徳のため、五斗俵は京枅で五斗四升五合入り(九%付加)、三斗俵は同三斗式升七合入(九%付加)にしないさい。

享保三年(一七一八)、一揆鎮撫のために出された触には、

「米入実之儀、唯今迄三斗式升入ニ相極り候へ共、

此後ハ三斗壺升入に相極可被遣事」（『広島県史』）
米の入実（俵の実容量）は、今まで三斗俵には三斗式升（約七%付加）を入れることになっていたが、今後は三斗壺升入（約三%付加）に決めて遣わすことになった。

この資料によると、「唯今迄三斗式升入」という時期があつたことになります。

それは兎も角、一揆で勝ちとつた三斗壺升入も、元文三年（一七三八）の達では、

「御年貢其外上納米計り廻し之儀、三斗壺升目を杉形りに盛候儀相止、小升を以三斗壺升五合迄に計り相納り候筈之事」（『広島県史』）

御年貢など上納米の計量（計り廻し＝^{すぎな}枡廻しのこと）は、三斗壺升目を「杉形り」（山のよう）に盛つて計量することは止め、小升を使つて三斗壺升五合（五%付加）に計り、納入する筈。

という運用がなされたようです。

杉形

前回の記事に「杉形り」が出ました。最初は、どう読むのかも解りませんでした。

【^{すぎなり}杉状・杉形】（『広辞苑』）

杉の木 of 聳えたような形、すなわち上が尖り下が広がった形。金字形。

「形」は「なりふり構わぬ」の「^{なり}形」でした。

野坂三益の「鶴亭日記」天保八年（一八三七）二月十一日の条に、次の記事があります。

「或示中村梅玉戯転作高砂曲

高き米このうら来れは豊年の麦もろともに出し穂の民のあわれも今すこし多くなるみの出来過てはや杉形に積にけりく」

或るひと、中村梅玉の戯れに高砂の曲を転作するを示す。

中村梅玉は、歌舞伎俳優の三代中村歌右衛門（俳名芝翫・梅玉、屋号高砂屋）。謡曲「高砂」と比べてみます。

高き米

高砂や

このうら来れは豊年の この浦舟に帆をあげて
麦もろともに出し穂の 月もろともにいでしおの

民のあわれも今すこし 浪の淡路の嶋かげや

多くなるみの出来過て 遠く鳴尾の沖すぎて

はや杉形に積にけり 早や住の江につきにけり

高値だった米価も、このうら？が来れば、豊作だった麦と同じように穂を出した稲も豊作となり、哀れな庶民の生活もあと少しの辛抱。沢山なる実が出来すぎて、杉形に積み上げられるだろう。

「杉形」の形容と米はつながりが深そうです。

麦藁焼・蚊ふすめ・くこし

「麦藁焼候儀、軒並不申所、或は大家にて竈不用心ニ無之所ハ格別、小家にて麦藁焼候儀無用ニ候、麦糠にて蚊ふすめ候儀、右同断ニ相心得、役人とも切々見廻り無怠可申付候事、付、家近所にてくこし仕間敷事」（安永四年（二七七五）四月「堀川町覚書」）

これは、広島町の町奉行から火の用心について出された触です。

麦藁むぎわらを焼くことは、家が建並んでいない所か、大

家で竈が不用心でない所はともかく、小家では焼いてはいけない。麦糠むかで蚊をいぶすことも同じく禁止する。町役人どもは度々の見廻りを怠らないこと。また家の近くでくこしをしてはいけない。

「麦藁を焼く」とは、「大家にて竈不用心ニ無之所ハ格別」といつているので、この場合は、家庭の燃料として使うことでしょう。

「蚊ふすめ」は、中四国地方・種子島の方言で「蚊ふすべ（燻）」のことだ、と『日本国語大辞典』は説明しています。

また、『世界大百科』の解説では、

「一般に木片をいろりや火桶でたいたり、ヨモギなどをいぶして、大型のうちわであおいだりした。江戸時代には、おがくずに硫黄の粉をまぜたものも使われた。このころには蚊帳も一般に普及していたが、庶民にとっては高価なもので、もっぱら紙帳しちやうや蚊やりを用いていたといわれる。」

蚊帳を持っていたとしても、起きていれば「蚊ふすめ」は必要です。

「くぐし」とは、『日本国語大辞典』が「くぐし」として載せているもので、

【くぐし】（『日本国語大辞典』）

中四国地方の方言物がよく燃えないでくすぶること。肥料の灰をつくるためにくみを焼くこと。草木などを集めて焼いた肥料用の灰。

【くぐす】（『日本国語大辞典』）

「中国地方の方言」 火でこがす。

正米と舂米

「正米」について、『日本国語大辞典』は次のように説明しています。

【正米】（『日本国語大辞典』）
しょうまい

①現在ある米。現物の米。②取引市場で、実際に取引される米。実米。↑↓空米。
ところが、次の用例は説明できません。

「正米三万五千石、粳二して七万石」（『鶴亭日記』）

正米が三万五千石、粳ならその倍の七万石。

「三石四斗五升 御囲粳六石九斗正米」（『踊場家文書』）

御囲粳六石九斗を正米に換算すると、半分の三石四斗五升。

この二例から、「正米」とは、粳を脱穀して玄米にしたものと考えられます。

【五合摺】（『岩波日本史辞典』）
ごごうずり

稲の粳もみ摺り割合が粳一升から玄米五合生じること。稲の粳摺り割合はおおむね稲の成熟度と粳皮の厚さによって決まるが、江戸幕府は年貢米の徴租法において粳納から玄米納への転換にあたって制度的に五合摺を公定とした

の説明からも、納得できます。「これにて一件落着」と思い、目を隣に動かすと、

【舂米】（『日本国語大辞典』）
しょうまい

①米を臼でつくこと。また、ついて精白した米。②奈良・平安時代、脱穀した米。もみがらを取り去った米。黒米（玄米）と白米（精白米）の区別がある。

の説明がありました。「正米」は「舂米」の宛て字

のようです。そこで、

「正米」とは、①米券（差紙）ではなく、米そのものの。「正米至て乏敷御座候ニ付、御差紙御上納仕度奉存候」（「野間家文書」）。②粃米に対して脱穀をした米（玄米）。春米。粃を脱穀すると半分の容積になる（五合摺）。

「春米」の宛て字として「正米」が使われるのは、さもありなんと思いましたが、「白米」と「玄米」を同じ言葉で表すとは……と実は呆れていました。ところが、

「粃挽臼之義、郡々とも多ク土之臼ヲ用ひ候様相聞候、尤小百姓内ニは木臼ヲ用ひ候も有之由、木臼と土臼との利害得失、小内いか様成義も可有之哉、全鉢土臼ニてハ米之痛有之見付不宜候、大坂登せ米ニ相成候ても御直段劣り候由、木臼ニて挽立候米ハ見付宜故、大坂ニても石ニ付壹匁余も宜由相聞候」（文化六年（一八〇九）「野間家文書」）

粃挽臼について、多くの郡では土の臼を使つて粃から粃殻を取っていると聞いている。小百姓の内には木臼を使っている者もいるとか。木臼と土臼との利害得失を考えてみると、土臼で粃

殻を取った米には痛みがあつて見かけが悪く、大坂の米市場に登せても値段が劣る。木臼で脱穀した玄米は見栄えが良く、大坂でも一石で一匁余も高値になると聞いている。

広島藩は、この文書で、土臼と木臼の利害得失について農民に諮問しながらも、木臼を勧めています、農民は「木臼は小百姓の使うもの」と問題にしませんでした。それもそのはずです、

【磨臼・摺臼】すりうす。（『広辞苑』）

粃摺用の臼。上下二

個の円筒形の臼で、

上臼を回転させて両

臼の間で粃を摺り、

粃殻を取り去る。古

くは木製。後には、

竹または木で上下の臼の外囲を作り、強粘土に食塩をまぜて詰め、両臼の摩擦面に桎製の歯を植えつけたものが現れ、これを土臼・唐臼とも呼ぶ。すりす。するす。

土臼は、江戸時代の初めころに中国から伝えられ、木臼と比べて作業能率は約三倍になったとそうで



土臼（和漢三才図会）

す。(土摺臼)

【春】(『漢字源』)

《音読み》 ショウ／シユ

《訓読み》 うすづく／つく

《意味》(動) うすづく。うすで粟などの穀物をつく。(動) つく。ものをつく。とんとんと、うちくだく。または、土台をつきかためる。

「春(うすづく)」の字を見て、「春米」とは、臼を使つて精白した米(白米)のこと、とすぐ分りました。子供のころ手伝つた〈足踏式の精米機〉を思い出したからです。舂挽臼は見たことも使つた経験もないので、春米⇨玄米は思いつきませんでした。

考えてみると、玄米にするにも脱穀、白米にするにも(精米)、両方とも臼を使つていたのだから、ともに春米に違いありません。これでようやく一つは納得しました。

根置・馬踏

「土手壱ヶ所 長さ三拾壱間 上り壱間半 根置式

間 馬踏八歩 此六拾五坪壱合、

但し、根置・馬踏ならし、是へ上りを掛け、夫れへ又長さを掛れば坪知れるなり。」(『広島藩農村考』)

これは、狩留家村本庄屋の手控から、普請帳の調方(算法)を記した個所の抜書きです。

土手⇨堤防

長さ⇨長さ

上り⇨高さ

根置⇨堤防の土台(台形の下

底)

馬踏⇨堤防の上の人馬の通

行する道路。(台形の上底)

坪⇨土砂の体積の単位。六

尺立方。立坪

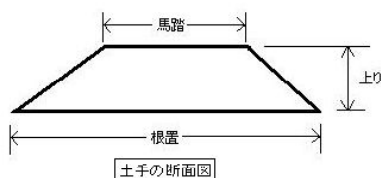
歩⇨間の一〇分の一

合⇨坪の一〇分の一

この坪(土砂の容積)を計算すると、

(2間+0.8間)÷2×1.5間×31間=65.1坪

【馬踏】(『単位の歴史辞典』)



土地の勾配のうち、これ以上なら馬も上り下りもできないという特定の値。一尺に対し五寸の勾配。

の説明は、ここでは当てはまりません。

「郡中におゐてハ藁細工・草履・わらし・馬踏・筵等其外種々之者作間相調」（庄原市史）

の「馬踏」は、馬踏^{ばふみ}ではなく、藁製品の馬の履物、馬踏^{うまぐつ}です。

「馬の蹄を守る為に現在は蹄鉄をつけるが、蹄鉄は明治になって国内に普及を始めた。それ以前は馬の沓という草鞋を馬に履かせ蹄の保護や滑り止めとした。」（日本はきもの博物館）

差心得

「此余くハしき儀は不及演説候、万々差心得いづれも力を合せ相励ミ可申」（「杏翁意見」）

これ以上の詳しいことは説明しませんが、充分に差心得、誰でも力を合わせて励みなさい。

「町年寄共申立之趣無余義相聞え候ニ付、願之通被仰付候条、銘々厚く差心得、不束之義無之様厳鋪可申付候」（HP『函館市史 通説編』）

町年寄共の申立の趣旨はやむを得ない事と思われるので、願の通り許可する。銘々が厚く差心得、不束なことの無いよう厳しく指示しなさい。

「為心得」なら、「心得として」と読めますが、「差心得」という表現にはあまりお目に掛ったことがないので、Googleで検索しました。

「親仁は差心得^{さしこころえ}たものと見える、この機^{きつ}かけに手綱^{たづな}を引いたから、馬はすたすたと健脚^{けんきやく}を山路^{やまじ}に上げた、しゃん、しゃん、しゃん、しゃんしゃん、しゃんしゃん、——見る間^まに眼界を遠ざかる。（泉鏡花『高野聖』）

【差心得】さしこころう。（『日本国語大辞典』）

（「さし」は接頭語「心得る。のみこんでいる。よくわかつている。しょうちしている。」

【差し】さし。

「接頭語」動詞に冠して語勢を強め、或いは調える。

例えば、「差し一出す」「差し一止める」などは、動詞に接頭語が付いたものだとすぐ解りますが、まさか「心得」が動詞だとは気がつきませんでした。しかしに、「心得う」と読めば、「差し一心得う」となり、「心得る」の意味だと知れます。これで、ようやく納得したことでした。

米立

「郡中見廻り役之者賃銀、元一日銀貳匁ニ相定居候處、銀札下落ニ付、右割合を以米立ニて被差出御聞届ニ相成候得共、……」（嘉永二年（一八四九）『野間家文書』）

郡中見廻り役の者の賃銀は、もとは「一日に銀二匁」と決っていたが、銀札の値打ちが下落したため、右の割合で米立の支給が許可されたが、「御年貢御未進之儀、前々ニは米ニて年貳割利附ニて御取立御座候處、近年ハ銀立ニして年三步之利附ニて御取立御座候、……」（嘉永五年（一八五二）『廿日市町史』）

御年貢の未納について、以前は米で年二割の利附で御取立てでしたが、近年は銀立で、年に三步の利附で御取立てになります。

「雨乞・虫送り都て祈禱并願解入用、……、米何斗と法量相極メ、執行之度毎郡府へ願出免許ヲ請可申、……但、銀定メ之品ハ、石六拾目相場ヲ以米立之事」（『広島県史』）

雨乞・虫送りなど、全て祈禱とお礼参りの費用について、……米何斗と分量を決め、その都度、郡役所へ願ひ出て免許受けなさい。……但、銀定めの品は、米一石〓銀六〇目の相場で換算し、米立とすること。

これらの例文はすべて、米と銀を対比させて記述してあります。

費用（賃銀）の額は、銀（実際は銀札）や米の量で表示できます。

「米立」とは、その金額を銀ではなく米を基準にしてあらわすこと、と思われます。

【銀建て^{ぎんだ}】

価格が銀の価値または銀本位の貨幣単位を以て表示される相場の建て方。

【円建て^{えんだ}】

輸出入取引や資金の貸借・投資において円による通貨表示を行うこと。

などと、同類の言葉とすると、「米立(米建て)」は「こめだて」と読むのでしょうか。

いられ子

「いられ子」という言葉の意味がどうにも分りません。

「当稲毛上、升突之時分ニ相成候条、……いられ子・太唐毛在之村々、畝数・有米積り仕、刈揚之願前方差出可申候」(宝暦七年(一七五七)七月『広島県史』)

当年も稲の升突(一坪の中の稲を刈り取り、その初の実収量を査定)をする時期になったが、……いられ子や太唐米(赤米)の作付のある村々では、耕作面積・収量見積りをして、刈り揚げの願書を事前に差出しなさい。

藩からのこの指示に対して、次のような願書を出

しています。

「 覚 安芸郡

一畝屯反屯畝 牛田村

……………

一同三反四畝 矢野村

……………

ベ三町六反七畝

右は、当早稲毛之内、いられ子蒔揚、例年之通、菜・蕎麦蒔付申度段、私共組合之内村々より願出申候ニ付、……」(寛政二年(一七九〇)七月、「野間家文書」)

今年の早稲のうち、いられ子を蒔り揚げ、例年のとおり、菜種・蕎麦の蒔き付けをしたいと、私共の組合の村々より願書が出ていますので、……

「早稲毛上之内、いられ子」の文言から、「いられ子」は稲の早稲の品種名のようにです。また、「いられ子・太唐毛在之村々」から、ありきたりの早稲ではなく、赤米と並び称せられるような、その上、稲刈りをするのにも藩へ願書を提出しなければならぬような、(特殊な)品種か?……と考え込みま

す。

矢野村の田は七四町余もあるのに、「いられ子」の作付はその〇・五%にも満たないこと。

また、「いられ子」を茹ったあと、菜種・蕎麦の蒔き付けをするといえます。『清良記』によると、「七月種子取物」に「早稲」があり、同月に「可植物」に蕎麦があるので、七月に収穫する作物のはずです。さて、何でしょうか？

『日本国語大辞典』に

いられ「名」「方言」 気ぜわしく落ち着きのな
い者。せつかち。(滋賀・愛媛・高知)

とあります。「せつかちな早稲」だから「いられ子」かな……と思っています

宿継・村継・あんだ

「東海道、中山道、甲州道中、日光道中、奥州道中、右宿々旅籠屋ハ勿論、脇往還其外之村々ニて宿を取候旅人煩候ハ、其所之役人立合、医師を懸、療養を加置、……右旅人早速快無之趣ニ候ハ、

其もの在所之村役人等え申遣、親類呼寄、対談之上可任存寄、若療養も不加、宿継・村継杯ニて送
出候儀頭るニおゐては、五海道は旅籠屋、問屋、
年寄、其余之村々は致宿候もの、村役人ともえ急
度御仕置可申付候」(明和四年(一七六七)『御触書
天明集成』)

五街道の宿しゆくの旅籠屋は勿論、脇往還(脇街道)そのほかの村々で宿泊した旅人が病気になったなら、その所の役人が立合い、医師に見せて療養を加え、……その旅人がすぐには快復しそうにないときは、その者の在所の村役人等へ連絡して親類を呼び寄せ、相談の上、その意向に任せなさい。もし、療養も加えず、宿継・村継などで送り出すようなことあれば、関係者は処罰される。

「宿継」については、『広辞苑』に載せてあります。

【宿継しゆくぎ・宿次しゆくぎ】(『広辞苑』)

人馬を継ぎかえて宿駅から宿駅へと荷物などを送ること。駅遞。

「村継」はありませんが、「むらつぎ」として、

【村繫】

村内に寄付を集め歩くこと。一説に、質入れのこと。

があります。七月二七日の記事に、「つなぎ」について書きましたので、余談ですが一言、「むらつなぎ」と読むような気がします……。

【村継・村次】（『日本国語大辞典』）

江戸時代、罪人、旅行中の病人、荷物、お触（おふれ）などを村から村へと継送すること。

「虚無僧廻在仕候節、行懸り之村方にて病氣二付、其病症ニ歩行難相成候て、竹名を名乗、四つ手駕籠にて送り囉ひ度輩は、役人共へ相願、人足世話ニ相成、賃銭払候儀ハ素り自分払ひ、其心当テ無之輩は、役人元へ願出次第、村作法之通、あんだにて村送りニ取計候筈ニ候」（「踊場家文書」）

虚無僧が村を廻り、行き先の村で病氣になったとき、その病状が歩行が難儀で、竹名を名乗り、四つ手駕籠で送くってもらいたい者は、役人共へ願んで人足の世話になる。賃銭の支払いは勿論自分払い。その心当てのない者は、役人元へ

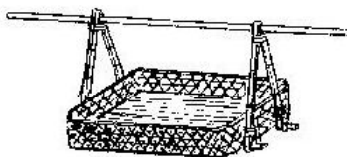
願ひ出次第、村のきまりのとおり、あんだで村送りをするはず……。

虚無僧に対しては少々つれない応対振りですが、旅の病人にとつては、「あんだ」でもありがたい「作法」だろーうと思います。つい、現在の様子と比較しなくなります。

この文書、面白い言葉が沢山でてきて、実に愉快です。

【復輿】

（アミイタ（編板）の軋）長方形の板を台にし、竹で編んだ縁をつけ、竹でつるした。罪人・戦死者・負傷者などを運ぶのに用いた。あみいた。あおだ。あうた。（図も『広辞苑』）



焼米

「当郡之内御家中様方知行所有之村々之義は、右御給主様方へ例年彼岸頃焼米少々宛差上来申候義ニ

御座候、右焼米之義ハ早稲毛之内、本熟ニ至り不申内相調申候義ニ御座候得は、小内不益不少義ニ御座候ニ付、当今御省略御年限中、右焼米差上候義御差止、右代りとして初納御蔵附米白米少々、差出し佳例御済せ被下候様御取計被為成下候ハ、難有可奉存候、纔宛之義ニ有之候ても、御給知村々辻ニてハ余程之弁利ニ相成可申と申値ひ候義ニ御座候間、心附之儘各様方迄申上試候間、余は宜御賢談之上、御差図被成下候様奉希上候、依て此段申上試候、以上

西七月

安芸郡割庄屋共

熊野直次郎様

（嘉永二年（一八四九）「野間家文書」）

当安芸郡のうち、御家中様方の知行所のある村々では、御給主様（領地の所有者）へ例年彼岸頃、焼米を少々ずつ差し上げてきました。焼米は早稲がまだ熟さないうちに作りますので、実は不益も少なくないことなので、現在の「御省略（緊縮財政 御年限中）」には焼米を差し上げるのは止めて、代りに初納御蔵附米白米を少々ずつ差し

出して、佳例の納入の代りとして御済せくださるよう御取り計らい頂ければ、ありがたく存じます。わずかのことでも、給知村々を合わせる と余程の便利になると、私共話合っております。 気づきのままを各様方（安芸郡番組）まで申し上げ 試しますので、よろしく御賢談のうえ、御指 示をお願いします。

この文書によると、知行地（給知）を与えられた藩士（百石以上）に対して、知行地の農民は「佳例」として少量の焼米を納めていたことが知れます。このほかにも餅米、俵付米、社米、門松代、蒔代などを給主に納めています。蔵入地（藩の直轄領）の農民にはそのような負担はありません。

「古城跡 ……壬生村壺ヶ所 中古城主庄ノ五郎壬生忠峯築と申伝、此所二ノ丸と申所二石ノ手水鉢有、又土中を堀申候得は古銅器古磁器米出事御座候由、当今も二ノ丸釣井跡と申所焼米苔ノ下より出申候」（『加計町史資料』）

古城跡の土中から、今でも焼米が出るとい話です。城跡、戦闘、兵糧、焼米……と考えが展開しているようです。

いびき太郎さんからのコメントです。

もち米の完熟前に刈り取りして脱穀、焙烙で「いり」、唐臼(私の在所では足踏み)の臼をいいます)で搗き「すくも」(粃殻を除(脱粒)いたものを。「ひら米」「焼き米」等といいますが、うろ覚えですが「いり米」(現在では「焼き米」の名で商品化)ともいったように思います。

当然刈り取りは早く、植え付けは極一部となります。「平米」(臼で搗くので平たくなる)は今の「インスタント食品」で「熱湯」を注ぐだけで、もちもちしたご飯が出来上がります、元の量の三倍位にはなるように思います。「戦場での携帯食だ」と古老が言っていました。もち米が素材であるだけ「腹持ちの良い」特性があります。収量の歩留まりは悪く田舎では「贅沢品」です。「いられ子」でも無く「収穫が七月」でも有りません(現在では八月ちようど今頃出荷が始まっている)が、軍用携行食ならば藩の監理が有ったかもしれません。

いびき太郎さんの話のとおり、現在では、焼米は昔懐かしい贅沢な「インスタント食品」として売られているようですが、江戸時代では、「戦場での携

帯食」として認識されていたのでしょうか。武士は日頃から兵糧を準備する……、これが農民が「佳例」として焼米を毎年納める「遺風」であつたように思います。

「御屋敷様ニ依り……焼米之義も式三升或は四升と申様ニ不同有之」(『甘日市町史』)

「焼米は一ケ年之出来初穂故、出来次第壹升宛可被差出候事」(海田町史)

とあります。「初穂」の「祝儀」なので、定額はなく、壹升出す村が多いようです。

早稲の穂がまだ未熟なもので焼米を作る……文字通り「初穂」です。前述の「佳例」は、初穂の祝儀の性格が強いのなら、兵糧の名残説は薄くなるのかもしれません。

余談ですが、上記、割庄屋の、安芸郡番組への〈意見書〉は、失礼にならないよう気をつかいながらも意見は通すという、見事な文章です。

相対

ある村の庄屋さんから隣村の庄屋さんへの手紙です。

「当村百姓丹藏と申もの、其御村三四郎へ先達て牛老足売渡し、尤下地取引も有之、差引過銀六拾目計り三四郎より丹藏ニ差戻し候約束前ニ御座候ニ付、日限ニ至三四郎方へ催促仕候処、銀子差越し不申、依て度々催促ニおよひ候へ共埒明不申、剩理不尽之返答振り仕候に付、逆も面対ニて相済不申候に付、無拋歎出候旨申出候、尤渠等相对取引之義、ケ様御駈合申進候儀思召も気毒仕候得共、……三四郎手元早々御約メ被成御報ニ御聞せ可被下候」(「横山家文書」)

当村の百姓で丹藏と申す者が、先頃あなたの村の三四郎へ牛一疋を売り渡しました。以前からの取引もあり、差引銀六〇目ばかりを三四郎より丹藏に渡す約束で、その日限になり三四郎方へ催促しましたが、銀子を渡しません。度々催促しても埒が明かないばかりか、理不尽な返答振り。とても面対ではことが済まないのです、仕方なく私に仲介を願ひ出てきました。もともと彼らの「相对取引」ですから、このように私が

交渉するのもご迷惑なことですが、……三四郎側の事情を早々御調べになり、御知せください。

牛の売買は丹藏と三四郎の「相对取引」なので、村役人の出てくる場面ではないのですが……と書いてあります。

【^{あいたい}相对】(『広辞苑』)

①当事者同士が直接に会って事を行うこと。②双方が納得すること。合意。③対等であること。丹藏と三四郎は、対等な同じ農民で、当人同士が納得をして牛の売買の契約をした、そのような取引なので「相对取引」という言葉が使われています。

「遊女町・傾城町等より願出候遊女揚代金滞之儀、向後相对に可済は格別、奉行所にては取上申間鋪候事」(幕令)

遊女町・傾城町等から願ひ出ている遊女揚代金の未払事件について、今後は当事者同士で決着をつけること。奉行所では取り上げない。

「相对」には、「関係者同士で適当にやれ。公権力はタッチしない」という意味も付加されています。いま流行の言葉でいうなら「自己責任」。「政府も自

治体も知りません……」と突き放した態度です。

築地の魚市場では、公的なセリ以外に、売り手と買い手が一对一で取る取引が六割もあり、今でもこれを「相對」というそうです。

「年貢納所之儀、在々百姓出入無之様に庄屋・小百姓相對仕、米にても銀子にても、其ぬし々々納上候通小帳を取上ケ可申事」(寛永五年(二六二八)『広島県史』)

年貢納入について、村の百姓が騒動をおこさないよう、庄屋と平の百姓が相互に確認の上、上納の「小帳」を作成すること。

「右の酒場只今迄私持来り申候へ共、身躰不如意ニ付同町塗や吉左衛門ニ売申度奉存候、内証相對仕申候、御公儀様へ御断被仰上被下候」(宝永八年(一七二一)『庄原市史』)

右の酒場(醸造所)は今まで私が所有しておりましたが、身代不如意のため、同町の塗や吉左衛門に売りたいと思います。内々には話は付いていますので、御役所へよろしく願います。

「相對死」もあります。「人が相對する」から始

って、使われる場所で微妙なニュアンスのでる言葉です。

御屋敷様

八月三〇日の記事に「御屋敷様」という、今では使わない言葉がありました。

『日本国語大辞典』には、「御屋敷様」の項目はありませんが、「御屋敷」はあります。

【御屋敷】おやしき。(『日本国語大辞典』)

①武家屋敷②奉公人や出入りの職人などが、その主家または出入り先の家を称する語。

これに「ゝのお方」を付ければ、「御屋敷様」の説明になります。

岡本綺堂の『半七捕物帳』(奥女中)で、②の使い方が見られます。

「あなたの方にもいろいろの御都合もございましょうが、いくら音信不通のお約束でも、せめて御奉公の御屋敷様の御名前だけでも伺って置きたいと存じますのが、……」

『廿日市町史』には、

「御屋敷様ニ依り……焼米之義も式三升或は四升と申様ニ不同有之」

御屋敷様によつては、差し上げる焼米も式升、三升、あるいは四升というように、違があります。

焼米を差上げる相手は給主ですから、①の「武士」に当りますが、②の「出入り先」の意味も加わつて、「給主として」私が入り出している御武家様」を意味します。

「先達て御願奉申上候御知行所極難渋者、弥増出来仕申候ニ付、気毒千万ニ奉存候、夫ニ付、此間惣村為御見分小島嘉平太様・野津団次郎様御越被為遊、御明知方・御給知方共不殘人別帖面ヲ以軒別御行付、御見分被為遊候所、相違も無御座、極難渋千万ニ付、御上ニも御ふびん御思召被為遊候段、尤至極之儀と御意被為遊候、夫ニ付、御給主様方へも、御歎キ奉申上候御屋敷様ニも、御不審御答被為遊候ハ、御見分被為遊被下候ハ、難有奉存候」（『湯来町史』）

先日お願いしました御知行所内の生活困窮者の件、どんどん増えており、気の毒に思います。それにつき、この間、全村見分のため小島嘉平太様・野津団次郎様が御越しになり、明知方・給知方とも、残らず人別帖面をもつて戸別訪問をして見分され、「たしかに極難渋千万なので、御上も御不憫に思召されるのも当然」と言われました。そこで、御給主様方・御歎き申し上げた御屋敷様も、御不審に思われるようでしたら、実情を御見分いただけるとありがたいです。ここでは、御給主様方・御屋敷様を併記していますが、給知の農民にとっては同じでしょう。

口演書

「口演書」という奇妙な言葉があります。

【口演】（『広辞苑』）

①文書でなく、口で述べること。口述。

「猶、役人共も此外何ナリとも、村為メ相成候義心付之儀も候ハ、書付或ハ口演ニても、無伏蔵可申出候事」（『広島県史』）

猶、役人どもで、これ以外に何なりとも村の爲めになることに気付いたなら、書類かまたは口演でも、遠慮せずに申出なさい。

「右之趣、郡中一統不洩様相触、尚又愚昧之者ともへ口演を以綿密ニ可申聞候事」(「踊場家文書」)
右の趣は郡中の全員に洩さず触れ知らせ、また、文盲の者へは口演で丁寧に申し聞かせなさい。
この例文のように、江戸時代でも「口演」＝「口述」です。

「御寺村次右衛門より差出ス口演書写シ

此度予州大嶋・波方嶋両嶋ニて差火仕候趣、段々聞合申候処、去ル十一月同国松山御領今治小松御領辺専差火仕候ニ付、御人出ニて御吟味被為在候得共、一円御見当出来不申、……近嶋之儀故、先ツ当嶋も昨日申値、旅人入込不申様取計可申外も無御座候間、……此段鳥渡心付申進候、以上

二月八日

御寺村次左衛門

向田野浦村庄屋信兵衛様」(「鶴亭日記」)

最近、予州大嶋・波方嶋両嶋で差火(放火)があったとかで、段々と聞き合せましたところ、去

る十一月同国松山御領、今治、小松御領辺に専ら放火しており、探索の人を出しても一向に犯人は見つからないとのこと。……近くの島のこどももあるので、この生口島(芸州豊田郡)でも話合いまして、旅人を入込ませないようにする以外に方法がないと思います。……ちよつと気付きましたので申し上げます。

この「口演書」中の「差火」は「つけび」と読みたいのですが、どうも無理なようです。

【差^さし火】(『広辞苑』)

炭火をさらにつぎ足すこと。また、その火。

は、この場合は、見当違いで、この項に「放火」の意味を追加する必要があります。

閑話休題。この文書は、次右衛門より差し出した文書なので、「口演」とどう関係するのか、よく分りません。

「最初御代官ヨリ割庄屋へ対シ演説シ、左ノ写ノ通ナル口演書ト云ヘル名印ナキモノヲ達シタルモノナリ」(「淡交夜話」)

最初に御代官が割庄屋に対して演説をし、左のような口演書という名も印もない文書を配布し

たものである。

「口演書」を演説の内容を文書化したものと理解すると、一応解つたような気がしますが、前述の「次右衛門より差出ス口演書」では、口述があつたような感じが感じられません。「申上ル口上之覚」と題する文書とともに、当分〈気になる言葉〉として残りそうです。

船滓

次の文書は、芸州矢野村（広島県広島市安芸区）の庄屋から、淡州平林村（兵庫県淡路市野島平林）庄屋宛の、難船救助への礼状の一部です。

「……御浦へ吹寄せ候得共、夜中之儀彼は致難儀候処、浦人大勢御召れ御出被成、何角被附御心被下候二付、船頭水主共端船にて致揚陸、段々御介抱成遣、其御地御番所表へも御注進被成候二て、早速浦方御役人御出張被遊、破船の様子等御見分被成、船頭水主共何角不自由無之様二と被仰付、散乱之船滓・船具等御取揚ケ被遣候旨、右孫九郎等

無別条罷帰り、委細申出仕、具ニ承知仕候……

矢野村庄屋新左衛門

淡州平林村御庄屋上林市兵衛様」（『広島県矢野町史』）

そちらの浦へ吹き寄せられましたが、夜中のことでもあり大変難儀しているところへ、浦人を大勢連れて来られ、色々と気遣っていただき、船頭・水主とも端船（小舟）で揚陸、段々と介抱をうけ、番所へも注進され、早速浦方御役人が出張なされ、破船の様子など見分されて、船頭・水主共が不自由しないようにと指示され、散乱した船滓や船具等を取り揚げられたとのこと、右の孫九郎等が無事に帰り、委細を申出ましたので、つぶさに承知しております。……

「破船之船滓等之儀は御売払被下候様御頼申候処、其段御聞届、入札払ニ御執計、」

破船の船滓等は売り払ってくださるよう御頼しましたところ、聞届けて入札払にしてください、「船滓」について確認のため、いろいろな辞書で調べましたが、載せてありません。『御触書天明集成』にも、

「活命者并死骸・荷物・船滓等流寄候儀も有之候ハ、早速可有注進旨」（『御触書天明集成』）

生存者・死者・荷物・船滓など流れ寄ることがあれば、さっそく報告しなさい。

と、使つてある言葉なのに……。

しかし、辞書にはなくても、意味は解ります。海難、破船、散乱、船滓とくれば、「バラバラになった船の残骸」以外にはありません。海難に付きものの、この基本的な用語が辞書にないとは、一体どうしたことかと思ひます。

現在使われている用語は、当然辞書に載せます。

「古語」は研究者が熱心に取組む相手です。それに對して、江戸時代の言葉は現在に近すぎて、食指が動かない（空白地帯）なのでしょうか。

五平太

「浦部向寄之村方よりハ塩浜向之薪、或ハくに木類、其外雜木を売出し、百姓共渡世之便第一之義ニ候処、近年九州より石炭（五平太トモ唱）を積登、塩

浜薪二用之故、村々より出ル薪類不捌、下直二成、百姓并木場方之もの難渋仕候」（文政二年（一八一九）『国郡志郡辻書上帳賀茂郡』）

（賀茂郡の）沿岸部の村方より、塩浜用の薪、あるいはくに木？類、そのほか雜木を売り出し、百姓共の渡世の第一の便りになつていました。が、近年九州より石炭（五平太とも言う）を積み登せ、塩浜用の薪に使うため、村々より出す薪類が売れず、値段も下がり、百姓や木場方の者は難儀しています。

塩田によつて得た濃厚塩水を煮詰めて食塩を作るとき、その燃料が地元産の薪から九州の石炭に轉換したため、百姓らが困つてゐるという文書です。

「小屋の瀬（木屋瀬）迄三里、久七と云を昼所とす。頻に臭氣の触るに不審せり。漸くさとれるは、此辺戸々石炭を焼いすことの多きゆへ也。飯など炊しハ臭氣の残り、馴なざれハ食し難し。下筋ハ俣用ゆれとも、此あたり尤多し。故国にても近来塩浜に用ゆ、何れ勝手有と也。」（文化元年（一八〇四）『筑紫道草』）

木屋瀬（長崎街道木屋瀬宿、北九州市）まで三里、

久七という所で昼食をとる。頻りに変な臭いをするので不審に思ったが、この辺の家では石炭を多く燃料とすることに気付いた。これで飯など炊けば臭気残り、馴れないと食べられない。下筋ではよく使うというが、この辺がもつとも多い。故国（安芸国）でも近来は塩浜に使つて便利なものだと言う。

【五平太】（『広辞苑』）

（北九州で五平太という者が初めて掘り出したからという）石炭の異称。

「五平太」には、北九州の五平太説の外に、長門国厚狭郡有帆村の百姓五平太説、長崎県高島に流れ着いた五平太説、川ひらた説などあつて、賑やかです。

「今来たる五平太船のはや帰り　太橋
五六十平太馬の続くらん　玉斧」

（「鶴亭日記」）

古文書で「五平太」という言葉を見つけると、六〇年以前、故郷（備後）の年寄が石炭のことをそう言っていたことを、懐かしく思い出します。

操綿

「操綿賃繰仕候者共、随分正道二付しめりハ勿論、都て手業成儀仕間敷候事……右操綿屋共外操綿二携候商人并賃繰等仕候もの共、一己利欲に迷ひ、御国産物於他国不評二相成候様成儀仕出し候てハ、甚以不届之至二付、……御家中多門之者共へは賃繰仕せ候ハ、……」（『広島市史』）

操綿くりわたの賃繰をする者共は、付しめりは勿論のこと、すべて小細工を絶対にしてはならない。……操綿屋や操綿に携る商人や賃繰の仕事をする者が、己れの利欲に迷い、御国産物である綿の評判を他国で落すようなことをすれば、はなはだ不届の至りである……。御家中で多門住いの者共へに賃繰をさせる場合は……。

江戸時代、広島藩の沿岸部で生産された棉・繰綿・木綿織は「御国産第一之品柄」と言われる（輸出品）でした。（明治の官営模範工場の一つは広島紡績所でした）。藩はその品質を高めるために上記の触書

を出しています。

【繰綿】くりわた。（『広辞苑』）

木棉きわたの実を綿繰車わたくりぐるまにかけ、核をとったままで精製していい綿。

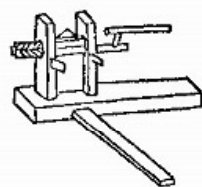
「繰綿賃繰仕候者」とは、綿花を繰綿に加工して賃銀を得る

人々のことで、現在の労働者の先輩にあたります。簡単な道具（下図は綿繰車）のできる作業ですから、たぶん自分の家で賃仕事をしたのだろうと思います。

その作業で、「付しめり」が厳禁されていますが、どんなインチキでしょうか。「付湿り」と書くのなら、湿らせて重量を稼ぐことかも知れません。

また、藩士の中で多門（多門長屋。本宅の外周に建造した長屋住いの下級武士の家でも、この賃仕事をしています）。

この触書の内容も興味深いものがありますが、「繰綿」の漢字表記も気になります。辞書は「繰綿」で。漢和辞典によると、



「繰Ⅱとる。たぐり寄せて、手の先で持つ。」（『漢字源』）

「繰Ⅱくる。たぐる。繭の表面をかすめて、生糸をいそがしく手もとへたぐりとる。」

二つの漢字の意味はほぼ同じ、手偏と糸偏の違いだけで字形もほぼ同じ、それなら混用が生じて不思議ではないことかもしれません。混用はこれだけではありません。「繰合」は「繰合」とも書かれています。

辞書の表記と少しでも違うと、「誤字だ、誤記だ」と大騒ぎする現在の状況から見ると、おおらかで、羨ましく（浦山敷）思います。

抜船

「舫船出船候ハ、上下共日和得斗見合せ一同二出船可仕候、抜船仕間敷候、若遭難風船を損し船具等流し及難儀候船有之候ハ、類船之者互ニ助情可仕事」（元禄十四年（一七〇二）「草津牡舫仲間条目」）

蛎船が出船するときは、上り下りとも、天候を充分見計らって、一緒に出船しなさい。抜船はしてはいけない。もし、難風に遭い船を損じ、船具などを流した船があれば、仲間の船の者は互いに助け合いなさい。

江戸時代の初期、秋の終り頃になると、広島が生蛎売りの船が出て、大坂など、瀬戸内沿岸の港で商売をして、翌年の一二月に帰港していました。その中心地、草津の牡蛎仲間の申し合せが上の文書です。

船団を組んで航行をしています、**「抜船」**禁止条項は、商売上の都合だけでなく、航行の安全面から必要とされたことでしょう。

「抜船」までは、辞書は載せてないだろうと思つて、調べてみると、ありまして、さすが『広辞苑』。

【抜船】

①番を定めて役目を持っている船を、臨時に別の用を使うこと。他船を出しぬくこと。また、その



船。②密貿易の船のこと。③(遊里語)他を出しぬくこと。ぬけがけ。

現在「蛎船」と言えば、船中で蛎料理を提供する(水上レストラン)のことですが、これは江戸末期の一八一〇年代から始ったそうです。(『広島県大百科事典』)
(写真は、広島、元安川の蛎船)

族ケ間敷

「未練がましい」など、接尾語「〜がましい」の付く言葉があります。近世文書では「〜ケ間敷」と書いて、よく見かける言葉です。

「当御時節柄、御仕向筋御縫ケ間敷儀御歎申上候段、重々恐入」

今の時節がら、藩の御援助に縋るようなお願いを申しあげて、誠に恐れ入りますが、

「衣類ヲ始メ朝夕之給物ニ至ル迄毛頭奢ケ間敷風俗ニ不至様」

衣類をはじめとして朝夕の食べ物にいたるまで、すこしも奢るような風潮にならないよう、

「普請作事等致候共、栄曜ケ間敷致方無之様、銘々分量ニ応し、随分手輕ニ可仕候事」

家を建てるにも、派手なやりかたをしないで、銘々の力量に應じて、随分手輕にしなさい。

「虚無僧共在中修行之作法并ニ村方請引掟筋之儀ニ付、安永年中從公儀被仰出、……然ル処虚無僧共心得違無筋之儀申懸ケ候様相移、役人共も当前之取引面倒ケ間敷儀を厭ひ流合ニ相成、族ケ間敷申懸ケ候節は少々つゝ助情を遣し、当前を穩ニ相濟せ候様相聞甚以不埒之至候、……無法之儀申掛ケ候ハ、掟書并ニ追々申付候法則へ引合、其上ニても兎哉角とねだれケ間敷申候ハ其所ニ留メ置早々注進可申出候」（『広島県史』）

虚無僧どもが村中で修行するときの作法と村方が応対する掟については、安永年中に幕府から指示があったが、…虚無僧どもが心得違いをして筋の通らない要求を出すようになり、村役人共も面倒になるのを嫌がつて、族ケ間敷い要求をしたときは少々の援助をして、その場は穩やかに事を済せると聞くが、甚だ不埒なことである。……無法の要求をしたときは、掟書などの

通りに処理し、その上にも兎哉角とねだれケ間敷言うならば、そこに留置いて早々に注進しなさい。

ここに「族ケ間敷」と言う言葉が出ましたが、読みも解らず、辞書で調べようがないので、文意から読み取る以外にありません。

この文書の続きに、次の文言があります。

「右安永年中掟書之通り之外、少しも心付等致ス間敷候、其上ニて族ケ間敷兎哉角申候は、其所へ留メ置早々注進可申出候」

右安永年中にだされた掟書以外に、少しも祝儀を出してはいけない。その上にも兎哉角と族ケ間敷いうならば、そこに留置いて早々に注進しなさい。

この文言、最初の文書の最後の部分にそっくりです。違うのは、「ねだれケ間敷」と「族ケ間敷」です。表記が違うだけで、意味は同じではないか。いや、仮名と漢字の違い、「族ケ間敷」は「ねだれがましい」と読むのではないか……と思います。

「ねだれがまし」とは、あまり耳にする言葉では

ありませんが、辞書にはあります。

【強請】ねだれがまし。(『日本国語大辞典』)

「ねだりがましい(強請)」に同じ。

これを遡ると、

【強請】ねだる。

①強いて物を乞う。②言いがかりをつけて金品を要求する。

に、たどり着きます。

虚無僧が村役人に「言いがかりをつけて金品を要求する」ので、村役人は少しの祝儀で事を済まそうとする……。状況はピッタリと当てはまりますが、「族」の字のどこを押したら「ねだれ」が出てくるのか……と思います。

「ねだりヶ間敷」という言回しもあります。

「病家之心得を以供方之者共へ手当いたし候を受納候ハ格別ニ候へ共、供方ノ者共よりねだりヶ間敷儀申出候者有之間敷筋ニて……、」

病家の者が心得て、医者の子の者へチップを渡し、それを受取るのは構わぬが、子の者からねだりがましく要求する者があつてはならない事

で……。

仕なす

「他所商人御領内へ来、宿主・問屋並村々の表織杯頼、表調呉候様申節、彼商人を御他領へさそひ行、其地に畳表を買取、御領内の表の様に致なし候て遣候儀仕へからず、自然密々に左様の致手段者有之は、聞付次第急度可申付事、……他所より畳表買來り、沼隈郡之表の様に仕なし売候儀も不可致事」(『広島県史』)

他国の商人が福山藩の御領内へ来て、宿の主人や問屋、村々の畳表を織る者に、畳表を調べてくれるよう頼んだとき、その商人を御他領へ連れて行き、そこで畳表を買取って、いかにも御領内の畳表の様にして売ることとはしてはいけない。もし密かにその様なことをする者があると聞き付けるとすぐ処罰する。他郡から畳表を買いに來たとき、沼隈郡産の様に見せて売ることもしてはいけない。

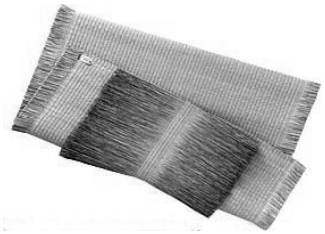
この文書は、正徳元年（一七一）、福山藩の郡奉行所が出した、畳表に関する条目の一部です。

この地方（沼隈郡）で作られる畳表は、「備後表」と言われ、福山藩は幕府に献上したり、幕府が買い上げたりしました。

生産量が減った今でも、高級品として高い評価を得ています。その中でも、手織のなかつぎおもて中継表（写真）は、蘭草の細い先端部分を畳表の中央部裏面からはみ出させ、蘭草の太い所だけを織り込んだ最高級品です。昔から厳しい品質管理が行われたといいますが、この文書もそのことを示しています。

ここで、「仕なし」という言葉が使われています。「致なし」もあります。「致」は「いたす、（する）の謙譲語」ですから、ともに、「しなし」と読むでしょう。

【しな為成す・為做す】（『広辞苑』）
（何かの状態に）する。作りなす。



「ゝのようにする、ゝのようにみせる」という意味で、ありふれた言葉ですが、今では使わないので、古文書で見ると珍しく思ってしまう。

勘弁

「入塾之輩は、第一何之為ニ逗留致候と申儀ヲ得と勘弁可致候、人数多キ中ニは、只名聞、又は親々之申付ニて、無扨逗留之振合ニて、決て学事ニ心ヲ不懸、只大切之御国財ヲ費のみ、甚以不埒之至ニ候、」（『塾中申談候儉約頭書』）

塾に入っている生徒は、いったい何のために逗留しているかと言うことをしっかりと勘弁しなくてはいけない。多人数の生徒の中には、ただ名聞のため、または親の命令で仕方なく逗留しているだけで、けっして学事を心懸けることもなく、ただ大切な御国財を費やすだけ、はなはだ不埒なことである。

安芸国賀茂郡寺家村の医師野坂三益は、屋敷内に「恭塾」を設けて、中国・四国・九州・近畿・北陸

地方からの入門者を教えました。これは天保四年（一八三三）に出された、恭塾の『塾中申談候儉約頭書』
いわば塾生に対する〈儉約の勧め〉の一節です。

文中に「勘弁」なる言葉があります。「留学の意義をきちんと勘弁しなさい」と言っているので、「モウ、勘弁ならねエ」の「勘弁（あやまちを許す）」とは当然違います。『漢字源』によると、この「あやまちを許す」は日本語だけがもつ意味だそうです。

「勘」は「かんがえる。奥深く突きつめる」、「弁」は「わきまえる。はじめをつけてわかる」ですから、漢語としての本来の意味は「考える」で、野坂先生も、「留学の意義をきちんと勘弁し（考え）なさい」と諭しているわけです。

「万端作略いたし、費ヶ間敷義は聊之義たり共相省キ、随分勘弁を尽し、如何様共取続、兼々被仰出候通文武之道相励、士風正敷御奉公可被仕候事」

（「温徳公済美録」）

生活全般を簡略にし、浪費は少しでも切り詰め、しっかりと勘弁をつくして、どうなるうとも家が断絶することのないようにして、文武の道に励み、士風を正しくして御奉公しなさい。

【勘弁】（『広辞苑』）

①考えわきまえること。②過失をゆるすこと。堪忍。③やりくりが上手なこと。また、数理に長ずること。

①でも、一応理解はできますが、「③やりくり上手」を当てはめれば、納得がいきました。それにしても、「勘弁」に「やりくり上手」の意味まであるとは知りませんでした。

申形

「 覚

病人送り御越し被成候得共、送り状文段之内何々之儀無御座、御法則ニ致相違、猶病人申形を以承糺し候得共、其訳相知レ不申、此趣ニては送り先キニ受取不被申ニ付、不得止事送り戻し申候、以上

何ノ何月何日

何国何郡何町村

役人名印

所之御役人中」（『広島県史』）

病人を私の村に送り越されましたが、送り状の内容に何々の事の記入が漏れており、規定の書式になっていません。病人の申形を聞いてもその事情が分りません。これでは次村が受け取ってくれませんので、やむを得ず送り戻します。

村役人から役所へ提出する文書は、どこの村の文書でも同じような書き方がしてあります。それもその筈、役所から「案文」という指定の書式が示されていました。上の文書は、「送り戻し状案文」（「宿継・村継・あんだ」参照）です。

「病人申形を以承札」という一節があります。「申形」はどんな意味でしょうか。

「様子相尋候処、病人申形ニて大旨は相分り候二付、送り戻し候ては病人難儀之儀、是迄も送来候事故」病人に尋ねて、その申形で大体の様子は分りました。前の村に送り戻しをすれば病人が難儀をするので、これまでも次村に送り出しをしてきました。

この二例を見ると、「申形」は〈申し立て〉〈言い分〉を意味するようです。

「右之伝馬驚候ゆへ、才領之族致不興候由、然とも

先払之者申形ニて、無異儀相済候」（「龜山諸事被仰出覚」名城大学法制史研究会）

その駅馬が驚いたので、宰領の者（輸送責任者）の機嫌が悪くなったようですが、先払の者の申形で何事もなく済みしました。

この場合は、〈取りなし〉と取ってもよさそうです。

「今更申分ハ有之間敷ト及理詰候処、上下之申形ニハ、元利若得不払時ハ質入引当之田畑、此方ニて売払、正銀を以元利無滞可払出との証文之表を立、其通ニ可被成と申候二付」（「理勢志」）

今さら申し分はないだろうと理詰めで話をしたら、上下町の者の申形では、元利をもし払うことができなければ、「質入引当の田畑を売り払つてでも正銀で元利を滞滞なく払います」との証文を楯に取り、その通にしますと言うので。これらの解釈の最大公約数は、〈言い分〉ぐらいでしょう。

「申形」の意味はほぼ分りましたが、読みは分りません。〈申しかた〉、〈申しなり〉、〈申しよう〉：

…。

鳥飴

「殿様、来ル廿一日曉七時之御供揃ニて在方へ為御泊鷹野被為成候二付、御道筋南御門より八丁馬場、京橋筋通り被成御座、東町端より御鷹野被遊候、右二付、町々掃除作法等、前々之通念入候様可申付候、……御帰城之節、例御鳥飴御行列ニて被為入候二付、町方拝見ニ罷出候儀も相成候得共、此度も先達て之通御鳥飴無之被為入候二付、全地廻御鷹野御往来之通二候間、拝見ニ不罷出候様、末々迄兼て可申付置候」（安永五年（一七七六）一月十六日「堀川町覚書」）

殿様（広島藩主、浅野重晟）は、来る二一日の早朝四時、御供を従えて在方（農村）へ御泊鷹野（宿泊を伴った鷹狩り）に出かけられます。南御門から八丁馬場・京橋筋を経由して、東町の端より鷹狩りをなさいます。それにつき、町々の掃除や作法については、以前の通り念を入れるよう

に指示をなさいます。……御帰城のとき、いつもは鳥飴の行列で城下に入られ、町方の者共も拝見に出たが、今度は前回同様、御鳥飴なしで入られます。地方の往来同様なので、拝見に出ることのないよう、末々まで前もって指示して置きなさい。

殿様の鷹狩りともなると、その「御供揃」も人数で、天保六年（一八三五）十一月の四日市駅（東広島市西条）泊の藩主、浅野斉肅一行は、御用人上席大橋主税以下三四六人、旅亭の数は五四軒と記録しています。（「鶴亭日記」）

「御帰城之節、例御鳥飴御行列ニて被為入候」とあります。鷹狩りの帰りですから、当然獲物の鳥も持ち帰っています。いつもは、城下に入るとそれを飾って隊列を整えて行進したのでしょうか。「鳥飴」は「とりかざり」と読むのでしょうか、どのようなものか判然としません。

借家と家代

「風立時節候条、火ノ用心油断仕間敷候、尤当月ハ諸社祭礼有之候間、借屋之者家明候て罷出候ハ、地頭へ相断、相借屋へ頼置可罷出候、尤社参之儀ハ、明ケ六時より暮六時迄、夜中は停止之事」(安永四年(二七七五)九月十日「堀川町覚書」)

風の吹く季節になったので、火の用心に気をつけなさい。今月は諸社の祭礼もあり、借屋の者が家を留守にして出かけるときは、地頭へ断り、相借屋へ留守を頼んで出ること。お宮参りは明け六時(午前六時)より暮れ六時(午後六時)までとし、夜中は禁止する。

これは、広島の町奉行から出された触です。「風が立つ」といういえば『風立ちぬ』を思い起しますが、これは夏の終りではなく、陽暦の一〇月、都市の住民にとっては大火の恐ろしい季節の始りです。

借家住いの者は「地頭」に声をかけたり、「相借屋」へ頼んで出かけるようにとの注意がありますが、江戸時代の「地頭」とは、

【地頭】じとう。(『広辞苑』)

④江戸時代、知行所を持つ旗本。また、各藩で知行地を与えられ、徴租の権を有した家臣。主

として東北地方で、名子なこを使役した地主で、ここでは、単なる「地主」を意味します。

【相借家】あいじやくや(『広辞苑』)

一つ棟の長屋に、ともに借家すること。また、その借家人同士。あいだな。あいがしや。

という、なんとも(嬉しい)言葉に出会いました。

また、長屋には「家代」なるものがありました。

「借家へ差置候者共之内老人、家代と唱、其者より毎月晦日家賃受取せ、其銀家主共受取、調印致遣し可申、右家代ハ役目と申様ニ申談置、其者之家賃銀ニ当テハ随分引下ケ差置遣し可然候事、……雨漏・壁落等有之候ハ、借家住居之者ともより早速仕直し方之義家代伝ひ家主へ可申出事」(弘化三年(一八四六)「十四日町年誌」)

借家に入居している者の中から、「家代」という者をきめ、その者に毎月晦日に家賃を徴収させ、家主が領収印を渡しなさい。これが「家代」の役目だと話して、その代りに家賃を随分と引き下げてやりなさい。……雨漏りや壁が落ちたら、借家住居の者は早速修理依頼を、家代を通して家主に申し出なさい。

借付

「公料銀は利高之貸付、若滞候節は公儀沙汰ニ相成候義ゆへ、畢竟損失ニ不相成見込ヲ以、当御領之者共公料へ銀差廻し借付候者も有之由相聞候間、若左様之者愈有之候ては借主共より随分承合、其段慥ニ相知候ハ、御代官所へ可申出候、しらへ之上其实銀主御領分之者ニ相極候へは、不届之仕形ヲ以借付置候事故、為過料銀主ハ貸損ト申付、借主は借得ニ可申付候事」(「安芸風土記」)

公領銀(上下銀)は高利の貸付、しかも返済が滞ると公儀の裁断になるので、結局は損失にはならないと見込み、当御領(広島藩領)の者共が公領(広島府中市上下町)へ銀を差し廻して借付をする者もあると聞いている。もしそのような者が増えるようなら、借主共から様子を詳しく聞取り、確かだと分れば御代官所へ申し出なさい。調べの上、事実、銀主が御領分の者と分れば、不届な仕形で借付をしているので、過料として、銀主は貸損、借主は借得とする。

「上下銀」とは、幕府領甲奴郡上下町にあった上下代官陣屋が、石見国大森銀山の産出銀の減少を補填すべく、産出銀を元手に在所の有力商人に委託して金融貸付業を営ませた結果、安芸・備後・備中地域に展開された貸付銀をいう。(勝矢倫生『広島藩地方書の研究』)

金利が高いのなら、「公料へ銀差廻し借付候者」もできます。ここで「借付」は「かしつけ」と読まないという意味が通りません。今なら必ず「貸付」と書くところです。「貸」と「借」は、同じ事柄を立場によって違う言回しをしただけで、いわばメダルの表裏のようなものですから、「貸付」を「借付」と書いたのでしょうか。「公料銀は利高之貸付」と、(正しく)書いてあるところもあります。

もともと、無原則に「貸」と「借」を混用した訳ではありません。「銀主ハ貸損ト申付、借主は借得」とキチンと書いています。

「貸」が「借」で書かれる例とは逆に、「借」と書くべきところを「貸」とする例文もあります。

「右者、只今迄天神町医師良格借屋ニ居申候処、此

度勝手ニ付私借屋貸請参申度由申候ニ付」(「堀川町覚書」)

右の者、今までは天神町の医師良格の借屋に住んでいましたが、この度都合により私の借屋を貸請(借請)たいと申しますので、

「売買」も、片方からみれば「売」ですが、相手には「買」になるので、入れ替えることがあります。これらは、書いた人の〈誤用〉ではなく、一般的に罷り通っていたようです。

もやしもの

「野菜もの等、季節いたらさる内商売致ス間敷旨、前ニ相触候趣も有之処、近来初物を好候義増長いたし、殊更料理茶屋ニては競合買求、高直之品調理いたし候段、不埒之事ニ候、譬ハ、きうり・茄子・ぬんけん・さゝけの類、其外もやしものと唱、雨障子を懸ケ、芥にて仕立、或ハ室の内炭団火を用養立、年中時候外れに売出し候段、奢侈を導ク基ニて、売出し候ものとも、不埒之至ニ候間、以

来もやし初ものと唱候野菜類、決て作出し申間敷旨、……」(天保十三年(一八四二)四月『国前寺御触留帖』)

野菜もの等はシーズンにならないうちに商売してはならないと、以前に禁止令を出したが、近來は初物好きがひどくなり、特に料理茶屋では競い合つて買い求め、高値の品を調理しており、不埒のことである。例えば、胡瓜・茄子・隠元豆・ささげの類や、ほかに「もやしもの」と言つて、雨障子(油障子)をかけ、堆肥で仕立てたり、または室内で炭団火(たんご)を使つて栽培し、年中季節外れに売り出しているが、贅沢なことである。販売する者も不埒の至りである。今後は「もやし初もの」と言う野菜類は、決して作り出しではない。

この触書は、天保改革の下で、天保十三年(一八四二)四月、幕府が出した触書の一部です。野菜の促成栽培を禁止しています。今ならビニールハウスで重油も焚いて栽培するところですが、当時はビニールではなく「雨障子」の温床とか、炭団(たんご)で室(むろ)の温度を上げる方法がとられていたようです。

「胡瓜・茄子……」は「初物(その季節に初めて出来たもの)」の例として示されていて、これは「もやしもの」ではありません。

「もやしもの」は、その仕掛から(促成栽培)に相当します。現在の「もやし」のほとんどは「緑豆もやし」ですが、江戸時代の「もやしもの」は何の野菜でしょうか。促成栽培の野菜といえ、冬でも食べられる胡瓜を思いますが、上記の施設では無理でしょう。

【萌^もやし】(『広辞苑』)

豆・麦などの種子を水に浸して発芽・軟白させたもの。また、その状態をいう。食用。

「もやし」といえば、その名前からして「萌」であり、発芽したものであり、今流にいえばSproutですから、新芽野菜です。胡瓜は考えられません。

『本草綱目』に、黒大豆を^{もやし}漿にし、芽が五寸の長さになると乾し、よく熬^いつて服用する、とある

(『和漢三才図会』)

の説明は葉の説明だが、野菜としての「もやしもの」は今と同様、豆の発芽したものだと思えます。

甘

「質素儉約筋之義ニ付ては度々触示し候処、近來は何となく相甘ミ、不当之着服等相用ひ、且饗応筋等奢美超過いたし候哉に相聞、甚以心得違ひ之義、」(嘉永二年(一八四九)「野間家文書」)

質素儉約筋のことについてはこれまで度々触れ示してきたが、近來は何となく甘ミ、不適當な衣服を用いたり、饗応も度を過ぎて奢美になっていると聞いているが、心得違いも甚だしいことである。

「百姓之本務農業精出、余暇ニは稼筋も無油断相働キ、兼々相示し候質素節儉相守、少ニても氣甘ミもたれ氣ニ相成候様ニては不相濟候間」(鶴亭日記)

百姓の本務である農業に精を出し、その余暇には油断なく働きて稼ぎ、今まで示してきた質素節儉の教えを守り、少しでも氣が甘ミ、人を頼る氣になつては濟まないことなので、

二例とも「甘ミ」という言葉が使われています。当然「甘味^{あまみ}」と思いますが、それでは意味が通りません。

「近來は何となく□み、不適當な衣服を用いた^り

「少しでも気が□み、人を頼る氣になつては濟まないこと」

□に「緩」の字を当てはめると意味が通ります。

「甘ミ」は「ゆるみ」と読み、「緩み」の意味に違いありません……と、言っただけでは説得力がありませんので、証拠を探してみました。

「此甘キを以御免御上ヶ候共」（郡要集）

「此ゆるきを以御免御上ヶ候とも」（理勢志）

この二つの本は題名こそ違いますが、同じ本の写本です。一書は「甘キ」と書き、他は「ゆるき」と表記しています。これで、「甘」＝「ゆるい」に決定です。『日本国語大辞典』には載せてありませんが、念のため『諸橋大漢和』に当たってみました。この辞書には「甘」に「ゆるい」の読みがありました。これで確定です。

「西条柿御買入相濟候二付、竿甘之儀申来り候条、此旨相心得、組合村々へ不洩様可相触もの也」（嘉永二年（一八四九）「野間家文書」）

藩による西条柿の買入れが済み、竿甘めの連絡があつたので、関係の村々に知らせなさい。

「西条柿」は安芸国の特産の渋柿で、広島藩は、その干柿を毎年將軍家に献上しました。このため公用柿の調達がすむまでは民間での自由な売買を禁じたと言います。柿は長い竹竿を使つてもぐの^{ゆるめ}で、「竿甘」とは、〈柿の收穫解禁〉のことだと考えられます。

「竿甘」があれば、「竿留」なる言葉もあります。

「当年は同郡之内柿生り付不自由二付、当郡村々竿留メ之義申来候条」（嘉永二年（一八四九）「野間家文書」）

今年は、同郡では柿の出来が悪いので、同郡の村々にたいして收穫禁止の指示がきた。

ちなみに、「西条」とは東広島市西条だとか、愛媛県の「西条」とか、ほかに……、本家争いが賑やかだそうです。

湊

「近年引統御公務其外御物入差湊御勝手向必至御差支二付、不被得止御家中知行等格外減少被仰付」

（「国前寺御触留帳」）

（広島藩では）近年、引き続いての御公務（幕府への手伝普請等）やその他の出費が差し湊、財政が窮迫して、仕方なく御家中の知行等を大幅に減少するようにとのことで、

「当所あたらし池水引方之義、清助と残り水子一同差^{さしもつれ}纏出来、村方にて済寄不申二付、去夏御約之義御願出二相成候处、御用湊二付、為御代勤社倉主役麻右衛門様、於御手元ニ、去当兩度御約合も被下候得共、」

当所のあたらし池の水利に關して、清助と残りの水子（池水の利用者）との間で紛糾し、村内では解決できず、去夏に（割庄屋に）仲裁をお願いしましたところ、御用が湊うため、社倉主役麻右衛門様を代りにたてられて、二度にわたって調

停をしていただきましたが、

出費が差し重なったり、御用が差し重なったりすることを「湊」と言い表しているようです。『漢字源』によると、

【湊】（『漢字源』）

「動」あつまる。多くの物がそこへとしぼられるようにあつまる。〈類義語〉↓輳。「輻湊」と説明してあるので、意味は「差し重なる、集中する」と理解して問題はないようです。

「此浦船着にて、干潟無之、町裏へ直ニ大船つき、……陸地も西国往還筋にて、海陸運送便利能場所故、……一^{なわ}牀生産ひ致よき場所ニや、風来者も入湊ひ、殊外人多ニて家居足りかたく」（「理勢志」）

この浦（尾道）は港で干潟がなく、町裏へ直に大船がつく、……陸地も西国往還筋で、海陸運送の便利のよい場所、……世渡りのしやすい場所柄のためか、風来者も入り湊ひ、人口が多く住居が足りない。

上記の意味を持ち、送り仮名に「ひ」の付く言葉（八行四段または上二段活用動詞）……。

「湊ひ」は「つどひ」と読むと教わりました。これなら条件に当てはまりますので納得です。

普通、「つどう」は「集う」と書きます。辞書で見ると、

【集う】（『広辞苑』）

集まる。寄り合う。寄り集まる。

ですから、意味は同じ。「集ひ」を「湊ひ」と書いて不思議はありません。

『日本国語大辞典』は【集う】の項に「〔方言〕物事が重なり集まる。出雲、広島」と書いています。

もともと、『御触書天保集成』にも「乍然御物入差湊、御難渋之段」とありますので、方言ではなく、全国区の言葉でしょう。

重

「御年貢之義、いづれ共取立無之候てハ相済不申、其時ニ至り俄ニ借替等ニて間ヲ合候故、高利之借銀重ミ、却て不勝手ニ至趣之事ニ相成、村方困窮

之根元ニ相見候」（『吹寄青枯集』）

御年貢は、どちらにしても取り立てなしでは済まないのです、その時になつて俄かに借金をして間に合せるものだから、高利の借金が重ミ、かえつて不勝手になり、村方が困窮する原因になつていようだ。

「私義、近年打続キ不作仕、其上不運相重ミ、依之借銀等増長仕」（『庄原市史』）

私のことですが、近年不作が続き、その上、不運が重ミ、そのために借金が増えてしまい

問題の「重ミ」という言葉の意味は、「積み重なる」と理解してよいと思います。たつた二例で結論を出すのは早すぎるのなら、いくらでもあります。

「米銀御拝借大造相重ミ」

「追々入用重ミ候故」

「作方不熟仕、依之御未進等相重ミ」

「臨時物入多借財相重ミ」

「重ミ」だから「重み」と考えたいところですが、名詞ではなく、活用語尾が「み」になつて、「積み重なる」という意味の動詞を見つきたい。

いくら思案しても、私は「嵩み(かさみ)」しか思いつきません。「重」も「嵩」も同じ意味を持っていますので、「重ミ」を「かさみ」と読みたいと思います。

【重】(『漢字源』)

〔動・形〕かさなる。かさねる(カサヌ)。上へおいて下におもみをかける。層をなしてかさなつたさま。

【嵩^{かさ}む】(『現代新国語辞典』)

体積・分量などが多くなる。「仕事が一・む」かさばる。金額がつもって多くなる。「人件費(経費)が一・む」

「然其右之通不納相かさミ候ても、銀子其節才覚之目当慥成義有之、右之断申聞候哉」(『広島県史』)しかし、その様に不納が嵩んでも、その時銀子を都合する確かな目当があつて、その様に断わるのであろうか、

「身上持崩し太切之貢をも怠り、終ニは未進借銀かさミ」(『広島県史』)

身上を持ち崩し、大切な年貢納入まで怠り、終

には未進借銀が嵩み

という文書もあります。「かさミ」の部分が漢字で書いてあつたなら、「重ミ」となつていただろうと思います。

また、「嵩」を使つた同種の文書も当然みられます。

「拝借高相嵩、返納難儀之趣相聞候間」(『御触書天保集成』)

拝借の金額が嵩んで、返納に困つてしていると聞いている

守護

「夫より日数十日程にて、つまみこゑとて焼土ニコやしを交せ麦の上へ置、中打と申候て、雁木の間々を鍬にて打返し、畦廻り之草を削り、溝を堀さらへ畦へ堀揚申候、是を壺番守護と唱申候」(賀茂郡『国郡志御用郡辻書上帖』)

それから日数十日程過ぎると、「つまみ肥」と

いって、焼土に肥しを交ぜ、麦の上へ置き、「中打ち」といって、雁木？の間を鍬で打ち返し、畦廻りの草を削り、溝を堀さらへて畦へ堀り揚げます。これを「壺番守護」と申します。

この「麦作之事」と題する文書の中で、「壺番守護」（種蒔から最初の手入れ）の説明です。作物の手入れを、「守護」と言っています。

「百姓共、農業諸稼一統油断は仕間敷候得共、第一作方手守護相怠り候ては、相応之年柄ニても不作いたし」（『広島県史』）

百姓共が皆、農業や外の稼ぎで油断するようなことはないのであるが、もし、耕作の手守護を怠るようでは、平年作の年柄でも不作になってしまうので、

今度は「手守護」と言換えていますが、作物の手入れには違いはありません。

【守護】（『広辞苑』）

①まもること。警固。

辞書の説明では、「作物の手入れ」に関係するのかどうか、判然としません。

広島弁で、「しごをする」という言葉があります。

「魚のしごをする」というふうに使います。下拵えをすることです。「生意気なので、しごをしようか」とは「懲らしめようか」の意味です。「畑のしごをする」とは、「畑仕事をする」ことです。これらの使い方で最大公約数は「手入れをする」ことです。

方言で、「畑仕事をする」ことを「しご」をするといい、古文書で、「作物の手入れ」を「守護」と書いています。ひよつとすると、「守護」を「しご」と訛って読むのではないか……と思います。

麦正月

「二月廿日ハ麦正月と唱、麦飯を食申候、往昔ハ麦飯を食シ、田畠麦毛上の中へ行、やれ腹太ト、へそひつはる、と高声にたわむれ、又ハ麦毛上の中にて、こけまろふといへとも、今ハ右様之儀仕もの稀成由相聞申候、市町にてハ、今日を骨正月と唱、元日より是迄取扱候塩肴之残りを料理いたし、左アレハ、此日より平用の飢食にかへり、家

職を専とすへき故事ならん哉と申值候義二御座候」(賀茂郡『国郡志御用郡辻書上帖』)

一月二〇日は「麦正月」といって、麦飯を食べます。昔は麦飯を食べて麦畑の中に入り、「やれ、腹太と、臍^{へそ}引張る」と声高に戯れ、または麦畑の中を転げ回ったといいますが、今はそのようなことをする者は稀だと聞いています。市町では、この日を「骨正月」といい、元日からこれまで食べた塩肴の残りを料理します。その意味は、この日からいつもの粗食にかえり、家業に精を出せという故事だろうかと話しています。

「半麦の飯を給、廿日正月と唱、夜分祝申候」(『国郡志御用二付下調書出帳』高田郡佐々井村)

半麦^{はんばく}の飯を食べて、「廿日正月」といって、夜分に祝います。

「村民、麦飯を食ふ、麦飯正月と称す、或は飯後に田に往き、大に呼はり、やれ腹ふとやといふ、或は祠官より、贈りし榊枝を麦田に挿す、又は藁を束ねて、地をうち、田鼠を駆る、賀茂郡数村、元日以後食し所の鰯魚の骨を、此日羹となす、因て

骨正月と称す、佐伯郡松原村には、粉団を食ひ、つゝぼ正月と称す」(『芸藩通志』)

村民はこの日麦飯を食うので、「麦飯正月」という。食後に田に往き、大声で「やれ腹太とや」といつたり、神主より贈られた榊の枝を麦畑に挿したり、藁を束ねて地を打ち、モグラを追ったりする。賀茂郡の数村では、元日以後食べた塩魚の骨を、この日羹^{あづもの}にするので「骨正月」という。佐伯郡松原村には、粉団子を食ひ、「つゝぼ正月」という。

「半麦^{はんばく}の飯」とは、米と麦の半々の麦飯のことです。「つづぼ」とは方言で、「地にこぼれた粉」のことです。

柳田国男は『歳時小記』で、

「或はこの日ひもじい思ひをすると、一年中食に飢ゑるといふ処も四国などにあるのを見ると、むしろ粗末なものでも思ひ切つて、飽食すべき日では無かつたかと思ふ。」

と言っています。(臍が引張られるほど腹一杯)に「飽食すべき日」であり、麦畑を転げ回るのは豊作を祈願した行事と思われます。

麦飯を「飩食(粗食)」とか「粗末なもの」と書いてありますが、気にかかるのは「半麦」という言葉です。麦飯とは言うものの、それは米麦混合飯です。江戸時代の農民の米対麦の割合どのぐらいだったのでしょうか。

「明治時代の監獄則に「米麦の混合率が四分六分の混炊」と規定されている。理由は「良民の貧者に勝るものを出したのでは懲罰の効用を失う」とある。」(HP「インテリケンちゃんの一〇〇字雑学」)

すると、明治時代の〈良民の貧者〉は「半麦」の麦飯を食べていたのでしょうか。

明治三二年頃、福岡師範学校の寄宿舎で「三度の食事に出来る御飯は米の方が少ないくらしいの麦飯」(HP「中村ハル自伝」)

「半麦の飯を給、廿日正月と唱、夜分祝申候」の文章を深読みすると、半分も米の入った飯だから、祝う気分も出たのでは……と思います。

ちなみに、栄養的に優れ、おいしい麦飯の米麦比は三対一だそうです。

いびき太郎さんのコメント

私の在所(世羅郡敷名村)では麦飯よりもつときびしい「かわもち」の話があります。住み込みの「おとし」(下男)は毎かたき(食事)「かわもち」を一つ食べた後でなければ「麦飯」を食べることが出来なかった、「かわもち」は喉の通りが悪く、やつとの思いでのみくだしていた、といいます。明治になってもその状態があったと聞いています。

現在となつては正確なこととはいえませんが、「かわもち」とは粳を脱粒して出るスクモ(粳殻)を更によく搗いて粉状にし、米に混ぜてもちのように丸めたもの。(かわの原料については、しら(充実)していない不良の稲穂の別説もある)

一月二〇日の二十日正月、二月一日の「ひてえ(一日)正月」は昭和二〇年代までは生きていました。

陌

「平田屋橋、西橋台より式枚目之板、長サ式尺、陌三寸程くさり、穴明キ申候て、往来無心元奉存候

二付、此段御注進申上候」(「堀川町覚書」)

平田屋橋の西の橋台より二枚目の板が、長さ二尺、陌三寸程腐り、穴が明き、往来が心許ないと思いますので連絡します。

平田屋橋は広島城の南、平田屋川(堀割)に架かる長さ三間の小さい橋でしたが、西国街道にあたるため人通りは多かったはずで、「長さ貳尺、陌三寸」と書いてありますが、長さと併記するなら、「陌」は「幅」に違いありません。

「井手……中川壺ヶ所 長八間陌壺間高サ五尺、但土俵ニてせき上ケ申候」(「賀茂郡広村差出帳」)

井手、中川、壺ヶ所 長さ八間、陌一間、高さ五尺、但し土俵でせき上げている。

ここでは、長さ・高さと並んで「陌」が記入してあります。

【井手】(『広辞苑』)

田の用水をせきとめてあるところ。井堰いせき。

この辞書の説明で「田の用水をせきとめ」とは、何のことやら分りません。

川は一番低いところを流れます。これより高い位

置にある田に水を導くには仕掛がいります。特に谷川はずっと下を流れていますので、この川から取水するには、遙か上流に背の低い井堰を築き、水位を上げて、そこから水を引きます。

『広辞苑』はこの井堰の説明をしたつもりなのですが、「田の用水を取るため、川をせきとめてあるところ」ぐらいの解説がほしいところです。

「賀茂郡広村差出帳」も井堰の寸法だけを書いていますが、井手の〈主役〉は井堰ではなく、田んぼに水を導く水路です。井堰(取水口)から網の目のように広がり、緩やかな傾斜で流れて、多くの田を灌漑します。このようにして「低い位置の川水を、高い所の田に流し入れる」〈魔法〉の仕掛が井手です。話を元に戻して、「陌」は間違いなく「幅」です。多くの用例が証明しています。それにしても、辞書で見かけないのが不思議です。

【陌】(『漢字源』)

《音読み》 ハク バク ミヤク

《訓読み》 みち

《意味》

「名」田畑の中を東西に通る小道。東西に通ず

るあぜ道。なわて。▽南北に通るあぜ道を「阡せんさ」という。

〔名〕みち。町の中のみち。「街陌かやく」

〔数〕十の十倍。▽百に当てた用法。

【幅】（『漢字源』）

《常用音訓》 フク はば

《音読み》 フク

《訓読み》 はば

《意味》 ……

棚川・悪水・引尾

「大須新開之義は……、雨天之砌は近郷より水落合、別て近年府中辺川筋出砂夥敷、田畠地面よりは余程川底高ク、棚川ニ相成、透水強ク、年々水損仕、右悪水、大須南蛮樋并郡新持合樋・石樋三ヶ所へ吐出候得共」（「矢賀村覚書」）

大須新開は、雨天の時には近郷から水が集り、特に近年は府中辺の川の出砂（砂の堆積）が夥しくて、田畠の面よりは余程川底の高い棚川になっているため、透水が強く、毎年水害を蒙って

います。この悪水は、大須南蛮樋・郡新持合の樋・石樋の三ヶ所へ吐き出していますが……

「棚川」は、辞書では見かけませんが、文意から「天井川」であることが分ります。

【天井川】 てんじようがわ。（『広辞苑』）

河川の運搬した砂礫が堤防の間をうめて、河床が周囲の平野面より一段と高くなったもの。

【悪水】 あくすい。（『岩波日本史辞典』）

日本の水利秩序で、村落ないし水田に入る水を用水といい、出る水を悪水と称した。悪水は生産・生活によつて排出された汚水・下水ではなく、水利制度上での排水のことで、大風雨による洪水を含める場合もある。

この悪水を、川や海に排水します。しかし、天井川の場合は、流すべき川のほうが水位が高いので自然には排水できません。

①大須新開のように、樋門を設置して、樋守が頃合を見て門扉を開け閉めし、排水をする方法があります。

②また、川底の掘浚（しゅんせつ）という手もありますが、「府中辺四ヶ村、大川筋掘浚方二付、村々出夫」と

いう、大工事になります。

③ また、逆に「地揚御普請」（低地に土を入れる）というやり方も文書でみかけます。

④ は、「外ト水尾ヲ付」という方法です。これは、天井川と平行に排水路を作り、下流で川にたないで「悪水」を捨てています。井手と同じ発想で、灌漑が排水に代っているだけの違いです。

「引尾之義は、悪水溝より大川床高ク、水吐不申ニ付、堤根へ添堤仕、川下ニて吐易キ様ニ仕候義ヲ引尾と唱来り申候」（『三原市史』）

「引尾」について、悪水を排水する水路より大川の川床が高く、そのため水を排水することができないので、堤防の根に沿って堤を付け、川下で合流させて悪水を吐き易くすることを「引尾」といっています。

水路が二筋、並んで流れる風景は、すぐにポンプを使って強制的に悪水を排水する現在のやり方に比べて、不思議な感じがします。「水尾」は「濡・水脈」で、ここでは「水路」です。

かたき売

野坂三益の「鶴亭日記」文化十年（一八一三）閏十一月十三日の項に次の記事があります。

「大侯君松平備後守、従四位下左近衛権少将、源重晟卿薨、奉諡恭昭院殿前羽林次将鸞台種徳大居士也」

大侯君松平備後守、従四位下左近衛権少将、源重晟卿薨ず。恭昭院殿前羽林次将鸞台種徳大居士と諡し奉る。

広島藩第七代藩主、浅野重晟は、寛政十一年（一七九九）に致仕し、文化十年（一八一三）閏十一月十三日に七一歳でなくなりました。賀茂郡代官は十八日付の触書で郡内に知らせています。

「少将様、御病氣御養生不被為叶、今十八日辰中刻御逝去被遊候、依之普請・鳴物停止、諸事穩便ニ仕、市町往還筋部ヲおろし諸事相慎、火之元別て念入可申事、但、部ヲおろし候儀、三日過候は夫ニ不及候条、店売買可仕事、……此節魚鳥かたき

売用捨之事

少将様(前の殿様)が御病気で養生されていましたが、今日十八日の辰の中刻(午前八時頃)に御逝去されましたので、普請・鳴物^{なりぶつ}は停止、諸事穩便^{えんべん}にして、市町の街道筋では葎戸^{わろど}をおろし、なにごともしないこと。火の元は特に気を配ること。三日が過ぎれば葎をあげて、店売りはしてもよい。魚鳥のかたき売(行商)は当分遠慮なさい。

十六日、十九日と書き継がれた日記の日付が、「薨去」の当日の十三日付に逆戻りしていますので、十八日付の公表を二十日以後に知ったのでしょうか。しかも、公式発表の「薨去」の日十八日ではなく、実際になくなった日付十三日と書いているのが面白い。正確な情報をどうして知り得たのでしょうか。

【担ぐ】(『広辞苑』)

肩にかつぐ。になう。

直接肩に担ぐよりも、主に天秤棒を使って荷を担ぎますから、「担ぎ売り」は「振り売り」に当ります。

【振り売り】(『広辞苑』)

荷物をさげ、または担って、声をあげながら売り歩くこと。また、その人。触れ売り。ぼてぶり。振り商売。

皆が喪に服しているとき、賑やかに魚を売り歩くのはまずいと考えたのでしょうか。

「体国院様(第五代藩主浅野吉長御逝去被遊候」ときにも、「諸事穩便」の触が出ていますが、

「同日(四日後)より御免 豆腐・こんにやく類かたき売、尤、肴類ハ籠底ニ入、上へ野菜類ニても置候て、さかなと見へ不申様ニ家内へ這入密かニ売候事」(『三原市史』)

四日後からは、豆腐・こんにやく類の行商はしてもよい。肴類は籠の底に入れ、その上に野菜類を置いて、魚とは見えないようにし、家内でこっそりと売きなさい。

「店売り」と並んで「振り売り」の活躍した時代の話です。

手置

「手置」という言葉を古文書で見ることがあります。取りたてて穿鑿するほどのものでもなく、今までは見逃して、辞書に当たることもしませんでした。

「近来当郡村々寄、博奕取扱候風聞有之、……五ヶ村之内、不審躰之もの有之趣相聞候故、不意ニ召捕遂吟味候処、取扱候段及白状候ニ付、嚴重之御手置申附候」（『踊場家文書』）

近頃、当郡の村々によつては、博奕をしているとの噂があり、……不審な者がいると聞いたので、不意に召し捕り、取調べをしたところ、白状したので、嚴重な御手置を申し付けた。

「百姓共徒党強訴致間敷旨、度々嚴重之御示し従公儀被仰出候、其筋毎々嚴重ニ相触候処、方角ニ寄り心得違徒党強訴似寄候仕方有之、其度々急度御手置申付候得は……」（文政五年（一八二二）『湯来町史』）

百姓共が徒党して強訴してはいけないと、度々嚴重の御示しが公儀（幕府）より出され、その度に嚴重に触れ知らせてきたが、地域によつては心得違いをして徒党強訴のような仕方をする者があり、その度にきびしい御手置を申し付けて

きたが……、

「御手置」とは「処置、処罰」と見当をつけて、一応辞書で調べてみました。ところが、

【手置】（『広辞苑』）

常^{ておき}に心を用いて取り扱つておくこと。

どうも例文の意味と辞書の説明に多少のズレがあるようです。

「惠蘇郡百姓騒立候処、早速夫々致手当、平和ニ相鎮候旨、いづれも心配之段察入候、畢竟百姓之難義筋より事起、土地之人氣ハ不宜、旁右之次第と存候、此後も手置筋厚考へ合可取計候、威を以押へ置候様成致方ハ不可然」（『広島県史』）

惠蘇郡の百姓が騒ぎ立てたところ、早速それぞれ手当をして、平和に鎮まったとのこと、いづれも心配したことと思う。結局、百姓の難義から起きたことで、その土地の人心が動き、このようになつたと思う。この後も手置筋を厚く考えて取り計らいなさい。威しで押えつけるような仕方は良くない。

この文書は、天明六年（一七八六）、参加者が五千

名に達した恵蘇郡の百姓一揆のあと、藩主、浅野重晟が家臣に示した書付です。ここで使われる「手置」は辞書の説明のとおり、「常に心を用いて取り扱っておくこと」ですが、藩は弓・鉄砲などで武装した郡廻り手先千名を送って待機させ、一揆を鎮圧したといいます。

これによく似た言葉に「手当」があります。腹痛などのときに患部に手のひらを当てたのが、その語源であるという、よくできた〈話〉があります。それは兎も角として、お腹や何かに「手を当てる」手を加える「処置する」ということを示す言葉には違いないだろうと、素人考えをしています。「手を当てる」も「手を置く」も同じことでしょう。

「手置」の本来の意味は「処置する」であり、「容赦なく処置する」は「処罰」に、「優しく処置する」は「常に心を用いて取り扱っておくこと」に変化したのだらうと思います。

春普請

「右新開堤筋（舟越村松石新開堤）之義は、近年追々破損ニおよび候ニ付、普請積帖面を以御願奉申上候義ニ御座候得ハ、何卒早々御見分、普請相調候様御成向之程奉願上候、尤差向捨置かたくヶ所之義は是迄取繕ひ仕置候得共、当春普請差延候様ニてハ、此先風波梅雨出水等之節、大破之程も難計、下方一統不安至極奉存候間」（嘉永三年（一八五〇）三月「野間家文書」）

右の新開の堤防（舟越村松石新開堤）は、近年段々と破損がすすみ、普請積帖面を提出して工事の御願をしています。なにとぞ早々に御見分をいただき、工事が完成するようにしてください。当面、放置できない箇所はこれまで改修してきました。当春の普請が延されるようでは、この先、風波、梅雨、出水等のとき大破するかも知れず、下方では皆不安に思っています。

この文書は、土木工事の許可を得るために、藩の「御見分」を求める「追御願書付」（再度提出した願書）です。文中に「春普請」という言葉が出てきます。

「普請之事、とかく百姓之隙之時分ニ申付候様可有

之候、其時節遅速有之故、百姓取込候時分ニも成申候と考候得は、春普請之儀は其場所之儀、年内可成程ハ其前にも見分之上粗相極、尚又春ニ至上しらへいたし候て、其俣申付候様ニ有之候ハ、百姓共も助力ニ成、第一時節もたかい不申候て可然事、百姓をつかい候時分ハ、昔より相定候時節有之候」(『広島県史』)

普請は、百姓の隙な時期(農閑期)にさせなさい。その時節にも遅速があり、百姓が忙しくなる時期になると考えられるようなら、できれば旧年中にも現地調査をし大凡を見極め、また春になり詳しい調査をして許可すれば、百姓共も助力になり、時期を間違えることもない。百姓を使う時期は、昔から決った時節があるものである。

この文書は郡村支配のことにつき代官に指示した書付で、「百姓をつかい候時分ハ、昔より相定候時節有之候」と言っています。

高田郡戸島村(現広島県安芸高田市向原町戸島の「国郡志御用ニ付下調書出帳」によると、五月になると、本格的な農作業に入ったようです。

三月 此月末に至り綿其外夏物類蒔付申候

四月 当月肥草刈取申候

五月 当月中之前後田植付申候

「春普請」があるのなら「夏普請」「秋普請」「冬普請」もあるのではないかと、調べましたが、『地方凡例録』に、

「春普請ハ前年十月の相場、夏普請は正月、秋普請ハ四月、冬普請は十月書上の下米相場を以て(人足の)代金を渡す」

の記事を見つけただけでした。

公事出入筋の裁判も、農業の妨げになるという理由で、不慮の事件以外は農閑期に行なわれる例となっていたそうです。(「芸藩志拾遺」)

鬱陶

蕪村の手紙を眺めています。独特の癖があります。が、味のある字で、大好きです。

「其夜ハけしからぬ御馳走、御心遣ひ之程かたしけなく、近年之佳興、□□を散シ、愚老、病氣もこ

との外よろしく罷成、大慶之至ニ奉存候」(佳業宛書簡)

その夜は大変な御馳走、御心遣いのほどかたじけなく、近年にない風流な楽しみに、□□を散じ、愚老の病氣もことの外よろしくなり、喜んでいます。



この□□に、右の二字が書かれていました。よく使われる文字は相当くずして書かれると言いますが、この字はそれほどくずしてないようです。

二字目は「陶器」の「陶」だと思いましたが、一字目が分りません。そこで電子辞書を使います。「陶」の字が後に付く熟語を検索(後方一致して候補を絞り、その中から適する語句をみつけます。『広辞苑』で該当するものが一一ありましたが、その最初に、

【鬱陶^{うつとう}】

心の晴れないこと。不快なこと。

字も意味もピッタリで、これに決ります。子供の頃から「うつとうしい」と度々言ってきたが、

一度も漢字で書こうと思うことはありませんでした。それが、「うつとう」には「鬱陶」という立派な漢字があると、この年になって初めて知って、何か心が晴々としてきました。

『大漢和辞典』によると、「陶」は「心中によるこんで未だ外に発せぬこと。鬱陶者、心初悦而未暢之意也。」と説明しています。

ついでに、「けしからぬ御馳走」も面白い。いつか使ってみたような気のする言回しです。

次ル

「次ル」と言う不思議な言回しがあります。「ツギル」と読むとはとうてい考えられません。

漢文の読下しで、「次ル」と書けば、「やどる／とまる」と読むのだそうです。

【次】(『漢字源』)

⑦ ジス「動」やどる。とまる。もと、軍隊がざつと部署をととのえて宿営する。また、旅の間に一日だけとまる。「旅次(宿屋。また、旅の

途上」 「師退次于召陵」 師退キテ召陵ニ次ル」

「長藩之輩往来之義一切差押、尤各国へ御使者等ニて通行之儀ハ先方并姓名等相糺、足輕共附添、次ル番所へ送付候様相達置候趣ハ候へ共、」 (『芸藩志』)

長州藩の者の往来は一切差し止め、もつとも各国へ御使者等の用事で通行する場合は、行先と姓名等を調べ、足輕共が付添つて、次ル番所へ送るよう指示していたが、

「至急農務方へ罷出候様被為仰出候ニ付、同七日一同広陵へ罷出、次ル八日夕御用済ニ相成、翌九日早朝立帰路仕候」 (明治四年(一八七二)『千代田町史』)

大急ぎで農務方へ出頭するよう言われましたので、同(八月)七日、一同広島へ行き、次ル八日夕方には御用が済みしましたので、翌九日早朝に出発して帰路につきました。

「八月十二日四ツ時、吉木村元右衛門申聞候儀ハ、口筋百姓一昨十一日小戸谷へ参り、中筋戸谷村百姓中相集り、割庄屋〇〇殿被参居候を呼出し、踏たをし縛り口中へ唾を吐込砂を入、不忍見ニ取計

いたし、并帳面有所迄尋候由、……其後〇〇殿ヲハ次ル十三日庄原へ引参り、囲へ入候由相聞申候」 (明治四年(一八七二)『千代田町史』)

八月十二日四ツ時、吉木村の元右衛門が申しますには、口筋の百姓らは一昨十一日小戸谷へ来て、中筋の戸谷村百姓達が集り、割庄屋〇〇殿が参られていたのを呼び出し、踏倒して縛り、口中へ唾を吐き込み、砂を入れ、見るに堪えない取扱いをして、帳面の在処を尋ねたそうです。……その〇〇殿を、次ル十三日庄原へ引き連れて、囲いへ入れたと聞いています。

あとの二つの文書は、明治四年(一八七二)の「武一騒動」(「広島県大一揆」)での様子を描いたものです。

最初の例文「次ル番所」は「次の番所」、次の例文「次ル八日」は「次の八日」、最後の例文「次ル十三日」は「次の十三日」。次の場所や次の日時を示していますので、意味は「次の……」と決めてもよさそうです。

問題はその読みです。「つぎる」という言葉は聞いたことがありません。

「……ル」が付いていますので、助動詞の「ル」か、それとも、ラ行の動詞かも知れません。「次」を動詞と考えて、再度『漢字源』を見ると、「やどる」とともに「つぐ」の動詞があります。『広辞苑』には、「次」は「継ぐ」と同源とあります。

困ったことに、私の頭は「次」なる漢字を見ても動詞のような気がしませんが、「継」なら、動詞と認めます。「次ル八日」が「継る八日」なら、「次ル」は「つぐる」（「る」は完了の助動詞の「り」の連体形か）と読むのでは……と思います。

【次ぐ・垂ぐ】（『広辞苑』）

① そのすぐあとにつづく。連続する。

最初から、辞書に載せてあった読み方なのに、結論を出すのにひどく遠回りをしたものです。

出捨

「出捨」という言葉について、辞書には何も載っていませんが、『広島県史』は次のように解説しています。「村方からの出捨夫（無償労働）」。

「大川筋掘さらへ方、助精出捨掘之義、……心得方宜敷、奇特之至ニ付」（嘉永二年（一八四九）「野間家文書」）

（府中）大川の出砂の浚渫を出捨で加勢するとは、大変良い心掛けで……。

という例文だけでは、「無償労働」であるとは、まだ判然としません。

「当村熊井田尻水尾附添……竹木等買入代銀程御仕向被成遣、其余夫方之義ハ村内惣出捨ヲ以取計候様被為仰聞、……乍去夫方丸て出捨と申てハ、其日拵喰之者、当年柄之成行、迎も得凌申間敷奉存候」（文政十二年（一八二九）『三原市史』）

当村の熊井田尻の水路延長工事に付き……竹木等の代銀は藩から援助で、人夫賃については村内惣出捨で取り計らうにとの命令ですが、……しかし人夫賃が全額出捨となったなら、その日暮しの者にとつて、こんな時世に、とても生活できるとは思えません。

「其日拵喰之者」には「無償労働」を強制されるのは死活問題ですから、「無償労働」という意味

に間違ありません。

「用水小破の際の加勢人足は廃止され、各村の「出捨り」で普請することとなった。」（『福井県史』）では、「出捨り」と書いてありますが、それ以外の文書では「……り」はありません。「ですて」と読んでいいのではないかと思います。

「毎年雨池内掘浚仕、於下方出捨勤崩仕候得共、難洪村柄ニ御座候得は……」（『船越町史』）

毎年溜池の内を掘り浚えをします。そのとき農民は出捨勤崩をしますが、貧乏な村なので……。今度は、「出捨」とならんで「勤崩」という言葉が出ています。また、「勤崩」だけの例もあります。

「村内入用夫并諸普請共勤崩ニ仕来申候」

村内に必要な人夫や諸普請などは勤崩でやつてきました。

「勤崩」も「出捨」と同じ、「無償労働」を意味するのではないかと考えています。

自給自足が生活の基本パターンである農民にとつて、出費は（痛い）ことですが、自分の労働力を（タ

ダ）と評価されても（仕方がない）と思ったのかも知れません。

押搾

「当村八坂道難所ニて奥郡人馬往来ニ苦候ニ付、去ル午年……新道付替り候得共、猶右新道より清水と申所之上ミ迄新道御作り被成度御旨ニて、夫積仕候様被仰付候ニ付見合申候処、山形嶮阻、或は潰抜所も御座候て石垣築上所も相見申候ニ付、山幅押搾式間余も掘闕キ候ハハ、道幅壱間位ニも相成可申と奉存候」（文化九年（一八一二）『三原市史』）

当村（御調郡西野村、現三原市）の八坂道は難所で、奥郡の人馬は往来に苦勞していたので、去る午年、……新道に付け替えました。今度は、清水の上まで延長したので、工事に必要な人夫の見積りをするよう指示されました。そこで調査をしたところ、山が嶮阻で、潰え抜けた場所に石垣を築いた所もありました。山腹を押搾し式間余りも削り取れば、道幅が壱間位にもなるだろうと思います。

文中に「潰拔所も御座候」とあります。広島地方の山には広く風化花崗岩が分布しており、山崩れの多い地域です。これを方言で「ずえる」と言います。

【ずえる】（『日本国語大辞典』）

山などの土がくずれる。「ゆうべの雨で裏のがけがずえた」

京都から中四国の方言だそうです。広島の古地図では「大ツエ」と書かれた地名も見られます。「潰拔」は「ずえぬけ」と読んだのでしょうか。

「押押」という珍しい言葉も使っています。「おしならし」と読み、「平均すると」という意味です。

「押」の字は『大漢和辞典』では「はじく」などの意味が書いてありますが、「ならす」はありませんが、しかし、

「ならし」という語に対して、「平」「均」「平均」「並」「概」という漢字をその意味に沿って当てたものと、それに対象物や動作を示す「土偏」や「手偏」を独自に足したもの、さらにそれ以外の文字が使われていた。「押」は見馴れなかったのか「坪」や「称」と記されることもあったよう

ある。（篠原宏之『日本の漢字』）

著者は、ある特定の地方でのみ通用している文字に対して「地域文字」という名前を付けていますが、「押」もその一つです。手を使って平らにするので、「ならし」（概）とは……。これは、〈広島産の文字〉です。

この字を古文書でよく見かけるのは、

地押取帳

図のような「地押野取帳」です。

春凌

「木綿織出し方之義は御国産第一之品にて……当郡中別て多分相稼、小百姓・浮過之者共渡世之一廉ニ仕来り候処、近年之形勢、世上不景氣にて木綿直段格外引下ケ、米麦は前代未曾有之高価ニ相成、……何程出精相稼候ても渡世之便ニ相成不申様押移、此成行にてハ浦方村々小前之もの共、忽来春凌方如何相成候哉と案劳仕、実以歎ケ敷次第第二御座候」（『海田町史』）

木綿織出しは安芸国の国産第一の品で、当郡(安芸郡)では特に多く稼ぎ、小百姓や浮過(賃仕事などの浮稼ぎで生計を立てた貧農)の生活の助けになっているますが、近頃は世上不景気で、木綿値段が大幅に引下げ、米麦は前代未曾有の高値になり、……どれほど精を出して稼いでも世渡りが難しくなり、この様子では浦方村々の小前の者(小百姓)共は、たちまち来春の凌ぎ方はどうなることかと心配する始末、実に嘆かわしいことです。

「亥年悪年不作ニ付、百性共難儀故、御願申、丙子ノ春峠御留山元伐り百本、した打共御免被為遣候て、小百姓末々迄夫賃取仕候て、春凌ニ仕候、悦申候」(『瀬戸田町史』)

亥年は不作のため百姓は難儀をし、藩に御願をして、丙子の春、峠御留山で百本の木材の伐採許可をいただき、小百姓など労賃を得たので、春凌になつて、喜んでいます。

この文書では「春凌」という用語まで使われています。「凌ぐ」とは、「苦しさやつらさをがまんして切りぬける」ことですから、春になると「苦しさ」

がやって来るといふことになります。その「苦しさ」とは飢えです。

「寺院に残されていた室町時代の過去帳を調べたところ、死亡者数のピークは春先。ちなみに江戸時代は食中毒が流行る夏場、現代は気温が急激に下がる冬がピーク、なのだが、江戸時代でも飢饉の年には春先がピークになっていた。」(HP「別府大学／仕事・研究室」)

貧農にとつては、借金取りやつて来る歳末や、米の収穫前(端境期)の時期より「凌ぐ」必要があつたのは、飢饉の時の「春」だったようです。

高田郡多治比村(現安芸高田市)の丸屋に伝られた「家業考」によると、

四月中・柴草刈り柴草おろし菜種刈り大麦刈り

五月節・麦刈り田ごしらえ田植

飢饉の時には(旧暦)四月まで食べ物が出たなかつたのでしよう。春をなんとか凌ぐことができれば、四月には麦が収穫でき、命をつなげます。

私のパソコンに保存してある〈データベース〉の中から「夏凌」「秋凌」「冬凌」「歳末凌」という用

語があるか調べてみましたが、一つもありませんでした。したが、「春凌」は四つ見つかりました。

【*注】中_二二十四節氣のうち、雨水・春分・穀雨など、一つおきの節氣、すなわち旧暦で月の後半にくるものの称。

【*注】節_二二十四節氣のこと。また、そのうち立春・啓蟄・清明など一つおきの節氣、すなわち旧暦で月の前半に来るものの称。（『広辞苑』）

飛渡・歩行渡

村の指出帳には、村内の橋の種類として、石橋・土橋とならんで、「飛渡り」「飛渡り^{こう}缸」が書いてあります。「^{こう}缸」とは「とびいし」のことですから、「橋」というよりは、配置された飛石伝いに小川を渡る（場所）です。チヨロチヨロと流れる小川なら、この仕掛でも充分役に立ったかも知れませんが、大きい川の場合は大変だったろうと思います。

【徒渡り】（『広辞苑』）

徒歩で川を渡ること。徒渉。

「当村大川堤仁部より大須賀へ渡り場之儀は、浦部筋忠海・竹原・三津辺、并ニ当郡川南村々より上方三原・尾道へ之通路ニて、日毎ニ往返之人其数難量場所ニ御坐候、降雨出水之刻は勿論、日夜兩度之潮時は同所より上手迄差入、歩行渡は難相成、無左迎も冬春寒之内は大河歩行渡之儀、他邦之ものハ其場ニ臨ミ致煩勞、毎日往返仕候近在之者共迎も同様迷惑がり候義、今ニ不初儀ニ御座候得共、定渡船と申儀も無御坐」（『三原市史』）

当村（豊田郡田野浦村、現三原市）大川（沼田川）堤、仁部から大須賀へ渡る個所は、沿岸部忠海・竹原・三津辺や、川の南にあたる村々から、上方三原・尾道への通路で、毎日ここを通る人数は大変な数ですが、（橋がないため）降雨出水の時は勿論、一日二回の満潮時には、同所より上手まで汐が遡り、歩行渡はできません。そうでなくとも、冬春寒の内の大川の歩行渡りは、他国の者はその場に立ちすくみ、毎日行き来する土地の者でも同様に昔から迷惑がつており、常設の渡船もあります。

沼田川は三原市に流れ出て瀬戸内海に入っている二級

河川です。この「歩行渡」の場所は、当時は河口から三kmほど上流で、川幅一〇〇mあまり、西国街道から分れて、沿岸部の竹原に行く交通の要所にあたります。

田野浦村双照院の住職、定屋^{じやうおく}は、先住職の遺志を継ぎ、俟約して

「数十年を積み、多くの銀を蓄へ官の許をうけて、村の新倉といふ処の大川に板橋の長七十六間なるを作りける。天保五年の暮なり。……天保六年未の九月、官より賞して寺格を進めたまひ、公の東觀往来に拝謁することを許されける。」（「芸備孝義伝」三編）

数十年にわたり積み立てて多くの銀を蓄え、藩の許しを得て、村の新倉という所の大川に長さ七十六間（二四〇m）の板橋を作った。天保五年（一八三四）の暮のことである。……天保六年（一八三五）の九月、藩から賞せられ、寺格が上がり、藩主の参勤往来のとき拝謁を許された。

現在は「定屋大橋」という名で立派な橋が架けられています。

事ヶ間し

「銘々持高当りの御年貢ハ勿論、役目銀、預り地、散田米、借家賃之類、御年貢も同様の品候間、限月通り速ニ可相納義は申迄も無之候得共、折節ニは不埒もの有之、不払之上、事ヶ間しく申族も相聞候、以来其類之ものハ急度可被申出、左候へハ御作法通り申付方も可有之事

但し、右外盆前、暮兩度之大取引事、兎角約り兼、市中ニおゐてハ元日之式も怠り、盆之仏祭りも滞候様相成り候義、甚心得違不埒事ニ候、素より可払出義ニて、いつれ流合ニは不相成候へハ、日限一日・半日延候通も相替義も無之事ニ候得ハ、兼て覚悟仕、暮は小晦日、大卅日ナレハ夕八つ時相済候様心寄、盆十四日八つ時限りと互ニ心ヲ懸候ハ、夜通し翌日迄はかゝり不申、一同盆・正月之式も被相行」（天保三年（一八三二）『三原市史』）

各人の持高に懸る御年貢は勿論のこと、役目銀・預り地・散田米・借家賃の類は、年貢と同様

の品なので、納期通り速やかに納めるのは言うまでもないことであるが、ときには不埒者がいて、納めないでクドクドと言訳をすると聞いている。今後は、このような者がいたら申し出なさい。決り通り処置するつもりである。ほかに、盆・暮両度の大取引では、兎角ケリが付かなくて、市中では元日の式や盆の仏祭りもできかねるとは、甚だ心得違いで不埒なことである。どうせ払わねばならず、許してもらえるものでもないのに、日限を一日や半日延ばしてもらっても仕方のないことである。前々から覚悟して、暮は小晦日（おおみそかの前日）までに納め、大晦日なっても午後二時までに済ませるよう心掛け、盆は十四日午後二時までと、お互いに心掛けるなら、夜通しまたは翌日まで懸ることはなく、みんな盆・正月の式をつとめることができる。

この文書は豊田郡の割庄屋連中が、郡内の農民の心掛けるべき事項について、村役人に示した文書です。ここに取上げた個所は、〈払うものは早く払いなさい〉という単純明快な説教ですが、払うものが払えないから、厳しい盆暮れの「大取引」（攻防）が

展開するのに……、割庄屋ならその辺の事情は十分承知の上、外に言い様がないので、このような〈説教〉になったのでしょうか。

この文書には、内容だけでなく、〈面白い言葉〉が沢山でてきます。

「事ヶ間しく申族」^{やから}は、初めて知りました。「小晦日」「大卅日」^{みそか}も今では、あまり聞かなくなりました。

【事がまし】（『広辞苑』）

ことがましい。ぎょうぎょうしい。おおげさだ。ことごとしい。

【小晦日】（『広辞苑』）

こつごもり。おおみそかの前日。陰暦一二月二九日の称。

【大晦日】（『広辞苑』）

おおみそか。（各月の「みそか」に対して）一年の最終の日。おおつごもり。

【晦日・晦】（『広辞苑』）

つごもり。（ツギゴモリ（月隠）の約）①月の光が隠れて見えなくなること。また、そのころ。（陰

暦の月のおわりごろ。下旬。②月の最終日。
みそか。(古くは「つこもりの日」ということが多
い)

「夕八つ」は「午後二時頃」、歳末なら「夕……」
といってもいいのかも知れません。

落葉搔取

「百姓共持分腰林、落葉拾取之儀は、往古ヨリ自他
之無差別搔取候処、近年村々寄ヨリ百姓共之内為
搔取不申候ニ付、貧民之儀ハ腰林一円無之、薪買
取業不相叶、殊ニ野山乏敷村方は寒氣凌難出来、
必至と行当候て歎出候ニ付、其段御伺申上候処、
左之通御差図被仰付候間、左様御承知可被成候
一落葉搔取之儀、往古ヨリ仕来之通、自他之無差別
搔取可申事

一枯木・枯枝落居候共、一切拾取申間鋪事
一落葉拾ひ取刃物、何ニ不寄一切持参仕間敷事
一茸類生候砌、茸生候山へは一切這入申間鋪事
一人家背戸山之義は屋敷近ク搔取無遠慮之至ニ有之

候間、少用捨可致事」(天保七年(一八三六)『三原
市史』)

百姓共の持分である腰林(私有林)の落葉を拾い
取ることは、昔から誰のものであらうと関係な
く搔き取つてきたが、近年は村々によつては搔
き取らせない百姓もいて、腰林を持つていない
貧農は、薪を買うこともできず、ことに野山(共
有林)のとぼしい村では寒むさを凌のげず、(割
庄屋まで)困つてお願いに來た。お上に御伺いす
ると、次のような指示があつたので、御知らせ
する。

一、落葉を搔き取ることは、昔からの仕来りの
通り、自他の差別なく搔き取つてもよろしい。
一、枯木・枯枝は落ちていても、一切拾い取つ
てはいけない。
一、落葉を拾い取るとき、刃物類は一切持参し
てはいけない。

一、茸類が生えている季節には、茸山へは一切
入つてはいけない。
一、人家のすぐ後の山(背戸山)は、屋敷の近く
なので、落葉を搔き取るとは遠慮しなさい。
農家にとって、里山の存在は必要不可欠なもので

あつたと言われています。この文書は、その利用の一つ、落葉のについてのルールです。

「落葉掻取之儀、往古ヨリ仕来之通、自他之無差別掻取可申事」と、昔から村で作られてきたであろう慣習を、藩もハッキリと認めています。

落葉は「拾取」るものではなく、「掻取」るものです。竹製の熊手を使

つて、山の斜面で松葉を掻き集めます。広島では、これを「さでる」

と言います。（図は熊手、「和漢三才図会」より）。大きな籠にいて背負って帰ります。松葉は焚付けに使います。外の落葉は肥料に使ったのでしょうか。



【さでる】（『日本国語大辞典』）

〔中四国方言〕掻き集める。さらえ込む。「松葉をさでる」

【さでかき】（『日本国語大辞典』）

〔方言〕①落葉などを掻き集めること。②くまで。

【さで】（『日本国語大辞典』）

〔方言〕落葉などを掻き集める用具。くまで。

うだり

「うだり」という珍しい言葉に出会いました。辞書は次のように説明しています。

【うだり】（『日本国語大辞典』）

〔方言〕①ぐずぐずしている者。のろま。②上の田から余り出るみず。広島県比婆郡。

【うたり】（『日本国語大辞典』）

〔方言〕沼地。湿地。低地の水たまり。

【うだる】（『日本国語大辞典』）

〔方言〕田の水などがいっぱいになる。広島県比婆郡

「美能婦村百姓長藏家之前畑ヲ掘田ニ致し、水之儀は上ミうたりヲ以作り可申奉存候処、右うだり懸り百姓升藏ヨリ畑堀へ水引候ては古地及旱損候段願出候ニ付、先庄屋与兵衛地所見分之上、うたり引候儀は差留メ被申」（『三原市史』）

美能婦村(三原市八幡町美生)の百姓、長蔵が家の前の畑を開いて田にし、用水は上みうだりを使う心積りのところ、このうだりを利用している百姓升蔵から、畑堀へ水を引いては従来の耕地が早損になると願ひ出てきたので、先の庄屋、与兵衛が現地を見分し、うだりを引くことを差し留めた。

「飛郷須川谷の儀、東南の方土地至て高く、井手水等懸り不申、其上谷うだりも無御座、畑畝凡弐町余御座候所、近年追々作り荒シ、合力米等多分ニ相成、其上有附居候百姓も追々離放も仕候様相成」
(『庄原市史』)

飛郷(村の中心から離れた集落)の須川谷は、村の東南に位置し、標高がいたって高く、井手水を用水として利用できず、その上、谷うだりもありません。畑が弐町余ばかり、近年は段々と耕地が荒れて、合力米等が多分に懸るようになり、その上、住んでいた百姓も追々と土地を離れるようになりました。

「上の田から余り出るみず(漏水)」は確かにあるでしょうが、この二つの例文から考えると、小さい

谷川のチヨロチヨロ流れる水、日照りが続くとすぐに枯れる水、その様な頼りない水のような気がします。

「上の田から余り出るみず」を使うのなら、升蔵の「うだりを利用して畑堀へ水を引いては、従来の耕地が早損になる」という抗議は出ないはずですし、また、「谷うだり」という言い方もしないだろうと思います。自然に上の田から水が漏れ出すのなら、「うだり懸り」とか「水引候」とは言わないはずです。

もつとも、辞書の説明どおりの使い方をしている例もあるようです。

「渇水期になると、隣の田圃のお兄さん(私より年長という意味で「お兄さん」)が、「昔や、こがいに水が無あこたあなかつた。今頃あ、作らん田がおゆう」「多く」なつたけん、こがいになつたんよ。田を作りや、上の田から水がずつて来るけん、水はある。」とよく言う。実際、農道を挟んで私の田圃がある側では、休耕田がないので、私の田圃に上側から水が「ずつ」て来る。私の田圃だけを見

でも、一番上の区画に水をあてると、少しずつ下の区画に水が下りていく。ところが、農道の反対側で私の田圃と同じ水準にある田圃は、その上に二町ふたまち（田圃の区画は、「ひとまち」、「ふたまち」と数える）、長い間の休耕田があり、耕作田から「ずつ」てくる水はその休耕田で吸収され消えてしまう。「今頃あ、うだりがのうなったけん、「田圃が」よお乾く。」と、その田圃のお兄さんは言う。漏水防止のため、畦を塗る代わりに、ビニールマルチで畦を覆う田圃も目立つ。それでもやはり、水は「ずる」。

「水がずる」＝上の田の水が地中を通って、下の田にしみ出ること。

「うだり」＝上の田から漏れてくる水。」（HP「てつがく村」）

小以高

水高

この字は、「□高」らしいのですが、□が読めませんでした。同類の文書を読

みずすめると、「□は二文字だと気づき、ようやく「小以高」と読めました。言葉を知らないという字は読めないものだと思います。

次の史料は、幕府領であった備後国甲奴郡小堀村（府中市上下町）の安永六年（一七七七）年貢免状の一部で、「小以高」が出てきます。

「西御年貢可納割付之事

検見取

一高九百三拾九石壹升壹合 備後国甲奴郡小堀村

此訳

田高七百五石三斗七升八合

(a) 貳斗壹升貳合

前々溝代引

内(b) 拾貳石四斗貳升九合

前々川欠山崩
石砂入荒地引

外八斗壹升壹合

当西起返

(c) 九拾三石四斗貳升

当西早損不作
付荒皆無引

(d) 小以高百六石六升壹合

残高五百九拾九石三斗壹升七合 （以下略）（安永六年（一七七七）『上下町史』）

「小以高」(d)の数字は(a)(b)(c)を合計したものに一致します。「田高」から「小以高」を引くと「残高」

になります。「小以高」は（小計）と考えてよさそうです。何と読めばよいのか、「こいだか」と予想して辞書に当りました。ありました。

【小以高】こいだか。（『日本国語大辞典』）

(a)	0. 212
(b)	12. 429
+	(c) 93. 42
(d)	106. 061

「こいしめ（小以締）」に同じ。地方凡例録「小以高は、たかの名目にはあらず、小ベの事也」

「小以高之事

小以高（コイタカ）ハ高の名目にあらず、小ベ（コジメ）の儀なり、……勿論高に限らず米金其外諸品幾口にても之を内にてベ立たる所を小以（コイ）と書て小ベといふことなり、以ハ集り止るの字義にて物を集め止めたる義、内にて小しく集るといふ儀則ち小以上の下略なり」（『地方凡例録』）

「小以高」は高の名前ではなく、「高の小計」のことである。……勿論、石高に限らず、米や金、その他の品物でも、幾つかのものを内で集約したものを「小以」と書き、「小計」を意味する。「以」は「集り止る」の字義で、物を集

め止める義。内側でわずかに集るといふ儀、則ち「小以上」の下を略したものである。

道幅

「此度、御巡見御通行道筋取繕方申附、尤、御巡見ニ不限、都て往還之儀は兼て相定候道幅有之候ニ付、定メ之通り造り直シ不申候てハ不相済儀ニ候所、作人共心得違、地端道々打欠き、作ク附いたし、或は木竹立広メ、又ハ石組いたし、道幅狭相成居候処数々在之、作人共作方あせり合より之義ニも可有之、乍併道筋田地へ欠込ミ不申候様ニとの義ハ従来申附候趣も有之候所、右之次第不埒成事ニ候得共、……」（『三原市史』）

この度（天保九年）、幕府御巡見使御通行のため、道筋の修理を申し付けた。御巡見に限らず、全て道路については以前から定めた道幅があり、規定通りに改修をする必要があるが、農民共は心得違いをして、道路の端を打ち欠いて作付をしたり、あるいは木竹を立広め、または石組を

するため、道幅が狭まくなった所が数々ある。農民共が耕作をあせり合うことよりこのようになるのであろう。道路を削り取り田地にしていけないと今までも指示していたのに、不埒なことである。

天保九年（一八三八）の幕府巡見使（全国の施政・民情を査察するため派遣された幕府の上使）は六月十四日に広島領内に入りましたが、この日付を欠いた文書は、その前に出されたものと思われます。

「兼て相定候道幅有之」と言うように、広島藩では、寛永十年（一六三三）、幕府の巡見使を迎えるにあたり、「西国街道筋道幅二間半（四・五^咫）、石見・出雲街道七尺（二・一^咫）、村伝之小道三尺（〇・九^咫）二相定」に決めたといひます。

年月が経つと、道路がだんだんと痩せ細って、田畑に変わっていく……。何とも、はや、言葉もありません。

たる砂

これは、天保十一年（一八四〇）、豊田郡小原村（三原市沼田西町小原）の庄屋が、不作の様子を割庄屋に訴える文書です。

「当年之義ハ、窪所毛上一^咫植候分ハ、六月大洪水ニてたる砂ニて埋り、方々^もひ苗仕植附、廿日、廿四、五日も遅作相成候事故、未夕青毛ニて本実ニも相成不申候所、最早冷氣ニ相成、霜逢等ニてハ追々相劣り可申哉と奉存候、……猶又畑方迎も不残綿^ハ一^咫吹不申、夏作計リニ御座候所一節照続ニ附田痛ニ相成、菜・蕎麦等も遅植ニて不作仕、……下方一統十方暮居申候」（『三原市史』）

当年は、低湿地の稲の一^咫植えた分は、六月の大洪水で「たる砂」のため埋ってしまった、方々から「貰い苗」をして植付けましたので、（十月になった現在）二〇〜二五日も成育が遅れ、まだ「青毛」のままで「本実」になっていません。もはや寒くなり、もし霜にでもあえば次第に実りももつと悪くなるだろうと思います。……また畑とても綿などは全く「吹き」ません。夏作ばかりの所は一時日照り続き「田痛」になり、野菜や蕎麦等も遅植のため不作でした。……こ

の状況にみんな途方に暮れています。

この年は五月末から六月初めにかけて長雨が続き、安芸・備後で一三〇人近くの死者が出るほどでした。

「大洪水にてたる砂にて埋り」とありますが、「たる砂」の意味が分りません。

稲が砂に埋れば、再び田植をしなければなりません。六月に入って「貰い苗」が出来るのだらうかと心配になります。（高田郡戸島村では五月に田植をする）。

「未夕青毛にて本実ニも相成不申候」とあります。

「毛」は「地表に生える草木・作物」ですから、「青毛」は、黄金色に熟してない「青いままの作物（稲）で「本実（実入り）」も見られない状況です。

畑作物も、「綿杯一円二吹不申」という有様です。

綿の実は、裂ける前は桃の実に形が似てるので、「綿の桃」と言うようですが、この「桃」が割れて、中から白い綿が出てくることを「綿が吹く」といいます。綿も熟してないと、吹きません。

このような状況では、農民は「十方暮」（途方に

暮れる）ばかりです。

手余地・生高

「村々農業第一ニ相當罷在候得共、五、七ヶ年以來格別ニ人少、手余地多ク、御年貢弁納小前生高へ莫太ニ相懸り、旁以無抛御年貢未進ニ罷成、其上近來別て麦作不熟ニ付、夫食手当等無御座、忽難立行候処、御支配様ニおゐて夫食其外他借等之御セ話方迄御苦勞被成下、漸当難ヲ凌、郡中之浮沈一時ニ相廻罷在候処、当亥年之作柄、是迄之成行にては相応ニ相見候間、何卒御未進銀他借等迄夫々相片付、凶作之余り二男三男他所奉公稼差遣し候ものともは猶受（更力）之義、袖乞等ニ罷出居候もの共迄追々呼戻し、手余地作付仕、困窮立直り候様仕度」（天保十年（一八三九）『上下町史』）

村々は農業第一に営んでいます。五、七ヶ年前から特に人手が少なく、手余地が多くなり、御年貢の上納が百姓の毛付高（耕作面積の高）に過重に懸り、そのため仕方なく御年貢が未進にな

り、その上、近来特に麦作が不熟のため食糧の手当もなく、忽ち立ち行かなくなつたところ、御代官様が夫食やその他借等の御世話までしていただき、漸く当難を凌ぎ、郡中の浮沈一時に回避できました。当年の作柄は、平年作のようなので、御未進銀や他借等処理して、凶作のため出稼ぎ奉公をしている二男三男は勿論、乞食に出ている者までも追々と呼び戻し、手余地を作付させて、困窮から立ち直るようにしたいと思います。

天保三年（一八三二）から連年のように続いた凶作による飢饉が漸くおさまる頃の、天領、備後国甲奴・神石・安那三郡、三十六か村村役人の嘆願書の一部です。

農村では食べてゆけず、二男三男が出稼ぎにゆき、「袖乞等二罷出居候もの共」もあり、そのため「格別二人少、手余地多ク」なっています。

【手余地】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、凶作や重税により作徳が見込めずに作付けが行われなかった田畑や、欠落百姓によつて放棄された田畑。耕地の狀態が不安定であつた江戸時代初期、および凶作の重なつた後期

に多く生じた。

耕作の放棄された田畑が多くなれば、当然、年貢は「生高（毛付高）」を対象として課かります。

【生高免】いきだかめん。本年貢のみの生高（村高から諸引方を引いたもの）に対する賦課率のこと。

（『府中市史』）

手余地を解消し、村を復興するためには、出稼ぎ（奉公・乞食）を呼び戻す必要があります。その後、村の状況はどのように変化したのでしょうか。

そわい

「北女猫島の地方より南安芸郡蒲刈下島白崎鼻への渡凡拾貳町程の所、潮瀬早くそわいハなければとも海底大石有と見へて、其海底石へ流当ル汐と女猫島或ハ白崎鼻へ流当ル潮と鳴る音遠く聞申候」

（『仁方村国郡志御用書上帳』）

北は女猫島の地方より、南は安芸郡蒲刈下島白崎鼻への渡り、凡拾貳町程の女猫の瀬戸は潮流が早く、「そわい」はないが、海底に大石があ

るとみえて、その海底の石へ流れ当たる汐と女猫島、或は白崎鼻へ流れ当たる汐とぶつかり鳴る音が遠くまで聞こえます。

現在、安芸灘大橋の架かっている呉市仁方から下蒲刈島の間の女猫の瀬戸は潮流が激しく、大潮時には4kmを超えることもあるといいます。「そわい」はないが大石があるため、汐の当る音が聞えると書いてあります。「そわい」とは何でしょうか。

「そわい 式ヶ所 船路より北ニ当ル

松か鼻 龍王山の南鼻にて岸より式拾間へ出ル、潮満深五尺、汐干深式尺程、是ハ小潮時の積り大潮ニハ石出ル、(以下略)」(同書)

そわい 式ヶ所 船路より北にある。ひとつは「松か鼻」といい、龍王山の岬で岸より式拾間伸び出ている。満潮時深さ五尺、干潮時深さ式尺ほど。大潮の時には石は海面に出る。

この記事から、「そわい」(そわひ)は暗礁だと分ります。平凡社『世界大百科』は、

【堆】

比較的浅い海底の高まりで、海上航行には十分な深さを有するもの。バンクともいう。……好

漁場となるので、古くから漁民によって呼名がつけられている。……すなわち出シ、グリ、ソワイ、ゾワイ、ソワ、曾根、バエ(簗)、ハエ、シ(辻)、岩、石、根、瀬、ビラシ、ツガイ(喰合)、アサリ、モ(藻)、モタレ、ヤマ(山)、イソ(磯)、場などの異称がある。

と、沢山の類語を書いています。その内の一つに、「はえ」があります。

「磯はへ 壺ヶ所 周廻り式拾間、汐干ニ地続ニ相成申候」(「生口福田村国郡志御用ニ付下調書出帳」)

磯はへ 壺ヶ所 周廻り式拾間、干潮時には地続きになる。

この史料では、「磯はへ」という言葉を使っています。

【咀】(『日本国語大辞典』)

絶壁。「方言」暗礁。広島県走島

【はえ】(『日本国語大辞典』)

「方言」海中の暗礁。①陸地から海中へ突き出ている岩礁。②海中の暗礁。広島県倉橋島

慕ひ

【慕う】（『広辞苑』）

①（恋しく思い、また離れがたく思つて）あとを追つて行く。②会いたく思う。恋しく思う。なつかしく思う。③理想的な状態・人物などに対してそのようになりたいと願ひ望む。

「頼政宇治にて自害之節、幼子西国へ落下、此西条にて被相果、郷人憐て東子滝の山上へ葬り、石塔を建置候処、其後菖蒲の前幼子を慕ひ尋来」（賀茂郡「国郡志御用郡辻書上帖」）

源頼政が宇治で自害したとき、その幼子は西国へ落ちゆき、この西条で亡くなった。村人は憐れんで東子滝の山上へ葬り、石塔を建てた。その後、菖蒲の前は幼子を慕つて尋ね来て、

「殿様御上下・御泊鷹野之節、御先払庄屋・与頭之内式人宛、御跡慕ひ割庄屋壱人相勤メ候様前々被仰付候処」（寛政二年（一七九〇）「野間家文書」）

殿様が参勤交代や御泊鷹野のため（郡内の往還を）

通られるとき、「御先払」として庄屋・与頭の
内から式人ずつ、「御跡慕ひ」として割庄屋壱
人が勤めるよう、前々から命じられています
が、「御先払」は行列の先頭に立って人払いをする役
目、「御跡慕ひ」は殿様を慕つて行列の後から付き
随う役目と思われます。「慕ひ」の意味は一応辞書
の説明の通りです。

「駆込者有之節は追手之者慕ひ来」（『上下町史』）
駆込者（危急の場合に進退きわまつて他人の家に
けこんで来た者）があつたとき、追手の者が慕ひ
（追つて）来て

「此節所々盗人多ク候、就夫盗出候物は町中を持通
ル儀可在之候間、夜中別て夜更候以後、長持・葛
籠・大ゆたん・包米、才布其外不審成鉢之荷物持
通ル者有之候は、町々火番人之内跡を付慕ひ、次
々町之火番人も誘ひ、段々次々へ付慕ひ候道筋之
火番人を壱人宛誘ひ催し付参、弥不審二候ハ八召
捕可申候」（享保四年（一七一九）「堀川町覚書」）

この頃、方々で盗人が多く、盗み出した物を持
つて町中を通ることも考えられるので、夜中、

特に夜更以後に長持・葛籠・大ゆたん・包米、才布(財布)その他不審な荷物を持つて通る者がいたら、町々の火番人はその跡を付慕ひ(尾行して)、次の町の火番人も誘って、段々次々と付慕ひ、道筋の火番人を壱人ずつ誘い、いよいよ怪しいと思えば召し捕りなさい。

前の文書の「御跡慕ひ」と、この文書の「跡を付慕ひ」とは、「あとを追って行く」という行動は同じですが、気持は真反対、同じ言葉が全く逆の意味を持つのも実に愉快です。

抱と拘

「十ヶ年相立候節ハ、木之生立ニ不抱、撫伐致可申事」(『府中市史』)

十ヶ年が経過したときは、木の成育状況に不抱、撫で伐りにしなさい。

「此度此許中台院へ屯集所御構ニ相成、農商ニ不抱、御国体一致、尽力勉励志之者ハ同所へ罷出、教授方指南ニ随ひ、」(慶応四年(一八六八)『三原市史』)

このたび、
こちらの中
台院へ屯集
所を御構に
なり、農商
に不抱、御

農商ニ不抱
御方ニ随ひ

国体一致、尽力勉励志の者は同所へ来て、教授方の指導に随い

「木之生立ニ不抱(抱かず)」(「農商ニ不抱(抱かず)」など、「不抱」を「抱かず」「抱えず」と読んだのでは、意味が通りません。「拘(か)らず」と読めば、筋が通ります。

「理勢志」には「作の善悪にも不拘」と書いてある個所が、この写本である「芸備郡要集」では「作毛の善悪に不抱」と書かれています。「拘」の代りに「抱」を使うこともあったことがわかります。多くの実例があることから、単なる誤字とは考えられません。

【抱】(『漢字源』)

《常用音訓》ホウ／いだ…／かか…える／だ…く

《音読み》　ホウ／ボウ

《訓読み》　だく／かかえる／いだく

《意味》《動》　いだく。だきかかえる。両手で包むようにだく。

「抱える」の意味には「拘る」に通ずるものはありません。両者に共通するものは、文字の形と、〈カエル〉〈カカワル〉の音の類似です。辞書では全く違う文字としてゐるものを、多少の類似点があるのを幸いに混用する〈江戸時代人〉のおおらかさには毎度感心するばかりです。

菜鰯

「浦辺島方、地寄りニて漁師共引網いたし候節、其処之者共多人数罷越、菜杯と唱へ魚ヲ貪り、漁師共迷惑いたし候趣も相聞へ、甚不埒之事ニ候」(弘化三年(一八四六)『広島県史』)

浦辺や島方の海岸で漁師共が引き網をしているとき、その者共が多人数やって来て、「菜」などといった魚を貪り、漁師共が迷惑をしてい

ると聞いているが、甚だ不埒の事である。

「浦島二おゐて鰯網引候節、百姓共大勢農業ヲ差置網元へ罷越、菜鰯と唱乞受、動モスレハ多少ヲ論シ難題ヲ申懸、及争論、漁方之妨いたし、又ハ買舟之者共買受候いわし浦島浜辺ニて干鰯ニ仕立候節も、菜いわし無体ニ乞受、不肯候時は干鰯ヲ踏ちらし海へかき捨候様成法外いたし候者とも有之」(文政十二年(一八二九)『廿日市町史』)

浦辺島方で鰯網を引くとき、百姓共が大勢農業を止めて網元へ来て、「菜鰯」といつて鰯を貰い受け、ややもすれば少ないと難題を吹つかけて漁の妨げをし、または舟で買付けに来た者共が買った鰯を浜辺で干鰯にしているときも「菜鰯」を無理矢理乞い受け、くれないときは干鰯を踏ちらし海へかき捨てるような乱暴をする者もいる。

『廿日市町史』の解説によると、

「菜鰯とは「囉い鰯」のことで、当時自分の浦で漁が行われた時には、村人がそれを少し手伝ったくらいでも漁獲物の幾分かを無償でもらう権利が慣習的に認められていた。」

『日本国語大辞典』は、

【肴】な。

鳥獣の肉・魚介・野菜類など副食物とするものの総称。おかず。

【菜】な。

「な(肴)」と同語源。食用、特に、副食物とする草の総称。

【魚】な。

「な(肴)」と同語源。食用、特に、副食物とするための魚。

と説明しています。

農民が地引網を手伝って、「菜(おかず)」にするために貰う魚を「菜」といったのだらうと思います。

『廿日市町史』の史料に見える「買舟」について、『日本国語大辞典』は、

【買船】

新造船もしくは中古船を買い取ること。またはその船。

とのみ書いていますが、次の例のように、別の意味もあります。

「同村蛤、上方より買船参り、売渡」(『廿日市町史』)

同村の蛤は上方から買うための船が参り、売り渡します。

請米

「所務之儀、米拵念を入、縄俵相応ニ宜敷仕立、請米之節直し無之様ニ可仕候」(文化十年(一八一三)『熊野町史』)

年貢納入について、米拵(調整)を念入りにし、俵も相応によろしく仕立て、「請米」のときに俵直しがないようにしなさい。

この文書は、安芸郡熊野村に知行地を持つ末田毎登の給人法の一部です。年貢の納入時には、米の質や俵拵えの検査があり、不合格なら俵を作り直す必要がありました。ここで「請米」という言葉が使われていますが、領主から見れば年貢米を受(請)け取ること、農民から見れば年貢米を納めることを意味するなんでもない言葉です。

「世羅・三谿郡、初挽正米三原御蔵へ上納、右為請米御蔵奉行中来ル廿一日出浮之旨申来候条、左候ハ、同廿二日三原へ着ニ可有之と存候間、此旨致承知、御調郡之儀も必廿五日ニ限り不申、来ル廿三、四日迄ニ相納請米相調候様ニ取計可申者也」(宝暦十三年(一七六三)『三原市史』)

世羅・三谿郡の農民は、年貢米(粃を脱穀した玄米)を「三原御蔵」へ納めるが、この「請米」のため(浦辺)御蔵奉行一行が、来る廿一日に広島を出発するとの知せがあった。廿二日には三原へお着きになると思われるのでその積りでいなさい。御調郡も予定の廿五日に限らず、廿三、四日迄にでも「請米」が調うよう準備しなさい。この文書でも「請米」を「年貢米を受け取る」と理解して不都合はありません。ところが、

「三津、竹原、忠海、尾道、三原、右五ヶ所にて、御年貢米請之御蔵有之、浦辺御蔵御奉行中、秋冬出張勤番、請米有之、下役として御米蔵算用役之者并御勘定所支配之番組も出ル」(『理勢志』)

三津、竹原、忠海、尾道、三原の五ヶ所にも御年貢米を請ける御蔵があり、浦辺御蔵御奉行は、

秋冬にはそこに出張り、年貢米を受取る。下役として御米蔵算用役の者や御勘定所支配の番組も出る。

「三篠川筋水運の拠点の一つであった三田村久保浜では、享保三年(一七一八)同所の久保問屋によって高田郡筋年貢米の請米(蔵払いの業務代行)が始められ、久保相場といわれる米相場も建てられるようになった。この請米制は宝暦六年(一七五六)廃止されたが、……」(『広島県史』近世二)

「請米」広島城下以外に置かれた御蔵所へ御米蔵の役人が出張し、運送の途上で検査・査収した年貢米をいい、……請米の制は宝暦六年(一七五六)に廃止され、年貢米はすべて広島御蔵所で収納されることになった。」(『近世用語の概説』)

という説明が重なると、「請米制」というややこしいような制度があつて……と思ひそうですが、ことは簡単です。その根拠は、

最初の史料(末田每登の給人法)は知行地に関するものですから、年貢米は広島や浦辺(三原など)にある藩の米蔵に搬入されるものではなく、言うまでも

なく給人のもとに届けられます。これは浦辺蔵にも蔵払いの業務代行とも無関係です。それでも「請米」という言葉が使われます。「米を受取る」という意味しか持たないからです。

「片嶋・本市・納所村ハ分テ赤米・青米・しに米等多御座候由ニテ御受米ニ難被為成遣候ニ付、」(『三原市史』)

片嶋・本市・納所村の年貢米は、特に赤米・青米・しに米等が多く、これではとても「御受米」(年貢米を収納)されません。

西風東風

「当村百々屋卯八郎妻よせと申もの者、当月三日夜四つ時過不図家出仕候ニ付、西風東風と行衛相尋候得とも一円行方難相知候ニ付、与合之者ハ勿論町内之者共立合、山川谷々雨池等迄相尋、尚其砌ハ洪水も仕候事故、流失仕候義も難量ニ付東城川下々ニ至ル迄相尋候得とも、何之手懸も無御座候ニ付、有懸御注進奉申上候」(『野間家文書』)

当村百々屋卯八郎の妻よせという者が、七月三日夜の十時過、ふと家出をしました。西風東風と行衛を尋ねましたが一向にわからず、組合の者は勿論、町内の者共も出て、山川谷々や溜池等まで探し、その時は洪水もありましたので、流された可能性もあり東城川の下に至るまで尋ねても何の手懸りもありませんので、様子を報告します。

「西風東風」は「あちこち」と読みます。

【彼方此方】(『日本国語大辞典』)

あちこち。あちらこちら。南総里見八犬伝「西東(アチコチ)に潜(しのば)せて是を舍蔵(かくまふ)こと」

「あちこち」を「彼方此方」と漢字表記がしてありますが、これも宛て字でしょう。どうせ宛て字なら、「西風東風」の方が面白い。

【東風】(『広辞苑』)

こち。(「ち」は風の意)春に東方から吹いて来る風。ひがしかぜ。春風。こちかぜ。

「こち」が「東風」なら、「あちこち」は「あち東風」となります。「あちこち」するとは、反対側

にも行くことですから、「東風」の反対は「西風」。
すると、「あちこち」は「西風東風」です。

「不図家出」の「不図」は「ふと(何かの拍子に)」
の宛て字。「風与」と書いてある文書も見かけます。

流合

「博奕御禁制之儀は一統致承知罷在候処、流合に付
近年急度申付、其筋よりは子共つゞ・やさらを以
右ニ似寄候遊び之儀も相止ミ候様申付、依之風俗
宜相成候処、此節又流合、所ニ寄右等之遊びいた
し候由相聞候」(天明四年(一七八四)『広島県史』)

博奕禁止は皆承知のことであるが、近年は流合
になったのでまた厳しく命じた。それ以来子供
のつゞややさらを使う賭博に似た遊びも止める
よう申し付けたので風俗がよろしくなったが、
最近また流合になり、所によつてはこのような
遊びをしていると聞いている。

「郡中村々住居之儀は前々より作法も有之、別て追
放・出奔立帰り者等差置不申候様二との儀は、先

年以來度々厳敷被仰出も有之候之処、近年又々流
合之儀も相聞候、甚以不届之儀二候」(『広島県史』)

郡中村々での居住には前々より作法があり、特
に追放・出奔の立帰り者隠れて帰郷した者を置
かないようにと、先年以來度々厳命を出してい
るのに、近年又々流合になっていると聞いてお
り、はなはだ不届きなことである。

「流合」^{ながれあい}なる言葉は辞書で見つけることができ
ませんが、文意から「規則を無視して易きにつくこ
と」に違ありません。

話が横道にそれますが、最初の史料で、子供が「つ
ゞややさら」を使つて賭博に似た遊びをすることを
禁止している、「つゞ・やさら」とは何でしょうか。

「都て小貝蛤類并諸魚之子、田畠之肥しニ用ひ来り
候義可致用捨候、尤こうな・やさら之類肥しニ用
ひ候儀は不苦候事」(『広島県史』)

全てアサリ・ハマグリ・魚の子は、田畠の肥料
に使わないようにしなさい。但しこうなややさ
らなどは使つてもよろしい。

アサリ・ハマグリと併記しているので、貝類と見

当を付けて調べました。

【児游貝】（山下欣二「国郡志御用ニ付下調書出帳」に見る水族・魚介、一一安芸国）

（やさら） キサゴ 海岸部の数村にヤサラの名がある。ヤサラとはキサゴという小さな巻貝を呼ぶ名であり、小さくて食品とはならないが紋様が美しいので装飾品とされていた。

【細螺】（『漢字源』）

キサゴ・キシヤゴ（国）巻き貝の一種。浅い海にすむ。身は肥料、殻はおはじきなどに用いる。

【螺・海螺】（『広辞苑』）

つぶ。①螺類の総称。つび。

子供の遊び道具ですから、「やさら」はキサゴという小さな巻貝、「つぶ」は「つぶ（螺）」だろうと思います。どのような遊びか、興味のあるところです。

拾物

「洪水之節、川筋村々并川口沖合可申出筈之处、中

ニは心得違品物隠し置候者も在之不埒之事候、依之、此以後右等之節拾物有体ニ申出候ハ、左之通被申遣候条、不隠置速ニ可申出、自然不申出隠置外方より相顕候節ハ、吟味之上品物取上ケ急度咎メ申付候事、……洪水之節、川筋又は川口・沖合等にて家財衣類等流来拾ひ上ケ置其段申出候得ハ、流主相しらへ、五十日見合、流主不相知分ハ悉皆拾候ものへ御下ケ遣、流主相知候分ハ品物下ケ遣、流候者より相応之礼ヲ為致、尤、半方候品ハ半方持主へ戻し遣候事」（嘉永五年（一八五二）『三原市史』）

洪水時に、川筋の村々や川口や沖合の村で、拾得物があれば当然申し出をするはずなのに、中には心得違いの者がいて、品物を隠し置く者もあり、不埒のことである。今後、拾い物を正直に申し出たなら、次のように処理するので、隠さずに速く申し出なさい、隠し置いたのが分つたら、吟味して品物は取り上げ、必ず咎を申し付ける。……洪水のとき、川筋または川口・沖合等で、家財・衣類等が流れ来て、拾い上げ届け出たなら、流した持主を調べ、五十日経過し

て、流し主が不明なら全て拾った者に下げ渡し、流し主の判明した分は元の持主に渡して相応の礼をさせる。「尤、半方候品ハ半方持主へ戻し遣候事。」

今の法律では、半年が経過して落し主が判らない場合は届けた人が全て、落し主が判明すると五〇〜二〇%の「報労金」がもらえる事になっているそうです。

この史料では「相応之礼」をさせると書いてありますが、「相応」の額が気になります。「尤、……」の意味不明の文言に関係があるのでしうか。

口過

「御省略御年限中、伊勢参宮等他国出之義ハ一切差留候处、郡中義ハ伊勢参宮并本願寺この外舟稼・塩浜稼等始メ、小百姓浮過杣木挽、或ハ作州辺へ農業手伝等、難渋もの為口過罷出候様之類へ当り候てハ、村役人共へ申出、役元ニおゐて相糺し、相違無之分ハ差免可然候条」(嘉永二年(一八四九)

「野間家文書」)

緊縮財政の御年限中は、伊勢参宮など、他国に出かけることは一切禁止しているが、農村では、伊勢参宮や本願寺参り以外に、舟稼・塩浜稼ぎを始め、小百姓や浮過(農村労働者)が杣木挽に、または作州辺へ農業の手伝に行くなど、生活困窮者が口過として出かけるときは、村役人共へ申し出、役人は事情を調べて、その通りなら許可してもよい。

「当村百姓国藏儀、去ル三月六日家出仕、行衛相分り不申ニ付御註進奉申上候处、……当月十八日夕不斗罷帰、様子相尋申候处、忠海町へ芋種並麦買求旁銀八匁持参仕候由之处、麦買受候得ハ芋種代引足不申、無何と心細ク相成如何可致哉案居、夫より前後不覚須波辺より尾道辺へ参候处、空腹ニ相成臥居候处、脇ヨリ喰物持越たべさせくれ為給呉候て、今治船賃有之ニ付渡海仕、同所ニ物囉ものもらい仕居候处、予州銅山へ参候得ハ渡世も出来候由にて、同方へ罷越相働居候得共、漸ク口過のみにて少も儲出来不申案居候处、……頗帰度相成候由にて、無難罷帰申候、尤、帰後氣抜いたし候様相見、何も狐狸之

所為可有御座と相見申候」(嘉永五年(一八五二)『三原市史』)

当村の百姓国蔵が、去る三月六日に家出をして行衛不明になった件は御報告しましたが、……当月十八日夕方ふと帰ってきました。様子を尋ねますと、「忠海町(竹原)へ銀八匁を持って芋種や麦を買いに参りましたが、麦を買えば芋種代が不足するので、何となく心細くなり、どうしようかと思案していると、前後不覚になり、須波(三原)辺から尾道辺へ行き、空腹のため横になっていると、誰かが喰物を持ってきて食べさせてくれました。今治へ行く船賃はあったので海を渡り、そこで乞食をしていました。予州の別子銅山へ行けば生活できると聞き、そこで働いてみましたが、食べるのがやっと、少しも儲けることができず思案していると、……しきりに帰りたくなり、ようやく帰ってきました」とのことでした。帰郷後、気抜けしたように見えるので、どうも、狐狸のせいに違いないと思います。

なんとも不思議な〈面白い〉記事です。

【世過ぎ】

世渡りをして行くこと。

【身過ぎ】

生活をして行くてだて。なりわい。生計。

【口過ぎ】

暮しを立てること。糊口。くちすごし。

と、『広辞苑』は同じような言葉を説明しています。この中で一番凄みのあるのは「口過ぎ」でしょう。なにしろ「食べる事が生きること」ですから。

江戸時代も終り頃になると、貧農は口過ぎのために色々な仕事を求めて(他国)にまで出かけています。

ざまぐ

次の史料は、広島藩十一代藩主、浅野茂長(浅野長訓)が文久元年(一八六一)領内巡察をするに際して、代官所から出された触書の一部です。

「御通行之節、御道筋ニおみて農業いたし候義一円不及用捨ニ、平日之通耕作いたし、百姓之業体奉入御覧候様可仕候事

火之元念入、御休泊所市町等二ては、別て繁々火之廻り可致候事

市町家並能、簾并店先下ケもの其外ざまく成もの取入置候事

御休泊所野合ニかゞし立申間敷候事（文久元年（一八六二）『三原市史』）

御通行のとき、道筋で農作業をして構わない。いつも通り耕作し、百姓の仕事ぶりを御覧に入れるようにしなさい。

火の元には充分気をつけ、御休泊所の市町等では特に度々火の廻り（巡視）をしなさい。

市町の家並をよくし、簾や店先の下げ物、その外ざまくな物は家の中に入れておきなさい。御休泊所の野合（野）にかゞしをたてないこと。

「ざまく」とは、

【ざまく】（『日本国語大辞典』）

「方言」不潔。きたならしいさま。

と説明しています。

【案山子】（『日本国語大辞典』）

かし。「かがし」とも。

これは警備上から禁止したものでしょうが、なぜ

禁止なのか、よく分りません。

殿様の御通筋では簾の使用は禁止です。警備の都合からそうしたものと思われまます。

殿様の御帰城のときに出された触にも、

「御通筋家々簾を釣り申間敷候、家内見通し候共、其分は不苦候

川々懸ヶ作り之家々より罷出、不作法成儀一切無之様可申付候、尤窓蓋仕、是又簾を釣り申間敷候」

（「堀川町覚書」）

殿様の御通りになる道沿いの家では、簾をつつてはいけない。家内が見通しになつても構わない。川の上にかけて渡して建つ家から人は外に出て、不作法なことが一切ないよう指導しなさい。窓蓋をして、簾はつつてはいけない。

【懸ヶ造り】（『広辞苑』）

山または崖がけに持たせかけ、あるいは川の上にかけて渡して建物造ること。また、その建物。崖造り。

「川々懸ヶ作り之家」は、広島では、一九六〇年頃でも見掛けたように思います。

愚昧之百姓

近世文書で、「愚昧之百姓」という文言を見るとあります。簡単に言うと「百姓はバカだから……」という意味です。

「全体勸化筋は御国中寺社たり共容易ニ難相調、殊ニ当時は郡中難渋之場合ニ候得ハ、勿論寄進事難出来候得共、愚昧之百姓前後之弁へもなく寄進等致候へハ、下地難渋之者共、又々御厄介筋歎出候様押移り候」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）

だいたい勸化（寺社への寄付）は、国内の寺社でも簡単には調わない。殊に現在のように農民が困窮している場合は猶更のことであるが、愚昧之百姓どもが前後の考えもなく（西本願寺へ）寄進すれば、もともと難渋者なので、また藩に援助を求め、御厄介を掛けるようになってしまふ。

この文書は、安芸郡代官所の番組（代官の手付）が割庄屋に出したもので、平気で「百姓はバカだから……」といっています。

農民自身もこの言葉を使います。次の史料は、備後国甲怒郡・神石郡八ヶ村小前（小百姓惣代三人が天領上下御役所の代官、加藤余十郎に宛てた嘆願書の一部です）。

「無宿共御入用郡銀之内ニて遣払ニ相成居候処、近來度々御下渡被為遊候趣粗承候得共、一円百姓共請取候義無御座、……先般御上様より御厳重被為仰付候迄不相渡、其儘ニ差置候は如何之筋谷ニて斯延引仕候義ニ御座候哉、愚昧之百姓ニ御座候間、無宿御入用等御取捌一円ニ不奉存ニ付、只々郡銀多分相懸り候とのみ差心得差出置候儀、村役人共ニては能々承知罷在候義ニ御座候間、御下銀之度毎小前末々迄割賦可仕筋合ニ奉存候得共、一円割合不仕差延候義、往々は私欲可仕心底と奉存候」（幕末頃『上下町史』）

「無宿共御入用」は郡の予算から払われることになっており、最近度々御下げ渡しになったと聞いてはいませんが、百姓共がそれを受取ったことは一切ありません。……先頃御上様から厳重な指示があるまでは支給されませんでした。いかなる理由でそのまま渡さずにいたのでしょう

か。私たちは「愚昧之百姓」ですから、「無宿御入用」等の取扱については一向に存じません。ただただ「郡の経費は多分に懸るものだ」とだけ心得て差し出しているのは村役人共はよく承知のはず、それなら御下銀があるたびに小百姓の末々まで支給するのが筋合だと考えます。ところがいつまでも支給しなかったのは、後になつて私腹を肥そうと思つていたからに違いありません。

肝腎の「無宿共御入用」の中身を知りませんので、まともな現代語訳ができませんが、八ヶ村の小百姓の代表として三人の名前を出して代官を相手に出した長文の「嘆願書」です。「余り入組之義ニ御座候間、書外は御吟味之節口上を以可奉申上候」（入組んだ内容なので、詳細は御吟味のとき口頭で申し上げます）と結んでいます。が、「私たち百姓はバカですから……」という言葉を使つて、遠慮なく主張しているのは見事です。

村八歩

【村八歩】（『岩波日本史辞典』）

中世・近代における村社会での制裁の一つ。付き合い禁止によつて村内での共同生活から排除すること。〈村はじき〉〈村はぶき〉〈村ばね〉とも。〈はちぶ〉は外すの意。十の付き合いのうち火事と葬式の二つを除いて絶交するためとの説もある。追放刑の一等下位の制裁として、共同体の権益毀損などに対して課されることが多い。

「当七月十五日より廿日迄之間、胡神祭礼并盆踊例歳之通出来候ニ付、少分之上用上組繫来ニ付、取集として廻掛り、「」方へ罷越、出銀いたし候様及談ニ候処、並合之出銀不致、其上不当之返答、難得其意ニ付一同申合、左様之者捨置候ては見習候もの出来勝、市中迷惑ニ可相成も難斗候間、今般左之名前もの申合候は、已来於「」方病氣又は死去等有之候とも、決して立入申間敷、附ては同人方ニおゐて諸買物一切致間敷規定相違無之、自然名前之内にて同人へ附合、又は買物等致候もの有之節は同人同様取斗可申、規定堅申合候ニ付、直筆を以名前相記置候処、仍て如件」（天保十五年

（一八四四）『上下町史』

今年七月十五日から廿日までの間、胡神祭礼と盆踊りを例年のように行うので、上組で少しばかりの費用を戸別に集金して廻り、「」方へ行き、出銀を頼んだところ、並の出銀をしないばかりか、けしからぬ返答をするので、何を考えているのやら、一同が申し合わせ、そのような者を捨て置いては見習う者も出るだろう、すると市中の迷惑になることも考えられるので、今般、左の名前の者（一八八）が申し合わせ、以後「」方で病人や死去等あつても決して立ち入らない、同人方で諸買物は一切しないことにした。もし一八八の内で同人と付合い、または買物等するものがあれば、同人同様に取り計らう。この規定を堅く申し合わせ、直筆の署名をする。

「村八分」という言葉は出ませんが、書かれた内容が「村八分」です。

「弟」「義、芸州領深江村にて取間違致候処、「」除帳願延引いたし居候間、村一統相談被成候て私を村八歩ニ被成下、一言之申開も無御座候処、此度岡屋村年寄伝治郎殿御立入被下段々御理解被遣

候て、村八歩之処濟方ニ御取計被遣、村並ニ御付合被下候処、千万忝奉存候」（万延元年（一八六〇）『上下町史』）

私の弟「」が芸州領深江村で取り間違いをしました。そこで弟の除帳（人別帳から削除する）願を提出すべきところ延引したため、村の皆が相談して私を村八歩にされました。私には一言の言訳もありませんが、岡屋村年寄伝治郎殿の仲介で、段々と御理解していただき、村八歩を止めて村並みに付合ってもらえることになり、大変感謝しています。

「取間違」とは、「御趣意取間違不申様可心得候事」の例文から考えると、「誤解する」という意味になりますが、この文書では何かの「間違をした」と理解すべきでしょう。除帳の手続が遅れることが、「村八歩」にもあたるような重大なルール違反になるのかどうか、よく分りません。ひょっとしたら、私の「取間違」かもしれませぬ。

も

は俵百石 六斗五升六合

「六拾五石 壹斗五升六合 大津上納米

此俵百六拾貳俵□三斗五升六合」

という文書があります(図)。□で囲った一文字が読めません。

文字が読めないのです、読みも分りません。従って辞書も使えません。

ところが、意味は解ります。それは、大津上納米は六五・一五六石です。これを俵に詰めると一六二俵になります。

一俵当りの米は

$$65.156 \text{ 石} \div 162 \text{ 俵} = 0.4021975 \text{ 石}$$

で、四斗あまりです。

米俵は、四斗俵とか三斗俵(広島藩の年貢米は三斗俵でした)のように端数はつきません。すると、この場合は〇・四〇二一九七五石ですから、四斗俵の俵です。四斗俵を一六二俵つくと、

$$0.4 \text{ 石} \times 162 \text{ 俵} = 64.8 \text{ 石}$$

になります。

大津上納米は六五・一五六石、俵詰の米六四・八石。

$$65.156 \text{ 石} - 64.8 \text{ 石} = 0.356 \text{ 石}$$

が俵に入りません。

「□三斗五升六合」はこの俵に入らない石数に一致します。

(広島藩では規格に満たない米俵を端俵といいました。「三斗俵と端俵」参照)

□に入る文字の意味は「百六拾貳俵」と余りが三斗五升六合、「百六拾貳俵」と端数三斗五升六合、「百六拾貳俵 端三斗五升六合」に違ありません。ところが□は一文字です。一文字でこれだけの内容を表すものは「記号」の可能性が高いと思います。

たとえば、「ろ」。「より」と読みます。「よ」と「り」を合成してできた合字です。「今日ろ……」と使います。「𠂔」は「ト」「キ」を合わせた「トキ(時)」、文字というより記号の様なものです。「と」は「こ」とです。これらは通常の辞書には載せてないので

調べようがありません。

【合字】（『広辞苑』）

二字以上の文字を合せてできた文字。「磨（麻邑）」「奎（木工）」など。

合字の逆、「歹」と書いて「残」と読ませることもあります。

□の文字を眺めてみると「乇」のように見えます。

「者」を崩して書くところに近いくなります。また変体仮名で、「者」からできた仮名「は」がこの形で

「乇」の意味とその形を重ね合せると、「は（端）」となるのかも知れません。つまり、

「此俵百六拾貳俵 は（端） 三斗五升六合」

「は」とは、

【端】（『広辞苑』）

②はした。はんぱ。

強引な〈結論〉をでっち上げましたが、ご存じの方、教えてください。

川除

「御国境の事、……下筋御境目には御番所番人も無之、佐伯郡木野木野川限の御境にて、向ひ岩国領脇郡小瀬村には急度番所有之、此御境御国入已来の境論所にて、川の名を向ふよりは小瀬川といふ、此方にては木野川と云、論る所は木野村よりは川中境と云、小瀬村よりは川は素より小瀬村内の川にて境目は東の方川を越往古は有之候処、今ハ形のミ残居候、夫故今の小瀬川は全ク岩国領小瀬村の内と云、此論片付ズ、……一方川除堤丈夫二候得ハ、出水の節水刳強く、向領の堤を水勢ヲ以刳崩候故、双方共堤を高く丈夫にして、少も余分川の方へ築出し候様に、互ニ仕値候故、……」（「郡要集」）

広島藩の下筋にあたる境界には番所も番人もいない。佐伯郡木野（広島県大竹市大竹町木野）の木野川が国境である。川向いの岩国領脇郡（玖珂郡か）小瀬村（山口県岩国市小瀬）には番所がある。

この国境は殿様御国入以来の境論所で、この川の名を岩国側では「小瀬川」といい、こちら広島では「木野川」という。広島領木野村では「川中が境」というが、岩国領小瀬村の言分は、「川は昔から小瀬村内の川で、昔の国境は川を越えた東の方にあり、今は形だけが残っている。だから、今の小瀬川は全て岩国領小瀬村の内である」と主張して結論が出ない。……一方の川除堤を丈夫にすると、大水のときは水刳が強く、向領の堤防を水勢で刳ね崩ずしてしまう。双方とも堤防を高く強くして、少しでも多く川の方へ築き出そうとしあうので、……

「広島廻之堤并川除破損之儀、郡奉行普請奉行町奉行令見分相談之上可申付事」（「鶴亭日記」）

広島近辺の堤防や川除が破損した場合、郡奉行・普請奉行・町奉行が見分し、相談の上指示しなさい。

「川除」の用例を二つ示しました。

【川除】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、水害防止のために設けられた施設。堤防を防護し、水勢を弱めるため、堤防から川中に張りだす形で敷設された。竹籠の中に碎石

を詰めた蛇籠や、これらと杭木などを組合せた牛などが用いられた。地域により多様な形態が見られる。

【川除】（『広辞苑』）

堤防を堅固にし、川水をせきとめること。堤防。

【河除】（古島敏雄校注『百姓伝記』の注）

治水工法。とくに堤を切らさぬための施設をいう。なる言葉が使われています。

「川除」の解説を三つ示しました。

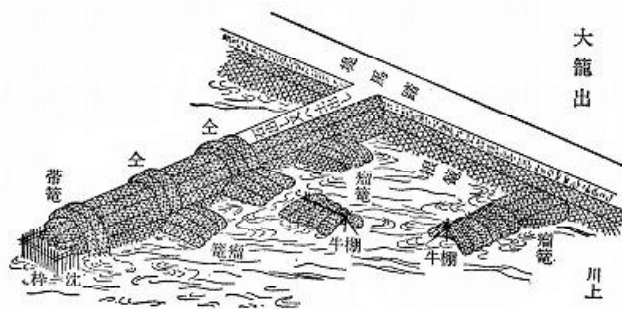
最初の説明は「川除」

Ⅱ「水刳」（水制。河川

の水勢緩和や流路の整正のため、河岸から河身に設ける工作物）説で、狭義に解釈したもの。

二番目は「川除」Ⅱ

「堤防」説。



三番目は「川除」＝「治水」説で、広義に解釈したもの。

用例を検討した結果、「川除」の意味を一つに限る必要はなく、解釈の幅を持った言葉だと考えるようになりました。

余談ですが、「境論所」について、国土地理院の二万五千分の一地形図を見ると、「小野川（木野川）」の真ん中に県境が引かれています。川の名前については、併記してあることから、現在も決着が付いていないということでしょうか。（図は水刻、『地方凡例録』から）

親ノ恩送り

「灰屋又三郎殿ハ、我等至テ難渋之節、御目ヲ被懸被下候間、親ノ恩送りニ其元馳走被成可被下候、是ヲ知ラヌフリ被成候ハ、其元ヘ罰が当り申候」（寛政元年（一七八九）頃の書状『近世書状大鑑』から）

灰屋又三郎殿は、私が大変困っているとき御目を懸けていただいたので、親の恩送りにあなた

（国元の娘）がもてなさない。これを知らぬ振りをすれば、あなたに罰が当たります。

これは、在江戸の父親から国元越後にいる娘に宛てた手紙です。「親ノ恩送り」という面白い言葉に出会いましたので取上げます。

【恩送】（『日本国語大辞典』）

「おんがえし」（恩返）に同じ。松翁道話「人の親でも我が親にして朝夕つかへ、心一ぱい御介抱申したら、少しは産みの親達へ御恩送りにもならうかい」

【恩返】（『日本国語大辞典』）

受けた恩にむくいること。浮雲「世話になった叔父へも報恩（オンガヘシ）をせねばならぬ」

【おやの恩は子でおくる】（『日本国語大辞典』）

父母から受けた恩に対しては、自分が子を育てることによって報いる。親の恩は次第おくり。関係の言葉を辞書から引用しました。このなかで、「恩送」は「恩返」に同じ、と書いてありますが、例文から考えても少し違うのではないかと思います。

「恩返」の例文は、私が叔父から恩を受けたので、その叔父に対して報恩する、つまり、恩を「返す」ことになります。

「恩送」の例文は、私が実の父母から恩を受けて、その恩を別人である義理の親に送る、つまり、恩を「返す」のではなく「送る」、これも恩返しの一つの形でしょう。

「おやの恩は子でおくる」は、「恩送」の一種で、親から受けた恩を、送る相手が自分の子供に限られた特別な場合です。

書簡の「親ノ恩送り」は、親が灰屋殿から恩を受け、送る相手は灰屋殿でも、送る人が娘になります。親の受けた恩は、その子供が受けたのと同じで、だから子供も返す義務がある……。

細かく分類しましたが、実は簡単なこと、品物を例にとると、渡してくれた当人に品物を渡すのを「返す」といい、別人に渡すのを「送る」という。これと同じでしょう。「恩送」は「恩返」に同じ、と簡単に言い切るのはいかがでしょうか。

「我等至テ難渋之節」の「我等」は「私たちが」

の意味ではなく、「私が」だろうと思います。「人を表わす名詞や代名詞に付いて、謙譲または蔑視の意をあらわす」（『日本国語大辞典』）

八延

「御年貢入実は勿論御大法有之候処、村每人別より之取立は七延八延三升と申様、従来之仕成可有之、当郡内一様ニも有之間敷候得とも如何様之振合候哉、内々当り合様子申上候様被仰付奉畏候、依て組合村々無急度相約メ申候処、左之通り申出仕候一牛田村・新山村・中山村・温品村・矢賀村・府中村・二保島

右七ヶ村之義は八延ニて米壹俵ニ付三斗貳升四合入二御座候、尤御蔵所ニて舛欠ニ難斗御座候ニ付少々宛込米仕候義ニ御座候
一戸坂村

右村之義は上田様惣御給知ニ御座候て、石ニ付壹斗三升之延舛ニて壹俵ニ付三斗三升九合入二御座候」（安政二年（一八五五）「野間家文書」）

「年貢米一俵の入実(実分量)は、もちろん藩には規定があるが、村毎に個人から取り立てるに際して、七延とか八延、三升とかいつて、従来の仕方があり、当郡内でも一樣ではないであろうが、実情はどうか、内々調査をして報告しなさい」との指示を受けましたので、私所管の村々について取りまとめ、報告します。牛田村・新山村・中山村・温品村・矢賀村・府中村・二保島の七ヶ村は八延で、米壺俵の入実は三斗式升四合入りです。もっとも御蔵所に納めるとき分量不足があると困るので、その上少々ずつの込米(余分の米)を入れていきます。戸坂村は全村、御家老の上田主水様の御給知(知行地)で、壺石につき壺斗三升の延舛で、壺俵では三斗三升九合入りになります。

「八延」という意味不明の言葉に出会いましたので、調べてみました。

史料から、年貢米納入時の俵の入実に関する用語であることは見当が付きまます。広島藩の年貢米は當時は三斗俵です。ところが、「七ヶ村之義は八延にて米壺俵二付三斗式升四合入」と書いてあります。

三斗俵の入実は三斗式升四合で、式升四合を余分に

入れる、これを「八延」という……と理解できます。計算してみると、

$$0.324 \text{ 斗} \div 0.3 \text{ 斗} = 1.08$$

つまり、八%余分に入れています。だから「八延」と名付けたのでしょう。同様に「七延」は七%増量、

$$0.3 \text{ 斗} \times 1.07 = 0.321 \text{ 斗}$$

入実は三斗式升壺合となります。「八延」「七延」は割合で表示していますが、増量分を直接「三升」と書けば、

$$0.33 \text{ 斗} \div 0.3 \text{ 斗} = 1.1$$

一割増ですから「十延」とでもいう名前が付いているのかも知れません。家老上田の給知では、

$$0.339 \text{ 斗} \div 0.3 \text{ 斗} = 1.13$$

一三%もの込米をさせています。

「舛欠」は量目不足のこと、「延舛」は(枡を延す)つまり「込米」のことでしょう。

利足月壺歩半

「米銀貸借利足之義は兼て御定之通り銀方月壺歩半、

米方年式割ニ候処、中ニは色々名目ヲ替、不当之高利ヲ貪候者も在之、……殊ニ米二当り候ては、纔五日、十日之間借用致候ても一ヶ年分之利足ヲ取、麦抔は新麦三斗貸附、秋ニ至り新米と取替元利返済之約定致候趣等甚タ有間敷儀」(明治二年(一八六九)『三原市史』)

米銀貸借の利足は、兼て御定の通り、銀については月壺歩半、米は年式割であるが、中には色々と名目を替えて、不当の高利をむさぼる者がいる。……ことに米に関しては、わずか五日の十日借りただけでも一ヶ年分の利足を取り、麦などは、新麦三斗を貸付け、秋になると新米と取り替えて、元利返済とする約束など、あるまじきことである。

これは御調甲奴郡御役所から庄屋に宛てた触書です。「銀方月壺歩半」とは、元金二五両(4分×25両=100分)に対し「月壺歩半」(1.5分=6米)の利子という意味ですから、法定年利率を計算すると、一年を一二月として、一八%になります。

元金 25 両 (4分×25 両 = 100 分)

1 年間 (12 月) の利子 = 1.5 分 × 12 月 = 18 分 (4 両 2

分)

元金 25 両 = 18 分 ÷ 100 分 × 100 = 18 %

「米方年式割」は年二〇%の利子で、お金より高い利子を払うようです。これらは〈利息制限法〉で決められた率です。

「高利ヲ貪候者」が「纔五日、十日之間借用致候ても一ヶ年分之利足ヲ取」場合は、一〇日借用、一年を三六〇日で概算すると、三六分の一の期間で一年分の利子を取るのです、なんと年利七二〇%(20%×36=720%)です。

「新麦三斗貸附、秋ニ至り新米と取替」の場合は、麦の収穫を六月、稲の収穫を一〇月とすると、借用期間は四ヶ月です。『江戸物価事典』によると慶応元年(一八六五)ころは米は麦の三割高です。四ヶ月で三割の物を返すので、年利率九〇%に相当します。この触書に対して、豊田郡小原村の庄屋が割庄屋に「申上書」を出しています。

「高利ヲ貪候族も有之哉ニて厚御触書難有仕合奉畏候、尤、右御文面之内ニ、米借之分纔十日か十五日之貸ニ式割之利足ヲ取候義有間敷事と被為仰

出、一応御尤ニ奉存候へ共、八月、九月ニ貸、新米ヲ取候へハ誠ニ纔之間ニハ御座候へ共、貸候米ハ去年より所持居候ものニ付、一ヶ年利ヲ付候義仕来りニ御座候、此義少し之間ニても無利ニてハ貸人無御座と申時ハ、あせ蒭之辺り蒭して、実熟も不仕ものヲ蒭入候様ニ相成候てハ、都て不益ニ可有御座奉存候」(明治二年(一八六九)『三原市史』)

高利についての御触書、ありがたく存じます。もっとも、「わずか十日か十五日の間米を借りただけで忒割の利足を取るとはあるまじき事」と言われますが、八月九月に貸して新米を返してもらうのはわずかの期間ですが、貸した米は去年より持ち抱えていたものですから、一ヶ年分の利子をつけるしきたりです。短期間だからといって無利にすれば、貸す人はおりません。そうなるに畦の辺りの未熟の米を蒭り入れることになり、かえつて不益だろうと思います。

この庄屋さんの論理は実に面白い。一〇日間貸した米も、去年の收穫からずつと抱えてきたものだから、一年分の利子を取るのは当然、(青田刈りよりはお得ですよ)と。

また、「貸候米ハ……」のように貸す側に立つて、正直に本音を出した文章です。今まで貧農に高利で貸付けてきた庄屋さんかもしれません。

小面

「私義、久年国留村庄屋役被仰付、御厚恩之程難有仕合ニ奉存候、然ル処、右村漸々困窮仕、御救等年々結構ニ被仰付候得共、行足り不申、御年貢御皆済御定日ニ罷成候得共、小面より皆済得仕不申故、恐入奉存、私身元ニ引請、家財家督等質入ニ仕、或は売代替御皆済仕候、既ニ去子年も七百目余、私身元より致作略勘定仕候、夫より去冬当春中如何程ニ詮儀仕候ても一向相納不申、年々仕癖ニ相成、人氣風義悪敷罷成申候て、私手ニ及不申候、御慈悲之上御役御赦免被仰付、未進方御吟味之上片付方被仰付被下置候ハ、重々難有仕合ニ奉存候、無左御座候ては、当春私身元及潰申候」(明和六年(一七六九)三月『上下町史』)

私は永年国留村の庄屋役を仰せつ付かり有り難

いことです。ところが、この村もだんだんと困窮し、御救など年々結構頂いていますが行き足りません。御年貢納入期限になっても、小面は納入することができず、恐れ入る次第です。私が個人で引き受けて、家財を質入れしたり売払って代って納めてきました。去年も七百目余り工面しました。去冬から当春にかけていくら詮議をしても一向に納めてくれません。どうも癖になったようで、気風も悪くなり、私の手におえなくなりました。御慈悲ですから、庄屋を辞めさせていただき、年貢未納について取調べ処置していただければ有難く存じます。そうでない、この春、私は破産します。

何とまあ、気の毒な文書の内容です。

「小面」は「こづら」と読み、「小百姓」を意味します。（『広島県史』近世二）

次の触書の文末の決り文句を比べると、「小面」と「小百姓」を同じように使っているのがわかります。

「御趣意之趣、村々小面ニ至迄不洩様厚ク御示談可被成」（天保七年（一八三六）菅村「内海家文書」『広島県史』）

「右之条々、組中之小百姓末々迄、堅相守候様可申聞候」（文化十年（一八一三）「和田家文書」『熊野町史』）
最初の資料の甲奴郡国留村は、享保二年（一七一七）から豊前中津藩領になっています。「小面」という言葉は福山藩の資料では普通に使われる言葉ですが、広島藩の文書ではあまり見掛けません。菅村内海家文書は、広島藩領の御調郡菅村のもので、「小面」を使っている珍しい例です。

御百姓

「御百姓之儀は常ニ格式と申も無之もの故、祭座等其外ニても改り候節は、寄合其村之古来よりの住人を以家柄を相立、座席を極メ候由、何方も同様之事ニ候、縦令は当時身元宜敷大高持之者ニても、名子譜代の筋は末座ニ差置キ候由、家柄を以座席を相定候段尤之事ニ候、然ル処以後は家柄古キものニても無高水吞ニ相成候ものは譜代之末座ニ可指置候、其故は何程宜敷家柄ニても水吞ニ相成候

得は、其村之高外ニ相成候得は其村御百姓ニては無之、只其村ニ居候計リニて、譬は他人之下作等いたし候連も自分之高無之候得は、人之下人も同前之事ニ候得は、高持御百姓同前ニ高座致候筈ニ無之候、夫共ニ高を持古之家柄ニ立帰り候ハ、元之席ニ可相加へ候」(安永九年(一七八〇)『上下町史』)

御百姓はいつも格式というものがないので、祭座など改まつた寄合のときは、その村の古来よりの住人かどうかで家柄を立て、座席を決める。どこでもそのようにしており、たとえば現在裕福で土地を多く持つてゐる者でも、名子譜代(一般農民より下位に置かれ、主家に隷属して賦役を提供した農民)の子孫は末座に座らせるといふ。家柄で座席を決めるのは尤もなことであるが、今後は家柄が古い者でも、無高水呑(田畑を所有しない貧農)になつた者は譜代の末座に座らせなさい。その理由は、どれほど良い家柄でも水呑になつてしまつては、その村の高の外だから、その村の御百姓ではなく、ただその村に住んでゐるだけであり、他人の小作等をしていても自分の持高がないのなら、人の下人も同様、

高持の御百姓と同様に高座をすることはないはず。再び土地を持つて以前の家柄に立ち帰つたら、元の席に加えればよい。

この文書は、中津藩の御役所が、備後国神石郡の豊前中津藩領の庄屋に出した通達です。この中に「御百姓」という言葉が使われています。普通は「百姓共」とか、時には「愚昧の百姓」と書かれてゐるのに、「御百姓」となつてゐるのは、何か意味があるはずです。

天明六年(一七八六)の福山藩百姓一揆で、鉄砲を構えて、一揆の鎮圧しようとした藩の役人やエタに對して、農民は、

「先日モ百姓ヲ鉄砲ニテ打トルト云リ、汝等ニ打ル、者ハ鳩ヤ雉計リ也、御百姓ヲハ何トテ打取ル事ノ成ルベキゾ」(阿部野童子問『府中市史』)

と叫んでいます。が、「御百姓」と自称するのは、役人の手先として動員されたエタ五十余人を目の前にしてゐるからだと思われまふ。

また、天領や旗本領の農民は「公儀の御百姓」と自称するといいますが、これは私領の百姓との比較

から称える場合です。

福山藩領芦田郡町村の伴蔵が、厳島参詣の許可を貰うために出した「乍恐以書付奉願上候御事」と題する文書(寛政九年(一七九七)『府中市史』)に、「町村御百姓 伴蔵」と自署していますが、これをどう理解すればよいのか解りません。

これに対して、中津藩の文書は、武士が百姓を「御百姓」といつている珍しい例です。もともと、小作農など自分の土地を持たない百姓は「御百姓」から除外していますし、内容から考えても決して大切にしている訳ではありません。(農ハ国ノ本ナリ)から出た言葉でしょうか。

下足

「近年役人共心得違之者有之流合ニ相成候趣追々相聞、既ニ手付之者廻村之節先触遣し候ても役人共不罷出、万一故障之儀も有之候得は長百姓共ニても可差出義は素り之事ニ候処其儀も無之候、間違之儀有之砌迺も其俣ニて右之趣も不申出由、其外

役人共之内広島ニては勿論郡中ニても手付之者へ下足等も不仕、或は笠冠ながら致挨拶、又は御当地ニて見当り候ても其俣ニ罷通り候様成義有之趣ニ付、末々小百姓共迄心得違無礼之儀有之様相聞候条」(宝暦八年(一七五八)『広島県史』)

近年、村役人中に心得違いの者がいて、流合になつてゐることを段々と耳にするようになった。今までも、手付の者(部下)が廻村するとき、事前に連絡していても出てこない、もし都合が悪いのなら長百姓でも代理を出すのが当然なのにそれもしない。間違があつたときでもその俣にして申出ない。その外役人共の内には、広島では勿論、郡中でも手付の者へ下足もしない。或は笠をつけたまま挨拶、または御当地で見懸けてもその俣通り過ぎる。このような状態なので、末々の小百姓までが心得違をして無礼なことがあると聞いている。

これは、町・村役人の勤向きについて出した賀茂郡代官の達です。「手付之者へ下足等も不仕」の文言があります。

【下足】(『日本国語大辞典』)

①足をさげること。足を、下におろすこと。②ぬいだ、はきもの。

適当な説明が見当りませんが、「履物を脱ぐ」とだろうと思います。代官手付といえど下級武士ですが、町中で出会うと庄屋さんは履物を脱ぐことを求められる。そんなバカな……と思い、外の資料を探しました。

「町役人共下足筋心得方之義、御侍様ハ素より御仲小姓様まで脱来申候、然ル所、去四月廿二日雨天砌、東四郎・愛蔵同道、御郭輪山之手通懸候所、桑原熊太郎様・青木吉右衛門様・高岡正平様、途中行逢、黙礼仕罷過候所、同夜三人之衆中より東四郎方へ、今日途中にて出逢候砌下足無之、如何之義ニ有之候哉尋来候二付、翌朝愛蔵申値、素右之衆中へ下足致来不申段、兼て相心得候通高岡迄様子申答、其後同廿六日、下足無之義は如何様之御心得ニ候哉と申参候二付、是迄脱キ来不申旨相答へ、押返又候何レ之格合より下足不致哉尋参候二付、御侍様は素より御中小姓様迄下足致、其已下脱キ来不申段再答仕候」（天保十五年（一八四四）

『三原市史』

町役人共の下足についての心得については、御侍様は勿論、御中小姓様まで脱いできました。ところが去る四月廿二日の雨天のとき、東四郎（三原町年寄山科屋）・愛蔵（同東町目代豊田屋）と一緒に御郭輪山の手を通り懸ったところ、桑原熊太郎様・青木吉右衛門様・高岡正平様に途中で行き逢い、黙礼をして通り過ぎました。同夜お三方から東四郎方へ、「今日途中で出逢ったとき下足しなかったが、なぜか」と尋ねて来たので、翌朝愛蔵と相談して、「今まで右の衆中には下足していません」と、今まで心得ているとおり高岡まで答えました。その後同廿六日、「下足しないのはどのような御心得か」申してきたので、「これまで脱いできませんでした」と答えると、押し返して又ぞろ「どの格合以下には下足しないのか」と尋ねてきたので、「御侍様は勿論、御中小姓様までは下足しますが、それ以下は脱いできません」と再び回答しました。当時三原は、広島藩家老浅野忠敬の領地で、その家来が「下足」に関して町役人を咎めるとい、いじましい話です。「御侍様には下足しますが……」

と返答しているので、下足してもらえなかった桑原様たちは「其已下」に相当するはずです。（広島と三原では下足の基準が違います）。

今まで侍Ⅱ武士と理解していましたが、どうも不正確なようで、侍Ⅱ上級武士と使われています。知行取のことかも知れません。

水越土手

「沼田郡西原村之川成堤、水越之積ニて土手調有之由、丁場之上出水なれハ、右西原村之堤を越し候故、御城下へ水たゝへ町方溢候程ニハならぬ積之よし、夫故西原村之左右村ニて、三ヶ所ハ水越之場所故、免もひきく候由」（「理勢志」）

この短い引用でも、むつかしい言葉があり、現代語訳の前にその説明がいります。

「川成堤」の意味はよく分りませんが、普通「川成」といえば、川のほとりの耕地が洪水などのため「川に成る」ことですから、そのような個所に造られた堤防と理解しましょう。

「水越」も辞書に見えませんが、川の水位が上がつて、堤防を越えることです。

【丁場】（『日本国語大辞典』）

夫役おやくに当てられ運送・道普請などをすべき受持の区域。また、一般に、仕事場の受持区域や得意先。持場。「方言」工事場。

沼田郡西原村（広島市安佐南区）の太田川の堤防は、大水のとき水越の予定で低く造られている。丁場で出水があれば、西原村の堤防が切れる前に堤防を越えるので、そのお陰で、御城下や町方が洪水に見舞われるほどにはならぬ積りとのこと。それゆえ西原村の左右の村三ヶ所は年貢も低くしてあるという。城下を洪水から守るため、対岸の村を水浸しにする計画は、デルタと新開からなる広島城下町にとって必要な仕掛だったのだろうと思います。堤防の決壊では、被害はただの浸水では済まない大きな被害をもたらすからです。

「松江・南方境水越土手、杭齒入砂上ケ水越無之様致度旨度々申談有之候所」（文久三年（一八六三）『三原市史』）

松江(三原市)と南方(同)の境の水越土手に、杭を打込み砂を入れて地上げをし、水が堤防を越さないようにしたいと度々相談をもちかけたが、

利害が絡むので、三原でも「水越土手」の問題は簡単に結論は出なかつたろうと思います。

「城郭保護のため家中の者の防水丁場出仕を軍役に準じて扱っている。出水の際川筋堤防の護衛にあたる場所を水丁場といい、白島の材木場に設けられた水尺が水嵩一丈二尺を超えると、家老をはじめ藩士卒が出勤し、所定の丁場の護衛にあたつた。」(『広島県史』)といいますが、「丁場」とは、この場合は、武士に割当てられた治水警戒場所と言換えてよいでしょう。

また「免もひきく」は「ひくく」を間違つたのではないかと調べると、そうではなく、全国指名手配の人相書にも、

「中背、少しひきく中肉、面体鼻筋通り、疱瘡之跡多く有之、色黒キ方」(『御触書天明集成』)

とあります。形容詞「低し(ひきし)」(ク活用)の連

用形「低く(ひきく)」でした。

広陵

「豊田郡木谷村元屋万介船舟子六人・防州岩国藩士二人、文化二丁丑十一月廿七日、発木谷浦、漂流異域、此歳六月十七日帰長崎、舟中八人者、二人漂流中死船、二人死異国、三人帰後死崎陽、惟善松存活、広陵藩中御徒行目附伊藤半右衛門・番組三宅嘉藏迎之崎陽、十一月廿七日帰広陵」(文化四年(一八〇七)「鶴亭日記」)

豊田郡木谷村元屋万介船の船子六人・防州岩国藩士二人、文化二丁丑(一八〇五)十一月廿七日、木谷浦を発し、異域を漂流し、此の歳(文化四年六月十七日)長崎に帰る。舟中の八人の者、二人は漂流中、船に死し、二人は異国に死し、三人は帰る。後、崎陽に死す。ただ善松のみ存活す。広陵藩中御徒行目附伊藤半右衛門・番組三宅嘉藏、これを崎陽に迎え、十一月廿七日広陵に帰る。

この記事は、豊田郡木谷村（現、東広島市安芸津町木谷）の稻若丸（元屋万助船、五百石積、船頭吟蔵）が江戸からの帰り、遠江灘で遭難漂流、「ワフ国（ハワイ）」の船に救助され、文化四年（一八〇七）に帰国した顛末を報じたものです。

文中の「広陵」は広島、「崎陽」は長崎のことです。原文は漢文ですから、そのように書いたものと思われまふ。

「米満村里正飯田村山崎屋甚蔵託予草之」（「鶴亭日記」）

米満村里正、飯田村山崎屋甚蔵、予に之を草するを託す

米満村の庄屋、飯田村山崎屋甚蔵が私にこれ（改編国郡志）の草案を託した。

「鶴亭日記」の筆者、野坂三益は、漢文では「里正」、和文では「庄屋」と書きわけています。

【里長】リチヨウ。（『漢字源』）

里の長。『里正・里宰・里尹』

「玉浦を玉江、忠海を忠江とする類まゝあり、江は川也、海にあらず、……広島を広陵とする類又少

からず、唐土の地名を直に取用ゆたる也、……今の学者の通患なり、よくく心得て因襲すましき事也」（勝島惟恭「行余紀聞」『広島県史』）

玉浦（尾道）を玉江、忠海を忠江とする類がまゝあるが、「江」は川で、海ではない。……広島を広陵とする類も多が、これは中国の地名をそのまま使った例で、……今の学者の悪い癖なので、真似をしてはいけない。

ちなみに、

【広陵】こうりょう。（『漢字源』）

〔地名〕揚州のこと。

稻若丸の漂流については、HP「ハワイ国王に会った最初の日本人」で詳しく知ることができます。

稲星

「同年霜月中頃より客星出ル、翌年正月七日之夜迄出申候、亥より子迄出候故哉、稲星と申習候」（寛保三年（一七四三）古志家旧記永代録『府中市史』）

同年（寛保三年（一七四三））十一月中ごろより、翌

【客星】（『広辞苑』）

【稻星】（『日本国語大辞典』）

彗星(箒星)を「稲星」というのは「この形ち稲の穂に似」と説明するのは納得できますが、「亥より子迄出」と、なぜ「稲星」と呼ぶのか、しばらく考えました。「亥」「子」は「い」「ね」≡稲の駄洒落でした。「彗星は夜の一〇時から一二時の間に出る」というのも眉唾だろうと思います。

「亥ノ十月十日頃より替りたるほし西南へ當り御出候罷、明子ノ正月十日頃より以後ハ見へ不申御入被成候、然ル処又正月十七日之朝藤兵衛三原へ出

長サ屋み夜さへ候時八三四拾間光御

西 ○ 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 ○ 東

此引尾御光也候申へ見どほ尺四三方明夜長」

寛保三年（一七四三）十月十日頃より風変りな星が西南の空に出た。翌年の一月十日頃より以後は見えず、御入りになられた。ところが一月十七日の朝、藤兵衛が三原へ行つたとき、西ノ村敷地沖で東の空を見ると、右の通りの変つた御星が御出になつており、その前後に方々で見た者がいる。その様子は次の通り。長さ、闇夜なら三四拾間の光り、夜明け方にはこの引尾の光は三四尺ほどに見える。

「寛保三年一月ノ寛保四年正月に現れたこの天体は、西洋ではKlinkenberg彗星と呼ばれた大変有名な尾が六ノ七本も見えた、明るい彗星であつたこと。……さらに二月二七日には、日の出前六分のときでも肉眼で見えており」

藤兵衛の覚書とKlinkenbers彗星の解説は、HP「T

wilght No9 1996年 11月 加藤一孝さんの記事から引用しました。

「十一月上旬より夜々珍星、西の方に現ず(稲星といふ)。(寛保三年(一七四三)記事『武江年表』)

中津領の儉約令

「今年八月より中津領志丸神石郡之方、御儉約之御触有之候、余りきびし過候様ニ風聞仕候、百姓之家天井板不残はづさせ申候由、其上着物あい付紋付一向成り不申、料理一汁一菜、膳ニふたを致候物二ツハ成り不申、一ツハゆるし申候、酒買申儀付届無之候てハ一向法度也、役所へ何用ニ入申候間、酒何程調申度と願出、蒙御免つぎ申事之由、酒屋ニても何用ニ入候哉ニ相尋付留メ置、後役所へ申遣よし」(宝暦二年(一七五二)「古志家旧記」、『府中市史』)

今年(宝暦二年(一七五二))八月より中津領の志丸神石郡の方に、御儉約の御触が出されたが、厳しすぎるとの噂である。百姓家の天井板は残ら

ず外させたという。着物はあい付紋付は全て駄目、料理は一汁一菜、膳で蓋をする物は一つならよい。酒を買うときは、役所へ「何用のために何程買います」と願ひ出、許可を得る。酒屋でも、「何用に入用か」と尋ね、記録して後日役所へ報告するそうである。

この儉約令は、『広島県史』に「郡中へ申渡覚」として載せてあります。

「小庄屋已下居宅座敷等板天井無用、畳ハ七嶋表ニ可限候、并器物類百姓相応之品は相用、縦御役人罷越候とも少も不相応之品相用申間敷事、 附、只今迄有来候畳は来酉年までに可相改事」(『広島県史』近世資料編五)

小庄屋以下の住宅の座敷等の板天井は無用である。畳は七嶋表(七島蘭の茎で織った畳表)に限る。器物類は百姓にふさわしい品を使いなさい。御役人が訪問しても不相応の品を使つてはいけない。いままですつていた畳は来年までに改めなさい。

「酒の許可」についての記載を探しましたが見つかりませんが、たしかに厳しい儉約令です。

「結納婚礼之節は……料理は一汁一菜、酒三献に可限候」

結納婚礼のときは……料理は一汁一菜、酒三献（酒三杯をすすめてから膳を下げるのを一献という）に限る。

勝手二付

「 覚

堀川町

一 御当地袋町生

御商人 利三郎

一 同紙屋町生

同 女房

一 同平田屋町生

同 幸蔵

合三人

一 真宗広寂寺旦那にて御座候

一 請人堺町四町目家持たはこ屋松次郎

右は只今迄平田屋町すみ屋忠兵衛借屋ニ居申候所、此度勝手二付、私借屋借り請参申度由申候二付、生所万事相しらへ申候処、別条無御座、慥成者にて御座候間、借屋貸し申度奉願候、此段宜様被仰上可被下候、以上

寅四月朔日

鍋屋源兵衛

年寄久賀屋六右衛門殿

「

（天明二年（一七八二）「堀川町覚書」）

この文書（送り証文）は、家主鍋屋源兵衛が年寄（町役人）宛てに出したものです。

商人利三郎の家族は、今までは平田屋町すみ屋忠兵衛借屋にいましたが、この度勝手につき、私の借屋を借り受けたいと申しています。生所・旦那寺など調べ、請人もたてており、確かな者ですので、借屋を貸したいと考えています。よろしく手続をお願いします。

「此度勝手二付」の文言を調べてみました。

【勝手】（『広辞苑』）

①都合。便利。②都合のよいこと。便宜のよいこと。便利なこと。③自分だけに都合のよいように行うこと。わがまま。きまま。④台所。くりや。⑤生計。家計。くらしむき。⑥建物の中や場所などのありさま。ものごとの様子。模様。ぐあい。⑦弓を射るとき、弦を引っ張る方の手。引手。

当てはまる意味は、「都合」「便利」「わがまま」

ぐらいですが、願書に「私の我儘の為」とは書かないでしょう。「便利が良いので」と書くのも変です。便不便是役人にとつてはどうでもいいことだからです。残るのは①の「都合」です。現在の「都合により……」という言回しに相当するのだろうと思います。

この言葉も、考えてみると〈変な言葉〉ですが、〈便利な言葉〉です。「都合により、今日は欠勤します」と聞いても、その具体的な理由は分りません。「どちらへ?」「ちよつとそこまで」の「そこまで」と同じ、それ以上は追求できません。

同類の文書では、たいてい「此度勝手二付」と書いてありますが、「為勝手」とするときもあります。

「唯今迄当村与兵衛儀借家二居申候処、為勝手今度其村長右衛門貸し家へ参度旨願出申候」(『古文書雑話』)

今まで当村の与兵衛の借家にいましたが、勝手の為、今度そちらの村の長右衛門の貸家へ参りたいと願ひ出ました。

「勝手」の意味は多岐にわたるので、外にも面白

い使い方があります。たとえば「不勝手」、

「不勝手之面々ハ随分布木綿着用可有之事」(「鶴亭日記」)

(家中で)不勝手の者共は、いうまでもなく布木綿を着用すべきである。

【不勝手】(『広辞苑』)

(特に武家方で)生計の困難なこと。

預而

「芳翰奉拝誦候、如仰講和談判始末二ハ、預而想像仕居候如ク随分騒々敷」(明治三十八年(一九〇五)九月二日『近世文書演習』立教大学日本史研究室編)お手紙拝見しました。仰せの如く講和談判(ポーツマス条約)始末には、預而想像していた通り随分騒々しく

これは、ポーツマス条約調印の数日前、桂太郎首相より山県有朋にあてた芳翰の冒頭部分です。

【ポーツマス条約】(『広辞苑』)

一九〇五年（明治三八）九月、日露両国全権がポーツマスで締結した日露戦争の講和条約。日本首席全権は小村寿太郎、ロシア首席全権はウイッテ。内容は日本の韓国における権益の確認、ロシアの満州撤兵、関東州の租借権および長春・旅順間の鉄道の譲渡、樺太南半の割譲など。

「預而」をどう読むのか、困りました。

【預】（『漢字源』）

《音読み》ヨ

《訓読み》あらかじめ／あずかる（あづかる）／あずける（あづく）

《意味》①「副」あらかじめ。前もつて。事前
にゆとりをおいて。②「動」あずかる。かかわ
る。

「預而……」の意味は「事前に想像していたように」でしょう。すると、「あらかじめ」か「前もつて」が適する言葉です。「……而」が続いているので、「前もつて」と読むのがいいと、結論を出しましたが、その後、むくげさんから、次のコメントをいただきました。

「……古語辞典には〈予て〉（かねて）という言葉が

出ております。（「預而」を（かねて）と読むのはいかがでしょうか。」

【予て】かねて（『広辞苑』）

①前もつて。あらかじめ。前々からずっと。②

（日数を示す語の下について）…前から。

むくげさんの御指摘の通り、『漢字源』も「預」の〈同義語〉として「予」をあげていますから、「預而」↓「予而」↓「かねて」と読むのが「前もつて」より簡潔で、適当だと思います。

多足

「生産物之内、近年奥村々へ琉球芋作植試験候処、相応生立、百姓共飯用多足相成候ものと相見候二付、追々村々端々へ手広植付可申、尤是迄植不申村方ニては、品柄珍ら敷存作物へさわり候ものも難計相聞、勿論野荒之儀は一統御法度ニ候得共急度示し置可申、自然芋作へさわり掘取候儀有之見当候ハ、直ニ取留メ置早速註進可申出候、依之左之通芋作畑所へ札立置可申者也、

〔建札〕此芋作へさわり候もの有之候得は、取留メ置早速御役所へ註進可申出もの也」(文政十三年(一八三〇)『広島県史』)

生産物の内、近年奥の(山間部の)村々へ薩摩芋を試しに植えたところ、それなりに成育し、百姓共の食糧の多足になると思われるので、だんだんと村中へ手広く植付けなさい。もつともこれまで植えていなかった村では、珍しがって作物へ触るかもしれない。いうまでもなく野荒は厳禁であるが、ひよつとして芋を掘り取る者を見つけたら、すぐに捕まえ連絡しなさい。次の札を芋畑に建てておきなさい。

〔建札〕「この芋作へ触る者は捕えて御役所へ連絡する」。

これは、文政十三年(一八三〇)に、広島県の山間部、山県郡御役所の出した触書です。

薩摩から正徳元年(一七一)に瀬戸内沿岸(愛媛県大三島)に薩摩芋が伝えられ、安芸国の山間部で試験栽培が行われるまでに、百年以上の時日を要したことになります。もつと早く広まっていれば飢饉の様子も違ったものになったかも知れません。

薩摩芋の栽培は「百姓共の食糧の多足」のためとされています。「不足」はよく目にしますが「多足」は珍しい言葉です。

【多足】^{たそく}(『広辞苑』)

①足の数の多いこと。②たしまえ。おぎない。補足。

薩摩芋が農民の食糧の「足し」になれば、年貢米も出しやすいというもの。藩も栽培を奨励するはずです。

私にとって戦中戦後の一時期は、薩摩芋は〈食糧の足し〉ではなく〈命の綱〉でした。その頃は、味よりも多収穫の品種が作られており、〈高系四号〉と言う名前を今でも覚えています。「一生の間に食べる芋の量は決っており、私は子供の頃に予定を終了しているので、もう食べない」という珍説をたてて永年実行していましたが、近頃は食べるようになりました。

頼母子の実例

〔文政十三寅三月始

一銀五百目 拾人講枕掛銀五拾目

半藏(元人)

二番天保二卯二月朔日会

一同三百九拾八匁

沢平吉落札 三拾八匁壹合貳厘

(一口分掛け、尚元人返掛け五拾五匁)

三番辰二月朔日会

一同四百拾九匁

兵四郎庄兵衛落札 三拾八匁

(落札人の掛送り六十匁)

四番巳二月朔日会

一同四百六拾七匁九分

小椿清藏落札 四拾壹匁八分貳厘

五番午二月朔日会

一同四百九拾目

長四郎林右衛門落札、四拾貳匁五分

六番未二月朔日会

一同四百九拾四匁八分

甚助落札 三拾九匁九分六厘

七番申二月朔日会

一同五百貳拾壹匁五分

狩留家村彦助落札 四拾壹匁六分三厘

八番酉二月朔日会

一同五百三拾八匁五分

多十郎落札 四拾壹匁七分七厘

九番戌二月朔日会

一同五百五拾五匁五分

茂助嘉平落札 四拾目貳分五厘

十ばん亥二月朔日会

一同五百七拾壹匁壹分

落札 三拾六匁壹分

十一ばん子二月朔日乙会落

一同五百九拾五匁

これは、永井弥六『広島藩農村考』所載「頼母子の実例(二九)」と題する頼母子の解説です。この事例をもとに、頼母子の姿を追ってみます。

【頼母子講】^{たのもしこう}(『広辞苑』)

互助的な金融組合。組合員が一定の掛金をなし、一定の期日に抽籤または入札によって所定の金額を順次に組合員に融通する組織。

半蔵が、生活苦からか、銀五〇〇目を必要として
いるのを知った知人が世話人となって、半蔵(元人
の窮状を救うため、規約をつくり、頼母子講
ちなみたまのし
(因頼母子)を結成します。必要とする金額を少数の
者が貸与えると、負担が重くなるので、講の人員を
一〇人とししました(拾人講)。

初会(文政十三寅年(一八三〇)＝天保元年)、各人が
五〇目ずつのお金(枕掛銀)を持寄ります。一〇人で
合計五〇〇目、これ(枕銀)を半蔵に貸付けます。

「枕」は落語の〈枕〉と同じで、頭に付くもの、「初
回」を意味すると思います。

借りた五〇〇目に五〇目の利足を付けて一〇年賦
で返済しますので、半蔵の一回分の返済額(返掛け)
は五五匁です。

一年後(天保二卯年年(一八三一)、第二会(毎年二月
朔日)が開かれました。もう半蔵を救済する目的は
達しており、後は毎年利足を付けて返してもらうだ
け……ではなく、「互助的な金融組合」ですから、
この会から正常な運営が始り、以後一〇回、講の全
員が融資を受けるまで続きます。

屋根の修理をしたいなど、差当たり資金の欲しい
人は、貸して欲しい金額を入札します。最低金額の
人が落札します。第二会は沢平吉が三九八匁で落札
しました。落札者は次回から毎回六〇匁(掛送り)ず
つを割賦返済する決りです。(自分の返済金額はここ
で計算できます。)

平吉に貸す三九八匁は、半蔵からの返掛け五五匁
を引いた残額を九人で拠出します。一人当り掛銀は
 $(398 - 55) \div 9 = 38.12$ 匁

第三会は、四一九匁で兵四郎庄兵衛が落札しまし
た。「兵四郎庄兵衛」はどう見ても二人ですが、そ
れでも一人前として扱われます。

四一九匁は、半蔵の返掛け五五匁・沢平吉掛送り
六〇匁と残りの八人が出して、その一人当りの掛銀
は

$$(419 - 55 - 60) \div 8 = 38 \text{ 匁}$$

第十一会(最終会、天保十一子年(一八四〇))では、
前会までに九人が落札を済ませているので、最後の
一人が今回の掛銀全て、

$$(55 + 60 \times 9 = 595 \text{ 匁})$$

を手に入れます。これでこの頼母子は完結しました。

元人の半蔵は、第二会以降、五五匁ずつの返済ですが、他の講員は落札後六〇匁ずつを返済に充てているので、半蔵は低利で借りたことになります。

第二会落札の沢平吉は、三九八匁を長期間借りて、

$$50 + 60 \times 9 = 590 \text{ 匁}$$

を返済しており、借りた金額より一九二匁多く返済しています。

第六会の落札者は、前半の五年は人に貸し、後半の五年は借金をしたので、掛銀と落札金額がほぼ同じです。

最終会の一人(名前の記入がない)は、一〇年間に貸したことになるの、差引一八五・四五匁の利足を得ています。

毎会、元人宅に集り、講のメンバーに御馳走が出されました。元人は金を借りた立場でありながら、招待した主人のように振舞うことができ、元人の面体をいたわる心遣いがされていたと、著者の永井弥六さんは指摘しています。

岩波文庫『塵劫記』(大矢真一校注)の注に「銀は

百八十匁などのように十匁未満がないときは百八十匁のように、匁のかわりに目を用いる」とあります。また、計算の端数処理は表記の数に合わせました。

ところへい

「ところへい(戸呂平)」という風習が広島にありました。次の史料は、安芸高田市・尾道市・呉市のもです。

「同十三日 此日戸呂平と申て、小家之者共大家分を歩行、餅・錢・米糲之類を貰ひ申候、昼の内は多分子供廻り、夜に入候得は家来分之者共、牛馬之沓縄用之物持参仕、餅共貰申候、往古より在来り候事にて、此日に限り門立仕候も恥と不仕風俗に御座候」(戸島村「国郡志御用ニ付下調書出帳」『高田郡史』)

(二月)十三日、この日、戸呂平といって、小家の者共が大家を歩き廻り、餅・錢・米糲などを貰う。昼間は子供が廻り、夜に入ればは家来分の者共が牛馬の沓縄用の物を持参して餅などを

貰らう。昔よりの仕来りで、この日に限り門に立つても恥と思わない風俗である。

古屋村では、十一日の戸呂平の説明で、「餅共遣し申候、此参り候者へ水浴せ仕候」と書いています。

「同夕とろへんと申、錢さし五六本、鋤等を竹にて小き拵、重箱の内へ入、子供持来候。」（「備後国沼隈郡浦崎村風俗問状答」『日本庶民生活史料集成九』）
（二月十四日）夕方、「とろへん」といつて、錢さし五六本、竹製の鋤等の模形を重箱の内へ入て、子供らが持ち来たり、

「十四日朝、とろ平と唱、子供檜の葉杯持チ、村方にて重立ツ家へ来り、餅錢之類を貰ふ」（「郷原村国郡志御用書上帳」）

「十四日、浮世過の子供、錢差、或ハ牛の綱類を家々へ持来、とろ平々々ト云ふて右品を納、祝儀錢を受」（「仁方村国郡志御用書上帳」）

「こよひ、在方には、とろへんと申もの参候。乞食様の者、木にて作候鍬のかたちなる物と、錢さし少々そへて持参仕り、とろへんととろへんと申候へ

は、内より、此料に仕かまへ置候団子餅、或は鏡をも遣はし候。顔を隠し候故、凶年には貧民もまされ出候よし。簑笠着し候も有之、藁細工の馬に錢そへ候も有之。近年次第々々になくなり候。」

（「備後国福山領風俗問状答」『日本庶民生活史料集成九』）

今宵、田舎では、とろへんと申ものが来る。乞食のような者が木で作った鍬の形をした物と、錢さしを少々添えて持参し、とろへんととろへんと言え、前からそのために準備していた団子餅、または鏡餅を渡す。顔を隠しているので、凶年には貧民も紛れて来ると言う。簑笠をつけている者もある。藁細工の馬に錢さしを添えることもあるが、近年は次第になくなってきた。

まとめると、「小家之者・浮世過」の子供や大人が、「牛馬の沓・農具・錢差・縄等」を「大家・重立ツ家」に持参して、「餅・錢・米粬之類」を貰う習俗で、辞書はこれを簡単に、

【とろへい】（『日本国語大辞典』）

小正月に村の青年などが変装して家々を訪れる行事を、広島県あたりでいう。

と、書いています。

泥ニ

「婚姻は人之大札ニて子孫相続之為ニ候得は甚以重んずべき事ニ候、然ルニ当世此道を取失ひ、色情のミニ泥ミ重キ礼義を失ひ、小店身軽之者共差向相対ニて夫婦ニ相成、依之ハ父母兄弟之存意をも背キ、我儘之次第も間々有之不行儀之事ニ候」(寛政三年(一七九二)「堀川町覚書」)

婚姻は人の大切な儀式であり、子孫相続のためであるので、はなはだ重んずべきことである。

ところが今はこの道を取り失ない、色情のみに泥み、重き礼義を失なっている。小店などに雇われた身軽な連中は、とりあえず二人の考えだけで夫婦になり、父母兄弟の考えにも背き我儘な行いが間々あり、不行儀なことである。

【泥む】(『広辞苑』)

①行きなやむ。はかばかしく進まない。どこおる。②離れずにからみつく。③なやみ苦しむ。

気分が晴れない。④拘泥^{こうでい}する。こだわる。⑤かかずらわって、その事に苦心をする。⑥執着する。思いつめる。惚れる。

今はあまり使われない言葉で、「なずむ」と読むとは知りませんでした。「拘泥」の「泥」と聞いて、意味もなんとなく分りました。この例文の使い方は、⑥執着する、でしょうか。

この文書は、広島城下の町人に宛てたもので、多分、町奉行が出したものと思われます。

この文書を逆に読むと、「此道」から最も自由であったのは「小店身軽之者共」だった、と理解できそうです。どのように「身軽」であったのか、興味のあるところです。

出替

「奉公人出替之節ニ候条、当分宿仕候共遂吟味、不正者囲ひ置、妄成出合等無之様可仕候事」(安永四年(一七七五)八月「堀川町覚書」)

奉公人の出替りの時期になったが、しばらくの

間の宿でも監視をして、不正の者を囲い置いたり、妄りな出合等のないようにすること。

これは広島町の奉行が町民に出した触の一部です。毎年、一月十日頃と八月二日の二回、同内容の触が出されています。一月・八月は触の出された時期ですが、その前後替の時期と見做してよいでしょう。

【出替奉公】（『日本国語大辞典』）

一年または半年を期限としてやとわれること。
一季・半季の奉公をすること。下男・下女などの場合が多い。

【^{でがわ}出替り・出代り】（『広辞苑』）

②女中・下僕などが、雇用期限を終えて交替すること。また、その交替期日。一季（一年）奉公は春、半季奉公は春秋二回で、その期日は、江戸では近世初めは二月二日・八月二日、一六六八年（寛文八）より三月五日・九月五日と定められた。後世の慣行としては七月と一二月とするものが多い。

出替の時期について、史料からそれを辿ってみます。

「下女下男当所出代り之季は、十二月十日に暇を遣し、同十三日夜代り参り申候、尤当座二相極め召抱候も御座候得共、多分八九月之頃約束仕置候者、其切りに召抱申候、半季を境、其五月田植相仕廻、惣休と申候入代り申候」（戸島村国郡志御用ニ付下調書出帳『高田郡史』）

当村での下女下男の出代り時期は、十二月十日に暇をやり、同十三日夜に代りの者が来る。すぐに雇うこともあるが、ほとんどは八・九月頃に約束して十二月に雇う。半季（半年）が期限なら、五月の田植あとの惣休み（泥落し）になったとき入れ代わる。

「奉公人出替り等之儀、奥村々ハ七月十五日、極月十三日と相定」（文政二年（一八一九）「佐伯郡白砂村国郡志御用ニ附下しらべ書出帳」『湯来町史』）

奉公人の出替り時期は、佐伯郡の奥の村々では、七月十五日と十二月十三日と決めている。

「十二月……廿日より同廿五日迄、出代りとして奉公人男女共入替る」（文政四年（一八二二）「寺家村国郡志御用就書出帳」）

十二月廿日より廿五日まで、出代りと言つて奉公人が男女共入れ替る。

その寺家村の医師、野坂三益の「鶴亭日記」から野坂家の「婢」の出替について拾つてみます。

文化四年（一八〇七）十二月、出婢筆女、代連女

（下女、筆を出して、連に代う）

文化五年（一八〇八）十二月、出婢阿連、以……

須磨代之

（下女、お連を出して、須磨に代う）

文化十三年（一八一六）十一月五日、婢須磨重身

而大帰、以……阿筆代之

（下女、須磨が身重のため帰り、お筆に代う）

文政元年（一八一八）十二月、出婢阿筆、代以阿

雪

（下女、お筆を出して、お雪に代う）

文政三年（一八二〇）十二月廿八日、出婢阿雪、

代以……阿清

（下女、お雪を出して、お清に代う）

文政九年（一八二六）十二月廿五日、僕周介婢清

出、以板橋晴八、……松為奴婢、松改名於富

（下男周介と下女清出て、板橋晴八と松を下男

下女とする、松はお富と改名する）

以下略

野坂家では下女一人を雇っており、出替時期は十二月下旬ですが、文化十三年は、須磨が身重のため家に帰つたので十一月に交替しています。雇用期間は短いもので一年、須磨は約八年間勤めています。

出替の時期は、時代や地方により、また都市と農村でも違いますが、江戸後期、広島では七月・十二月であつたと言えそうです。

居風呂

「近来ハ母老年、殊ニ血証ニて、手足身体疼痛御座候て、自由相遂ヒ難、折々浴湯仕候得ハ快氣ヲ覚候故、居風呂ヲ好ミ申候、依之遠近ヲ不扨、風呂焚候家御座候得は、自身負行入湯為致」（文政九年（一八二六）「鶴亭日記」）

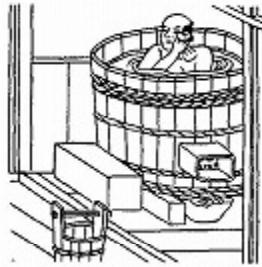
近頃は母親も年を取り、殊に血証のため手足身体が痛んで自由にならず、時々浴湯すると気分が良くなるので居風呂を好んだ。そこで遠近に関わらず、風呂を焚いた家があれば、（亀蔵は）自分で背負つて行き入湯させた。

これは、亀蔵が継母に孝養を尽す様子を割庄屋に報告する文書です。母は居風呂を好み、「貰い湯」をしたことが書かれています。亀蔵の家に風呂があったとしても、「貰い湯」をしたはずです。

【^{すえふろ}据風呂・居風呂】（『日本国語大辞典』）

大きな桶の下にかまどを作りつけて、湯をわかし入浴するのに用いるもの。すいふろ。（図参照）

私の興味は、この風呂は移動できるのかどうかにあります。『広辞苑』は「据える」を「一カ所に定めて動かさないようにする」と説明しますが、（動かそうと思えば動かすこともできる）という意味も含むのではと考えるからです。



据風呂 〈大百人一首〉

一 損料之定メ

夜着 式分宛

ふとん 壹分五厘宛

……

居風呂 三分宛

右之通、借用仕候宿屋中より差出候事、尤、損し出来候ハ、借り主より繕差戻し候事」（明和九年（一七七二）「諸大名衆東町御休泊条目之定」）

居風呂は三分、借用した宿屋より借用料を主に払うこと、壊れたら借り主が元通りにして返すこと。

大名が三原宿に泊るとき、宿屋は布団や居風呂を借りて、借用料を支払っています。すると、居風呂は動かせるようです。どうも図のイメージと違います。

「如何なる故か大橋家（大橋経登）にて据風呂を屋外の庭に出して之を焚き、交る／＼浴し居たる所、天俄に陰りて急雨を下しければ、浴者風呂を出で雨を避けんとすると同時に経登突然として飛び来り、湯は風呂桶に満ち、人は其中に蹲り居るにも係はらず、両手を桶の左右に懸け、其俣挈げて屋内に入れたりといふ」（小鷹狩元凱「広島蒙求」）

これは「怪力を顕して万衆を驚したる奇談」として書かれたもので、その光景は想像するだけでも可

笑しくなりますが、それは兎も角、この据風呂は移動可能です。もつとも、力持の男にかかれば、図のような風呂桶は動かせるでしょう。すると問題は、移動させて使ったかどうかになりますし、なぜ移動させる必要があるのかも気になります。

【据風呂】（前田勇『江戸語の辞典』）

「すいふろ」に同じ。持ち運んでどこへでも据える事が出来るのでいうとも、水風呂を居風呂とも書くので字によつていうともいい、確かでない。

色々と調べましたが、この説明の「確かでない」

休日の覚え方

「御在国中休日

五日、十一日、十四日、十九日、廿五日、廿八日

御留守中休日

二日、五日、八日、十一日、十四日、十六日、十九日、廿二日、廿五日、廿八日」（文化十一年（一八一四）一月「鶴亭日記」）

これは、広島藩の城中・城外とも藩の役所の休日を示しています。「御在国」「御留守中」は、藩主が在国か、参勤交代のため御留守中かをいいます。

御留守中の休日を覚えるために、「ニゴヤイシムク又ニゴナ」という語呂合せがあつたといえます。

「月末の休日はもと二十八日なりしが、同日は月の三祝日の一なれば、諸士登城して賀辞を上るの式あり、故に二十七日に繰上げたるなりと古老より聞きたるまゝ」（小鷹狩元凱『広島雑多集』）

という事情で、「……ニゴヤ」となるべきところが「……ニゴナ」になっています。

語呂合せがないと覚えられないほど休日が沢山あつたとは、うらやましい。

二季払

「先年より当地諸買物代、七月・極月二季之請引仕来ニ有之候处、夫ニてハ仕入銀差間、難儀之者も有之候様相聞候、依之此度相改、五節句払定法を

建申付候、尤他所懸り商売は五節句取立難相成趣
ニ相聞候ニ付、唯今迄之通り銘々相對を以可致請
引候、当町内限り五節句払と相心得、只今迄二季
請引ニ仕来候諸商売之買物代、医師并諸師匠謝礼
等ニ至迄、五節句払ニ可致請引候、尤寺社并借家
賃等は唯今迄之通り二季払ニ可致、其外ハ則左之
通り五度ニ請引可仕事

三月上巳節句前

五月端午節句前

七月盆前十三日限り

九月重陽節句前

極月大廿九日限り小廿八日限り

是迄限銀売之者ハ只今迄之通り相對を以限銀可致
請引」(『広島県史』)

以前から当地尾道での買物代金は七月と十二月
の二季の支払でやってきたが、それでは仕入銀
にも差支え、難儀する者がいると聞いている。
そこでこの度改正をして五節句払定法を建て
た。他所との商売で五節句払にはできないのな
ら、今まで通り銘々が相對で対応しなさい。尾
道町内限りの取引は五節句払になると心得て、

今まで二季払でやってきた諸商売の買物代や、
医師や師匠への謝礼等まで五節句払にしな
さい。但、寺社(への奉納)や借家賃等は、今まで
通り二季払とする。それ以外は次の通り。

三月は上巳節句の前

五月は端午節句の前

七月は盆前十三日限り

九月は重陽節句の前

十二月は大の月なら廿九日限り、小の月
は廿八日限り

これまで現金売買をしてきたものは、相對で今
迄の通りにしなさい。

この触書は、尾道町奉行所が掛売りについて「町
中一統」へ出したものです。

「現金掛値なし」が普通の、今の商取引から見
ると、掛売りが医者の治療費の支払にまで、広範囲に
行われていたのには驚きです。農業中心の社会では、
収穫のサイクルに合わせた商取引になるのでしょ
う。それにしても、盆・暮の二季払はよく聞きます
が、「五節句払」とは聞いたことがありません。

この「五節句払」が、どの程度行われたのか知り
ません。多分、うまく行かなかったろうと思います。

目にした文書はみな二季払でした。

「年中店買払等も盆と暮と二季払二仕来り申候」(文
化十一年(二八一四)「安芸郡海田市国郡志御編集に付
下彈書出帳」)

「此あたり六季払と申事なく、諸払只歳前と盆前の
みに候ゆへ如此に候」(文政元年(一八一八)「備後
国福山領風俗問状答」)

掛売りが普通の社会で、現金売に限られたものと
は何か、興味が持たれます。

御取越

「法恩講と唱、真宗之祖師忌、霜月廿八日なるを取
越、十月二仏事仕、是を御取越といふ、人家二不
取行ハなし、霜月二入候てハ僧分多用二付、十月
朔日より家々ニ右法恩講執行也」(「理勢志」)

真宗の祖師(親鸞)忌は十一月廿八日で、法恩講
というが、日程を繰り上げて十月に仏事をする。
これを御取越といい、これをしない家はない。

十一月に入ると僧は忙しくなる(?)ので、十月
朔日より家々で法恩講を行なうのである。

安芸国では浄土真宗の寺が圧倒的多数を占め、そ
の門信徒を「安芸門徒」といいます。備後でも真宗
は優勢です。

【報恩講】(『岩波日本史辞典』)

仏教各宗派で宗祖や派祖の忌日に行う報恩の仏
事をいう。とくに浄土真宗の場合は、覚如が報
恩講式を作り、南北朝時代には親鸞の忌日一一
月二八日を結願とする七日間の法会が行われて
おり、以後真宗最大の年中行事となった。

この「真宗最大の年中行事」を、「僧分多用二付」
十月に繰り上げて、その名も「御取越(繰上げ)」と
したと説明しています。

【御取越】(『広辞苑』)

親鸞の正忌陰暦十一月二八日を引き上げて、そ
れ以前に法事を行うこと。引上会とも。

ところが、もともと「御取越」＝繰上げですから、
本来の意味にも使われます。

「玉雲院様三周忌二付、来ル廿九日、晦日御取越御

法事御執行有之候間、諸事穩便ニ仕」(安永五年(一七七六)十一月「堀川町覚書」)

玉雲院様(浅野重晟御嫡岩松君、安永四年(一七七五)年正月晦日逝去)の三周忌を、十一月廿九日と三十日に御取越御法事を執り行うので、諸事穩便にして

何かの都合で、安永六年(一七七七)一月末の法事を二ヶ月繰上げるといふ、本来の意味で使われています。この二例は共に法事です、それ以外にも「取越」はあります。

【取越米】(『広辞苑』)

江戸時代、特別の事情によつて支給期(春・夏・冬)前に支給された切米。

【取越し苦労】(『広辞苑』)

将来のことをあれやこれやと考へて、つまらない心配をすること。杞憂。

【取越正月】(『世界大百科』)

暦日上の正月を待たずに年の途中に儀礼的に正月を迎え、旧年から脱しようとする。……その年の忌まわしさから脱し新たな嘉年を期待して行われるもの……時期的には六月前後が多

かった。

給与の繰上げ支給、心配の繰上げ、正月の繰上げ、……「取越し苦労」が(心配の繰上げ)とは、気が付きませんでした。

咲ひ

「下安井村柏といふ所に、稲刈り候時おの々々一束つゝを納め置き、此日出して扱き春き、其米をかき喰ひ、其藁を集めて大蛇のこくなる七五三をつくり、蛇切峠と申に、道の左右の樹にかけ、人々嶺に上り、其下なる大森と申里の方へ後をむけ、衣をかゝけ臀を出して打叩き々々、是をくらへ々々と悪口仕候。いかなる嚴冬大雪といへとも怠らず、止る時は一郷災ありと申つたへ候。大森の人折ふし其処を通りかゝり候ても、問ひなじりも不仕、また家にありて兒女とも是をききて咲ひなくさみ候よしに御座候。此処を蛇切と申候は、むかし大蛇ありて人を悩し候を、神の助にて切殺し候へとも、其靈猶たゝりをなし候故、神託によ

りて木の本にいはひ祭り、年久敷如此仕り来り候」
(文政元年(一八一八)「備後国福山領風俗問状答」)

下安井村(福山市新市町下安井)柏といふ所では、
稲刈りの時に稲束一つずつ取り置いて大晦日に
出し、米にして食べる。その藁を集めて大蛇の
ようなしめ縄を作り、蛇切峠という所の道の左
右の樹にかけ、人々

は嶺に上り、その下
の方にある大森とい
う里へ後ろを向け、
着物をからげ尻を出
して打ち叩きながら、

「これを喰らえ々々」

と悪口を怒鳴る。ど
んなに厳冬大雪でも、
止めると郷に災いがあるとの申伝がある
ので止めない。大森

の人が時折通りかかってても文句は言わない。家
の子供はこれを聞いて「咲ひ」面白がるそうである。
ここを蛇切というのは、むかし大蛇がいて人を悩ました。
神の助けで切り殺したが、それでもたたるので、
神託によって木の本で祭



り、永年このようにしてきたという。

なんとも面白い風習ですが、文中の「咲ひなくさ
み候」が読めない。そこで辞書に当たると、なんと、

【咲】(『漢字源』)

《音読み》 ショウ

《訓読み》 わらう(わらふ)／えむ(ゑむ)／さ

く

《意味》

〔動〕わらう。えむ。口をすぼめてほほとわら
う。〈同義語〉↓笑。

〔国〕さく。花がさく。

《解字》〔図参照〕

会意兼形声。天𠂔は、なよなよと細い姿の人を
描いた象形文字。笑は、細い竹。細い意を含む。
咲はもと、「口＋音符笑」で、口を細めてほほ
とわらうこと。咲は、それが変形した俗字。日
本では、「鳥鳴き花笑ふ」という慣用句から、
花がさく意に転用された。「わらう」意には笑
の字を用い、この字を用いない。

「咲」の字は、本来は「わらう(笑)」の意味で、
日本で「さく(咲)」に転用されていたとは……。も
っとも、「花が笑う」＝「花が咲く」と考えたのも、

いい思い付きです。

これで疑問も解けました。(家の子供達はこれを見て笑い、面白がる)のは当然です。

外に、古文書の中で「咲(笑)」が使つてあるか調べましたが、日本語では「笑」が使われており、なかなか例文が見つかりません。見つけたのは、漢文らしき次の縁起でした。

「学徒等猶此語不得聞重而咲鳧」(「篁山竹林寺之縁起」〔鶴亭日記〕)

学徒等、猶ほ此の語を聞き得ずして、重ねて咲いけり

級友はこの言葉を聞かず、また笑つた。

分家は分家なりに、漢字を手なづけようとしたのが解ります。

石打

「右町内大塚屋喜三郎儀、去月廿日夜婚儀相整候処、大勢相集石打及狼藉、剽薮戸打破、家内へ致乱入、

屋根瓦迄はね落し、諸道具等も及破損候旨、言語道断之事二候、……全躰婚儀等之儀は銘々祝儀之事二候得は、役人并五人組之者共ハ素よりの儀、同町之者迄も吉凶相互ニ助ケ合致相睦相親ミ可申筈之処、却て祝儀妨ケ、……全躰他町より踏込、右躰之狼藉見逃二いたし置候ては、其町内之者共一分二も難立事二候、畢竟ハ同町之者より致手始候と相見候、……此以後は役人共并同町之者共早速罷出、狼藉者打伏、搦捕、其趣可申出候、其儀無之ニおゐてハ、同町之者狼藉致し候相決、急度可遂糺明候、万一頭取之者難相知候ハ、同町之者共鬭取せ可申候間」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

右町内の大塚屋喜三郎の婚儀が先月廿日夜行われ、そのとき大勢の者が集まつて石打の狼藉に及び、その上薮戸^{しやうこ}まで打ち破り、家内へ乱入して屋根瓦まではね落し、諸道具も壊したというのが、言語道断のことである。……だいたい婚儀は銘々の祝儀だから、役人や五人組の者は勿論、同町の者までも吉凶には互いに助け合つて仲良くするはずなのに、かえつて婚礼を妨げている。

……もし他町より踏み込んできて、この狼藉を見逃してはその町内の者共の面目も立たないはず、とすれば同町の者が始めたものと思われる。今後役人や同町の者はすぐ駆付け、狼藉者を打ち伏せて搦め捕り、報告しなさい。それが無いようなら、同町の者が狼藉をしたものと決めて、必ず犯人を糺明する。もし頭取の者が誰か分らなければ、同町の者共に鬪をひかせて、当った者を頭取とする。

【石打ち】（『広辞苑』）

①小石を互いに投げ合う遊戲。②婚礼の夜、近所の者などがその家の中に小石を投げ込む習俗。いしのいわい。

五月五日、端午の印地打ちの行事も、石打ちの一つですが、広島町奉行が出したこの禁令の石打ちは婚礼の祝いです。ただし、その度が過ぎて、まるで打壊しのような有様です。

【印地】（『広辞苑』）

五月五日、端午の日に、海浜や川原で多くの子供が二手に分れて小石を投げあい、勝負する遊び。もと正月に大人が参加して争い、豊凶を占ったという。印地打ち。石合戦。

死傷者が予想される行事や祝儀があつたのも驚きですが、犯人を鬪引で決めるという乱暴な決りも、脅しだけでも知れませんが、仰天するところです。資料中に面白い言葉がありました。

「町内之者共一分二も難立」

【一分】いちぶん。（『広辞苑』）

一人の分際。一身の面目、または職責。

ちよほくれ

「ちよほくれ」と題する、面白くて難解な「戯書」があります。これは資料の全文です。

「△ちよほくれ

ヤレ／＼皆さん、聞てもくんねい、次第にお国の衰微の初ハ、江戸のおかゝが大切過て、匆札か三十、二分か六もん、瓜や茄子に銀歩を掛られ、たまらぬ物かや、夫に年をも時をかまわず、いらさる大社を建立なんそと金銀費し、物しり顔なるやふさめなんと、人かしらねばうそハ八百、朝

鮮流やら吉良の流やら、あれこれあつめてよう

く出かせと、嘸やむかしの鎌倉時代の、人に見せたら腹の根かゝよう、親父がおすきの音楽あけたら、褒美ハ現銀、それに三年四年もかゝった、棟梁大工ハ加増もごんせん、いらさる奢に今更目がさめ、阿部の半左を大坂に登し、思案をさすれとねつから叶ハぬ、松野を町から追出し、米銀なんそと広い御国で八分日雇を、大坂へ登しようく、出来た三万五千ハ当座のちりだよ、それにおのれか一人でしたよに、半左に十分あつ灰はねかけ、おのれハ百石、半三八御免で、ヤレく可愛や、コレく関様とふして下さる、内わの上ケ下ケおいてもくんない、五札をきかせて下され、世上の噂ハ人氣のよしあし、こゝらハおまへのかんじん要じや、小田原評議もあいてによりやす、目先の大学、正しき丹波や、ちからハ入らねい、江戸の讃岐ハ築の出見てなら、お国ハいつきに富貴になりやす、おはらをきわめて一六のりねい、大祿囉うた恩ハ此時、五札をきかせてやすひ御米を喰して下され、目出度御国ハ繁昌に成ます」(天

保九年(一八三八)二月二十五日「鶴亭日記」)

この文書は、野坂三益の「鶴亭日記」で見ることができます。天保九年(一八三八)二月二十四日、医師野坂三益は、竹原下市菅趙右衛門宅に往診して、ここに泊り、「或示」(ある人が見せた)のがこれです。迷惑が懸るのを恐れて匿名にしたものと思われるす。

「見聞わらひ集」(江波海宝寺蔵)にも全文が載せてあります。「于時天保八酉年正月ヨリ」書きはじめ、天保八年と天保十年の記事に挟まれたところにこの文書があり、「作者不知」と書いてあります。

次は、熊見曲水「芸藩紙幣始末(八)」(『尚古』第四年第壹号)には、この文書の前半が書かれ、「此文句儒者種野篤郎九作との嫌疑を受けたりといふ」と解説しています。

小鷹狩元凱『芸藩三十三年録』は、この文書に言及しています。これによると、「同九年二月作の戯書にて当時世間に伝播せし「チヨボクレ」の一文」と年代を明記しています。その内容や、他の史料からも領ける年代です。

【ちよぼくれ】（『広辞苑』）

小さい木魚二個を叩きながら、阿呆陀羅經あほうだらきようなどに節をつけて口早に謡う一種の俗謡。また、それを謡いながら米銭を乞い歩いた乞食僧。江戸時代に流行し、町民の幕政批判がこめられていた。「ちよぼくれ、ちよんがれ」の囃子詞はやししほを入れた。ちよんがれ。

痛烈な藩政批判のこの歌は、とても声を出して人前で謡われたものとは思えませんが、そのつくりは、木魚を叩きながら謡いたくなるような調子の良さです。

【種野友直】（『芸備史』）

種野友直、字は子諒、通称徳之助、後徳九郎と称す、広島市平塚に生る、幼より強記なり。喜んで筆硯を弄び、絵本草双紙を写すを唯一の楽しみとせり、九才にして矢口来応の心学を傾聴し、次で儒学を研精す、年十二才にして藩の勘定所に出仕す、退庁後は専ら書を繙き、朗々夜を徹せり、天文地理より甲越流の兵書稗史雑書に至るまで遂に通ぜざるなし、経学は護園派を喜び、最も占筮を能くす、嘉永、安政の交国家多事なり。友直攘夷に志あり、病弱を以て奔走に堪え

ざるを遺憾とせり、次で帷を大手町六丁目に下す、門人集まるもの千数なり。慶応二年士班に列し、藩学の儒員となる、維新後荒神町尋常小学校、大須賀村庶民学校、西条高等小学校等の創始に任ず、明治十一年八月二日病んで家に没せり、年六十二、死するの前日正坐して衣袴を呼び、時余にして人事不覚となる、士は玄服して正寝に死するの意を忘れざるなり。

「ヤレく皆さん、聞てもくんねい、

次第にお国の衰微の初ハ、

江戸のおかゝが大切過て、

匆札か三十、式分か六もん、

瓜や茄子に銀歩を掛られ、たまらぬ物かや、」

いやはや、皆さん、聞いてください

次第にこのお国が衰微する初めは、

江戸のおかゝ（御嬢）を大切にし過て、

銀札壱匆札が三十文、式分札か六文の値打ち、

何から何まで高い両替手数料をとられるは、

たまらない、

【江戸のおかゝ】

広島藩九代藩主浅野齐肃なりたかの正室、末姫（徳川家

育の第二十四女、天保四年十一月十五日藩邸に入興。後の泰栄院。

【広島藩の銀札の種類】（『淡交夜話』）

「旧藩ノ銀札、則紙幣ハ五匁札・壹匁札・五分札・三分札・貳分札ノ五種、明和ノ発行」

【紙幣の公定価格】（『芸藩志拾遺』）

「紙幣の公定価格は壹匁は百文」。

【銀歩】（『広島藩における近世用語の概説』）

「両替屋や商人等が金銀貨と藩札との両替をする場合の、両替歩合（手数料に相当）を銀歩という。」

【歩合】（『広辞苑』）

取引の額に応じて取る手数料または報酬。

銀札壹匁が百文に相当するはずなのに、それが三十文では、価値が三分の一となっている。貳分は壹匁の五分の一だから、三十文の五分の一、六文となる。なお、「匁札」は「壹匁札」のこと、「目札」（「見聞わらひ集」）とも書いてあるので、「めふだ」と読んだと思われます。

広島藩では「正銀歩合 払銀払札共壹割貳步入之

事」（文政九年（一八二六）としています。銀と銀札の交換時に一二パーセントの手料を要するという意味でしょうか。「銀歩」について調べましたが、その説明のないこと、不思議な気がする程です。

「夫に年をも時をもかまわず、

いらさる大社を建立なんそと金銀費し、」

それに時期をも考えずに、

不要の大社を建立して金銀を費し、

【時】（『広島県史』年表）

天保四年（一八三三）、「夏多雨、秋冷害のため損毛甚しく、……一月、米価騰貴のため広島城下の米商打ちこわしを受ける。」

天保五年（一八三四）、「五月、米価騰貴のため海田市の米商打ちこわしを受ける。」

天保七年（一八三六）、「三月、広島藩、美濃・伊勢両国川々御普請手伝の公役を命じられ、京・大阪に……藩債を募る。この夏、秋、気候不順。米穀不熟。」

天保八年（一八三七）、「この春、疫病流行し大凶作。」

天保九年（一八三八）、「この夏、秋、冷害。米穀

不熟。」

【天保の飢饉】（『広辞苑』）

天保四く七年に起つた全国的な飢饉。米価狂騰し、餓死する者多く、幕府の救済した者は前後七十余万人に及び、また、一揆・打ちこわしが諸方に発生して幕藩体制の危機が激化した。

【饒津神社】にぎつじんじや。（『広島県大百科事典』）

広島市東区二葉の里二丁目。祭神は藩祖浅野長政の霊。一八三四年（天保五）藩主斉肅が藩祖浅野長政の追悼のために建立を始め、多大の経費をかけて、翌年遷宮式を行ったものである。幕末で天災、飢饉や一揆、打ち壊し、海防問題など世上不安の中でのこの事業は、揺らぐ藩政立て直しの精神的支柱とするためであつた。

「物しり顔なるやふさめなんと、

人かしらねばうそ八百、

朝鮮流やら吉良の流やら、

あれこれあつめてよう／＼出かせと、

嘸やむかしの鎌倉時代の、

人に見せたら腹の根かゝよう、」

知つたかぶりをして流鏑馬を行つたが、人が知らないのをいいことに、

嘘八百の朝鮮流や吉良流の寄せ集めで、

やつとでつち上げたものだから、

昔の鎌倉武士に見せたら、

腹を抱えて大笑いすることだろう。

【流鏑馬】（『広辞苑』）

騎射の一種。馬上で矢継ぎ早に射る練習として、馳せながら鏑矢^{かぶりや}の的を射る射技。的は方板を串に挿んで三所に立て一人各三的を射る。平安末から鎌倉時代に武士の間で盛行。現在は、神社などで儀式として挙行。三的。

朝鮮流や吉良流については不明。吉良長氏が流鏑馬の射手を勤めたことが『吾妻鏡』に書いてあるそうです。

「親父がおすきの音楽あけたら、褒美ハ現銀、

それに三年四年もかゝつた、

棟梁大工ハ加増もごんせん、」

親父がお好きの音楽を奉納したら、

褒美として現銀が下されたのに、

造営に三年四年もかかった

棟梁大工には加増もない。

「いらさる奢に今更目がさめ、阿部の半左を大坂に登し、思案をさすれとねつから叶ハぬ、松野を町から追出し、米銀なんそと広い御国て八分日雇を、大坂へ登しようく、出来た三万五千ハ当座のちりだよ、それにおのれか一人でしたよに、半左に十分あつ灰はねかけ、おのれハ百石、半三八御免て、ヤレく可愛や」

いらさない奢にようやく目がさめ、

阿部半左衛門を大坂に行かせて、

金策をさせるがうまく行かない、

松野唯次郎を町から追出し、

米銀なんそと広い御国て八分日雇を、

大坂へ登しようく、

工面した三万五千両は当座の塵だよ、

それに自分一人でしたよに、

半左衛門に熱灰をはねかけるような処遇、

おのれハ百石加増で、

半左衛門は御免でかわいそう

放縦な財政支出のために生じた不足を借金でやり

過ごそうとした当時の執政関蔵人は、勘定奉行阿部半左衛門を大坂に行かせ、豪商からの借金交渉に当らせた。阿部は「執政の放縦な財政は、大坂の豪商が容易に借金を許すからだ」と考えて募債をせず帰国、「今大坂の金融は閉塞し、誰も貸金を断ります」と報告した。これを知った町奉行松野唯次郎は、「大坂の豪商は金を貸すのが仕事、大名の借金の求めに応じないことがあるか」と、密かに管下商人一両名を大坂に派遣して調べ、阿部の嘘の執政に密告した。執政は大に怒り、半左衛門の官を罷免（天保八年十二月二十八日）、松野を勘定奉行兼務とした。松野は大坂の豪商と結び、藩債を起したが、その三万五千両は当座の塵のようなものである。阿部には熱灰をはねかけるようなことをして、自分は百石の加増を受けている。（『広島県史』『芸藩三十三年録』より要約）

【阿部半左衛門】

天保五（一八三四）勘定奉行

【松野唯次郎】

文政三年（一八二〇）町奉行、天保八（一八三七）勘

定奉行

【関蔵人】

天保四（一八三三）年寄上座

「コレ／＼関様とふして下さる、内わの上ケ下ケおいてもくんない、五札をきかせて下され、世上の噂ハ人氣のよしあし、こゝらハおまへのかんじん要じゃ、」

この状況をどうしてくれるのか、

関蔵人さんよ。団扇を上げ下げしないで、

五種類の銀札が効目のあるように

してください。世上の噂、人氣からみると、

ここがお前の肝心要の時だよ。

「小田原評議もあいてによりやす、目先の大学、正しき丹波や、ちからハ入らねい、江戸の讃岐ハ築の出見てなら、お国ハいつきに富貴になりやす、おはらをきわめて一六のりねい、大禄うた恩ハ此時、五札をきかせてやすひ御米を喰して下され、目出度御国ハ繁昌に成ます」

長談義をするのも相手によりけりで、

目先の今中大学や、正しい木村丹波や、

大橋主税（以上御年寄）などは

不要なので辞めさせ、

江戸にいる沢讃岐、築山為蔵、黒田斎に

藩政を執らせば、お国は一気に豊かになります。

ここは関さん、腹を決めて大博奕を

打ってみなさい。

今まで大禄を貰うた恩を返すのは今ですよ。

藩札の価値を元に戻して、

安い御米を喰わして下され。

そうすれば、御国はめでたく繁昌しますよ。

【小田原評定】（『広辞苑』）

長びいてなかなか決定しない相談。小田原談合。

【今中大学】

文政五年（一八二二）御年寄、文政十三年（一八三

〇）藩主斉賢急逝のとき、幼少の世子斉肅を擁

立した。天保十二年（一八四二）関蔵人の隠退に

より執政となる。

【木村丹波】

主膳、文政七年（一八二四）御年寄。

【大橋主税】

天保七年（一八三六）御年寄。

【沢讃岐】

左仲、天保二年（一八三一）御年寄。

【築山為蔵】

大蔵、天保一三年（一八四二）御年寄。

【黒田斎】

天保八（一八三七）町奉行

【一六勝負】（『広辞苑』）

采の目の一が出るか六が出るかを賭けて勝負を争うこと。ばくち。

「見聞わらひ集」によると、「ちからハ」は「主税ハ」と、「お国ハいつきに」は「お国ハ斎（いつき）ニ」と書かれています。当時の高官で「斎」の名を持つのは「黒田斎」がいますので、それに当ててみました。掛詞が多用されているので、見逃した名前があるかも知れません。意味のとれないところはそのままにしています。

御暇

「殿様へ去月十五日为上使板倉佐渡守様御出、御国許へ之御暇被仰出、如例品々御拝領物被成、従大納言様も阿部豊後守様を以御拝領物被成、同十九日御登城、御礼首尾能被仰上、於御前御懇之上意にて御馬御拝領被遊候」（安永四年（一七七五）五月「堀川町覚書」）

殿様（広島藩七代藩主、浅野重晟のもとへ、去月（四月）十五日に、上使板倉佐渡守様（老中）が御出になり、御国許への御暇許可が伝えられ、いつもの品々を拝領しました。大納言様（徳川家基）よりも阿部豊後守様（西丸老中）を通じて拝領物をいただきました。同十九日に御登城して御礼も無事に申上げ、御前において御懇の上意で御馬を拝領されました。

「御暇」という言葉は、読みも意味も色々ありますが、ここでは殿様の「おいとま」です。

「我藩主の江戸に参勤する年期は、子寅辰午申戌の

四月より丑卯巳未酉亥の四月に至る一箇年を例とす。期満つれば江戸を發し国に至る。之を御暇と云ひ、江戸に之く之を御参府或は御参勤と云ひ、満期の時に臨み尚留りて江戸に在るを御滞府と云ふ。」(『芸藩三十三年録』)

この触に続いて、殿様「御帰城」の触が出されています。

「殿様、陸地近日御帰城被遊候条、御通筋町方掃除仕、手桶出し、尤立砂ハ去年之通、壱町ニ貳ヶ所見合可仕候」(安永四年(一七七五)五月十六日「堀川町覚書」)

殿様が近日陸路を通り江戸から御帰城になります。御通り筋の町方では掃除をし、手桶を表に出し、去年の様に一町に二ヶ所立砂をしなさい。次回の「御暇」は安永六年(一七七七、酉年)にあたりますが、このときも四月廿八日に江戸城へ御礼に行き、「御馬拝領被遊」ています。

参府

「殿様益御機嫌能、先月十三日御参府被遊、同廿八日為上使水野越前守様御出被成、当月朔日御登城御参勤之御礼首尾能被仰上、御懇之被為蒙上意候旨申来候事」(天保十一年(一八四〇)六月「鶴亭日記」)

殿様(広島藩九代藩主、浅野齐肃)はますます御機嫌よく、先月(五月)十三日に御参府遊ばされ、同廿八日、上使として水野越前守様(老中)が御出になり、当月(六月)朔日に登城し、参勤の御礼を申上げ、御懇の上意をいただいたと、国許まで連絡が来た。

【参府】(『広辞苑』)

江戸時代、大名などが江戸に参勤または出府すること。

この天保十一年(一八四〇)子年の参勤は、「殿様来ル(四月)十六日御発駕被遊(広島出發)」、最初の宿泊は、同じく「十六日、四日市(東広島市西条御止宿)」、五月「十三日御参府被遊(江戸到着)」となっていました。約一ヶ月を要しています。

寛文三年(二六六三)、「広島藩主光晟の参勤時の供人馬は二一六九人九一疋にも及んだ」(『広島県大百科事典』)といえます。

「先触ト唱へ、駅々へ廻章(回状)ヲ以、何中少将殿、或は何守殿参府、又ハ帰国ニ付、人足何人・馬何疋継立、及左之通り休(昼飯ノ事ナリ)泊ヲ頼ム旨、道中用人ト称シタル藩士ヨリ前以通報シ、而シテ其前々日、或ハ前日、御先越(先発)ト唱フル用人来駅シ、宿所割賄料ヲ定メ、川越等ノ用意ヲナセリ、其意通行之差支ナキ様駅吏へ依頼スル旨趣ナレトモ、實際ハ恰モ命令スルニ似タリ」(「淡交夜話」)

【先触れ】(『広辞苑』)

室町〜江戸時代、官人または貴人が道中する場合に、前もって沿道の宿駅に人馬の継立^{つぎたて}などを準備させた命令書。

先触の例として、

「御先触写

人足八人、馬五疋従江戸石州浜田迄上下可有之、是は彼地城中為引渡大久保彦左衛門被差遣ニ付て被下之者也

天保七年八月

右宿中」(天保七年(一八三六)十二月「鶴亭日記」)

【休泊】(『広辞苑』)

休息し、宿泊すること。

「岡村民之助出郡、左之通村々休泊り小休所ニおゐて被下ケ渡候条」(寛政四年(一七九二)、「野間家文書」)

の例文から見ると、休泊は、昼食のための休みのようで、広辞苑の説明はピンぼけのように思います。

「休泊」は「やすみどまり」と読むのかも知れませんが、休泊と同じ意味で「昼泊」が使われることもあります。

「九月十一日昼泊廿日市 同十二日昼船中 同十二日泊り飛渡瀬村 同十三日昼泊り中村」(天保十四年(一八四三)「踊場家文書」)

「御泊所ニ寄仕構方差問候処も可有之、夫等御先越之手附より差図可及ニ付」(『広島県史』)

御泊所によつては仕構方に不都合があるかも知れず、それらは御先越の手の者が指図するだろうから先越は今で言う「先乗り」のようです。

【先乗り】(『広辞苑』)

準備のため、仲間の者より先に目的地に乗り込むこと。また、その人。先発。

欠米

「俵数納候節ハ掛改、其内ニテ輕俵斗セ、欠米有之候時ハ惣俵へ込可申事」（『千代田町史』）

俵を納めるときは量を調べ、そのうち軽い俵を計らせて、欠米があるときは総ての俵に込米をすること。

これは、給主（松村）に年貢米を納入するときの欠米の処理の決りです。

「旧芸藩の米俵は三斗入り十三貫目の制定にして、農人より之を納租するに当り、秤目、枴目に於て些少にても欠^{カシ}あらば、其不足を他の米を以て補充し、……納租の俵には三斗の外に入^{イリ}といへることありて、一俵に就き采地即ち知行所を領する侍士分の家に納むるは、式升壺合を加へありしことを慥に記憶あれども、官に納むるものは三升の入なりと覚ゆれども是は再調を要す。又云ふ、納米を

検査するの一例を示せば、十俵輸納し来るときは毎俵之を秤り、其最重と最軽との俵より米を藁蓆の上に振ひ出し、農人をして一升ますを以て量らしめ、不足あらば其欠に当る若干を十俵の俵毎に平均に他の米を以て継ぎ足さしむ、尚家々にて方法に多少異別ありたらん」（小鷹狩元凱「広島雑多集」）

年貢米の俵の規定量に対し不足する量を「欠^{カシ}」と言うと説明しています。すると、欠米は「かんまい」と読むのかも知れませんが、『地方凡例録』は「カケマイ」のルビを付けています。納入米俵の規定に不足する米を意味すると理解できます。

ところが、広辞苑は、

【欠^{かんまい}米】（『広辞苑』）

近世、租税米の運搬中に生ずる腐化・濡米などによる不足米を補う名目で賦課された付加税。

と解説しています。この説明では、「込米」の解説になってしまい、本来の「不足する米」とは違うことになります。

【込^{こみまい}米】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、年貢米の俵詰めに際して定量に上乘せして詰める余分米。合米（ごうまい・あわせまい）とも。定量不足俵があつた場合には全俵数に対して追徴米が賦課されたため、その防止のために込米を加えた。三斗七升詰め俵にも四斗二升詰め俵にも、各一升程度の増量が行われている。

【欠米^{かんまい}】（『世界大百科』）

〈かけまい〉ともいう。年貢米のうち、不足したり損耗した米やもみのこと。転じて、江戸時代には年貢米を輸送する途中で湿気や虫害によつて生じた減損分を弁済し補充するために、あらかじめ徴収した付加米のことを指した。

この説明が、最も適当なようです。

込米は入米とも言いました。給知（高野藏人）では、
「入米は石ニ付七升ニ相究メ候之間、壺俵計り切三斗式升壺合ニて相納メ可申事」（宝暦十二年（一七六二）『広島県史』）

入米は壺石につき七升と決っているので、壺俵（三斗）ではその一〇分の三、式升壺合を加えて、三斗式升壺合を納めなさい。

蔵入地（藩の直轄地）では、

「御年貢米上納之定

壺俵ニ付三斗入 但込米一升宛 前々ハ三斗入一俵
ニ付込米式升宛ニて候得共、享保三年より一升宛
ニ被成下」（『広島藩御覚書帖』貼紙）

上記「広島雑多集」の「官（藩）に納むるものは三升の入なりと覚ゆれども……」は壺升の間違です。

御触通

「去ル霜月於大坂従公儀鉄座被仰付候ニ付、其節被仰出候公儀御触通ハ、其砌相触候ニ付、銘々承知可罷有候」（天明二年（一七八二）一月「堀川町覚書」）

昨年十一月に大坂で幕府から鉄座についての指示が出され、そのときの公儀御触通については、触れ知らせたので、銘々承知していると思うが、この文書で「触通」なる言葉、どう読んだらいいのか分らないので、辞書を調べましたが出ていません。例文を探してみると、

「従公義被仰出候別紙御触通^{（みで）}之古文字金・文政金・式歩判」

「触通」とは（何かの間違では？）と読んだ文書も出る始末。しかし、例文は沢山あるので、書き間違ひとは考えられません。

「質素節儉御触通り堅相守、諸事分限ニ応し渡世可致との難有御趣意」（『広島市史』）

質素節儉に関する御触の通り堅く守り、諸事分限に応じて世渡りをしなさいとの有難い御趣意。

この例文では「通り」と送り仮名が付けてあるので、「御触の通り」と解釈しても一応は意味が通ります。

「綿実・菜種売方之義も度々被仰出候御触通りも有之」（『海田町史』）

綿実や菜種の売り方について度々命令された御触通りもあって、

この例文になると「御触の通り」と理解するより、「御触通」＝「御触」としたほうが解りやすい。

「右御触通りニ相背キ致商売候者は無之哉之事」（『堀川町覚書』）

「近來儉約御法度筋御触通度々申聞候得共」（『瀬戸田町史』）

「御触通」とは「御触^{（みで）}通り」と読み、「御触書」のことに違いありません。

【通^{（とほ）}す・徹す】（『広辞苑』）

他人に通じかよわせる。・ゆきとどかせる。知らせる。

巢おろし

「御鷹野場所有之村井之目印并坪蓋共、近年触示之通、流合不仕候様触示し可申事 水鳥・雲雀、其外諸鳥共、巢おろし不仕候様ニとの儀、并郡中ニ於て雀之子・雲雀之子飼之儀、不相成段も……触示可申者也」（文化九年（一八一二）「鶴亭日記」）

殿様が使われる御鷹野場所のある村では、井戸の目印や野壺の蓋などについて、近年の触れ示

しの通りきちんと指示しなさい。水鳥や雲雀、そのほかの諸鳥の巣おろしは禁止、郡中で雀や雲雀の子の飼育禁止も……触れしなさい。

【巢下ろし】（『広辞苑』）

鳥の巣から雛をおろして育てること。

鷹狩りのときは空ばかり見上げて、足下不注意から井戸や肥だめにはまると大変なので、このような触が出されたのでしょうか。「巢下ろし」禁止はなぜ出されたのでしょうか。動物愛護から出されたものではなく、鷹狩りに関連して〈獲物保護〉のためかもしれません。

野壺に落ちた侍……、と考えただけでも可笑しくなります。

宮島の富籤

「合鑑

一明鴉口 吉川屋

金兵衛

大東五万束叶

是見たかく

又是見たかく

木口三人同船

子初会

「HP（「はつかいち」）」

これは、宮島富籤の合鑑の文句だそうです。

予備知識がないので、字は読めても何が書いてあるのか、サッパリ解りません。そこで、少し調べてみました。

「〇宮島の富

宮島を神地とし、有象無象に係はず永く保存の道を立て繁栄限りなかりしは、年々五回（或は四回か再調を要す）同地に開催したる富の会にして、明治維新の頃までは公行せられき。抑々富の会に加入せんには、富元とみもと即ち富坐より発行せる縦横一寸許りの四角にして、厚さ三歩許りの木駒（檜にて製る）と、諸口（紙の名）堅半枚の合鑑紙とへ、同一の番号及び口名（例へば高砂口とか田村口とかの五口を開会毎に更に命名せり）を書したるものを備へあれば、加入者は先づ合鑑紙を受取り、之へ吾が思ふ所の文句を随意に書入れて、自身之を持参す

るか、又は口入といへる一種の仲介人へ託する歟して、一口に就き藩紙幣十匁を添へて富坐へ交付す、合鑑紙をば富坐にて検閲押印せしを受取り返し、会の結了後まで加入者之を保留しておく、彼の木駒へは富坐に於て合鑑紙と同一の文句を記入し、之を巨大なる桶に入れ、富坐晴れの場所即ち公衆の目前に於て、期日来れば小童をして錘もて桶の小穴より木駒を突かしめ、親の十貫目が当るか（慶応の頃は親は百貫目に上れり）、次ぎ親の六貫目が得らるゝか、或は掛金全部を投棄することとなるか、今も昔も同一人情、其開会中は美人を天の一方でなく、欲魂は遙に宮島の富桶を望むのみ。此地の富の会は官営に属し、前陳富坐へ交付する一口十匁の中二十分の一即ち五分を奉行役所に納め、残る九匁五分を以て加入者、当りのもののへの分配金となる、尚記すべきことありと雖も、此編の主要にあらざれば之にて止め、此処には只笑種の残話を述ん。文政の頃、藩主は安芸守様と称へ官は少将なり、其御弟に右京公子といふあり、是等よりの思ひ付きか、彼の富の木駒や合鑑紙へ書

付けたる悪戯の文句に

箆筒長持、あきのかみ、

此富とつて、せうしやう、うきやう

となしたる者あり、富は運よく当りたれど、後日の祟りを恐れてか現金受取の人は遂に来らずといふ、折角の好運も自滅せしものなり」（「広島雑多集」）

富坐は木駒と合鑑紙に、同一の番号と口名を書いたものを準備し、加入者は先ず合鑑紙を受け取り、これへ勝手な文句を書入れ、一口で銀札十匁を添へて富坐へ渡すと、富坐ではそれに検閲押印して返すので、会の結了後まで加入者が保管しておく。富坐では木駒に合鑑紙と同一の文句を記入し、当日、巨大な桶に入れて公衆の面前で、子供に錘で桶の小穴から木駒を突かせる。親の当り籤は十貫目（慶応の頃は親は百貫目）、次ぎ親は六貫目を与えられる。

【合鑑】（『広辞苑』）

合符に同じ。

【合符】（『広辞苑』）

合鑑。鉄道で手荷物の預り証のこと。チツキ。

【合札】（『広辞苑』）

品物を預かった証拠として引きかえに渡す札。

「合鑑」は預り証のようなものでしょう。

「宮嶋富会札銘有五、一云東雲口、二云明鴉口、三云」（天保十一年（一八四〇）一月十三日「鶴亭日記」）
宮嶋富会の札銘に五つ有り、一に東雲口と云ひ、二に明鴉口と云ひ、三に（記述無し）と云ふ

「鶴亭日記」の筆者、野坂三益は、宮嶋富鑑に興味があつたのか、何回も同様の記事を書いています。この合鑑の「東雲口」の銘から、天保十一子年の初会のものであつたことが解ります。毎回「銘有五」ですが、ここでは二つしか記入してありません。「東雲」は「明け方に東の空にたなびく雲」、「明鴉」は「夜明けがたに鳴く鳥」ですが、「……口」とは何を意味するのでしょうか。

「合鑑」の記載の内、最初から書かれていたのは、「合鑑」「一明鴉口」「大束五万束叶」「子初会」の四ヶ所だろうと思います。

「大束五万束叶」は「大束（松の割木）五万束の当

籤がかなうように……」でしょう。

「厳島社の門前町と内海交通の港町として中世末以来急速に発達した宮島は、藩も町奉行の支配下として重要視し、遠近からの人寄せのために浄瑠璃・歌舞伎・芝居興行等を許し、また三・六・九月の市立てを中心に大束入札払いの名目で富くじを許可するなど、その保護をはかった。」（『広島県史』）

「子初会」は天保十一子年の一月の富会です。

「吉川屋金兵衛」は富札を買った者（加入者）の名前で、自筆でしょう。「是見たかく、又是見たかく」は、既に当籤したような気持で勝ち誇っている様子を自分で書き入れています。これが今の籤番号に相当します。「木口三人同船」は何のことか、見当も付きません。

「広島雑多集」の説明によると、一口銀札十匁、当り籤親（二等か）は銭十貫目、次ぎ親（二等か）は六貫目となっています。ところが、

「宮島二富アリ年二六回之由、此節ハ其一度ニテ既ニ済けれども、取当し者追々行事と見へて、同船

二三四人あり、我富札ヲ見たり、宮島へ上りて朝飯を給へしニ、宿ニ富を取申し名前張り附てあり、式朱計りニて札壺枚を売、我同宿へ行し者ハ六七枚持居れり、壺枚当る時ハ、式両・三両・五両・百兩余りもある由、其咄細かに咄し聞せけれども略ス、宮島ハ是ニて立と云し也、面白からぬ事也」(安政六年(一八五九)六月、河井継之助の旅日記「塵壺」)

宮島には富籤があり、年に六回開かれるという。今度のはその一つで、既に済んだが、当籤した者が次々と行くものとみえて、同じ船に三四人いた。私も富札を見た。宮島へ上り、朝飯を食べた宿には富をあてた者の名前が張りだしてある。式朱ばかりで札壺枚を買う。同宿した者は六七枚も持っていた。壺枚当れば、式両・三両・五両・百兩余りもある由、その話を詳しく聞いたが省略、宮島はこの富籤の御蔭で保たれているそうだが、困ったことである。

ここでは、壺枚式朱で、当りは二〜百兩となっています。単位が違うので簡単には比べられません。

「広島雑多集」の「箆筒長持、あきのかみ、此富

とつて、せうしやう、うきやう」の意味を、「私の箆筒や長持はあきのかみ(空き、安芸守〓広島藩八代藩主浅野齐賢)だから、この富を取つて、少々(少将)、生きよう(右京〓浅野長懋、藩主の弟)」とこじつけました。

差紙

「御差次納(旧藩其廩米ヲ藩士等ニ渡スニ米券ヲ以テ為ス、而シテ米券ヲ土民間互ニ売買スルヲ許セリ、払米則チ米廩ヲ開ク定日アリテ券ト米ノ引換ヲナス、此米券ヲ御差紙と言フ、其差紙ヲ税米等ノ代リニ納ムルモノ、之ヲ御差次納ト称ス、御差紙ヲ以一端米廩ヨリ正米ノ受払ヲ受ケ、其正米ヲ又米廩ヘ納ムヘキヲ其手数ヲ省キテ直ニ米券ヲ以テ収ム故ニ、払渡米ト收納米ヲ差次クト言フ意ニヨリ此名称ヲ附タルナルヘシ)ナリ、故ニ町村ヨリハ金銭ヲ徴シ、惣代ノ者広島ニテ米券ヲ購買スルナリ」(「淡交夜話」)

御差次納について説明すると、旧広島藩では、蔵米を藩士等に支払うのに(勘定所の発行する)米

券を渡していた。しかも米券を領民が互いに売買するのを許していた。藩士への現米の支給は、米蔵が開く定日に米券と引換える。この米券を御差紙と言った。差紙を年貢米等の代りに納めることを御差次納と言う。年貢米は現米を御米蔵へ納入するのが原則であるが、農民が御差紙を使つて御米蔵より正米を受取り、それを御米蔵に納入する、その面倒な手数を省いて直に米券で納めるので、払渡米(受取の米と収納米(納入の米)とを差次ぐと言う意味から、この名前が付いたものと思われる。だから町村では税を金銭で徴収して、代表者が広島で米券を購買するのである。

この資料「淡交夜話」(『三原市史』第三巻)は、藩政末期の庄屋や、明治には初代豊田郡郡長を務めた松浦唯次郎の体験談をまとめたものです。実務経験者の話だけあって、具体的に解りやすい説明です。

【指し紙・差し紙】(『広辞苑』)

①江戸時代、奉行所が人民を召喚するために発した出頭命令書。御召状。②蔵米の落札人が米商に発行した切手。③芸者・娼妓が、新しく出るひろめの時、半紙を縦に四つに切ったほどの

細長い紙に名前や風体などを記して、茶屋・揚屋に配るもの。

②の説明に近いようですが、次の説明を加えた方がよさそうです。

藩の勘定所の発行する米券。御米蔵で現米に換えられる。また、年貢を米に代えて納入すること(差次納)もあった。

【差次・差継】(『広辞苑』)

③差引勘定。

「差次納」は「差次払」とも言います。

指別

「通用指紙之儀、以前は中長紙ニ相調候処、宝曆七年より仙固ニ相成候、然ル所仙固は墨付又はよこれニ紛レ候漉むら有之、度々其申出も有之候、依之当二月十五日出指紙より中長紙ニ相成候間、此段町新開へ触知せ候事、但、下地之指紙は其俣ニて通用可在之候、米建等素より新古之指別無之事」(天明二年(二七八二)「堀川町覚書」)

通用している差紙（米券）は、以前は中長紙で作成していたが、宝暦七年より画仙紙に変更した。ところが画仙紙は、文字が汚れか、紛らわしい漉き斑（もみ）があり、たびたび申出もあつたので、今年の二月十五日発行の差紙から元に復し中長紙になるので、町・新聞へ触れ知らせなさい。但し、今までの差紙はそのまま通用するので、米建等では勿論新古の違いはない。

この短い触書の中に〈面白い言葉〉が沢山見られます。

「指紙」は「差紙」です。「指」「差」ともに「さす」ですから、同じ使い方をしたものと思われま

す。「指支」は「差支」です。

「指別」を初めて見たときは、……？と思いましたが、「差別」（違い）のことだと解りました。

「他郡御代官通行之節、往還并村往還筋先案内之もの指出候義区々ニ有之候得共、以来は往還小路之無指別其村限長百姓耆人ツ、指出、途中百姓とも行違ひ不敬之筋無之様可取計候事」（文化十二年（一八一五）『広島県史』）

他郡の御代官がお通りになるとき、往還や村往

還の先案内の者の出し方が区々なので、以来は往還や小路に関係なく、その村の長百姓耆人出させて、途中で百姓とすれ違ったとき不敬のないようにしなさい。

紙の種類で「中長紙」はよくは分りません。「仙固」は、

【仙貨紙・仙花紙】（『広辞苑』）

（天正年中、伊予の人兵頭仙貨の創製という）質厚く、極めて強靱で、純白でない楮（こうぞ）製の和紙。袋紙または合羽の地紙とする。愛媛県宇和島原産。泉貨紙。

差紙（指紙）は米券ですから、厚手の紙を使ったのでしよう。すると、「中長紙」も「仙貨紙」と同じように厚手の丈夫な紙だろうと思います。

翔付

「一水野左近将監様御下、近日当町御通行行、其節当町御止宿被遊候間、御通り筋町々、軒前手桶出し、尤立砂二ハ及不申候

(中略)

一 当町御到着已後、無用之者御関札内ニ入込、通路仕せ間敷候、夜中は猶以吟味仕、不作法之儀無之様、別て心を附可申候事

一 御泊り之内、若出火、又はいヶ様之儀有之候共、罷出不妨様可仕候、銘々宿々火之元心を附可申候事

一 御着以後、自然出火之節は、御先手者頭道家幾三郎・岡本犀之助内壺人早速翔付、御退所迄御先乗被相勤候事

一 右之節御立退所迄御荷物取除夫并才領之者、手当テ仕置可申事」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

水野左近将監様(唐津藩主)が御下り、近日当町を通行、その時当町に御泊りになるので、御通り筋の町々は、軒前に手桶を出しなさい。もつとも、立砂をするには及ばない。(中略)当町に御到着以後は、無用の者が御関札の内に入り込み通行させてはいけない。夜中は特に吟味して不作法なことのないよう気を配りなさい。御泊りの時、出火、また如何なる異変があつても、外に出て邪魔をしてはいけない。銘々自分の家の火の元に気をつけなさい。御着の後、火事が

あつたら、御先手者頭道家幾三郎・岡本犀之助の内、一人が早速かけつけ、御退所まで前駆して先導を勤めなさい。その時、御立退所まで御荷物を運ぶ者やその監督者を準備しておきなさい。

これは唐津藩主、水野左近将監が西下のときの広島宿泊に關して、町奉行が出した触です。水野は広島藩主浅野宗恒の二男で、水野忠任の養子嗣となつた人で、幕府の高官同様の特別の扱いがあつたのかも知れません。

【関札】(『広辞苑』)

宿札。その宿に何某が泊ると記した札。

【立退所】(『日本国語大辞典』)

立ち退いて仮に移っている所。一時、身を寄せている場所。

「早速翔付」という表現が面白い。今なら、「早速駆け付け」と書くところだ。「駆」も馬に乗ってかけつける感じですが、「翔」なら空を切ってかけつける。こちらの方が速そうです。

【翔】(『漢字源』)

〔動〕 かける。羽を大きく広げて飛びまう。

【駆け付ける】（『広辞苑』）

駆けて到着する。急いでその場所に着く。

町儀

「町議（町会議員）」なら知っていますが、「町儀」という言葉は馴染がありません。

ちやうぎ

【町儀・町義】（『日本国語大辞典』）

江戸時代、町人が町内のものに対しつとめた義理づきあい。家屋敷の売買、質入れ、婚姻、養子、隠居、移転などが行なわれた時、名主、五人組、家主、書役などに対し、所定の金銭、品物を贈り、ひろめをすることなど。

と、辞書は説明しています。

「私居宅表五間裏入式拾間式尺、但表之方二入五間有之表借家式竈御座候て、裏二本家居宅元より有来、此分二只今迄住宅仕居申候处、此度為勝手革屋町伯父医師三圭方へ引越一所二相成、右居宅本家借屋二仕度奉願候、尤御町儀諸役等之儀は元よ

り表借屋二家代之者差置候二付、只今迄之通相勤させ申度奉存候」（天明二年（一七八二）堀川町覚書）

私の家は、表間口は五間、奥行（裏入）は式拾間式尺、表の方に奥行五間の表借家が式竈あつて、裏に本家居宅が元からあり、ここに今まで住んでいましたが、このたび都合により革屋町の伯父医師三圭方へ引越して一緒に住むことにしました。そのため右の居宅本家を借屋にしく思います。御町儀諸役等については、以前から表借屋に家代がいますので、今迄通り勤めさせます。

「御町儀諸役」と書いてあるので、辞書の説明とほぼ一致しますが、「つきあい」という私的なものでなく、町民としての「勤め」を意味するようです。

「一胡堂西光寺町中より拙僧に御預被成、然ル上ハ存命の内無怠可致守護事、

一万事町儀の差図を請相勤可申事」（『知新集』）

胡堂西光寺を町中より拙僧に御預けになったからには、存命の内は怠りなくお守りいたします。それについて万事町儀の差図を受けて勤めます。

こんどは「町儀の差図」とあるので、「町民としての勤め」から、今の町内会のような「町中」に意味が拡がっています。

「右御役付之方角へ、町ニ寄盆節季町儀より之為附届包銀其外品物相贈候儀有之由、是又右同断之事」
(寛政三年(二七九)『広島市史』)

藩の御役付の方へ、町によつては盆・節季に町儀よりの付届けとして、包銀やその外品物を贈るといふが、これも止めなさい。

「町儀より之為附届」の文言から、〈町内会〉のような組織だと理解してよさそうです。当然、年寄などの町役人が中心になって運営していることだろうと思います。

本家と借家

「合七百七拾七間貳尺八寸
内

四百三間四尺八寸 表本家分
貳百七拾壹間三尺貳寸 裏本家分

七拾貳間貳尺五寸

表借家分

貳拾九間四尺

裏借家分

右は当市焼亡家数間如是ニ御座候、以上

卯二月」(慶応三年(一八六七)『廿日市町史』)

慶応二年(一八六六)六月十四日、ついに第二次長州戦争の戦端が開かれ、芸州口では長州軍が一時佐伯郡廿日市まで攻め入るなど両軍の攻防がくり返されました。これは戦火による廿日市の焼失家間数の翌年報告した文書の一部です。現在なら、焼失面積を調べるところですが、当時の町屋では家々の間口間数を基準に課税していたので、このような報告になったと思われる。

家を、本家・借家と、表・裏の基準で、四つに分けています。

【本家】(『広辞苑』)

おおもとになる家筋。いえもと。宗家。

一般に「本家」とは上の意味ですが、この文書では「借家」に対比しているのので、「自宅」とでも言いますか、「借家でない家」を意味します。

【表側】（『広辞苑』）

物の表の方。家などでは、道路に面した方。

【裏借屋】（『岩波日本史辞典』）

近世の都市で、裏店にある長屋など店借人向けの貸家。最下層の住民が手間取などの賃稼ぎをしながら生活した。京都西陣では織物職（織屋）の多くは家持で、表借屋に住むものもいたが、織物下職（織手・糸繰）は大部分が裏借屋に住んだ。

【表借屋】↓【表店】（『岩波日本史辞典』）

前近代の都市において、表通りに面した家屋敷のこと。通りから奥まった裏店に対していう。居住者は裏店に比べ社会的、経済的階層が高く、多くは家屋敷を店舗として商業を営み、町共同体運営の主体となった。

「本家」の辞書にない意味をここで知ることができました。

利走り

「利走り」という言葉に出くわしました。辞書には載せてありません。

「此銀近年利走りの儀段々工面仕候得共、不身上成るものに預ケ置候ては、却て本を欠、損失難計ニ付、身上宜ものへ割符仕預ケ置候処、世上一統當時利走り悪敷」（寛延二年（一七四九）『広島市史』）

この銀について、近年は利走りのことで色々と工夫しています。暮し向きの楽でない者に預けたのでは、かえって元金も欠け、損失の可能性もあるのです、金持に分割して預けていますが、世間全体に現在は利走りが悪く

「町方町人共へ綿座役所より之貸附銀も兼て約束之限月迄ニは元利共無滞同所へ可差出候、右場所之儀は利走り第一之事ニ候得は、利留メ等之儀は勿論、元延之儀も以来決て不相成候」（天明二年（一七八二）『堀川町覚書』）

綿座役所より町方の町人共への貸附銀も、約束の期限までには元利とも滞りなく差し出しなさい。綿座役所は利走りを第一として運営しているので、利払いの中断は勿論、元金返済の延期も絶対許されないことである。

「家売買之十歩一銀此後は不殘其組々大年寄用場へ可差出候、半方は其俣玄閑え差出し、半方は大年寄月番も仕集置慥成ものへ預け置、利走仕せ候て、此後町方不時物入有之節、……右銀を以て要用相達し候事」（宝暦七年（一七五七）『広島市史』）

家を売買するときの十歩一銀の税は、以後全てその組々の大年寄の役所へ差し出しなさい。その半分は藩の役所へ納め、半方は大年寄月番に集めて、確かな者へ預け置き、利走りさせて、その後町方で不時の物入りがあるときなど……この銀を使いなさい。

この内容から考えて「利」は利足のことと見当はつきます。「走り」は動きを示す言葉ですから、「利走り」は、お金がまるで生き物のように動き廻って、利足を増殖することだろうと思います。

「走る」に似た言葉で「廻る」があります。一緒にして「走り廻る」とも言います。

【利回り】（『広辞苑』）

利益配当または利息の元金に対する割合。

上の例文で「利走り」を「利回り」と置き換えて

読んでみても、意味は変わらないのではないかと思います。

仕当

「仕当」とは何か、辞書で見つけられないため、考えています。

「其外二も所々ニて銅山堀候得共、少しハ銅有之候得共、仕当に難合由ニて相止候、今以堀跡の穴は見候事也」（『郡要集』）

その外にも所々で銅山を掘り、少しは銅もあったが、仕当に合にくいという理由で止めた。今でも掘り跡の穴はある。

文意から「仕当に難合」とは「採算に合にくい」と見当をつけましたが、

「当銀山之儀近年不盛、其上文字銀御吹改二付、灰吹丁銀引替増歩合も被仰付候得共、錢其外諸色高直二而、銀山師仕当二合不申段々困窮」（仲野義文『江戸時代における銀山町の人口動向と社会構成について』）

当銀山（石見銀山）は近年振わず、その上、文字銀御吹改のための灰吹丁銀引替増歩合も仰せ付けられたが、錢その外物価が高く、銀山師は仕当に合わず段々と困窮して、

この例文も鉱山に関するもので、鉱山特有の用語かとも思いましたが、そうとも限らないようです。

「私儀延享年中より砂糖製法之儀心懸新田開発之為ニも可相成儀と奉存居候処、八ヶ年以前巳年甘蔗種被下置候ニ付、得と製法試、去々戌年ニ至丈夫ニ砂糖出来仕、仕当ニも引合候様工夫成就仕候ニ付」（明和五年（一七六八）「池上家文書」）

私は延享年中から砂糖の製法に関心があり、新田開発の為にもなるのではと思っていました。が、八年前、甘蔗種を頂いたので、色々と製法を試し、去々戌年になって砂糖が出来るようになり、仕当にも引き合う様に工夫も付けましたので、

「紙漉どもは桑の紙に成ることを能く存じ居り、随分紙になれども、少し黄色ゆへ買入少く、楮・三俣等と差ひ、皮剛く紙に漉に大分手間掛り、仕当

に合ざるゆへ、銘々所持の桑も紙には漉直さず薪にするに付」（『地方凡例録』）

紙漉業者は桑が紙に成ることをよく知っており、たしかに紙にはなるが、少し黄色なので売行きが悪く、楮・三俣等と違い、皮が剛くて紙に漉くのに大分手間が掛り、仕当に合わないの

で、自分持ちの桑も紙にはせず薪にするので、
おおよその意味は解ったので、読みをかながえま
した。「しとう」「しあて」「しあたり」……。辞書
で調べるとありました。

【^{しあ}為当てる】（『広辞苑』）

「文」しあつ（下二） 物事をして好結果を得る。
思いどおりにする。

これなら「採算にあう」に通じます。「為当」は
「仕当」と同じと考えられます。すると、「仕当」
は「しあて」と読むと結論を出しました。

墨祝

「例年正月十四日二年越祝ひと唱へ、橙へ油墨をぬ

り婦人往来ヲ妨候由、尤是等ハ全幼年之者之仕習ハしと存候処、近年ハ大人杯も相交り妨致候趣相聞へ候、甚以不埒之時候、……已来十四日年越婦人へ墨祝ひ之儀堅令停止候間」(寛政二年(一七九〇)「野間家文書」)

例年、一月十四日に「年越祝い」といつて、橙へ油墨をぬり、婦人の通行を妨げる行事がある。これは子供の行事とばかり思っていたが、近年は大人なども一緒にするという。甚だ不埒のことである。今後、十四日の「年越墨祝い」は堅く禁止する。

これは(安芸国)安芸郡代官の出した触書です。福山でも同様な行事がみられます。

「此日、墨付と申て、子供辻々へ集り、橙を二つに割、鍋墨をぬりて隠しもち、往来の女の顔にぬり付申候事御座候」(「備後国福山領風俗問状答」)

この日(二月十五日)、墨付といつて、子供が辻々へ集り、二つに割りにした橙に鍋墨を塗って隠し持ち、往来の女の顔に塗りつける行事もあります。

「十四日」と「十五日」、「油墨」と「鍋墨」、「墨

祝」と「墨付」など、少しの違いはありますが同じ行事でしょう。

面白いのは「正月十四日」を「年越」としてのことです。

【小正月】(『世界大百科』)

一月一五日を中心とする新年の行事。一月一日の大正月に対する呼名。十五日正月ともいう。前夜を十四日年越しといい、年越しの一つに数える。小正月で、正月行事は終わると考えるのが普通である。一五日の朝、粥を食べる習慣は全国に広く、小豆粥にしているとが多い。……果樹をなたや粥杖でたたいて豊熟を願う成木責めなどがある。火祭も全国的に見られる。左義長とかドンド焼きとかいい、正月飾を集めて燃す。

新年で最初の満月の日には色々な行事が行われ、広島では「とんど」など今に残っています。もつとも、墨祝は聞いたこともありません。

寄せ村

「熊谷文之進殿、免状下ケ渡春毛上見分として、来ル廿八日昼後出立、左之通被相越候間、浦島初メ遠村々へ早々通達有之、寄せ村之人別はやく被相揃候様可被取計、先触ハ出テ候得共此段申進置候、廿八日ギラン泊りニて、廿九日朝ギラン出立、戸坂村通 廿九日△海田市昼 郡中不残寄せ村ニ候間、昼九つ時ニハ必相揃ひ候事 同夕引取之事」(嘉永三年(一八五〇)五月「野間家文書」)

代官熊谷文之進殿が免状の下げ渡しと春毛上の見分のため、来る廿八日昼後広島を出発、左の通り出郡されるので、浦島など遠い村々へ早々連絡し、寄せ村の人別が早く揃うよう取計うこと。先触は出しているが再度指示する。

廿八日 祇園泊り、廿九日 朝祇園出立、戸坂村經由、廿九日 昼海田市。郡中残らずの寄せ村なので、正午には必ず揃うこと。同夕方引取り。

これは安芸郡番組の割庄屋宛の指示です。

安芸・沼田郡の代官、熊谷文之進は免状の下げ渡しと春毛上の見分のため広島を出発、一日目は沼田郡で、二日目は移動して安芸郡海田市で寄せ村をしています。

【免状】(『広辞苑』)

領主からその年の年貢の高を記して各村に下した文書。年貢割付状。

「御代官衆御廻村寄せ村之節、村々役人中不残被罷出統合之義ハ兼て御承知之通有之候得共」(天保十年(一八三九)『広島県史』)

御代官衆が廻村して寄せ村のとき、村々役人残らず出頭するというきまりは既に御承知のとおりですが

「寄せ村」とは、代官などが出郡したとき、指示するために郡元などに各村の村役人を召集すること。

出浮と出府

「態申進候、然は早稲・中・晩田、毛上御見分として服部善之助様、左之通り御休泊ニて御廻村被遊候間、最寄之御昼泊り所へ御出浮可被成候

九月廿七日○地御前村 廿八日△船中 廿八日○中村 廿九日△船中 御帰府」(天保十二年(一八

四一）八月十七日「踊場家文書」

連絡します。稲（早稲・中手・晩稲）の作況御見分のために御代官、服部善之助様が、次の通りの御休泊日程で御廻村されますので、最寄の御昼泊り所へ御出浮ください。

九月廿七日地御前村泊 廿八日船中昼泊 廿八日中村泊 廿九日船中昼泊 御帰府

これは割庄屋が能美島の村役人へ宛てた連絡です。「最寄之御昼泊り所」に出頭するよう指示しています。「休泊」は昼休み（△）と宿泊（○）を、「昼泊」は昼休み（昼食）を指す言葉ですが、この場合「最寄之御昼泊り所」とは言うものの、何時何処へ行けばよいのか分りません。代官の昼休みは全て「船中」です。島内は「中村」だけです。場所はこのようにありませんが。廿八日午後か、廿九日午前か。たぶん廿八日でしょう。

ここに「出浮」という言葉が使っています。「出向く」ほどの意味でしょう。

【出浮】（『日本国語大辞典』）

出歩く。浮かれ歩く。

「去秋頃賀茂郡小比曾・大河内辺之百姓共、多人数御城下へ向罷出候由にて、通路筋熊野・奥海田兩村或は船越村迄も出懸ケ候様之義も有之候哉、其節右村々ニおゐて出浮候者差留メ方手配有之、出懸ケ候者共差留候義も有之候ハ、」（文化十四年（一八一七）「野間家文書」）

去年の秋、賀茂郡小比曾・大河内辺の百姓共が、多人数、広島の御城下へ向けて出たというが、通路にあたる熊野・奥海田村、または船越村辺の者までも出かけたかどうか。その時、右の村々で出浮した者を差し留めるよい仕方でもあれば、……

この場合の「出浮」は、文字通り「フラフラと出かける」が当てはまります。

「出浮」を音読みすれば「しゅつぷ」ですが、「出府」という言葉もあります。

【出府】（『広辞苑』）

- ①江戸時代、幕府の所在地たる江戸に出ること。
- ②地方から都会に出ること。

「武井様広嶋表へ御出府御座被為在砌」（「矢賀村覚

書」)

武井様が広島へ御出府になったとき

これは、上記②に当てはまります。

水祝

「道筋之宿々人宿仕候輩の外ハ、家作等不可致、結構・祭礼・仏事并嫁取支度其外万事奢たる義仕へからず、并水祝禁之、祝義・贈答ニも理不尽之儀不可申募、惣て常々風俗異形ニいたし猥敷躰無之様可仕事」(正徳元年(一七一))「御法度御条目」『府中市史』)

道筋の宿屋や人宿をする者のほかは、家作をしてはいけない。結構・祭礼・仏事・嫁取の支度、其外、何事も贅沢な仕方はしてはいけない。水祝は禁止する。祝義や贈答にも理不尽なことを申し募ってはいけない。何事も服装を異形にして不作法な躰のないようにしなさい。

これは、正徳元年(一七一)に福山藩の郡奉行が出した「御法度御条目」の一部です。この短い文の

中に〈氣に掛る言葉〉が沢山見られます。

【人宿】(『岩波日本史辞典』)

江戸時代の都市において、奉公人の斡旋を行う業者。桂庵、口入、受人、肝煎などともよばれる。農村からの流入民を始め、短期の奉公人は町方・武家方とも人宿を介して雇用され、人宿は奉公人、雇用者双方から謝礼をとった。

【結構】(『日本国語大辞典』)

家屋などの構築物。

【水祝】(『広辞苑』)

嫁入りや婿入り、または新婚最初の正月の神参りの帰りなどに、若者たちが新郎に水をかける風習。みずあびせ。みずかけ。

「祝義・贈答ニも理不尽之儀」とは、具体的に何を指すのか分かりませんが、「墨付」などもこれに入っているのではないかと思います。

川除堤目論見

「○川除堤目論見の事

一、堤勾配通例ハ川表七寸五分勾配、川裏五寸勾配、あるひハ川表曲尺勾配川裏七寸五分勾配に築く。

石堤砂堤等勾配早きもあり。

一、たとへバ堤長百間高六尺敷三間馬踏六尺此砂坪式百坪

人足六百人但し砂取老町、老坪三人懸り、式百坪分(以下略)」「『算法地方大成』)

川除堤(堤防)工事の概算

堤の勾配は、普通、川表(川側)では七寸五分勾配(水平距離一尺(一〇寸)に対して、垂直方向に七・五寸上がった勾配)、

$$\tan \theta = 7.5 \div 10 = 0.75 \quad \theta = 37^\circ$$

川裏(川の反対側)では五寸勾配(曲尺 27°)とする。または、川表は曲尺勾配(45°)、川裏は七寸五分勾配(37°)に築く。石堤や砂堤等では勾配の早い(急傾斜)もある。

例えば、堤の長さ一〇〇間、高さ六尺、敷(敷地、台形の下底)三間、馬踏(道幅、台形の上底)六尺とすると、必要な砂の坪(体積)は二〇〇坪となる。

$$(1 \text{ 間} + 3 \text{ 間}) \times 1 \text{ 間} \div 2 \times 100 \text{ 間} = 200 \text{ 坪}$$

(坪は 6 尺四方)

人足は延べ六〇〇人。但し砂の運搬距離一町、

一坪に三人懸り(二人は土の運搬など、一人は土掘り)、二〇〇坪分で計算する。

$$3 \text{ 人} \times 200 \text{ 坪} = 600 \text{ 人}$$

こんなに短い引用でも、簡単には分りません。

【川除堤】堤防。

【目論見】計画。

【勾配】

傾斜角度。「わが国には角度の觀念がなかった。したがって傾斜は水平に一尺進む間にどれだけ高くなるかで表わした」(岩波文庫『塵劫記』の注)

【曲尺勾配】

「四五度の勾配はとくに矩勾配と呼びます。」



（「勾配のいろいろ」）

【勾配早き】

「勾配が早い↓傾斜が急である、などは日常よく使われている言葉でもあります。」（「水平器の知識」）

【坪】

土砂の体積の単位。六尺立方。立坪。りゆうつぽ

【図の説明】

川表 堤馬踏 堤長 川裏 筋芝 堤小口
敷馬踏 高 表法 裏法

何となく

「一御児小姓筆頭御免

辻清人

右は病氣にて内々歎出候趣有之二依て何となく御免也」（『村上家乗』）

右の者は病氣のため内々に辞職願を出していたので、何となく許可になった。

この古文書を読んで、「何となく御免」という言

いまわしが、なんとなく気に掛ったので調べてみました。

【何と無く】（『広辞苑』）

とりたてて何ということもなく。どことなく。

「一様子がおかしい」

「近年世上不穩ニ付、盆中躍之義三、四年以来御聞濟ニ相成不申、然ル所、当年は一時氣候不順にて一統案勞罷在候得共、此節ニ至候ては、氣候順行諸作共美事ニ出来立、一統喜悅之眉ヲ開申候、乍併昨年以來之次第にて、何となく市中陰氣ニ相成居申候間、」（慶応元年（一八六五）『三原市史』）

近年は、世の中なにかと不穩のため、盆躍りがここ三、四年禁止になっています。今年は一時氣候不順で、皆心配していましたが、氣候も回復し作物も美事にでき、喜悅の眉を開いています。しかし昨年以來、何となく市中が陰氣になっていますので」

この例、「何となく市中陰氣ニ相成」には違和感はありませんが、

「御年貢方始都て押類とも勿論可為米納義ニ候処、

近年何となく唯様差次多分ニ相成、御不便利筋も有之候のみならず、御役所手業増之義も有之旁不容易事ニ候得共、」（文政八年（一八二五）『広島県史』）

御年貢をはじめ全て押類は言うまでもなく米で納めなければならぬが、近年は何となく差次払が多くなり、藩としては便利が悪いだけでなく、仕事も増えて困ったことであるが、

「何となく……差次多分ニ相成」の言い方には、「とりたてて何ということもなく」という、（気楽な、無責任な）語感ではなく、「どういう理由か分らないが」という意味が込められているように思えます。

「何となく唯様差次多分ニ相成」、「その理由は分らないが、差次払が増加し」

「何となく市中陰気ニ相成」、「どうした訳か市中が陰気になり」

ところが、最初の例文「何となく御免」を「どういう理由か分らないが……」と理解しても、まだ違和感が残ります。ここでは「何事もなく、トラブルもなく……」の意味だと考えています。

板場

「町方板場持油屋貳拾九軒、外ニ新開方三軒、合三拾貳軒有之」（安永六年（一七七七）「堀川町覚書」）
町方（広島市中）で板場を持つている油屋が二十九軒、外に新開方（郊外）に三軒、合計三十二軒ある。

この文書で、「板場」という言葉に出くわしました。いままで、板場は、

【板場】（『広辞苑』）

料理屋で俎を置く所。料理場。また、菓子屋でのし板を置く所。転じて、そこで働く者。いたまへ。いたもと。いた。

と理解していましたが、どうもそれだけではないようです。

【板場】（『日本国語大辞典』）

型紙捺染の工場で、型付の作業をする場所と、説明が追加されています。

「油絞のためにはまず綿実は川水を利用する水車場で粉碎される。粉碎された綿実を絞る処は板場と称し三ヶ所あつて、責木を打込む音が高く響いていたと云う。」（『矢野町史』）

「板場」を「油絞りの作業場」ととれば納得できます。

八〇年ほど前、子供の頃、村に椿油を絞る作業場があり、この「板場」で四人の作業員が、焙烙で煎った椿の種から油を絞っていたと、懐かしそうに昔話を話されるのを聞きました。

『日本国語大辞典』の編者は、染物の仕事場でこの言葉を仕入れて、上記の解説になったのかも知れませんが、菓子屋や油絞りの作業場も「板場」ですし、それ以外の仕事場でも、板を道具に使っていたら「板場」と言っていたかも知れません。

草麦

「御公儀歩兵隊・騎馬隊之御方様御人数凡弐百人、

隊列御運動として村内へ御入込被為在御座候御様子二附、……尚又当村之義は、日々御城下表より肥シ持運ひ人馬出這り繁ク、其上春方草麦之頃川砂持込、別て窪所田方二当り申候ては友百姓相互二因ミ合、多人数相集り砂持取計義も御座候二付、御途中ニおゐて自然非礼之義御座候ては甚タ恐入候義ニ奉存」（慶応二年（一八六六）三月「矢賀村寛書」）

御公儀の歩兵隊・騎馬隊の御方約二百人が隊列の訓練のためとて当村内へお入りになつていますが、……当村では、日々御城下表（広島）より下肥運搬の人馬の通行が多く、その上春の草麦の頃に川砂を運んできて、特に低地の田に入れています。そのため百姓同士が多人数集りその仕事をしていますので、途中ですれ違い失礼なことがあつても困るので、

第二次長州戦争のため広島に参集した「御公儀」の軍隊が、広島東郊の矢賀村で行軍をするので、農民が迷惑している様子が書いてあります。「春方草麦之頃」とは「春三月の、麦がまだ穂を出す前の頃」です。

【草麦】（『日本国語大辞典』）

まだ熟していない青い麦。 青麦。

「御年貢上納たりとも草稻・草麦売買致間舗事」(寛政五年(一七九三)『広島県史』)

御年貢を納めるためであっても、草稻や草麦を売買してはいけない。

辞書では見つけることができませんでしたが、「草麦」があれば「草稻」があつて当然です。

「六月土曜之頃虫送りとて草稻出来立時分天氣不晴にてサハイ虫生し候へは抱之社人を頼御祈禱いたし氏神へ集り燈明神酒ヲそなへ神火をもらい松明へうつし鐘大鼓打ならしゲドウ虫送るよと声々にさけび村裾にて焼捨申候」(文政二年(一八一九)向山村「国郡志御用ニ付下調査出張」)

六月の土用のころ「虫送り」といって草稻が出来立てる時分に、天氣が悪くて「サハイ虫」が発生したら神主に祈禱してもらい、氏神へ集り燈明神酒を備え、神火をもらつて松明へうつし、鐘太鼓を打鳴らし、「外道虫送るよ」と声々に叫び、村境で焼捨てます。

殆ト

「何分賊勢ハ多人數、殊ニ三面ヨリ砲發候間、殆ト苦戦仕処」(慶応四年(一八六八)「関東征旧記」『木原適処と神機隊の人々』より)

何分賊勢は多人數で三面から砲發するので、殆ト苦戦していたところ、

「御途中ニおゐて自然非礼之義御座候ては甚タ恐入候義ニ奉存、私共ニおゐても殆ト案勞仕居申候」(慶応二年(一八六六)三月「矢賀村寛書」)

(公儀歩兵隊の方々に)途上で(村民が)非礼のことをするかも知れず、そうなると甚だ恐れ多いこととて、私共村役人も殆ト案勞しております。

「当年柄稻作大ニ不登、処ニ寄てハ皆無同様之村柄も有之、ヶ様之処ニてハ貧民共ハ忽チ今日之煙も立兼、治生殆ト行当候様相聞、況来春ニ至り候得は郡中村ニおゐて窮民出来湧可申敷之様子ニて」(明治二年(一八六九)『千代田町史』)

今年の稲の出来はサッパリで、所によつては收穫皆無同然の村もあり、こういう状態では貧民共はたちまち今日の煙を立てることもできず、村役人は殆ど途方に暮れているそうで、来春になると郡中の村々では窮民が出来湧くのではないかという状況で、

【殆ど・幾ど】（『広辞苑』）

（ホトホトの転）①大方。大略。「―が賛成だ」「雨は―止んでいる」②今少しで。すんでのことだ。

「―轆（ひ）かれるところだった」

私は、「殆ト」を「殆どが賛成だ」の様に理解していたので、「殆ト苦戦」と言われれば「大部分の者が苦戦」と解釈してしまいましたが、「殆ト案労」「殆ト行当」には、困ってしまいます。

説明をよく読むと「ホトホトの転」と注釈があります。

【殆・幾】（『広辞苑』）

①今少しで。すんでのことだ。②大体。ほとんど。③非常に。本当に。「―困った」「―あきれた」

「殆ト苦戦」は「ホトホト苦戦」、「殆ト案労」は

「ホトホト心配しあぐねる」、「殆ト行当」「ホトホト行き当り」と解釈すれば納得できます。ひよつとしたら、「殆ト」は「ほとんど」ではなく「ほとほと」と読むのかも知れません。

北平・南平

「山の北平・西平には、万木諸草はへかねる。水気・陽気うすき故なり」（『百姓伝記』）

山の北平や西平では、木や草は生えるのが難しい。水気や陽気が薄いからである。

【平】ひら。（『広辞苑』）

⑤山中にある相当広い緩斜面。天狗平（てんぐひら）の類。へら。ひらなか。

「山の北平」とは「山の北側斜面」のことと知ることができます。ただ、それが「緩斜面」かどうかは問題です。

「御建矢賀山之内松転木御注進書附 アキ郡矢賀村 覚

北平

一松転木沓本 廻り沓尺五寸長サ沓間半

南平

一同同沓本 廻り沓尺七寸長サ九尺

同所

一同同沓本 廻り五六寸長サ五尺

ベ四本

右は当村御建矢賀山之内当七日夜風雨之刻転木仕候二附、此段御注進奉申上候、以上」(「矢賀村覚書」)

山の北平に松転木沓本、廻り沓尺五寸長サ沓間半、山の南平に同沓本、廻り沓尺七寸長サ九尺、同所で同沓本、廻り五六寸長サ五尺、合計四本右は矢賀村の御建(藩有林)、矢賀山のうちで、今月七日夜風雨のとき転木したので注進します。

矢賀山には「緩斜面」はありません。「平」という漢字の意味や、「天狗平」の例から、解説に「緩斜面」の意味を含ませたものと思います。

「村内川除普請所惣牀南川除何千何百何拾間、北川除何百何拾間とケ所附帳二御座候、……都て川除

は村普請二取計来候二付、私川除南北之違は御座候得共、南平より北平へ一続にて間数之内二御座候」(安政六年(一八五九)『府中市史』)

村内の堤防の普請所は全て、南の堤防の長さはいくら、北はいくらと、「ケ所附帳」に書いてあり、……堤防は全て村費で普請してきました。私の所の堤防も……南平から北平へ一つづきに間数が書いてあります。

この文書は、山ではなく川の堤防に関する記事です。面倒な解説は抜きにして、「堤防の南平、北平」と書いています。すると「斜面」ではなく、ましてや「緩斜面」でもなく、単に「北側、南側」を表しているだけだと思います。

「北平」は「きたびら」と読むのでしょうか。

透と

「麻疹は最早引候得共、余熱未透与不去候二付、御食御進不被成、御平臥被成」(『村上家乗』)

麻疹の症状はもう引きましたが、余熱はまだ透

と去らないので、御食も進まねず、臥せておられます。

「三次御領分百姓共相談之趣ハ、吉田孫兵衛殿去暮大坂より之触状ニ、年々残し米を御捨、当納所計御取立之上ハ年内ニ透と皆済仕せ可申候、若不足仕候百姓ハ何百人にても獄門ニ掛ケ可申候、其村之庄屋ニハ手錠ヲ入闕所仕可申候」(享保三年(一七一八)『広島県史』)

(享保三年(一七一八)百姓一揆のとき)三次支藩の百姓共が相談した事柄は、吉田孫兵衛殿(三次藩郡奉行)が去年の暮、大坂より送った触状に、「年々の残し米を免除し、今年の年貢ばかりは取立を年内に透と皆済させなさい。もし不足する百姓は、何百人でも獄門に掛けなさい。その村の庄屋には手錠をかけて闕所しなさい。

なんともはや、凄まじい内容ですが、「年貢を年内に透と皆済」と書いてあります。

【透と】(『日本古文書学提要 下』)

「すきつと」すつきりと。残らず。ことに。

【すきと】(『広辞苑』)

①すつかり。残らず。さっぱりと。狂、雷「快う成つた」②(下に打消の語を伴つて)まったく。全然。浄、大経師「毎年のことでもこちは―覚えぬ」

「余熱未透と不去」は「余熱がまだすつきりと去らず」、「年内ニ透と皆済仕せ」は「年内には残らず上納させ」と解り、これでスッキリしました。

御残し米

「年々残し米を御捨、当納所計御取立之上ハ年内ニ透と皆済仕せ可申候」(享保三年(一七一八)『広島県史』)

年々の残し米を免除し、今年の年貢ばかりは取立を年内に透と皆済させなさい。

この文書は、前回の記事「透と」で取り上げたものです。この中に「残し米」という言葉があります。

「領主側の年貢収納に関わる経理上の手順を一瞥しておこう。まず、村方からその年の免状を受理する旨を記した免状請書を代官所に提出させる。次

に、所取り立てが開始された段階で、村方から「納目録」が提出され、代官はこれを郡単位にまとめ勘定奉行に提出する。これは言わば蔵払い予定目録とも言うべきものである。次いで、蔵払いのたびごとに、村方に米蔵から請切手と称する受取手形が手渡される。例外的に認められていた代銀納の場合は、銀蔵から同様に受取手形を受け取る。

蔵払い終了後、村方ではこれらをまとめ、さらに「払目録」を添えてそれぞれ所轄の代官所に提出する。この「払目録」には翌年に繰り越しとなる未進米・残し米・鉄山下し米の数量も合わせて記載されている。残し米とは、口屋番・蔵番など郡中在住の役人に、翌年六月払い切りで村方から直接給付することになっていた扶持米分を言い、鉄山下し米は、鉄山労働者の飯米を確保するために指定された村落が直接鉄山に納入する年貢米である。』（『広島藩地方書の研究』）

文政十二年（一八二九）の安芸郡の極月勘定を例にとつて説明すると分りやすいと思います。

一 覚 安芸郡

一定物成八千八百六拾五石四斗九升六合 古地新開
一米八拾石壹斗貳升壹合 壹歩米半納

（中略）

べ壹万三拾六石四斗壹升貳合六勺

内払

九千三百四拾貳石九斗貳升壹合貳勺 御蔵払米

（中略）

四千四百貳石五斗七升 御差次

（中略）

べ九千九百貳拾貳石四斗三升貳合六勺

残百拾三石九斗八升 御残米

内

三拾七石七斗 府中村田所領

拾石 牛田村安国寺領

六拾六石貳斗八升 蒲刈嶋御繫船方御切米
御扶持方共來寅年分

以上

文政十二年丑霜月廿三日 割庄屋野村孫兵衛
（以下略）（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）

安芸郡全体の極月の勘定は、「一定物成」「壹歩米半納」等を加えて、納税すべき総額「壹万三拾六石四

斗壹升貳合六勺」の内、「御蔵払」「御差次」など合計「九千九百貳拾貳石四斗三升貳合六勺」が納入済みとなっています。差し引くと、「残百拾三石九斗八升 御残米」です。つまり、「御残し米」は、未納分として（残った米）です。

古文書の中で「御残米」という表記が一般的ですが、文化十四年（一八一七）の同類の文書には「御残し米」と書いてあります。「御残り米」の表記は次の例文に見られるくらいで、少数です。これは藩が年貢徴収に努めたが「残ってしまった米（未進米）」ではなく、わざと現地に「残した米」で、「口屋番・蔵番など郡中在住の役人に、翌年六月払い切りで村方から直接給付する」都合によるものです。

「六月 前年之年貢皆済之勘定帳面出、尤唯今迄未取立を当月取立候義ニは無之、郡ニより御残り米トいふ事有、是ハたとへハ御口屋番中か又ハ御蔵番杯之郡中在住之者共之扶持米等を右残り米ニて村方より渡させ候故、此分六月迄ニ渡し候へハ七月より新米も出来、其年之米を以渡ス故、六月ニ払切也、依之右御残り米払仕廻皆済也」（「理勢志」）

六月には前年の年貢皆済の勘定帳面を出す。これは今まで未取立分を当月に取り立てる意味ではない。郡によって御残り米といふことがあるが、これは、例えば御口屋番の連中か又ハ御蔵番など、郡中在住の者共の扶持米等をこの御残り米で村方より渡させるので、この扶持米などを六月までに渡せば、七月から取れる新米を渡さないのが、六月に全額支給する。だから右の御残り米を払えば、年貢は皆済したこととなる。

『広島藩地方書の研究』には、年貢の未納分として、「御残し米」以外に、未進米・鉄山下し米を挙げていますが、安芸郡極月勘定・「理勢志」にはその記述が見られません。

「態申遣ス

一七人扶持 賀茂郡寺家村野坂三益

右御扶持方当未十月分九月渡りより村方ニおゐて当御年貢米之内より御残米ニして毎月十八日渡り二相成候条」（天保六年（一八三五）「鶴亭日記」）

賀茂郡寺家村の野坂三益（天保五年より御医師格）の御扶持方（七人扶持）は、当未年十月分（九月渡り）より、村方で当御年貢米の内より御残米にして毎月十八日支給することになったので、

畳む

「備後銀あるいは上下銀じょうげぎんとよばれる貸付融通銀の制である。これは石見国大森銀山の産出銀を元手に、

[illegible]

は莫太の大銀に相成」るはずです。

「手便」という言葉も出るので調べました。

【手便】（『広辞苑』）
てびん

手ぢか。手回り。日葡「テビンニハナイ」

これでは、文意に合いませんので、外を調べてみると、「今昔物語巻第二十九」（角川文庫）に、「手便」とあつて「たより」とルビが付けてありました。「たより」なら「手段」ですから、意味も通ります。

御仕向

「仕向」という言葉を古文書でよく見かけます。

【仕向ける】（『広辞苑』）

①ある態度で人に接する。取り扱う。待遇する。

「親切に―ける」②ある動作・行為をするように他に働きかける。「勉強するように―ける」③商品などを先方にあてて送る。

よく使われるのは、②の意味、「他人がある行為をするように働きかける。その気持を起こさせる。」でしょう。

「盗賊人ヲ殺候ものは重罪、但、諸道具計取候ものハ少輕ク仕向可申付候」（『吹寄青枯集』）

盗賊で人を殺した者は重罪、但し、諸道具ばかり盗んだ者は少し軽く取扱うようにしなさい。

「出郡之面々末々迄たとへ自分代銀ヲ出候共、酒肴は不及申、菜好ミ等決して不仕、勿論郡中ニおゐて一切買調物不仕様かたく御仕向可有之事」（『吹寄青枯集』）

郡部に出張する役人は全て、たとえ自分で代銀を出しても、酒肴は勿論、好みの菜おかずなどけつして出さず、郡中で買物をさせないようにしなさい。

これは、①の意味「取り扱う。待遇する。」で使っています。

③の意味、「商品などを先方にあてて送る。」で使った例文は見たことはありません。

よく見かける使い方は、次のようなものです。

「当年稻毛虫附二付、飢人之儀段々江戸大坂ニおゐて従公儀御力入被仰出之趣も有之、御領分之儀初秋以来追々御仕向も候処、……御家老御知行所之

儀も定て御油断ハ有之間敷候得共御領内之儀故御差別は無之儀ニ候間、弥以餓死人無之様ニ尚又御仕向も有之候様ニ仕度候」（享保十七年（一七三二）十二月『広島県史』）

当年、稲に虫が附いたことにつき、飢人の件で江戸大坂で幕府から指示も出ているが、当広島藩でも初秋以来、追々と御仕向もあり、……御家老の御知行所も御油断はないだろうが、領内なので同様にして、餓死人がでないよう、なお又御仕向もするようにする積り

「享保の飢饉」にあたり、餓死者を出さないよう、藩が「御仕向も有之候様ニ仕度」としています。

「去秋風損ニて堤筋所々及大破、忽難捨置場所出来仕、下方一統心痛仕候儀ニ御座候へ共、素り難渋之村方、別て右新開方御借銀大造之儀ニて、近年柄之儀返上等差間、困窮仕候儀ニ御座候へハ、所詮仕戻し村業ニ相叶不申、不得止歎出申候儀ニ御座候、依て当度普請入用之義ハ格別ヲ以御貸銀ニて取捌キ候様御仕向被為成下候ハ、御蔭ヲ以普請丈夫ニ相調難有仕合可奉存候」（文政二年（一八一九）六月「野間家文書」）

昨秋の台風で堤防が所々で大破し、そのままに置いて置けない場所があり、私どもも心を痛めています。が、貧乏村のため、この新開造成にも藩から大造の借銀をし、近年の状態でその返済にも差支える有様で、復旧工事は村の手に余り、やむを得ず御借銀の御願をしています。今度の普請入用は特別の計らいで御貸銀で取捌くよう、御仕向いただき、普請も丈夫に調えることができます。有難いことです。

「御貸銀ニて取捌キ候様御仕向」と願書を出しています。

この二例とも、「御仕向」を「御援助」と読み替えると理解できます。飢饉のときの〈無償〉の援助でも、災害復旧のための〈有償〉の「御貸銀」でも、「援助」に違いはありません。

辞書には「仕向」＝「援助」の説明はありませんが、上記②の「ある動作・行為をするように他に働きかける。」の意味が拡大したものではないかと思えます。藩による援助ですから、「御……」が付きます。

有付

「在り付く」という言葉について調べます。

古文書では、「有付」「有附」と書いてあります。

【在り付く】（『広辞苑』）

①生れつく。②物事に慣れる。③似あう。しつくりと合う。（多くは下を打消にして用いる）④住みつく。落ち着く。安住する。⑤夫婦となつて住みつく。同棲する。⑥生活の道を得る。暮しをたてる。⑦仕官する。就職する。⑧望んでいたものを手に入れる。

「やつと、晩ご飯に有り付いた」の使い方は、⑧の意味で、今でもよく使います。

「葱はうへ付けてほどなく有り付くものなれば、熊手にて間をかきあざり、草少しもなくすべし。」

（『農業全書』）

葱は植付けると、ほどなく有り付くものなので、熊手で間をかきけずり、草を残らずなくしなさい。

「葱が有り付く」は、〈根付く〉ことなので、④「住みつく」に近い使い方です。

「私儀親一所ニ家持住宅仕居申候所、武家奉公之望御座候ニ付、八年已前居宅弟吉兵衛へ譲遣し、夫より佐藤忠左衛門様へ支配役ニ有付、則多門へ引越居申候処」（『堀川町覚書』）

私は親と一緒に自宅に住んでいましたが、武家奉公の望みがあり、八年前家を弟吉兵衛へ譲り、佐藤忠左衛門様の支配役の仕事に有り付き、多門へ引越して住んでいました。

「支配役ニ有付」は、⑦「仕官する。就職する。」に当ります。

「郡中ハ耕作之暇産業不自由之土地へは何そ其場所相応之生産手職等ニ有付、其品々捌方取計遣候得ハ貧民渡世家業ニ相成」（『広島県史』）

郡部で、農閑期に適する産業の無い土地では、何かその場所にふさわしい生産手職等に有り付き、その産物販売の道を開いてやれば、貧民の家業にもなり、

「生産手職等ニ有付」は、⑥「生活の道を得る。」

暮しをたてる。」に相当します。

「荒地無毛之土地多、自然と作人も減、農家至て無数之村ニ有之、田畑荒所多、去とも極たる年貢ハ百姓共かつき合差出、其外村方入用課役類も悉く有付百姓とも闇キ候故、約る処、銘々出方増し、身前之貢之外二人之貢課役も勤る故」（「理勢志」）
荒地で、作物のできない土地が多く、自然と耕作者も減り、農家が非常に少ない村です。田畑で荒れた所が多く、それでも決った年貢は百姓共全員負担して差し出し、その他村の入費もみな有付百姓ともがかづき、自分の年貢のほかに人の年貢も出すことになるので、

村を見捨てた農民の年貢まで「有付百姓ども」が負担する、この場合の「有付」は「村に残った」という意味ですから、④「住みつく。落ち着く。安住する。」の「住みつく」に近い使い方です。

卒与

「今日用事有之、清太を卒与広島へ返ス」（慶応二

年（一八六六）『村上家乗』）

今日用事があつて、（家僕の）清太を卒与広島へ返した。

慶応二年『村上家乗』は広島藩家老の東城浅野家に仕えた村上彦右衛門の日記です。この文書に「卒与」という言葉が使われています。「与」は仮名の「と」ですから、「卒与」は「そつと」と読み、なにか都合があつて、ひそかに帰したのだろうと考えていました。

「夜家小従木野帰ル、今日昼船ニて丹羽正蔵室同船ニて六丁目渡場へ着船、丹羽へも卒与寄帰候由也」（慶応二年（一八六六）『村上家乗』）

夜、家内が木野より帰る。今日昼、船で丹羽正蔵の室と同船したので、六丁目渡場へ着船して、丹羽へも卒与寄つて帰えつたという。

知人の家に寄り道するのに（ひそかに）はおかしいと思ひ、辞書を調べると、ありました。

【卒】（『漢字源』）

〔形・副〕にわかに。急なさま。突然に。

「卒与」は「そつと」ではなく「卒^{そと}と」でした。

「今日用事があつたので、急に広島に返した」と理解する方が自然です。

「たまたま同船したので、予定外に寄道をした」に違いありません。

「夜山田養吉、原田志賀之助と申御船頭を伴来話、志賀之助は四ヶ年計江戸・横浜へ入込洋学執行致、近頃卒与帰候由、段々珍話有之、酒を饗、深更迄話」（慶応二年（一八六六）『村上家乗』）

夜、山田養吉が原田志賀之助という御船頭を伴れて話しに来た。志賀之助は四年ほど江戸や横浜へ行き洋学を学び、近頃卒与（突然）帰ったところで、段々珍しい話があり、酒を飲みながら、深更まで話した。

「御船頭」と「御」が付けてあります。この一文で、民間の船頭ではなく、藩のそれだと解ります。

雨落

【雨落】あまれち（『広辞苑』）

① 軒のあまだれの落ちる所。② 劇場で、舞台の

最前面、一番客席寄りの所。

「浄念寺本堂後之庇屋根尻高、雨落扣強柱之根朽候ニ付、本堂之後桁行七間之内西之方ニて別紙願書之通庇仕度」（享和二年（一八〇二）『三原市史』）

浄念寺本堂の後の庇屋根の端が高いので雨落の当りが強くて柱の根が朽ちたので、本堂の後の桁行七間の内西の方に別紙願書の通り庇をしたいので、

この例文の「雨落」は、①「軒のあまだれの落ちる所。」に当てはまると思いますが、説明に適さない使い方もあります。

「当両村北は灰峯野山峯通雨落限り栃原村境」（文化十一年（一八一四）『呉市史』）

この両村（安芸郡庄村と山田村）の北は、灰峯の野山で、峯通り雨落を限り栃原村との境です。

村の境界の話ですから「雨だれ」は関係ありませんが、「雨」にはつながりがあります。

「大抵山の界ハ峰通りにて前ひらハ何村、後ひらと何村と雨落かきりに分るものなり、たま々谷川かきりの界もあれとそれハ稀なり」（頼杏坪「老の

絮言「『広島県史』」

たいてい山の境は峰通りで、前側何村、後側は何村と、雨落かぎりに分れるものである。時には谷川が境界になっているものもあるがそれは稀である。

これは山の尾根の話です。すると、「雨落」には、降った雨が左右に分れる「尾根」という意味もあるのだろうと思います。

いびき太郎さんのコメント

「私方在所で「あまおち何々坪……」という言い方が有ります。建物の広さを表現する「建坪」は実際に柱のある範囲をいいますが、「あまおち」は庇の先端で覆われる範囲をいいます。

かつての農家では、初等の筵干しは数日続きますので、夜間は軒先に取り込む場所が必要で、夜間でなくても雨降りには縁側にも土縁^{どえん}にも筵が取込まれます。

「雨落ち」は農家の家の大小を計る数字に使われています。尤も、現代の農家建築では、ことさら「軒の出」を出す必要が無くなった様にみえます。建築家の言では「現代の建築技術上の術語で

はないが、用語としては時々出てくる」とのこと
で「在所の方言」ではないようです。」

差引

「一定物成 壱万三百三拾四石四升 新開 共
一米六石三斗貳升三合 新開御見取米

〆 壱万三百四拾石七斗六升三合

内

七拾五石三斗

広島御蔵払

九千九百七拾九石九斗五升貳合

三原御蔵払

(中略)

〆 壱万三百四拾石七斗六升六合

差引三合払過」(「世羅郡郡用帖」)

古文書の中で数字だらけの文書のときは、電卓を使って読みます。これは世羅郡の「御年貢米皆済勘定目録」の一部で、定物成など合計「壱万三百四拾石七斗六升三合」の年貢を納むべきところ、三原の御蔵などに納入して、その額「壱万三百四拾石七斗六升六合」、差引きすると「三合払い過ぎ」です。

引き算の結

果を、「差引」

「差引残」「差

引」残而」

「残」などと

表現していま

す。

右図の左は、

「引」 貳歩貳朱ト

貳百七拾三文 不足

と書いてあります。「差引」を短くしたものと思

います。

右図の右は、

「残 七百三拾五匁」

「夕」と書いて「残」と読ませているのでしよう。

永貫文

ここに、〈ややこしくて面白い〉文書がありますので、その一部を紹介します。

「永貳九百八拾九文九分 普門善二会目懸金割
此金貳両三分三朱

永五拾貳文四分

此錢五百廿三文

所へ

貳両壹分ト

八百七拾文 十一月十四日請取

引」 貳歩貳朱ト

貳百七拾三文

不足

(年不明、幕末期か、「浜町自治会所蔵文書」)

この中に、「永樂錢(文)」と「金貨(両)」と「錢(文)」の三種の表記が出揃います。

永樂錢は、寛永通宝が多量に鑄造された寛永十三年(一六三六)に使用が禁止されましたが、計算単位としてその後も使われました。金貨一両は四分、一分が四朱と、四進法のため、細かい計算が面倒なので、金一兩 \parallel 永一貫文(一〇〇〇文)として、永貫文で表示しました。

「普門講の第二会目の懸金」は、「永貳貫九百八拾九文九分」(永二九八九・九文相当です。これを「金貳両三分三朱」(永二九三七・五文)と端数「永

五拾貳文四分」(永五二・四文に分割します。

金貨は支払できますが、「永」は使えないので、「永五拾貳文四分」(永五二・四文)相当額を「錢」で支払うこととなります。これが「錢五百廿三文」(錢五二三文)となっています。永五二・四文 \parallel 錢五二三文なら、ほぼ永一文 \parallel 錢十文(金一兩 \parallel 永一貫文 \parallel 錢十貫文)のレートです。(江戸時代の初めには一兩 \parallel 四貫文でしたが、最後のころになると、一兩が十貫文にまでなっています。)

十一月十四日に初会分懸金として受取ったのは、「貳両壹分ト八百七拾文」でした。永貫文に換算すると、「貳両壹分」 \parallel 永二二五〇文、錢「八百七拾文」 \parallel 永八七文、合計永二三三七文です。ところが、初会分も第二会目懸金と同額を懸けるように変更になりましたので、不足することになりました。

その不足額の計算は永貫文ですと便利です。

不足額、永六五二・九文は、

請求額	永 2989.9 文
納付額	- 永 2337.0 文
不足額	永 652.9 文

金貨「貳歩貳朱」(永六二五文)と、端数は永二七・九文、比例計算をすると錢二七九文(二七八・四文)になりますが、請求は「貳百七拾三文」になっていて、六文の違いができました。金・錢の交換比率の誤差から生じたものと思いますが、ほぼ一致です。

「兩」の四分の一は「分^ぶ」ですが、ここでは「歩^ぶ」も使っています。

このややこしい計算は一種の〈金種計算〉ですが、永貫文を使うと計算が楽になります。永貫文が計算単位として生きていた訳がよくわかりました。

この〈ややこしくて面白い〉文書についての記述は、ややこし過ぎるので、問題を換えて〈解りやすい〉説明をします。

【問題①】所持金が二九八九・九円あります。二三三七・〇円の買物をしました。残金はいくらですか。

答 2989.9円 - 2337.0円 = 652.9円

電卓を持ち出すまでもなく、小学生でも簡単に正解を出します。(〇・九円はないので、現実には困ります……)

【問題②】所持金が、金貨二両三分三朱と錢五二三

文あります。金貨二両一分と錢八七〇文の買物をしました。残金はいくらですか。ただし、四朱Ⅱ一分、四分Ⅱ一両です。また一両(Ⅱ永一〇〇〇文)は錢一〇〇〇〇文と交換されるとします。(買物には、補助貨幣としての小額硬貨Ⅱ錢はどうしても必要ですから、支払は金貨と錢の二本立になります)。

この問題の〈ややこしい〉点は二つあります。第一は「朱」「分」が四進法であるため、金貨だけの計算をするのでも面倒です。第二は、金貨と錢の単位の違いです。二センチ+三インチの計算は、単位をセンチに揃えないと計算できません。金貨と錢も同じです。その上、金貨と錢の交換比率はいつも変動していますので、さらに面倒になります。

これらの問題点をまとめると、結局は「単位の統一」です。そこで、単位を永貫文だけにすると計算が楽になります。金貨も錢も、現実には通用もしない永貫文に換算して単位を揃え、永貫文を使って計算をし、出た答えを現実に通用する金貨と錢に戻します(金種計算)。

このような手順で前回の計算がされています。も

う一度、たどってみてください。少しは〈解りやすく〉なっているかも知れません。

吹聴

「吹聴」という、今ではあまり使われない言葉があります。

【吹聴】(『広辞苑』)

ひろく言いひろめること。言いふらすこと。披露。

「孫六 右之者算盤細工致し候処至て工合宜く、當時同人製作之十露盤は孫六算盤又は廿日市十露盤と唱へ、世上吹聴重宝仕候」(『廿日市町史』)

孫六が作る算盤はいたって工合がよく、現在、同人製作の十露盤は「孫六算盤」又は「廿日市十露盤」といって、世上に吹聴、重宝しています。

「世上吹聴」とは、「世間で評判になっている」ほどの意味でしょうか。

「御発句あまた御見せかたじけなく候。いづれも甚

よろしく御座候。添削には及不申候。珍重に御座候。折節几董・百池など居合せ候て、いづれもへ吹聴いたし候処、みな々々感賞仕候」（『蕪村書簡集』）

あなたの御発句を沢山見せていただきかたじけなく思います。どれも良くて、添削するまでもなく見事な出来です。折節、几董・百池などが居合わせていましたので、吹聴したら、みな感心していました。

この「吹聴」は「披露」することでしょう。

「一筆啓上致候、暑之節御座候得共御安康可被成御勤珍重奉存候、然は私義加辺七郎左衛門後役として沖家室在番被申附候、万端不案内無御心置被仰下度奉存候、先ハ為御吹聴如斯御座候」（天保八年（一八三七）「鶴亭日記」）

お手紙を差上げます。暑さの折からお元気にお勤めのこととお喜び申上げます。さて、私、加辺七郎左衛門の後役として沖家室在番を申し付かりました。万端不案内ですが、御心置なく仰せ下さい。先は御吹聴する次第です。

この場合も「披露」に当りますが、自分で自分の

就任を「披露」していますので、「就任の御挨拶」と考えた方がよさそうです。

並合

【並合】（『日本国語大辞典』）

江戸時代、大坂での商事上の慣用語で、抵当の意。また、抵当による貸借のことという。「来舶の諸品を質するを、なみあひと云、並合と書す。俗言也。因之て諸買物を質するをも並合と云」

「唐船持渡之薬種・荒物類、買物并荷物並合引当等二取組候者共、近年売買ハ危踏、融通不宜趣二相聞候、右商売ニ携候町人は勿論、都て国々ニて取捌候者共ニ至迄、仮令公事出入吟味中ニても無障可致取引候」（天保二年（一八三一）『広島県史』）

唐船が渡来した薬種や荒物類を、買ったたり荷物の並合引当にしている者共が、近年は売買を危ぶんで、融通が良くないと聞いている。この商売に従事している町人は勿論、すべて国々で販

売している者共も、たとい係争中でも障りなく取引をしない。

ここで「並合引当等二取組」の「並合」は「抵当」を意味すると思いますが、多くの例文は、このような特殊な意味ではなく使われています。

「当町客屋家賃、是迄毎年銀貳百貳拾五匁ツ、間打銀より仕払来居申候所、外方並合も御座候て当年より米壺石五斗二相定候段、榑崎忠兵衛より申越候間、」（明治四年（一八七二）『三原市史』）

当町の客屋（賓客を接待する藩の建物）の家賃は、これまで毎年銀貳百貳拾五匁宛、間打銀（町入用を賄うために、表間口一間につき三匁を徴収した）から支払っていましたが、外との並合もあつて、今年より米壺石五斗に決めたと、榑崎忠兵衛より連絡があつたので、

【並】（『漢字源』）

〔国〕なみ。程度が普通であること。

「外方並合も御座候て」は「外との釣合もあるのど……」ほどの意味でしょう。

「主人并雇主共之場ニても、……給銀賃銀共前々之

通引下ケ可相渡候、尤勝手ニ寄候ては一人立並合より給銀賃銀共上ケ遣候ものも有之由相聞候処、自然も脇々とへ移り合候様相成候間、兎角已前之通り引下ケ候様可致候」（天保十三年（一八四二）『広島県史』）

主人や雇主のほうでも、給銀・賃銀とも以前のよう引き下げて渡しなさい。もともと、雇主の都合により一人立並合より給銀・賃銀を上げて支給する者もいると聞くが、ほかにも影響があるので、以前の通り引き下げなさい。

「並合」は「程度が普通」として使っています。ここで気になるのは「給銀賃銀共」という言い方です。給銀と賃銀は、ともに「仕事をしたことに対して支払われる金銭」と理解していましたが、二つを区別するような書き方です。宿題にします。

肥松・肥木

「古木之分枯倒之節、從來新木同様村方勝手取片付居候処、宮沖新開出来、樋蓋用肥松御山所ニ不自

由二付、肥木之分八尺宛御用木被仰付、夫故古木ハ御山方御立会御見分ニ相成、自然と御作事所支配と申様之義ニ押移候得共」(明治四年(一八七二)『三原市史』)

(並木松の)古木が枯れ倒れたとき、従来は新木と同様に村方が自由に処分していましたが、宮沖新開が出来て、その樋蓋用の肥松が御山所(藩有林)では不自由なので、肥木の分は八尺宛御用木とされるようになりました。そのため古木は御山方が立会つて御見分になり、自然と御作事所支配のように変りましたが、

【肥松】(『広辞苑』)

脂やにの多い松。松明たいまつなどに用いた。

肥木の部分は水に強いので、樋蓋用材として使われたり、「荷敷肥松式枚」(『倉橋町史』)のように船材にもなっています。勿論、照明にも使われます。

「暮頃野より罷帰、下部者藁を打夜なべの用意仕、夫より夕飯と申て食事仕、下部は牛馬之沓又は縄其外履物類凡何程と申極め程相仕廻相休み申候も有之、……凡四ツ時頃相休申候、尤格別忙敷節は

夜半過迄も起居申候、其時は例夜臥り候時分、又茶を給申候、是を夜食と申候、尤明りは多分肥松之火又囲炉裏之焚火にて相當み申候」(戸島村「国郡志下調書出帳」)

暮ごろ野良より帰り、下の者は藁を打ち夜なべの準備をして夕飯をたべ、牛馬の沓や縄、履物などいくら作ると決めて、済むと休みます。：およそ四ツ時(午後十時)頃休みますが、格別に忙しいときは夜半過までも起きています。その時は、いつもなら寝る頃茶を給たべます。これを夜食といいます。明りは多分肥松の火か囲炉裏の焚火でとります。

「火煙之儀ハ昼ハ煙、夜ハ火を第一ニ上ケ候仕形、松葉、肥松等を焼可申」(安政二年(一八五五)『廿日市町史』)

(火山)で揚げる火煙は、昼は煙、夜は火を第一にあげ、松葉や肥松等を焼きなさい。

これは、異国船をはじめとする異変に際し、これを城下まで速に報知するため地御前村高畑山を火山とすることを定めたものです。

雨乞・葉潤

「郡中田畠作物干損仕候ニ付、村々氏神ニおゐて雨乞御祈禱度々仕候処、少々之葉潤は仕候得共行届不申、此節ニ至り日痛弥増申候ニ付、府中村道隆寺ニおゐて雨乞御祈禱仕呉候様ニ組合村々より願出候間」（寛政二年（一七九〇）「野間家文書」）

郡中の田畠作物が旱損の被害を受け、村々では氏神で雨乞祈禱をたびたび行つても少々の葉潤程度の雨で、今では日痛がひどくなつたので、府中村道隆寺で雨乞御祈禱をしてくれるよう郡内組合村々から願ひ出、

日照りが続くと、雨乞い祈禱の〈神頼み〉しかありません。村の祈禱で効目がないなら、郡単位でと規模が拡大します。そして最後は、

「雨乞之御祈禱於巖嶋大守様より被仰付」（『三原市史』）

藩主の命により巖嶋で雨乞いの祈禱となり、御札が各村に配られます。

「今年旱五月廿八日雨ふり其後少々之そばへ二度有り決て葉潤ニも相成不申候、凡三十六日之旱なり、右ニ付六月廿四日より二夜三日雨乞村方之願執行いたし候処少之御利生も無之ニ付、直ニ寸志二夜三日執行致し候処是又同様少し之御利生も無之ニ付、又々寸志一七日社籠候処、七月四日凡八ツ頭時分より西之方真黒ニ曇り、しきりニ雷鳴いたし大風ふき時之間ニ降り来り誠ニ大潤致し、」（天保十年（一八三九）『府中町史』）

今年（天保十年）の旱は、五月廿八日に雨が降り、その後少々のそばへが二度あつたが葉潤にもならないほど、凡三十六日の日照りである。そこで、六月廿四日より二夜三日の雨乞祈禱を村方の願ひで執行したところ、少しの御利生もなく、続けて寸志二夜三日の祈禱も効果なく、また寸志で七日の社籠をしたところ、七月四日の午後二時ごろから西の空が真黒に曇り、しきりに雷鳴、大風が吹き、しばらくして大降りになり、これは、神主の覚書です。村役人から雨乞い祈禱を頼まれ、効果がないとみるや社籠までしています。「少々之そばへ二度有り決て葉潤ニも相成不申」と

書いていますが、「そばへ」とは、通り雨。

【戯】（『広辞苑』）

或る所だけで降っている雨。通り雨。わたくし雨。むらしぐれ。日照雨。

「葉潤」は「葉っぱが濡れる程度の雨」、「一七日社籠」は「七日間の社籠」。

祈禱だけではなく、お籠り・雨乞い踊・山に登り雨乞の火焚きなど、涙ぐましい努力が続きます。

【雨乞い踊】稲作の過程で降雨を祈る呪法として用いられた風流系の踊り。首尾よく雨が降ると、願ほどきのお札参りとしてもう一度踊るのがならわしであった。……庄原を例に解説しておこう。

雨乞いのため7日を単位に願かけをし、その間古老について踊りを習う。満願の日に村の西端にある月貞寺へ集合し、「請雨経」を読誦して一通り踊り、それから蘇羅比丘神社まで道行きをする。」

（友久武文『広島県百科事典』）

寸志

【寸志】（『広辞苑』）

①いささかの志。②心ばかりの贈物。③自分の志の謙譲語。寸意。寸情。寸心。

前回紹介した神主さんの覚書で、「又々寸志一七日社籠候」とありましたが、この「寸志」は「私のサービスです。お代は頂きません」の意味です。このように「寸志」は人から強制される筋合のものではないはずですが……。

「生涯苗字御免 割庄屋脇万左衛門忬割庄屋同格八十八 右は父万左衛門此度御国恩為寸志致上銀志宜、奇特之至ニ付」（天保十一年（一八四〇）「鶴亭日記」）

父の割庄屋万左衛門がこのたび御国恩に対し寸志として藩に上銀をした。心懸がよいので、忬割庄屋同格八十八に「生涯苗字」を許す。

上銀する側が、「御国恩為寸志」（御国恩に対し寸志として）と謙譲語を使うのはともかく、受取る側が「寸志」といえばおかしい方になります。が、「寸志銀」なる言葉を藩も使っています。

「御入興ニ付ては大造之御入用ニ付、不被得止此度

御城下・町新開・郡中・宮島・尾道・三次町共一統御用銀被仰付、……銘々身上之厚薄ニ寄相応之割合を以出銀も被仰付度候得共、難渋之時節、別て御不便ニ思召、先ツ其儀ニは不被仰付候間、銘々存寄次第出精差出候様可被申付候、尤寸志銀差出度ものハ是又勝手次第差出可申候」(文政十三年(一八三〇)『広島県史』)

(徳川家斉二十四女末姫の嗣子浅野勝吉(後安芸守斉肅)への)御輿入れは大変な費用がかかり、やむをえずこの度御城下・町新開・郡中・宮島・尾道・三次町共一統に御用銀を差出すよう命じた。……身上の厚薄に相応した割合で出銀したこともあったが、今は難渋の時節なので不憚に思われ、銘々の気持次第で差し出すように、となった。もつとも寸志銀を差し出したい者は勝手次第に差し出さない。

この文書を見ると、「寸志銀」以外に「御用銀」なるものもあります。

「藩府が領内の豪商・豪農から直接諸債を募ることも行われた。御用銀とよばれて、もともと「京銀のごとく利足」を付けて返済することをたてま

えとするもので、藩府は勘定所の証文を出し正式に債務として扱ったものである。藩財政の逼迫した元禄以降になると、御用銀を村高割りに強制することも行われているが、しかも元銀はほとんどすえおきとなり、ともすれば利払いも滞りがちで、……また寸志銀と称する献銀も盛んに行われて、年頭御目見や扶持人の待遇を与えられるものが町人・百姓の中にも続々現われてきた。」(『新修広島市史』)

この説明では、「御用銀」と「寸志銀」の違いが判然としません。豪農・豪商の差出す金額の多いものが「御用銀」、裕福な百姓・町人の小額の上銀が「寸志銀」と読むことができます。大金を差出して「寸志」といえば、何か変ですが、小額なら「寸志銀」が当てはまります。『広島藩における近世用語の概説』によると、その区別は銀百匁としています。

「御用銀」は〈藩の借金〉なので、本来は利足を付け、元本も返済する建前であった、とのことですが、「寸志銀」はどうなっているのか、「献銀」とは、普通は「差上げる」意味で使いますが、よく分りま

せん。

「御入興に付郡中より指上候御用銀・寸志銀、出月より月五朱御利足御下ケ被下候条」（天保六年（一八三五）「鶴亭日記」）

御入興に際して差上げた御用銀・寸志銀は、出月より月五朱の利足を付けるので、

また、相田村庄屋引継ぎの諸帖面の内に、「同（御用寸志銀）利足御下ケ人別割附帖」（『相田地区辺の郷土史メモ』）があることから、「寸志銀」も「御用銀」と同様に藩の借金で、利足を付けたのだと思います。

「米三拾石 賀茂郡広村大新開庄屋五助

右此度御普請御用ニ付御用銀等被仰付候処、奉願永代上限ニ銀子差上奇特之儀ニ付、右之通毎歳被下之」（天保三年（一八三二）「鶴亭日記」）

御普請御用の際、御用銀を差出すよう命じたところ、永代上限に銀子（銀百貫目）を差上げますと願い出たので、毎年米三十石を給する。

「永代上限ニ銀子差上」という文言があります。

【切り・限】（『広辞苑』）

（副助詞。ギリともそれが最後で、後に続くはずの行為・作用が生じないこと。また、他に認められない意を表す。だけ。かぎり。

すると、「上限」は「じようげん」ではなく「あげきり」、つまり、「銀子を藩に差上げる」（後になつて返してくれとは言わない）ことです。「元銀はほとんどすえおきとなり、ともすれば利払いも滞りがち」なら、「永代上限」の方がスツキリするからでしょうか。

心拍子

「郡用所へ相談として、七月廿九日仲作・京藏・清太郎三人出勤、山中村より八十右衛門出勤之筈ニ候処、心拍子ニて行違ニ相成候ニ付、右三人より有懸り相伺ひ候所、入相踊差止メ、村方限り踊奉納仕候様差図有之、其趣村々へ通し合、思ひくゝの雨喜び、丁子の揃ぬ踊なり臈」（明治四年（一八七二）『三原市史』）

郡用所へ(喜雨踊共同開催)相談のため、七月廿九日、仲作・京藏・清太郎の三人が出席、山中村よりは十右衛門が出席の予定が、心拍子のため行違いになったので、右三人より実情を聞き、共同開催は中止、村ごとに踊を奉納するよう指示があつたので、その事を村々へ連絡した。思いついた雨喜び、調子の揃わぬ踊であることよ。

照り続きのため、四ヶ村共同の雨乞い躍りを奉納して、「霊雨」があつたので、「御礼躍(喜ひ踊)」をすることになりました。ところが、山中村の持込む幟について他村からクレームがつき、各村代表が集って協議をする場に、山中村代表が「心拍子ニて行違ニ相成」欠席したので、共同開催は止めた……、という話のようです。

雨乞いに関する「霊雨」「喜ひ踊」という言葉も面白いのですが、「心拍子」なる言葉も(不思議な)言葉です。

【心拍子】(『日本国語大辞典』)

- ①歌いながら頭の中で拍子をとること。また、その拍子。②心をはずませること。心のはずみ。③謡曲で、謡いの途中で、次の語を印象づける

ために少し間を置くこと。声枕。こわまぐら

どの意味も、「心拍子ニて行違ニ相成」の解釈には役にたちません。文意から考えると、「勘違いで行違いになった」としたいところです。

「右は同人心拍子ニて宇市・定介と申上候は全く相違ニ御座候、此両人之分は渠等申出之通、少しも間違無御座候」(慶応二年(一八六六)『庄原市史』)

右の説明は同人(正右衛門)の心拍子で、宇市・定介と申し上げたのは全く違っていました。この二人の分は彼らの言う通りです。

文書の一部分だけを引用していますので、解りにくい現代語訳ですが、「心拍子」に「勘違い」を入れると意味が通るように思います。

「此御難間ニテ心付候。ナルホド拙心拍子ニテ、山崎ヲ今少近キコ、ロニ存候」(『頼山陽書翰集』)

この御難間で気付きました。なるほど、私の心拍子で、山崎をもう少し近い様に思っていました。

「②心のはずみ」が程度を過ぎると、「心が躍る↓勘違い」にまで意味が広がるのかも知れません。

索引

【あ】

あいかんし 合鑑紙 152
あいたい 相對 38
あいふるべく 可相触 12
あいふれらるべく 可被相触 12
あおげ 青毛 87
あくすい 悪水 66
あげきり 上限 194
あちこち 西風東風 95
あちこち 彼方此方 95
あまおち 雨落 183
あまごい 雨乞 191
ありがたがる 難有狩 3
ありつく 有付 181
あんだ あんだ 36

【い】

いきだかめん 生高免 88
いしうち 石打 139
いしなりがんしょ 医師成願書 10
いたば 板場 170
いちぶん 一分 139
いちり 一里 21
いで 井手 65
いなぼし 稲星 119
いられこ いられ子 34
いりまい? 入米 26, 150
いんじ 印地 139

【う】

うけまい 請米 84
うだり うだり 82
うっとう 鬱陶 72
うまぐつ 馬踏 32
うら 裏 15
うらிரい 裏入 16
うらしゃくや 裏借屋 161

【え】

えいかんもん 永貫文 185

【お】

おいとま 御暇 146
おおたば 大束 154
おしならし 押押 76
おしむけ 御仕向 179
おちばかきとり 落葉搔取 81
おとりこし 御取越 135
おのこしまい 御残し米 177
おふれどおり 御触通 151
おもて 表 15
おもてしゃくや 表借屋 161
おやしきさま 御屋敷様 40
おんおくり 恩送り 107
おんひやくしょう 御百姓 113

【か】

かいぶね 買船 93
かう 買う 15
かえしがけ 返掛け 126
かかわらず 不抱 91
かけおくり 掛送り 126
かけづくり 懸け造 100
かけつけ 翔付 158
かさみ 重ミ 61
かしつけ 借付 55
かせぐ 掬 7
かだい? 家代 54
かたぎうり かたき売 68
かちわたり 徒渡 78
かって 勝手 121
かなばんます 鉄判杓 21
かねこうばい 曲尺勾配 168
かねて 預而 123
かふすべ 蚊ふすめ 28
かわもち かわもち 64
かわよけ 川除 106, 168
かんべん 勘弁 51
かんまい 欠米 150

【き】

きじょう 帰城 148
きゅうじつ 休日 133
きゅうはく 休泊 149
ぎょいをえる 得御意 17
きょうます 京桵 26
ぎんぶ 銀歩 142

【く】

くごし くごし・くぐし 29
くさいね 草稻 172
くさむぎ 草麦 171
くちすぎ 口過 99
くにゅう 口入 153
ぐまい 愚昧 101
くりわた 繰綿 46

【け】

げそく 下足 114

【こ】

こいだか 小以高 84
こうえんしょ 口演書 42
こうばい 勾配 168
ごうまい 合米 150
こうり 高利 110
こうりょう 広陵 118
こえまつ 肥松 190
ごごうずり 五合摺 29
こころびょうし 心拍子 195
ごじゅうちょうり 五十町里 8
こしょうがつ 小正月 164
こじり 小尻 24
こづら 小面 112
ことがまし 事ヶ間し 80
ごへいだ 五平太 45
こみまい 込米 26, 150
こめだて 米立 33
ごようぎん 御用銀 4, 193

【さ】

さおどめ 竿留 58
さおゆるめ 竿甘 58
さきのり 先乗 149
さきぶれ 先触 149
さし 刺 21
さしがみ 差紙 156
さしこころえ 差心得 32
さしつぎ 差次 155
さしひきしめ 差引^メ 185
さでる さでる 82
さべつ 指別 157
ざまく ざまく 100
さんとびょう 三斗俵 25
さんぶ 参府 148

【し】

しあて 仕当 163
しけあじ? 時化味 5
したい 慕ひ 90
したじ 下地 23
しなす 為成す 50
じならし 地押 76
じゅうにんこう 拾人講 126
しゆくつぎ 宿継 35
じゅくと 熟与 19
しゅご 守護 62
しゅつぷ 出府 166
じょうげぎん 上下銀 55
しょうまい 正米 29
しょうまい 春米 30

【す】

すえひめ 末姫 141
すえふろ 居風呂 132
ずえる ずえる 76
すおろし 巢下ろし 152
すきと 透と 175
すぎなり 杉形 27
すみいわい 墨祝 164
すんし 寸志 192

すんしぎん 寸志銀 193

【せ】

せきふだ 関札 158
せんかし 仙固紙 157
せんし 船滓 43

【そ】

そうらわん 候半 3
そつと 卒与 182
そばえ 戯 192
そわい そわい 89

【た】

だいとうまい 太唐米 34
たいふ 滞府 148
たそく 多足 124
たたむ 畳む 178
たちやど 立宿 14
たながわ 棚川 66
たのもしこう 頼母子講 125
たべる 給 6
たもん 多門 46
たるすな たる砂 86

【ち】

ちょうぎ 町儀 159
ちょうば 丁場 116
ちょつと 鳥渡 5

【つ】

つぐる 次ル 74
つけび 差火 42
つつぼしょうがつ つつぼ正月 63
つどう 湊 59
つとめくずし 勤崩 74
つなぎべいぎん 續米銀 4
つなぐ 續 4
つるかけます 弦掛枴 21
つるばん 弦判 21

【て】

てあまりち 手余地 88
でうき 出浮 166
ておき 手置 69
でがわり 出替り 130
ですて 出捨 74
てびん 手便 179

【と】

とうじ 当時 13
とかき 斗搔 21
とびわたり 飛渡 78
とみもと 富元 152
とりかざり 鳥飴 53
とりこしまい 取越米 136
とろへい 戸呂平 127

【な】

ないわし 菜鯛 92
なかつりょう 中津領の俵約令 120
なかやど 中宿 15
ながれあい 流合 96
なずみ 泥ミ 129
なみあい 並合 189
なるべくだけ 可成丈 11
なるべくほど 可成程 11
なんたんぼ 何反帆 20
なんとなく 何と無く 169

【に】

にぎつじんじゃ 饒津神社 143
にきばらい 二季払 134

【ぬ】

ぬけぶね 抜船 47

【ね】

ねおき 根置 31
ねだれがましい 族ヶ間敷 48

【の】

のべます 延舛

【は】

は 端 104
はうるい 葉潤 192
はえ はえ 89
はしただわら 端俵 24
はちのべ 八延 109
はば 陌 65
ばふみ 馬踏 31
はるしのぎ 春凌 77
はるぶしん 春普請 71
はんばく 半麦 63
はんめ 半メ 7

【ひ】

ひきお 引尾 67
ひとやど 人宿 167
ひら 平 173
ひろいもの 拾物 97

【ふ】

ぶあい 歩合 142
ふいちよう 吹聴 187
ふかって 不勝手 122
ふと 不図 96
ふと 風与 96
ふりうり 振売り 68

【ほ】

ほとほと 殆ト 172
ほねしょうがつ 骨正月 63
ほんけ 本家 160

【ま】

まくらぎん 枕銀 125
ますかけ 枡掛 21
ますかけ 舛欠
ますまわし 升廻 25

【み】

みずいわい 水祝 167
みずこし? 水越 116

みちはば 道幅 86
みやじまのとみくじ 宮島の富 152

【む】

むぎしょうがつ 麦正月 63
むぎわらたき 麦藁焼 28
むすう 無数 14
むらつぎ 村継 35
むらはちぶ 村八分 102

【め】

めふだ 欠札 142

【も】

もうしあう 申値 18
もうしなり? 申形 52
もくろみ 目論見 168
もとにん 元人 125
もやし もやし 57
もらいなえ 貰い苗 87

【や】

やあいじゃくや 相借家 54
やきごめ 焼米 37
やさら 児游貝 97

【ゆ】

ゆるみ 甘ミ 58

【よ】

ようれきかんざん 陽暦換算 22
よこま 横間 16
よせむら 寄せ村 165

【り】

りばしり 利走り 161

【わ】

わたがふく 綿が吹く 87
わらう 咲 137

言葉を“面白狩る”

——広島古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

2007年1月2日 発行

高橋 新一 編集

tak10172@gmail.com

続 言葉を“面白狩る”

——広島の古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

高 橋 新 一 編

はじめに

広島近世古文書の中から、面白い言回しや、辞書にみづからにくい言葉を探し出し、調べてみます。

近世文書をみると、解らない言葉が次々出てきます。すぐに辞書で調べます。電子辞書でたいてい用が足りませんが、載せてないときは重い辞書を引張り出してページを繰ります。それでも見つからない言葉があると、色々のやり方で調べるので、手間が掛かります。

以前は、「辞書は何でも載せている」と思っていました。ところが、古文書を読むようになると、捜し物が見つからないことを度々経験するようになりました。考えてみると、これは当然のことで、限られた頁数の辞書に全ての言葉を収録できる訳がない。いや、その前に、大きな言葉の海を相手に全ての言葉が調べ尽されている筈がない……。

また、見つけ出しても、不適切な解説の場合も見られます。辞書の編集者として間違ふことがあっても不思議ではありません。

辞書に載せてない言葉でも、辞書を頼りにして、古文書をあさり、比較すると、意味が明らかにすることがあります。

古文書は、いわゆる歴史用語だけでなく、〈何でもない言葉〉でも、解らないと正確に理解できません。ここに取上げた言葉は、編者が〈面白い〉と思ったものです。題して、「言葉を〈面白狩る〉」。

これは二〇〇六年十二月から〇七年八月までに、同名のブログに載せたものを再編集したもので、第二集です。

二〇〇七年八月

高橋 新一

参考辞書

岩波書店『広辞苑』第四版 電子ブック版

小学館『日本国語大辞典』

学習研究社『漢字源』電子ブック版

岩波書店『岩波日本史辞典』CDROM版

*二〇〇七年九月、一部を訂正しました。

目次

手おもく	5	取嚙人	24	歩銀	40	蠟打	56
被下之	6	御前米	25	取締・取締	41	帰省	58
遠行	8	小越船	26	命つり・死に残り	43	御領分追放	59
百姓代	9	内密申上試	27	宿水	44	掛持家	60
不得寸暇	11	平田船	28	覧	46	御払米	61
夜拔	12	捨り・町才覚	29	かくい	47	運賃米	63
銭取遣	12	差紙立	31	懸引	49	かけ紙	65
建り	14	仕合	33	あせり	50	草手	67
町家借屋	16	せんたく	34	御垢付	52	好ミ	69
麦こなし	17	兎口	35	預り申金子	53	宜男	71
浪人・改	19	人気相屈し	36	御戻米・知行取と切米		寺判	73
猿猴	20	不大形	38	取	54	中田・晩田	74
熟与 その2	21	安駄	40	早追	56	自由	75

くきぬき	家小	朝八字	無屹度	殆飽果候	差立	差寄せ	不実場	役印借	欠ケ流	当分庄屋	鬺取札	諸色	御けんもし	文字詞
93	92	90	89	88	87	86	85	83	82	81	79	79	78	77

御甘米と御戻米	馬代	手把	船頭	同日	郡中底引	数望寄	頓二・頓而	間切帆	手馬	吊	有残	秋分	乗打	下宿
108	107	105	104	103	102	101	101	100	99	98	97	96	95	94

竺	利留メ	くハたく	他見向	根足	半下	所払	六里踏	左義長巻建	医師の駕籠	切畠	警師政都	月代剃	国漉栗	時合
124	123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	112	111	110	109

幾々	料理ケ間敷	積気	候者	入切手	江	千一	乃不与焉	山の口明	当前	腰付	田町	火札張札捨文	袖乞・袋乞	一倍
141	140	139	138	137	135	134	134	132	132	131	129	128	127	126

野合	上向	唐樋・南蛮樋	茶を煮	かんかんのう	酒湯	道打・平打	御一字御拝領	取なやミ	切賃	出帰	如何敷	俵拵	俵拵	見せ消ち
154	153		151		150			147	146	145	144	143	141	142
		152		151		149	148							

とゝヲ・かゝア	ふさい不申	点	印免	籠者	威し	所付	初老	不時飽	北極出地三十四度	実を難操	激ミ・いつ也とも	所作	見へ透	引当
	166	165	164	163	163	162	161	160		158		157	156	155
167									159		157			

事々敷	見附	升突	降りみ降らずみ	芸る	雪汁	一途のすぎはひ	せり立	態飛脚	かんたち	ひろさ	田法	百姓共作り取	山田・迫田	相訳り不申
184	182	181		179	178		176	175	174	173	171		169	168
			180			177						170		

腹やすく	秘骨	浮地	合力	聞遁	晚景	申掠	随而	逸々	筆順	御取替米	浮置	天窓
	199	197	195	194	194	193	192	191	189		186	185
199										188		

手おもく

「紀藩にて御蔵板ニ御彫刻之貞觀政要……被贈下、遠方御脚費、旁御芳意、今にはじめぬ事ながら大慶至極、御礼謝し尽しがたく奉存候、……然ル処、八ノ巻・九ノ巻両巻共十五丁メ落丁御座候、いかゞいたし候哉、……乍併、のどづゝミ致し有之候本故、右落丁さしこみニも甚手おもく可有之哉、願くハ御地之書林杯ニ参り居候本の内、八・九ノ両巻はかり御引かえ被下候ハゞ、此方ニ有之候八・九ノ両巻返上可仕候、尤、道中往來の脚ちんハ江戸扨にて被遣可被下候」(文政十三年(一八三〇)三月二日、殿村篠斎宛、『馬琴書翰選』)

紀州藩で御蔵板(出版した書物の板木を持っていること)の『貞觀政要』を遠方から御脚費(送料)をかけて贈っていただき、いつものことながら有難いこととございます。ところがどうした訳か、八巻、九巻とも十五丁目が落丁しています。：

…のど包した本なので、落丁分を差込むのも大変「手おもい」のではないかと思います。できればそちらの本屋にある八、九巻だけを御引換えただければ、こちらの八、九巻をお返しします。道中往來の脚賃(送料)は江戸扨にしてください。

【殿村安守】(思文閣 美術人名辞典)

江戸後期の国学者・歌人。伊勢松坂の人。姓は大神、通称助吉・佐吾兵、名は周表、号に篠斎・篠舎・三枝園・蝙蝠磨等。本居宣長の門に学び、宣長歿後は後嗣の春庭の後見となる。滝沢馬琴と親交し、『八犬伝』の評判記『大搔戯筆』などの著がある。弘化四年(一八四七)歿、六九才。

滝沢馬琴は、松阪の豪商で紀州和歌山へ退隠した友人、殿村安守から送られた『貞觀政要』に落丁があるので、色々と思案をして、和綴の本に落丁分を差込むのは「甚手おもく可有之」と書いています。

【手重い】(『広辞苑』)

たやすくない。おっくうである。

「手輕」は使いますが、その反対、「手重」という言葉があるとは知りませんでした。「のどづゝミ」とは、「のど」（本の綴じ目部分の天地（角）が紙で包んであるのを言うのでしょうか。落丁を差込むには綴じ糸を切ることになる？）ので、面倒なことです。

本は紀州から江戸まで送られています。今なら「書籍小包」で安く送ることができますが、当時は「御脚費」もバカにならない額でしょう。そこで馬琴は遠慮して、「脚ちゃんハ江戸払」と申し出ていますが、「送料着払」の仕組まであるとは、たいしたものです。

被下之

「今夜、対馬守殿より大蔵宿へ以使者龍紋二巻被下之、早速為御礼年寄善右衛門所迄罷出候処、鈴木市之進出会、段々丁寧成挨拶ニて引取」（延享五年（一七四八）『広島藩・朝鮮通信使来聘記』）

延享五年（一七四八）四月十日、朝鮮通信使は芸州

蒲刈に着船しました。一行を警護・随行している対馬藩主の宗対馬守から広島藩接待責任者、御年寄岡本大蔵の宿舎に龍紋（絹織物の贈物）があり、早速御礼として対馬守の宿舎（蒲刈の年寄善右衛門所まで出向いたところ、対馬藩中老鈴木市之進と出会ひ、丁寧な挨拶をして帰った、という内容です。

「龍紋二巻被下之」を「龍紋二巻、之を下ださる」と読むのか、それとも、「之」を無視して簡単に「…を下さる」でいいのか、迷うところです。

「助字はしばしば、意味の充足よりも、句のリズムの充足のためにおかれること、のちに説くごとくであるが、この「之」の字の場合は、もつともそうであって、必ずしも一定の明確な意味は、ほんらいもない。しかし日本語としては読みわけないと不便なので読みわけるのである。なお訓読も今日の形になるまでに、実はいろいろ変遷を経て来ているのであって、中古以来の朝廷づきの儒者、清原氏の訓読では、学而時習之の之のごとく、句末にある「之」は、句末のおき字として読まなか

った。学んで時に習う、とのみ読み、之れを習うという読み方を、拒絶する。専らリズムを充足するおき字であると、句末の「之」を見たのであって、一理ある読み方である。また「日本書紀」の訓も、この清原氏の読み方なのであって、すべて句末の「之」を読まない。」（吉川幸次郎『漢文の話』）

「日本書紀」に例をみると、たしかに「之」は読んでいません。

「即越那羅山、望葛城歌之曰」（『日本書紀』）
即ち那羅山を越え、葛城を望みて歌して曰はく、
句末の「之」を読まないときもあつたが、現在では「日本語としては読みわけないと不便なので読みわけるとなれば、「被下之」を「之を下ださる」と読んでいたのかと思います。もつとも、何が不便なのかよく解りませんが……。

「豊前国宇佐宮え奉幣使被遣之、陸地通行之事候間」（『御触書天明集成』）

……奉幣使、之を遣わされ

「奇特至二付、為御褒美被下之」

……御褒美として、之を下され

「為祝儀、肴一種宛被贈之、令欣悦候」（貞享元年（一六八四）『小場家文書』）

祝儀として肴一種宛、之を贈られ、……

「在陣中山野ニおみて発炮之義、遠慮被有之可然事」（元治元年（一八六四）世羅郡「郡用帳」）

在陣中に山野で発炮することは、当然遠慮すべきである。

意味はその通りですが、「被有之可然事」をどう読みますか。「遠慮、之れ有られしかるべき事」ですか？

「其段申達候御承知可被有之」（「鶴亭日記」）

以上、知らせたのでご承知ください。

「……御承知、之れ有らるべく」とでも読みますか。「之」を読まなかったら解りやすいのに……と、まだ迷っています。

遠行

「旧冬は、御実母様御病氣にて御養生不被成御叶御遠行之由、右ニ付初春ハ御状も不被下候趣委曲承知、御追悼奉察候、乍去稀老御佳齡のよし、せめてもの御事ニ奉存候、貴君御半百遠からずと奉存候処、是迄北堂御在世は羨しく奉存候」（文政十一年（一八二八）三月二十日、殿村篠齋宛、『馬琴書翰選』）

去年の冬、御実母様は御病氣養生の甲斐なく「御遠行」とのこと、年賀状も下されなかつた事情がよく分りました。御追悼のほどお察しいたします。しかし稀れな御佳齡と聞き、せめてもの御事と存じます。あなたも「御半百」に近いのに、これまで御母堂が御在世であつたとは羨ましく思います。

滝沢馬琴の友人、殿村篠齋への手紙です。文中の「遠行」は、辞書を引くまでもなく「死亡」と解り

ます。

【遠行】 えんこう。（『広辞苑』）

① 遠くへ行くこと。② 死ぬこと。遠逝。

永六輔作詞の、「知らない街を歩いてみたい どこか遠くへ行きたい……」という歌がありますが、これを歌う人も、まさか②の意味があるとは思ってないでしょう。それにしても、「死」を「遠行」というのは深い意味があるような気がします。なお、『近世上方語辞典』は「えんぎよう」と読んでいます。

「北堂御高齢八十五にてめてたく終らせ給ひよし、此上の御事と奉存候」（文政十年（一八二七）滝沢馬琴書翰、殿村安守宛『馬琴書翰選』）

お母様が八十五歳の御高齢で「めてたく終らせ給ひよし」、この上の御事と存じます。

現在は女性の平均寿命八六歳、江戸時代後期では無事に大人になった人の寿命は、男は六一歳、女は六〇歳程度だそうですから、八五歳の死亡は「稀老御佳齡」で「めでたい」ことですが、手紙にそのよ

うに書けるのは、事情のよくわかった親しい関係にある人でないととてもできないこと。受取った篠斎も友人の優しい気持を喜んだことでしょう。

【北堂】（『広辞苑』）

①「儀礼士昏礼」中国で、家の北方にある堂。主婦のいる所。②「詩経衛風、伯兮、毛伝」母の称。③「類書纂要」他人の母の尊敬語。母堂。

「御半百」の意味も見当が付きません。殿村篠斎の没年は弘化四年（一八四七）、六九歳ですから、この手紙の当時文政十一年（一八二八）は五〇歳、「半百」です。

「春三月三日例歳弁天社祭礼ナリ、蒲刈島惣鎮守ナリ、……此両三日前ニ遠行ノ漁者トモ帰り合ヒ祭事ヲ相ク、甚タ賑コトトモナリ、遠行ノ漁者ト云ハ、予州・長州辺ニ行常ニ漁釣ヲスルヲ云ナリ、……皆正月三月七月九月十一月ニハ帰岸スルナリ」（『下蒲刈町史』）

春の三月三日は毎年蒲刈島惣鎮守の弁天社の祭りである。この二三日前に「遠行」の漁師ども

が島に帰り祭を助ける。はなはだ賑やかなことである。遠行の漁師とは、予州・長州辺に行き何時も漁釣をする者をいう。正月、三月、七月、九月、十一月には帰ってくる。

この例文の「遠出」は、文字通りの漁師の話です。

百姓代

「百姓代」といえば、いうまでもなく、

【百姓代】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代の村役人の一つ。名主（庄屋）・組頭（年寄）による村政を監査することを職務とした。

一七世紀中頃から散見され、一八世紀前半を画期として各地に出現する。当初は村役人経験者が務めたが、次第に小前層の代表者が就任するようになつた。多くの場合村内事情を成立の契機とするが、時には領主からの指示による設置もあつた。

ところが、辞書の説明に当てはまらない用例もあります。

「御裁許之趣ハ御利止・切金ニ被仰付候、是ハ御当国ニテハ無利年賦払也、年割之銀数払方は世羅郡百姓より公儀御役所へ差出し候得は、其日直ニ銀主上下人へ御下ヶ被遣候御作法也、御定日有之、嚴重なる事也、毎年御定日ニハ、上下并世羅郡より江戸へ参り候て、及迷惑候付、江戸ニテ世羅郡百姓代を拵へ、其者より切金差上、猶又上下受取方にも、上下ものを江戸ニテ拵置、其者より受取遣候処、……右請取方之上下人代江戸者故、右切金江戸者押領、真ノ上下人へ不相渡候へ共、元來公儀を掠候事故、上下人より出訴も得不仕、依之、右切金之半方を今一度ニ受取、内済仕度由、上下銀主より内談ニおよひ、其通り相成」(「理勢志」) 広島藩領の世羅郡百姓が、天領上下(現、府中市上下町)の町人から借金(上下銀)をし、その返済でトラブルになり、結局江戸での、

判決は「御利止・切金」、広島でいう「無利・年賦払」となった。年賦の払い方は、世羅郡百姓が公儀御役所へ差出し、役所はすぐに銀主で

ある上下町人へ下げ渡す。これには御定日があり、毎年その定日に上下および世羅郡から江戸へ行くのも迷惑なので、江戸に世羅郡の「百姓代」を拵え置き、その者から切金を役所へ差出し、上下町の受取方も、上下町の代理人を江戸に置き、その者が受け取ることにしたところ、……請取方の上下代理人(江戸者)がこの金を押領し、受取るべき上下町人へは渡らなかつた。元來代理人を置くことは公儀には内緒なので、上下銀主も訴えることもできず、結局、貸金の半分を一時に受け取り、それで済ますよう、上下銀主から話があり、その通りになった。

借金の年賦払を、江戸の役所を経由して行うことにしたため、債権者(上下の銀主)も債務者(世羅郡の農民)も、江戸者を代理人にして事に当つたので、債権者代理人が切金を横領して困る事態となりました。上下銀主は借金を半額にまける代りに、一時払とするよう提案、ようやく解決したという、何ともおかしい事件です。

この文書に「世羅郡百姓代」という言葉がありませんが、勿論、村方三役の「百姓代」ではなく「百姓

の代理、代表」を意味します。これが「百姓代」の本来の意味でしょうから、辞書の最初に載せるべきです。村方三役としての「百姓代」は、百姓の代表だからこそ「村政の監査」を職務としている訳ですから、二番手、三番手の意味です。

不得寸暇

【寸暇】（『広辞苑』）

わずかのひま。「―を惜しんで働く」

『広辞苑』に取上げている例文、「寸暇を惜しんで働く」を誤用して、「寸暇を惜まず働く」という〈面白い〉使い方も見ます。古文書で時に見かけるのは「不得寸暇」（寸暇を得ず）という言いまわしです。

「此せつ俄にうろたへ、昼夜画にのみ取かゝり、不得寸暇候、御察可被下候、それ故発句も無之候、最早年内は書通もいたしがたく候、来春寛々可申上候、頓首」（安永七年（一七七八）十二月二十一日付

来屯宛書簡、『蕪村書簡集』）

このところ俄かにうろたえ、昼夜となく画だけに取り掛り、寸暇を得ることができません。お察しください。だから発句もできません。最早年内はお手紙を差上げることも難しそうです。来春になれば、寛々と申上げるつもりです。頓首。

近世京都の文化人名録である『平安人物志』（明和五年版）によると、谷口蕪村は、名は寅、字は信章、号は老雲、姓は与謝、俗称は与謝蕪村。画家に分類されています。俳人より画家として知られていたのでしょうか。年を越すために画業に精を出したのでしょうか、「わずかな暇も得られない」と歎いています。

「内々御頼候詩も不得寸暇遅引仕候、去共数年以來之儀二候間、何と歟少之暇も有之候時分相調候て進可申旨被申越候」（宝永四年（一七〇七）稻生若水宛室鳩巢書状、『近世先賢書簡集』）

内々あなたに頼まれている詩も暇がなく延び延びになっていますが、数年来のご依頼でもあり、

何とか暇をみつけて作りたいと申ししてきました。

二例とも書翰です。確かに、手紙の中で「暇がなくて……」と言訳をするのには都合のいい文句です。「寸暇を惜しむ」という〈説教がましい〉言い方より、「寸暇を得ず」という〈言訳がましい〉言いの方が面白い。

夜拔

「近来貴家御田地小作人之内、御年貢不納ニおよひ、家内眷属召連夜拔ケ出奔いたし候者数多、剩其中ニ他国ニて居住之穴を構へ、先方ニて前廉ニ家普請抔いたし置候者有之哉之風聞も御座候ニ付ては、心裏全巧を以累年手元難渋之由申唱、御田地ニ出来立候有物を引込、私慾不埒支度入用ニ取遣ひ候道理相当り」（天保八年（一八三七）『府中市史』）

近頃、貴家の御田地を借りている小作人の内には、御年貢が納められず、家内一族を連れて「夜

拔ケ」出奔する者が多く、中には他国に居住の穴（隠れ家）を構え、先方に以前から家を建てている者もいるとの風聞もあります。心中密かに計画をし、長年生活が苦しいと言い触らして作物を貯め込み、私慾不埒の支度の費用に使ったに違いなく、

【夜脱け】（『広辞苑』）

夜に乗じてこっそり脱け出ること。夜逃げ。

「居住之穴を構」の「穴」とは、洞穴であり、隠れ家で、「ヤサ」（鞘の逆読み）とでも訳す言葉でしうか。

銭取遣

「取遣」を「取遣ひ」と読むか、「取遣り」にするかで意味が違います。

「二月廿日

一銭取遣百弍文ニ相成候由、用場より被仰付候事」（天明二年（一七八二）「堀川町覚書」）

二月廿日より錢「取遣」が百弍文になったと、役場から連絡がありました。

この記事を見ただけでは、「錢取遣」とは何か、何が「百弍文」になったのか解りません。そこで同類の記事を探しました。

〔四月朔日〕

一錢取遣ひ、壹匁ニ付七拾九文ニ相成候由申来候、早速町内相触候事」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

錢の取遣いが壹匁につき七拾九文になったとの知らせがありましたので、早速町内に触れなさい。

〔閏十二月二日〕

一札場錢相場、今日より壹匁ニ付、八拾三文ニ被仰付候事」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

札場での錢相場は、今日から壹匁につき八拾三文になりました。

広島藩は、明和元年(一七六四)、幕府の許可を得て再度銀札(明和札)を発行し、翌年七月以降は他国交易に要する以外の正金銀通用を禁止し、銀札と補

助貨幣としての錢貨のみの流通を強制しました。この時発行された銀札は、従来と同じく五匁・一匁・五分・三分・二分札の五種類で、銀札場は領内三ヶ所に設置されました。このような状況下の記事です。ここに藩札の発行や兩替を担当する「札場」が登場します。すると、「壹匁ニ付」とは、「銀貨壹匁ニ付」ではなく、「銀札〓壹匁札ニ付」と読み取る必要があります。結局、前述の記事の内容は、「今日から、銀札場における銀札と錢の兩替の交換比率(錢相場)は、銀札壹匁につき錢一〇二文とする」と理解することが出来ます。

ここでは「取遣ひ」と、「……ひ」が送ってあります。

【取】とり。(『日本国語大辞典』)

〔接頭〕動詞の上に付けて改まった語調にするのに用いる。

すると、「取遣ひ」は「遣ひ〓使い」と同義ですから、「錢取遣ひ、壹匁ニ付七拾九文」とは、「銀札壹匁は錢七拾九文遣い」、言換えると「銀札と錢の

交換比率」を意味するはずですが。

これに対して、「取遣り」は違う意味です。

「御領分村々旧冬より新札ニ被仰付、金銀錢取遣り
壺分迄は錢、貳分よりハ札遣ニ被仰渡候間、愈々
々迄手堅可被申付候」（元禄十五年（一七〇二）『庄
原市史』）

領内（三次藩）では、旧冬より新札（銀札）を使うこ
とになった。お金の「取遣り」は小額の壺分ま
では錢を、貳分以上の高額の「取遣り」は銀札
を使うよう命令されたので、末々まできちんと
指示しなさい。

【取り遣り】（『広辞苑』）

自分の方に取り、また、先方に与えること。贈
答。授受。やりとり。

売買は商品と貨幣の「取り遣り」ですから、「取
引」と言換えることができます。

建り

「於勝殿、当春御出府被成候ニ付、三月十二日此許
御発興、下道中木曾路御旅行被成候事、但、未御
弘メも無御座候事故、御道中向は御召仕之女中
御建りニて御旅行被成筈之事」（天明二年（一七八
二）『堀川町覚書』）

於勝殿がこの春江戸にお出でになります。三月
十二日に広島を御興で出発され、下り道中は木
曾路を御旅行なさいます。但し、まだ御披露目
もありませんので、御道中向では御召仕の女中
の「御建り」で旅行されます。

於勝殿とは広島藩主、浅野重晟の女勝子（勝姫、
後に唐津藩主水野式部少輔忠光室）です。お披露目もま
だ済んでないので、「御召仕之女中之御建り」で旅
をするとのことですよ。

【立】たてり。（『日本国語大辞典』）

「方言」事実と違っていても表向きはそうとし
ておくこと。たてまえ。「病気のたてりにして
欠席する」高知県

公式には、大名の女子ではなく、御殿女中

としての旅行として扱うということです。

「建り」は「建り合」とも言います。

「郡廻り中并宗旨御改奉行中廻村之砌、御貸小人賄方之儀、素り札賄ニて従来建り合も有之候処、方角ニ寄候ては何となく流合、家来同様之賄方取計候哉ニ相聞、依之以来御貸シ小人へは、賄方建り之通急度取計、居候所等も別座ニ指置可申様、組合村々へ早々可申聞者也」（是長村「御触留帳」）

郡廻りや宗旨御改奉行の一行が廻村するときに随行する御貸小人の賄いについては、札賄という従来からの「建り合」もあるのに、所によつてはいい加減になつて、家来と同様の賄をする¹⁾と聞いている。以後御貸小人への賄方は必ず建りの通りに取り計らい、食事の場所等も別座にするよう、組合の村々へ早々に連絡しなさい。

「御小人は小人とも云い、武家奉公人ではあるが、武士身分ではない。藩庁の給仕・使丁・飛脚・諸荷物の運搬等にあたり足軽より下位で、従つて名字はなく世襲の者もあつたが、おおむね一代限り

である。しかし、事情によつては「足軽代」にも遣い、増禄・足軽への取立てなどもあつた。また抱替・二代・三代など世襲の者も多く、なかには、「全く卒の扱に」同じ者もあつた。」（山田隆夫『矢賀郷土史』）

「御小人」に「貸……」が付くと、他の部署の御小人を臨時に借受けたものかと思ひます。

【御小人賄札】（金岡照『広島藩における近世用語の概説』）

御小人が藩用で郡中（主として郡役所）へ出張する際には、藩発行の賄札（紙製で認札ともいう）を持参した。この札を、御小人賄札という。この札にはエト印と御勘定所役印が押印してあり、賄料（諸入用米札は七合、宿賃米札は二合七勺、泊り分は九合七勺）が記されている。御小人が賄札を昼食や宿泊をしようとする村（村は指定されてゐた）へ差し出すと、その村は事前に配布されている御勘定所役印の押印と照合し、札と引換に、厘米の中から札に記入されている米の相当料で賄つた。但し、指定村以外の村で昼食等をしよ

うとする場合には、年寄のいる村が引き受けた。なお、村が受け取った賄札は、三、四月頃に組毎に割庄屋元へ集められ、郡役所へ提出された。また、村が負担した賄料は、郡割にして各村が負担した。

この例文での「建り」「建り合」は、「本音と建前」の「建前」ではなく、「原則」「決り」を意味するようです。

町家借屋

一 覚

堀川町

一 御勘定所御雇

鍋屋源兵衛借屋 与八

一 石原外記様御雇

肥後屋太郎兵衛借屋 弥七
天満屋助右衛門借屋 槌松

一 奥玄蕃様御雇

町家借屋 甚吉

一 植木求馬様御雇

同借屋 伝吉

右之通御雇二付、今日江戸へ参申候二付、書付差上申候、以上

寅三月九日

年寄久賀屋六右衛門

室屋喜右衛門殿（天明二年（一七八二）「堀川町覚書」）
広島藩の勘定所や藩の高官に雇われて江戸に行く五人の町人についての報告書です。全員借屋住居ですが、最初に出る三人は「誰々借屋」ですが、二人は「町屋借屋」に住んでいます。これだけきちんと区別して書いてあるのは、何かの違いがあると考えられます。

「町家借屋日雇

市右衛門

茶屋甚兵衛借屋同 甚吉」（「堀川町覚書」）

の記事を見ると、両者とも日雇ですから、借りる者による違いとは思えません。

【町家（町屋）】（『世界大百科』）

民家のうち、城下町などの町や町並みを形成している敷地に建てられたものを総称して町家（屋）と呼ぶ。

【相借家】あいじゃくや。（『広辞苑』）

一つ棟の長屋に、ともに借家をする事。また、その借家人同士。あいだな。あいがしや。

【家持】 いえもち。(吉田 伸之『世界大百科』)

日本近世の被支配諸身分のうち、百姓、町人、諸職人の者で、家屋敷を所持し、そこに居住する戸主のこと。家屋敷は、イエの基礎となる家屋と、その敷地とからなるが、家持はこの両方を同時に所持している。これに対して、自分は他所に住み、家屋敷を有する者を家主、敷地のみを有する者を地主という。また、家屋敷の全部または一部を借りて居住する者を借家・店借、敷地を借りて家屋は自分で有する者を地借とよぶ。……在方と町方とでは顕著な相違が存在している。在方では、農業経営の主要な舞台は、高請された田畑なのであって、経営主体であるイエが家屋敷と一体であること(家持であること)は自明の前提なのである。したがって、百姓の場合には、高の所持、不所持が、身分や階層を区分するうえでの最も重要な指標になる。一方、町方に居住する町人や諸職人などの諸身分にとつては、家屋敷の所持、不所持、すなわち家持であるか否かが最大の指標となる。

詳しい解説で助かりますが、家持と借屋の関係を説明していないのが残念です。

借屋をする者は、当然、家持から借ります。「相借屋」の場合は長屋ですから、複数の店子があります。この家持が天満屋助右衛門なら、複数の「天満屋助右衛門借屋」と呼ばれる店子がいるだろうと思います。

「天満屋助右衛門借屋 たはこ切喜四郎」

「天満屋助右衛門家代 藤吉」

「天満屋助右衛門借屋 槌松」

最初から貸家として作られる長屋に対して、自分の住居として使っていた家を、何かの都合で貸家にする場合もあるのではないか、単なる町家が貸家になると「町家借屋」といわれるのではないか……。転勤のため、泣く泣く自宅を人に貸す話からの連想で、単なる思い付きですが……。

麦いなし

「麦作取込之節候条、左之通可申聞事

一道筋橋上ニて麦こなし、又は無考風立候て往来之障、免忽之儀無之様可仕事」(天明二年(一七八二)四月「堀川町覚書」)

麦の収穫の時期になったので、次のように申し聞かせなさい。道筋や橋の上で「麦こなし」をしたり、又は考えもなく風を立て、通行の邪魔をするなどの失礼のないようにしなさい。

大藏永常の「農具便利論」は図入りで「麦こぎ」を説明しています。

「此麦こぎは稲こぎよりはるか後に畿内にて作り出せし物とみへて、いまだ諸国に用ひざる所あり。右



に図するごとく一間又一間半のものとありて、多人数立並びて稲こぐごとくして、しかふして筵に広げ干て唐竿にて打おとすこと也」(農具便利論)

「麦こなし」とは、「麦こぎ」の後、穂から実を取出す作業です。

「脱穀した麦は穀竿(唐竿―ブリ)でたたき実を殻からはじき穎をとった。これを麦こなしといった。

……ブリは五尺ぐらいの竿の先にこれより短い回転する檜の木のパッドまたは竹を四、五本束にしたもの、後にはこれらの代わりに鉄製の金具を取り付け、これをしゃくつて空中で回転させ麦の穂を打ち殻をはずすのである。」(山田隆夫『矢賀郷土史』) 炎天下のこの作業について、宮沢賢治は「イギリス海岸」で、

「これから私たちにはまだ麦こなしの仕事が残っています。天気が悪くてよく乾かないで困ります。麦こなしは芒がえらえらからだに入って大へんつらい仕事です。百姓の仕事の中ではいちばんいやだとみんなが云ひます。この辺ではこの仕事を夏

の病氣とさへ云ひます。」

と書いています。また、「風立候て往来之障、龜忽之儀無之様可仕事」とは、

「麦或は粉の庭仕廻の塵にまじりたるを分るには、箱いかきやうのものにいれ、風吹にさし上て少しづゝ

おとせば、粉は下におち、塵は風に吹れて風下へ落て粉と塵とわかる也」(「農具便利論」)

「風起筵」(図参照)の筵であおり、箱かぜおこし(ざる)から落ちる塵を吹飛ばしています。この作業が「往来之障」になるのでしょう。

浪人・改

「毎年二月・八月中ニ女奉公人之浪人改仕、追々無滞奉公仕候様ニ可申付候、若又奉公も不仕、渡世見えさる女有之候は、遂吟味町御奉行所へ可申出候、且又所々より奉公人尋来候は改置候者共教遣シ、有付有之候様可仕候事

右之趣は唯今迄女奉公人之儀請人無之ニ付、我假仕奉公之場をたかへ、或は心底不宜もの有之、不届之仕形之者も有之由相聞へ候、依之今度男奉公人之請人作法之通可仕旨被仰出候間」(享保四年(一七一九)「堀川町寛書」)

毎年二月・八月中に女奉公人の「浪人」を調べ、ブラブラしないで次々と奉公するように申し付けなさい。もし奉公もせず、何で渡世しているのか分らないような女がいれば、詳しく調べ町御奉行所へ申し出なさい。また方々より奉公人が欲しいと尋ねて来たときは教えて、再就職できるようにしなさい。これは、今までは女奉公人は請人(保証人)を必要としなかったので、我俣をして奉公先を替えたり、心底の良くない者、不届の仕形の者もいると聞いている。そこで男奉公人の請人の作法同様にすると仰せられるので、

「女奉公人之浪人」という言葉が使われているのは驚きですが、

【浪人】(『広辞苑』)

①古代、本籍地を離れ他国を流浪する者。浮浪人。②（「牢籠（ろうろう）人」の約で、「牢人」とも書く）中世く近世、主家を去り封禄を失った武士。浪士。③職を失うこと。また、その者。ここでは、「女奉公人の失業者」の意味です。

雇用期限を終えて交替（出替）する時期は、七月と十二月が多かったそうですが（前記、「出替」参照）、再就職のできなかった者の調査は、一月遅れの八月・一月になるのでしょうか。

調査の担当は町役人で、就職の幹旋に近いこともやっていたことが解ります。

【改め】（『広辞苑』）

①あらためること。新しくかえること。②（多く他の語の下について）しらべること。吟味。検査。

【子午の人馬改め】

「藩独自の戸口調査とは別に、享保十一年（一七二六）以降は、幕府の指令によつて子午の人馬改めが行なわれた。すなわち、子の年と午の年と六年目ごとに領内国一円に統一的な人馬改

めとして実施されたものである。村ごとに各家の筆頭者の身分と職業別人数と男女別家族成員数の集計をして、前調査との増減を記している。加えて牛馬数については、かならず調査すべきものとされていたことが注目される。」（『広島県史』近世Ⅰ）

「改」という言葉は、「吟味」から更に拡がって、「調査」まで含むようです。

猿猴

「往昔三ツ岩之下タ千尋之淵ニて、是ニ猿猴住候由之処、利平太先祖いつの頃か乗馬ヲ野飼ニ河原へ緊置候処、猿猴馬を取んと馬之綱を手ニまき川へ引込んとせし処、刎上りければ頭之皿之水をこぼち、猿猴之術を失ひ、馬ハ其儘駄屋ニ飛帰ル、下女馬を飼ント行見れば、異形之もの駄屋ニ居ける、斯て主人へ此旨告ければ、憎きものかなと名作之差添を以て其儘切殺」（文政二年（一八一九）坪野村

「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳」

昔、三ツ岩の下、千尋の淵に猿猴えんこう（河童）が住んでいたという。利平太の先祖がいつの頃か馬を野飼にするため河原へ繋いでいたところ、猿猴が馬を取ろうと馬の綱を手に巻き、川へ引き込もうとする。馬が跳ね上がったので頭の皿の水がこぼれ、猿猴の術を失ない、馬はそのまま駄屋に飛び帰る。下女が馬に餌をやろうと行つて見れが異形のものが駄屋にいる。そこで主人に告げると、「憎きものかな」と名刀でそのまま切り殺した。

「昔東泉寺古寺跡、百姓長兵衛家の庭に、平方地上へ出し亀に似たる石有、或時長兵衛方の馬を近所西の川原と云所に野飼せしに、猿猴出て馬の綱を手に巻馬に乗、馬驚て主家に飛帰ル、家人彼猿猴を捕て亀石に縛附置、殺すへき旨を申、家主憐て殺益なしとて、此石あらん限害をなさすハ命助へしと厳敷戒、猿猴合掌平伏せし故、綱を宥命を介く」（文政二年（一八一九）「仁方村国郡志御用書上帳」）
昔、東泉寺古寺跡の百姓長兵衛の家の庭に、半

分ほど地上へ出た亀に似た石があつた。ある時、長兵衛方の馬を近所の西の川原という所で野飼をしていると、猿猴が出て馬の綱を手に巻き馬に乗った。馬は驚いて家に飛び帰る。家人はこの猿猴を捕えて亀石に縛りつけ「殺そう」という。家主は憐れんで「殺しても益なし」とて、「この石ある限り害をしなかつたら命は助ける」と厳しく戒めると、猿猴は合掌平伏、綱をゆるめて命を助けた。

河童が馬を水中に引きこもうとする……、河童が活躍していたころの、昔の話です。

【猿猴】 えんこう。（『広辞苑』）

サル類の総称。

【駄屋】 だや。（『広辞苑』）

（中国地方で）厩舎（うまや）。

熟与 その2

「御家中知行所給役之者共不統之義有之、去ル丑年

より人撰御役所へ申来候上被申付候事ニ御触有之
締り合も宜候処、近頃郡中之者共給役内望よりし
てハ手筋ヲ求メ手ヲ入候歟、兎角給主より人名ヲ
差シ申来候分多分有之、并御役所より人撰駈合後
村方へ直ニ其者身元之様子等尋有之候処ニて、其
村之役人中より色々と給主へ被申出候歟、人撰い
たし候者を尚又撰替之義申来候分も有之、是等ハ
役人中ニおゐても受引振熟与無之、右等之義有之
よりしてハ自然如何様之義出来湧候義も難計」(安
政三年(一八五六)『広島県史』)

御家中知行所の給役の選定方法が区々なので、
去る丑年より人撰は郡御役所へ申し出の上で任
命せよとの御触があり、締り合もよくなつたが、
近頃は、郡中の者共が給役になりたがり、手筋
を求めて働きかけ、給主からも誰々を給役にし
てほしいとの申し入れが多くなつた。郡御役所
が人撰をして村方で直接身元調査をする、そ
の村の役人が給主へ色々と報告するためか、決
めた者を撰び替えて欲しいとの申入れがある。
これらは役人中でも応対振りが「熟与無之」、

このような事ではどんな問題が起るやも知れ
ず、

禄高百石以上の家臣は、郡部に知行所(給知)を与
えられていて(給主)、そこからの年貢をもとに生活
していました。知行所の農民の中から年貢徴収など
の世話をする役を給役(給庄屋)といいます。この資
料では、なぜ給役になりたがるのか説明はありません
が、その選定の様子は知ることができます。

文中に「熟与無之」の文言があります。以前検討
して結論を出せなかった「熟与」の中で、「熟与無
之」を中心に考えてみます。

「当町方ニて魚類不自由ヲ見込、御城下へ持出高直
ニ売捌候趣も相聞、彼是甚以熟与無之事ニ候得
は、」

当町方では魚類が不自由になると見込み、御城
下へ持ち出して高直で売り捌いていると聞い
ているが、いずれにせよ甚だ「熟与無之」ことな
るので、

「馬糞買入方之儀ニ付、兼て申達候趣を以厚く駆引

有之儀与ハ相見候得共、内々聞探候処、百姓共内ニハ一円承知不致者も有之趣ニ相聞、甚タ熟与無之、

馬糞買入のことについては、以前通達した趣旨の通り丁寧に指導している様ではあるが、内々に聞き探ると、百姓共の内には一切知らない者もあり、甚だ「熟与無之」ことである、

【熟】（『大漢和辞典』）

つらつら。つくづく。とくと。じつと。

【熟々・倩々】つらつら。（『広辞苑』）

つくづく。よくよく。念入りに。

【倩・熟】つらつら。（『国語大辞典』）

（「と」を伴って用いることもある。古くは「に」をとともなうこともあった）物ごとを念を入れてするさまを表す語。つくづく。よくよく。念入に。

三つの辞書ともに、読みはともあれ、意味は「念入に」が共通しています。「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、……」（白骨の御文章）の「つらつら」です。

三つの例文の「熟与無之」の意味を、「念入でなく」↓「いい加減な」↓「不適當な」までシフトすると当てはまるようです。

「何卒此度之御趣意合永久相届候様、下方熟与精々御教導可有之候」

なにとぞ、このたびの御趣意が永久に届くよう、下々へ「熟と」御教導ください。

この場合の「熟与」は「念入に」がそのまま当てはまります。

さて、読みですが、「熟与無之」を「つらつらとこれ無く」と読むには抵抗があります。

古文書でよく使われる言葉に、「得斗」「篤斗」があります。両方とも「とくと」と読みます。意味は「よくよく。念入に」で、「熟」と同じです。意味が同じで、「……与」と続くのなら、「得斗」「篤斗」の仲間に入れて、「熟与」＝「とくと」と読めるのではないかと思います。

取噺人

「上下之申形ニハ、元利若得不払時ハ質入引当之田畑、此方ニて売払、正銀を以元利無滞可払出との証文之表を立、其通ニ可被成と申候ニ付、此方より答ハ、可売払出ニも此方ニてハ買人無之、素り致借銀候程之村方故、村内又ハ郡中ニ貸人有之候ヘハ、其方ニて借受候、如斯之次第故、此方ニて売払不相成段答ヘ、双方理押及再答之往反難済ニ付、江戸表へ願出、御裁許を受可申事ニ相成、既ニ互ニ其用意之处、取噺人有之、借銀高四歩九厘払ニ漸片付相済」(「理勢志」)

銀主である天領上下町の者の言分は、「もし元利を払うことができないときは、抵当に差出した田畑を借銀した私共が売り払い、その正銀で元利を滞りなく払います」と証文に書いてあるので、その通りにすべきであるという。それに対して、借主である広島藩の農民は、「返えそ

うにもこちらには買手がなく、借銀するほどの貧乏な村なので、村内や郡中で貸してくれる人はない。あればなにも上下町の者から借受けることはない。貸す人がないから上下から借りたのだ。こちらでは買手がないので返済はできない(抵当の田畑は引渡すので、こちらに引越してでも耕作しなさい)」。双方とも理屈をこねて議論しても埒が明かない、江戸に願出て裁判をしてもらおうと準備をしていたが、「取噺人」が出てきて、借銀の49%を払うことでようやく決着がついた。

「取噺人」という、見かけない言葉があります。

「噺」は「扱」^{あつかい}と同じです。(『大漢和』は「いき(息)」と書いてあるだけです)。

【扱】 あつかい。(『広辞苑』)

(「噺」とも書く) 争いやけんかのなかだちをすること。調停。仲裁。また、それをする人。

【噺・扱】 (『世界大百科』)

「近世」取扱ともいい、仲介者を人、扱人と称した。江戸幕府は、私的紛争は当事者間で話し

合い、互譲、解決する内済ないさいを原則とし、原告被告の主張の当否を判断して裁許さいきょ、すなわち判決を下すのは、やむをえない場合に限られた。：扱人は通常、町村役人などの名望家か、法制に通じた公事宿くじやどであつた。」

「取贖」は「執贖」「取扱」とも書いてあります。上下銀については、以前「借付」の中で取上げました。縛れた借金の問題が、半金の返済で内済決着したのは呆れるばかりですが、現在の裁判所ならどんな結論を出すのでしょうか。

御前米

「毎秋收納の頃には広嶋より士列御藏奉行出張請米有之、此御藏より直ニ大坂登セ御払米に相成、米の性宜敷、中にも因の嶋米御国随一と申事ニて、御前米ニ相成、此米斗り広嶋へ船廻りになる、」
（「郡要集」）

毎秋、年貢を收納するときには広島より士列の

御藏奉行が出張り、年貢米を受取る。この尾道御藏所から直接大坂に登せ、御払米になる。御調郡は米の質が良く、中でも因島の米が御国随一といわれているので、「御前米」にもなり、この米ばかりは広島へ廻漕される。

御前米については辞書を引くまでもないことですが、調べてみると、

【御膳米】（『日本国語大辞典』）

貴人の御膳に供する米。江戸時代、將軍家の食用に供する美濃の特産米。

【御前】（『広辞苑』）

貴人に対する敬称。江戸時代、大名・旗本などをその臣下から言った敬称。

「御前米」とは「藩主の食用に供する因島の特産米」のことです。

「是ハ殿様の御前米故に尤初秋に上米斗り撰とり、百姓も格別念入上納致也」（「安部野童子問」）

これは（福山の）殿様の御前米なので、初秋に上米だけを撰び取り、百姓も格別に念を入れて上

納する。

小越船

「敬次郎今五半時頃出宅、水主町大雁木迄参、同所より御本手之子弟中一緒ニ小越へ乗、宇品にて万年丸御艦へ乗移候也、殊之外勇敷出立いたす、舟場迄は若党・小者を為連、小越へは平川静一郎一人乗込、万年丸へも乗、何角見合呉候由」(慶応二年(一八六六)『村上家乗』)

慶応二年(一八六六)十一月朔日、息子敬次郎(二四歳)は、今朝九時頃家を出て、水主町の大雁木まで行き、そこから御本手の子弟達と一緒に「小越」に乗り、宇品で汽船万年丸に乗移った。殊の外勇ましい出立であった。水主町の舟場までは若党・小者を連れて、「小越」へは平川静一郎が一人乗って万年丸へも乗り、何にかと氣遣ってくれたという。

これは、広島藩家老東城浅野家に仕えた村上彦右

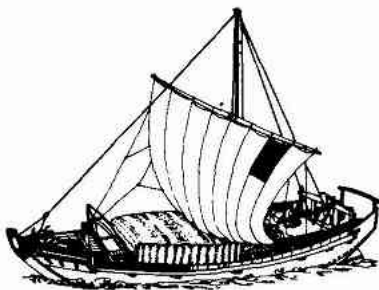
衛門の日記で、広島藩士の子弟や民間有望少年五〇名(ほかに自費生若干が加わる)が選拔され、「洋学為修行江戸表へ被遣」ました。その一行に村上敬次郎も加わり、広島を出発するときの様子です。

水主町の雁木(船着場になっている石段状の棧橋)で「小越」に乗り、宇品で汽船万年丸(薩摩藩より購入)に乗換え、江戸に向います。開成場での洋学修行のための旅でした。

【小越船】(こしぶね。(『日本国語大辞典』)

江戸時代、伊勢湾を中心に小廻しの廻船として使われた百石積前後の船。船型、構造とも弁才船に似ているが、上廻りは簡単で、関東地方の五大力船や紀州、瀬戸内方面のいさば船に相当する。(絵図)

水主町の雁木といえ



ば太田川の下流ですから、小さい船しか航行できません。図で見るより小さい船のような気がします、どうでしょう。

内密申上試

「御給地方御年貢米之俵付と唱、石二付壹升宛勘定目録へ取結び被為召上候得共、是は口米之外にて御明知方ニおゐてハ上納仕候義無御座候得共、往古より之仕来と相見候二付、御統合之義は不奉存候得共、是等を始メ年頭蔵附御勘定等年中三度御祝儀米と唱、壹度米式升より七八升位迄、其外暑氣見舞歳暮之御祝儀等鳥目、或は其村生産之あらゐも黒豆等之内差上候様之義も有之、是は其御屋敷様く之御形合を以被仰付置候義にて区々ニは御座候得共、此入用悉皆其組限之御高前へ割賦仕候義故、御明知方よりは入役免当高く、扱又御屋敷様ニ依り御高前之割合よりは多分餅米被召上、此間損銀并ニ焼米之義も式三升或は四升と申様ニ

不同有之、其外門松料等之儀ニ付御給知方ニおいても組ニ寄免之高下有之候得共、上文之通御方々様御仕来之御形合を以被仰付置候義故、乍難渋百姓共も相諦居」（安政元年（一八五四）「俵約筋被仰出変年不作無実凌方之義ニ付御年貢上納筋始郡中生産筋取行方之儀愚考内密申上試書附」『廿日市町史』）

御給地（藩土に給与した知行地）では、年貢米を納めるとき、「俵付」といつて、一石につき壹升ずつ、勘定目録に連動して余分に納めるようになっていきます。これは「口米」の外に納めるもので、御明知方では上納しておりませんが、昔からの仕来りのようです。事情は分りませんが、「俵付」をはじめ「年頭・蔵附・御勘定」などに、年に三回「御祝儀米」といつて、一度に米式升く七、八升程を納めます。そのほか「暑氣見舞」「歳暮の御祝儀」等として、鳥目か、村の産物の荒芋・黒豆を差し上げることもあります。これらはその御屋敷様（給主）それぞれのやり方で命じられますので区々ですが、この負担は全てその組の御高前（石高に割当てますので、御明知方よりは負担が重く、また御屋敷様によって

は御高前の割合より多くの「餅米」を召し上げられ、その上、「損銀？」や「焼米」を差上げるのも式升から四升と違いがあり、その他「門松料」等についても組によっても免の高下があります。上述の通り御方々様の昔からの仕来りで要求されますので、困りながらも百姓共も諦めて納めています。

これは佐伯郡の割庄屋連中が郡役所へ「愚考を内密に申し上げ試」した建議の一部です。自分たちの意見を「愚考」とへりくだり、「内密」にお願いすると相手の顔を立て、これは勿論、主張ではなく、申上げですらなく、「試」みに申上げるだけで、ダメでも構いません、という題のもとに農民の要求を遠慮せずに書いています。

給知農民の色々な負担が説明してあります。その内、「俵付」とは、

【俵付米】たわらづけまい。（『近世用語の概説』）
俵附米は蔵入地や明知にはなく、給知特有のものであり、年貢米納入に際し、運搬途中の目減りを補うという理由で、多くの場合一俵（三斗）

につき三合を加えた米をいう。但し、俵附米の量は、給主によって異なっていた。……

平田船

「如月四日、けふハ船出すへしとて告やりけれハ、親しき限りつとひ来りて……かくするうち船子ともの来りて、はや船に乘れ日も暮ぬなどいへは、けにやとて傘よ木履とひしめきて皆船迄ぞ送りける、艀といふものゝ苦おし揚て乗移れハ、人々ハ江に立ならふ、汐時ハまた早けれども此程の雨に水かさ増れハ、さらハとて纜を解く、声々別を告て急流にさし下せハ、時も移さす字品のもと船に着く」（文政五年（一八二二）『萍日記二編』）

二月四日、「今日船出する」と知らせると親しい者が集り……そうしていると船頭が来て、「はや船に乘れ、日も暮ぬ」というので、「げにや」と「傘は、木履は」と騒いで皆船まで見送りをしてくれる。「艀」という舟の苦（舟の日除け）

を押し揚げて乗り移れば、人々は汀に立ち並ぶ。汐時にはまだ早いがこのところの雨で川の水かさが増しているので、「さらば」と縄を解くと、声々に別れを告げる。急流に乗ってあつという間に宇品の本船に着く。

これは、広島多賀庵三世玄蛙が文政五年、吉野・橋立へ旅立ったときの『萍日記』です。先日の記事「小越船」に代って、今度は「艀船」が登場します。同様に、この船で川を下り、宇品で本船に乗換えています。「小越船」とは「艀船」のことかも知れません。

艀船は平底の川船です。江戸時代に、年貢米などを広島城下に大量輸送するものとして重要な役割を果たしたといえます。

【平田船】（『岩波日本史辞典』）

平底・薄板構造で喫水の浅い大型河船・近距離海上輸送船。近世には全国の主要河川で用いられ、船とも書かれた。就航する水系により船型や構造を異にし、同名であっても様々な差異があった。

【太田川の水運と舟宿】（『広島県大百科事典』）

太田川の水運は近世、県北の鉄や各地の年貢米を城下に運ぶために開けた。明治以後の主要な積み荷は木材や薪炭、竹、鉄道の枕木、各地の特産物（紙、むしろ、柿など）で、舟は大舟または木舟と呼ばれる七枚の板をはり合わせた九m余のひらた舟で、その日の水量により二〜三t（最大四t）の荷を積んで広島へ下った。舟には前にかいを持つ表乗りが、後ろに櫓をこぐとも乗りがあり、二人で操作した。表乗りが熟練者で、とも乗りは雇人などであった。帰りは、九〜三月は川端の「のぼりよ」を「すえもち」と呼ぶ竿で押してのぼり、四〜八月は南風を利用して帆を張って帰った。河戸から上流はひき綱で引き上げた。（幸田光温）

【艀】（『大漢和』）

長く狭い舟。

捨り・町才覚

「近年郡中村ニ寄格別難渋之者も有之段達御内聴、御不便ニ思召候、依之夫々御撫育可被成下候得共、当御代被為至度々御公務被為蒙仰、御勝手向殊外御差間御難渋被遊、御差繰御六ヶ敷ニ付、格別人別へ行届成立候様ニは相成間敷候得共、此度御憐愍ヲ以諸郡是迄之御貸米銀一円御捨被下候、尤御代官所取計ヲ以貸付置候分、并町才覚等致し遣候口々は、捨りニは不相成候、返納方分りは追て可申付候」(寛政二年(一七九〇)「踊場家文書」)

近年、郡中村によつては、格別に難渋の者もあると殿様のお耳に入り、不憫に思われて色々と御撫育(手当)されましたが、当代になって度々幕府から手伝普請を命ぜられて財政が逼迫し、やりくりも難しく、一人一人が成立つような手当はできないが、この度御憐愍を以て、これまで諸郡に貸している米銀の返済を全て免除することになった。ただし、御代官所の計らいで貸し付けたもの、及び「町才覚」等の措置をしてやった口々は該当しない。それらの返納については後に指示する。

「御貸米銀一円御捨被下候」、つまり藩が貸付けた米銀は返さなくてよい。「御捨」「捨り」は、貸借関係を捨てる、返さなくてもよいことを意味します。

【廃】すたる。(『日本国語大辞典』)

捨てられる。近世以降「捨」の字をあてる慣用があり、それにひかれた意味の展開も見られる。
〔方言〕遺失する。無駄になる。

「捨り」は「すたり」と読むようです。

「油下直ニ売払候様被仰出候得共、不算用掛不足等当時捨りニ相成居申候ニ付、一統手を縮メ直段一列ニ引上」(文政十一年(一八二八)「鶴亭日記」)

油を安値で売るようにと言われますが、採算に合わず掛も不足して、現在は「捨り」になっているので、商売人は手を引き、揃って値段を引上げ……

ここでの「捨り」は債権の放棄ではなく、「損失」の意味で使っています。

次に問題にするのは「町才覚」です。文面から「借金」に違いはありません。

【才覚】（『広辞苑』）

計画。くふう。算段。くふうして金を集めること。くめん。

藩の資金ではなく、町人の金を借りること、と見当を付けましたが、「町才覚等致し遣候（して遣わした）」と恩着せがましい言い方が気になります。農民が相対で町人の資金を借るのなら、藩には直接関係のないこと、このように言うからには、藩が口をきいて、町人からの借金を仲介したと考えれば合点がいきます。仲介とは、保証人になることかもしれません。

「余日も無之儀故我等共一通り町才覚申付遣候、猶不足之分役人共何分才覚を以相片付可申筈二候、然とも不足二相届候程之才覚二不至候二付段々心配を以亦々町才覚相調遣候」

（年貢の収納まであと日数もないので、代官所で一通り「町才覚」を申し付けて遣した。それでも不足の分は村役人共が何とか捻り出すだろうと思うがどうも心配なので、またまた「町才覚」

を調べて遣わした。（宝暦十三年（一七六三）『広島県史』）

代官所の口利きで町人から借金するとは、具体的にはどうすることなのか、分りません。

差紙立

「諸国共米相場追々引立、川口入津も被指免候所、他国米直段も御国米よりは割合宜相聞へ候、右二付ては別て差紙立多ク差出、追々御米請取、畢竟近來は何となく差紙直段よりは正米之相場余程宜候二付、弥増指紙を以御米多ク請取、外輪等へも忍ひく指遣候趣ニも風聞有之不届至極二候、右二付当月四日六日之指紙立、不都合ニも御米取いたし、若々抜ケく外輪へ遣候儀有之候ては不埒至極二付、右両日之請取米は銘々入用実意を以成たけ石数減シ可申出候」（天明二年（一七八二）『堀川町覚書』）

諸国とも米価が次第に上がり、川口入津（輸入）

も許されているが、他国米の直段は御国米より高いと聞いている。そのため「差紙立て」で多く差し出し、次々と御蔵米を受取っている。それというのも最近では差紙直段よりは正米の相場が余程よいので、ますます指紙で御米を多く受取り、外部等へもこっそりと送っているという噂もある。不届至極である。それについて今月四日・六日に行われる差紙立てに際し、不必要に御米を取り、こっそり外へ出すようなことがあつてはいけないので、右兩日の請取米は銘々の入用分だけ、正直に石数を減して受取りなさい。

この触書は下級の藩士宛のもので、給料の支給の實際を垣間見ることができます。

その前に、差紙について復習します。

「御差次納(旧藩其廩米ヲ藩士等ニ渡スニ米券ヲ以テ為ス、而シテ米券ヲ土民間互ニ売買スルヲ許セリ、払米則チ米廩ヲ開ク定日アリテ券ト米ノ引換ヲナス、此米券ヲ御差紙と言フ、其差紙ヲ税米等ノ代リニ納ムルモノ、之ヲ御差次納ト称ス、御差紙ヲ以一端米廩ヨリ正

米ノ受払ヲ受ケ、其正米ヲ又米廩ヘ納ムヘキヲ其手数ヲ省キテ直ニ米券ヲ以テ収ム故ニ、払渡米ト收納米ヲ差次クト言フ意ニヨリ此名称ヲ附タルナルヘシナリ、故ニ町村ヨリハ金錢ヲ徴シ、惣代ノ者広島ニテ米券ヲ購買スルナリ」(「淡交夜話」)

「其廩米ヲ藩士等ニ渡スニ米券ヲ以テ為ス、……払米則チ米廩ヲ開ク定日アリテ券ト米ノ引換ヲナス」

(禄高百石未満の藩士に切米取)は藩の御米蔵から禄米を受取るが、御米蔵が開かれる定日があり、そのとき米券(差紙)と引換えに支給される。

資料は、「差紙直段より正米直段が高いので、下級藩士が盛んに差紙を出して米に替えているが、生活に必要な分だけを替えなさい」という趣旨の指示です。ここに「差紙立」という言葉が登場します。これはどうも差紙を藩の蔵で米に替えることを指しているようです。

「当郡大田筋之儀は御承知被為下候通、過半畑方之所ニて田作は格別も無御座、……先年より御年貢

米等是不殘差次上納ニ被為成下候故、……所出来米は不殘村々飯用手当ニ仕候得共、右様稼方多人數之人柄所出来米計ニては三步一も飯用ニ届兼候故、例年共口筋中筋より飯用方過半買入、年ニ寄候得は御差紙立米、又は佐伯郡廿日市辺ニて他国船米等も買越候様之儀も御座候て」（『加計町史』）

当郡（山県郡）太田川筋の村々は、ご存じの通り大部分が畑で田作はあまりなく、……先年より御年貢米等はのこらず差紙納めにしていただきました。……所のできる米は全部村々の飯用に当てていますが、それでも人数が多くて三分の一にもなりません。いつも、口筋や中筋の村から飯用米の過半を買い入れ、年によると「御差紙立米」を買ったり、佐伯郡廿日市辺で他国船米等も買いに行くこともございます。

太田筋の村は、年貢米に代って差紙（広島島の勘定所で購入）を納め、飯米不足のため差紙を買って、藩の米蔵で米に替えていたのでしょうか。これを「御差紙立米」というのだろうと思います。

農民が買える差紙なら、下級藩士も買えるはず。

支給される差紙のほかに手に入れ、米に替えると儲る……。それぐらいは知恵を出したろうと思います。その証拠に、支給された差紙を正米に替えるのは当然のことなのに、藩が悲鳴をあげている。

仕合

「置下表式拾枚 右は近々御帰城被為在候ニ付、例年御昼御膳所御小休など被為仰付、冥加至極難有仕合奉存候、依て私宅御成間置表替仕度奉存候間、何卒前段之通置表御売下ケ被為成下候様奉願上候」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）

近々殿様が江戸から帰城なさいますが、いつも私方に御昼御膳所や御小休など仰せつかり冥加至極有難き「仕合」に存じます。そのため、私宅の御成間の置の表替えをしたいと思ひますので、置の下表式拾枚を御売り下げてくださいますようお願いいたします。

藩主が西国街道で帰城するとき、西条四日市（東

広島市の藩主用の本陣「四日市御茶屋」に泊ると、次の日の昼食は中野村辺が適当な場所になります。そのため、中野村の割庄屋の野間家には「御成間」まで作られていたようです。

文中に「難有仕合奉存候」とあります。「難有」は「有難」と書くこともあります。今でも「有難きしあわせ」と冗談でいうこともあります。前に「有難き」が来ると、つい「仕合」を「幸せ」と勘違いします。

【仕合せ】しあわせ。（『広辞苑』）

- ①めぐりあわせ。機会。天運。「ありがたき―」
- ②なりゆき。始末。③（「幸せ」とも書く）幸福。好運。さいわい。また、運が向くこと。

「御覽被成候哉、否だに未承候は遺憾之仕合ニ御座候」（文政五年（一八二二）『馬琴書翰集』）

御覽いただけただろうか、まだお聞きしてないので、遺憾の「仕合」でございます。

「遺憾之仕合」は「遺憾の幸せ」であるはずがなく、「遺憾のめぐりあわせ」です。「難有仕合」は「有

り難き状況」なのはどうでもありません。

せんたく

「人相書

一歳三十五 尾道町 甚兵衛

せい高く、中肉、色白く、眉毛厚く、顔長く、目口耳常躰、着物紺立嶋布子、せんたく空色羽織、帯鼠色とろめん

一同廿六 同人女房 きた

せい中、中肉、色白く、顔長ク、目口耳常躰、着物空色せんたく袴、白しゅばん、帯せんたく茶いろ木綿、已上」（天明二年（一七八二）『堀川町覚書』）
甚兵衛と女房きたは「御領分追放者」で、今後広島に「立帰」らせないよう、人相書で手配をしています。年齢・体の特徴・衣服を列挙しただけで、果して人相書としてどれほど効果があったのか疑問に思います。ただ、着衣については詳細に記されています。当時の人はそれでイメージを描くことができます。

たのでしょうか。

甚兵衛さんの服装は、紺色の立嶋模様の布子(木綿の綿入れ)、羽織はせんたくの空色、帯は鼠色でとろめん。

【空色】(『日本国語大辞典』)

江戸時代庶民が葬儀に参列するときに着た水色の紋服。

【兜羅綿】とろめん。(『広辞苑』)

「和漢三才図会」によると、中国舶来の毛布の一。綿糸に兔の毛をまじえて織った布。色は多く鼠色・藤色・薄柿色。後には毛をまじえずに織って足袋に用いたという。

と説明されても、解ったようで解らない。「せんたく」になると全くお手上げです。汚れたら誰でも洗濯するので、人相書に書いても仕方ない筈……とは思いましたが、あれでもと思い、辞書を引きました。ありました。さすが、大辞典。

【洗濯】(『日本国語大辞典』)

「方言」針仕事。洗い張りした着物を縫い直す

こと。仕立直し。

どうも、洗濯とは仕立直しをした衣類のようです。仕立直しの前段階に洗濯するのでその名が付いたと思います。

兎口

「兎口(兎口)」は、古文書でよく見かける言葉です。ところが、どうした訳か、『広辞苑』には「兎唇」の意味以外は見つかりません。

「郡二寄候てハ、諸職人共師匠之手伝と唱、急度職業相調候もの共隠職いたし候者多く有之段相聞候二付、御建合村々役人中へ及示談、下方職筋之ものへ及示諭候処、兎口も無之感服いたし、追々改出願出候段」(嘉永二年(一八四九)「野間家文書」)郡によつては、諸職人共が師匠の手伝だと言つて、確かにその仕事をしていながら職を隠している者が多いと聞いている。そこで、御建合を村々の役人共へ申入れ、村内でその職筋の者へ

説諭させたところ、「兎口」もなく感服して、
だんだんと改めて登録しているという、

文意からすると、「兎口も無之」は「一言もなく」
「兎哉角」と言うこともなく」を意味します。

「懸り合之もの共段々御手厚御約合被成下候所、
…一件落着ニ至、於私も兎口可申上様毛頭無御座、
大ニ安心仕難有仕合奉畏候」(天保十三年(一八四二)
「水子懸り合一件内済口上書」)

関係者一同に丁寧な調停をしていただき、……
一件落着しました。私も「兎口」申上げる積り
は毛頭なく、大いに安心して有難く思っています。

「当村権助宅へ這入候盜賊治療之儀、村役人中より
御談し罷越見合候処、最早脈も絶々ニて、……療
治相届不申、兎口之間及絶脈申候」(天保三年(一
八三二)「鶴亭日記」)

当村権助宅へ盗みに入った盜賊の治療について、
村役人から依頼があり、行つて診ましたが、
最早脈も絶々の様子で、……治療の甲斐無く、

「兎口」の間に死亡しました。

この用例の「兎口」は、少し意味合いが違うよう
で、「兎口之間」は「アツという間に」の感じですよ。
意味や、使われている文字からして、「兎や角」
に関連する言葉だと思います。

【とやかく】(『広辞苑』)

(「兎や角」と当て字) かれこれと。なんのかの
と。とやこう。

【とやこう】(『日本国語大辞典』)

「とやかく」の変化した語。

【とこう】(『日本国語大辞典』)

〔副詞〕「とかく」(兎角)の変化した語。あれ
これ。

「兎角(とかく)」↓「とこう」↓「兎口」と変化
して、「兎口」の漢字を当てたものと思われます。

人気相屈し

「当村近年別て猪鹿多ク相成、稲作ハ勿論畠作楮ニ至ル迄喰荒し、種々申値手ヲ尽し追払、尚割立板垣等仕候得共行届キ不申、最早人氣相屈し、実以此度御入村ニて御見分被成下候通極難渋之村柄ニ御座候二付、威筒買求メ之業も難相叶御座候て、猪鹿追払可申術も難相成」(文久元年(一八六一)『湯来町史』)

当村(多田村、現広島市佐伯区湯来町大字多田)では、近年特に猪鹿が多くなり、稲作は勿論、畠作・楮にいたるまで喰い荒し、種々と対策を話合つて手を尽し追い払い、割立板垣等もしましたが効果がなく、もはや「人氣相屈し」しました。この度御入村御見分いただいた通り、極難渋の村柄のため、威筒を買い求めることもできないので猪鹿を追い払う方法がなく……

と、村役人が割庄屋宛に「威筒御鉄砲三拾挺」を「御貸下ケ被為遣候様」にと歎願した願書です。その中に「人氣相屈し」という(面白い)表現があります。

【人氣】じんき。(『日本国語大辞典』)

人の氣持。その地方一帯の氣風。

【屈する】(『広辞苑』)

心が沈む。氣がふさぐ。くす。くんず。

「人氣相屈し」とは、若者言葉でいうと「みんなの氣持が(へこむ)」ということでしょう。

「本郷駅衰微、其上野菜・海魚不由由、家居不宜二付、旅人之泊り二間、都て人氣悪キ所と旅人申触、大ニ迷惑もの也」(「理勢志」)

(西国街道の)本郷駅は衰微し、その上野菜・海魚が不由由で、建物もよろしくないなので、旅人の宿泊に差し支え、すべて「人氣の悪い所」と旅人が申し触れて、大に迷惑している。

この場合の「人氣」は「にんき」ともとれますが、「じんき」も「にんき」も出所は同じでしょうから、詮索は不要だとおもいます。

【威し鉄砲】(『岩波日本史辞典』)

威し筒とも。江戸時代、猪・鹿などから農作物を守るために使われた、音だけで玉を込めない鉄砲。

文化七年(一八一〇)佐伯郡水内下村の書類による

と、

「獵師鉄炮 筒長三尺四寸、玉目式匁七分、……

威鉄炮 筒長式尺八寸五歩、玉目式匁七分」

と、銃器そのものにはほとんど差がないので、獵師鉄炮と威鉄炮の違いは用途だけだろうと思います。空砲を打つ威鉄炮でも「玉目（銃弾の重さ）」が示されています。

猪の被害は現在も続いています。駆除班を編成したり、捕獲柵、防御用トタン、柵、電気柵、ネットなどで防ごうとしています。ちなみに、湯来湯泉の名物料理はぼたん鍋だそうです。

不大形

「西原村之辺、旱損ニて難渋仕候ニ付、井手掛・雨池築調等之義、前々より段々と儀論熟談有之候へ共難調処、祇園町住居大工卯之助心付ニて、沓里程上ミより新井手掛、溝を堀り、田地之水勢付候

へハ水懸り候趣申出、段々しらへ聞糺之上、卯之助存付之通ニ相成、終ニ水掛り宜普請成就、照続之節も潤有之日痛毛もなく、二三年之間ハ土地へ水が珍敷方か、地も肥毛上実入能、百姓之歎不大形、卯之助ハ御賞として生涯式人扶持被遣候、右新井手新溝之入用凡銀ニて式十貫余之由、此分水受百姓より追々払出候事ニ候へども、御捨被遣、其代り心ニ夫たけ御免ヲ御上ケニ相成候処、作得増候故、百姓共勇立納所致し候処、土地も居合ニて、初二年之如くに出来立不申、実入も大ニ劣り、百姓とも方年貢渋滞ニ付、種々御仕向御償ひ方有之、其後ハ取続居申候よし、井手ハ今以宜敷、此功ニよつて近年之旱魃にも日損不仕也」（「理勢志」）

西原村辺りでは旱害で困っており、井手や雨池の築調について以前より議論もしてきたが結論が出なかった。ところが祇園町住居の大工卯之助が発案して、沓里ほど上流に新たに井手を掛けてそこから水路を堀り、田地に水を流し込めば水も懸るようになると申し出たので、段々と

検討し、結局卯之助の予想どおり、終に水掛りよく工事も完成した。おかげで照り続いても日痛みの作物もなくなり、二三年間は土地も水が珍しいのか、地も肥えて作物の実入もよく、百姓の歓びも「大形ならず」、卯之助は藩から褒美として生涯式人扶持を与えられた。この工事費は銀式十貫余、受益の百姓より少しずつ払い出す事になっていたがそれを藩が負担し、その代り年貢を御上げになった。収益が上がるので百姓は勇みたち年貢を納めたが、土地も居り合うつと、初二年のように実入りもなく、百姓どもの年貢納入も渋滞し、種々と藩の援助もあり、その後はなんとか取り続けているそうである。井手は今も健在で、おかげで早魃年にも日損はない。

明和五年（二七六八）に作られたこの井手は、「八木用水」の名前で現在も使われているそうです。

文中「歓不大形」は、文意から「大喜びをする」と理解してよさそうです。文意から言葉の意味を推測するという方法は、おおよその意味は解るにしても、細かいニュアンスまでは読取れないというもど

かしがつきまといまふ。「大喜び」にも、躍上がつて喜ぶ、歓声を上げて喜ぶ……など色々あります。もつと解りやすい例文を探るか、もつと細かく検討する必要があります。

「不大形」とまとまつて辞書に載せてないので、まず「不」から考えます。「大形ならず」と読むのでしょうか。「大形」は「おおがた」か「おおかた」のほずです。

【大方・大抵・凡】おおかた。（『日本国語大辞典』）
事柄の質、関係、程度などが、特殊でなく一般的なこと。副詞的にも用いる。世間一般。普通。並ひととおり。一般に。

「不大形」は「おおかたならず」と読み、「並ひととおりでなく」と解釈して納得しました。

「不大方」「不大形」ともよく使われています。

「去年ハ不大方御懇情被成下、当年も不相変御懇情之段奉希上候」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）
去年はたいへん御懇情をいただきました。当年も相変らず御懇情のほどお願いいたします。

安駄

「○○宅前有寡婦○○者、家産尽而奇窘且重恙、無族類以介抱其病賑濟其窮者、是以作安駄乗之留一戸養之、一日一夜偏村中、廿六日朝、自東隣源蔵伝之予家此夜死、翌廿七日葬正福寺境内西窀穸、予亦臨其葬」(文化七年(一八一〇)「鶴亭日記」)

○○宅前に寡婦○○という者有り。家産尽きて奇窘(逼迫)し且つ重恙、族類(親族)に其の病を介抱するを以て其の窮を賑濟する者無し。是を以て安駄を作り之に乗せ一戸に留めて之を養う。一日一夜村中を偏る。廿六日朝、東隣源蔵、之を予の家に伝え、此の夜死す。翌廿七日葬い、正福寺境内西に窀穸(埋葬)す。予も亦た其の葬に臨む。

○○宅前に寡婦で○○という者がいた。家産尽きて逼迫し、重い病気にかかったが、族類(親族)に病気を介抱してその窮状を救う者はいなかった。そこで安駄を作つてこれに乗せ、一戸に留

めて一日一夜だけ養い、村中の持ち回りとした。廿六日朝、東隣り源蔵が私の家に伝えたが、この夜死亡した。翌廿七日葬い、正福寺境内西に埋葬した。私もまたその葬に臨んだ。

文中の「安駄」は「あんた輿」のことで、以前記事にしたことがあります。

今、孤独死が問題になっていますが、瀕死の病人の〈持回り〉も胸の痛む話です。

歩銀

「歩銀」という、よく使われる言葉があります。

それだけに、意味が本来のものからシフトして、特別な意味を持つようになります。特殊な用法だけを頭に入れないで、基本的な意味を理解することが大切だと思います。

「海陸運送弁利宜場所ゆへ、諸荷物融通交易の業最安に付、入津弥増、諸荷物取捌の間屋四拾軒程有之由、是等口銭として売買物の代銀に歩銀を所務

とする業故、おもわさる大儲する事もあり、商船
不来時ハ難儀も致し、何分盛衰有之候得共」「郡
要集」)

(尾道は)海陸の運送の便利が良い場所なので、
諸荷物融通交易の業が容易なため、港に入る船
も増加し、諸荷物を取捌く問屋も四拾軒ほどあ
るという。これらは口銭として売買物の代銀に
かける「歩銀」を得る仕事なので、思わぬ大儲
けをする事もあり、商船が来ないと難儀もする
ので盛衰が激しい。

【歩】(『広辞苑』)
歩合。ふあい 割合。

【歩銀】ぶぎん。(『日本国語大辞典』)
両替や取引の額に応じた割合の手数料。また、
利益金。ふあい 歩合。

【口銭】(『広辞苑』)
売買の仲介をした手数料。問屋口銭。コミッシ
ョン。

「民業に係る鉱山の産鉄は固より幕令を奉し、彼の

大阪鉄座にて検査を受け其料銀として歩銀を徴収
せらるゝを以て、各鉱主は孰も大に苦痛を感す
る所たり」(『芸藩志拾遺』)

民間の鉱山の産鉄は勿論幕府の命令に従い、大
阪鉄座にて検査を受け、その料銀として歩銀を
徴収されるので、各鉱主はみな大に苦痛を感じ
ている。

「歩銀」とは「取引の額に応じた割合の手数料」
とする『日本国語大辞典』の説明はスッキリとした
解説です。以前にも「銀歩」について不確かなこと
を書きましたが、この説明でモヤモヤが晴れました。

取締・取縮

「勝手向難渋二付、取締筋之儀毎々申付候得共、兎
角臨時物入多借財相重ミ、就テハ家中長々減石申
付可為難儀候得共、融通モ難付、更ニ取直之期モ
無之処、昨年以來尚又莫大之入用出来湧、忽勝手
向難持堪、此姿ニテハ公務初国民撫育之儀モ無覚

束、甚以不相濟事二候、当時専大俵中ニ候得共、此場合尋常之儀ニテハ迎テ難取直、依之此上万端可令勘弁候間、勝手掛り役人共ハ勿論、其外向々急度相心得、熟和誠実ニ申合、從來之仕成等ニ不泥、際立格外ニ作略取締致候様手厚ニ可申談候」(嘉永七年(一八五四)『芸藩志』)

藩の財政(勝手向)が困難な状況にあり、緊縮財政に関して度々命じているが、とかく臨時の出費(物入)が多く借財がかさみ、そのため家来にも長期間減石を申し付けているので難儀をしているであろう。しかも融通も付かず回復の目当(取直之期)もないのに、昨年以來又莫大な出費が出来てしまい(出来湧)、これでは忽ち財政も持ち堪えられず、幕府に対する勤めをはじめ、国民の撫育についても覚束ない様子である。これでは誠に濟まないことなので、現在、専ら「大俵中」であるが、これも普通のやり方ではとても効果はなく、そこでこの上は全面的にやりくりをする(可令勘弁)ので、財政担当役人は勿論、その他関係の役人は心得て話合い、今までのやり方を踏襲せず(從來之仕成等ニ不泥)、格外に計

略し、どうするか手厚く話し合いなさい。

これは広島藩主、浅野斉肅の経費節減をもとめる書付です。幕末の困難な財政状況を明け透けに述べています。今、地方財政の破綻が取沙汰されていますが、どこかの市長が市の職員に訓辞を候文ですと、このようになるという見本みたいな文章です。

(外の自治体も、国も、同じかも知れませんが。対策を部下に丸投げするのも……)。

現在は使わない言いまわしが多いので、それを(一)で示しました。「大俵」は勿論、「大俵約」だろうと思います。その中でも「取締筋」は大変面白い。

「殊に御国方ニおゐてハ当時格外之御大俵御取締メ御省略中実以恐入候御場合ニ附」(安政四年(一八五七)『広島県史』)

殊に御国元では現在、格外の御大俵、「御取締メ」、御省略中で、実にもって恐れ入りますが「御大俵」「御取締メ」「御省略中」と、同義語を連発しています。ここでは「取締」の代りに「取締メ」です。

「此上御勝手向格段ニ御取縮メ不被遊てハ、御趣法も相立兼候御場合ゆへ」（安政三年（一八五六）『広島県史』）

この上財政を格段に「御取縮メ」されなくては、御趣法も立たない場合ですから

どうも「締」と「縮」を同じように使っています。（締めると縮むからか？）

「銘々手許取縮り御国恩奉報候儀ニ有之」（『春草堂秘録』）

「当時不益相見候筋、右に付取締め人数減し候次第」（寛延二年（一七四九）『広島市史』）

「一統休浜之法取締り被仰付」（『春草堂秘録』）

送り仮名も、「取縮メ」「取縮り」「取締め」「取締り」あり、読みは判然としませんが、「取締」「取縮」は、犯罪の取締ではなく、節約するの意味だと思えます。

命つり・死に残り

「当国ニても少シも奥へ相成候程大凶作也、誠に広島奥郡都て、三原御支配之内ニても奥郡程別て悪敷、已ニ広島へは奥郡より去秋百姓分之者ことくく出浮、町内御家中こじき致、一円引取不申趣人数千人と申事、御上ヨリ町橋シへ固屋所々太造御掛、御家中・町家之施ニて命つり、勿論野辺固屋故寒中ニ老人・子共は余程死候由、春へ相成候て御上より御救等被下候哉、死残之分余程引取候由」（天保七年（一八三六）『三原市史』）

当国（安芸国）でも少しでも内陸部になるほど大凶作である。誠に広島奥郡は全て、三原（家老浅野甲斐）御支配の内でも奥郡ほど悪く、既に広島へは奥郡より去秋から百姓身分の者がことごとく村を離れて来て、町内や武家屋敷で乞食をし、いっこうに里へ引き上げない者が数千人いるという。御上よりは町端の方々に沢山の小屋掛けをして、御家中や町家の施しで「命つり」、

勿論野辺の小屋のため、寒中には老人子供は余程死んだという。春になって御上より御救等が下だされたためか、死に残りの者共がだいぶ故郷に引き取ったという。

天保三年（一八三三）から九年（一八三八）にかけての「天保の飢饉」は広島でも悲惨な状況を呈しています。この資料「天保七丙申秋凶作ニ付西春飢饉容艱覚書」は、野串村（現、三原市）組頭良助が、天保七年（一八三六）の凶作、翌八年（一八三七）の飢饉の实情を中心に記録したものです。その中に広島の様子が見て取れます。二〇〇年前にもならない頃の恐ろしい出来事ですが、今は完全に忘れられています。この文書に「命つり」という文言があります。「命を釣る」とでも書くのでしょうか。

【釣る・吊る】（『広辞苑』）

①上の物にかけてたれさげる。つるす。②ひっかけて上げる。釣針で魚をとる。③かつぐ。昇く。④上へあげる。

いずれも、細い糸や綱につながり、辛うじてぶら下がっている……。そのようなイメージの言葉です。

釣人の言う、いつ〈ばれる〉かわからない頼りない命。「生残り」ならぬ「死に残り」も、凄い表現だと思いました。

宿水

「下北方村之義、先年茅沖宿水吐落不申、六七ヶ年も湖水同様、多分之不植畝出来仕候ニ付、拾一ヶ年前去ル嘉永三戌年御願申上、御免許之上難渋之中よりも多分之入役を以、梨和川底へ潜樋居エ調、松江・小原両村土地借受、引尾溝付替取計、宿水見込通り吐落、一統安悦仕居申候処」（万延元年（一八六〇）『三原市史』）

下北方村（現、三原市）では、先年茅沖で「宿水」を排水することができず、六、七ヶ年も湖水同様となり、多くの植付不能の土地ができたので、十一ヶ年前の去る嘉永三年（一八五〇）、御願をして免許を受け、困難な中から多分の費用を投じ、梨和川底へ潜樋を設置し、松江・小原両村

の土地を借り受けて引尾溝？の付け替えをし、宿水は見込通り排水することができて、みんな安悦しておりましたが、

「前々とハ大川埋り強、大窪処水吐不宜、尤、水損不作年ニハ御仕向御厄介筋ニ相備り候年柄ハ勿論、無左候とも大窪所ハ年中宿水不絶様相成り、両三日も雨天ニ候へハ水痛毛損仕、虫付等も毎年之儀」(文政八年(一八二五)『三原市史』)

以前に比べ大川の埋りが強く、大窪処(低地)の排水が悪くなり、水害不作のため藩の援助を受けるような年だけではなく、いつも低地に年中宿水が絶えないようになり、二、三日も雨が降ると作物が水に痛み、虫付等も毎年のことで、この二例からも判るように、「宿水」とは「排水できず、長期間溜った水」を意味します。

【宿】(『漢字源』)

「形」年を経ている。かねてからの。「宿老」もつとも、色々な意味があるようです。

【宿水】しゆくすい。(『広辞苑』)

前日から汲んでおいた水。くみおきの水。

【宿水】ねみず。(『早引万宝節用集』)

「目洗薬師堂 傍に潮石あり、石孔の宿水を以眼を洗ふ、故に名づく」(『芸藩通志』厳島)

目洗薬師堂 傍に潮石があり、石の孔の「宿水」(溜った水か)をもつて眼を洗うのでその名がある。

「潮石 同大日堂の上、目洗薬師の傍にあり、高一丈許の処に小孔ありて、宿水潮候によりて増減す、俗、眼疾にそゞぎ験ありといふ」(『芸藩通志』厳島)

潮石は大日堂の上、目洗薬師の傍にある。高さ一丈ばかりの所に小孔があつて、「宿水」は潮どきにより増減する。俗に、眼疾に付けると効果があるという。

「恠石 有留村成戸にあり、岩下に小祠あり、水神と称す、岩上の凹処に、宿水あり、疣を治す」(『芸藩通志』高田郡)

恠石は有留村(現、安芸高田市)成戸にある。岩の

下に小さな祠があり、水神と言っている。岩上の凹処に、「宿水」があつて、疣を治すと言伝える。

「宿水」とは「溜り水」のようです。

覧

「中須賀村百姓祖平次と申者、水車壱輛所持仕居候処、去ル文化十一年、広島新開方何某より胡粉製方之儀伝授致、……右製方之最初、かきながら能ク洗ひ、水車之石臼杵先キへ鉄ヲ卷キ、是にて搗キ、小米とをしにてをろし、是を水にて練り、矢張り水車へ仕かけ有之挽キ臼へかけ、丁度とうふ豆を挽ごとく水少シ宛覧にて流しかけ挽せ」(文政二年(一八一九)『廿日市町史』)

中須賀村百姓祖平次という者が水車を壱輛を持つており、去る文化十一年(一八一四)、広島新開方何某より胡粉の製方を習い、……その作り方は、最初蛸殻を能く洗い、水車の石臼の杵先

きに鉄を巻いたもので搗き碎き、「小米とおし」でおろし、これを水で練り、水車で動かす挽き臼へかけ、丁度豆腐豆を挽くように水を少しずつ「覧」で流しかけながら挽かせ、
今ではあまり見ることもできなくなった品々が出てくる文書なので、取上げました。

【胡粉】(『広辞苑』)

日本画に用いる白色の顔料。古く奈良時代には塩基性炭酸鉛すなわち鉛白をいい、鎌倉時代まで用いた。室町時代以後、貝殻を焼いて製した炭酸カルシウムの粉末を白色顔料として多く用い、これを胡粉と呼ぶようになった。

【篩】(『広辞苑』)

粉または粒状のものを、その大きさによつて選り分ける道具。普通、まげ物の底に、馬尾・銅線・絹・竹などを張つたもの。トオシ。

【覧】(『広辞苑』)

ふしを抜いた竹や中心部をくりぬいた木を地上に架設して水を通ずる樋。うちひ。かけどい。かけい。

「小米とをし」は砕けた米は通過する程の目の篩だろうと思います。「笕」は掛流しの水道で、水車小屋では簡単に設置できます。

「山県郡は都て山深く、奥山十七ヶ村といふニは麦も不生立、稲作一篇にて木綿、大豆等も出来ず、雪深にて居宅棟高く軒は地ニ付候様に建、雪降積節ハ笕の水も不通故雪を沸し炊候」（『郡要集』）

山県郡は全て山深く、その中でも「奥山十七ヶ村」という地域は、麦も出来ず稲作だけで、木綿・大豆等も出来ない。雪が深いので居宅の棟は高く軒は地に付くように建てている。雪が降り積る時期は「笕の水」も凍って通らず、雪を沸かして炊事に使う。

この「笕」は谷水を家まで引いている水道です。

「五代目三右衛門正徳年中御新格の時節頭庄屋相勤、享保年中より割庄屋庄原村庄屋兼帯、中上野留池底樋石樋二調、大川筋水刎疊石或は石垣石わくの類、浜井手の水宮内村小川の上を笕にて通し、其下モ布掛山の腰巖石を繰抜、用水を通し候類数々、

今ニ村益ニ相成」（『庄原市史』）

五代目の三右衛門は、正徳年中御新格の時節に頭庄屋を勤め、享保年中より割庄屋、庄原村庄屋を兼帯し、中上野留池の底樋を石樋に調替、大川筋水刎疊石、或は石垣石わくの類、浜井手の水、宮内村小川の上を笕で通し、其下もの布掛山の腰巖石を繰り抜き、用水を通すなど数々、今でも村益になっている。

井手の水路は等高線をなぞるように緩やかに流れますが、途中で小川の流れる場所にさしかかると、「小川の上を笕にて通し」ます。この笕（掛渡井）は竹製の水道ではなく、もつと大型のもので、多分「石の水道橋」でしょう。

かくい

「山毛上大炭小炭其外薪等かくい伐念入、請山之内伐くさしあらし申間敷、手代山配節々見合吟味可申事、且又大炭小炭焼出シ竈立置候ハ、昼夜共

火用心気ヲ附可申事」(天保十二年(一八四二)『広島県史』)

山の樹木を大炭・小炭・その他薪等に使うため、丁寧に「かくい伐」をし、請山の内伐採を中断して荒らさないよう、手代や山配^{やまばえ}は度々見廻って気を付けなさい。又、大炭・小炭を焼き出す竈を築いたら、昼夜とも火の用心をしなさい。

これは、鉄山条目の一部です。中国山地はたたら製鉄の中心地でした。

【たたら製鉄】(『広島県大百科事典』)

「……まず鉄穴流しによつて採取した砂鉄を鉦へ運び、高殿と呼ばれる建物の中の粘土製で長方形の炉の中へ、木炭(大炭と呼ぶ)と砂鉄を交互に入れて、炉の両側にある大轡(天秤轡)から風を送り温度を一二〇〇度以上に高めて溶融させる。……砂鉄は花崗岩の風化したもので中国山地のものは良質であり、その種類は真砂と赤目とに大別されて、赤目を原料に使う製鍊法を銑押法、真砂を原料とするのを鉤押法という。一般に山陽側には赤目が多く、山陰側には真砂

が多いので、広島など山陽側の鉦では銑押法がほとんどである。銑押鉦では銑をつくり出し、鉤押鉦では鋼を含む鉤の大塊がつくられる。銑押法では一回の作業が四日間の昼夜連続作業を単位とし、砂鉄四〇〇貫、大炭三六〇貫内外を使つて約一〇〇〇貫の銑を出し、鉄池に投じて冷却する。銑は炭素が多く硬くてもろいので、鑄物などに一部使うほかはすべて大鍛冶屋へ送り鍊鉄に仕上げる。大鍛冶屋では左下場と本場の二段階の作業を行う。まず左下場で銑を木炭(小炭と呼ぶ)で包むようにし、吹子からの送風により赤熱して炭素量を下げる。次に本場へ回し、同じく小炭を使つて赤熱したものを、金床にのせて四人で交互に槌でたたき鍛鍊をくり返す。鉄滓はしぼり出され炭素も減つて質にムラのない鍊鉄がここに出来上がる。……(向井義郎)」

「炭 鉄爐所へは、大炭を焼いれ、割鉄場に鍛冶へは、小炭を焼て売る、此業甚広し、故に深山幽谷も、おもひの外に、竈烟立ち賑ふなり」(『芸藩通志』奴可郡)

鉄爐所へは、大炭を焼いて納入し、割鉄場の鍛冶には、小炭を焼いて売る。この仕事は方々でしており、深山幽谷でも、けっこう竈の煙が立ちのぼり賑わっている。

【刈杭・加杭】 かくい。（『日本国語大辞典』）

根の付いた木の切り株。物類称呼「櫓 ほと 関西にて、ほとと云尾張及出雲辺にて、きりかぶと云（略）土佐にて、かくいといふ」

「村山ハ勿論自分腰林たり共かくい掘決して不相成候事」（天保元年（二八三〇）「宮内村山方取締りの捷書」）
村有林は勿論、私有林でも「かくい掘」は禁止する。

この場合、切株を掘り起して使うことを禁止しています。最初の資料の「かくい伐」は「かくい掘」とは違うのでしょうか、判然としません。

「伐くさし」の「くさし」は中断した状態です。

【止し】 さし。（『広辞苑』）

「接尾」動詞の連用形に添えて中止の状態を表す語。「飲み―」「読み―」「言い―」

広島では「くさし」ではなく、「くさし」といいます。

懸引

「懸引」という言葉があります。今でもよく見るのは、次の②の使い方です。

【駆引き・懸引き】 かけひき。（『広辞苑』）

①戦場で、時機を見はからって兵馬を進退させること。
②芸能・売買・交渉などで、相手の出方を見て態度を変え、有利になるように処置すること。

「万一養子相定不申内ニ私病死等仕候節ハ、家屋敷並ニ家財等一切御引請被下、家名相続仕候様御懸引被成下度」（弘化三年（二八四六）『庄原市史』）

もし、養子が決らないうちに私が病死等したときは、家屋敷や家財等一切を引き受けて、家名が相続するよう「懸引」して下されたく、

「用水懸引井路之儀、川中ニ井堰を立水を引分候処、

堰の仕形ニより川下之井水不足ニなり」（『広島県史』）

農業用水「懸引」の水路で、川中に井堰を立て、水を引き分けると、堰の仕形により川下では用水不足になり

この「懸引」は用水を耕地に引入れることです。

「紀州塩津浦平右衛門と申獵師三拾五年以前ニ小方へ参、阿多田島ニ能網代有之候間、鰯網引申度と庄屋方へ断申候、庄屋申候ハ阿多田島辺ニて鰯網遣申所無之由申候得は、爰許之網と私つかい申網ハ違申候、懸引と申候て海中ニて取申網ニて御座候と申候、其時分迄左様成網御領分ニ無御座候ニ付不思議ニ奉存由申候得ハ、先我等ニ引せ被申様子御見及候ハ、網仕立様教可申由申ニ付、重宝成儀と奉存引せ見申候」（寛文十年（一六七〇）『廿日市町史』）

紀州塩津浦の平右衛門という漁師が三十五年以前に小方へ来て、「阿多田島によい漁場があるので、鰯網を引ききたい」と庄屋へ申入れて来た。

庄屋は、「阿多田島辺で鰯網が使えるような所はない」というと、「こちらの網と私が使う網は違います。「懸引」といって海中で鰯を取る網です」という。その頃まではそのような網は御領分にはなかったので不思議に思っていると、「先ず我等に網を引かせて様子を見れば、網の仕立方も教えます」というので、早速引かせてみた。

「現在「掛ケ引」とよんでいる大網は百余年前にできたものといっている。地曳に対して、カケビキというのは網船二艘で沖廻して、カケヅナをオカにとつて曳くのでカケビキという称呼があつた。」（『大柿町史』）

この「懸引」は「かけびき」と読むのでしょうか。

あせり

「頃日は天気も宜候へハ、此場合何とぞ御蔵払出精いたし、はか取候様有之度、いか程あせり候ても

来月へも懸り候てハ御蔵前差湊ひ」（享和元年（一八〇一）『広島県史』）

最近^{はかど}は天気も良いので、なんとか年貢米の御蔵払が捗るようにしたいと思います。いくら「あせり候ても」来月へかかつては御蔵前が混雑し、

【焦る】（『広辞苑』）

①気がいらだって足をばたばたさせる。②せいて気をもむ。いらだつ。じりじりする。

ところが、次の用例は少し違います。

「田畑作徳有之ゆへ、至て大切に致し境目をあせり隣地主と争論不絶」（「郡要集」）

（この地域の）田畑は作徳（利益）があるために大切に^{あせ}にして、境界を「あせり」、隣の地主と争論が絶えず、

「境目をあせり」とは、具体的には、境界である畔を削って、自分の土地を広くすることで、当然隣の地主は怒ります。

「出来至而不宜、去年ニハ拔群出来劣、升突ニても既ニ下りニ相成を、其儘実ニ下ヶ候而ハ、御物成

ニも及不足、依之百姓ともたれ掛り、收納を及洪滞候而ハ如何敷ニ付、真実之下りニ而も、初も毛を強くもませ不申、其外升目をもあせり候而、拔群之出来劣リニハ不当様ニ取計」（「理勢志」）

（作物の）出来が大変悪く、去年と比べて拔群の出来劣りで、升突をしても不出来と判るとき、税率を下げれば税収が不足するし、百姓どもも収納を渋るようになる。そうなる困るので、明らかに不作であっても、升突に際しては初も毛を強く揉ませず、升目をもあせって、ひどい不作に見えないようにする。

「升目をあせり」とは、枡による計量操作を誤魔化すこと。その操作の仕形により相当な違いが生ずると思われます。「初も毛を強くもませ不申」とは、初^{はつ}のまゝを計量するので、枡が揉まれますとその毛が落ちて分量が減るので気を付ける、という事でしよう。

「寺院……動もすれば官位相進ニ候様互ニあせり合」（『千代田町史』）

寺院どうしが、……ややもすれば（僧侶の）官位

を上げようと互に「あせり合」

この場合の「あせり合」は「競り合う」の意味でしょう。

「至て差急何卒廿日頃迄二取約候様被仰付候得共、手広之郡中其様火急二相約り不申、成丈相あせり相約可申」（『芸藩志』）

大至急なんとか廿日頃迄に取約めるよう言われますが、手広の郡中のことゆえ急には約りません。できるだけ「あせり」約めます。

「あせり」は「急いで」の意味です。

何れの用例も、辞書が載せている本来の意味から少し捻がった内容を持ったため、（気にかかる）のでしょう。

御垢付

「三次御代よりは格別に御銀御用被為仰付奉指上候に付、御懇御出入被為仰付、家作普請等仕候節は御材木被為下、御垢付御衣服拝領仕候程、尔今正

月社参には着仕候由」（「国郡志御用二付下調書出帳」吉田村、『高田郡史』）

三次支藩ができてからは格別に御銀の御用を仰せ付けられ、差上げてきましたので、御丁寧に出入するように命ぜられ、家作普請のときは御材木を下され、「御垢付」の御衣服を拝領するほどで、今でも正月の社参のときにはそれを着用しております。

「久地村百姓之老母百十二才なる者罷出、座上ニて蒲団敷之儘御目通り被仰付、御垢付御小袖一枚、御金共頂戴いたし」（慶応四年（一八六八）『宮本愚翁日記』）

久地村の百姓の老母、百十二才なる者が出てきて、座敷上で蒲団敷のまま（若殿様浅野長麿に御目通りを仰せ付けられ、御垢付御小袖一枚と御金を頂戴し、

【垢付】（『日本国語大辞典』）

①垢のついていること。また、そのもの。転じて、着古した衣服。特に、故人が生前使用していた衣服。形見に分けるときにいう。②近世、

高貴の方が臣下、またはその他に下賜した衣服の称。普通、紋付である。

ここでは、言うまでもなく②の意味で使っています。一二歳のお婆さんが若殿様の前に引き出されて、迷惑なことだろうと思います。「蒲団敷之儘」とは座布団か、それとも……。

殿様が、その場で着衣を脱ぎ、「ソチニ遣ス」と言いながら下賜するのが本来の「御垢付」の意味でしょうが、ここではそのために準備された新品の小袖に違いありません。「垢付」とはなんともむき出しの言葉ですが、今でも有名野球選手のユニホームが売買されるとき、洗濯してあったら〈価値〉が激減するそうですから、「垢」に値打ちがあるのでしょうが、変な話です。

預り申金子

「借用申金子之事

一金六拾両也 但利足壹ヶ年壹割式分定

右は私義商内仕入銀差支候ニ付、八ヶ年之間元利割払之積ニ御貸被下候様、貴殿へ御無心申入候所御納得被下、書面之金子御貸被下候処、慥ニ借用申所実正明白ニ御座候、然ル上は……」（嘉永二年（一八四九）『上下町史』）

私は、^{あきない}商内の仕入銀に困り、八ヶ年間元利割払で貸してくださるよう貴殿へ御願すると、納得されて書面の金子を御貸しくださり、確かに借用いたしました。そこで……

「預り申金子証文之事

一金拾六両式歩

右は書面之金子、親類証人立会之上、私へ御預ケ被成、慥ニ預り申候処実正明白ニ御座候、然ル上は……」（安政四年（一八五七）『上下町史』）

書面の金額、親類・証人立会の上、私へ御預けなされ、確かに預りました。そこで……

この両通は、いずれも借用証書の一部分です。「○の金額を借用しました。いくらのお利足を付けて何時までに返済します。それができないときは……」と細かに規定してあります。

最初の証文は「借用申金子」と書いていますが、次の証文は「預り申金子」としています。大部分の証文は「借用」ですが、「預り」も見られます。「預る」には、なにか切実さに欠けるような気がしないでもありませんが、「お金を預る」とは結局は借用することだと理解する必要があります。

御戻米・知行取と切米取

「
覚

一当寅年より知行四つ物成被下候事

一同御切米、高拾石二付正米八石五斗相渡候事

一同御扶持方式拾人扶持以上、拾人扶持二付、九人

半扶持被下候事

但、拾九人扶持已下は無引被下候事」(天明二年(一

七八二)「堀川町覚書」)

広島藩では、宝暦三年(一七五三)より家中に半知借上をしていたといえます。

【半知】(『広辞苑』)

江戸時代、藩の財政窮乏を救うため、家臣の知行の半分を蔵入地にとり上げたこと。

『広辞苑』はこう説明してますが、正確ではありません。

広島藩では、知行地を半分取りあげることではなく、家臣の俸禄の半分の借り上げ(借知)ることを「半知」といいます。

【半知】(『日本国語大辞典』)

②江戸時代、藩財政の窮乏を補う手段として、領主が家臣に対し、借上・上米などと称する知行・俸禄の削減を行ない、甚だしい時には俸禄の半分にも達したところから半知と称した。

天明二年(一七八二)になって藩主は、「格別之思召を以、今度別紙之通御戻米被仰出候」として、示したのが上の文書です。つまり、家臣から「借り」ていたのを「戻す」という訳ですが、中身はピンハネ率を軽減するという内容です。

内容を検討する前に、広島藩の禄制の概略を知らねばなりません。

「高百石以上領受の者を知行取と称し郡村にその采地を定めて之を与へられ、所得は五ツ物成ものなりとす。五ツ物成とは例へば知行百石を受くる者は現米五十石を得。……百石未滿を給せらるゝ者を御切米きりまい取と為す。官の米廩より之を受くる……」(『芸藩輯要』)

「当寅年より知行四つ物成被下候事」

禄高百石以上の武士を知行取といい、郡村にその知行地を与え、所得は五ツ物成(高の五〇%)を通常としますが、「半知」ならば「二ツ物成五歩」(二五%)になります。五〇%が二五%に減るので、「ピンハネ率」は五〇%です。天明二年(一七八二)には「四つ物成」(高の四〇%の所得に緩和されました。「半知」に比べれば、「ピンハネ」が軽くなっています(「ピンハネ率」二二〇%)。

「同御切米、高拾石二付正米八石五斗相渡候事」

百石未滿を支給される武士を切米取といい、藩の米蔵から受取ります。減額されて、高拾石につき玄

米八石五斗を渡されるので、「ピンハネ率」は一五%の計算です。多く借り上げると、低所得者は生活できないので配慮したのでしょう。

「同御扶持方式拾人扶持以上、拾人扶持二付、九人半扶持被下候事、但、拾九人扶持已下は無引被下候事」

儒医などは、毎月若干の扶持米の給与を受けていました。拾人扶持を貰うべきところを九人半に値切られる訳ですから、「ピンハネ率」は五%。但し、拾九人扶持以下の者からはピンハネしない。

百石が知行取りと切米取りの分れ目だとの説明には、「なるほど」と一応は納得しますが、「よく考えてみると夜も眠れない」ほどの大問題です。例えば、百石の知行取りの所得は前述のように五〇石ですが、九〇石の知行取りはそのまま九〇石ですから、こちらの方が多くなる。

「切米取りの侍士は、本来、二十石以上百石未滿の禄とされているが、実際は六十石代が最上限となっていた」(武田正視『木原適処と神機隊の人々』)

この説明を聞いてようやく安心しました。

早追

「拙義、老母病氣見舞に、六月七日より俄に出立、七月中在郷、八月六日に帰京候。京の大変（地震）、大に氣遣候て、如早追（急行飛脚）帰申候処、さまでも無之、皆々無事安心仕候。老母は復常、第一是にて帰られ候也。」（天保元年（一八三〇）『頼山陽書翰集』）

私は、老母の病氣見舞に六月七日より俄に出発して、七月中は広島に居り、八月六日に帰京しました。京の地震が大いに氣遣いで、早追（急行飛脚）のように大急ぎで帰りましたが、それほどなく皆々無事、安心しました。老母も回復し、おかげで帰ることができました。

編者は「早追」を「急行飛脚」と注を付けています。

【早追】（『広辞苑』）

江戸時代、急用のため昼夜の別なく駕籠（かご）を飛ばした使者。駕籠舁（かごかき）の人数を増し、宿駅ごとに乗り換えて間断なく走らせた。はや。

「御早道ノ者 月々再度宛広島江戸ノ間ヲ往復シテ御書状ヲ持参ス、此時御家中初メ末々迄衆状モ御世話被下ニ付持参ス、不時早追ノ輩有之節附添旅行ス、通常広島江戸行道ヲ十五日間トス」（『芸藩輯要』）

御早道ノ者（飛脚） 月に二回、広島・江戸の間を往復して御書状を持参する。この時、家中初め末々の手紙まで御世話くださるので持参する。「早追の者」があるときは、付き添って旅行をすることもある。通常は広島・江戸間は十日かかった。

この場合、飛脚が附添うこともある「早追」は、（急行飛脚）ではなく、（急行駕籠）のような気がします。

蠅打

「殿様御病氣御養生不被為叶、今廿一日御逝去被遊候、依之何も相愼、火之元別て入念候様人別へ可申渡候

寅十一月廿一日」(天保元年(一八三〇)「鶴亭日記」)

殿様(広島藩主、浅野斉賢)の御病氣は養生の甲斐無く、今廿一日御逝去されました。よって、何事にも愼しみ、火の元は特に氣を付けるよう人別に申渡しなさい。

との、代官より指示があり、「御穩便ニ付」「相愼」むべき事柄とその期間が知されます。

「(前略)

一桶屋職 大工職 木挽

右かなな削り等居職之手前々々ニて職致候儀ハ不苦候得共、是亦随分隱密ニ可仕候事

(中略)

一蠟打 油絞

右居職之儀故不及用捨候事」(天保元年(一八三〇)「鶴亭日記」)

桶屋職・大工職・木挽は、鉋削りなど、居職(屋

内労働)でそれぞれが仕事をする分は構わないが、目立たぬようにしなさい。蠟打・油絞りは居職なので、休業しなくてよい。

「油絞」は菜種・綿実などから油を絞ることですが、「蠟打」とはどんな仕事か、調べました。

「漆之実蠟打申候板場、当村百姓勘介手前ニて方々漆之実買集、当月末より来春迄ニ木蠟八拾貫目ほど出来仕候、毎年広島大坂出し売払申候」(享保六年(一七二一)『加計町史』)

漆の実を蠟打する仕事場(板場)では、当村百姓勘介が自分で漆の実を買集め、当月(九月)末より来春迄に木蠟を八拾貫目ほど作り、毎年、広島や大坂に出荷しています。

この文書から、櫨(うすし)科の落葉高木)の実を原料として木蠟を作る



仕事を「蠟打」といったことが知れます。

燼の実を粉にし、蒸して、圧搾機で絞^{しゅちく}り出します。

その圧搾の仕方は「矢」（くさび）を「撞木」で打込みます。まるで釣鐘を鳴らすときのようなのです。ここから「蠟打」という言葉が出たと思われます。「蠟打」と「油絞」が併記される理由は、その製法がほぼ同じだからです。

【板場】いたば。（柏書房『日本史用語辞典』）

江戸時代、蠟の絞り場を称した。燼から蠟をとるため、燼板場の名も長州藩ではみられる。

以前、「油絞りの作業場を板場という」と説明しましたが、蠟打の作業場も板場というようです。

「蠟搾り機」のサイトに写真があります。

帰省

「猴子橋頭生暮煙
已看兩岸市燈懸
同人莫恠吾行疾

欲及萱堂未就眠

己酉帰省到以即事

頼襄

猿猴橋のほとりには夕煙りがかかっている。すでに、川の兩岸には町の燈火が見える。同行の人よ、わたしの足早やなのをあやしみなさるな。母上が休まれる前に、家に帰りつきたいのだから。

文政八年広島に帰省して作る 頼襄

猴子橋頭 暮煙を生じ

已に看る 兩岸 市燈の懸るを

同人 恠しむ莫れ 吾

が行くの疾きを

萱堂未だ眠に就かざるに及ばんと欲すればなり」

これは、広島、鶴見橋の西詰にある頼山陽の詩碑です。猿猴橋を渡って広島市の街に入ると、思わず早足にな



る……母親(萱堂)思いの四六歳の山陽です。

帰省とは、「故郷に帰ること」とばかり思っていたが、辞書を引くと、

【帰省】(『漢字源』)

故郷に帰って父母の安否を問う。

とありました。

御領分追放

「惣百姓共へ申及徒党ヲ企、一村及騒動強訴之次第不届ニ付、九郎左衛門儀死罪被仰付、其外左之人相之者共は御領分追放被仰付候間」(天明二年(一七八二)「堀川町覚書」)

惣百姓共を語らって徒党を結び、村を挙げての騒動強訴に及んだ次第は不届きにつき、九郎左衛門は死罪、そのほか左の人相書の者共は「御領分追放」とする。

死罪と御領分追放とは天と地の違いがあります。が、「御領分追放」とはどのような刑罰なのか、調

べました。

「虚無僧三省儀、去夏高宮郡可部町ニ於て手荒之振廻致被召捕、御領分追放ニ相成候処立帰、熊野跡村百姓仁右衛門宅ニて及狼藉、吟味之上当五月東御境へ追放ニ相成候処亦々立帰御領分中徘徊致害障ヲ成候風聞有之候条」(天保元年(一八三〇)「鶴亭日記」)

虚無僧三省は去夏高宮郡可部町で手荒の振廻をして召捕られ、「御領分追放」になっていたのに立ち帰り、熊野跡村百姓仁右衛門宅で狼藉に及び、裁判により当五月に東御境へ追放になったが、又々立ち帰って御領分中を徘徊して害をするという噂があり、

「御領分追放」の文字通り、「東御境」へ連れて行き「御領分」から「追放」することでしょう。「東御境」は尾道の房路で、「御番所」がありました。

「頭取八郎次御領分追放防州小瀬へ被送申候」(文化十一年(一八一四)『加計町史』)

頭分の八郎次は「御領分追放」となり、防州と

の境、小瀬に送られた。

これは、西の国境に送られた例です。

「右之者、御領分追放被為仰附御送り被為遣、慥ニ受取申候、直ニ革田ヲ附次村へ送届申候」

右之者、御領分追放の判決により送られて来たので、直ちに革田（警固の者）を付けて次村へ送り届けました。

という庄屋の報告がありますので、リレーで村送りをしたのでしょうか。

「組頭・長百姓為見届御境目迄罷越候節は、平用出飯米定例之通り」

組頭・長百姓が見届けのために御境目まで行く場合は、いつもの通りの出飯米（出張旅費）を支給する。

村役人までが国境まで連れて行く場合もあったようです。

掛持家

「掛持」という言葉があります。

「八幡宮……壺社

神主同郡矢野村香川日向守掛持」（『熊野町史』）

（川角村の）八幡宮の神主は、矢野村（尾崎神社）の神主香川日向守の掛持である。

【掛持ち】（『広辞苑』）

二つ以上の仕事を兼ねて受け持つこと。兼務。兼任。

「掛持庄屋受村へ入込逗留之節、夜具損料村割取計候村方も相見候得共、以来自分払之事」（『広島県史』）

「掛持庄屋」が担当の村へ入り逗留するときの夜具の損料は、村費負担としないで自己負担としなさい。

掛持庄屋とは二ヶ村以上の庄屋役を受持つ者といえます。これらは「兼務」と理解して不都合はありませんが、次の「掛持家」には少々困ります。

「小商人庄八娘もよ 西の小路にて茶屋伝三郎掛持家に借宅す」（『知新集』）

「町内私掛持家、表五間、裏入拾七間、但シ家之入九間御座候、此家太右衛門と申者ニ貸シ置、小商仕居申候処」（『堀川町覚書』）

町内にある私の「掛持家」は表五間、裏入拾七間、家の入九間ですが、この家を太右衛門と申す者に貸し、小商をしておりましたところ、

これらの例文から見ると、「掛持家」は借屋のようです。複数の住宅を所有しているとき、本人が居住している居屋敷以外の家を「掛持家」といい、借屋などにあてたものと考えられます。

「借屋并掛持家ハ家主より念を入可申付候」（『堀川町覚書』）

借屋や掛持家は家主より（火の用心に）念を入れるよう指示しなさい。

「借屋并掛持家」と併記していますので、単なる「借屋」とは違いがあるのかもしれませんが。

「家持は、文政期には約三軒の借家竈を有し、しかも町家のうちその大半を「抱」とか「掛持」として兼併し、店舗規模を拡大するかあるいは借家とし

ているのである。」（『広島県史』近世2）

「表通りの家が借家（掛持ち家という）となることもあるから」（『新修広島市史』3）

【抱】（『近世用語の概説』）

本人の居住する居屋敷とは別に、買得所持された屋敷をいい、又掛持ともいう。「大身成者」がむやみに方々へ抱屋敷を持つことは禁止されていた。

解説を読むと、よけいに混乱します。

御払米

「郡中御年貢米見改請米御蔵所有之、毎秋收納の頃には広島より士列御蔵奉行出張請米有之、此御蔵より直二大坂登セ御払米に相成」（『郡要集』）

（御調）郡中の御年貢米を検査して収納する御蔵所が（尾道に）あり、毎秋收納の頃には広島より士列の御蔵奉行出張して年貢米を受取り、この御蔵より直に大坂に登せて「御払米」になる。

この資料からうかがえるように、年貢米を売払うことを「御払米」といいます。

【払米】はらいまい。（『世界大百科事典』）

江戸時代において年貢米（蔵米）を売り払って換金化する行為、またその売払米を総称する。年貢米の多くは大坂、江戸等の幕府直轄の大都市で換金化された。しかし大名領など国元での払米や村段階の払米もあり、前者は地払、後者は在払、郷払、村払などとも称された。いずれも払米の一形態である。（本城 正徳）

「御年貢米并俵拵等念入収納致候様二との義ハ是迄触し置候趣も有之、其段ハ下方ニも能相心得居候義と相見候、縄俵等迄も念入拵立候分も有之候得共、村ニ寄候てハ縄俵等至て匱略薄側ニ仕立差出し候分も儘有之、受米ニ難相成分ハ於御蔵所ニ刎俵等ニ相成、替俵指出候類も毎度有之趣相聞、……薄側仕立之分ハ別て抜こほれも多く、……大坂浜方ニおゐて薄側之分は不相好、外向評判ニも相懸り候義も有之、就てハ御払米直段へも相響キ、

彼は御不益不少ニ付」（文化十四年（一八一七）「野間家文書」）

御年貢米は丁寧に俵拵えをして納めるようにとこれまでも指示しているので、農民も心得ているが、村によっては縄俵等が粗略で、俵を薄側に仕立て差出す分もあり、御蔵所で「刎俵」（不合格の俵）になつて、代りの俵を出すことも毎度あると聞く。……俵の側が薄いと米の抜けこぼれが多く、……大坂浜方（大坂堂島米市場の仲買）でもこれを嫌う。これでは広島米の評判にも関係し、「御払米」直段へも影響して、不利益も少くない。

「右三カ村之義ハ兼々御承知も被為在被下候通、田方無數村方ニて先年より御差次御願申上候、尤米納増之御趣意被為仰出候義ニ付、成たけ御差次減少仕、米納相増候様取計申度と役人共ニも精々心配仕、……近村余米等之融通ヲ以米納仕候も御座候、若近村余米等も無御座候得ハ、御示談ニおゐて運賃米并御家中様御払米等買入俵直し仕、御蔵払仕候外致し方も無御座候」（天保三年（一八三二）

『海田町史』)

右の三カ村はご承知の通り、田の少ない村で、先年より御差次(年貢の銀納を御願しています)が、米で納めるようにとの御指導もあるので、銀納を減らし、米納を増やすよう役人共が努力し……近村の余った米を買取って米納をしますが、それもないときは運賃米や御家中様の「御払米」等を買入れ、俵を作り直して、藩の御蔵に年貢米として納めます。ほかに仕方がありません。

この例は、藩士が手に入れた年貢米を換金する場合で、前記解説の「地払」の例です。

運賃米

前回の資料中に「運賃米」という言葉がありました。

「もともと租米は広島城下の米蔵まで百姓役として運搬し、納入することを原則としたが、……慶安

二年(一六四九)三原・尾道・木浜・竹原・三津の五か所に新たに米蔵を置き、また三次支藩還付以後は三次の米蔵においても租米の納入を認めて便宜をはかった。……広島城下の米蔵以外に納入の分は、それぞれの米蔵より広島までの所定の運賃米は百姓の負担とされていた。」(『新修広島市史』)

「浦辺御蔵運賃米 但御年貢其外種米壺歩米等之類、浦辺御蔵へ上納仕候得ハ米壺石ニ付運賃米式升宛相添出シ申候、此米高例年千石程御座候、右運賃之義浦辺御蔵無之候得ハ広島へ相納申筈ニ候処右之通浦辺ニて上納済候様ニ被仰付候付畢竟広島迄之運送之心ニ右之通出シ申候」(「広島藩御覺書帖」)

御年貢、そのほか種米・壺歩米等を浦辺御蔵へ納入するときは、米壺石につき式升(二%)を「運賃米」として添えて出す。この米は例年千石程ある。浦辺御蔵がなかったら広島へ納入するはずなのに、浦辺御蔵で上納が済むので、広島までの運賃のつもりで出している。

この「運賃米」を出していると思われる村の免割帖をみても、「運賃米」なる言葉を見つけることができませぬ。しかし、免割帖に記載が無くてもやはり出していました。

「藩ノ米廩迄ハ民費ヲ以テ運送ス、而シテ米廩ニ二種アリ、広島ニアルモノヲ御蔵所ト唱へ各郡ノ海浜ニアルモノヲ浦辺御蔵所ト云フ（本郡ニテハ忠海村ニ置ク）、広島納メ正則ニシテ、浦辺納メハ町村ノ便利ニ備へタルモノトセリ、故ニ広島倉ノ納米ハ三斗入壺俵ハ（込米式升四合乃至式升七合ヲ加入シタルモノ）則チ三斗ノ収納ニナルモノ、浦辺倉ノ納米ハ三斗入壺俵ヲ（込米前条ニ同シ）式斗九升式合六勺四才七毛ノ収納トス、則チ納米百石ニ付式石五斗壺升式合五勺余ヲ正数外ニ、徴収スルモノナリ、広島倉迄ノ回送費等ニシテ藩内一般ヲ平均同額ニシタルモノト言ヒ伝へタルモノ、其計算ヲ知ルモノナシ」（「淡交夜話」）

年貢米などは、藩の米蔵までは農民が自費で運送するのが原則である。藩の米蔵には二種

類あり、広島にあるものを御蔵所といい、各郡の海浜にあるものを浦辺御蔵所という。広島に納めるのが正則で、浦辺蔵納めは町村の便利のために備えたものとしている。だから広島蔵の納米は三斗入壺俵（込米として式升四合ノ式升七合を加えてある）をそのまま三斗と評価するが、浦辺蔵の納米では、三斗入壺俵を（込米は広島納に同じ）を納めても式斗九升式合六勺四才七毛を納めたとして計算する。つまり納米百石につき、式石五斗壺升式合五勺余を余分に徴収する。この額は広島蔵までの回送費を藩内一般で平均同額にしたものといわれているが、なぜその数字になるのか知る者はいない。

正味〇・三石の米を、〇・二九二六四七石と評価するのだから、いくらの米を納入すると一〇〇石と認めてもらえるのか、比例計算をすると、

正味0.3石：評値0.292647石＝正味x石：評値100石

$0.292647 \times x = 0.3 \times 100$

$x = 102.51258$

つまり、「広島藩御覚書帖」の記述（壺石ニ付運賃米式升）とは違って、二一・五%余の運賃米（壺石ニ付

運賃米式升五合余)を負担していたことになります。

「藩府は領内の年貢米収納のため広島城下以外にも三次・竹原・三津・忠海(はじめは木浜)・三原・尾道等に米蔵を設けていた。三次以外はすべていわゆる浦辺蔵方であったが、収納米はほとんど直接上登せ米にあてられたのである。蔵米の運輸には民間の廻船が用いられたが、その方法は幾度か改められている。はじめは船手奉行の支配するところで民間の廻船を徴発して行われたが、寛文(一六六五前後)ごろ蔵奉行支配に改められ、天和三年(一六八三)にはふたたび船手奉行支配となり、それぞれ所定の運賃米が支払われていた。運賃米は竹原米蔵より積登せのものについてみれば寛文以前は石につき三升七合、その後延宝五、六年(一六七七・八)ごろまで三升三合、ついで三升二合に減じられ、天和三年(一六八三)以後はまた三升四合と増し、その後長くこれが行われた。」(『新修広島市史』³⁾)

この説明によると、浦辺蔵で収納された年貢米の

ほとんどは直接大坂に送られたといえます。すると、農民から広島への「運賃米」を取る根拠がなくなる筈ですが、それでも建前から徴収しています。

この解説にも「運賃米」がでてきます。これは年貢米を大坂に廻漕するために、藩が廻船業者に運賃として払う米で、名前は同じでも、中身は大きく違うものです。

かけ紙

「態申進候、然は国郡志下しらへ帖御出し被成候二付、小内見合夫々かけ紙致し差戻し候間、小内得斗御見合御調可被成候」(文政二年(一八一九)『湯来町史』)

連絡いたします。「国郡志下しらべ帖」を提出されましたので、内容を検討しました。問題の個所には「かけ紙」をして差し戻しますので、充分参照して作成してください。

これは、広島藩の地誌『芸藩通志』編集のため、

各村から出された「国郡志下しらへ帖」の再提出を求める担当割庄屋からの下村庄屋宛の達しです。「下調帖」に不備があつたのか、その個所に「かけ紙」をして差戻しています。「かけ紙」という言葉は初めて見ました。普通は「付紙」をして書類が役所から戻ってきます。

【付紙】 つけがみ。（『広辞苑』）

①文書中の必要な箇所にしるしとしてつけておく紙。さげがみ。付箋。不審紙。②合図や目じるしとして門口などに貼り付けた紙。

【懸紙】 かけがみ。（『広辞苑』）

①文書の本紙の上に懸ける紙。書状などの巻いた上を包む紙。包紙。表巻。^{うわまき}②進物の上包みに用いる紙。多く熨斗・水引などの形が印刷してある。

今なら、「ポストイット」にコメントを書込み、貼付けるところですが、「懸紙」は包紙ですから、沢山のコメントを書くわけにはいきません。この説明は、ここでは当てはまらないので、更に探すと、

ありました。長い引用ですが、面白いので……、

【懸紙】 かけがみ。（『世界大百科事典』）

古文書学上の用語。書札様文書はふつう三紙から成る。本文を書くのが本紙で、それと友紙^{ともがみ}をもう一紙付して奥から折り畳む。これを礼紙^{らいし}という。その上をさらに別の友紙で包み、うわ書きを加える必要に応じて封をして相手方に届ける。これを封紙^{たてがみ}というが、中世の書札礼では上巻（表巻）といい立紙とも称している。本紙、礼紙は料紙を横に使うが、封紙は縦に使うから立紙という。また文書を保護するため、それを受け取った人がのちに別の紙で包むことがある。これを包紙という。懸紙^{かけがみ}というのは封をするしなにかかわらず、本紙の上に懸ける紙のことである。したがって一般には封紙（上巻、立紙）のことを懸紙というが、包紙をさす場合があり、時によっては礼紙を懸紙ということもある。それゆえ、懸紙という概念ははなはだ漠然としており、正確には封紙、包紙、礼紙という言葉を使つたほうがよい。（上島有）

また文書に貼付された付箋の一種で本文を増補

・削除または訂正する目的をもった紙片をもう。付箋は通常、紙片の一端にのりをつけて付すのに対し、紙片の上下にのりづけして固定する形式のものをとくに懸紙おかしと称する。なお紙片全面にのりづけしたものは押紙おしと呼ばれる。(笠谷和比古)

やはり、一種の付紙でした。

草手

「百姓の草手にたつや夏の雲　玄珠」(文政七年(一八二四)「鶴亭日記」)

【草手】くさて。(『日本国語大辞典』)

他人の土地の草を刈って払う代償。

と、辞書は説明しますが、勿論、この句の解釈には役に立ちません。すぐ、後に、

【草手銀】(『日本国語大辞典』)

江戸時代の小物成の一種で、入会の草刈場に課された軽租。または入会村から地元村へ納める

用益料。

の項目があり、これから「草手」の解説をひねり出したことが分ります。誤りではないとしても、基本の意味から大きくシフトした用語ですから、応用が利きません。

この俳句の状況から想像すると、「草手」は「草」のことだと思えます。真夏の昼下り、百姓が草を相手に汗を流しながら働いています。草を引いているのでしょうか、草を刈っているのでしょうか。それとも田の草を取っているのかも知れません。頭を上げると、むこうには、白い入道雲が……。

「殿様御鷹野之節、加子町御(下)屋敷へ御立寄被成候御内意ニ御座候、……御掃除之御心得ニ相成可申ニ付御内々御知せ申置候様ニとの事御坐候由、……草手のミにても余程かゝり申候ニ付、早速より御用意之儀申談」(享和二年(一八〇二)『三原市史』)

殿様が御鷹野のとき加子町の御(下)屋敷へ御立寄りになるとの御内意です。……御掃除の心

組みのため内々知らせるようになること、…
：「草手」だけでも余程日数が懸るため、早速
より準備に取りかかるよう、

ここの「草手」は庭の掃除として草を抜くこと。

「当村中入相野山毛上薪二伐り取、夏柴草茹取肥手
二仕、且ハ牛馬飼所ニ御座候…何分にも以前と
違追々人増二相成、伐茹も手強草手も不自由二相
成、此先キ後年ニ至り如何可有御座」（『産業の発
達と地域社会』）

当村中の入相野山は、毛上を薪として伐り取、
夏には柴草を茹り取って肥料にし、牛馬を飼う
所です。何分にも以前と違い段々と人口も増え、
伐茹も増加して「草手」も不自由になり、この
先キ後年になればどうなるのかと、
ここの「草手」は、色々と利用される草木を意味
しています。

「保田村 ……水利よく、柴草多し、

始終村 ……水利草手、前村に同じ」（『芸藩通志』）

始終村は、保田村同様に水利はよく、柴草は多

い。

「稻毛草手の儀ハ、植仕舞より凡十五日ニ当頃より
一番草を取、夫より十五日振程ツ、に式番草三番
草を取候迄ニて、手入相済」（奥屋村「国郡志御用
書上帳」）

稲の草取りは田植の後約十五日にあたる頃から
「一番草」（最初の除草）を取り、それから十五
日ごとに「式番草」「三番草」を取るだけで手
入れを済まし、

ここの「草手」は「田の除草」です。

「堤筋へ櫨苗植附方之義、……差間筋は無之哉、尤
作物其外草手等差間も可有之候ニ付、地主・作人
共へ熟談いたし、植附度趣」（嘉永二年（一八四九）
『海田町史』）

堤防に櫨苗を植えることは差支えはないか、作
物やほかの「草手」等に不都合なことも考えら
れるので、地主や作人共へよく相談して植付け
たい趣

農民にとって「草手」は、単に除草の対象だけで

なく、肥料であり、飼料であり、燃料であり、建築材料にもなる……、生活に結びついた「草」を示す言葉だと思います。

好ミ

古文書に「好ミ」という言葉がたびたび顔を出し、悩まします。

「近來は上下交々奢侈に移り、片鄙遠郷卑賤の輩に至るまで、華美を好ミ百姓も農事を厭ひ武士の勤等を心掛、或ハ市店商賈等の風俗を好ミ自から耕作に疎く成り行くこと多し」（『地方凡例録』）

近頃は上も下もだんだんと奢侈になり、片鄙遠郷卑賤の者までも華美を「好ミ」、百姓も農事を嫌がって武術を心掛け、または市店商賈等の風俗を「好ミ」、自然と耕作に疎くなることが多い。

これは言うまでもなく「好きだ」ということで、悩むことはありません。

「おろしや寒国ゆへ米穀無之二付、日本に好ミを結ひ、此已来交易などいたし度、且は先年の御礼とし使者を以て献上物持越候」（「筑紫道草」）

ロシアは寒国のため米穀がないので、日本と「好ミ」を結び、これからは貿易をしたく、且は先年の御礼とし使者を遣わして献上物を持たせた。

これは、「よしみ(好・誼) 親しいまじわり」です。

「諸帳面是迄郡御役所にて色々御好ミ御座候て度々調替無尽之費御座候て百姓不勝手ニ御座候」（享保三年（一七一八）『加計町史』）

諸帳面のこと、これまで郡御役所で色々「御好ミ」があつて、度々作り直しをさせられ、無駄な費用がかかり、百姓は困っています。

この史料は、享保の一揆のときの「乍恐御願申上ル口上覚」と題する「山県郡百姓」の要求書の一節です。

【好み】このみ。（『広辞苑』）

①好むこと。特に興味をひかれること。嗜好。えりごのみ。ものずき。②歌舞伎で、衣装などについての役者の注文・希望。③時好。流行。④（「…ごのみ」の形で）そのものを特に好む意を表す。「派手」

この中で、無理矢理に当てはめると、「えりごのみ。注文・希望」でしょうか。「役所で色々と注文があつて、書類を書直させられる……」と解釈できないことはありません。

「先達て被指出候寺院人別書出し草按之趣ヲ以、其々触頭へ指出候様可被申渡候、尤尚触頭より之好ミも有之候ハ、其趣ニ随ひ書出し可然候」（寛政二年（二七九〇）「野間家文書」）

先頃、指示した「寺院人別書出し」は雛形のように作成して、触頭の寺院へ差出すよう連絡しなさい。なお、触頭よりの「好ミ」もあれば、それに従つて書出してもよろしい。

触頭からの「好ミ」は、「注文、意向」とみてよさそうです。次の史料で、「好ミ」を「注文」と理解して不都合がなければ、合格です。

「前年御年貢、其外上納米、御米蔵へ納候分ハ、当分御蔵奉行中より受切手被差出置候分、本切手仕替可申二付、又々品分好書を以、右当分手形本切手二仕替候様ニと、御代官中へ御蔵奉行中より申来候也、左候得は、前年ニ收納致し置候米何程ハ御年貢切手、何程ハ給米利足ニ御調可被下と御代官中より好有之事也、右二品ニかきらず、郡二寄納所米有之候へハ、其品を上ケ好候事」（「理勢志」）

前年の御年貢などの上納米で御米蔵へ納めた分は、差し当たり御蔵奉行の発行した「受切手」（仮受領証）を「本切手」に替えるので、又々「品分好書」で御蔵奉行から御代官へ、「本切手に替えるよう」連絡がある。そこで、前年に収納した米の内、何程は御年貢切手、何程は給米利足と調べてくださいと御代官より「好」（注文）があります。右の二品に限らず、郡によつては「納所米」があれば、その品を上げて「好」（注文）があります。

「態申進候、然は態申進候、然は国郡志下しらへ帖

御出し被成候ニ付、小内見合夫々かけ紙致し差戻し候間、小内得斗御見合御調可被成候、尤産物之義、此節夫々部類を分ケ御好書御下ケ被下候処、余も大造成事故兼て書写し相廻し候義も難相成、勿論藥物等之義は難相分品類も在之候ニ付、委ク御書出し被成候ハ、此方ニて部類取分ケ書直シ可申ニ付」(『湯来町史』)

連絡いたします。「国郡志下しらへ帖」を提出されましたので、内容を検討しました。それぞれかけ紙をして差し戻しますので、充分参照して作成してください。もともと産物については、この節それぞれ部類を分けた「御好書」を藩から頂きましたが、あまりにも大部なもので書写しして廻すことも難しく、勿論藥物などは分りにくいので、全部書き出してあれば、こちらで分類して書直します。

「品分好書」「御好書」という言葉まで出てきましたが、「注文を付けた書類、意向を示す書類」と考えたらどうでしょうか。

宜男

「九百六拾貳人 男 但、弘化三年御改以後貳百三拾六人増し

(中略)

右男人数之内

一宜男九拾八人 但、貳拾歳より四拾才迄

内 貳拾五人 上

七拾三人 中」(嘉永五年(一八五二)一月『甘日市町史』)

これは、地御前村の人馬改め(人口調査)の書付の一部です。この中に「宜男」という言葉があります。同書の注釈によると、

「人馬改めは、藩政時代に各村から書き出された戸口調査の一種で、その実施について広島藩では寛文二年(一六六二)までさかのぼることができる。

その後享保十一年(一七一七)からは幕府の指令にもとづき、子と午の年に全国で画一的に人馬改め

が行われた。この正式の人馬改めは主に農業労働力の把握にその中心が置かれていたため、各家別にその持高、家数、家族構成員の名前、性別、年令を記し、前調査期との異同についてもその理由を付し、この他に牛馬数とその増減についても書き上げている。……ところで本史料中にみえる二十歳から四十歳までの「宜男」の調査は、特に夫役数の把握を目的としたものであるが、この時期のものになると、助郷人足の調達にも利用されていたらしい。そしてのちにはこれが、海防への資料としての意味をも持つようになっていった。」

これは嘉永五年（一八五二）子年一月の報告で、人口の増減を六年前の弘化三年（一八四六）午年と比べています。毎年報告したのではなく、やはり子年・午年に出したものと思われます。

夫役負担に堪えられる者となると、男性であり、年齢二〇～四〇歳の条件が付きます。もつとも、「宜男」は九八人で、男性の一割に当ります。ピラミッド形の人口構成を考えると、二〇～四〇歳の年齢の

者は全体の三分の一、約三〇〇人はいると想定すれば、「宜男」はその三分の一を占め、約一割です。

夫役負担に堪えられる屈強の男で、徴兵検査でいう

「甲種・乙種合格」のようなものかもしれません。

『下蒲刈町史』の解説では、

「牛馬の前にある「宜男」は、御船方に徴発される加子役（＝船頭・水夫）に適する人数を書き上げたものである。」

「前々は宜男の分せい恰好、歳申出候得共、近年迄是は御手廻り御駕籠之者に御抱の為也」（「郡要集」）

以前は、「宜男」については背格好や歳を報告していた。今では御手廻りの御駕籠の者を召抱える為に利用している。

この記事は「郡要集」の「諸郡年中行司」の「正月」の項にあります。つまり、「人馬改」は一月に報告すべき事柄です。

「宜男」は「宜しき男」と読むのでしょうか。

寺判

「人数合五百五拾壹人 内 三百九人 男

貳百四拾貳人 女

但、寺判人数、用場へ書付差上候事」（安永四年（一七七五）七月「堀川町覚書」）

いきなり「寺判」という言葉が出てきました。

【寺判】（『広辞苑』）

寺院の印。寺印。

極めて基本的な意味を書いています。しかし、ここでは役に立ちません。

「寺判人数五百六拾壹人 内 三百二十人 男

貳百四拾壹人 女」

（天明二年（一七八二）七月「堀川町覚書」）

「人数合」「男」「女」の人数が書いてあれば、人口調査と考えられます。しかも「堀川町覚書」の中にメモのように書き加えてあるので、堀川町の人口

のはずです。

「 覚 堀川町

一人数合五百五拾貳人 内 三百拾壹人 男

貳百四拾壹人 女

（中略）

右、人改之儀、町中家持借屋末々迄吟味仕、少も相違無御座候、以上

天明二壬寅年三月廿九日 年寄久賀屋六右衛門」

（天明二年（一七八二）三月「堀川町覚書」）

同じ年の三月の「人改」報告書で、堀川町の人数を五五二人と書いていますので、「寺判人数五百六拾壹人」は堀川町の人口に違いありません。

「人口調査」と「寺判」の取り合せなら、宗門改に関する事項です。

明和年間（一七六四く七二）に高田郡多治比の丸屋甚七が書いた「家業考」に、

「○六月……廿八日ニハかならず宗旨証文を寺よりもらい五人頭へ渡すべし。是を寺はんといふ。（丸屋甚七「家業考」『日本農書全集』所収）

とあり、同書の解説に、「藩政時代には、寺が宗門改めとして檀徒であることを証明し、秋に宗盲人別帳をつくつていたが、宗旨証文とは寺から出す檀徒証明書のことである。」

寺の発行する寺判(檀徒証明書)を役人に提出する、その集計が「堀川町覚書」の記載となり、「用場へ書付差上候事」(役場に書類を提出することになる)でしょう。その後の手続は、

「一八世紀初頭、享保初年ごろの宗門改めの制度をみると、毎年九月に宗旨鉄砲改奉行が出張し、檀那寺が取調べて寺判を押した帳簿を検査し、異常の有無を確認するということ、……」(『広島県史』近世Ⅰ)

中田・晩田

「早稲・中田・晩田ト、三田とも夫々出来立之遅速善悪有之ニ付、三田とも別々升突致し、惣有米を

極メ、御年貢ヲ取、其余作徳ニ定ル」(「理勢志」)

早稲・中田・晩田の三田とも、それぞれ成熟の遅速、善悪があるので、三田とも別々に升突(収量調査)をし、惣有米を極め、御年貢を取り、其の余を農民の作徳にする。

「初二熟ル稲を早稲わせといふ、次ニ熟ル稲を中田といふ、又其次ニ熟ル稲を晩田といふ……中田・晩田毛之見分……」(「芸州政基」『広島県史』)

最初に熟れる稲を早稲わせといい、次に熟れるものを中田といい、その次の稲を晩田という。

三田ともルビが付いていればよかったのに、あるのは早稲だけ、そこで「中田・晩田」をどう読むのかを考えます。「早稲」は「わせ」ですから、これは問題にしません。

【早稲・早生】わせ。(『広辞苑』)

(ワサの転)。稲の品種の中で、早く開花・結実・成熟するもの。早生稲。

「中田」「晩田」を「なかくて」「おくて」と読んでいますが、「なかくた」「ばんた」といってはいけません。

んか。

「奈良時代には、すでに熟期によつて早稲と晩稲（おくて）の区別があり、『万葉集』には〈早田〉〈早稲〉の語が見えている。平安時代になると、さらに中間の（なかくて（中稲））が現れた。早稲を作付けするのが早田、中稲をつくるのは中田、晩稲をつくるのが晩田と呼ばれた。〈黒田日出男〉」（『世界大百科事典』）

この説明では「中田」を「なかくだ」、「晩田」を「おくてだ」と読んでいます。もともと、これらは作付する田の名前で、いま問題にしている稲の品種名ではありません。品種名では一般につきのようによい

【中手】なかくて。（『広辞苑』）

早稲と晩稲との中間期に熟する稲の品種の総称。中稲。

【奥手・晩生・晩稲】おくて。（『広辞苑』）

植物の比較のおそく生長・成熟する品種。特に稲にいう。おしね。

田の名前である「中田」を品種名を示すものに転用しているので、話がややこしくなりますが、品種名を示すものなら「中田Ⅱなかくて」、「晩田Ⅱおくて」と読む外はなさそうです。『百姓伝記』もそのように読んでいます。

「種かしをする時節は、二月の節に入て、二日三日めより早稲種をかし、水にひたす。中田の種を六日めに種かしする。晩田籾を、また二日三日もをそく種井に入るゝなり。十日のうち、また七日のうちに早稲・中田・晩田ともに種かしする事、古法なり。」（『百姓伝記』上）

前述の「芸州政基」に「中田・晩田毛之見分」なる言葉があります。「晩田毛Ⅱおくて」から「毛」が抜けて（省略して）「晩田Ⅱおくて」になったと考えればいいのかもしくれません。

自由

「和子さま御宮参のよし、……参し候筈ながら、田舎より俄に客おはし候て、取紛れ候まゝ、自由なからまつく文もて御祝ひもうふし上まいらせ候」(天保十二年(一八四一)『女用手習鏡』)

お子様の御宮参りとのこと、……参るつもりでしたが、田舎から俄に客があり取り紛れて、「自由」ながら差当たり手紙でお祝い申し上げます。

これは女性用手紙文の例として出版されたものです。この中に「自由」という言葉が出て、戸惑っています。

【自由】(『広辞苑』)

②(freedom; liberty) 一般的には、責任をもつて何かをすることに障害(束縛・強制など)がないこと。自由は、このような条件からの自由、何かへの自由であり、条件と目的によってさまざまである。無条件的な絶対の自由は人間にはない。自由は、障害となる条件の除去・緩和によって拡大するから、目的のために自然的・社会的条件を変革することも自由と呼ぶ場合がある。この意味での自由は、自然・社会の法則の

認識を通じて実現される。(イ)社会的自由。…
…(ロ)「意志の自由」に同じ。(ハ)倫理的自由。
……

これは『広辞苑』の【自由】の項の、ごく一部を書出したものです。これほど熱心に記述した項目を知りません。ただ残念なことには、前記手紙文の「自由」の説明とは方角が違うようです。

「じゆうなる御事に候へども 使をもて御祝ひ申上まいらせ候」(天保十二年(一八四一)『女用手習鏡』)
「じゆう」なことですが、使の者に手紙を持たせて御祝い申し上げます。

文意から「自由」を外の言葉に置換えると、「略儀ながら」に相当すように思います。

【自由】(『日本国語大辞典』)

〔方言〕物事の便利。物事の具合。

の説明が一番近い。すると「略儀ながら」よりも「勝手ですが、都合により」と解釈すると収りがよいようです。

文字詞

「今もしは御日柄もよく娘子さま御被初あそハされ候よし」（天保十二年（一八四一）『女用手習鏡』）

今もしは御日柄もよく、お嬢さま、御被初かつぎせめをなさる
とのこと、

【被衣初め】 かずきぞめ。（『広辞苑』）

江戸時代、京都で女子五歳から七歳の頃、初めて被衣を着ける儀式。一月の吉日に行なった。

「今もし忌明致まいらせ候に付、まつく御礼申上まいらせ候」（同上）

今もし、忌明けしましたので、さつそく御礼を申し上げます。

今では「しゃもじ」くらいしか使わない文字詞ですが、『逆引き広辞苑』で「く文字」を調べると、「あ文字」「い文字」「う文字」……など沢山の文字詞が出ています。「今文字」は見つかりません。

【今文字】 こんもうじ。（『日本国語大辞典』）

（こんちよう（今朝）の後半を略して「文字」もうじを添えたもの）今朝の意。

「今朝はお日柄も良く……」ではなく、「今日はお日柄も良く……」のはずですから、「今もし」は「今日」のことだと思えます。

「此躰にてハ頓てよろしく候半まゝ御心もし安く思召下さるへく」（同上）

この様子では、やがて（病気が）よくなると思えますので、ご安心下さい。

「御心安く」でいいものを「もし」を入れて、かえって長くなっています。

文字詞の使われる手紙を読むと、クイズのようで面白い。問題を出します。

「猶御けんもしに御礼申上まいらせ候、かしく」（同上）

「御けんもし」とは何でしょうか？

御けんもし

手紙文の最後に見かける文言に次のようなものがあります。

「書余拝顔可申上候と、早々如此御座候」

書き残したことはお目に懸って申し上げます。取り急ぎ以上のとおりです。

「期貴面候節、万事可申上候」

お会いしたとき万事申し上げます。

「いつれくわしき事へお目ニかゝり御咄いたすへく」

「猶御けんもしに御札申上まいらせ候、かしく」(天保十二年(一八四二)『女用手習鏡』)

なお、「御けんもし」に御札を申し上げます。かしく。

「御けんもし」とは文字詞の「御見文字」だともいいます。「見く」で文意にかなう言葉を探すと、「見参」でしょうか。「お会いしたときに」の意味です。

「御ふもし拝しまいらせ候」

お手紙拝見いたしました。

の「ふ文字」は、『広辞苑』も載せていますが、辞書に頼らなくても、「ふく」と考えると「文」(手紙)を思いつきます。

「虫食い川柳」のように頭をひねりながら読む面白さから想像すると、書き手が「この意味、解りますか」と勝手に出題したのが文字詞ではなからうかと思えます。

「五もしさま御事、御縁談御調、御結納遊はし候よし」(同書)

「五もしさま」とはいくら考えても、調べても解りません。(出題者)が捻りすぎたのでしょう。同書にその答が次のように説明していますが、なぜそう言うのか解りません。

「○御息女さま 五もしさま 御娘子さま 御いとさま 御令愛さま 御いと子さま、など見合かくべし」

諸色

「御城下町新開之儀は、元來諸交易等之便自由之土地ニ付、諸色之不自由無之、無何と諸民便り易より、近年別て他国者遊人之類入込、中ニは無願之族居留り徘徊致候様子ニ相聞」（文政十一年（一八二八）「鶴亭日記」）

御城下の町新開は、もともと交易の便が自由な土地のため、諸色に不自由はなく、何となく諸民が暮しやすいので、近年は特に他国者や遊び人の類が入り込み、中には居住許可なしの輩が居て徘徊していると聞く。

「諸色」とは「物価」のこととばかり思っていますが、町は「諸色之不自由無之」（諸色に不自由しない）と書いてあるので、辞書を調べます。

【諸色・諸式】（『広辞苑』）

①いろいろの品物。②転じて、物価。
やはり、物価だけではないようです。もともと

「色」には「種類、品目」の意味があるので、「諸色」の本来の意味は「いろいろの品物」となるのは当然のことでした。

【諸色】（『岩波日本史辞典』）

諸種の商品の意味。米価など特定商品の価格に對し一般の物価のことを江戸時代には「諸色直段」と称し、転じて諸色のみで物価の意を示すこともあった。

町が人を引寄せるのは昔も今も同じ、何が引き付けるのでしょうか？

關取札

「沼田郡相田・筒瀬村新割被仰付候關取札差上書附
覚 沼田郡相田・筒瀬村

一高九拾六石貳斗六升貳合 相田村

内

八拾壹石

高三石札貳拾七枚

拾石

高貳石札五枚

三石

高壺石札三枚

七斗六升

添札壺枚

五斗六升六合

同壺枚

九斗三升六合

同壺枚

ベ九十六石八斗六升式合 札数三十八枚

〔以下略〕（文化九年（一八二二）三月「横山家文書」）

これは相田村の鬩取書の一部です。

「給人に知行判物が下されると同時に、各村々へは給人名とその知行地高が代官から通達される。村方ではそれをうけて、全村をいくつかの石組（コクグミ）に分けた鬩帳を作成して郡役所に提出する。鬩帳は一冊ごとに、田畑の善悪や百姓数とその居りの善悪、牛馬数などに不公平のないように組合わせ、これをたとえば、七〇石組・五〇石組・三〇石組・あるいは一石以下のように、数種類の石組に組分けしたものの数十冊を用意するのである。ついで、代官から各給人に対して、鬩取りの日時を案内し、代官立会いのうえで鬩帳についてくじ引きが行われる。そして合計がその村の知行

地高となるように数冊の帳面を引くと、そこに記載された百姓が知行地百姓となり、その持高の合計が知行地高となるという理屈である。」（『広島県史』）

この年、相田村では、次の二人の給主が割当てられました。

「 態申遣ス

一 高三拾貳石五斗六升六合相田村之内坂田吉太郎渡
一同貳拾壺石七斗六升 同村之内寺尾弥祐渡

右之通当申年より給知ニ相成候条、此旨相心得、
田畑百姓分り鬩取書無甲乙様例之趣ニ相認、来月
十日迄ニ可差出」（文化九年（一八二二）二月「横山家文書」）

相田村の高は 三六二・二石、既に三人の給主があり、それに二六五・九三八石が与えられています。残りの九六・二六二石から坂田・寺尾に割当て、その残りが明知（給知予定の土地で、差当たり藩が支配する）です。

坂田 32.566石=3石×9枚+2石×2枚+1石×1枚

寺尾 21. 76石=3石×6枚+2石×1枚+1石×1枚
明知 41. 936石=3石×12枚+2石×2枚+1石×1枚

註 96. 262石=3石×12枚+2石×2枚+1石×1枚

《金種計算》のような作業が始ります。上の割当では一つの計算例です。坂田は添札(端数)の〇・五六六石札と三石札九枚と二石札二枚と一石札一枚を貰ったのではないかと思います。

当分庄屋

「 態申遣

一 宗吉村庄屋 貞兵衛

右之者、歎ニ付役儀差免、跡当分庄屋役下見村庄屋喜一郎へ申付候条、此旨相心得可申者也

卯閏四月 賀茂郡御役所」(文政二年(一八一九)「鶴亭日記」)

宗吉村の庄屋貞兵衛は、願いにより庄屋役を解き、「当分庄屋」として下見村の庄屋、喜一郎

に申し付けたので、その積りでいなさう。
」に「当分庄屋」という言葉が出てきます。

【当分】(『広辞苑』)

②事があつてから少しの間。当座。③近い将来まで、しばらくの間。さしあたり。

「当分」(しばらくの間)、「臨時」の庄屋役の意に違いありません。

「当村庄屋順三郎殿義、去ル五月已来より禁身被為仰付、当分庄屋官三郎殿へ被為仰付、村方諸願筋御同人御手元ニおゐて相整、殊ニ厚情之御人柄ニ御座候へは忽差支之義は無御座候得共、順三郎殿義は従来之御役柄ニ御座候故、老若婦女子ニ至ル迄村方一統衆心一致ニ順三郎殿へ御格別之御慈悲ヲ以何卒帰役之義被為仰付候様只管御歎キ奉申上候」(慶応二年(一八六六)『千代田町史』)

当村の庄屋順三郎殿は、去る五月以来禁身に処せられ、「当分庄屋」を官三郎殿へ仰せ付けられました。村方の諸願など官三郎殿のもとで調べられ、情の篤い御人柄ですから困ることはあ

りませんが、順三郎殿はいままで庄屋の役だったので、老若婦女子に至るまで村民全員が、格別の御慈悲により庄屋役に復帰できるようと歎願しています。

「其村庄屋善右衛門病死いたし候二付、当分庄屋八木村庄屋藤平へ申付候条、」

その村（緑井村）の庄屋、善右衛門が病死したので、緑井村の「当分庄屋」として八木村の庄屋、藤平へ申し付けたので、

「小多田村庄屋兼帯申付 宗近柳国村庄屋 仙助」
宗近柳国村の庄屋仙助に小多田村庄屋の兼務を申し付ける。

庄屋が処罰されたり、急死したり……、諸事情により急いで庄屋を任命する必要があるとき、「当分庄屋」が任命されたものと思われまゝ。適任者が見つからないときは、他村の庄屋を充てることもあり、八木村庄屋藤平は緑井村の庄屋も当分の間、兼務することになります。これを「掛持庄屋」「兼帯庄屋」といいます。

「当分庄屋」の「当分」とは、どのくらいの期間のことか、具体的に検討する必要があるそうです。

欠ケ流

「村内土地砂地にて都て水持不宜、尤川筋無御座村柄故ニ欠ケ流等は一円無御座候得共、御新開所ニ相成雨池御築調被為遣候処、御建龍王山西ノ谷より洪水之節流砂にて上ハ池之分水溜り五反三畝も有之池所一円ニ砂埋にて、水溜り少しも無御座、年来砂池と唱候程之儀にて、最早砂堀り上之業は相叶不申故、種々申値、右砂池より大川筋為久と申所迄長四百式拾九間半御藺宇村当村之分共田地之中カヲ買取、砂勿新溝御願奉申上、文化元子年御免許被為在相調、其後砂浜はまり少ク相成大概之義は右溝筋へ砂流申候、是等古今之違、用水手当テ之池所砂池ニ相成百姓共迷惑不少儀ニ御座候」（文政二年（一八一九）「十文字 国郡志下調帳」）

村内の土地は砂地のためすべて水持が悪く、川

のない村なので「欠ケ流」等は全然ありません。そこに藩により新開が開かれ、雨池も築調されましたが、御建山の龍王山西ノ谷より、洪水のとき砂が出て、上の池（水溜り五反三畝）が全部砂埋りになり、水溜りは少しもありません。以来「砂池」と名が付く程で、もう砂を堀り上げることもできず、色々と相談して、この砂池より大川筋の為久という所まで長四百式拾九間半の土地を買取り、「砂刳新溝」をつける工事を御願して、文化元子年に免許を受け、調えました。その後「砂浜り」も少なくなり、大抵は右の溝筋へ砂が流れます。これが昔と異なるところで、用水手当の池が砂池になり、百姓共は大迷惑をしています。

「欠ケ流」という言葉が出ました。「川がないので、欠ケ流は一切ありません」だけではよく分りません。

「年々洪水之節堤欠ケ流田畠等損所多」（『千代田町史』）

いつも洪水の時、堤防が欠ケ流れ、多くの田畠が被害を受けます。

「欠ケ流」とは堤防・田畑などが欠けて流れることと知れます。

「砂浜り」は「砂填り」（砂が落ちこむ）です。

「水持」は保水力のことで、砂地は保水力が低いので耕地にはあまり適しません。

「雨池五ヶ所

大利迫 壺ヶ所 水持四畝、水懸り壺町程」（『千

代田町史』）

ここの「水持」は雨池（天水を溜める池）の面積のことで、「十文字 国郡志下調帳」では「水溜り」と言っています。

「水懸り」はこの池水で灌漑をする耕地面積です。

役印借

「郡中村々役人共、自借ヲ村借書調、与頭・長百姓・年行司等之加印ヲ以借方いたし候類間々有之、……第一謀証文相当り、御法度素り之事ニ候処、

……右牀不埒之証文ヲ以致借方、当人不届は勿論、加印之者共儀も加印等之主意忘却いたし、不埒之儀ニて、第一自借村借役印等之分りも相混し、且は村借役印借等之指問ニも相成、千万不埒之儀ニ付」(寛政二年(一七九〇)「踊場家文書」)

郡中村々の役人共が、自分の借金を村借のように書き調べて、与頭・長百姓・年行司等の加印まで受けて、借金をする者がままあるが、……これは偽証文に相当し、勿論違法なことである。……このような不埒な証文で借金をすることは、当人は勿論、加印の者共も加印等の意味を忘れた不埒な行為である。これでは自借と村借役印等の区別もなくなり、村借役印借等の差支えにも成り、全く不埒なことである。

「役印借」という珍しい言葉がありました。「村役人が借金の保証人として加印をした借用証書による借金」と理解してよさそうです。この文書は、個人の借金をあたかも「村借」のようにみせる村役人の加印を厳禁したものです。

「喜助父与助義も極困窮ものニて、近来之年柄故御

年貢未進其外役印借等多く御座候て一跡仕捌候ても引足不申仕合御座候」

(不始末をでかした喜助の父、与助も極困窮者で、近頃の年柄のため御年貢も未進のありさま、そのほか「役印借」等も多く、全財産を充てても、弁償するには足りません。)

個人の借金に村役人が役印を押してはいけないとはいいいながら、年貢未進者の借金に対しては、村役人が力を貸して「役印借」をさせたものと思います。

「誉 造賀村庄屋 市郎兵衛・助三郎

右村方未進仕捌方へ歩安出銀取計候段、奇特二付」(天保六年(二八三五)「鶴亭日記」)

村の年貢未進の対策として、低金利の融資をしたのは、奇特なことである。

この例は、「役印借」ではないでしょうが、年貢未進をさせないため、村役人が無理をする状況を示しています。

不実場

「百姓与助伴喜助、杵原村栄助方ニ召抱居候処、当
七月同人商用もめん三拾三反・銀札七拾五匁共為
持、府中村三軒屋惣次郎方へ遣候処、寺家村より
旅人式人懸ケ連ニ相成、同村塚之埜山中にて喜助
義謀計ニ懸り、右木綿式拾反・銀札七拾五匁押取
ニ逢候一件……最初、喜助義、栄助方へ罷帰り候
節、追剥ニ逢候趣偽り申出、於栄助ニハ、喜助へ
疑念ヲ懸ケ居候ニ付、当度喜助稠敷約合申候処、
是迄度々申出候儀ハ偽りにて、実事ハ尾道之もの、
阿戸村之ものと申旅人式人、寺家村道連レニ相成、
全謀計ニ懸ケられ不実場へ携候得共、重キ御法度
筋へ携候義故恐多奉存、色々作言申出、斯相成候
上ハ悔先非候段誤入只管歎出申候ニ付」

百姓与助の伴喜助は杵原村栄助方に雇われてお
り、今年の七月、同人に商売用の木綿三拾三反
と銀札七拾五匁を持たせて、府中村三軒屋惣次

郎方へ行かせたところ、寺家村より旅人二人と
連れになり、同村塚の埜の山中で騙されて、木
綿式拾反・銀札七拾五匁を取上げられた事件に
ついて……、最初、喜助が栄助方へ帰ったとき、
「追剥に逢いました」と偽りの報告をしていま
したが、栄助は怪しんでいました。この度の厳
しい取調べにより、「これまでの話は全部嘘で
す。本当は尾道の者・阿戸村の者という二人の
旅人と寺家村から道連れになり、騙されて「不
実場」に携ってしまいました。重い御法度を破
り、色々と嘘を言いました。こうなつては先非
を悔い謝ります」と、ひたすら申出ますので、
「不実場へ携」ることは「重キ御法度筋」だそう
です。から、何か良からぬ事をやつたに違いありませ
ん。

「元トより達人故、門人も多く出来候得共、例の不
行跡者故、門人ももてあまし、此所ニも居がたく、
或ハ金毘羅町、又は善通寺等の茶屋、不実場へ入
込無体を申掛」（「街談文々集要」）

勿論達人なので、門人も多く出来たが、例の不

行跡者なので、門人ももてあまし、ここにも居られず、或は金毘羅町、又は善通寺等の茶屋や不実場へ入り込み無理難題を申し掛け、

「不実場へ入込」とありますので、何か良からぬ場所のようです。「不実(誠意がない)」な場所と見当を付けて、探しましたが見つかりません。『近世上方語辞典』でやっと見つけました。

【不実】(『近世上方語辞典』)

①誠意がないこと。不親切なこと。②忠実でないこと。不心得。③博奕。博奕場を不実場ともいう。

喜助さんは、つい博奕に手を出したようです。

「街談文々集要」は下記からの引用です。

<http://www.hh.em-net.ne.jp/~harry/bunbun6.html>

差寄せ

前回の、博奕で主人の金をすってしまった喜助の話の続きです。

「六百目余之銀、いか躰立働候ても所詮調達之業出来不申、喜助奉公仕せ、給米等ヲ以相償候義も種々及示談候得共、前段之不評一統流布仕候二付、召抱候ものも差寄せ無御座、必至行当り居申候、村方ニテも、組合ヲ初助情頼母子等之義も種々心配いたし見候趣ニ御座候得共、……彼是行当り歎入候旨申出候」

六百目余りの銀は、(父親が)どれほど立ち働いてもとても調達はできないので、喜助に奉公させ、その給料で弁償させるなど、色々と相談しましたが、なにしろ喜助の悪評が世に知れ渡っているため、召し抱える者は「差寄せ」ないので、必至と行き当っています。村方でも、「組合」を初めとして、助情頼母子等も考え色々と心配しましたが……結局、お手上げの状態ですと、申出ております。

「召抱候ものも差寄せ無御座」の「差寄せ」を考えてみます。

【差し寄す】(『広辞苑』)

①そばへよせる。②短く縮める。

の説明では、得心できません。意味が少しズレて、「差し当たりは」「当面は」の筈です。

「右七ヶ村之義ハ差寄せ植場所無御座候旨申出仕候」

(文化十二年(一八一五)「野間家文書」)

右の七ヶ村は、今のところ(桐苗を)植る場所がないと報告がありました。

この弁償の件に関して、「組合ヲ初助情頼母子等之義も種々心配いたし」の「組合」は、あまり見かけない「五人組」のことだと思えます。

【五人組】(『岩波日本史辞典』)

江戸時代、近隣の5軒を単位に組合せて組織した治安・行政の連帯責任制度。……寛永年間(一六二四・四四)幕藩体制の確立に並行して全国的に実施され、連帯して治安維持や法度の順守、貢租の完納、キリシタン禁止にあたることが命じられた。責任者に五人組頭が選ばれ、五人組帳の提出も義務付けられた。五人組制度は領主の施策として町村に導入されたが、地域によっては形式的組織に留まる所もあり、また住民の隣保組織としての性格を次第に強めることもあ

った。

差立

博奕で主人の金をすってしまった喜助の話の続きです。

「江戸屋西隣茶店へ参り、河戸村之もの硯ヲ借り書面相調、此元より飛脚差立候ても、此書状持参仕候得は銀子相渡シ可申候得共、夫レてハ費ニ付、飛脚賃ハ其方へ遣シ可申候間、書状持参銀札受取、此元へ帰り呉候様申候ニ付、実事と存、右書状平原へ持参、中ノ吉蔵と相尋候処、右名前之もの一円無御座候ニ付、衡ニ掛ケラレ候義と其所ニて心付」

江戸屋西隣茶店へ行き、河戸村の者が硯を借りて書面を調のえ、「ここから飛脚を差し立て、この手紙を渡すと銀子を渡してもらえるが、それでは費用もかかるので、飛脚賃はお前にやるので、手紙を渡して銀札を受け取り、ここへ帰

つてくれ」といいますので、信用して、この書状を平原へ持参して、中ノ吉蔵を探したところ、そんな名前の者はいませんでした。謀(衡)にかかれたと、そこで気が付き、

主人の商品・銀札を、博奕で〈負けた〉ふりをした河戸村の者に寸借され、今日受取る予定の銀札で返却する……と聞かされた喜助が、品物・銀札を巻上げられるカラクリが書いてあります。可笑しいやら、気の毒やらで何とも面白い資料です。

飛脚を使うことを「差し立て」といいます。

【差立て】(『広辞苑』)

①さしたてること。送り出すこと。②郵便物などを発送すること。

【差】(『広辞苑』)

〔接頭〕動詞に冠して語勢を強め、或いは調える。

「飛脚を立てる」で済むものを、「飛脚を差し立てる」と使っています。「差」の言葉は「差」をあまり気に掛けないようにする必要がありそうで

す。

殆飽果候

「高田郡ハ……田畑作徳有之故、至て致大切境目をあせり、隣地など争論ハ不絶、其外貸借取遣り等之事二付、差纏、出入・工事訴訟事多く、是ニハ殆飽果候事也」(「理勢志」)

高田郡は……田畑からの収入もよいので、土地を大切にして境目をあせり、隣地などと争論が絶えず、その外、貸借取遣り等のことでも揉め事があり、出入・公事訴訟事が多く、これには「殆飽果」ることである。

「飽果」を「飽き果てる」と読むと、「食べ物でもないのに……」と思います。「飽果」を「呆れ果てる」と読めば、文意に合って納得します。ついでに「殆」を「ほとんど」と読まずに「ホトホト」と読めば、「殆飽果候事也」は「殆ど飽き果て候ことなり」ではなく、「ホトホト呆れ果て候ことなり」

となり、〈珍文〉が完成します。

【殆ど・幾ど】ほとんど。（『広辞苑』）

（ホトホトの転）①大方。大略。②今少しで。す
んでのこと。

無屹度

「町・地方之もの願解と相唱、大勢申合せ寺社方へ相集り、酒・さかな相携呑喰いたし、終夜騒動いたし候様子相聞、素より信心一通り之儀は可為格別候得共、畢竟根元は保養慰ミ之事と相見へ、甚夕不風俗之至、以来右様之類在之ニおゐてハ屹度可申付候条、心得違致間鋪候事」（天保四年（一八三三）『三原市史』）

町や地方の者共が「願解」といつて、大勢が申し合せ、寺社へ集り、酒肴を持参して呑喰をし、終夜騒動していると聞いている。勿論、信心のことなので一応は格別ではあるが、結局は保養慰み事と考えられ、はなはだ不風俗の至りであ

る。以後このようなことがあれば「屹度」処置するので、心得違いをしないこと。

【願解き】がんばどき。（『広辞苑』）

神仏にかけた願がかなったとき、そのお礼参りをする事。

【屹度・急度】（『広辞苑』）

〔副〕（キトの促音化。「屹度」「急度」は当て字）
①時間的にきわめて短いさま。急に。すばやく。とつさに。②急に、はつと。③厳しいさま。状態や表情にゆるみのないさま。厳重に。きつぱりと。しっかりと。④行為の確実に行われるさま。たしかに。必ず。相違なく。

上記の「屹度」は「厳重に」の意味です。「屹度」「急度」と表記してあり、珍しい言葉ではありません。これによく似た言葉で、「無屹度」「無急度」も使われます。

「右之通、万石以上之面々え、無急度可被相違候事」（『御触書天明集成』）

右の通り、一万石以上の大名へ、「無急度」伝えなさい。

「平野群次死去ニ付、葬送之節聖光寺へ諷經被參候
寺院も可有之候間、檀縁・心易面々は格別、其外
ハ用捨有之候様断申度、同性豊次郎存寄ニ候、此
段無急度通達之事」（弘化四年（一八四七）『国前寺
御触留帳』）

（広島町奉行）平野群次の死去につき、葬送のと
き聖光寺へ諷經に参られる寺院もあると思われ
るので、檀縁や心易い面々はともかく、その外
はご遠慮頂きたいと、同姓豊次郎の意向です。

「無急度」通知しなさい。

辞書では見ることができませんでしたが、「急度」
Ⅱ「無急度」と解釈してよさそうです。「無」を
付けても意味が変わらないという、〈面白い〉例です。

「殿様此度無屹度郡中御廻在被遊、御領分東西御兩
度ニ御廻可被遊旨被仰出候所、此度之義は深キ思
召も被為有候御様子ニて」（文久元年（一八六一）『三
原市史』）

殿様はこのたび「無屹度」郡中を巡視され、領
内の東西を二度に分けて御廻りになると仰せら

れました。この度の巡視は、深いお考えもお有
りの様子で、

この場合の「無屹度」は「必ず」「是が非でも」
だと思います。ところが、

「夕方山村静登を無屹度招寛話、酒鮓を饗」（明治
元年（一八六八）『村上家乗』）

夕方、山村静登を「無屹度」招き、寛いで話を
し、酒鮓でもてなす。

和やかな雰囲気の話に、「無屹度」という厳しい
言葉が使われているのは、どうも納得がいきません
が、文字通り、屹度（厳重）が無いⅡ「ゆるゆると」
という意味かも知れません。

朝八字

「朝八字過よりオールト招ニ応、同居人住宅へ行、
…オールト夫婦外ニ菅人館外迄出迎、居間ニて饗
ス、パン・魚砂糖煮・洋魚酸・鶏・豚・漬物・豚
肉角□煮・牛胆・米飯小鳥・茶太白・シヤンペン

酒・菓子・ジャボン等皆々奇品也」(慶応三年(一八六七)十一月十一日『村上家乗』)

朝「八字」過より(英国商人)オールトの招きに応じ、(長崎の)同人居宅へ行く。……オールト夫婦のほかは、壺人が館外まで出迎え、居間でもてなした。パン・魚砂糖煮・洋魚酸・鶏・豚・漬物・豚肉角□煮・牛胆・米飯小鳥・茶太白・シヤンペン酒・菓子・ジャボン等、みな奇品であつた。

村上彦右衛門(広島藩家老東城浅野家の家中)は、その日記『村上家乗』に、「朝八字過よりオールト招二応」と書いています。文意から「八字」は「八時(午前八時)」と解ります。もともと、前年の日記にも、「八時」は書いてありますが……、

「○十七日、丁丑、晴、余寒強、主水様為御祝詞御出ニ付五半時より出仕、夕八時退」(慶応二年(一八六六)一月十七日『村上家乗』)

十七日、丁丑、晴、余寒が強い。主水様が御祝詞のため御出になるので五半時(午前九時)より出仕し、夕八時退出する。

日記に「夕未鼓後退」の記事を見かけます。夕方の「未刻」の後に退出した、言換えると「八つ」の後、今の言い方なら午後二時過ぎを指します。そのような勤務時間の割振りなら、「夕八時退」は夕方の「八ツ刻」のことで、「八時」ではありません。

このような時刻表記をする村上彦右衛門が、「朝八字過」と書きました。今まで、時刻を示すのに「八時」とは書いても、「八字」の文字は使いませんでした。「八時」と書いて「八ツ刻(未)」を指していたのに、この時から「八字」と書いて、今の表記と同じ「八時」を意味するようになります。

「洋製世紺度付之時規一箇を求、高価物ニは候得共、当時軍用必須之器、且勤仕之身前大ニ有益之物故捐資て求之、……価金十兩貳分ト銀拾九匁三分四厘也」(慶応三年(一八六七)二月三十日『村上家乗』)

洋製のセコンド(秒針)付の時計一箇を買う。高価な物であるが、現在では軍用必須の器具であり、私の勤めに大いに有益の物なので私費で買った。……価金十兩貳分と銀拾九匁三分四厘であつた。

高価な時計を入手した村上彦右衛門は、二十四時間の定時法が正式に採用される前に、定時法で時間を示していたことになります。

「江戸時代末期となり、定時法で時刻を示す西洋機械時計が安い値段で数多く輸入されて普及し、また一方では定時法を使用していた外国との交渉が増加するにつれて、不定時法を使用していたのは何かと不都合が起ころうになり、一八七三年、太陽暦が採用されるとともに時刻法も一日、二十四時間の定時法が採用された。」（『世界大百科事典』）
今、百円ショップに五〇〇円位の値札で腕時計が並べてあるのを彦右衛門を見ると、なんと思うでしょうか。

家小

「家小兎角頭悪敷、平常困候付、和田村温泉へ入治致度積年之望ニ候得共、其義も得不為致候処、近

日田中実五郎義願候て致入治候様子ニ付、好折柄之義故罷越可然と相許候ニ付、今日於席御用人佐藤益之丞へ左之通申出置也

私家内義佐伯郡和田村水内温泉へ為入治差遣、暫之間逗留入治為仕度御坐候間、御序之節可然様被仰上置可被下頼入存候」（慶応三年（一八六七）七月『村上家乗』）

「家小」は持病の頭痛で困っており、以前から和田村温泉へ入治したいと望むものの実現しなかった。ところが最近、田中実五郎が願い出て行った様子なので、良い機会だ、行くが良からうと許し、今日御用人佐藤益之丞へ次のように申し出た。「私家内、佐伯郡和田村水内温泉へ行かせ、しばらく逗留して入治させたいと思いますので、御序のとき、宜しくお伝え下さい」。

『村上家乗』には「家小」という言葉がよく使われていますが、外の文書ではほとんど見かけません。初め「家小」といい、後、「私家内」と言い換えていますので、「妻」を示す言葉と解ります。

【家小】（『大漢和辞典』）

家族。妻子、又妻をいふ。

「家小兎角頭悪敷」を直訳すると、〈妻はとかく頭が悪く……〉となりますが、もちろん頭痛などの病気を指します。

「鶴亭日記」の野坂三益は、奥さんのことを、「春野」と名前で書いています。

「春野と田阪蓮乗・大道僊藏妻行佐伯郡水内温泉」（文政九年（一八二六）七月「鶴亭日記」）

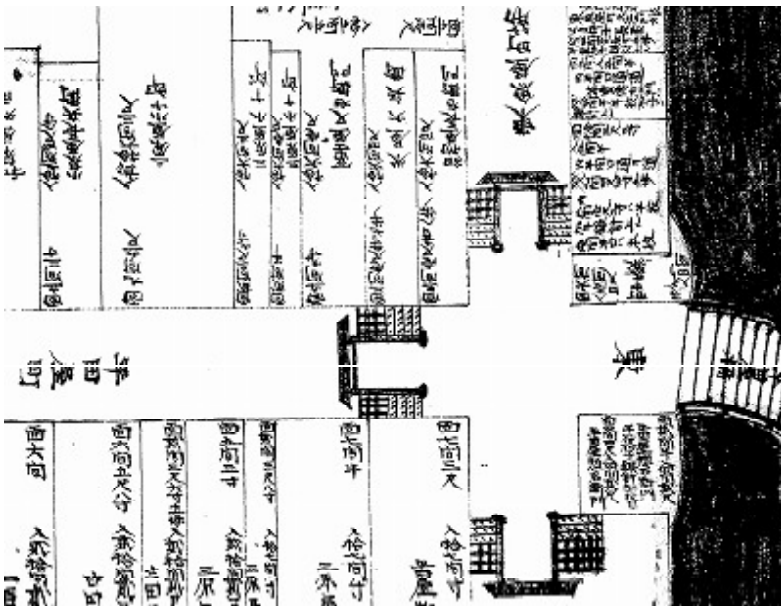
春野、田阪蓮乗・大道僊藏の妻と佐伯郡水内温泉に行く。

くきぬき

「侍町惣門口之儀、夜之五時よりかたく門をさし、一切人の出入不仕様ニ可申付候

付、町中之儀右同前二町々之くきぬきをさしせ可申候、不及申候得共家中侍共并召仕候ものも夜之

五ツ時より一切あるかせ申間敷事」（元和十年（一



六二四)「浅野長晟留守中法度」)

侍町惣門は、午後八時から堅く門をさし、人の出入を一切禁止する。町中でも同様に町々の「くきぬき」を挿させなさい。言うまでもなく家中の侍、召仕の者も午後八時以降の出歩きを禁止する。

「侍町惣門」は城廻りの侍屋敷町に設けられていた三軒紺屋・八丁堀・流川・柳町、四か所の門をいいます。町の「くきぬき」は、

【釘貫】(『広辞苑』)

①柱を立て並べて横に貫^{ぬき}を通しただけの簡単な門、または柵。釘貫門。②町の入口に設けた木戸。

「承応町切絵図」(平田屋町)には、広島の繁華街、本通・パルコ付近に町門(釘貫)が三つも描いてあります。平田屋町筋・平田屋橋が現在の「本通」東端で、西国街道に当ります。

下宿

「○十六日、丁卯、曇、蒸熱甚、早朝出勤、午鼓前退、妙慶院へ代参新吉申付、家来三人共并下女まさ当季も相勤度旨願出候付承届、下女なかは暇を乞候二付是承届、暇遣し、今日下宿いたす也」(慶応三年(一八六七)七月『村上家乗』)

○十六日、丁卯、曇り、大変蒸暑い。早朝出勤し、午鼓(昼の時報)前に退出する。妙慶院への代参を新吉に申し付ける。家来三人・下女まさは、当季も勤めたいと願い出たので承知する。下女なかは暇を乞い、許して暇を遣わしたので、今日下宿した。

半季奉公では出替りは春秋二回で、その期日は、広島では七月と十二月。七月は十五日で、村上家でも七月十六日の日記に出替りが記載されています。奉公人の希望により継続勤務かどうかが決っていますが、通常はどうでしょうか。

【下宿】げしゅく。(『広辞苑』)

①やどさがり。やぶいり。②やや長い期限を定めて他人の家に部屋住みすること。また、その家。

文字通り、宿に下がった(退職した)訳ですが、ついで現在の使い方で解釈してしまいます。

乗打

「今日は此間以来脚氣之氣味差起、足痛致候候ニ付駕籠ニて参ル、草津村御番所ニて乗打之不審申候候ニ付、帰掛家来を以、前時は無案内ニ乗打致候段御不審有之候へ共、素より下乗之心得ニは無之候故其儘罷通候間、御様子も御坐候ハ、大御目付衆被仰達可被下旨為申入候て其儘罷通候也」(慶応三年(一八六七)七月十三日『村上家乗』)

今日は、先日来の脚氣が起り、足が痛むので(海蔵寺に)駕籠で参詣した。(往路で)草津村御番所から「乗打」の文句が出たようなので、帰りがけに、「さきほどは声も掛けずに『乗打』して、不審に思ったようであるが、はじめから駕籠から降りる積りはないので、そのまま通過した。何か文句があるのなら、大御目付衆でも連絡しなさい」と、家来に申し入れさせて、そのまま

通過した。

【乗打】のりうち。(『広辞苑』)

馬や駕籠に乗ったままで(貴人の前を)通り過ぎること。

【下馬】(『広辞苑』)

馬からおりること。貴人の門前、または貴人に会った時、また社寺の境内などで、敬意を表して馬からおりること。下乗。

草津村御番所は、元治元年(一八六四)八月に長州戦争に関連して設けられたものです。

「此度東西南北往還口々へ第一長藩人為改御番所御建構ニ相成候間、乗馬之輩は勿論歩行立之者たりとも御番所前駆通申間敷候、御番所ニて如何ニ存候義も候得は、番人共より姓名等相尋候筈ニ候間、其節ハ速ニ相答作法能罷通候事」(元治元年(一八六四)「芸藩志」)

このたび東西南北の往還口々へ、長藩人改めのため御番所が設置されるので、乗馬の者は勿論、歩行の者でも御番所前を駆け通つてはいけな

い。御番所で不審に思えば、番人が姓名等を尋ねるので、速かに答えて、作法よく通りなさい。慶応三年（一八六七）には、草津村御番所は本来の役目を終えているはず……。『村上家乗』の筆者、村上彦右衛門は広島藩家老東城浅野家の高官なので、〈文句あるか！〉と、駕籠から降りないで通り過ぎていきます。

秋分

『村上家乗』の慶応三年（一八六七）八月廿六日の記事に「秋分」がありました。

「廿六日 秋分 夜五時九分」（慶応三年（一八六七）八月廿六日『村上家乗』）

【秋分】（『広辞苑』）

二十四節気の一。太陽が秋分点に達した時の称。秋分を含む日を秋分の日といい、太陽暦では九月二三日頃。秋の彼岸の中日に当る。昼夜の長さがほぼ等しくなる。

慶応三年八月廿六日を陽暦に換算すると、西暦一八六七年九月二三日、たしかに秋分の日です。続く「夜五時九分」は時刻の表示です。すると、これは秋分点通過時刻を示すはずです。暦から転記したのでしようが、慶応三年（一八六七）の日記に秋分点通過時刻が記載されているとは驚きです。

慶応三年の秋分点通過時刻を次のサイトで調べました。（「薩摩暦・昼夜」）

「天保壬寅元暦 慶応三年 丁卯 八月 廿六日 秋分八月中 日出より日入まで 昼五十五刻 夜五

十刻 六より六まで

昼五十五刻 夜四

十五刻

夜五時九分」（「天保

壬寅元暦・慶応三年」

（薩摩暦、鹿児島県立図書館蔵）

概算すると、「分」は十分の一ですから、



「夜五時九分」とは、夜の五つと十分の九、つまり四つの少し前に当たります。四つは、今の午後十時頃。

少し詳しく計算すると、暮六つから明六つまで(夜間)の時間は六四八分。

(60分×24時×45/100=648分)

これを六等分すると、夜の一辰刻は一〇八分。「夜五時九分」は真夜中の一・一辰刻前ですから一一八・八分前、一時間五八・八分前、つまり午後一〇時一分頃です。不定時法のため面倒な計算になりました。

秋分だけでなく、二十四節季についても同様の記事があります。

「十五日 雨水 朝四時四分」(慶応三年(一八六七)一月十五日『村上家乗』)

有残

「夜廻り無油断いたし、有残成もの見当り候ハ、

早々御注進可申上候事」(慶応二年(一八六六)『広島県史』)

夜廻りを油断なくして、「有残成もの」を見つけたら、直ぐに注進しなさい。

「有残」は辞書で見つけることはできませんでしたが、「有残」||「うさん」||「胡散」と考えると、「胡散」の宛て字と解ります。

【胡散】(『広辞苑』)

(ウは唐音) あやしいこと。疑わしいこと。

「御鑑札所持不致候ては何も証拠無之、有残船同様之事ニ被取計候ても申訳有之間敷、畢竟目先の押着にて前々申渡候儀令忘却不埒之至候」(文政四年(一八二二)『広島県史』)

(他国へ行った船が)御鑑札を所持していなかったら、(抜荷物を扱っていないという)証拠もないので、「有残船」のように取扱われても仕方がない。

結局、目先の「押着」のため以前申渡したこと忘れ、不埒の至りである。

「有残船」とは「怪しげな船」でしょう。ついで

に、「目先之押着」は「目先の横着」に違いありません。

「右平吉今以立帰り不申趣ニ御座候得は、弥出奔と相見へ申候、素より貧窮者ニて家内老母老人居申、地頭金三郎よりも心付遣し申候、尤少々之諸道具等も追々売喰ニ仕候有残り之物相しらへ申候処、左之通ニ御座候、……」（天明二年（一七八二）『堀川町覚書』）

この（息子）平吉は今も（借屋に）帰宅していない様子なので、出奔と考えられます。素より貧窮者で、家内には老母老人が居ますが、家主の金三郎も気に掛けていました。少しの道具を段々と売り喰いをして暮していました。「有残り」の物を調べますと、破畳式枚、莖式枚、竈壺つ、土釜壺つ、鍋壺つ、茶碗式膳、小盥壺つ、杓壺本、小桶式つです。

この「有残り」は宛て字ではなく、〈残って有る〉の意です。

吊

「○廿九日、……吉田鉄翁先生昨日物故之由、甲州流軍法之大先生ニ候得共、時勢ニ応変化する事を不知、只古流ニ拘泥して当時之用を不作して及老耄被果、可憐生也、歳は八十有余也」（慶応三年（一八六七）七月『村上家乗』）

「○十五日、……午後退、夕坪内伯母氏不快を訪、夫より吉田兼次郎殿を吊」（慶応三年（一八六七）八月『村上家乗』）

○廿九日、吉田鉄翁先生が昨日亡くなられたとの事。甲州流軍法の大先生であったが、時勢に対応できず、古流に拘泥して今の世に役に立たず、年をとられ亡くなられた。可哀想な生涯であった。歳は八十あまり。○十五日、……午後退出して、夕方、坪内の伯母の病気を見舞い、それより吉田兼次郎殿を吊問した。

【吊・吊】とむらい。（『日本国語大辞典』）

①人の死をいたみ、その喪にある人を慰めること。
②死者の霊を慰め冥福を祈ること。

【吊】（『漢字源』）

〔動〕 つる。つるす。ぶらぶらとぶらさげる。

《解字》会意。「口十巾（ぬの）」で、布切れで何かをぶらさげるさまを示す。吊（たれる）が「吊問」の意に傾いたためつくられた俗字。

「たれる」を表す「吊」の字が「とむらう」に取られてしまったので、「たれる」を表すために「吊」の字が作られた……そうですが、「吉田兼次郎殿を吊（とむらう）」と使われています。「吊」の字まで「とむらう」に取られるとは、「たれる」が可哀想です。

手馬

「今日御家中申合せ之乗切有之由にて、手馬を森仙太郎より借用を乞候二付貸」（慶応二年（一八六六）二月四日『村上家乗』）

今日、御家中が申し合せての「乗切」があり、

森仙太郎が「手馬」を借用したいということで貸す。

「乗切」の意味は、同書の【注】に「乗馬の遠出」と説明があります。『広辞苑』では「乗り切ること。乗りづめ」となっています。

「手馬」については辞書で見つかりませんが、「手」は My で、「手馬」は My Horse だろうと思います。

「馬術稽古之義、一統出精有之候とも、当時御馬数も無ク稽古不行届二付、五三人申合手馬持候義勝手次第二可被致候、仍て馬代金之義ハ年賦拝借可被仰付候」（享和元年（一八〇一）『広島県史』）

馬術の稽古には皆精を出しているが、現在、御馬の数も少なく稽古も行き届かないので、五三人が申し合せ、「手馬」を持つてもよい。馬代金は藩より年賦で貸与する。

この文書で、「手馬」とは別に「御馬」のことも書いてあります。勿論〈藩の飼馬〉ですから「御馬」です。「手馬」は〈個人の飼馬〉です。

「旧藩の頃、一疋一本の俚諺ありたり、是は藩士の

禄三百石以上を有する者は、常に家には馬一疋を飼養し、途には鎗一本を携帯せしめて資格の上その権式を保つことを要す」（小鷹狩元凱『広島雜多集』）

むかし、「一疋一本」という俚諺があつた。これは藩士で禄三百石以上を有する者は、常に家には馬一疋を飼養し、鎗一本を持たせた従者を連れて外出しなければならなかつた。

この「手馬」なる言葉、『日本国語大辞典』には載せてありませんが、日本中央競馬会の「競馬用語集」で今も生きていました。

【お手馬】（日本中央競馬会「競馬用語集」）

いつも同じ騎手が調教しまたレースに騎乗していて、その馬の癖や性格など熟知している馬のこと。

間切帆

「○廿五日、甲辰、晴、暖、逆風ニ付舟不出、夕少

々風和候ニ付、八半時過より間切帆ニて出帆、波甚荒、舟動揺殊甚、内裡へは一里許之渡なれ共、黒崎へ渡候積之处、風波荒く同所迄難至、小倉へ着船ス」（慶応三年（一八六七）十月『村上家乗』）

○廿五日、甲辰、晴、暖、逆風のため舟は出ない。夕方少々風が弱くなり、八時半時過より「間切帆」で出帆したが、波が荒く、舟がひどく動揺する。内裡（門司）へは一里ばかり距離だが、黒崎へ渡る積りが、風波が荒く小倉へ着船した。

この時の船は、広島を出発した「大杉屋忠右衛門船十反帆、船子三人乗也」。海上船の場合、十反帆で百石船（米百石を積む）というのが大体の目安ですが、そう説明されても、素人にはその大きさの見当はつきません。小舟でないことは確かですが、強い逆風に手こずっています。関門海峡の潮流にも苦勞しただろうと思います。それでも、逆風帆走のできる船と技術のおかげで、小倉に着いています。

【間切る】（『近世上方語辞典』）

帆船が逆風にむかってジグザグに進む。船乗り用語。

頓二・頓而

「日見峠ニ幕府之御番所有之、当時島侯御受之由、姓名書付出し駕籠を下て通ル、嶮山也、其前二日之見峠と云あり、是亦高山也、絶頂霰飛、寒風烈、崎陽へ入ては誠ニ暖也、日見峠を越て氣候頓ニ異也」(慶応三年(一八六七)十一月二日『村上家乗』)

日見峠(長崎市、長崎街道の難所)に幕府の御番所があり、現在は島侯(島津侯か)の担当とのこと、姓名書付を出し駕籠を下りて通過する。嶮しい山である。その前に日之見峠と云うのもあり、これも高山で、絶頂では霰が飛び、寒風烈しく、崎陽(長崎)へ入ては誠に暖かである。日見峠を越えると氣候は「頓ニ」違う。

【頓に】とみに。(『広辞苑』)

①急に。にわかに。②しきりに。

「文政小判壱歩判引替方之儀近頃諸向引替差出方渉取不申、右は頓而通用停止可被仰出候儀ニ候間、

御領分在町金銀取引いたし候者は勿論、其外所持之者は最寄引替所へ差出可引替旨……」(天保十四年(一八四三)『広島県史』)

文政小判・壱歩判の(新貨幣との)引替えについて、近頃諸向の引替え差し出し方が捗らず、これらのお金は「頓て」通用停止になるので、御領分在町金銀を取引する者は勿論、そのほか所持の者は最寄の引替所へ差し出し引き替えるよう……

【懸・頓】やがて。(『日本国語大辞典』)

【懸て】やがて。(『広辞苑』)

②おっつけ。まもなく。ほどなく。そのうちに。早晚。今に。

「頓」の字に「ニ」を付けると「とみに」ですが、「而」を付けると「やがて」と読む……、不思議な字です。

数望寄

「大日本神社仏閣参詣所数望寄

勸進元 下野日光山

大関 イセ 太神宮

関脇 シナノ 善光寺

……

行司 紀州玉津嶋 摂州住吉社 播州人丸社

大関 紀州 高野山

関脇 アキ 宮嶋

……」(文政六年(一八二三)「鶴亭日記」)

「鶴亭日記」の筆者野坂三益は、多方面に興味を持ち、こまめに記録しています。この「大日本神社仏閣参詣所数望寄」は神社仏閣の「見立番付」です。相撲番付をまねて、大関、関脇などの位付けをした刷り物で、江戸後期から盛んに出されました。今で言う〈ランキング〉です。

さすがに、大関・関脇は誰でも知っている寺社が並んでいますが、上位にランクされている「ミカワ猿股寺」はわかりません。「ヤマトせふたいじ」は有名寺院なのに、細かい文字で書かれています。招

提寺(唐招提寺)です。

「数望」とは何かと頭を傾げましたが、相撲番付をまねた番付ですから、「すもふ(相撲)」と読むと検討をつけました。「寄」は「コレクション」。すると、「数望寄」は「相撲に見立てた番付」です。

郡中底引

「宝暦六年子二月郡中賄賂筋内割ヲ以取立候趣ヲ、厳敷為吟味郡御奉行より御歩行組物書役并番組之内三手程二分ケ、村々へ前方より通達ニも不及、不意ニ村々へ入込、役人元之根本帖取出、入役筋之隠し居候迄委クさかし出シ、根帖共ニ取戻り段々吟味有之候処、郡中是迄賄賂筋并村役人共不直悉ク相頭候事

私ニ云、郡中底引ト号シ、本文之通庄屋元又八年行司小帖・根帖共厳敷吟味取出シ、郡中是迄之内割相頭候よし」(『吹寄青枯集』)

宝暦六年(一七五六)二月、郡中では賄賂のため

の資金を内密に徴収しているとのこと、厳しく調べるため郡御奉行の命により御歩行組物書役や番組が三手に分かれて村々へ不意に入り込み、役人の手元にある根本帖を取り出し、秘密の支出まで全て探し出し、根帖共に押収して帰った。段々と調べると、郡中のこれまでの賄賂や村役人共の不正が全て明らかになった。これは、「郡中底引」といわれ、庄屋元または年行司の管理している小帖や根帖の精査の結果、郡中の今までの内割の様子が明らかになったという。

賄賂に関する一斉手入れの記事です。「小帖」「根帖(根本帳)」という言葉が出てきますが、「根帳」とは原簿のことでしょう。

「底引」といえば「底引網」を思い出します。そのように解すると、〈ゴッソリと残さずに取りあげる〉イメージがあります。「郡中底引」とは、大量の諸帳簿を「県警」と印刷された段ボールに入れて押収することか、それとも不正を全て摘発することか解りませんが、この事件名を「郡中底引」といっ

たのではないかと思います。

その後、どのように決着を付けたか、他の資料で見ると、

「是迄之儀は古来よりの仕来と見て、郡御奉行限に被指置候二付、自今之儀急度慎受納仕間敷、并郡内の者共より贈物之儀頭候得は屹度曲事可被行旨双方へ厳事御示出候」(『理勢志』)

このような賄賂は昔からの仕来りなので、郡御奉行限りで(処分なしで)終りとする。「今後は賄賂を受取るな、郡内の者より賄賂を受取ったことが知れたら処罰する」と、双方に厳命した。何とも、はや……。

同日

「 覚 堀川町

一 御当地広瀬村生 御小人 武平太

一同 銀山町生 同 女房

一同 広瀬村生 同俣 貞次郎

一同 西地方町

同弟 源三郎

一真宗元成寺旦那那二て御座候

一請人堺町四町目家持炭屋宇七

右は唯今迄広瀬村作人利七借屋居申候処、此度勝手ニ付私支配之借屋借り請参申度由申候ニ付、生所万事相しらへ申候処、別条無御座、慥成者ニ御座候間、借屋借し申度奉願候、此段宜様ニ被仰上可被下候、以上

寅三月廿四日

肥後屋太郎兵衛家代 弥兵衛

年寄久賀屋 六右衛門殿

右之通申出候ニ付、吟味仕候所相違無御座候ニ付、借屋貸させ可申哉、此段御窺申上候、以上

同日

年寄久賀屋 六右衛門

室屋 喜右衛門殿」(天明二年(一七八二)「堀川町覚書」)

これは「送り証文」です。御小人(武家奉公人)武平太の家族四人が、広瀬村作人利七借屋から堀川町にある肥後屋太郎兵衛(斜屋町年寄)の借屋に転居したいとの申出に、家代(管理人)弥兵衛がその許可を

堀川町年寄(町役人)に申請した書類です。武平太は広瀬村生れ、そこで悴貞次郎が生れています、その弟は西地方町生れ、その後、広瀬村に転居し、この度堀川町に移ることになるのでしょうか。どのような都合で度々転居するのか解りませんが、そこは借屋住居の気楽さもあつたのだと思います。

この申請書を受取った堀川町年寄久賀屋六右衛門は、その日(同日)のうちに奥書を付けて、上部の新町組大年寄室屋喜右衛門へ提出しています。その文言は、「右之通申出候ニ付、吟味仕候所相違無御座候」。いくら有能な町役人でも、受付けた当日に「吟味」を済ませるといふ訳にはいかないはずです。事務処理の早さには感心しますが……。

船頭

「沖船頭之分、諸事慥成能キ船頭雇」(宝永二年(一七〇五)『広島県史』)

沖船頭については何事も確かな有能な船頭を雇

い、

の記事を見て、「沖船頭」を辞書で調べると、芋蔓式に「…船頭」が見つかりました。

【沖船頭】（『広辞苑』）

船頭のうち、船主に雇われて船頭となっている者。↑↓直乗船頭

「豊後国三佐浦市五郎船拾五反帆沖合船頭兵次水主炊共八人乗」（天保十年（一八三九）「鶴亭日記」）

豊後国三佐浦（大分市）の市五郎の持船拾五反帆、
「沖合船頭」兵次・水主・炊（^{かしき}炊事係）の八人乗り

【直乗船頭】じきのりせんどう。（『広辞苑』）

和船の船主で、自ら船頭として船に乗っている者。直船頭。直乗。

【居船頭】いせんどう。（『広辞苑』）

実際に乗船する船頭に対して、自分では船に乗らない廻船所有主。

「備中之内山崎兵庫頭様御領津良島浦船六端帆居船

頭弥三郎自身加子とも二人乗、薪商売ニ当国阿賀浦へ罷下り被申候処」（正徳元年（一七一）『下蒲刈町史』）

備中の内、山崎兵庫頭様御領津良島浦（倉敷市連島）の船六端帆で、「居船頭」弥三郎自身と、水夫の二人乗りで、薪商売に当国の阿賀浦（呉市）へ下られ

「居船頭」でも、場合によれば自身で乗組むこともあるのでしょう。筆者は、そのことを「居船頭弥三郎自身」と表現しています。

手把

「手把」という単位があります。

「竹枝 但、一束ニ付五尺手把」（「広島藩覚書帳」）

これは、藩が竹枝を必要なとき、御建敷（藩有の竹林）で伐り出させる竹枝の規格（大きさ）を示したものです。

【把】（『漢字源』）

〔単位〕ひとにぎりの量をあらわす単位。▽昔は半かかえを把といったこともある。

〈一握りの量〉が「一把」なら、周囲二〇cm足らずの量ですから、「五尺手把」と長さを付け足す必要はないので、『漢字源』の説明はここでは当てはまりません。

「：手把」と表記された資料を集めてみました。

〔なよ竹式本 但、式尺手把〕

〔河竹 但、一束五尺手把〕

〔柄竹 但、一束一尺八寸手把〕

〔から竹三束 但、式尺手把〕

〔ほて笹 但、一束式尺手把〕

〔薪 凡一ヶ年五万三千束程 但、長一尺五寸、式手把〕

〔松大束 凡一ヶ年百把程 但、長式尺、三尺手把〕

〔竹も大なる分ハ廻り何寸壹本ニ付代何程、小サキ分ハ何尺手把壹束ニ付代何程と書出候事〕

【把】わ。（『広辞苑』）

束ねたものを数えるのに用いる語。

竹・薪などは束ねて運びます。その束の大きさも、その品物によってそれぞれ規格があると思われるます。軽いもの、例えば茅などは大きな束になり、薪のような重いもの、竹のような長いものは小さい束にするはずです。

「薪 長一尺五寸、式尺手把」とは、縄で縛った束の直径が式尺なのか、それとも円周が式尺のどちらかでしょう。そこで、一尺を約三〇cmとして両方とも計算してみました。

薪の束 $\pi d = 30\text{cm} \times 1.5\text{尺} = 45\text{cm}$

直径式尺の束とする

$\pi d = 30\text{cm} \times 2\text{尺} = 60\text{cm}$

$\pi C = 60\text{cm} \times 3.14 = 188\text{cm}$

円周式尺の束とする

$\pi C = 30\text{cm} \times 2\text{尺} = 60\text{cm}$

$\pi d = 60\text{cm} \times 3.14 = 19\text{cm}$

薪の長さより束の直径が大きい、こんな、海苔巻の一切れのような束は見たことがありません。すると「式尺手把」とは、周囲式尺の束でしょう。（直

径を測るより周を計る方が簡単です。

【束】そく。（『単位の歴史辞典』）

たばねたものを数える単位。「束」^{たば}ともいう。

……ものによつてその量は異なり、稲は一〇把を一束という。ふつうは長さ三尺の縄で縛つたものを一束という。

「手把」は「てば」ではなく、「たば」（束）と読むのでしよう。

馬代

「当家之馬森仙太郎世話にて御用人今村文之助殿方へ譲與、今日為牽遣ス、馬代左之通也 金拾五両右之通ニ候得共、此節御定金価にてハ正金之取引六ヶ敷、内実は壺両ニ付百廿五匁位ニも取引候由之処、表向は矢張両七拾式匁相場銀札取引故、正味八両式分式朱余ニ当也」（慶応三年（一八六七）十二月八日『村上家乗』）

当家の馬を森仙太郎の世話で御用人今村文之助

殿方へ譲り、今日牽いて行つた。馬の代金は金拾五両。しかし、この節には御定の金価で正金の取引はできなくて、実際は壺両につき銀札百廿五匁位で取引するそうだが、表向の壺両〓銀札七拾式匁の相場で取引したので、実質は八両式分式朱余にあたる。

元治元年（一八六四）十一月、藩府は市中の通貨の相場を次のように決めています。

「金銭相場並ニ正銀と銀札之取引左之通り相改り候に付、此段町中可相触候

一、金一両に付 正銀 札銀 七十二匁に成る」（『新修広

島市史』）

つまり、「金一両を正銀（銀貨）七十二匁、または銀札七十二匁と交換する」としています。すると、馬代拾五両は、

$50 \times 72 \text{ 匁} \times 15 \text{ 両} = 5400 \text{ 匁}$

ところが、当時の藩札の実勢価格は、金一両〓銀札一二五匁なので、馬代として手に入れた銀札一〇八〇匁を金貨（両）で表示すると、

銀札1080文・銀札125文＝8.64両＝8両2分2朱余
になつてしまふ訳です。

「十日、……森仙太郎より兼て之馬今村之方へ参、居合宜敷旨にて馬代札銀ニして老貫八拾匁為持差越、尤右之内中次料金百匁代拾八匁石田岡右衛門へ遣ス也」（慶応三年（一八六七）十二月十日『村上家乗』）

十日、……森仙太郎が例の馬のことで今村方へ参り、「具合が良い」とのことと、馬代として銀札老貫八拾匁を受取り、寄越した。この内、仲介料として金百匁、代拾八匁を石田岡右衛門へ遣わした。

御甘米と御戻米

以前、「甘米」という言葉について検討したことがあります。（66/9/15）。その結論は、「甘米」は「ゆるみ」と読み、「緩み」を意味する……でした。『広島県史』も「甘米」に「ユルメマイ」のルビを付け

ています。また、「御戻米」についても考察しました。（07/2/11）。今回は、「御戻米」に関連する「御甘米」を考えます。

「右甘メ米之儀は即今異国船防禦向」（安政六年（一八五九）十二月廿六日「国前寺御触留帳」）

「右御甘米之義は即今異国船防禦向」（安政六年（一八五九）十二月廿六日「芸藩志」）

元は同じ資料で、片方は「甘メ米」、もう片方は「甘米」と書いていますので、「甘米」は「甘メ米」とも書き、「ゆるめまい」と読むことが分ります。

「御公務其外御物入事不少御勝手向必致と御差支ニ付、御難渋之段は兼て被仰出一統承知之通ニ候、仍て打続格外御減石御家中末々は別て及困窮候趣ニ付、当子年限り知行物成五步通御御切米等も右ニ準し御甘メ被下候旨被仰出候、尤御繰合御六ケ敷中より御甘米被成下候義ニ付」（嘉永五年（一八五二）「国前寺御触留帳」）

幕府に対する御公務など出費が多く藩財政も逼迫しているのは皆も承知の通り、そのため打ち

続く格外の御減石により御家中でも末々の者は特に困窮しているので、今年に限り知行物成を五歩通、(御切米等も右に準ず)「御甘メ」になった。財政困難の中からの「御甘米」なので、：

「格外御減石」(借知)については「御戻米」の記事で詳しく説明しましたが、(藩による家臣の給料のピンハネ)です。藩に少しの余裕ができると(ピンハネ率を下げる)(御戻米)ことがありました。上記の資料でいう「御甘米」は「御戻米」と内容は同じです。取り過ぎたので「戻す」のも、取り方を「甘める」(緩める)のも同じです。

違いがあるとすれば、

「当子年限り……御甘メ被下」

「当午年限御甘米被成下」

「当巳ノ年限り御甘米被成下」

の記事から、その年限りの措置を「御甘^{ゆる}メ」と言うたのかも知れません。

なお、「物成五歩通……御甘メ」とは、禄高の五

分(五%)のことです。(「御戻米」の項、参照)。

時合

「種々御差繰を以、乍纔御甘メ米被成下候処、近頃何となく惣体気配相弛、音信贈答客来饗応向等御時合不都合之儀有之哉之趣も相聞、甚以いかゝ之事二候、右甘メ米之儀は、即今異国船防禦向等御手当筋御油断難相成御場合、事二臨御手後レ之儀有之候てハ難相済二付、一統暮向之儀は此上猶も勘弁相尽、聊氣弛之儀無之武備非常之手当専要二心掛候様との御趣意」(安政七年(一八六〇)「国前寺御触留帳」)

藩も色々とヤリクリをして、僅かではあるが御甘メ米をされたのに、近頃は何となく全体的に気分が緩み、音信贈答や客来の饗応など、「御時合」柄不都合なことがあったことである。この甘メ米は、目下の異国船防禦のための手当として、手後れがあつてはいけなないので、暮し

向きは何とか凌ぎ、武備非常の手当として使うようにとの御趣意であるのに、……

この文書では、「異国船防禦」で大騒動しているのに、音信贈答をするとは「御時合不都合之儀」としています。つまり、「時合」は「時期」「時節柄」の意味で使っています。

【時節柄】（『広辞苑』）

時節にふさわしいこと。時分柄。時期が時期だからの意で、副詞的にも使う。

ところが、辞書には、

【時合】じあい。（『広辞苑』）

時刻。刻限。ころあい。

【時合】（『近世上方語辞典』）

その時ごろ。時分。食事どき。

「時刻」と「時期」では大分ズレがあります。

「殿様御上下・御泊鷹野之節、御先払庄屋・与頭之内式人宛、御跡慕ひ割庄屋壱人相勤メ候様前々より被仰付候処、右之外乍恐為御馳走村々にて御先大払長百姓式人・ほうき引夫式人・人押長百姓式

人、此六人罷出、御先を相勤メ申候、此儀ハ仕来之通仕申度奉存候得共、当御時合之儀故一応御窺ひ申上候」（寛政二年（一七九〇）「野間家文書」）

殿様が参勤や御泊鷹野のとき、御先払として庄屋・与頭の内から式人宛、御跡慕いとして割庄屋壱人が勤めるよう前々から仰せつかっています。この他に御馳走として、村々で御先大払の長百姓式人、ほうき引夫として式人、人押の長百姓式人、この六人も出て、御先を勤めています。この件は仕来りの通りしたいと思いますが、当「御時合」なので一応御伺います。

この使い方の「時合」は、「時刻」は勿論、「時期」まで越えて、「時世」まで広がっています。

国漣栗

「広陵之医平原主殿、嘗著国漣栗弁二篇、使吉田大有請序於予、固辞不得書以贈焉」（文政六年（一八一三）五月「鶴亭日記」）

広陵の医平原主殿、嘗て「国漉栗弁二篇」を著し、吉田大有をして序を予以て請は使む。固辞するを得ず、書して以て贈る。

広島の医師、平原主殿がかつて「国漉栗弁二篇」を著し、吉田大有(西条四日市の医師)を通じて序文を私(野坂三益)に求めた。断れないので、書いて贈った。

「国漉栗弁二篇」なる書名は地方の医師の著作で、どう読むのか、どうせ分らないだろうと思いつつ、Googleで検索しました。なんと、京都大学附属図書館所蔵 富士川文庫目録の中に「国漉栗弁二巻 コロリベン 平原発(有的)著」とありました。

「国漉栗」を「コロリ」と読んでいます。「虎狼痢」と書いてあれば、何とか読めたのに……。

「国」はコク、「漉」はロク、「栗」はリツ、最初の音だけをつなぐと「コロリ」になります。なるほど、脱帽です。

外来語は、現在なら「コロリ」と書くところです。医者ともあろう者が仮名を使うわけにもいかずと思つたのでしょうか、それとも漢文で書いてあつたの

かもしれません。緒方洪庵は一音の漢字を選んで「虎狼痢」と書いたそうです。ここでは二音の漢字の頭の音だけをつないで造語しています。

「近世におけるコレラの流行は、文政五年(一八二二)を初発として安政五、六年(一八五八、五九)、文久二年(一八六二)の三回で、いずれも大陸から長崎へ伝播し、九州・西国を経由して全国的な大流行となつた。文政五年のコレラ流行は、八月中旬ごろ突然発生し、九月に入つて猛威をふるい十月に入つて急速におさまっている。」(『広島県史』)

なお、中村真一郎『頼山陽とその時代』に、坂井虎山に関連して平原有的が少し顔を出しています。富士川文庫は富士川游(ふじがわう)の旧蔵書で、『日本医学史』編纂のために収集されたといえます。広島出身の富士川氏だから目にとまったのかもしれませんが。

月代剃

慶応四年（一八六八）一月十二日、広島藩九代藩主、浅野斉賢（安政五年（一八五八）致仕）が亡くなりまし
た。葬儀は二月六日に行われます。

「○（二月）廿七日、……御家中之面々末々迄下髭剃
候義来月二日より不及用捨、陪臣月代剃候義明後
廿九日より不及用捨旨被仰出候得共、御家来中は
末々迄頬髭剃候義来月朔日より不及用捨、足輕以
下月代剃候義右同日より不及用捨、御歩行組は来
月三日月代剃候義不及用捨段被仰出也」（慶応四
年（一八六八）一月『村上家乗』）

一月廿七日、御家中の面々は全て、下髭は来月
（二月）二日より剃つてもよい。陪臣については、
月代は明後廿九日から剃つてもよいと指示が出
た。御家来中全て、頬髭剃は二月朔日より、足
輕以下の月代剃も同日より構わない。御歩行組
は来月三日月代剃は構わないと指示が出た。

前々藩主の死去に際し、家臣（陪臣も）は喪に服し
ていますが、その具体的な行動の一つは髭や月代を
剃らないこと。このような指示が何時出されたのか

分りませんが、家臣は皆、半月間は髭ボウボウの異
様な状態だったのでしょう。さすが、葬儀の少し前
には解禁になっています。

警師政都

「○十四日 早辞仁方村、帰路過広村、診三好文友
阿母之沈痾、兼訪多賀谷武兵衛、出経市飯田村、
有人要路曰、警師政都有病請診之、乃行、」（文政
六年（一八二二）「鶴亭日記」）

早に仁方村を辞す、帰路広村を過ぎ、三好文
友の阿母の沈痾を診る、兼ねて多賀谷武兵衛を
訪ふ。出て市飯田村を経るに、人有り、路を要
して曰く、「警師政都病有りて之を診るを請ふ」
と。乃ち行く。

早朝に仁方村を出て、帰路は広村を通り、三好
文友の母の宿痾を診察して、兼ねて多賀谷武兵
衛を訪問した。そこを出て市飯田村を通ると、
私を待伏せする人があり、「警師政都が病気で
診察をお願いします」と頼まれたので、すぐ行

った。

【瞽師】（『漢字源』）

盲人の音楽師。

人名の「政都」をどのように読めばいいのか、調べました。

「く都」の人名を「鶴亭日記」で抜出しました。全て「瞽者」でした。

「阿賀村瞽者柳都

四日市瞽者戸野都

南方村須磨都

黒瀬南方村之瞽須磨之都

下見村瞽者民之都

……」

「都は『いち』と読む。盲人官位の最下位（上より検校、勾当、座頭、都。さらに細かく分けることもあろう）」（<http://www.kansai-shogi.com/hakubutukana/minkan1.htm>）

「○仁保島朝都 あさぐち 仁保の嶋、あさぐち 湊崎といふ所に、朝都

とよぶ、目しひあり、」（『芸備孝義伝』巻二）

『芸備孝義伝』には、うれしいことに、「朝都」あさいちのように多くのルビが付けてあります。

【都】（『漢字源』）

《訓読み》 みやこ／みやこする（みやこす）／あつめる（あつむ）／あつまる／すべる（すぶ）／すべて／ああ／と

《名付け》 いち・くに・さと・ひろ・みやこ「座頭市」の例から、「く市」はよく知られていますが、「く都」も「くいち」「くのいち」と読んだのでしよう。

「 天明三卯年

○座頭弟子入致候節、役人より座本小頭宛遣す書面
例文

態得御意候、其後御替も無御座、玆重ニ存候、然
は当村百姓何兵衛忤何之助、当年何歳ニ相成候処、
弱年より眼病相煩、段々療治致候得共、次第二相
増、此節ハ明りも無之様罷成候ニ付、所詮家業等
も得不致、夫故今般何都相頼、弟子ニ罷成度段歎

出候二付、宜敷御取成頼存候、以上
月日 何村庄屋何兵衛

座本何都殿

小頭何都殿（天保五年（二八三四）「鶴亭日記」附録）

当村の百姓何兵衛の悴、何之助（当年何歳）は、幼年より眼病を煩らい、療治はしても次第に重くなり、近頃は明りも感じないようにになりました。そのため家業も継ぐこともできず、今般何都を頼んで弟子になりたいと申していますので、宜しく取りなしてください。

切畠

「切畑式畝拾八歩 五升式合」（寛永十五年（二六三八）

「安芸国安南郡矢野村地詰帳」）

寛永十五年（二六三八）矢野村で地詰（検地）が行われ、千三百余石の村高のうち、「五升式合」の切畠（計三筆、斗代二斗）が記されています。

上田の斗代一八（反当一石八斗）に比べて、九分の

一の生産力しかない切畠（切畑）がわずかですがあります。「切畠」とは何か、調べました。

【切畑】（『広辞苑』）

①山腹などを切り開いて作った畑。②「やきばた」に同じ。

【焼畑】（『広辞苑』）

原始的農耕法の一。草地・林地などで、雑木・雑草を焼き、その焼跡に蕎麦・稗・大豆・粟などを播き付ける畑。地力が衰えると放置し、数年ないし十数年後再び焼畑として用いる。切替畑。やいばた。やきまき。叢焼。やぶやきやぼ。山薙。やまなぎななぎ。なぎの。

「切畑ハ切替畑ともいふ、野にても山にても五年七年又ハ十年も作りて、其土地疲て作毛実のらざるに至て、其所を捨て、又外の所を切開て作るなり」（『算法地方大成』）

『広辞苑』は、微妙に違う二つの説明を併記しています。

「入会之野山・草山并面々持山ニても無用くいかつ

ら等雑物は鶴之嘴ヲ入掘捨立宜様可仕、惣て作方
之出来不出来共肥ニ依ルもの故、自今ハ別て草山
共木苗植継心掛厚可仕事 但、切畠・焼畠仕候節
火之元念入出火無之様可仕」(文化六年(一八〇九)
『広島県史』)

入会の野山、草山、個人持ちの山でも、無用な
くい葛等の雑物は鶴嘴で掘り捨てること。農作
の出来不出来は肥料によるので、特に草山など
の木苗を植え継ぐよう心掛けなさい。切畠や焼
畠をするときは山火事のないように気を付けな
さい。

この文書では「切畠焼畠」と並べて書いています
が、「火之元念入出火無之様可仕」と念押ししてい
るので、「焼畑」と理解してよいのではないかと思
います。

医師の駕籠

「此度駕籠・乗物且病家先き送迎等之儀ニ付、左之

通相及し候、近年都て駕籠ニ乗候輩多ク相見候、
是迄も先年ニ至り歩行相障候歟、又は発向いたし
勤先きも多ク歩行にてハ病家廻り難届類ハ勿論之
事ニ候得共、外飭のためニ駕籠ニ乗候哉と相見へ
候義有之候、……卑賤之者共大病にて難儀いたし
候節、病家ニイケ程懇望之医師有之候ても、其医
師之様子次第にては頼兼、……就中貧賤のもの共
へは常々駕籠ニ乗候輩たり共、多クハ歩行にて見
廻し遣し候様ニ有之度事ニ候」(寛政三年(一七九
一)『広島県史』)

この度は、(医師の)駕籠乗物での病家先き送迎
について次のように指示する。近年は駕籠に乗
る医師が多いようである。以前から歩行が困難
であるとか往診する病家が多いときは駕籠に乗
るのも仕方がないが、見栄のため乗っているよ
うに思われる。貧乏人が大病して困っている
とき、来て欲しい医師があっても頼みかね、……
いつもは駕籠に乗っている医師でも、貧乏人へ
は歩いて往診してもらいたいものである。

「御医師并ニ町医共駕籠ニ乗候儀或ハ陸尺も病家先

キニおひて不作法等無之様との義前々度々相触示之趣も有之候処、近年陸尺之内ニハ病家先キニおひて不当之迎賃錢食り候者とも有之、右ニ付ては病家迷惑筋不少、依ては貧民ハ無是非難呼迎、或ハ病家先キニ寄り候ては陸尺共取捨ニて不罷越様之義も有之哉ニ相聞」(文久二年(一八六二)「国前寺御触留帳」)

御医師や町医が駕籠に乗ること、陸尺(駕籠かき)が病家先きで不作法がないようにとの触れ示しはたびたび出しているが、近年陸尺のなかには病家先きで不当の迎賃錢を食ぼる者がいる。そのため病家は大迷惑し、貧民はやむをえず医師を呼ばないとか、病家先きによつては特定の駕籠かきを連れてこないように注文を付けると聞く。(文久二年(一八六二)「国前寺御触留帳」)

医師が使っていた「駕籠」や「乗物」、陸尺について触れです。「鶴亭日記」の野坂三益も往診の駕籠の中で漢詩を作っています。

「度々之送迎」という言葉から、病家が駕籠を差しまわすようにも読めますが、「外飭(見栄-之ため

ニ駕籠ニ乗」となれば、(自家用車)か(契約車)があつたのでは……と想像しています。

左義長巻建

「態得貴意候、去冬已来公儀衆并ニ諸家様方御当地御参集ニ附、火薬要心并ニ人集り用捨ニ附、此辺村々左義長巻建不相成候ニ付、村内家別御守札村方へ取集、御手元へ相送り申候、非常御要心格別、人目ニ相立不申候様御焼立可被下候、依而御初穂壱封御神納可被下、先は要旨如此ニ御座候、以上
寅正月十一日 村方

渡部様」(慶応二年(一八六六)「矢賀村覚書」)

お手紙を差上げます。去冬以来、公儀衆や諸家様方が御当地にお集りになりますので、火薬の要心及び人集り禁止のためこの辺の村々では左義長の巻き建が禁止されています。そこで、村内家毎の御守札を村で集めて御手元(矢賀村八幡社)へ送ります。非常のことなので格別に気を

付けて人目に立たぬよう焼いてください。そのため御初穂壺封をお納めます。以上用件のみ。

寅正月十一日

村方

矢賀村八幡社渡部様

矢賀村(現、広島市)の庄屋から村の八幡社に手紙が届けられたのは、慶応二年(一八六六)一月十一日のことでした。もうすぐ小正月。左義長の行事があるはず。ところが、広島藩は前年の十一月大阪において幕府より(第一次)征長の先鋒を命ぜられ、この年の二月には征長諸藩兵が多く広島に到着します。

【左義長】(『広辞苑』)

小正月の火祭りの行事。宮中では正月一五日および一八日に吉書を焼く儀式。清涼殿の東庭で、青竹を束ね立て、毬打三個を結び、これに扇子・短冊・吉書などを添え、謡いはやしつづ焼いた。民間では正月一四日または一五日(九州では六・七・八)長い竹数本を円錐形などに組み立て、正月の門松・七五三飾・書初めなどを持ち寄って焼く。その火で焼いた餅を食べば、年中の病を除くという。子供組などにより今も行われる。どんど焼。

左義長を作ることを「巻建」といっています。子供のころ、大人が縄で巻いて組立てていたの思い出します。竹竿の先に餅を挟み、焼いて食べました。書初めだけでなく、お守り札も焼いたのでしょうか。

六里踏

「大木谷雨池土手普請積帳」と題する文書の中に「六里踏」という言葉があります。

「大木谷雨池

一土手 馬踏壺間 高サ七間 長四十五間 此坪三百拾五坪

一夫六百九拾九人九歩壺厘 右土手坪数入用土七万五千六拾荷、坪付式百四拾荷、土堀場往来式丁、壺日壺人百八荷、壺日六里踏ニテ本文(明治五年(一八七二)『庄原市史』)

大木谷雨池(溜池)の堤防工事に必要な「土持夫」

（土運搬人夫）を計算したものです。

この土手（堤防）は、馬踏一間、高さ七間、長さ四五間で、体積は三一五坪（一坪＝六尺立方）です。断面は台形の筈ですが、計算を簡単にするため一間×七間の四角形とみなしています。

$$1間 \times 7間 \times 45間 = 315坪$$

「坪付式百四拾荷」（一坪の土は二四〇荷の荷物に相当）が標準ですから、

$$240坪 \times 315坪 = 75600坪$$

の土を「土堀場往来式丁」（工事現場から土堀場までの距離二町）の距離を運びます。

「老日六里踏」とは、土運搬人夫は、一日に、土一荷を担いで、六里（＝二二六町）運ぶことです。つまり標準仕事量です。

この場合は、距離が標準の六里（二二六町）に対してわずかに二町（二二六分の二）なので、「老日老人百八荷」（二〇八荷）を運びます。

$$75600坪 \div 108坪 = 700人$$

延七〇〇人の「土持夫」が要る計算になります。

この文書では端数処理の関係からか、「夫六百九拾九人九歩老厘」と半端な数字をはじき出しています。

「石取寄夫、大木取寄夫等四里踏」（『熊野町史』）今度は「四里踏」です。石や大木の運搬は、土に比べて困難が伴うので稼げる距離が少なくなります。

このような計算を積上げて「積帳」（見積書）を作成しています。

所払

【所払】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代の追放刑の一つ。追放刑のなかでは最も軽い。居住の村や町から追い払われ、その地への立入りが禁止された。

「家蔵へ忍ひ入盗人ニ被頼盗持運び配分取候もの
敲之上軽追放 但 配分取不申候ハ、 敲之上所
払」（『芸藩志拾遺』）

家の蔵へ忍び入り、盗人に頼まれて盗品を持運び配分を取った者は敲の上軽追放。配分を取らなかつたら、敲の上所払」（『芸藩志拾遺』）

「所払」のほか、「御領分并御城下追払」（天明二年（七八二）「堀川町覚書」）もありました。

ところが「所払」にはもう一つの意味があります。

「所払之事

一 広嶋并浦辺五ヶ所の御蔵々へ津出仕候ニ付、村々道法八里迄ハ津出仕候御極メ、九里よりハ其村々物成之内八里分ハ津出、壹里分ハ所払ニて村内百姓共面々御年貢払、両様之分り有之候、八里へ越へ十里廿里有之所も八里引去、其余は所払之割合有之事」（『吹寄青枯集』）

広島や浦辺五ヶ所の御蔵へ年貢米を納入するとき、村から御蔵までの道程が八里（三一km余）まではそのまま納入し、九里の村は年貢米の内、八里分（九分の八）は現物で納入、壹里分（九分の一）は「所払」で、村内百姓共がそれぞれ年貢を現地で売却して銀納）納入するという二通りの納入方法がとられる。八里を越えて、十里、廿

里もある村も、八里相当分を引いた残りが「所払」となる。

「所払」の「所」は現地、「払」は「売払い」のこと。百姓の年貢運送負担の軽減を考えて、一部の銀納を認めた制度です。

半下

「 覚

恵蘇郡川北村

一 御囲籾四拾六石五斗 社倉御見込之分

内

貳拾七石五斗 下組ニて貯置申候

此俵七拾八俵 但三斗五升入

外ニ貳斗 半下

拾八石七斗 上組ニて同断

此俵五拾三俵 但三斗五升入

外ニ壹斗五升 半下

右為御見分此度御出被遊、俵数刺御入御改之上、御代官様御封印被為成、其儘私共へ御預被為置ニ

付、慥ニ奉預候、依て預証文奉差上候、以上

天保十一年子霜月 庄屋 多喜二

(以下略)(天保十一年(1840)『庄原市史』)

恵蘇郡川北村の御囲籾の保管状況を代官が出張して検査しています。俵数だけでなく刺まで入れて計量し、封印をして村役人に預けています。その預り証文がこの資料です。

川北村下留の貯蔵籾 27.5石

俵数(0.35石入) 78俵

半下 0.2石

これを数式で表すと次のようになります。

$0.35石 \times 78俵 + 0.2石 = 27.5石$

二七・五石の籾を〇・三五石入りの俵に詰めると、七八俵の俵ができますが、残り〇・二石では規格にあった俵はできません。この残りを「半下」といっています。

「半下タ はした・端数のこと」(横山雅昭『相田地区辺の郷土史メモ』)

【端】はした。(『広辞苑』)

数のそろわないこと。不足なこと。また、余っていること。はんぱ。

「坂田吉太郎給知村百姓への条目」(文化九年(一八二二)『横山家文書』)では、すこし違う意味で使われています。

「米入実は三斗式升壺合入之事、半下米は壺斗二付七合之割合之事」

(年貢納入の際、三斗俵の)入実は三斗式升壺合とする。つまり、「半下米」は壺斗につき七合になる。

年貢米壺斗につき七合を余分に入れるのなら、三斗では式升壺合を加えて、三斗式升壺合になります。この「七合」は「壺斗」に比べれば「半下」端かもしれませんが、「半下米」というより「付加米」にあたります。

「端俵」については、「三斗俵と端俵」(2006/08/19ブログ)に載せてあります。

根足

「大川辺り小土手根足ニ柳繁茂、中ニ八大木も有之、其分大雨風之時分根ヲ動せ候ては土手之弱ニ可有之」（明治二年（一八六九）『三原市史』）

大川辺の小土手の「根足」に柳が繁茂し、中には大木も有る。大雨風の時に大木の根が動けば土手の弱りになるだろう。

土手の「根足」とは、土手の基礎部分を指すようです。

「別所谷新池 壺ヶ所

堤 根足拾間 馬踏三間 高サ五間五歩 長サ拾

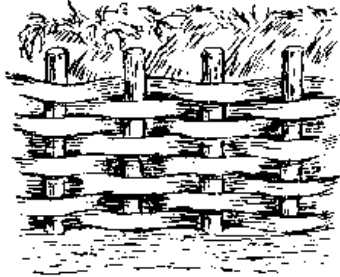
壺間」（文化十一年（二八一四）『三原市史』）

この資料から見ても、「根足」は堤防の断面で、台形の下底に相当する、堤防を乗せている基礎部分と考えられます。台形の上底は「馬踏」です。

「平水迎も吐方悪敷御座候ニ附、……新々開より沖式百間東西へ掻分ケ水尾土手築調申候処、一応水理相立、水吐宜候へ共、素より杭箒にて根足相堅メ土持仕候義ニ御座候得共、汐受之場所ニ御座候

て、日々持土洗流」（慶応三年（一八六七）「矢賀村覚書」）

平水の時でも水吐けが悪いので……新々開より沖合式百間に東西へ掻き分けて排水のための水路の土手を築き、一応水吐けも良くなりましたが、なにしろ杭^{しげらみ}柵（下図『広辞苑』）で根足を堅め土を運び入れたので、汐が当たると土が洗い流れてしまい……。



他見向

「当度御綿密ニ御儉約……然ル所乍恐方今御形勢ニ附、御城下并ニ当郡海田市辺御屯集、諸御藩中様方之内療用御願御座候て罷出、御他領医師方と出会病談仕、且又御当所御医師方と会合之節、紬着

用御宥免被為下候得は、他見向も宜敷、難有仕合可奉存候、其外病用ニ罷出候節は一切綿服着用仕」
(慶応二年(一八六六)「矢賀村覚書」)

この度綿密に儉約令が出されましたが、このような情勢(長州征討)のため、私も御城下や海田市辺に御屯集の諸御藩中様方の往診にでかけ、御他領の医師方と出会い話をしたり、また広島
の御医師方と会合します。そのとき、紬の着用をお許し頂ければ、「他見向」もよく有難いことです。病用以外で他出するときには必ず綿服を着用しますので……。

これは、安芸郡矢賀村(現、広島市)の医師文礼の「着服之儀ニ附御歎書附」です。紬着用なら「他見向も宜敷」とあります。

「他見向」の意味は、「ひとめ、よそめ、よそみ、はため」に違いありませんが、どう読めばいいのか……。

【他見】たけん。(『広辞苑』)

他人に見せること。他人が見ること。日葡「タケンアルベカラズ」。「―に供する」

すると、「他見向」は「たけんむき」と読むのかもしれませんが、私は「よそみ」と読んだほうが落着きます。

くハたく

「 覚

一此間も御注進申上候平田屋橋、惣躰之板釘共二くさり、所々はぎ目明キ居申候

一北之方東より五枚目之板釘共二くさり、くハたく仕候

一南之方中程、板釘共二くさり、下へ落込申候
右之通ニ御座候二付、御注進申上候、已上

酉六月廿五日

堀川町

平田屋町」

(安永六年(一七七七)「堀川町覚書」)

先日もお知らせしました平田屋橋の件、ほとんどの板釘ともに腐り、所々の接ぎ目に隙間があります。北の方東より五枚目の板や釘が腐り「く

ハたく」しています。南の方中程の板釘とものに腐り、下へ落ち込んでいます。以上、お知らせします。

これは、関係の町役人の出した、広島城下、西国街道に架かる平田屋橋の破損状況の報告書です。橋の板が腐り、通ると「くハたく」して危険な状態です。「早く修理をお願いします」とは書いてなくても、その願書です。「く」は繰返し符号です。

板がぐらつくときは「ガタガタ」というので、「くハたく」は「ガタガタ」だろうと考えましたが、旧かな世代の人から、それは「くわたくわた」です、と教わりました。「くわ」は新かな遣いでは「か」。「ガタガタ」ではなく、「カタカタ」でした。そう言えば「国会」を「こつくわい」と発音する首相もいました。

利留メ

「 覚

安芸郡川角村

一去ル子年諸作不熟ニ付、百姓共難渋仕申候ニ付、御歎キ申上候処、町銀御口入被為成遣、銀貳百目御貸シ被遣、是迄年々利上仕候得共、先達ても御歎申上候通、当年より利留メ年賦銀ニ御取立被遣候ハ、難有仕合ニ奉存候、為其書付ヲ以奉願上候、以上

(文政四)巳三月

庄屋四郎右衛門

岩崎彦八様

富長甚五郎様」(文政四年(一八二二)『熊野町史』)

文化十三年(一八一六)子年、諸作物不熟のため百姓共が生活に困り、お願して町銀貳百目の借入れの御世話をしていただきました。これまで(月一步の)利足だけは返済してきましたが、以前お願いしましたように、当年より「利留メ」にして「年賦銀」にしていたけると有難いことです。宜しく願います。

これまでは、「元銀」(元金の返済が不可能なため、「利足」だけ払っています。これでは永久に利払が続くことになります。そこで、川角村は、利払は中止し(「利留メ」、元金を年賦(「年賦銀」)で返

済することを藩に求めたのでした。しかし、同年十二月の関連の文書によると、「此迄元銀得御返仕不申ニ付、「^{ばかり}」利足計指上申候、当年も利足指上置申候」と書いてあるので、「利留メ」「年賦銀」は実現していません。

「先年より町方役人共商事仕入或は渡世為取統支配銀借用願申出候得は、利息月壹歩元銀拾ヶ年賦返納に申付、是迄貸来候処、近年流合に相成、二三ヶ年利息払致候得は兎角様々難渋申立、利留め或ハ元銀年賦延之儀願出、甚心得違之事に候、已来は、支配銀貸附利息月五朱、元銀は仕来之通拾ヶ年賦返納貸附可申候間、此已後は利留め年賦延之儀曾て不承届候間」（安永六年（一七七七）『広島市史』）

先年より町方役人共が商事仕入のため、または生活のため「支配銀」の借用を願い出ると、利息月壹歩、元銀拾ヶ年賦返納の条件で貸付けてきた。ところが近年はいい加減になり、二三ヶ年利息を払うと兎角様々と難渋を申し立て、「利留め」か「元銀年賦延」を願い出るが、心得違

いである。以来は、支配銀貸附利息月五朱、元銀は従来通り拾ヶ年賦返納で貸し付け、利留めや年賦延は許可しない。

藩による「捨り」や「棄捐令」のある時代とはいえ、「町銀」（民間の資金）と「町方支配銀」の違いはあるものの、簡単には許可のあるはずはありません。

竺

「送竺大象之防州序」（文政六年（一八二三）六月「鶴亭日記」）

安芸国の医師、野坂三益は、旧い弟子の大象が岩国善教寺の法嗣となつて行くに際し、「竺大象の防州に之くを送るの序」（漢文）と題する長文を^{はなむけ}餞として書き贈っています。「大象」は人名、その名前から僧と推測できますが、「竺」とは何でしょうか。

三益は、医師としての活動とならんで、「恭塾」を開いていました。当時の塾生の中には、「竺覺浄」「竺恵空」などの名前も見られます。やはり、「竺」

とは僧を示す言葉に違いありません。（塾生は医者と僧侶の〈卵〉が大部分だったようです）。

【竺】（『漢字源』）

《意味》①「名」だけ。太いたけ。「天竺」とは、インドの古名。②「形」あつい。ぶあついさま。ゆきとどいているさま。

「天竺」に関係がありそうですが、「僧侶」とは書いてありません。「Wikipedia」に次の記事があり、疑問が氷解しました。

「今日でも、日本も含めて漢字文化圏の仏教教団では、出家した者は、受戒の師によつて戒名（法名）を付けてもらう決まりとなっている。この時、在家の姓を捨てて、出家者は、すべて釈氏を名乗る。この、出家者は釈氏と名乗るという制度を始めたのが、釈道安である。彼以前の中国の仏教界では、その中国伝来の当初から、受戒の師の姓を受け継ぐのが慣習となっていた。インド・西域からの渡来僧は、その出身地を姓として名乗ることが通例であつたので、中国人の出家が許可された後、新

たな出家者は、師の姓に従つて、竺（インド）・安（パルチア）・康（サマルカンド）・支（大月氏）などの姓を名乗った。支遁や竺道生らが、その代表である。

それに対して、道安の場合、仏図澄の弟子であれば、同門の竺僧朗のように、竺姓を名乗ることになった筈である。しかし、道安は、竺姓を名乗らず、釈氏を名乗った。彼は「大師の本は釈迦より尊きなし」と述べたという。これは、釈迦の教えである仏教の信者であることを端的に表すとともに、意識的にも、直接の師僧の弟子としての自覚よりも、仏弟子としての自覚をより重視すべきことを標榜したものであつた。

そして、次第に道安の意見は中国仏教界において支持されるようになり、やがて全ての出家者は、釈氏を名乗るようになったのである。」（「釈道安 - Wikipedia」）

「鶴亭日記」では、「竺」のほか、「僧」 「釈」と書くときもあります。

「僧大水乞題扇面画、樵夫携瓢之図也」

僧大水、扇面の画に題するを乞ふ。樵夫携瓢の図なり。

「大谷本願寺釈蓮如判」

一倍

「諸職人水役銀

大工・木挽・左官・鍛冶・桶屋・屋板葺等の営業を出願して其許可を受けたる者より、毎年水役銀といふ雑税を徴収す、而して此職工に本役と半役との別あり、家を有するものは本役一ヶ月式工、又持家なきものは半役一ヶ月壺工の水役と為す、此本役の大工ならは一ヶ月税銀式匁六分、半役ならは壺匁三分、又本役の木挽は壺匁六分、半役は八分等なり、閏月ある年度は十三ヶ月分、則本役の大工は一ヶ年分三十三匁八分なり

職人一ヶ月水役定

一下大工 壺匁三分

一同木挽 八分

一同桶屋 壺匁

一同鍛冶 壺匁

一同船大工 壺匁三分

一同畳刺 壺匁三分

一左官 壺匁

但、^{いづれ}執も半役銀なり、本役は此一倍の役銀とす」
（『芸藩志拾遺』）

大工などの職人で営業許可を受けた者から水役銀という税を徴収する。この職人には本役と半役との区別がある。家を有するものは本役、一ヶ月式工、持家のない者は半役、一ヶ月壺工の水役を負担する。例えば、本役の大工ならは一ヶ月税銀式匁六分、半役ならは壺匁三分となる。下大工の一ヶ月水役は壺匁三分、同木挽は八分、……但し、これらは半役の金額で、本役はこの「一倍」の役銀である。

「二倍」という面白い言いまわしが使われている。

【一倍】（『広辞苑』）

①ある数量と同じ数量。②ある数量を二つ合わせた数量。倍。二倍。③（副詞的に）いっそう。ひとしお。

上記の文書では、大工の水役（営業税、月額）は、半役の者は「老奴三分」、本役の者は「此一倍」の「式奴六分」と説明しています。つまり、『広辞苑』の解説の②「二倍」に当たります。

中学生に「百円の一倍はいくらか？」と問うと、

$$100 \times 1 = 100$$

と計算をして、「百円」と答えますが、江戸時代なら「二百円」というはずです。

私のパソコンの中の自称〈古文書データベース〉で「一倍」をキーワードとして検索すると、沢山の例文を見つけることができますが、「二倍」という言葉は、「資料の解説」の中では見付けられますが、「資料」そのものの中では見られません。細かく吟味した訳ではないので断定はできませんが、「①ある数量と同じ数量」という意味で使うことはなかつ

たのだろうと思っています。

「人に交り候へば、珍説・新聞ヲ得候益有之候へ共、又煩しき事も一倍ニ御座候。とかく閉居のかた、後やすくおぼえ申候」（文政十年（一八二七）滝沢馬琴書翰（篠斎宛））

人に交われれば、珍説・新知識を得て有益ですが、また煩わしい事も「一倍」です。とかく閉居した方が、後気楽です。

ここで使われる「一倍」は「③（副詞的に）いっそう」に当り、勿論、古文書でも使われています。

袖乞・袋乞

「行倒者有之候ハ、始て見出し候者、何方へ参り候刻いか様の訳合ニて見付候段、口上書為仕候事、（中略）

袖乞、袋乞、米少ニても有之候ハ、五器杯ニても持居候へば全乞食体ニ有之候ニ付、其趣注進候事」（『温故鑑大意拔書』佐伯町史）

行倒者を最初に見つけた者には、何処へ行つたとき、どのような訳で見つけたのか、口上書を書かせなさい。……行倒者のうち、袖乞、袋乞をして米を少しでも持つているか、御器きなど持つていれば、乞食に違いないので、その旨注進しなさい。

行倒者があつたときの、村役人の処置について書いたものです。

【袖乞い】（『広辞苑』）

乞食をすること。また、その人。ものもらい。こじき。

「袖乞は袖を広げて人にものを乞うことです。」（『日本国語大辞典第二版オフィシャルサイト』）

着物のたもとを広げて、一握りの米を入れて貰う乞食の姿が想像される言葉です。すると、「袋乞」は「袋を広げて人にものを乞う」ことになります。御器（食物を盛る蓋つき椀）を差し出すこともあつたのでしょうか。これらの小道具を持つ行倒れは乞食と判断されました。

「郡中村々多餓芋而乞人往々斃路傍」（天保八年（一八三七）一月「鶴亭日記」）

郡中村々、餓芋がふ多くして、乞人きつじん往々路傍に斃たおる。郡中の村々では餓死者が多く、乞食があちこちの道端に倒れ死んでいる。

この天保の飢饉では、乞食に出る農民も多かったと思われます。

火札張札捨文

「火札、張札・捨文いたし候もの御仕置之事一遣恨を以火を可附旨張札又ハ捨文いたし候者死罪」（寛政二年（一七九〇）「御仕置定式」『広島県史』）

火札を張札・捨文をした者の処罰は、遣恨をもつて「放火をする」と予告した張札または捨文をした者は死罪とする。

これは福山藩が幕府の公事方御定書を基準にして定めた「御仕置定式」の一節で、この部分は御定書

第六三条に相当します。

「火札」とは、「放火の予告を伴う火札を目的の家や高札場に張り出す」（『世界大百科』）という物騒なものです。

「張札」は「近世に庶民が非合法的要求を記して、人目につきやすい場所に張り出した札。」（同上）、
「捨文」とは、

【捨文】（『広辞苑』）

氏名を書かず、趣意だけを書いて捨てておく文書。落書。

とはいふものの、具体的にはどうするのか、判然としません。

【落し文・落書】（『広辞苑』）

公然と言えないことを記してわざと道路などに落しておく文書。

【投文】（『現代新国語辞典』）

「だれからと知らせずに」家の外からひそかに投げ込む手紙。

この二つ、同じようなもので、目くじらを立てて

穿鑿するほどのことではないのかも知れません。

田町

「美登屋八右衛門 仕置

しおく井手 田町に早損なかれかし 君に捧けむ
世々のみのりを 寛則

文化五年戊辰六月

水神井手田町記之

石工新三郎」（『瀬野川町歴史探訪』）

これは、広島市安芸区中野にある水神井手の碑文です。美登屋八右衛門寛則は「田町に早損なかれかし（田町に早損がないように）」と歌っています。またこの碑を建立したのも、「田町」と名乗っています。

「日本の俗に仕置と云ふことは、国家の政をするに後年の事を前に委しくをしはかり、かねて仕をく事なるべし。」（『農業全書』）

日本で普通に「仕置」という言葉は、国家の政ごとをするとき、後年の事を詳しく推し量り、

事前に処置をしておくことであろう。

「しおく井手……」は、『農業全書』のいう「仕置」に当ります。

「享保十三申

南無阿弥陀仏

惣庄屋与茂助時此井手発氣井原左兵衛

田丁中建之」(同上)

これも、同地区にある井原佐兵衛の墓碑です。庄屋与茂助のとき井原左兵衛がこの井手(西大井手)を発起して、享保十三年(一七二八)に完成したといえます。この墓碑も「田丁中建之」とあります。

「小川筋井手所之義川上短ク御座候故、少し之日照りニも兎角渴水ニ相成、尚雨池之義も何レ逆も小池之義ニ御座候得は田丁へ行届かたく、其故於下方ニも出捨勤崩シ等ニて内掘り井手浚へ等仕、時ニ依て村方よりも見合ヲ以少々つゝ立遣し相凌候義ニ御座候」(文化十一年(一八一四)「奥海田村下調査出帳」『海田町史』)

(奥海田村の)小川や井手は、川が短かいため、

少しでも日照りが続くと兎角渴水になります。雨池も小池ばかりで、水は「田丁」へ行き届きがたく、農民も「出捨勤崩シ」(無償労働)等で内掘り井手浚えをし、時によれば村よりも少々の援助もしている。

「一雨池九拾九ヶ所

(中略)

同所下 周廻拾八間

壺ヶ所 水溜り拾式歩

右藤助自分池

兼貞 周廻貳拾八間

壺ヶ所 水溜り壺畝

右田丁持」(文化十二年(一八一五)『瀬野川町歴史

探訪』)

これは、中野村の雨池(溜池)についての記述です。「藤助自分池」(藤助の個人持の池)や「田丁持」のものもあります。

「田町(田丁)」とは、井手や雨池によって農業用水を受ける農民と考えられます。「芸備郡要集」で

は、「水請之百姓」と表しています。

腰付

「山目付共廻村之節、村境へ山番之者は勿論、道案内之者耆人差遣置可申候、……昼食は前宿より腰付ニいたし罷越候ニ付、定テ昼処村ニてハ山目付共其向寄之百姓家へ立寄相認メ可申候間、前方より急度昼所仕構之用意は仕間鋪候、泊所計相仕構置可申候」（明和二年（一七六五）『広島県史』）

山目付の役人が廻村するとき、山番は勿論、道案内の者耆人を村境まで迎えに出しておきなさい。……昼食は前の宿から「腰付」にして行き、昼食時には適当に百姓家へ立ち寄り認めるので、前もって昼食場所を準備する必要はない。宿泊所だけ準備しておきなさい。

「山目付御用ニ付廻村之節……昼食は米三合宛泊り所ニて炊せ腰付ニ致し可申候」（同上）

山目付の役人が公用で廻村するとき……昼食は

米三合を宿泊所で炊かせて「腰付」にしなさい。

「腰付」は「こしつけ」と読み、この場合は「腰に付けた弁当」のことと考えられます。それにしても、米三合の弁当とは、今なら三人分以上に当ります。

「役人夫婦御貸人とも御当日夕迄之腰付弁当并雨具簑笠持参可致候事

但、成丈ヶ板簑・伝八笠ハ相用申間敷候事」（嘉永三年（一八五〇）『広島県史』）

（引卒の）役人や人夫御貸人とも、当日夕方までの「腰付弁当」と雨具（簑笠）を持参しなさい。

できるだけ板簑や伝八笠は使用しないこと。

この文書では「腰付弁当」と書いてあり、弁当のことだと分ります。なお、「伝八笠」とは竹の皮で作った農薬用の笠で、今では「鯛の浜焼」の包装に使われています。

「同八拾耆奴 役人七人長百姓八人村中式手ニて麦毛下見仕候兩日分腰付米九升代石ニ付同断」（天保十四年（一八四三）『加計町史』）

役人七人と長百姓八人が村中を二手に分れ、麦毛の下見をする、二日分の「腰付米」は九升（一人一日三合として）。その代銀は八拾壹匁（米一石九〇〇目として）。

この「腰付米」は村役人に支給される昼食代です。

当前

【当前】あたりまえ。（『日本国語大辞典』）

①共同労働の収穫を分配するとき、一人あたりの受けるべき配当。一人前の分量。漁獲物などを現物で配分する時、人数分に分けた一山。②（①を受け取ることは当然の権利であるところから）道理から考えて、そうあるべきこと。当然。②については「当然」のあて字「当前」の訓読から出たものとする説がある。

「近年追々下御大名様、其外公儀御役人衆、陸地御通行多故、都て駅所入用相増し、……足し銀の所ハ郡村かつき償ひ候二付、百姓手前に取候てハ持

高之割賦を請候故、……賀茂郡・豊田郡・佐伯・御調も駅所も同様と申内、足銀を右高へ割候故、当り前纔也、安芸郡ハ小高へ割賦二付、弥以迷惑強き事也」（「理勢志」）

近年は段々と下筋の御大名様や幕府の御役人衆の陸地御通行が多いので、駅所の入用が増加している。（不足額に対する）足し銀（補助金）はその郡の農民が持高に应じて負担する。賀茂郡・豊田郡などにも同様に駅所があるが、これらは多くの農民のいる大郡なので、個々の農民にとつての「当り前」は僅かである。安芸郡は小高の郡（少ない農民）なので、それに割当てると、農民の負担は大きい。

『日本国語大辞典』の説明では、「収穫」に重きを置くため「受けるべき配当」の意味になってしましますが、「出費」を「分担すべき割当額」の意味も含まれていると考えるのが当り前でしょう。

山の口明

「四月 此月田地の肥草取申候、自分山の肥草は勝手に刈取申候得共、野山の儀は、二月頃より村中一統鎌留め申付置、五月中より三十日前に山の口明村中へ触込、当日は老若男女に至迄、手足達者の者共は耆人も不残、前夜より喰物用意仕、夜半頃野山へ罷出、終日肥草刈取申候、村内には歩行不叶の者又は極老の者共のみ残り居申候、尤無人の者共は他村より雇人仕候て刈取候者も御座候、又明春苗代に入候肥草も此時用意仕置候、此砌自身又は家内に病人共御座候て野山へ得参不申者御座候時は、講中の者申合せ、先其者の田地相応明年の苗代用迄肥草刈遣し、其後銘々共肥草刈取申候、夫より苧束ネ置、草を負脱し申候、郷中より凡苧里半又は二里近き道法にて御座候、野山口明より郷中へ負取る迄日数凡十四五日を相懸り申候、右日数の間、給物等色々に才覚仕、前廉に貯置、肥草刈脱し候間は他事に心を懸け不申、」(文政二年(一八一九)坂村「国郡志御用ニ付下調書出帳」

『高田郡史』)

四月 この月は田地の肥草(肥料とする草を刈ります。自分の山の肥草は勝手に刈取つて構いませんが、野山(入会地)は二月頃より村中に鎌留め(刈取り禁止)となります。五月中(夏至)の日より三十日前の「山の口明」(入会山の入山解禁が村中へ知らされると、その日は老若男女にいたるまで手足の達者な者は耆人も残らず、前夜より喰物を用意して夜半ころ野山へ出かけ、終日肥草を刈り取ります。村内には歩けないもの極老の者だけが残ります。人手のない家では他村より人を雇つても刈る者もいます。明春に苗代に入れる肥草もこのとき用意しておきます。自身又は家内に病人がいて野山へ出られないときは、講中の者が相談して、その者の必要量の肥草を刈つてやり、そのあと自分の肥草を刈り取ります。刈った草は束ねておき、山から村まで、苧里半または二里近い距離を草を背負つて帰ります。山の口明から要るだけの肥草を郷中へ運ぶまで約半月かかります。その間の食べ物など予め準備をし、草刈の期間中は他事に心を懸けません。

この「書出帳」の記述で、肥草の刈取りが、村に

とつて一大行事であつたことがよく分ります。子供のころに経験した「山の口明」の、ワクワクする気持ちを思い出します。

乃不与焉

「観方今容于世之士、非諂諛則比党、……蓋容于世有道、諂与党、乃不与焉」（文政六年（一八二三）「鶴亭日記」）

方今の世に容れらるるの士を觀るに、諂諛に非ずんば則ち比党、……蓋し世に容らるるに道有り、諂と党と。乃ち与せず。

これは、野坂三益が門下生大象に餞として贈った文章の一節です（『16』『竺』参照）。漢文ですが、誤読を恐れては前に進めませんから、気にしないで訳してみます。

今の世で受入れられている人々を觀ると、相手に媚びへつらう者か、徒党を組む連中である。つまり、世に受入れられる方法は、おべっかを

使うか群れに入ることであるが、私はそれに与しない。

今から約二〇〇年前の文書ですが、今の世にそのまま当てはまると思っています。野坂三益の言葉、「乃不与焉」が気に入りました。

実は、「……」に入る文句は「何待齒牙之余論」です。「何んぞ齒牙の余論を待たんや」と読下すのだらうと思いますが、私の手に余るので消えてもらいました。どなたか、教えてください。

千一

私の父は、去年十二月十八日夜、当所の金弥方へ招かれて参り、午後十時ころ帰宅しました。余程酒に酔っている様子で、茶を飲んで部屋へ引き籠り、そのまま臥りましたので、私共も安心して本家へ戻り寝ました。ところが、翌朝、沖の川端に怪我人いると近所の者が言いますので、急ぎ参り見ましたら、それは私方の親父で、治療しましたが亡くなりました。それ以来、色

々と悪評する者がいます。

「証拠等も無御座、殊ニ長役も相勤候もの、態々手懸ケ打擲仕もの共も御座有間敷哉ニ奉存候得共、世間一統種々悪評仕候様相聞申候得共、取留手掛り之様子も無御座候故、是迄見合居申候得共、若御役沙汰ニも相成、千一悪情もの打擲共仕候ものも相顕候節、此俣捨置候ては全私不行届孝心之道も難相立、甚以恐入候次第ニ御座候間、此段有懸り趣書付ヲ以奉申上候」(天保四年(一八三三)『湯来町史』)

証拠もなく、村役人までした者に手を掛けて殴る者もないだろうと思ひ、世間の人の悪評も放置していましたが、もし御役沙汰にもなり、「千一」質の悪い奴らに殴られたと分つたときは、私の不行届、親不孝になりますので、この事情を書付にして申上げます。

【万一】(『広辞苑』)

(副詞的に) ひよつとして。もしや。まんがいち。という言葉があるので、「千一」があつても不思議

はありません。

「左様之儀も有之間敷候得共、千一心得違ひ之儀有之候ては不相済」(天明二年(一七八二)「堀川町覚書」)
そのようなことはないとは思ふが、もし「千一」心得違いのことがあつては申訳ないので、

江

「変体かなは、原則としてひらがなに改めたが、助詞に使用されている而(て)・江(え)・者(は)・斗・与(と)・茂(も)は小活字で示した。」(『広島県史』の凡例)

と書いてありますが、パソコンで小活字を出すには少々面倒です。そのためもあつてか、なぜこれらの助詞を特別扱するのかと不思議に思っています。

「又者」は「又は」と表記しても何の不都合もありません。むしろ、誰でも理解できるのは「又は」の方です。活字になった古文書で、上記助詞の小活

字表記をやめて仮名表記にしたものが、最近は増えてきたように思います。このブログも仮名表記を使っています。

「真字式歩判通用之儀、当九月を限り候様にと、去巳年十月相触候処、今以引替残有之趣二候、遠国等いまた不行届哉二付、真字式歩判引替之儀来未九月を限り、不残引替可申候、尤遠国之分者去ル卯年十月相触候通、引替之金高并道法遠近二応、道中入用も被下候事二候得者、御領者御代官、私領者領主、地頭二而厚世話いたし、最寄引替所江為差出、……」（天保六年（一八三五）「鶴亭日記」）

「真字式歩判通用之儀、当九月を限り候様にと、去巳年十月相触候処、今以引替残有之趣二候、遠国等いまた不行届哉二付、真字式歩判引替之儀来未九月を限り、不残引替可申候、尤遠国之分は去ル卯年十月相触候通、引替之金高并道法遠近二応、道中入用も被下候事二候得は、御料は御代官、私領は領主、地頭ニて厚世話いたし、最寄引替所え為差出、……」（『御触書天保集成』下）

この文書は、今まで使っていた真字式歩判が通用停止になるので、早く新貨幣と引替えるようにとの幕府の触書です。『御触書天保集成』に載せてあるこの触書を「鶴亭日記」も載せています。両者を比較すると、『御触書天保集成』の編者は、助詞を小活字ではなく仮名に換えて表記していることが分ります。

仮名に書換えは大賛成ですが、「引替所江」を「引替所え」と書換えているのが気にかかります。たしかに、仮名の「江」は「え」ですが、今は「引替所へ」と書きます。

「麦藁取込候儀心を付、二階江上ケ置、亦者竈近所等二差置候儀一切仕間敷候」（安永四年（一七七五）

「堀川町覚書」）

「麦藁取込候儀心を付、二階へ上ケ置、亦者竈近所等二差置候儀一切仕間敷候」（天明四年（一七八四）

「堀川町覚書」）

これは、毎年麦刈りの時期、四月になると町奉行から出された触書です。「江」と「へ」の表記の違い

いがあるだけで、内容は全く同じです。「江」＝「へ」です。当時の人も江と書くところを「へ」と書いています。

活字になった古文書で上記のように「くえ」と書いたものはありますが、通常「く江」と表記する筆書の原本で「くえ」と書いたものを見た記憶がありません。

入切手

他国の医師が当町（広島）へ来て、忍びで療治をする者がいると聞くが、町方で引受の者がなくては営業できない決りである。ただし、他所者でも医師が優秀か、または御当地で不自由の医术であれば、格別を以て御当地住居、または滞留願を出せば許可することもある。

「但、町医師など方へ出し二相成医道稽古ニ参、滞留いたし候者有之候、是ハ全定法之通入切手いたし候へは不苦候事」（天明四年（一七八四）「堀川町

覚書」）

町医師の家に医道稽古のために来て、長く滞留している者は、決りの通り「入切手」をすれば、永遠留しても構わない。

次の文書は、町役人に宛てた「入切手」のための申請書と思われれます。

「 覚

一周防国佐渡（佐波）郡徳地村生 玄瑞

右玄瑞儀、徳地村百姓長崎屋新八と申者之弟にて、一所二居申候処、御当地へ差出し医術修業仕セ度由二付、兄新八より山口町松野屋新六ヲ相頼参り申候、尤新六儀商用ニ付徳地村辺へ参り候節、右新八方宿にて心安ク御座候由二付、此度私方へ差置、医術指南仕呉候様ニと右新六相頼申候故、其段承知仕候、依之当月より来巳八月迄私方ニ逗留仕セ度奉願候、此段御赦免被為成被下候ハ、難有可奉存候、右之趣宜様被仰上可被下候、以上

辰八月八日

堀川町矢上潤徳

六右衛門殿」（天明四年（一七八四）「堀川町覚書」）

周防国佐波郡徳地村生れ玄瑞は、同村百姓長崎屋新八と申す者の弟で、一緒に住んでいましたが、御当地広島へ出て医術の修業をさせたいと、兄新八より広島山口町松野屋新六を頼んで参りました。新六が商用で徳地村辺へ行ったとき、右新八方に泊り、知合いになったもので、今度私方へ置いて医術の指導をして欲しいと新六が頼むので承知しました。今月から来年八月まで一年間逗留の許しをお願いします。

堀川町医師

矢上潤徳

『新修広島市史』によると、

「五日以上となれば入切手を必要とした。商用・修学などで長期間滞在する場合は、普通縁故を頼つてその家主より入切手を願ひ出ることとされており、その場合一応一か年以内を限って許可されるのを例とした」。

「入切手」は、他国人の〈長期滞在許可〉のようです。今の〈ヴィザ〉に似たようなものかもしれません。

候者

「漸寒氣之時節成候間、火之元念入候様被仰出候間、油断仕間敷候、小家住居之者、他出候ハ、無人可有之候間、隣家頼合セ、互ニ可心附候、立番并家持共見廻り、無油断相勤候様可申付者也」（天明四年（一七八四）十月「堀川町覚書」）

ようやく寒気の季節になり、火の元には念を入れるよう指示が出されたので、油断しないこと。小家住居の者が他出「候ハ、」無人になるので、隣家を頼んで互いに気を付けること。立番や家持どもは見廻りをして油断なく勤めなさい。

毎年、寒くなると町奉行から火之用心の触が出されます。「堀川町覚書」の筆者は、何故か、この同じ触書が続けて筆写していますが、表記の違う所は一つ、最初は「他出候ハ、」と書き、次に「他出候者」としています。原文が「候者」であったので、そのように書き直したのかも知れません。「候ハ、」

も「候者」も同じだと認識しているので、〈間違い〉が起きたのでしょうか。

「難濟儀有之候者、家老共聞届」

「難濟儀有之候ハ、家老共聞届」(留守中法度)

「候ハ、」を略したものが「候者」だと考えられますので、両方とも「候ハ、」(sourawaba)と読むことになります。

「大勢罷出候儀難心得、願之儀「有之候は」(願の儀があるのなら)聞届可遣由申渡候処」の元の資料は、「有之候者」と書いてありましたが、助詞の「者」を「は」に書き換えているので、上記のようになりました。これは、つい「有之候は(koreari sourouwa)」と読みそうですが、「有之候ハ(koreari sourawaba)」と読まないで、正しく読んだことになりません。「書いてある通りに読むと間違になる」こともあるようです。

積気

「殿様、来ル十五日御発駕被遊候筈之處、御積氣之御気味被成御座、其上暑中ニも候得は、長途之御旅行難被遊、依之今暫御在国御保養被遊度思召ニ付、御参勤御時節御延引之義、於江戸御届之筈ニ候」(天保九年(一八三八)六月十二日「鶴亭日記」)

殿様(広島藩第九代藩主浅野齐肃なりたか)は、来る六月十五日に(江戸へ向け)御発駕される予定であつたが、「御積気」気味のため、また暑中でもあり、長途の御旅行はむづかしく、今しばらく御国で保養される。参勤時期延引の届出は江戸で提出済みの筈。

八月廿日付の達では

「殿様御積氣之御気味、今以得とは不被成御座候へ共、少々御快方ニ付此節之御様子ニ候ハ、凡来月十九日比御押被成御発駕可被遊候」(同上)

殿様の御積気は、まだ良くないが、少々良くなられたので、この様子では九月十九日ころ押して出發される予定。

少々体調が悪くても、参勤の時期になると参府し

なければならぬ殿様も大変です。結局九月「十三日御発駕」、「先月(十月)九日御参府被遊、……去ル(十一月)朔日御登城御参勤之御礼首尾能被仰上」(同上)となっています。

【積氣】(『漢字源』)

つまり重なった大気。天のこと。

辞書は見当違いの説明をしています、「○煩惱疑惑の積氣の持病に○三世の諸医師もお匙を投たが……」(「見聞わらひ集」)でも、病氣として書いています。そこで、やまいだれを付けて「癩氣」で調べると、ありました。

【癩氣】しやつき。(『広辞苑』)

癩しやくの病氣。

【癩】(『広辞苑』)

種々の病氣によつて胸部・腹部に起る激痛の通俗的総称。

料理ケ間敷

「恩着せがましい」など、「ゝがましい」が付く言葉が『広辞苑』には二〇例ほど載せてあります。

【がましい】(『広辞苑』)

〔接尾〕 体言・副詞または動詞の連用形などについて形容詞をつくる。文語ではシク活用。…に似ている。…らしい。…の風がある。…の。きらいがある。

古文書には二〇例どころか、沢山の例を見ることが出来ます。「族ねだりケ間鋪」については、以前ブログの記事(06/9/1)としました。

「面倒ケ間敷」「費ケ間敷」「権柄ケ間敷」「緹ケ間敷」「馳走ケ間敷」「かさつケ間敷」「見物ケ間敷」「甘ミケ間敷」「論ケ間敷」「もたれケ間敷」「不足ケ間敷」……。この調子ならいくらでもできそうです。「…に似ている」とは言うものの、どれも非難の気持を込めた言葉です。

「就御用郡中へ指出シノ面々、昼泊り所ニて賄方之儀、宝曆拾壹年別紙之通り改申附候処流合、料理ケ間敷取計、亦は酒肴等迄指出シ候方角も有之、

依之は定銀之外足銀等いたし、下方之迷惑ニ相成候様相聞へ、有間敷事ニ候」(寛政元年(一七八九)

「是長村覚書」)

御用として郡部へ出張する面々の、昼泊り所(昼休み所)での賄^{まはい}は、宝暦十一年に別紙の通り改めて申し付けたところ、その以後いい加減になり、「料理ケ間敷」取り計らいをしたり、または酒肴等まで差出す所まであり、規定の費用に追加をするなど、下方の迷惑なっていると聞いているが、あるまじき事である。

昼賄は商人式歩五厘宛で、「右賄方之義全所有合之品ヲ以入用代銀不足不致様ニ取計候事」(その所で有り合せの食材を使い、代銀の限度内で準備する)が原則であるのに、「料理ケ間敷^{がまし}」食事を出すのは不相当であるとしています。「料理らしい料理」とは、なんともやこしい話です。

幾々

「追々作付苗代時分ニ押し移り候得共……、乍併如何艱難苦勞仕候ても作付不仕候てハ幾々相統難相成と申値仕候得共、最早肥し等仕構へ候時刻ニも相成候得共、去年右艱之義故肥し代借受仕払之手術も無御座、……買肥斗ニてハ行届キ不申、就てハ壺ケ年たり共荒肥不仕候てハ忽荒地ニ相成幾々不為筋ニも御座候二付、旁々以柴草焼土相用ひ古来之通り作付相調候様御懸ケ引被成下候ハ、難有可奉存」(嘉永六年(一八五三)『廿日市町史』)

追々に農作業も苗代の時期になってきました。……どんなに苦勞があつても植付をしなくては「幾々」家を続けることが難しくなると話しかつています。すでに肥料の準備をする時なのに、肥料代を借りても支払の手段がありません。…買肥(金肥)だけでは不充分で、一年でも荒肥(厩肥)を入れないと荒地になるので、「幾々」の爲にも悪く、昔からの柴草や焼土を使って作付ができるようお骨折り下さい。

「本史料は、地御前村から宮内村への入百姓が、宮内村での柴草肥しの使用禁止を言い渡されたのに

対し、その解除を願ひ出たものである」(同書解説)。

この中に「幾々」が二回書いてあります。

【幾幾】いくいく。(『広辞苑』)

〔副〕いくつもいくつも。

と、辞書にはあっても、この場合には当てはまりません。文意から、「将来」と考えると意味が通ります。

「成井川瀬替之儀は町浜大益之様ニ有之候所、御上御慮ヲ以追々普請出来、既ニ来春迄ニは凡成就いたし候趣恐悦之至候、就は兼て見込之通り、七軒堀干潟新開ニ築候ハ、尚又幾々大益ニ相成り可申、依之町浜申合此度御願申上候」(天明二年(一七八二)「春風館日記」)

成井川の瀬替(流路変更)は町浜にとつて大益になり、御上のお考えで普請も進み、来春には完成しそうで喜ばしいことです。それに関連して予定通り、七軒堀干潟新開に築けば、「幾々」いつそうの大益になると考えますので、町浜の

者が申し合せて御願申し上げます。

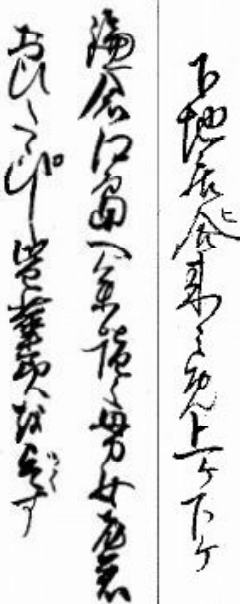
「幾々」|| 「将来」と考えて、「行く行く」と読んでいたのなら好都合ですが……。

見せ消ち

下図左は、寛政九年(一七九七)、一八歳の頼山陽が昌平黌に入学するため江戸に向つた旅行記『東遊漫録』(筆写本)の一部です。

「鎌倉江島へ参詣之男女老若おひたゝびし皆華美を^{ツク}尽す」(頼山陽『東遊漫録』)

「おひたゝびし」とは、はて……? 文意からすると「夥し」のはずで、「び」がいらぬ……と考



えて、やつと誤読に気付きました。「ぴ」ではなく「ひ〇」でした。

【見せ消ち】みせけち。（『広辞苑』）

写本などで、字句の訂正をするのに、もとの文字が読めるようにした消し方。その文字に傍点または細い線などをするす。

この場合は、「ひ」の右に「〇」を付けて抹消しているので、「ぴ」と誤読しました。文字の右に「ヒ」を付けて抹消する場合もあります。（図右）

「居合」を「居来」（居へ来たり）に訂正するため、「合」の右に「ヒ」を書き加えて抹消し、「来」を追加しています。

「誤字ノ旁ニ『ヒ』ト書ク。非ノ義」（『大言海』）

俵拵

「大坂御登せ米近年ハ縄之締り弛ク俵形見苦敷相成、……約ル処御払直段へも答候趣相聞、……是迄ハ

縄五ツ通り之内両端シト中結ひ之筋ヲモヂリ候処、当年ハ中結ヲ残シ其余四筋ヲモヂリ、中結を随分堅ク締」（安政二年（一八五五）『広島県史』）

大坂に登せる米俵の縄の締りが弛く、俵形が見苦しくなり、そのために安値となる。……今までの縄の掛方は「縄五ツ通り之内」両端と中結の筋をもじっていたが、当年からは、中結以外の四筋でもじり、中結は堅く締め、

米俵を目にすることのなくなった現在、上記の説

明だけではよく解りません。米俵の写真（下図）にしら米穀店を探して、ようやく納得がいきました。

写真では、米俵の胴体を縄で五ヶ所を結んでいます。



これが「縄五ツ通り」でしょう。五ヶ所の内、真ん中の結びが「中結び」のはずです。これらの「結び」に直交して、縄が絡めてあります。絡めることを「振る」といっています。写真の俵の振り方は、「中結ヲ残シ其余四筋ヲモデリ」の説明に当てはまります。「モデリ」方は写真右下のように見えます。それ以前、の振り方は、両端と中央の三ヶ所で絡めていたのだ、「俵形見苦敷」になっていたものと思われまふ。

如何敷

「都て川々通船、川口御番所ニて作法宜敷相断罷通り候儀ハ勿論之事ニ候処、中ニハ御家中網打舟ニて編笠冠り候儀ハ不苦抔と相心得候輩も有之哉ニ相聞へ、如何敷事ニ候」（天保十四年（一八四三）『広島県史』）

全て、川々の通船は、川口御番所では作法よく断わって通るのは勿論のことであるが、御家中の中には、網打舟に乗り編笠を冠ったまま通つ

ても構わないと心得ている輩もあると聞くが、「如何敷」ことである。

さて、この「如何敷」は「いかがし」と読むのか、「いかがわしい」か、迷いますが、「如何わしい」と読みたいところです。

【如何し】いかがし。（『広辞苑』）

「形シク」①疑わしい。おぼつかない。②よろしくない。どうかと思われる。

【如何わしい】いかがわしい。（『広辞苑』）

「形」「文」いかがは・し（シク）。①正体はつきりしない。疑わしい。怪しい。信用ができない。②風紀上よろしくない。好ましくない。

両者の区別は判然としません。『日本国語大辞典』によると、「いかがわしい」は「いかがしい」の変化したもの、と解説していますので、区別が付きにくいのは当然かも知れませんが、「如何わしい」の方はその程度が強いような気がします。

「右之者平常実体之者ニ御座候て……村内ニおゐて拒鐘出来湧既ニ銘々共手元へ願出可申場合押移り

候節二ても、同人立入双方へ利害解聞せ小内にて
穩順ニ相納メ、役人共手助りニ相成候儀儘御座候
趣、乍併役筋ニ居不申者ニ御座候へバ表向差遣ひ
候義如何敷」(弘化五年(一八四八)『下蒲刈町史』)

右の者は実直な者で、村内で思わぬ拒鐘(故障
か)ができて、役人に願ひ出るようなときでも、
同人が間に入り、双方へ利害を説明して穩やか
に解決するので、役人共にとって手助けになる
ことが度々あります。しかし役人ではないので、
表向きに使うのは「如何敷」と思われるので、
この場合は、「如何しく」と読み、「不適當」の意
味だろうと思います。

出帰り

「出帰り」という言葉があります。

【出帰り】(『広辞苑』)

① 主家から暇をとった者が再び仕えること。か
えり新参。

勿論、これらは「出かけたり、帰ったり」という
基本の意味から少しはずれた使い方です。

「老牛之義ハ兼て是迄被為仰出候趣も御座候得共、
馬口労共手元ニおゐて密々ニ防長又ハ備中辺へ牽
参り、忝足ニ付代銀凡壹両貳・三步位ニ売払申候、
尤右之内出帰諸入用金壹歩位相懸申候趣ニ御座
候」(嘉永二年(一八四九)『海田町史』)

老牛の取扱については、これまでも指示があり
ましたが、馬口労共が勝手に内々で防長や備中
辺へ連れて行き、忝足の代銀凡壹両貳三步位で
売払っています。もともと「出帰」の諸入用が
金壹歩位は懸るようです。

「文化九年分拔参宮四国遍路諸稼等ニて他国へ出
帰り書附 沼田郡相田村」と題する文書があります。
所謂「出帰り書付」です。当時人口が六〇〇人足ら
ずの沼田郡相田村(現、広島市安佐南区相田)で、拔参
宮・四国遍路・諸稼等のため、一〇人が他国に出向
き、七人が帰っています。

この二つの資料から「出帰り」は他国(他領)への

出入り、今でいう出入国に相当するものと思われる。
す。

切賃

「改印札正金ニ引替申度者は東屋半次郎へ申出候へは引替遣し可申、尤両ニ付銀老分宛切賃相掛り可申候事」（弘化五年（一八四八）『広島県史』）

改印札を正金に引き替えたい者は、東屋半次郎へ申し出ると引き替える。もつとも一両につき銀老分ずつ「切賃」を出すこと。

「改印札」は広島藩が弘化四年（一八四七）に旧来の藩札に改印を捺して発行した銀札のこと。「正金」は金貨。「切賃」は両替手数料です。切賃について辞書の説明を比べました。共通するのは「両替の手数料」ですが、中身は微妙に違います。

【切賃】（『広辞苑』）

金銀貨を錢に切り替える手数料。切錢。替賃。
両替錢。打賃。和利。

【切る・截る・斫る】（『単位の歴史辞典』）

両替をすること。中世末から近世初めにかけて金銀の塊や板を必要に応じて切って秤にかけて取引したことによる。江戸時代には金貨、銀貨が発行されるが、銀貨はその形や大きさが一定せず、通用金額も書かれていず、いちいち秤で計って通用金額を決め、錢貨と交換した。これを業としたのが両替屋で、そこで両替することを「切る」といい、その手数料を「切賃」というようになる。なお銀を金に替える手数料は「打ち賃」または「打ち錢」といった。

【切賃】きりちん。（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、金貨同士の両替の際に支払われた歩銀。〈切〉は大を小に切る意で、切遣いの名残ともいわれる。切賃には両替手数料とともに、交換する貨幣間の相場の格差分が含まれ、切賃は絶えず変動した。一般に小判より小額の一分判の方が遣い勝手が良いので、小判を差し出す方が切賃を出した。また江戸後期には計数銀貨についても同様の歩銀の授受が見られた。

【切貨】（『近世上方語辞典』）

両替の手数料。守貞漫稿貨幣「兌換を俗には、きりちんと云、切貨也、或はうちゝんと云、打貨也、昔はきりちんにて大を小に換る也、譬へば小判を一分判にかゆるには、小判を出す方より切貨を添る也、大を小に切るの意にて切貨と云也」

『広辞苑』は、「金銀貨を錢に切り替える（金銀↓錢）」、『單位の歴史辞典』は、「銀貨は……錢貨と交換（銀↓錢）」、『岩波日本史辞典』は、「金貨同士の兩替（金↓金）」、『守貞漫稿』は「小判を一分判にかゆる（金↓金）」。

上記の例文は、「改印札正金ニ引替（銀札↓金）」の場合です。このように説明が区々なのも珍しいことで、〈細かいことは気にしない〉という態度がいいのかもしれません。

取なやみ

「町内川場筋町門より下拾五間之間土手、先年より町内塩田屋五右衛門借り来、荷物等参ル節ハ土手にて取なやみ申候処、此度町門より拾五間下にて御普請方より杭木御打被成候」（安永六年（一七七七）「堀川町覚書」）

町内の運河で、町門の下、拾五間の間の土手は、先年より町内（堀川町）の塩田屋五右衛門が借りて、荷物等が到着のとき、土手で「取なやみ」をしていました。このたび町門の拾五間下で、藩の御普請方が杭木を打ち込まれることになり、

「船頭、中背共義はいつれも荒増成ものにて、取なやみ候節度每手鍵へ掛地上へ投候故、俵形も殊之外損シ米も痛ミ候道理ニ御座候」（安政元年（一八五四）『廿日市町史』）

（津出来を船積みするとき）船頭や人夫は大雑把で、「取なやみ」のときその都度米俵へ手鍵をかけて地上へ投げるので、俵形も崩れてしまい、米も痛むことになりましたが、

今まで聞いたこともない「取なやミ」という言葉が悩みの種でしたが、やっと『日本国語大辞典』で見付けることができました。

【取悩】（『国語大辞典』）

取り扱うこと。取り扱い。

荷物を「取なやミ」、米俵を「取なやミ」……、「取扱」で納得しました。それにしても「く悩」とは、恐れ入りました。

御一字御拝領

「若殿様御元服被仰付候間、先月廿五日殿様御同道御登城被成候様、前日御老中様方御連名之御奉書御到来、御同道御登城被遊候所、於御前御懇之上意有之、御元服被仰付、御一字御拝領、被任叙従四位上侍従、御盃御頂戴、御腰物御拝領被遊、御名上総之介様と御改、御名乗慶熾公被為附候」（嘉永四年（一八五二）「国前寺御触留帳」）

若殿様（二六歳）は、元服を仰せ付けられ、先月（三月）廿五日に殿様（広島藩九代藩主、浅野齐肃なりたか）と一緒に登城するようにと、その前日御老中様方御連名の御奉書が届いたので登城しますと、御前で御懇の上意があり、元服を仰せ付かり、「御一字御拝領」し、従四位上侍従に叙せられ、御盃を頂戴し、御腰物も拝領され、御名を上総之介様と御改めになり、御名乗は慶熾公よしてゐると付けられました。

これは、若殿様が元服して、浅野慶熾と名乗ったことを領民に知らせる文書の一部です。

慶熾は、浅野齐肃の長男として天保七年（一八三六）十一月に生まれ、嘉永四年（一八五二）三月に元服して、将軍から「御一字御拝領」して、名乗を慶熾としました。安政五年（一八五八）四月、齐肃の致仕により二三歳で襲封、広島藩一〇代藩主となりましたが、この年の九月に江戸で亡くなりました。

元服当時の将軍は徳川家慶、その一字「慶」を拝領して「慶熾」と名乗りました。

実名（名乗）は、元服の時につける二字の名前で、

訓で読むそうです。（高島俊男『お言葉ですが…（7）漢字語源の筋ちがい』）

先代の斉肅も、

「殿様先月廿三日於御前御元服被仰付、御一字御拝領被任叙従四位侍従、御名安芸守と御改、御名乗斉肅公と被為附」（天保三年（一八三二）「鶴亭日記」）

殿様は先月（七月）廿三日、御前で元服を仰せ付き、「御一字御拝領」、従四位侍従に叙せられ、御名は安芸守と御改めになり、御名乗は斉肅公と付けられた。

浅野斉肅は文化十四年（一八一七）生れ、天保二年（一八三二）に襲封、一五歳で広島藩九代藩主となり、翌年に元服しました。当時の將軍は家斉、「御一字御拝領」して「御名乗斉肅公と被為附」。

道打・平打

「道程式拾六町五拾貳間 但貳つ畔より川東村境瀬峠迄 此道打夫九百六拾三人」（宝永六年（一七〇

九）『千代田町史』）

（川井村）貳つ畔より川東村境瀬峠までの道程、式拾六町五拾貳間、この「道打夫」として九百六拾三人。

「同貳匁四分 道打之節酒代」（元治元年（一八六四）『千代田町史』）

道打のときの酒代 貳匁四分。

「道打」の使い方を調べてみました。「道法」「道打夫」「酒代」に関連するとなると、これは「道路の工事」に関係する言葉と見当をつけました。

【道打】 みちうち。（『日本国語大辞典』）

〔方言〕 道路の修理。道普請。（奈良県）

「道打」に似た言葉で、「平打」も見かけます。

「十二段雁木 堤馬踏より外すへて平打石にて其下に雁木十二段あり」（『知新集』）

堤防の馬踏（通路）のほか、全ての「平打」は石で、その下に雁木が十二段ある。

「船越村松石新開堤平打、去八月兩度之大風波にて

所々破損仕」(文政十二年(一八二九)「野間家文書」)

船越村、松石新開の堤防の「平打」が去る八月
両度の大風波で方々が破損し、

「浦辺嶋方新開堤、従公儀被仰出候新開所へ上置・
平打之繕ひ、捨石等之入用有之時節委細吟味見分
有之候上、入用其外夫積帖・目録被調、前廉可被
申聞候」(『吹寄青枯集』)

浦辺や嶋方の新開の堤防は、公儀の発案による
新開は、上置や「平打」の修理、捨石等の必要
があるときは、詳しく見分して費用などの積帖
を作成し、事前に申出ること。

「平打」に関する資料を並べました。いずれも堤
防についての記事です。「平打」が破損したとか、
修理するという記述から見ると、堤防の部分の名称
と考えられます。「馬踏」は堤防の断面(台形)の上
底部分(通路)、「上置」は馬踏の上にかさ上げして
置いた土ですから、「平打」は堤防の側面と考えて
よさそうです。

「平」には「側」(『日本国語大辞典』)の意味があり

ます。

酒湯

「天心公旧臘より御庖瘡御煩、御酒湯も御掛り被遊
候処、御気色睨々不被成御座、次第二御差重、御
養生不被為叶御逝去被遊」(延宝元年(一六七三)一
月二日『三次分家濟美録』)

天心公(広島藩第三代藩主、浅野綱晟)は去年の暮
れより庖瘡にかかり、「御酒湯」も御掛りあそ
ばされましたが、御気色もはつきりされず、次
第に重くなり、御養生の甲斐なく御逝去されま
した。

【笹湯・酒湯】 ささゆ・さかゆ。(『広辞苑』)

庖瘡^{ほうそう}の癒えた後、酒をまぜてつかわせた湯。ま
た、それに浴すること。

「庖瘡の癒えた後」につかう湯なら、一度は快方
に向ったでしょうが、年がかわつてすぐ亡くなっ
ています。三七歳でした。

古文書では、「疱瘡」「痘痕顔」など、よく見かける言葉です。

かんかんのう

「ニヒク知るを楽しむ」、「日中二千年漢字のつきあい」の番組で、落語「らくだ」に出てくる「かんかんのう きうれんす……」は、清楽の「九連環」を原語で歌ったものだとの〈漢文二十面相〉の説明があり、面白く聴きました。

「曲亭馬琴所著蓑笠雨談云……寛政十二年十二月十二日、大清寧波府の船人劉然乙その徒八十六人、遠州袖志が浦に漂着す、彼地に逗留の内、清人等かうたひし曲子コウタあり、掛河の人耳熟して唄ひきかせたり、その曲魚鼓のときものをうちならして囃すといふ、唱哥此方の潮来曲イタコブシに似たり 我的吓感郎的呀々有呀吓呀々有看看送奴個九連環……」（文政九年（一八二六）「鶴亭日記」）

曲亭馬琴の著作『蓑笠雨談』によると……寛政

十二年十二月十二日、大清寧波府の船乗り劉然乙とその部下八十六人が、遠州袖志が浦に漂着した。そこに逗留しているとき、清人等が歌った小唄があり、掛川の人に唄い聞かせて教えた。その曲は「魚鼓」のようなものを打ち鳴らして囃すという。この歌は日本の潮来曲に似ている。

寛政十二年（一八〇〇）の漂着事件を耳にした馬琴が、さつそく『蓑笠雨談（著作堂一夕話）』（享和四年（一八〇四）刊）に取入れ、文政九年（一八二六）には「鶴亭日記」が引用しています。

この「かんかんのう……」、はたして定説の長崎から広まったのか、それとも掛川発か、興味の持たれるところです。

茶を煮

「厳島小浦じよろ じよろハ、小浦の船人、善三郎が女なり、善三郎、年三十ばかりの時、あやまちて、打撲し、それより、骨節いたむ病となりて、

起居も、人のたすけを待てり、家貧く養ふ便なく、妻ハ、じよろが五歳の時より、父につけ置、日々に、いさりして、養ひける、……其十といふ春、母にむかひて、今よりハ、内におハして、父上のおぼすまゝに介保し給ハ、さぞ、よろこび給ふべし、わらハ、代て、礪に、ゆき候ハんと、いひければ、母も不便には、思ひながら、其いへるまゝに、且許しける、是より、日々に貝ほる業に、力を、はげまし、暁潮の落る頃ハ、夜深く起、茶を煮、両親にすゝめて、のち出行」(『芸備孝義伝』)

じよろは、小浦の船乗り善三郎の娘である。善三郎は年三十ばかりの時、誤つて打撲し、それより関節の痛む病となつて、起居も人の助けかりるようになった。家は貧しく、妻はじよろが五歳の時から父の看病をまかせ、毎日漁りをして養つた。……じよろ十歳の春、母に向つていうには、「これからは、家に居て、お父さんの思い通りに看病をしてあげると喜ばれるでしょう。私はお母さんに代つて礪に行きます」。母も不憫に思いながらもそれを許した。これより、

日々に貝を掘り、暁に干潮になるころは、夜中に起き、茶を煮て両親にすすめて出かけた。

これは『芸備孝義伝』の一節です。「茶を煮」という言葉を面白く感じました。

茶葉の形状とか品質により、湯を注ぐだけではダメで、釜の中で「グラグラと煮出す」ことを「茶を煮る」というのでしょうか。当時は、文字通り〈煮〉ていたのかもしれませんが。

現在でも、広島では「茶を煮る」というお年寄りがあると聞きました。

唐樋・南蛮樋

瀬戸内沿岸には「新田(新漕)」という地名がたくさん残っています。江戸時代、干潮時に干潟になる所を堤防で囲い込み、盛んに新田開発(干拓)が行われました。

干拓の設計で特に重要なのは排水です。満潮時には、干拓地より海面が高いので排水はできません。

流れてきた水は遊水池にプールしておき、樋門を閉じて海水の侵入を防ぎます。干潮になると、樋門を開いて海に排水します。

「当村内阿品古地土手唐樋、近年痛ミ居申候物ニ相見え、去ル十五日夜汐樋之板より透込、馬踏より吹出シ……、矢庭ニ土俵、杭、やたを以て取繕其場は取防置申候ニ付、毛上痛候程之変も無御座候得共、……仕替之外無御座候、日夜汐満干之場所ニ御座候へは無心元」（安政三年（一八五六）『廿日市町史』）

当村の内、阿品の古地土手唐樋は、近年痛んでいたものとみえ、去る十五日夜汐樋の板より海水が透き込み、馬踏より吹き出し、応急処置として土俵・杭・やたで取り繕いました。作物に被害はありませんでしたが、取替える外なく、日夜汐の満干の場所のため不安で……

「ここに造る樋門には唐樋と南蛮樋とがあつた。唐樋は石組みの樋門の外側に、左右外開きになる板戸をとりつけ、干潮の時は内部に停滞した余水を

放流し、満潮の時は板戸を密閉して海水の浸水を防ぐようにした。南蛮樋より時代的に古い工法である。南蛮樋は、樋門の外側に上げ下げできる海水防禦の板戸をとりつけ、南蛮という轆轤で干潮時に板戸を巻上げて内部の余水を放流し、満潮時に板戸を下ろして海水の浸入を防ぐようにした。

唐樋とは構造の異なった新式である。」（山田隆夫『矢賀郷土誌』）

「唐」も「南蛮」も外国の技術を取入れた装置という意味だろうと思います。

唐樋は、海の干満の差を利用し、その力で〈弁〉のような扉の開閉を行うとの説明を見ますが、〈全自動〉で開閉するとは、とても考えられません。これに對して、南蛮樋の扉は〈ギロチン〉のように上下する仕掛で、轆轤で動かすそうです。轆轤とは滑車ですか？ どうも判然としません。広島太田川の大芝水門には電動の〈ギロチン〉があります。

上向

「先年御類焼御間無く亦々此度上向両御屋鋪御類焼
にて、莫太之御銀出故、御家中御借米被仰付、広
嶋町方御用銀寸志銀、諸郡へも右ニ准シ被仰付候
事故、」（寛政六年（一七九四）「踊場家文書」）

先年の御類焼から間も無く、またまたこの度上
向では両御屋鋪が類焼し、莫太の出費のため、
御家中からの御借米が仰せ付けられ、広嶋町方
や諸郡からも御用銀・寸志銀を出すようにとの
指示があり、

「乍恐御上向ニおいても種々御判断之上増業御差留
メ被為仰付」（嘉永五年（一八五二）『瀬戸田町史』）
恐れながら、御上向でも種々と御判断の上、増
業差留の指示が出ました。

「彼是上向ニ於ては厚議論有之」（文化十年（一八一
三）「鶴亭日記」）

あれこれと、お上では議論をして、

「上向」という言葉が使われています。もちろん、
「うわむき」ではなく「かみむき」です。

【上向】かみむき。（『日本国語大辞典』）
お上に関すること。公事にかかわること。役所
むき。

野合

「一魚鳥かたき売之儀ハ、屋敷町不相成候事

一野合農業不苦候事

一広嶋肥し取ニ出候人馬不苦、相慎罷通候様可申
付候事」（文化十年（一八一三）「鶴亭日記」）

魚や鳥の振売りは、侍屋敷町では禁止。「野合」
での農業は構わない。広島へ下肥を取りに出る
人馬は構わないが、気を付けて通ること。

これは、前の藩主、浅野重晟が亡くなったときの、
「諸事穩便」の内容の一部です。

「一御通行之節ハ勿論、御野合被遊候刻、烟立不申
様可申付候

一野合之おとし取除可申候」（文化十二年（一八一五）
「鶴亭日記」）

御通りのときは勿論、御野合されるときも、煙を立てないよう指示しなさい。野合の「威し」は取り除けておきなさい。

これは浅野右京(藩主斉賢の弟)が鷹狩りをするときに出された御触の一部です。

【野合・野相】のあい。(『広辞苑』)

戦いで、両軍が平地で出会うこと。

【野合】やごう。(『広辞苑』)

男女が婚儀を経ずに通ずること。密かに結びつくこと。

これらの説明は当てはまりませんが、次の説明で納得しました。

【野間】のあい。(『日本国語大辞典』)

野。野原。

「野合農業」は「野外の農作業」、「野合之おとし」は「田畑に設置してある動物除けの威し」ですから、「野合」は「野外」の意味です。「御野合被遊候」は「野外での活動(鷹狩)」だろうと思います。

引当

享保の飢饉を経験した広島藩は救荒対策の必要を痛感して、領内に社倉法の実施を奨励しました。麦を備蓄し、それ(「永貸麦」)を年々農民に貸付けて利殖をおこない、飢饉になれば、零細な農民と浮過の者(土地を持たないで、賃仕事などの浮稼ぎで生計を立てる貧農)に「救麦」を支給しました。

「春水遺響」(頼春水)には、社倉の運営が「当時宜敷相聞申候所」の状況を次のように説明しています。

「村方百姓、長病等にて野合ニ働き得仕不申候者御座候へハ、長百姓など申合、右社倉麦かし遣し仕候、是ハ利やすニ御座候故、外方かり替よりハ勝手ニ付候方ニ御座候、尤浮過へハ引当無之者へハかし遣し不申、高持之百姓計へかし遣し申様聞へ申候、畢竟元麦手薄ニ御座候故、右等之計ひにて浮過迄へハ届不申候」(「春水遺響」『広島県史』)

村の百姓が長の病いなどで外で働けない者があれば、長百姓などが相談して社倉麦を貸している。これは利安なので外で借りるより勝手がよい。しかし浮過のような引当を持たない者には貸さないで、高持の百姓だけに貸しているという。結局は、元麦が手薄なためであり、浮過には届かない。

【引当て】（『広辞苑』）

①かた。抵当。

見へ透

「郡村の普請といへは、……御代官、次に手附切磋商する事ニハ無之、譬橋落堤切損し雨池井手埋ミ現在に見へ透、不繕して不相済入用も、兼て法則正敷候得は左之ミ聞糺しらべに不及、唯仕形を論し、持堪へ宜敷入用減候様ニ迄切磋商」（『理勢志』）

郡村の土木工事は、全て御代官やその手付（部下）が詳細に吟味する訳ではなく、橋が落ちるとか、

堤防が切れる、雨池や井手が砂で埋ってしまうことがいづれ来るだろうと、今からハッキリと予想されるときは、修理が不可欠で基準に合つてさえいれば、詳しい吟味はしないで、工法や耐久性、費用を減らすことだけを吟味する。

【見え透く】（『広辞苑』）

①底までとおつて見える。内まで透いて見える。
②（人の言動の裏にかくれた意図などが）よくわかる。

現在では、主に上記②の意味で使われる言葉ですが、古文書では、「透明で」中身が「よく見える」の意味からずれて、「将来が見通せる」の使い方が多いように思います。

「過分之塩出来仕候得は、忽直段下落浜業不引合ニ相成候程之儀ニ御座候処、諸国因ミ合相破り銘々勝手次第塩焚重年候ハ、世上遣ひ承り塩年々持越し、果ハ友潰レニ相成候儀は見へ透居申候」（嘉永元年（一八四八）『瀬戸田町史』）

必要以上の塩を生産すれば、たちまち直段が下がり、製塩業は引き合わなくなる。諸国の協定

を破り、銘々が勝手次第に塩を焚くことが続けば、在庫が増加し、結局は共倒れになることは「見へ透」いている。

所作

「鳴物所作ニ仕候者ハ御免被為在候得共、婚姻其外都て振舞等寄合之節、酒宴ニ長し太鞍三味線等にてうたひさわき候様之儀無之様御示し可被成候」
(天保二年(一八三一)一月「鶴亭日記」)

鳴物(楽器の演奏)を「所作」にしている者は許すが、婚姻や振舞等の寄合のとき、酒宴に浮かれて太鞍・三味線等で歌い騒ぐことのないよう示しなさい。

これは前年十一月の広島藩八代藩主、浅野斉賢が亡くなった際の、触書の一部です。

「所作」は「ふるまい」とばかり思っていました
が、「鳴物所作ニ仕候者」という、聞いたこともない言葉を見つけました。

【所作】(『広辞苑』)

②仕事。生業。

「鳴物所作ニ仕候者」とは「楽器の演奏を職業とする者」でした。

激ミ・いつ也とも

「死生ハ命にありといふとも、今日息のかよはん程は思ひのまゝに看病して、後悔なからんこそ、人たるものゝ甲斐ハあれと存候故、さのミ驚キなげく事ハなく、激ミつとめ候故歟、愚拙ハ平生の老病も起り不申候て、俗にいふ丈夫達者に御座候、……貴覽後、御高評承りたく奉存候、御返却之儀ハ急キ不申候間、わざ／＼飛脚ニ御下しにも不及候、いつ也とも御店中御交代之節など、脚ちゃんかゝぬ様に御返し被成可被下候」(文政六年(一八二二)三月八月八日、篠斎宛馬琴書翰)

人間の死生は天から授つたものといいますが、今は生きている限り思いのままに看病して、後

悔のないようにすることが人たるものの甲斐だ
と思います。だから(看病すること)をそれほど驚
き歎くこととは思っていません。「激ミ」努め
るせい、私は平生の老病も起らず、俗にいう
「丈夫達者」の状態です。……ご覧頂いた後、
御高評を承りたく思います。お返しは急ぎませ
ん。わざわざ飛脚を使つて江戸までお送り下さ
るには及びません。「いつ也とも」御店中御交
代のときなど、費用の懸らぬよう御返しくださ
い。

これは、馬琴の殿村安守宛の長い長い手紙の一節
です。一読しただけでは、何のことか解らない言葉
に度々出くわします。当字です。意味を取りながら
読み進めると、コロッと読めるときがあります。こ
れが古文書を読む楽しみの一つです。

「激^はミつとめ候」↓「励^なみ努め候」

「いつ也^{なり}とも」↓「何時^{いつなりとも}成共」

これらは馬琴が勝手に使った当字だろうと思いま
す。

実を難操

「田畑闕損し川除キ堤海辺にての潮留、雨池新調又は内堀、樋取繕ひ、居替、道橋又は川さらへ等之類、普請御銀出の場所、又は郡割調の場所、村調の所有之事也、百姓共自分調ニ当ル処ヲも上へ御引請、御銀出、亦是郡村之力ヲ以調候様ニ歎出候故、此等之儀は見分之上弾紉の有之事也、……下方ニハ兎角貧窮差当り不作等申立、下方之力難計故、……此所甚以実を難操」(「郡要集」)

田畑の闕損、川除や堤防、海辺の潮留、雨池の新調または内堀、樋の修繕や居え替え、道橋または川浚え等の普請には、藩の負担する場所、または郡割調の場所、村で調える場所がある。百姓共が自分調に相当する場所でも藩または郡村の費用で普請してほしいと歎き出すので、見分して詳しく審査する。……百姓共は兎角貧窮とか今年は不作なのでと申し立てるが、下方の力の本当と所は判りにくい。この所ははなはだ

「実を難操」いものがある。

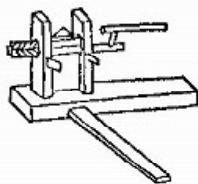
春普請（春の農閑期の土木工事）の費用の出所には色々ありますが、農民は何とかして藩費で済ませようと、不作など申し立てます。藩の役人はそれを素直に信用しては瞞されることになる、と、「郡要集」は強調しています。農民の言分は「甚以実を難操」と言っています。

いびき太郎さんによると、「実を難操」は「実を操り難く」と読むのが適当だそうです。「実を操る」とは綿繰りのことです。

【綿繰車】（『広辞苑』）

簡易な綿繰機。綿花をローラーの間にかませ、これを回転して繊維だけを通過させ、その種子を分離させる。

（下図は綿繰車）



これが本来の意味ですが、「無理やり綿花と綿実を分離することから、広島地方では「執拗に意味または真相を詮索する」という意味にもなるそうで

す。面白い言葉を教わりました。

北極出地三十四度

「北極出地三十四度半少強

文化六己巳年十一月東町善教寺地内にて

東武天文方御役人測量、一度卅六町道廿八里之積也」（文政二年（一八一九）『三原志稿』）

ここで「東武天文方御役人」とは伊能忠敬のことです。文化六年（一八〇九）には山陽道と瀬戸内の島々を測量しました。このとき、善教寺（広島県三原市東町二丁目）を宿舎としています。寺の門前に「文化年間 伊能忠敬 観測地」の碑が建っています。

地図によると、善教寺の場所は、ほぼ北緯三四度二分ですから、北極星の高度は「北極出地三十四度半少強」に当ります。

「一度卅六町道廿八里之積也」の意味するところは、三六町＝一里（3.9273km）を計算して、緯度一度を二八里とする、という意味です。

これをもとに、北極から赤道まで(地球の $1/4$ 周)を計算すると、

$$3.9273\text{km} \times 28\text{回} \times 90\text{度} = 9896.796\text{km}$$

北極から赤道までの子午線(経線)の距離は一万kmですから、緯度一度を二八里とするのも、大体正しいことになります。

不時飽

「不時飽臨時御物入差湊ひ、殊ニ昨年御引続両度之御代替何角と不一方御出方も有之」(安政六年(一八五九)『芸藩志』)

「不時飽」臨時の物入りが重なり、特に昨年は二度も御代替りがあつてなにかと大層出費が重なり、

「引続両度之御代替」とは、安政五年(一八五八)四月、広島藩第九代藩主浅野斉肃が致仕し、慶熾が襲封しましたが、九月に死亡、十一月に長訓が本藩を継いだことをいいます。

問題は「不時飽」という言葉です。「不時」だけなら簡単です。

【不時】ふじ。(『広辞苑』)

思いがけない時。時節はずれ。定まった時の外。臨時。

「不時飽臨時御物入」を「思いがけない臨時の支出」と解釈すれば一応納得できます。ところが、次のような文書があります。

「心得違之者無之様、不時飽示し方貫通いたし、聊たり共締合忽緒之義無之様」(明治二年(一八六九)『広島県史』)

心得違の者がないように「不時飽」指示を貫き、少しでも締め合いをないがしろにすることのないよう、

「不時飽示し方貫通いたし」を「思いがけない指示……」と解釈したのでは、意味不明になってしまいます。

「楮作り之者共、一年中不時飽農間之余力相尽シ」(弘化二年(一八四五)『広島県史』)

楮の生産者は、一年中「不時飽」農作業の間に余力を尽くして

「一年中不時飽」とあるので「一年中いつも」と考えれば意味が通ります。「不時飽示し方貫通いたし」は「いつも指示を徹底し」になります。「不時飽」を「時を空けず」と読むのなら、「いつも」「度々」の意味となり、「不時飽臨時御物入」は「度重なる臨時の支出」と解釈できます。

「勿論渠等よりハ不時飽^{アクマデモ}御仕向筋之儀歎出申候得共」

(『千代田町史』)

勿論彼等よりは「不時飽^{あくまでも}」御仕向筋(藩の援助)を歎願していますが

この本は「不時飽」のルビとして「アクマデモ」と付けていますが、はたしてこのルビは原本にあったものか、それとも、編集者が〈親切心〉から付けたものか、わかりません。「不時飽臨時御物入差湊ひ」を「あくまでも臨時御物入差湊ひ」と読むと、おかしい文章になると思います。

「飽」も「空」も「あく」と読みます。「不時飽」

は「不時空」のことで、「間断なく」の意だろうと思います。読みは「時を空けず」が正しいかどうか、分りません。

初老

「糸崎八幡宮……石華表 銘 右 奉寄進絲崎八幡宮鳥井一基

左 宝永四歲次丁亥六月吉日 備之後州三原城主

浅野甲斐源忠義建焉

額板 八幡宮の文字、大徳寺天祐の筆也

忠義公、御初老に依て御奉納也、下地ハ木の華表なりし也」(文政二年(一八一九)「三原志稿」)

糸碕神社(広島県三原市糸崎町)の鳥居についての記事で、これには以前は木の鳥居であったものを石に代えて、「忠義公、御初老に依て御奉納」とあります。

【初老】(『広辞苑』)

①老境に入りかけた年ごろ。②四〇歳の異称。

浅野忠義は広島藩の家老（三原城主で、寛文七年（一六六七）に生れ、天和三年（一六八三）に父の後を嗣ぎました。鳥居を寄進した宝永四年（一七〇七）は数え年で四一歳です。「増補三原志稿」は「宝永四年、糸崎八幡宮祠前に石華表一基を建立す、時に年四十一、聊初老を賀するの意なり」と説明しています。還暦と同様に、「御初老」を祝ったものと思われ
ます。

所付

「御家中之衆、新知被下御加増拝領ハ、所付を被下候事なれとも、当分一両三年ハ所付不被下、御序之有之迄ハ御差紙被下候」（「理勢志」）

御家中の者で新たに知行（領地）をもらうとか、加増されるときは、「所付」を受ける。その「所付」は序のときに渡すため、差当たり一〜三年間はそれなしで、御差紙が支給される。

この文書で、「所付」の意味が解らないと、何が

書いてあるのやら見当もつきません。

「御家中へ被下候知行所付之事

覚

一 高何程 安芸国何郡何村之内

一同 同

高合

右為支配遣候、全可令領知候、重て以折紙可取替此墨付者也

元禄十三年正月廿一日 御印形

何之何右衛門とのへ」（天保八年（一八三

七）「鶴亭日記」）

藩士が藩主から領地をもらう場合、最終的には何村の誰兵衛の土地を何石、何助からいくらと決める必要がありますが、その前段階で「高何程 安芸国何郡何村之内」と村を指定しています。これが「知行所付」で、具体的に知行所を付けることと考えられます。

加増されても所付が決らなければ、当然年貢は入ってきません。それまでは藩が集めた年貢の中から

加増相当額が御差紙（米券）の形で支給されます。折角領地をもらっても、その場所が二、三年も決らないとは何と呑気な……と思いますが、「江戸時代の武士にとつて、領地とは、まず「石高」の数字であつて、リアルな「土地」を必ずしも意味するものではない」（磯田道史『武士の家計簿』）の説明どおりです。

「重て以折紙可取替此墨付者也」の文言は、「後日、この文書に代えて、村名の入った正式の文書（折紙）発行する」という意味です。

威し

「六月廿三日 具足屋又左衛門儀御具足初て威し候付銀式拾枚被下、翌年丁卯三月廿七日御具足御召初有之

引用書 用旧御買物直段見合帖

六月廿三日

又六様御具足始て威申候付為代銀左之通被下

一銀八百六拾目 奈良具足屋又左衛門」（鳳源君御伝記）

寛永三年（一六二六）六月廿三日、具足屋又左衛門が御具足を初めて「威し」たので銀式拾枚を渡した。翌年卯三月廿七日に御具足の御召初めがあつた。又六様（浅野長治、御歳十三歳）の御具足を初めて「威し」たので代銀八百六拾目を奈良具足屋又左衛門に下された。

又六郎（浅野長治）は広島藩初代藩主浅野長晟の長男で、備後三次藩初代藩主です。

【威・威】おどす。（『日本国語大辞典』）

（「緒を通す」の意）鎧の札を糸、革、または布帛の緒でつづりあわせる。

【具足】（『広辞苑』）

④甲冑。特に、当世具足の略。

具足を作ること「威す」というようです。

籠者

「三吉郡先給人之百姓籠者覚

一上布野村丹羽大膳殿

(中略)

右之村滞米之儀、請相不究候付て籠者被仰付候由、山中又左衛門・伊藤半右衛門口上之通承届候、当作手入仕時分之間百姓籠より先御出し可被成候、此滞米之儀重て御談合可申入候、已上

六月廿五日 三人

八島若狭守殿

溝口勘右之門殿

永田与左衛門殿」(寛永十年(一六三三)『鳳源君御伝

記』)

寛永九年(一六三二)、浅野長治は三吉郡など五万石を分知され、三吉藩を立てました。それ以前の給人の年貢米の未進(滞米)があつたようです。

右の村々の滞米について、結論が出ないので「籠者」を申し付けたと山中又左衛門・伊藤半右衛門から聞いているが、当年の農作業の間は百姓を籠舎から出しなさい。滞米については後日話合いなさい。

「籠者」は「籠舎」のこと。年貢の未進があると百姓を牢に入れ、農繁期には牢からだしています。

「去年未進方ニ取候人質返し可申候」という文言も見られますので、「人質」として「籠者被仰付」たものと思われます。

印免

「理勢志」(広島藩郡村支配の現場で、郡方所務を遂行する役人のためのマニュアル)には、年貢率決定の様子が書いてあります。その中に、「印免」という言葉が使われています。

今年の御免(税率)の原案を作り、それを代官から郡廻へ上げて熟談し、郡廻は勘定奉行とも相談して御年寄衆へ報告、そこで許可が下りると、

「御免之義下組之通極り候段、郡廻衆より請郡限御代官衆へ通達有之、依之印免可仕ニ付、来ル何日郡廻宅へ被揃出候様、前廉ニ郡廻衆より達し有之、印免調、其日直ニ免目録御勘定奉行衆・郡御奉行

衆、郡廻り衆・御代官より被差出、印免といふ事は、村毎之免を免数書記候帳面を以、郡廻衆聞届候趣を以右之免数悉く印形被仕、依て印免といひ伝ふ事か、……此儀至て可秘密筋ニて如斯書頭候筈は無之事ニ候得共極秘ニ書記候事、穴賢可秘く」（「理勢志」）

御免が原案通りに決まったことを郡廻から担当郡代官衆へ知らせ、「印免をするので、来る何日に私（郡廻）宅へ出揃うように」と事前に連絡がある。「印免」が済むと、その日すぐに郡廻り・代官は免目録を勘定奉行・郡御奉行へ提出する。「印免」といふのは、村毎の免数を書いた帳面に、郡廻が承認したという意味で右の免数すべてに印形をするので「印免」というのであろう。……免の決定は秘密にすべき事柄で、このように書いてはいけませんが、極秘で書記する。穴賢秘すべし秘すべし。

「印免可仕ニ付」（印免をするので）とあるので、免を記した数字に捺印をすることと考えられます。免状にも数字ごとに印が据えてあります。

「一土免（印）六ツ（印）四歩（印）七厘 明知方相田村」

点

「拙者懇意之書林十軒店英平吉方ニて水滸伝翻刻出来、当年中ニハ発兌いたし候よし、……これハ高地二三と申仁訳し候よし、……点も尤くハしく、よみヲつけ、字義ヲ頭書ニいたし、一卷毎に末へ音義を附録いたし候よしニ候へハ、よむ人の為になり可申候」（文政十年三月二日篠斎宛馬琴書翰）

私が懇意にしている書林十軒店（万笈堂）英平吉方で『水滸伝』が翻刻され、今年中には発行されるとのこと。……高地二三という人の訳だそうです。……点も最も詳しく、読みを付け、字義を頭注にし、巻末に注があるそうで、読者の為になります。

この『水滸伝』は、『水滸伝と日本人』（高島俊男）で、「高知平山『聖歎外書水滸伝』四冊は、文政十

二年（二八二九）、江戸の万笈堂・慶元堂の共同出版。底本は金聖歎七十回本」と解説してあります。

これは、原文に返り点・送りかななどを付けた、訓訳本です。高校の漢文教科書でおなじみの所謂（漢文）です。原文にこのような処理を加えることを「訳し候」といっています。この作業こそ「翻訳」です。読者は、上がったたり下がったりしながら漢字を見たり送りがなを読んだりする忙しい作業はになりませんが、「翻訳済」の文章を解りやすい「読下し文」にする作業ですから、「訓訳」に比べれば簡単なはずですが、それでも苦勞しています。

【点】（『広辞苑』）

漢文訓読のための補助記号。返り点やヲコト点。訓点。

【訓点】（『広辞苑』）

漢文を訓読するために、原文に書き加えた文字・符号の総称。今日では返点^{かえりてん}・片仮名を主とし、時に平仮名を交える。

ふさい不申

「綿 土地ニふさい不申、あまり作不申候得共、折節少々宛作試申候」（文化十一年（一八一四）「山村国郡志下調帳」『三原市史』）

綿はこの地に「ふさい不申」、あまり作つてはいませんが、時々少々ずつ作り試しています。

「琉球芋少々宛作試候処土地之ふさい候得共、是又猪鹿ニ被堀喰、取立少き方ニ御座候」（文政二年（一八一九）「穴村国郡志下調帳」）

琉球芋を少々ずつ作り試したところ、土地に「ふさい候得共」、これも猪鹿に掘り喰われ収穫は少しです。

「ふさい不申」とか「ふさい候得共」という言葉が出てきたので、『広辞苑』で調べました。

【相応ふ】ふさう。（『広辞苑』）

つり合う。適合する。相当する。

「相応しい」というのはよく使いますが、「相応ふ」にお目にかかったのは初めてです。

とゝヲ・かゝア

「当村言語風俗 当村風俗六七拾年已前迄之事ヲ承候ニ、男女共ニ髪ニひんつけ杯用事無御坐、水ヲ付てときとろゝかつらにてつやを仕候事ニ御座候由、ひんかい水入とて長式寸はかりくしなり成るいひつの焼物御座候、今諸所ニ相残居申候、何ニ用たるものやら當時之人は知るもの無御座位之事にて、もとゆひハ鹿之角ヲ削髪之根元へ差込、わけをこより又は苧をよりてゆひ申候由、婦人も同様なけしまたに櫛壺本之外かさりもの無之よし申伝候、着物など地布の帷子之外用ひ不申、是ニ応し冬之物も質朴なるよし、三拾年斗前迄は当村之言葉之いやしき事誠ニ気毒成事ニ御座候、とゝヲかゝアト唱へ親子兄弟同輩之言葉遣ひにて、當時はとゝ様かゝ様兄様なとゝ町場同様之言葉ニ相成

申候得共、火ヲシト云ゝ、四郎右衛門ヲヒロ右衛門ト申、東野村ヲシカシノ村と申、右ヲムキト云ゝ、清右衛門ヲヘイ右衛門ト云、平兵衛ヲセイ兵衛と申違始末と云て宜布事をひまつと申候、ヒト申事得いわぬニも無御坐、此事は今ニ土民共一円相直り不申土地からと奉存候」(文化十一年(一八一四)「山中村国郡志編集御用諸品書出」『三原市史』)

「当村(御調郡山中村、現広島県三原市)の言語風俗について 当村の風俗は、六〇〇七〇年以前(二七五〇年頃)までの様子を聞くと、男女共に髪に「鬢付け油」を使うこともなく、水を付けて髪を解き、「真葛」(茎の粘液は製紙用または鬢付け油の材料)で艶を付けていたそうです。「ひんかい水入」は長さ六cmばかりの「くしなり」になった歪な焼物で、今でも諸所に残っていますが、何に使用したものか今は知る者はいません。「元結」(髻を結ぶ細い緒は鹿の角を削り、髪の根元へ差し込み、「鬚」を「紙縊」(細く切った紙によりをかけて紐状にしたもの)または「苧」を縫って結っていたそうです。婦人も同様な「けしまた」に櫛壺本の外は飴物はなかったと申伝えていま

ん残りました。

相訳り不申

「当村之名、如何様之訳にて羽佐竹村名を得、古は何村と唱、何之字を用ひ候哉、相訳不知申候」(文政二年(一八一九)「羽佐竹村「国郡志御用二付下調書出帳」)

当村(現、安芸高田市羽佐竹)の村名、羽佐竹村は、どのような訳でそういうのか、昔は何村とっていたのか、どんな字を使っていたのか、「相訳不知申候」

「相訳不知申候」は「その理由を知りません」の意ですが、「相訳け知り申さず候」とでも読むのでしょうか。

「但、勤中勤功書類委敷相訳り不申候二付、省略仕候」(享保五年(一七二〇)『廿日市町史』)

但し、勤め中の勤功書類の詳細は「相訳り不申候二付」、省略します。

す。着物なども「地布」の「帷子」(単物)の外は使いません。冬物も質素な物であったとのこと。三〇年ばかり前までは、当村の言葉はきまりが悪いほど卑しく、「父ヲ」(fotoo)「嬢ア」(kakaa)といい、親子兄弟同輩の言葉遣いで、現在は「父様」(fotosama)「嬢様」(kakasama)「兄様」などと町場同様の言葉になっていますが、「火」(hi)を「シ」(shi)とつい、「四郎右衛門」(shiro-)を「ヨロ右衛門」(hiro-)と申し、「東野村」(higasino-)を「シカシノ村」(sikasino-)と申し、「右」(migi)を「ムキ」(muki)とつい、「清右衛門」(sei-)を「ヘイ右衛門」(hei-)とつい、「平兵衛」(hei-)を「セイ兵衛」(sei-)と言ひ違え、「始末」(shimatu)とつていふことを「ひま」(himatu)と申します。「ヒ」(hi)といえないことではないのですが、この事は今でも土民共みんな直りません。土地柄かと思えます。

つい「江戸時代」という言葉で一括りにしますが、中期と後期を比べるだけでも大きな違がありそうです。現代語訳を試みましたが、不明の箇所がたくさ

この例文では、「相訳り」と「ゝり」が送つてあるので、「訳」は動詞だろうと思いますが、辞書にはありません。文意からすると、「訳り」⇨「分り」のはずですが、どうも訳が分りません。

「少々も快方ニ有之候ハ、押て出勤可被申、夫共出勤相成かたく候へハ、受答相訳り候様名代指出可被申候」(天明六年(一七八六)『広島県史』)

少しでも体調がよければ、無理をしても出勤してください。それが無理なら、受け答が「相訳」る代理を出してください。

この例文でも、「訳り」⇨「分り」だと考えられます。

【訳】わけ。(『広辞苑』)

(「分け」の意)①事を分けて明らかにした、物の筋道。②意味。

「訳」⇨「分け」⇨「分かる」に移っていったものと思われまます。

山田・迫田

「村々田方、山田・迫田ニ至迄、壹歩壹畝も無残植付仕廻可申出と、其趣達しニ成候事」(「理勢志」)

(六月には)村々で、山田・迫田にいたるまで壹歩・壹畝も残らず田植が終れば報告(「田方植付仕舞注進」)するようにと、触を出す。

「山田」「迫田」と、まるで苗字のようにですが、ここでは田の種類です。

【山田】(『広辞苑』)

山にある田。山間の田。

【谷・迫】(『広辞苑』)

(関西・九州地方などで)谷の行きづまり、または谷。せこ。

【迫】(『世界大百科』)

山あいの小さな谷をいう。岡山県以西の中国地方と九州地方に多い。……このような小さな谷に開かれた田が迫田であり、《俚言集覧》に〈美

作にて山の尾と尾との間をさこと云ふ。其処に小水ありて田有をさこ田と云ふ」とある。迫田は、谷田、棚田と同様に、一枚一枚の耕地は零細であり、労働力の投下に比して収穫量は決して多いものではなかった。しかし、小さな谷々の湧水によつて用水が確保でき、河川のはんらんなどの影響をうけることが少ないので、古代、中世では安定的な水田であつた。……

「山田」「迫田」とも、小さい谷間に開かれた零細な田です。

「河内と申ヶ所至て悪所にて、多く水田、陰田・迫田等御座候」（『千代田町史』）

河内という所は農業には悪所で、多くの水田は陰田や迫田です。

「郷中并山田・迫田までも紙札立置引当て不差間様仕置可申候」（『広島県史』）

（榊突の際は）、郷中から山田・迫田までも紙札を立て置き、引当の作業に差支えないようににしない。

百姓共作り取

「耕作之基は土地二候処、此土地へ百姓とも勝手ニ任せ家を建、竹を植、稲を可植田地へハ木綿を植、彼是と畝数を差へ、其外夏作、大豆・小豆・たはこ、麦作等ニハ年貢も不掛、作り取ニ致し置、秋作之稲のミニて貢納る事ニ付、……」（「理勢志」）

耕作の基礎は土地である。この土地へ百姓共が勝手に家を建て、竹を植え、稲を植えるべき田地に木綿を植える。あれやこれやで耕地面積が変動する。そのほか夏作、大豆・小豆・煙草、麦作等には年貢もかからず、「作り取り」にして、秋作の稲だけで年貢を納めるので、……

「作り取り」とは、年貢は掛らず収穫はすべて農民の得分となることをいいます。広島藩の地方書「理勢志」は、「麦ハ御年貢もなし、百姓共作り取にて、上納事一向なし」と、強調していますが、これは（武士の論理）で、百姓を誤魔化す理屈です。

米のできない畑も、検地により米ができると思な
されて、(田より低い斗代で)高付けされます。この
高(土地)に対して年貢が掛けられるので、結局は麦
作にも課税されることになります。

もつとも、年貢は原則として米納で、麦を納める
ことはないのです、その意味では「麦ハ御年貢もなし、
百姓共作り取」です。

また、田方で二毛作をするとき、表作の米作りで
は税を納め、裏作の麦は「作り取り」と解釈できな
いことはありません。

徴税の仕組の完成する近世初期では、二毛作とか
綿作とかをあまり考慮しないで、高(土地)に対して
年貢を掛けることにしたのではないか……と思いま
す。

【二毛作】(『岩波日本史辞典』)

同じ耕地に年二回、別々の作物を作付けするこ
と。水田・畠地ともに一部では平安中期に始め
られ、鎌倉中期になると、幕府が水田二毛作の
麦について領主の所当徴収を禁じており、広く
普及し始めたことが知られる。「老松堂日本行

録」によれば、室町期の瀬戸内では夏に稲、初
秋に蕎麦、晩秋に麦を蒔き、翌年の初夏に麦を
収穫する三毛作が行なわれていたことがわか
る。だが、寒冷地や湿地帯では二毛作は困難
であり、近代初頭においてもその普及率は全水
田の二五%程度であった。

田法

「郡村ニて高を極るにハ、田地毎に間竿を入、豎三
拾間ニ横式拾間なれハ、是を十露盤にてかけ合せ、
六拾坪となるを、田法の三にて割ハ式畝也」(「理
勢志」)

郡村で高を決めるには、田地ごとに間竿を入れ、
縦三〇間に横二〇間なら、これをソロバンで掛
け合せ、六〇坪となるのを、「田法の三」で割
れば二畝となる。

土地面積の計算例として、「理勢志」は、

竪30間×横20間＝60坪

という間違った計算をしています、その間違はここでは無視して、「六〇坪＝二畝」の計算に注目します。

「六拾坪となるを、田法の三にて割ハ式畝也」と解説しています。「田法の三」とは何でしょうか。

$$30坪 = 30坪 = 1畝$$

ですから、坪数を三〇で割れば畝に換算できますので、「田法の三」とは 一畝＝三〇歩に関連する言葉に違いありません。

「反別に石盛其外何品にても物を割掛るにハ、畝までハ其まゝにて置き、歩ハ田法三にて割り、何畝何歩何厘何毛と分にして掛る」(『地方凡例録』) 耕地面積に石盛などを掛けて分米の計算をするには、畝までの数字はそのまま使い、歩は「田法三」で割り、何畝何分何厘何毛と、分にして掛ける。

例えば、斗代一八斗の上田、三反四畝一五歩の分米を計算するには、一五歩を「田法三」で割り五に変換して、

$$\text{面積} 3.45反 \times 18斗 = 62.1斗 (6反2斗1升)$$

とします。このような面倒な計算が必要なのは、「歩」が三〇進法のためです。これを一〇進法にする処理が「田法三にて割」ることです。

「なかさ三十七間、ひろさ二十八間をもつて掛くれば千三十六坪となるなり。これを田法三百坪をもつて割れば、三反四畝十六歩としるべし。」(『塵劫記』)

長三七間、幅二八間を掛ければその面積一〇三六坪となる。これを「田法三百坪」で割れば、三反四畝一六歩となる。

縦横の長さを測量し、面積を算出すると、坪となります。これを反畝歩に換算するには、三〇で割ると答は反畝となり、余りが歩になります。

岩波文庫版『塵劫記』の校注者注によると、

「田法三百坪——一反は三百歩だから、これで割って坪単位を反単位に直す。これが田法三百である。ソロバンでの計算では単位を問題にしないから、他のところでは田法三ともある。なお、反の単位に直すとき、小数第一位まで割り、小数第一位は畝

となる。」

「田地内壺坪二なよ竹四本四角二括り候を入レ、其内二有之稻を刈こきをして粃ニいたし、升ニてはかり見候へハ、上分ハ大概式升ほと粃有之、正米ニして半方之建り之物故、一坪壺升出来也、右壺坪を田法壺歩ト云」（「理勢志」）

（升突で稲の出来を査定するには）、田地の内に壺坪の広さの、なよ竹四本を四角に括ったものを入れ、その内にある稲を刈りこいで粃にして枡で量れば、上分の田では式升ほどの粃がとれる。正米（春米）にすると半分になる建前なので、一坪で壺升の玄米となる。壺坪のことを「田法」では壺歩という。

今度は「田法壺歩」という言葉が出ました。「田法の三にて割」も含めて「田法」を考えると、「田法」とは「土地の面積の計算や単位に関するきまり」とでもまとめることができそうです。

つゆ

「その庵のひろさ畳一ひら二ひらに過されは、人々見て今すこしひろめよといひければ」（『梅鶴閑話』）
その庵の広さは畳一、二枚しかないのです、人々はこれを見て、今すこし広めたら如何ですかというと、

「広さ」といえば、普通は次の意味で使います。

【広さ】（『広辞苑』）

広いこと。また、広いか狭いかの程度。面積。
ところが、『塵劫記』などでは、別の使い方がしてあります。

「ながさ三十七間、ひろさ二十八間をもつて掛くれば千三十六坪となるなり。」（『塵劫記』）

長さ三十七間、「ひろさ」二十八間を掛算すると、千三十六坪となる。

一升枡（容積1803.91^{二五}）の大きさを『塵劫記』は次のように説明しています。

「一升ます ひろさ四寸九分四方、ふかさ式寸七分」

4寸9分×4寸9分×2寸7分

= 14.847cm×14.847cm×8.181cm

＝1803.37(リツ)ム

「麦をつくる畠にはまた夏作毛……を二月下旬より四五月に仕付ける程に、……麦の間にまく故、うねせまきは自由なりがたし。あだうねのひろさ一尺三四寸より二尺四五寸までに及ぶべし。」（『百姓伝記』）

麦を作っている畠に、夏の作物を二月下旬より四五月に植えると、麦の間に蒔くので畝が狭いと思い通りにならない。徒畝（麦の作条と作条の間）の「ひろさ」を一尺三四寸～二尺四五寸にするとよい。

「とたてのひろさ四寸五分」（「船之法符之目録」『倉橋町史』）

戸立（和船の船尾を仕切る板）の「ひろさ」四寸五分。

ここで「ひろさ」とは面積ではなく、幅の長さというようです。

【広】ひろさ。（『日本国語大辞典』）
広いこと。また、その程度。間口・幅の大きさ

など。

そういえば、「広幅」などと日常的に使っています。

かんたち

「米八百五十石有。但、一石に付三升づゝかん立ち申候時に、右のます目になにほどぞといふ時、升目八百二十四石五斗に成といふ。」（岩波文庫『塵劫記』）

米が八百五十石あり、一石に付三升づゝの「かん立ち」があると、実際にある米の量はいくらかと問うとき、八百二十四石五斗であるという。同書の注によると、「かん立ち＝量目の不足すること。「かん」は「欠」と書く」とあります。一石で三升不足すると、「一石」は実は九斗七升ですから、

0.97石×850石＝824.5石
です。

「廻し欠、三斗入俵ニ付貳合、五斗入俵壹俵ニ付三合迄欠り有之分は御請取候て、欠米別ニ御請取可有之候、是より過分ニ欠立候は有俵ニ御直せ可被仰付候」（慶安二年（一六四九）『広島県史』）

廻し欠、年貢米三斗入り俵では貳合まで、五斗入り俵では壹俵につき三合まで「欠り」があるときはそのまま受け取って、欠米（不足の米）は別に徴収しなさい。これ以上の不足があるときは、規定量の俵に作り直させなさい。

「欠り」は「不足」のこと、「かけり」と読むのでしょう。「欠米」は「不足した米」、「かんまい」と読みます。「廻し欠」の意味は解りません。

「御蔵米払之時……米渡候時かんたち候ハ、百姓出し可申候、若あまり候ハ、百姓ニもとし可申候」（寛永七年（一六三〇）『広島県史』）

御米蔵から切米を渡すとき、量目が不足していたら、不足分は百姓が負担しなさい。余れば百姓に戻しなさい。

「かんたち」は「欠立」で、「規定量に不足する

こと」。

態飛脚

「 覚

一 飛脚 松三郎

儀十郎

右町御奉行所急御用ニ就、唯今より夜通し態飛脚差立候、着刻出刻共書記し可被差戻候事

正月九日 御勘定所（天保十年（一八三九）「鶴亭日記」）

町御奉行所の急御用のため、唯今より夜通しの「態飛脚」を差し立てる。着刻・出刻共に記入して差し戻しなさい。

飛脚から「御用状」を受取った野坂三益老は、「御用状壹通 右請取申候 御飛脚未之刻（午後二時頃）着、同刻出」との返事をしています。

飛脚で「急御用」「夜通し」となれば、通常の飛脚ではなく、その為に「態々」^{わざわざ}仕立てた飛脚と思わ

れます。

「御年貢納所・差次米・厘米取立方・郡中態飛脚二不及諸用達取計等之事

……

郡中諸用村々より広島へ飛脚差出候義、諸入役之費可有之候間、吉田町・可部町両所二役相究被置、郡中之諸用不差急願又ハ注進書付等右両所へ差出、一ヶ月六度程ツ、兼て日限被究置、郡中之諸用書附取集吉田町より飛脚差出、勿論可部町ニ集り居(申候脱)書付等も右飛脚立寄、一緒ニ仕広嶋へ持参候様可有御申付候」(『吹寄青枯集』)

郡中の用事で村々より広島へ飛脚を差し出すことは、費用も掛るので、吉田町・可部町両所に担当者を決めておき、不急の書類は右両所へ差し出し、一ヶ月六度ほど日限を決め、書類を取り集めて吉田町より飛脚を出し、可部町にも立ち寄り、一緒に広島へ持参するようにしなさい。

経費節減の工夫がされても、急用なら「態飛脚」が必要です。意味は理解できますが、これを何と読

むのでしょうか。「郡中態飛脚」という用例からみて、「態飛脚」という名詞になっているような気がします。すると「わざわざ」とでも読むのでしょうか。

せり立

「当御年貢米於御蔵所ニ、殊之外勿俵多御座候趣、……就ては、上納払切御日限延引不致、早々皆済ニ至り候様、前廉御せり立可被成候、呉々も万々御手拔無之様御取計可被成」(天保十二年(一八四一)「踊場家文書」)

今年の御年貢米は、御蔵所に納入するとき、ことのほか勿俵(不合格俵)が多いとのこと、……就ては、上納払切の御日限を守り、早々に完納するよう、事前に「せり立」てておいてください。呉々も万々手拔りのないよう御取計ください。

これは割庄屋から庄屋宛の指示です。

「右村々当御年貢納り方……当年ハ……中晩田熟後レ、其上打続雨天ニ付麦作蒔後レニ相成り、村々共手後レ奉恐入候、此以後払之儀ハ段々相約メ申候処、御請合御証文之通早々せり立、御蔵払御切手差上可申段申出仕候」（寛政四年（一七九二）『野間家文書』）

右村々の当年御年貢の納入について……当年は中晩田の稲の成熟が遅れ、そのうえ打ち続く雨天のため麦蒔の後れになり、村々とも遅れ気味で恐れ入ります。今後の納入について集約しましたら、御請合証文の通り、早々に「せり立」、御蔵払・御切手を差し上げると申出ています。これは割庄屋から郡役所に宛てた状況報告です。ともに年貢納入を「せり立」てることについての文書です。

【迫り立てる】（『広辞苑』）
せきたてる。催促する。

一途のすぎはひ

「三次十日市町念頃屋源右衛門妻ぎん こゝに孝婦あり、ぎんと呼ぶ三谿郡高杉村の喜右衛門が女にて、三次十日市町念頃屋源右衛門が妻なり、はじめ来りしより、いくほどなく舅姑みな老病して起居さへいとくるしげなり。ぎんは虎之助とて、幼きものをもまうけたれど、其つかへの、こまかに至れること、いはんかたなし、夫また、あしき病を受けて、年を経つゝ床にのみふしたれば、すぎはひ、やうやくきはまりて、その心ばそきいふべくもあらざるに……」（寛政九年（一七九七）『芸備孝義伝』）

三次十日市町念頃屋源右衛門妻ぎん ぎんという孝婦がいる。三谿郡高杉村の喜右衛門の娘で、三次十日市町念頃屋源右衛門の妻である。嫁いで間もなく舅姑が二人とも老病して起居さえ不自由となった。ぎんは虎之助という子をもうけたが、年寄の介護は細やかであつた。夫もまた、悪い病気にかかり、次第に床に臥せるようになったので、とうとう「すぎはひ」も極まり、その心細いこと……。

「農一途之者六歩五厘方 職五厘方 商式歩方 日雇歩行持舟稼馬遣浮過壱歩方

右皆農業に相雜り渡世仕申候、工商類何々によらず一途のすぎはひと申義は凡て無御座候」(文政二年(一八一九)高田郡「国郡志御編集ニ就テ下調郡辻書出帳」)

(高田郡では)專業農家六五%、職人五%、商売人二十%、その他の日雇・荷歩行・持舟稼・馬遣・浮過一〇%。これらは農業との兼業で、工商類すべて「一途のすぎはひ」(專業)ということではありません。

【生業】すぎわい。(『広辞苑』)

世を渡るための職業。なりわい。生計。

雪汁

「寒中に雪汁を貯へをき、春蒔くべき前に種子を漬けてしばし置きて上げて蒔くも虫付かず。雪は五穀の精にして雪汁にひたしうゆれば、虫の喰はざ

るのみならず、旱にも痛まずみのりよきものなり。寒の中に雪をつぼに入れ、日かげの所土中に埋めをき用に随ひて汲み出し用ゆべし。」(『農業全書』)

寒のうちに「雪汁」を貯えておき、春の種蒔前に種子を漬けて蒔けば虫も付かない。雪は五穀の精であり、雪汁に浸して植えれば、虫が喰わないだけでなく、日照りでも作物は痛まず、実りもよくなる。寒の中に雪を壺に入れ、日陰の土中に埋め、汲み出して使う。

「古キ絵キヌ或ハ古キ唐紙ノ画洗フニハ、寒ノ内ニ雪汁ニテ蓮葉ヲ煎シ置、ウケバリヲシテ置、上ヨリ鳥ノ羽ニテ洗フ也」(天保八年(一八三七)「鶴亭日記」)

古い絵で、絹または古い唐紙に描かれた画を洗うには、寒の内に「雪汁」で蓮葉を煎じておき、浮け貼りをして、上から鳥の羽で洗う。

【雪汁】ゆきしる。(『広辞苑』)

雪どけの水。雪汁水。

【浮け貼り】(『広辞苑』)

などをはる時、骨の上だけに糊をつけて、その他を浮かせてはること。

芸る

「芸るな四月の野には鳥か臥 完来」（下垣内和人著『近世中国俳壇史』）

「大島完来 江戸後期の俳人・伊勢津藩士。通称は吉太郎、号に震柳舎・野狐窟・空華居士等がある。俳諧を二世宗瑞に、のち蓼太に学び、雪中庵の名蹟をついでその四世となった。また能書で聞こえていた。文化十四年（一八一七）歿、七〇才。」（思文閣「美術人名辞典」）

「芸る」とは、何のことか。たまたまその答を『農業全書』で見つけました。「芸る」とルビがありま

す。
「芸る事は苗をうへ付けて、十日ばかり過ればよくあり付く物なり。其時は草はいまだ目には見え

ねども、早草の根は土中にはびこるなり。上の農人は見えざるに芸り、中は見えて後芸る。見えても又とらざるは是を下の農人と云ふなり。」（『農業全書』）

「芸る」事は、苗を植付けて、十日もすると草が根付くものである。その時は草はまだ目には見えないが、草の根は土中にはびこっている。熟練した百姓は見えなくても「芸り」、普通の百姓は草が見えだして「芸る」。見えても取らないのは下の百姓である。

ルビと適切な説明で「芸る」の意味が解りました。草を取ることです。

「農人は春の耕し夏の芸ぎりに力を尽し、時至りぬる秋のおさめをつゝしんで苅り取るべし。」（『農業全書』）

百姓は、春は懸命に耕し、夏は「芸ぎり」に力を尽し、時がきて秋の収穫を慎んで苅り取るべし。

【芸】ウン くさぎる。（『学研漢和大字典』）

畑の土をませかえして雑草をとる。△「藝」は別字。藝は、芸の異体字だが、のち藝と混同され、藝と同じ意味に用いる。日本では芸を藝の略字として用いる。

「芸」は略字で、その本字は「藝^{げい}」であると考え、「藝」の意味を調べましたが、「くさぎる」は出てきません。念のため、「芸^{うん}」を調べるとありました！3つの文字が入り乱れて、場外乱闘。同じようで、違うようで……、これ又面白い字です。

【耘^{うん}】くさぎる。（『広辞苑』）

田畑の雑草を除き去る。

兎も角も、これでようやく完来の句も解りました。

降りみ降らずみ

「長門国萩の城下は北海に臨みたる土地なり……夏の頃など、風静にして天気殊によろしき日は、夕暮より船を催して鯖を釣に出るなり、是を釣には地方を離る事三四里あるひは六七里乃至十里余も

漕出し、扱船の両方には篝火夥敷焼捨ると、海中の鯖火の光りに船の左右へよること幾千万といふ事をしらす、其時釣をたれて一夜に三四百より七八百尾も釣上るなり、これ一人の得ものにして、小舟一艘にも数人乗れば数千の鯖を釣うる事なり、如斯なれば数百の船の篝火海上一面にかゞやきて夥しく賑々敷なり、斯て夏たけ秋暮て降りみならずみ定めなき時雨ぞ、冬の初より浪風荒く海底大に騒動す、此時は海魚皆城山の方へ寄居る故、其時には陸より釣をたれて鰯などといふ魚をも釣揚るなり」（山下弘毅著『碌々雑話』）

長門国萩の城下は北海に臨む土地である。……夏の頃など、風が静かで天気の良い日は、夕暮より船を準備して鯖を釣に出る。この釣は海岸から三四十里余も沖に漕ぎ出し、船の両側で篝火を派手に焚くと、海中の鯖は火の光りに船の左右に沢山集る。この時釣糸を垂れると一夜にして三四百から七八百尾も釣り上る。これは一人の得物で、小舟一艘に数人乗れば数千の鯖を釣ることになる。そのため数百の船の篝火が海

上一面に輝き賑やかなことである。こうして夏が過ぎ秋も暮れて、「降りみふらずみ」気まぐれに時雨る初冬から浪風は荒く、海底は大いに騒動する。この時、海魚は皆城山の方へ寄せ来るので、陸より釣糸を垂れて、鰯^{いわし}なども釣り揚る。

山下弘毅著『碌々雑話』は、主として広島藩内に係わる、四方山の物語りを記したものです。その中から釣りマニアが喜びそうな話の一部を引用しました。

「降りみふらずみ」というおもしろい言葉を見つめました。

【降りみ降らずみ】ふりみふらずみ。（『現代新国語辞典』）

《連語》「み」は動詞などの連用形について「…したり」の意を表す接尾語。「文」「雨や雪などが」降ったり、降らなかつたりすること。

升突

「升突仕様之事 早稲・中田・晩田共、畝^{うね}耑^{はし}歩之内出来^う来^き初^{はつ}ヲ知^して其^{その}初^{はつ}ヲ米^{こめ}ニ直^{ただ}し、其^{その}村々其^{その}年々出来^う来^き米^{こめ}高^{たか}ヲ承^{うけたまわ}知^し仕^し候^{こう}様^{さま}之事^{こと}ニて御^ご座^ざ候^{こう}」（『青枯集』）

升突とは、早稲・中田・晩田とも、面積^{めんせき}耑^{はし}歩^ふ（耑^{はし}坪^{へい}）の内の初^{はつ}の出来^う来^き具^ぐ合^がを調^{しら}べ、その初^{はつ}を米^{こめ}に換^か算^{さん}して、その村のその年の米の出来^う来^き高^{たか}を知るこ

ことである。

「耑^{はし}間^ま之^のな^なよ竹^{たけ}四^よ本^{ほん}伐^ば、四^よ方^{ほう}ニ居^ゐ候^{こう}を升^{しやう}ト云^い、村^{むら}中^{ちゆう}見^み廻^{まわ}り宜^{よろ}く出来^う来^き候^{こう}所^{ところ}へ右^{みぎ}之^の升^{しやう}を入^いれ、其^{その}内^{うち}之^の稻^{いね}毛^も刈^{かり}取^と、こき落^おし、其^{その}初^{はつ}を升^{しやう}ニてはかり改^{かへ}」（「理勢志」）

耑^{はし}間^まの長^{なが}さのなよ竹^{たけ}四^よ本^{ほん}を準備^{じゆんび}して、四^よ方^{ほう}を四^よ角^{かく}に括^{くわく}つたものを「升^{しやう}」という。村^{むら}中^{ちゆう}を見^み廻^{まわ}り、出来^う来^きの良^よい所^{ところ}へこの「升^{しやう}」を入^いれ、その内^{うち}の稻^{いね}を刈^{かり}取^とり、脱^だ穀^{こく}をして初^{はつ}を桝^{ます}で量^{はか}り……。

一^{ひと}坪^{へい}の稻^{いね}を刈^{かり}取^とり、これを基礎^{きそ}として全体^{しんたい}の収^{しゆ}穫^{かく}量^{りやう}を算^{さん}出^だす作^{さく}業^{ぎやう}ですから、「坪^{へい}刈^{かり}」とも言います。

【坪刈り】つばがり。（『広辞苑』）

一坪の稲を刈り取り、これを基礎として全体の収穫量を算出すること。江戸時代の検見(けみ)にもこの方法を用い、現今も行われる。

「升突」の「升」は、粃を量る「枴」のことだとばかり思っていました、そうではなく、枴のような四角な形を意味するようです。相撲や劇場などの観客席を「升席」と言うのに気がつきました。

「升突」の「突」は、田んぼに「突き立てる」ということかも知れません。

【枴^ひ指】ますづき。(『日本国語大辞典』)

各筆の上・中・下の等級を決めて、一村の収穫高を算出し、これと高とを比べて田租の割合を決めること。・池野文書「東浅井郡志四」文禄五年三月一日・石田三成落村掟「一ねんぐのおさめやうの事、田刈らさる前に、田頭にて見はからひ、免之儀相定むべし。若給人、百姓ねんちがひの田あらば、升つきいたし、免定め可申候」・歌謡・踊唱歌「御伊勢踊「今年や世の中稲の枴づきしてみたら、稲は三束、米は五斗五升五合つく」。池野文書「年貢の納め方 稲刈り前に、田頭が見計らって税率を決めなさい。もし

百姓の見込み違いの田があれば、給人(給主)は「升つき」をして税率を決めなさい。」

『青枯集』のスッキリとした説明と違い、『日本国語大辞典』は、正確ではありません。「各筆の上・中・下の等級を決め」るのは検地のときです。「これと高とを比べて田租の割合を決める(年貢率の決定)」のは、升突の作業と直接の関係はありません。(広島藩では年貢率は春先に決ります＝土免。)

見附

「見付」という言葉には、色々な使い方がありますが。

【見附】みつけ。(『岩波日本史辞典』)

近世城郭の要所に置かれた枴形ますがたのある城門の外側で、城門を警護する番兵の見張る場所。転じて城門。見付とも書く。軍事的意味が薄れると、人・物の通過点として繁華な町並みが形成されることもあった。江戸城の見附(城門)は俗に「三十六見附」といわれる。赤坂・

四谷・市谷・牛込などの見附は地名としても残る。

「御升突御廻村後、稲毛上荳揚挽粉成取斗候処、当夏風水両難、仍て寔ニ案外至極取実無少不、其上米見附不宜、中ニハ屑米同様之分御年貢米へ不向ニ御座候ニ付、第一米拵等格外手間取、彼是ニて只様遅納ニ相成、恐多次第二奉存候」(嘉永三年(一八五〇)「野間家文書」)

御升突で御廻村された後、稲を荳り揚げて挽粉成(脱穀)をしましたところ、夏の風水害により予想外に取実が少なく、その上米の「見附」(みかけ)も悪く、中には屑米同様な物もあり、御年貢米には不向なため、米拵え等に変手間取り、あれこれあつて遅納になり、恐れ多いことです。

「若し凶年等にて悪作に会し、貢米に不足を感じる事あらは、該村役員は農民と協議して見附を請願する事あり、見附とは郡廻以下重役をして、特に悪作実地の情況の検閲を請願する事にして、其事頗る重大の事と為す、故に其事あるに会しては、

代官は切に事情を調査し、果して見附請願の已むを得ざるを認る時は、村役員及調査役員をして宣誓して実況を調査せしめ、之か帳簿を造り呈出せしむ、茲に於て郡廻役及代官役、若くは之に属する諸職員又は勘定所吟味役等実境を巡検すといへとも、早田中田晩田の三毛ある時は三回に出張して之を検査し、更に枿突を為し産米を積算して該貢米の額を定む」(『芸藩志拾遺』)

もし凶年に当り、不作のために年貢米にも不足すると思えば、庄屋などは村民と協議して「見附」を願出ることがある。「見附」とは郡廻以下重役に悪作の様子を実地に検閲してもらいうよう請願することで、大変な事柄である。請願を受けた代官は事情を精査し、果して見附請願も仕方がないと認めると、村役員及調査役員に宣誓させて実況を調査させ、帳簿を作り提出させる。その後、郡廻・代官・御歩行目付・御小人目付・御勘定所吟味役、郡の手附番組、割庄屋、外村の役人共が、早田中田晩田の三毛ある時は三回も出張して実況を巡検し、枿突をして産米を積算して、年貢額を改める。

その際、村役人は、「右之条々於相背は、忝も梵天帝釈四大天王惣て日本国中大小神祇別て銘々奉願本尊神罰冥罰可蒙者也」という起請文まで書いています。春先に一度決った年貢を、不作を理由に減額してもらうことが、いかに「重大の事」か分ります。

また、「見付之諸入用悉皆を出候事也、其見付跡何程難渋二陥候共、歎御聞届ハ無之御建り也」（見付の費用は全額村負担。見付の後に村が難渋に陥っても、藩は援助しない）と脅されると、簡単には「見付を請願」はできないだろうと思います。

【見付】 みつけ。（金岡照『近世用語の概説』）

凶年（村全体で三割以上の損毛）の場合には、該村役人は農民と協議して代官に対して、見付を請願することができた。見付とは、「郡廻り」「代官」等が凶作の状況を実地に見分することをいい、代官は見付の請願があれば事情を調査し、やむを得ないと認めたときは、村役人や調査役員に実情を調査させ、その結果についての帳簿を提出させた。これによって「郡廻り」「代官」（または代官所職員・勘定所吟味役等）は巡検し、

升突をして年貢米の額を定めた。早稲・中田・晩田の三田がある時には三回の見付を実施した。寛永地詰帳によれば、高宮郡矢口村の見付田の石盛は一反が五升、見付田は二升であった。

事々敷

「近年水主町へ町方より事々敷談しありて、御水主の余力に「さなだ」をおらすべしとて手始ありし、水主町には勘定方役の手元にて銀子取替数々の機こしらへ渡し、織ならはせしに自が染色も備前さなどとは劣り、店にても捌けがたく見取も下直になりて引合ざれば、今は織ものなく機代等取替の銀子償ひかた六ヶ敷とぞ聞、是また見込ちがひどもにや。」（文政十二年（一八二九）『秘話独断』）

近年、水主町へ町方より「事々敷」話があつて、御水主（加子）の内職に「真田織」を織らせるが良からうということになり、水主町には勘定所が資金を前貸して数々の織機を拵え渡して織ら

せたが、染色も備前真田より劣り、店でも売れないので値段も安く、結局引き合わないため、今では誰も織る者もなく、機代等前貸の返済も困難だということである。これもまた見込違いであつた。

下級武士の生活救済のために考え出された「真田織」も、「是また見込ちがひ」となり、殖産興業政策も失敗であつたとしています。

「近々阿蘭陀領事官長崎奉行支配之もの附添出府休泊相成候、宿々は非常之手当致し、且蘭人見物之ため無用之もの猥ニ宿へ立入、猥成儀無之様、猶取締其外之儀可有之候

一蘭人見物之もの毎々群集いたし、通行差支候所も有之由ニ付、宿村役人共見計途中相詰、往来附添之ものより差図次第相制、尤宿組二階見世先等二て事々敷見物いたし候儀は無之様、所役人共より兼て可申聞置候」（安政五年（一八五八）『広島県史』）

近々オランダ領事官が、長崎奉行支配の者の付添で江戸に行くため宿泊することになった。宿々は非常の場合の手当をし、オランダ人見物の

ため無用の者が勝手に宿へ立ち入るなど、みだりなことがないよう取り締りなさい。オランダ人を見物するため毎々群集して、通行に差支える所もあるとのことなので、宿村の役人共は見計らつて途中に待機し、付添の者の差図により整理をしなさい。宿の二階や店先等で「事々敷」見物することのないよう、所の役人共より事前に触知らせなさい。

【事らしい】ことごとしい。（『広辞苑』）
おおげさである。仰山ぎやうざんである。たいそうである。

天窓

「当村和七と申もの今六拾歳斗りなりしが、十八歳の時八月上旬夕七ツ時此山へ参居候処、よいよいと声を懸るもの有、おいと答て向を見れハ十二三歳斗の小童天窓に毛あり、貌の色赤黒くぼろを着たることく見へて人にあらず、追々近寄故おそろ

しく其所を立去り罷戻候由」（文政二年（一八一九）
「仁方村国郡志御用書上帳」）

当村（現、呉市仁方町）の和七という者、現在は六〇歳ばかりであるが、一八歳の時、八月上旬夕七ツ時（午後四時頃）この山（野路山）へいつていたら、「よいよい」と声をかける者がある。「おい」と答えて向を見れば、一二、三歳ばかりの子供で、「天窓」に毛があり、顔色赤黒く、ボロを着たように見えるが、人間ではないモノが、だんだんと近寄ってくるので恐ろしくなり、そこを立去って帰ってきたとのことである。

「花曇り惟然に似たる天窓つき 籬」（文政八年（一八二五）「鶴亭日記」）

【惟然】いぜん。（『世界大百科事典』）

？・一七一一（正徳二）江戸前期の俳人。姓は広瀬、通称は源之丞。初号は素牛。別号に鳥落人。美濃国関の人。一六八八年（元禄二）芭蕉に入門。芭蕉に近侍することが多かったが、師の没後、九州、奥羽、北陸等を行脚、蕉風を広める上に功績があった。擬声語を用いた口語調の軽妙な

句を特徴とし、風羅念仏なるものを創始した。編著は《藤の実》（一六九四）、《二葉集》（一七〇二）等。《水鳥やむかふの岸へつういつい》（《惟然坊句集》）。桜井 武次郎

【天窓】てんそう。（『広辞苑』）

①てんまど。②あたま。

この句の作者は柴籬（野坂三益）。「天窓」は「あたま」と読みます。花曇りの日の花見、遠目で惟然らしい頭格好の人を見かけたが……、という意味だろうと思います。

「三上郡小童村祇園社の上なる山は小黒く見え渡るもろ山々の天窓は算ふるにいとまなく」（文政二年（一八一九）「三田村国郡志御用書上帳」）

三上郡小童村祇園社の上で、小黒く見え渡る諸々の山の「天窓」は限りなく、
ここでは山頂にまで「天窓」を使っています。

浮置

「先達て御廻達御文意之内、格別働宜神妙ニ相勤候ものへ、時ニ取褒美遣候様之義不苦との義有之候得共、此義村方一同へ申談候ては氣取違等致候もの可有之も難計候ニ付、先ツ村方へ申談候義は浮置、奉公人之内拔群致出精候者へ褒美等遣度段、抱主より伺出候ハ、其時々少々之取計は不苦旨申談可然事」(弘化二年(一八四五)『広島県史』)

先日触示した文書に、「特に働きが良く神妙に勤めた者には褒美を遣わしても構わない」との内容があつたが、村方一同へ話すと勘違いをする者もあるかもしれないので、差当たり村方へ話すことは「浮置」き、奉公人の内拔群出精した者へ褒美等を遣わしたいと雇主から申出があるとき、少々の褒美は構わないと話してもよろう。

「浮置」という今は使わない言葉がでした。「浮」は水面にプカプカと漂う不確かな状態、「置」はそのままの状態で残すことですから、「保留」に当ります。

「利息は三ヶ年の間御浮置、四ヶ年目に到り三ヶ年

分利足並に其年分元利とも御下げ被成候事」(慶応三年(一八六七)永井弥六『広島藩農村考』)

利息は、三ヶ年の間は「御浮置」、四ヶ年目になるとそれまでの三ヶ年分の利足とその年分の元利を御下げになる。

最初の三ヶ年分利息支払を「猶予」し、四年目に「御下げになる」、言葉の端々から藩が借金するところが読み取れます。

江戸時代の人は、「浮世」に見ごとく「浮」の言葉を目的に使っていたのかも知れません。

「作間浮儲三方々へ出商ひ仕候ものも数々御座候」(畑賀村「文化度国郡志」)

農閑期に「浮儲(雑収入)」のため村を出て行商するものも沢山います。

「浮過は「無地浮世過」の略称で、狭義の百姓とは区分される広島藩固有の身分呼称である。これは当初からの呼称ではなく、一八世紀初頭の差出帳類ではじめて浮過という身分把握がおこなわれた。これはこの頃に著しい経済の発達がみられ、

人びとの生活も元禄文化の象徴であった「浮世」で、田畑を所有していなくても生計が成り立つような諸種の稼ぎが出現したことがその背景にあった。」(中山富広『近世の経済発展と地方社会』)

「浮世過」は「浮世―過」ではなく、「浮―世過」でしょう。「浮」は「農業から離れて不安定な」、「世過」は「世渡り(生活)」という意味で使いだしたものであると思います。

【世過ぎ】 よすぎ。(『広辞苑』)

世渡りをして行くこと。くちすぎ。生活。「身過ぎ」

御取替米

御取替米に関する史料、解説を集めました。

「八月上旬之大風ニて作方一同仰山之毛損仕、人家都て建物山林等大造之風損難筆紙ニ尽シ衰至極之年柄二御座候二付、約ル処御年貢方米納御勘定も

難相調、不得止郡辻ニて御取替米も御歎申上候次第二御座候二付」(嘉永三年(一八五〇)『府中町史』)

八月上旬の大風のため、全ての作物が大損害を受け、人家など建物や山林等も大造な風損で、筆紙に尽くしがたく、大変な年柄でした。そのため御年貢上納も調い難く、やむを得ず郡として「御取替米」を御願いする次第です。

「御取替米の義は身代相応相暮し、田畑家督等有之者共迄御世話被下候筋ニては決て無之、畢竟、貧民鄉村を離れ、家絶候ては忽広太の田畠荒所致出来候事故、厚く御恵ミヲ以御取替筋相調候事ニ有之、極貧民の外少ニても分借不相成、都て御取替米銀統合は真の急難防キの為相調候訳ニて、是非五七年の内ニは払済、七ヶ年の余は少し渋滞不相成御貸米銀なれハ、」(「温故鑑大意抜書」『佐伯町史』)

御取替米とは、財産があつてそれなりに暮し、田畑跡目のある者まで藩が御世話をしてくださるという事では決してない。結局、貧民が鄉村を離れて家が絶えてしまえば広太の田畠が荒所

になるので、厚い御恵みにより（未納の年貢米を藩が御取替になるのだから、極貧民の外は少しも借ることができない。すべて御取替米銀は急難防ぎのためにすること、必ず五七年の内には返済し、七年を過ぎれば絶対に返納渋滞が許されない御貸米銀である。

「年貢米の未進（不納）のきびしく取締られたことはいうまでもない。しかし、そのため欠落^{かろう}すなわち追上百姓の出ることは好ましいことではなかつたので、親類・五人組・村連帯等による共同の弁済が強く要求された。諸上納米銀を延滞せず年度内に皆済するようはからうことは、代官らのもつとも主要な任務でもあたから、百姓らはあらゆる手段を講じて未進米の調達をはからなければならなかつた。御取替制の行われたのはそのためである。すなわち村として年貢米の一部をどうしても調達できない場合、「願に寄り、御貸物之米銀品二寄御貸被遣」といつて、藩の貸付を受けさせることとした。これは年二割から三割の利足を付け、翌年年貢米とともに返済させたもので、年貢米とし

てはその年度内に皆済を期し、借り米銀の形に切換えさせたものである。これはもちろん無制限に許されたものではなく、現実には城下町の米問屋からの「町借」によつたり、代官らのはからいによる郡貯銀からの貸出しを受けて処理した場合も少なくなかつた。」（『新修広島市史』）

筆順

「割庄屋は、一郡之長なるも、広島町大年寄より筆順遙か下なり、宮島尾道三原三次四ヶ町、其外郡中市町役人皆村役人より筆順上につくは（市町年寄は割庄屋の上町頭は村組の上也）如何の訳にやと、是まで人々に尋しに、郡村役人は給米を取故賤しめて下につけ、町役人は無給ゆへ上に付クゲナといふ人多し、……独断。給米を取ゆへ賤しむといふ説甚心得がたし」（『秘語独断』）

割庄屋は一郡の長であるが、広島町の大年寄より「筆順」は遙か下である。宮島・尾道・三原

・三次四ヶ町、その外郡中市町の役人はみな村役人より筆順は上である。(市町の年寄は割庄屋の上、町頭は村組の上である)。どうしてかと訳を尋ねると、「郡村役人は給米を取るので賤しめて下にし、町役人は無給のため上に付けるそうだ」という人が多い。……給米を取るので賤しむという説は、私は間違だと思う。

【筆順】(『広辞苑』)

文字を書く筆はこびの順序。

「筆順」について辞書で調べると、上記の説明しか見当りません。資料の「筆順」は「記載順」＝「格式」を示すと思われます。

「宗旨奉行、当年之筆順人名左之通宛可差出候

奥田外之助

戸田六大夫

吉田矢柄

藤井十六郎」(天保十五年(一八四四)「国前寺覚書」)

郡廻りは文化六年(一八〇九)より宗旨奉行を兼ねています。そこで郡廻りの就任年を『芸藩輯要』で

調べると、

奥田外之助

天保三年(一八三二)

戸田六大夫

天保七年(一八三六)

吉田矢柄

天保六年(一八三五)

天保一二年(一八四一)

藤井十六郎

天保一五年(一八四四)

です。吉田矢柄がなぜ二回登場するのか解りませんが、「当年之筆順」は大体就任順であり、それが格式の順でしょう。

「此度永代苗字帯刀御免二付、下地役格二は不拘都て座順筆上ニ相心得可申事」(天保十年(一八三九)「鶴亭日記」)

この度、永代苗字帯刀が許されたので、今までの「役格」には関係なく全て「座順」は筆上と心得なさい。

「筆順」「座順」「役格」と、ほぼ同一の内容を表す言葉が出てきましたが、役格が下でも座順は上という場合もあるようです。

逸々

「切支丹宗ハ耶蘇宗とも云て、……其改宗したる者を転切支丹と云ひ、其諸親類を類族と云て、年々改め証文を取ることにして、其類族死去其外変事等あれば、逸々届けを出し、其嚴重なること普く人の知る処にして」（『地方凡例録』）

切支丹宗は耶蘇宗ともいい、……改宗した者を転切支丹といい、その親類を類族といつて、年々調べて証文を取る。類族が死去したり、何か変った事があれば、「逸々」届けを出す。その仕方の嚴重なことは誰でも知っている。

「無益之品仕入商ひ致間敷旨被仰渡奉畏、商ひ渡世之ものへ逸々為申聞、万一心得違之もの有之におゐてハ、早速御注進申上候様可致事」（天保十三年（一八四二）『広島県史』）

無益の品を仕入れて商いをしてはいけないとの指示があり、商人へ「逸々」申し聞かせました。

もし心得違いの者があれば、早速御注進申し上げます。

「逸々」の使用例を二つ引用しました。文意から考えると、「事細かに」に換えてもよさそうです。

【逸】 いつ。（呉音はイチ）（『広辞苑』）

- ①のがれ去ること。とりになすこと。②失うこと。なくなること。世に知られないこと。③きまりにはずれること。④気らくに楽しむこと。⑤すぐれていること。

辞書の説明には当てはまるものがありません。ただ一つ、「呉音はイチ」を根拠とすれば、「逸々」は「イチイチ」と読めます。すると「一々」ということになり、意味も通ります。

随而

「一筆啓上仕候、冷気次第に相増し候へ共、弥御安全可被成目出度奉存候、したがって随而野生儀、道中筋無異議江戸に着仕り、築地屋敷に罷在候」（安政三年（一

八五六『龍馬の手紙』)

お手紙を差上げます。段々と寒くなつてきました、お元氣のこととめでたく存じます。「随而」私、道中無事に江戸に着き、築地屋敷に居ります。

手紙文には伝統的なパターンがあり、それを守つて書くこととそれらしい手紙ができるという、便利なのです。

「拝啓」から始まり、時候の挨拶に続いて、先方の安否を確かめるだけで便箋一枚は使います。その後、自分の安否を記して、肝腎の用件にはいります。自分の安否を書く前に、例文のごとく大抵「随而」が入ります。

【したがって】(『日本国語大辞典』)

先行の事柄の当然の結果として、後続の事柄が起ることを示す。それだから。それのによつて。だから。

この解説は、手紙文の場合はどうもしっくりしません。相手の無事と自分の無事は無関係だからです。

「随而」の代りに「次に」「二(つぎ)に」を使う例が見られます。相手の安否を問うた「次に」、自分の様子を説明しています。

「先以益御安泰被遊御座候旨奉敬賀候、二二私儀無事罷居申候、御安意可被遣候」(木原秀三郎書簡) 先ずますます御安泰のことお喜び申上げます、「二二」私も無事でいますので御安心ください。

【二】(『漢字源』)

《常用音訓》ニ／ふた／ふた…つ

《音読み》ニ〔呉〕／ジ〔漢〕〈er〉

《訓読み》ふたつ／ふたつにする(ふたつにす)／ふた／ふたたび

《名付け》かず・さ・じ・すすむ・つぎ・つぐ・ふ・ぶ・ふた

「随而」の代りに「順而」も使われます。

「御尊公様御機嫌克被遊御座、恐悦ニ奉存候、順而小生無異罷有申候間御安意被成下度奉願上候」

御尊公様も御機嫌よく、お喜び申上げます。「順

而「私も変わりありませんので御安意ください。」
「随」は「後に付きたがう」ですから、「次に」と同じです。手紙文で「随而」とあれば、「次に」の意味です。

申掠

「 下三ツ嶋村から娘さん
右之者儀、又兵衛方ニ奉公勤居候内、主人を掠、
傍輩吉兵衛と密通いたし候段、不届ニ御座候得共」
（『近世法制史料集』）

下三ツ嶋村からの娘、さんは、又兵衛方に奉公
勤めるとき、主人の目を「掠」め、傍輩の吉兵
衛と密通したことは不届であるが、

「制札 諸国在々所々田畠不荒之様ニ入精耕作すへ
し、若立毛損亡無之所申掠、年貢等令難渋輩於在
之ハ可為曲言者也」（寛永十九年（一六四二）『広島
県史』）

制札 諸国在々所々で田畠を荒らさないよう入

念に耕作しなさい。もし作物に被害がないのに
「申掠」めて、年貢等の納入を怠る者があれば
処罰する。

「所持之書籍其余摂州西出町長太夫を申掠出金為致
買調候書籍類をも売払、一己之慈善申成、右代金
難渋人へ施し遣し」（天保十年（一八三九）「鶴亭日
記」）

（大塩平八郎は）持っている書籍や、摂州西出町長
太夫を申し掠めて出金させ買い調えた書籍類も
売り払い、私の慈善といつてこの代金を貧乏人
へ施して、

【掠める】かすめる。（『広辞苑』）

（「霞む」と同根。古くは四段にも活用）①こつそ
りと奪いとる。掠奪する。②人目をくらます。
ごまかす。③わずかに触れる。触れるか触れな
いかの所を通り過ぎる。④ほのめかす。一端を
かすかに知らせる。⑤歌舞伎で、下座音楽を弱
く静かに奏する。

最初の例文「主人を掠」は「主人の目を盗んで」、
次の「損亡無之所申掠」は「被害はないのに誤魔化

し」、最後の「長太夫を申掠出金為致」は「長太夫を言いくるめてお金を出させ」の意味でしょう。

古文書の中に、「掠」のような感情タツブリの言葉が使われると、つい「面白い」と思ってしまう。

晩景

「厳島明神祭礼御供船之儀ハ、佐伯郡地御前御社旅所ト唱、年々五月五日明神彼社へ渡御、六月十七日厳島還御之節供奉致二付、十六日晚景各町供船紅燈繡幕相逐絲竹金鼓相簇広島川口を出る事有之」（宝暦八年（一七五八）『廿日市町史』）

厳島明神の祭礼（管弦祭）の御供船は、佐伯郡地御前御社を旅所といい、毎年五月五日、明神はその社へ渡御され、六月十七日に厳島へ還御される。そのとき供奉するため、十六日の「晩景」に各町の供船は紅燈・繡幕で飾立て、笛太鼓で賑やかに、広島川口を出発する。

【晩景】ばんけい。（『広辞苑』）

①夕日の影。②夕方の景色。夕景色。③（パンゲイとも）夕方。晩方。

夕景色とばかり思っていました。が、「夕方」の意味もあることを知りました。

「六月廿一日之朝夜中川原谷川洪水ニて、土手を水越町へ流込、……源右衛門も四つ時分より下代衆出テ被居候所へ相詰、昼帰候て又八つ時分より罷出、晩景迄居申候」（『三原市史』）

六月廿一日夜中に川原谷川が洪水をおこし、朝には水が土手を越えて町へ流込み、……（復旧作業のため）源右衛門も午前一〇時から下代衆（番組）が出ておられる所へ詰め、昼には帰り、午後二時頃出てきて、晩景（夕方）まで居ました。

聞遁

「右之者儀、藤八捨子いたし候儀乍存、懸合候事を厭ひ、聞遁候筋ニは無之、吟味之節迄不存趣無相

違相聞候間」(宝暦十一年(一七六一)『近世法制史料集』)

右の者は、藤八が捨子をしたことを知りながら懸り合いになるのを嫌がつて「聞遁」しにしたのではなく、吟味の時まで知らなかったと聞いているので、

【聞き逃す】(『広辞苑』)

聞きおとす。聞きもらす。

『広辞苑』のこの説明は不充分です。

「如斯相触候上、若見遁聞遁にいたし置候族有之ニおみてハ、急度可申付候」(寛保三年(一七四三)『御触書寛保集成』)

このように触れ示したからには、もし、見遁・

「聞遁」にしている者がいたら、必ず処罰する。

「見遁」については、

【見逃す・見遁す】(『広辞苑』)

①見ても気づかずにすこす。ある機会に対応せずします。見おとす。②気がついていながらそのままにしておく。大目に見る。

と、〈見て見ぬ振りをする〉意味を書いているのなら、「聞遁」の説明にも〈聞いていて聞かぬ振りをする〉を加えてほしいところです。

【聞き逃す】(『現代新国語辞典』)

①うっかり聞かないでしまう。聞き落とす。聞き漏らす。②聞かないことにして無視する。「酒の上の失言だからーそう」

合力

「右之もの儀、浪人之由申、所々ニて合力を請、名主之方ニて宿賃不差出一宿仕、得心不致候所ニては、押て宿無心いたし合力を乞」(宝暦十二年(一七六二)『近世法制史料集』)

右の者は、浪人だと言つて方々で「合力」を請い、名主の家では宿賃を出さずに一宿し、断られると、無理矢理宿を無心して「合力」を乞い(宝暦十二年(一七六二)『近世法制史料集』)

「鳥目五貫文 同郡(恵蘇郡)先五人頭 与七

右、年来同村於金尾峠雪途之節往来之旅人へ深切致し、村方普請等も何角頭を取差配、至て深切ニ致世話、難渋者坏家作等二ハ無賃ニて合力致し、彼是奇特之至ニ付、為御褒美被下之」(文政六年(一八二三)「鶴亭日記」)

恵蘇郡の先の五人頭、与七は、年来同村の金尾峠が雪のとき往来の旅人に對し親切にし、村方普請等でもなにかと差配を取つて親切に世話をし、難渋者などの家作等には無賃で「合力」し、あれこれ奇特の至りなので、褒美として鳥目五貫文を下さる。

【合力】こうりよく。(『広辞苑』)

(ゴウリキ・ゴウリヨクとも)①力を添えて助けること。助勢。②金品を施し与えること。また、その金品。

これが「合力」の元の意味だと思ひますが、これから派生した言葉があります。

【合力】こうろく。(『広島県大百科事典』)

……広島県内には「手ごう」「でごうする」という名称も類約語として広く分布している。無

償を前提とした人々の相互扶助し合う共同作業形態をいうが、具体的には合力は不時の災害のとき、冠婚葬祭の儀礼事のとき、家の普請や屋根ふきのとき、火事の場合の後片付け、墓つくりのときなど村人たちがお互いに助け合う場合が多く、これらの場合はすべて合力であつた。

……要するに「合力」は報酬を期待しないで自分の方から積極的に向いて行く形の互助協力の行動形態なのである。(八木佐市)

【合力米】かうりよくまい。(『早引万宝節用集』)という言葉もあります。「こうりよくまい」とでも読むのでしょうか。

「瓦師新左衛門 生国紀伊国、右新左衛門儀、江戸御屋形御普請之節、真福寺境内を瓦焼場所に被成御借、瓦工之者被成御附、瓦御用相勤申候、但馬守様従紀州御入国之節、御当地へ被召連、御合力米五石被下置、舟入村之内にて御免地表面六十四間半拝領仕、御用相勤申候由」(『広島市史』)

瓦師新左衛門、生国は紀伊国。江戸御屋形の普請のとき真福寺境内を瓦焼場に借りて瓦工をつ

けて瓦御用を勤めた。但馬守様（浅野長晟）が紀州から広島へ入国するとき、御当地へ召し連れて、御合力米五石を与え、舟入村に御免地（表間口六十四間半）を拝領して、藩の瓦御用を勤めた。

『芸藩輯要』に、「社寺農商の合力米」の文言があるの、これらの者に藩が与えた「手当」と思われます。

「毛上合力」という言葉もあります。

「悪作いたし年貢米不足いたし候へハ、毛上合力なと名附役人共長百姓之内にて相談して、右之不足米ヲ村中へ割賦ニして合力いたし遣候」（『芸州政基』）

不作のため年貢米が不足するとき、「毛上合力」といって、役人共長百姓と相談し、不足米を村中へ割賦して「合力」する。

また、「悪田合力米」という言葉もあります。

「悪田合力米之義、先前より附ケ来之分当時土地肥立作物相応出来候ても、矢張仕来之合力米遣し候分も有之哉ニ相聞、甚タ不当之義ニ付、是等は村

役人・長百姓共得と申値、実意ニ叶候様相改可申候事」（嘉永六年（一八五三）『広島県史』）

悪田合力米は、以前より付けていても、今は土地が肥え作物もそれなりにできるのに、今までどおり合力米を与えていると聞くが、はなはだ不当なことなので、村役人・長百姓がしつかり相談し、実情に合うように改めなさい。

この文書から、「悪田合力米」は「悪田」を理由に村が持主の年貢米に「合力」することだろうと思います。

浮地

「村々当稲毛不熟ニ付、……極困窮者へ相当候ては此余致方無御座、不納方投出之分村支配仕候て追上ケ等多分仕候ては来春作付之所無覚束、村ニ寄浮地多追々衰微ニ押移可申奉存候」（天保七年（一八三六）『三原市史』）

今年の稲作が不熟のため（年貢の納入が困難で、

……極困窮者に対しては方策もなく、年貢を納めず投げ出した分は村が管理するにしても、追上げ百姓が多くなると来春の作付も覚束なく、村によつては浮地が多くなり、段々と衰微するものと思われます。

これは、天保の飢饉を引き起した凶作に關して、割庄屋が藩に出した拝借米願書の一節です。「投出」「村支配」「追上ケ」「浮地」など、尋常でない言葉が続きます。

「右之通投出し申候上は、如何体御取捌被下候とも私儀は不申及父直藏子孫諸親類並に横合より聊毛頭申分無御座候」（『広島藩農村考』）

右の通り「投出し」ました上は、どのように取り捌かれても、私は勿論、父・子孫・親類など少も申分はありません。

「投出」とは、〈どうにでもしてくれ〉ということですから、土地は「村支配」（村の管理）となります。

「百姓未進出来候時、家・田畠・山林・家財等迄不

残未進方ニ引当被取上、身すからにして居所ヲ追出したるを形付百姓又追上ケ百姓共いふ也」（『芸州政基』）

年貢を納入できないで、家・田畠・山林・家財等まで未進の引当に取り上げられ、身一つで居所を追い出された百姓を形付百姓とか、「追上ケ百姓」という。

【浮地】うきじ。（『日本国語大辞典』）

所有の定まらない地。特に近世、農民が負債その他の事情のために逃亡して、後に残された土地。引受人のない場合は普通、上地（あがりち）として没収した。＊田賦考「田地之部」「地主を極候得共、作主無之、無余儀惣作に極め、望の者は下作に入、年々御損引いたし来候由、右の通にて、村方の浮物になり行故、浮地と唱へ」

【上田地】あがりしでんじ。（『日本国語大辞典』）江戸時代、逃亡または失踪した農民の田地の公収されたもの。その村全体、または総代が耕作し、年貢を納めるのを通例としたが、後には入札処分されることが多くなつた。＊地方凡例録

「上り田地と云は、欠落逐電百姓の田地を云、古来ハ科の有無に拘へらず総て取上に致し、村総作に成る法なりしに、近來ハ借金等相嵩み身上取続がたくして是非なく欠落いたし、科なければ田畑取上に相成らず、子孫の者相続いたし」

秘骨

「免を定るにも土地計之考ニもあるましく、なり立生産ひ筋等ニ依て、盛衰之考合、産業産物稼等ニよる事歟、秘骨ニいへハ限りもなし」(『理勢志』)

村の税率を決めるとき、その土地の様子だけでなく、村の成立ち・生産の様子等により盛衰を考え、産業産物稼等も考慮に入れるのであるが、「秘骨」にいえは限がないので程々にする。

【ひこつ】(『日本国語大辞典』)

方言。通を振りまわして議論し物識りぶること。

「ひこつを言う」 名古屋。

【秘骨】(『日本国語大辞典』)

極致。要領。こつ。また転じて、自慢。得意。

腹やすく

「人に交り候へハ、珍説新聞ヲ得候益有之候へ共、又煩しき事も一倍ニ御座候、とかく閉居のかた、腹やすくおほえ申候」(文政十年(一八二七)『馬琴書翰集』)

人ときあうと、珍説や新聞を得ることができて益のあることですが、又煩しいことも一倍です。私はとかく閉居する方が「腹やすく」おほえます。

この短い文章の中に「面白い言葉」がたくさん出てきます。

まず、「新聞ヲ得」です。

【新聞】(『日本国語大辞典』)

①新しく聞いた話。新しい風聞。新しい話題。
・学問のすゝめ「当時流行の訳書を読み世間に奔走して内外の新聞を聞き」

【新聞】（『岩波日本史辞典』）

幕末・明治期は news を新聞、newspaper を新聞紙と訳し分けて用いたが、後に時事的話題を伝達する無綴じの印刷定期刊行物の呼称として定着。起源は一七世紀欧州。日本では外国紙の翻訳抜粋である「官板バタビヤ新聞」（一八六三）、浜田彦蔵の「海外新聞」（六五）、柳河春三の「中外新聞」（六八）を先駆として……」

「新聞」は「新聞ヲ得」の「新聞」からできたものと思います。

次に〈面白〉のは「閉居のかた」、今なら「閉居の方」というところです。

最後は「腹やすくおほえ申候」です。気持を表現するときに出てくる臓器は、心臓や腹などですが、腹は、「腹が黒い」「腹が煮える」「腹に据えかねる」のように暗いイメージが先行します。「心和ぐ」などは心臓に独占されていますが、「腹やすくおほえ申候」で、腹も頑張っているのが分ります。

続 言葉を“面白狩る”

——広島の古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

2007年 8月 15日発行

高橋 新一 編集

tak10172@gmail.com

言葉を“面白狩る”

第 3 集

——広島の古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

高 橋 新 一 編

はじめに

広島近世古文書の中から、面白い言い回しや、辞書で見つかりにくい言葉を探し出し、調べています。

近世文書を見ていると、解らない言葉が次々と出てきます。すぐに辞書で調べます。電子辞書でたいい用が足りませんが、載せてないときは重い辞書を引っ張り出してページを繰ります。それでも見つからない言葉があると、あの手この手で調べるので、手間が掛かります。

以前は、「辞書は何でも載せている」と思っていました。ところが、古文書を読むようになると、探し物が見つからないことを度々経験するようになります。考えてみると、これは当然のことで、限られた頁数の辞書に全ての言葉を収録できる訳がない。いや、その前に、大きな言葉の海を相手に全ての言葉が調べ尽くされている筈がない……。

また、見つけ出しても、不適切な解説の場合もある。

ります。辞書の編集者として間違えることがあっても不思議ではありません。

辞書に載せてない言葉でも、辞書を頼りにして、古文書をあさり比較すると、意味が明らかになることがあります。

古文書は、いわゆる歴史用語だけでなく、〈何でもない言葉〉でも、解らないと正確に理解できません。ここに取り上げた言葉は、編者が〈面白い〉と思ったものです。題して、「言葉を〈面白い〉」。

これは、二〇〇七年八月から〇八年一月までに、同名のブログに載せたものを編集したもので、第三集です。

二〇〇八年一月

高橋 新一

主な参考辞書

岩波書店『広辞苑』第四版 電子ブック版
小学館『日本国語大辞典』
学習研究社『漢字源』電子ブック版
岩波書店『岩波日本史辞典』CDROM版

目次

実名敬避	5
鶴亭	6
急度	7
余借	8
蔵付	9
内俵	11
丸給知	12
見さめ	14
居扶持米	15
除帳	16
差次	17
東西南北人	18
宮島市立	19
認め	21
染々・為何	22

為何	22
当分御払	23
地合	24
実体	25
腰ヲおす	26
瀬取	27
無用・給	27
ならし餅	29
外聞	30
あの御方	31
士列	32
気動	33
五ヶ年振	34
急度	36
非工事	37
社・礮	38
非事・理屈	39

御取替米	その二	40
山林諸荷物		41
晴天十日		42
競立	43	
下宿	その二	44
彼は	45	
夜前	46	
仲ヶ間直段		47
付届ヶ	48	
冠米	49	
著	50	
返毫覚書		51
地他・飛行		53
飛行	53	
彳	55	
差許	56	
出来	58	

多端	59
可為反古候	60
相布令	61
こたなし	62
鼠土	63
土兵	64
四半幟	65
五七年	66
殿付と様付	67
頼母	68
何角	70
広太	71
町新開	72
身持之者	74
制度	75
野荒	76
模形	77

量肥	78
兩御玄関	79
町宅	80
切々	81
振り合	82
上り家	83
さし持	84
自由	85
大形	86
自普請	87
金百疋	88
御簪・御賞	90
何々迄	91
鶴の含穂	92
鶴の含穂	93
麦藁焼	94
小間	95

小間銀	96
水役銀	98
水役銀	100
廻国	101
自滅	102
先ン取	103
取毛	104
御銀出	105
世話敷	106
年増	108
永日	109
取置	110
実法	111
蝗虫	112
朝鮮通信使	114
差繰	115
工手間	116

文目 117
 追揚百姓 118
 信居り合宜鋪 120
 押借二等敷 121
 馬鹿等敷 122
 不勘定 123
 不統 124
 真踏 125
 もあひ 126
 徘徊 127
 何敷 129
 隠地 130
 真急 131
 居エ 132
 種和シ 133
 被為 134
 半挽 136

辻借 137
 面皮も無御座 139
 欲ヶ敷 140
 懸込 141
 へか 142
 糴約 143
 立木 145
 心切・入々 147
 亡所 148
 帳落寺 150
 平坪 151
 粥之実・纒敷 153
 御自分 154
 行成 155
 正月 156
 西向く侍 158
 ハデ干 159

懸御厄害 161
 せんたく その二 162
 たばひ申度 163
 ゑよふぶしん 164
 御尤もごかし 165
 小体 167
 竈改 168
 鬺引 169
 被為御付 171
 已前二認 171
 潤色 172
 多門 174
 門を打 176
 包銀・包賃 177
 細工仕習 179
 絵符 180
 索引 199

実名敬避

「……恐惶謹言

三月二日

著作堂解

殿村篠斎大人 梧下」(文政十年(一八二七)殿村篠斎宛、『馬琴書翰集』)

これは殿村篠斎(じょうさい、佐五平、実名安守、号篠斎・三枝園・篠舎・蝙蝠麿・孀鷹)宛の滝沢馬琴書翰の末尾の部分です。

【曲亭馬琴】(『岩波日本史辞典』)

一七六七・一八四八(明和四・六・九・嘉永一・一一・六)江戸後期の読本作者。本名滝沢興邦のち解。曲亭は戯作の号。別号、大栄山人、著作堂主人、蓑笠漁隠、信天翁など。

差出人は「著作堂解」、「著作堂」は馬琴の号、「解」は実名です。「解」をなんと読むか。それが問題です。

「本名は瀧澤興邦(たきざわ おきくに)、……後に解(とく)と改める。」(Wikipedia)

答は簡単に分りましたが、「実名」こそが問題です。

【実名】じつみよう。(『広辞苑』)

(ジチミヤウ・ジツメイとも) まことの名。本名。

この説明は簡単すぎて、何も説明していないのに等しい。

「平安時代中・後期の上流社会では、男性は幼名(童名)を帯び、元服に際して二字の実名(諱、名乗)をつけるのが恒例となった。……このころから男性には、通称(呼名)がつけられた。元来これは、実名敬避の習俗を背景としているが……(角田文衛)」「(『世界大百科事典』)

「実名は原則漢字二字、これを訓よみする。……ただし、まれには一字名もある、頼山陽の襄(のぼる)や曲亭馬琴の解(とく)はよく知られるところだ。……実名のよみはわからぬことが多い。わか

つても実名を直称するのは失礼である。そこで音で言うことがおこなわれる。」（高島俊男『お言葉ですが…(7) 漢字語源の筋ちがい』）

「実名」は正しくは訓読みだが、人は音読みをする……とは、ややこしくて面白いことです。

鶴亭

安芸国寺家村の医師、野坂三益の日記（鶴亭日記）は、四六卷（第一卷不明）が残されており、大変貴重な史料です。第二巻の題名は「鶴亭雜記」、最終巻は「鶴亭日記」、いずれも「鶴亭」が付いています。

「家君名直、字子廉、号鶴亭、通称玄珉、……俳諧発句、以広陵十二庵東吹為師、号白圭」（文化五年（一八〇八）「鶴亭日記」）

家君（父上）、名は直、字は子廉、号は鶴亭、通称は玄珉。俳諧発句を好み、広陵十二庵の東吹を以て師と為し、白圭と号す。

ここで、「鶴亭」は父玄珉の号だとしています。ところが、自分の日記の題も「鶴亭」です。

「就川尻村白石屋幸四郎俳名呉竹菴雨洗、始学俳諧、予号鶴亭柴籬」（文化十一年（一八一四）「鶴亭日記」）
川尻村白石屋幸四郎、俳名呉竹菴雨洗に就き、始めて俳諧を学ぶ。予、鶴亭柴籬と号す。

本人の俳号「鶴亭柴籬」にも「鶴亭」が付いています。「鶴亭」は父のものか、本人のものか迷うところですが、家（建物）につけた号と考えれば説明がきます。

【亭号】（『大辞泉』）

「亭」の語を伴った号。烏亭・曲亭・二葉亭など。

【庵号】（『広辞苑』）

「庵」で終る雅号や称号。特に、「庵」で終る寺の称号。

【軒号】（『広辞苑』）

住居・茶室・書斎などの雅号で、下に「軒」の字のつくもの。また、文人・茶人などがそれを

自分の号に用いたもの。

これらの説明も、「軒号」以外はいいい加減なもので、説明を聞かなくても「曲亭」をみれば「亭の語を伴った号」ぐらいは分かります。「亭」「庵」「庵」は「わがボロ家」の意味ですから、建物をもとにして雅号を作ったものでしょう。

「豊後臼杵俳諧行脚臨霞来宿 鶴亭興行」（文化十一年（二八一四）「鶴亭日記」）

豊後臼杵の俳諧行脚、臨霞が来宿したので鶴亭で興行（歌仙）を行った。

野坂家では、父の代から自宅（またはその一部）を「鶴亭」と名付けていたと思われます。藩主が鷹狩りに出向く地域ですから、家から舞い降りた鶴を眺めることができたのでしょう。全国の俳諧行脚が訪れて、また近隣の俳句仲間が集って「鶴亭」で歌仙を巻いています。

急度

「極月、郡々共木之実・物之葉取置候注進、是は百姓の給物ニ取り置候段書付ヲ以申出候古形也、是にて急度目当ニ相成候筋も無之、給物貯置飢渴之助ニ仕候と云形敷」（『芸備郡要集』）

十二月になると、いずれの郡でも「木の実や物の葉を貯えました」と藩に注進する。これは百姓の食べ物として貯えた事を書付にして報告するのが昔からのやりかたである。木の実などの貯蔵したからといって、必ずしも役に立つというわけでもないが、飢饉の時の助けにでもなれば……という意味であろう。

「木之実・物之葉」とは、ドングリや食べられる葉のことでしょうが、具体的にはどんなものが貯蔵されたのでしょうか。

「急度目当ニ相成候筋も無之」の言回しも、分りにくい表現です。

【屹度・急度】（『広辞苑』）

④行為の確実に行われるさま。たしかに。必ず。相違なく。

「急度……無之」になると、「必ず」が「必ずしも」に意味が動きます。

【目当て】（『広辞苑』）

①目をつけて見る所。心中でめざしている所。ねらい。あてど。目的。

この場合の「目当」は「食糧にすること」ですから、通して現代語訳をすると、「必ずしも食糧として使えるという訳でもないが」となります。

役に立つかどうかともよく分らないのに「従来どおり」とする藩の方針に対して、「芸備郡要集」を書いた実務担当の下級役人は「前例主義」に不満をチラと見せています。

余借

「納所不相済内、米売払或ハ余借等へ相渡し候義并所々米売払、余村之米又は他国米相調納候事、堅無用二候、此旨稠敷可申付候、若是等之義有之、

外より相聞へ候ハ、当人ハ不申及給庄屋迄も可為曲事候事」（『申渡覚』給人法）

年貢の納入がまだ済まない内に、米を売り払ったり、「余借」等へ渡すこと、また所の米を売り払い、その代わりに他村・他国の米を買って納めることは絶対に禁止するので厳しく申し付ける。もしこれらのことを外部から聞けば、当人は勿論、給庄屋も処罰する。

これは給人法（給人がその知行地農民に布達した法令）の一部です。年貢の納入が最重要事項で、それ以前の米の移動を禁止した条項です。この中に出てくる「余借」という言葉は辞書に見つかりません。

「御貨物等ヲ以役人共へ口入又ハ余借等ヲ償ひ、作方仕入等も闕キ候役人も有之様風聞二候」（『吹寄青枯集』）

藩から借り受けたもので、役人共へ口入したり、「余借」等を償い、そのため農業の仕入等にも事欠く役人もあるときいているが、

「新古借合シ三拾貳万両余之惣高相富ミ申候、……

可成丈公廨諸費取縮メ、新借不相嵩様心懸、且旧債支消方及示談候付、今般御届申上候通り、此年御届高より八万四千八百兩余ハ減少致し候得共、

猶余借多分有之、不都合之段奉恐入候」(明治四年(一八七二)大蔵省宛、亀岡県書状、「形原松平家についで」サイト <http://www1.odn.ne.jp/~cag38460/public.html/93hansai.html> よる)

新旧の借金を合計すると三拾貳万兩余にもなつてしまいました。……できるだけ役所の費用を縮小して、新しい借金を増やさないよう心懸け、旧債に支払いも相談したので、借金額はこの年の御届高より八万四千八百兩余は減少しましたが、猶「余借」が多分にあり、恐れ入る次第です。

【余・餘】(『広辞苑』)

③そのほか。それ以外。

すると「余借」は「それ以外の借金」のことだろうと思いますが……、自信がありません。

蔵付

「給主焼米・蔵付・勘定・歳暮・年頭・暑寒・吉凶二付祝儀米并見舞等主人家来へ差出候向も有之趣二候得共、已来右等一切不可差出、蔵付之節為初穂米主人計りへ白米貳升差出候事」(明治元年(一八六八)『広島県史』)

給主に対して焼米や、蔵付・勘定・歳暮・年頭・暑寒・吉凶の際の祝儀米や見舞等を主人やその家来へも差し出している所もあるようだが、今後は一切差し出してはいけない。「蔵付」の時に初穂米として主人だけに白米貳升を差し出しなさい。

給知の農民が、給主に対して年貢以外に様々な名目で負担させられている状況に対し、藩は「蔵付の時、初穂米として主人だけに白米貳升を出しなさい」と指示しています。そこで「蔵付」について検討を加えます。

【初穂】はつほ。（『広辞苑』）

（室町・江戸時代はハツオと発音し、「初尾」とも書いた）②その年最初にみのつた稲の穂。④その年をはじめて収穫した穀物を、神仏または朝廷に最初に奉るもの。また、その代りに神仏に捧げる物で、金銭・米穀・食物・酒など。

初穂とは、その年に最初に収穫された稲であり、従って神仏や給主に捧げる縁起物ですから、それを供える時期が重要です。給主の場合はそれが「蔵付」のときに当たります。

【蔵付・倉付】くらつけ。（『日本国語大辞典』）

年貢を領主などの蔵に運びこむこと。＊俳譜・滑稽雑談「二月「按に和国の風俗に蔵著と称して、公家・武門・寺社家に至る迄、年の終に各百姓年貢を始めて納るの日、飲食をあたへて其労を慰す、周礼等にいはるる労働の事、又似通ひたるにや」

この辞書は用例文が適切で、「年貢を始めて納るの日」と時期を限定しています。

「御蔵付之節、内祝仕来りニ候得共已来相止メ、御年貢皆済仕候節内祝致候共不苦事」（天保二年（一八三一）『廿日市町史』）

御蔵付のとき、内祝（慰労のための）をするのが仕来りになっているが以後は止めること。年貢皆済のときに内祝をするのは構わない。

この資料を見ても、「蔵付」は単に「年貢を領主などの蔵に運びこむこと」だけではなく、その初日と意味を限定する必要があります。給主にとっては自分の領地からの最初の収入であり、農民には義務を果たし、旦那様が慰労してくれる？嬉しい日、それが「蔵付」です。

もっとも、「蔵付」は知行地の年貢収納だけではありません。元治元年（一八六四）、世羅郡では年貢米を三原御蔵に納めています。九月廿八日に「御蔵付仕度奉存候」と申し入れています。各村が皆済したのは十一月廿九日でした。

内俵

【棧俵】さんだわら。（『広辞苑』）

米俵の両端にあてる、円いわら製のふた。さんだらぼうし。さんだらぼっち。内俵。

【内俵】うちだわら。（『日本国語大辞典』）

【方言】俵のふた。さんだわら。長崎県南高来郡千々石

二つの辞書ともに、棧俵＝内俵と説明していますが、これは明らかに間違です。

「御年貢米拵、……是迄内俵・外俵・縄・サン俵等迄無差別其年出来有之色合宜上藁相撰能々干立相調来候処、」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）
年貢米の俵の拵えについて、……これまでは内俵・外俵・縄・サン俵等まですべて、今年の藁で色合いの良い上藁を選び、よく乾燥させて使ってきました。

年貢俵は、内俵・外俵・棧俵・縄を材料にして拵

えます。棧俵については上記の説明の通りですが、「内俵」の説明が足りません。しかし、「内俵・外俵」とくれば、見当が付きます。内外、二重に包んでいるはずです。

「中か俵に新藁相用ひ候者は至て十分に干立可申候、扱又中か俵編藁之儀は全体は去年藁にても随分宜趣に相聞候」（『広島藩の庄屋』）

中俵に新藁を使う者は十分に乾燥させなければならぬ。また中か俵を編む藁は去年の藁でも工合がよいと聞いている。

「内俵」が未解決なのに、今度は「中か俵」なる言葉が出てきましたが、「中の俵」＝「内側の俵」です。

「坂村百姓（忘名）古藁之内俵にて村方収納所へ年貢米を出しければ取立役受す、依之役人元にて叱りたる時、右百姓申様は古藁の俵は手前貯用に拵へ置甚惜しく候得共、当秋は俵が遊て睨々新俵を作らずゆへ無扱惜めく、あの俵へ入出し候、はて古藁俵にては済不申敷と不審さうに申出候よし

（割庄屋坂村新人はなし）（『秘語独断』）

名前は忘れたが、坂村の百姓が古藁の内俵を使った年貢米を村方に納めたところ、係りの者が受け取らない。村役人も叱ると、その百姓が申すには、「古藁の俵は手前貯用に拵えていたものですが、当秋は俵が遊んで新藁の俵をキチンと作らないので、仕方なく「惜めく」あの俵へ入れて出しました。はて、古藁俵ではダメですか」と不思議そうに言ったとか……。

米俵、特に内俵を作るのに適当なのは、新藁かそれとも古藁かが当時問題になっていたようです。充分乾いてない新藁を使うと米が湿るので不適當だが、見栄えはよい。結局、藩としてどの様な結論を出したのか知りませんが、農民と村役人の意見が違ったのは面白いことです。

もつと面白いのは、「惜めく」なる言葉。意味は「大変惜しがって……」の筈ですが、読みは「おしめく」だろうと思います。まさか「おめおめ」ではないだろうと……。どなたか、御意見はありませんか。

丸給知

【丸】（『漢字源』）

④まる。全部。また、全部、すっかりの意の接頭語。

【給知】きゅうち。（『近世用語の概説』）

藩主から百石以上の藩士に与えられた知行地をいう。

「丸給知」とは、「全部」が「給知」となっていることを示す言葉で、疑義を挟む余地はないように思われます。ところが、「全部」をどう解釈するかで意味が違ってきます。

村の「全部」が給知に指定され、蔵入地や明知は存在しない……という意味か、それとも、その村「全部を一人」で支配していると解釈すべきか、迷うところです。

「関屋村……、此村は弓削主馬殿丸給知也」（「理

勢志」)

(高宮郡)関屋村は弓削主馬殿の丸給知である。

家老給地を除けば、弓削主馬のように、一人で関屋村全体を給知(『広辞苑』などは「給地」としている)としている例は珍しいようです。

「家老給知としては一村丸給知の場合が普通であるが、……一般藩士の給知についてみると、一村丸給知はほとんどなく、多くは入会い給知で、しかも相互に遠隔な数か村にわたっている。」(『新修広島市史』)

ここでは、「一村丸給知」「入会い給知」という言葉を使って〈解りやすく〉説明しています。家老は「一村丸ごと」支配するが、一般藩士の場合は一村丸給知はほとんどなく、一村に複数の藩士が「入会って」領地を持つ……。ただ、これらの言葉は古文書の中に見付けることができますので、編者の造語かと思われます。

「明知・給知入組村々は右究給分之内、給知高拾石

二付壹升五合宛給分立可申事、筆取所二無之、他所より召抱候は、給分之様子可申聞候、役人之内筆取勤申間敷候、筆跡之善悪二不構、外二召抱可申候、但寄合丸給知は庄屋ニても勝手次第相勤可申事」(『鶴亭日記』第三二卷)

明知と給知が混在する村々は右に決めた給与のうち、給知高拾石に壹升五合の割合で給与を分担させなさい。適当な書記が村内になく他村から雇う場合は給与について説明しなさい。村役人の誰かが書記を兼務してはいけない。筆跡の善悪にかまわず外から雇いなさい。ただし「寄合丸給知」の場合は、庄屋なりとも書記を兼務してよろしい。

『新修広島市史』の言う「入会い給知」は、古文書では「寄合丸給知」(全村が複数の給主の知行地)と書かれています。これも「丸給知」です。立派な？歴史用語があるのに、「寄合」を「入会い」に言葉換え、「丸給知」から「丸」省いて「入会い給知」なる言葉を造ったために、「丸給知」とは無関係のように見えてします。「明知・給知入組村」(明知と給

知が混在する村」という村もあるので、これに対し「丸給地」を「一村が丸々給知」と言換えるのは問題ないとしても、「家老給知」としては一村丸給知の場合が普通であるが、……一般藩士の給知についてみると、一村丸給知はほとんどなく」との説明は、弓削主馬のような例は珍しいと言いたいのではないだろうか、「一人だけで全部を支配」することが「丸給知」だとの誤解を生みそうです。

「丸給知」は「明知・給知入組村」等に対する概念で、「全村が給知」を表し、それを何人が支配するかは無関係だと思っています。

見さめ

篠斎から掛物の買入れを頼まれていた馬琴は、鈴木芙蓉の山水画を買取りました。

【掛物】（『広辞苑』）

書画を軸物に表装し、床の間や壁などにかけて飾りとし、または賞翫するもの。書のを掛字、

画のを掛絵、また、書画ともに掛字という。掛軸。掛幅。

「殊ニ、直段も存候より不廉候得は、如何可有之哉難計候ニ付、先留置、一兩日中拙宅床ニかけ置、熟覽いたし候処、見さめも不致、実ニ唐人之山水之様ニ見え候、依之かひ取」（文政十一年（一八二八）篠斎宛馬琴書翰）

特に直段も予想よりは安くないので、どうしようかと迷い、差当たり手元に置いて一兩日中拙宅の床に掛け置き熟覽したところ、「見さめ」もせず、唐人の描く山水の様に見えるので、買取りました。

書画の購入で迷うときは、二日もじっくり見て、嫌にならなければ「買い」というのは、面白い決断の方法です。

【見醒め】（『広辞苑』）

見ているうちに興のさめること。

〈ホンモノ〉はいくら見ても見醒めしないとは、専門家の話でした。

居扶持米

「御領分座頭・盲女、元和五御国入已来、宝暦年迄ハ郡中廻在一飯ツ、之賄ニて有之候処、……近在のミヘ参り、其上大勢連ニて、耕作繁多之節を（不考、宿賄を乞候故、村々とも面倒至極及迷惑、郡方課役と申内奥遠方ヘハ不参、近在ヘは度々（参り）、後ニハ広島統之所ハ毎日〳〵引も不切程ニ廻在致候故、段々其仕様改も有之内、宝暦五比ハ作方至て不熟、郡中穀類乏敷ニ付、右廻在被差留、座頭共在所限凌せ置候事ニ候処、同七丑年より居扶持ニ相成、諸郡高より座頭老人一日五合、盲女老人一日三合ツ、之積を以、官位之無差別、居扶持被遣」（『理勢志』）

御領分の盲人は男女とも、元和五年（一六一九）の浅野長晟の御国入から宝暦ころまでは、郡中を廻在して一飯の賄を得ていたが、……近郊の村々へ大勢連れだつて農繁期も考えずに参り宿

賄（食事付の宿泊）を乞うので、どの村も迷惑を受けて面倒がる。盲人への援助は郡方（農村部）の課役とはいいいながら、遠方の奥郡へは行かず近在ヘは度々参り、後には広島近郊では毎日々々引も切らず廻在するので、段々と規則も改められた。宝暦五年（一七五五）の凶作のとき郡中の穀類が乏しくなり、廻在は差止めて、居村だけの援助でしのがせていたが、宝暦七年（二七五七）から「居扶持」になり、諸郡とも高より座頭老人一日五合、盲女老人一日三合ずつ、官位に関係なく「居扶持」を遣わされた。

ここでは簡単に「居扶持」とだけ書いてありますが、「理勢志」の目録には「座頭盲女居扶持米」となっています。また「盲人居扶持米」と書いた文書もあります。

【扶持】（『広辞苑』）

①たすけること。②俸禄を給して、家臣としておくこと。また、その俸禄。主として米（扶持米）を給与した。

【扶持米】（『広辞苑』）

扶持として給与する米。ふち。

勿論「盲人居扶持米」の「扶持」は「たすける」の意味です。「居」は「据える」で、「設ける」の意ですから、「盲人居扶持米」は「制度化された盲人援助のための米」とでもいうことができます。

社会保障制度も見るべきものがないように思える江戸時代にあつて、「盲人居扶持米」が設定されていたことにすこしホッとするものがあります。もつとも、はじめは「郡中廻在」を許すだけで藩は直接ことに当らず、宝暦以降でも「諸郡高より」居扶持米を負担させています。

「座頭壺人一日五合、盲女壺人一日三合」の文言、「一日五合食べるとは何と大食い」と解釈してはいけません。これが一日の生活費ですから。

除帳

「 御内密申上候覚 高田郡〇〇村
一御追放者、出奔除帳之者共、当時心得相改罷在、

住帰仕候ても後害に不相成候分申出候様、御内密を以被為仰附奉畏、相約左に申上候

一郡御追放 文政二年九月被為仰付候 百姓儀助倅

庄五郎

一村御追放 同年同月被為仰付候 百姓八右衛門娘

ふゆ

右之者儀去る文政年中密通之儀に付御上達に相成、御吟味之上前段之通御裁許被為仰付候

一除帳、文政十年亥七月

百姓 彦右衛門

同人妻 いと

同人倅 六藏

同 彦助

右之者儀は村内にて借銀に逼り家内出奔仕候に付、行先等も相知れ不申、後難の義も難計候故、親類共より除帳の儀願出申候に付前段の通御聞届け相成居申候、

右人数六人者とも儀当時心得相改罷在候趣に相聞候、帰住被為仰付被遣候ても村方差支筋無御座候、此段御慈悲の御判談宜奉願上候、依て御内密書付

差上申候、以上

巳正月

庄屋組頭連名印

割庄屋あて（永井弥六『広島藩農村考』）

追放・出奔により除帳の者で、現在は心得を改めており、住帰しても後害にならない分は申し出るよう内密に仰せ付けられましたので報告します。文政二年九月に郡追放になった百姓儀助の倅庄五郎と村追放になった百姓八右衛門の娘ふゆは、文政年中に密通のかどで裁判により右の処分となりました。文政十年亥七月に除帳となった百姓彦右衛門の家族四人は、村内での借銀に困り一家内出奔し行先等も不明のため、後難を恐れて親類共より除帳を願出たので聞届けました。以上六人の者は今では改心していると聞いていますので、帰住の決定があっても村方には何も差支えはありません。御慈悲の御判談を宜しく願います。御内密に書付を差し上げます。

【除帳】（『日本国語大辞典』）

②江戸時代、百姓、町人が他所へ移住し、新住所

へ人別を送るときに人別帳から名前を削除すること。③追放刑に処せられた者や、失踪した者を人別帳から除去すること。帳外。除帳された者を無宿という。

この資料の場合は、追放と失踪ですから③の場合です。「密通」といい、「借銀に逼り家内出奔」といい、それぞれ事情があつたことでしょうが詳しくは分りません。彦右衛門の家族は、「後難の義も難計候故、親類共より除帳の儀願出」たために無宿となっています。

【帰住】（『日本国語大辞典』）

江戸時代、欠落者、または久離（きゆうり）、勘当処分をうけて離村した者が改心して立ち帰つたのを、許して復籍させること。

差次

「二米八拾石

一同三石壺斗七升式勺

舟越村

海田市

……

右は私組合村々之内、前段之通り両村御差次御聞届被為成遣候様奉願上候、勿論米納出情仕候様との儀ハ近年精々御深切ニ被為仰談候御趣意、村々役人共は素り於下方ニも一統奉感服、……前段両村儀ハ木綿作村柄ニ有之、此余米納業難相叶候旨歎出」(文政十二年(一八二九)「野間家文書」)

海田市・舟越村については、上記の石数の「御差次」を許可してください。近年は米で納めるようにと御叮嚀に指示されており、村々役人をはじめ一同もよく分つてはおります。しかし両村とも木綿作が盛んな村で、これ以上米で納めるのは困難だと申しています。

ここである「差次」は、年貢米の「差次払(差次納)」、つまり、米券(差紙)を購入して年貢米の代りに納めることです。古文書で見る「差次」のほとんどは「差次払」です。しかし、本来の意味は、

【差次・差継】(『広辞苑』)

③差引勘定。

「出役庄屋出飯米一日三升、木錢六分五厘宛

但、社倉役、与頭等ニても庄屋代出役申談候分は全庄屋並之飯米立出候事

但、賄方一賄ニ付三分五厘宛、人足一賄式分五厘ツ、ツ、出飯米相渡候節、差次請取候事」(天保五年(一八三四)「鶴亭日記」)

出張した庄屋の出飯米(出張旅費)は一日米三升、木錢六分五厘とする。但し、社倉役や与頭が庄屋の代理で出たときは庄屋と同様に支給する。

食費一賄で三分五厘宛、人足の分一賄式分五厘宛、出飯米を支給するとき「差次」いで受取ること。

つまり、出飯米(出張旅費)から出張中の賄方(食費)を「差次」(相殺)して支給することになります。

東西南北人

「帰路登九品堂、去海数十里而殆入目中、其高極可知焉、昨日於仁方親漱其海、今日又遠望之、萍蓬之嘆不為少、人生七十為古稀、除幼与耄、則其在

世幾許乎、而栖々塵務汲々名利、遂不免為東西南北人、斃而後已矣、嗚呼々々」(文政六年(一八二三)「鶴亭日記」)

(下三永村福成寺からの帰路、九品堂に登る、海を去ること数十里にして殆ど目の中に入る、其高き極みを知るべし、昨日仁方に其の海に親漱し、今日又之を遠望す、萍蓬の嘆少しとせず、人生七十は古稀れ為るも、幼・耄とを除かば則ち其の在世幾許か、而して塵務に栖々とし、名利に汲々として、遂に東西南北の人たるを免れず、斃れて後ち已む、嗚呼。

下三永村福成寺からの帰路、九品堂に登った。海を去ること数十里、一望のもとに景色が広がり、その高さが分る。昨日仁方で遊んだ海を今日はここから遠望している。浮草のような今の生活が嘆かわしい。「人生七十古来稀」というが、幼年と老年を除けば働ける時間は幾許もない。それなのに俗事にセカセカし、名利に汲々として、まるでさすらい人のよう……。しかし斃れて後ち已む、嗚呼……。

【東西南北人】(『漢字源』)

トウザイナンボクノヒト 一定の住居を持たず、自由に各地をさすらう人。▽孔子が、自分の身の上のことをいったことば。

【幾許】いくばく。(『漢字源』)

数量・時間などについてたずねることば。どれぐらい。

【幾許】ここ(『広辞苑』)

こんなに多く。こんなに甚だしく。ここたく。漢文から面白い言葉を探すとキリがありません。

宮島市立

「 覚

一頃日、宮嶋市立候二付、疑敷者并慰もの之類、若忍ひ候て此許へ罷越候共、立宿・一座之出会も堅仕間敷候、野辺ニても見当り次第可追払候、其内不審成鉢之者有之候ハ、指留置、早々可申来旨町中末々迄可申聞者也

但、市揚之節も同様可相心得事

未三月

文右衛門

五組大年寄中」

（安永四年（一七七五）「堀川町覚書」）

近頃、宮島で市が立つので、疑がわしい者や慰み者などが、もし忍んで広島へ来ても、立宿や一座の会合もさせてはいけない。野辺でも見かけたら追払い、不審な者なら差しとめて、早々に連絡しなさい。市が終ったときも同様である。

これは、広島町奉行から広島五組の大年寄宛の文書です。この文書から宮島が特別な場所であったことが伺えます。

「○宮島の大芝居 宮島は旧藩政治の諸事厳格を重んずるの時代に係はらず、之を世外に置き、藩の内外を問はず万衆の樂土として、一年四季遊観に佳ならざるは無く、殊に三」六」九の三月三回の市立には、種々なる諸芸の興行物ありたりしが、中に就き六月市は最も繁盛を極め、歌舞伎の大芝居は必ず大阪の名優顔揃ひを招来し、同月十三四

日頃に船揚りと称し、渠等到着せし海岸へ上陸するに当り、迎ひの提灯恰も昼の如く輝がし、先づ土地の嬌々たる大小の芸妓が、絲竹鉦鼓を囃子たてゝの先導に、繼いて上下着たる俳優が、名前の記しある雪洞の下を、一々列を正して進み行き、以て芝居小屋に入り、一同手打ち等の式を終りて各自の寓所に就き、其翌夜より開場し、毎日昼と夜とを区別して四幕づつを演ず。」（小鷹狩元凱「広島雑多集」）

つまり、宮島を「万衆の樂土」として、三・六・九月には市が立ち、六月市には歌舞伎の興行に賑わったようです。

「堀川町覚書」には、上記の文書が「三月十日」「六月十日」「九月十日」付で、ほぼ同じ文言で書き留めてあります。

『広島県史』には、「市立で期日は、厳島社の四季法会の祭礼を中心に行われ、三月・六月・九月・十一月の各十日から一ヶ月を開市期間とするをことを例とし、」と、一一月の市立も書いてあります。

認メ

「無思慮大言ヲを綴り不憚文意ヲ認メ載候檄文、村々へ為捨置」（天保十年（一八三九）「鶴亭日記」）

考えもなく大言を綴り、お上をも憚らぬ文章を「認メ」載せた檄文を村々へ捨て置かせ、

これは、大塩の乱のとき、「塩詰之死骸引回シ之上、磔ニ行もの也」と断罪した文書の一部です。

「明十七日其御村ニ於て御昼認メ被遊度候間、近例之趣ヲ御差問無之様御仕構可被成候」（文政十二年（一八二九）「鶴亭日記」）

明十七日、あなたの村で御昼を「認メ」といふことで、以前の通り差問のないよう準備して下さい。

文章を書くのも、弁当を使うのも、ともに「認メ」です。この二つ、何か共通点があるのでしょうか。

【認める】したためる。（『広辞苑』）

- ①整理する。処置する。④食事する。食べる。
- ⑤書類・手紙を書きととのえる。書きしるす。

これには、共通点の説明がありません。

【認】（『学研漢和大字典』）

「国」①したためる（したたむ）処置して整える。したくする。「よろずの事を認めおく」②したためる（したたむ）食事をととのえて食べる。また、用具をととのえて手紙などを書く。「手紙を認める」

共通点は、「ととのえて」でした。

祐筆の書いた手紙を、殿様が「確認」のため花押を書いて「認（みと）める」という説もあつて面白いのですが、この説では「弁当を認める」をどう説明するのでしょうか。

染々

「敬次郎江戸帰着後、同行世話ニ成候三宅八太郎、

平川市太郎兩人いまた染々と逢挨拶も不述候付、
今極夕右兩人を呼、酒鮓を饗、万謝を述」(明治
元年(一八六八)『村上家乗』)

(養子)敬次郎が江戸より帰った後、同行して世
話になった三宅八太郎・平川市太郎の兩人に
は、まだ「染々」と会って挨拶もしてないので、
今極夕兩人を呼び、酒を出して謝辞を述べた。

『村上家乗』は広島藩家老の東城浅野家に仕えた
村上彦右衛門の日記です。養子敬次郎は、藩の洋学
修行の一員として慶応二年江戸へ留学し、翌年末に
江戸の治安悪化のため帰国しています。

【染み染み・沁み沁み】しみじみ。(『広辞苑』)

①深く心にしみるさま。よくよく。つくづく。

②静かに落ちついてゐるさま。しんみり。

いまは「しみじみ」と仮名書きをするので、「染
々」と書かれたのを見ると一瞬戸惑いますが、こち
らの方が感じが出るようです。

為何

「長州御征伐ニ付一昨年尾州様始諸藩御多勢御下向
被為在、右ニ付候ては多分之諸入用、委細先達て
約帖奉差上候通難相捌、御評議被為遣候様御敷奉
申上候処、いまた為何御様子も無御座、」(慶応二
年(一八六六))

長州御征伐のため、一昨年(元治元年(一八六四))
尾州様を始めとして諸藩の多くの軍勢が下向さ
れ、そのための多額の出費があり、その詳細を
まとめて提出しました書類で、私共では処理で
きないので藩で御評議いただきたいと御敷申し
上げましたが、いまだ「為何」御様子も御座い
ません。

これは賀茂郡の割庄屋が賀茂郡御役所(代官)宛に
出した嘆願書の一部です。「いまた為何御様子も無
御座」は「いまだ何たる御様子も御座無く(いまだ
に何のお知らせもなく)」の意味でしょう。

「亮匈話云、京撰間戲書大塩平八郎墓表嗚呼是狂人為何馬鹿」(天保十年(一八三九)「鶴亭日記」)

亮匈の話に云く、「京撰の間の戲書、大塩平八郎墓表に、嗚呼是れ狂人、為何馬鹿」と。

(僧)亮匈の話によると、京撰の間の落書。大塩平八郎の墓に、ああ是れ狂人、為何馬鹿と。

読下し文には自信はありませんが、「為何馬鹿」は「何たる馬鹿」と読むのだろうと思います。

【何たる】なんたる。(『広辞苑』)

【連体】なんという。

当分御払

「御賄代公儀ニ当り候てハ、いづれも御判鑑渡りニて当座御払無御座、尤も騎兵組へ当り聊百両御内払御座候のみ、其余は一円御払無御座候、殊ニ御賄料至て少く、御一泊銀札ニして凡三匁五分くらいニ当り纔敷義ニて、米代丈ニも引足不申、併乍

纔も当分御払被遣候へハ、夫丈ニても多足ニ相成候得共、右之仕合甚以迷惑仕候」(慶応二年(一八六六))

御賄代は、幕府の御軍勢はどこも「御判鑑」渡りで即金の支払(当座御払)はありません。もつとも騎兵組は僅か百両だけ内金を頂いただけで、残金は一円の御払もありません。しかも御賄料が少額で御一泊銀札約三匁五分位、米代にもありませんが、僅かでも「当分御払」いただき少しの足しになります。こんな状況で甚だ迷惑しています。

この文書は、前回と同じ、賀茂郡の割庄屋が賀茂郡御役所(代官宛に出した嘆願書の一部です。四日市駅(東広島市)に「去十一月より当七月迄御宿仕候人数、御往来ニて凡四万余人余ニ可有御座哉ニ被相考申候」という大混雑。長逗留する部隊や通過する軍勢の食費の支払は「御判鑑」渡り、「後日払つて遣わす」と紙切れ一枚で済まされると、宿場町の者はたまりません。

ここに「当座御払」と「当分御払」という言葉が

同じ意味で使われています。

【当座】（『広辞苑』）

②その場ですぐ。即座。即刻。

【当分】（『広辞苑』）

②事があつてから少しの間。当座。③近い将来まで、しばらくの間。さしあたり。

「御判鑑渡り」とは具体的にはどうすることでしょうか。

また、農民が代官に対し、「右之仕合（幕府の部隊のやり方）甚以迷惑仕候」と憚りなく言い切るのも時代のなせる業でしょうか。

地合

「たとへ地合木綿たり共、染形等手込、上品ニ似寄候高値之品、一切不相成候」（天保十三年（一八四二）『広島県史』）

たとえ「地合」が木綿であっても、染形等が手が込み、上品に似せた高値の品は一切禁止する。

【地合】（『広辞苑』）

①布の地質。布の風合。②布地。

これがよく見かける「地合」ですが、この説明に当てはまらない使い方があります。

「全体平用地合之御通行ニ候へハ、御賄銀等は迄御定則之趣も可有御座候へ共、此度之御通行は平常とハ違、全臨時御軍用之事故、地合ヲ御離レ、人馬賃錢を始、御宿料等下方迷惑ニ不相成様、相当之处を以当分ニ御払被遣、郡村之足銀ニ不及様被成置被下度」（慶応二年（一八六六））

もともと「平用地合」の御通行でしたら、御賄銀などについてこれまでも規則がありますが、このたびの御通行は平常とは違う臨時御軍用の通行ですから、「地合」とは別の原則で、人馬賃錢を始めとして御宿料など、下方の迷惑にならないよう相当額を即金で御支払いただき、郡村の足銀（補助金）を当てにしなくても済むようにしてください。

これも、前回と同じ、賀茂郡の割庄屋が賀茂郡御

役所(代官)宛に出した嘆願書の一部です。「地合之御通行」が「臨時御軍用之(御通行)」と対比して使われています。「地合」とは「通常の、いつもの」の意味のようです。

【地】(『広辞苑』)

③後に加えられたものに対して、基本的・本質的なもの。

「乍去多人數罷出候ニ付、作方守護後レ地合難洪之処弥困窮陥歎ケ敷次第奉存候」(明治元年(一八六八)『甘日市町史』)

しかし、(御出陣御用入夫)として多人数が出ましたので、農作業の手入れが遅れ、「地合」難洪の村ですが、ますます困窮し嘆かわしい次第です。

ここでは「地合難洪之处」とありますから、「地合」は「元来、もともと」を意味します。

実体

「
岩出伊右宿門御代官所
信州高井郡小見村百姓

銀拾枚
太右衛門

右之者、実体成者ニて、親え孝行ニ有之、妻子其外えも親しく、近村々えも寄特成取計致し候ニ付、其身一代刀差免、并子孫迄苗字名乗可申候、為御褒美、書面之通被下之候、
右之通、可被申渡候、

三月」(安永九年(一七八〇)『御触書天明集成』)
小見村百姓の百姓、太右衛門は「実体」なる者で、親には孝行、妻子などには親切に、近村々へも寄特な取り計らいをしたので、その身一代の刀を許し、子孫まで苗字を名乗ってもよろしい。褒美として銀拾枚をくださる。

この太右衛門は『地方凡例録』にも「奇特百姓太右衛門褒美之事」として、載せてあります。ここに「実体成者」という文言があります。

【実体】じつてい。(『広辞苑』)

まじめで正直なこと。じつちよく。

古文書から「実体」なる言葉を探すと、まず、上記の意味に使われていますが、現代の文章を調べると「実体(じったい)」と使われる例が殆どです。同じ「実体」の文字なのに、昔は「じつてい」、いまは「じつたい」と違った使い方をしています。

辞書には「奇特」で載せてあるのに、この文書のように「奇特」と書いたものを見ることがあります。「奇特と書いて何が悪い……」と怒られそうですが、全くその通です。

腰ヲおす

「冢代ハ女の事故、金蓮介ハおそれましき也、但し、鄆蔵カ腰ヲおす故、鄆蔵ニ少しハはゝかるよしあらん」(文政十一年(一八二八)篠斎宛馬琴書翰)

冢代は女なので、金蓮介は恐れないだろう。でも、鄆蔵が「腰ヲおす」ので、鄆蔵には少しは憚ることもあろう。

これは『傾城水滸伝』中の人物について、作者馬

琴が述べた個所です。『傾城水滸伝』の内容は知りませんが、「腰ヲおす」という言回しが気にかかりました。

【腰を押す】(『広辞苑』)

後方から助力する。また、そそのかす。

【尻を押す】(『広辞苑』)

後方から援助する。

【背中を押す】(Wikipedia)

慣用表現。

これらはみな、あと一歩が踏み出せない人の後を押して前に進ませる、行動させる、という意味でしょう。腰、尻、背中と三通りの言い方があるのも面白いところです。もともと、「背中を押す」は辞書にありません。尻を押すより背中の方が押しやすいので、最近ではそう言うのかも知れません。

瀬取

「諸船川内にて荷物積候ハ、勿論、縦沖積仕候ハ、沖にて荷物瀬取致候共、大坂え来り候船は、出入共荷物多少によらず、其船之石高二応シ、壱石ニ付三銭宛之積り石銭可差出事」（宝暦五年（一七五五）『御触書天明集成』）

諸船が川内で荷物を積むのは勿論、たとえ沖積して沖で荷物を瀬取しても、大坂へ来く船は出入とも、荷物の多少によらずその船の石高に応じて一石につき三銭（三文）ずつ「石銭」を差出しなさい。

これは、大坂両川口（安治・木津両川口）が年々と浅くなり、諸船の出船入津が不自由になったので、出入りの船から石銭を徴収し、水尾（みお）河・海の中で、船の通行に適する底深い水路を浚えをするという幕府の触書です。

【瀬取】せどり。（『日本国語大辞典』）



瀬取船（船壁）

港で接岸できない沖懸りの廻船から積荷を小船に移し陸揚げすること。また、その船。江戸時代、廻船が大型化しても江戸、大坂はじめほとんどの港が浅く接岸できないため、荷揚げには喫水の浅い瀬取り用の小船を使った。（図は同書より、瀬取船）

【石銭】こくぜに。（『広辞苑』）

（コクセンとも）江戸幕府が浦賀・大坂・長崎等で船積の石数（こくすう）に応じて船舶に課した税。

無用・給

「一年寄・割庄屋并四日市・三津・下市・白市庄屋共之外、袴着御役所へ罷出候儀無用之事
一役人共於御役所脇差指し応対仕間敷并諸帳書付類披見無用之事

一於御役所役人共御用向ニ交猥ニ多葉粉給申間敷事」（天保五年（一八三四）「鶴亭日記」）

年寄・割庄屋と四日市・三津・下市・白市の庄屋の外は袴を着けて賀茂郡御役所(代官所)へ来ることは「無用」である。役人どもが御役所で脇差を指したまま応対してはいけない。諸帳書付類をみることも「無用」である。御役所で役人どもが御用向のとき猥に多葉粉を吸ってはいけない。

これは宝暦七年にだされた御触の一部です。ここに「無用」という言葉が使っております。

【無用】(『広辞苑』)

- ①役に立たないこと。必要でないこと。「心配——」②してはならないこと。「天地——」「口外——」③用事がないこと。「——の者入るべからず」

「用が無い」と書いてあるので、つい、「①必要でない」と解釈してしまいます。「袴着……無用」とは、「袴を着なくても構いません」という優しい言い方ではなく、「袴を着てはいけない」という禁止の意味です。「天地無用」の無用でした。

「婦人帽子無用之事」の文言は、「殿様御発駕」

に際しての御触の一部ですが、「婦人の帽子(被り物)は禁止」の意味です。

「給」も気になる言葉です。

「同二十日半麦の飯を給廿日正月と唱夜分祝申候」(佐々井村国郡志下調帳『高田郡史』)

正月二十日、半麦の飯(米麦半々の飯)を「給」べ、廿日正月といって、夜分に祝う。

「正月元日未明ニ親族其外下人至迄身祝と唱餅雑煎祝酒を給祝ふ」(田口村国郡志下調帳『西条町史』)

正月元日の未明に親族や下人まで、身祝といって、餅雑煎を祝い、酒を「給」べて祝う。

「飯を給(食)べ」るのは当たり前ですが、「酒を給べ」、なんと、「多葉粉まで給べ」る。

【食】たべる。(『日本国語大辞典』)

「文語」たぶ。「たぶ(賜)」に対する謙譲語。「たまう(給)」と同じく、本来は「いただく」の意であるが、特に「飲食物をいただく」場合に限定して用いられる。

「食べる」と解釈しないで、本来の「いただく」とすれば、一応納得できます。

ならし餅

「但馬守様御七十之御年賀御祝被遊候ニ付、御家中始陪臣并銘々屋敷多門住居之者町新開郡中三原宮島尾道共、御領分一統七十歳已上へ男女不限御祝ひ之ならし餅被下候、尤右御祝餅相渡候儀は日割等出来之上追て其方角より知せ可在仕候間」（天明六年（一七八六）「堀川町覚書」）

但馬守様（第六代広島藩主、浅野宗恒。致仕後但馬守）御七十の年賀の御祝いのため、御家中を始め、陪臣、銘々の屋敷多門に住居の者、町新開、郡中、三原・宮島・尾道とも、御領分全域で七十歳以上の男女へ御祝いの「ならし餅」を下さることになった。御祝餅を渡す日程が決り次第知らせるので……、

浅野宗恒は、享保二年（一七一七）に生まれ、天明

七年（一七八七）に七一歳で亡くなっています。この文書はその前年、七〇歳のときのものです。

「ならし餅」を調べても分りません。漢字で書けば「均餅」だと思いますが、すると作るのに手間の掛らない伸餅のことかも知れません。

【伸餅】のしもち。（『日本国語大辞典』）

厚さ一ツの長方形に大きくのばした餅。切り餅にする。

「御領分一統七十歳已上」の男女はどの位いたのでしょうか。大量の餅を搗いたのだろうと思います。千葉県習志野市「実籾郷の会」のHPに「ならし餅」の記事がありました。照会したところ、「その年の豊作を祈り、二月に栗の木の枝に紅白の餅をならす伝統行事」とのお返事をいただきました。木に餅がなるので「ならし餅」と言うのだろと思います。興味深い行事ですが、古稀の御祝にプレゼントする祝餅とはどうも違うようです。

外聞

【外聞】がいぶん。（『広辞苑』）

①他人に聞かれること。自分についての世間のうわさ。評判。②面目。名誉。③見え。ていさい。

「市町ニてハ商売躰他所出会等も在之抔と、着服之儀申立を致し候処も有之候得共、素被仰出之御作法一統之事ニて、御国風と見候時は、他所向外聞之食着も無之」（天保四年（一八三三）「鶴亭日記」）
都市部では「仕事上、他所へ行き、人に会いますので……」と着服（儉約令の規定について異儀を申し立てる者もあるが、勿論、仰せ出された御作法は誰にも適用される事柄で、これも御国柄と思えば、他所向きの「外聞」のこだわりも無いはず、

「他所向外聞」は、③他所向の「体裁」に当てはまります。ところが、どれにも該当しない例文もあり

ります。

「郡中居住之者ニて、町方役方之手先・外聞など致し、或は目明シと相唱、中ニは御用之挑燈致所持、博奕・盜賊類ニ制止取計候者も有之、間々於村方權威ヲ振ひ、財物ヲ貪り取ものも有之、又其手先相働候同類も有之、専ラ捕手之業致稽古候も有之候由相聞候」（文化十一年（一八一四）「鶴亭日記」）

郡中に居住する者で、町役人の手先・「外聞」などをして、或いは目明しと唱え、その中には御用の提灯を所持いたし、博奕・盜賊類の取り締りをする者もあり、ときには村方で威張り散らし、財物を貪り取ったり、その手先となつて悪事を働らく者もあり、また専ら捕手の業を稽古する者もあると聞いている。

「兼て申付置候通忍び廻り并外聞之者申付置候ニ付、若右等之儀取扱候もの有之候得は、直ニ召捕せ、又は其風聞ニ依て外聞仕せ」（天明六年（一七八六）

「堀川町覚書」）

以前から言うように、忍び廻り（密偵）や「外聞」の者に指示をしているので、もし右等の儀（博奕）

に関わる者があれば、直ちに召し捕らせ、またはその噂があれば「外聞」させて……、

【聞き合せる】 ききあわせる。（『広辞苑』）

①同一の事柄について、あれこれと問い合せる。いろいろ聞いて考え合せる。②問い合せる。照会する。

「外聞」は、外に出て聞き耳を立てて噂や情報を集めることのようにです。「聞き合せ」に相当します。外で聞き廻るので、「そとぎき」と読んだのかも知れません。

あの御方

「此風律は在世の時より其名高く他邦に聞え、船橋道牛」九州漫遊の時、彼地にて恵美三伯と此風律が咄をすれば、彼地の人々、扱はあの御方々と御懇意にましますやと、肝をつぶせし如くに申たるよし」（『梅鶴閑話』）

この風律（俳人、木地屋保兵衛）は在世の時より有名で、その名は他国にも聞えていた。船橋道牛（医師、平木玄達）が九州漫遊の時、恵美三伯（医師）や風律の話をすると、彼の地の人々は、「さてはあの御方々と御懇意ですか」と肝をつぶしたように言ったという。

「一長崎御奉行柘植長門守殿御登、近日当町御泊之趣ニ相聞候間、……」

一あの御方御家来中末々迄へ対し不礼之儀不仕候様可申付候、宿請仕候亭主方之分ハ勿論惣て念入れ候様可仕候事」（天明二年（一七八二）「堀川町覚書」）
長崎御奉行柘植長門守殿が御登りの際、近日広島に宿泊するとのことで、……「あの御方」の御家来に対して、末々の御家来でも不礼のないようにと指示しなさい。宿を請けた亭主は勿論、全てのことを叮嚀にしなさい。

これは、広島町奉行が町大年寄に指示した内容の一部です。柘植長門守正寔は、当時は長崎奉行（安永四年～天明三年）、のち勘定奉行（天明六年～天明八年）も歴任しています。

「あの御方」という言い方が、会話の中ならともかく、公文書に使われているのは少々驚きです。

【彼御方】あのおかた。（『日本国語大辞典』）

他称。話し手、聞き手両者から離れた人を指し示す（遠称）。上位者に用いる。

【彼の】あの。（『広辞苑』）

①自分からも相手からも遠い位置にあることを指示する。

士列

「馬方・人足・水主之者行路之儀、……士列之面々ハ勿論、其外御家人へ対シ失礼之義無之様、手堅相示可申、士列之面々と見請候ハ、早速笠・ほうかふりを取、……」（天保三年（一八三二）『熊野町史』）

馬方・人足・水主の者が道路を通行するとき、士列の御方は勿論、その他の御家人に対しても失礼のないようにと手堅く指示しなさい。士列

の御方と見受けたら、早速笠や頬被りを取りなさい。

一口に御家来（御家人）と言っても、その中に士列とそれ以外があるようです。士列とは何か。調べました。

【士列】（『日本国語大辞典』）

士籍につらなること。

【士籍】（『日本国語大辞典』）

士族の身分としての籍。さむらいの格。士分。

「士列」とは「御さむらい」……では説明になりません。そこで先ず広島藩の家臣団の解説で予習します。

「家臣団を大別すれば侍士・徒士・足輕となり、：

侍士は、長柄ながえ以上（行装に長柄傘の使用を許された者）、布衣ほい以上（礼式に布衣の着用を許された者）、馬持うまもち以上（知行高三〇〇石以上）、御直支配（御側詰以上、御序の御前御用（御直支配に準ずる格式）、それ以下（知行高一〇〇石以上）に分かれていた。なお、侍士のうち

小祿の者には切米取も少なくなかった。きりまいどり

徒士は、左右徒士小姓組・外様徒士組に編成されるもののほか、諸役方にも配属されていた。藩主に拝謁する際の区別は、侍士が直接応答を許されたのに対して、徒士は詞を賜るだけとされた。

また、足輕は、譜代の者もいたが原則として一代限りとされた。一代限りの足輕は、農民出身者が多く、苗字を許されない者もあった。先手足輕組・側足輕組・供足輕組に編成されたもののほか、諸役方の下役として配属されていた。」（『広島県史』）

「当藩軍装の事たるや、……士列は羅紗の陣羽織を着し、歩行は茜絹の陣羽織を着し、物書役及び諸足輕に在ては陣笠を被り陣羽織を着し「物書役は袖、諸足輕は木綿なれとも、染色は身分に依りて異なれり……」」（『芸藩志拾遺』）

家臣団で侍士・徒士・足輕の内、士列とそれ以外の境界はどこに置かれるのか。史料を探ると、「此見廻り役は士列と徒士と半数宛交互当番にて勤仕す」（『芸藩志拾遺』）とありました。

『新修広島市史』は、上士（一〇〇〇石以上の侍）、中士（二〇〇石以上の侍）、下士（歩行あるいは足輕）と分けています。上士・中士を士列と言い、侍、知行取とも言います。

気動

「高田郷は水帳無之村々多く、田畠等ノギ畝数不相分に付、坂田吉太郎殿御代官之頃、村之水帳調候様談し有之候処、下々気動に掛り候とて、役人共願出候付夫切に相成候由。

独断 気動申立るは畢竟田畠しらべ水帳調る時は役人共持分無高地へ響合候付、人機を申立にして襲ひかけ候に相違無之」（『秘話独断』『近世地方経済史料第6巻』所収）

「高田郷」は安芸国高田郡と考えられます。坂田吉太郎が文化十年（一八一三）に高田・高宮郡の代官に就任しているからです。「田畠等ノギ畝数」の「ノギ」は意味不明です。古文書で「ノギ」という言葉

は見たことがあります。「ホノギ」ならよく見かけます。「等」の異体字は「ホ」で、「ホ」と読み違えます。ここでは「田畠ホノギ畝数」ではないかと思えます。

高田郡には水帳(検地帳)のない村が多く、田畠のホノギ(耕地に付された小字名)や面積が不明確なので、坂田吉太郎殿が御代官のとき、村の水帳の調え替えの話を出したところ、「百姓共の気動にかかわるので……」と役人共が願ひ出たので夫切(それっきり)になったという。私の考えでは、役人共が百姓の気動を理由として反対するのは、結局田畠をしらべて水帳を調えると、役人共が持っている無高地(村高に入っていない土地)に影響するので、人機を申し立て反対したに相違ない。

資料から「気動」の意味は分かります。「気分が動く」「人心が動揺する」です。読みは「きーゆるぎ」でしょうか。

こうなると、「人機」(人気)にかかわります。

【人気】じんき。(『日本国語大辞典』)

人々の気配。人が群集してつくりだす騒然とした気配。

「検地を断行すると一揆が起きるかも知れません」と脅されると、代官も引込めるより仕方がなかったのでしょうか。

五ヶ年振

「五ヶ年振御領分中人数改有之、帖面御勘定所へ出、寄せ書一紙ニして上る也、凡人数は高程有之物と申候、御領分中惣人数辻五拾万ニハ不足候事」(「芸備郡要集」)

五ヶ年振りに領内の人口調査があり、その帖面を御勘定所へ提出する。郡内村々を寄せて一紙にまとめて提出する。人数は石高ほど居るといふが(五〇万石の領地なら人口は五〇万人)、御領分の人数合計は五〇万には足りない。

「七年ふりニ御領分人数改有之、帖面御勘定所へ出し、寄せ書一紙ニして上る也、人数ハ高程有之も

のといえへとも、御領分惣人数辻ハ五拾万ニハ不足也」(「理勢志」)

「芸備郡要集」と「理勢志」は題名こそ違え、内容はほぼ同じです。転写を重ねると、このように原本から次第に遠ざかるのは仕方のないことです。

それにしても、人口調査があつたのは「五ヶ年振」か「七年ふり」か、肝腎の個所が相違しています。原本は見つかっていません。

人口調査(人馬改)については、「宜男」07/02/22の項目で取上げ、「六年ごとに行われた」と書きました。

【子午改】しごあらため。(『岩波日本史辞典』)

江戸幕府が六年ごとに実施した全国一斉の人口調査。実施年が子年と午年であつたためにこの名がある。一七二二(享保六)、領知ごとに田畑の面積と人口の書上げを求めたのが始まりであるが、制度化するのは二二六(享保一一丙午)以降。改めの基準は集計年齢の下限が異なるなど全国一律ではない。

五年でもない、七年でもない、六年である……という訳です。これは史料からも裏付けることができます。(「宜男」参照)

次に問題になるのは「振り」です。

【振り・風】ぶり。(『広辞苑』)

〔接尾〕②時間を表す語について、時日の経過の程度を表す。「久し」「一年」

普通は、「〔六〕ヶ年振御領分中人数改有之」は「前回から六年ぶりに人口調査があつた」と読取りますが、ここでは「六年ごと」と解釈しないとシツクリしません。

「釘地鍛冶屋炭山所之儀は三ヶ年振りニハ改メ願出候建り合も候処、近年流合願出も不致心得違之事二候」(天保十三年(一八四二)『広島県史』)

釘地鍛冶屋(釘・農具などの地鉄をつくる鍛冶屋)の炭山所については、「三ヶ年振り」には改めを願ひ出る建前になっているのに、近年はルーズになり願ひ出もしないのは心得違いである。

この内容は今ひとつ判然としませんが、「三ヶ年

振り」が「三ヶ年ごと」を示すのは明らかです。
「〓年振り」には「〓年毎に」の意味もあると思
っています。

急度

「諸都共鉄炮之事ハ急度御建リ有之事也、獵師筒は
受主数相定、其人数増減不相成、其内死失ニて放
候者無之時は、村受ニ致免割ヲ以運上銀納置、扨
又猪鹿作毛ヲ荒、作人共追払之為、先年より威筒
を拝借仕居候事ニ候、是も数極り有之候、……右
威筒ニて獵は堅不仕事也、年々持主改有之、代替
之節は願出、達之上免許、当人は不及申、五人組
役人共連印請証文出、……殊外嚴重之御作法也」
（「芸備郡要集」）

諸都とも鉄砲については「急度」決りがある。
獵師筒は受主の数が決っており、その人数の増
減はない。受けた者が死亡して使う者がないと
きは、村がそれを受け、取立てた税で運上銀を

納める。また作物を荒らす猪鹿を百姓が追い払
うため、先年より威筒をを拝借していすが、これ
も定数がある。……威筒では獵はしてはならず、
毎年持主の調べがあり、持主が代るときは願出
て免許を受ける。そのとき当人は勿論、五人組
役人共が連印して請証文を出す。……格別に嚴
重な決りがある。

農民が使う「獵師筒」と「威筒」についての仕組
を説明しています。「鉄炮之事ハ急度御建リ有之」
の「急度」に違和感を感じました。普通、「きつと（必
ず）来てくださいね」などと使います。それならば、
「鉄砲については必ず決りがある」になっしまい
ます。

【屹度・急度】きつと。（『広辞苑』）

（キトの促音化。「屹度」「急度」は当て字）①時間
的にきわめて短いさま。急に。すばやく。とつ
さに。②急に、はつと。③厳しいさま。状態や
表情にゆるみのないさま。嚴重に。きつぱりと。
しつかりと。④行為の確実に行われるさま。た
しかに。必ず。相違なく。

使い慣れている「きつと」は④、ですが、③「厳しい」もありました。「鉄砲については厳しい決りがある」が正しい解釈です。この史料は「殊外嚴重之御作法也」と、再度強調しています。

御触書の文末の決り文句、

「其者ハ勿論、其所之役人迄吟味之上急度可申付候条、心得違無之様可致候」

本人は勿論、その所の役人までも取調べて、「急度」罪科を申付るので、心得違いのないようにしなさい。

「急度可申付候」は、「必ず処罰する」と言う意味の外に、「嚴重に処罰する」という意味合いも含まれているのかも知れません。

非工事

「惣て家業ニ厚心ヲ用、百姓は農業ニ力ヲ尽シ、商人ハ商ひニ精ヲ出し、職人は家々之家業ヲ第一ニ

相勤、銘々職行ヲ忘レ遊芸ヲ好、或は悪心ヲ以工事ヲ好、愚成者を偽非工事ヲ進、亦は偽ヲ巧ミ人之害ヲなす輩有之は猥ニ不隱置可申出、勿論何事ニ不寄誓紙書一味致徒党者有之ハ、制而御高札之通可註進ス事」(文化六年(一八〇九)『広島県史』)

誰もが家業に気を配り、百姓は農業に力を尽し、商人は商いに精を出し、職人は家業を第一として勤めなさい。それぞれが仕事を忘れて、遊芸を好み、または悪意をもって訴訟をしたがり、愚かな者を騙して「非工事」を進め、または騙しを計画して人の害をする者があれば、思慮もなく隠し置かず、申し出なさい。勿論、何事によらず、誓紙を認めて徒党をする者があれば、「制而」御高札の通り報告しなさい。

「工事」は「公事」の宛字です。

【公事】(『広辞苑』)

③訴訟。

【非公事】ひくじ。(『日本国語大辞典』)

非分な公事。道理のない訴訟。勝味のない分の

悪い訴訟。

この史料の「非工事」は「道理のない訴訟」に相当します。

徒党に関しては「御高札之通可註進ス事」と書いてあります。

「よろしからざる事に百姓大勢申合」せているのを知って、「そのすし(筋)の役所へ申出(密告する)」するときは、「制而」とは何をすることでしょうか。まさか、「差しとめること」ではないでしょう……。

「鶴亭日記」文化十一年(一八一四)附録「四日市駅象魏(高札)」によると、四日市駅(東広島市西条)の制札場には一〇本以上も建てられていました。その中に、有名な一揆の触があります。

「定

何事ニよらず、よろしからざる事に百姓大勢申合候をととうとなへ、ととうしてしみてねかひ事くハだつるをこうそといひ、あるひハ申あハせ村方をたちのき候をてうさんと申、前々より御法度ニ候条、右類之儀これあらハ、居村・他村ニかき

らす、早々そのすしの役所へ申出へし、御ほうひとして

ととうの訴人 銀百枚

こうその訴人 同断

てうさんの訴人 同断

右之通、下されもの品ニより帯刀苗字も御免あるへき間、たとへ一旦同類ニ成るとも、発心致し候もの名前申出るにおあてハ、其科をゆるされ、御ほうひ下さるへし

(中略)

明和七年四月 奉行

右之通被仰出之間、領国之輩急度可相守者也

安芸(浅野重晟)」

社・礎

「凶年打続下方一統年々之不作ニ疲居申候処、就ては去秋格外成ル風損ニ付無抛御年貢不納仕、夫故是迄願之田畑等も持主の方へ被取戻何社業之方便

も無御座候、礪と行当り極々難渋ニ落入」(嘉永四年(一八五二)『廿日市町史』)

凶年が打ち続き、下方はみな年々の不作に疲れておりますところに、去秋の大変な風損のため、仕方なく御年貢を納めることができませんでした。そのため今までお願いしていました田畑等も持主へ取り戻す方策は「何社」立たず、「礪」と行き当り極々難渋に落ち入っています。

古文書を読んでいると、何と読むのかも分らない文字に出くわします。ここでは「社」と「礪」の文字ですが、調べてみるとスグに納得します。

【社】(『漢字源』)

《常用音訓》シャ／やしろ《音読み》 シャ／ジャ《訓読み》 やしろ／しゃ／こそ

村社むらじや講平こうへいという陸上の選手の名前を思い出します。「何社」は「何こそ」です。

【礪】(『漢字源』)

《音読み》 トウ(タウ)《訓読み》 はたと／はつたと《意味》(名)下に敷く石。底あて。(国)

はたと・はつたと。(イ)平手でうつ音。(ロ)にらみつけるさま。(ハ)思いあたるさま。(ニ)行きづまるさま。

「礪」とは「はたと」です。《意味》(ニ)「行きづまるさま」に当てはまります。

非事・理屈

「公事訴訟弾之義ハ、元来自身理分と心得訴出候事ニ候処、糺明之上却て非事ニて、取得も無之、無理を理屈と心得違、又ハ心底ニハ非事と存知ながら、巧筋を以云廻らし、徳を附ント心付出訴する族も有、役人共之越度油断と見付、其虚に乘し悪事も巧ミ、目安訴状出ス類も有之」(「理勢志」)民事事件での訴訟の審理では、もともと自分に道理があると思つて出訴するのであるが、調べが進むとかえつて非理となり、得る物もなく、道理もないのに「理屈」とはき違い、または心底では違法と知りながら言葉巧みに主張し儲け

ようと考えて出訴する連中もある。役人どもの越度油断を見付けてその虚に乗じて悪事をたくらみ、目安訴状を出す者もある。

文書の中で対になっている言葉が見つかる、解釈が楽になります。「理分」と「非事」です。一つにまとめると「理非」です。

【理非】（『広辞苑』）

道理と非理。道理にかなっていることとはずれていること。

【理分】（『広辞苑』）

道理にかなう方。道理があつて利益になる方。

【非理】（『広辞苑』）

道理に合わないこと。道にそむくこと。非道。

「非事」は辞書で見つかりませんが、「非理」と考えてよさそうです。

「無理」と「理屈」も対になっています。

【無理】（『広辞苑』）

①道理のないこと。理由のたたないこと。

【理屈】（『漢字源』）

①物事のすじみち。道理。②〔国〕自分を有利にするために考えた、道理にあわない理由や理論。

この文書では「理屈」は「道理」の意味ですが、辞書は真反対の意味を併記しています。

御取替米 その二

以前、「御取替米」に関する史料・解説を集めて、記事07/7/25にしました。これは「その二」です。

世羅郡田打村では「逐電」したり「追揚」となった百姓が多く、「浮地」（百姓が残っていた土地）が増えて、村役人はその対策に苦慮していました。そこで郡内の「非人乞食之内屈くつきよう竟之もの三拾人」を選び耕作に充てるため、広島県庁に対して「三拾石、当秋迄拝借御願」をしました。その返事が次の文書です。

「此義至極之義と相見へ候二付、申出通り御米取替之義承届候、……御取替米三拾石ニ当り候ては当

秋返上之儀とも厚可申談置候もの也」(明治五年(一八七二)「続波多野家文書」)

この件については当然のことなので、申し出の通り御米を「取替」ることを承知した。「御取替米」三拾石の今年秋返上についてもしつかり相談しておきなさい。

【取替え】(『広辞苑』)

①とりかえること。交換。②かわり。かけがえ。ひかえ。

この文書で使われている「取替」の意味は、「交換」とは違います。「立替」の感じです。

【立て替える】(『広辞苑』)

他人に代って金銭・財貨などを出して置く。他人に代って一時支払う。

【貸付金】(柏書房『日本史用語辞典』)

正しくは御貸付金という。江戸幕府より大名や町人・農民などに対する貸出金のうち、利殖を目的としたものをいい、救済のみを目的の拝借金とか、不時の立替の取替金とは区別される。

『日本史用語辞典』は「取替」を単なる「貸付」ではなく、「不時の立替」と説明しています。この古文書の「取替」の説明にピッタリです。

【取替・取換】(『日本国語大辞典』)

④金銭を立て替えること。金銭を一時用立てること。また、その金銭。

山林諸荷物

「郡中山林諸荷物之儀は従前之仕来り規則之趣も有之候処、今般県治改革殖産之道広く被相行候二付、古格相廢、……板材木、炭、薪類県庁壺ヶ年入用之品丈ヶハ従前之振合を以割賦申付候得共、其余は都て勝手売事差許候事」(明治四年(一八七二)十二月『廿日市町史』)

郡部の「山林諸荷物」については、従前の仕来り規則もあるが、今般県治を改革、殖産の道を広く行うようになったので、古い規則は廢止する、……板材木、炭、薪類は県庁で壺ヶ年入用

の品だけは今まで通り納入を割当てるが、その余はすべて自由に売ってよろしい。

これは、廃藩置県直後の広島県の出した触書です。「県治改革殖産之道広く被相行」という政策のもと、「山林諸荷物」販売の自由化を決めています。但し、県庁の必要とする量をまず確保していますので、〈殿様気分〉は残ったままです。

それはさておき、「山林諸荷物」（山荷物）という耳慣れない言葉が出てきました。その例として、「板材木、炭、薪類」が挙げられています。すると、「山荷物」とは単なる林産物ではなく、藩が課税対象とした商品のようです。

「寛永期に入って林産物の流通統制からはじまる。すでに元和八年（一六二二）安北郡（高宮郡）深川筋から城下へ積下す薪船に船運上を課しているが、寛永三年（一六二六）になると、可部から城下へ下る薪船に対して、さらに同五年には、安北・佐東（沼田郡）・山県三郡にまたがる太田川水系を利用するすべての割木船に船運上を課している。また

同年には古くから、佐西郡（佐伯郡）産の林産物の集散地であった廿日市に口屋を設け、郡中からの薪炭・木地・葛籠草等の林産物に十歩一銀を徴するようになっていた」（『広島県史』）

晴天十日

「此度西之宮御殿百六十式歳振り再建御座候て、御普請中何之故障筋も無御座、御棟上ケも無滞相調ひ、弥以当町繁栄之基と一統競立相歛居申候、尚又、来ル廿八日御遷宮御座候由、旁以稀成ル御神式ニ御座候ニ付、為賑ひ右境内ニおゐて来ル廿八日より晴天十日之間芝居興行仕候ハ、脹々敷参詣仕、……格別ヲ以御免被為仰付可被下候ハ、難有仕合ニ奉存候」（天保十二年（一八四一）『三原市史』）
このたび西宮八幡社の御殿が一六二年振りに再建され、普請中何の故障もなく、棟上げも無事に済み、お陰で当町繁栄の基と一統競い立ち飲んでいきます。来る廿八日に御遷宮があるとのこ

と、稀な御神式ですから賑いとして境内で来る二八日より「晴天十日」の間芝居興行をすれば沢山の参詣がありますので、……格別をもって御許可をお願いします。

西之宮再建遷宮につき芝居興行の許可を求めた文書です。「晴天十日」という面白い言葉がありましたので、調べてみました。

【晴天十日】（『日本国語大辞典』）

（晴れた日一〇日間の意）大相撲興行の日数。安永七年（二七七八）に江戸の深川八幡で一〇日間興行されたのが最初で、恒例となったのは、天明元年（二七八二）両国回向院からのことで、それ以前は晴天八日であった。

「相撲興行の日数は、四方山人が『狂詩諺解』、いにしへより、晴天八日の定めなりしが、安永七年戊戌三月廿八日より、深川八幡にて角力興行ありし時より、十日となりしと覚ゆ」といへり。近來は秋角力なく、寒中興行す。是も天明三癸卯七月浅間山焼、秋角力冬に延て寒中興行したるよりな

り」（『嬉遊笑覧』）

これらは相撲興行の説明ですが、芝居も同様、境内での興行ですから雨天になると中止、「晴天十日」は「晴れた日だけ数えて一〇日間」の意でしょう。

競立

「厳嶋六月市立之節は、例年之芝居見せ物等別て賑々敷有之趣、郡町之もの共拝参致し候儀は從來之事ニ候得共、当年は上方より芝居もの共之内別て名高キ者共も参候趣ニ付、競立候趣ニ相聞、町方杯も示し筋も有之趣ニ相聞、就ては郡中之者共も心得役者共へ贈もの等致し、又は厳嶋は制外土地ニ相心得、且所ニては近年は兼て御制禁之美服相用候様成ものも有之候由、是迄彼是と相聞甚以如何敷事ニ候間、社参致候儀差留候儀ニては無候得共、右様役者共へ贈もの等致し、又は同所ニて百姓共之分限制禁之美服相用候様之儀も有之候ては

甚以不相済候間、其方組合村々之もの心得違無之様得と申聞、下々當時之御趣意合熟と致し候様村々ニ可申談もの也」(文政十三年(一八三〇)『広島県史』)

厳島の六月市立のときは、例年芝居見せ物などで特に賑々しく郡町の者が参拝するが、当年は上方より有名な役者(中村歌右衛門)も参るとのこととで「競立」っており、町奉行も指示を出すと聞いている。郡中の者もそれを知っており、役者へ贈物などをし、又は厳島は制外の土地と考え、御制禁の美服を着る者もいるそうである。これまでも色々と聞いている。社参は構わないが、役者共へ贈物をしたり制禁の美服を着るようなことがあれば只では済まないことなので、組合の村々の者が心得違いないよう申し聞かせ、下々が現在の御趣意合を「熟と」承知するよう指示しなさい。

厳島へ中村歌右衛門が来るので、町も田舎も沸返っている様子が「競立」という言葉でうまく表現してあります。

【競立】きそいたつ。(『日本国語大辞典』)
互いに先を争うようにして立つ。先を争って事をはじめ。

「熟と」を「キチンと」と読み替えると意味が通りますが……。

下宿 その二

「四日市教善寺之儀は、御大名様方御遺骸御通行之節、従来御本陣ニ相成、其外御大名様方御通行之節、多分之御荷物御同勢之内多人数之分ハ下宿ニ相成来り、全ク脇本陣ニ准シ駅役相勤、其外宗旨判形見届之節ハ、年々場所ニ相成候処」(嘉永六年(一八五三))

四日市教善寺(東広島市、JR西条駅裏)は、御大名様方の御遺骸の御通行のときは御本陣になっており、その外御大名様方御通行のとき、多くの御荷物や御同勢の「下宿」として使われ、脇本陣のような役割を果たしています。その外、宗旨

判形見届のときは、毎年その会場になっていきますが……、

この文書は、教善寺修覆費用の拝借を藩に求めた願書に対する返事の一部です。この中に、教善寺が「下宿」として使用されていることが書いてあります。

「下宿」については以前記事 07/03/21にしたことがあります。この史料の「下宿」は、それとは別の意味です。

【下宿】したやど。（『広辞苑』）

①江戸時代、大名などが宿駅の本陣に泊まる時、家臣たちの宿泊する宿。

「鶴亭日記」には天保十一年（一八四〇）「殿様御参府之刻御下宿帖」が書き留めてあります。それによると、弥七右衛門の家には「辻豊前様上下廿人、馬老疋」というように、約四五軒、四〇〇名弱（除足軽）の家臣が宿を取っています。

彼は

「草庵の花散そむる比より夜毎の嵐に心動て誰松島の思ひしきり成ければ三月十九日といふ日住なれし戸ほそをうしろ手に引捨身は風雲の小笠に任せて千里の杖をかりそめに突そむれハしたしき限は彼是出合の清水まで見送る」（文化五年（一八〇八）玄蛙の松島紀行『萍日記』）

草庵の花が散りはじめる頃から、夜毎の嵐に心が動かされ、松島への思いがしきりに募るので、三月十九日、住み馴れた家の戸を後ろ手に引いて、身を風雲の小笠に任せて、千里の杖をとりあえず突けば、親しい人たちが「彼是」出合の清水まで見送ってくれる。

芭蕉の旅立ちを思わせる、玄蛙（俳人、多賀庵三世）の松島紀行の冒頭です。「したしき限は彼是出合の清水まで見送る」の「彼は」について考えてみます。古文書では「彼は」と「彼此」が同じように使っ

てありますが、辞書ではどうでしょうか。

【彼是】かれこれ。（『早引万宝節用集』）

【彼此】かれこれ。（『早引万宝節用集』）

【彼是】あれこれ。（『広辞苑』）

あれとこれ。あれやこれや。いろいろ。

【彼此】かれこれ。（『広辞苑』）

〔代名詞〕①かれとこれ。②あの人の人。た

れかれ。〔副詞〕①とやかく。なんのかの。何

やかや。あれこれ。②（数値を表す語を伴って）

おおよそ。ほとんど。やがて。

『広辞苑』は「是」と「此」を「これ」と読んでいますが、「彼」を「あれ」「これ」と読分けて、あれこれと説明しています。

この文書の「彼是」は「かれこれ」と読み、「あの人この人」の意味だと思えます。

「出合清水 国内の勝区を詠ぜし歌とて、いひ伝る歌あり、安芸の国、出合の清水、鷺の森、阿弥陀がみねに、厳島山、此歌何人の詠ぜしを知らず、其勝区とするも、厳島の外其地さかならず、府

中村に、出合清水とよぶあり」（『芸藩通志』）

夜前

「以飛脚一筆啓上仕候、然て夜前江戸表より書状来申候処、三宅先生御儀御病氣ニ御座候処、御養生不被御叶、当月十一日終ニ御病死被成候、此段私より為御知要旨迄如此ニ御座候、以上

九月廿八日 中西良伯

野坂三益様（天保二年（一八三一）十月「鶴亭日記」飛脚でお手紙を差上げます。さて「夜前」江戸表より書状が来ました。三宅先生は御病氣でしたが、養生の甲斐もなく、当月十一日に亡くなれました。私から要旨のみをお知らせします。

「三宅先生」とは三宅立續（広島猿樂町、側医師並のことで、野坂三益が一六歳のとき、教えを受けた恩師です。当時、江戸で「儲君」（浅野斉肅）の御抱守として勤めていたと思われまます。

夜前に江戸表より書状が届いたとあります。夜の

前、夕方にも来たのかと思いましたが、辞書を引いてみると、とんだ大間違いでした。

【夜前】やぜん。（『広辞苑』）

前日の夜。昨夜。よべ。

「広瀬組・中通組内にて、夜前盗人三ヶ所這入、少々宛盗取候趣知セ来候間、此段相達し候、早々此旨相心得居候様ニ、町々夫々へ相知せ被置候様ニ存候、以上

十一月三日

用場

町々へ」（天明二年（一七八二）「堀川町覚書」）

（広島市中の）広瀬組・中通組内で、夜前盗人が三ヶ所に入り、少しづつ盗み取ったとの知らせがあったので、連絡する。早々に町々へ知らせなさい。

仲ヶ間直段

「もし御求も可被成候ハバ、うり出しの節、壺部登

せ可申哉。宮元よりとりよせ候へバ、仲ヶ間直段同様之事故、飛脚ちん位は下直ニ付可申候。思召も御座候ハバ、後便ニ可被仰下候。石魂録も同断ニ御座候。四冊にて立直段十五匁の処、仲ヶ間へハ二わり引、正味十二匁にて遣し候よしニ候。八大伝ハそれより少し高料ニ可有之哉ト奉存候。（文政十一年（一八二八）篠斎宛、馬琴書翰）

もし（『八大伝』を）御求めでしたら、発売のとき一部お送りしましょうか。宮元から取寄せれば「仲ヶ間直段」で手に入りますので、送料（飛脚賃）位は安くなるでしょう。ご希望でしたら後便でお知らせ下さい。『石魂録』も同じで、四冊で定価一五匁ですが、仲ヶ間へハ二割引、正味一二匁でくれるそうです。『八大伝』はそれより少し高いかも知れません。

同業者同士では一般の値段より安く融通し合うようで、これを「仲ヶ間直段」と呼んだのでしょうか。

『松浦佐用媛石魂録』^{まつらさよひめせきこんろく}（後集上帙四冊）の定価は一五匁。労賃から換算して銀一匁が現在の四〇〇〇円に相当（『武士の家計簿』）するものとすれば、六万

円（米価換算で一万円）になります。この初印本は四〇〇部ですから、高価なもの仕方のないことかも知れません。もっとも、馬琴自身も、「是迄拙作に、これほど高料の本ハ無之哉ニ覚申候」と驚いています。

『江戸物価事典』によると『好色一代男』は二五匁（一匁＝四〇〇円として、一〇万円）、貸本屋が繁盛するのも頷けます。ちなみに、岩波文庫版の『好色一代男』は六九三円です。

付届ケ

「当村大久保井手水当、五月九日之夜ニ杵原村へ盗み申二付、早速盗口閉マキ申候、然所ニ又翌日夜盗申二付、其段貴殿へ申出候得は、杵原村にてハ何右衛門と申もの盗申候哉と御尋被成候へとも、夜中ニ盗レ、殊其場ニ当村之もの居合不申候二付、何右衛門ぬすミ申を不存と申候へは、貴殿御申被成候は、何右衛門盗候と其人を慥ニ捕へ候わでハ

役人より役へ付届ケも不相成と御申候二付、五月七日之夜迄私共武三人参しのび見申所ニ、又々盗ニ参申二付……」（享保九年（一七二四））

当村の大久保井手の水当について、五月九日の夜、杵原村へ盗み取られたので、早速盗口（水路）を閉じました。ところが又翌日の夜も盗まれましたので、貴殿（当村庄屋へ申し出ましたところ、「杵原村の何右衛門という者が盗んだのか」と御尋ねになりましたが、「夜中に盗まれたことでもあり、その場に当村の者が居たわけでもないのです、何右衛門が盗んだのか分りません」と答えると、貴殿が申されるには、「誰々が盗んだと、その者を捕えてないのなら、私から役へ「付届ケ」もできない」と云われるので、五月七日の夜まで、私共二、三人が現場へ参り隠れて見ておりますと、又々盗みに来ましたので……

井手の用水が他村の者に盗取られるので、庄屋に相談を持ちかけると、犯人が誰か不確かなので担当の役人に「付届ケ」ができないと、相手にされな

ったようです。

【付け届け】（『広辞苑』）

①謝礼や義理で届ける贈物・祝儀。②転じて、賄賂（わいろ）。③とどけ出ること。訴え出る（と）。

①②の意味は知っていましたが、③まであるとは……。

それにしても、腰の重い、頼りにならない庄屋さんです。

冠米

「当村之義ハ御承知被下候通り、從來極難渋仕候得共、浅野豊後様御支配所ニ付、度々御仕向等被成下、漸取続居申候所、追々田地瘦衰、兎角百姓永續不仕、年々逐電百姓又ハ追揚等ニて冠米近年余程相嵩ミ」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）
当村（世羅郡田打村）は御承知の通り、以前から極難渋の村です。（旧幕時代は）浅野豊後様（広島藩

家老）の御支配所で、度々援助を頂き、ようやく取り続けてきましたが、段々と田地が痩せて百姓も永續しがたく、年々逐電百姓や追揚により「冠米」が近年では余程累積し

「当郡田打村之義は、從來極々難渋村ニ御座候て、別紙書付を以村役人共より申出候通り相違無御座候、去已年已来私共手元ニおゐて、夫々取約借財捌方種々様々駆引仕候得共難捌、其上半年追揚百姓闌米多端之義ニて、弥増捌方工風無御座ニ付」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

当郡田打村は、以前から極難渋の村で、別紙の書付（前資料）で村役人が申し出ている通りです。
去る已年（明治二年（一八六九）以来、私共（割庄屋）が田打村の借財の処理について骨を折りましたが解決できません。そのうえ、明治三年（一八七〇）の追揚百姓のため「闌米」が多くなり、ますます処理方法の工夫もつきません。

最初の文書は村役人から割庄屋宛、次のそれは割庄屋が広島県庁に取次いだ文書です。ほぼ同内容の箇所を並べました。最初の文書で「冠米」と書いて

いるものが、次の文書では「かづきまい闌米」と表現してあります。

【闌】広島藩では、この作業（地概）の結果、じならし高が検地帳の村高よりも足りなかった場合に、不足分を各農民に割り付けることを「かづき・かつぎ」とよび「かづきまい闌」という字を造って当てていた（地域文字）。「一門」の中に各家屋があるという会意文字であろう。（笹原宏之「日本の漢字」）

【被く】かずく。かづく。（『日本国語大辞典』）

「潜（かづ）く」と同源で、頭から水をかぶる意が原義。転じて、ものを自身の上にのせかぶる意。①頭にのせる。頭にかぶる。②損失・責任などを引き受ける。しよいこむ。

【冠】（『漢字源』）

〔名〕かんむり。頭にかぶるものの総称。

「冠」は「頭にかぶる」ものですから、「冠」＝「かづきまい闌」と考えていいのではないかと思います。さて、何と読みましょうか。「かづきまい」「かぶりまい」「かんまい」……。

著

「御大名様方之内御大家并長崎御奉行様御通之節ハ馬多分入用ニ候処、兎角出方少く、御用問ニ相成候ニ付、……馬居候村々ハ不残差出せ申度……差寄村々馬数相約不申候てハ著も難付ニ付及御尋申候」（嘉永六年（一八五三））

御大名様方のうち御大家とか長崎御奉行様の御通りのときは、多くの馬が入用なのにとかく集りが悪く、御用に差支える状態である。そこで（割当制を止め）馬がいる村は残らず差し出すようにしたい。差当たり、村々の馬数が分らなければ「著」も付きにくいので、尋ねる。

「十方山 戸河内村枝郷横川ニ有……麓ヨリ頭迄凡壱里、此山平は頭式歩通り雲かかり雪も五月頃迄残居申候、所ニ見渡処ハ石州高津・雲州御崎・石州三瓶山・当御領ニてハ巖島・岩国沖相見得申候、石州沖の道船此山著ニ乗り申由ニ御座候」（文

政二年（二八一九）『千代田町史』

十方山（じゅつぽうざん、一三一八・九^{ほど}）は戸河内村の枝郷横川にある。麓から山頂まで凡^{およ}七里、この山平は上から式歩通りは雲にかかり、雪も五月頃まで残っている。山頂からは、石州高津・雲州御崎・石州三瓶山、当御領では巖島、岩国沖まで見渡せる。石州沖を通る船はこの山を「著」にして航行するという。

「著」という、普通では見馴れない文字が使われています。

【著】めど。（『広辞苑』）

①「めどはぎ」の略。②（めどき（筈）を用いること）から）占い。

「著」は「めど」と読みますので、意味は「目処」です。

【目処】めど。（『日本国語大辞典』）

（「めど（著）」と同源か）目ざすところ。めあて。

目的。目標。標的。（方言）目あて。目的。見当。広島県

古文書では、「目処」の代りに「著」を使います
が、辞書にその説明がないのが不思議です。

返毫覚書

「郡方年貢初、諸運上等取立勘定済候上、追て返毫覚書と唱、御代官所へ御勘定所より夫々員数を合、奥書は、右取立之帖上納手形共受取申候、重て皆済之御印取替へ可申との文言にて、御年寄衆・郡御奉行中・御勘定奉行中、惣連名書判印形共居へ、其郡々御代官殿宛にて参候事」（「芸備郡要集」）
郡方の年貢や諸運上の取立勘定が済むと、「返毫覚書」という文書が御勘定所から御代官所へ渡される。それは年貢・諸運上の額が合計され、その奥書には、「取立帖や上納手形を受け取ったので、かさねて「皆済の御印」と取り替える」という文言で、御年寄衆・郡御奉行中・御勘定奉行中が連名で書判印形を据え、其郡々の代官殿に渡されるのである。

「返毫覚書」という文書名は、「芸備郡要集(理勢志)」だけに見られる、不思議な言葉です。引用したこの個所は、年貢納入に関する事務手続の最終段階の解説のようです。

「諸郡共米納は其都度に藏奉行の切手を取り、銀納は銀奉行の切手を取り、追々代官所へ呈出し、暮に至り米倉払詰の以後に払目録と称する帳簿に右等幾回上納の員数を記載して、村々より決算を為す所なり、代官よりは郡中を統て目録と為し之を勘定所へ送致す、之を皆済目録と号せり、前記の米倉及銀庫より支出せし幾回の證券(米券銀券なり)は、町村より呈出せしを代官所に収集し置き、来春に至り米倉又は銀庫へ提出して一郡一通の證券と為さしむ、之を切手仕替と称せり、此一通の證券は代官より勘定所へ送付し、公租上納の已に結了せしを報告する所なり」(『芸藩志拾遺』)

村は、数回にわたって年貢米を納入します。その度に仮領収書(「切手」)が発行されます。全て納入すると「払目録」を作成して代官所に提出します。

代官所は「皆済目録」にまとめて、勘定所に送ります。仮領収書(「切手」)も、村から代官所へ提出、代官所は「切手仕替」(一通にまとめた物)をして、これも勘定所に送ります。

残念ながら『芸藩志拾遺』の解説はここまでで終了ですが、「芸備郡要集」によると、その後、勘定所が「返毫覚書」を代官所に送付するようです。その内容は「皆済之御印」ですから、「確かに領収しました」という領収の確認書に違いありません。

「返毫」を調べても分りませんが、「年貢の領収書」を意味する言葉なら、それに近いものがあります。

【返抄】へんしょう。(『広辞苑』)

- ①古代・中世、官府から命令を受けた下僚が命令を奉行し終った時、その完了を報告する文書。
- ②平安時代、金銭・年貢などの領収書。後には請取状・所納状ともいい、「請」「納」などと首書する。
- ③転じて、保証書。

「返抄」が、どうした訳か「返毫」に変わったのではないかと考えています。

地他

「当町新開上荷造以上之船繫居候節は、地他二不限都て三ツ引御印幟建居可申筈二候処、其義流合建居候船不相見候二付」（文化六年（一八〇九）『広島県史』）

当（広島）町新開で上荷造（本船と陸揚地の間を往復して荷物を運ぶ二、三〇石積の小船）以上の船を繫ぐときは、「地他」にかぎらず全て三ツ引の御印幟を建てることになっているが、いい加減に考えて、建っている船を見かけないので、

「三ツ引御印幟」とは広島藩の旗印で、「三」の字をデザインしたものと思われまゝ。広島市の市章は、この「三ツ引御印」に手を加えて、水都広島川の流れのようにカーブをつけています。（図は広島市市章）。



「郡中板材木類、地他売捌御用聞共之義ハ從來申付置候処、今般県治御改革殖

産之道広ク被相行、都て山林荷物直売事差許候二付」（明治四年（一八七二）『続波多野家文書』）

郡中板材木類を「地他」へ売る御用聞商人については、今までは規則もあつたが、今般県政御改革、殖産のため、すべて山林荷物（林産物）の直売が許可されることになった。

広島県庁の出したこの指示は、「板材木他所捌・地所捌御用聞共」宛です。ここにも「地他」が使っておりまゝ。

その内容から、「地他」は「自他」のことだと分かります。宛字とも考えられますが、「地産地消」の用例からすると、このような使い方があるのかも知れません。

【地】（『広辞苑』）

（イ）その土地。その地方。

飛行

「此度郵便御取設、当月五日ヨリ日々一度宛、従東京長崎迄飛脚御差立ニ付、当県内往還筋駅々ニおゐて郵便御用取扱所被差置并脚夫も人員相定候、……駅々より差立候脚夫、自然途中ニおゐて病氣ニ付、飛行出来難き趣ヲ以行囊隣駅取扱所へ郵送方相頼候義も有之節ハ、直ニ自分之用事ヲ相止メ一時五里行之早サヲ以送り方可取計候事」（明治四年（一八七二）「続波多野家文書」）

この度、郵便制度を開設し、当月（二月）五日から毎日一度ずつ東京から長崎まで飛脚を送るため、県内の主要道の駅々に郵便御用取扱所を置き、脚夫も採用した。……駅から送り出した配達人が、もし途中で病氣になって、「飛行」できないので郵袋を隣駅の取扱所へ送ってくれるよう頼まれたら、すぐに自分の用事を止め、一時に五里（一九・六三五km）の速さで送りなさい。

この文書は、「いびき太郎のホームページ」(<http://www9.ocn.ne.jp/~ibiki/index.html>)からお許しを得て引用しました。

面白いのは「飛行」という言葉で、「いびき太郎」さんは次のように解説をしています。

「飛行…空を飛んでゆく……わけはないので、走って行くこと。京都弁では「走る」ことを「とぶ」というので、「走る」が正解でしょう。学生時代、京都生まれの友達に「とべ！」と声をかけられ意味が分からなかったことが有ります。因みに、広島弁では「飛べ！」は「駆けれ！」。

この「飛行」速度、「一時五里行」の一時は「いつとき」で、今の二時間に当るはずです。（なぜなら、一日二四時間の定時法を採用したのは、明治六年（一八七三）の太陽暦の採用と同時に。すると、時速約一〇kmになります、それにしても相当のスピードです。

【郵便制度】（『岩波日本史辞典』）

信書、その他の物件を伝達する制度。一八四〇年に英国で確立した郵便制度を、日本政府は前島密の建議に基づいて導入、七一年に東京・大阪間で発足した。駅通司（のち駅通寮・駅通局）が管掌。

この文書の日付は明治四年（一八七二）十二月、生れたばかりの郵便制度からは、強烈な「お上意識」が臭ってきます。この十月から郵政民営化になりました。今度は「儲け第一主義」が心配です。

イ

「イ」という字があります。今はあまり使いませんが、古文書ではよく見かけます。「たたずむ」と読みます。その意味を尋ねると、「杜子春のように、所在なげにその場にしばらく立ち止まっていること」と答える人がいます。「そうではなく、しゃがみ込んで、じっとその場所にいること」という人もいます。言葉のイメージが人によりズレがあるのが面白いところです。

【佇む・イむ】たたずむ。（『広辞苑』）

- ①しばらくその場に立っている。立ちどまる。
- ②さまよう。ぶらつく。徘徊する。

「入湯之儀相互に隙取不申入代り入治可仕事、付り、湯入口ニおゐて無用ニイミ申間敷事」（寛延二年（一七四九）『湯来町史』）

湯泉に入るときはサツサと入れ替って入治すること。湯の入口で訳もなく「イ^{たなず}」んではいけない。

これは広島藩が和田村（湯の山）温泉の入湯者に示した心得書の一部です。『広辞苑』の説明①②のどちらにも当てはまる感じがです。

「別紙人相書之者共、於郡方御領分追放者ニ候条、此以後立帰候てもイセ申間敷候、若於町方住居仕せ候得は、家主は勿論、其町役人共迄も急度可申付候」（天明二年（一七八二）「堀川町覚書」）

別紙人相書の者共は郡方で御領分追放になった者であるので、この後立ち帰っても「イセ」てはいけない。もし町方に住まわせたなら、家主は勿論、町役人も厳重に処罰する。

この場合は、「徘徊する」に当てはまります。「住む」まではいえるかも知れませんが。

「サンカト唱無宿非人共近年所々数多罷在、喰事用鍋釜等其外合羽桐油之類渠等不相当之品所持、何所ニても竹木取合小屋掛いたし、桐油等ヲ以雨雪を防候故、無差間所々心易致徘徊、……以来灰屋山野等ニイせ不申」（安政二年（一八五五）『千代田町史』）

サンカという無宿非人共が近年所々に多くいて、炊事用鍋釜や合羽桐油など、彼らには不似合いな品を所持し、どこでも竹木で小屋掛をし、桐油紙で雨雪を防ぐので、差支えのない様な所を気軽に徘徊し、……以来は灰屋・山野でも「イせ」てはいけない。

「当春百姓共騒動之義、其砌ハ……立騒候得ハ、押て難鎮メ候ニ附、出合候諸役人も先ツなだめ置候所、弥以法外成ル仕形ヲ尽し、然れ共素より家屋敷田畠妻子等ヲ捨、何方ヘイ可申様無之候故、終ニハおのれニ鎮り候」（享保三年（一七一八）『加計町史』）

当春の一揆のとき、百姓共がおおいに騒ぎ立て、

無理矢理に鎮圧することも難しく、出勤した役人も先ずなだめたので、ますます法外の仕方をしたが、家屋敷田畠妻子等を捨てどこへ「イ」むということもできないので、終には勝手に鎮まった。

この場合は、「徘徊」を通り越して「（秘かに）住む」に当るのではないかと思います。

差許

郡中社倉頭取

年寄

社倉支配役

庄屋

社倉十人組頭取

組頭

右役義之もの共一同差許候条、此旨人別へ相達、且役用諸書類等ハ其儘預り置、追て役員相定候迄ハ当分諸用受引候様可申聞候事

但、取立役長百姓ともも一同差免し候事

壬申正月 広島県庁

世羅郡割庄屋共」（明治

五年（一八七二）「続波多野家文書」

郡中社倉頭取・年寄・社倉支配役・庄屋・社倉
十人組頭取・組頭、以上の役職に就いている者
は全て「差許」すので、各人へ伝えなさい。関
係書類は当分自分で保管し、後ほど役員が決る
まで諸用を引受けるよう指示しなさい。取立役
や長百姓も同様である。

旧藩時代の郡や村役人の解職の通告書です。「解
職」とズバリと書かないで、「差許」「差免」とボカ
して表現しています。

【差し許す】さしゆるす。（『広辞苑』）

「許す」をおもおもしろいという語。

「許す」とは、その前に願いがあつて、それを「許
す」ことです。

「其村先医師文郁悻泰次儀、惣髪二致元章と改名、
寺家村医師野坂三益弟子二相成、医術修行仕度段

願出聞届差免候条……」（天保四年（一八三三）「鶴
亭日記」）

その村（小松原村）の先医師文
郁の悻泰次が、惣髪（下図）。

月代を剃らず、髪を全体に伸ば
し、頭頂で束ねたり後ろへなで
つけて垂らしたもので、医者な
どの髪型にして元章と改名
し、寺家村医師野坂三益の



弟子になり、医術を修行したいとの願いを聞き
届け差し免す。

「歎二付造賀村庄屋差免、御褒美被下 割庄屋格造
賀村庄屋清兵衛」（文政十三年（一八三〇）「鶴亭日記」）
庄屋辞職の申し出があつたので、褒美をおくり、
これを差し免す。

「差許」も、長く使っている間に「免職」にまで
変質しています。

混乱期とはいえ、準備不足のため、解職後も当分
は書類を各自で保管、仕事も続けなさい、とは……。

出来

「留守中事立候儀出来候は、早速江戸へ可申越候、其内差向候事ニ候は、但馬守殿へも申上、家老共聞届、可致差図事」（安永五年（一七七六）「堀川町覚書」）

留守中に重要な事柄が「出来」たときは、早速江戸へ連絡しなさい。急を要することなら但馬守殿（前藩主、宗恒）へも申し上げ、家老共も聞いて差図をしなさい。

これは、広島藩主、浅野重晟が参勤交代で江戸に出発する際に出した「留守中法度」の一部です。

「事立候儀出来候は」の「出来」を、最初は「でき」と読んでいましたが、これは「しゅつたい」と読みますと教わりました。

【出来】しゅつたらい。（『広辞苑』）

- （シュツタイとも）①現れること。出て来ること。
②事件が起ること。③物事のでき上がること。

成就。

【出来】しゅつたらい。（『広辞苑』）

（シュツライの転）①事件の起ること。②物事のでき上がること。成就。

なるほど、重大事件が起ることですから、「事立ち候儀、しゅつたい候はば」と読むのが、重々しくて良さそうで、そう読むことにしました。ところが、

「米一升ヲ飯ニタキ一升五合飯ニスル事 先ツ米ヲ炊桶ニ入レ、水ヲイレテ惟一遍マゼテ、直ニシタミヘ打上ゲ、甑ニテ蒸シ、米一升ニ水三升イレテ再ビ飯ニタク、少ク柔ナレドモヨク出来ル」（天保八年（一八三七）「鶴亭日記」）

米一升を飯に炊いて一升五合飯にする方法。先ず米を炊桶に入れ、水を入れて一回だけ混ぜ、すぐにシタミ（底は方形、上は円い大形の笊）へ打ち上げ、甑で蒸し、米一升到水三升を入れて再び飯に炊く。少し柔らかいがよく「出来ル」。

天保の飢饉に際し、色々と工夫をしています。ここでは「出来ル」と書いてあります。「しゅつたらい」

する」とは読めませんし、意味も違います。

「近來牛馬直段別て引上候ニ付、小百姓共ハ牛も得不申、柴草踏肥遣ひ候業不相叶ニ付、自然と諸作出来劣ニ相成候様相見候」(天保十年(一八三九)「鶴亭日記」)

近頃、牛馬の値段が高くなり、小百姓共は牛も手に入れることができないので、柴草の踏肥を使うこともできず、自然と諸作が「出来劣」になるように思える。

「出来劣」は「できーおとり」でしょう。

【出来る】で・きる。(『広辞苑』)

- ①出てくる。勅規桃源抄「竺法蘭のこちへ・きらるるに逢て」。滑、旧観帖「江戸ははじめてでござへますかへ。…兄児(せな)ア一度・きたこともおざるとよ」②形をとって現れる。(イ)うまれる。浄、歌念仏「あの弟がー・きるまでは」(ロ)発生する。おこる。日葡「クワジ(火事)ガヲコッタ、また、デキタ」(ハ)作られる。生産される。(ニ)男女がひそかに結ばれる。③まとまりがついて仕上がる。(イ)完成する。

(ロ)物事がうまく行く。伎、吾嬬鑑「平馬感心の思入れにて横手を打つて、ー・きた」(ハ)苦勞をして人物が練れる。④(それについての)能力・才能がある。⑤可能だ。また、…する能力または権利がある。

昔の文書でも、「あの弟ができるまでは」と「できる」を使っていますので、「しゅつたい」とばかり読むとは限らないことが分かります。

どちらで読むのがいいのか、一応の検討は必要ですが、「出来る」の意味の中に「しゅつたい」のそれが全て含まれているので、「できる」と読んでもそれほど不都合ではないのでは……、もともと、生れは同じ言葉でしょうから(適当に)読めば……とと思っています。

多端

「都て自他御家中旅行之節、被相雇候郡中町新開上
下稼之者共、近來無何と風儀不宜儀も有之、往還

筋駅所抔ニ於て兎角權威を振舞、繼人足之者少シ
越度有之候得共多端ニ申立、或ハ及手荒賃錢も不
遣途中より追返シ無賃ニて荷物致せ候者も有之趣
相聞、甚以不埒之儀ニ付、」(文政十三年(一八三〇)

「鶴亭日記」)

郡中や町新開の者で、自藩や他藩の武士の旅行
の際に雇われて稼ぐ者がいるが、この連中、近
頃何となく風儀が悪いようで、往還筋駅所でと
かく威張り散らし、繼人足の者に少しでも越度
があれば「多端」に言い立て、手荒に扱い賃錢
も遣らずに途中より追返し、無賃で荷物を運ば
せる者もあると聞くが、甚だ不埒なことである。

【多端】(『広辞苑』)

①複雑で多岐にわたっていること。②仕事が多
いこと。用向きの多いこと。忙しいこと。多忙。

「多端ニ申立」の意味は「大袈裟に申し立て」だ
とすると、辞書の説明と少し違う気がします。

「食物を始め諸品々に至る迄、町中沽物^{うりもの}多端ありて、
中以下之商人は余程金銀を殖し、日雇中背類^{なかせ}は賃

儲多く、近年にも無之融通之由承る」(『新修広島
市史』)

食物を始めとして諸品々にいたるまで、町中の
商品が「多端」で、中以下の商人は余程金銀を
増やし、日雇中背の類は賃儲けが多く、近年に
ない景気であると聞く。

これは、元治元年(一八六四)の第一回長州征伐の
戦争景気で潤った広島町の様子です。「沽物多端」
とは「商売繁盛」のことだろうと思います。今は「多
端」をこのように使うことはまずないので、「才
ヤ？」と思うのでしょうか。

可為反古候

「右約束変し候ハ、馬御指留可有之候、其時分此方
より申分有之間敷候、若此儀ニ付中山村衆異儀被
申候ハ、此証文可為反古候、為後日証文如件」
(享保元年(一七一六)『千代田町史』)

右の約束に違ふようなら、馬の通行を差止めら

れても、我々は異儀の申立てはしません。もし、中山村の衆が異儀を申されるなら、この証文は「可為反古候」、後日のため証文は以上のとおりです。

この文書は、石州川本村の広島通し馬に関して、川本村が芸州中山村宛に出した証文の一部です。

【反故・反古】 ほぐ。（『広辞苑』）

①書画などを書き損じた不用の紙。ほぐ。ほうご。②転じて、役に立たない物事。

【反故にする】（『広辞苑』）

②約束・契約などをなかったことにする。破棄する。

「可為反古候（反古たるべく候）」は「この証文は無効とする」の意味で、証文の末尾で見る文言です。

「反古」といえば、「転じて、役に立たない物事」と説明してありますが、トンでもない。和紙の反古は襖の下張などで再利用されます。張子の材料として流出していた貴重な古文書を救い出した話も聞きました。

相布令

「別紙之通被仰出候条、郡中村々へ不洩様相触可申者也」（明治四年（一八七二）『広島県史』）

別紙の通り仰せ出されたので、郡中村々へ洩さぬよう「相触」れなさい。

「別紙相布令候御趣意篤と相心得、歎願之者ハ夫々御世話可被下候事」（明治三年（一八七〇）『広島県史』）

別紙で「相布令」ている御趣意を充分心得て、歎願すればそれぞれお世話くださる筈である。

【触れ】 ふれ。（『広辞苑』）

①広く人々に知らせること。②政府・官公署から告示すること。また、その文書。「布令」は当て字。

【布令】 ふれい。（『広辞苑』）

官署が命令を布告すること。また、その命令。

「触」の宛字として「布令」を使うのは、なかなか良くできていると思います。

『広島県史』近世資料編4で調べると、「相触」と書留めてあるのは明治四年（一八七二）まで、「相布令」が使われはじめるのは明治三年（一八七〇）です。

こたなし

「一歳五拾八 同郡同村百性保兵衛

せいひきく、色黒、中肉、中鬢、目耳口鼻常躰
着物、浅黄袷上二洪こたなし、帯布浅黄」（天明
四年（二七八四）『堀川町覚書』）

これは「御領分追放者」の人相書です。どのような理由で御領分追放になったのか分りませんが、年齢、身体的特徴、着衣が記入してあります。立帰ったとき通報させるための人相書です。これだけの情報ではとても人相の判別は難しいだろうとは思いますが……。

着物は、浅黄色の袷の上に「洪こたなし」を着し、

浅黄色木綿の帯を絞めています。この記述の中で「洪こたなし」には頭を抱えてしまっています。

「洪」は染色の様子と見当が付きませんが、「こたなし」とは聞いたことはありません。

「単衣をこたなしといふ……下臈のきるつとりといふものをハこはたといふ（以上袋草紙文）、こはたハ木皮なり、……こたなしハこはたなるへし」（天明初年、香川南浜「秋長夜話」）

広島では単衣のことを「こたなし」という。下賤の者が着る「綴り」を「木皮」というが、「こたなし」はこの言葉に由来すると思われる。

【こだなし】（『日本国語大辞典』）

「方言」①筒袖の短い仕事着。鹿児島県肝属郡。

②布織りの筒袖の仕事着。広島県山県郡中野

「こたなし」は「こだなし」と読むようです。二つの説明で「筒袖の仕事着」が共通しています。仕事着は一般に短い物ですし、布織りは当然のことですから、結局、同じ説明です。「秋長夜話」の「単衣」説を付け加えると、「こだなし」とは「筒袖の

単衣仕事着」だろうと思います。

「秋長夜話」の「木皮」||「こだなし」説はコジツケのように思えます。

【手無・袖無】たなし。（『広辞苑』）

筒袖の仕事着。麻などで作った襦袢のようなもの。

『広辞苑』の「手無」^{たなし} || 「こだなし」説の方が説得力があります。

鼠土

「時勢の変遷に従ひ、弾薬多額の製造を要するを以て……新に佐伯郡寺田村に水車を設け、大に之か製造の設計を定め、本日より之を公布す、又其原料なる鼠土の如きは、城内藩主書院の床下を始めとし、下は各郡村農家床下に至る迄遍く之を掘取せしむる事と為し、……佐伯郡寺田村水車御場所ニおゐて砲薬専ら製作被仰付候付てハ、御城中を

始め諸御屋敷諸役所並家中屋敷御多門御貸家寺社町新開郡中共、床之下鼠土御人出見分之上撰取之筈ニ付、差問無之様可被致候事」（慶応四年（一八六八）『芸藩志』）

時勢の変遷にしたがい弾薬を多量に製造する必要があり、新たに佐伯郡寺田村に水車を設けて弾薬製造の設計を定め本日より公布する。その原料である「鼠土」は城内藩主書院の床下を始めとし、下は各郡村農家床下にいたるまで掘り取ることで、……佐伯郡寺田村水車御場所では砲薬を専ら製作するので、御城中を始め諸御屋敷、諸役所並びに家中屋敷、御多門、御貸家、寺社、町新開郡中共、床の下「鼠土」の見分のため係員を行かせて選り取り不都合がないようにしなさい。

「鼠土」とは弾薬の原料であり、城内の建物から郡村農家に至るまでその床下から掘り取り、水車場で加工するもののようにです。

「焰硝土 硝石のこと。古い人家の床下の土（白い霜柱状のものができた土）を掘り取り乾燥させ、

焼いてパチパチとはねるような土を焰硝土又は鼠土といった」(横山雅昭『相田地区辺の郷土史メモ』)

「汲み取り便所の壁から床下の土中に染み出した窒素に富む糞尿などから生じたアンモニアに亜硝酸細菌と硝酸細菌が作用するため、古い民家の床下の土壌には硝酸カリウムが蓄積している。これを原料とすることで硝石を生産した。床下土を用いた硝石の製造は江戸時代を通じて主流の方法であった。……明治時代に入ると、南米のチリから莫大な埋蔵量を有した天然の硝酸ナトリウムであるチリ硝石の輸入を始める。」(Wikipedia「火薬」より引用)

土兵

「弁当持参ヲ迷惑符申候、是ハ平常家内飢食仕居候得は、弁当用別釜ニテ炊出候故、其失費ニ困り候付、役人共一同弁当麦飯ニテ相調候様可申談奉存

候事」(慶応三年(一八六七)『広島県史』)

(農兵育成のため「武芸稽古」に参加させるとき、百姓は)弁当持参を迷惑がります。これは平素は家内で粗食をしていますので、弁当となると「別釜」で炊き出し、その失費に困るからです。そこで役人も全員麦飯の弁当にするようにしてください。

嫌がる百姓を農兵に仕立てようとした割庄屋は、弁当の中身まで気を配っています。

「別釜」とは、普段の食事のための釜とは別に、弁当用に米だけを炊く小さい釜のことです。この言葉を見て、小学生の頃の遠足のことを懐かしく思い出しました。

「前文之通り練兵仕らせ候覚悟ニ御座候得共、……御軍兵御手当ニ被遊御争戦之場へ御繰出被為在候様之御義も若可有之哉と一統危踏候気方御座候二付、右ハ全其地之固メ銘々身前之防と申義御聞込被為置、決て御軍兵へ御加被為遊候様之義は無之候間、其義安心稽古相励候様二との御義、乍恐御

紙面ヲ以被為仰付被遣候ハ、難有可奉存候」(慶応四年(一八六八)『広島県史』)

以上の通り(百姓に)練兵させる積りですが、御軍兵の手当として戦場へ出されることもあるのでは……と「危踏」む気配もありますので、練兵は村の警備、自分たちの防ぎのためと聞いているので、決して軍隊に加えることはないので安心して稽古に励むよう御紙面で指示をしてください。

「危踏」は勿論「危ぶむ」です。

【危ぶむ】あやぶむ。(『広辞苑』)

①あやういと思う。気がかりに思う。懸念する。

②疑う。

「危踏」の文字遣いは、朽ちかけた橋にソツと足をかけ「渡っても大丈夫かな？」とつぶやく、そんな感じがします。

このような騒動の末、結局、慶応四年(一八六八)に「各郡土兵追々相増、郡中忽農事妨候様可立至、速ニ差止候」(各郡で「土兵」が増えているが、農作業

の妨げになるので速やかに中止)との指示が出ています。

【土兵】どへい。(『広辞苑』)

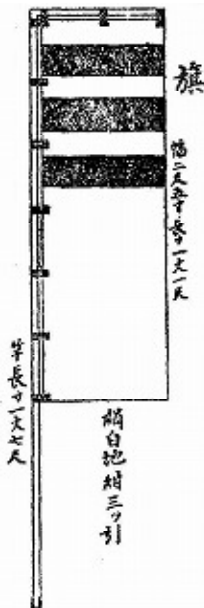
土着の兵士。その土地で徴集した兵。

四半幟

「四半幟三四本用意之事 但、地合木綿黒ニて三ツ引何組何村と相記候事」(慶応二年(一八六六)『廿日市町史』)

四半幟を三、四本用意しなさい。幟は木綿で黒で三ツ引を描き、何組何村と記入すること。

これは、慶応二年(一八六六)に出された、村々異



変の節の心得頭書の一部です。村で何か異変があると、村役人の指示により村名を記した「四半幟」のもとに集る手筈になっていたのでしょうか。

【四半・幟半】しはん。（『日本国語大辞典』）

② 武具の指物の一種。縦三、横二の割合で、四方（正方形）に四方の半分を加えた大きさであることからいう。また一説に、四方の半分のことで、縦二、横一の割合のものともいう。四半物。

『芸藩輯要』には「芸州藩旗差物」として図（右図）が載せてあります。絹の白地に紺色の三ツ引があり、「幅二尺五寸長サ一丈一尺」のサイズ、横縦比は五対二ですから、細長い幟です。大塩の乱で使われた「救民と認め候四半幟」の横縦比は、図から計算すると二対五になりました。

このように色々な横縦比がありますが、「四半」は、四方（正方形）の半截（二対四）から名付けられたと考えるのが自然だともいえます。実際の幟の比率がそれから多少ずれても、やはり「四半幟」と言ったのでしょ

五七年

「奴可郡粟田村に世ためしの酒とて酒壺升、壺に入、覆をして能封して同所妙現の社殿の下に埋置、冬十月祭の日、村役人ども沐浴斎戒して壺の覆を開いて其中の酒の減少方に依て翌年の豊凶を考へ…翌亥の年の吉凶をはかり見しに八合五勺ほど有しと、しかれば今年は必ずよき年柄なるべしといひしに、果して其とし五七年にはこれなき豊作なりとぞ」（嘉永七年（一八五四）『碌々雑話』）

奴可郡粟田村には世試の酒といつて、酒壺升を壺に入れ蓋をして密封をし、同所妙現の社殿の下に埋めて置く。冬十月の祭日に、村役人どもは沐浴斎戒して壺の蓋を開け、酒の減り方で翌年の豊凶を占う。…翌亥の年の吉凶を計り見たら八合五勺ほど残っていたので、「次は必ず豊作だろう」と予想すると、果してその年は「五七年」にはない豊作であったという。

「五七年」という言葉が使っています。勿論、位取数字ではないので「五十七年」ではありません。

【五七日】ごしちにち。（『広辞苑』）

人の死後、三十五日目。追善の仏事を営む。

「五七日」や「七七日」（なななぬか）は掛算の答で数を表していますが、「五七年」を「三五年」と考えるのも無理があります。

「其とし五七年にはこれなき豊作なり」は文意からすると、その年は「近年にない」豊作であったと理解したいところです。

「親兄より小田地を引分遣し、其分計にて別宅仕候者多は相続難成、五七年之内ニは分ヶ地をも売払浮過等ニ相成申候」（延享五年（一七四八）『加計町史資料』）

親や兄より小さな田地を分けてもらい、それだけで分家する者の多くは続かないで、「五七年」の内には分けてもらった土地も売り払い、浮過などになってしまう。

「村方荒神社廻りく〳〵に五年或七年ふりに祭等仕、氏子社人を頼、神米等上げ、五七年ふりの事にて御座候得は賑々布仕、銘々応分限に客来仕、饗応し申候」（『備後国深津郡本庄村風俗問状答』）

村の荒神社は廻りもちで、五年から七年振りに祭をする。氏子は神主を頼み、神米等を供え、「五七年」振りのことなので賑やかに祭をし、銘々分限にあわせて客を呼びもてなす。

今なら「五〴〵六年」と言うところですが、連続数より「五七年」の方に味があるようです。与謝蕪村の「春風馬堤曲」の一節

○たんぼゝの花咲り三リ五リ五リは黄に
を思い出します。

殿付と様付

普通、文書の宛先の人名などに「殿」や「様」を付けますが、どちらが丁寧な言い方でしょうか。

【殿】（『広辞苑』）

高貴な人を指し、敬つていう語。

【様】（『広辞苑』）

氏名・官名・居所などの下に添える敬称。

この説明では、比べられません。

「常備兵之者へ已後諸書付并御用等申遣し候節は、殿付にて可然哉ニ存候、尤御用立並已上之面々へは様付にて指出候事ニ存候」（明治元年（一八六八）『広島県史』）

常備兵の者に対し、以後諸書付や御用等を言うときは、「殿付」が適当と思います。もつとも、役付きの面々には「様付」で指し出しなさい。

【様】（『近世上方語辞典』）

人名・官職名・人を表わす語などの下につけて、敬意を表わす。「殿」より敬意が重い。貞享三年・好色一代女二「すゑくも腰をかぎめず、様付けし人も殿になり」貞享四年・武道伝来記一ノ二「様つけぬばかり主あしらひになりぬ」享保十五年・世間手代気質四ノ三「今迄殿

づけにした人に様を付けて小腰をかぎめ」

「殿と称すること……今は下賤をかへつてどのと称し、貴人を様と云ふに似たり」（喜田川守貞『近世風俗志』）

殿と称すること、……今では賤しい者に「殿」を付け、貴人には「様」を付けていうのに似ている。

その由来はともあれ、江戸時代には「様」の方が格が上のです。

問題はどこで「様」と「殿」とを分けるかです。役所から「殿付にて可然」との指示があれば楽ですが、身分制社会ではともすると、「近來其次第相分兼、格外ニ慇勤之族も相見へ」（近頃は「様」と「殿」の区別が分りかねて、失礼を恐れて、丁寧な言い方をする連中もあり……）ということになるのでしょう。

頼母

「八月節句之義ハ、身持之者は頼母飴り、作物ヲ備へ祭申候」(安芸郡矢野村「国郡志下調査出帳」)

八月の節句には、身持の者は頼母を飾り、作物を備えて祭ります。

【田の実】たのみ。(『広辞苑』)

①田にみのった稲の実。②陰暦八月朔日に新穀を贈答して祝った民間行事。田の実すなわち稲のみのりを祝う意から起るといふ。「たのみの祝」「たのむの節」「たのむの日」「たのも節供」などという。

八月の節句は、五節句に入っていないので、今ではあまり知られてないようですが、八朔(陰暦八月一日)の行事です。「頼母飴り」とは何でしょう。

「八朔の日、矢野ではかつて女子のある家では板で舟を作り、紙人形を載せて川に浮かべ、夜は点火して餅を供え川に流した。この時「頼母さん来年ごいせ春ごいせ」と歌った。農村では新穀感謝の日の意味合いが強いので、この日一日休養することになっていた。この日たべる餅を八朔のニガ餅

と称する。」(石井元一郎「矢野の今昔」)

「八朔。田の実りを祈願して、粉人形・紙人形・藁人形を作る村が多い。小船を作り田面船という」

(『広島県史』)

【田面船】^{たのもぶね}(『広島県大百科事典』)

……江戸時代、商港・尾道に出入りしていた北前船を模したもので、木片で屋形舟を造り、御殿桜や松竹梅を描き込んでいた。四個の車もついている。田面は田の実りのなまり。旧暦八月一日の八朔の祭りに誕生を迎える男児の家に贈り、この船を引いて氏神様にお参りする。……」

「むかしたのもといふは、米の粉にて団子を拵へ、半紙のいろ紙にて振袖の着物をこしらへ、帯むすばせ、あみ笠きせて躍子となし、其年の豊かなる事を天に祈り祭るなり、其ゆゑに八月朔日を土百姓はたのみの節句といひて祝ふなり、たのみは田の実に頼を兼ていふなるべし、たのもといふは田の実を田面にいひなしたるなり」(『碌々雑話』)昔、頼母というのは、米の粉で団子を拵らへ、

半紙の色紙で振袖の着物を拵え、帯を結び編笠を着せて躍子を作り、その年が豊作になるよう祈る祭である。八月朔日に百姓は「たのみ」の節句といって祝う。「たのみ」は「田の実」に「頼」にかけていうのだろう。「たのも」は「田の実」を「田面」に言換えたものである。

「八朔、女子をもつ家たのものを饅るといひて竹に紙をはり家の形をつくり、又紙をいろとりて男女の人形をとゝのへ、おほくハ芝居者の姿に似せ、其前へ稲の初穂木の実などをそなへて祭る、昔々ハたゝ団子もて人形をつくり板のうへなとへならへて祭れるのミなりしを、ちかき頃より上件の如くなれり、いつれにまれ後の雛の転りたるならんか」(『知新集』)

八朔に、女子のいる家では「たのものを饅る」といって竹に紙を張り家の形をつくり、また色紙で男女の人形を芝居者の姿に似せて作り、それに稲の初穂木の実などを備えて祭る。昔はただ団子で人形を作り板の上に並べ祭るだけであったが、最近ではこのようになった。いずれにし

ろ、雛祭の習俗が転化したものかもしれない。さて、「頼母を飾る」とは、米の粉団子の人形を作り、田の実りを祈願して、田面船に乗せて飾り、流すことではないかと思っています。

何角

「此度御家中知行御切米等御減石御甘メ被下候処、依之御勝手向御融通被為附候て之義ニは無之、御代替等何角莫太之御物入有之、弥増御逼迫之折柄二候得共」(天保六年(一八三五)「鶴亭日記」)

この度、御家中の知行・御切米等の御減石借知(藩によるピンハネ)を緩和されるのは、財政が好転したからではなく、殿様の御代替など「何角」膨大な出費があり、ますます逼迫した状況であるが、

「何角被取紛、御無沙汰被罷過候」(『近世書状大鑑』)

「何角(なにかと)」忙しさに取り紛れてしまい、お便りもできず過ぎてしまいました。

「何角」という、『広辞苑』などの辞書には載せてない言葉があります。『日本史用語辞典』で見つけることができましたが、文意に合いません。

【何廉】なにかど。（『日本史用語辞典』）

何角とも記す。どのような意。

「何角」を『近世書状大鑑』の如く「なにかと」と読めば、辞書にある言葉になります。

【何彼と】なにかと。（『広辞苑』）

あれこれと。なにやかやと。いろいろと。源明石「うちやすらひーの給ふにも」。「御迷惑をかけます」

「何角莫太之御物入有之」は「あれこれと膨大な出費があり」と理解できます。

「何角被取紛、御無沙汰被罷過候」は「なにやかやと忙しさに取り紛れてしまい、お便りもできず過ぎてしまいました」です。

「何角」は「何彼と」の宛字でした。

広太

「郡中取続之為、一ヶ年限り一郡々々ニて御免忝ツ成御下ヶ被遣、諸郡質素第一ニ入役減方之義稠敷穿鑿ニて、取続方之儀第一に御示有之候所、広太之郡中故、何こそ取続方之筋ニ相成候趣見へ渡り不申候得共、下方為に相成候義は相違無之と奉恐察候事也」（『芸備郡要集』）

農村が成立って行けるようにと、一ヶ年限り各郡で御免（年貢率）を忝ツ成御下げになり、質素を第一として経費を減らすよう処置されました。しかし、「広太」の郡のことですから、何こそ取続方の手掛りになる様子は見受けられませんが、下方の為になっているに相違ありません。

「広太之郡中」とは「広い農村部」を意味するのは明らかですが、「広太」をどう読むかが問題です。

「勿論広大之郡中不容易儀とハ奉存候得共」（嘉永

二年（一八四九）『海田町史』

勿論、広大の郡中ですから容易なことではない
と思います……

「極く山家のものは葛と蕨を掘りて錢財を得る事積りては広太成る事也。是は山より金銀を掘出だすにおなじ」（大蔵永常『公益国産考』）

山奥に住む者は葛と蕨を掘って売れば、積つて広太なものとなり、山から金銀を掘出すようなものである。

「広太」に換えて「広大」と書いたり、「くわうだい」のルビをつけているので、「広太」は「広大」に違いありません。

「大切」も「太切成事二候間」になったり、「其村々之儀、前々より太太切御用相勤（その村は以前から極大切な御用を勤め）」になります。「莫大」も「莫太」と書かれます。

「太」と「大」は字の形が似ているので、「大」と書くべきところを「太」と気軽に書いたのでしょう

う。筆で漢字を書き、最後に筆を戻して「点」を打つ文字（例えば「津」、右図）をよく見かけますが、書手は、さぞ、
氣持が良からうと思います。



町新開

「初午二付、三之御丸稲荷社来月八九日両日共朝五時より夕七時迄、町新開近在之男女拝参勝手次第之事」（天保十四年（一八四三）「国前寺御触留帳」）
初午なので、三之御丸稲荷社へ来二月八九日の両日とも、朝五時より夕七時まで、「町新開」や近在の男女の参拝は自由である。

これは三之御丸稲荷社参拝を許す広島町奉行の触です。城下や近在の者がこの日に限り指定された通路で城内を往来できたものと思われれます。「町新開」とは何か、調べました。

広島藩では、領内を地方（農村。郡奉行支配）と町方（広島などの城下町や港町。町奉行などの支配）に分け

て統治しました。広島近郊の新開地は次第に農村から町に変化しますので、郡奉行が支配するか、それとも広島町奉行の管轄かでトラブルが起きます。

「町新開之事……町御奉行中引受ニ候処、宝暦六年、新開方御所務一円郡廻り湯川伝兵衛殿引受ニ被仰付、其当分引渡事何角ニ付段々論談有之、新開方ハ人所務共一円に湯川氏引受ト再ひ被仰付、尤寺社ハ其俣町御奉行衆御引受ニ相成」(「理勢志」)

宝暦六年(一七五六)、広島城下新開方の支配の全てが広島町御奉行から郡廻り(郡奉行の下僚、湯川伝兵衛)に移管された。その当分は引渡しについて色々ともめてたが、再び「新開方は一切郡廻りの引受」との指示が出された。ただし、寺社は従来通り町奉行の引受である。

「町作人共之内新開入作之者、当御年貢皆済日限之儀、無遅滞皆済仕候様、先達て申付有之由、右日限之通速ニ上納致皆済候様、新開方より申来候間、右定之通無滞急度可致上納候」(天明二年(一七八

二)「堀川町覚書」

町在住の百姓で、新開入作の者の年貢納入期限について、遅れずに皆済するよう先ごろ指示があったと聞くが、日限通り速やかに上納皆済するようにと、新開方役所から連絡があったので守りなさい。

これは町奉行から町方の五組への指示です。町に住む百姓が新開にある田畑を耕すとき、年貢納入について新開方と町奉行の両方から触が出されています。もともと、新開方の支配は、文化七年(一八一〇)には再び町奉行の管轄に戻りました。

『知新集』(文政五年(一八二二))によると、広島城下には、町分の五組(中島組・新町組・白神組・中通組・広瀬組)と新開組(国奉寺村・六町目村・竹屋村・段原村・比治村・山崎新開・大黒村・亀島新開・皆実新開・東新開・矢賀村・尾長村・古川村・大須新開・西愛宕町・東愛宕町・大須賀村・明星院村・白島村・広瀬村・空鞆町・左官町・天満町・川田村・観音村・西地方町・船入村・江波新開・水主町新開・吉島新開)があります。すると「町新開」といえば、五組と新開組を合わせ

た所謂〈旧市内〉の地域と思えばよいことになり
ます。

身持之者

「八月節句之義ハ、身持之者は頼母餠り……」か
ら、「頼母餠り」について書きましたが、今度は「身
持之者」を検討します。

「近來郡中へ狂言師・淨溜理語り等之遊び者類徘徊
致し、村中身持之者共方角二寄候てハ足留メ為仕、
近村より見物人抔引受候由相聞候」『吹寄青枯集』
近頃、郡中へ狂言師や淨溜理語りなどの遊び者
が徘徊して、村中の「身持之者」の家に足留め
し、近村よりの見物人を引受けていると聞か
ず……

「身持之者共どぶ酒と唱、手酒相製候哉ニも相聞」

（天保十五年（一八四四）『広島県史』）

「身持之者」ともがどぶ酒といつて、手酒（自家
で醸造した酒）を製造していると聞か……

これらの文書の続きは、「心得違不埒之事二候」
などの文言が続きます。

狂言師などが「遊び者」に分類されているのも驚
きですが、「遊び者」を逗留させたり、自家製のど
ぶろくを造る力のある者は、金持の連中です。

「此度御憐愍ヲ以、諸郡是迄之御貸米銀一円御捨被
下候……相對借り之分ハ決して上より年賦等二被仰
付候儀ニは無之候間、此分不心得違、其儘唯今迄
之通り貸借り之道不危踏、身持之者共随分貧窮之
者共へは心ヲ付遣……」（寛政二年（一七九〇）「踊
場家文書」）

この度、御憐愍を以て諸郡のこれまで御貸米銀
（藩から貸した米銀）を全て御捨（破棄）下さいま
すが、……双方納得づくでの貸借は藩から年賦払
にするような指示は絶対にないので、勘違いせ
ず、今までどおり安心して貸し借りをしなさい。

「身持之者」共は貧窮の者共へ気を配って……

【身持】（『日本国語大辞典』）

①一身を保ち処していくこと。一身の処置。生

計の保持。②平生のふるまいぶり。毎日の行ない。品行。素行。行状。行跡。

「身持之者」は、「誰の援助も受けないで一身を保ち処していく人」から「金持ち」にまで脹らんだ言葉です。

制度

「近年打続作方不宜、去年柄拔群凶作ニ付難渋者多、当麦作熟色付候比より少々宛穂ヲ切取、其外何ニ不寄手ニ掛、作人共制度致候得共、難手届振合ニ付」（天保八年（一八三七）十月「鶴亭日記」）

近年は凶作が打ち続き、去年などは特にひどかったので難渋者が多く、今年の麦作が熟して色付く頃から少しずつ穂を切り取る者があり、そのほか何でも手にかけて盗み取り、作人共が「制度」しても手が届きかねる状態である。

【天保の飢饉】（『広辞苑』）

天保四〜七年に起った全国的な飢饉。米価狂騰

し、餓死する者多く、幕府の救済した者は前後七十余万人に及び、また、一揆・打ちこわしが諸方に発生して幕藩体制の危機が激化した。広島藩でも、「作人共制度致候得共難手届振合」という状態になりました。

【制度】（『広辞苑』）

①制定された法規。国のおきて。②社会的に定められている、しくみやきまり。

これらはいずれも名詞であり、「制度致候得共」と、動きを示す言葉としての説明がありません。そこで「制」と「度」に分けて、

【制する】（『広辞苑』）

②おさえる。とどめる。禁ずる。

【度する】（『広辞苑』）

②道理を言いきかせて納得させる。

これなら意味が通ります。これらを一緒にして、

【制度する】

とどめて止めさせる。

という、辞書の項目が欲しいところです。

「御調郡辺村々へ、所謂踊込ト唱候強盜民家ヲ探し、人心苦悩及所業候段、実ニ不便之事ニ候、就ては上ニおいても厚御制度方有之趣ニ候得共、何敷広大之土地ニて僻境暇取、悉々御手も届兼候より」

(明治元年(一八六八)『廿日市町史』)

御調郡辺の村々へ、いわゆる踊込(ええじゃないか)という強盜が民家を荒し、人心を悩ましていることは実に不憫なことである。藩としても充分な「御制度方」があるとはいえ、何しろ広大の領地で僻境の地へは手が届きかねるので

この文書でも「制度」を「強く制止する」と考えてよさそうです。

野荒

「近年打続作方不宜、去年柄拔群凶作ニ付難渋者多、当麦作熟色付候比より少々宛穂ヲ切取、其外何ニ不寄手ニ掛、作人共制度致候得共、難手届振合ニ

付、追々稲毛熟色ニ相成、右様之仕業致候ては不相濟、一統相歎、因之村々限り道筋空地所へ樹木ヲ建、野荒之者括置杭と記置申度旨、口演書差出、当年柄之儀故、野荒之者捕へ、役人共へ申出候迄括置候義は、手元限り聞届置候条、此旨相心得者也」(天保八年(一八三七)十月「鶴亭日記」)

……段々と稲も熟色になってるので、穂を切るような仕業があるのではと、みんな心配している。そこで村々の道筋の空地へ「野荒之者括置杭(野荒らしの者を縛り付ける杭)」と書いた木を建てたいとの口演書が提出されている。このような年柄なので、野荒の者を捕へ、役人共へ申出るまで括り置くことは私の管内では許す。

これは代官の出した触で、前回「鶴亭日記」の続きです。

【野荒らし】(『広辞苑』)

田畑の作物などを荒らすこと。また、そういう人や獣など。

「野荒の者はこの木に縛り付ける」と書いた木が建てられとは……。威しか、それとも実際に使われたのかは分かりません。翌年、次の指示が出ているので、実際に立てられていたのでしょうか。

「去年柄二付村々共野荒之者多く、右二付棟木建方之義、兼て差免置候処、此度御巡見衆御通行二付往還筋村々其外御見懸り二相成候分は御通行之節は取除ケ置候様」（天保九年（一八三八）「鶴亭日記」）
去年は野荒の者が多く、そのため棟木を建てることを許可しているが、この度、幕府御巡見衆が御通行になるので、往還筋村々などで見える分は、御通行のときは取除けておくよう……。

模形

「時勢二付火薬充分御貯無之てハ不相濟、依て左之者共頭取申付下業之者共差遣其郡村々最寄之内へ場所御構硝石製造被相行、追々御人出も有之、就

てハ製子之者共左之模形之通、鑑札壹枚ツ、相渡、村々入込せ床下之鼠土掃取せ并炊灰買集、尤相對にて相当之代料取引致せ候付差問無之様売渡可申」（元治元年（一八六四）「芸藩志」）

この時勢では、火薬を充分に貯える必要があり、そのため左の者共を頭取にして部下の者を村々に派遣し、最寄の場所へ硝石製造所を構えて製造させ、藩からも係員を出すことにする。そこで作業員には左の「模形」の通り、鑑札を壹枚ずつ渡し、村々に入り込ませて床下の鼠土を掃き取らせたり、竈の灰を買い集めさせる。勿論話合いで相応の代金を払うので、差支えのないように売り渡しなさい。

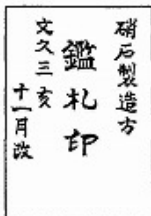
「鼠土」は黒色火薬の原料です。「左之模形之通」として鑑札の図（下図）があります。

「模形」を辞書で引く

と出てきません。「模型」

ならありますが、意味が少し違うようです。文意から考えると（サンプル）

白焰製造鑑札



《例文》に当ります。

【雛形】（『広辞苑』）

①実物をかたどって小さくつくった模型。②物の様式を示す見本。③文書などの書き方の様式を示す書式。

「雛形」の③です。

【模】（『漢字源』）

「名」かた。粘土をおしかぶせて、鑄型をつくるための木の型。また、転じて形を示すひながた。手本。「模型」「模範」

「模形」は「もけい」と読むより、「ひながた」という方がよさそうです。

畳肥

「矢賀村之内猿猴橋町南裏茶屋新七菜園畳肥置候小屋之内縊死罷在候男」（天明四年（一七八四）「堀川町覚書」）

矢賀村の内、猿猴橋町南裏、茶屋新七の菜園の「畳肥」を置いている小屋の内で縊死していた男（の人相書）

縊死のことはともかく、「畳肥」という見馴れない言葉があるので、調べました。

「奥村ニてハ、田方へハ柴木草トいふを第一ニ入、畑へも焼草とて、松枝其外木草焼候て灰ニし、又ハ畳肥とて藁草ニても土をかけ、畳重置くさらし、肥ニ用る事なり」（「理勢志」）

山間部の村では肥料として、田圃へは主に柴木や草（荊敷）を入れる。畑へは焼草と言って、松枝など木草を焼いて灰にしたものを入れたり、又は「畳肥」と言って藁草などに土をかけ、畳み重ねて置き、腐らせたものを肥料とする。

交互に草などに土を重ねて発酵させる、「畳み重ね置く」ので「畳肥」と言うようです。

【畳む】（『広辞苑』）

②積み重ねる。折り重ねる。

この説明は「堆肥」の説明です。「堆」とは「積

み重ねる」ことです。

【堆肥】（『広辞苑』）

わら・ごみ・落葉・排泄物などを積み重ね、自然に発酵・腐熟させて作った肥料。つみごえ。

「疊肥」とは「藁草ニても土をかけ……」と説明しなくても、「堆肥」と言えば充分でしょう。

この男の所持品は、「たはこ入させる式分札壹枚銭式もん。死躰の脇ニ明キ食こり売つ、已上」とあります。空になった「食こり」（弁当行李）が一つ転がっていたと報告しています。

両御玄関

「質素節儉御触通り堅相守、諸事分限ニ応し渡世可致との難有御趣意、末々行届候様ニ力を入常々教諭可有之事ニ候、勿論音信贈答親類内無抛取遣候共随分軽く取斗、他向は相互ニ相断可然儀ニ候得は、自今は両御玄関へ被相勤候御役付之方角へ盆

節季或は暑寒之砌音物等堅相止メ可申儀ニ候」（寛政三年（一七九二）「堀川町覚書」）

儉約令は堅く相守り、何事も分限に応じて渡世するようにとの有難い御趣意を、末々の者まで徹底するように日頃から教諭しなさい。勿論、音信贈答は親類内で仕方なく取り遣りするにしても随分軽くし、それ以外は互いに断わるべきである。今後は「両御玄関」へ勤める役付の者への盆節季や暑寒の進物も絶対に止めるべきである。

この文書は町役人に対して町奉行からの指示です。「両御玄関へ被相勤候御役付」という面白い言い回しがありました。

「広島城下の行政組織は、町人町は東から新町、中通、白神、中島、広瀬の五組に分けて、各組に一人ずつ大年寄をおき、各町組の町年寄以下の町役人を統括し、委任された町政の運営に当たった。新開には新開組上、同下に各一人ずつ大割庄屋をおき、配下の庄屋以下の村役人を統括して、町組同様に新開組の行政を行わせた。以上の町大年

寄、新開大割庄屋を統括するのが広島町奉行で、寺社奉行を兼ね、二人が交代で町政（新開を含む）の責任をとった。」（『広島県大百科事典』）

「この月（安政五年（一八五八）二月）東・西町奉行所を御玄関と唱えていたのを御役所の唱えに改む」（『新修広島市史』第五巻年表）

「両御玄関」とは広島市の東・西町奉行所のこと、
「両御玄関へ被相勤候御役付」とは、そこに勤務する役人のことでした。町役人にとつては「町奉行所」
Ⅱ 「御玄関」なのでしょう。

天明四年（一七八四）、堀川町の与頭楠見屋次兵衛が商用で大坂に行くため、五〇日間の「御暇」を乞う願書を提出しています。

「此書附、次兵衛用場並両御玄関へ差上置」

次兵衛は、この願書に堀川町年寄の奥書をもらい、新町組の用場（役場）と「両御玄関」へ提出しました。ここで「両御玄関」とは、町奉行所を意味するのか、それとも東西の町奉行所のことか判然としません。

同じ文書を二通も出すとは考えられませんが、月番の町奉行に出したのではないかと思えます。
追記

「安政五年二月晦日、從來東西両町御奉行所を、民間にては「両御玄関」と唱へ来りしが、自今改めて「両御役所」と称せしめ、東御玄関を「東御役所」、西御玄関を「西御役所」と改唱せしむ」

町宅

「 覚

一 私親は御町内生ニて、徳助と申、小商ひ仕居申候処、四拾八年以前ニ御町内ニて病死仕候、私儀、親一所ニ居申候処、四拾八年已前ニ御小人ニ被召抱、夫より御手廻りニ相成、三拾五年以前ニ御小道具ニ相成、拾七年已前ニ御支配足輕ニ相成、竹屋町ニ借宅仕居申候処、拾年已前ニ牢御屋鋪番ニ被仰付、則御多門へ引越参居申候、然ル処、此度町宅仕度奉存候ニ付、御屋敷御多門明ケ差上申度

段御願申上候処御免被仰付候、就夫御町内天満屋
きち家代万吉儀は、私弟之子にて甥ニ紛無御座ニ
付、当分此者方へ引越参、追て相応之借屋借り請
申度奉存候、依之私由緒如此御座候、以上
未五月八日 御勘定所御支配足輕村上和田
平

堀川町年寄茶屋忠蔵殿（安永四年（二七七五）「堀
川町覚書」）

私の親は、当堀川町生れで徳助と申し、小商い
をしており、四八年前に御町内で病死しました。
私は親と一緒に住んでいましたが、四八年前に
「御小人」に召抱えられ、その後「御手廻り」
になり、三五年前に「御小道具」になり、一七
年前に「御支配足輕」になり、竹屋町に借宅
していました。一〇年前に「牢御屋鋪番」にな
り、その御多門へ引越しました。この度「町
宅」したく思い、御屋敷の御多門を出たいと御
願うとお許しになりました。御町内の天満屋
きちの家代（管理人）をしている万吉は、私の弟
の子（甥）なので、差当たりここに引越し、適当
な借屋を見つけるつもりです。以上が私の由緒

です。

小商人の息子、和田平が御勘定所御支配足輕にな
る経過が詳しく記された珍しい文書です。

「此度町宅仕度奉存候」という文言があります。
「町宅」とは「町にある住宅」と思っていました、
念のため辞書に当たると、次の説明がありました。

【町宅】（『日本国語大辞典』）

町住まい。

切々

「夜前已来風立候所今以不相止危敷候条、火之元別
て念入候様、町中小借屋末々迄申付、役人共切々
見廻り候様可申付候」（天明四年（二七八四）二月「堀
川町覚書」）

昨夜から風が強くなり、今だに止まず「危敷」
様子なので、火の元には特に気を付けるよう、
町中の小借屋末々の者まで指示をし、町役人ど

もは「切々」見廻りをするよう命じなさい。

「風立」といえば、堀辰雄の小説「風立ちぬ」を思い出しますが、ここでは二月、冬の季節風の強いときです。役人共は「切々」と町内のパトロールをするようにと命令しています。

【切切】せつせつ。（『広辞苑』）

①ねんごろなさま。心のこもっているさま。また、情のせまるさま。②声・音などの、うれいがありひしひしと心にせまるさま。

この説明は不適當で、「心を込めて」巡視するより、「切々（再々、せつせ）」と何回も見廻った方が効目があるのに……と思いました。

「此節切々風立候間、火之元別て念入候様」（安永四年（二七七五）一月「堀川町覚書」）

この季節「切々」風が立つので、火の元に気を付けて……

【切々】せつせつ。（小松茂美『手紙の歴史』）
しばしば。

これで、結論が出ました。

「危敷」は「あやしく」と読み、雲行きがアヤシクなる意味と、碩泉さんから教えていただきました。

振り合

「態申進候、然ハ当春普請御見分として谷文之進様、近々郡内御廻村被遊候間、其村々御役人中并長百姓壺人宛、例之振り合を以左之通最寄御休泊之内へ御出揃可被成候」（嘉永二年（一八四九）四月「野間家文書」）

お手紙を差上げます。今年の春普請の見分のため谷文之進様（代官）が近々安芸郡内を御廻村されますので、各村の役人と長百姓一人、例の「振り合」で左の通り最寄の御休泊所に出浮してください。

土木工事は、百姓の暇な春に行いました。それを春普請といいます。「春普請御見分」は普請の結果の見分と思われます。

【振合い】（『広辞苑』）

他との比較または釣合。事のなりゆき。

「例之振り合」は「いつもの様に」の意味でしょうから、少し違うようです。

「近年紛敷諸秤売買候者有之哉に付、此度京都秤師神善四郎名代武川垣三罷下り相糺し度趣にて、来月上旬罷越候趣ニ相聞、右ニ付其方儀用懸り申付候条、此旨相心得万々寛政度之振り合を以手違無之様可及駄引」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）近頃、怪しげな秤を売買する者がいると、ことで調べるため、京都の秤師神善四郎の名代、武川垣三が来月上旬に來ると聞いている。そこで其方に用懸りを申し付けるので、寛政のときの秤改めの「振り合」でもって手違いのないようにしなさい。

「寛政度之振り合」は「寛政のときの様に」という意味です。

「いつもの様に」という、いい加減な指示内容ですから、「振り合」も漠然とした「様子」という程

度の意味だろうと思います。

上り家

「 覚

研屋町東筋東側

一表式間老尺式寸、裏入式拾五間三尺壺寸

研

屋町中野屋源助事七藏上り家

右家、闕所入札御払ニ被仰付候、望之者有之候ハ、右町年寄山本屋市三郎方へ罷越承合入札仕候様、町々可被相触候、尤有無来月五日迄可被申出候、以上

八月廿四日

室屋喜右衛門」（安永

五年（二七七六）「堀川町覚書」）

研屋町の中野屋源助こと七藏は、欠所となつたので、研屋町東筋東側にある七藏の居宅（表間口二間余、奥行二五間余）の「上り家」が闕所入札払となる。希望者は研屋町の町年寄、山本屋市三郎方で様子を聞き入札するよう、町々に触れ

知せなさい。希望者の有無について来月五日までに大年寄に通知すること。

七蔵がなぜ闕所とされたのかは分りません。

【闕所】（柏書房『日本史用語辞典』）

近世では、もっぱら庶民に対する刑罰に用い、磔・火罪・獄門・死罪および重追放に対しては田畑・家屋敷・家財が、中追放では田畑・家屋敷、軽追放では田畑が付加刑として闕所となった。闕所は原則として永久没収。

「上り家（上り屋）」は、次の「揚屋」には該当しませんので、「上り屋敷」のことだろうと思います。

【揚屋】 あがりや。（『広辞苑』）

江戸小伝馬町の牢屋の一部。御家人（ごけにん）、大名や旗本の臣、僧侶・医師・山伏などの未決囚を入れた所。

【上り屋敷】 あがりやしき。（『広辞苑』）

江戸時代、幕府や藩に没収された屋敷。

さし持

「当郡里方村々之者共ハ日頃かつき荷仕馴居申候間、
 耆人持さし持或ハ三四人持等御荷物へハ夫々相応
 シ棒御取添、御荷造り御掛改メ直ニ持出し候様ニ
 シテ夫頭之者へ御引渡し被遣度奉存候、併息杖ハ
 銘々用意仕被遣可申と奉存候」（文久二年（一八六
 二）『廿日市町史』）

当郡の村の者は日頃から担ぎ荷には馴れてい
 すので、耆人持、「さし持」、または三四人持な
 どの御荷物へ、適当な棒を取付けて荷造をして、
 重量を量り、すぐに持出せるようにして、夫頭
 の者へ引き渡してください。息杖は各自で準備
 します。

この文書は、異国船防禦のための御用荷物運送に
 際して、荷造りにについての割庄屋からの注文です。
 いきなり「さし持」という言葉に出会えば頭を抱え
 ることになりましたが、このように文章の中だと辞書

を見なくても見当が付きます。

御用荷物の中には重い物もあるでしょう。軽い荷物なら「壺人持」、重量物なら「三四人持」となっています。するとその間に書いてある「さし持」は「二人持、つまり、二人で持ち運ぶ荷物」のほうです。

【差し】（『広辞苑』）

②二人ですること。（イ）さしむかい。（ロ）さしにない。「―でかつぐ」

【差し担い】（『広辞苑』）

物に竿などをさし通し、前後二人で担うこと。差合せ。さし。

【息杖】いきづえ。（『広辞苑』）

荷物をかついだ人やかごかきが息入れするとき、になったものを支えたりするのに用いる杖。

自由 その二

「いづれ両様之内、購得度義ハ尤相違無之候へ共、

後悔無之様ニと存候故、自由なから即答不申上候」
（天保二年（一八三一）篠斎宛『馬琴書翰集』）

いつかは、どちらかを買いたいと思っているのは確かですが、後悔のないようにと思い、「自由」ながら即答できません。

「自由」について、2007/02/25のブログに書いています。そこでは「自由」を「勝手ですが、都合により」と解釈するのが適当としました。

馬琴の手紙でも、「私の勝手より即答できません」と使っています。

【自由】（柏書房『古文書用語辞典』）

本来はわがまま勝手の意。一般の慣例や慣習・談合などを無視してそれを乱そうとする行為をすべて「自由之新儀」として非難した。幕末、蘭語[rijheid, Freedom]の訳語に幕府通詞森山多吉郎が自由の語をあてた。明治初期の啓蒙思想家たちによってLibertyの訳語として使用された。

さすが『用語辞典』。「自由」とは「わがまま勝手」

のことと明快な解説です。ところが、

「去秋不作ニ付穀類不自由、引続疫病流行死亡多く、
下賤之者共跡弔等も得不仕類別て御不便ニ被思
召、右等為菩提、左之於御寺々法事執行被仰付候」
(天保八年(一八三七)「鶴亭日記」)

去秋は不作のため穀類が「不自由」し、引続
て疫病が流行して死亡が多く、下賤の者共は跡
の葬式も出せないことを御不便の思し召され、
その菩提のため、左の寺々で法事を執行するよ
う仰せ付けられました。

「穀類不自由」を「穀類がわがまま勝手ではない」
と解釈する訳にもゆかず、当然「穀類が思うままに
ならない」の意味です。

すると、「自由」とは「思いのまま」の意であり、
これを悪く言う人は「わがまま勝手」といい、善く
とれば「思いのまま」に相当する言葉でしょう。

大形

「旧年より寒氣、初春に成候て愈此地は寒威候へば
〇〇難義、別して二月十六日西行上人の御忌日の
頃は食事も難進、余程老衰候に付、幸能時節正念
に命終可仕と万事放下覚悟いたし候処、思の外日
々暖氣にて、をのづから漸々力づき、此頃は大形
全快いたし候、少も御氣遣有間じく候、生延候段
残念に存候、此後も外より病氣之様子被聞候ても、
必々人など被登せ候事など無用に存候」(山下弘
毅「梅鶴閑話」)

旧年より寒氣が強く、初春になるとこの地は大
変寒く難儀して、特に二月十六日の西行上人の
御忌日の頃は食事も進まず、余程老衰の様子、
幸いにも良い時節に命を終えられると万事放下
覚悟していましたが、案外暖氣となり、次第に
力づき、この頃は「大形」全快しましたので、
御心配無用に願います。それにしても生き延び
たこと残念に思います。今後病氣の様子をお聞
きになっても必ず人を登すこと無用に存じま
す。

これは僧似雲の、子吉右衛門に宛てた卯月六日付

の手紙の一部です。

【似雲】 じうん。（『広辞苑』）

江戸中期の歌僧。初め如雲と称。安芸の人。武者小路実陰の門。西行に私淑し、諸国を行脚。

著『磯の浪』、家集『年並草』など。（一六七三～一七五三）

「此地」とは、河内弘川寺で西行塚を発見し、「花の庵」を結んだ所でしょう。

文中「大形全快」の文言は「ほとんど全快し」の意味ですから、今なら「大方全快」とするところです。

自普請

「堤川除常々不切様心掛、満水之時ハ村中之者出會随分可困之、大造成道橋等損候て往還之障ニ成候歟、大分之田地損亡ニ相成候所は、惣て小破之時分早速修覆可仕、及大破ニ実々自普請難成所は、

御入用ニて可申付、請取場之道橋は常々無油断作事可申付事」（文化十三年（一八一六）御仕置五人組前書（天領）『広島県史』）

堤防が切れないようにいつも気を付け、満水の時村中の者が出て困い（堤防のかさ上げか）をし、道橋が大破して通行の障りになったり、多くの田地が被害を受けるところは、小破の時分にすぐ修覆しなさい。大破してとても「自普請」にならない所は、御入用（公費）で修覆を命ずるので、担当の道橋はいつも油断なく修理を命じなさい。

「自普請難成所は、御入用ニて可申付」とあるので、「自普請」は「御入用」の反対にある言葉と解ります。この文書は天領のものですから、大きな災害の復旧費用は代官所が出しますが、小規模の災害は「自普請」（自力で工事する）としています。「自力」とはいえ農民個人ではなく、村としての工事でしょう。

【自普請】（柏書房『古文書用語辞典』）

江戸時代の普請形態の一つ。農民が費用をだし

て堤防の築造・修理、橋梁の掛替などを行うこと。

【御普請】（『世界大百科事典』）

江戸時代、幕府や藩が施工した土木工事。とくに堤川除・用水・道橋等の普請において、周辺村落が費用を出して行った工事を自普請というのに対し、領主側が費用を負担して行った工事をいう。

金百疋

「一金百疋 唐津屋彦左衛門

右先々月五日於御本丸御能仰付候ニ付、従但馬守

様友之助様奎之丞様被下之」（天明四年（一七八四）

「堀川町覚書」）

先々月五日、御本丸で唐津屋彦左衛門に御能を仰せ付けられ、但馬守様（前藩主浅野宗恒）・友之助様（浅野重晟の二男）・奎之丞様（重晟の弟、浅野長包）より金百疋が授けられた。

「百疋」とは何両に当るのか、調べました。

【匹・疋】（『広辞苑』）

② 銭を数える語。古くは鳥目一〇文を一匹とし、後に二五文を一匹とした。

「後に二五文を一匹とした」といういい加減な説明には困ってしまいますが、天明四年（一七八四）では一疋＝二五文 でしょう。

すると 一〇〇疋＝二五〇〇文＝二・五貫文に相当します。

【両】（『広辞苑』）

④ 近世、金貨幣の単位ともなり、金貨一両が四分（二六朱）で、銀六〇匁・銭四貫文がこれと同価とされた。

一両＝四貫文なら、二・五貫文は、比例計算で、

〇・六二五両＝二・五分＝二分二朱。

これで、結論が出たと安心してしていると、

【貫文】（新人物往来社『古文書用語大辞典』）

銭貨の単位。金一両は永一貫文。

【両】（新人物往来社『古文書用語大辞典』）

①貨幣（金貨）の単位。一両は……銭四貫文。

一両は一貫文？、それとも四貫文？と大混乱の後、次の説明にたどり着きました。

【匹・疋】（『岩波日本史辞典』）

②疋 江戸時代の金の貨幣単位。主に儀礼の際に用いた。銭一〇文を一疋と称したが、金一両が銭四貫文と公定されたことから、小判・一分判をそれぞれ金四〇〇疋・金一〇〇疋と称して授受した。

ここには、半端のない「一分判を金一〇〇疋と称して授受した」と明記してあります。先の端数のついた計算結果「二分二朱」とは違います。なぜこの違いが出たか考えてみると、この計算で 一疋＝二五文 としたのが間違いの元でした。

一疋＝一〇文 として計算すると 一〇〇疋＝一〇〇〇文＝一貫文。慶長十三年（一六〇八）から一両＝四貫文（四〇〇〇文）の交換比率ですから、たしかに一貫文＝一／四両＝一分 となります。

【匹】（柏書房『古文書用語辞典』）

疋とも書く。②銭の単位。鎌倉時代には二五文を一疋。江戸時代では一〇文一疋で、金一〇〇疋は一分に、一〇〇〇疋は二両二分に当った。

【疋】（『歴史の単位辞典』）

銭一貫を一〇〇疋という。……疋はこのほかに 一分金の一〇〇疋、二五文の疋などがあり、『広辞苑』の「後に二五文を一匹とした」との説明には問題がありそうです。

一両は一貫文か、それとも四貫文については、次のサイトが参考になります。

「慶長金銀が発行された当初は、金一両＝銀四二〇四三匁＝永楽銭一貫文が交換相場であった。慶長一三年（一六〇八）金一両に銀四貫文の割合で取引すべし、として永楽銭の優位通用を禁止し、銀銭のみの一文通用とした（但し「永楽銭勘定」という場合は金一両＝永楽銭一貫文という計算で後世まで続いた）」（<http://www.e-obs.com/heo/heodat2/n174.htm>）

御誉・御賞

「家別楮植増等発起支配役中御申値、追々植弘メ生立候様ニ付、御代官所より御誉も被蒙、御紙藏おゐても奇特之至御吹聴有之、上下両全之儀ニ候得共」（弘化二年（一八四五）『広島県史』）

「家」ことに楮を増植することを思い付き、支配役が相談して、次第に植弘め生長しているので、御代官所からも「御誉」をいただき、御紙藏からも奇特なことであるとの御吹聴（宣伝）もあり、楮植増は藩も農民もともに有益なことであるが、

文中「御誉」という言葉が出てきます。意味は、我々素人でも分かりますが、どう読むのか、自信が持てません。

【誉】（『漢字源』）

《音読み》 ヨ 《訓読み》 ほまれ／ほめる（ほむ）

「御ほまれ」ではなく、「御ほめ」と読めるなら好都合です。

「唐人も其能を誉めて具さに書き載せたり」（『農業全書』）

中国人もその（蕎麦）の効能を誉めて、詳細に書き載せている。

「誉」に「ゝめ」が送ってあるので、「御誉」は「御ほめ」に決定……と一仕事したような気になりましたが、Atokで「home」とタイピングして漢字変換すると、簡単に「誉め」と出てきたのにはビックリしました。

「一同三俵 三次五日市組胡町裏住精次倅房藏右父母へ孝行いたし候ニ付、先年度々御賞被下候処、母ハ先年相果候得共、当時父存生不忘事方宜ク、奇特之至ニ付、為御褒美被下之」（嘉永三年（一八五〇）「野間家文書」）

三次五日市組胡町の裏住、精次の倅、房藏は父母へ孝行し、先年度々「御賞」を頂いている。母は先年亡くなったが、父は今も存生しており、

よく仕えて奇特なことなので御褒美として米三俵を授ける。

今度は「御賞」ですが、これも「御ほめ」と読みます。念のため、Atokも「home」を「賞め」と変換します。

【賞】（『漢字源』）

《音読み》 ショウ（シャウ）《訓読み》 ほめ
る（ほむ）／めでる（めづ）

何々迄

「母ハ父之後妻ニて全ク継母ニ御座候、至て懇ニ事エ、往年は商売等も仕候故、折々家出之時は逗留中之儀何々迄も差間無之様取繕ひ叮嚀ニ暇乞致、尚亦出懸候ても一兩度ハ立帰、寒暑自愛之儀飲食用心之事迄も呉々申置、近隣へも毎々慰懃ニ頼置候て罷出候」（文政九年（一八二六）「鶴亭日記」）

（宗吉村亀蔵の）母は父の後妻で継母に当りますが

丁寧になえ、以前は商売をしており、家出（外出）する際は留守中に「何々迄」も不自由のないようにし丁寧にあやうをして出掛け、時々帰宅して寒暑・食事などのことまで注意をし、近隣へも毎々慰懃に頼んで出掛け、

これは宗吉村亀蔵の行状について答えた野坂三益の報告の一部です。文政十一年（一八二八）亀蔵夫婦は藩により孝子として表彰されています。（『芸備孝義伝』三編巻八）

「何々迄も差間無之様取繕ひ」という言回しがあります。文意から考えると、「何々迄」は「何から何まで＝全て」の意だと思えます。読みは「なにからなまでに」以外には思いつきません。

「何々迄」は一般的に使われたとみえて、例文には不自由しません。それにしても、現在は完全に死語になっているのが不思議です。

「御示談之通り大ニ心得違前後不弁軽々敷申散し候段、今更奉感服、幾重も奉恐入誤候、自今各様之儀は素り、都て被仰出之儀何々迄も万端相慎、急

度相守可申候」(慶応元年(一八六五)「横山家文書」)
御指摘の通り心得違いをして前後も弁えず軽々しく言い触らししたことを深く反省しており、幾重にもお詫びいたします。以後は各様は勿論、誰から指示されたことでも「何々迄」も必ず守ります。

鶴の含穂 その一

「鶴の含穂」という糯米の品種の話です。

「鶴の含穂餅米之記」

文政五年年、曾我豊後守様京都町御奉行御在勤之折節、所司代御直りニおゐて、鶴の含穂なりとて粳三粒を得られしを持帰られ、其内粳粒を家来石毛幸太夫へ給りしを、翌春ニ至り時節をすくり、小茶碗ニ水ヲ入、是をひたし、昼ハ日向ニ運び、朝暮ハ火炉のきわにあたくめ、丹誠の甲斐ありて日数立ぬれハ芽を生したるを鉢ニ移し、猶も心ヲ用ひしに、青葉三寸とハ成たれとも、唯一ト本の

事故、成長覚束なく、依て近キ田方より稲草少し取寄せ、是ヲもひとつニ植て、其成長ヲ窺ふに、新芽三本ニなり、植添し稲草よりハ長くのひ、初秋のころには穂全ク出て実入もよく、恙なく蒔納メ神棚へ備へ置しに、其年の冬、豊後守様召させられ、御参府之節持下りしを、知行所武州の越か谷領七左衛門村の長、善右衛門ニ申付、仕付させ、且又水旱の患も難計けれハとて、其内を兼て出入いたす小松川村の長、長右衛門ニも分けあたへ、二ヶ所ニ植附しに、いづれも年々歳々に実を結び、五ヶ年を経て亥年ニ至りてハ十二俵の米とハ成りぬ、此米来歴のいと珍敷めて度ハいふもさらなり、諺に一粒万俵と云へる事実に偽ならず、前の如丹誠ヲ積ぬれハ、一粒の米五ヶ年にして俵数と成る、穀の尊キ事人力の誠有事、思ひ計ぬ、依て此米の来由と丹誠を尽せし一端を書しるし畢」(文政十二年(一八二九)「野間家文書」)

「鶴の含穂餅米之記 文政五年(一八二二)、曾我豊後守(助弼)様が京都西町御奉行として御在勤のとき、所司代で「鶴の含穂」であるとして

三粒の籾を入手して持帰り、その内の壹粒を家来石毛幸太夫へ授けた。翌春時節を選び、小茶碗に水を入れてこれを浸し、昼は日向に、朝暮は火炉の脇に動かして暖め、その丹誠の甲斐があつて日数が立つと芽が出たので鉢に移した。

青葉三寸に生長したが、一本では成長も覚束なく、そこで近くの田より稲を少し取り寄せ、これを一緒に植えてその成長を観察すると、新芽が三本になり、植添えの稲草よりは長く伸び、初秋のころになると全て穂が出て実入りもよく、無事に蒔納め神棚へ供えておいた。その年の冬、豊後守様が江戸に呼戻されたときに持帰り、知行所のある武州の越か谷領七左衛門村（埼玉県越谷市）の庄屋善右衛門に命じて栽培させ、また水旱の患も考えて、小松川村庄屋長右衛門にも分け与え、二ヶ所に植付けた。両方とも年々歳々に実を結び、五ヶ年を経て文政十年（一八二七）には十二俵の米となった。この米の来歴は珍しくまた目出度いことである。諺に一粒万俵というがそのとおりで、如丹すれば、一粒の米でも五ヶ年にして俵数と成る。穀物の尊きこと、人力の誠あることを思うべきである。よってこ

の米の来由と丹誠を尽した一端を書き記した。

曾我豊後守助弼は、文政三年（一八二〇）八月一三日（文政六年（一八二三）十一月八日の間、京都西町奉行を勤めています。

鶴の含穂 その二

「鶴の含穂籾種御下ケニ付御受書附

一 鶴の含穂くわへ穂餅米種籾少々宛御下ケ渡し植付可申旨奉畏候、私共并矢野村姫宮早稲作り立候作人、同村与頭久右衛門五人へ配分仕、銘々考ヲ以植附可申奉存候、右米得失考合申植候様被仰付候得共、勿論纔之種籾を以差寄せ得失考合も難附、追々右稻生立、苺こなし仕候上ニて委敷様子可申上」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）

鶴の含穂籾種御下げの受書 「鶴の含穂くわ

へ穂」餅米種籾を少しずつ御下げになり、植付けるようとの御指示、承知しました。私共割庄屋と矢野村で姫宮早稲を栽培している同村与頭

の久右衛門の五人へ配分し、それぞれ考えて植付けたいと思います。この米の得失を考えて植えるようにとのことですが、僅かの種籾で今は得失も思いつきませんので、稲が生い立ち脱穀したとき詳しく申し上げます。

「鶴の含穂」とは、いわくありそうな名前ですが、残念ながら曰く因縁はわかりません。「くわへ穂」とありますので、どこからか鶴が啜えて来たものかもしれません。(含む口の口の中に物を入れ持つ)

この文書は、広島藩が文政十二年(一八二九)に安芸郡で試験栽培をさせたときの割庄屋の受書です。天保五年(一八三四)大塩平八郎の平松樂齋(漢学者・伊勢津藩士宛の手紙にも「鶴の含穂」について書いてあります)。

「一義民磯八作り候、采女殿より貰候鶴含穂三粒之殖候糯米一袋、被送下、御厚意奉謝候、何様珍敷、則元朝より参候社友、并縁類共、二三粒ヅ、尊兄より貰候訳を申遣、為給候、是等も御来駕節、拜謁候て、御礼可申上候已上」(『日本芸林叢書』)

第八卷

義民磯八が作った「鶴の含穂」三粒から殖した糯米を采女殿より貰らった一袋を送っていただき、有難う御座いました。なに様珍しく元朝より来た社友や縁類に二三粒ずつ、あなたより貰った訳を話しながら食べさせました。これもお出でのごときお目に掛けて御礼を申し上げます。

麦藁焼

「麦藁焼候儀、軒並不申所、或は大家にて竈不用心二無之所ハ格別、小家にて麦藁焼候儀無用二候、麦糠にて蚊ふすめ候儀、右同断二相心得、役人とも切々見廻り無怠可申付候事」(天明四年(一七八四)「堀川町覚書」)

麦藁を焼くことは、軒をならべ接近して家が建っていない所や、大家で竈が不用心ではない所はともかく、小家では麦藁を焼いてはいけない。麦糠で蚊遣を使うことも同様である。町役人は

度々見廻り注意を下さい。

「麦藁焼」と書いてありますが、「焼く」と読むのは誤りで、「焚く」と読むべきです。今なら「焚」とすべき所を「焼」と書くのは、江戸時代人のおおらかさだと思っています。

麦藁は焼き捨てるものではなく、燃料として竈や風呂で「焚く」ものでした。麦藁は中空なので一気に燃上がります。広島の小町家では火事の恐れがあり、麦糠の蚊遣とともに禁止したものとおもいます。

現在、都市に住む若い人には想像も出来ないことかも知れませんが、戦後の農村では夕方はどこかしこに蚊が充満し、その中に人がいるような有様でした。蚊遣は必需品でした。

小間

「広島市内にても、町端新開は都て貢租地に編入して土地畝数を定むる所なれとも、町内に至ては畝反の定めなく、年貢と唱へすして水役と称し、町

通り表の間数にて小間に就き水役銀若干と為し、古来一定の員数ある所なり、裏入は幾間有るとも之に關せず、専ら表間口の間数にて水役を上納し、並に町内諸費も之に依り割賦する所なり、裏町の表又脇小路・脇町杯は水役下直なり」（『芸藩志拾遺』『広島県史』）

広島市内でも、郊外にある新開は全て貢租地で面積も決まっているが、市中には面積の定めはなく、年貢とは言わず水役と称して、町通り表の間数で「小間」につき水役銀何程を上納すると昔から決っている。裏入（奥行）はいくらあっても関係なく、表間口の間数で上納する。町内諸費も表間口の間数で割当てる。裏町の表小路・脇小路、脇町などは水役は下直である。

これは、広島町内の税金「水役銀」の解説です。それは面積には無関係で、表間口の間数により税額が決るといいます。「町通り表の間数にて小間に就き水役銀若干と為し」の文言で、「小間」なる言葉が気にかかります。

【小間】こま。（『広辞苑』）

①少しのあいだ。あいま。ひま。②小さい室。茶道で四畳半以下の茶室。③和船で舳に最も近い間所。④建築で垂木と垂木、根太と根太の間。また、瓦の屋根面にあらわれた幅。⑤公役小間（江戸幕府が、江戸の市民に対して、屋敷地の広狭に応じて課した公役の徴収単位。二〇坪を一小間と定めた）。⑥明治初年、東京府内で土地を貸して一カ月に一円の賃料を得らるべき区域。

⑤の説明に関係が深そうですが、これは面積をもとにした江戸府内の話ですから、裏入は無関係とする広島「小間」にはそのままでは当てはまりません。

「町並家々之表間口ニ応銀子ニて上納仕候、但小間一間ニ付一両五分」（元和六年（一六二〇）「広島藩覚書帖（二）」）

町の家々の表間口の長さに応じて銀子で上納します。その額は「小間」一間で一両五分（銀一匁五分）です。

【齧】（なま）。（『広辞苑』）

（「小間」の意か。「齧（せき）」は中国で演劇・語り物などの一区切り・一場面を指す）①（写真用語）ロール・フィルム・映画フィルムの一画面。無声映画は一秒間に一六齧、現在は二四齧回転する。②転じて、或る場面・局面。③授業・講義などの時間割の一区画。

「小間」を「齧」と考えれば、意味がシフトして、「屋敷地の表間口の幅に応じて課した公役の徴収単位」と理解できるのでないか、だから家の表間口の幅に応じて家持から徴収した各町内で要する費用のことを「小間銀」とか、「小間續」と言うのも頷けるところです。

小間銀

「一町限り之入用を小間續ト云て月々間割より取立候也、右小間銀年ニ寄月之趣ニ寄り多少有之候処」（『理勢志』）

一つの町だけの入用を、小間續こまづなぎといって毎月間

割で（家の表間口の広狭に応じて）徴収する。この「小間銀」の額は年月により多少の違いがある。この「小間銀」は前回書いたところですが、別の意味の「小間銀」もあります。

「去申霜月、海田上市出火ニ付、同所并奥海田村市頭類焼之もの難渋相逼、小間銀御貸下」（嘉永二年（一八四九）「野間家文書」）

去る嘉永元年（一八四八）十一月、海田上市から出火、同所と奥海田村市頭が類焼し、罹災者は難渋しておりましたが、藩から「小間銀」を御貸し下げになり、

このときの焼失家数は一一八軒、竈数一八九世帯でした。海田市は駅所のためか、藩は「小間銀」を貸与しています。この「小間銀」は災害復旧のための貸付金のようなのです。

「 焼亡村々小間取約辻寄帳

廿日市

一表本宅 三百四拾三間貳合

此小間銀百貳拾貳百貳拾目

一同借宅 拾七間七合

同四貫四百貳拾五匁

一裏本宅 三百四間七合

同九拾老貫四百拾匁

一同借宅 八拾六間老合

同拾貳貫九百拾五匁

ベ貳百貳拾八貫五百七拾匁

（中略）

右は焼亡村々小間取約奉差上候間、何卒早急御銀御下ケ被為成遣候様、御願奉申上候也」（慶応三年『廿日市町史』）

これは、長州戦争による廿日市の焼失家屋を対象に小間銀の調査をしたものです。廿日市の表本宅は一間につき三五〇匁、同借宅二五〇匁、裏本宅三〇〇匁、同借宅一五〇匁、合計二二八・五七貫目の小間銀を調べて、早急に「御銀御下ケ」下さいという内容です。この文書の「小間銀」は（徴収する小間銀）か（貸与する小間銀）がよく分りません。

徴収と貸与とは大違いですが、どちらも「小間」

という言葉を使っています。それというのも二つに共通するものがあるからでしょう。

どちらも「建物」に係し、「間口の長さ」に関するのではないか、「小間」の本来の意味は「建物の表間口の長さ」ではないかと思えます。

水役銀 その一

「水役銀 広島市内にても、町端新開は都て貢租地に編入して土地畝数を定むる所なれとも、町内に至ては畝反の定めなく、年貢と唱へすして水役と称し、町通り表の間数にて小間に就き水役銀若干と為し、古来一定の員数ある所なり、裏入は幾間有るとも之に關せず、専ら表間口の間数にて水役を上納し、並に町内諸費も之に依り割賦する所なり」（『芸藩志拾遺三』『広島県史』）

広島市内でも、郊外にある新開は全て貢租地で面積も決まっているが、市中には面積の定めはなく、年貢とは言わず「水役」と称して、町通

り表の間数で小間につき「水役銀」何程を上納すると昔から決っている。裏入（奥行）はいくらあつても関係なく、表間口の間数で上納する。町内諸費も表間口の間数で割当てる。

「町方水主銀 郡中并広島新開ハ都て年貢地故、其土地畝数ニ定あり、広島町中ハ畝反之定ハなく、年貢とハ不唱、水主役と唱、町并表間之間数にて小間ニ付水主役銀何程と申、古来より之定数有之事也、裏入ハ何間有之共夫ニハ不懸、表間口計之間数にて水主役上納、并町中入目も割賦する事也」（『理勢志』）

郡中と広島新開は全て年貢地で面積も決っているが、広島町中には面積の定めはなく、年貢とは言わず「水主役」と称して、町并（町並）表間の間数で小間につき「水主役銀」何程を上納すると昔から決っている。裏入（奥行）はいくらあつても関係なく、表間口の間数で上納する。町内諸費も表間口の間数で割当てる。

『芸藩志拾遺』と『理勢志』の一部を引用しました。『芸藩志拾遺』は大正二年（一九一三）に書上げら

れた、藩政期の諸事項を解説したものです。『理勢志』は地方書で、享和年間から文化期初年頃の成立と考えられています。

二つの資料は、ともに広島市街地に賦課した宅地税について述べています。しかも言回しまでほとんど同じです。後に書かれた『芸藩志拾遺』は『理勢志』を〈参考〉にして書いたに違いありません。もつとも大きな違いが一つあります。宅地税の名称を『芸藩志拾遺』は「水役」「水役銀」といい、『理勢志』は「水主役」「水主役銀」としています。「水役」と「水主役」はよく似ていますが、『芸藩志拾遺』は「水役銀」と「水主役」をそれぞれ項目を立てていますので別物と考えています。勝矢倫生『広島藩地方書の研究』は、『理勢志』（『芸備郡要集』）の「水主役（銀）」は間違で、「水役（銀）」に読替える必要があるとしています。

「水主役銀 広島町組

町中より人ヲ出シ御船手之用事相達筈ニ候得共不鍛練ニ付町並家々之表間口ニ応銀子ニて上納仕候

但小間一間二付一両五分、所ニ依り一両掛り又ハ七分五厘掛」（元和六年（一六二〇）「広島藩御覚書帖」『広島県史』）

広島町の町中より動員して、御船手（船のことを支配する役所）の用事をさせるはずであるが、船についで鍛錬がないので、その代りに家の表間口に応じて銀で上納している。その額は小間一間で一両五分（銀一匁五分）などです。

この古い資料も、広島の宅地税（水主役銀）についての説明です。その記述から、「水役」とすべき所を「水主役」と間違えた主張するには無理があります。

【水主役】かこやく。（『広辞苑』）

江戸時代、特定の漁村に課せられた藩御用の船の課役。後年、役務から銀納に変わったところが多く、これを水主役銀という。

「水主役 水主役は沿海郡中に何百軒と極り居りて、……浦辺水主は、仮令は厳嶋へ藩主の渡海せらるゝに際しては、期日前より船手方へ出頭せし

むるといへとも、實際就役の日より終結の日まで米九合と賃銀六分宛を支給せらる、右公用日の日数飯米等浦島割と為す、但此公用日より飯米受領する内六分は追て浦嶋割とすといへとも、米九合は船手方より支給交附せり、又幕府役員か海路通行に際して之か漕船は賃銀六分を支給し、水主へは賃銀なく出飯米のみを支給せり」（『芸藩志拾遺三』『広島県史』）

水主役を勤める家数は沿海の郡で何百軒と決っている。浦辺水主は、たとえば厳島へ藩主が渡海されるとき、事前に船手へ出頭させるが、實際は就役の日より終結の日まで米九合と賃銀六分ずつを支給するだけである。この費用（賃銀分）は浦島に割当て負担させる。また幕府役人が航行するときの漕船は賃銀六分を支給し、水主（船員）へは賃銀はなく出飯米のみを支給する。

元和六年（一六二〇）「広島藩御覚書帖」の中では、市街の宅地税と水主役がうまくつながっています。本来「水役」と「水主役」は同じもので、後に分かれたものではないか……、それは次回で検討します。

水役銀 その二

「広島町組に賦課される水主役銀は、元和六年（一六二〇）、藩船手役所が徴収する水主役の代銀納の制として創始され、町並みの家々の表間口に応じて銀子を上納するように定められた。これは浦方のいわゆる水主浦とされた村々が従事する水主役（加子役）と同様な仕事は、不鍛錬なために従事しえないという趣旨からでたものであり、実質的には広島町組の地子的な性格となった。」（『広島県史』近世二）

江戸では、城下町に住む町人は年貢の免除の代りに幕府御用の人足を負担する義務（公役）があり、後に銀納制になったといえます。広島城下でも水主役が代銀納（水主役銀）に移行しています。そこで、本来の浦辺島方の水主役（藩御用の船の夫役と区別するために、水主役銀を水役銀と言替えたと考えれば、『芸藩志拾遺』が「水主役」と「水役銀」の二つの

項目になっているのも理解できます。

この他に、「諸職人水役」がありました。これは大工・壁塗・木挽・桶屋・鍛冶・畳刺ら諸職人に賦課された役家別夫役でしたが、寛永十六年（一六三九）に「諸職人水役銀」として代銀納になっていきます。ここでも「水役」「水役銀」が出てきます。なぜこれも「水役」というのか、どうも解りません。

【水役】 みずやく。（『古文書用語大辞典』）

①灌漑用水を分配する役目。また、その人。②諸職人に課した技術的労役。のちに代銀納となった。③他村からの移住者や無高百姓のこと。

【水役】（『日本国語大辞典』）

①他村からの入村居住者が、村株を得るまでを、奈良県吉野郡という。福井県大野市では、自作地を持たない村民。②大阪府河内地方で、田に引く水を分配する役目。

【水役】（『古文書用語辞典』）

水役銀ともいう。諸職人に賦課した賦役、または役銭。

「御当国海辺御軍船などの御手当ニよつて水主役といふ歟、又ハ市町火災ヲ除る心ニて、水ニ縁を取らふ歟、京都ニてハ地子といふよし」（「理勢志」）（「水役銀」というのは、）元々は当国の海辺御軍船などの夫役に由来したためか、それとも市町を火災から守る願いを込めて「水役」というのだろうか。京都では地子ということ。

これだけ集めても、なぜ「水」が使われたのか、判然としませんが、「水主」と関連が深いのではと秘かに思っています。

廻国

「右太右衛門妻、娘壱人召連レ、今朝町内へ参懸リ、右娘病氣ニ付難儀躰ニ相見へ申候ニ付、早速役人共罷出見分仕候て、薬など給させ、猶近所近所之者共へ給物等心ヲ付候様申付置候処、先刻病死仕候、依之右母へ委細之様子相尋候処、夫太右衛門

儀は所ニ居申、其儘浮過日雇仕候由、去年秋以来殊外時節柄悪敷御座候」「申聞候は、中々渡世難相立候ニ付、私ニ娘召連レ廻国ニ罷出、何方ニて成共乞食仕候様ニと申聞候ニ付、去霜月ニ所を罷出あちこち仕、当春此御地へ参、乞食など仕、今以露命をつなき居申候処、娘相煩、今日病死仕申候……」（天明四年（一七八四）七月「堀川町覚書」）

（雲州の浮過）右太右衛門の妻（三三才）は娘耄人（六才）を連れて、今朝町内へ参り懸り、娘が病気で難儀していたので、早速役人が出て様子を見て、薬などを吞ませ、近所の者に食物の心配をするようにと指示しておりましたが、先刻病死しました。そこで母親に詳しく様子を尋ねますと、夫の太右衛門は在所で浮過日雇をしておりますが、去年の秋以来大変時節柄が悪く……暮した立たないので、私に娘を連れて「廻国」にでてどこでなりとも乞食をするようにと言いますので、去年の十一月に所を出てあちこちし、当春にこの御地へ参り、乞食などして露命をつないでいましたが、娘が病気になる、今日亡くなりました。……

【廻国】（『広辞苑』）

①諸国をめぐり歩くこと。②廻国巡礼の略。

諸国をめぐり歩くのも何か目的があるはず。大抵は宗教的な目的のようで、「廻国」とくれば「巡礼」を思い浮べますが、ここでは乞食のための廻国です。「殊外時節柄悪敷」という如く、天明の飢饉の真っ最中でした。

【天明の飢饉】（『広辞苑』）

天明二〜七年に起った大飢饉。特に三年浅間山噴火の影響でおきた冷害による奥羽地方の飢饉は多数の餓死者を出し、このため各地に一揆・打ちこわしが起き、幕府や諸藩の支配は危機に陥った。

自滅

「布野村平左衛門も……下方の難渋申立、上の米銀を多く取出したるよし聞へけれハ、三次町にて詰

問に及ふへくと呼出しをかけたる所に、其夜急病にて死たり、実ハくびれて死たるよしなり、かれハ……やゝ恥を知りて自滅せし」(頼杏坪「老の絮言」『広島県史』)

布野村の平左衛門も……農民の生活苦を申立て、藩の米銀を多く取り出したことが知れて、三次町で詰問するため呼出しをかけたところ、その夜急病で死亡したというが、実は縊死であった。彼は……恥を知っていて「自滅」した。

「但、主殺・親殺たりと云とも乱心ニ無紛ニおゐてハ死罪、致自滅候ハ、死骸取捨ニ可申付事」(「温故郡務録」『広島県史』)

主殺し・親殺しであつても乱心による場合は死罪。自滅した場合は「死骸取捨」とする。

【自滅】(『広辞苑』)

①自然に滅びること。②自分の行為が原因となつて自分の身をほろぼすこと。

【自滅】(『古文書用語大辞典』)

自殺すること。

ここでは、「自殺」があてはまりません。「死骸取捨」とは具体的にはどうすることでしょうか。

先ン取

「郡中村々百姓共之内、難渋もの為取立相企候三拾人講、或は拾五人講之頼母子、先ン取之者とも跡掛ケ怠り、指縫事数々有之趣ニて、段々書付ヲ以申出候振り合、尚又右頼母子先ン取後取之者銘々之得勝手筋、郡廻り中或ハ御役所へ直訴仕候者とも有之候得共、畢竟因ミ相對事之頼母子ニ依て田畑ニ離レ、産業不相成追上ケ、或は袖乞等いたし候者数多有之候様成行候儀、元来助ケ合を以相企候主意に不相叶儀故」(文化十年(一八一三)『広島県史』)

郡中村々の百姓共のうち、難渋者の生活が成立つようと企てた三拾人講や拾五人講の頼母子で、「先ン取」の者が「跡掛け」を怠り紛糾して、書付を提出したり、「先ン取」「後取」の者

が勝手に郡廻りや代官所へ直訴する者もいる。因ミ相對事の頼母子でありながら、最後には田畑を失い、村を追われ、袖乞等する者が多いとは、元来は助け合いのために企てた趣旨にもとるもので、

頼母子に関する言葉が沢山見られます。「三拾人講」「拾五人講」は頼母子の参加者という言葉でしょう。「先ン取」「後取」は貸付の時期の先後を意味します。頼母子の運営で一番困るのは、「先ン取之者」とも跡掛ケ怠ることです。先に落札した者がその後の掛送り(返済)を怠けたものではどうしようありません。

「先ン取之者」、意味は分かりますが読みが分りません。「先与頭」を「先ン与頭」と書く例があるので、「先ン与頭」に倣って「先ン取之者」と読むのではないかと思いますが、「先ン取」と読むのかもしれない。

取毛

「御納所之儀、年々御取毛も強様に存誤候者有之様に相聞候、是ハ以之外之了簡違候、先收納之儀ハ何方にても検見之法古今共不相替事候、就中御当地ハ小検見に被仰付、其上作物出来不出来相応の御用捨被成下候得ハ、御百姓の痛と成申儀ハ毛頭も有之間敷候、然処潰百姓適々も有之時ハ、御取毛も強又ハ村役等も多く当り候など、申族も有之由、是等之儀ハ無筋千万之事候」(享保八年(一七二三)『広島県史』)

年貢については、年々の「御取毛」が強いように誤解している者がいると聞くと、これはもつての外の了簡違いである。先ず収納は、どこでも昔から検見の法を採っている。とくに御当地(福山藩)では小検見(手代その他下役人の行う検見)をしており、作物の不出来の際は、相応に税を下げるので御百姓の痛みになることは絶対でない。たまた潰百姓があると、「御取毛」が強過ぎるとか「村役(村の労役)」の負担が多いとか言う輩もいるようだが、これらは「無筋千万」のことである。

柏書房『日本史用語辞典』では、「取毛」を「田

畑の收穫高」と説明していますが、この資料には適さないようです。「毛」は「地表に生える草木・作物」（『漢字源』）で、その「毛（作物）」を穫り入れると「田畑の收穫高」ですが、更に藩が年貢として取上げるので「御取毛」と言うのでしょうか。

「潰百姓適々も有之時」の「適々」も、今では「適」と書いて「たまたま」と読みます。ここでは「時折り」の意味です。

【偶・適・会】 たまたま。（『広辞苑』）

①偶然。ちようどその折。②まれではあるが、時折り。

「御噂なども適々出申候」（元禄七年（一六九四）、怒誰宛芭蕉書簡）

御噂なども時折りしています。

「無筋千万」の「無筋」も、今では「筋が通らない」とか「筋が立たない」と言うところを、「無筋」と簡潔に表したものでしょう。

御銀出

「近年打続臨時御物入多ク、御勝手向御差繰難被為成二付、御銀出之品々并御定銀出之分共相減し渡り候趣此度諸向へ被仰出候、依之郡中御銀出之品并夫飯米を以普請願出候者ハ可成たけ差延、寺社御銀出繕ひ之分も右ニ准シ取計可申旨」（安永三年（一七七四）『広島県史』）

近年は続けて臨時の支出が多く、藩財政はヤリクリが難し状態なので、御銀出の品々や御定銀出の分も減額して下げ渡すと命ぜられました。そこで郡中の御銀出しの品や夫飯米で普請の願出はできるだけ延期しなさい。寺社の御銀出し修繕も同様にするこ。

「海田市平打損処取繕入用御免許前

（中略）

一 惣銀 〆 壱 四百七拾七匁五分
内 壱 〆 三百九匁五分 御銀出

百八奴

郡割

右、当春普請諸入用前書之通聞届差免候条、此旨相心得、普請念入丈夫ニ可相調者也」(文政十二年(二八二九)「野間家文書」)

これは海田市で平打(堤防の側面か)の復旧工事のための藩の免許書です。延べ五四〇人の郡夫と村夫の労働と「惣銀貫 壹貫四百七拾七匁五分」の費用で、春普請を丈夫にやり遂げるようにと許可を出しています。

労働力は郡・村の農民の奉仕ですが、経費の大部分(約九五%)は「御銀出」で、残りが「郡割」(郡の負担)です。

「皮楮ハ紙漉職相當候もの共第一之品ニ付、木楮繁殖方相尽候義肝要之事ニ候、依て無毛土地又ハ作物障リニ不相成ケ所家廻り等へ楮苗植付取計候者共、苗入用ニ候得ハ下ケ遣し可申、尤苗代銀半方御銀出、半方ハ植付候もの共より差出し可申候事」(明治四年(二八七二)「続波多野家文書」)

皮楮は紙漉を仕事とする者にとって第一の品で

あるから、楮の木が繁殖するように努めなさい。無毛の土地や作物の障害にならない所、家廻り等へ楮苗の植付を計画している者で苗が入用なら県から支給する。ただし苗代銀の半方は「御銀出」であるが、半方は自分で負担しなさい。

「御銀出」という用語を使った文書を三例並べました。「御」が付いているので「藩が出す財政支出」には違いありませんが、何れも藩自体の事業ではなく、「補助金」にあたると考えてよさそうです。なお、読み方は、「諸郡寺社修覆御銀出し場所の事」(「吹寄青枯集」)から「御銀出^{おぎだ}し」でしょう。

世話敷

「薩侯御前において、大画牋紙凡疊六七畳程なる一幅へ、墨画の牡丹花只一輪を被仰付……天晴なる牡丹花なりと御賞感被遊、其御礼何なりと相望可申と被仰出候所、岷山申けるは、主人より禄厚く賜ければ不都束ながらも何不自由なりとも覺不申

勤仕り、世話敷身前に候得ば未だ芝居の戯場に参りし事無御座候間、俳優を見申度、これを御見せ可被下と申上ゲ、外日薩侯より厚き御仕構にて役人共付添ひ、岷山を芝居へ伴ひけると」(山下弘毅「梅鶴閑話」)

(岡岷山は薩摩の殿様の御前で、大画仙紙凡畳六七畳程の一幅へ墨画の牡丹花一輪を描くようにいわれ……「天晴なる牡丹花なり」とお褒めになり、「御札に何でも望みを」と言われると、岷山は、「主人より禄を厚く賜わっているので何不自由なく勤めてきました」が、「世話敷」立場ですからもまだ芝居の戯場に行ったことがありません。俳優をみたいので見せてください」と申上げた。後日、薩侯は厚き御仕構で役人も連れて岷山を芝居へ伴ったと言う。

【岡岷山】おかみんさん。(『広島県大百科事典』)

一七三四年(享保一九)〜一八〇六年(文化三)一一・

三。広島藩士・日本画家。名は煥、通称利源太。

幼くして広島藩の絵師勝田幽溪に学び、のち宋紫

石の門に入った。沈南蘋風の密画をよくし、広島藩主浅野重晟に仕え画道によって侍士に進んだ。

「暁竹図」「百花百虫屏風」などがある。へ原田佳子

「五節句は袴着し相互ニ勤合、尤端午は農業方別て世話敷時分ニ御座候得は、朝未明ニ相勤農業障りに不相成様仕来申候」(文政二年(一八一九)、山県郡加計村「国郡志御用ニ付下しらへ書出帳」)

五節句は袴をつけて相互に勤め合うが、端午の節句は農業が特に「世話敷」時分なので、朝未明の挨拶をして農業の障りにならないようにしてきました。

【忙しい】せわしい。(『広辞苑』)

「文」せは・し(シク) ①事が多くて暇がない。いそがしい。

これは「忙しい」の宛字ですが、いかにもその感じが出ている気がします。

年増

「西条辺峻山多御座候ニ付年々砂石夥敷流出大川筋竝切明川等埋強、……是迄迎も御定数御免許夫之外軒別出捨等をも任せ種々取計ヲ以漸大難相防居申候得共、追々年増埋強土手筋も所々危相成」(文政十一年(一八二八)「鶴亭日記」)

西条辺は嶮しい山が多く、毎年砂や石が夥しく流出し、大川筋や切明川では砂埋りが強く、……今までも御免許を頂いた定数の人夫ほかに軒別に出捨(無償労働)等をもさせ種々の手当をして漸く大難を防いでいますが、次第に「年増」に埋りが強く、土手筋も方々危険となり

「山南桑田藤十郎と云者あり、國中無双之大福者也、……時に殿様藤十郎が宅へ御殺生の序ニ御立寄遊され、……仕送りの事なと厚御頼ミ、殊に藤十郎老母へ御盃下されける、……然しより後は御用向差支なく相調ける……然るに当主様御公役向ニ付

御入用多、例年御勝手向之外に臨時之御用金年増に多而已にて一円御返済無、さしも豪富の藤十郎身代も傾計り」(天明七年(一七八七)「安部野童子問」

『府中市史』)

山南さんなんに桑田藤十郎という國中無双の金持がいた。ある時、殿様が藤十郎宅へ狩りのついでに立寄られ、資金援助をお頼みになり、藤十郎の老母へ御盃を授けた。……その後、頼まれた御用向は全て調達したが、当主様(福山藩主、阿部正徳)は御公役向(天明七、八年、老中)について御入用が多く、例年の御勝手向の外に臨時の御用金も「年増」に増加するが、さっぱり御返済はなく、さしもの豪富藤十郎の身代も傾いた。

「年増」と書いてあると、つい次のように思いがちです。

【年増】としま。(『広辞苑』)

娘盛りをすぎて、やや年をとった婦人。江戸時代には二〇歳過ぎをいった。

勿論、ここでは不相当です。

【年増】としまし。(新人物往来社『古文書用語大辞典』)

年々程度がすすむこと。

「年増」の元来の意味は「年が増す」ことでしうが、次第に展開して「やや年をとった婦人」で定着しています。それにしても、二十歳を過ぎれば「年増」とは、恐れ入りました。

永日

「略義ながら、忤事もよろしく申上度よし御座候。尚、いろく申上度候得ども、畢竟ハ無益の雑談、御多務中、貴覧も御面倒ニあらせらるべくと奉存、他は期永日之時候。恐々謹言

正月九日

滝沢解」（文政六年（一

八二三）、篠斎宛、馬琴書翰）

略義ですが、忤も宜しく申上げたいと言ってお

ります。まだ色々と申上げたいことも御座いますが、畢竟は無益の雑談、御多務中なので御面倒をお掛けしていると思いますので、「他は期永日之時候」。恐々謹言。

これは滝沢馬琴の書翰の文末です。「他は期永日之時候」は決り文句で、「他は永日之時を期し候」と読みます。

【永日】（『広辞苑』）

①日中のながいこと。特に春にいう。ひなが。はるなが。②別れの挨拶や手紙の終りなどに用いる語で、「いずれ他日ゆるゆる会おう」の意。

【期す】（『広辞苑』）

①かねてその時と定める。期待する。②覚悟する。

「他は期永日之時候」とは、「この手紙で書残したことは、他日ゆるゆるとお便りします」の意味に違いありませんが、「永日」に多少引つ掛かります。

「永日」は「日中のながいこと」です。特にそう感じるのは「春の日」です。そのように考えると、「永

日之時」とは「春の真つ最中」のことかもしれませ
ん。この手紙の日付は「正月九日」です。

「万奉期永日候也。正月五日。篠崎長左衛門。北条
讓四郎様侍史」(森鷗外著「北条霞亭」)

「万々其内期永日之時候、勿々、頓首。正月三日。

北条讓四郎。北条立敬様」(森鷗外著「北条霞亭」)

「先ず八年甫之御祝詞申し上げたく愚礼を呈し候。

尚永日之時を期し候。謹言。 山南敬介知信」(文

久四年(一八六四)、小島鹿之助宛、Blog「青風の足跡」

<http://seiran.exblog.jp/4944066/>)

「期永日之時候」の文言のある手紙がこれだけ集
まりましたが、いずれも正月に出したもののばかりです。
季節限定の挨拶、「いずれ春の長い日にゆるゆると
お便り(お会い)します」の意味だろうかと思ってい
ます。

取置

「一

娘つき

右之者宗旨之儀は代々真言宗にて、拙寺旦那二紛
無御座候、此度四国順拝二罷出候間、所々御閑所
無相違御通可被下候、行暮候節は一宿等奉願上候、
若又何国にて病死等仕候も、以御慈悲を其所之御
作法二御取置可被下候、勿論国元へ御触届ケ二及
不申候、為後日依て一札如件」(文化十四年(一八
一七)『熊野町史』)

娘つきは、代々真言宗で、拙寺(徳正寺)の旦那
に違いありません。このたび四国順拝に出ます
が、所々の御閑所を間違ひなくお通し下さい。
行き暮れたときは一宿等宜しくお願いします。
もしどこかで病死でもしたら、御慈悲をもって
その地の御作法で「御取置」下さい。勿論国元
への御連絡には及びません。後日のため一札を
書いておきます。

これは「往来手形」です。決り切った内容で、つ
い見落してしまいますが、「取置」を辞書で調べる
と思いがけない内容が書いてありました。

【取り置く】（『広辞苑』）

①手に取って（そこに）置く。②とりのけておく。しまっておく。残しておく。③処置する。始末する。特に、死体を葬る。埋葬する。

実法

「去ル申年諸国貯夫食被仰付、追々出穀貯置候得共、凡半年程之夫食有之候迄は年々困置可申旨兼て被仰渡候処、其村々人数高二引合候てハ不足之処も相見候、此上貯穀可致事二候、然処是迄之通初ニて貯置候てハ、年々詰替欠減も相立可申、其上末々之ものニ至り初出穀并石数多相成候てハ、差支候ものも有之、少々之不作ニも貯穀難相成様ニ成行、凶年之備薄難儀候間、銘々空地之場所へ稗を作置出穀いたし可貯穀候、尤稗は何ヶ年貯置候ても更ニ痛不申、若縄俵等損候節は取替候て事済勝手ニも相成候、勿論稗は如何様之場所ニも実法候

得共……」（寛政八年（一七九六）『広島県史』）

去る申年（天明八年（二七八八））、諸国に「貯夫食」を仰せ付けられて追々と出穀貯え置いてきたが、およそ半年分の「夫食」が貯まるまでは年々困い置くようにとのことで、その村の「人数高」と比較すると不足の村もあるのもつと貯穀しなくてはならない。しかし今までのように初で貯えたのでは、年々詰め替えもし、欠減の補充も必要なので、農民のなかには初を多く出穀すると差支える者もいて、少しの不作でも貯穀が難しく、これでは凶年の備えにはなりそうにない。そこで、それぞれ空地の場所へ稗を作付し、出穀して貯穀しなさい。稗は何ヶ年置いても痛まず、縄俵等が損じたときは俵の取り替えて済み手が掛らない。勿論、稗はどんな場所でも「実法」るが、……

【夫食】ふじき。（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、飢饉時に領民の食料欠乏を救うため支給した五穀のこと。

【夫食】（『広辞苑』）

（フジキとも）農民の食糧とする米穀のこと。

例文から判断すると、『岩波日本史辞典』の記述の方が正確なことがわかります。

【貯穀】（『日本史用語辞典』）

貯夫食・囲籾ともいう。江戸幕府の備荒貯蓄用の穀物。幕府では寛政改革で貯穀を奨励し、天明八（二七八）年には農民側の貯穀の二〇分の一を年貢より与え、以後二年間継続しその充実をはかった。また、貯穀のための郷蔵建築用材は御林よりあたえることにした。

「人数千三百六拾七人 内（七百拾人男 六百五拾七人女） 村中人数高」（文政十年（一八二七）『加計町史』）

「人数高」は「人口」と知れます。

「実法^{みのり}」は辞書をひくまでもなく、「稔り」です。それでも、引いてみると、

【実法】じほう。（『広辞苑』）

（ジッポウの促音ツを表記しない形）きまじめ。ばか正直。

「ばか正直」と怒られました。

蝗虫

「当島田方蝗虫夥敷追々増長仕、三田共痛弥相増候二付、役人共ハ不申及長百姓共立働手入養生色々々々ニ任せ、手届キ不申者共へは村方より加勢夫遣し、男女ニ不限昼相防せ鯨油并種油白土油粕等相用ひ、夜中者かゝり松明等二て焼立させ申候処、少しは虫欠り毛上見直し候所も相見へ、……別て島中二ても宮盛浦去ル九日十日頃より虫気見付、今日迄全皆損三田共凡三步位、中痛三步位、六歩位大痛二御座候、……此趣ニ御座候ては追て弥増可申と十方暮居申」（寛政四年（一七九二）七月十六日『下蒲刈町史』）

当島（安芸郡蒲刈島）の田に蝗虫が夥しく段々と増加し、三田（早稲・中田・晩田）とも被害が増しているの、村役人をはじめ長百姓共も立働いて色々と手当をさせ、手が届かない者へは村方より加勢夫を出し、男女にかぎらず昼は鯨油・種

油・白土・油粕等を用いて防ぎ、夜中は篝松明等で焼き立てさせたので、少しは虫も減り作物も見直した所も見え、……特に島中でも宮盛浦は去る九日十日頃より虫気が見つかり、今日迄全皆損の田は三割位、中痛は三割位、六割位は大痛の状態です。……この様子では次第に被害が拡大すると思われ「十方暮」ています。

「蝗虫」と書いてあるので、蝗^{いなむし}の被害があつたのかと思ひ調べました。

「寛政四年（一七九二）浮塵子が大量発生したとき、油をたびたび撒いて被害を最少限に食いとめたことを伝えている。油は種油や胡麻油も用いられたが、鯨油が最も効果が大きいといわれている。先に掲げた「御問状答書」でも、蝗害については「人々手火を燃し田間をありき候、又鯨油を水にそそぎ候も御座候」と記しているから、もちろん福山藩域でも鯨油の使用が行なわれていることは明らかである。」（『広島県史』近世二）

ここには、蝗ではなく「浮塵子」と書いてありま

す。どうやら、別物のようです。

【浮塵子】うんか。（『広辞苑』）

カメムシ目（半翅類）ウンカ科・ヨコバイ科などの昆虫の総称。形はセミに似、大きさ約5mm。口吻で植物の汁を吸い、またウィルスを媒介する種類もある。後肢はよく発達し、跳躍し、また飛ぶ。大群をなすこともある。種類はきわめて多くセジロウンカ・ヒメトビウンカ・トビイロウンカ（以上ウンカ科）・ツマグロヨコバイ（ヨコバイ科）は稲の害虫として有名。古来、しばしば凶作の原因。こぬかむし。さねもりむし。糠蠅。蝗（いなむし）。

【稲子・蝗】いなご。（『広辞苑』）

バッタ科イナゴ属の昆虫の総称。体長約3cm。稲の害虫。体は緑色、翅は淡褐色。後肢が発達してよく跳び、第一腹節部に聴器がある。鳴かない。夏・秋に田圃・草原に多く、秋、土中に産卵する。ハネナガイナゴ・コバネイナゴなど。

「十方暮」は、勿論宛字です。

【途方に暮れる】（『広辞苑』）

どうしてよいかわからないで、困りきる。

朝鮮通信使

「当地ハ古来朝鮮人饗応ノ地ニテ、朝鮮人來ル時ハ
前日ヨリ藩主ヨリ監官・幹官・主計・所由・
フシシギョウ・チソウヤク・ソウシヤカン・アシカル・ブノモノ・コヤクニン
監工・典賓・謁吏・官健・役夫・小吏ノ
類ヲ衆多サシコサレ、御茗屋トテ新ニ高第ヲ造営
アツテ、船ヨリ是ニ至ルマテ途中一丁余毛氈ヲシ
カル、コヽニテ山海ノ奇品ヲ備ヘ饗応アリ、対州
公ハ御客屋ニテ饗シ賜モフ、（上御茶屋・下御茶屋
トテ兩所アリ、今ニ屋鋪跡アリ、又朝鮮人屋鋪ト云）、
其式甚タ嚴重ニシテ其美麗ナルコト筆端ニノベカ
タシ、（朝鮮人來ノ節ハ前日ヨリ山中ニ新飯屋ヲ造リ、
街中ノ人民ヲコヽニウツシ、市中ノ家宅不殘公廨・
官廠ニセラル、事終テ後夫々古宅ヲカヘサル、御茗
屋ハ常ニ屋鋪跡ハカリアリ）」（文化十二年（一八一五）

『蒲刈志』）

当地（三之瀬町）は昔から朝鮮人饗応の地で、朝鮮人が来る時は、前日より藩主より奉行・幹官・勘定方・役人・普請奉行・馳走役・奏者・足輕・役夫・小吏の類を多く送込み、御茗屋（御茶屋、迎賓館）といつて高第を新築し、船からここまで途中一丁余（二〇〇坪余）に毛氈を敷き、ここで山海の奇品を備えて饗応する。対馬公は御客屋でもてなす。（上御茶屋・下御茶屋とて二箇所あり、今でも屋敷跡があり、「朝鮮人屋鋪」と言っている）。その様子は甚だ嚴重で美麗、筆紙に尽くしがたい。（朝鮮人が来るときは、前日より山中に新飯屋を造り、街中の者をここに移し、市中の家宅は残らず役所・役人部屋になる。事が終わって後、それぞれ古宅を返す。御茗屋はいつも屋鋪跡ばかりがある。）

三之瀬（呉市下蒲刈町）は、朝鮮通信使の寄港地であった。

朝鮮からの使節団の総員は平均四〇〇人ほど、広島藩の接待要員は七〇〇人以上、合計一〇〇〇人を超える人数がこの小さい島につめかけます。三之瀬

町の人数は一三八四人（弘化三年（一八四六））。その日、島民は藩の要員の宿舎にするため家を空け、山中の小屋に移ったといいます。毛氈や「安芸蒲刈御馳走一番」が有名ですが、島民を締め出すのもスゴイ話です。

差繰

「委細上文申上候通、尚先達ても御歎書附差備置申候次第、勿論駅所之義ニ御座候得は、焼失諸家作仕戻し不申候ては諸向御通行之節御差間ニ相成申候ニ付、家主共銘々差繰、高歩之銀子借暮仕、差向相凌申候義ニ御座候得は……」（嘉永二年（一八四九）正月「野間家文書」）

委細は前文の通りで、先達ても御歎書附を差上げておりますが、なにしろ海田市は駅所ですので、焼失諸家作を復旧しないと諸向御通行の節御差支えになりますので、家主共はそれぞれ「差繰」（やりくりをし）、高利の銀子を借りて暮

し、差向は凌いでいます……

嘉永元年（一八四八）十一月十日、西国街道の駅所、海田市（広島県安芸郡海田町）で大火があり、焼失家数一一八軒、焼死者三人の被害が出ました。この文書は「焼家御仕向残材木御下渡之義追御願書附」で、藩から材木の下げ渡しを願っています。文中に「差繰」という言葉があります。

「然は春普請所御見分として新保彦兵衛様御廻村、左之通御休泊被遊候間、例之趣ヲ以飛渡瀬村御休泊所へ疾より御出揃可被成候、……御差間之儀有之候とも御差繰、名代無之様必々御出浮可被成候、猶又弁当各々御持参可被成候、已上」（天保十二年（一八四一）「踊場家文書」）

さて、春普請所の御見分のため新保彦兵衛様（郡廻り）が御廻村になり、左のように御休泊されますので、いつもどおり飛渡瀬村の御休泊所へ早朝から疾より御出揃ください。……差支えてもなんとか「差繰」（くりあわせ）、代理のないよう必ずお出で下さい。なお弁当は各自でご持参下さい。

割庄屋から村役人に宛てたこの文書にも「差操」が使われています。「差支えても必ず出席」とは…。

【差し繰る】（『広辞苑』）

さしつかえないように都合をつける。くりあわせる。

勿論、この説明に文句を付けることはありませんが、広島では意味が広がった別の使い方もあります。うまく立ちまわって自分の利益をはかる。並んでいる順番を抜かして割り込む。ごまかす。

これは広島だけでなく、中国・九州でも使われるようですが、古文書でこの使い方をした例を知りません。

工手間

「年来御懇意の中なから、これ迄一臂の力をつくして御為ニいたし候事も無之、交遊之間、尤耻しく

候へハ、此度之御頼を幸ひと存、国字評并ニ此度之校訂・点裁等、前後三、四十日の工手間をかけ申候、御一笑可被下候」（天保二年（一八三一）篠斎宛、馬琴書翰）

長年御懇意にしていたきながら、これまであなたのために一臂（片腕）の力を尽くすこともなく、交遊の間に恥ずかしく思っていました。この度の御依頼を幸いに、『水滸後伝』国字評とこの度の校訂・点裁などに、前後三、四十日の「工手間」をかけました。お笑い下さい。

滝沢馬琴が、友人殿村篠斎に宛てた手紙です。文中「工手間」という言葉の読みに困っていると、それは「くでま」ですよ、昔使っていました、と教えられました。

【工手間】くでま。（『広辞苑』）

職人が物をつくる手間。手数。また、その工賃。

成程、「物をつくる手間」ですか。この場合は馬琴の仕事ですから、「職人のくでま」は当りませんが…。

昔は日常的に使われていた言葉が、今では知る人が少ない。残念なことです。

文目

「予に或農夫語ていえらく、吾綱貫を九月すへより春三月までに一足価銀八匁なるを二足はく事にて、此代合十六文目なり」(大蔵永常『農具便利論』) 私に或る農夫が話すには、「私は綱貫^{つなぬき}(牛皮製で底に鉄釘を打った雪沓)を九月末より春三月までに、一足価銀八匁のものを二足履くので、この代金は十六文目になります」。

ここでは「文目」は「匁」と同じく、銀の重量單位として使われています。読みは勿論「もんめ」です。

江戸時代のお金は、金(両)・銀(匁)・錢(文)が基本的なもので、銀貨はその重さで一匁と量り、銅貨は一文と数える。ここでは、本来は「匁」と書くところを「文目」と宛字を使っている。……と理解し

ていました。ところが、

【匁・文目】もんめ。(『広辞苑』)

①尺貫法で重量の単位の一。貫の千分の一。略して目(め)、古くは錢(せん)という。三・七五[㍻]に当る。泉。②江戸時代、銀目(ぎんめ)の名。小判一両の六〇分の一。③(「文目」と書く)錢(ぜに)を数える単位。錢一枚を一文とした。

「匁」と「文目」が同じ項目に書かれ、重量單位と錢を数える單位との説明があります。ひよっとすると、単なる宛字ではないかも知れません。調べてみると、

「文」は穴あき錢を数えるときの呼称で、日本では一錢を一文目と呼ぶようになり、これに錢の正字「泉」の草書「匁」を当てた」(小泉装裱勝『單位の歴史辞典』)

「本来の寛永通宝一枚は、ほぼ一匁(三・七五[㍻])」(東野治之『貨幣の日本史』)

「民間では「一文錢の目方」または秤の「一文の目」の意味で「もんめ」と呼びならわされるようにな

った」（小泉袈裟勝『単位の歴史辞典』）

これで「錢一〇〇〇文が一貫文」という意味がはじめて解りました。「文」と「匁」の深い関係も知らずに、単位の違いだと今まで思っていたとは……トホホ。

ちなみに、五円硬貨の直径は二二mm、重さは三・七五g。

追揚百姓

「当郡田打村之義は、從來極々難渋村ニ御座候て、別紙書付を以村役人共より申出候通り相違無御座候、去巳年已来私共手元ニおゐて、夫々取約借財捌方種々様々駄引仕候得共難捌、其上午年追揚百姓闌米多端之義にて、弥増捌方工風無御座ニ付」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

当郡の田打村は、以前から極難渋の村で、別紙の書付（前資料）で村役人が申し出ている通りです。去る巳年（明治二年（一八六九）以来、私共（割

庄屋が田打村の借財の処理について骨を折りましたが解決できません。そのうえ、明治三年（一八七〇）の追揚百姓のため「かきまい闌米」が多くなり、ますます処理方法の工夫もつきません。

この資料は、十月二日のブログ「冠米」に引用したものです。そこでは「闌」を組板にのせ、これは「かき被く」で、「損失・責任などを引き受ける、しよいこむ」の意味であると書きました。今度は「追揚百姓」について調べました。

『広島藩地方書の研究』には、「年貢未進の果てに村を追われる「追揚」百姓」と書いてあります。「追揚百姓」とは、年貢未進のため村を追われる百姓のことのようにです。

年貢の未進があると、他の村民が共同で負担して年貢を納入します。つまり、「闌米」になります。実際に庄屋であった松浦唯次郎の話、「淡交夜話」は、次のように説明します。

「租税ハ庄屋役ノモノ一町村ノ額ヲ負担シテ收納ス、町村民ハ庄屋へ納ムルモノニテ、其納ムルト未納

ト二拘ハラス庄屋ハ完納セサルヲ得サル例ナリシ、未納者アルニ於テハ私金ヲ以テ立換ヘサルヲ得ス、故ニ又町村民ヨリノ徴収上ニハ頗ル権力ヲ有ス、怠納者ヘハ手錠ヲ命シ或ハ家宅搜索ヲナシ、不納者ノ如キハ身代限ヲ没収シ、其不足米金ハ町村民一般ヘ賦課ス、此処分ヲ受ケタルモノヲ追揚ケ百姓ト云フ、村内ノ辺陬地ヘ小屋掛ヲナシテ居住セシム、其棟ヲ蔵掛ケ屋根ト云フ倉庫ノ如キニ方ノミノ屋根トシ、一見追揚ケ百姓タルヲ了知セシム、又戸主ハ勿論一家族下駄・傘・羽織ヲ用ルルヲ禁シ、土地ヲ所有セシメス、公私ノ出会ニ最末席セシム」(『淡交夜話』『三原市史』)

一町村の年貢は庄屋が負担して納める。町村民は庄屋へ年貢を納めるので、完納・未納に関係なく庄屋は藩に完納しなければならぬ。未納者があれば自分の金で立替えてでも納める。だから町村民から徴収する上では強い権力も持ち、怠納者へは手錠をかけさせたり家宅搜索をする。不納者には身代限り(全財産を没収し、売り立て代金が庄屋に渡される)、それでも税額に不

足すれば他の町村民一般へ負担させる(闔米)。この処分をうけた者を「追揚ケ百姓」といい、村外れに小屋掛をして住まわせる。その屋根は「蔵掛ケ屋根」といつて倉庫のように二方だけの屋根とし、見ただけで「追揚ケ百姓」だと判るようになっている。戸主は勿論、家族はすべて下駄・傘・羽織の使用を禁止し、土地を所有させない。公私の会合では最末席とする。

【身代限り】しんだいかぎり。(『広辞苑』)

江戸時代、負債主が定められた期日までに負債を償還できない時、一定の手続を経て身代全部を債権者に提供して債務にあてたこと。この処分を受けたものは、その償還を完了するまで種々の権利・資格を喪失する。今日の破産または強制執行に当る。

「追揚」とは「村から追放することではなく、「農民としての種々の権利・資格を取り上げる」とのような気がします。

「貢米上納期限までに未進の農民ある時は、家屋・田畑・山林・家財等まで残らず未進方に没収せら

れ、居所を退去せしめらるゝ事あり、之を片付百姓又は追上げ百姓ともいへり」(『芸藩志拾遺』)年貢米上納期限までに未進の農民がある時は、家屋・田畑・山林・家財等まで残らず未進方に没収せられて、居所を退去させられることがあり、これを「片付百姓」または「追上げ百姓」とも言う。

「居所を退去」は「居村から退去」ではなく、「住居から退去」と解釈できるのではないかと思います。

信居り合宜鋪

「心学道話之義は愚昧之百姓共耳二入やすく、既二一昨年、賀屋忠恕様御廻郡、御道話被成下候節、御実効も御座候て、委細其節申上置候通二御座候、昨年暴動之後、追々鎮定之姿二御座候得共、此場合賀屋様御廻郡村々御道話被為成下候ハ、信居り合宜鋪、人氣和らぎ可申と奉存候間、格別を以二月中旬より日数三十日御廻邸被成下候様奉願上

候」(明治五年(一八七二)「統波多野家文書」)

心学道話は愚昧の百姓でも耳に入りやすく、一昨年、賀屋忠恕様が御廻郡になり御道話をされたとき実効があり、委細はその節申上げました。昨年の暴動(武一騒動)の後、追々と鎮つていますが、この度も賀屋様が御廻郡になり村々で御道話を頂ければ、「信」居り合も宜しく人氣も和らぐものと思いますので、格別を以て二月中旬より日数三十日間、御廻村頂きますようお願いいたします。

【心学】(『漢字源』)

江戸時代、石田梅岩らの唱えた一般民衆向きの実践道徳。神・儒・仏の三教を調和させた教え。石門心学。

【賀屋忠恕】(『三百藩家臣人名事典』)

天保九年(明治十七年(一八三八)八四)。広島藩士。心学者。……石門心学に入つて忠恕と称した。……同(明治)二年、藩命により領内の各地を巡回講読して心学による教化に従い、藩主長敷からもしばしば招かれて道を説いた。……

【武一騒動】（『岩波日本史辞典』）

一八七一（明治四）、旧広島藩の安芸・備後両国に広がった一揆。頭取森脇武一郎（山県郡有田村、一月鼻首）の名にちなむ。同年七月の廃藩置県による旧藩主一代浅野長訓の上京を阻止するため広島へ強訴し、その後領内各地で官員宅・公機関・割庄屋・庄屋など二〇〇軒近くを打ちこわした。維新政府の新政策への不安や不満が、旧領主引留めという形で出現し、最も大規模な一揆となった。隣接する福山藩でも引留一揆が発生している。

資料中に「信居り合宜鋪」の文言があります。
「信^{まことに}居^{おり}り合^{あい}宜^{よろしく}鋪」と読むようです。

【信】（『漢字源』）

《音読み》シン《訓読み》まこと／まことに／のびる（のぶ）／のばす／まかせる（まかす）
〔副〕まことに。ほんとうに。「若妻信病、賜小豆四十斛」若妻信二病メバ、小豆四十斛ヲ賜ヘヨ」（『魏志』）

押借二等敷

「今般米価高直ニ付、諸人難儀之趣相違も無之候得共、貧窮人共往還広場へ屯集致居商人共より施行を乞募り候趣、押借二等敷左迄困窮ニ不至もの迄相進メ…」（落合功『入門 事例で見る江戸時代』）
この度は、米価高値のため、誰でも難儀をしていることは同じであるが、貧窮人どもが往還や広場へたむろし、商人どもに施行を迫っているが、これは「押借二等敷」、それほど困ってない者も一緒に…。

「押売」は「押売りお断り」という玄関先の貼紙で今でも健在（効果の方はどうでしょうか）ですが、「押買」となると、意味は解つても使ったことはありません。まして「押借」という言葉は古文書でたまに見かける程度です。

【押借り】（『広辞苑』）

無理に金品を借りること。

古文書には、「宜敷」など、「く敷」(くしく)と表示することは「珍敷」ありませんが、「押借ニ等敷」の「等敷」^{ひとしく}は珍しい書き方です。

馬鹿等敷

また、「く敷」の話です。

「夜四ツ時分、船宿より宮島へ渡ため、船二乗れ共、九過迄潮不満とて船を不出、漸出しと思しに、又砂二つかへて不動、乗合ともに陸へ上り暫歩し、又船二入りけれハ又不動、乗合ハ横着者多不上工面をし而已し、我一端衆を励して不残上ケけれ共、彼是する中潮ハ追々引、船計りニても不泛様二なり、乗手も迷惑船頭も骨折損、終ニ小船を雇イ、一里計り乗りて草津と云所へ附、刻ハ既ニ夜明たり、寒さハさむし、寝もせず、今宵ハ馬鹿等敷目ニ合たり」(安政六年(一八五九)九月廿四日、河井継之助の旅日記「塵壺」)

夜四ツ時分(二〇時頃)、(広島)の船宿より宮島へ

渡るために乗船したが、「九つ(午前〇時)過まで潮が満たない」と言つて船を出さず、漸く出たと思えば、又砂につかえて動かず、乗合はみんなに陸へ上り暫く歩く。又船に乗ると又動かない。乗合は横着者が多く上がらない工夫ばかりするので、私はみんなを励まして一度は上陸させた。そうこうするうち潮は次第に引き、船だけでも浮ばず、乗客も迷惑、船頭も骨折損。とうとう小船を雇い、一里ばかり乗つて草津という所へ到着したころは、既に夜が明けていた。寒さは寒し、寝もせず、今宵は「馬鹿等敷」目にあつたものだ。

船宿の所在地がわかりませんが、デルタのために遠浅で適当な港のない広島では、干潮時には船が動かないことがよくわかります。河井継之助は、「馬鹿等敷目ニ合たり」と怒っています。勿論、「馬鹿等敷」は「馬鹿らしき」と読むはずです。前回の「等敷」より珍品です。

【河井継之助】(『広辞苑』)

幕末の越後長岡藩の家老。名は秋義。号、蒼竜

窟。古賀謹堂・山田方谷らに学ぶ。藩財政を再建。洋式の銃砲を購入してフランス式の調練を行なった。戊辰戦争にあたり長岡城に籠城して政府軍を苦しめたが負傷し、落城後に死亡。(一八二七～一八六八)

不勘定

「昨冬御家中様他所酒御取寄被為在候義見当り申候二付、素より御達之振り合を以御法度之義と相心得、其酒御預り申早速御注進奉申上候処、其取計方甚以不統合ニも相当候義御坐候て、蒙御咎ヲ奉恐入候義ニ御坐候、然ル処、他所酒御家中様御義ハ御勝手ニ御取寄被為在候事ニ相成、右ニ付市中締り合も所詮難附、先ツ他所酒勝手次第同様之義、就てハ聊之造酒も売後レニ相成、別て不勘定、扨々歎息仕居申候」(天保十三年(一八四二)『三原市史』)

昨年の冬、御家中様(広島藩三原家老浅野の家中)が他所の酒を御取り寄せになったことがわか

り、勿論、御法度との御達もありましたので、その酒を御預りして早速御注進申し上げましたところ、そのやり方が不適當であると御咎を蒙りました。しかし、他所酒を御家中様が勝手に取寄せられると、市中の締り合も付きませんので、他所酒の取寄せ自由化と同じことになってしまいます。これでは私共のわずかの造酒も売れ残りになり、たいそう「不勘定」なことです、我々酒造業者は歎息しております。

これは、三原の「酒屋惣代」が三原西町年寄川口屋源右衛門宛てに出した願書です。

「今年春方より塩直段不景氣ニ御座候所、五月下旬より早続ニ相成、塩直段追々下落、此余何程引下ケ可申も難斗、塩浜不勘定は不及申、不大形損亡年ニ御座候」(嘉永六年(一八五三)『瀬戸田町史』)

今年の春より塩値段が下落して不景氣でしたが、五月下旬より日照り続きのため、塩値段はますます下落、今後どの位引下げるか予想も付きません。塩浜の「不勘定」は言うまでもなく、大変な損亡年です。

これらの例文から、「不勘定」とは「採算がとれない」の意味だと思います。

不統

「給知方收納立派ニ取計候義、元りの事ニ候へ共、中ニは不統ふすべの取計致村方も有之哉ニ相聞、如何の事ニ哉、自今統合不ふすべ宜は急度相改可申事」（嘉永六年（一八五三）『佐伯町誌』）

給知（知行地）方で年貢納入を立派にすることは勿論であるが、中には「不統」の取り計らいをする村方もあると聞いており、如何なものだろうか。今後は「統合不ふすべ宜」ことはきちんと改めなさい。

古文書で「不統」という言葉は珍しい用語ではありませんが、辞書には載せてありません。『佐伯町誌』の編集者が付けたと思われるルビは「ふすべ」とあります。意味は、すぐ後に続く文言、「統合不ふすべ宜」（統合がよくないこと）と同じだと考えられます。

従つて「統合」が解れば「不統」も解るはずです。

「御領分宿駅作法之義は建り合も有之、素り不統合之義は有之間敷候得共、即今公儀之御振り合も有之折柄ニ付、御大名様并公儀御役方御通行之節は勿論、都て旅人へ対別て作法宜仕、人足・馬士類心得違酒手杯乞請候相成猥ケ間敷義無之様、一統へ手厚相示可申事」（天保十二年（一八四二）『広島県史』）

広島藩領の宿駅での作法については法則もあり、「不統合」のことではないと思われるが、現在幕府の御振り合もあるので、御大名様や公儀御役方の御通行のときは言うまでもなく、全ての旅人へ対しても作法をよくし、人足・馬方などが心得違をして酒手などをねだるような猥りなことの無いよう丁寧に指示しなさい。

【統合】とうごう。（『広辞苑』）

二つ以上のものを一つに統とべ合あはせること。統一。二つの例文で「統合」を「統一」と解釈するには無理がありそうです。そこで、「統とべ合あひ」と考え

て、

【統べる・総べる】すべる。（『広辞苑』）

①個々のものを一つにする。別々のものをまとめる。②支配する。管轄する。

の「②支配する」と解釈します。もつとも、「支配」というギラギラした言葉ではなく、「やり方」くらいのソフトな意味と思えば、「統合不宜」は「やり方が良くない」になるし、「不統合之義」は「良くないやり方」になるでしょう。

真踏

「一平田屋橋真踏之板九尺程、往来之馬踏折申候、依之御注進申上候、以上

辰八月四日

堀川町

平田屋町」（天明

四年（一七八四）八月四日「堀川町覚書」）

平田屋橋、「真踏」の板が九尺ほど、「往来之馬踏折」りましたのでお知らせします。

これは広島城下、西国街道に架かる平田屋橋の破損について、関係の町が注進した文書です。文中「真踏之板」について調べました。

『三原市史』に、「堤真踏壱間内外」とあり、（馬踏）と注がつけてあります。

【馬踏】ばふみ。（『日本史用語辞典』）

江戸時代の河川で、堤防の上を人馬が通行するように平らになった部分のこと。堤防を作るときにはまずこの寸法から決められたという。

【土居】（『世界大百科事典』）

城郭や屋敷地の周囲に防御のために築いた盛土のこと。……土居の頂の平面を馬踏（まふみ）といい、

「真踏」は「馬踏」の宛字でした。すると、「馬踏」の読みは「ばふみ」ではなく、「まふみ」のはずです。また、意味も、堤防や土居の通行部分だけではなく、橋も仲間に入れる必要がありそうです。

この文書で、「往来之馬踏折申候」の文言は紛らわしい言い方です。「往来する馬が橋の板（真踏）を

踏み折った」のか「往来(橋)の馬踏(路面)が折れた」のか、二つの解釈ができます。前月にも同様な註進をしていますので、それを参考にすると、

「平田屋橋西詰より四五枚目の板、小口少々くさり、惣鉢釘ゆるミ居申候処、只今往来之馬踏折、往来無心元奉存候、尤今日は駄荷馬等往来多御座候二付、其所へ印建置申候」(天明四年(一七八四)七月十七日「堀川町覚書」)

平田屋橋西詰より四五枚目の板の小口が少々腐り、全体に釘が緩んでいましたが、只今「往来之馬踏折」、通行に危ない状態です。今日は駄荷馬等の往来が多かったので、破損箇所へ印を建てました。

このとき長崎奉行の通行があり、「駄荷馬等往来多」と言いますから、馬が踏み折ったものと解釈しました。

「馬踏を馬が踏み折った」と書けば、(ふざけるな)と怒られるかもしれないので、「真踏」と「馬踏」に使い分けた……?

もあひ

「是迄書肆へ百回本のよろしきを御注文被成候よし、然処、百二十回の善本有之候ハ、ほしく思召候、もしさる本出来候ハ、老拙ともあひニ御求め被成度思召のよし、老拙方引用済候節、価の半金にて御引とり、御蔵本ニ被成度趣、御教示之旨、承知仕候」(天保二年(一八三二)篠斎宛馬琴書翰)

これまで本屋へ(水滸伝の)百回本のよいものを御注文されたとのこと、しかし、百二十回の善本(全本)があれば欲しいので、もしその本が見つかれば、老拙(馬琴)と「もあひ」で入手したいとの思召、私の方で引用が済めば、価の半金で引取って御蔵本にしたいとお考え、承知しました。

「中国の通俗小説は「回」と呼ばれる講談の一話に相当するまとまりからなるが、施耐庵あるいは羅貫中がまとめたと言われる水滸伝の初めの構成は百

回から成っていた。…水滸伝が人気を博するようになると、一六世紀頃に……付け加えられた百二十回からなる版が生まれた。」(水滸伝(Wikipedia))
『水滸伝』(百二十回全本)は簡単には入手できにくいとみえて、殿村篠斎は滝沢馬琴と「もあひ」で求めたいと提案しています。

「当村百姓共難渋仕難取続趣は……田畠土地は衰へ前々と違ひ都て作方取実も無之趣ニ相見へ、作牛等も不自由ニておふくハ模相持ニ仕候様と相見」
(文政八年(二八二五)『三原市史』)

当村(豊田郡両名村)の百姓共が難渋するのは、田畠の土地が衰え、以前と違い作物の取実もないようで、作牛等にも不自由し、多くは「模相持ち」にしているようで、

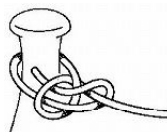
【もやい】(『広辞苑』)

①(「舫い」と書く)もやうこと。船と船とをつなぎ合せること。むやい。②(「催合」と書く)(イ)二人以上の者が一緒に仕事をする事。共同。おもやい。(ロ)部落内の共同作業。また、利益

の共同分配。

「舫い」と「催合」が同じ項目で説明されているのも驚きです。(図は舫い結、『広辞苑』)

本の共同購入話を持ちかけたのは篠斎かも知れませんが、本当に欲しかったのは種本にする必要があった馬琴でしょうから、この話は篠斎の好意から出たものと思います。(原書)は余程高価で、入手の機会も少なかったのだらうと思います。



徘徊

「他国医師当町へ参込、忍ひく致療治、御当地住居願いたし候類有之由相聞へ候、右類は町方引受之者無之候ては其業不相成事ニ候処、医師躰ニて他所者参込候趣風聞相聞へ、右躰之者忍ひ候て参込徘徊いたし候てハ御当地町医師渡世之妨ニも相成、其上如何敷意味も有之候ニ付、右等之趣慥ニ相聞候へハ、宿主は勿論其者とても及吟味候間、

此旨町方へ可申付置候、尤他所者ニても医術至て勝レ、或は御当地不自由之医術ニ候へハ、其格別を以御当地住居又は滞留願定法之通ニ取計ひ、其趣願出候は聞届候儀も可有之候」(天明四年(一七八四)「堀川町覚書」)

他国の医師が当町へ入り込んで秘かに療治をし、御当地へ住居願を出していると聞いているが、町方に請人(保証人)がなくては営業できないのに、医師の躰で他所者が参り込んでいるとの風聞がある。(このような者がこっそり参り「徘徊」しては、御当地の町医師の営業妨害にもなり、怪しくもあるので、そうと聞けば宿主は勿論本人も吟味するので、町方へ触れ知らせなさい。但し、他所者でも医師が大変勝れるか、御当地で不自由している科目の医師なら、特別に御当地住居・滞留願が決りどおり出るなら許可する。

「近來沖合ニ芸子類之船繋り居候て、右芸子類之者町方致徘徊候趣之相聞候、右躰之者堅イセ申間敷候、依之忍ひ廻り之者差出し致出合候者有之候得

は無案内入込み急度遂吟味候間」(天明四年(一七八四)「堀川町覚書」)

近來、沖合に芸子類に船を繋留し、芸子類の者が町方を「徘徊」していると聞く。そのような者は絶対イせてはいけない。そのため忍びで巡視する者を差向け、出合(密会)している者があれば断りもなく踏込んで必ず吟味をするので、「徘徊」という言葉の使われた二つの文書を示しました。

【徘徊】(『広辞苑』)

どこともなく歩きまわること。ぶらつくこと。

「他国医師当町へ参込」み、治療をしているので、「徘徊」とは「どこともなく歩きまわる」のではなく、「秘かに住み着く」ことでしよう。

繋留した船を「基地」にして町方を「徘徊」する「芸子」の例は、「どこともなく歩きまわる」に当てはまるかも知れませんが、「徘徊」と同義で「イむ」を使っています。「イ」については、このブログ「イ」07/10/7で検討しました。「イ」の意味は「徘徊

徊」を通り越して「秘かに住む」にも当るのではないかと書いていますが、この例文でも「秘かに住」んでいるのかも知れません。

何敷

「同夜、広島より飛脚帰り便にて、中兄（井原）保三郎より書状到来、書面之趣にては、大兄（中村）蔵太郎様病氣殊之外差重り、薬ハ勿論食事も難相叶趣にて大切ニ及候付、小子義至急ニ帰広方山本卯助より種々と御役所向ヲ駆引呉候趣ニ候へ共、此節柄御人少中故交代六ヶ敷由ニ付、……翌廿三日早天、佐藤守真殿へ駈合、紙面差出ニ相成、夕刻飛脚帰り候へ共為何答無之、然ル処同廿四日夕、広島より飛脚来り、山本卯助より之紙面之趣にては、中村兄様長々病氣ニ候処、養生不相叶、去ル廿二日死去被致、就ては急々罷帰候様申来候処、何敷昨朝佐藤殿より之答書も無之ニ付、直ニ引取候業も不相叶」（明治四年（一八七二）九月『宮本愚翁

日記」

同夜（明治四年（一八七二）九月廿二日）、広島より飛脚の帰り便で、中兄（井原）保三郎から書状が来た。大兄（中村）蔵太郎様の病氣がことのほか重くなり、薬は勿論、食事も難しく危篤とのこと、私が至急帰広できるようにと山本卯助が種々と御役所に交渉してくれたが、今は人手不足で交替はむつかしく、……そこで翌日の早朝、佐藤守真殿へ手紙で御願したが、夕刻に飛脚が帰るが何の返答もない。廿四日夕、広島より飛脚が来て、山本卯助の手紙には、「中村兄様長々病氣ニ候処、養生不相叶、去ル廿二日死去被致、就ては急々罷帰候様」とあつたが、「何敷」昨朝の佐藤殿より返事もないのですぐに引き取ることもできず、

「難捨置ニ付、御趣法振之義御給主様へ御願申上居候場合、去ル巳年御俸禄御奉還、御本手へ御一詰ニ相成、御仕向等も無御座候、就ては御手元へ申出、趣法向種々様々御評議被為下候得共、何鋪多分之借米相捌不申」（明治五年（一八七二）「続波多

野家文書」

（田打村の難渋は）放置できないので、救済策を御給主様（家老、浅野豊後）へ御願しておりましたが、去る巳年（明治二年（一八六九））俸禄を奉還されて、御本手（本藩）に加えられたので、御援助もありません。そこで御手元（広島県庁）へ申し出、対策を種々様々御評議いただきましたが、「何鋪」多分の借米のため処理できず、

「何敷」「何鋪」という言葉を使った文書は少なく、明治初年の二例がありました。辞書にはありませんが、文意からすると「なにしろ」「何分にも」に相当する言葉ではないかと思えます。

【何しろ】（『広辞苑』）

（シロはス（為）ルの命令形。他のことは一応別にして、これだけは強調したいという気持を表す）なんにしても。なににせよ。とにかく。

【何分にも】（『広辞苑』）

（「何分」を強めたいい方）何といっても。

隠地

「当村之儀は、小川筋凡壱里貳拾丁程之内、東西山高、中二小川有、其左右二田畠御座候処、右地幅せまく至て日当り悪敷土地柄ニ御座候、大田川筋之儀は、村内凡廿五丁之間、左右郷中畠計之土地ニて前二大川ヲ引受申場所ニ御座候、全躰当村之儀ハ山高、不平して隠地勝ニて作物熟シかたく一統困窮之村方、其上人数多村方ニて農業計ニては渡世仕かたくニ付、農間ニは為稼塩硝煮渡世之もの備後備中作州方角其外萩御領迄も稼ニ罷出此分凡式歩方」（文政二年（一八一九）穴村「国郡志御用ニ付下しらへ書出シ帖」）

当村（山県郡穴村）は、小川筋は壱里貳拾町ほどあり、東西の山は高く、中に小川があり、その左右に田畠があつて地幅狭く日当りが悪い所です。大田川筋は、村内で廿五町、左右に村落があり畠ばかりの土地で前に大川があります。全

体的に山は高く、平地がなく、「隠地」勝ちなため、作物が熟しがたく困窮の村方です。そのうえ人数も多く、農業だけでは生活できないので、農閑に塩硝煮の出稼ぎで備後備中作州や萩御領までも行く者が二割います。

山県郡穴村(現、広島県山県郡安芸太田町穴)は山村で、平地が少なく、農業だけでは生活できないので、農閑期には二割の者が「塩硝煮」の出稼ぎ、三割が杣木挽として「御当国は勿論九州四国其外大和河内辺」まで出掛けたといえますから、驚きです。

「隠地勝ニて作物熟シかたく」とあります。

【隠地】おんち。(『広辞苑』)

隠して耕作し、年貢を納めない土地。隠田(おんでん)など。

これは当てはまりません。適するのはこちらです。

【陰地】おんじ。(『広辞苑』)

山林中の日陰の地。

一概に誤字だと決めつける訳にはいきません。「陰地」のことを「隠地」と書いた例はいくらでもある

からです。

真急

「三原御用人熊谷善兵衛様・御物頭都築谿太郎様已下百三十拾余人、去九月中旬甲奴郡本郷村へ御出張、暫同所二御止宿之处、四月二十八日真急御引取二相成、同所七ツ下りより御発足ニて、当所へ夜半時分御着、尾道屋上原屋を始メ数軒御宿ニ相成」(元治元年(一八六四)「郡用帖」)

三原(家老浅野氏)御用人熊谷善兵衛様・御物頭都築谿太郎様以下百三十拾余人が去る九月中旬、甲奴郡本郷村へ御出張になり、暫くそこに御止宿のところ、四月二十八日、「真急」に御引き取りになって同所を七ツ過ぎに出発され、当所(甲山町)へ夜半時分に御着きになり、尾道屋・上原屋など数軒に宿泊されました。

百人を超える人数が、何のために移動しているのか、事情は分りませんが、甲奴郡本郷村(現、広島県

三次市甲奴町本郷）から世羅郡甲山町（現、世羅郡世羅町甲山）に移っています。出発は「七ツ下り」、「夜半時分」に到着です。県道五一号線を通れば山道で約二〇km、五時間もあれば行ける距離ですから、出発の「七ツ下り」は午後四時過ぎという、変な時間です。まさに、「真急（大急ぎ）御引取」です。

「百姓とも過半藁肥ハ不残売払、忽田地へ当テ候肥無御座、且日々稼喰ニ御座候故、麦作手守護等も届兼候、此姿ニテハ不遠一村亡所ニ可相成、心痛至極ニ奉存候、御時節柄恐多御歎ニ御座候得共、格別を以村浮地作付方真急御判断被為成下」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

（田打村の）百姓は、ほとんどの藁を売払い、田地へ肥料として入れません。その日の稼で生活しているのです、麦作の手入れも難しく、遠からずこの村はなくなるのではと心配しています。御時節柄恐れ多いことですが、特別に村の浮地（耕作者未定の土地）の作付について「真急」御判断いただきましたく、

村の存亡に係わることなので、方策を「真急（大

急ぎ）御判断」くださいと歎願しています。

二例とも、「真急」は「大急ぎ」のことと思われるますが、さてどう読んでいいのやら……。

居エ

「御昼泊所ニおみて召上り用清水相撰、兼て掃除致し、清浄之水桶を居エ、新き五合杓ヲ付ケ、平人這入不申様ざつと麻苧テなりとも垣をいたし、御用清水と札を立置可然と存候事」（文久元年（一八六二）「横山家文書」）

（殿様が）御昼泊所で召上がる清水を選び、掃除をしておき、清浄の水桶を「居エ」、新しい五合杓を付け、平人が立入らないよう麻苧などで垣をして、御用清水と立札をしてください。

これは広島藩主浅野長訓が領内西北部を廻在するにあたり、沼田郡割庄屋が相田村役人に出した指示の一部です。井戸の傍に「水桶を居エ」るように指示しています。

【据える】（『広辞苑』）

①置くべき場所を定めて物を置く。一カ所に定めて動かさないようにする。⑧印判などを押す捺印する。

「右之趣村々共御承知之上、此状村下タへ受印形御居エ、詰村より佐六方へ御戻し可被成候」（文化九年（一八一二）「横山家文書」）

以上の事を御承知のうえ、この文書の（宛先）村名の下へ受取印形を「居エ」て、（次の村に廻し）、最後の村から私、佐六方へ御戻しく下さい。

庄屋への連絡は、割庄屋から文書が回覧され、庄屋はそれを記録し、次の村へ送っています。重要な事柄なら「受印形御居エ」たり、急ぎの連絡なら「時付を以御廻し可被成候」（時刻を記入）となります。

「一戸長同副互ニ殿居エ

一少長同副互ニ殿居エ

一同より少長少長副へ殿居エ

一同より戸長戸長副へ殿居エ

但し名前文字大小差別之事」（明治五年（一八七

（二）「続波多野家文書」

これは県庁からの指示と思われますが、戸長・戸長副・少長・少長副で書類を送るとき、互いに宛先に「〃殿」を付けなさいというものです。名前の文字の大きさは地位によって差を付けるという意味かと思っています。

種和シ

「追々種和シ之時節ニ押移、借財方御判断被成下候迄延引難出来ニ付、種々ニ申値候処」（明治五年（一八七二）正月「続波多野家文書」）

次第に「種和シ」の時節も近付いてきましたが、（田打村）借財の（処理方法）の御判断を頂くまで引き延すこともできませんので、（私達世羅郡割庄屋で）解決策を種々と相談しました。

その案とは、去暮の非人乞食の調査によると、

種和

当郡・近郡ともで数百人いるので、この内で屈竟な永々百姓をしたい者三〇人を選び、田打村空家の二軒へ住わせ、浮地の耕作をさせるというものでした。

文中に「種？シ」（右図）の文字があります。「種和シ」としか読めませんが、そんな言葉は知りません。「種卸シ」なら解りますが、「卸」の字には見えません。どちらにしろ、田植の準備段階の仕事のはずです。

【種卸し・種下ろし】たねおろし。（『広辞苑』）
たねまき。特に、八十八夜の前後に、稲の種籾を苗代にまくこと。

この文書では、「種和シ」と書いてあり、「種かし」と読み、「籾種を発芽しやすいように水に浸す」とあるので、世羅郡出身の人に教わりました。

【浙す・浸す】かす。（『広辞苑』）
①米を水であらう。とぐ。②水につける。ひたす。

明和年間（一七六四～七二）に高田郡多治比の丸屋甚七が書いた「家業考」に、「三月ドヨウ 籾種か

す（籾を水に浸す）」（丸屋甚七「家業考」『日本農書全集』所収）とあります。

【和す】かす。（『広辞苑』）
↓わする

【和する】わする。（『広辞苑』）
「文」和す（サ変）やわらぐようにする。やわらげる。したしませる。

「和す」は「かす」と読み、「やわらげる」の意と解りました。すると、「種和シ」は「種かし」と読み、「籾種を（発芽しやすいように水に浸して）和らげる」とだと解りました。「種卸し」は「種和シ」の次に来る作業でした。

被為

ほとんどの古文書にはルビが付きませんので、どう読むのかいつも困ります。次の資料のような、ルビ付の文書は大変ありがたい存在です。

「殿様益御機嫌能被為遊御超歳恐悦至極奉存候」（「小

被為 07/12/16

笠原諸礼大全」)

殿様、益ますます御機嫌能よくぞ被為遊おぼせられ、御超歳恐悦至極奉
存候。

古文書で「被為く」の文言をよく見かけますが、これをどう読むか、私の苦手なものの一つです。

「殿様益御機嫌能被遊」なら「殿様、ますます御機嫌よく被遊(遊ばされ)」と読みますが、「被為遊」となると「遊ばせられ」となっています。「為」は「せ」と読み、使役・尊敬の助動詞「す」の未然形「せ」です。これから「被」に続きます。「被為在」は「在らせられ」、「被為成」は「成させられ」となります。少し複雑になると、「被為下置」|| 「下し置かせられ」、「被為蒙仰」|| 「仰せを蒙らせられ」、「被為成下」|| 「成し下せられ」……となるようです。

「遊ばされ」(被遊)の「くされ」は尊敬の意味です。すから、尊敬の助動詞「為」を付けて「遊ばせられ」(被為遊)となると、尊敬が重なります。殿様のことで、なので、くとい表現を使っているのでしょうか……。

【らる】(『角川古語辞典』)

④尊敬の意を表わす。「給ふ」などにくらべると敬意は低い。

「被為く」の文字があると、「く」(動詞の未然形) + せられ」と読めば、ほとんどの場合はOKですが、機械的にできないこともあります。

「被為寄附」は「寄附為され」と読み、「被為仰付」も「仰付為され」になります。この場合の「為」は使役・尊敬の助動詞「す」ではなく、動詞「為す」で、「寄附」「仰付」の名詞が続きます。

「私儀近来腰痛ニて相困り、段々服薬等も仕候得共、兎角快方ニ押移不申、然ル処、摂州有馬入湯可然旨、久地村医師好謙申聞候ニ付、日数五十日之間、他行御赦免被為仰付候様奉願上候、左候ハズ、留守中村方諸用向之儀は、与頭共へ得斗示談仕置申候間、何卒早々相叶候様、宜被仰上可被下候

寅閏三月 庄屋加右衛門

組合割庄屋直三郎殿」(文政十三年(一八三〇)「横山家文書」)

私は近頃腰痛で困っており、服薬等もしていませんが効目がありません。そこで摂州有馬の入湯が良からうと久地村医師好謙が言いますので、日数五〇日間、他行をお許し仰付なされ候様願ひ上げます。留守中の村方の諸用向は、与頭共へ指示しておきますので、なにとぞ早々に実現しますよう、「宜被仰上可被下候」。

「御米之内、当一ヶ年御貸下ケ被為下候ハ、難有仕合可奉存候、秋二至り候得ハ、毛頭無間違御返納可仕候間」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）
年貢米の内から、今年一ヶ年だけ御貸し下げ「被為下」とありがたく存じます。秋になると絶対間違いなく御返納いたします。

「御貸下ケ被為下候ハ、」を、原則を適用して、「御貸下ケ下せられ候ハ、」と読むより、「御貸下ケ為し下され候ハ、」のほうが良いのでは……とまだ迷います。

殿様に関する敬語が重なり、農民の願書には「宜被仰上可被下候」（宜しくお伝え下さい）とへりくだった表現には、読むたびにウンザリします。

半挽

「一同式石四斗五升 浮地凡畝数七町之種粃代、壹反二付粃七升宛之半挽

（中略）

右は田打村浮地田畑作配方諸入用凡見積如斯二御座候」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

これは田打村の浮田を差配するに際しての諸入用の概算見積の一部です。以前紹介したように、田打村では追揚百姓の耕地が浮田となり、乞食三〇人にそれを作らせるという計画をたてました。浮地の面積は約七町あり、これに稲を栽培すれば種粃は一反につき七升を要するので

七升×七〇反＝四九〇升＝四石九斗

の種粃が必要です。勿論、種粃ですから「粃」として利用します。普通、米の容積は玄米で表します。四石九斗の種粃を玄米に換算するには、半分にしま

すので(五合摺)、

四石九斗÷二＝二石四斗五升

これで記述の検算ができました。

【五合摺】ごごうずり。(『岩波日本史辞典』)

稲の籾もみ摺り割合が籾一升から玄米五合生じること。稲の籾摺り割合はおおむね稲の成熟度と籾皮の厚さによって決まるが、江戸幕府は年貢米の徴租法において籾納から玄米納への転換にあたつて制度的に五合摺を公定とした。

ここでは「五合摺」の代りに、「半挽^{はんびき}」という言葉

葉を使っています。辞書には載せてありませんが、

「半」は「籾の分量の半分が玄米、半分が籾殻」の意味でしょう。

【籾摺り】もみすり。(『広辞苑』)

籾を磨臼(すりうす)にかけ、唐箕(とうみ)で秕(しいな)を去り、のち篩(ふるい)または千石筵(せんごくどおし)などで米と籾殻を分けること。

【籾摺り歩合】もみすりぶあい。(『広辞苑』)

籾のときの量と玄米になってからの量との歩

合。

【挽】(『漢字源』)

〔国〕①ひく。のこぎりをひいて切る。②ひく。ろくろで木器や陶器をつくる。③ひく。石うすで粉にする。

「摺」の字の代りに「挽」③を使うのも不思議ではありません。

【春挽米】はるひきまい。(『古文書用語大辞典』)春挽とも。米会所で用いられる言葉で、籾のまま貯蔵し春になって玄米にした米。

辻借

「当御領分村々之儀、先年水野様御領分之節より辺鄙之儀困窮仕候二付、年々莫太之御高引又ハ御用捨米等被下置、御百姓相続仕罷有候処、……御高入二罷成申候、然ル所年々御用捨米減□□被仰付行届不申、追々他借を以上納仕、村役人力二及不

申分ハ大庄屋中相願、辻借ヲ以年々皆納仕候、
 …然ル所九年以前丑年、千五百石御用捨米御取揚
 被仰付、九百五拾石被下置候得共、行足り申義ニ
 無御座候、無抛大庄屋中辻借ヲ以皆納仕候処、其
 後元弘ハ勿論利上等も得不仕、追々増長仕致方無
 御座、辻借・村借共ニ凡千貫目余罷成候」（安永
 六年（一七七七）『上下町史』）

当御領分（豊前中津藩飛領）の村々（甲奴郡水永村な
 ど）は、昔、水野様御領分の時代より辺鄙の地
 で困窮しているため、年々多額の「御高引」や
 「御用捨米」をいただき百姓も続いてきました。
 ところが、「御高引」が廃止され、年々の「御
 用捨米」も減少したため、「他借」をして年貢
 を上納しています。村役人の力で調達できない
 分は大庄屋に頼んで「辻借」で年々年貢の皆済
 をしてきました。明和六年（一七六九）に「御用
 捨米」が大幅に減額されたので、仕方なく大庄
 屋の「辻借」で皆納しています。その後、元金
 は勿論、利払もできず、次第に借金が膨らみ、
 「辻借・村借」で凡千貫目余になりました。

「辻借」の意味を調べるため、長々と引用しまし
 た。

【辻借】 つじかり。（『日本史用語辞典』）

村の負債をいう。一村の年貢総米に不足が生じ
 た場合、その分を庄屋・村役人が金穀を借りて
 弁済にあてた。おもに鳥取藩などで行われた。

この辞書は「村役人が金穀を借り」と説明してい
 ますが、その場合なら「村借」になるはすです。

「御貸物一円御捨被下候上ニ難渋村々村借御払替等
 御世話も被成下候へハ、勿論過之候儀は無御座候
 得共」（文化十一年『広島県史』）

藩からの御貸物を全て返済免除にしてもらい、
 難渋村々の「村借」の御払替の御世話もしてく
 だされば、これに過ぎることはありませんが、

「村役人力ニ及不申分ハ大庄屋中相願、辻借」と
 あるように、「辻借」は村役人ではなく、大庄屋に
 よる借金で「郡借」に当るものと思います。勿論、

「郡借」という言葉もあります。

「郡借村借とも此余捨置候得ハ、終ニハ御仕向等御

厄介相備候様罷成可申候二付」(元治元年(一八六四)世羅郡「郡用帖」)

郡借や村借をこれ以上放置していると、終には藩の御仕向(援助)を御願して御厄介を掛けることになるので、

面皮も無御座

「甲怒郡上下村郷宿一作奉申上候、私義御慈悲を以数代郷宿被仰附、冥加至極難有相勤罷在候、然ル処私外三軒有之、都合郷宿四軒にて郡中村々引請罷在候得共、公事出入にて出勤仕候節ハ、訴答同宿仕候ては差支も有之趣ヲ以相断候得は、縦令引請にて一件中ハ本人任存意ニ、三軒之内へ列宿致来りニ御座候、尚引受村ニも無抛子細有之節ハ、其訳柄にて転宿いたし候儀も有之、……是迄仕来り之儀、然ルニ私ニ限り右様不承知申立候は如何候儀ニ候哉、殊々人々へ右様之儀亮輔より申談へては、私義心行不怠不実不法もの様ニも相聞、外

村々氣請ニも抱り家業障りハ勿論、世上へ対面皮も無御座心外至極ニ奉存候二付」(嘉永五年(一八五二)『上下町史』)

甲奴郡上下村で「郷宿」を営んでいます一作が申し上げます。お陰様で数代も郷宿を仰せつかり有難いことで御座います。上下には私の所以外に郷宿が三軒あり、都合四軒で郡中村々の公事宿を引受けております。公事出入(民事裁判)で出掛けてくるとき、「訴答」が「同宿」すれば差支もあるので、担当の村であつても、公判中は本人の望みにまかせて他の三軒へ「列宿」してきました。担当の村でも特に事情があれば「転宿」することもあります。……これがこれまでの仕来りなのに、(同職の亮輔が)私の方への転宿に限り不承知を申し立てるとはどうしたことでしようか。これでは私の心行が悪く不実不法者のようで、外村々の評判にもかかわり家業にも障り、世間へ対して「面皮も無御座」心外至極に存じます。

上下(広島県府中市上下町)は大森銀山と尾道、福山を結ぶ街道の町で、天領上下代官所がありました。

【郷宿】ごうやど。（『岩波日本史辞典』）

近世、城下町・陣屋町に公務で出張してきた村役人等を泊める公定の町人宿。領主と村役人とを取次いだ。訴願文書の指導・代筆や郡中大割計算など、中間的行政機能を果し、公事宿、蔵元、用達などを兼務する場合がある。宿ごとに担当する地域が決まっていた。

【訴答】そとう。（『古文書用語大辞典』）

訴訟において訴えた側と訴えられた側。訴訟人（原告）と相手（被告）。

「同宿」「転宿」は解りますが、「列宿」は「同じ宿に並ぶ」ほどの意味でしょうか。

【面皮】（『広辞苑』）

①つらのかわ。②世人に対する面目。世人への顔むけ。

②の意味もあるとは知りませんでした。

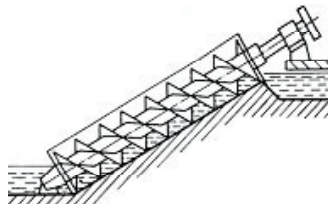
欲ヶ敷

古文書で「くヶ敷」という書き方を目にします。

「すいしやうりん、ふかき処より高き処へ、水をまきあぐるものなり。……こしらへ六ヶ敷」

（『百姓伝記』）

水上輪（アルキメデスポンプ）は深い所から高い所へ、水を巻き上げるものであるが、構造が複雑で、



「六ヶ敷」に編者は「むつかしく」とルビを付けています。

「全庄屋役市左衛門相望候より事起候様奉存、甚欲ヶ敷奉存候」（文化九年（一八二二）『上下町史』）

庄屋役を市左衛門が望んだために、（庄屋罷免の訴願）の騒ぎが起ったものと思います。はなはだ「欲ヶ敷」思います。

「欲ヶ敷」のおおよその意味は解りますが、どう読めばいいのやら……。『くつかしく』を付けて「欲かしく」ではなさそうです。

「歎ケ敷」は「歎かわしく」、「疑ケ敷」は「疑わしく」と読みます。「猥ケ間敷」は「猥がましく」、「八ケ間敷」は「やかましく」になりますので、これに倣って「欲ケ敷」を「欲がましく」として、辞書にあたりました。ありました！

【欲がまし】よくがまし。（『広辞苑』）

「形シク」（ガマシは接尾語）欲が深そうである。

接尾語「ガマシ」は、通常「ケ間敷」と表記しますので、「欲ケ敷」ではなく「欲ケ間敷」と書いて欲しいところです。

懸込

「阿字屋重郎殿・麦屋宗五郎殿より手紙にて申参候ハ、村方差縄取扱申度間、罷出候様申来候ニ付致出勤候処、同廿四日八ツ時分右兩人より被申候ハ、此間百姓中御役所へ懸込被致候ニ付、御役所より阿字屋重郎殿へ被仰聞候ハ、百姓懸込願之儀村役

人取次も無之ニ付、取上ケハ不致候得共、願面見合候処、村方ニおゐて孫右衛門得と対談を詰候ニも不相見へ、間立入取扱内済為致可然様被仰聞候ニ付申進候間、如何被思召候哉御吟味詰之上夫々ニ御仕置等も御受被成候思召ニ御座候哉、又ハ熟談内済被成候哉承度と重郎殿より被申候義ニ御座候」（文化九年（一八一二）『上下町史』）

阿字屋重郎殿・麦屋宗五郎殿より（私、小堀村庄屋孫右衛門に）手紙で、「村方騒動の処理をしたいので（代官所へ）出頭するよう」にと指示があり出掛けますと、同廿四日八ツ時分に兩人から話がありました。「この間、百姓連中が御役所へ「懸込」をした。百姓の懸込願は村役人の取次もないので正式に受理はしないが、願書面をみると、村方で庄屋孫右衛門と話を詰めているようにも見えないので、（阿字屋が）仲介をして内済させるよう御役所より指示があった。御吟味の上御仕置等も受けるつもりか、それとも熟談内済したいのか、聞きたい」と申されました。これは、「乍恐以書付御訴訟奉申上候」と題して

「備後国甲怒郡小堀村百姓半右衛門」（以下、八十六名）の名前で数々の「不正」を代官所に訴えられ、罷免を訴願された庄屋孫右衛門の記録です。「懸込」という言葉が使っています。

【駆込訴】 かけこみそ。（『岩波日本史辞典』）

近世の訴訟方法の一つ。越訴の一形態。評定所や奉行所の門内へ駆け込み訴訟すること。幕府は訴状を受理しないことを原則とした。処罰は少なく、度重なる場合などに急度叱り程度の軽い刑罰に処した。

「懸込」には、鎌倉の東慶寺などの「駆込み寺」という名前に共通する緊迫した意味が読取れます。

へか

「田打村浮地作配方諸入用見込積り帳

（中略）

一米四拾石五斗 田打村浮地作配方非人乞食之内
屈竟之もの三拾人扶持米二月より十月迄九ヶ月分

壹人一日五合宛

（中略）

一同三石 作牛式疋買入代米見込

一同三斗 鋤并鋤先へか代共ニタ仕舞分見込」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

田打村の浮地（耕作者のいない耕地）を耕作させる

ための諸入用の見積り帳

一米四五石五斗 田打村の浮地を耕作させるた

め非人乞食の内屈竟な者三〇人をあて、扶持

米として二月より十月まで（九ヶ月分）、一人一

日五合として。（中略）

一同三石 作牛を二疋購入すると、その代金な

らぬ代米（見込）。

一同三斗 鋤と鋤先と「へか」代共ニセット分

（見込）。

数字が並ぶ文書を面白く読むには、電卓を使います。

三〇人の乞食に農業をさせるため、一人一日五合の米を九ヶ月間支給すると、四〇石五斗が必要だと書いてあります。正しく読んだかどうかを検算する

と、直接書かれてないことも解ることがあります。

米菰米=0.005石×30人×日数=40.5石

日数=40.5石÷(0.005石×30人)=270日

月の日数=270日÷9月=1月分30日

計算すると、一月を三〇日で計算していることが解ります。(二月は平均約二九・五日)

七町の耕地面積を想定しているので、作牛二疋の購入も考えています。すると鋤も二挺必要ですが、鋤先と「へか」も二セット(ニタ仕舞)準備します。

【へか】(『日本国語大辞典』)

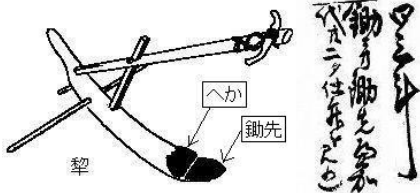
「方言」①鋤の土をかえす部分の鉄板。(広島県比

婆郡)②すきやき。牛鍋。

(島根県那賀郡、隠岐、広島

県高田郡)③的はづれ(徳島県)

「へか」は広島の方言だと教わりました。「今晚は、へかにでもするか」と使ったの



だそうです。

「仕舞」と読むのだろうと思いますが自信がありませんので、原本を示します。(図は鋤(広辞苑)と「仕舞」)。

羅約

「年々御年貢上納方羅約いたし候節、百姓共過半藁肥之類隣村泉村・重永村へ売払、数年肥し不仕十分疲衰候田地二付、相応ニ出来立候様相見候へも取実無御座、村中挙て難渋仕、仮成相暮候百姓忝人も無御座」(明治五年(一八七二)「続波多野家文書」)

毎年御年貢上納について「羅約」する時期になると、ほとんどの百姓は肥料にする藁などを隣の泉村・重永村へ売り払い、ここ数年も充分に肥料を入れていないので土地は痩せ衰え、それなりには出来ているように見えても取実は無く、村中すべてが難渋し、一応の生活をしている百姓は忝人もいません。

「当御年貢米不納村々へ当嚴敷御切瑳被為在、右ニ付御番組様方海田市へ御出張出役人等御差入、村々役人共始メ私共へも右一条誠ニ御手厚御示談被為成下、素り御事柄之義少々も油断不仕、昼夜とも心力を尽し糶約メ候処、弥以手詰ニ相成、……此余約メ方之義尚又御嚴重ニ御示談之趣、一応奉畏菟口も無御座候得とも、此余いか様嚴敷糶約メ候とも相約り候著一円無御座」(嘉永三年(一八五

〇)「野間家文書」)

今年の年貢米不納村に対して厳しく応対され、そのため御番組様(代官手付)方が海田市へ出張の出役人等を差向けられ、村々役人・私共割庄屋へも年貢納入について手厚く示されました。勿論大切な事柄ですので油断なく昼夜とも心力を尽して「糶約」ていますが、とうとう手詰りになりました。これ以上の約メ方について嚴重に示談があり、一応承知いたしました。が、この余どれほど厳しく「糶約」ても約る予測は全く立ちません。

二つの文書から「糶約」の意味を探ります。文意

からして「糶約」は年貢納入を厳しく督促すること考えて間違はないでしょう。

【糶】(『漢字源』)

《音読み》テキ/ジャク 《意味》(動・名)米を物色して買い入れる。また、そのこと。かいよね。(対語)↓糶チョウ。

これではどうもシツクリとしません。そこで、

【糶】(『漢字源』)

《音読み》チョウ 《訓読み》せり 《意味》(動・名)米を物色して売りに出す。また、そのこと。うりよね。(対語)↓糶テキ。(国)①せり。せり売り。競売。②せり。せり売り。行商。

「糶」も「糶」と同様に「せり」と読めるなら、「糶約」は「せり約める」厳しく督促する」になるだろうと思います。

「糶」と書くべきところを「糶」と誤ったのかと調べましたが、他の史料でも全て「糶」と書いてありました。おらかな江戸時代人のこと、文字の部品の「出」と「入」が違うだけで、大騒ぎをするな

と怒鳴るだろうと思います。

『古文書用語大辞典』（新人物往来社）では、【糶売】
Ⅱ「せりうり」、【糶買】Ⅱ「せりがい」とあり、「糶」
も「糶」もともに「せり」と読んでいます。

「当御年貢米於御蔵所ニ、殊之外刎俵多御座候趣、
……就ては、上納払切御日限延引不致、早々皆済
ニ至り候様、前廉御せり立可被成候、呉々も万々
御手拔無之様御取計可被成」（天保十二年（一八四一）
「踊場家文書」）

今年の御年貢米は、御蔵所に納入するとき、こ
とのほか刎俵（不合格俵）が多いとのこと、……
就ては、上納払切の御日限を守り、早々に完納
するよう、事前に「せり立」てておいてくださ
い。呉々も万々手拔りのないよう御取計くださ
い。

この文書では、年貢の納入を「せり立」と仮名で
書いていますので、「糶約」は矢張「せりつづめ」
だと、強引に結論を出しました。

立木

「郡中手作手絞株之者ハ近年迄綿実稼不相成事ニ候
処、元バ役より厚歎出之趣も有之、年々当年限と
申ス趣意ニて綿実御場所へ専ら相廻、御用所へも
程々相渡候上、余過少々ツ、元バ役之見計を以取
計有之事ニ相成居候処、兎角色々工風を附繰綿屋
共迄抱込懸り物を増或ハ綿実之目方を取捨杯致、
荷主迄直附仰山ニ買取候者も有之哉ニ相聞、畢竟
立木定之外余分ニ立増候より絞草買あせり候義と
被相察、右体猥々間敷義有之候てハ一体之規則崩
ニも相成」（嘉永七年（一八五四）『広島県史』）

郡中の手作手絞り油株の者は近年まで綿実稼が
許されていなかったが、元締役よりの歎願もあり、
毎年「当年限り」として、大部分は綿実御
場所へ送り、御用所へも程々は渡し、余りを少
々ずつ元締役の見計いで搾油しているが、色々
と工夫をつけ、繰綿屋共まで抱え込んで懸物を

増し、または綿実の目方を「取捨」などして、荷主から直接買取る者もあると聞いている。これは結局「立木」を規定数より多く立て増しして絞草を買いあせるためと思われ、このような猥々間敷ことがあつては全体の規則も崩れ

これは安芸郡の番組が割庄屋にあてた製油業者の不締りを戒める書付です。安芸郡など広島湾岸の地域は綿の大産地で、「安芸木綿」の名で知られていました。綿を繰った後に残るのが綿実で、これから油を絞ります。「手作手絞」（自家用）の名目で「株」を与えて制限していますが、業者は設備を拡大しています。幕府は絶えず「油方見糺之者」を諸国に派遣して違犯の摘発に当らせるので、藩はこのような触を出した物と思われま

す。「立木定之外余分ニ立増候」という文言があります。

【立木】たちき。（『広辞苑』）

地に生えている樹木。

の説明はありますが、役に立ちません。京都の山中

油店のHP「菜の花の便り・・・第二号」にその説明がありました。

「菜種油が我国で搾油された年代は明確でなく『清油録（大蔵永常著）』の記述をみると『攝津国住吉の辺り遠里小野村の若野氏某がはじめて藝苔子（今いふ菜種子なり）を製し清油をとりて従来の子の油にかえて住吉明神に献じ奉れり、皇国菜種子油の原始なり』（原文）とあります。それまでは山城国大山崎八幡宮の荏胡麻を搾る「長木（ながき）」が一般に使用されていましたが、遠里小野の若野氏が考案した「構押木（おしき）」により菜種が搾油され、明暦年間（二六五六年頃）には改良が加えられて、矢と称する楔（くさび）を打ち込む「立木（たちき）」が開発されました。」（『菜種油のはじまりと搾り機の変



遷』<http://yoil.co.jp/aburanohanashi/6/index.htm>

へん
htm)

楔については、ブログ「蠟打」07/02/13で言及しました。櫨の実を粉にし、蒸して、圧搾機で絞り出します。その圧搾の仕方は「矢」を「撞木」で打込み、木蠟を絞ります。写真(<http://www.h7.dion.ne.jp/~msikoku/sikokushop/sikoku/utikomokurou/utikowrousoku4/utikowrousoku4.htm>)は「蠟搾り機」のサイトにあります。そびえ立っている二本の柱が「立木」だと思えます。

文中「綿実之目方を取捨」とは「綿実も目方を少なめに偽り」の意でしょう。

心切・入々

「正金銀両替銀歩之儀は、去ル戌年御示し有之、一統承知之通、銀歩高直ニ致取引候ニ付ては、米価ヲ初諸色直段不得止追々高直ニ相成、御領分中一統末々迄別て難渋ニ落入候事ニ付、段々厚御趣意

ヲ以札場両かへ之歩合壺割式歩ニ御改、百目ニ付拾式匁宛之割合ニ御定有之、両替屋諸問屋共初メ都て之取引右歩合より下端ニ取引候様、……右御趣意之趣未熟得不致事哉ニ候得は、右等之趣夫々得と感服心得違之者無之様改て早々懇ニ被相諭、正金銀之取引いたし候者共は相互ニ心切ニ申直、正道ニ取引候様銘々得心ニ至り候迄入々申解聞せ。」(文政十三年(一八三〇)『広島県史』)

金銀貨の両替手数料は、文政九年(一八二六)に御示しがあつた。一統も承知の通り、手数料が高直になると、米価をはじめ物価も段々と上るので、札場での両替手数料を壺割式歩に改め(一〇〇目につき一二匁)、両替屋諸問屋共は手数料より安く取引するようにしなさい。……この御趣意がまだ得心できない者があれば、丁寧に説明し心得違の無いよう諭し、正金銀の取引をする者共は相互に「心切」に話し合い、正しい取引をするよう得心できるまで「入々」と説明し、正金銀両替銀歩が一二%は高いのかどうか分りま

せん。ここでは「親切」について考えてみます。

【親切・深切】（『広辞苑』）

- ①（「深切」と書く）深く切なること。痛切。
- ②人情のあついこと。親しくねんごろなこと。

「米五俵 佐伯郡玖波村百姓幸八忰助八妻なつ
右舅姑へ事方宜、就中舅孝八儀十ヶ年以前より中風
相煩行歩等不相叶候処、深切二介抱致奇特之至二付、
為御褒美被下之」（文政八年（一八二五）「鶴亭日記」）
佐伯郡玖波村百姓幸八忰助八の妻なつは、良く
舅姑へつかえ、舅孝八が十ヶ年以前より中風の
ため歩けなくなつたが、「深切」に介抱したの
で米五俵を褒美として遣わす。

「深切」は「深く切なること」と解説してありま
すが、例文のごとく「人情のあついこと」＝「親切」と
しても使います。最初の例文では「心切」を「親切」
と同じ扱いをしています。

近世文書には宛字が多く、私達を悩ませ、面白が
らせませす。学者などな別にして、一般の人にとって
言葉は読み書きするものではなく、聞いたり話した

りするものと思っていたに違いありません。「しん
せつ」と聞き覚えた言葉を、「親切」と書くとうと「深
切」「心切」としようと構わない、だから多くの宛
字が出現することになります。心から丁寧に教える
のなら、「心切」の方が適当かも知れません。

「入々申解聞せ」と「入々」という言葉が「心切」
とほぼ同様に使つてあります。「武平殿へも入々御
尋合被下候」、「小内入々相しらへ申候処」、「入々様
子聞糺候」、「入々厚御演舌之趣奉畏候」……など。
意味は「親切に、丁寧に、入念に、詳しく、返す返
す」のように思えますが、辞書にはありません。「入
々」は「しみじみ」とか「かえすがえす」「つらつ
ら」「よくよく」……と読めそうですが、さてどれ
がよいやら。

亡所

「百姓とも過半藁肥ハ不残売払、忽田地へ当て候肥
無御座、且日々稼喰ニ御座候故、麦作手守護等も

届兼候、此姿にてハ不遠一村亡所ニ可相成、心痛至極ニ奉存候、御時節柄恐多御歎ニ御座候得共、格別を以村浮地作付方真急御判断被為成下」(明治五年(一八七二)「続波多野家文書」)

(田打村の)百姓は、ほとんどの藁を売払い、田地へ肥料として入れません。その日の稼で生活しているので、麦作の手入れも難しく、遠からずこの村は「亡所」になるのではと心配しています。御時節柄恐れ多いことですが、特別に村の浮地(耕作者未定の土地)の作付について至急御判断いただきたく、

この資料は、このブログで「真急」07/12/13と題して取上げたものです。今回は「亡所」を検討します。

『広辞苑』には「亡者」は載せてありますが、「亡所」はありません。

【亡所・亡処】ぼうしよ。(『古文書用語大辞典』)

「もうしよ」とも。耕作者がいなくなり荒廃した田畑。住む者がいない所。生産力の落ちた痩せた土地。亡地。

この状態では、田打村は遠からず「住む者がいない所」になるのではと心配しています。

「村ニ寄多分之未進有之、是等急速取立候ては亡所ニも至り候様有之候ては御撫育之御趣意ニ反シ可申候得共」(元治元年(一八六四)『千代田町史』)

村によつては多くの未進(年貢未納)があり、これらを急速に取立てるなら「亡所」にもなるようでは御撫育の御趣意に反しますが、

この資料の「亡所」は、「耕作者がいなくなり荒廃した田畑」です。

「此石高一定せは後來幾年を経過するとも妄に之か増減を為すを許さず、若し天災等にて田畑の亡所と為ることあるとも、官よりは其地租を減することなく、此亡所の田租は他の同村内農民の^{かづき}闔として、年々一定の貢米を分課し上納せしむる所と為す」(「芸藩志拾遺」)

村高が一度確定すると、その後何年経過しようとも簡単には増減を許さない。もし天災等で田畑が「亡所」となっても、藩はその年貢を減す

ことはなく、この「亡所」の年貢は村内他の農民の闌^{かき}として年々一定の年貢米を割り当て上納させる。

この村高を変更しないことを「村高不易の原則」というようですが、古文書中に「村高不易」なる言葉はまだ見ません。

【不易】（『広辞苑』）

かわらないこと。不変。「万古—」

それはともかく、この資料の「亡所」は、「生産力の落ちた痩せた土地、亡地」に当ります。

「亡所」という簡単な言葉にも細かなニュアンスの違いがあるにしても、ghost town という強烈なイメージの前にはその違いは吹き飛んでしまいます。一昨日のTV番組「Japanナビゲーション」で、北海道羽幌炭鉱の現在の様子を見ました。一九七〇年に閉山した当時は一万を超える人がいた街が山中にひっそりとありました。「亡所」でした。

帳落寺

「帳落寺 寺法私称〇〇山〇〇寺ト唱来り、……右開基年間不知、往古〇〇庵ト唱禪宗之由、然ルヲ元和年中真宗ニ改宗、広島寺町仏護寺末寺ニ相成、夫ヨリ以来凡二百年来真宗相続仕候所、先年寺院御改之事書出し不申伝、帳落ニ相成候由申伝へ、古伝記等無御座候」（文政二年（一八一九）、『佐伯町史』）

この寺は帳落寺ですが、宗派内では〇〇山〇〇寺と私称してきました。開基年は不明。昔は〇〇庵といい、禪宗でしたが元和年中（二六一五）二四に真宗に改宗し、仏護寺の末寺になり、以来約二〇〇年真宗です。先年、寺院御改のとき書出しをせず、「帳落」になったと申し伝えています。古伝記等はありません。

「帳落寺」とは何か、調べようとしたが、分りません。

「広島藩の把握(国法)では小堂、本山の把握(寺法)では寺院、というこれらの寺院は「隠寺」「帳落寺」と呼ばれ、とくに山県・佐伯両郡に多かった。宗判権(宗門改帳に判を押す権利。「門徒」を持つ基礎資格)がなく、近世を通じて非公式な存在であつたが、明治十二年(一八七九)、寺院明細帳調製にともない公式な寺院として位置づけられた。」(『千代田町史』注釈)

本山(寺法)からは正式な寺院として認められながら、藩(国法)では小堂の扱いとされ、諸権利が制限されていたのが「帳落寺」です。この書出帳によると、「先年の寺院御改のとき書類を出さなかつたため、藩の帳簿(寺社帳)の載らず、「帳落寺」となつたとあります。

「寛永年中寺院御改之節、寺号書出し不申、御帳落寺ニ相成候由申伝」(『吉和村史』)

寛永年中(一六二四～四四)に寺院調査があつたとき、寺号を書き出さなかつたので、御帳落寺になつたと申し伝えています。

「寛永年中寺社御改ノ節、住持念信在京中にて御帳落ニ相成」(『安佐町史』)

寛文年中(一六六一～七三)、寺社調査のとき、住持念信が在京中であつたので御帳落になり、

「寺社御改」の時期も判然としませんし、なぜ「帳落」になるのか、どのように権利が制限されるのか……宿題です。

平坪

「一同(夫)八拾三人四歩 芝打夫右土手長概三拾四間半、法形上り六間貳歩、此平坪貳百拾三坪九合、前後両斗ニて四百貳拾七坪八合、敷芝三万三千三百六拾八枚、但壺間壺通り六枚敷、拾三通□□上り壺坪ニ付七拾八枚ツツ、壺□□ニ付四百枚打」(文政七年(一八二四)『庄原市史』)

これは恵蘇郡下原村のある溜池の普請積帳の一部で、芝を張る人夫の見積です。

「右土手長概三拾四間半」

この堤防の長さは平均して三四・五間。実際は上(馬踏)の長さは三九間で長く、底(根置)は少し短く三三間で逆台形のため平均しています。谷間に作られているのでしよう。

「法形上り六間式歩」

堤防の法面の下からの幅は六・二間。

「此平坪式百拾三坪九合」

法面面積＝長34.5間×幅6.2間＝219.9坪。

【坪】(『広辞苑』)

④土地面積の単位。六尺四方、すなわち約三・三〇六平方^メ。歩(ぶ)⑥土砂の体積の単位。六尺立方。立坪(りゅうつぽ)。

【平坪】ひらつぽ。(『広辞苑』)

一間四方の面積。↓立坪。

【立坪】たてつぽ。(『広辞苑』)

土・砂利などの六尺立方の体積の称。りゅうつぽ。↓平坪。

「坪」は面積の単位ですが、体積の単位でもあるので、土木工事では、これを区別するために「平坪」「立坪」と書き分けています。平方と立方の積りです。

「前後両斗ニて四百式拾七坪八合」

堤防法面の内外で、その面積は

$$219.9坪 \times 2 = 427.8坪$$

の意味だと思えますが、内側に芝が必要なのか?と思えます。

「敷芝三万三千三百六拾八枚」

次の説明によると、法面壺坪に七八枚を張るので、芝の総数は

$$78枚 \times 427.8坪 = 33368枚$$

が必要です。

「但壺間壺通り六枚敷、拾三通□□上り壺坪二付七拾八枚ツツ」

芝は、一間で壺通り(一列)に六枚を敷き、一三通り(二三列)になるので、法面壺坪二付

6枚×13枚=78枚

とする。芝一枚の大きさは一尺×半尺ほどの長方形と思われます。「拾二通□□上り壺坪」は「拾三通り法上り壺坪」と思ひます。

「一同(夫)八拾三人四歩……壺□□ニ付四百枚打」人夫が一日四〇〇枚の芝を打つとすれば、

$33368枚 \div 400枚 = 延83.4人$

を必要とする。「壺□□」は「壺人夫」でしょう。

なお、端敷は適当に処理しています。

粥之実・纒敷

「兼て御承知被下候通り、私義は極難渋小百姓ニ御座候処、近年追々諸色高直ニ相成候ニ付てハ別て貧窮ニ罷暮候得共、近來之御形勢之義ハ毎々御示談被成下、御上様別て御苦慮被為在候御様子奉恐入、右等御苦慮被為在候御義も、皆私共御不便ニ被為御思召被下候て御深考被為遣候御義と奉感

戴、妻子共へも日々御大恩奉蒙候御程申聞、如何体ニ成とも御国恩奉報度候と夫婦申値仕候得共、素り難渋之私事故是程と申ス義ハ出来不申、せめてハ日々飯用ニ粥たき候時右粥之実ニ仕候米五十位七拾粒ツ、除ケ置、麦飯たき候節ハ麦壺勺程ツ、除ケ置、其麦手元ニて白米ニ仕かへ置、近年之宿願ニて漸々只今迄ため置申候米左之通御座候
一 白米七升八合 年來ため米

右之通り至て纒敷員数ニ御座候得共、御国恩為寸志奉備上度奉存候間、乍恐何卒御格別之御慈悲ヲ以、被御召上被遣様御願被仰上被下候ハ、難有仕合奉存候」(慶応二年(一八六六)『千代田町史』)

御存知のように私は極難渋の小百姓で、近年段々と物価が上がり貧乏暮らしをしています、近來の時勢について毎々お話を聞き、御上様には特に御苦慮の様子。それというのも私共を不憫に思し召し下さるためで、妻子供へも日々に御大恩を話して聞かせ、なんとかして御国恩に報じたいと夫婦で話しました。勿論貧乏な私のこと何もできませんが、せめて日々飯用に粥を炊

くとき粥の実にする米五十位七拾粒宛を、麦飯ときは麦壳勺程宛除け置き、その麦を白米にかえて、ようやく宿願の白米が七升八合貯まりました。いたって「纒敷」員数ではありませんが、御国恩寸志として備え上げたいと存じます。恐れ多いことですが御格別の御慈悲で取次いでください。

貧農が七升八合の米を「御国恩為寸志」として殿様に差し出したいと申出る文書です。取次の庄屋は、「平日暮方時々少々ツ、買喰渡世仕浅間敷者ニ御座候」（いつもの暮しぶりは、時々少々ずつ「買喰」して世渡りする「浅間敷（みじめな）者です」と紹介しています。「買喰」とは農家でありながら食料の自給ができないでいくらかを買う生活の意味だと思えます。このような農民が一体どのような「御国恩」を受けたというのでしょうか……、涙の出るような文書です。

「汁の実」とはいいいますが、「粥之実」はあまり聞きません。

【実・子】（『広辞苑』）

②汁の中に入れる菜または肉。具。③中身。内容。

「纒敷」という言葉が出ましたが、どう読めばよいのでしょうか。「く敷」のつく言葉は、形容詞シク活用で連用形の活用語尾「しく」の宛字です。例えば、「苦し」なら、連用形の活用語尾「しく」を続けて「苦敷」となります。「纒^{わすか}」の文字は古文書でよく見かけますが、「纒」は「僅か」に相当し、「僅か」は古語辞典によると、「形容動詞ナリ活用」で、連用形の活用語尾は「しく」ではなく、「なり」です。から「僅か敷」というはずはありません。「纒」を「乏し」に置換えると、「乏敷」になります。これを元に戻すと「纒敷」になり、「とぼしく」と読めそうな気がします……。

御自分

「官許沼田郡上安村河野道碩医師成
沼田郡上安村医師正超忤豊吉儀、医師成相調候ニ

付、御自分弟子ニ致し医業修行為致度段、願之通承届候間、此段可被相心得候、已上

已五月 植木三蔵

近藤鹿之助

野坂三益丈」（天保四年（一八三三）「鶴亭日記」）

官、沼田郡上安村河野道碩の医師成を許す

沼田郡上安村医師正超の忝豊吉儀、医師成相調候ニ付、「御自分」弟子にして医業を修行させたいとの願いを聞届けるのでそのつもりでいなさい。

【御自分】（『広辞苑』）

①（代名詞的に相手を敬つていう語。江戸時代、武士階級のものが用いた）あなた。貴公。貴殿。

「御自分儀、逆上足冷ニ就当夏秋中不出来之節足袋相用申度旨申出之趣承届候条、勝手ニ被相用候、以上

四月十五日 松野唯次郎

黒田斎

野坂三益老」（天保十年（一八三九）「鶴亭日記」）

「御自分」のことで、逆上足冷のため当夏秋中具合の悪いときは足袋を使いたいと申し出があり、承知したので自由に使いなさい。

足袋の使用許可まで出さねばならないのは、野坂三益は天保六年（一八三五）に藩から「御医師格被仰付」になったためと思われます。

「自分」なら一人称、「御自分」になると二人称に化ける言葉です。

行成

「一私御呼出し被仰聞候は、先日途中盜賊ニ逢候趣専風聞有之候ニ付、実意之行成委細ニ申上候旨被仰付奉畏、則左ニ申上候

一去ル十一日、御家中様方へ年頭ニ罷出、帰り懸、尾長村一類内へ立寄、凡六つ半時頃帰村仕、水尾尻迄戻り見申候処、誰共不知頭巾かつき唄人居申候ニ付恐々ニ戻候処、其人申候は、いつれへいぬる人歟同道可致と申縋り懸り、若氣咄ヲ致、兎哉

角申内、水尾中程迄戻候処、上より耆人通懸、夫
を見ルより同道致候人直ニ帶ヲ解、色事ヲ第一ニ
申懸否哉、兩人共着類被取、いつれへ逃候哉も相
知レ不申、其節被取物左之品ニ御座候
一木綿紺立嶋裏花色布子 耆つ

……

丑正月廿二日

〇〇〇後家〇〇

庄屋清三郎様」(文政十二年(一八二九)「野間家文書」
私を呼出されて言われるには、「先日途中で盗
賊に逢ったと専ら噂になっているが、実際の「行
成」を詳しく述べよ」とのこと、左に申し上げ
ます。去る十一日、御家中様方へ年頭挨拶に出
掛け、帰りに尾長村の親類に立寄って六時半時
(午後七時)頃に帰村しましたが、水尾水道の端
まで帰りますと、誰とも知れぬ頭巾をかむった
人がおり、恐る恐る通ると、その人がいうには、
「どこへ帰る人か、同道しましょう」といつて
まわりつき、「若氣咄」をします。そのうち
水尾も中ほどまで帰ったところ、上より一人の
人が通りかかり、それを見て同道する人が帯を
解いて色事を申し懸けるやいなや、兩人とも着

類を取られ、犯人はどこかへ逃げました。その
とき盗まれた物は、木綿紺立嶋裏花色布子耆つ、
……

温品村の〇〇〇後家〇〇が広島からの帰りに盗賊
に逢ったその「行成」を庄屋に述べた奇妙な内容の
文書です。

「成行」なら解るのに、「行成」とは困った……
と辞書を引きました。

【行成】ゆきなり。(『広辞苑』)

(「成行(なりゆき)」の倒語) 「いきなり」に同
じ。

【行き成り】いきなり。(『広辞苑』)

事がらのなりゆき。また、なりゆきにまかせる
こと。十分考えないですること。

「若氣咄」は調べても分りません。

正月

天保八年(一八三七)元旦、寺家村の医師、野坂三

益は五三歳(数え年)の春を迎えました。その日の日記。

「○朔日己卯

鴉嘉と唱へ爵春と和す牛の孟馬の為非貧、凡耳目に触るゝものミナ昇平元朝の姿にあらざるハなし」(天保八年(一八三七)正月「鶴亭日記」)

鴉、嘉(カア)と唱え、爵(雀)、春(チュン)と和す。牛の孟(モウ)、馬の非貧(ヒヒン)為(た)り、およそ耳目に触るゝものミナ昇平元朝の姿にあらざるはなし。

めでたい文字が並んでいます。『漢字源』によると

「嘉」|| 「たつぷりと余る意から、けつこうな、めでたいなどの意となる」。

「春」|| 「陽氣が地中にうごめいて、外に出てくるころ」。

「孟」|| 「はじめ。季節や時代のはじめ。」「孟春」。

「非貧」|| 貧に非らず。

見るもの聞くものすべてが昇平(穀物がよく実り、

値段が安定している。世の中が穏やかにおさまっていること。また、平和の世)の元朝を寿いでいます。

連年の凶作が天保の飢饉を引き起こし、この年二月、大塩の乱が起こります。野坂三益はのどかな正月風景を描いていますが、その月の日記に「飢食松皮製法」や「わらびもち」ならぬ「藁餅之製法」をメモしています。

【正月】(『古文書用語大辞典』)

①一月のこと。太陽暦採用以前には一月とは表記されない。

たしかに、「鶴亭日記」も「天保八丁酉稔 正月」と表記してあります。私のパソコン中の資料(原文)を「年一月」で検索すると、該当する箇所はわずかで、やつと「明治六年一月一日」が見つかりました。それ以前は「明治五年申正月」のような日付が入っています。明治五年十二月三日を明治六年(一八三七)一月一日として、太陽暦を採用しました。

西向く侍

カレンダーを見なくても、太陽暦では小の月(三日以下)は二・四・六・九・十一月のはずです。

「西向く侍(士)」の語呂合せで一度覚えると毎年使えます。

太陰太陽暦では、月の満ち欠けを重視し、その周期が約二九・五日であるため大の月(三〇日)と小の月(二九日)を作っています。その順番は太陽暦のようには決っていません。満月が十五日になるように暦を作りますので、毎年月の大小の順が変わります。そのため、今月は大の月か小の月かは暦を見ないと分かりません。大小の順を示す暦を大小暦というそうです。

「○天保十一子とし大小

すむが大 ○にごるが小

こめがげじきで、よがなおる

おやがぶじなが、めでたいな」(「見聞わらひ集」)

これは、天保十一年(一八四〇)の大小暦です。「西向く侍」と同様、「米が下直^{げじき}で世が直る」か「親が無事なが目出度いな」と覚えていければ、この年の月の大小は解ります。ヒントは「清むが大、濁るが小」です

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

こめがげじきでよがなおる

○ ○ × × × × × × × × ○ ○

○が清音、×が濁音ですから、○×図に合うような気の利いた語呂、「米が下直で世が直る」を付ければ簡単にできそうです。もつとも、「五月は大か小か？」と聞かれると、「こめがげじき……」といいながら指を五本折る必要があります。

「じ」↓「小」。

太陽暦用の大小暦「西向く侍(士)」がいつ頃考え出されたのか、興味があります。日本では明治五年十二月から太陽暦になったので、その頃考え出された文句だろうと思っていました。ところが、この文句は天保八年(一八三四)の大小暦として作られたも

のだそうです。この年の大小の順は

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

にしむく士

○×○×○×○×○×○×○×○

×だけ読むと、なるほど、「西向く侍(士)」です。

この大小暦を太陽暦用の大小暦に使ったといいます。パターンさえ同じなら転用できます。

このパターンに一致する年がまだあるかもしれないと江戸時代に限り調べると、享和元年(一八〇二)でも、西を向いた侍に出会いました。

「西向く侍」の月を閏月ではないと仮定すれば、江戸時代で該当するのはこの二回だけです。「西向く……」の文句が作られたのは、享和元年かも知れないと思います。

ハデ干

「ハデ干の米は青米少し。掛てほす中に矢張熟すと

いふ。(豊田郡竹仁村長百姓才三郎咄)……賀茂郡奥

屋村組頭新兵衛咄に、ハデ乾の米は至て宜と承候へ共、当郡は上納早皆済故何かなし相応に干立納るといふ。」(文政十二年(一八二九)「秘語独断」)

ハデ干^{ぼじ}をした米には青米は少ない。掛けて干すうちに矢張熟すそうである(豊田郡竹仁村長百姓才三郎の話)。賀茂郡奥屋村組頭新兵衛の話では、ハデ乾^{ぼじ}の米は良いそうですが、当郡では年貢米を早期に納めるので、なにかと適当に干し立てて納めます、と。

【はで】(『日本国語大辞典』)

「方言」刈った稻などを掛けて干す設備。稻掛け。広島県高田郡など

【稻架】はさ。(『広辞苑』)

(新潟・富山・福井・岐阜などで) 稻掛。稻架(とうか)。はざ。

「いねかり ひがんニいると、いねのうれぐわいニてわせいねよりかりてよし。まづはでばをさきニかりてよし。……たいていがりほしニすれば

まいらず、よけい作るとしハかりぼしを大分せねばてまもよけいいる。はでもこたゑんものなり。かりぼしハ三日ほせばよし。つきたてぼしハ五日ほせばよし。はで二かけてほせば廿日ぼしニせねばこぎにくし」(明和年間(一七六四〜七二)、丸屋甚七「家業考」『日本農書全集』第九卷所収)

彼岸に入ると、稲の熟れ具合をみて早生稲から刈つてよい。はざ場、つまり、はざを立てる場所をまっ先に刈る。はざにかけないで地干しにすれば手間がいらぬ。多くつくつた年は、かなり地干ししなければ手間がよけいかなり、はざの数も足りなくなる。地干しは三日干せばよい。つきたて干し、すなわち刈つた稲を三把くくつて穂のほうを下にして立て乾燥させるやり方なら、五日干せばよい。はざにかけて干す場合は、二十日干さなければ扱きにくい。(現代語訳は小都勇二氏による)

「ハデ干」以外の稲の乾燥方法について、「家業考」は「刈干し」(地干し)と「突立干し」も紹介していますが、「はで場を最初に刈る」と書いている

ので「ハデ干」が主流でしょう。「ハデ干」が二〇日を要するのに「刈干し」(地干し)が三日干せばよいとは信じられません……。

現在の稲刈りはコンバインを使うのが一般的だそうですね。この機械は稲を刈取り、籾の脱穀、わらの裁断などを一度にやっつけてしまえます。籾の乾燥は後ほど乾燥機で処理します。稲刈りの済んだ田に「はで」が何列も並び、稲束が架けてあるその間を走り回って鬼ゴツコをしたのを思い出します。日本の農業も大きく変化したと思います。

【青米】あおごめ。(『古文書用語辞典』)

いまだ熟さない緑色の米。

未成熟な「青米」でも「はで干し」をする間に多少は熟するという話ですが、年貢米には充てられませんでした。

「当郡之義ハ寒所冷水受之田方多御座候故、先年より至て米見付不宜青米はら白折米等有之、御蔵所ニおゐて御刎米多く」(文化六年(一八〇九)『千代田町史』)

当郡（山県郡）は寒所で冷水受の田方が多いため、先年より米の見かけが大変悪く、「青米」・はら白・折米などが混じり、藩の御蔵所で年貢米納入の際に勿米（不合格米）が多くでる。

この青米が、炊き上がりの「新米の香り」をもたらずそうですが、食べたことがないので分かりません。

上記「秘語独断」は『近世地方経済史料』第六巻所収のものから引用しました。同書は「ハデ干」を「ハデチ」（二ヶ所）と誤植しています。同頁に「ハデ干」「ハデ乾」の記述があるので「誤植」としました。

懸御厄害

「私儀芸州能美嶋畑村と申所之者ニ而御座候所、近年内証及逼迫ニ渡世方難相成ニ付、旧臘弍反帆船買行、式人乗ニ而石船稼相始メ、岩国ニおゐて開作築上ニ相成候ニ付而ハ彼場所へ石積越可仕と

奉存……御用繁之御中、奉懸御厄害候段奉忍入候」（天保十二年（1841）「踊場家文書」）

私は芸州能美嶋畑村という所の者です。近年内証（暮らし向き）が逼迫し渡世がむづかしくなり、昨年の暮、式反帆の古船を買い入れ、式人乗りで石船稼ぎ（石材の運搬）を始め、岩国での新開造成場所へ石を運ぼうと考え、（中略、運搬の途中で難船し、世話になった大島郡の村役人に対して、御用繁多のなか、「御厄害」をおかけしまして、誠に恐れ入ります。

「今朝被思召寄、おもしろき肴被下、今夕之下物に可仕候。毎々御届物懸御厄害候」（熊谷鳩居堂宛『頼山陽書翰集』下巻）

今朝はお気遣いいただいて、結構な肴を頂きました。今晚の下物（酒の肴）にします。いつもいつも御届物、「御厄害」をお掛けします。

【厄害】やくがい。（『広辞苑』）

厄難と災害。また、厄難にあつて害せられること。

文字通り「厄害」と解釈すると、意味が通りません。

【厄介】（『漢字源』）

〔国〕①他人の世話をすること。また、世話になること。②他の事に時間を使って迷惑であること。めんどろ。じゃま。③いさうろう。食客。

「懸御厄害」は「お世話になりました」ほどの意味でしょう。

鳩居堂は江戸時代創業の京都の筆墨の老舗で、この店の看板を山陽は揮毫しています。

せんたく その二

「○十五日ハあそび日なり。朝しごととして朝はんよりあそぶ。此日ハ朝飯より家来下女ともせんたくに遣スべし。おがみとして一夜とまり、せんたくとして四夜とまり、合して五夜とまつてもどる事なり。みやげとしておがみ分白米壹升、せんたく

米として白米壹升、合して貳升ツ、遣す事。尤家来下女壱人はのち二遣すことなり。十四日ばんにハよなべなし」（明和年間（二七六四〜七二）「家業考」）

○（二月）十五日は小正月で仕事休みである。朝仕事をして朝飯をすませてから休ませる。この日は下男、下女とも朝飯がすんだら実家へ里帰りさせること。正月休みとして一晩泊まり、やぶ入りとして四晩泊まり、合わせて五晩泊まって帰らせる。みやげとして正月休みの分が白米一升、やぶ入り米として同じく白米一升、合わせて二升ずつもたせてやること。もつとも、下男と下女のうち、それぞれ一人ずつは残しておいて、後日里帰りさせる。前日の十四日の晩は夜業はさせない。（現代語訳は小都氏のものによる）

明和年間（一七六四〜七二）に丸屋甚七（高田郡多治比）が書いた『家業考』には、詳細な農事暦が記されています。引用した部分は正月の記事です。

甚七は大地主で、二町余を自作し、使用人が二〇人以上いたといいます。

以前、「せんたく」について検討し、「針仕事、仕立直し」のことであると知りましたが、再び「せんたく」の話です。『家業考』の編集者の注によると、

【せんたく】（『家業考』の注）

奉公人に休暇を与えて親元へ泊まりに行かせること。やぶいり。

【セentakアルキ】（『世界大百科』「里帰り」の項）

「セentakに行く」などといつて年に数回、自分や子の衣服の調製修繕をするため長期間里帰りする。この慣習は全国的にみられる。多くは農作業開始前の春と、農作業がひとまず片づいた秋に行われ、その期間は数日から一カ月にもおよんだ。この種の里帰りは婚出してから数年、長いところでは十数年後まで行われ、その間衣生活のほとんどは生家に依存することになる。（植松 明石）

「せんたく」は、衣類の洗濯から始まり、針仕事、仕立て直し、更に里帰りにまで意味が拡大しています。農家の嫁は自分や子の衣服の修理は実家でするしかなかった……と同時に、命の洗濯もできる楽し

みな里帰りでもあったのでしよう。

この場合は、嫁ではなく使用人の里帰りですから、敷入りです。おみやげは主人から貰った米貳升。

【敷入】（『広辞苑』）

奉公人が正月および盆の一六日前後に主家から休暇をもらって親もとなどに帰ること。また、その日。盆の休暇は「後の敷入り」ともいった。宿入（やどいり）。

【洗濯泊】せんたくどまり。（『日本史用語辞典』）

敷入ともいう。近世、農家の奉公人が宿下りをする。九月下旬から十月中に、平年は一二日、閏年は一三日間休暇を与えられ実家に帰った慣習。

【おがみ】（『家業考』の注）

正月に実家に泊まりに行くこと。

これからは、広島地方の農家奉公人の里帰りについて、アンテナを張っておきたいと思います。

たばひ申度

「昨日か、何より之二種、忝奉存候。梨子は、別てめづらしく御座候。拙も大方快復に及申候。是をムザく」とたべ仕舞候も可惜。母の参迄たばひ申度、如何してたばひ候ものニヤ、御存など候ハゞ、御教可被下候。

(月日欠)

鳩居堂様

頼

御小児さま、麻疹は如何ナサレ候ヤ」(熊谷鳩居堂宛『頼山陽書翰集』下巻)

昨日いただいた何よりの二品、ありがとうございます。梨子は特に珍しく、私も大方快復しましたので、これをむぎむぎと食べてしまうのも勿体なく、母の参るまで「たばひ」申したく思います。どのようにして「たばひ」候ものか御存知ならお教え下さい。

御子様の麻疹はどうなりましたか。

【庇ふ・貯ふ・惜ふ】たばう(タバフ)。(『広辞苑』)

①惜しむ。大切に守る。②大切にしまっておく。たくわえる。

珍しい言葉に驚き、辞書にチャンと載せてあるのにも感激しました。

病氣見舞いの梨の札状だと思いますが、母親まで担ぎ出してこれほど喜ばれると、鳩居堂も、また何かプレゼントしたくなるのだと思います。手本のような貰上手の山陽の札状でした。

ちなみに、梨を「たばふ」方法は、ヘタの部分を下にして冷暗所で保存することだそうです。

ゑよふぶしん

「普請どもあらば此頃より用意すべし。人をやとふニハ春がいつちやといよし。おそふニハ人すくなし。家、駄屋、灰屋のよふなものをつくるニハこふ中を頼んでもよし。つとめやいゆへなんばいそがしくてもちゃんなしにしてくるなり。ゑよふぶしんニハいゝにくし」(明和年間(一七六四〜七二)「家業考」)

普請をする年には、このころ(正月)から普請の

用意をする必要がある。人を雇うにしても春が一番雇いやすい。おそくなると雇いにくくなる。家、家畜小屋、灰屋のようなものを作るには、講中の人を頼んでもよい。これはお互いに務め合いだから、どのように忙しくても無償でしてくれる。しかし、栄耀普請では頼みにくいものであるから、別に考えねばならない。(現代語訳は小都氏のものによる)

『家業考』は広島弁丸出しで書いていますが、広島のお年寄は辞書を見ないでも大部分は解ります。辞書の説明と小都氏の注を比べます。辞書の説明も間違ではないのですが、現地の研究者小都氏の注にはかきません。

【駄屋】だや。(『広辞苑』)

(中国地方で) 厩舎(うまや)。

【駄屋】(小都氏注)

牛馬小屋。この地方では母屋とは別棟で、納屋に併置されていた。

【灰小屋】はいごや。(『古文書用語大辞典』)

灰屋とも。農家で灰を貯えておく小屋。しばし

ば火災のもとなつた。

【灰屋】(小都氏注)

焼土をつくるため田の中に建ててある野小屋。四本柱で、三方の腰を土や石で囲み、屋根をふいたもの。「はんや」と呼んでいる。

この記事には、講中と栄耀普請のことが書いてあります。

【講中】(小都氏注)

この地方(広島)で講中とは、安芸門徒と呼ばれる真宗門徒を中心にした講組織(共同体)で、相互扶助の組織でもある。

【栄耀普請】(小都氏注)

母屋や納屋などの普請でなく、離れ座敷とか隠居部屋などのぜいたくな普請のこと。

「栄耀普請」という面白い言葉は、広島だけでなく島根県など、各地で使われていたようです。

御尤もごかし

「去ル冬之頃より当郡穴村百姓共、村方入用多分懸り候杯と申立、御役所へ御直訴等ニ罷出候得共、年内ハ何之御沙汰も無之処、当年二月廿六日徒党を相企て百姓共人数四百余人相集り、本郷にて正学寺釣り鐘を突ならし、夫より勢揃をいたし直ニ同村川手出合いと申所之河原へ集り居候処、……就夫当三月右為御吟味当村市室屋方にて御しらへ始ル

御歩行目付 下村彦兵衛様

御番組 加の尾利三様

和田千三郎様

先役人御呼出し大キニしかり、夫より村方諸帖面不残取寄せ御改メ被成候計りにて百姓共ハ一円御しらへも無之候処、右帖面ニおみて何之私欲くも無之候得共、誠ニ色々と申立、役人計り強く御しらへ有之候得共、此度之御しらへ何之所詮も無之様二見へ、弥百姓をハ御尤もごかしニ御しらへ、仕廻ハ百姓方願下ケ之分ニ成り、三四十日の御しらへ漸々御帰り被成候」(文政十一年(一八二八)『加

計町史資料』)

去る冬の頃より当郡(山県郡)穴村の百姓共が、村方入用(村の経費)が多く懸りすぎているなどと申し立てて御役所へ直訴したが、年内には何の沙汰もないので、当年二月廿六日に徒党して、百姓共人数四百余人が集り、本郷で正学寺の釣鐘を突き鳴らし、それより勢揃いをしてすぐに同村川手の出合という河原へ集っていると、(中略)、当年三月、当村市室屋方で御歩行目付下村彦兵衛様・御番組加の尾利三様・和田千三郎様により取り調べが始まった。まず、先ず村役人を呼び出して叱りつけ、その後村方の諸帖面を残らず取り寄せてお調べになるばかりで百姓共は全然取り調べをしない。右の帖面とて何の私欲もないのに色々と申し立て、役人ばかり強く御調べになるので、この度の御調べは何の結論もないようで、最後に百姓を「御尤もごかし」に御調べになつて、結局は百姓方の要求願ひ下げとなつた。三四十日の間調べて御帰りになつた。

「御尤もごかし」という面白い言葉に出会いまし

た。「おためごかし」なら聞いたことがあります……。

【御為倒し】おためごかし。（『広辞苑』）

表面は相手のためになるように見せかけて、実は自分の利益をはかること。

【ごかし】（『広辞苑』）

〔接尾〕（ユカシの転）体言・動詞の連用形について、そのようなふりをして相手をだまし、自分の利益をはかる意を表す。

【尤もごかし】もつともごかし。（『広辞苑』）

何事にも「御尤も」と言つて、人の意をむかえること。

小体

「去ル申年改メ三ヶ年之間格外御省略被仰出、御年限中年頭暑寒五節句諸勤事相止候処、尚又此度厳敷被仰出候趣も有之候二付、弥以暮向取縮此余万端作略致候儀は勿論之事二候得共、斯永々右等勤

事等相止候ては終ニハ重き礼節を取失ひ候様移行之義も難計、依て来年より左之廉々ハ以前へ相復候事（中略）音信贈答之儀ニ相当夏尋出之趣も有之、端午幟并さげ之類贈候儀ハ不致旨其節及御答候通二付、破魔弓・羽子板等ハ素り上巳雛人形等も一円取遣りハ不致、雛飴之儀も幟立ニ准し上品手込之品ハ勿論、有合候共用捨成丈ケ小体手輕致候筈ニ候事」（安政元年（二八五四）『広島県史』）

去る申年（嘉永元年（二八四八））、あらためて三ヶ年の間格外的御省略が指示され、その年限中は年頭・暑寒・五節句諸勤事を中止していたが、この度も厳しい指示もあり、暮し向きを取り縮めすべて作略にすることは勿論であるが、このように永々と右の勤事を中止しては重き礼節を取り失うようになる恐れもあり、来年より左の事（省略）は以前に復することにする。ただし、音信贈答について夏に問い合わせもあり、その際、端午幟やさげの類は贈らないようにと回答した。破魔弓・羽子板等は勿論、上巳（三月節句）の雛人形等も一切取り遣りはしないで、雛飴りも幟立と同様、上等な品や手の込んだ物は勿論、

有り合せの品でも遠慮して、なるたけ「小体」手軽にしないさ。

広島藩から家中に対して「暮向万端作略」に関する指示です。「端午幟并さげ之類」の「さげ」とは幟を飾るためつり下げたものでしょうか。

【小体】こてい。（『広辞苑』）

住居・生活などが、小さくて、はででないこと。

織留三「商売物も―にして」。「―に暮す」 ↑

↓大体（おおてい）

【大体】おおてい。（『広辞苑』）

こせこせしないさま。おおよう。

電改

「村々は毎年両度ツ、村役人共電改と相唱、軒別見廻り、少々ニても不審之義有之候は早速申出候様一統へ相示、自然見過しニいたし置、後日ニ相頭ニおゐてハ、役人とも急度曲事ニ被行候条、此旨

厚ク相心得、毎年不怠見廻り、其度ニ不審之儀無之候ハ、其段書付ヲ以申出候様」（文政八年（一八二五）『広島県史』）

村々では、毎年両度ずつ村役人共が「電改」といって、軒別に見廻り、少しでも不審なことがあれば早速申し出るよう皆へ示しているが、もし見過しにして後日に露頭するなら役人共も厳しく処罰されるので、よく心得て、毎年怠らず見廻り、その度に不審なことがないのなら書付で申し出るよう、

【電】かまど。（『広辞苑』）

（「ど」は場所を意味する語）①土・石・煉瓦・鉄またはコンクリートなどで築き、その上に鍋・釜などをかけ、その下で火を焚き煮炊きするようになった設備。かま。くど。へつつい。②転じて、身代（しんだい）の意。独立の生活を立てる一家。所帯。

煮炊き用の設備から「世帯」にまで意味が拡大した言葉です。すると「電改」は「世帯調査」のことですが、何を調べたのかこの資料だけでは分かりませ

ん。駐在所の警察官が戸別訪問をするのと同じで、不審者を調べるだけではないと思われます。

もつとも、藩の関心事は不審者のことらしく、次のような報告書を提出させています。

「 覚 安芸郡中組

中野村

一 奥海田村

海田市

船越村

右村々竈改見廻仕候处、不審体之義無御座趣、別紙之通申出仕候、則書付取揃差上申候、以上

戊二月 割庄屋野間太兵衛

安芸郡御役所」（嘉永三年（一八五〇）「野間家文書」）

鬺引

「博奕之儀は勿論、夫ニ似寄候勝負事不仕候様、連々被仰出も有之候处、近来紋付と唱、賭物之取扱

仕、且又石州伊津和二て鬺引有之候二付、其取次等仕候者も有之様相聞へ、不埒之事ニ候、右類之儀ハ兼々被仰出候通、弥以相慎候様、召仕末々へも厳敷可被申付候」（安永四年（一七七五）「堀川町覚書」）

博奕は勿論のこと、それに似た勝負事はしないよう、度々仰せ出されているが、近来「紋付」という賭物の仲介をし、かつまた石州伊津和（出羽）で「鬺引」があるので、その取次をする者もあると聞き不埒のことである。これらは以前からの触のとおり慎むよう召使いの末々へも厳重に申しつけなさい。

【紋付】もんつけ。（『広辞苑』）

歌舞伎役者の紋を書いた紋紙を使用する賭博。棒引紋付。

【籤引き】くじびき。（『広辞苑』）

くじを引くこと。くじとり。抽籤。

「くじびき」を辞書で引くと「くじを引くこと」との説明がありました。こんな無愛想な説明では役に立ちません。籤は籤でも、まさか「あみだくじ」

のようなものではないはず。そこで「鬪引」について資料で調べてみました。

「御近国所々鬪引有之、右札取扱候者有之由相聞、甚以不埒之至ニ候、右札取扱仕候者は勿論、夫へ携候者ハ、後日ニ相聞候共、急度可被及御吟味候間」(安永六年(一七七七)「堀川町覚書」)

御近国の方々で「鬪引」があり、この札を世話をする者があると聞き、不埒なことである。札の仲介をする者は勿論、その直接係わる者は、後日に知れても、厳しく吟味するので、

「御他領ニ有之富鬪引之類携候儀ハ厳敷御法度筋、并博奕取扱候儀ハ勿論賭之諸勝負等迄も従来之御法度ニて」(寛政三年(一七九一)「堀川町覚書」)

御他領でやっている「富鬪引」の類に係ること、博奕、賭の諸勝負事は従来から御法度で、ここでは、「富鬪引」を簡単に「鬪引」といっているようです。

【富籤】とみくじ。(『広辞苑』)

多数の富札を販売し抽籤(ちゅうせん)により賞

金の当る、賭博の一種。江戸時代に流行。富札と同数の番号札を箱に入れ、箱にあげた小孔から錐(きり)を突き入れ、刺さったものを当り番号として多額の賞金を出し、残額を興行者の収入とした。寺社修理料などをまかなうため寛永の頃から公認され、江戸では谷中感応寺・目黒不動・湯島天神を三富(さんとみ)と称した。一八四二年(天保一三)禁止。富突(とみつき)。福富。見徳。

「於宮島市立之節、他国者を引受くじ引迄申事有之候由、彼地は市立之所ニ候得は格別之儀ニ候、然共くじ引は先年之突頼母子同前之儀ニ相聞へ候間、町之者末々ニ至迄皆て人数ニ相加り申間敷候」(享保十四年(一七二九)「堀川町覚書」)

宮島で市が立つとき、他国者を受入れて「くじ引」までであるというが、彼地は市立の所なので格別に許している。しかし「くじ引」は先年の「突頼母子」と同様なものと聞くので、広島町の者末々まで絶対に加わってはいけない。

石州伊津和(出羽)の鬪引ですが、出羽(現在、邑智

郡邑南町出羽）はたたら製鉄で有名で、中国地方有数の牛馬市が近年まで開かれていたそうです。宮島と同様、人集めの手段として鬺引が行われたのではないかと思います。

被為御付

三、四〇年前に出版されたある市の「市史」を古本屋でようやく手に入れ、読み始めました。

「右御願申上候通御憐愍之上、御聞届御貸付銀御免許被為御付被下候は、町中一躰之潤に相成、難有仕合可奉存候」

右の御願いを御憐愍のうえ聞き届け、御貸付銀の御免許をいただければ、町中全体の潤になり、感謝いたします。

一応、意味は解りますが、どこかおかしい。このような場面では「被為御付」という言い回しは使いません。「被為仰付」だろうと思います。外の資料で「被為御付」とした文書は皆無でした。この本で

は、「被為仰付」もありますが、「被為御付」も沢山見かけられます。正誤表には載せてありませんが誤植でしょうか。原資料と対照できないのでなんとも言えませんが、信頼性に欠けるのは否めません。「永禄二末年」とあれば「末年」を間違えたのかと思ってしまう。

已前二認

「拍案驚奇御覽被為済、御返却被成候よし、□□ル御事と奉存候、当今、さのミ入用之義も無之候へハ、年内ニても、来春ニても、御幸便之節ニて不苦候処、御心配之義奉存候、右、近日、着可仕と奉存候、此書状、已前二認置候間、別段之御請不仕候、左様御承知可被下候」（天保二年（一八三二）篠斎宛『馬琴書簡集』）

「拍案驚奇」を読了され御返却されたとのこと、□□の御事と存じます。今のところ、それほど入用ということもなく、年内でも来春でも、御

幸便のときでも構いませんでしたのに、御心配をいただきました。近日には着くと思います。この書状は前もって書いておりますので、格別の御請もいたしません。そのように御承知ください。

篠斎に貸した本が近日中に馬琴のもとに返ってくる話のようです。

面白いのは、「此書状、已前ニ認置候間」の文言です。現在進行形で書いている手紙に、「この手紙は、以前に書いておりますので」と書く不思議さ。

もつとも、「已前」とは、本が届く「已前」と考えると納得できます。本と手紙がすれちがうことを恐れての気遣いと思われます。メールで瞬時に連絡できる現在と違って、江戸と関西の間の飛脚には日数がかかります。

料金もかかります。篠斎宛のこの手紙は影印本で五一頁、一頁分の長さを二五^ツと計算すると約一三^ツ。『何分読書のいとま無之』と歎く馬琴の長文の手紙です。とても一気に書上げることはできません。「此書状、已前ニ認置候間」には、手紙を送出す「已

前」に、長時間かけて書いたという意味もあるのでしよう。長い手紙は、今流にいうと「コストパフォーマンスが高い」。

潤色

「凶年等之節、町新開之者共飢渴等之救之為め、以前は社倉銀と唱へ、当時は町御奉行所支配銀と名目附置候物は、町新開家畠等之売買歩一銀を差出置、是を貸付潤色仕候物に御座候」（寛延二年（一七四九）串田孝八綿改所改革案『廣島市史』）

凶年の際、広島町新開の者どもの飢渴を救うため、以前は「社倉銀」といい、現在は「町御奉行所支配銀」と名付けている資金があるが、これは町新開で家畠等の売買のとき「十歩一銀」を差し出させ、これを貸付けて「潤色」するものです。

「社倉銀」「町御奉行所支配銀」「歩一銀」と難しい言葉がありますので、『新修広島市史』から引用

します。

「公共的な町方の金融機関として、享保（二七二〇前後）ごろ町社倉銀と称したものがあつた。これは「町新開家島等之売買」の時、当事者から十歩一銀を差し出させることとし、これを貸し付け利殖すれば「凶年等之節、町新開之者共飢渴等救之為め」になるとして始められたものである。町大年寄がこれを管理して、一般の貸借が月一歩半から二歩であつたのに対し、月一歩の利で融通したから、町新開のものは大いに便宜を得たが、ともすれば返済の滞るものもすくなかつたことが伝えられている。寛延ごろには町奉行所支配銀と名称が改められ、町奉行所の直接管理に移されているが、同二年（二七四九）五月町方付歩行串田孝八の献議によつて綿改所の機構を改革し（綿座改所と称す）、ここに支配銀貸付方受引の町人を任用して頭取職に付け（肥後屋太郎兵衛・茶屋新平がその任にあつた）、支配銀の運用を任せることとした。」（『新修広島市史』）

集めた「十歩一銀」（代価の十分の一にあたる税）を「貸付潤色仕候」とあります。

【潤色】（『広辞苑』）

- ① 光彩を添えること。② 幸運。めぐみ。恩恵。
- ③ 表面をつくり飾ること。特に物語・話題などを、面白く作りかえること。潤飾。

ここには適当な説明が見当りませんが、「潤」は「うるおい」です。貸付には利子がつきものです。

【潤】（『漢字源』）

- ④ 「名」うるおい。しめり。色つや。転じて、元金からしみ出たもうけ。「利潤」

『解字』潤は「門十王」の会意文字で、曆からはみ出た「うるう」のとき、王が門内にとじこもつて静養するさまを示す。じわじわと曆の計算の外にはみ出てきた日や月のこと。潤は「水＋音符潤」で、じわじわとしみ出て、余分にはみ出る水分のこと。

利子は、元金から「じわじわとしみ出て、余分にはみ出る水分」のようなものだそうです。結局「潤色」とは「利殖」のことと知れます。

多門

以前のブログ「繰綿」(2006/09/05)の引用資料中に「多門」という言葉があり、その解説に「多門とは、多門長屋のことで、本宅の外周に建造した長屋に下級武士が住む」と説明を付したことがあります。今回は「多門」に的を絞って検討します。

【多聞】(『広辞苑』)

①城の石垣上の長屋。城壁を兼ね、兵器庫などに用いる。松永久秀が大和多聞城で始めたからという。多聞櫓。②本宅の外周に建造した長屋。

【多門・多聞】(『日本国語大辞典』)

①城の石垣の上に築いた長屋造りの建物。城壁のはたらきをもたせ、倉庫などに用いた。②本宅の周囲に建築した長屋。*大和事始・多門「今世宅外の長屋を多門(タモン)と云」③江戸城中の御殿女中がつかった下婢。長局が狭いので、御切戸御門内、多門(〇)のところへこれらの女達を置き、用事のあるときに「多門、多門」と

呼んだところからこの名があるという。御端(おした)。

「多門言葉といへる多門とは、藩士邸内の長屋のことにて、之に住せる者の言葉は一種あり、当時町人言葉に比して稍々上品なりしは常に上位の者に接遇して「遊ばせ」言葉を用ゐたるに依れり」(『広島雑多集』)

広島には「多門言葉」といわれる言葉があるが、この多門とは、藩士邸内の長屋のことで、これに住んでいる者の言葉は、当時の町人言葉にくらべて上品なのは、いつも上位の者をもてなし「遊ばせ」言葉を使うためである。

「拾年已前二牢御屋鋪番二被仰付、則御多門へ引越参居申候、然ル処、此度町宅仕度奉存候二付、御屋敷御多門明ヶ差上申度段」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

一〇年前に「牢御屋鋪番」になり、その御多門へ引越しました。この度「町宅」したく思い、御屋敷の御多門を出たいと

「同(寛政)五年十一月朔日、杏坪は妻児を携へて、学問所の御多門に移居し、……学問所の御多門と云ふは、今の、所謂門長屋なり」(重田定一『頼杏坪先生伝』)

これら3例の資料にある「多門」は、『広辞苑』②の意味で使っております。つまり、「門長屋」のことです。

【長屋門】ながやもん。(『日本国語大辞典』)

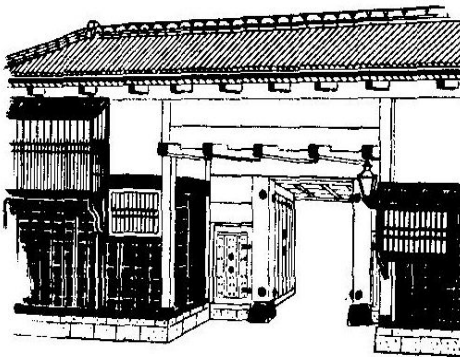
武家屋敷などの前面に家臣・下男などを住ませるための長屋を設け、その一部をあけて門としたもの。屋根は長屋と一つづきとなる。(下図は『日本国語大辞典』から)

藩士邸内の門長屋なら、部屋数も少なく、家臣・下男以外の者は住まわせないだろうと思ういます。頼杏坪の移住した学問所の御多門も(社宅)の様なもの、会社従業員だけのための施設でしょう。ところが、次の『廣島市史』(大正十一年発行)によると、「御多門」は藩から貸与(無料か)された下級武士(御歩行組)の住宅で、長屋ではないとの説明

です。

「(宝永六年(一七〇九)十二月藩府は白島村一本木に長屋四十四軒を作り、長柄の者(藩府槍卒の類)を置く、皆家賃を徴せず、家族と共に住せしむ、藩内廉従夫卒の類にして、住家を給与せらるゝもの之に止まらず、皆是の如き長屋に住するを得せしむ、之を『御長家』と称す、又御歩行組も住宅の貸与を得

たるもの少からず、其構造は長屋作りにあらずして各戸独立の家なれども、概ね玄関を設けず、総て草葺なり、之を御多門



長屋門〈東京風俗志〉

と称す」（『廣島市史』）

「夫依り土手つゝき西の方一本木御馬屋丁とて御家人の下々数多、堤にかしの木有り、依て一本木といふ也、夫より諸侍の屋しき、此外町借宅或ハ自分家、又ハ端々に御長屋多門住居の輩多し」（延享二年（一七四五）『広島独案内』）

それから土手続きの西の方に一本木御馬屋町があり、御家中の下級武士が多く住む。堤に櫓の木があるので一本木という。それより諸侍の屋敷、町借宅・自分家、または端々に御長屋多門住居の者が多い。

「広島国泰寺之下、八拾間多門（今七十間多門といふ）……七十間多門、士列」御歩行組などの御多門あり」（『梅鶴閑話』）

広島国泰寺の南に「八拾間多門（今は七十間多門という）」という地名があり、士列や御歩行組などの御多門になっている。

これらの資料にみられる「多門」は、長屋か戸建の区別はともかくとして、門長屋のような規模の小

さいものではなく、下級武士のための〈住宅団地〉だと思われます。

「多門・多聞」という言葉は、多聞櫓から始ったのではないか。城の石垣上の長屋で足軽たちが住んでいた。この多聞櫓と門長屋の類似から、門長屋も「多門」と呼ばれるようになり、やがて、足軽たちの住む長屋や〈団地〉までも「多門」に加えられた。私はそのように思っています。

門を打

「於町中何者によらず、令喧嘩及刃傷、又は打果候はゞ、其町之門を打、早速奉行江申来、可相待裁許候、其内は申なため候て、引分置可申候、猥に大勢集り不可騒動事」（元禄十二年（一六九九）広島町法度『廣島市史』）

誰であらうと、町中で喧嘩や刃傷沙汰をおこし、または人を殺したときは、その町の「門を打」、至急町奉行へ知せ、指示を待ちなさい。

その間はなだめ聞かせて引き分けて置き、みだりに大勢の者が集り騒動してはいけない。

「門を打」という面白い言葉に出会いました。

【大門を打つ】（『広辞苑』）

遊郭の大門をしめて人の出入りを禁ずる。また、郭（くるわ）内の遊女を買い切つて豪遊する。

この場合は、大門ならぬ町門です。「門を打」とは「門をしめて人の出入りを禁ずる」ことで、釘を打ち付けて閉鎖することではなさそうです。

「広島城下の警備のため、各町の境界に町門（木戸）を設けたが、その設置は福島時代に始まり、浅野時代に整備された。家中町にあるものを侍町総門、町人町にあるものを町門とよび、双方あわせて百余に及んだという。一七五八年（宝暦八）の大火のころ町門は一〇七あったのが、復旧のとき整理され七三となり、以後も減少したが、明治以後まで存続した。夜間は門を閉じ、守衛のものをおいた。」（『広島県大百科事典』）

「街道沿いに関所の設けられることはなかったが、広島城下には各街路の両端に町門（木戸ともいう）が設けられていた。警備のための施設であることはいうまでもないが、夜八時より翌朝六時までは木戸を立てて自由な交通を許さなかったのであるから、交通の障害となったことは否定できない。宝暦九年には西国街道沿いの町門は多く整理されて、西に堺町二丁目門・猫屋町門、東は京橋町門の三か所だけを残したが、平生は「往還本通りの町門は閉不申」ようにして、旅人往来の便宜をはかることに改められた。」（『新修広島市史』3）

「夜間閉鎖された町門を通るのは、町民においても鑑札が必要でそのおりの手続はかなり複雑であった。」（『新修広島市史』2）

包銀・包賃

「銀札場の事務……銀納諸貢米石代の引受をなし、

都市の上納銀を取扱ふ、○案ずるに、此上納銀は五匁札四拾枚、乃ち貳百目を一定の紙包となし、封緘嚴密鄭重なる押印をなし、包銀と唱へ、之を以て御銀蔵に納むるものとす、貳百目に充たざる端数は、端切手と唱へる一種の預り券を以てす、藩府にては、包銀にあらざれば一切取扱はざる事となり居れり、此改め手数料として千分の二、乃ち百目に付二分の割を以て料金を納めしむ、之を判賃と唱へり」(『廣島市史』)

銀札場の事務のひとつは、銀納諸貢米石代(年貢米の代りに納める税金)や都市の上納銀を取扱うことである。この上納銀は、五匁札四拾枚(貳百目)を一定の紙包にし、封をし嚴密な押印をする。これを「包銀」といい、これを御銀蔵に納める。貳百目未満の端数は、「端切手」という一種の預り券で納める。藩府は包銀でないと一切取扱わない。この改め手数料として千分の二(百目に付二分)の料金を銀札場に納めるが、これを「判賃」という。

藩へ上納する銀札は、まず銀札場で包んでもらう。

五匁札ばかりで貳百目を包み、封をして押印をしてもらった「包銀」を御銀蔵に納める。御銀蔵は銀札の枚数など数える事務が軽減されることになる。銀札を包む手数料は金額の〇・〇%で、銀札場に払う。本来の「包銀」は、文字通り銀貨を包むこと。銀貨の品位や重さを測らなくてもよくなります。

【包金銀】(『岩波日本史辞典』)

江戸時代、紙に包み封印した金銀貨。封包のまま流通し、表には内容量や封をした者の名前を記して内容を保証した。幕府への上納は、金貨は後藤包、秤量銀貨は常是包、計数銀貨は銀座包に限られたが、民間では両替商の仲間包が流通。銀遣いの上方では銀貨を計量する必要があるから、端銀にいたるまで包銀がさかんに行なわれた。

銀札の場合は、枚数を数えるだけの計数貨幣ですから、「包銀札」にする必要性はないはずだ。「包銀札」なのに「包銀」というところからみると、「包銀」の真似をしただけで、藩に納めるときは仕方なく「包銀」にしたのでしょう。

この手数料には、次の規定がありました。

「札包賃ハ只今迄之銀子包賃同前二候、則包賃ノ定、別紙書付有之候事

(別紙)包賃之定

一 壹匁ヨリ三拾目迄 壹分

一 三拾匁分ヨリ六拾目迄 壹分五厘

一 六拾匁分ヨリ百目迄 貳分

一 百目壹分ヨリ百三拾目迄 三分

一 百三拾目壹分ヨリ百六拾目迄 三分五厘

一 百六拾目壹分ヨリ貳百目迄 四分」(『廣島市史』)

「銀札の包賃は今までの銀貨の包賃と同じとする」ので、貳百目の「包銀」の包賃(判賃ともいう)は四分になります。

大黒常是が銀貨を「包む」から、その品位・重量が保証されます。つまり、「包賃」は手間賃ではなく保証料に相当します。

藩札を包んで、同額の「札包賃」を出させるとは、一体何を保証するというのでしょうか。

細工仕習

「諸職人共弟子細工仕習之者可有之候、其者前髪在之内ハ無帳ニテ細工仕、年頃相過元服任候ハ、早速可申出候、遂吟味御帖ニ可付候」(正徳六年(一七一六)『知新集』)

大工など職人の弟子で「細工仕習」の者は、その者に前髪があるうちは無帳で細工をしてもよいが、年頃を過ぎて元服をすれば早速申し出なさい。調べて御帖(作事所の職人改帳)に登録する。

【前髪】(『日本国語大辞典』)

昔、少年や婦人が髪の毛の額の上の部分に別に束ねたもの。ぬかがみ。ひたいがみ。向髪。(下図)

もつとも、この図の前髪の少年は大工の卵とは思えません。



前髪② <和国百女>

「元服は多くは十五歳の頃前髪を採、名など改、親族因人を招軽き饗膳を進むもの稀二あれとも多くハ幼少より自然生羽釜丁稚にて前髪のもの少し」
 (文政二年(一八一九)田口村「国郡志御用ニ附下約書出帳」)

元服は、多くは十五歳の頃に前髪をとり、名などを改め、親族因人を招いて祝宴をひらく者も稀にはあるが、ほとんどは幼少からの自然のままの「羽釜丁稚」で前髪のある者は少い。

「羽釜丁稚」という子どもへのアースタイルは後日検討することにして、庶民の子の〈元服〉は一五〜一七歳のように、それ以前から親方のもとで修業しています。これを「仕習之者」といっています。

【為習】 しない。 (『日本国語大辞典』)

しなうこと。修業すること。また、その人。

「諸職人に弟子入りして「細工仕習之者」(手間ともいった)でも元服以後は作事所に登録して、半役としての焼印札の交付を受けなければならない

ことを規定している。」 (『新修広島市史』)

『新修広島市史』は「手間」ともいったと解説していますが、辞書の説明と違います。

【手間】 (『広辞苑』)

③ 手間賃をもらってする仕事。また、その職人。

絵符

「以来町人へ絵符ヲ貸渡、公家衆・門跡方并武家之荷物ニ為致候儀、急度相止可被申事」(天明四年(一七八四)「堀川町覚書」)

これからは町人へ絵符を貸し、公家衆・門跡方や武家の荷物に偽装することは絶対にしてはいけない。

「絵符」という言葉は子どもの頃聞いたことがあります。

【えぶ】 (『日本国語大辞典』)

「方言」 荷物に目印のため付ける紙片の類、ま

たは荷札など。淡路島 岡山 広島 山口……。

元来は、「絵符」でした。これは幕府の出した触書で、『御触書天明集成』247に載せてあります。

【会符】 えふ。（『世界大百科事典』）

江戸時代、幕府や大名、朝廷、公家、寺社などが荷物運送に際して、自分の荷物であることを明示するため荷物につけた証札で、伝符、行李符ともいう。絵符とも書く。会符は、多くは木札で、板札の上部に穴をあけて紐を通して荷物につるすもの（絵符）と、板札の下に柄をつけて荷物に立てて標示するもの（立絵符）との2種類があった。幕府や朝廷のものには葵や菊の紋章の下に〈御用〉と墨書し、大名の場合は各家の紋章の下に城下所在地名、寺社などは紋章の下に例えば〈知恩院 御用〉などと記した。これらの荷物は、宿駅の人馬を使つて継ぎ送つたが、將軍家御用物など無賃錢のもの以外は、多くが御定賃錢で運送できる特権を与えられていた。18世紀後半以降、商品流通がさかんになり、御定賃錢と相対賃錢との差がひらくと、町人、百

姓が武家、公家などに金銭を提供し、その会符を借りて自分の商品荷物を御定賃錢で送る風潮が生じた。このため幕府は、しばしば禁令を出して取り締まったが、十分な効果はなかった。

（丸山 雍成）

第一、三集索引

【あ】

合鑑	①	153	上り家	③	83
合鑑紙	①	152	揚屋	③	84
相借家	①	54・②	上り屋敷	③	84
相対	①	39	安芸木綿	③	146
相対死	①	40	悪水	①	66
合符	①	153	上限	①	194
合札	①	154	朝都	②	113
可相触	①	12	浅野忠義	②	162
可被相触	①	12	浅野長懋	①	155
青毛	①	87	浅野長訓	③	132
青米	③	160	浅野斉肃	②	149
垢付	②	52	浅野宗恒	③	29
上田地	②	198	浅野慶熾	②	148
			朝八字	②	90

足輕	②	15・③	32	預り申金子	②	53	焦る	②	51	当前	②	132	西風東風	①	95	彼方此方	①	95	嘸	②	24	あの御方	③	31	阿部半左衛門	①	144	阿部正倫	③	108	雨池	②	130	雨落	①	183	雨落何坪	①	184	雨乞	①	191
----	---	------	----	-------	---	----	----	---	----	----	---	-----	------	---	----	------	---	----	---	---	----	------	---	----	--------	---	-----	------	---	-----	----	---	-----	----	---	-----	------	---	-----	----	---	-----

【い】

復興・安駄	①	36・②	40	如何し	②	144
家持	②	17				

如何わしい ② 144
 生高 ① 88
 生高免 ① 88
 息杖 ③ 85
 幾幾 ② 142
 幾許 ③ 19
 石打 ① 139
 医師成願書 ① 10
 惟然 ② 186
 居船頭 ② 105
 已前二認 ③ 171
 礪はへ ① 88
 板場 ① 170・② 58
 逸々 ② 191
 一字拝領 ② 148
 一倍 ② 127

一分 ① 139
 一里 ① 21
 一六勝負 ① 146
 いつ也とも ② 157
 井手 ① 65
 稲子・蝗 ③ 113
 稲星 ① 119
 稲若丸 ① 118
 伊能忠敬 ② 159
 猪鹿 ② 37
 命つり ② 43
 今中大学 ① 145
 いられ子 ① 34
 入切手 ② 137
 入米 ① 26・150
 印地 ① 139

因の嶋米 ② 25
 印免 ② 165
 浮置 ② 187
 萍日記 ② 28
 浮過 ② 187
 浮地 ② 197・③ 40
 浮儲 ② 187
 浮け貼り ② 178
 請米 ① 84・① 93
 有残・胡散 ② 97
 春 ① 31
 うだり ① 82
 内俵 ③ 11
 鬱陶 ① 71

馬踏 ① 32
 馬代 ② 107
 馬持 ③ 32
 裏 ① 15
 裏入 ① 16
 裏借屋 ① 161
 浦辺御藏所 ② 64
 潤 ③ 173
 浮塵子 ③ 113
 運賃米 ② 63
 永貴文 ① 185
 永日 ③ 109
 永代上限 ① 184
 江戸のおかゝ ① 141

絵符 ③ 181
 えぶ ③ 180
 栄耀普請 ③ 165
 遠行 ② 8
 猿猴 ② 20
 焰硝土 ③ 63
 【お】
 御跡慕ひ ① 90
 追揚百姓 ③ 118
 御暇 ① 146
 大形 ③ 86
 不大形・不大方 ② 39
 大塩の乱 ③ 21
 大塩平八郎 ③ 94
 大炭 ② 48

大田南畝 ① 8
 太田川の水運と舟宿 ② 29
 大束 ① 154
 大体 ③ 168
 大橋経登 ① 132
 大橋主税 ① 146
 大門を打つ ③ 177
 於勝殿 ② 14
 おがみ ③ 163
 岡岷山 ① 22・③ 107
 沖船頭 ② 105
 御銀出 ③ 105
 晩田 ② 74
 御蔵所 ② 64
 送り証文 ① 121・② 104

御小人 ② 15
 御小人賄札 ② 15
 御小休 ② 33
 御差紙立米 ② 33
 御差次納 ② 32
 押借り ③ 121
 押押 ① 75
 御仕向 ① 180
 惜めく ③ 12
 御祝儀米 ② 27
 御為倒し ③ 167
 御多門 ③ 175
 落葉搔取 ① 81
 御序の御前御用 ③ 32
 被為御付 ③ 171
 威筒 ② 37・③ 36

落し文 ② 129
 威・緘 ② 163
 御取替米 ② 188
 御取越 ① 135
 御長家 ③ 175
 御成間 ② 34
 御残し米 ① 177
 尾道 ② 41
 御百姓 ① 113
 御昼御膳所 ② 33
 御触通 ① 151
 御誉・御賞 ③ 90
 表 ① 16
 表借屋 ① 161
 表店 ① 161
 御戾米 ② 108

御役所	③ 80	御屋敷様	① 40・② 27	恩送り	① 107	隠地	③ 131	御百姓	① 113	廻国	③ 101	買船	① 93	買う	① 15	返掛け	① 126	抱屋敷	② 61	不抱	① 91	抱・拘	① 91	刈杭・加杭	② 49	客星	① 119				
鶴亭	③ 6	算	② 46	掛送り	① 126	懸紙	② 66	駆込訴	③ 142	懸け造り	① 100	懸け造	① 100	翔付	① 158	掛渡井	② 47	欠ヶ流	② 83	懸引	② 49	掛ヶ引	② 50	掛持ち	② 60	掛持庄屋	② 60・② 82	掛持家	② 60	駕籠	② 115
水主役	③ 98・98	水主役銀	③ 98・99	重ミ	① 60	下士	③ 33	借付	① 55	貸付金	③ 41	貸本屋	③ 48	家小	② 92	和す	③ 134	被衣初め	② 77	掠める	② 193	風起筵	② 19	持	① 6	家代	① 54	くはたく	② 122	かたき売	① 68
徒士	③ 32	歩行渡	① 78	徒渡	① 78	冠米	③ 49	被く	③ 50	勝手	① 121	勝手二付	① 121	鉄判枡	① 21	曲尺勾配	① 168	預而	① 123	蚊ふすめ	① 28・③ 94	竈	③ 168	竈改	③ 168	鎌留	② 133	上向	② 154	賀屋忠恕	③ 120

粥之実 ③ 154
 唐竿 ② 18
 唐樋 ② 153
 刈干し ③ 160
 彼是 ③ 46
 河井継之助 ① 8・155・③ 122
 川裏 ① 168
 川表 ① 168
 かわもち ① 64
 川除 ① 106・168
 川除堤目論見 ① 167
 かんかんのう ② 151
 鳶木 ② 26
 管弦祭 ② 194
 欠立 ② 174

勘弁 ① 51
 願解き ② 89
 欠米 ① 150
 貫文 ③ 88
 【き】
 貴意 ① 17
 聞き合せる ③ 31
 聞き逃す ② 195
 児游貝 ① 97
 帰住 ③ 17
 帰城 ① 148
 帰省 ② 58
 競立 ③ 44
 北平・南平 ① 173
 屹度・急度 ② 89・③ 7・37

無屹度 ② 89
 寄特 ③ 26
 木村丹波 ① 145
 鳩居堂 ③ 162
 休日の覚え方 ① 133
 休日 ① 133
 休泊 ① 148
 気動 ③ 34
 得御意 ① 17
 崎陽 ① 118
 享保の飢饉 ① 180
 京桺 ① 26
 曲亭馬琴 ③ 5
 切替畑 ② 114
 切金 ② 10
 切賃 ② 146

切畠 ② 114
 切米取り ② 55・③ 33
 銀札 ① 142
 銀札場 ③ 177
 銀建 ① 33
 金百疋 ③ 88
 銀歩 ① 142
 【く】
 杭柵 ② 121
 釘貫 ② 94
 くごし・くぐし ① 29
 草稻 ① 172
 芸る・耘る ② 179
 草手 ② 76
 草手銀 ② 67

蔵付・倉付 ③ 10
 蔵掛ヶ屋根 ③ 119
 蔵入地 ① 150
 愚昧之百姓 ① 101
 愚昧 ① 101
 窪処 ② 45
 口入 ① 153
 工手間 ③ 116
 屈する ② 37
 口過 ① 98
 具足 ② 163
 籤引き ③ 169
 鬺取札 ② 79
 鬺帳 ② 80
 籤親 ① 154
 草麦 ① 171

元服 ③ 180
 兼帯庄屋 ② 82
 軒号 ③ 6
 玄蛙 ③ 45
 下馬 ② 95
 闕所 ③ 84
 下足 ① 114
 毛上合力 ② 197
 【け】
 鯨油 ③ 113
 訓点 ② 166
 郡中底引 ② 102
 郡借 ③ 138
 黒田斎 ① 146
 操綿 ① 45・46

合米 ① 150
 勾配 ① 168
 蝗虫 ③ 113
 広太 ③ 71
 こうそ ③ 38
 楮 ③ 106
 口銭 ② 41
 講中 ③ 165
 合字 ① 105
 口演書 ① 41
 小以高 ① 85
 小以締 ① 85
 【こ】
 見文字 ② 78
 見聞わらひ集 ① 140

瞽師 ② 113
 心拍子 ① 195
 小越船 ② 26
 御国恩 ③ 154
 五合摺 ① 29
 御減石 ② 109
 五組 ③ 73
 石代 ③ 178
 石銭 ③ 27
 御帛城 ① 147
 肥松 ① 190
 合力 ② 196
 合力米 ② 196
 広陵 ① 118
 高利 ① 110
 郷宿 ③ 140
 ・
 ③ 137

札包賃 ③ 179
 差寄せ ② 86
 座順 ② 190
 差免 ③ 57
 差し許す ③ 57
 さし持 ③ 84
 差引 ① 185
 差し火 ① 42
 差し担い ③ 85
 差次払 ③ 18
 差次・差継 ③ 18
 差次 ① 156
 差立 ② 87
 差心得 ① 32
 差繰 ③ 115
 差紙立 ② 32

三之瀬 ③ 114
 三斗俵 ① 25
 棧俵 ③ 11
 三献 ① 121
 サンカ ③ 56
 沢讃岐 ① 146
 座本 ② 114
 侍士 ③ 32
 侍 ① 116
 様付 ③ 68
 ざまく ① 100
 指別 ① 157
 サハイ虫 ① 172
 実を操る ② 159
 さでる ① 82
 薩摩芋 ① 124

子午改 ③ 35
 時化味 ① 5
 竺 ② 124
 直乗船頭 ② 105
 敷 ① 168
 地方 ③ 72
 仕置 ② 129
 似雲 ③ 87
 仕合 ② 34
 仕当 ① 163
 地合 ③ 24
 時合 ② 109
 【し】
 山林諸荷物 ③ 41
 参府 ① 147

四半・幟半 ③ 66
 死に残り ② 44
 地押 ① 76
 仕習 ③ 180
 為成す ① 50
 地頭 ① 54
 実名 ② 148・③ 5
 熟と ① 20
 実体 ③ 25
 下宿 ③ 44
 認メ ③ 21
 下地 ① 23
 随而 ② 191
 慕ひ ① 90
 時節柄 ② 110
 寺社帳 ③ 151

熟与 ① 19
 宿継 ① 35
 宿水 ② 45
 秋分点 ② 96
 十歩一銀 ③ 42
 拾人講 ① 126
 祝儀米 ③ 9
 自由 ③ 85
 積気 ② 140
 借知 ② 109
 积氏 ② 125
 自滅 ③ 103
 仕向 ① 179
 染々 ③ 22
 自普請 ③ 87
 寺判 ② 73

初会 ① 126
 春米 ① 29
 正米 ① 29
 硝石 ③ 77
 焼失家屋 ③ 97
 上士 ③ 33
 上下銀 ② 10
 上下銀 ① 55
 象魏 ③ 38
 正月 ③ 157
 定屋大橋 ① 79
 潤色 ③ 173
 自由 ② 76
 出府 ① 166
 出来 ③ 58
 守護 ① 62

【す】

人馬改め ② 71
 身代限り ③ 119
 親切・深切 ③ 148
 塵劫記 ② 172
 人氣 ② 34
 心学 ③ 120
 新開組 ③ 73
 士列 ③ 32
 尻を押す ③ 26
 初老 ② 161
 除帳 ① 103
 諸職人水役銀 ② 126
 諸色・諸式 ② 79
 所作 ② 157

乃不与焉 ② 134
 砂浜り ② 93
 捨文 ② 128
 捨り ② 30
 生業 ② 178
 杉形 ① 27
 透と ① 175
 巢下ろし ① 152
 ずえる ① 76
 据える ③ 133
 居風呂 ① 132
 居扶持米 ③ 15
 末姫 ① 141
 彗星 ① 119
 水上輪 ③ 140
 水滸伝 ③ 127

節 ① 78
 関札 ① 158
 関蔵人 ① 145
 制度 ③ 75
 晴天十日 ③ 42
 【世】
 寸志銀 ① 192
 寸志 ① 192
 不得寸暇 ② 11
 寸暇 ② 11
 磨臼 ① 30
 数望 ② 102
 墨付 ① 164
 墨祝ひ ① 164
 統べる ③ 125

洗濯 ② 35
 船淬 ① 43
 仙固紙 ① 157
 千一 ② 135
 世話敷 ③ 107
 糴約 ③ 144
 せり立 ③ 145
 迫り立 ② 176
 被為 ③ 135
 銭取遣 ② 13
 銭相場 ② 13
 銭さし ① 128
 背中を押す ③ 26
 瀬取船 ③ 27
 瀬取 ③ 27
 切切 ③ 82

空色 ② 35
 戯 ① 192
 外聞 ③ 30
 訴答 ③ 140
 袖乞・袋乞 ② 128
 卒与 ① 182
 曾我豊後守 ③ 92
 候半 ① 3
 候者 ② 138
 惣髪 ③ 57
 【そ】
 先ン取 ③ 103
 洗濯泊 ③ 163
 センタクアルキ ③ 163
 せんたく ③ 163

疊肥 ③ 78
 佇む・ゝむ ③ 55
 多足 ① 124
 多賀庵玄蛙 ② 29
 太陽暦 ③ 157
 太陽暦換算 ① 22
 滞府 ① 148
 堆肥 ③ 79
 大唐米 ① 34
 大小暦 ③ 158
 大儉 ② 42
 大工卯之助 ② 38
 【た】
 夫切 ③ 34
 そわい ① 89

量む ① 178
 たたら製鉄 ② 48
 多端 ③ 60
 立木 ③ 145
 立退所 ① 158
 立宿 ① 14
 田丁・田町 ② 129
 立坪 ③ 152
 立・建 ② 14
 建り合 ② 15
 棚川 ① 66
 手無・袖無 ③ 63
 種卸し・種下ろし ③ 134
 種和シ ③ 134
 種野友直 ① 141

田の実 ③ 69
 頼母飴り ③ 69
 頼母子講 ① 125
 田面船 ③ 69
 束・手把 ② 107
 庇ふ・貯ふ・惜ふ ③ 164
 給 ① 6・③ 28
 偶・適・会 ③ 105
 多門・多聞 ① 46・③ 174
 多門言葉 ③ 174
 駄屋 ② 21・③ 165
 たる砂 ① 86
 誰々借屋 ② 16
 俵拵 ② 143

俵付米 ② 28
 反帆 ① 20
 地他 ③ 53
 因頼母子 ① 126
 茶を煮る ② 152
 中 ① 78
 中士 ③ 33
 帳落寺 ③ 151
 町儀 ① 159
 てうさん ③ 38
 朝鮮通信使 ② 6・③ 114
 丁場 ① 116
 貯穀 ③ 112
 鳥度 ① 6

【ち】

ちよほくれ ① 141
 次ぎ親 ① 154
 つきたてぼし ③ 160
 突頼母子 ③ 170
 二 ② 192
 随而 ② 193
 築山為蔵 ① 146
 次ル ① 73
 付紙 ② 66
 付け届け ③ 49
 差火 ① 42
 晦 ① 80
 辻借 ③ 138
 つゞ・やさら ① 96

【つ】

【て】

つづ正月 ① 63
 包銀 ③ 178
 包金銀 ③ 178
 湊 ① 60
 勤崩 ① 75
 縊米銀 ① 4
 縊 ① 4
 繫 ① 4
 坪 ① 168・③ 152
 坪刈り ② 181
 熟・情 ② 23
 釣る ② 44
 弦掛枿 ① 21
 鶴の含穂 ③ 92
 弦判 ① 21

手便 ① 179
 手作手絞 ③ 146
 出捨 ① 74
 出来る ③ 59
 出替奉公 ① 130
 出替 ① 130
 出帰り ② 145
 手重い ② 5
 手置 ① 69
 手馬 ② 99
 出浮 ① 166
 定時法 ② 92
 亭号 ③ 6
 手余地 ① 88
 出合清水 ③ 46
 手当 ① 70

手間 ③ 180
 点 ② 166
 天井川 ① 66
 天窓 ② 186
 伝八笠 ② 131
 田法 ② 171
 天保の飢饉 ① 143
 天保の飢饉 ② 44・128
 天保の飢饉 ③ 58・75
 天明の飢饉 ③ 102
 当座 ③ 24
 東西南北の人 ③ 19
 当時 ① 13
 同日 ② 104

当分 ③ 24
 当分庄屋 ② 81
 斗搔 ① 21
 不時飽 ② 160
 熟与 ② 22
 兎口 ② 35
 所付 ② 162
 所払 ② 118
 年越 ① 164
 年越祝ひ ① 163
 年増 ③ 108・109
 ととう ③ 38
 とゝヲ・かゝア ② 168
 殿付 ③ 68
 殿村安守 ② 5・③ 5
 飛渡 ① 78

土兵 ③ 65
 十方暮 ③ 113
 富籤 ① 152・③ 170
 頓に ② 101
 富元・富座 ① 152
 弔・吊 ② 98
 兎や角 ② 36
 取り ② 13
 取噉人 ② 24
 取置 ③ 110
 取替え ③ 41
 鳥飭 ① 53
 取毛 ③ 104
 取越正月 ① 136
 取越米 ① 136
 取締・取締 ② 41

取なやミ ② 147
 取り遣り ② 14
 戸呂平 ① 127
 兜羅綿 ② 35
 【な】
 菜・魚 ① 93
 内密申上試 ② 27
 菜鰯 ① 92
 長柄 ③ 32
 中か俵 ③ 11
 中津領の儉約令 ① 120
 中田 ② 74
 中長紙 ① 157
 仲ヶ間直段 ③ 47
 中宿 ① 15

長屋門 ③ 175
 流合 ① 96
 投出 ② 198
 投文 ② 129
 被為 ③ 135
 泥ミ ① 129
 泥む ① 129
 菜種油 ③ 146
 七十二町一里 ① 8
 何角 ③ 70
 何廉 ③ 71
 何敷 ③ 129
 何々迄 ③ 91
 並 ① 189
 並合 ① 188
 ならし餅 ③ 29

押 ① 76
 成可丈 ① 11
 可成丈 ① 11
 可成程 ① 11
 為何 ③ 22
 何反帆 ① 20
 何となく ① 169
 南蛮樋 ② 153
 【に】
 饒津神社 ① 143
 二季払 ① 134
 西向く侍(士) ③ 158
 式尺手把 ② 106
 二毛作 ② 171
 人数改 ③ 34

野荒 ③ 76
 野間 ② 155
 【の】
 年貢米拵 ③ 11
 宿水 ② 45
 族ヶ間敷 ① 48
 強請 ① 49
 鼠士 ③ 63
 根置 ① 31
 子午の人馬改め ② 20
 根足 ② 121
 【ね】
 抜船 ① 46
 【ぬ】
 人相書 ② 34

激ミ ② 157
 馬鹿等敷 ③ 122
 羽釜丁稚 ③ 180
 はえ ① 89
 葉潤 ① 191
 徘徊 ③ 128
 端 ① 104
 者 ① 104
 【は】
 乗打 ② 95
 延舛 ① 109
 野坂三益 ① 50
 残り米 ① 177
 歹 ① 185
 残し米 ① 176
 ② 116

早道ノ者 ② 56
 早追 ② 56
 馬踏 ① 31
 陌 ① 65
 刎俵 ② 62
 ハデ干 ③ 159
 初穂 ③ 10
 八朔 ③ 69
 初午 ③ 72
 八延 ① 109
 礮 ③ 39
 半下米 ② 120
 端俵 ① 24
 端切手 ③ 178
 半下夕 ② 119
 稻架 ③ 159

【ひ】
 灰屋 ③ 165
 半メ ① 7
 半百 ② 8
 半麦の飯 ① 63
 半麦 ① 63
 判賃 ③ 178
 半知 ② 54
 晚景 ② 194
 春普請 ① 70
 春挽米 ③ 137
 春凌 ① 76
 張札 ② 128
 腹やすく ② 200
 払米 ② 62
 ③ 82

火札	模形	人宿	等敷	筆順	非事	秘骨	飛行	非工事	挽	引	低し	引尾	引当	匹・疋	東御境
②	③	①	③	②	③	②	③	③	③	①	①	①	②	③	②
128	78	167	122	189	39	199	54	37	137	185	117	67	155	88	59

歩合	歩	【ふ】	広さ	拾物	平原主殿	平坪	平田屋橋	平田船	舶	平打	平	火山	百姓代	姫宮早稻
①	②		②	①	②	③	②	②	②	②	①	①	②	③
142	41		173	97	110	152	122	29	28	149・③	173	190	9	93
										106				

風与	不図	扶持米	蕪村	不統	不実場	夫食	富士川文庫	応ふ	歩銀	不勘定	不勝手	風律	吹聴	武一騒動
①	①	③	①	③	②	③	②	②	②	③	①	③	①	③
96	96	15	71・②	124	85	111	111	166	40	123	122	31	187	121
			11・③											
			67											

返毫覚書	別釜	へか	江	【へ】	可被相触	布令	触	可相触	篩	降りみ降らずみ	振り売り	振合い	振り・風	ふ文字
③	③	③	②		①	③	③	①	②	②	①	③	③	②
52	64	143	136		12	61	61	12	46	180	68	83	35	78

返抄 ③ 52

【ほ】

布衣 ③ 32

報恩講 ① 135

亡所・亡処 ③ 149

北堂 ② 9

反故・反古 ③ 61

可為反古候 ③ 61

北極出地三十四度 ② 159

② 159

殆卜 ① 173

殆飽果 ② 88

骨正月 ① 63

本家 ① 160

本郷駅 ② 37

【ま】

真急 ③ 132

前髪 ③ 179

賄札 ② 15

間切帆 ② 100

間切る ② 100

枕銀 ① 126

信 ③ 121

孫六算盤 ① 187

升 ② 181

枡掛 ① 21

舛欠 ① 109

升突 ② 181

升廻し ① 25

町方 ③ 72

町方水主銀 ③ 98

町才覚 ② 30

町新開 ③ 73

町宅 ③ 81

町奉行所 ③ 80

町門（木戸） ③ 177

町家（町屋） ② 16

町家借屋 ② 16

松野唯次郎 ① 144

真踏 ③ 125

丸給知 ③ 12

廻し欠 ② 175

万年丸 ② 26

【み】

見へ透 ② 156

水尾 ① 67

見醒め ③ 14

水祝 ① 167

水懸り ② 83

水がずる ① 84

身過ぎ ① 99

水越 ① 116

水帳 ③ 34

水野左近将監 ① 158

水刳 ① 106

水持 ② 83

水役 ③ 98・101

水役銀 ③ 95

見せ消ち ② 142

見立番付 ② 102

道打 ② 149

道幅 ① 85

見附 ② 184

三ツ引御印幟 ③ 53
 見逃す・見遁す ② 195
 水内温泉 ② 93
 実法 ③ 112
 身持之者 ③ 74
 三宅立績 ③ 46
 宮沢賢治 ② 18
 宮島市立 ③ 20
 宮島の大芝居 ③ 20
 宮島の富 ① 152

【む】

麦こぎ ② 18
 麦こなし ② 18
 麦正月 ① 62
 麦藁焼 ① 28・③ 94

虫送り ① 172
 無数 ① 13
 無用 ③ 28
 村上彦右衛門 ② 26・91
 村借 ③ 138
 村高不易 ③ 150
 村継 ① 36
 村八分 ① 102
 目当て ③ 8
 目と匆 ① 127
 著・目処 ③ 51
 匆札 ① 142
 免状 ① 165
 面皮 ③ 140

【め】

もあひ ③ 126
 申形 ① 52
 申値 ① 18
 申形 ① 52
 目論見 ① 168
 文字詞 ② 77
 モヂリ ② 143
 餅米 ② 28
 尤もごかし ③ 167
 元人 ① 125
 物書役 ③ 33
 物囉 ① 98
 刳摺り ③ 137
 刳挽臼 ① 30

【も】

もやい ③ 127
 萌やし ① 57
 もやしもの ① 56
 貰い苗 ① 87
 刳摺り歩合 ③ 137
 紋付 ③ 169
 夕・文目 ③ 117
 門を打 ③ 176
 相借家 ① 54
 臈・頓 ② 101
 焼米 ① 37
 焼畑 ② 114
 役印借 ② 84
 役格 ② 190

【や】

児游貝 ① 97
 夜食 ① 190
 夜前 ③ 47
 厄害 ③ 161
 藪入 ③ 163
 流鏑馬 ① 143
 山田 ② 169
 山の口明 ② 134
 郵便制度 ③ 54
 雪汁 ② 178
 行成 ③ 156
 甘ミ ① 57
 甘米 ② 108
 【よ】

欲ヶ敷 ③ 141
 横間 ① 16
 好ミ ② 69
 余借 ③ 8
 世過ぎ ① 99
 寄せ村 ① 165
 他見向 ② 122
 四日市御茶屋 ② 34
 夜抜 ② 12
 寄合丸給知 ③ 13
 四里踏 ② 118
 宜男 ② 71
 頼山陽 ② 58・③ 161・164
 らる ③ 135
 【ら】

理屈 ③ 39
 利足月老歩半 ① 110
 里長 ① 118
 利留メ ② 123
 利走 ① 162
 琉球芋 ② 166
 両 ③ 88
 両御玄関 ③ 79
 獵師筒 ③ 36
 料理ヶ間敷 ② 141
 【ろ】

六里踏 ② 117
 【わ】
 把 ② 106
 訳り ② 168
 熊飛脚 ② 175
 綿が吹く ① 87
 綿繰車 ② 159
 咲ひ ① 137
 割庄屋 ② 189
 【その他】
 ぐがましい ② 140
 ぐごかし ③ 167
 ぐ敷 ③ 154
 入々 ③ 148
 纒敷 ③ 154
 浪人 ② 19

言葉を“面白狩る” 第3集

——広島古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

2008年1月28日 発行

高橋 新一 編集

(Mail: tak10172@gmail.com)

言葉を“面白狩る”

第4集

——広島古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

高橋 新一 編

はじめに

広島近世古文書の中から、面白い言い回しや、辞書で見つかりにくい言葉を探し出し、調べています。

近世文書を見ると、解らない言葉が次々出てきます。すぐに辞書で調べます。電子辞書でたいい用が足りませんが、載せてないときは重い辞書を引っ張り出してページを繰ります。それでも見つからない言葉があると、あの手この手で調べるので、手間が掛かります。

以前は、「辞書は何でも載せている」と思っていました。ところが、古文書を読むようになると、探し物が見つからないことを度々経験するようになりました。考えてみると、これは当然のことで、限られた頁数の辞書に全ての言葉を収録できる訳がない。いや、その前に、大きな言葉の海を相手に全ての言葉が調べ尽くされている筈がない……。

また、見つけ出しても、不適切な解説の場合もある。

ります。辞書の編集者として間違えることがあっても不思議ではありません。

辞書に載せてない言葉でも、辞書を頼りにして、古文書をあさり比較すると、意味が明らかになることがあります。

古文書は、いわゆる歴史用語だけでなく、〈何でもない言葉〉でも、解らないと正確に理解できません。ここに取り上げた言葉は、編者が〈面白い〉と思ったものです。題して、「言葉を〈面白狩る〉」。

これは、二〇〇八年一月から〇八年七月までに、同名のブログに載せたものを編集したもので、第四集です。

二〇〇八年七月

高橋 新一

主な参考辞書

岩波書店『広辞苑』第四・五版 電子ブック版

小学館『日本国語大辞典』

学習研究社『漢字源』電子ブック版

岩波書店『岩波日本史辞典』CDROM版

目次

はじめに	1
目次	2
馬宿	5
人押	6
御人出	7
素札	8
年番割庄屋	10
払押	11
大割年番	12
御直参	14
粒立	15
旅住居	16
小家	17
言葉を引下げる	19
不洩様	20
仕出し	20
申聞	22

目次

打歩	23
足弱	24
厘米	25
いられ子	27
小一畝	30
沼井	31
ツ子	32
御笹川	32
思ひ入買	34
諸口壺丸	35
連々作	36
銘酒屋	37
相組	39
小貝	40
分	41
当前・向來	43
天水所	44

評判	45
普為聴	46
いられこ	47
御医師格	48
しらせ書	49
沼田郡天満町	51
久太郎	52
書翰の日付	53
「廣島独案内」成立年考	55
入御聴	64
口へ文を吹込み申し候	65
御見送	66
上り銀相場・上り金相場	67
備御苦勞	68
懸ヶ作・気毒	69
郵便報知	71
同ク格	72

晦日著	おこたる	摺墨・池月	高掛り取立物	年々引・高内引・	無地高	得貴意	高分り	地百姓・入百姓	番田子	地内木	うむとん	損料借	表裏	けしからぬ	村囲ひ	弟隼・地鳥見	気ノツマラヌ
137	136	135			132	131	130		128	125	124	123	122		119		118
			134					129						120		118	

目 次

呼名	138
巻頭・軸	139
とち葺	140
馬足	142
町借押米	143
免割・面取立	144
ぱつと致	146
安芸の「ト脱け」	147
ホツト	147
悪情	148
郷保	149
候わゝ	150
投出し証文	151
植物	153
送入籍を不許	154
御厄害	154
永年を楽ミ	156
小廻り	156
面木	157
差合	159
まいらせ候	159
頼母子の賄	160
御下代	162
薪ぞうし	164
切免	164
入草	166
左側通行	167
疾病	168
船すりたて	168
成尺	169
放シ追	170
承届	171
不都東	172
幸便	173
相聞	174
結ぶ	175
他所向	176
番組の定員	177
兩人庄屋	178
陳	179
決而	180
致拝啓	181
老衰	182
抜句	182
川替	183
下執事	184
我等共	185
態と	187
そろ	188
位下り	189
我が鍋之もの	191
令承知	192
索引	194

馬宿

「○四月六日、交趾国より貢せる象一頭、將軍の召により、長崎より江戸に赴く、途中広島を通過し、是日堺町二丁目馬頭助兵衛の後庭に次す、藩主吉長、同町沢村屋に臨み之を觀る、是時長崎奉行三宅周防守より發せる諸国廻状あり、左の如し、今般当地より象壹疋、摂津大阪迄宰領相添牽登せ申候、各御領内罷通候付、急度道々警固被御申付渡儀は御無用御座候、然共珍敷生類故、所々及群集相障候儀可有之候間、其御心得御申渡、將又右象道法多步行不申候間、本宿之外民家にも止宿致候儀可有之候、馬宿之様之所にて一夜宛之儀可罷成候間、態御取締等之儀には不及候、川々大概之川は渡り申候、浅き瀬御案内御申付可有之候、馬越申程之事に候はゞ、船は被差出に不及候、勿論船に而無之候へば、難渡川は、馬三四疋も乗せ申程之船に而候へば能御座候、泊々其外野合にて、

草笹之葉米之粥等、飼申候所々にて宰領之者相調、代払可申候、右之趣御領内公役に被致候様にと申進候訳には無之候へ共、珍敷生類故、御用之儀指支不申候様致度如此候」(『廣島市史』)

(享保十四年(一七二九)四月六日、交趾国(ベトナム北部)から献上した象一頭が將軍の召により長崎より江戸に赴いた。途中広島を通過し、この日、堺町二丁目馬頭助兵衛の後庭に泊った。藩主吉長は同町沢村屋に臨みこれを觀た。このとき長崎奉行三宅周防守の發した諸国廻状がある。次の通り。

今般当地から象が壹疋、摂津大阪まで宰領が付添つて牽き登せることになった。各御領内を通過するので道々の警固を命ずるわけではないが、なにしろ珍しい動物のため所々で人が群集し、障害になることも考えられるので、その積りでいなさい。また象は長くは歩けないので本宿のほか民家にも止宿する。馬宿のような所で一夜を過すので心配無用。川々も大抵の川なら渡るので、浅い瀬を案内させて欲しい。馬が

渡るほどなら船は出さなくてよい。勿論船でなく
ては渡れない川なら、馬三四疋も乗せられる
ほどの船ならよい。泊りやそのほか野合で、草
笹の葉や米の粥など宰領の者が調える(代金は
払う)。以上、御領内の公役というわけではな
いが、珍しい動物なので御用に支障がないよう
にとお願いする。

【本宿】ほんじゆく。(『広辞苑』)

「ほんじゆく」とも。単独で規程の人貯を常備
した一般的な宿場。↓加宿・間宿・合宿・
あいのしゆく相宿

【馬宿】うまやど。(『広辞苑』)

①伝馬に使用するための馬を集めておいた場
所。②宿駅で馬方とともに馬が宿泊するための
宿屋。

人押

【巡見使】(『広辞苑』)

江戸幕府が諸国に派遣して、地方政治の良否を
視察させた役人。寛永以後、將軍の代替りごと
に地域別に派遣するのを常例とした。諸国巡見
使。ほかに幕領には国々御料所村々巡見使を派
遣。

延享三年(一七四六)六月十五日、幕府巡見使が広島
に入り、塚本町芥河屋久五兵衛宅に止宿しました。
それに先立ち、次の広島町触が出されました。その
一部に、

「銘々居宅、先達て相触候通、屋ね・庇・外囲ひ等、
弥御着十日以前まで二直し仕廻可申候、軒下植石
出入高下見苦敷所築直し、格子・地幅等洗、見苦
敷竹格子ハ取繕候儀、是又五六日以前まで二仕立
可申事」(延享三年(一七四六)五月『広島県史』)

各自の居宅は、先日知らせたとおり、屋根・庇
・外囲い等は、御着十日以前までに修繕を終え
ること。軒下の植石に出入、高下があると見苦

しいので築き直し、格子・地幅等は洗い、見苦しい竹格子は修繕をして、五六日以前までに終えること。

「御巡見衆来ル十六日之朝御立ニ付、御通り筋為人押へ御先手足輕差出候得共、右押へ無之所并町裏等之人押へ家持・月行司・肝煎共可差出候付、御通り之節物靜ニ、幼少之ものにても出し不申、尤高声等仕間敷候 右之通急度可申付候、以上」
(延享三年(二七四)六月『広島県史』)

幕府御巡見衆は来る(六月)十六日の朝、御立ちになるので、御通り筋に「人押へ」として御先手足輕を出す、右の押えのない所や町裏等の人押えは家持・月行司・肝煎から出しなさい。御通りのとき物靜にいして、幼児でも出さないよう、大声を出さないように指示しなさい。

「人押」という言葉があります。「人押へ」と送りがなが振ってあるので、「人押え」と読むようです。巡見使御通り筋の整理・警戒のために動員されてい

ますが、まさか、見物人の頭を「押えて」平伏させる役目ではないと思います。御先手足輕や町役人・家持などがする仕事ですから、

【押える・抑える・圧さえる】。(『広辞苑』)

④ある限度をこえないようにとめる。封じる。
くいとめる。

この程度(見物人の整理)でしょう。

御人出

「当村百姓権助宅へ昨十六日夜盜賊一人這入、見咎候由之處、其儘飛出候ニ付、追懸候内、近所之者も駆出、西風東風と追回し、騒動之音ニ驚方々より多人數相集り、手々ニ擲伏セ候由、然ル処庇所等も出来、大ニ難儀仕居候段申出候ニ就、早速私共見分仕候処、見知候人も無御座無宿盜賊ニ相見へ申候、尤言舌等も一円相分り不申候ニ付、医師呼寄為見合治療相加遣申候得共、何分容躰重ク、追々相衰へ薬杯も得給不申、兎口之内絶命ニ及申候、……」

辰九月十七日

庄屋亮平(外三名略)

賀茂郡御役所

態申遣ス

其村百姓権助宅へ這入擲伏セ絶命ニおよひ候段、注進之趣令承知、見分しらへとして御人出有之候条、此旨相心得、入念番人等附置可申者也

辰九月十八日

賀茂郡御役所

年(二八三)「鶴亭日記」)

庄屋から郡役所へ注進

当村の百姓権助宅へ昨十六日の夜、盗賊壹人が入り、見とがめるとそのまま飛出したので追っかけていると、近所の者も駆出し、西風東風と追い回し、騒動の音に驚いて方々より多人数が集まり、てんでに投げ伏せたので庇もでき、おおいに難儀しているようですと私まで申し出たので、早速私共村役人が見分しましたところ、見知る人もない無宿盗賊のようで、言舌等も分らないので、医師を呼寄せて診察治療させまし

たが、なにしろ容体が重く、だんだんと衰え、薬なども取ることもできず、そうこうする内に絶命しました。……

郡役所から庄屋への指示

その村の百姓権助宅へ入り、投げ伏せて絶命に及んだ件についての注進の事柄は承知した。見分調べとして「御人出」があるので心得て、入念に番人等つけて置きなさい。

「見分しらへとして御人出有之」とありますが、郡役所から役人が出張(御人出)して、検視にあたったものでしょう。

素札

「御組合村々之内木綿収納銀追々被差出候処、是迄は例之通封し被差出候ニ付、封しヲ切儀もいかゞ敷候ニ付、依て其俣受取置候得共、夫ニては統合も不宜との儀ニ付、以来は素札にて被差出候様ニ村々へ御示し合有之候様致度、此段申達候」(文

政十二年（八二九）「野間家文書」

組合村々（割庄屋の担当する村）のうちで木綿収納銀を追々と上納しているが、これまでは例の通り「封し」て上納しており、「封し」を切るのもいかなものかと思いいそのままで受け取っていたが、それでは統合も悪いので、今後は「素札」で差出すように村々へ指示して下さい。

これは安芸郡の番組（代官手付）が郡内の割庄屋宛に出した指示です。

「木綿収納銀は綿一〇匁につき収納銀一匁である。

……木綿の栽培は砂質の土壤に多肥を施すのが最適とされている。干拓による新開地は塩分を含み砂質の土壤であるので、米作にはなかなか適しなかったたので、畝をたてて綿を作った。」（山田隆夫『矢賀郷土誌』）

収納銀に関して、「封し」「封しヲ切」「素札」とは、勿論銀札のことです。（'08/1/23「包銀・包賃」参照）。「素札」は「封し」に対して使われていますから、包んで封のしてある銀札ではなく、バラの札

と思われます。「封のしてある銀札では統一がとれない」事情は分りません。

「少額の銀札は包まずして用う、其多額取り集め札は未だ包まず、これを素札と称せしならん」（熊見曲水「芸藩紙幣始末」）

「素札」を『広辞苑』で調べてみると、

【素札】すふだ。（『広辞苑』）

カルタで、点数にならない、つまらない札。花ガルタで、一通りの絵模様ばかりで、動物・短冊などを書き添えてない札。スベタ。

【スベタ】（『広辞苑』）

（*espada* エスパダ の転。劍の意。もとカルタ用語）①花ガルタで、つまらない札。素札のこと。②顔かたちのみにくい女。また、女をいやしめてののしる語。

凄い言葉に辿り着きました。

年番割庄屋

「
態申遣

郡割年番割庄屋 亮平

〃 六郎右衛門

右当巳年郡割方年番申付候条、此旨相心得、入役減
少筋兼々申付候趣ヲ以郡割諸入用約方締合厚申合
力ヲ入相勤可申者也
巳正月 賀茂郡御役所

割庄屋 脇万左衛門

(以下、割庄屋八人略) (天保四年)

八三三)「鶴亭日記」)

今年、天保四(八三三)巳年の賀茂郡の年番割庄
屋を亮平・六郎右衛門に申付る。郡の経費が減
少するよういままで指示しているが、郡割の諸
入用の取りまとめにつき引締め、よく相談して
熱心に勤めなさい。

賀茂郡は大郡のため、割庄屋・同同格・加役合わ

せて九人います。この文書は賀茂郡役所が年番割庄
屋二名を任命した触書です。

この史料で検討するのは「年番」です。

【年番】ねんばん。(『広辞苑』)

一年ごとに交代して執務すること。また、その
番に当たっている人。

「年番」の意味はその通ですが、「年番割庄屋」に
なると、別の意味が付加されます。

「各郡に割庄屋と云ふ者を置く、其人員は一定せず、
式人以上なれば交代して壱人宛年番と唱へて郡割
の事を専務する所なり、此割庄屋ハ庄屋の惣代視
せらるゝも直接其責には任せず、表面ハ伝達吏の
観あれとも實際は庄屋以下指揮監督の権を有し、
其進退黜陟を具状し、請願許可の意見を内申せし
めらるゝの例と成れり」(『芸藩志拾遺』)

各郡に「割庄屋」を置く。その人数は一定して
いない。式人以上おれば、交代して壱人宛「年
番」といって郡割の事を専務する。「割庄屋」

は庄屋の惣代のようにみられているが、直接その責めは負わない。表面的には伝達吏のようであるが、実際は庄屋以下を指揮監督する権を持つており、その任免について藩に具申する。また請願の許否の意見を内申する。

「年番割庄屋」は郡割担当の割庄屋のことで、年番で執務する。「芸藩志拾遺」は「壺人宛」としていますが、賀茂郡では二名が担当しています。

「郡割とは、一村に限らず郡中一般へ係る可き諸経費を、村々へ其高に応じて賦課するをいふなり、其経費の事項たる仮令は幕吏の通行等にて人馬賃銀等の不足額を補充する米銀、又は宿駅の家屋〔本陣〕、牢獄等の修繕工事の費用、或は割庄屋以下村吏か公用の爲め旅行往來の雑費等の類は遍く郡中一般へ賦課せざるを得ざるの類是なり」（「芸藩志拾遺」）

郡割とは、一村に限らず郡全体に関係すべき諸経費を各村々へその村高に依じて割当てることである。その経費とは、たとえば幕吏の通行等

で人馬賃銀等の不足額を補充する米銀、又は宿駅の家屋〔本陣〕、牢獄等の修繕工事の費用、または割庄屋以下村役人が公用のための出張費用などである。これらは郡全体に賦課せざるをえないものである。

払押

「御大名通り之節、肝煎之者前後四人罷出候、唯今迄者一組切に代り候得共、此以後代り合不申、町中払押可仕事、但、此以後認不申付候間、焼飯成共持参可仕候、不時之勤着物も改め罷出候間、人名書留め置、毎暮大年寄分心を附可遣候事」（宝暦七年（一七五七）『新修広島市史』）

御大名が通行するとき、肝煎の者が前後四人出て、今までは一組切りに交替していたが、今後は交替せずに町中の「払押」をしなさい。但し、これからは食事は出さないの、焼飯なりとも持参しなさい。臨時の仕事で、着物も改めて出

勤するので、人名を書き留めて置き、年末には大年寄が気を遣ってやりなさい。

「払押」という言葉が使われています。「人押」(8/131ブログ参照)と同じく、大名行列の沿道の見物人に指示する役目でしょう。「払押え」と読むはずです。

「上々様方所々へ被成御座候節、又は御大名様御通行之砌、払押として出勤之方角待合之節茶たばこ其外堅差出申間敷事」(寛政三年(一七九二)『新修広島市史』)

上々様方が所々へお出でになるときや、御大名様の御通行のとき、「払押」として出勤している者が待合をしているとき、茶・たばこ・その他を出してはいけません。

「御大名通之節、払押付廻り小使辻押等ハ袴高股立、雨天ニ候得ハ菅笠・合羽相用候事」(文化五年(一八〇八)『広島県史』)

御大名御通りのときに出勤する「払押」「付廻

り」「小使」「辻押」等は、袴高く股立を取り、雨天なら菅笠・合羽を使いなさい。

「人押」に類する言葉が沢山書いてありますが、細かい違いは分りません。

「焼飯成共持参」と書いてあります。「焼飯」とくると、すぐ炒飯を思い出しますが、

【焼飯】やきめし。(『広辞苑』)

①握り飯の表面を焼き焦がしたもの。やきいい。

②炒飯に同じ。

「焼飯」は「やきいい」と読む方がよいようです。

大割年番

「五組申合、此度より大年寄大割年番と唱候て、諸事請銀仕候て、何角諸払毎暮勘定を五組町々家持共迄も披見仕せ候事」(宝暦七年(一七五七)『広島市史』)

(広島)五組の申し合せにより、此度より大年寄

中に「大割年番」という掛りを置き、諸事の請銀・諸払の毎暮勘定を五組町々の家持まで見せることにした。

【大割】おおわり。（『岩波日本史辞典』）

江戸時代に各地で用いられた用語で、諸費用分割ないしは分担金をいう。一般には、郡や大庄屋単位、もしくは町組単位で徴収される税や諸経費を指すことが多い。

「郡割ヲ大割ト言フ」（『淡交夜話』『三原市史』）

「郡割」（郡全体に係る諸経費を村々へその高に応じて割り当てること）を「大割」という。

「大割」の本来の意味は、広域（大）での諸経費の分担（割）と考えてよさそうです。

「広島市街に於ては宅地に課する租税三階あり、第一水主役・第二大割銀・第三小間銀（おわりぎん）なり、水主役は田畑の貢租と同じく藩費に供するものなり、其徴収法は宅地の表間数に応じ課税するものにして、敢て宅地坪数の多少及側面（奥行）裏面の広狭

長短に關せざるものなり、而して其負担額は各町皆同じからず、其繁華の程度に由りて差等を設け、又その町の長短に由りて自ら負担を異にす、毎歳各町負担額の定まる時は、或町内宅地の総表間数に依りて之を除し、以て各宅地に賦課するものとす、……大割銀は広島市街に要する費用にして、今の市税の如し、其徴収法亦水主役の賦課に準ず、小間銀は広島各町に要する費用にして、其徴収法も亦た大割銀の如し……町大年寄のもとにて其收支の算用をなすを大割方と称す、五組大年寄年番にて大割方事務を担当す、之を大割方掛と称したり、天保年中に至り、此大割方掛の事務を綿座役所内に移し、大割方と称し、町大年寄二人大割方掛を命ぜられ、以て其事務を管掌せり」（『広島市史』）

広島市街（新開は除く）では、宅地に課する租税に三種類ある。第一が水主役、第二は大割銀、第三は小間銀である。「水主役」は田畑の年貢と同じで藩費に供するものであり、その徴収法

は宅地の表間数に応じて課税する(坪数・側面(奥行)・裏面の広狭長短には関係ない)。また、その負担額は各町で違いがあり、繁華の程度により差を付け、その町の長短により負担を異にする。毎年、各町の負担額が決ると、町内宅地の総表間数で負担額を割り、これで各宅地に賦課する。「大割銀」は広島市街全体に要する費用で、今の市税のようなものである。その徴収法は水主役の賦課に準じている。「小間銀」は広島各町で要する費用で、徴収法は大割銀のようである。……町大年寄の中で税の収支の算用をする者を大割方という。五組の大年寄が年番で大割方の事務を担当する。これを大割方掛といったが、天保年中にこの事務を綿座役所内に移して、「大割方」と改称し、町大年寄二人が大割方掛を命ぜられてその事務を管掌した。

長い引用になりましたが、「小間銀」「水役銀」(7/11/13〜15ブログ参照)の拙い説明も、これで少しはスッキリするのではないかと思います。「大割銀は広島市

街に要する費用」で、「大割年番」(「大割方掛」「大割方」とも)は広島の大年寄の中から「大割銀」に関する職務を年番で担当する役職です。郡部における「年番割庄屋」(08/26ブログ参照)に相当するものでしょう。

御直参

直参といえは、

【直参】じきさん。(『広辞苑』)

②直接にその主君に属する家臣。特に、徳川將軍家に直属した一万石以下の武士、すなわち旗本・御家人(ごけにん)の総称。↑↓陪臣(ばいしん)

と理解していますが、そうでない意味もあるようです。

「御家中之面々末々御直参之者又者奉公人たりとも、常々町人慮外過言仕間敷事、附り、見分之役人差廻し候条、若心得違之儀も有之候はゞ、急度可相

糺事」(享保十一年(二七六)『廣島市史』)

御家中の面々に対しては、末々の御直参の者・
又者・奉公人であっても、常々町人は非常識な
失言をしてはいけない。附り、見分の役人を差
し廻し、心得違いのことがあれば厳しく取り締
る。

【又者】またもの。(『広辞苑』)
陪臣。又家来。

「御直参」は「又者」と並んで、「御家中之……末
々」と位置付けされています。

「藩府より、自今御直参の輕輩は町御奉行の支配に
属せしむる旨を命ぜらる」(元文二年(一七三七)『廣
島市史』)

「御直参の輕輩」という解説もあります。

「御直参(諸足輕の事なり)」(『廣島市史』)の記事で、
足輕のことと分りました。

「直参」の本来の意味は、「主君に直接仕えること。
また、その人」(『日本国語大辞典』)だと思います。

なぜ、足輕が「御直参」と呼ばれるのか、訳が分り
ません。

粒立

「郡中村々之内、粒立候無役之者共へ当り、役望ニ
寄り、近來種々と手筋ヲ求メ、内実之処多クハ当
所之者共へ取入、又ハ被欺候て多分之銀子差出候
儀も有之哉之趣も相聞へ、甚以心得違不埒至極之
事ニ付」(文政十年(一八二七)『広島県史』)

郡中村々のなかには、「粒立」ながら無役の者
どもが役職を望み、近來色々手蔓を求めて当
所(郡役所か)の者に取り入り、または欺されて
多くの銀子を差し出すと聞いている。はなはだ
心得違い、不埒至極のことである。

【粒立つ】つぶたつ。(『広辞苑』)

多くの粒になって現れ出る。あわだつ。

この説明はここでは当てはまりません。

「町方粒立候者共之子供は勿論、中以下之子供迄も、近來は遊芸專致稽古、剩人に寄り身振り杯をも稽古致させ、髮容なども芸子に似寄、異風に相聞、此等は甚以心得違之事に候」(寛政元年(二七八九)『廣島市史』)

町の「粒立」者の子供は勿論、中以下の子供までも、近頃は遊芸を専ら稽古をし、人によつては「身振り」なども稽古させ、髮形なども芸子に似せた変な風だと聞いている。これらは大変心得違いのことである。

「中以下」と対比させて「粒立候者」が使われているので、《上流》を意味するのでしょう。盆に拵けた一握りの大豆の中で、粒の大きな目立つもの、そのようなイメージです。

「身振り」の稽古とは何の事でしょうか。

旅住居

「 覚

一 御当地堀川町生

弥七 歳四十四

右弥七儀、町内肥後屋りつ借屋次兵衛忤、次兵衛儀は廿一年以前病死仕、母并妹一所二居申候処、父死亡之後、商売方薄ク相成渡世難儀仕、其上若氣之儀共御座候て菟角家業睨々不仕候て、甚氣毒ニ奉存候内、拾九年以前戌八月、風と罷出、其後罷歸り不申候ニ付、不審ニ奉存、方々心当りの先々相尋相尋候得共、行衛相知レ不申候ニ付不便ニは奉存候得共、不得止事、家出仕候段右母より申出仕候処、其後聞承候へは、大坂梶木町塩屋平兵衛店借り請小商ひ仕居申候、当時妻子も有之程宜渡世仕居申候由、……追々年ヲも重旅住居仕候処、不便ニ奉候ニ付、此度私方へ引請世話仕遣し申度奉存候」(天明四年(二七八四)「堀川町覚書」)

御当地堀川町生れの弥七(歳四十四)は、町内肥後屋りつ借屋、次兵衛の忤です。次兵衛は廿一年以前に病死し、母、妹と一緒に居ましたが、父死亡の後、商売もうまく行かず生活が苦しくなりました、その上若氣の至りでしょうか家業

がはかばかしくないので可哀想に思っていましたところ、拾九年前の明和三年（一七六〇）八月、フイと家を出て帰ってきません。不審に思い、心当りの先々を探しましたが行衛不明、不憫ですがやむをえず家出したことを母親より申出しました。その後聞きますと、大坂梶木町塩屋平兵衛店を借りて小商いしており、いまでは妻子もあり程よく生活しているそうです。……彼も段々と年を重ねて「旅住居」をしているのも不憫ですので、私方で引受け世話をしたいと思えます。

一九年前に、無断家出をした青年を郷里に帰住させたといひ、大年寄宛の願書です。現在では大坂に生活の根を下ろし、程よく生活をしているのに、「追々年々も重旅住居仕候処、不便ニ奉候」と同情しています。

【旅】（『広辞苑』）

住む土地を離れて、一時他の土地に行くこと。旅行。（古くは必ずしも遠い土地に行くことに限ら

ず、住居を離れることをすべて「たび」と言った旅とは、移動することではなく、故郷を離れて生活することのようです。「旅住居」は「仮住居」。それは、当然、最後には故郷に帰って生活することを夢見たのだらうと思います。

弥七の帰住は、町奉行の許しを得て、実現しました。しかし、大坂に居るのがよいのか、広島に帰るのがいいのか、どちらが弥七一家にとってよかったのか、分りません。

小家

「小家」という簡単な言葉にも色々な使い方があり、一筋縄では行きません

「三百式拾四軒 本百姓

式軒 御年貢蔵

七拾五軒 小家

五軒 百姓蔵

式十九軒 無高浮世過

老軒

酒蔵

式軒

医師

(以下略) (享保十二年(一七二七)「芸州山県郡村々

諸色覚書」の内、穴村、『加計町史資料』)

これは穴村の「家数」の内訳です。「百姓蔵」も「家数」に入れてあるので、「家数」とは「建物数」を示していると考えられますが、「蔵」を除外すれば「世帯数」を表すと思つてよさそうです。

本百姓が三三四軒、「小家」が七五軒、無高浮世過が二九軒、その他です。

「村を構成する農民には、まず領主に年貢のほか特定の夫役を負担する本百姓がおり、彼らのなかの有力者が庄屋、組頭などの村役人となり村政を担当した。……村には本百姓のほかに、広島藩ではこいえ小家、下人、浮過……と呼ばれる隷属下層農民……もいた。」(『広島県大百科事典』)

この説明は、穴村の資料の解説文にピッタリです。しかし、土地を持ち年貢を納める「本百姓」、土地を持たず労働力を売って生活する「無高浮世過」(浮

過)に対して、「小家」「下人」とは何か、「隷属下層農民」と言われても、残念ながらよく分りません。

「持来り之田畑山林近年追々質入、又は売払、種々様々ニ差操り、大家小家ニ不寄身上一盃借銀仕居候処」(天保九年(一八三八)『加計町史資料』)

持ち伝えた田畑山林を、近年は質に入れたい売り払い、色々とやりくりして、大家小家に関係なく身上いっぱい借銀しておりますが

この場合の「小家」は「大家」と対比させて使っています。

【小家】こいえ。(『広辞苑』)

小さいそまつな家。

【小家】しょうか。(『広辞苑』)

①小さい家。貧しい家。②自分の家の謙称。

「火ノ用心弥以念入、小家住居之者他出仕、無人之節ハ、隣家互ニ申談置候様可仕事」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

火の用心は念を入れ、「小家住居」の者が外出して無人になるとき、隣家にお互いに頼むようにしなさい。

「借屋之者家明候て罷出候ハ、地頭へ相断、相借屋へ頼置可罷出候」（安永四年（一七七五）「堀川町覚書」）

借屋の者が家を明けて外出するときは、地主にや相借屋へ声をかけて頼むようにしなさい。

これは広島市街の例ですが、「小家」ではなく「小家住居」と書いてあります。これは階層としての「小家」ではなく、「小さい家、貧しい家に住む者」のことでしょう。外出のときは「隣家」に頼みますが、「借屋」の者は「相借屋」に頼みます。「小家」と「借屋」を細かく使い分けているのが面白い。『早引万宝節用集』は、【小家】を「こいえ」と読んでいます。

言葉を引下げる

「内々夫婦之申談を決し、他向を忍び下女躰に申成し、役人共并向三軒両隣へも沙汰無之もの共は、仮令其亭主の親類たりとも、近辺のものどもは勿論、都而言葉を引下げ下女あしらいに可致、心得違ひ同輩の挨拶向等有之間敷候、但、是迄下女躰に申成し置候者は、已来改て本妻に仕、其段役人共并向両隣へも相知せ可申候、夫とも何ぞ様子有之本妻に難相成訳合も候はゞ、全下女あしらい勿論之事」（寛政三年（一七九一）『広島市史』）

内々に夫婦の話をつけ、人目を忍んで下女だと申し成し、役人や向う三軒両隣へも無沙汰のものは、たとえその亭主の親類であっても、近辺の者も、「言葉を引下げ」て下女あしらいにし、間違っても同輩の挨拶をしてはいけない。但し、これまで下女と申し成していた者を、あらためて本妻にしたら、役人や向両隣へも知らせなさい。なにか事情があり本妻にできない訳合でもあれば、やはり下女あしらいは仕形がない。

使う言葉にはランクがあり、相手によりその程度

に気を遣うのは今でも同じ事ですが、「言葉を引下げ」て下女あしらいをするようにと、ハッキリと藩から指示されるというのも変なものです。

不洩様

「別紙之通従公儀被仰出候間、此段郡中村々へ不洩様可被相触候、以上」（明和七年（一七七〇）『吹寄青枯集』）

別紙の通り公儀より仰せ出されたので、郡中村々へ「不洩様」に触れなさい。

この文言は触書の末尾にみえるもので、触書の周知徹底を求めています。

「不洩様」を読むとき、「洩れざる様」とするのがいいのか、それとも「洩らさざる様」か、迷っていました。「洩」を自動詞とするか、他動詞と考えるかの違いです。

【漏る】もる。（『角川古語辞典』）

自ラ四・自下二（下二段は中世ごろから用いられる）③はぶかれる。除外される。

【漏らす】もらす。（『角川古語辞典』）

他サ四 ③抜かす。省く。

「此段末々まで洩ざるやうに申付け置き」（『廣島市史』）

『廣島市史』のこの記述は、いかにも原文の引用の形になっていますが、編者の読下しで（多分、原文は、「此段末々迄不洩様申付置」の筈です）、自動詞として読んでいます。

考えてみると、町役人が触を伝達するとき、わざわざ一部の人を除外することはなく、結果的に伝達洩れができてしまう訳ですから、他動詞である筈がない。迷うほどのことではないのに迷っていた、お粗末な一席でした。

仕出し

「町人作人、軽き仕出しにて家内之男女野辺水辺遊山に罷出候儀は不苦候事、但、美々敷軀に仕、洒宴遊興長じ候儀は急度可相嗜事」（享保十一年二七二六『廣島市史』）

町人や百姓が、軽い「仕出し」で家内の男女が野辺・水辺・遊山に出掛けること構わない。ただし、派手な恰好で洒宴遊興にふけることには気を配ること。

これは享保十一年（二七二六）に広島藩の出した儉約令の一部です。「仕出し」という言葉があります。

【仕出し】しだし。（『広辞苑』）

①（工夫して）作りだすこと。新案。新趣向。新流行。②よそおい。おめかし。③注文の料理を調べて届けること。出前。^{でまえ}④財産を作り出すこと。⑤演劇・映画などで、本筋に関係がなくて、ちよつとあらわれるだけの端役。⑥建物などで、外側へ突き出して構えた部分。縁側など。

「③注文の料理を……」の意味が私の頭を占領して

いて、その他の意味があるのを知りませんでした。上の資料の「軽き仕出し」が『広辞苑』のどれに当てはまるのかと消去法で考えると、「②よそおい、おめかし」かと思います。

「近來小間物之類、結構成物并手替二仕出候類商賈有之、就中鼻昏袋・烟草入之類二金入、其外結構成地合之物有之候、向後此等之類求、所持仕候儀、可為無用事、但、有來候共、其品二寄用捨可有之事」（享保十一年（二七二六）『鶴亭日記』）

近頃は、小間物で、結構な品物や変り種を「仕出」して商売する者があり、特に鼻紙袋・煙草入の類に金を掛け、その外結構な生地のももある。今後はこれらを買求め所持してはいけない。但し、従来の品でも物によつては使つてはいけない。

「手替二仕出候類」の「仕出」は、「①（工夫して）作りだすこと。新案。新趣向。新流行」にあたります。江戸時代の為政者は、どうも「新規」が大嫌いなようです。

申聞

「此趣全ク末々一統勸善之御趣意ニ候間、其処得と相心得可被申聞候」（文化九年（一八二二）「鶴亭日記」）

この趣旨（藩による孝子等の表彰）は、末々一統の勸善の御趣意であるので、それをよく心得て「可被申聞候」。

「申聞」とあれば「申し聞き」と読んでしまいそうです。「申聞」という言葉は、「申」と「聞」からできていますが、これら正反對の動作を一緒にして「申し聞き」と読んで、何のことか解らなくなります。

【申し聞かせる】もうしきかせる。（『広辞苑』）

「文」 まうしきかす（下二）。「言い聞かせる」の丁寧な言い方。

したがって、「可被申聞候」は「申し聞かさるべく」（言い聞かせなさい）となります。

「どふぞ小糸に御逢被成候て、とくと御申聞せ可被

下候。」（『蕪村書簡集』175）

どうぞ小糸にお逢いになって、しっかりと申し聞かせてください。

「申し聞かせる」と同様な言回しで、今は使いませんが、「申し聞ける」という言葉があるそうです。

「村役人は正直を以て下をなつけ、下より不疑様ニ明白ニ申聞け、下を助候事本意ニ候」（宝暦二年（一七五二）『広島県史』）

村役人は、正直でもって下々の百姓を手なづけ、下々より疑われないようにに明白に「申聞け」、下を助けることが本意である。

【申し聞ける】もうしきける。（『広辞苑』）

①言いきかせる。②申し伝える。「主人にも左様・けます」

【聞】きける。（『日本国語大辞典』）
聞かせる。

打歩

「九月十四日より藩内一般に銀札へ正貨を交へて通用せり、而して此銀札は何時にても札場に於て正貨と兌換せらるゝあり、且紙幣携帯の便宜なるを以て、人民は頗る之れを好せしといふ、然れとも後に正貨の通用を禁し、紙幣のみを使用せしめらるゝに当ては、正貨は自然紙幣百分一の打歩（百目に対し一匁）を以て悉く官庫に收納せらる、而して若し人民之正貨必用あるに際しては、紙幣百分二の打歩を以て兌換し得る所なり」（『芸藩志拾遺』（宝永元年（二七〇四）九月十四日より、藩内一般に銀札と正貨ともに通用した。この銀札はいつでも札場で正貨と兌換でき、紙幣は携帯に便利なので人民は銀札を好んだという。しかし、正貨の通用を禁止して紙幣だけを使うようになる」と、紙幣百分の一の打歩（百目に対し一匁）を払って正貨は全て官庫に納められ、人民が正貨を

必用とするときには、紙幣百分の二の打歩をつけて兌換した。

『芸藩志拾遺』は藩札の説明に「打歩」という言葉を使っています。

【打歩】うちぶ。（『日本国語大辞典』）

①ある貨幣を他種の貨幣と両替するときを支払う手数料。②同じ額面の二種の貨幣の間に生じる価値の差。③株式や公社債などの売買価格が、その額面を上回ったときの差。

両替の際、「銀子一〇〇匁↓銀札一〇一匁」、「銀札一〇二匁↓銀子一〇〇匁」のようなダブルスタンダードになっているので、②の「価値の差」とは考えられません。

また、銀子一〇〇匁を札場に持参し銀札に替えてもらおうと一〇一匁に増えますので、①「手数料を支払う」のではなく「もらう手数料」となっています。それは「手数料」とはいわないでしよう。①②ともピッタリの説明ではないようです。

「已に現然紙幣の兌換に渋滞なきを觀て、皆欣々之か通行を便なりと為すを以て、紙幣の価格は却て正貨に対し打歩を為せり、乃ち紙幣の公定価格は尅匁は百文なるに、市価に於ては之に五六文の打歩を為して通用せり、蓋し正貨は携帯に不便なるのみならず、之を使用するに当ては極銀所に至りて其重量の秤量を為さしむるの煩勞等あれども、紙幣は之れなきを以てなり」（『芸藩志拾遺』）

公定価格は、銀札一匁〓錢一〇〇文であるが、市価では銀札一匁〓錢一〇五文（一〇六文）として通用する、つまり五〓六文の打歩をする。銀貨を使うときは極銀所で重さを量らなければならぬが、銀札はその煩勞がないので喜ばれ、打歩をつけて通用した。

この資料の「打歩」は②の意味で使っております。最初の資料の「打歩」は、これに似た事柄なので流用したのではないかと思います。

実は、「打歩」という言葉は明治以降の解説書にあるだけで、古文書中には見られません。

「一札替候儀、銀子百目ニ札百尅匁……相渡候、…」

一札を以銀子請取被申候節は、札百式匁ニ銀子百目可相渡事」（宝永元年（一七〇四）『広島県史』）

銀札に替えるときは、銀子百目で銀札百尅匁を渡す。銀札を銀子に兌換するときは、銀札百式匁で銀子百目を渡す。

足弱

「末々男女足弱或は浮過之者妻子共渡世一助に可相成、然る時は自然と御国産にも相成可申哉と、厚御恵を以、郡中町方共蚕飼立、絹機織習のため、絹座御構、追々其業弘り、絹織出し候に付」（安永二年（一七七三）『廣島市史』）

（広島に養蚕を広めることは）末々の男女や「足弱」、浮過の妻子どもの渡世の一助にもなるだろう。そうなると自然と御国産にもなるはずと、

厚き御恵をもつて、郡中や町方で蚕を飼立て、絹機織習いのため絹座を構えられ、次第に広まり、絹を織出すようになったので

【足弱】あしよわ。（『広辞苑』）

歩く力が弱いこと。また、老人・婦人・子供などの称。

私も、「足弱か？」と問われると、「文字通り……」と答えます。

天明六年（一七八）恵蘇郡百姓一揆のの記録にも「足弱」があります。

「先年の通り役人家悉く打めくと聞へければ、恵蘇郡役人三割庄屋を始とし、庄屋与頭ニ至るまで恐るる事限り無く、依て家財雑具不残隣家山林へ持運び、其之外家内之男女老も若きも足弱連れしる人の方え忍はす有様、世常之出来事とハいいながら、目も当てられぬ風情なり」（天明六年（一七八）『庄原市史』）

（一揆勢は）先年の通り役人の家を全て打めぐ（打

壊す）との噂があり、恵蘇郡役人・三割庄屋を始めとし、庄屋与頭までたいそう恐れ、家財雑具はのこらず隣家や山林へ持ち運び、そのほか家内の男女、老も若きも「足弱」を連れて知人方へ忍ばす有様、世常の出来事とはいいいながら、目も当てられぬ風情である。

厘米

広島藩に「厘米」という雑税があります。この税について「淡交夜話」は興味深い解説をしています。

「七厘米・一厘米ヲ惣称シテ厘米ト云ヘリ、地浦ニ軽重アル事由及其原由ニ就テハ判然タル記録アルヲ聞カズ、……厘米之義御尋候得ハ、地方村々高二付七厘、浦辺島方ハ水主役モ勤候ニ付壹厘掛リ申候、……右之通差出候得ハ西国街道天下送ノ者扶持切米、川々渡守給米并惣百姓寄り合可相勤普請所ノ入用等、厘米ヲ以テ相渡リ申候、其外ノ掛リ役等ヲ御差免シ被成候ニ付、百姓共勝手能御座

候由可申上候云々、職人引高ヲ或人ノ説ニハ、以前ハ各自現在ノ持高ヲ以引高トナセシヲ中古實際持高ノ多少ニヨラス耆人ノ高五石ト定リタルモノト言ヒ、又某氏ハ、水役ト言フハ家役トシテ勤メタル名ナリ、而テ貧富同等ニ課スルハ忍ヒサルヲ以テ持高五石以上ヲ本役、五石以下弍石五斗以上ヲ半役トシ、弍石五斗未満ハ浮過トテ家役ヲ免シタルニテ、本役日數十日ヲ勤ムレハ半役ハ日数五日ヲ勤ムルナリ、職人水役銀ニ本役・半役ノ別アルモノニヨルモノニテ職ノ巧拙ニヨリタルニ非ス、故ニ引高モ五石又ハ弍石五斗ヲ程度ニナシタルモノナリト言ヘリ、両説トモ其抛ルヘキ記録ハ終ニ搜索スルコト能ハサリシ、杜撰モ量リカタシト雖トモ参考ニ供ス」（「淡交夜話」）

「七厘米」「一厘米」を惣称して「厘米」という。陸地村は高の七厘、浦辺村は一厘を藩に納めるが、なぜこのような軽重があるのか、その由来も判然とした記録はないようである。……厘米について（幕府巡見使が）尋ねたら、「地方村

々は高について七厘（〇・七％）、浦辺島方の村々は水主役を勤めるので耆厘（〇・一％）課税されます。……このようにして差出した厘米は、西国街道天下送の者の扶持切米、川々渡守給米、惣百姓が勤むべき普請所の入用等に使われ、その他の掛り役等が免除されるので、百姓共にとって好都合です」と答えるよう、藩は指示している。「職人引高」については、或る人の説によると、以前は各自の持高を以て引高としたが、中古より實際持高の多少によらず耆人の高五石と定めたという。また或人は、「水役」について、これは元来「家役」として勤めた名称であつたが、貧富に等しく課するのは忍びないので、持高五石以上の者に「本役」、五石以下弍石五斗以上を「半役」とし、弍石五斗未満は「浮過」として「家役」を免除したもので、本役の者は日数十日を勤めるときは、半役の者は日数五日を勤める。「職人水役銀」に「本役」・「半役」の区別があるのもこれに由来し、技術の巧拙によるものではなく、だから引高も五石

とか貳石五斗程度にしたといっている。両説とも典拠は不明であるが参考までに述べる。

この説明中で「職人引高」がいきなり出てきて、話が難しくなっていますので、この解説を示します。

「水役上納之職人有之候得は丸役壱人ニ付高五石、半役壱人ニ付高貳石五斗ニ相当ル厘米を其村厘米之辻ニて御引被下候、此厘米たとへは半役壱人ニて高貳石五斗、当陸役村は壱升七合五勺、加子浦は貳合七勺ツ、職人へ遣ス事」(天保四年(一八三三)「鶴亭日記」の記事)

水役銀を上納する職人がいれば、丸役(本役)では壱人につき高五石、半役は壱人につき高貳石五斗に相当する厘米を、(藩は)その村の厘米の合計から減額する。この差引いた厘米を、半役壱人の場合なら、高貳石五斗の厘米(陸役村なら壱升七合五勺、加子浦なら貳合七勺)を職人に遣わす。

「小間」「小間銀」「水役銀」(07/11/12～15ブログ)と、

①広島市内では、町通り表の間数で「水役銀」を上納する。②「水主役」は沿海郡中に何百軒と決っている。③職人は「諸職人水役銀」を納める……について、個別の税でありながら、いずれも名前に「水」が含まれるのは、なにか共通するものがあるからではないかと推測しました。

諸職人の厘米が、水主役を勤める浦辺島方と同様に減額や免除されるのは、諸職人が水主役を勤めているとみなされる(実際は諸職人水役銀を納める)からではないかと思えます。

「浮過」とは、「耕地を持たないため地主の土地を小作したり、貸仕事などの浮稼ぎで生計を立てた」と理解していましたが、正しくは、持高「貳石五斗未満ハ浮過トテ家役ヲ免シタ」農民のようです。

いられ子 その2

「いられ子」(06/8/28ブログ参照)について、書いたことがあります。

「いられ子」は稲の早稲の品種名で、ありきたりの品種ではなく、稲刈りをするのにも藩へ願書を提出しなければならぬような、“特殊な”品種か?…と想定しました。

「いられ子」について記述したものを目にするにはほとんどなく、不思議に思っていました。『大崎町史』にその手掛りがありました。

「いられこ」とは何であろうか、当町域の古老を尋ね廻ったが、ついに「いられこ」が何であるかを明らかにすることはできなかった。……国会図書館に問い合わせたが、不明であった。その時「いもち病」のことを紀州の方言に、「いら」とあると教えられた。また広大の後藤陽一教授から、広島県の北部の方で「いもち病」のことを「いられこ」と聞いたような気がするとも教えられた。」

(『大崎町史』)

「 覚 豊田郡大崎中野村

一 いられこ 畝式丁五反壹畝
内

三畝 六合穂

有米式斗七升

五畝 五合穂

有米三斗七升五合

壹反式畝 四合穂

有米七斗式升

六反九畝□□□(拾式歩か) 三合穂

有米三石壹斗式升三合

七反三畝拾八歩 式合穂

有米式石式斗八合

八反八畝 凶損

有米合六石六斗九升六合

右ハ当村いられこ畝相改申候処、如斯御座候、追々

荊揚時季ニ相成候間、何卒御赦免被為仰付成遣候

ハ、難有可奉存上候、為其以書附御願申上候以上

(寛政六年)寅八月 役人三人

豊田郡御役所 (寛政六年(二七九四)『大崎町史』)

「三畝 六合穂 有米式斗七升」と書いてあります。まずは、「何合穂」の説明から。

「毎秋に該村庄屋・組頭・長百姓は村内の早中晩三田……を遍く巡視して、某田は幾升穂（二間四方即ち一坪の粗高をいふ）、某田は何合穂と概算して、下見帳と称する簿冊を調製して代官所へ呈出す」（『芸藩志拾遺』）

収穫の秋になると、庄屋・組頭・長百姓は村内の田を巡視して、この田は「幾升穂」（一坪の粗の收穫高）、こちらは「何合穂」と概算して、下見帳と称する簿冊を作り代官所へ提出する。

三畝の田の出来が「六合穂」（二坪六合の粗）なら、 $6\text{合} \times (3\text{畝} \times 30\text{升}) = 540\text{合}$ の粗の收穫が見込まれます。これを玄米に脱穀すると、半分になりますので、 $540\text{合} \div 2 = 270\text{合}$ 、つまり「有米式斗七升」です。

ついでに「有米」の説明もします。

【有米・在米】ありまい。（『古文書用語大辞典』）
現実には手もとにある米。現米。

「現実には手もとに存在する米」だから「有米」と名

付けたのでしょうか、ここで「有米」と強調するのは、これは「粗」ではありません、脱穀した「中身の米」といいたいばかりに、この言葉を使っています。

話を戻します。「六合穂」つまり「二坪の収量（粗）が六合」なら「三畝の有米式斗七升」、つまり「一反九斗」の収量です。宝暦十年（一七六〇）地詰、中野村の田の斗代（地詰の反当収量）は壺石八斗から壺斗代ですから、中位の斗代九斗とすれば、「六合穂」は平年作となりますが、実際の生産力は高くなっているでしょうから、「六合穂」の田三畝が被害を受けたと報告されているのでしょうか。

中野村の「いられこ畝」に関する報告は、「六合穂」から「凶損」（收穫皆無か）に及んでいます。「いられ子」は「稲の早稲の品種名」とするのは間違いで、被害を受けた稲のことに違いありません。その原因は『大崎町史』編者の調べの通り「いもち病」の可能性が高いのではないかと思います。

小一畝

六町三反八畝十六歩の場合、 $16\text{歩} \div 3 = 5\text{畝} \frac{1}{3}$ となる。割切れないときは「小一畝二不仕」という。

「小一畝」という珍しい言葉に出会いました。
「三步を小一畝ト唱、三十歩ヲ一畝ト呼シ候ニ付、三百歩ハ耄反ニ相成候事」（『吹寄青枯集』）

土地の面積三步を「小一畝」という。三十歩を「一畝」と呼ぶので、三百歩は「耄反」になる。

「四町八反三畝拾五歩 但、ケ様ニ畝ノ次何十何歩ヲ田法三ツヲ以割候て、割余り無之ヲ小一畝ト云」（『吹寄青枯集』）

四町八反三畝拾五歩の例のように、「畝」の次の位「何十何歩」を「田法三ツ」を以て割ると、 $15\text{歩} \div 3 = 5$ の様に割り余りがない（割切れる）のを「小一畝」という。

「六町三反八畝十六歩 但、右ノ如ク三ツヲ以割候て、割余り有之ヲ小一畝ニ不仕ト云」（『吹寄青枯集』）

「小一畝」とは「面積三步」のことと『吹寄青枯集』は解説していますが、用例では「歩の位が3の倍数」（3で割切れる）の意味で使っております。割切れないときは、「小一畝二不仕」とか「小一畝二合不申」といい、割切れるときは「小一畝二合」と書いてあります。

三で割切れるかどうかが問題になるのは、三〇歩で一畝になる（三〇進法）があるからです。そのため検地帳などの計算で苦労します。

面積と斗代（二反当り収量、単位斗）をもとに収量を計算します。面積が四町八反三畝拾五歩とすれば、まず「反」表示に換算します。

$$4\text{町}8\text{反} = 48\text{反} \quad 3\text{畝} = 0.3\text{反}$$

$$15\text{歩} = 15/30\text{畝} = 0.5\text{畝} = 0.05\text{反}$$

です。結局、四町八反三畝拾五歩＝48.35反となり

ます。この例では拾五歩が3で割切れた（「小一畝に合った」）ので計算が楽でしたが、「十六歩」なら、

$$16\text{歩}=16/30\text{畝}=0.53333\text{畝}=0.053333\text{反}$$

ですから、算盤でも難しい計算になってしまいます。

「村々古検地之所々ハ小一畝ニ合不申候、此度ハ諸村とも小壹畝ニ合候様算者へ可被申付候、但、壹歩式歩ハ捨り、四歩五歩ハ三步ニ仕、七歩八歩ハ六歩ニして、拾歩拾壹歩ハ九歩と可仕候共、余者右ニ准可被申付候」（享保二十年（一七三五）『加計町史資料』）

村々の昔の検地は「小一畝」に合いませんが、この度は諸村とも「小壹畝に合」うようにと算者へ指示がありました。面積が壹歩、式歩のようにならぬときは切捨て、四歩、五歩は六未満だから三步とする。（3で割り、余りは切捨て。）

測量の段階で「歩」を3の倍数にして、ややこしい計算を回避しようとしたのでしょう。

沼井

「塩浜式町九反七畝 五拾壹石六斗

ぬい数百式拾九」（寛永十五年（一六三八）『大崎町史』）

これは豊田郡中野村（現、大崎上島町）の地詰帳の一部です。田・畠・屋敷に続いて「塩浜」の分米が記載してあります。この中に「ぬい」という聞き慣れない言葉がありました。

「ぬい」というのは沼井で、塩田の中に一坪ぐらいのわくで囲ってスノコ式に濾過装置を施したもので、塩田の砂に海水をかけて乾燥させ、塩の結晶をつけた砂を、このぬいの中へ運び入れて、さらに海水をそいで濃い海塩水を探り、これをくり返して後この濃縮された塩水を煮て塩を採るのである。……塩浜の高付はその浜の面積によるのではなくて、このぬい数によつて分米が定められている。つまり、ぬい一つ当たりの石盛りは四斗と

きめられている。」(『大崎町史』)

この仕掛なら、六〇年ほど前に塩田で見慣れた風景ですが、その名前は知りませんでした。

ツ子

「当巳九拾三歳 百姓常治後家ツ子」(明治二年(一八六九)『大崎町史』)

当巳年(明治二年)で九拾三歳になった百姓常治の後家ツ子

これは、長寿者についての報告書の一部分だと思われる。ここで問題にするのは「ツ子」の表記です。

まさか「後家ツ子」ではないでしょうか、百姓常治の後家で「ツ子」さんのことに違いありません。女性の名前なら、「ツコ」ではなく「ツネ」と読むはずです。「子」は仮名文字では「ネ」です。

みたところ漢字に見えても、筆者が仮名文字とし

て書いているときには、「カナ」に書直す必要があります。そうしないと、女性の名前なので平気で「ツ子(ツコ)」と読み、(変な名前)と面白がるでしょう。

御笹川

「廿四日晴、朝、四日市を立て、あくまで長山を越、原を通りて広島へ七ツ頃二附、所々見物、御笹川とて相応之川あり、是を七ツ二堀り別て、城之左右へ廻し、中ニハ橋のみニて上り川もありけれ共(安芸之七川と云由)、表立し二三橋ハ、城際迄舟も入、尤大船ハ不入、自由能様せし物ナリ、城市供(ツメ)広大ニして、賑かニありけれ共、余り奇麗ニハ無之様也、城之外郭坏、甚不手入なり」(安政六年(一八五九)河井継之助「塵壺」)

九月廿四日晴。朝、四日市(東広島市西条町)を出発して、長い山や原を通り過ぎ、広島へ午後四時頃に着いた。所々を見物する。ここには「御

笹川」といつてそれなりの川があり、これを七つに掘り分けて城の左右へ流す。「芸芸の七川」と言うとか。中には橋だけで上る川もあるが？、主な二三の橋（川か）は城際まで舟を入れることができる。大船は入れない。便利にしたものである。城、町ともに広大で賑やかではあるが、余り奇麗ではない。城の外郭など手入れが悪い。

これは河井継之助の旅日記「塵壺」から、広島について記述した部分です。「御笹川」が書いてあります。広島の地理に詳しい人なら、「御笹川」とくれば「三篠川」のことだとすぐ思いつきます。三篠川は太田川の支流で、芸備線沿いを流れて深川で太田川に合流します。太田川は広島市の平野部に入ると七つに分流して（現在は六つ）、広島湾に注ぎます。もっとも、この記事をよく読むと、「芸芸之七川」の名として「御笹川」が書いてあり、支流の三篠川ではありません。現在と当時で名前が違うことも考えられます。そこで『芸藩通志』で調べてみました。やはり、支流の三篠川は「三田川」、本流の太田川

は「大田川」と書いてあります。すると、太田川を「御笹川」と呼んだときもあったのかも知れません。「三篠川」が駄目なら、地名「三篠町」（広島市西区）を手掛りにします。

「三篠町は明治二十二年町村制施行に際し楠木村、新庄村、打越村の三箇村を合併し一箇村とせしものにして合併当時は三箇村と一時称へしも、村民之れを好まず改称せんとする折柄県より楠木及新庄の頭字を探り新楠村と指令ありしかば新楠の二字にては打越を除外するものなりとて議論大に起り打越選出の村議等は県当局に陳情する所あり、……三村共太田川に關係を有し其の分流及支流は町を圍繞せるより太田川の別名を探り之れを以て村名を三篠村とし認可せられしなりと。由来三篠は御篠と書くを正とする由なるも三箇村合併の意を含みて御を三に換へしものなり、然して御篠は太田川の異名にて又鯉城も別名を御篠城と称せりと。古記に依れば太田川の分流又は支流は恰かも笹の葉を重ねしが如き觀あるより此の異名起りし

なりと録せり。」(『三篠町沿革誌』)

「御笹川(御篠川)」は太田川の別名でした。これで納得、「此の異名起りしなりと録」する「古記」とは何でしょうか。

思ひ入買

「近來米思ひ入買いたし候儀ハ買ベと相唱候儀ヲ恐レ、右買置いたし候者無之由尤之事ニ候、併去年之儀は麦米兩作とも不熟ニ付世上一統不自由之趣相聞ヘ、春之内ハ別て末々之者可及難儀候哉、依之右思ひ入買置候儀他国米ニ有之候得は不苦候間、随分無用捨買取可申、且又当所之米ハ飯用之外思ひ入ニ多く買集メ候儀ハ可致用捨候」(寛政三年(一七九二)『新修広島市史』)

近ごろ、米の「思ひ入買」をすると「買ベ」といわれるので、それを恐れて買い置きをする者がいないそうであるが、去年は麦米ともに不熟で世上一統不自由したと聞いている。春になる

と末々の者が難儀をすると思われるので、右の「思ひ入買置」きは他国米に限り構わないので、しっかり買い取りなさい。ただし、国産米は飯用の以外に、「思ひ入」に多く買集めてはいけない。

【思ひ入れ】(『広辞苑』)

①思惑^{おもわく}。予想。予定。⑤深く心をかけること。

「思ひ入れ」は⑤の意味でたまに使うことはあつても、「①思惑」の意味もあるとは知りませんでした。

「思ひ入れ買ひ」は、「思惑買」に相当します。

【思惑買】(『広辞苑』)

相場の騰貴を予期して、投機的に買い込むこと。見越買。

藩は日頃から米屋に対して、買占め・売惜しみをしてはならないと命じていますが、『広島市史』は「封内凶作の兆ある時は、寧ろ他国米を移入して米商に買ひ貯へ置かしめ、以て米価の調節を計らんと欲し」て、この触を出したと説明しています。

諸口壺丸

「諸口壺丸 但、式拾壺束入

中品目方四貫百目より四貫五百目迄

代六百八拾八匁……

上品目方 四貫六百目より五貫目迄

代七百八拾四匁……

一半紙壺丸 但、六匁入

中品目方五貫六百より六貫目迄

代九百八拾六匁

上品目方 六貫百目より六貫五百目迄

代壺^ズ八拾八匁」(明治五年(一八七二)「続

波多野家文書」)

これは、広島県庁が「御用紙」として紙漉から「御買上ケ」になる紙の直段表です。「紙品上中下之内、下紙は入用無之ニ付、上中之品相撰相納可申」としているの、「中品」「上品」の直段だけが書いてあります。

紙を数える単位として、まず「丸」が出てきます。

【丸・円】(『単位の歴史辞典』)

④和紙を数える単位。半紙は六^{むしめ}締、美濃紙は四締、奉書紙は一〇束、杉原紙は八束、傘紙・元結紙などは五束、小菊紙は九締を一丸とする。

一締は紙一〇束すなわち一〇〇帖、一帖は美濃紙で四八枚、半紙では二〇枚。

「半紙壺丸 但、六^ズ入」は「六^{むしめ}締」と読むと分ります。この辞書では諸口一丸についての記述がありませんが、資料に「諸口壺丸 但、式拾壺束入」とありますから、「諸口紙は二一束を一丸とする」を追加したところです。

「丸」が分つても、「束」^{そく}「締」(ズ)が続きます。

【束】そく。(『日本史用語辞典』)

ひとにぎり・ひとたばともいう。古代、稲を量る単位。稲を束ねることに起源すると考えられる。一束は穀一斗、米五升に相当する。一〇把で一束。なお、杉原紙の一束は一〇帖。

【締め】しめ。（『広辞苑』）

④たばねたものを数える語。半紙一しめは一〇束すなわち一〇〇帖、二〇〇〇枚。

【帖】じょう。（『広辞苑』）

（ハ）紙・海苔などの一定の枚数を一まとめにして数える語。美濃紙は四八枚、半紙は二〇枚、海苔は一〇枚を一帖とする。

面倒な単位ですが、一応解ったような気がします。それにしても、なぜ「丸」を使うのか、国語辞典にはその説明が求められません。

上品と中品の違いは、その重さにあるようです

連々作

「拾石六斗五合

小崎新開

享保十四酉年御地詰

新見平八

古川友之丞

斗代 畑 中下畠八斗 下上畠七斗 下畠六斗

下中畠五斗 下々畠四斗

当土免四つ壺歩

畝数壺町三反四畝式拾壺歩

内 式反式畝九歩 連々作」（文化十二年（一八一

五、矢野村「国郡誌御編集ニ付下しらへ書出帖」）

これは安芸郡矢野村（広島市安芸区）小崎新開の地詰の概要の説明です。小崎新開は、享保十四年（一七二九）に地詰（検地）があり、面積は壺町三反四畝式拾壺歩、石高は拾石六斗五合、全て畑です。

この面積には「連々作」式反式畝九歩が含まれています。

「田畑之位ハ其村ニ応シ相極メ候事、屋敷地斗代ハ壺石五斗ニテ御座候、其外悪所田地有之候へは見附田畑と唱、位を其村々ニ応シ下斗代ニ相極メ申候、又作付も成不申所は連々作と唱へ、一向斗代難付故畝計相改候、此分八年月ヲ経作物も宜出来仕候へは見取懸り、其以後高付ニ相成申候」（『吹寄青枯集』）

（検地のとき）田畑の等級は村に依じて決めるの

で、それぞれ違いがあるが、屋敷地の斗代は全て壱石五斗である。それ以外に悪所田地があれば「見附田畑」といって、その位(斗代)を村に応じて最低の斗代に決める。また作付も出来にくい所は「連々作」といい、斗代を付けることが難しいので、面積だけを測る。これは年月を経て、作物も出来るようになると「見取り」とし、その後「高付」をする。

「連連作とは初て新開ヲ築き候節、海辺などハ沖堤之廻り近辺ハ潮氣もつよく、又新開中之悪水之溜所ニも成当分作付不相成、連々年々ニ地こしらへ潮氣もぬけ作付いたし候ヲ以、ケ様之所ヲ連々作と言也」(天明二年(一七八二)『芸州政基』『広島県史』)

連々作とは、初めて新開を築いたとき、海辺など沖堤の廻り近辺は潮氣も強く、また新開の中で悪水の溜まる所でもあるので、当分は作付もできず、「連々年々」(毎年)地拵えをして潮氣を抜き、作付をするので「連々作」というのである。

すると、小崎新開の連々作は、面積は計測されても、収穫は問題外とされるので、高「拾石六斗五合」に含まれないでしょう。

銘酒屋

「五組造り酒屋 合三拾五軒 此内壱軒 銘酒屋」
(天明二年(一七八二)『廣島市史』)

五組(広島城下)の造り酒屋は三拾五軒、この内壱軒は銘酒屋。

これは天明二年(一七八二)九月、広島城下に於ける職業別の戸口調査報告書の一部です。

「銘酒屋」なる言葉に、特別な意味があるのか、調べてみました。

【銘酒屋】(『広辞苑』)

①銘酒を売る家。②明治時代、銘酒を飲ませることを看板にし、裏面で私娼を抱えて営業した店。

【銘酒】（『広辞苑』）

銘柄のよい清酒。

「芥川屋久羅 初代助右衛門……五代目源八郎居町年寄役を勤、六代目今の久羅なり、代々酒造を家産とす、諸銘酒この家の製方を佳品とし世に銘酒屋とよふ」（文政五年（一八三二）「知新集」『新修広島市史』）

芥川屋は、初代が助右衛門、……五代目源八郎は居町（堺町）の年寄役を勤め、六代目は今の久羅である。代々酒造を家業としている。諸銘酒のある中で、この家の酒が佳品であると、世人は銘酒屋と呼んでいる。

「酒 府下酒屋多が中に三原屋（白神三町目）海老屋（同一町目）ハ昔より御用聞酒屋とす、又室屋（山口町）平野屋（京橋町）概屋（猿猴橋町）芥川屋（塚本町）金屋（猫屋町）この数軒を今大舗とす、其外堺町芥川屋助右衛門といふものむかしより銘酒を造り世に銘酒屋と称す、又近きとしよりおひく増し、

今銘酒屋数家あり、製酒銘左に示す、

釀酒 翠涛酒 南陽水 青田酒 竹紫酒 梨花酒
 百花酒 千里酒 薔薇酒 仙桂酒 続命酒 十六
 味地黄保命酒 九霞酒 千日酒 霰酒 天一方養
 命酒 神方清明酒 四種酒（隔症に用ひてよし）薩
 摩伝 泡盛 阿蘭陀カンフラ 人参延命酒 金あ
 らき 銀あらき 不老酒 養老酒 茴香酒 みか
 ん酒 菊酒 へに酒 仙齡酒（中風筋気などに用ひ
 て効あり）梅酒 忍冬酒 いちこ酒 桑酒 保
 命酒 韓方紅顔酒 みりん酒 本直酒 甘露酒
 焼酎 転多ねり酒 桜波ねり酒 白ねり酒」（文
 政五年（一八三二）「知新集」『新修広島市史』）

「知新集」の「土産」の項に、広島島の酒造に関する記事があります。これによると、

城下には酒屋が多くあるが、三原屋・海老屋は昔から藩の御用聞酒屋であった。室屋・平野屋・概屋・芥川屋・金屋などが今では大店である。このほか堺町の芥川屋助右衛門が昔より銘酒を造り、世に銘酒屋といわれている。最近ハ

段々と銘酒屋も増加している。その製酒銘は次の通り。

と、製酒銘が書いてあります。焼酎・みりん酒など知った名前もありますが、大部分は「十六味地黄保命酒」などの薬酒のようで、酒の種類・商品名がちや混ぜに多数列挙されているのは〈壯観〉ですらあります。それはともかく、文政期には多くの「銘酒屋」があります。天明二年戸口調査報告書の「此内老軒 銘酒屋」は「堺町芥川屋」のことを指すと考えてよからうと思います。

相組

「去秋米穀不作、御蔵納米減少ニ付てハ他米御買入等ニて御取合セ有之候へ共、差向御米配差間候付、来月より差掛ル処御家中初末々迄都て御扶持方并差紙立等麦取交御渡可被下、右は一統迷惑筋も可有之候得共、不被得止次第二候間、銘々心得違之儀無之其覚悟有之、此場合如何様共勘弁相尽可被

取続候事……右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候」（天保八年（一八三七）「鶴亭日記」）

昨年（天保七年（一八三六））米穀が不作のため御蔵納米が減少し、他の米を買い入れて間に合せてはいるが、差当たり御米を配るに差支え、来月より御家中をはじめ末々まで御扶持方ならび差紙立等は麦を取り交ぜて渡すことにする。みんな迷惑とは思うが仕方のないことで銘々が覚悟して工夫して堪えなさい。……以上「相組支配方末々」まで洩れないよう知らせなさい。

天保の飢饉のとき、不作のため年貢米が思うように集らず、扶持米などにも麦を交えて渡すと家中に連絡した文書です。文末には、たいてい「右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候」の文言があります。「相組」とは何か、考えます。

【合い・会い】（『広辞苑』）

〔接頭〕（「相」と書く）①名詞または動詞について、一つの事柄に共にかかわる意をあらわす。一緒に。同じ関係にある。互いに。

すると、「相組」とは「同じ組」「組内」のことでしよう。

「切支丹宗門之儀、庄屋共毎月並百姓に申渡之、五人組切相改、相組ハ勿論他組たりといふとも、聊不審成もの有之ハ宗旨奉行へ速に可申出之事」(享保二年(一七二七)『広島県史』)

切支丹宗門の件は、庄屋共が毎月百姓に申し渡し、五人組の内で改め、「相組」は勿論、「他組」であつても、少しでも不審な者がいたら宗旨奉行へ速く申出なさい。

ここでは「相組」は「自分の属している五人組」を指していますが、組織の中で生活するのは「御家中」です。「右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候」の付く文書は、家中に宛てたものと理解してよいと思われます。

「五節句・式日礼有之節は勿論、不時に惣出仕帳二付候刻も相組相済候迄其番頭・組頭可罷在候」(享保二年(一七二七)『広島県史』)

五節句や式日の儀式のときは勿論、臨時に「惣出仕帳」に記帳するときも、「相組」の記帳が済むまでその組の番頭や組頭は残つて居なさい。

「組」には、番頭・組頭などのキャップがあり、自分の統べる「相組(組内)」のメンバーに組頭が伝達すること、または下部組織へも通達することを求めて、「右之趣相組支配方末々迄不洩様可被相達候」の文言があると考えています。

小貝

「都而小貝蛤類并諸魚之子、田畠之肥しに用ひ来り候儀、可致用捨、尤こなやさら之類、肥しに用候儀不苦候事」(寛政四年(一七九二)『廣島市史』)

全て「小貝」・蛤類や諸魚の子を田畠の肥料として使ってきたが、これを禁止する。もつとも、こな・やさらの類を肥料にするのは構わない。

これは貝類の乱獲を防ぐため、「貝かき」以外の道具を禁止した触の一部です。「小貝」という言葉があります。

【小貝】（『広辞苑』）

①小さい貝。②（「頁」^{おおい}）と区別している貝偏^{かいへん}に同じ。

ところが、広島ではアサリを指します。

「オオノガイはアサリとほぼ同じところにいるがはるかに大きいので、アサリの小貝に対して大貝と称していたのであろう。（山下欣二『国郡志御用ニ付下調書出帳』に見る水族・魚介、一「安芸国」）

「小貝養成に就て 本市江波村沖合干潟に於ける介類は年々採取するもの多く、江波村民の五歩以上は此のあさを以て家業とする故、介類の養成は同村民のため此の上なき有益のことなれば、単に採取のみに偏よるは甚不可なりとて、同村有志者は予々之を慮り、此程よりその蕃殖法を研究し、第一採取者は勉めて小介をあさらず五歩目節を通

るものは一切採らざることを盟約し、是迄とても毎年一回最小の小介を簍^{ひし}近傍に撒布せることにて、本年は昨日此の小介撒布を施行したるに、同村民三百名出で揃ひ、篩ひ落せし小介を六石積小船二十一艘に積みて沖合に播き撒らしたり、本市天満川下も予て磯沖より採取せし小介を養成する習慣ありて、之れも昨日小介を播き込みしが、其石数は凡そ百二十石許りにして今より八九ヶ月を経ば五倍の太さに肥ゆる故、明年一二月頃に至れば六百石程になるべしと云ふ。」（中国新聞、明治三十四年（一九〇二）七月十一日）

「やさら」は児游貝^{きさご}のことですが、「こな」は不明です。

分

「○同じ三分なら海田から

昔し広島東郡の農人、宮島に参詣せんと欲し、安芸郡海田市に來り渡海の船賃を問ふ、舟子は銀三

分なりと答ふ、農人以爲く、是より広島へ二里許あり、同地まで往て乗船せば船路を縮め賃銀も亦減ぜんと足労を厭はず広島に來り渡海の船賃を問ふ、舟子は銀三分なりと答ふ、農人愠りの色を生じて曰く、同じ三分ならば海田より乗らん」と忽ち海田へ引返したりといふ、事は笑話なれども率直の情掬すべし」(小鷹狩元凱『広島雑多集』)

昔、広島 of 東郡の百姓、宮島に参詣しようと思ひ、安芸郡海田市まで來て渡海の船賃を問うた。船頭は「銀三分です」と答えた。これから広島まで二里ばかりある。そこまで行つて乗船すれば船路を縮めるので運賃も減るだろうと考え、足の疲れもかまわず広島に來て、渡海の船賃を問うと、船頭は「銀三分です」と答えた。百姓は怒つて、「同じ三分なら海田より乗る」と、忽ち海田へ引返したという。笑話ではあるが、率直でよろしい。

『広島雑多集』にはルビが付けてあり大助りです。「銀三分」とあるので、「銀三分(ぶ)」と誤読しま

せん。

【分】 ふん。(『岩波日本史辞典』)

重量單位。一分は約〇・三七五^ギにあたる。一〇倍を匁、一〇分の一を厘という。江戸時代の秤量貨幣であつた銀もこの單位を用いたが、轉じて小額の銀札の單位にも使用。

【分】 ぶ。(『岩波日本史辞典』)

江戸時代の金貨の單位。歩とも書く。一兩が四分、一分が四朱にあたる。一八三七(天保八)には銀を素材としながら分を單位とする天保一分銀が発行された。

「分」の一〇分の一は「厘」です。

【厘】 りん。(『古文書用語大辞典』)

釐の略字。「リ」と表記されることもある。

『塵劫記』(岩波文庫)で、「厘」の注記に、「もとは釐。厘は略字。はじめ「り」と読み、後に「りん」と読む」とあります。

当前・向來

「御当地新開吹綿之儀ハ、御國産第一之品柄一統融通広大之事ニ候処、近年御他邦ニおゐて殊外不評仕候より、直段下落ハ勿論都て不捌と相成、此余弥増不評仕候てハ往々一統作人之難渋押移候義ハ眼前之事ニ候、其基ハ近来流行之新綿種ニ取寄せ、中ニも朝鮮綿・赤木白花など専ら作付、此綿至て性合不宜ニ付他所不評と相成、是等之義ハ一統心得も有之度候処、当前之利分ニ拘り向來之憂を不顧追々植増し、……近来新種之朝鮮綿杯惡敷種ハ一円指止メ、往古より作來候青木其外品合宜敷分計作立候時ハ、忽他所氣受宜敷買船多ク参り直段等大ニ引立候得ハ、一統不一方徳用ニ相成候ハ現在之事ニ候間」(文政十三年(一八三〇)『広島県史』)

御当地(広島)新開の吹綿(綿花)は「御國産第一之品柄」で、多くの人の生活を支えているが、

近年は他国での評判が悪く、値段は下がり売行きもよくない。これ以上の不評となれば作人の難渋するのは明らかである。その原因は、近来流行の新綿を種々取寄せ、朝鮮綿赤木白花などを作付することで、この綿は質が悪く、他所の不評となつている。これはみなも心得ているが、「当前」の利益にこだわりの、「向來」の憂を考えないで段々と植増しをしている。……このような惡品種の栽培を止め、從來の「青木」など品質の良いものだけを栽培すれば、たちまち他所の評判も良くなり、買船も多く来て値段も引立てば、みんな大いに徳用となるのは「現在之事」である。

『広島市史』は、「只管産綿の多収ならんことを欲し、種々流行の新綿種を取寄せ」と解説しています。「当前之利分ニ拘り向來之憂を不顧」という文言に頭を悩ませています。文意から考えると、「現在の儲けに目がくらみ、将来の不利益を顧みず」だと思ふのですが……、辞書はうまく答えてくれません。

【当然・当前】（『日本国語大辞典』）

①その事柄が、どう考えてもそうあるべきであること。そうであることが、なんら疑問の余地のないこと。あたりまえであること。また、そのさま。②その事柄が、どう考えても疑問の余地のないさまを表わす語。

【当前】（『漢字源』）

①トウゼン まのあたり。目の前。②アタリマエ（「国」「当然」と同じ）。

「当前」は、『漢字源』の「目の前」で説明がつきますが、「向來」には困ります。

【向來】きょうらい。（『広辞苑』）

（コウライとも）以前から今まで。

【向來】（『漢字源』）

嚮來。今まで。從來。「向來道隅有売餅人」向來、道ノ隅ニ餅ヲ売ル人有リ」（↓後漢書）

「向來」の意味に「将来」があるかと探すと「過去」

が出てくる始末。「現在の儲けに目がくらみ、従来の不利益を顧みず」とは？

「徳用ニ相成候ハ現在之事」の「現在」という言葉も面白い。

【現在・見在】（『広辞苑』）

②実際であること。ほんとう。

天水所

「村中田地凡半方大川かかり、其余谷々水田おほく御座候、押ならし天水所に御座候」（文政三年二八

二〇）「甲奴国郡志 秋」梶田村、『甲奴町誌』）

梶田村（現、三次市甲奴町梶田）の田の約半方は大川の水を引いているが、その外は谷々に水田が多く、大抵は「天水所」です。

【天水】（『広辞苑』）

あまみず。

【天水場】（『古文書用語大辞典』）

天水懸・天水田とも。水利が悪いため、雨水や湧き水を溜めた水を利用して稲作をした土地。

田の水源には「井手水懸り」「雨池水懸り」「天水所」がありますが、「大川かかり」は「井手水懸り」のことでしょう。

特別な灌漑の仕掛けを持たず、雨だけをたよりに栽培するのは畑です。田でそれができるのは「谷々」で、周囲の山林からの湧き水のある場所、湿田に限られるのではないかと思います。

評判

「蕨粉之事 右品近年殊外不自由ニ御座候て、傘屋共迷惑仕、中ニハ餅粘へ渋ヲ加へ用ひ候様ニも相聞候得共、永雨之節自然へげ候様ニては必評判ニも相懸り可申ニ付、右躰之義無之様傘屋共へ一統示し筋申談せ候義ニ御座候、畢竟蕨粉平日壺升ニ

付壺升より壺升四五分位仕候処、近頃ハ壺升ニ付三匁四五分」（『文政十二年（一八二九）「野間家文書」』）
蕨粉は近年殊の外不自由で、傘屋共は迷惑をしている。中には餅粘へ渋を加えて代用していると聞くが、長雨のとき「へげる」（剥がれる）ようでは「評判」にもかかわるので、そのようなことのないよう、傘屋共に指示したことです。
それというのも、蕨粉はいつもは壺升、壺升より壺升四五分位なのに、近頃は三匁四五分にもなり、

この資料の「評判」は「名声」に相当する使い方ですが、それとは違う意味もあるようです。

「早魃所田地をしらへ、已ニ池所見分仕積方等念入相しらへ、弥何レ之村ハ郡夫ニ不被仰付候ては難相調旨、連書を以御願申出候上ニて御評判被仰付候様被成下候ハ、……御願申上候様仕度奉存候」（文化十三年（一八一六）『三原市史』）

（郡夫による普請については、私達割庄屋が）早魃所の田地を調べ、従来の池所を見分して、工事の

見積をし、この村は郡夫による普請でなくては調い難いと、割庄屋連書で御願いをして、藩の「御評判」をいただきたいと考えています。

【評判】（『漢字源』）

ヒョウハン ①つきあわせてきめる。②「俗」審判する。

ヒョウバン 「国」①相談してよしあしを判定する。②世間のうわさ。③世間によく知られていること。名声。

「評判」に「相談してよしあしを判定する」という意味があるとは知りませんでした。

普為聴

「鹿之助殿絹紐付候箱より御奉書取出し、申渡と被申候故、平伏ス……鹿之助殿段々御祝詞被仰下、都て平人より御召抱、直ニ士格ニ被成下候儀は至て稀成儀、殊ニ御城下は医師も沢山有之候得共、

被召抱候分は至テ数少ク、別て郡中より此度如此結構被仰蒙候事御手柄之至、猶追々御歎申述候儀も可有之、御出精可被成と、段々御深切ニ御普為聴被下候」（天保五年（一八三四）「御医師格被仰付候節手控頭書」）

（賀茂郡代官、近藤）鹿之助殿は絹紐付きの箱から御奉書を取り出し、「申渡す」といわれたので平伏しました。……鹿之助殿は色々と御祝詞を下さり、平人より召抱え、直ぐに士格にされたのは至つて稀なこと、殊に広島御城下に沢山の医師もいる中で召抱えられる人は大変少なく、特に郡部よりこのようなことは、御手柄の至りです。また追々と御歎を申すこともあることでしよう。精勤して下さいと、御深切（親切）に「御普為聴」下さいました。

これは、寺家村の医師、野坂三益が「御医師格被仰付」たとき、代官から辞令とともに祝詞を受けた様子です。ここに「御普為聴」なる珍しい言葉に出会いました。

「普為聴」は「吹聴」のことに違いありません。

【吹聴】ふいちよう。（『広辞苑』）

ひろく言いひろめること。言いふらすこと。披露。

「夕方、若狭屋直次郎善導印鑑を受候とて普為聴ニ来ル」（明治五年（二八七二）『宮本愚翁日記』）

夕方、若狭屋直次郎が善導印鑑を受けたと「普為聴」に来た。

「善導印鑑」は心学に関する資格かも知れません。その資格を得たことを報告（披露）に来たのでしよう。

代官の「御普為聴」は、藩主からの辞令を伝達（披露）することと思われます。

いられこ その3

「一本郷村 下北方村 上北方村 萩路村 松江村
小原村 小泉村 惣定村 末広村

右村々之儀ハ稲・麦左之通之品専植申候
一いられこ早稲と申分

但

ほこま 但、小泉早稲共申候 赤ほうし稲

三川 うす赤稲

北国 但、久左衛門ほつく共申候 赤毛稲

一早稲と申分（中略）

一中田と申分……………

一晚田と申分（中略）

♪

一はたか麦と申分……………

一大麦と申分（中略）

一小麦と申分（中略）

一中河内村 小田村 下河内村 上河内村 河戸村

和木村 大草村

右村々は左之通之稲・麦専植申候

一いられこ早稲と申分

さきや 赤稲

小泉早稲 同

久左衛門早稲 同

はちこく うす赤稲

みかわ 同

一早稲と申分(以下略)〔寛政六年(一七九四)『三原市史』

「いられ子」とは何か。「稲の早稲の品種名」(06/8/28ブログ)、「いもち病」(08/2/18ブログ)の二説について書きましたが、やっと分りました。「稲の早稲の品種名」です。

上記の資料は、米麦の品種について詳述してあります。

米は、「いられこ早稲」「早稲」「中田」「晩田」と大分類してあります。麦は、「はたか麦」「大麦」「小麦」に分類してあります。すると、「いられこ早稲」は極早稲に当るものと考えてよさそうです。

「いられこ早稲」には、ほこま(小泉早稲とも)・三川・北国(久左衛門北国とも)・さきや・はちこく等の品種名が見られます。

「赤ほうし稲」「赤毛稲」「うす赤稲」の名は穂の色が赤味があったことを示すものでしょう。

「いられこ畝の被害」(08/2/18ブログ)は、極早稲

の作況の報告だとしても、作付面積を藩に報告する(06/8/28ブログ)理由は何でしょうか。

御医師格

天保五年(二三四)、賀茂郡寺家村医師野坂三益は、広島藩から「御医師格」に取立てられました。「御医師格」とは何かを、この任命から考えます。

【藩医】(『岩波日本史辞典』)

江戸時代の各藩に仕えた医者。初期から藩には医者がいたが、大藩の場合幕府の制にならっていた。幕府では大奥で將軍などの脈をとる奥医師、奥詰医師と御番医師、寄合医師、小普請医師など表の医師とがあった。藩医は多くは世襲だったが、町や村の医者秀れた者が登用されることもあり、また年頭挨拶などに参上するだけの御目見医師もあった。京都の医家の門人帳では18世紀前期から門人が増し、藩医の子弟が多く見える。「解体新書」(二七七四)の翻訳に関係

したのもほとんど藩医で、医学の発展に果した役割は大きい。

野坂三益の「天保五甲午九月廿日 御医師格被仰付候節手控頭書」によると、当時、御側医師九人、御側医師並一九人、御医師組二一人、御医師格二一人、御目見医師六人、合計五七人の名前がみえます。この中に野坂三益などが加わりますので、席次は五一番目くらいになるのでしょうか。「御医師」の名前から、殿様の脈をとる医師のように考えられますが、その任務は「御側医師」が担当したのでしょうか。

辞令とともに渡された「小書付」には

「此度御扶持方被下置候得共、病用之儀ニ付御領分何方へ罷越候共勝手次第之事

一其儘寺家村ニ罷在不苦候事

一年頭御礼并江戸御往来之節計登城御目見可致事」

この度、御扶持（七人扶持）を下されることになったが、治療のために領内のどこへ往診しても構わない。今まで通り寺家村に住んでよろしい。年頭御礼と江戸御往来のときだけ登城して御目

見すること。

とあり、公用としての医療活動についての規定はありません。

「七人扶持」をもらうことになった野坂三益は、次のような領収書を出しています。

「 覚

一米壺石五升 但十月分御扶持米

右受取申候、已上

未九月十八日 野坂三益印

近藤鹿之助殿（賀茂郡代官）

石井貞次郎殿（賀茂郡代官）」（天保六年（一八三五）

「鶴亭日記」）

計算すると、壺人扶持は月額米壺斗五升に相当します。

しらせ書

「今日私儀数年来医術心掛療治出情候ニ付、生涯御扶持方被下置、御医師格被仰付、冥加至極難有仕

合ニ奉存候、此段為御知如此御座候、以上

九月廿日

野坂三益

弓削大之助様（天保五年（一八三四）「御医師格被仰付候節手控頭書」）

今日、私が数年来医術に心掛け療治に出情したとのことで、生涯御扶持方を下され、御医師格を仰せ付かりました。冥加至極有難いことで御座います。この段お知らせいたします。

これは、野坂三益が御医師格を仰せ付かった際に出した通知で、特に目新しいというものではありません。ところが、いわば楽屋裏の文書「しらせ書先例」を見ると、俄然面白くなります。

「しらせ書先例

一御年寄中 支配人当テ

一御番頭より御中小姓頭迄直宛テ、美様、書留此段為御知申上候

一大目附より同ク格迄美様、書留此段為御知仕候
一町御奉行ハ支配頭故美様ハ勿論、書留為御知申上候

一御先手者頭より御目付御代官迄、平ラ様、書留此段為御知如此御座候以上 普為知と唱

一御医師中ハ御側医師より同並御儒医師組御医師格御目見医師迄、平ラ様、書留同断

一御歩行組ハしらせニ不及、尤懇意しらせは格別之事、平ラ様、書留同断
一番組懇意しらせ、門人之名ニて相しらせ、此方之名ハ出し不申候事

一町人、右同断（天保五年（一八三四）「御医師格被仰付候節手控頭書」）

御年寄への宛先は、「直宛テ」ではなく、「支配人当テ」とする。

御年寄から町御奉行までは、敬称の「様」は「美様」とし、以下は「平ラ様」とする。（右図左は美様、旁が「美」の草体のように書いてある。右は平様、目下の者に対して用いる。『くずし字用例辞典』から）

書留（文書の末尾に書く文言）は、「此段御手元迄御知如此御座候」、「此段為御知申上候」、「此段為御知仕候」、「此段為御知申上候」、「此段為御知如此御座候」と文言を微妙に変化させる。

頼辰

御歩行組には「しらせ書」は出さなくてよい。番組(代官の下僚)の中で懇意な者には、門人の名前で出す。

最初に載せた弓削大之助宛の通知の書式は、弓削大之助が御先手者頭ですから、「直宛テ」「平ラ様」、書留は「此段為御知如此御座候以上」になっており、見事に「しらせ書先例」に合致しています。

「お知らせ」の手紙を一本書くにも、細かな決りがあり、それに合うようにするのは何とも鬱陶しいことです。が、考えなくても例文どおりに書けば〈百点〉が貰えるのなら、これも気楽なことかも知れません。

「普為知」という新しい言葉ができました。「普為聴」に似ています。例文を見ると、「此段為御知申上候」と書いてあります。これが「普為知」に関する文言でしょう。

【普】(『漢字源』)

{形} あまねし。広く全部に行き渡っている。

「普為知」は「普く知らせる」の意味でしょう。「普為聴」は「普く聴かせる」かも知れません。これら

は「吹聴」から派生した言葉のような気がします。

沼田郡天満町

明治五年(一八七二)、広島県庁は、板材木炭薪類に課税するため「改場所」(検査所)を県下三四ヶ所に置くことを布令しました。その内、沼田郡・安芸郡の「改場所」は次の一〇ヶ所です。()内は現在の町名です。

沼田郡久地村(広島市安佐北区安佐町久地)

沼田郡長束村(広島市安佐南区長束)

沼田郡相田村(広島市安佐南区相田)

沼田郡西山本村(広島市安佐南区祇園町西山本)

沼田郡楠木村(広島市西区楠木町)

沼田郡天満町(広島市西区天満町)

安芸郡牛田村(広島市東区牛田)

安芸郡拾歩所海田市(安芸郡海田町)

安芸郡愛宕町(広島市東区愛宕町)

安芸郡宮原村(呉市宮原)

『芸藩通志』（文政八年（二八二五））には沼田郡の「村里」三ヶ村が記載されていますが、「沼田郡天満町」は見当りません。同様に安芸郡の「村里」を調べると三五ヶ村が記載されていますが、「安芸郡愛宕町」はありません。

この二ヶ所は「村」ではなく「町」が付いており、『芸藩通志』広島府の「坊里」の中に載せてあります。天満町と西愛宕町・東愛宕町はいずれも「新開組」に属します。

郡部は代官が支配し、広島市の街地は広島府として広島町奉行の管轄下に置かれました。『芸藩通志』はその行政区域を考慮して編集してあります。廃藩置県になるとその枠が外れ、本来の郡名が表に出ます。

「広島府は、地、安芸、沼田二郡に亘る、大抵京橋川より、東は安芸郡、西は沼田郡なり」（『芸藩通志』）

広島駅の南、比治山の西を流れる京橋川が境界で、安芸郡と沼田郡に分れます。

その後、第一大区を経て広島区となり、広島市になるのは明治二十二年（二八八九のことです）。

久太郎

「 覚

一金五両也

右拝借仕候処、実正二御座候。追而返済可仕候。

戊子十一月三日

頼久太郎襄

熊谷久右衛門殿（文政九年（二八二六）『頼山陽書翰集』）

これは京都熊谷鳩居堂（筆墨の老舗）宛の頼山陽の借用証文です。名前を「頼久太郎襄」と書いています。

【頼山陽】（『広辞苑』）

江戸後期の儒学者・史家・漢詩人。名は襄のぼる。通称、久太郎。別号、三十六峰外史。

名は襄のぼると解りましたが、通称の「久太郎」をどう読むのか分りません。

【頼山陽】（『岩波日本史辞典』）

一七八〇～一八三二（安永九・二二・七・天保三・九・

二三）江戸後期の儒者、詩人。名は襄のぼる、通称ゆうたろう久太郎、字は子成、別号は三十六峰外史。

「茶山は神辺かんなべに來り寓してゐる頼久太郎ひきたろうの事を蘭軒に報ずるに」（森鷗外『伊沢蘭軒』）

調べてみると、「きゆうたろう」「ひきたろう」と色々です。まさか多数決というわけにもいかず、困っていると、丸く収る答を見つけました。

「頼山陽 名は襄のぼると訓読す」字は子成、通称は久太郎、山陽外史と号し京都に入りて後ち別号を三十六峰外史といふ、春水の長男なり、母の名は静、梅颯と号し、大阪の儒医飯岡義斎の長女なり、安永九年十二月二十七日、大阪江戸堀一町目の寓居に生る、祖父享翁（又十郎と称す）芸州竹原に住す、山陽の胎中にあるとき、予め通称を選し

て贈る、春水因りて之に従ふ、……久の字は、初め音読せずして訓読せり、後ち西遊前に自ら改めて徳太郎といひしが、又た故ありて旧称久太郎に復せり、然れども其称呼は復た前の如くならずして音読すべしといふ」（『廣島市史』）

書翰の日付

『頼山陽書翰集』下巻から、珍しい日付の表記を集めました。

一日 「閏六月朔」（閏六月一日）【朔】ついた

ち。ひと月が終わって、暦の最初にもどった日。陰暦で月の第一日のこと。

二日 「孟夏初二」（四月二日）【初二】月の初めの第二日。

三日 「霜月初三」（十一月三日）【初三】月の初めの第三日。

十四日 「五月幾望」（五月十四日）【幾望】陰暦の十四日の月。▽望（満月）に幾ちかいの意。

十五日 「五月望」(五月十五日) 【望】満月。

陰暦の十五日。

十六日 「閏六月既望」(閏六月十六日) 【既望】

陰暦で、月の十六日のこと。

二十五日 「三月念五日」(三月二十五日) 【念】

【数】二十。

月末 「七月晦」(七月二十九日～三十日) 【晦】

みそか。つごもり。陰暦の月末で、月のないやみ夜。

一月二日 「開春二日」 【開春】春になる。ま

た、春のはじめのころ。

一月七日 「人日」 【人日】陰暦一月七日の

こと。

一月七日 「七くさの朝」 【七草】

一月八日 「人日後一日」 【後一日】

一月十六日 「上元後一日」 【上元】陰暦一月

十五日のこと。

三月四日 「上巳後一日」 【上巳】三月三日。

三月二十九日～三十日 「春尽日」「三月尽」 【尽】

四月八日 「仏生日」 【仏生日】釈迦の誕生日。

陰暦四月八日とされる。

五月五日 「重五」 【重五】陰暦五月五日の節

句。

五月七日 「端陽後二日」 【端陽】五月五日。

五月十四日 「竹酔後一日」 【竹酔日】陰暦五

月一三日の称。中国の俗説で、この日に竹を植えれば、よく繁茂するという。

六月三十日 「七月前一日」 【前一日】

七月九日 「七夕後二日」 【七夕】陰暦七月七

日の夜。

八月十七日 「中秋後二日」 【中秋】陰暦八月

十五日のこと。

九月八日 「重陽前一日」 【重陽】陰暦九月九

日の節句。

九月九日 「重九」 【重九】陰暦九月九日の節

句。

十二月九日 「臘八後一日」 【臘八】陰暦十二

月八日。釈迦が悟りをひらいた日といわれる。

二月 【仲春】仲春。陰暦で、春のまんなかの月

とされる二月のこと。

四月 【孟夏】 陰暦で、夏のはじめにあたるとされる四月のこと。初夏。

五月 【梅月】 陰暦五月の異称。

十月 【孟冬】 陰暦で、冬のはじめにあたるとされる十月のこと。初冬。

十月 【孟明】

十月 【小春】 陰暦十月の別名。この時期は、春のように暖かで、よい天気が続くことから。

十一月 【復月】

十二月 【臘月】 陰暦一二月の異称

十二月 【嘉平】 陰暦十二月に祖先や精霊をまつる臘祭のこと。

「広島独案内」 成立年考

奥本均さんから次の記事が寄せられました、了解を得てここに転載します。

「広島独案内」 成立年についての一考察

奥本 均

「広島独案内」は江戸時代に書かれた広島城下町の地誌である。しかし、現在は原本が失われており、写本が残るのみであるという。高橋先生（昭和五十六年）は十一種類の写本を挙げているが、このほかに県立古文書館で西村晃先生によって発掘された保田家本がある。この「広島独案内」の著者およびその成立年については、これらの写本の中にこれを記載したものがないので不明である。ただし、その成立年代を記述している文献はいくつかあり、筆者の知る範囲で述べると、まず広島市史がある。この第一巻、第四期、第二章、第二節に、「廣嶋獨案内 延享二年の著作」と明記されており、第四巻、第十章にも全く同様の記述がある。次に成立年代を大まかに示したものでは、「角川日本地名大辞典34 広島県」の「参考図書目録」のなかに挙げられている「広島独案内」の成立年代は「天明〓寛政年間頃」とあり、平凡社の「日本歴史地名大系³⁵」「広島県の地名」の「文献解題」のなかで触れられているのは「江戸中

期頃」とある。「史跡広島城跡資料集成第一巻」では成立は「享保頃力」となっている。他方、「広島独案内」の記述内容から成立年代に迫ろうとされたのは高橋先生と中山先生である。中山先生は、絵図に記された人物名、寺院に納められた位牌、東照宮の祭事、日通寺の建立、町名の変更、などの諸観点から「享保十年代後半から元文年間あたりに成立したものと推測できるであろう」とされている。高橋先生は記述内容を詳細に検討した結果、『広島独案内』の著述が成った年は、(矢賀新町が)荒神町と改称された延享二年から吉田町が台屋町と改名された寛延四年までの七年の間にある」と結論されている。

筆者はやはり記述内容から成立年代を探りたいと思っていたところ、記事のなかに町大年寄の屋号が記されていたのでこれに注目した。三種類の写本(保田家本、浄土寺本、出来屋本)で見たところ、いずれも、新町組大年寄 室屋何某支配也、中通組 三原屋何某支配也、白神組 三原屋何某

支配也、中嶋組大年寄 芥川屋支配也、広瀬組大年寄 芥川何某支配也、とあった(ただし保田家本では写本の段階で中嶋組のところが行抜けたらしく、西村先生によると、「……中嶋組、大年寄芥川屋支配也。……」が抜けているのではないかとのことである)。そこで、この五組の大年寄が同時に前記の屋号の者共であった時期を、広島市史の町組別の大年寄の変遷の列記と新修広島市史の「各組歴代大年寄家別表」によって調べてみると、それは享保十九年(1738)三月十五日から延享二年(1745)閏十二月一日までの間ということがわかった。この期間以外に五組の町大年寄が同時にこれらの屋号の者であった期間はない(表1、3を参照)。享保十九年三月十五日というのは、中嶋組の大年寄が両替屋五郎右衛門から芥川(河)屋孫右衛門(兼役)へ代わった年月日である。このときから、新町組大年寄は室屋惣左衛門(室屋三代目、友心)、中通組大年寄は三原屋三郎右衛門(三原屋六代目)、白神組は三原屋三郎右衛門が兼役、中嶋組大年寄は芥川屋孫右衛門(寄継)

が兼役、広瀬組大年寄は芥川屋孫右衛門（寄継）という体制になり、これが延享二年閏十二月一日まで続く。この延享二年には、三組の大年寄が交代しているが、交代月日はすべて同じ閏十二月朔日で、中通組は三原屋三郎右衛門（六代目）から天満屋助右衛門へ代わり、中嶋組では芥河屋孫右衛門から三原屋三郎右衛門へ交代し、広瀬組では芥河屋孫右衛門（寄継）から芥河屋久五兵衛（貞佐）へ交代している。

そこで、この結果を期間を明確に限定した高橋先生の結果と重ねてみると、期間が重なるのは延享二年のみということになる。さらに期間を搾れば、「知新集」には、「もとは矢賀新町といひしを寛保のころこのあたり火災しは／＼ありしかは延享二乙丑年八月願て荒神町とあらたむ」とあるので、この年の八月から閏十二月一日の間ということになる。したがって、「広島独案内」は延享二年八月から閏十二月一日の間に著述されたと結論

づけられる。

この結果は、図らずも広島市史が明確に記述している「延享二年に著述」と合致する。この昭和四十七年に発行された「広島市史」は大正十一年から十四年にかけて広島市役所編纂により刊行されたものを原本として復刻されたものである。想像が許されるならば、その当時は「延享二年に著述」を裏付ける何らかの確かな資料があったのであろう。しかし、支那事変から太平洋戦争、原爆、終戦と時代を経るうちに、それらの資料は散逸あるいは焼失してしまったのであろう。現在それらの資料は市役所に残っていないという。多くの著者が「延享二年に著述」を採らなかったのは、偏に裏付ける資料が見当たらなかったことによるだろう。本考察の結果はこの「延享二年に著述」という、「広島市史」の記述を強く支持するものと考えられる。

表1

西暦	和暦	新町組 大年寄	中通組 大年寄	白神組 大年寄	中島組 大年寄	広瀬組 大年寄
	福嶋時代	松屋太郎右衛門 (久巴)	平田屋惣右衛門 (宗加)	萬屋市左衛門 (宗甫)	鷹金屋嘉右衛門 (了惠)	芥河屋孫右衛門 (常有)
1621	元和7		かゝ屋五郎右衛門		?	常有退職 芥河屋孫右衛門 (寄資)
1624	寛永19				?	
1633	10					
1636	13		三原屋正左衛門 (宗伯)		備中屋助左衛門 退職 備前屋九右衛門 播磨屋助右衛門	
	13					
1643	20					
1644	正保1					
1646	3		三原屋小十郎	萬屋長右衛門	備中屋彦右衛門 (二代目)	寄資退職 芥河屋孫右衛門 (寄隣)
1547	4					
	4					
	5					
1648	慶安1					
	1					
	3	5/7久巴退職 松屋太郎右衛門 (初名、平助)				
1651	4					
1652	承応1					
1655	明暦1					
1657	3		三原屋正左衛門 (宗貞)		備中屋助左衛門 (三代目)	

1658	万治1				
1661	寛文1		萬屋市左衛門	播磨屋助右衛門	
1666	6		三原屋三郎右衛門 (三代目)		
1671	11			隅屋作兵衛	橘屋甚兵衛
1673	延宝1				
1674	2				
1677	5				
1681	天和1	伊豫屋助三郎 正哉 (三代目)			
1683	3	三原屋重右衛門		河替屋五郎右衛門	芥河屋孫右衛門 (義隆)
1687	貞享4	三原屋小十郎			
1688	元禄1				
1692	5	松屋太郎右衛門			
1693	6				
1696	9		三原屋三郎右衛門 (甚七、四代目)		芥河屋平八 (玄祐)
1699	12	伊豫屋吉左衛門 (初名、新助)			
1700	13			河替屋正作	
1701	14			河替屋五郎右衛門	
1704	寶永1				
1711	正徳1	三原屋三郎右衛門 (五代目、兼役)	三原屋三郎右衛門 (清三郎、五代目)		
1714	4			備前屋六右衛門 (初名、吉助)	

表2

西暦	和暦	新町組	大年寄	中通組	大年寄	白神組	大年寄	中島組	大年寄	広瀬組	大年寄
1718	享和3							芥河屋孫右衛門 (寄継)			
1723	享保8	三原屋新三郎 (五代目)〔兼役〕 室屋惣左衛門 (友心) (三代目)		室屋惣左衛門 (三代目) 諸道具引受		芥河屋孫右衛門 〔兼役〕 三原屋三郎右衛門 (六代目) 〔兼役〕		両替屋五郎右衛門	芥河屋孫右衛門 (寄継、又哉)		
1733	18										
	18										
1734	19							芥河屋孫右衛門 (寄継) 〔兼役〕			
1736	元文1										
1741	寛保1										
1744	延享1										
1745	2			天満屋助右衛門				三原屋三郎右衛門 〔兼役〕	芥河屋久五兵衛 (濤賀、貞佐)		
1747	4	室屋喜右衛門 (源内) (四代目)									
1748	寛延1										
1751	寶暦1					三原屋三郎右衛門 (甚七) (七代目)		野上屋徳三郎 (七代目)			
1756	6										
1760	10			天満屋助右衛門							
1763	13										

1764	明和1	室屋喜右衛門 弥八郎(五代目)			
1765	2		天満屋助右衛門 當分支配	芥河屋孫右衛門 (後名、又佐)	野上屋徳三郎
	2		三原屋三郎右衛門 (八代目)		
1766	3		天満屋助右衛門 當分支配		
1769	6			芥河屋孫右衛門 (又佐)	徳三郎退職 野上屋吉三郎
1770	7			三國屋次郎右衛門 (三代目)	芥河屋孫右衛門 (又佐)
1771	8				
1772	安永1	室屋喜右衛門 (五代目)	三國屋次郎右衛門 (三代目) [兼役]		
1777	6	天満屋助右衛門 [婦役]			
1780	9	室屋喜右衛門 (五代目) [兼役] 茶屋次郎右衛門 (昌甫) (六代目)	三原屋三郎右衛門 (九代目)		
	9				
1781	天明1				
1784	4	茶屋次郎右衛門 (秀平) (七代目)			
1789	寛政1	茶屋次郎右衛門 (七代目)			
1790	寛政2			三國屋和七郎 (四代目)	

表3

西暦	和暦	新町組	大年寄	中通組	大年寄	白神組	大年寄	中島組	大年寄	広瀬組	大年寄
1791	寛政3	室屋喜右衛門 (六代目)				三國屋和七郎 (四代目) [兼役] 三原屋三郎右衛門 (十代目)					
1792	4							藤井榮三郎 (三國屋五代目)		茶河屋孫右衛門 (初名、萬次郎)	
1794	6										
1796	8										
1801	享和1										
1804	文化1										
1805	2					三國屋榮次郎 [兼役] 沼田三郎右衛門 (三原屋十一代目)				三國屋榮次郎 (五代目) [兼役]	
1807	4										
1808	5			茶屋次郎右衛門 (作五郎) (八代目)							
1809	6									對馬屋七郎右衛門 (六代目) 忠八郎	
1818	文政1	茶屋次郎右衛門 (八代目) [兼役]									
1825	8	室屋喜右衛門 (室屋七代目)									
1826	9			岩室喜右衛門 (室屋七代目) [兼役]							
1828	11										

〔引用文献〕

広島市史 第一巻 広島市役所編集 昭和四十七年

広島市史 第四巻 広島市役所編集 昭和四十七年

『広島独案内』の成立年について 高橋新一著 「ふる

さとひろしま」第一号 ひろしま郷土史研究会編

昭和五十六年

「広島独案内」について 中山富広著 平成三年度科学

研究費補助金研究成果報告書 「地方社会の自己証

明 ― 広島の学際的研究 ―」 P. 103～136 平成四年

角川日本地名大辞典 34 広島県 角川書店 昭和六十二年

日本歴史地名大系 35 広島県 の地名 平凡社 昭和五十七

年

史跡広島城跡資料集成 第一巻 広島市教育委員会社会

教育部管理課編 平成元年

新修広島市史 第二巻 広島市役所発行 昭和三十三年

新修広島市史 第六巻 (知新集) 広島市役所発行 昭和

三十四年

入御聴

「已下、拙家災厄之一条、これも入御聴候も無益に似たれども、今日迄疎遠之申訳迄二、あらまし認、入貴覧申候」(文政六年(一八一三)篠斎宛、『馬琴書翰選』)

以下、我が家の災厄について、これも「入御聴」でも無益のようですが、今日までご無沙汰をした申し訳に、荒増を認めて御覧に入れます。

「近年郡々御所務難渋之趣相聞候、就中去年之義は、御年貢滞候郡々有之趣等委細達御聴二候」(延享元年(一七四四)『吹寄青枯集』)

近年は郡々の年貢徴収に苦勞していると聞いているが、特に去年などは御年貢の滞った郡々のあることが詳細に「達御聴」している。

二例とも「御聴」という言葉が使われています。

【御聴】おきき。（『古文書用語大辞典』）

聞くことの丁寧な表現。「達御聴」お耳に入り。

「御境杭江疵付候分茂有之趣入御聴」疵のついた境杭もあるとのことがお耳に入り。

そうすると、「達御聴」は「御聴（オキキ）に達し」、「入御聴」は「御聴（オキキ）に入り」と読み、意味は「お耳に入り」となるのでしょうか。

この読み方にはどこか引つ掛かるものがあります。「達する」のは「御耳」に達するのであり、「入れる」のは「御耳」に入れる訳ですから……。

「進藤三折

一、七人扶持を下さる

御医師格に仰せ付けらる

町御奉行支配

右年来医术を心掛け、療治に精出し候段、御聴^{おみみ}に達し候に付き、生涯右の通り仰せ付けらる」（弘化二年（一八四五）『近世風聞・耳の垢』）

ここでは「御聴」に「みみ」のルビを付けていま

す。この文体から考えて、原文のままではなく読下しにして、解りやすく書直してあります。勿論、辞令の原本にルビは無いはずですから、編者が付けたものと思われます。

でも、これで味方ができました。これからは、大声で「御聴^{おみみ}に達し」と読むことにします。

口へ文を吹込み申し候

「五月頃、三原の町にて鍛冶屋新六の所に旅僧一人一宿仕り、その夜新六親の命日にて勤めを相頼み候ところ、この旅僧なにも給べ申さず、その夜座禅仕り、翌朝雨天ゆへ旁差留め、非時を心能く給べ、またまた座禅仕り、翌朝暇乞ひ仕り罷り出で、またまた立ち帰り折角御世話に相成り御礼にまじなひを伝へ申すべしとて、筆一本取り出しまじなひの文字を教へけれども、新六は無筆故、口へ文を吹込み申し候」（宝暦元年（一七五二）『近世風聞・耳の垢』）

宝暦元年（七五〇）五月ころ、三原の町、鍛冶屋新六の所に旅僧一人が一泊した。その夜に、新六は親の命日なのでお勤めを頼むと、この旅僧は何も食わず、その夜は座禅をし、翌朝は雨天なので出発を留めると非時を快く食べて、また座禅をし、翌朝、挨拶をして出立したが、またまた立ち帰り、「折角御世話になったので、その御礼にまじないを教えましょう」と筆を一本取り出してまじないの文字を教えたが、新六は無筆なので、「口へ文を吹込み申し候」。

【吹き込む】（『広辞苑』）

②あらかじめ言いきかせておく。そそのかし教える。「悪知恵をー・む」③レコード・テープ・レコーダーなどに録音する。

若い人は「レコード・テープ・レコーダー」なる言葉は知っていても、今では使うこともないでしょう。「吹き込む」という言葉は知らないかも知れません。まして、「口へ文を吹込み申し候」という面

白い言回しは理解できないかもしれません。

ビクターのマークに使われている旧式の蓄音機は録音もできたそうです。そのときは、文字通り、ラッパに声を「吹き込んだ」のでしょうか。

「口へ文を吹込む」のでは理屈に合いません。実際は、無筆の新六の「耳へ文を吹込」んだ筈です。耳から脳を経由して、口に指示が伝わります。脳を通過すると情報に変化する恐れがある。いつそのこと、「口へ文を吹込む」と安心……と考えたかどうか分りませんが、面白い表現です。

御見送

御医師格の辞令を受けるため広島に出た野坂三益が、御側医師中村元亮（知行百五拾石）宅に挨拶に向いたときのことです。

「中村元亮殿へ一昨日鳥渡罷出、奥へ通り、暫御嘶も有之、罷帰候時、自身玄閑迄御見送被下候故、素より懇意中、殊ニ御老人御見送達て御断り申上

候処、是ハ貴公へニては無之、殿様之事故、達て
辞退被致間敷と被申候」(天保五年(一八三四)「御医
師格被仰付候節手控頭書」)

(御側医師)中村元亮殿宅へ、一昨日ちよつと立
寄り、奥へ通つてしばらく御話をして、さてお
暇するとき、御自身で玄関まで御見送りくださ
るので、懇意な間柄でもあり、殊に御老人なの
で、「御見送りは結構です」と御断りしました。
すると、「貴公のために見送りをしているので
はない。殿様に関係することなので御見送りを
するのです。辞退してはいけません」と言われ
た。

御医師の中で五本の指に入ろうかという、大先輩
の中村元亮が、新入りの野坂三益に殿様の影を見て、
玄関まで見送りに出るといふ話で、殿様の〈凄さ〉
が解ります。

上り銀相場・上り金相場

「歳中官府米価
上り銀相場之覚

一米石ニ付百三拾目

右、從今日相場ニ候条、此旨相心得、組合村々へ不
洩様相触可申者也

申正月廿一日 賀茂郡御役所

割庄屋宛

一同百三拾三匁 四月十六日

.....

一同貳百廿六匁 同(十二月)十六日」(天保七年(一八
三六)十二月「鶴亭日記」)

「年貢を銀子で上納する場合には、上納銀相場が立
てられていた。……寛永十一年十一月には、……
広島町上米相場の三匁上りを基準に決定された」
(『広島県史』)

「上り銀相場」の名前から、一見、銀の相場のように
に誤解しそうですが、『広島県史』の説明の通り、「年
貢を銀子で上納する(上り銀)」ときの計算の基準と
なる米の価格です。「鶴亭日記」は「歳中官府米価

(年間藩の公定米価)と明記し、天保七年一月二十一日〜十二月十六日の年間一〇回の変動を書いています。この年の米価は、一年間で一・七倍を超えて騰貴しているのに驚きます。

【天保の飢饉】(『広辞苑』)

天保四〜七年に起った全国的な飢饉。米価狂騰し、餓死する者多く、幕府の救済した者は前後七十余万人に及び、また、一揆・打ちこわしが諸方に発生して幕藩体制の危機が激化した。

明治になると、「上り金相場」なる記事がみられます。

「二月朔日上り金相場
一米石ニ付金四両貳歩壹朱ト永拾壹文五歩」(明治五年(一八七二)「続波多野家文書」)

明治政府は、銀納を金納に変えたようで、そのため「上り金相場」となっています。金貨は(高額貨幣)のため、壹石当りの米価を金貨だけでは表せません。そこで(少額貨幣)との併用になります。そ

れが「永貫文」です。永楽銭の使用が禁止された後も、金一両を永楽銭一貫文(一〇〇〇文)として、計算単位として使われたそうです。(06/12/22ブログ「永貫文」参照)

上記の米壹石の相場を「永」で計算すると、

$$(4+2/4+1/16 \times 1000 + 11.5 = 4574 \text{文})$$

になります。「両」なら四・五七四両ですが、具体的に、どの様に納めたのでしょうか。

備御苦勞

「奉備御苦勞候義は恐多奉存候得共、」(安政六年(一八五九)『府中市史』)

「備御苦勞」奉り候義は恐れ多く存じ奉り候へども、

この文言の意味は解ります。「お上に対しご苦勞をお掛けして、恐れ多いことではございますが」ですが、漢文表記の「備御苦勞」をどう読めばいいのかわりません。「御苦勞を備え」か「御苦勞に備え」

か、それとも「御苦労備え」か、判断に苦しみます。

「何方え参り不埒筋出来、御上奉備御苦労に候儀仕候哉之程難斗」（享和元年（一八〇一）『新修尾道市史』）

どこかに行つて、不埒なことをしでかし、御上に御苦労に備えることも考えられ、

ここでは「備御苦労に」と、「に」の送りがなが付いてあります。ところが、

「不奉備御苦労ヲ候」（文化六年（一八〇九）『広島県史』）

御苦労を備え奉らず、

こちらは「ヲ」が振つてあります。送りがなでは結論が出ません。

【備える・具える】（『広辞苑』）

①物事に対する必要な準備をととのえる。用意する。続紀二六「兵を―・ふる時に」。「台風に―・える」②物を不足なくそろえておく。設備として持つ。③欠ける所なく身につける。自身ものものとして保持している。④その地位につける。

『広辞苑』の示す答は4つありますが、（迷惑を）「お掛けする」という意味はありません。「備える」ではなく、「供える」と理解すれば、一応意味が通ります。「御上奉備御苦労」は「御上に、御苦労を供える」と考え、「御苦労を備え」と読むのが適当ではないかと思ひます。

懸ケ作・気毒

「宮沖新開拾町余、私共持地御座候儀は御承知之通二御座候、右田畑前々より懸ケ作二仕候処、遠方故町方より通ひ作り二仕候ては勝手二相（二）不申候二付、町方宜敷懸り作人皆相止メ、地ヲ戻し候て、只今にては三軒家辺、西野村之者、其外牛神・さこ・畑・木浜、沼田下村等之ものともへ懸ケ作二仕候処、何も輕キ在百姓、殊二入作之儀二御座候得は次第二土地も悪敷相成り候故、毛上有附等も不宜、尤、懸ケ作年貢米等も兎角不埒御座候て、六、七年以来は毎歳拾四、五石、或は年二寄

り五、六、七

石程つゝ入足し米仕候儀は何共気毒ニ奉存候」（宝曆十一年（一七六一）カ、『三原市史』）

宮沖新開の拾町余の土地は、御存知のとおり私どもの所有地です。この田畑は以前より「懸ケ作」にしておりますが、町方より「通ひ作り」にすれば遠いため勝手が悪く、町方の良い「懸り作人」は皆やめて土地を返し、今では三軒家辺、西野村の者、その外牛神・さこ・畑・木浜、沼田下村等の者どもへ「懸ケ作」にしています。が、いずれも軽い在の百姓で、入作のため次第に土地も悪くなり、収穫も少なくなり、年貢米にも不都合が多く、最近では毎年一四、五石、年に寄っては五、六、七石ずつ私共が年貢米を追加する有様、なんとも「気毒」なことです。

地主の名は川口屋源右衛門と川口屋次郎左衛門。新開のこの土地を町方の者へ「懸ケ作」させると、遠距離のため返却するので困ると歎いています。この文意からすると「懸ケ作」とは小作のようです。

「懸ける」を『広辞苑』で調べると、動詞の意味だけで三六もありました。関係のありそうなものを選ぶと、

【掛ける・懸ける】（『広辞苑』）

⑮頼んで、ゆだねる。託する。「仏様に願を―ける」⑯他者にたよって、その世話を受けさせる。「医者に―ける」（Ⅱ医者の治療を受けさせる）

この言葉は『三原市史』以外では見られません。地域性のある言葉でしょうか。

【「気の毒」】（『広辞苑』）

（心の毒になること）①自分が難儀な目に会って心をいため、苦しむこと。困ること。きまりがわるいこと。当惑。②他人の苦痛・難儀についてともに心配すること。③相手に迷惑をかけて、すまなく思うこと。

②③の意味で「気の毒」という言葉を使いますが、①の自分に対して「気の毒がる」Ⅱ「困る」の意味

もあるとは……。『目の毒 気の毒 河豚の毒』（昭和28年の歌謡曲）の文句を思い出しましたが、「心の毒」と考えれば、解ることでした。

郵便報知

「新聞誌流布被相行候義ハ、第一人智を明力にし、都鄙之状態互ニ致承知、所謂開化之一助とて相成相成御趣意ニ候処、今般東京書肆太田金右衛門願ニ寄りテ、郵便報知と題付、一種之新聞紙刊行相成候趣ニて、市長・里正等他之模範と可相成ものハ一部宛一ヶ年分買入候様相成度旨、駒通寮より頼談有之候間、此旨相心得有志のものハ買求方、少長已下へも可申聞もの也、但、新聞紙ハ毎月五号宛刊行、定価老部ニ付新貨三錢宛、一ヶ年分取買入候向ハ本価式割引之積り之よし」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

新聞が世に広まることは、第一に人智を明らかにし、都士と地方の状態を互いに知ることにな

り、所謂開化の一助になるものである。今般、東京の書肆、太田金右衛門の出願により「郵便報知」と題して新聞紙が発行されるので、市長や村長など他の模範となるべき者は一部ずつ一ヶ年分購読するよう、駒通寮より依頼があつたので、有志の者は買い求め、少長（村長以下）の者にも勧めなさい。新聞ハ毎月五号ずつ発行。定価は一部新貨三錢。一ヶ年分を申込むと二割引となる由。

これは広島県庁が世羅郡の戸長に宛てた文書です。郵便報知新聞の購読を勧めるのは駒通寮、後の郵政省です。この新聞は明治五年（一八七二）、駒通頭前島密が秘書の小西義敬を社主として創刊させもので、駒通寮の組織を通じてニュースを集めたといえます（『世界大百科事典』）。なるほど、駒通寮や県庁が肩入れするはずで

「定価老部ニ付新貨三錢宛」を米価をもとに今の値段に当てはめると、明治五年（一八七二）、米一〇キロが三六錢。現在五キロ入り二〇〇〇円とすると、

一一一一倍です。

3 錢×11111=33333 錢=333 円

現在の新聞代と比べると案外安いのではないかと思います。もつとも、郵送料が追加されますが、駅通算がこれだけ後押しをしているのなら、これも割安だったのかも知れません。

同ク格

「 大御目附

一戸嶋保左衛門殿

一池田直一殿

同ク格

一谷崎平司殿
一伊藤富之進殿

一小堀主馬殿

一梶川万之助殿

一大野木右門殿「(天保五年(二三四)「御医師格被仰付候節手控頭書」)

「同ク格」という珍しい言い方に一瞬戸惑いました。「ク」が送ってなければ、当然「どうかく」と読みますが、ここでは「同じく格」と読むことを要

求しています。

「同」は「前に同じ」の意味ですから、「大御目附格」と書くべきところを「同ク格」と省略して表示したのでしょう。すると「く格」と「く同格」は別物の筈で、調べてみると「大御目附同格」「大御目附格」がありました。そういえば、割庄屋にも「割庄屋同格」とは別に「割庄屋格」という言葉があったような気がします。

「左之通野路山開地ニ付御賞被下候間、此段相心得、組合村々不洩様可申聞者也

未五月 賀茂郡御役所

割庄屋宛

一生涯苗字御免 年寄同格割庄屋内海村三津村庄屋

彦五郎

一生涯苗字御免 年寄同格割庄屋南方村庄屋 雄平

一野路山諸用而已苗字御免 割庄屋同格兼広村庄屋

儀兵衛

一割庄屋同格 割庄屋格三津村庄屋 三右衛門

一割庄屋格 社倉主役野路山開地引受 久右衛門

一割庄屋格 庄屋上席野路山開地引受役 新十郎
一庄屋上席 庄屋角広村社倉十人頭取 勘右衛門

(以下略) 」（天保六年（二三三）「鶴亭日記」）

これは野路山の開拓に尽力した役人の表彰者のリストの一部です。割庄屋だけに注目すると、「割庄屋」「割庄屋同格」「割庄屋格」の三種あり、この順に格式が区別されていると思われます。

三右衛門は、三津村庄屋でありながら「割庄屋格」のランクにあり、今回の表彰で上位の「割庄屋同格」に進んでいます。とはいえ、三津村庄屋を辞めた訳ではなさそうです。

「割庄屋」は役職名ですが、「割庄屋同格」「割庄屋格」は単なる格式で、「割庄屋の格式に準ずる」ものとして、具体的にはせいぜい座順に係するくらいでしょうか。江戸時代は小刻みなランクを必要とした社会だったようです。

取弾

「絞油免許鑑札ハ、毎年四月中其管轄庁ニおゐて相改可申候、万一焼失・盗難等ニて失ひ候義有之候ハ、其段申出候得ハ、事実巨細取弾、鑑札可相渡候、尤新規願受候節之免許料半納上納可申事」
（明治五年（二八七）「続波多野家文書」）

絞油免許の鑑札は、毎年四月中にその管轄庁で改めなさい。もし焼失または盗難などでなくしたと申出たら、事実をいねいに「取弾」で鑑札を渡しなさい。この場合は、新規に鑑札を受ける免許料の半額とする。

文意から考えて、「取弾」が「取りしらべ」なら好都合ですが、果して「弾」を「しらべ」と読んだかどうか。

【弾】（『漢字源』）

《常用音訓》ダン／たま／はず…む／ひ…く《音読み》ダン〔呉〕／タン〔漢〕《訓読み》

ひく／はじく／たま／はずむ（はづむ）《名付け》ただ《意味》①ダンズ「動」ひく。弦をはじい

て音を出す。弦楽器をひく。②「動」はじく。ぴんぴんと指先ではじく。また、はねかえす。

③「動」相手の悪事をはじき出す。相手を強く責めて、あばきたてる。「指弾(指さして責める)」「弾効」④「名」たま。はじきたま。はね飛ばすたま。「国」はずむ(こ)ど。はねかえる。

③の「相手を強く責めて、あばきたてる」ことは、強引な「調べ」に通ずるものがあります。この言葉から「毒気」を抜けば「調べ」として使えそうです。

「此度大炮八十斤度御鑄造相成、追々支度等相調候処、地銅今五百貫目不足之旨申出有之差向御買入等隙取候二付、両町・地方共銘々当時不用之品有之候ハ、精々致心配成丈差出候様有之度、勿論時之相場ヲ以御買上ニ相成候間、十分取弾勿々差出候様御達可被成候事」(文久三年(一八六三)『三原市史』)

この度、(80ポンド)大炮を御鑄造になるので、その準備を進めているが、地銅が五百貫目不足とのこと。今買入れると時間がかかるので、三

原の町・地方で不用の品でもあればなるだけ差し出して欲しい。勿論時価で買上げるので、よく「取弾」、早く差出すように指示しなさい。

この資料の

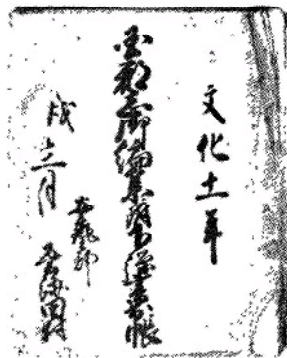
「取弾」は、単なる「取調べ」を意味します。

『海田町史』には、奥海田村の「国郡志

御編集二附下弾書出帳」とあります。これは、『芸藩通志』編集のために各町村から提出させた「下しらべ書出帳」です。「しらべ」の代りに「弾」と書いています。(写真は『海田町史』から)

余談ですが、「斤度」を「ポンド」と読みました。

「ポンド」を漢字で書くと「听」ですが、略して「斤」とし、「〜ド」の気持で「度」を付けると、「斤度」の出来上り。重量80ポンドの砲弾を打ち出す大炮だ



そうです。

かん・欠り

「右巳冬改帳高

合五千七百廿三人

辰年冬改帳高

六千七十六人

差引三百四十四人 かん

但シ、去癸巳春夏疫病流行病死者多ク有之、旁以

如此人数欠り候様ニ被存候」(安永三年(二七七四)『三

原市史』)

これは「三原町惣総人数左之通」と題する文書の一部です。

安永二年(二七七三)巳年冬の人口調査では、三原町(西町・東町・西町地方分・茅町・東町地方分・寺院)総人数は五七二三人。その前年、安永元年(二七七二)辰年冬の人口六〇六七人と比較すると、「差引三百四十四人 かん」になります。それは去る安永

二年の春夏に疫病が流行して病死者が多く、そのためこのように人数が「欠り」となりました。

『広島県史』年表は、安永二年(二七七三)に、「この春・夏、広島近郊疫病流行、死者多数」と書いていますが、『武江年表』でも、「三月末頃より疫病行れ人多く死す(江戸中にて三月より五月まで凡十九万人、疫死といふ。大方、中人以下なり)」と記録しています。「差引三百四十四人 かん」の記述中の「かん」は、漢字で書くと「欠」で、意味は「減少」です。

【欠】かん。(『広辞苑』)

(字音ケンの転)目方・分量などが減すること。
目減り。めり。日葡「カンガタッタ」

【欠米】かんまい。(『広辞苑』)

①米の目減り分。日葡「カンマイガタツ」

次に問題になるのは「人数欠り候様」の「欠り」の読みです。「欠」を「ケツ」として「ケツリ」?(余談ですが、「蹴る」ことを広島の方言で「ケツる」と言います)。「カケ」とみて「カケリ」?。どうも納得で

きません。

「欠り」を「へり(減り)」と読んではいけませんか。

種籾おろし

「近年追々御蔵入村々之内、黒せうてん・鼠北国保と申類歟、悪田不知ト申稲毛、近来植付候方角も有之、既ニ去々年御登せ米之内ニも相見へ、其段は先達ても御代官所へも御勘定所より申来り、右鉢之籾種植付不申様ニ相触聞せ候処、又候哉、去秋も右類之悪米御蔵払ニも出候て、……当種籾無間も種かし之頃相ニ相成候付、村々百姓人別所持之種籾、庄屋・与頭立会急度相しらへ、右鉢之種籾当年決て蒔付不申様仕せ可申候、……若当年ニて悪田不知、借錢なし杯と申様成種籾おろし、御年貢払之節刺米ニ出候時は、其米主は不及申、其村役人共も越度申付候」(明和五年(一七六八)『三原市史』)

近年、「黒せうてん・鼠北国」や「悪田不知」という品種の稲を植付ている村々があり、年貢米として納入するので、去々年には大坂で販売する御登せ米のなかに見つかったと、御勘定所より御代官所へ苦情が持込まれた。そこで、このような品種は植えないよう指示したが、又ぞろ去秋もこのような悪米が御蔵払に出ていた。……今年も間もなく種かしの頃合になるが、百姓が各自所持している種籾を村役人が立会つて調べ、今年は絶対に蒔付させないようにしない。……もし、「悪田知らず・借錢なし」などの種籾を苗代に蒔き、御年貢払のとき「刺米」に出るようなことがあれば、米主は勿論役人共も処罰する。

藩は、年貢米を大坂の米市場で売るとき腹白米などの悪米が混じることを警戒していますが、稲の品種にも気を遣っています。この資料には「黒せうてん・鼠北国・悪田不知・借錢なし」の品種名が見られます。「悪田不知」は「悪田でもそれなりの収穫

が見込まれる」という意味でしょうか。「借錢なし」は百姓の願いをそのままネーミングしたものでしょう。

「左之稲ハ考之趣申値、左之品ハ当年より堅植付不
申様申談相示し申候

一別所美作 鼠北国 岩黒 黒西国 新五 与三
出雲道仙 せうでん 雲切 赤仁三 作寄せ 勘
根 あみ打 伴六 権三郎」(寛政十年(二七九)『三
原市史』)

これは、種下ししてはならない稲の品種のリスト
です。

【種卸し・種下ろし】(『広辞苑』)

たねまき。特に、八十八夜の前後に、稲の種籾
を苗代にまくこと。

法寺・平僧寺

「一同(寺)壺ヶ寺 桁九間梁行七間 禅宗万年山松

寿寺 住持祥雲 法寺也

……………

一同壺ヶ寺 桁四間梁行弐間 禅宗 寿雲庵 当時
無住 本尊薬師如来

本寺は当村松寿寺、無旦平僧寺也、持高六斗壺升
四合、寺前畠七畝拾八歩有、慶長六年福島公之御
時代、御地詰寺屋敷迄高付也、御本帳ニ時雲庵と
有、其後寛文四辰年御竿入ニて、寺屋鋪御有メ相
成、御本帖ニ寿雲庵とあり、一説ニ似雲といへる
哥人之むすひ置たる草葦なりしを、禅門之僧来て
松寿寺に属シ、寺ニなりし由ニ承候……」(文化
十一年(一八一四)『三原市史』)

これは「国郡志編集御用諸品書出」から東野村の
寺院から抜書きしたものです。

松寿寺は禅宗で「法寺」であり、寿雲庵は禅宗
で「無旦平僧寺」であると記されています。寿
雲庵は、現在無住で、本寺は当村の松寿寺です。

「無旦」で「平僧寺」です。持高は六斗壺升四
合、寺前に畠七畝拾八歩があります。慶長六年

(二六〇二)、福島公の時代に地詰があり、寺屋敷にまで高を付けられました。御本帳(検地帳)には「時雲庵」と書いてあります。その後、寛文四年(二六四)竿入れがあり、寺屋敷は除外されました。御本帖に「寿雲庵」とあります。一説に似雲といへる歌人が結んだ草庵であつたのを、禅宗の僧が来て松寿寺の下寺にしたと聞いていますが、……

「無旦」は旦那(檀家)のない寺のことでしょうが、「法寺」「平僧寺」とは聞いたことがあります。『世界大百科事典』に答を見つけました。

【寺格】(『世界大百科事典』)

寺院に等級を設けて格式を区別すること。……近世に各宗派教団が確立すると、この傾向は著しくなり、多様な寺格が制定された。曹洞宗では別格寺院を常恒会、片法幢会、随意会に、法地(普通寺院)を一〇四に分け、その下に平僧地があつた。真宗では院家、内陣、余間、飛檐、平僧に区分したのに始まり、きわめて複雑な寺

格が定められ、……(大桑 斉)

御借米

「御上御勝手向御難渋二付、去ル辰ノ年御家中御借米被仰付、末々之御家人迄御借米有之(有之)分は、此度五歩通り御戻米被仰付候、此儀は一統困窮二付御恵ミ之思召、格別を以被仰付候、全御儉約筋御宥メ被遊候筋ニて曾て無之候、此筋心得違も可有之候間、末々迄全只今迄之心得を以相守候様ニ寄々可申聞候

右之段為心得申聞候、已上

九月十二日

五組へ

(安永四年(二七七五)「堀川町覚書」)

藩の財政が厳しい状態にあるため、去る辰年(安永元年(二七七二)か)から御家中より「御借米」を仰せ付けられ、末々の御家人まで「御借米」があるが、この度、五歩通り(禄高の五%)の「御戻米」となる。これは一統が困窮しているので、

御恵みの思召し、特別な処置でよるもので、御
俵約筋を緩和する訳ではないので、勘違いのな
いよう、末々まで今までどおりの心得を守るよ
うに、機会がある毎に申し聞かせなさい。以上
の事柄を、町人にも心得のため知らせなさい。
「御借米」「御戻米」という言葉が使われています。
文意からみて「御借米」とは、藩が「御家中」（家
臣）から借金ならぬ「借米」をすることのようです。
ところが、

【御借米】おかりまい。（『古文書用語大辞典』）

知行所をもたない旗本・御家人に年三回支給さ
れた切米のうち、春・夏に与えられたものをい
う。請取証文の標題に「請取申春御借米之事」
などがある。

この説明は、どうしたことでしょうか、この資料
には全く当てはまりません。

「御借米」は「御減石」「上米」^{あげまい}ともいい、その程
度により「半知」「五歩御借り」があり、その程度
を緩めることを「御戻米」「御甘米」といいます。（

07/04/04ブログ『御甘米と御戻米』参照）

次の解説をもとに、具体的に検討します。

「百石以上領受の者を知行と称し、采地を与へ、所
得五ツ物成とす、五ツ物成とは例せば百石を領す
る者は現米五十石を得、然れども十分の二は軍役
として官に納めおき軍時の補給等に備ふるを定法
とせり、故に四ツ物成即ち四十石を以て上限とす、
官時に禄中より納むるを御減石」^{ごげんこく}又は御借米^{おかりまい}と云
ふ、此給与法に差等あり、同く百石を領する者を
以て例せんに、其所得三ツ物成五歩なれば三十五
石、三ツ物成なれば三十石、而して二十五石を下
限とす、之を五ツ物成即ち五十石に対し半知と唱
ふ」（小鷹狩元凱『芸藩三十二年録』）

「此度御戻米被成下候儀、全御撫育之思召ニ候得は
……………」

一当酉年より、知行四つ物成被下候事

一同御切米渡り方、此度御直し被下、高拾石二付正
米八石五斗被下候事

一同御扶持方も式拾人扶持已上、拾人扶持二付九人

半扶持被下候事

但、拾九人扶持已下ハ無引被下候事

「

(安永六年(二七七)「堀川町覚書」)

「此度御戻米被成下候」(今年、安永六年から「御戻米」になるの)とあるので、それ以前の「御借米」は多かったと思われますが、次のように緩めています。

知行取りは五ツ物成(二〇〇石を領する者は現米五〇石を得る)が原則であるが、「当酉年より、知行四ツ物成」(二〇〇石を領する者は現米四〇石を得る)とする。つまり一〇石(二〇%)の「御借米」である。

高拾石の切米取りは、当然一〇石を支給されるのが原則であるが、「正米八石五斗」(八・五石)を渡す。一・五石(二五%)の「御借米」である。

御扶持を受ける者で「式拾人扶持已上」ならば、「拾人扶持ニ付九人半扶持」を支給する。五%の「御借米」である。「拾九人扶持已下」は「御

借米」はなしとする。

安い給料の武士から多量の「御借米」をすると、生活できなくなるので、このような《累進課税》の原則を設けているようです。

参宮の犬

「木札写し

口上

此犬、参宮之望と相見、長州家中より罷出候处、周防久米市にて一子誕生仕、夫故留置候处、神託有之候に付無抛送り出し申候、宿々御氣を被附、一宿宛御貸し可被下候、敷銭沢山に相成候節は、両替被成、首に御附送り可被下候、此段奉頼上候、以上、

但、首に鉄印御犬と御座候

文化十酉十二月 防州花岡駅「

(文化十年(1813)『廣島市史』)

文化十年(二八三)十二月八日、この日、伊勢参宮

の大母子二頭が広島を通過しました。長州藩士某の飼犬一頭が伊勢参宮のため首に鉄印「御犬」の標と銀錢若干とを着けて単身出発、防州久米市で一子を分娩しました。里人は留めて育てていましたが、神託があり、放して東上させました。防州花岡駅の役人は、木札にその趣旨を記し、各駅では注意愛撫し一宿を与え、宿料は頭に懸けた銀錢を両替して取り、剩りは首につけて出発させて欲しいとの文を記し、これを母犬の首に付けて送出了しました。まさお君の大先輩、元祖「旅犬」の話です。その後どうなったのでしょうか。

豎紙

「雛形 諸口豎紙」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

これは広島県庁が提出を求めた書類の「雛形」（書式）の解説で、用紙についての規定です。

【諸口】もろくち。（『広辞苑』）

③紙の一種。障子紙に用いるもの。

【豎紙・立紙】たてがみ。（『広辞苑』）

文書の料紙の正式の用法で、全紙を横長に用いるもの。略式の折紙・切紙に対していう。

これらの項目を担当した編集者は、余程機嫌が悪かったのか、無愛想な説明で、読んでもよく解りません。

どんな紙か知りたくて引いたのに、「諸口は紙の一種である」とは……。また、「障子紙」に書いて提出したのか？とも思います。

次の解答、「豎紙とは横長の紙である」とは、まるで〈問答〉のようです。この答は、調べてみるとその通りですが、なぜ「豎」なのかの説明が抜けていては説明になりません。

和紙を漉くとき、漉桁の手前から紙料を汲み込み、漉桁を前後に揺り動かして（縦揺り）漉き上げます。そのため紙の繊維は「豎」に並びます。漉桁は横長ですから、出来る紙の全紙は横長ですが……。

そういうば、「横紙破り」という言葉を思い出し

ました。

「諸口堅紙」とは、諸口という紙を、折ったり切ったりしないで全紙のまま、横長にして使いなさいという指示のようです。（実は、まだよく解っていないが）。

馬責

「近來町内馬持之面々数多有之趣にて丁内にて馬責仕候様ニ相見へ申候、町方にてハ商方家業之障りニも相成、老人子共往来之難儀ニも相成、第一町人不相成之事故、其品ニより作法不宜儀共も有之候得は、旁以自今以後町方にて馬責仕候儀決て指留メ候間、其段承知可有之候、勿論替具等置候儀は仕間敷候、若又馬飼置候て商売之助ケニも相成候筋も有之馬責等仕候事ニ候ハ、野相追出し候て耕作其外諸事障りニ不相成候方角にて馬責仕候儀は勝手次第第二候得共、是亦作法宜敷仕別て往来念入可被申候事」（宝暦四年（一七五四）「竹原下市覚書」

『広島県史』）

近頃、町内でも馬持の連中が多くなり、町内で「馬責」をしているが、町方では商人の家業の妨げにもなり、老人子供の通行も難儀をする。第一、町人にふさわしくなく、作法の悪いこともあるので、今後町方で「馬責」をすることは禁止する。勿論「替具」等置いてはいけない。もし商売上馬飼が必要で「馬責」をするのなら、野原に追い出し、耕作などの障りにならない場所です。「馬責」をするのは勝手であるが、作法宜しく往来の人に気配りしなさい。

これは竹原の町内に出された触書です。

【馬責】うまぜめ。（『日本国語大辞典』）

馬を訓練すること。馬を乗りならすこと。また、その人。責馬。

「責める」とは、借りた金を返さない人には「催促する」という意味ですが、相手が馬なら、優しく「訓練する」という意味になるようです。町人が町中で

馬の訓練をしていたとは、江戸時代の〈暴走族〉で
しょうか。「替具」は分りません。

凡而

「近年諸所新浜多致出来、塩相場追々下直ニ相成、
其上出来塩多有之候故、塩之払口少ク銀子廻り合
不宜、差間及難渋居候処、猶又近来諸所塩浜有之
場所ハ入津被差留候方角も有之、益々払口之障り
ニ相成候由、然処、当所之儀ハ近来他所塩構も無
之ニ付、所々夜欠塩多積来、下直ニ売払候故、凡
而塩相場之障りニ相成、当所塩はけ不申よし」(明
和八年(一七七二)『三原市史』)

近年は方々に新しい塩田がたくさん出来たの
で、塩の相場も次第に下直になり、その上塩の
生産量が多く、販路は少なく、銀子の廻りが悪
いので困っている。その上、塩田のある地域で
は塩の移入を禁止している所もあり、ますます
販路が狭くなっている。ところが、当地では、

他産地の塩の移入を規制してないので、方々か
ら夜間に塩を持ち込み下直に売り払う。これら「凡
而」塩相場の障りになり、当所の塩が捌けない
とのことである。

「凡而事を挙候ニハ孫子之所謂五事七計之如、道義
之曲直ハ勿論、前後之利害始終之得失迄熟考せざ
れハ、不成ハ指見候事。」(元治年間『斬奸状』)

「凡而」事を挙げるには、孫子の所謂、五事七
計のように、道義の曲直は勿論、前後の利害、
始終の得失まで熟考しなければ、成功しないの
は当然である。

「凡而」の使つてある2つの例文を引用しました。
どういう意味で、どう読めばいいのでしょうか。

【凡】(『漢字源』)

《常用音訓》ハン／ボン 《音読み》 ボン(ボ
ム)／ハン(ハム) 《訓読み》 およそ 《意味》
ボンナリ「形」あたりまえのさま。一般的であ
る。「形」全体をおおっているさま。おしなべ

るさま。(副) およそ。全体をおしなべて。総じて。(副) およそ。全体(前後)を通じて。全部で。(国) およそ。だいたい。

「而」は「て」ですから、「凡」の《意味》から考えて、「全て」か「総じて・おしなべて」だろうと思います。「全て」と言えば例外を許さないようなので、「総じて」と読めるのではないかと思います。

「所々夜欠塩多積来」の「夜欠」が解りません。「夜駆」ではないかとの御意見を頂きました。

正五九

〔寛政三年九月三日、従来死刑の執行は正五九月には停止せし所なれとも、以後は停止に及はざる事と規定せらる〕(『芸藩志拾遺』)

従来、死刑の執行は「正五九」月には停止していたが、寛政三年(一七九〇)の改定により、停止しなくてよいことになった。

【正五九】しょうごく。(『広辞苑』)

旧暦の正月と五月と九月との称。忌むべき月として結婚などを禁じ、災厄をはらうために神仏に参詣した。

【三齋月】(『広辞苑』)

〔仏〕在家信者が八齋戒を守り、悪を慎み善を修すべき三ヵ月、すなわち正・五・九の月の各月の前半一五日。三長齋。三長齋月。

「御寺々御参詣并御代参之事

.....

四月七日 伝正院様 年頭・盆・正五九月・御祥当月 明星院

御参詣無之時は御代参御年寄」(安永四年(一七七五)「堀川町覚書」)

伝正院(浅野長政、命日四月七日)の菩提所、明星院に、年頭・盆・正五九月・祥月に藩主が参詣する。または御年寄の代参がある。

〔正月・五月・九月には、冥界にある人間の善悪の

行為を映し出す「業鏡」が私たちの住んでいるこの南閭浮堤のありさまを照らし出して、そこに行われている良い事と悪い事の全ての行為をこの「業鏡」に映し出してみるのは。したがって、この「業鏡」が私たちの方に向けられる正月・五月・九月には少しでも悪い事はしないように、またどんなに小さい事でも良い行いをして、「あの世(冥界)」に行った時に苦しまなくてすむようにしようというわけです。」(HP「仏事Q&A 41」http://www.good-stone.com/)

一・五・九月は、中に三ヶ月を置いて設定してあります。定期的に「業鏡」が向けられるようです。

助足

「御年貢米御蔵払之節御刺米之儀、下方御憐愍心之御趣意ニ依て去酉年分よりハ御下被為遣候ニ付、村々納米石数ニ応、人別へ融通仕候様ニ割戻候、尤、俵毎へ割当りも六ヶ敷儀ニ付、得斗儀論仕、

免割助足と申候敷、いつれ村々便宜、下方疑念無之様取計ひ方ハ有之間敷哉、得斗熟談仕候て申上候ハ、御判談之上可被為仰付、尤、是迄之分ハ郡中不時為御用当テ、其儘御代官所ニ被為差置候旨、委細御紙上之趣難有仕合奉畏候、依之村々役人共一同申談試ミ候所、乍恐被為仰出候通、纔之物を俵毎へ割当り候儀ハ却て業前等不益ニも相当り、人別手元ニても多足ニ相成候程之儀ニも御座有間敷候ニ付、唯今迄之通於御蔵所ニ御払之度毎御見届ケ被為遣、員数相約メ、御蔵納諸欠差引ニ仕候ハ、人別へ割戻し同様ニ相当り候ニ付、百姓共へハ帳面を以具申聞候ハ、人別へ疑惑之儀も御座有間敷」(寛政二年(二七九)『三原市史』)

御年貢米御蔵払のときの御刺米(品質検査のため俵から抜き取った少量の米)について、百姓を憐れみ、去年分から納米石数に応じて各人へ割り戻すが、俵毎へ割るのも困難なので、割庄屋で充分検討し、免割の「助足」というか、どちらにしる村々の便利が良く、下方が疑念を起さな

い方法ないだろうかと諮問されましたので、熟談のうえ申し上げます。是までの分は郡中不時の御用に充当するため、そのまま御代官所で保管すること、有難いことでございます。村々役人共とも相談しましたが、言われるとおりわずかの物を俵毎へ割り当てるのはかえって面倒なだけで、一人一人に渡しても「助足」になるほどのことでもないのです、今まで通り御蔵所で御払の毎に見届けて数量を約め、御蔵納諸欠のあるときこれを充当すれば、人別へ割戻したのと同じこと、百姓共へハ帳面で説明すれば疑惑もないでしょう。

年貢納入時の刺米を藩が農民に返却するという、珍しい文書で、その方法について割庄屋の意見を求めています。文中に「助足」という言葉が使っています。何でもない言葉ですが、辞書を探しても見つかりません。

「助」は「助け」、「足」は「足す」だと思います。文意から考えても、そのどちらかでしょう。年貢米

を納めたとき、刺米分が返ってくるのは、所得税の僅かな還付金があるのと同じこと。嬉しいことです。が、生活の「足し」にはなっても「助け」になるほどではないでしょう。「多足」という言葉もあるし、「助足」は「足し」のことでしょう。

【多足】 たそく。（『広辞苑』）

② たしまえ。 おぎない。 補足。

庭はへ

「腹白米之義は勿論、右等之米ニ似寄候ても御蔵所へ差出候得は、御年貢惣皆済迄ハ御蔵所へ留メ取置候様子ニ相聞候、左候得は何角之失却多ク第一其方共役前も不相濟事ニ候条、此旨厚相心得村々收納所ニて遂吟味候上津出し可仕候、且又是迄御蔵前庭はへ之節他村又ハ他郡之米扨相交り、俵形等見苦も有之趣ニて、御蔵前刺米之節右等之義相知レ候方角有之」（文政元年（一八一八）『広島県史』）

腹白米などの悪米を御蔵所へ差出せば、御年貢が全て皆済となるまでそこに留め置かれるそうであるが、そうなると色々と失費が多く、お前たち村役人の仕事ぶりも問題となるので、村々の収納所で充分吟味して津出し（出荷）をしなさい。また御蔵前で「庭はへ」のとき、他村他郡の米と比べると俵形等が不細工で、刺米のときに知れてしまうこともある。

「庭はへ」という難しい言葉に当りました。例文を見ただけでは見当も付きません。解説が欲しいところです。

「租米は検査を受けるために蔵所の庭場に配列されるが、これを「はへ」「拼」ないし「配」の字を当てると称した」（勝矢倫生『広島藩地方書の研究』）

つまり、年貢米を収納する御蔵所の庭に米俵を配列することです。まず、蔵役人により俵形（俵装）が調べられ、不合格なら仕替させられる（「俵はへまき」）。次いで、米質検査のため刺が入れられ、最

後に入実の量の検査（「欠米はへまき」）をします。

はえ【捶】（『日本国語大辞典』）

（動詞「はえる（捶）」の連用形の名詞化）木材や米俵などを積み上げた山。またそれを数えるのにいう。「方言」俵などを積んだ列を数える語。

山口県豊浦郡 熊本県南関

はえる【捶】（『日本国語大辞典』）

（動詞「はえる（延）」からか）俵や木材を形をととのえて積み上げる。捶積みにする。

【捶】はえる。（『和漢三才図会』）

凡そ材木や米俵を積重ねるのを捶という。手につくり竝につくる。俗に付会^{ツツケ}で用いているのである。

上り田

「二銀八拾目

豊田郡小泉・末広・惣定村

右は永々照統、御法則之通三度雨乞仕候得共一向潤無御座、最早此節ニてハ雨池ハ悉ク落シ切、上り田之分ハ三ヶ村共水一向無御座大造早損仕候趣、下方一統十方暮居申候ニ付、追々雨乞仕候様頻ニ願出申候ニ付、三ヶ村申談シ小泉村龍泉寺へ相頼雨乞御祈禱相調申度奉存候間、入用方右員数之通御願奉申上候、何卒御免許被為成遣候様奉願上候」(寛政十一年(一七九九)『三原市史』)

日照りが続くため、規則通り三度も雨乞をしましたが一向に降りそうにありません。最近では雨池(溜池)も空になり、「上り田」は三ヶ村とも水がなく大変な早損になりそうで、農民はみな十方暮(とほうにくれ)、雨乞を頻りに願ひ出ますので、三ヶ村が相談し小泉村龍泉寺に頼み、雨乞祈禱をしたいと思います。その費用は銀八拾目です。

雨乞いは三度までという規定があるようですが、効目がないと、更にもう一度の祈禱を郡役所に求めています。(広島藩で最後にお問い合わせは厳島神社

のようです)。

「上り田地」については、「浮地」(07/08/03ブログ)で取上げました。ここで言う「上り田」は、それとは違い、旱害を受けやすい水田(畑に近い)のようです。

「阿賀^{あがた}多は上り田にて元は畠のことである。畠は一に陸田^{あがりた}ともいう。抑も上古の田というは田と畠を続べたる名称でその中で水のつかぬものを畠とも上田ともいったので水田よりは高く上りたるのである。上代には山の畠を山阿賀^{やまあがた}多といい」(名田富太郎『山県郡史の研究』)

「山県郡」の「山県」の語源は、「山阿賀^{やまあがた}多」(山畠)とのこと。陸田⇨畠⇨上り田は「水田よりは高く上りたる」耕地(畠)と説明してあります。

頭書

「文化四丁卯年二月質屋定法御尋之書附控
質屋中取引之定法承置度ニ付頭書致、左二記

一流質は何ヶ月限候哉、此節置候質はいつ比流シニ相成候哉、尤、札へ切月は如何書入候哉之事

一置候月ニ請候時は、歩合一ヶ月か二ヶ月か三ヶ月分か、是も銀高二寄り歩合違候哉、又ハ同様歟、銀高二寄違候時は何匁迄何ヶ月分取、何拾目より何ヶ月合取候事哉

(以下略) (文化四年(二八〇七)『三原市史』)

文化四年(二八〇七)二月、質屋定法について御尋の書附控

質屋連中の取引の定法を承りたいので「頭書」にして、以下に記す。

一何ヶ月経過すると質物を流すのか。今、質に置くといつごろ流しになるのか。質札へ切月はどのように書入れるのか。

一質に置いたその月に請け戻した場合、利子は一ヶ月か二ヶ月か三ヶ月分か。金額により利子は違うのか、それとも同じか。違うとすれば、何匁まで何ヶ月分を取り、何拾目より何ヶ月取るのか。

面白い内容の文書ですが、その検討は後回しにして、今回は「頭書」なる言葉について考えます。

【頭書】とうしよ。(『広辞苑』)

①本文の上欄に書き加えること。また、そのもの。釐頭（こうとう）。②本文の初めに書いたこと。「ーの通り」

【頭書】かしらがき。(『広辞苑』)

①書物の本文の上欄に解釈などを書き添えること。また、その書いた文句。標注。頭注。②正本の台詞の上に一つ書きをして、肩にその台詞を述べる俳優の名を書くこと。

引用の文書の原本ではどのように書かれていたのか分りませんが、内容は本文そのものであり、「頭注」とは考えられません。したがって、辞書の説明はここでは全く当てはまりません。

この文書を「頭書致し、左に記す」と書いています。すると、この文書の書方が「頭書」と思われませんが、特に変わったところはなく、質問事項を箇条書

にしてあるだけです。ひよつとすると、簡条書の文書のことを「頭書」というのかも知れません。

【一つ書】ひとつがき。(『広辞苑』)

簡条を分けて書く文書で、各項目ごとに「一(ひとつ)、何々」として書き分けること。また、その文書。書立。^{かきたて}一打。^{いちうち}

「一筆啓上仕候、……然ハ御別紙写之通御内々御尋御座候間、委細頭書ニして落洩無御座候様御知セ可被下候、……已上

十二月六日 割庄屋 六郎右衛門

野坂三益様

……

頭書

一殿様先年東郡御泊鷹野被為在候節ハ数度御昼御膳所御小休等被為仰付、……

一右京様御泊御猟之砌度々御昼御膳所御小休等被為仰付候

……

十二月八日

野坂三益

割庄屋 六郎右衛門様」(文政十二年(一八二九)「鶴亭日記」)

賀茂郡割庄屋六郎右衛門が、「御内々に別紙記載の事について御尋したので、詳しく「頭書」にして洩れの無いようお知らせ下さい」と依頼し、野坂三益は「頭書」と題して一〇項目にわたる簡条書の返書を送っています。

これで決り、「頭書」は「一つ書」のことでしょう。

ついでに、以前「口演書」(ブログ 2006/09/02)についての記事で、口演＝口述なのに、なぜ「書」が付くのかと書きましたが、解決しました。「レジュメ」でした。

【口演】(『古文書用語大辞典』)

口頭で述べること。それを文書にしたもの。口述。

取替一札

「
.....
為取替申一札之事

右ヶ条之通御同意ニ陸鋪永続可致様執計可申候、
日毎之附合ニ御座候間、自然心落不申儀御座候ハ
、穩ニ咄合ニおよひ、双方共讓合規定之通聊相
背申間敷候、万一我儘之申出候節は、御立入之御
衆中へ申出テ、御差図ヲ請、御意相背申間敷、為
後日取替一札依て如件

安政三丙辰歳十二月 上山屋宇兵衛

竹満屋嘉助殿（安政三年（一八五〇）『府中市史』）
これは、上山屋宇兵衛と竹満屋嘉助が共同で油絞
工場を入手し、水車などは日替りで交互に使うとい
う、何ともややこしい取決めをした文書の末尾部分
です。

以上のように同意して、仲良く永続するように
努めます。毎日の付き合いのことですから、得心
できないことがあれば穏やかに話合い、譲り合
い、この取決めに違反しません。もし万一我儘
な主張をするときは、御立入の人々に申し出て、

御差図の通りにします。「為後日取替一札依而
如件」

「為後日取替一札依而如件」は（決り文句）で、「将
来のトラブルに備えて、この取替証文を作成しまし
た」の意味です。

『広辞苑』には「取替」が頭に付く言葉が四つ（「取
替え」「取替銀」「取替原価」「取替えっこ」）載せてあ
ります。いずれも「とりかえ」と読んでいます。

【取替え】とりかえ。（『広辞苑』）

①とりかえること。交換。②かわり。かけがえ。
ひかえ。

ところが、「為」があるので、「為取替一札之事」
は、「取り替わし」または「取り替わせ」になるよ
うです。

【取り交す】とりかわす。（『広辞苑』）

やりとりする。交換する。

この証文の場合は、正本を宇兵衛が預り、写しを
嘉助が保管しています。これが「為取替」の中身で

す。

為替

「為替と云ふ行あり。為替、かわせと訓ず。この行は、京坂より江戸に金銀を贈〔送〕らんと欲する者あり、また江戸より取り収めんと欲する者あり。贈らんと欲する者は、金銀に手形を副へて得意の両替屋に与ふ。取らんと欲する者もまた、手形を両替に与して金銀と換へ得るなり。この二手形を江戸の両替屋に贈る。すなはち金銀を出すべき方より手形と換へてこれを取り、復江戸にて取る方へこの金銀を与へ、手形と換ふるなり。すなはち一行四戸の出納を便し、かつて飛脚の費なく、また京坂にて取るべき者即日これを得て、途中金銀の用に日を費やさず。しかれども、これ全く泰平の余沢にあらざれば、行ひがたき事なり」（喜田川守貞『近世風俗志』）

為替は「かわせ」と読む。これは、京坂より江

戸に金銀を送金したい者があり、一方では江戸から受取りたい者があるとすると、送金する者は、金銀に手形を添えて得意の両替屋に持参する。受取りたい者もまた、手形を両替屋に持参して金銀と換えることができる。この二つ手形が江戸の両替屋に運ばれる。つまり金銀を出す方から手形と交換で金銀を受取り、また江戸では受取方へ手形と交換に金銀を与える。即ち一行で四戸の出納をに關わる。おかげで飛脚の費用もなく、また京坂で受取る者はその日の内に金銀を入手できる。世が泰平なればこそできることである。

生れて初めて「為替」という文字を見たとき、何と読むのか見当も付かず、「かわせ」と教わると、若い人流に言う「ソーナンド」と妙に感心してしまい、それ以上の追求がストップしていました。

「為」について調べます。

「不容易謀計ヲ企、愚昧之門弟等ヲ感服為致、米価高直諸民難渋之折を窺ひ」（天保五年（一八三四）「鶴

亭日記」)

容易ならざる謀計を企て、愚昧の門弟等を「感服為致」、米価が高直で諸民が難渋している時期をねらい……

これは大塩の乱に関する文書の一部です。「感服為致」は「感服致させ」ですから、これと同じ読み方をすれば、「為替」は「替させ」「替せ」、または「替」となります。

【為替】(『漢字源』)

カワセ〔国〕①とりかわすこと。交換。②現金をおくるかわりに、手形・小切手・証書などで金銭の受け渡

難しそうな「為替」という言葉も、その出発点に立帰ると、「交換」という単純な意味になりました。前回の記事中の「為取替」と同じ意味になっています。

越米

「其郡ニおゐてハ従来米不自由之郡柄故、他郡越米取計候様之ものも有之間敷候へ共、自然此場合右様之者有之候ては決して不相済、此儀ニ付ては去々酉年春申附候趣有之候得共、尚又此度別紙之趣を以三上郡申付置候条、此旨相心得不締筋無之様兼て相心得可申者也

亥三月 奴可三上郡御役所」(文久三年(一八六三)『広島県史』)

その郡(三上郡)は従来米の不自由な郡なので「他郡越米」をする者はいないだろうが、ひよつとしてこの様なことがあってはいけないので、去々酉年(文久元年(一八六二)の春に申しつけたが、この度再度別紙の通り三上郡に指示するので、守りなさい。

「他郡越米」なる言葉が使っています。「郡境を越えて移動する米」の意味と思われます。ここで禁止しているのは、米が足りないのに他郡に移出することか、それとも足りないための他郡からの移入か、判然としません。「別紙」触書では次のように書いて

ています。

「他国越米之儀は重御制禁之儀ニ付、不締筋は有之間敷候得共、近年他郡越米多、百姓共飯米差間及難渋候趣相聞候付、……猥りに他郡越米不相成趣等、委細去々酉年春触示候趣も有之候処、兎角拔々他国越米多有之哉ニ相聞、去秋稲作相応出来立候とハ申条、右様拔々越米いたし候様候ては、郡内融通方へ相こたへ、先キ／＼飯用差間一統難成およひ候様押移候儀も難計」(文久三年(一八六三)『広島県史』)

他国へ米を出すことは絶対禁止なので不締りはないと思われるが、近年は他郡への越米が多く、そのため百姓共の飯米にも差支えて困っていると聞いている。……猥りに他郡へ越米をすることは禁止すると命じたにも拘らず、兎角ぬけぬけと他国への越米が多いようで、去秋の稲作はそれなりに収穫があつたとはいえ、こんなに越米があれば郡内の融通にも響き、先々には飯用の米が不足するようになることも考えられ：

…。

この文書では「越米」を「米を移出する」意味で使っておりますが、元来は「移動する米」という簡単な言葉でしょう。

「春越米」という言葉もあります。これは別に検討する必要があります。

皮楮六貫目かへ

「当楮直段之義は往古より之御仕入銀之員数ニ相当候丈ケハ皮楮六貫目かへ、其余過楮五貫目かへニ御買上ケ被下事」(嘉永五年(一八五二)『広島県史』)

今年の楮値段は、以前からの御仕入銀の員数に相当する分は皮楮六貫目替、その余の過楮は五貫目替でお買上げになる。

広島藩では、紙楮を完全な藩専売制としていました。原料となる皮楮は公定価格で藩が買上げ、紙漉村には必要量の楮を渡し、製品は公定価格で藩が買

上げました。抜け楮・抜け紙は厳しく取り締まりました。

この文書は、皮楮の公定価格を示したものです。よく解らないのは「皮楮六貫目かへ」の文言です。

「世羅米価石二付七百五匁替」（慶応三年（一八六七）『村上家乗』）

普通、価格を表すときは、上記のように、「世羅郡の米は、一石につき、銀札七〇五匁です」と書きますが、この文書では、「皮楮は六貫目です」と書いてあるだけです。「六貫目」も、皮楮の重さか、銀額（銀札）か、……多分皮楮の重さでしょう。そうすると金額の記入漏れとなります。

「此楮御直段紙漉村所楮は拾匁二付六貫三百目かへ、海辺村々納り楮御仕入前六貫目かへ、過楮は五貫目替ニベ御買上ケ紙漉共へ御渡し直段五貫百目位」（文政二年（一八一九）『廿日市町史』）

この楮の御直段は、紙漉村（山間部にある）の所楮は拾匁につき六貫三百目替、海辺村々の納入

する楮の仕入値段は六貫目替、過楮は五貫目替にして藩が買上げになり、紙漉共へ御渡し直段は五貫百目位です。

この文書に辿り着いてようやく理解できました。「皮楮六貫目かへ」とは「銀一〇匁につき皮楮六貫目」のことです。楮の価格については、「銀拾匁」と交換される「皮楮の重さ」で表示するのが業界の〈常識〉のようです。〈常識〉のない私たちは目を白黒させるばかりです。

村の割当量を超えて生産した楮を「過楮」といい、二割ほど高値で買取ったようです。

流質

「文化四丁卯年二月質屋定法御尋之書附控
質屋中取引之定法承置度ニ付頭書致、左二記
一流質は何ヶ月限候哉、此節置候質はいつ比流シニ
相成候哉、尤、札へ切月は如何書入候哉之事
……………」

同年二月右御尋ニ付、左之通書付差出申候

覚

一流質之儀は、古来冬ものは八月切、夏物は二月切ニ仕、各三ヶ月延流之義、享保年・宝暦年中ニも御答申上候処、いつ比よりか流合ニ相成、只今は足掛三年にて、当卯年分夏物は来ル巳之春二、三月中流申候、冬ものハ巳之八月ニなかし申候、…
…古来之所よりハ全壱ヶ年流し延引仕候様ニ相考申候

一穀類麦は来ル四月切、米綿は来ル八月切流申候、大綱新穀出来候へは流申候、尤、株立候質物は応対次第之事

一受札切月当八月切、来二月切、或ハ八月切共書申候、是も家々にて少々宛違申候、誠ニ書印置申候計にて流候処ハ引合不申候へ共、仕来御坐候故書付申候

(以下略) (文化四年(二八〇七)『三原市史』)

文化四年(二八〇七)二月、質屋定法について御尋の書附控

質屋連中の取引の定法を承りたいので「頭書」

にして、以下に記す。

一何ヶ月経過すると質物を流すのか。今、質に置くといつごろ流しになるのか。質札へ切月はどうのように書入れるのか。

……………

同年二月に御尋があり、次のように返答しました。

流質期限について、古来は冬物は八月切、夏物は二月切ですが、三ヶ月延すこともあると以前御答しましたが、いつ頃からかい加減になり、現在は足掛三年で、今年文化四年(二八〇七、卯年)に預った夏物は来る六年(巳年)の春、二、三月中に流します。冬物は六年八月に流します。…
…昔より全く壱ヶ年延びています。

穀類麦は来る四月切、米綿は来る八月切で流します。つまり新穀が出来れば流すのが原則です。もつとも、特別な質物については相談に応じます。

受札(質札)には「切月当八月切」、「来二月切」または「八月切」と書きますが、質屋により多

少の違いがあります。これもただ書くだけで、流すとき見ません。仕来りなので書くだけです。

「流質之儀は、古来冬ものは八月切」といきなり書いてあります。質物は主に衣類のようです。米麦まで質に置いたとは知りませんでした。

現在では、貸付の期限は三ヶ月だそうです。

「切」は「限」です。

【切り・限】きり。（『広辞苑』）

①切ること。切ったもの。また、切ったものを数える語。②段落をつけること。また、その切れ目。区切り。③際限。限度。はて。

状かさ

「此方可懸御目ものも無之候、几辺ニ有合候画論之詩一首、状かさのため二入レ申候」（上田少藏宛山陽書翰）

私方には御目に懸けるほどのものがありません

が、（お礼として）机の辺りに有り合せの画論の詩一首を「状かさ」のために入れておきました。

【嵩】かさ。（『広辞苑』）

①積み重なったものの高さ・大きさ。また、一般に一まとまりのものの分量。体積や容積。

手紙を差出すとき、中身が少ないため、わざとその「かさ」（分量）を増やすことを「状かさ」を増すと言うようです。

微量の粉薬を分けるとき、メリケン粉？で増量して分けると楽に分割できると聞いたことがあります。が、封書の場合、中身を「増量」する必要は勿論ありません。

「机の辺りに転がっていた、有り合せの画論の詩一首を、「状かさ」のため書き加えました……」と「さりげなく」書けば、貰った人の精神的負担が軽いだろうとの配慮でしょうが、逆効果のような気がしますが、どうでしょうか。

分丈

「町方数立候者共之子供ハ勿論、中以下之子供迄も近來ハ遊芸專致稽古、剩人ニ寄り身振り杯ヲ稽古致させ、髪容なども芸子ニ似寄異風ニ相聞、此等は甚以心得違之事ニ候、三味線身振りなど稽古致させ候余暇も有之候は銘々家業之教可致筈、別て女子は他家へ遣候ものニ候へハ、織縫其外女子之業前ニは第一ニ不教事ニ候処、遊芸致させ候儀親々之教ニ有間敷不風俗ニ之至ニ候、畢竟商賈之分丈ヲ令忘却奢ヲ生し候ニ依る事ニ候」(寛政元年(七八九)『広島県史』)

町方で大家の子供は勿論、中以下の子供までも近頃は遊芸をもっぱら稽古し、「身振り」までも稽古させる者があり、髪形なども芸子風にしてしていると聞くが、これら甚だ心得違いのことである。三味線や「身振り」など稽古させる暇があれば家業を教え、特に他家へ嫁にやる女子は

織縫など女子の仕事に第一に教えなければならぬのに遊芸をさせるとは、親の教えにあるまじき不風俗の至りである。それというのも、商売の「分丈」を忘れ、奢りの心が生れているからである。

「万端百姓之分丈相応と申所ヲ了簡仕、其相応ニ輕く暮可申候」(享保十一年(二七六)「鶴亭日記」)
全て百姓は「分丈」相応ということを考え、それ相応に輕く暮らしなさい。

「分丈」という言葉の意味は、例文から大体解ります。「身分」「分限」「分際」に当たります。読みが分りません。「分」「丈」の文字をなせ使うのか、それが解れば意味も読みも明確になるでしょう。

「分」は、⑥わけ与えられた性質・地位。身の程。力量。」(『広辞苑』)、「身分」でしょう。

【丈】だけ。(『広辞苑』)

①それと限る意。②限度・程度を示す。③その身分・事情などに相応する意。

「丈」は「限」に通ずるものがあるので、「分丈」は「分限」の意味に違いありません。

【分上】ぶんじょう。（『日本国語大辞典』）

それとして本来与えられたもの。身のほど。身分柄。その身のてまえ。

「分丈」は「分上」の宛字のようです。すると、「ぶんじょう」と読むのでしょうか。

「身振り」とは「身振狂言」のことを指すのかも知れません。

【身振狂言】（『広辞苑』）

身振りばかりで演ずる歌舞伎狂言。特に、子供の首振り芝居。

積帖面

「当夏洪水損所仕戻普請積帖面を以御敷奉申上候処、当度損所村々為御見分御入込被遊……」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）

この夏の洪水による損所の復旧工事について「積帖面」を以てお願いをしましたところ、この度、損所村々の御見分のためお出でになり……

「積帖面」は、他の資料では「積帳面」「積り帳面」などと書いてあります。

「堤方如何ニも無覺東相見へ候ニ付積り帳面差出候義も御座候へ共、村調可仕旨御付紙ヲ以御下ケ被為遣菟口無御座義ニ付、昨年已来又候借替等を以ケ成取繕置候義ニ御座候得共、石垣築足土手上ハ置等不仕てハ片時も油断相成不申、唐樋も去ル西年大病仕居エ替不申候てハ透汐之患も有之平日水吐ケ不宜、……余は御推察被成下御取繕御慈断奉蒙候様厚被仰上可被下候」（嘉永五年（一八五二）『廿日市町史』）

（扇新開の）堤防は、いかにも心配なので「積り帳面」を差出して普請のお願いをしましたたが、「村費で調えなさい」との御付紙で下げ戻されました。仕方なく、昨年以來又々「借り替」を

して程々に修繕しましたが、石垣の築き足し、土手の「上ハ置」等をしなくては片時も安心できません。唐樋も去る酉年に大いに痛み、「居え替」しなくては漏水の心配もあり、平日でも水吐けが悪く、……窮状を御推察の上、御取繕を決めていただくよう取りなしてください。

【積る】（『広辞苑』）

量・数の膨大なもの、または実体のつかめないものを大づかみにして、およその結果を出そうとする意。①あらかじめ見計らって見当をつける。おおよその見通しをつける。みつもる。

「積り帳面」は工事費の「見積帳」、つまり「予算書」と見積りました。

借替

「昨年已来又候借替等を以ケ成取繕置候義ニ御座候得共……」（嘉永五年（一八五二）『廿日市町史』）

昨年以來又々「借替」をして程々に修繕しましたが……

前回「積帖面」の資料中、「借替」という言葉ができました。借金だと考えられますが、どのような借金でしょうか。

「〇〇村組頭」 「・同」 「手元差間、銀

子同村庄屋六郎右衛門へ借替呉候様相頼申候処、六郎右衛門家職追々手広ニ仕候ニ付仕入方之銀子難取闕御座候故、何卒来月上旬銀子四貫目六郎右衛門へ拝借被為仰付被下候ハ、与頭共へ貸附遣し、難有可奉存候段申出仕候、勿論返上之義は当極月限り元利速ニ六郎右衛門より奉返上候段申出仕候」（文化十四年（一八七）「野間家文書」）

〇〇村の組頭「 「・同」 」の手元が

差支え、銀子を同村庄屋六郎右衛門へ「借替」してくれるよう頼みましたが、六郎右衛門も家職を段々と拡げており、仕入銀が不足するので貸すことができません。そこで、組頭共へ貸すために、来月上旬に銀子四貫目を六郎右衛門へ

貸していただければ有難いと申しております。

勿論返済は当十二月、元利を六郎右衛門より返上すると申しております。

村役人が藩に対して借金を依頼し、それを割庄屋が仲介をするという文書です。庄屋が藩から借りたものを、さらに組頭に貸すことになります。本などは「借りた本を又貸しをする」といいますが、お金の場合、「借替」というのではないかと思います。

「役人共より取立方幾度催促致候ても渋滞いたし、取立日限ニ至り候得は致方無之無是非借替上納相済せ、其もの／＼へ当り未進ニ取計候外ハ無之趣風聞有之」（文化十四年（一八一七）『広島県史』）

村役人が（年貢の）上納についていくら催促しても渋滞し、年貢上納日限になると仕方ないので、村役人は「借替」をして上納を済ませ、当人に對して「未進」の扱いにしていると聞いている。

当人が借金すべきところ、それが出来ないときに、別人が代りに借金をしてやること……。

辞書には、次の説明があります……。

【借換え】（『広辞苑』）

①新たに借りて、前に借りたものを返却すること。

札續

「御他領ニ有之富鬪引之類へ携候儀は嚴敷御法度ニ候へ共、今以方角ニ寄り忍々取扱札續之者も有之と相聞へ不届キ至極之事ニ候、所々札續致し候者之名前も凡相知レ居候ニ付、急度御手置可被仰付候得共、此度改ケ様ニ相触候儀故、先是迄之儀は格別ヲ以御宥免被成下候ニ付、以来之儀ハ急度相改可申候、……、富鬪引之儀へ携候者共札續之者等於有之ハ召捕候上重キ御手置可有之候」（寛政三年（一七九二）『広島県史』）

御他領にある富鬪引の類へ関わることは厳しい御法度であるが、今でも所により忍んで札續を

する者もあると聞き、至極不届なことである。所々の札纒している者の名前も大体知れているので厳しい注意をするが、今までのことは特別に咎めだてはしないが、今後は必ず改めなさい。富鬩を引く者共や札纒をする者があれば、召捕り重い処分をする。

宮島の富鬩は勿論のこと、他領の富鬩にも関係をしてはいけないという触書です。「富鬩引之儀へ携候者共」と「札纒之者等」が並記してあるので、富鬩を引くものと、札纒をする者はべつものと考えられます。

札纒の「札」とは「鬩札」のことです。纒については、

【貫】つなぐ。（『日本史用語辞典』）

纒とも書く。つづける、財政維持をいう。

との説明がありますが、広島では「集金する」という意味で使います。（ブログ「纒」（06/07/27参照）

【繫】（『日本国語大辞典』）

「方言」米錢などを各人各戸が出しあう。（岡山・広島・山口）

社内に〈宝籤同好会〉があり、幹事さんが会員から「集金」し、代表して「鬩」を買ってくるという話があります。売場が遠い所なら便利です。まして非法の、他領の富鬩の世話をしてくれる〈幹事〉さんがいれば助かります。札纒とはそのようなものと想像しています。

「養女」

「 覚

一 佐伯郡「村みつ

右は私娘ニて則一緒ニ居申候、然ル処此度御城下猫屋町「屋次兵衛養女ニ望申候ニ付遣申度、内証相極メ申候、依て引越之儀奉願上候、御赦免被為遊被下候ハ、難有仕合可奉存候、此段宜敷被仰上可被下候、町方へは右次兵衛より御願申上候筈ニ御座候、以上

亥八月

百姓 利兵衛

庄屋平左衛門殿

組頭紋兵衛殿

同五兵衛殿

前書之通願出申候処、相違之儀も無御座候間、願之通御赦免被為遊被下候様奉願上候、以上

八月

庄屋 平左衛門

佐伯郡御役所」（寛政三年（一七九二）「是長村御触留帳」）

みつは、私利兵衛の娘で一緒に住んでいましたが、この度広島猫屋町「」屋次兵衛が養女に貰い受けたいとのことで、内々で取決めました。そこで引越のお許しをお願いします。町方の役所へは次兵衛より御願するはずです。

これは庄屋宛の「引越し願」の文書です。庄屋も「間違いないません」と奥書をしています。

「百姓・町人御城下又は他郡へ引越住宅仕度願出候ハ、委細吟味之上双方より願書出し申候て突合候ハ、其趣ニ随ひ可申談候事」（『吹寄青枯集』）

百姓や町人が御城下又は他郡へ引越して住みたいと願い出たら、委細を吟味し双方より提出の願書を突き合せ相談しなさい。

「其村百姓利兵衛娘みさ儀、当所猫屋町」「屋次兵衛養女に遣し候二付、引越し儀願之通承届ケ指免し候条、此旨可申聞者也

亥八月 宮田織人

庄屋 平左衛門」（寛

政三年（一七九二）「是長村御触留帳」）

これは代官の出した、百姓利兵衛娘みさの「引越し」許可状です。

猫屋町「」屋次兵衛は、百姓利兵衛の娘みさとみつ、二人を相次いで養女としたものと思われまふ。これは本当に「養女」だったのでしょうか。

手次坊主

「同村手次聞海・一音と申者、寺同様之構をいたし、一ヶ寺住職之様ニ相心得、半鐘も釣り置、或は寺

号之取扱もいたし候儀、於御国法ニ甚心得違不埒至極ニ付夫々咎メ申付、寺形チ之所は俗家ニ引直させ、半鐘も早々取除、素り俗家ニて、仏所構法談等不相成候ニ付、心得違不仕、全ク百姓と相心得可罷在、於村方ニも寺之あしらいニ不仕候様急度申付候」(寛政三年(一七九二)「是長村御触留帳」)

同村(下殿河内村)の手次、聞海・一音という者が寺同様の構えして、一ヶ寺の住職のように心得、半鐘も釣り、寺号も付けているが、御国法に反しており不埒至極、兩人へ咎メを申し付けた。寺の構は俗家に引戻させ、半鐘も早々に取り除け、勿論俗家なので寺の構・法談等はず、全て百姓と心得るよう指示した。村内でも寺の扱いをしてはいけない。

「此国は一向宗盛にして、郡中村々一向門徒にあらざるハなし、元来村々に寺ある事なし、多くハ仏護寺十二坊の門徒なり、其村所にて農民の僧形となりて勸化するものを手次坊主といふ、……此手次坊主ども漸々村の用意を得て勢つき、後ハ堂を

も建立し、おのづから寺のやうになりしなり」(天明初年、香川南浜「秋長夜話」)

安芸国は一向宗(浄土真宗)が盛んで、郡中村々で一向宗の門徒でない者はない。元来村々に寺はなく、多くは広島島の仏護寺十二坊の門徒である、その村で農民が僧形となつて勸化する者を「手次坊主」という。……この手次坊主どもが次第に村民に迎えられて勢つき、後には堂をも建立して寺のようになる。

「安芸国では世俗の住人が僧形となつて信徒を勸化するものを手次坊主(毛坊主ともいう)といい、その人たちの努力で布教が進んだ。堂や道場を建立して寺のような姿を整えるために、本寺とたのむいわゆる上寺に「取次頼み、本願寺へ請て、寺号・木仏、開山上人の画像、太子・七高僧・代々門跡上人の影など申受て、一寺を創立」するという、わりに簡便な手続を行なつて、真宗寺院がどこまでできる事情が藩の儒官香川南浜によつて指摘されている(「秋長夜話」続々編)。このように本末の

關係を結ぶことによつて、末寺となるべき堂は正式に寺院への昇格が認められ……」（『広島県史』）
「鶴亭日記」（天保五年（一八三四）の「国中寺院」の記事中で、安芸郡の寺院は三八ヶ寺、二ヶ寺が禪宗で、残りは全て真宗です。真宗のうち一七ヶ寺は「道場」の名が付されています。藩による禁止も成功しなかったようです。

破船

「当浦利兵衛船先月廿八日夜遠州榛原郡御崎沖にて破船仕候ニ付御注進書付 佐伯郡高田浦
一式拾六端帆 佐伯郡高田浦利兵衛船
沖船頭高田浦左兵衛 水主同浦六兵衛 同久兵衛
同与兵衛 同十兵衛 高田浦和作 同茂助 同
作内 同弥助 同要吉 高田浦代助 中浦喜太郎
同長五郎 三吉浦与八 柿ノ浦孫市 同伝七
乗組合拾六人
右之船は、亥極月摂州大坂伝法屋吉右衛門名前二

て、大坂川口より江戸着ケ之御城米御請合申候て、
当子正月十三日迄ニ不殘積受、同日大坂川口出帆
仕候て、同廿三日江戸へ着船仕候、同廿六日御城
米無滞払込、翌廿七日空船にて江戸出帆仕、同廿
八日裏賀御番所御改相濟、早速同所出帆仕、其夜
四ツ時遠州御崎沖之御前岩と申磯へ乗上ケ破船仕
候処、風波烈ク船板離レ申候、勿論舳も砕ケ候ニ
付、漸ク右之船板凡拾六人之者とも乗移り、夜中
居申候処、翌廿九日朝遠州榛原郡地頭方村と申所
より小船六艘乗参り、其船にて右乗組之者方揚陸
仕、拾六人不殘助命致申候、船板其外船具諸道具
は不殘捨り申候、左候て其所暫く滞留仕、遠州御
代官所野田松三郎様御支配にて、諸事御しらへ之
上無滞相濟、当月四日其所出達仕候、同十三日大
坂へ罷戻り、伝法屋吉左衛門へも右之段申届ケ、
何々迄も相濟、当月廿三日当浦へ罷戻申候、此段
申為御注進之書付奉差上候、以上
子二月

庄屋 平左衛門
与頭 門兵衛
同 五兵衛

佐伯郡御役所」（寛政四年（二七九二）「是長村御触留帳」）

当、佐伯郡高田浦の利兵衛船（武拾六端帆、乗組合拾六人）は、昨年十二月摂州大坂伝法屋吉右衛門の名前で大坂川口から江戸への御城米廻漕を請け合い、今年一月十三日までに船積、同日大坂川口を出帆、同廿三日江戸に着船し、同廿六日に無事御城米を払込み、翌廿七日空船で江戸を出帆、同廿八日浦賀御番所で改めを受けて同所出帆、その夜十時遠州御崎（御前崎）の沖の御前岩という岩礁に乗り上げ破船しました。風波が烈しく船板が離れ舳も砕け、漸く右の船板に拾六人が乗り移って夜中いましたら、翌廿九日朝遠州榛原郡地頭方村（現、牧之原市地頭方）という所より小船六艘が救助に来て、その船で乗組者が揚陸し拾六人全員が助かりました。船板その外船具諸道具はすべてなくなりました。そこに暫く滞留し、遠州御代官所野田松三郎様御支配下で諸事御調べが済み、当月四日そこを出

発、同十三日大坂へ帰り、伝法屋吉左衛門へも報告し、全て済んで当月廿三日当浦へ帰りましてので報告します。

「御前岩」は、御前崎東方一・三海里的の沖合にある大根バエという浅礁域にあります。

差許

「郡中社倉頭取

年寄

社倉支配役

庄屋

社倉十人組頭取

組頭

右役義之もの共一同差許候条、此旨人別へ相達、且役用諸書類等ハ其儘預り置、追て役員相定候迄ハ当分諸用受引候様可申聞候事

但、取立役長百姓ともも一同差免し候事

壬申正月

広島県庁

世羅郡割庄屋共」（明治

五年（二八七）「続波多野家文書」

右の役についている者共は一同「差許」すので、各人へ伝えなさい。役用諸書類等はそのまま預かり、後ほど役員が決まるまでの当分は諸用に応対しよう指示しなさい。年貢取立役や長百姓も同様に「差免」す。

廃藩置県の翌年、広島県庁は従来の郡村役人に対して「役儀差許」と命じています。「差許」（差免）とは何を許すのか、資料からは判然としませんが、実は「罷免」です。

本来、「差し許す」（差免）とは「許す」ということです。

「病身ニ付役儀難相勤段歎出候ニ付差免 白市村年寄 源次右衛門」（文化四年（一八〇七）「鶴亭日記」）

白市村の「年寄」源次右衛門は病身なので役儀を勤めることが難しく、役職を辞退させてくださいとの歎願に、郡役所が「差免」（許可）したという内容です。

長年、「退任」するときに「差免」という言葉を使つたため、「罷免」にまで変質しています。

この指示で、庄屋などの役職が廃止されました。とはいえ、次の「戸長・少長」の決まるまでの間は、関係書類を保管し、今まで通りの仕事をするようにとしています。

代官直支配

「一御代官直支配 豊田郡中河内村立栄寺

右先住以来御国法相守、寺風質素如法ニ相勤、郡中難渋者へ救方厚心懸、此度社倉穀之儀ニ付志厚深切之致取計候段、甚以奇特之至ニ付

丑八月 賀茂郡御役所

割庄屋当」（文政十二年（一

八二九）「鶴亭日記」）

豊田郡中河内村の立栄寺は、先代の住職以来、御国法を守り、寺風も質素如法に勤め、郡中の難渋者への救方を厚く心懸け、社倉穀について

志厚く、親切な取計をしたので、「御代官直支配」とする。

「御代官直支配ハ格式有之寺社也、並之寺社ハ庄屋支配也」（『芸藩輯要』）

御代官直支配の寺社は格式があり、並の寺社は庄屋支配である。

立栄寺は今までの庄屋支配から、代官による直支配になり、格式が上がったことになります。今後は代官から直接指示が来ると思われますが、具体的にどう変わるのか分かりません。

「一七人扶持被下 御医師格被仰付

賀茂郡寺家村ニ罷在 野坂三益

町奉行所支配

右、数年来医術心掛、療治精出候ニ付、生涯右之通被仰付」（天保五年（一八三四）「鶴亭日記」）

「御医師格」に任命された野坂三益は、それまでの代官支配から「町奉行所支配」に変わっています。

請々

「去ル辰年洪水後、後難防キ方之為、諸堤御普請上置土御手入厚被仰付候ニ付、ベリ宜丈夫ニ相成候得共、所ニ寄藪所抱之堤坏ハ竹の子掘り取候様子ニ相聞穴明キ候故、上置等退転いたし候所も有之、子供之業斗とも不相見、甚不屈ニ候、以来右躰之儀見当り候節ハ、藪所抱之方角より人名等相糺、其請々へ相届ケ申出候筈ニ候間、心得違無之様、子供ニ至迄所々役人共より急度相示し置可申候」（享和元年（1801）『新修広島市史』）

寛政八年（1796）の洪水の後に、今後の防災のため諸堤防の上置土（馬踏のかき上げの土）の手入れの工事により、丈夫に普請ができた。しかし、堤防にある藪所で竹の子を掘り取ったような穴が明き、折角の上置も以前のようになっている所がある。子供の悪戯とも見えず、甚だ不屈なことである。今後このようなことを見つけた

ら、藪所付近の者を取り調べ、その「請々」へ届け出ることになっているので、子供にまで所役人は説明しておきなさい。

堤防の竹藪から竹の子を掘り取り、堤防に穴を明けるといふ、なんともスゴイ話です。「請々」という言葉が使っています。

「御勝手向弥増御難渋之段は一統得斗相心得、請々にては此余一際御入用相減并御人減等之義も厚可申談候、向に寄、仕来等申立、十分に御減方難約場所も可有之哉に候得共、当時之御場合、御勝手方は素より、表方末々迄、右等之御趣意承知可有之」（天保十四年（一八四三）『廣島市史』）

藩財政が一段と厳しい状況にあることは、家臣一同よく心得ており、「請々」では、これ以上一際入用を減らし、人減も議論しなさい。なかには「仕来り」を申し立て、「合理化」が進まない場所もあるが、現今の場合、「御勝手方」は勿論、「表方」末々の者まで、これらの御趣意を心得て……

「請々」とは「各受け持ち」「担当部署」と解釈したらどうでしょうか。

「御勝手方」と「表方」並べて書いています。何か意味がありそうですから、私の宿題とします。

不二応

「兼而御承知被下候通、大和勝手向格外省略中、當時格外之御減石中に付、此上弥々以省略被致、外向勤筋も乍不本意万端不二応作略可被致と被存候、依之年頭初、都而御勤ケ間敷儀は堅御断被申度被存候間、……」（嘉永元年（一八四八）『廣島市史』）

御承知の通り、私、浅野大和（広島藩家老、三原浅野家）の財政は厳しい「省略中」「御減石中」で、更に「省略」する積もりです。したがって、外部に対する付き合いも不本意ながらすべて「不二応」省略したいと思います。よって、年頭のことを初めとして全て「御勤ケ間敷」ことはかたくお断りするつもりです。

これは、藩財政が危機的な状況にあった頃の、広島藩家老浅野大和(忠)の年寄今中大学宛書状の一部です。

文中の「不一応」は「一応ならず」と読むのでしょうか。言い回しが「一方ならず」とよく似ています。

【一方ならず】(『広辞苑』)

ひととおりでなく。なみなみならず。

【一往】(『広辞苑』)

②(「一応」)とも書く。副詞的にも使う(イ)ひととおり。ひとわたり。大略。

「不一応」の意味は「一方ならず」と同じであることが解ります。

「御勤ヶ間敷」というスゴイ言葉も使われています。

「御勤」は「義務・義理・交際」、「ヶ間敷」(がましい)は「…に似ている。…らしい。…の風がある。

…のきらいがある」の意味です。すると、今の言葉では「虚礼」に相当するものかもしれません。

丁の日

「凶年の諸物価騰貴は通貨の膨脹を来し、通貨の膨脹は通貨の価値を下落せしめて止まず、当時藩府の財力は到底銀札の下落を支持することを得ず、竟に嘉永五年正月九日を以て、有名なる「五百掛の令」を発せり、……是れ改印札は六十五匁を以て金壹両に替へ、旧銀札は三十二貫五百匁を以て金壹両として引替ふるものなれば、旧札は正に六十五匁相場(改印札の金相場)の五百倍に当ればなり」(『広島市史』)

「旧札並に綿座切手、当閏二月四日より御引替相成、旧札は札場にて、綿座切手は綿座にて御引替被下候、尤三次・尾道札場にて、旧札綿座切手共、御引替被下候事、但、丁の日斗りに御引替被下、朝五つ時より夕八つ時限りの事」(嘉永五年(一八五二)『広島市史』)

旧札・綿座切手は、当年閏二月四日より改印札

と引替を始める。旧札は札場で、綿座切手は綿座で引替、三次・尾道札場にても、旧札・綿座切手とも引替。但し「丁の日」だけ、朝八時から午後二時限り。

所謂「五百掛相場」の、銀札引換日限の触です。

「丁の日」という、今では珍しい「干支紀日法」が使われています。今年二〇〇八年の年賀状に「戊子」と書く人はあまり見かけませんが、それでも鼠は活躍していますので、「干支紀年法」はまだ使われているといえます。

野坂三益の「鶴亭日記」でも、文政十年（一八二七）から「正月朔日丁丑」「二日戊寅」……と、干支を付記して日付を記述しています。誤記して訂正をした箇所もあります。干支を間違えて直しているのは、時々暦で確認したのでしょうか。それほど一般的ではない日付の記述法だと思います。毎年歳末には「新暦」を入手しています。

「○廿八日 受太神宮之御祓新暦」（文化六年（一八〇九）「鶴亭日記」）

十二月二十八日、太神宮の御祓新暦を受取った。

ちなみに、「中国でも日本でも暦はしばしば改定されているが、干支による紀日は古代から連綿と続いており、古い記録の日付を確定する際の有力な手がかりになる。」（『ウィキペディア (Wikipedia)』）
今日、二〇〇八年四月二三日の干支は「癸巳」^{みずのとみ}だそうです。（「換暦」<http://maechan.net/kanreki/>による。「文政10年1月1日」とタイピングすると、たどころに「丁丑」と表示されます。）

干支は六〇で一回りしますから、次の「丁丑」の日は六〇日後ですが、「丁の日」は一〇日で一巡、銀札の交換日は月に三回ほどあることになります。「丁の日」があるのなら、「甲の日」が使われているか調べてみましたが見つけれませんでした。「戊の日」「庚の日」の使用例はありません。

【釈奠】せきてん。（『広辞苑』）

（シヤクテン・サクテンとも）「礼記王制」孔子を祀る典礼。犠牲・蔬菜を供え、爵を薦めて祭る意。二月・八月の上の丁^{ひのと}の日に行う。古代中

国では先聖先師の祭礼の総称。後漢以後、孔子を祀る大典の特称となった。日本では、七〇一年（大宝一）二月丁巳に行われたのが最初。室町時代に廃絶、のち江戸幕府・諸藩が再興、湯島や佐賀県多久の聖堂では今日も続けられている。おきまつり。

改歩

前回「五百掛相場」の続きです。

「札場両替改歩并金銭相場、閏二月五日より左の通り相改候間、此段町中不洩様相知せ置可申候、一札場両替改歩は以前の通り、入金一步入、払金二歩入に相定り、金一両に付銀札六十四匁定め、二歩入にて一両に付、札六十五匁二分八厘に相成、銭九六一貫文に付九匁五分三厘なり、札一匁に付九六銭百五文也、丁銭にして百一文なり、尤も改歩の儀は正金改札両替之節歩入なり、此度御引替被下候分は旧札三十二貫五百目にて、改札六十五

匁御渡し被成候事」（嘉永五年（一八五二）『廣島市史』）

この文書の現代語訳は簡単にはいきません。まず、「改歩」から検討します。「改歩の儀は正金改札両替之節歩入なり」（改歩とは、正金（金貨）と改札（改印札）を両替する際の歩入（手数料）のこと）との注釈があります。

「札場両替改歩は以前の通り、入金一步入、払金二歩入に相定り」（札場での両替手数料は、以前の通りで、入金は一匁歩入り、払金は二匁歩入りである）としています。宝永元年（一七〇四）の触は次のように解りやすく説明しています。

「一札替候儀、銀子百目ニ札百匁匁相渡候附金子并銭は、上方御当地相場相考、銀二直し札可相渡事

一札を以銀子請取被申候節は、札百匁匁ニ銀子百目可相渡事」（宝永元年（一七〇四）『芸藩志拾遺』）

銀貨を銀札に替えるとき、銀子一〇〇目に対して銀札一〇一匁を渡す（入金一步入）。銀札を銀貨に替えるとき、銀札一〇二匁に対して銀貨

一〇〇目を渡す(払金二歩入)。金貨や銭の兌換は、上方や広島での相場を考えて、まず銀に換算して銀札と兌換する。

「改歩」とは、金銀貨と銀札を両替する際の両替歩合(手数料)と考えられます。つまり「銀歩」「打歩」(ブログ(06/11/16・'08/02/14参照)と同義語になります。この資料が、正金(金貨)と改札(改印札)の両替の説明であるため、特別な場合に限る手数料のように書かれているだけです。

「金一両に付銀札六十四匁定め、二歩入にて一両に付、札六十五匁二分八厘に相成」

金一両 \parallel 銀札六四匁の交換レートなら、銀札を一両に替える場合は「二歩入」(二%増し)であるから、 $64\text{匁} \times 1.02 = 65.28\text{匁}$ の銀札を要する。

「銭九六一貫文に付九匁五分三厘なり、札一匁に付九六銭百五文也、丁銭にして百一文なり」

銀札を九六銭一貫文に替えるときは九・五三匁の銀札を要する。つまり、銀札一匁は、九六銭

一〇五文(丁銭なら一〇一文)となる。銭相場が不明なため、検算ができない。

「此度御引替被下候分は旧札三十二貫五百目にて、改札六十五匁御渡し被成候事」

この度、旧札を新札(改印札)に引換えるが、旧札三二貫五〇〇目で、改印札六五匁を渡す。 $32500 \div 65 = 500$ つまり、旧札の値打ちを五〇〇分の一とする。

【九六銭】くろくぜに。(『広辞苑』)

江戸時代、銭九六文を一〇〇文に通用させた計算法をいう。

【丁銭】ちようせん。(『広辞苑』)

江戸時代、銭九六文を一〇〇文と扱った習わしに対して、銭一〇〇文を額面通りに一〇〇文の価値に用いたこと。

見立

「江戸行の孫を見立る花疊り 籬」(文政七年二八

二四)「鶴亭日記」)

「籬」は野坂三益の俳号、柴籬。ここに「見立る」という言葉が使っております。

【見立てる】(『広辞苑』)

- ①よく見定めて立てる。②人の門出^{かして}を見送る。
- ③見て選び定める。鑑定する。診断する。④世話をする。後見となる。⑤なぞらえる。仮定する。見なす。⑥みくびる。軽蔑する。

今なら、東京の学校に入学する孫を門前で見送る年寄をイメージしますが、当時は、何のために江戸へ行ったのでしょうか。

「出足当日見立に見候儀、一統相断、格別之近親相見候共、吸物はまぐり焼肴一種迄之事、但、真之内輪限り家内祝ひ等、弥々以極手軽之事」(嘉永元年(一八四八)『廣島市史』)

出発当日の見送りはみな断り、格別の近親者が来ても、吸物はまぐり焼肴一種に限ること。内

輪限りの家内の祝いなども極く手軽にすること。

これは大俣中作略の申し合せの一部です。「見立」には別れの会が付きもののようです。すると、単なる「見送り」ではなく、「送別」の意味をもつ重い言葉かも知れません。

札鎌

「札鎌拾八牧

内

九牧 安芸郡上瀬野村

九牧 同下瀬野村

内

式牧 右両村より壺牧ツ、庄屋札と相唱無運上ニて庄屋元ニ遣ウ

式牧 右同断札屋札と相唱鎌世話仕候者無運上ニて遣ウ

拾四牧 右同断七牧ツ、札鎌持主より壺牧ニ付壺勿

ツ、運上両村へ遣ス

但当村之儀山所不自由ニて肥草苅等乏敷ニ付先年より右之通御仕向御座候」(文政二年(一八一九)「賀茂郡奥屋村国郡志御用書上帳」)

奥屋村(現、東広島市志和町奥屋)は山林の利用が不自由で、肥草苅等が乏しく、先年より安芸郡上瀬野村・下瀬野村の山林を入相で利用しています。

「飯谷山(竪七丁横六丁)雑木小松毛上 但、此山之内切ふさぎ限かも郡奥屋村・冠村より札鎌ニて柴草入相刈場所」(「文化度国郡志」(上瀬野村))

(上瀬野村の)飯谷山(縦七丁、横六丁)は雑木・小松の毛上である。この山のうち、切ふさぎ迄賀茂郡奥屋村・冠村より「札鎌」による柴草入相刈場所である。

【入会・入相・入合】(『広辞苑』)

一定地域の住民が特定の権利をもつて一定の範囲の森林・原野または漁場に入り、共同利益(木材・薪炭・まぐさなどの採取)すること。

「鎌札」(『吹寄青枯集』)という言葉があります。

入相地利利用許可札と思われれます。「札鎌」とは入相地で使える鎌でしょう。

奥屋村は「札鎌」一八枚の利用を上瀬野・下瀬野村から得ており、その内、二枚は「庄屋札」として、二枚は「札屋札」(札鎌世話人札)として無償で使い、残り一四枚は「札鎌持主」(札を請けた村民)は一匁の使用料を徴収して、上瀬野・下瀬野村へ入相地利用料として払っていると思われれます。

「札鎌拾八枚」のように、今なら「枚」と書くところを「牧」と書いてありますが、外にもその例は沢山ありますので、誤記・誤読ではありません。

杉風宛宛芭蕉書簡(元禄七年六月三日)にも、「常の内上々を拾牧調申候」とあります。

「枚」「牧」はその字形・読みが似ているので流用したのかもしれない。

「苦小牧」と書いて「とまこまい」と読ませます。

ここでも「牧」は「まい」です。「苦小牧」の語源はアイヌ語の「ト・マコマイ」。明治六年(一八七三)に「苦細」と漢字表記されましたが、「これではふ

りがなを付けない」と読めないことを理由に同年、「苦小牧」に換えたといえます。当時の人にとつて、「こまい」を表すのには「細」より「小牧」の方が読みやすかったからでしょう。「牧」を「まい」と読んでいた証拠です。

「苦細」を「小牧」に換えたのは開拓使の職員小牧昌業で、「小牧」とする積りが、つい自分の名前の「小牧」と書誤ったという説は再検討を要すると思つています。

三八便・一六便

「十八日三八便船を以荷物御送越之御状、今廿九日午後相届、夫々雀躍奉拝見候……十八日三八便荷物、箱荷一・合羽包二、何れも聊も無損無難相届、中之品、書付へ引合せ、相違も無之、夫々受取、家来之品ハ、夫々遣し取計、大ニ安心仕候、蚊屋も当分宿ニて借候処、今晚より心持能寝可申、半紙五束、別て都合、御心付難有奉存候、但、三八

便より廿一日出早道一六之状之方先二届、三八不届ニ付、三八宿も一兩日跡、両度しらへ候へ共、「未タ不届」と申、兼て「三八ハ埒明ぬ」と申事も承候へ共、「あとの鴈先ニ成り」申候、御笑ニ備へ申候」（慶応四年（一八六八）四月二十九日、父親宛 桜井元憲書翰）

十八日出しの「三八便船」で荷物を送ったとお手紙を頂きましたが、その荷物が今日二十九日午後が届き大喜びをしております……十八日出しの「三八便」の荷物（箱荷一、合羽包二）、リストの通り無事に届きました。家来の品はそれぞれ渡し、安心しました。蚊帳もしばらく宿で借りていましたが、今晚より気持よく寝ることが出来ます。半紙五束も有難く存じます。ただ、二十一日出しの飛脚便「一六」の手紙が先に届き、「三八」が届かないので、一、二日後「三八宿」で二度調べましたが「まだ届いていません」と言うばかり、以前から「三八は埒明ぬ」と聞いてはいましたが、「あとの鴈が先に

成る」という諺のようで、御笑ください。

大坂の桜井元憲に広島父親から「三八便荷物」が届いた、礼状です。「三八便船」とあるので、広島―大坂間の定期便船と思われます。「三八」は、三と八の付く日、月に六回運行したのではないかと思います。

「早道一六之状」なる言葉も気にかかります。

「尚々、此書状、一六便にて遣候事、くれ／＼も御面倒御苦労ながら、僕名代と思、可然奉願候」（文政十年（一八一七）宮原節庵宛『頼山陽書翰集』）

追伸、この手紙は「一六便」で送りました。御面倒なお願ひ（上京する山陽の母を広島まで出迎えるに行くこと、私の名代として、よろしくお願ひします。

「同月（九月）十一日、一六便ニテ留守状来ル」（明治四年（一八七二）『宮本愚翁日記』）

九月十一日、「一六便」で「留守状」が届いた。

「一六便」は飛脚の定期便のようです。これも月六

回配達したのかもしれませんが。

気助

「万一右官五間違ひ候はゞ、貴家か灰屋（橋本家）、油屋（亀山家）あたりにて、律義之人耆人、私手助、気助に可相成人、道中之間、同道仕度存候。或は右官五参候ても、道連とて上坂候人も出来候へば、猶更よろしく御座候」（文政十二年（一八二九）『頼山陽書翰集』）

もし官五の都合がつかないときは、貴家か灰屋（橋本家）・油屋（亀山家）などで律義な人を一人、私の「手助、気助」になる人を旅行中、同道したいと思います。官五が来ても、道連れとして一緒に上坂してもらえらるなら、なおさらよいと思います。

頼山陽が、母親を連れて帰京するに際し、旅中の介添を依頼している手紙です。「律義之人耆人」に介添してもらえば、私の手助けになり「気助」にも

なると書いています。

【氣助け】（『広辞苑』）

①元氣づけること。安心させること。また、そのもの。②慰労のために酒を与えて元氣づけること。また、その酒代。

今なら「心強い」とでも書きますが、「手助、氣助」も便利な言葉です。

氣ノツマラヌ

「貴家楼上へ御招之事、願候。母在京中に奉希候。同伴仕可参、一向氣ノツマラヌ老人に候。少年之樂も能解被居候。歌舞などは好之方也」（文政十二年（一八二九）『頼山陽書翰集』）

大津の岩崎鷗雨宛の山陽の手紙です。

母が在京中に同伴してお宅にお邪魔したいと思います。母は一向に「氣ノツマラヌ老人」で、少年の楽しみも能く解っており、歌舞などは大

好きです。

母親、梅颯は当時七〇歳、「ツマラヌ老人」ではなく、「氣ノツマラヌ」老人だと紹介しています。

【氣詰り】（『広辞苑』）

周囲または相手に氣がねすることが多く、氣持がのびのびしないこと。窮屈なこと。

「少年之樂も能解被居候」。好奇心の旺盛な人だったでしょう。羨ましい……。

弟隼・地鳥見

「態申遣

豊田郡本郷医師円識儀、先達て弟隼ヲ捕エ、暫飼置候処、地鳥見よりしらへ之上差出、不埒之段示し有之候由ニ候間、鷹捕エ候歟、或ハ見当候共、早速地鳥見又ハ御鷹役所へ可申出候」（文化十年（一八三三）『鶴亭日記』）

豊田郡本郷の医師、円識が、先ごろ「弟隼」を

捕えて暫く飼育していたが、「地鳥見」が取調べ、(藩庁へ?)差し出し、「不埒である」と叱られたという。今後鷹を捕えるか、または見つけたとき、早速地鳥見か御鷹役所へ連絡しなさい。

「弟隼」とは隼の一種だろうと見当を付け、調べましたがわかりません。

「右春渡り秋引年ニ寄り多少御座候

一鷲 一弟鷹

一兄鷹 一はい鷹

一このり 一つみ

一ゑつさい 一弟隼

一兄隼 一さし羽」(元治元年(一八六四)「御

領分諸色有物帖」)

「弟隼」「兄隼」「弟鷹」「兄鷹」……と隼や鷹の名が書いてあります。

【弟鷹】だい。(『広辞苑』)

大鷹おおたかのめす。鷹狩に用いた。↑↓兄鷹しょう

「弟鷹」が「だい」とは驚きますが、「兄鷹」はな

んと「しよう」と読むそうです。「だい」「しよう」は「大」「小」でしょう。大鷹の雄は全長約五〇センチ、雌は全長約六〇センチ。雌の方が「大」です。それでも「弟」と名付けられています。雌だからでしょうか。

「弟隼」は隼の雌とみて良からうと思います。さて、何と読むのでしょうか。

「地鳥見 藩主ノ放鷹場アル郡ニ限り之ヲ置ク、放鷹ノ障害ヲナス者、則放鷹場ニテ諸鳥ヲ獵獲シ或ハ故ナク之ヲ追フモノヲ取締リ、又諸鳥ニ障害ヲナストキハ之ヲ申牒、所分(処分)ヲ求ムル等ノコトニ従事スルモノ」(『淡交夜話』『三原市史』)

村圀ひ

「御圀粗社倉穀之外、郡ニ寄、村圀ひと唱へ、不慮之備へに致し来り候村方も有之、素り此筋之義は村々とも手厚相成度、当時全ク村圀ひと相唱へ候分、石数如何程有之候哉、左之模形之通乃至急取

約メ様子可申出、就てハ、成方之もの致出米、其儘村方へ預り置、利足ハ出米之者へ下ケ遣し、難渋もの相凌候程之類も有之候ハ、夫等も取約可申出もの也」(明治五年(一八七二)「続波多野家文書」御囲初・社倉穀の外に、郡によつては「村囲ひ」といつて、不慮の災害の備えをしてきた村方もあり、勿論是等については村々とも手厚くすべきことである。現在、「村囲ひ」がどれ程あるか、左の書式で至急取まとめて提出しなさい。ついては、「成方」のものが米を出し、そのまゝ村方で預り置き、利足は出米の者へ下げ渡し、難渋者の凌ぎとしている類もあれば、それも報告しなさい。

社倉法以外に、「村囲ひ」や、それに類する仕組をもつ村のあったことが分ります。「村囲ひ」は「村貯へ」と同義と思われます。

「嘉右衛門は父を嘉一右衛門といひて、春田村の里正たりし頃深く村民を憐み、元文の初めより、村貯へといふ事を始め凶年の備をなしおきけるに」

(天保十四年(一八四三)『芸備孝義伝』)

嘉右衛門の父、嘉一右衛門は、春田村の庄屋であつた頃、深く村民を憐れみ、元文の初めから、「村貯へ」といふことを始め、凶年の備えをしていたが……

「成方之もの」は「成立之者」と同義です。

「私共其外村内成立之者共申値、寄附出銀等仕」(文政十一年(一八二八)「鶴亭日記」)

私共やその外、村内で「成立之者」が相談し、寄附をして出銀し……。

けしからぬ

「尾州より小冊参候故、御めにかかけ候。さてもなごやのはいかい、けしからぬ物に相成候。みなしぐりの出来損ひにて、いやみの第一むねの悪き事にて、一句も句をなしたるものは無之候」(安永中頃、几董宛『蕪村書簡集』)

尾州から小冊子が届きましたのでお目に掛けます。名古屋の俳諧は「けしからぬ」物になってしまい、「虚栗」の出来損いのようで、いやみの第一胸の悪きことで、一句も句の体をなしたるものはありません。

【怪しからず】（『広辞苑』）

①あやしい。異様である。常軌を逸している。
②よくない。感心できない。わるい。③不法である。不都合である。不当である。④はなはだしい。いみじ。⑤並はずれている。すごい。

資料の「けしからぬ」は、言うまでもなく、「②よくない」の意味です。

「けしからぬ秋暑に候。いかゞ御しのぎ被成候や。打絶御無音、案申事に御ざ候」（安永六年（二七七七）『蕪村書簡集』）

けしからぬ秋暑ですがいかがが御凌ぎでしょうか。とんと御無沙汰続き、案じておりました。

「けしからぬ」秋暑は、「⑤並はずれている」の

意味で、現在はこのような使い方をする人はいないでしょうが、蕪村は「けしからぬ御草臥」「けしからぬ御馳走」「けしからぬ多用」など、多用しています。

「芥川貞佐伝 続崎人伝 貞佐は、備中笠岡、丸山久右衛門といふ人の子にして、幼名吉とよぶ、為人卓犖不羈にして、奇才あり、幼より諸事に、心をよせ、甚穎敏なれども、必其奥秘を極んともせず、されども、かりにも吾師とたのみたる人をば、尊崇し、一小冊に其教の旨趣を委く筆記して、他日の遺忘に備へ、これを乞食囊と題す、それが中の要を挙るに、弱冠にして、東涯先生に親炙し、親義別序信の端をきく、飛鳥井家にまうで、蹴鞠を学び、紫下濃を免るにおよぶ、四条家に随ひては、鯉鶴の庖丁までを伝へ、礼家によりては、食饗の式粧を知る、三弦は、野崎檢校の門に遊び、尺八は、明暗寺の徒にとふ、其余、茶、香、囲碁、双六、乱舞、連俳、狂歌、卜筮の術等、わたらずといふことなし、唯立花と恋のみちばかりは、未

師匠なしと、其末にかけるもをかし、中にも、狂歌をこととし、浪華の由縁齋が流を伝へて、よに用らる、……ある時、人々碁を囲みけるに傍よりけしからぬ助言しければ、碁を嗜むことも、人にしられぬ」（『芸藩通志』）

広島広瀬町（広島市中区）芥川屋の養子、芥川貞佐は囲碁の達人でもあります。が、「人々碁を囲みけるに傍よりけしからぬ助言」とは①⑤のどの意味でしょうか。広島にも面白い人がいたようです。

表裏

「当嶋去楮秋方、見込之毛上とは表裏之次第、気毒千万二候、他村ニては差て出来劣りニも不相見、過上村々も有之候」（寛政四年（一七九二）「是長村御触留帳」）

当島（能美島）の昨秋の楮の収穫は、見込とは「表裏」の次第で、気毒千万であった。他村ではそれ程出来劣りとも見えず、沢山収穫できた村も

あった。

【表裏】（『広辞苑』）

①おもてとうら。表面と裏面。外と内。表面と内心。②態度や言葉と内心とが一致しないこと。不正直。裏切り。うらおもて。かげひなた。③相対立する関係にあること。うらはら。反対。

能美島の楮の収穫は良いものと予想していましたが、結果は見込とは「③反対」であつたようです。

「御調郡は一体陽なる郡柄の様に相見え、尤早損所ニて、照続キ候得は大ニ作毛痛及難渋候事也、早稲を第一に作り、中田纔、晩田なし、尤近年は表裏に相成、早稲は至て纔ニ相成、中田・晩田専ら作り候事」（『芸備郡要集』）

御調郡は、大体が「陽」の郡柄のようである。もつとも、旱害を受けやすく、日照りが続くと作物は大きな被害を受け、難渋することになる。早稲を主に作り、中田はわずか、晩田は栽培しない。しかし、近年は「表裏」になり、早稲は

極僅かになり、中田・晩田をもつぱら栽培している。

早稲と中田・晩田の割合が「反対」になつていますが、なぜそのように變つたのか、記述がありません。

損料借

「春秋集註か、何ぞ三伝揃居候もの、急に書林へ被仰付可被下、是は拙、買入候てもよろしく候。損料借にても、右十匁極近々、買入とてもよろしけれども、」(文政十年(二八二七)大八木士信宛『頼山陽書翰集』)

『春秋集註』か、なにか三伝(『左氏伝』『公羊伝』『穀梁伝』)の揃っているものを急いで書店に申込んでください。これは私が買入れても「損料借」でも構いません。一〇匁くらいなら買入れてもいいのですが……

【損料】(『広辞苑』)

衣服・器物などを借りて、その損ずる代償として支払う金銭。借用料。借料。

すると、「損料借」は料金を払つて借用することです。

「諸御通り之節、ふとん・かや・呉座・水風呂之義、是迄ハ借寄せ道具多分ニ相見へ、以来随分海田市にて間を合候様御取計可被成候、御多人数にて不足之節は、只今迄之通村々へ割賦可仕候、但損料建之義も唯今迄之通、是迄ふとん・かや間々致紛失村々ニ迷惑ニ相成候間、自今以後は右紛失もの駅役へ御償ひ之事」(文化十二年(二八一五)『海田町史』)

幕府の御役人などが御通りになるとき、海田市宿(安芸郡海田町)では、蒲団・蚊帳・莫座・水風呂などの道具を多く他村から借り寄せているが、今後は海田市で間に合わせるようにしなさい。御多人数で不足するときは、今までどおり

村々へ割当てなさい。ただし「損料」を払うのは今までの通りである。これまで蒲団や蚊帳が紛失して村々に迷惑をかけているので、以後は紛失したら駅役で弁償すること。

海田市では蒲団など不足すると、「損料借」をしますが、勿論レンタルの店などないので、周辺の村から借りています。

頼山陽の場合は、専門書を買うか借りるかを検討しています。江戸時代には本代が高いので貸本屋が流行ったと聞きますが、まさか普通の貸本屋が専門書を取扱うとは考えられません。書店が貸本もしていたのではないかと想像しています。

うむとん

「塾中贈干温鮎箱、箱上 名物 干温鮎 芸州吉田
本町中屋伊兵衛
箱中 ゆてかたの事
一千うむとんの儀ハずいぶん湯たくさんにして、湯

玉たち候節、壺人前ニ付酒二勺も入、うむとんをふりさハき入、四五へんもにへ上ル度くにつら水を打、たき木をのけ、只少シのうちむし置候て、水四五へんもかへ、御あらひ、其まゝうむどんをしたみへうちあげ、御風味可被成候、たとへ二三時有之以ても、のび申事すこしも無御座候、其外品々うむとん御望次第御座候間、御用之節ハ被仰付可被下候、奉頼上候、以上

芸州吉田郡山 中屋伊兵衛「天保十年（一八三九）「鶴亭日記」

塾中、干温鮎箱を贈る。箱上には、「名物 干温鮎 芸州吉田本町中屋伊兵衛」とあり、箱中に「茹で方」が書いてある。

「干うむとん」は、タツプリとした湯が沸騰すると、一人前酒二勺を入れ、「うむとん」を振り捌き入れ、四五回も煮え上がるたびに「つら水」を打ち、焚木をのけ、すこし蒸して、水を四五回取換えて洗い、そのまま「うむどん」をしたみに打ちあげて、お上がり下さい。たとへ

二三時たつても伸びることはありません。その他にも「うむとん」は色々と御座いますので、御用の節はお申し付け下さいますようお願い上げます。」

吉田出身の塾生が贈ったものでしょうか、野坂三益は、箱入の干温飩の調理の仕方までその日記にメモしています。

【餛飩】（『世界大百科事典』）

「小麦粉でつくるめん類の一種。名称は奈良時代に中国から渡来した唐菓子（こんどん）の餛飩からの転化で、いつの間にか餛飩、温飩と書かれ、（うどん）（へうどん）と呼ばれるようになったが、中身は別物である。近世に餛飩といったのは中国の切麺で、日本の切麦（きぎ）にあたる。切麦はうどんより細く切るのが特徴で、熱くしたものを熱麦（あつぎ）、冷やしたものを冷や麦（ひやぎ）といい、そうめんと同じく点心のほか饗膳（きやうぜん）の後段にも供された。……干しうどんは近江の日野、羽後の稲庭（いななわ）、下総の行徳が有名であった。……（新島繁）」

「つら水」とは「ビックリ水」のこと。「したみ」は「笹」。

「温飩（うむとん）」は「うどん」と読んだのでしょうか。

地内木

「物産之事 木之類

……地内木 灰木 白洗木 金芽木……」（文化十二年（一八一五）、安芸郡矢野村「国郡誌御編集ニ付下しらべ書出帖」）

矢野村の物産で「木之類」の項目に、馴染のない木の名前が載せてあるので調べました。

「斉墩果 和名ちさのき、土人ちないと云、……花は白梅に似て葉の先とかりて香有り、枝間にさかりて咲実ハ山がらを飼ふ餌に用ゆ、搾りて油とす、処々山谷河側に多し」（天明元年（一七八二）『山県草木志』）

和名は「ちさのき(ちしゃのき)」、土地の人は「ちない」という。

【ちない】(『日本国語大辞典』)

〔方言〕植物。えごのき。鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、愛媛県

【えごのき】(『広辞苑』)

エゴノキ科の落葉小高木。高さは通常三〜五メートル。樹皮はやや赤みのある黒色で平滑。夏、短い総状花序の白色五弁花を下垂する。果実は小卵状球形、熟すと殻が裂けて褐色の種子を現す。種子から油を採り、材を床柱、天井の材とし、挽物細工・玩具・杖などに造る。果皮中にはエゴサポニンをふくみ、新鮮な果実を洗濯用に用いた。ロクロギ。チシャノキ。

「えごのき」は「挽物細工」に使われ、「ロクロギ」の別名をもっています。その用途は「傘用ちない木」(『広島県史』)のようです。

「傘 多くこれを作り、江戸に運致して売るも広し」

(『芸藩通志』 広島府物産の項)

広島城下が傘の産地であったとは、知りませんでした。

「ロクロが日本で普及し始めた一六世紀頃である。ロクロに(傘の)骨をまとめて開閉を可能にするという知恵は、すばらしいものであった。屋根を支える親骨用のロクロ、親骨を支える子骨用のロクロ……それゆえ、乱暴な開閉や無数の開閉に十分に耐え、しかも日光にも雨にも影響されないで、細工の容易さ材質が求められる。エゴノキ(落葉性中高木でわが国各地の山野に自生)は、生の時は柔らかく加工しやすいが、乾くと固く緻密になる。しかも軽くて粘り強い性質がある。なお、同系列のハクウンボクも材料になる。エゴノキはチナ、チナイ、チオオ、チンネ、チナワ、チナエ、チナネなどの別名があり、その幹で腕くらいの太さのものを利用する。ハクウンボクは、その葉が大きく便所紙にも使用されたためか、ヒトツバの別名もある。幹は強く農具の柄にもなり、太鼓のバチ

になるチナ（広島県の通称）と対称的である。エゴノキがなぜか岩国周辺に多いという。岩国市の南部には六呂師の地名も残っている。」（広島市郷土資料館『広島市における和傘づくりとその技術』）

【灰木】（はいのき）

ハイノキ科の常緑小低木。本州の南畿以南、四国、九州の山地に生える。高さ一〇メートル、径三〇センチに達する。葉は互生し長さ三〜八センチの狭卵形で、先は尾状にとがり、縁に鋸歯がある。初夏、葉腋のまばらな総状花序に三〜六個の先が五裂した小さな白い花が咲く。果実は卵形で紫黒色に熟す。幹・葉を焼いて灰からあくをとる。いのこしば。

【白洗木】（しらさき）

姫榊 ヒサカキ ツバキ科の常緑小高木。暖地の照葉樹林中に多い。高さ三メートル。葉はやや茶の葉に似て、革質、楕円形、細鋸歯がある。春、黄緑色の小花を密生、異臭あり。球形紫黒色の液果を結ぶ。サカキの代用として枝葉を神前に用いる。また、

焼いて灰汁あくの灰とする。材は堅く、細工・建築材。いちさかき。ひさぎ。野茶。

【金芽木】（かなめぎ）

要の木。カナメモチの別称。バラ科の常緑小高木。新葉は紅色を帯び、また落葉前も紅葉。五〜六月頃多数の小白花をつけ、秋、紅色の実が熟す。暖地に自生。庭木や生垣とする。古来扇の骨としたことによる命名ともいい、車軸・鎌の柄などにもする。アカメモチ。ソバノキ。

番田子

「此度大久保彦左衛門殿小出織部殿近々御通ひ有之、右之通相心得可申者也

一御本陣御門左右立砂、番田子出し置掃除可仕候事」

（天保七年（二八三）「鶴亭日記」）

この度、大久保彦左衛門殿・小出織部殿が近々四日市をお通りになるので、以下の通り心得な

さい。御本陣御門の左右に立砂をし、「番田子」を出しておき、掃除をしない。

浜田城引渡御用のため、大久保彦左衛門と小出織部一行が西国街道を通り、九月廿日には四日市駅で昼休みをとっています。迎えるにあたって、掃除をして門の左右に「立砂」をし、「番田子」を置くよう指示しています。

【盛砂】（『古文書用語大辞典』）

立砂とも。貴人を迎えるときに玄関先などに盛った砂。

「番田子」とは何か、分りませんが、「田子」は「担桶」でしょう。

【担桶】たご。（『日本国語大辞典』）

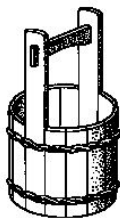
①水などを入れて、天秤棒などになうおけ。
にないおけ。たごおけ。②（「こえたご（肥桶）」の略）糞尿を入れて運ぶ桶。こえおけ。たごおけ。「方言」①水や肥料などを担って運ぶ桶。
②手おけ。③水くみ桶。水おけ。④肥料を運ぶ

桶。こえたご。⑤桶。

【担桶】たご。（『近世上方語辞典』）

水・肥料などを入れて担う桶。「たんど」ともいい、今はタンゴとのみいう。文政四年カ・浪花方言「たご。荷桶也」安永四年・物類称呼四「畿内にて、たご（担桶）といふを、江戸にて、になひといふ（これになひをけの略也）」「たごとは、をけの惣称也、上方にては、ないたご、かたごといふ、たごとはかりいふ時は、畿内西国共に水桶也、東国または豊後にては、たごと云ば糞器をいふ」

門の左右に置くのですから、「水桶」でしょう。用途を道路の打水とすれば、「手桶」（図は『広辞苑』）で充分の筈です。
「番く」の意味はどうにも分りません。



地百姓・入百姓

「当村古地新開高分り様子申上書附 アキ郡矢賀村

覚

一 高五百七石四斗式升九合

古地・新開共

三百九拾八石七斗六升七合

古地

内

三百九拾八石式斗八合六勺

地百姓

式拾石五斗五升八合四勺

入百姓

但し去丑年ニ高壹石三斗三升七合

地百姓より入百姓へ增高ニ相成申候

百八石六斗六升式合

大須新開

内

九拾壹石式斗九升七合三勺

地百姓

拾七石三斗六升四合七勺

入百姓

但し去丑年ニ高式石三斗五升六合四勺

地百姓より入百姓へ增高ニ相成申候」

（慶応二年（一八六六）「矢賀村覚書」）

これは安芸郡矢賀村（現、広島市東区矢賀）の古地と新開の高の内訳を報告したものです。まず古地（従来からある土地）と新開（新開発の耕地など）に二分しています。また、それぞれについて地百姓と入百姓の持高、増減を記しています。

【入百姓】（『広辞苑』）

江戸時代、他村から転入した農民の称。

【入百姓】（『古文書用語大辞典』）

村入とも。他村・他地域から移住させて手余地や荒地を耕作させた百姓のこと。

【入百姓】（『日本国語大辞典』）

江戸時代、手余地や荒蕪地の多い村で、他から移住させて耕作にあたらせた百姓。＊財政経済史料一八・官制・地方職制雑・寛政元年閏六月「奥州之内手余地有之場所へ、無罪之無宿共差遣し、致入百姓、猥に離散不致ため片鬢剃、尤當時之内は夫食其外相応之御手当被下、右之内にも出精之者は追々高持致し片鬢立、宗門村人

別へも加候様取計」

どの辞書も「入百姓」を「他村・他地域からその村に入り、現在はその村民となった百姓」と説明しています。しかし、この資料では地百姓と対比させて入百姓の持高が記載してあります。古くからの住民か、新しい住民かを区別して、藩府に報告しなければならぬ特別な事情があるとは考えられませんが、

【入作】いりさく。（『広辞苑』）

江戸時代、村内の耕地を他村の居住者が耕作すること。また、その人。↑↓^{でさく}出作

入作をする（他村の）百姓、「入作百姓」を「入百姓」というのなら、矢賀村の内、自村と他村の農民の持高を対比させるのも意味のあることでしょう。

大辞典の大合唱の前では、「入百姓」には「入作百姓」の意味も含まれることを主張しにくいものがあります。

高分り

「沼田郡相田村（御明知方御給知方）高分り并広嶋迄里程附

覚

沼田郡相田村

一高三百六拾貳石貳斗内

四拾壹石九斗三升七合

御明知方

七拾八石

浅野左治馬様

七十五石七斗貳合

高野直衛様

百拾貳石貳斗三升六合

関左内様

三十貳石五斗六升六合

坂田吉太郎様

貳十壹石七斗六升

寺尾弥祐様

ベ三百六十貳石貳斗

一里程貳里拾壹丁 相田村より広嶋御高札場迄

右之通ニ御座候、已上

申三月四日

庄屋直三郎」（文化九年（一

八二）「横山家文書」）

これは、沼田郡相田村（現、広島市安佐南区相田）の「高分り」などを記した報告書です。相田村は明知・給知入交じりの村で、その内訳が書いてあります。前回の記事「地百姓・入百姓」中の、「当村古地新開高分り様子申上書附」と題する矢賀村資料にも「高分り」という言葉が使われています。ここでは「古地」と「新開」の高の内訳が記載されています。「高分り」の「く分り」は「早分り」の「く分り」（分ること）と同じと考えるなら、「高分り」とは「高の内訳が分ること」「高の内訳」と思われます。

得貴意

「残桜記之事、去年十月申上候処、御蔵書御かし可被下候よし被仰下、忝奉存候。然処旧臘屋代翁よりやうく允借せられ候間、早速写し取申候。此段先便状中ニ得貴意候故、御承知ト奉存候。依之御かし被下候ニハ不及候。万々奉謝候」（文政十二年（一八一九）篠斎宛『馬琴書翰選』）

去年十月にお願いしていました御蔵書の『残桜記』（伴信友 撰）を御貸し下さること、誠にありがとう御座います。しかし昨年十二月に屋代翁（屋代弘賢）からやつとお許しが出て借用し、早速写し取りました。このことは先の手紙で「得貴意」ましたので御承知のことと思います。そういう事情で御貸し下さるには及びません。万々ありがとうございました。

【貴意】（『広辞苑』）

あなたの御意見。お考え。御意。^{ぎよい}「ーを得たくお伺い申し上げます」

【御意を得る】（『広辞苑』）

①お考えをうけたまわる。②お目にかかる。

「得貴意」（貴意を得る）には、「お知らせする」の意味もあることが解ります。（ブログ「得御意」（06/08/10参照）

無地高

「今般被仰出候無地高并年々引と唱候高内引、従前高掛り取立物当末年より免除之義ニ付、兼て御布令之趣ニ候得共、其廉々之内いづれ朝廷へ御窺ニ可相成義ニ付、先ツ取約候義は見合せ置可申もの也

未七月 賀茂郡農務方」（明治四年（一八七二）『広島県史』）

このほど指示のあった、「無地高」や所謂「年々引」などの「高内引」、従来の「高掛り取立物」は、今年（明治四年）から免除するとの布令があつたが、その条々のうちいづれか朝廷へ御伺いをするので、差当たりは集約は見合わせなさい。

この短い文書の中に難しい用語が沢山出てきます。まず、「無地高」から。

「無地高之事 在来り上中下の反別に石盛を掛けて寄せ付るとき只今までの割付高に不足分の高を無地高といふ、……又ハ作毛の外に桑・楮・茶・漆など多分ある積りに立て米に直し、高に結び入れて村高を殖したるもあり、是等の類を小物成高と名目を附るもあり、又ハ無地高と唱ふるもあり、……或ハ古来より何ゆへ無地高に成たるやも知らず、仕来りにて村方にても知ざる類多し、何れにしても田畑反別に石盛を掛けて高の余りたるは都て無地高なり」（『地方凡例録』）

従来の上中下の土地の面積に石盛を掛けて合計したとき、今までの村高に不足するとき、その不足分を「無地高」という。……または作物の外に桑・楮・茶・漆など多くの収益が見込まれるとき、それらを米に直して村高に加えることもある。これらを「小物成高」というが、「無地高」ということもある。

この説明ではよく解りません。

「無地高ハ高ありて地所なきをいふ、是ハ上中下反別に其位切の石盛を懸高を寄立る時、水帳の村高より不足す、其不足高の地所無ことなり」（『算法地方大成』）

「無地高」とは高はあるのに地所のないことをいう。これは上中下反別にその位の石盛を懸けて高を合計するが、水帳の村高より不足することがある。その不足高の地所がないことである。

「無地高」とは「高ありて地所なきをいふ」と、ズバツと先ず結論を示されると、思わず「ハイ、解りました」と大声で返事をしたくなります。本来は、「地所」があるからこそ「高」が生れる訳ですが、何かの理由で「地所」が消滅したのに「高」だけが残されて「高ありて地所なき」状態になります。『算法地方大成』は、そうなる理由を次のように説明します。

「国々都て々様の類多きハ、検地の節竿違ひ等にあることなり、又古来の山崩川欠水堀川成等永引に

引べきを引かずに仕来り、当持主村役人もわきまへず、反別より高の多きもあり」（『算法地方大成』）
国々で「無地高」が多くみられるが、そうなる理由は、①検地のときの竿違ひ（測量の間違）、②昔からの山崩・川欠・水堀・川成等により「地所」が消滅したのに、「永引」にしないで「高」だけが残され、当の持主や村役人も弁えない。

『地方凡例録』は、③桑・楮・茶・漆などの収益を米に直して村高に加える場合をあげています。

「再検地……」の文言は、「無地高」の存在が明確に示される事情を説明したものにすぎません。

枝葉末節をクドクドと解説されると、本来の意味が掴めなくなります。「無地高ハ高ありて地所なきをいふ」から説明が始ると、私たち素人にも理解できます。

広島藩の文書では「無高地」はほとんど使われていません。これに代えて「閭高^{かつきたか}」が見られます。蛇足ですが、「無地高」と「無高地」は違います。

「地の無い高」と「高の無い地」（租税賦課の対象とならない村高に入っていない土地）の違いです。

年々引・高内引・高掛り取立物

「年々引と云ハ人作にて拵へたる引物にて、たとへば陣屋敷・郷藏敷・堤敷・溝代・道代などの、其土地に入用にて、なくて叶ハざる場処は、作物も仕付ず年貢諸役も勤めず、古往今来起返さず、潰れに成たる地を、年々引高に相立る分と取箇帳とりから其外諸帳面にも記す、是を年々引と唱ふ」（『地方凡例録』）

「年々引」というのは、人為的な原因でこしらえた「引物」であつて、たとへば陣屋敷・郷藏敷・堤敷（堤防の敷地）・溝代・道代などの、その土地に入用な場所は、作物も植えず、年貢諸役も納めず、昔から現在まで起し返さず、潰れになった土地を、年々引高として取箇帳などの

諸帳面にも記している。これを「年々引」という。

【年々引】ねんねんびき。（『古文書用語大辞典』）
陣屋敷・郷藏屋敷・堤敷・溝代・道代など、公共用地として利用される土地について毎年年貢を免除すること。

【高内引】たかうちびき。（『世界大百科事典』）
江戸時代、田畑が災害によつて荒廃したり、道や堤に地目が変更されるなど、年貢を免除または軽減すべき事情が生じた場合、その分を引高として村高の内から控除することをいう。高内引には年々引、連々引、一作引の三種がある。
年々引は、なんらかの必要があつて人為的に地目変更がなされた土地など、もとに戻る見込みがない場合に適用され、永引高として恒常化されるものである。郷藏屋敷引、田畑成引、堤敷引、溜井敷引、道代引など多くの種類がある。
これに対し、山崩れ、洪水などの天災によつて

高内引となった土地は、連年おこしかえし起返、原状に復しうるものであるから連々引と称し、年々引と区別された。川欠引、永荒場引、石砂入引、池成引などがこれにあたる。また一作引とは、風水害、干ばつ、虫害などで作付不能となったり、立毛を損毛して收穫皆無となった場合に、その年に限り高内引にするもので、当引とも称する。

〈安藤 正人〉

【高掛り】（『広辞苑』）

村などの石高に応じて賦課されること。石掛り。

「高掛り取立物」とは村高に応じて賦課されるもの

で、広島藩では、壺歩米や厘米がこれに当ります。

摺墨・池月

「三宅左近者志和之人也、業針医在国近村、其話曰、源頼朝所愛之馬摺墨者出志和西村、今仍有馬神社」（文政六年（一八三三）「鶴亭日記」）

三宅左近なる者は志和（東広島市志和）の人なり、針医を業として国近村（東広島市黒瀬）に在り、其の話に曰く、『源頼朝所愛の馬、摺墨は志和西村より出づ、今、仍て馬神社有り』と。

名馬摺墨は志和西村（東広島市）から出たという話です。

【宇治川の先陣】（『広辞苑』）

一一八四年（寿永三）木曾義仲が源義経を防いだ宇治川の合戦で、義経勢の佐々木高綱・梶原景季がそれぞれ源頼朝から与えられた名馬池月いづき・磨墨するすみに乗って先陣を争ったこと。

「四満津 西宗村にあり、相伝ふ、昔、名驢磨墨を出すの地なりと」（『芸藩通志』）

四満津は西宗村（現、山県郡北広島町西宗）にある。

昔、名馬磨墨を出した地であるという。

「山県郡都志見村（現、北広島町都志見）。……地内には名勝駒が滝があり落差二〇メートル、滝つぼの裏に石

窟があり観世音が祀られている。瀑布記には、長年間空海大師が暫く居住したとあり、堂宇・神祠・鳥井跡も残り霊山勝地の道場跡といわれている。隣村西宗の産といわれた名馬池月・摺墨が此地に遊牧し、鍛錬した故事にちなんで駒が滝といわれる。」（『角川日本地名大辞典』）

摺墨だけではなく、池月もこの産だといえます。

「山県郡内にある史蹟名勝天然記念物 勇が松 原村西宗西浄士平……勇が松は樹齢五百年と推定さる。千里の能を謳われ、宇治川先陣に先登の誉れを今日に伝えたる名馬池月を、この松に繋ぎたることありとの伝説ゆかし」（『山県郡史の研究』）

おこたる

「拙病痊可の御悦び御叮嚀被仰越、忝奉存候。去年の大病はいよ／＼おこたり果候。眼疾ハとかく同様にて、あしくもならず、よくもならず候。少々毒をたへ候ても、ふかくあたり候事もなし。又薬

を用ひ候ても、きゝもいたし不申候。これハ老病にて、せんかたなく候。左眼、此分ニ候へハ用ハ弁シ候間、今ハ懸念不致候。只腰痛にて、歩行ハ勿論、家内のたちまハリも不便にて、困り候へとも、是も老人のあたりまへと存候間、ともかくもいたし罷在候間、乍憚御安慮可被成下候」（文政十三年（一八三〇）篠斎宛『馬琴書翰集』）

私の病の全快にご丁寧なお手紙を頂きありがとうございます。御座います。去年の大病はようやく「おこたりの果」てました。眼疾の方は相変らず、悪くもならず良くもならず、少々毒を食べても、酷く当ることもなく、また薬を使っても効きもしません。これは老病ですから仕方ないことです。左眼はまだ使えますので懸念はしていませんが、腰痛のため、歩行は勿論、家内での移動も不便で困っています。これも老人には当り前のこと。なんとか過していますのでご安心下さい。

【怠る・惰る】（『広辞苑』）

①病勢がゆるむ。病気がなおる。

「老人力」が付き始めた者がこれを読むと、馬琴の性根の据わり方には感心するばかりです。

晦日著

〔端裏書〕未／十月十一日出 同晦日著 十二月十一日返事出ス（天保六年（一八三五）篠斎宛『馬琴書翰選』）

これは、殿村篠斎宛、馬琴の手紙の端裏書です

【端裏書】（『岩波日本史辞典』）

文書の端（袖）の裏部分に書加えられた文言。端裏は文書を折りたたんだとき表面となることから、ここに文書の表題・差出者名・日付等を記して見出しとしたもの。端裏書は、受理者が後日整理のために書付ける場合と、文書の伝達過程で副状そえじょうや遵行状が加えられる際に書加える場合がある。後者を端裏銘・裏端書とよんで区別する場合もある。

十月十一日付の馬琴の手紙が、同月三十日に「著」、十二月十一日に返事を出したとの内容です。「晦日著」は「晦日着」を間違えて書いたものかと辞書を見ました。

【著】（『漢字源』）

〔動〕つく。つける（つく）。くつついて止まる。

また、くつつける。ある場所にくつついておちつく。（同義語）↓着。「定著（＝定着）」「土著（＝土着）」

土着）「帰著（＝帰着）」

【著】（『広辞苑』）

「着」の本字。

成程、恐れ入りました。当時は、篠斎は「若山へ御退隠」のほずですから、江戸から和歌山まで届けるのに二〇日近くを要したようです。

「九日。晴。昼九つ時頃讃州多度津湊へ著船。金刀比羅宮参拝。夜五つ時頃人車に而帰船。」（森鷗外『伊沢蘭軒』）

呼名

〔周州大道〕

上田少藏様

頼徳太郎

貴答

（文政元年（一八一八）頼山陽書翰）

〔十月廿七日〕

菅太中 ときのみ 晋帥

上田庄藏様

（文化八年（一八一八）菅茶山書翰）

〔

菅太中

三月廿五日

上田少藏様

侍史

（文化八年（一八一八）菅茶山書翰）

〔上田正藏様〕（意戒書翰）

いずれも上田少藏宛書翰の宛名書です。

〔上田堂山 名は光陳、一名修、通称少藏、号を堂

山、俳号を不夕といい、其の居を不昧居と称す、

周防大通の素封家にして家世酒造を業とし大庄屋

格たり、資性仁慈にして能く善を奨め窮を救い、

また公共の事に尽し、又頗る学を好みて士を愛し、

殊に書画器物の趣味あり、当時文人墨客乃至知名の士の来訪する者常に門に絶えず……」（『近世防長人名事典』）

「少藏」「庄藏」「正藏」と色々な文字が使っています。菅茶山は自分の名前を「太中」と書いていますが、「太仲」も使っています。

「当時は、近代とは異って、世間も場合によつては当人さえも、人名について宛字を用いる呑気な風があつた。これは新聞雑誌などがないから活字情報が発達せず、人名は耳で聞くことが多かったために、自然に発生した習慣だったろう。現に菅茶山のような学者でさえ、同じ自分の詩集中に、同一人物の名を、同一発音の別の字で記している場合が、例外でない」（中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』）

最近、「こだわりの」という嫌な宣伝文句をよく耳にしますが、

【こだわる】（『広辞苑』）

①さわる。さしさわる。さまたげとなる。②気

にしなくてもよいような些細なことにとらわれる。拘泥する。③故障を言い立てる。なんくせをつける。

些細なことに大騒ぎすると、大切なことが疎かになります。「些細なことにはとらわれない」当時の人を見習う必要があります。

巻頭・軸

「曩者淳田之貞芝将奉納俳諧発句於沼田庄小片嶋八幡宮篤老園詞宗撰之、予亦下評也」

芸州沼田之庄 小片嶋八幡宮永代奉額
俳諧発句四季混雑一万句集、

額上五十吟、入花五銅

篤老園大宗匠撰

巻頭軸一反 軸奥嶋一反

二ヨリ十迄硯蓋 十一ヨリ末迄塗枕

花評五十吟 西条柴籬

巻頭烟草盆 軸菓子盆

二ヨリ十五迄茶台 十六ヨリ末迄水入
句集所 広嶋世並屋伊兵衛

四日市池田屋忠介

尾道小物屋友四郎

松山中屋伴蔵

願主 桃径里仙 会林 貞芝

申六月限

篤老園宗匠撰額上五十吟

ひるがへるものや火桶に置く手さへ ヌタ 芦角

(以下略) (文政七年(一八二四)「鶴亭日記」)

さきに、淳田(惣定村)の貞芝(久保和作)が沼田庄(現三原市沼田東町)小片嶋八幡宮への俳諧発句奉納を計画した。篤老園詞宗がこれを撰し、私(柴籬、野坂三益)も評を下した。

これは、その《募集要項》です。

小片嶋八幡宮に奉納するため、俳諧(季節不問)一万句を集め、そのうち秀作五十吟を額に記して掲げる。応募する者は一句五文を添えて、広島の書肆、世並屋伊兵衛・四日市(西条)池田屋

忠介・尾道小物屋友四郎・伊予松山の中屋伴蔵に六月までに投稿して欲しい。篤老園大宗匠が撰する五十吟で、巻頭に選ばれた句の作者に絢一反、軸(末尾)は唐棧一反を、二番から十番までは硯蓋を、十六番以下は塗枕を進呈する。ほかに西条の柴籬(野坂三益)の選ぶ五十吟には、巻頭は煙草盆、末尾は菓子盆、二番から十五番は茶台、十六番以下は水入を進呈する。この奉納額の願主は淳田の桃径・里仙、会林(連絡場所)は貞芝である。

【軸】(『広辞苑』)

④(巻物の軸②に近い所の意。卷子本でなくともいう)書物の末尾の部分。巻軸。↑↓首。⑤(軸④に記す意から)俳句・川柳などの巻の末に記す点者の句。

そういえば、「巻頭」も巻物から出た言葉でした。

「鶴亭日記」は「篤老園宗匠撰額上五十吟」と「柴籬花評高調五十吟」を書きとめています。

とち葺

「同 一隅大明神 祭神熊野忍隅命

梁耄間半桁式間 正面巳午方 とち葺

拝殿 梁耄間半桁式間半 茅葺

祭日 九月九日

社人立上肥後同村上行部抱

社領無御座鎮座年暦相知れ不申候

弓場山 一天神

梁耄間桁耄間 正面未ノ方 そ木葺

祭日 十月廿五日

社人宇賀村信野石見

同当村立上備前抱

同同村上行部

社領無御座鎮座年暦相知れ不申候」(文政三年(1820)

「甲奴国郡志」『甲奴町誌』)

大歳山の隅大明神の祭神は熊野忍隅命、御殿は梁耄間半、桁式間、正面は南南東に向き、「と

ち葺」、拝殿は梁壱間半、桁式間半で「茅葺」。祭日は九月九日、社人、立上肥後と村上行部の抱えである。社領はなく、鎮座の年暦不明。

弓場山の天神の御殿は梁壱間、桁壱間、正面は南南西向き、「そ木葺」。祭日は十月二十五日。社人は宇賀村信野石見・同当村立上備前・同同村上行部の抱えである。社領はなく、鎮座の年暦不明。

「茅葺」は知っていますが、「とち葺」「そ木葺」は初耳、調べてみました。

【棚葺き】とちぶき。（『広辞苑』）

棚板^{とちいた}で屋根を葺くこと。また、その屋根。

【棚板】とちいた。（『広辞苑』）

屋根を葺くのに用いる板で、厚さ一〜三cm、幅九〜一五cm、長さ六三cm以下のもの。古来、能舞台や堂社の屋根に用いる。

【粉葺き】そぎぶき。（『広辞苑』）

粉板で屋根を葺くこと。また、その屋根。

板葺には柿^{こけり}葺、木賊葺、棚葺、長板葺など、色々な材料が使われています。

「民戸市中家並大かたわら葺、尤火除のため瓦葺も数々御座候」（文化十一年（一八一四）海田市国郡志御編集に付下彈書出帳『海田町史』）

民家は市中の家並でも大部分が藁葺ですが、火除のため瓦葺も数々あります。

西国街道の宿場町、海田市でも大部分が藁葺です。『知新集』（文政五年（一八三三）には、広島城下各町の職人の人数が載せてあります。塩屋町（現、中区大手町二丁目）の記事は、

「本道口中医一人 針医一人 大工五人 柿葺二人 取葺二人 壁塗三人 桶屋一人 木挽一人 刀鍛冶一人 鍛冶一人 石工一人 紺屋一人 同手間二人 傘張二人 塗師二人 指物師一人 筆結一人 表具師一人 縫物師一人 葛屋市郎兵衛 袋物師二人 衣師一人 衣屋十三郎 座頭四人」

この中に「柿葺二人 取葺二人」が見られます。

【取葺き】とりぶき。(『広辞苑』)

屋根の葺き方。粉板そぎいたを並べて、石や丸太などを押えにしたもの。

広島城下(新開組も含む)の屋根屋を『知新集』から集計すると、柿葺四一人、取葺二〇人、茅葺三三人でした。城下でも板葺、茅葺の家が多かったと思われる。

「瓦師」は一三人を数えますが、これは船入村の「瓦焼」に住む瓦を製造する職人ですから、屋根屋ではありません。瓦で屋根を葺く職人はいたはずで、これを何と呼んだのでしょうか。

馬足

「作候穀恵米故、青米・赤糲・碎米にて至て米性悪敷、御廻米仕候得は欠減夥敷、殊更湊迄は通船無之、坂道にて十月より翌三月迄寒所雪降馬足は勿

論人足等も難立難所、殊ニ村ニ寄り平生ニても三日は相懸り不申候ては津出難仕難儀仕候ニ付、他国米湊にて買納仕候得は、所出生米とハ直段壱石ニ付式拾目余高直ニ御座候、其上湊入用・納入用等多分相懸り百姓内損多、御廻米仕候てハ極難之村々相続難仕段御願申上候」(寛政五年(一七九三)箱田・細川家文書『広島県史』)

出来る米が悪米で、青米・赤糲しいな・碎米など米の性が悪く、輸送すれば大量に目減りします。

船では運送できないので坂道で運びますが、十月より翌三月まで寒所のため雪が降り、「馬足」は勿論、人も通りたい難所、村によっては津出しに三日を要します。他国米を港で買って納めれば、所の米とは直段が壱石につき式拾目余高直です。その上、港の経費・納入経費が多く、百姓は損失が多く、年貢米を輸送しては極難々な村は潰れてしまいますので、(石代納の許可を)御願いたします。

これは、甲奴・神石・安那三郡の幕領三六カ村の

連名で、石代納を願ひ出た文書です。

【石代納】こくだいのう。（『広辞苑』）

江戸時代、租税収納方法の一。年貢米の代りに貨幣を以て上納すること。

広島藩では、「石代納」に代つて「差紙納」「差次払」という言葉を使います。

「当御年貢米之外、上ケ米・諸押米類ニ当り、差紙納之義、歟出候ニ付、格別を以大辻左之通聞届遣候条、此旨相心得可申、尤米納増之義ハ兼て御趣意も有之候事故、此余可成丈ケ差次払相減シ、米納相増候様無油断可取計者也

一米四百四拾八石壹斗」（文政十二年（一八二九）「野間家文書」）

今年の御年貢米のほか上ケ米・諸押米類などの納入について、「差紙納」を歟願しているの、特別に次の通り許可する。もつとも御意向もあり、できるだけ「差次払」を減らし、「米納」を増やすようにしなさい。

「明神峠登り五丁下り四丁、急坂にて御座候、此道三原尾道より稲草村通路ぬけ道にて戸下谷にて大道に出申候、但馬足ハ立不申候」（文政三年（一八二〇）『甲奴町誌』）

明神峠の登りは五丁、下りは四丁。急坂で、この道が三原・尾道より稲草村への通路のぬけ道で、戸下谷で大道につながります。ただし、「馬足」（馬による輸送）は立ちません。

町借押米

「 態申遣ス

一米三拾石 林司馬之丞分

右は村方町借押米申付置候所、甘メニ相成候条、此旨相心得、給主納取計可申もの也
子十月 世羅郡御役所

萩福田村当分当分庄屋伊右衛門」（元治元年（一八六四）「郡用帖」）

萩福田村に対し、林司馬之丞分の米三拾石を「町借押米」とするよう命じていたが、「甘メ」になつたので、給主に納めなさい。

「町借押米」という言葉がキーワードです。

「広島藩では、中期以降いわゆる町借押米（まちかひし）の制が行なわれている。給人が代官の保証で商人から借米し、秋の收穫時に給人元に運ぶ以前に給知村の貢米を押えておく制度にほかならない。多くの給人が借米していることが知られるが、上米と押米とで年貢米を全部もってゆかれる知行地も珍しいことではなかった。」（『広島県史』）

【給人】きゆうにん。（『広辞苑』）

③江戸時代、藩主から知行地を与えられた侍。

【押える】（『広辞苑』）

③動いたり出たりしないようにおしとどめる。

『広島県史』は、「給人が代官の保証で商人から借米し、秋の收穫時に給人元に運ぶ以前に給知村の貢米を押えておく制度」と説明しています。この説明

で少々気になるのは「借米」ですが、「借金」と読替えて理解しておきます。

給人の収入源は知行地の年貢米ですから、借金の返済はこれから出ることになります。普通は本人が返却しますが、この場合は代官が一枚噛んでいまして、給人の懐に入る年貢米を「押え」て（知行地のある村に対して給人に渡さないよう指示して）、それを返済に回す制度と思われます。いわば借金の（源泉徴収）です。

この文書の場合は、どうした訳か、「押え」を解いた指示です。

免割・面取立

「免割とは日々月々村方諸入用之米銀ヲ秋ニ至りたゞミ上ケて免ニ直し、百姓持高に割賦するをいふ、此諸入用物ハ一歩米・厘米・小物成、庄屋・組頭・筆取給、紙墨筆油代・米払之欠米雑用・寺社初穂銀、諸賄用・諸普請・村役人飛脚等之出飯米、

未進百姓之かつき米、浦嶋辺之村ハ御船手へ懸ル諸入役、惣ベ郡々村々諸入用之内免割ニベ取立候所もアリ、面取立又ハ家取立と申様ニ少々風替り之方角もアリ、たとへハ津出シ米致ニも駄賃米を免割ニ仕ル所もアリ、又々銘々納主より納高ニ応ベ当分々々ニ賃米相そへ出セ候所もアリ、小物成ニても家々付取立村もアリ、免割取立之村もアリ」(天明二年(二七八)『芸州政基』『広島県史』)

免割とは、日々月々の村方の諸入用の米銀を、秋になつて集計して、税として百姓の持高に比例して割賦することを言う。この諸入用とは、一步米・厘米・小物成、庄屋・組頭・筆取給、紙墨筆油代・米払の欠米雑用・寺社初穂銀、諸賄用・諸普請・村役人飛脚等の出飯米、未進百姓之かつき米などであり、浦嶋辺の村では御船手へ懸る諸入役も含まれる。たいていの郡々村々の諸入用は「免割」で徴収するが、「面取立」または「家取立」など少々風変りな徴収をするところもある。例えば年貢米の輸送費を「免割」

とする所もあり、また納主より納高ニ応じて相当の賃米を添えて出させる所もある。小物成でも「家々付取立」の村もあり、「免割取立」の村もある。

この説明は、「免割」と「面取立」の違いを解説したものです。この記述には誤解を生む曖昧な表現があります。「村方諸入用之米銀」は、紙墨筆油代などの「村が必要とする諸経費」と読めそうですが、藩に納入する「一步米・厘米・小物成」も含まれているので、「村の諸負担」と広く理解すべきです。「免割」は、村の諸負担を百姓の持高を基準にし、これに比例して割当てる徴税の仕方です。

これに対して「面取立」は、大工など「特定の諸個人を対象として徴収する方法」(『廿日市町史』)です。「面」は「顔」＝「人」ですから、人を基準にした課税方法という意味で「面取立」というのでしょう。ほかに、家を基準にする「家取立」もあるようです。

ぱつと致

「此度海防御用掛被仰付候義は、此先キ異船の様子次第にては不得止公辺ニ於てモ御打払之御覚悟ニ相見、就ては御手当筋之義行届候様此度御演達之趣モ有之、其期ニ臨御不手都合之義有之候ては難相済、依之各御用掛被仰付候、尤是等之義ぱつと致候ては忽人氣ニ拘り不可然候間、内密各限り被相含厚可被申談候」(安政二年(一八五五)『広島県史』)

この度(五人の者に)海防御用掛を命じたのは、将来異船の様子次第では幕府もやむを得ず御打払の御覚悟のようで、その手当をしつかりするようとの指示もあり、その時になつ慌てるようではないので、お前たちに御用掛を申し付けた。もつとも、この事が「ぱつと」しては忽ち人氣にかかわり、拙いので、内密にして仲間内だけで検討しなさい。

「生海鼠之儀、成たけ煎海鼠ニ製候様無之候ては、御定之斤数致不足ニ付、精々相製候様ニと申付置候得共、自然煎海鼠ニ不相成分、問屋共へ差出売買候共、是迄之通名目ヲ揚、ぱつと道売不致様、睨と相示し可申事」(文化四年(一八〇七)「鶴亭日記」)

生の海鼠なまこをできるだけ煎海鼠いりこに加工しなくては、幕府指定の割当量に不足するので、しっかりと煎海鼠を作るよう命じているが、ともすると煎海鼠にならない分を問屋へ売ると思われる。今までのように名前を明示して「ぱつと」道売(行商)はしないよう指示しなさい。

【海参・煎海鼠】いりこ。(『広辞苑』)

ナマコの腸をとり去り、ゆでて干したものの。平安初期から調物とされ、近世には中国に輸出された。ほしこ。ふじこ。

古文書の中に「ぱつと」という言葉を見つけると、思わずハツとしてしまいます。

【ぱつと】(『日本国語大辞典』)

①勢いよく四方へ広がるさまを表わす語。②動作や状態の変化が急であるさまを表わす語。③はでで人目につくさまを表わす語。

安芸の「ト脱け」

「広島県人の言葉には「ト」が脱ける、即ち安芸の「ト脱け」、などと冷評せらるゝことを能く聞くが、僕は支障はなきことと思ふ、「学問 いふものはせぬばならぬ」、「酒 いふものは多量は悪い」と。「イフ」と「モノ」との辺りに、自から「テフ」ともいふ様な音を含んでをると述べたれば、翁(重野成斎)のいはるゝには、山口県人の中にも「ト」が脱ける者があるやうなれど、是は言葉遣ひの都合であつて、言葉の中に自然と「ト」を含んでをる、文章の上になで脱けては困るが、言葉の上よりしていいば「顔回ナル者あり」といふより、「顔回イフ者あり」といふのが穏かであると述べられた」(明治三十五年(一九〇二)小鷹狩元凱「広島雑多集」)

蛇足ですが、

【てふ】(『角川古語辞典』)

チヨウ《といふ》の約》…と言う。

安芸の「ト脱け」と指摘されて、広島に住む私も、「ナルホド」と気がつく始末。他地域では、「学問」といふものはせぬばならぬ」と話すのでしょうか。

ホツト

「昨年より三都書林申合せのよしにて、まづ稿本ヲ三都の書林中へ不残見せ候て、いよ／＼故障無之と申候ヲ承り届、其上にて改方名主へ出し尚又改ヲ受、又その上にて出板ヲゆるし候故、ことの外時日おくれ候事ニ御座候、此度、巡島記出版之及延引候も、これらの故に御座候、ケ様にむつかしくのミなり行候間、板元もホツトいたし可申候、左候へハ、すゑ／＼迄ほり立可申哉否、難計候」

（文政五年（一八二二）篠斎宛『馬琴書翰選』）

昨年から三都の書店の申合せとかで、まず原稿を三都の書店中へ残らず見せて許可を得、更に「改方名主」へ出して再度改を受けて出版許可を得るので、ことの外時日が遅れます。この度、『朝夷巡島記』の出版が遅れたのもこのためです。この様に難しくなるので板元も「ホツト」することでしょう。そうなると最後まで彫り立てるかどうかわかりません。

【ほつと】（『広辞苑』）

①ためいきをつくさま。②胸をなでおろしてやつと安心するさま。③もてあまして疲れたさま。

「安心する」のと「溜息をつく」「持て余す」のは大違いですが、〈同居〉しているのが面白いところ。それというのも、「ホッ」は息を吐出すことで、息を吐くことは力を抜くことですから、安心したときも、困ったときでも「ホッ」とします。

この文書の場合は、言うまでもなく、板元が「溜

息をつく」意です。

悪情

「御承知之通、都て」「共氣質一統風儀不宜ニ付、悪敷行作候ハ染易キ道理ニて追々見真似いたし、村中ニても菟角悪情ものハ」「相好、動スレハ村方厄介引出候様之儀ニて」（嘉永二年（一八四九）『海田町史』）

御承知のとおり、「」の職にある者の氣質、風儀は悪く、悪い行いは染まりやすいもので、村中でも段々と見真似をする者がいます。とかく「悪情」者はこの職を好み、ややもすれば村方で厄介を引き起し、

「於四日市曝之上御領分追放 海田市出生先名」

「立帰無宿」「」

「」、広嶋町方役筋手先と偽り、於内海村悪情相働候ニ付」（文化八年（一八二二）『鶴亭日記』）

海田市出生の先名は「立帰無宿の」

「は、自分は広島町方役筋の手先と偽り、内海村で「悪情」を働いたので、四日市で曝した後御領分追放となった。

「悪情」を辞書で調べてみましたが、出ていません。

「悪性」ならあります。

【悪性】あくしょう。（『広辞苑』）

たちのわるいこと。特に、酒色にふけること。

遊蕩。

「情」と「性」には何か通じ合うものがあるのではないかと思ひ、例文を探しました。

「人々之情質善二も悪二も趣候」（天保四年（一八三三）『広島県史』）

人の「情質」は善にも悪にもなるもので、

「郡々を廻り諸法度堅申付之、耕作情を出し万事百姓費無之様に可申付候」（明暦三年（一六五七）『広島県史』）

農村を廻り、諸法度を守るように命じ、耕作に「情を出し」、無駄な出費をしないよう百姓どもに指示しなさい。

現在なら、「情質」は「性質」と書きます。「情を出し」は「精を出し」と書きあらわします。

「情」「性」「精」は発音・意味とも類似の文字なので、細かい区別をしないで使っていたと思われます。すると「悪情」は「あくしょう」と読んだのでしょうか。

郷保

「十五日 尾方藤兵衛免下見村郷保、転寺家村郷保、柏尾喜一郎去寺家村郷保、移下見村郷保、長百姓松田千蔵為社倉吏」（文化九年（一八二二）『鶴亭日記』）

尾方藤兵衛、下見村郷保を免され、寺家村郷保に転ず。柏尾喜一郎、寺家村郷保を去り、下見村郷保に移る。長百姓松田千蔵、社倉吏と為る。

漢文で書かれている「鶴亭日記」の日記の個所です。役職名で「郷保」なる言葉が使われています。

【郷保】きょうほう。（『広辞苑』）

①郷と保。中国の村落自治の単位。②村。村里。

これは役職名ではないので、少しピント外れです。

「尾方藤兵衛転大河内村庄屋為下見村庄屋、代亡人四日市新屋与一兵衛」（文化七年（一八一〇）「鶴亭日記」）

尾方藤兵衛、大河内村庄屋を転じ下見村庄屋と為り、亡人四日市新屋与一兵衛に代はる。

「下見村庄屋」であった尾方藤兵衛は、「下見村郷保」をやめて「寺家村郷保」に就任しています。漢文で「郷保」と書きあらわしたときは「庄屋」を意味することが分ります。

日記の主、野坂三益は、漢文で書くときは「広島」とは書かず「広陵」と書きます。できるだけ〈中国風に〉書こうとしています。ですから、割庄屋の佐助は「大吏下三永村保田屋佐助」です。「大吏」は

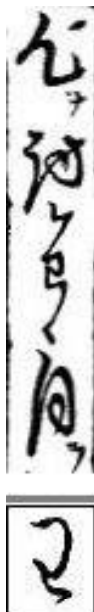
割庄屋のことのようです。もつとも、「代亡人国近村岡田惣右衛門、為割庄屋」（亡人国近村岡田惣右衛門に代り、割庄屋と為る）の例から、「割庄屋」も使います。

「庄屋」を「郷保」に翻訳して文章を綴り、それを元の「庄屋」に翻訳して理解する。なんと回りくどい作業することか……と感心しています。

候わゝ

「其品ニ寄銘々は元より費之儀とは心付居申事ニても、其所之風俗亦は仕来等ニ依て一分立改かたき儀も可有之候得共、此度被仰出を以心ヲ付候わゝ、自ラ儉約之守り無用捨銘々も仕やすく、勝手向之便ニ相成道理ニ候」（享保十一年（一七二六）「鶴亭日記」『広島県史』）

事柄によつては、自分では無駄な出費だと気付いていても、所の風俗または仕来りなので改めにくいこともあると思うが、この度出された



儉約令を基準にして氣を付け「候わゝ」、儉約も仕易く、家計も助かる道理。

これは「郡中儉約之覚」の前書の一節で、その中に「候わゝ」という珍しい文字が使つてあります。元の資料「鶴亭日記」の記述は図のとおり、『くずし字用例辞典』の仮名の「わ」(王)の字(下の図)と比較するとたしかに「わ」です。

ほとんどの文書では、「候ハゝ」と表記しますが、ここでは「候わゝ」と書いています。係助詞の「ハ」は「わ」と読むので、発音どおりの字を使ったもので、珍しい例です。

【候半】 そうらわん。(『古文書用語大辞典』)

半は当て字。ゝであるう。「弥御無事御暮候半与、一段之事ニ存候」ますます平穩にお暮らしであろうと、ひとしおに存じます。

ここでは「半」を編集者が発音どおりに「わん」

と、〈読み〉仮名をつけていますが、仮名で書き表わすのなら「はん」(はむ)とするのが正式なのではないか、だから「半」と当て字をしたのだらうと思つています。

投出し証文

「 投出し証文一札之事

私儀、当村嘉助と取引差纏一件、村方にて相片附不申、追々御取次に相成、去夏吉田町におゐて御吟味中、双方和談内済仕度御歎申上候所、御聞届け被為遣、御出役勝田村庄屋豊八郎様御取談を以、則左之通相極申候

.....

右之通投出し申候上は、如何体御取捌被下候とも私儀は不申及父直藏子孫諸親類並に横合より聊毛頭申分無御座候、為後日之連印投出し証文差出し申候処如件」(永井弥六『広島藩農村考』)

私と当村嘉助との取引が「差纏」れてしまった

一件は、村内では解決できず、だんだんと仲介していただき、去夏は吉田町で御吟味中、双方より和談内済したいのでお願いしたところ、御聞届けくださり、御出役の勝田村庄屋豊八郎様の御取りなしで次のように決りました。……右のとおり「投出し」ましたので、どのように処理されても、私は勿論、父・子孫・親類などが横合より少しも異議を申しません。後日のために連印をした「投出し証文」を提出します。

これは「投出し証文」の一部です。今ではあまり見ない〈面白い〉言葉が使われています。まず、「差縛」です。

【差縛れ】さしもつれ。（『広辞苑』）

さしもつれること。もつれ。紛糾。葛藤。

「差縛」の「差」はさしたる意味はありませんので、「縛」が主体です。

【縛】（『漢字源』）

「動」もつれる（ギミ）。糸がからみあつて解けなくなる。

誰でも経験のあることですが、糸が縛れて解こうとしても思い通りにならず、日頃は冷静な人でも人格が変わるほどです。「差縛」の説明は、「紛糾」という素っ気ない解説でなく、実感のこもったものが欲しいところです。

「投出し」もスゴイ言葉です。

【投げ出す】なげだす（『広辞苑』）

①投げて外へ出す。投げつけるようにして差し出す。ほうり出す。なげいだす。②命・財産などを、惜しげもなく差しだす。③事が完成しないうちにあきらめてやめてしまう。

元の意味は①ですが、「投出し証文」の「投出し」は、〈煮て喰おうと焼いて喰おうと、お好きのように……〉と一任して、地面にひっくり返って手足をバタバタさせている様子が頭に浮びます。

このような気持の籠った言葉が今では死語になってしまっているのは残念なことです。

植物

【植物】しよくぶつ。（『広辞苑』）

草や木など、根が生えて固定的な生活をしているような生物をいう。動物と対立する生物区分。

……

「植物」と書いてあると、つい「動物と対立する生物区分」としての「植物」を思いますが、そればかりではないようです。

「農業筋別て力を尽し、後年之為ニ相成候儀は、植物等も仕試候次第、都テ村方ヘ力ヲ入、百姓共導方宜ニ依て疑念も無之、受心も宜其筋相守、猶又御年貢方相励ミ、数年来壺式三番皆済相劣候儀無之……」（文化十年（二八三）「鶴亭日記」）

農業に特に力を尽くし、将来のため「植物」等の試験栽培をもし、村政に全力を尽して百姓の信頼も得ており、また御年貢上納にも励んで、

最近では年貢の皆済順位が郡で三番以下にはなつたことはなく……。

これは菅田村庄屋を割庄屋格にするとの表彰状の一節です。「植物等も仕試」とあります。上記「植物」と理解しても勿論当てはまりますが、もっと狭く解釈して、「作物」の試験栽培とすれば文意が明確になります。

「農家の益と成るべき植物の事」（大蔵永常『広益国産考』）には、「植物」のルビとして「うへもの」と書いてあります。すると、この場合「植物」は「うへもの」と読むことになります。

【植え物】うへもの。（『広辞苑』）

①植えて育てる草木の総称。特に野菜。②連歌・俳諧で、木・草・竹の類を表す語の総称。③近世、城内に植えた樹木。

人が植えて育てるもの、野菜に限らず、作物全般、いや、もっと広く椿・漆などの木も含まれる言葉でしょう。

送 入 籍 を 不 許

「戸籍調二付、当二月朔日より五月十五日迄送入籍を不許、尤精願之ものハ可申出旨兼て相達候通、心得違有之間敷事

壬申正月 広島県庁」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

戸籍調をするので、今年二月朔日より五月十五日まで送・入籍を許可しない。どうしても必要なら申出るよう以前指示したが、心得違いをしないよう守りなさい。

【壬申戸籍】じんしんこせき。（『岩波日本史辞典』）明治政府が編製した最初の全国的統一戸籍。一八七二（明治四）戸籍法にもとづき翌七二年から編製された戸籍で、七二年の干支にちなみ〈壬申戸籍〉という。華族・士族・卒・祠官・僧侶・平民までの〈臣民一般〉を現実の生活単位た

る〈戸〉で把握し、各戸に戸主をおき戸内の家族関係を戸長へ申告させた。国家がすべての国民を一元的に把握する全国的統一戸籍の編製は、身分登録制度としての役割を果たすとともに、治安の維持・徴兵・徴税・教育・衛生・統計等の行政の基礎資料を提供し、明治政府の基盤の確立に重要な役割を果たした。

「新しく戸籍簿を調製するので、三ヶ月半のあいだ送籍・入籍を禁止する。動くな！」という物凄い通達です。

御 厄 害

「稲作一ト通り之外何社産業ハ勿論、更ニ浮所務方無御座候て、百姓一方ニて渡世仕候郡柄ニ御座候て、從來貧郡ニ御座候処、去ル巳年稀之大凶作仕、不容易御厄害御歎申上、多端之御貸米被成下、：此余捨置候てハ田打村同様別段御厄介差備候様押移可申村方も有之、甚以案勞至極ニ奉存候」（明

治五年（一八七二）「続波多野家文書」

（世羅郡は）稲作以外の産業は勿論、浮所務（臨時収入）もなく、農業だけで生活する所です。今までも貧しい郡でしたが、去る巳年（明治二年（一八六九））の稀に見る大凶作のため、大変な「御厄害」をお願いしまして、沢山な米を御貸しいただき……。このまま放置すれば、田打村のように特別な「御厄介」をお掛けする村も出るのではないかと大変心配しています。

【厄害】やぐがい。（『広辞苑』）

厄難と災害。また、厄難にあつて害せられること。

「御」つきの「厄難」とは、考えることもできませんし、どうも文意に合いません。

「何分不慮之儀出来仕、御用繁之御中、奉懸御厄害候段奉恐入候候段奉恐入候、……万一六ツかしく儀出来候節ハ何時も私罷出取捌可仕候、ケ様申上候は御当浦ハ不及申上御近浦、私子孫ニ至ル迄御

厄害^{やかい}之儀ハ少も懸ケ申間敷、」（天保十二年（一八四二）「是長村御触留帖」）

何分（難船という）不慮の事故がおきてしまい、御用繁多の中で「御厄害」を懸け恐れ入ります。……もしトラブルができたときは何時でも私が出掛けて処理します。このように言うからには御当浦は勿論、御近浦でも私の子孫まで御厄害（やかい）はお掛けしません

この文書には沢山仮名が振つてあります。筆者の心覚えのためと思われる。「厄害」には「やかい」と振つてあります。正しくは「やかかい（厄介）」でしょう。

【厄介】やかかい。（『広辞苑』）

④面倒なこと。手数のかかること。迷惑なこと。

「一な問題」「一をかける」

「御厄害」は「御厄介」と理解すると、全ての不審が解消します。「続波多野家文書」は同一文書の後段で「御厄介」を使っています。

永年を樂ミ

「菅田村先庄屋 儀左衛門、……………、依て其方身
前為普為聴我等共より此壺品贈遣候条、老人之儀
随分保養ヲ加へ、永年ヲ樂ミ、子孫之後榮可期候
一蓬萊三ツ盃」（文化十年（一八二三）「鶴亭日記」）

菅田村の先庄屋、儀左衛門は、（庄屋としてよく
勤めたので）、その功績を表彰して我等（代官）よ
りこの「蓬萊三ツ盃」を贈る。老人のことゆえ
随分と保養を加え、「永年」を樂しみ、子孫の
繁榮を期待しなさい。

これは、まえにブログで取上げた菅田村庄屋の表
彰状の続きで、その父親、儀左衛門の表彰です。「永
年ヲ樂ミ」という代官の優しい言葉が使っておりま
す。

【永年】（『漢字源』）

①トシヲナガクス なが生きする。②なが年。

多年。

すると、「永年ヲ樂ミ」とは「長生きを樂しみ」
ということでしょう。（後期高齢者）という無神経
なネーミングがまかり通る世の中では、なかなか「永
年ヲ樂ム」ことはできそうもありません。

小廻り

「役人共、同所へ罷出候得は作法宜仕、玄關西脇惣
入口と掛札有之候所より上座致し、同所にて小廻
りを以て何郡手附へ応対之儀申込候事、尤隙取儀
ニ候得は、西之方大手根郡之役人溜り所有之候二
就、懸札見合、同所へ罷越、待合居可申事、但、
手附応対ハ御役所次之間へ呼寄可致示談候事」（文
化十一年（一八二四）「鶴亭日記」）

村役人などが同所（郡御用屋敷）へ出張したとき
は、作法よくし、玄關の西脇「惣入口」と掛札
のある所よりあがり、そこで「小廻り」に「何
郡手附にお会いしたい」と申込むこと。待たせ

るようなら、西の方の「大手根」に郡の役人の溜所があるので、掛札を見てそこへ行き待つていなさい。ただし、手附の応対は御役所の次之間に呼んでそこで話をする。

庄屋などが郡御用屋敷に出頭したときの手続が具体的に記されており、当時にタイムスリップしたような気になります。ここで使われている「小廻り」について、『広辞苑』には適当な説明がありませんが、見当はつきます。受付の仕事をしているが、その名前から「雑用係」に違いありません。「新役所の小廻り小人の類」（『老の絮言』）から、小人がその仕事をしていたと思われます。

もつとも、「小廻り」という言葉は藩の役所に限りません。畑賀村では「小廻給」として年に米貳石を充てています。

【御小人】おこびと。（『広島藩における近世用語の概説』）

藩庁の使丁をいい、御小人の扶持米・諸雑費・藩外への出張旅費等は壹歩米から、藩内の出張

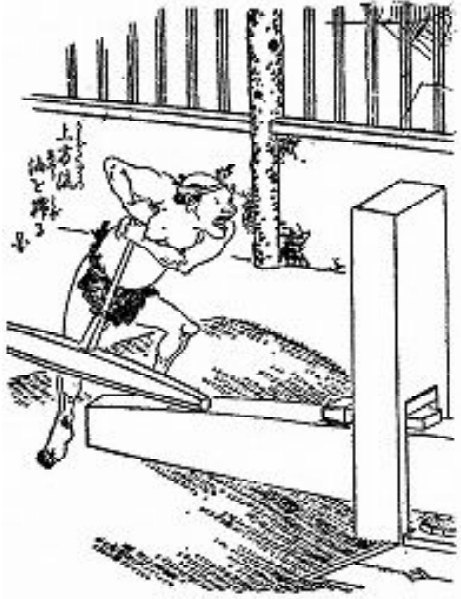
旅費は厘米より支給した。御小人は藩庁の給仕・使丁・飛脚・諸荷物の運搬等にあたり、足輕より下位で、従って苗字はなく、旅行以外は大刀を帯びることを許されず、また、軍夫に従事することもあった。御小人は明治六年（一八七三）に廃禄となり、制度上解体された。なお、明治三十年に旧御小人八十二名が復禄を請願したが、不成功に終わった。ちなみに、幕府所属の御小人は約五〇〇人おり、切米一五俵と一人扶持を受けていた。

面木

「今般絞油税改て被仰出就て、兼て及布告候通り、従前稼来り之もの共へ夫々鑑札下ヶ渡し候二付、御規則表ニ照準し、銘々稼高器械之大小面木数并郡村名前等、更ニ取弾、来晦日迄ニ殖産係りへ可申出もの也

壬申正月

広島県庁」（明治五年（一八七二）「続



波多野家文書」)

この度、絞油税について再度指示があったが、兼ねて布告したとおり、今まで営業してきた者どもへそれぞれ鑑札を下渡すので、御規則表を参照して、銘々の稼高、器械の大小、面木数、郡村、名前等を更に取調べ、来る晦日までに殖産係りへ報告しなさい。

絞油業者の「面木」数について書いてあります。

「油稼株と申すは……当時御城用水車稼有之、四面木御仕構二相成候得共、場所手狭二付、近來は式面木稼いたし候」(天保七年(一八三六)『三原市史』)

油稼株については……現在御城用の水車稼があり、四面木の仕構があるが、場所が手狭なため、近頃は式面木で稼働しています。

「手作手絞株持之者共、壺株壺面木定二候処、……

外壺面木ツ、扣建木立加へ居候様相成候処」(嘉

永二年(一八四九)「野間家文書」)

手作手絞株を持つている者は壺株につき壺面木の決りであるのに、……外にもう壺面木を予備として立て加えるようになります、

これらの資料から「面木」は絞油器械の心臓部で、「建てる」もののようです。大蔵永常『広益国産考』には、「上方流油を搾る図」(上図)が載せてあります。この図は木蠟製造の「立木式搾り機」(07/02/13ブログ参照)に類似しています。絞油の場合は「建

木」と書いてありますが、要するに（建ててある木）ですから同じです。これに「くさび」を打込んで搾ります。「面木」とは、この図で「建木」のことではないかと思っています。

差合

「殿様、来ル十三日三本松へ必六ツ半時揃ニて御帰城被遊候、其節御医師中一同御城へ被罷出御目見可有之候、若煩差合等ニて不被罷出候ハ、其段早々可被申聞候、以上

六月十一日 薬師寺九郎

松野唯次郎」（天保八年（一八三七）「鶴

亭日記」）

殿様（浅野齊肅）は、来る十三日、三本松（広島市東区尾長西）へ六ツ半時（七時）に御供揃いで江戸からお帰りになります。御医師一同は登城して御目見しますが、もし病氣や「差合」などで参加できないときは早く連絡しなさい。

殿様は、前年（一八三六）四月朔日に発駕して江戸に赴き、この年の六月十三日に帰城しています。威儀を正して城下に入るのは「三本松」からでしょうか。野坂三益は御医師格ですから、御城でお出迎えるよう、町奉行から手紙が来ています。「六ツ半時」（七時）に広島城下に入るのなら、朝の七時と思われまふ。すると昨夜は海田市泊りかもしれません。「煩」（病氣）なら参加できないのは当然で、この時、野坂さんは「此節腹痛難儀仕候ニ付得不罷出」と、飛脚を差立てています。

【差合・指合】さしあい。（『古文書用語大辞典』）さしつかえ。さしさわり。支障。不都合。

まいらせ候

「御家内皆様へよろしくたのミまいらせ候」（文政六年（一八三三）上田堂山宛、頼杏坪書翰）

お家の皆様へよろしくお伝え下さい。

これは頼杏坪の書

翰の追伸末尾です。

「たのミまいらせ候」(右図)と結んでいます。

【参らせ候】まいらせそろ。(『広辞苑』)

①(女子の手紙文に丁寧語として用いられた慣用句)ます。ゞざいます。

【頼杏坪】らいきようへい。(『広辞苑』)

江戸後期の漢詩人。名は惟柔^{ただなな}。山陽の叔父。広

島藩士。古詩に長じた。(二七五六～一八三四)

「おひく寒氣に成申候、すいふん御用心候様ニと
存候、めてたくかしく 神無月二日

たくなこ(惟柔) お郁とのへ」

(頼杏坪書翰)

次第に寒くなります。ゞ自愛ください。「めて
たくかしく」。

【めでたく、かしこ】(『広辞苑』)

女子の手紙の末尾に添える語。かしこ。

宛先は男性や女性ですが、言うまでもなく頼杏坪は男性です。男性でも「女子の手紙文」の用語を使っています。珍しい例かも知れませんが、(女性専用)と決め付けないほうがよさそうです。

頼母子の賄

「頭書

一枕金高百両、但正銀六貫五百目 廿人講

年兩度会、利足年壹歩壹朱

一賄方、願主返掛之内を以、老会分百六拾弍匁五分、
引残て百九拾五匁宛、毎会願主より出銀仕候事。

一会日 三月朔日、九月朔日

一枕正金五両、来る十二月六日迄に御越し被遣候事」

(永井弥六『広島藩農村考』)

これは頼母子の規定です。頼母子は「頼母子の実
例」(ブログ(06/11/05))で取上げましたが、別の資
料で再度検討します。

この頼母子講は「願主(元人)」を救済する目的で

つくられたもののようで、「枕正金五両」を願主を除く二〇人の講員から十二月六日までに世話人が集め、合計「枕金高百両」（銀に換算して「正銀六貫五百目」、金一両＝銀六五匁で換算）が願主に貸付けられます。利率は「年壹歩壹朱」、つまり金二五両につき金一步一朱。一〇〇両なら一両一步（ $1.25\text{兩} \parallel 1.25\text{匁}$ ）、一・二五%の年利率です。

「願主」はこの元利を均等に分割して「返掛」（返済）します。一会の返済額は、一六二・五匁を賄いとして出費し、一九五匁を出銀、合計三五七・五匁（五・五両）です。利率から考えて一〇年間で完結すると思われまゝ。春秋二回開くので、特別な初会も数えると二一会が開催されたはずです。

初会は十二月六日ごろ開かれ、集めた「枕金」一〇〇両が「願主」に渡されます。願主は講員をもてなし、一六二・五匁の賄料を支出するだけです。これは返済の一部として認められますが、正式の「返掛」（返済）は次会からです。

第二会は三月一日、願主は賄いを含めて合計三五七・五匁（五・五両）を「返掛」をします。これが第

二一会まで、二〇回繰返されます。すると願主の返済額（元利合計）は、

$$162.5\text{匁} + 357.5\text{匁} \times 20\text{回} = 7312.5\text{匁} (112.5\text{兩})$$

になります。その内の一〇〇両は元金、一二・五両は一〇年分の利息です。計算がピッタリと合ったところで、ややこしい計算は終ります。

当時の利率は「月壹歩半」（年利一八%）が普通のようなですが、この例の場合は「利足年壹歩壹朱」（年利一・二五%）ですから、救済する目的のために低金利に設定しているのが解ります。願主は一人当り八匁を超える大ご馳走を出して亭主面ができますが、これも「返掛」の一部として認めてもらっています。「賄」という言葉が使っておりまゝ。

【賄い】（『広辞苑』）

- ① 整備すること。ととのえること。
- ② 食事などを調べて供すること。また、その人。まかないかた。
- ③ 世話・給仕をすること。また、その人。
- ④ 取りつくりうこと。まにあわせ。
- ⑤ 出費。

今は本来の意味から大きく外れて、「賄い料理は、

飲食店において客に出すのではなく、従業員の食事に作られる料理。単に「賄い」と呼ばれることも多い」(Wikipedia)。

御下代

「 廿一日

一御下代三好弥一右衛門殿早見半六殿、今夕広嶋より御越、一井正右衛門殿御戻り被成候

廿二日

一御下代弥一右衛門殿・半六殿へ年寄善右衛門御年頭相勤申候、与頭中同断」(宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

「十四日町年誌」は、尾道町の町年寄、灰屋・橋本家の「年誌」です。

宝永二年(一七〇五)一月二十一日に、「御下代」一井正右衛門に代り、三好弥一右衛門・早見半六両名が広島より着任しています。翌日には早速町年寄善右衛門や与頭が新任の「御下代」に年頭のご挨拶に

参上しています。この内容から、「御下代」とは藩の役人と見当をつけて調べました。しかし、『芸藩輯要』『歴代御役人帖』には、この名前はありません。

「夫免奉行・代官・村廻り・下代等始て其地に莅時は、土地厚薄、田畠広狭を(先脱)考検、次に東西南北、日向陰地、大河小河之流、池塘井手溝川除……」(寛政二年(一七九〇)『吹寄青枯集』)

だいたい、免奉行や代官・村廻り・「下代」等が初めてその地に検地のため行くときは、土地の厚薄、田畠の広狭をまず考え、次に方位・日照・河・池塘・井手溝・川除……など考えて、

「郡方支配之古法聞書……」

夫免奉行・代官・村廻り・手代等始て莅其地時ハ、土地之厚薄、田畠広狭を先考検……」(寛政期「温故郡務録」)

「温故郡務録」は「吹寄青枯集」からの抜粋して編まれた地方書だそうで、同一内容の箇所を引用しま

した。「温故郡務録」には「郡方支配之古法」とあります。また「下代」が「手代」になっています。

「田地境抔ハ銘々地主罷出、引合申様ニ成事ニて済申候、時節ニより候、尤役人中計ニてハ仕形無心許トテ、支配之御代官中下代召連被罷出、地坪有之候義も御座候」(寛政二年(一七九〇)『吹寄青枯集』)

田地の境などについては、関係の地主も出て確認するが、時には村役人ばかりでは心配だと御代官が「下代」を召し連れて出かけ、地概をすることもある。

「郡方当格式之儀御尋候ハ、広嶋より御役人中度々郡方へ往来有之候ては費多く、百姓共難儀之筋ニ候段御聞届被成、正徳二辰年より御代官衆并村廻り役中・下代役御差止被成、……」(享保二年(一七二七)「御巡見衆御尋之事有之、其品ニ応御返答覚書」)

農村支配の仕組を御巡見衆がお尋ねになれば、広島から御役人がたびたび郡方へ往来しては費も多く、百姓共が難儀しているので御聞届けら

れ、正徳二年より御代官衆・村廻り役中・「下代役」は中止になり、

正徳の新格により「下代役」は廃止された役名でした。道理で、耳慣れない役名でした。

【下代】げだい。(『岩波日本史辞典』)

①江戸時代、代官の下で職務を担当したもの。
手代。②江戸郷宿の手代で、訴訟当事者を補佐したもの。

「属吏ニ手附若干名アリ(テツキト称ス、番組足輕ノ中ヨリ某郡御代官手附ヲ命ズ、自他共多クハ手附ト言ヘリ、筆頭ハ御勘定所物書役並ト云ル格式ニ進ム例ナリシ)」(『淡交夜話』)

(代官の)属吏として手附が若干名いる。これを「テツキ」という。番組足輕の中から某郡御代官手附に任命する。自他共に「手附」と言っている。その筆頭は御勘定所物書役並といわれる格式に進むのが通例である。

薪ぞうし

「今度御兩人様御廻り何ニても御馳走仕間敷由畏奉存候、以来御下代衆御出候共薪ぞうしより外ハ一切仕間敷候」(寛文九年(二六六九)『広島県史』)
これは、給人(山本徳右衛門・寺津与右衛門)が知行所の百姓へ出した指示に対する請書の一部です。

この度、給主様が給地にお出でになつても「御馳走をするな」との指示があり、承知しました。以後は「御下代衆」がお出でになつても「薪ぞうし」以外は一切しません。

前回のブログで、「御下代」とは代官の属吏のこととで、のちには代官手附(番組)と言われたと書きましたが、この資料を見ると訂正の必要がありそうです。この文書の「御下代衆」は、給人の手代と理解しなければ意味が通りません。「下代」は代官に限らず、属吏(手代)を意味する言葉でしょう。

ここで面白いのは「薪ぞうし」という言葉です。

【雑仕】ぞうし。(『広辞苑』)

①平安以後、宮中で雑役・走使いに奉仕した役。行幸・行啓にも供奉した。②雑仕女の略。

「雑仕」は「雑用」という意味が元だと思います。すると「サービス」「もてなし」に拡がります。「薪ぞうし」とは、寒い時期に囲炉裏で「薪のサービス」をすることだと考えましたが、どうでしょうか。

切免

「切免は特定の悪所で(田畑に限る)土免を一つ成減免する制度であつた。もつとも免状の内を減ずるのでなく、一つ成の減免分は村で償い出すので、切免所を設けると悪所は救われたが、それだけ村の他所の負担は増した。」(『白木町史』)

「又免に切免と称するものあり、例之は高百石の村にして免五つ三步を課せられたるに、或る谷畑の悪くして定免に堪へざるものあらは、該畑に免五

つを課し、残り三步は他の田畑へ^{かづきだか}聞高と為すことあり」(『芸藩志拾遺』、『広島県史』)

また徴税の仕方に「切免」というものがある。たとえば、高百石の村に免五つ三步(税率、村高の五三%)が課せられたとき、ある谷畑の土地が悪く指定された税率で納めることができないとすると、その畑の税率を五つ(五〇%)に下げ、残りの三步(三%)は他の田畑へ余分に負担させることである。

切免についての二つの解説は、ほぼ同一内容ですが、大きく違うのは減免の率です。『白木町史』は「二つ成」(村高の一〇%)の減免ですが、『芸藩志拾遺』は、例えば「三步」(同三%)を他の耕作者に負担してもらおうとしています。どちらが正しいのか、迷ってしまいます。

一 覚 山県郡後和田村

一此度御給知割ニ付切免之儀御尋被為遊、先達て書付差上ケ申候所、本郷切免所銘々得勝手之書付拵埒明不申、此度委細被為仰聞御意之趣恐入奉畏候、

就夫此度百姓共又々相談仕向後切免之員数御なへし左之通ニ御極メ被為遊可被下候

一御免状ニ式歩下り 移名原

一同三厘式毛下り 法蔵寺

(以下略) (宝暦六年(一七五六)『千代田町史』)

この度、御給知割に関連して「切免」のことにしてお尋ねがあつて先日お返事を差上げましたが、本郷の切免所について銘々が得勝手の書類をこしらえ埒があかないとのお叱りを受け恐れ入ります。それにつき百姓共が再度相談し、「切免」の員数の「御なへし」を次のようにして欲しいと申しております。

移名原は御免状の税率から二%減免、法蔵寺は〇・三三%減免。

この例から考えて、切免所の税率の減免は、一〇%と固定したのではなく、「悪所」の程度によって減免に幅のあることが分ります。減免分を追加負担する他の地域の農民も、一律一〇%には承服がたいのではないかと思います。

「御なへし」は意味不明です。

入草

「高持百姓分のもの、耕作の間イ間イ家業として諸職人に遠方へ参、又は商ひ等に他行仕とも、百姓分は勿論芋にても田作仕候ものは入草時分迄には罷歸り、田徒内互に助け合植附相調候儀は素よりの事に候へば、井手役子供に打任せ、十五才より内子供夫に出し候儀は以来堅く不相成、たとへ植付以後他行仕候は丈夫成る人やとい出候か、又は前段相極め日雇銀出し可申事」（天明六年（二七八）『白木町史』）

田畑を持つ百姓でも、耕作の閑なとき家業の職人として遠方へ行き、または商売に他行しても、百姓は勿論、芋の栽培などをしている者でも、田作りをする者は「入草」時分までには帰村し、「田徒」内で互に助け合つて田植をするのは当然のことなので、「井手役」を子供に任せて、

十五才以下の子供を夫として出すのは禁止する。もし田植以後、他行するのなら大人を雇つて出すか、前述の日雇銀を出すこと。

農閑期に、職人として商人として出稼ぎをすることが、百姓の副業として定着していたと著者は指摘しています。もともと農作業が忙しくなるなる時期には帰村します。それは「入草時分」です。

「土地ハ中位ニも相当リ可申候得共、入草等無御座故作実不宜」（文政二年（二八一）『吉行村国郡志御用書上帖』）

耕地の位は中に当りますが、「入草」等がないため実入りは良くありません。

「入草」は辞書に見つけることはできませんが、文字通り田に肥料として草を入れることでしょう。すると「いれくさ」と読むのでしょうか。

【肥草刈】こえくさかり。（柏書房『日本史用語辞典』）
江戸時代、自給肥料である厩肥にする草を刈ることをいう。金肥導入以前は大事な肥料であり、

肥草を刈る入会地の権利をめぐる多くの争論が発生した。

この説明で「厩肥」に限定しているのは理解しがたいところだ。

【蒔敷】かりしき。（『広辞苑』）

山野の草・樹木の茎葉を緑のまま水田や畑に敷き込むこと。また、その材料。かつて地力維持の重要な手段の一。

この資料に「田徒」という言葉があります。「井手田徒組」（『白木町史』）から、ある井手を利用する百姓のことだろうと思います。それなら「田町・田丁」と同義かも知れません。「田丁」とは、田で働く男が本義と思われます。

「井手役」とは、井手の利用者（田町）が、田植前に井手（水路）の整備に汗を流すことです。「子供に大切な井手役を任せるとは何事か！」

左側通行

「往来順路の心得

一道中は自分左の手の方を通行すべし、高貴の方に往逢ひ候時は、猶更ら相心得可申、右えよければ慮外と知るべし」（天明頃、『白木町史』）

道中では左側通行をしない。高貴の方に往き逢うときは特にそうしなさい。右へ避けるのは非常識である。

これは道中心得を示したものです。昔から左側通行のルールのあったことが分ります。

「通行区分採用の沿革については、様々な説がある。日本の左側通行については、江戸時代頃から武士などが左腰に差している刀が触れ合うことを避けて、自然と左側通行になっていたという説が一般に流布しているが、……」（Wikipedia）

この道中心得は「左腰に刀」説にとつて有利な資料ですが、なぜ「右えよければ慮外」なのか、説明の欲しいところです。

アメリカは右側通行です。それは「右腰に拳銃を

下げる習慣」のためだとか……。ともに良く出来た
《咄》です。

日本では今は左側通行するのは車だけですが、昭和
二五年頃までは人も車ともに左側を通行したそ
うです。

疾病

「六月

○家君疾病、使上三永村藤春閣療之

八月

○七日 辰刻、家君卒、行年六十一」（文化四年二八

〇七）「鶴亭日記」）

六月、家君の疾病なり、上三永村藤春閣をして
之を療せ使む。八月七日辰刻、家君卒す、行年
六十一。

「鶴亭日記」の主、野坂三益の父親、玄珉の死亡記
事です。この年の二月、「賀客満堂」で還暦のお祝
をしましたが、「家君之疾、延日不愈」から「家君

疾病」となりました。「疾病」とは「病氣」のこと
とばかり思っていました。辞書を引くと、

【疾病】（『漢字源』）

ヤマイヘイナリ 病氣にかかり、からだがぐったり
する。危篤になる。「子疾病」子ノ疾病ナリ」

「辞典を引け……「大事な字や難しい字だけを引い
て、そうじゃない字は引かなくてもいいだろう」
と考える人もいるかも知れません。熟練者は勿論
それで構いませんが、しかし初学者が何故未熟か
というと、それは「どれが大事な字なのか、難し
い字なのか、そしてどの字がそうじゃないのか」
の区別が付かないからこそ未熟なのです。」（HP
「疑殆録」より引用）

初心者なので、漢文を読むときには、漢和辞典で
全ての字を調べることにしました。

船すりたて

「浦嶋船持共、船すりたて仕候儀、焼立候ては如何敷候得共、他所へ出船仕候節ハ、右等之取計不仕候ては差支可申二付、御触書相達日より五日過候は、役人共見計、目立不申様取計可申事」（文化十年（一八三三）「鶴亭日記」）

これは、前広島藩主、浅野重晟の死去のとき出された「御穩便二付心得之頭書」の一部です。

浦嶋の船持共が、「船すりたて」をするとき、焼き立てるのは好ましくはないが、他所へ出船の場合しないと困るだろうから、御触書が届いて五日過ぎれば、役人共が見計らって目立たぬようにさせなさい。

「焼立」という言葉で、半世紀も前のことを思い出しました。小さな漁船でも、陸に引上げ、船底を藁で「焼立」てていました。それを、「船をたでる」と言っていました。

【たでる】（『日本国語大辞典』）

②木造船の船底を藁や柴などを燃やしてあぶ

る。船底材のなかの船食虫を殺すとともに、しみ込んだ水分をとり去って、船の寿命を長くし、船足を軽くするために行なう。船食虫のつきやすい海船では欠くことのできない作業である。

「船すりたて」の「すり」は、汚れを擦り落すことでしょう。木造船全盛時代の話です。

成尺

「住居之儀ハ成尺古風ニ相構、畳表替之儀は客来之座敷沓間計引通し本表にて、其他は家内不残七嶋表木綿へり致候事」（天保四年（一八三三）「鶴亭日記」）

住居については「成尺」古風に構え、畳表替は客間だけ沓間計引通しの本表にして、その他の部屋は全て七嶋表木綿縁を使っています。

これは日記の主、野坂三益の「儉約令」についての日頃の心得を述べた個所です。寛政二年（一七九〇）の「御触書」に、「畳表等多くハ引通し・七嶋を用

ひ、仮染ニも結構に相見間敷もの用ひ申間敷候」の項目があるので、これを意識してのことかも知れません。

【引通し】（『広辞苑』）

②長い藺草いぐさを用いて中で継がずに織った備後表。

この資料で注目したいのは「成尺」という言葉です。文意から「成丈」のことと知れます。これは個人の癖かと思いきや、結構他の資料でも見かけます。

「御年貢之義は米納勿論ニ付、可成尺ケ米納相励、」（明治三年（一八七〇）『三原市史』）

御年貢は米で納めるのが大原則なので、なるべくだけ「可成尺ケ」米納を励み、

【尺】（『広辞苑』）

②ながさ。たけ。

放シ追

「所ニ寄り馬方共馬放シ追ニいたし候者共も有之趣ニ相聞候、不埒之事ニ候、勿論御定法之通馬之綱三尺より長く取申間敷旨役人共常々無油断相示し可申事」（文化十一年（一八二四）『海田町史』）

所よつては馬方共が馬を「放シ追」にしている者共もいると聞くが不埒のことである。定法のとおり馬の綱は三尺（九〇センチ）より長く取らないよう宿場の役人共はいつも油断なく指示しない。

馬方は手綱を持つとき三尺より長くしてはいけないという決りがあつたようで、ましてや「放シ追」は厳禁です。「放シ追」とは綱を持たずに馬を「追う」ことのようにです。

【追う・逐う】（『広辞苑』）

距離をおいた対象を目指して、それにとどこうと後から急ぐ意。①先に進むものに及ぼうとして急いで行く。おいかける。⑧かりたてる。せきたてる。日葡「ウマヲヲウ」。

承届

「芸備孝義伝、中嶋本町書林世並屋伊兵衛手元にて売弘之義、町義伝ひ願書差出候処、都て開板物之儀は公儀御免無之候ては勝手ニ売弘難相成御建りも有之哉ニ相聞へ候ニ付、先日御面談之節及御咄候処、左様は有之間敷段御噂之趣も御座候得共、為念一応伊兵衛手元夫等心得之処相約メさせ申候処、別紙之通申出、此趣にてハ同人店方にて摺立商ひ候共故障無之事と相見候付、願通り承届差免申候」(文政二年(一八一九)頼杏坪宛、町奉行植木直太夫書翰、『広島県史』)

『芸備孝義伝』を中嶋本町の書林世並屋伊兵衛が販売したいと「町義」を通して願書を提出したが、全て書籍の出版は幕府の免許がなくては勝手に販売できないというきまりがあるとかで、先日の御面談のとき、「免許不要」の噂もあり、念のため一応伊兵衛に調べさせたところ、

別紙のように申出がありました。此分なら同人店方で印刷して販売しても構わないと思われるので、願の通り「承届」許可しました。

頼杏坪の編集をした『芸備孝義伝』初編、第二編は京都瑤芳堂から出版、「一八一八年(文政元)には杏坪の提案で京都から初編、二編の版木を取りよせて世並屋に摺らせている。」(『広島県大百科事典』)そうです。

【承届】うけとどく。(『古文書用語大辞典』)

「うけたまわりとどく」とも。承諾する。聞き入れる。「百姓共願之趣一々承届ケ候」百姓たちの願いの趣旨は一つひとつ聞き入れます。

この辞書は「承届」を「うけたまわりとどく」と読んでいます。「承」は「うけたまわる」に違いありませんが、これでよいのでしょうか。

【承る】(『広辞苑』)

①謹んで受ける。②(目上の人の)命を受けてその通りにする。③謹んで聞く。拝聴する。

町奉行が書林世並屋伊兵衛の願いを「聞き届」けることはあつても、「謹んで聞く」はではありません。「承届」は「ききとどけ」と読んだのに違いありません。

「村々より切免願候義は品ニ寄聞届可被遣候事」
（『吹寄青枯集』）

村により切免を願出るとき、事情によつては聞き届けてつかわすこともある。

「格別を以先歎出候趣承届遣候条」（『吹寄青枯集』）
特例として歎願の趣を聞き届けてつかわす。

「承」の「謹んで聞く」の意味が、単に「聞く」になつてしまつたのでしょうか。

不都束

「在中神社拝殿等へ藁杯積置、社地不掃除之村方も有之、就て自然非人・乞食之類拝殿等へ止宿いた

し、終ニは相果候儀も有之、対神慮甚タ恐入候儀ニ候、当時別て神社御崇敬被遊候折柄ニ候間、右様不都束之儀無之様可致、」（明治三年（一八七〇）『広島県史』）

村の神社の拝殿等へ藁などを積み置き、社地を掃除しない村方もあり、非人・乞食などが拝殿等へ止宿し、終には死亡することもあるようである。神に対し甚だ恐れ多いことである。現在は特に神社を御崇敬されているので、このような「不都束」なことはないようにしなさい。」

【不束】ふつつか。（『広辞苑』）

①太くしつかりしていること。②（こつこつして）不格好なこと。ふていさいなこと。③（こつこつして）風情がないこと。無骨。④雑なさま。かるはずみなさま。⑤つたないこと。ゆきとどかないこと。⑥江戸時代、叱り・手鎖・過料などに処すべき裁判の宣告文の終りに書く罪名の上に付けた語。ふらち。ふとどき。

沢山の意味が書いてあるので嬉しくなりますが、ここでは「不届」にあたります。

ふつう「不束」と書くようですが、ここでは「不都束」としています。「束」に「不」をつけただけでは「ふつか」と読まれそうで、「都」を入れたのだらうと思います。

幸便

「去酉早春之貴書、かの筆賈今日只今持参剥封、致拝見候所一年前之御状なり、先以新禧無限申収候、……筆賈また貴地へ参り、出かけのよしにて立候居候故、ざつと一筆無事越年之事のミ申進候」(文政十年(一八二七)二月、上田少藏宛、頼杏坪書翰)

去る酉年早春のお手紙、あの筆の行商が今日只今持参しましたので封を剥がし拝見しましたところ、一年前のお手紙でした。先ず新年のお喜びを申し上げます。……筆屋はそちら(周防大道、現防府市台道)に出かけるところで、立って待つ

ていますので、大急ぎ無事越年したことののみ申上げます。

江戸時代、手紙を運ぶのは飛脚とばかり思っていました、どうも大間違いのようです。上田少藏宛、頼杏坪書翰を見ると、「幸便御状被下」「湯浅正平帰便御状被下」の文言をよく見かけます。

【幸便】こうびん。(『日本国語大辞典』)

つごうがよいこと。よいついで。また、そのような時に人に手紙を託することが多かったの
で、手紙の書き出しの文句や添え書きのことばとしても用いる。

だれか近くへ行く人に託した手紙が相当の割合を占めていたのではないかと思います。そのようなチャンスは度々あるわけではなく、人を待たせたまま、大急ぎで手紙を認めることにもなります。お礼はするにしても無料のはずです。だから一年前に託した手紙が今届いても仕方のないことかもしれません。

この手紙に、頼杏坪は「今春七十二才ニ相成り、元旦雑煮餅五ツ」食べたと書いています。これから

文政十亥年のものと判りますが、一年かかって今日届いたのなら、出したのは「去戌早春之貴書」かも知れません。また、「幸便」には違う意味もあるようです。「幸便とは、二五八の日一カ月すべて九回集る所の通送物品を一纏めにして江戸を発するを言う。」（『江戸物価事典』）

相聞

「浜田城下大火二付、所之者へ相尋候処、今朝四ツ時頃より出火候由、城下二ヶ所より出火にて、城内も焼候様子二相見、尤櫓ハ無別条有之候由、砲声相聞候へ共、是ハ合薬へ火移候共にてハ無之哉と申事ニ御座候」（慶応二年（一八六六））

浜田城下が大火なので、所の者へ尋ねると、今朝四ツ時頃（午前一〇時）に、城下二ヶ所より出火し、城内も焼けた様子、もともと櫓は別条なとのこと、砲声が「相聞」ますが、これは「合薬」へ火が移ったのではないかということです。

第二次長州戦争、石州口の様子です。

【合薬】ごうやく。（『広辞苑』）

①数種の薬を調合した薬。あわせぐすり。②火薬に同じ。

「砲声相聞」の「相聞」は、「相きき」と読むのか「相きこえ」なのか、考えてみました。

「きき」なら「聞く」（他動詞）に当たります。

【聞く】（『広辞苑』）

〔他〕注意して耳にとめる。傾聴する。

「きこえ」なら「聞こゆ」（自動詞）です。

【聞える】（『広辞苑』）

〔自〕きこゆ。（聞カユの転）音・匂い・言葉などが自然に他の感覚に通じる意。聴覚に感じられる。音声が自然に耳にはいる。

砲声が自然に耳に入るわけですから、「相聞え」と読むのでしょうか。

「此御宿は一軒丸て手当置候様被仰聞、此節ハ別て

御用繁、家内不寝仕候事度々にて迷惑仕候故、いづれも宿仕候義を嫌、無抛辻賄二仕候趣にて、多分の失費と相聞へ申候」(慶応二年(一八六六))

これは「長州御征伐二付、一昨年尾州様始諸藩御多勢御下向被為在……又候去冬以来御多勢御下向、長々御滞陣被為在、右二付候てハ、不絶公儀御軍勢を始紀州様其外諸藩御通行……」に困り果てた西条四日市宿の様子です。

この御宿は一軒を丸ごと充てるようにとのこと、最近は特に繁く、家内不寝のときも度々あり迷惑しておりますので、どの家も宿をするのを嫌がり、仕方なく「辻賄」(共同炊事か)にして多分の失費と「相聞へ」ていいます。

ここでは「相聞へ」と「へ」が送ってあります。「相聞え」と書いてあることもあります。

【相聞】 あいぎこえ。(『広辞苑』)
↓ ともん

【相聞】 ともん。(『広辞苑』)

(消息を通じ合う意) 万葉集の一部の巻に見える和歌の分類の一。広く唱和・贈答の歌を含むが、恋愛の歌が主。「あいぎこえ」ともよむ。

結ぶ

「岩つたふ苔の雫をむすひつゝさそな心もすみ染の袖 義遍
かへし

結ひつゝ岩根の雫すむ水の心にはつる墨そめのそて 似雲

(山下弘毅『梅鶴閑話』)

「義遍は吉野吉水院の住僧、似雲は『近世畸人伝』にその名が見えます。似雲の草庵を訪れた義遍は、「軒近き岩間より雫の落ければ、其下つがたの岩を、すこしくぼめてたまりたるを、湯にわかしこれを用ひて、茶をも喫せず」という話を聞き、「げにたぐひ有まじと、哀にもたとくもおもひて」歌を詠みます。

【結ぶ】（『広辞苑』）

⑦（「掬ぶ」と書く）手のひらを組んで水をすくい飲む。

苔清水のようにさぞや心も澄んでいることでしょうと言われると、似雲は恥じるばかりと返しているのだらうと思います。

「結ぶ」が「手のひらを組んで水をすくい飲む」にまで意味が広がるのに感心しています。

【似雲】じうん。（『広辞苑』）

江戸中期の歌僧。初め如雲と称。安芸の人。武者小路実陰の門。西行に私淑し、諸国を行脚。著「磯の浪」、家集「年並草」など。（二六七三―一七五三）

他所向

「一此後自他無差別生涯苗字帯刀御免

奴可郡割庄屋西条町 延右衛門

右積年役方志厚出精相勤、下方示筋等万端行届、居合も宜二付、先年他所向苗字帯刀御免被下候処、其後も弥以不怠精勤致し、難渋之者へ深切之致方等、彼是御領分内ニても苗字帯刀御免被下」（文化十二年（一八一五）「鶴亭日記」）

奴可郡割庄屋西条町延右衛門は今後自他の区別無く、生涯苗字帯刀を許す。この者は積年役方を精勤し、下方の指導も万端行届き、下方との居合も良いので、先年「他所向」苗字帯刀を許されたが、その後も怠らず精勤し、難渋者へ親切に当り、御領分内でも苗字帯刀を許す。

奴可郡割庄屋の延右衛門は、以前「他所向苗字帯刀御免」となっていました。今回は更に「自他無差別生涯苗字帯刀御免」となりました。

【余所・他所】よそ。（『広辞苑』）

①ほかの所。別の所。他所。②直接関係のない物事や人または場所。他事。局外。また、かわりのないこと。疎遠なこと。

この文書で「自他」の区別は、「御領分内ニても」の文言から、「自」は「御領分内」、「他」は「御領分外」と解ります。まず「御領分外」を許し、次いで「御領分内ニても苗字帯刀御免」というこの順序はどのような考えから出たものでしょうか。

「他所向取引正銀ニ無之ては不相濟」（文政二年（八一）『広島県史』）

「他所向」の商取引では、（藩札は通用しないので）正銀でなくてはならないが、

この文書でも「他所向」は「藩外」を意味しています。

番組の定員

「御郡廻り 池谷三郎左衛門様

御代官 西川文右衛門様 藤川次右衛門様

御村廻り 中尾忠助様

御番組 山本彦助様 池田平太様 谷口新五様

松山甚平様 野田彦四郎様 山科平左衛門様

之時

延享元子年三月（寛保三年（一七四三）「安芸郡万覚帳」、「海田町史」）

これは、延享元年（一七四四）時の安芸郡を担当する藩の役人名簿です。

郡廻りは「二〇四郡に一人」が置かれました。天保五年（一八三四）郡廻りに任命された伊藤小六郎は「沼田・安芸・佐伯・山県」の四郡を担当しています。

安芸郡の代官は、沼田郡と兼務です。文化八年（一八一八）、松野唯次郎は「沼田・アキ郡」の代官に任命されています。両方とも小さい郡だからでしょうか。

番組（代官手附）は六人です。代官の手附ですから当然、沼田・安芸の二郡に係わります。

「藩中郡吏略記

.....

沼田安芸郡御代官 吉田矢柄、三上千蔵
御徒行目附 和合本五郎

番組 山田孝藏、佐久間宗助、逸見八藏、金尾和三、
今井百平、井原和七、(定加)堀井省二、勝屋保兵
衛、世羅嘉市」(文政十一年(一八二八)「鶴亭日記」)
文政十一年(一八二八)には番組は九人です。「定加」
は「定加り」で、定員の追加だと思っています。

「右打首之刻(享保二十年(一七三五)諸御役員様□
御代官 池谷三郎左衛門様

御奉行 玖島小四郎様

御番組 □山甚平様、深津伝助様、谷口丈七様、山
文四郎様、神田彦四郎様」(文政五年(一八二二)『湯
来町誌』)
享保二十年(一七三五)、山県郡の番組は五人です。

両人庄屋

「 態申遣

一 中島村・白市村庄屋 友兵衛

右之者、高屋東村兼帯両人庄屋申付候条、此旨相心
得可申者也

子八月九日 賀茂郡御役所」(文化十三年(一八二六)
「鶴亭日記」)

中島村・白市村庄屋の友兵衛を高屋東村「両人
庄屋」として兼帯することを命ずる。

【兼帯】(『広辞苑』)

二つ以上の官職を兼ねること。兼任。かけもち。

中島村の友兵衛は、中島村と白市村の庄屋を兼帯
していましたが、更に高屋東村の庄屋も兼ねること
になりました。高屋東村は「両人庄屋」の村です。
文化九年(一八二二)に稲木村庄屋八兵衛が高屋東村庄
屋に任命されていますので、八兵衛と友兵衛の両人
が庄屋になったものと思われます。「二人庄屋」と
書かれた資料もあります。

【庄屋】(『広島藩における近世用語の概説』)

庄屋は郡廻りと代官の詮議により、各村に一名
(村高やその他の事情によっては二名)が置かれた。
……

高屋東村の村高は一〇一〇石余で、賀茂郡の村高

平均六三五石から見ると大きな村であることがわかります。

三ヶ村の庄屋になった友兵衛ですが、翌月には「白市村庄屋差免」の辞令を受けています。

陳

「古戦場 当村古戦(ママ)之由申伝へ、既二院(陰徳記二陶ノ良等(郎党)宮川甲斐守七千余引率シ、天文廿三年六月朔日、廿日市之西折敷畑之山上二陳(陣)ヲ取、毛利元就父子攻メ寄せ給ひ敵敷合戦有之候処、宮川打負引退ク、吉田勢時を作り友田、津田、浅原迄追かけ、究竟之頭七百五拾余討取り、宮川甲斐守も討死之由相見へ、左候得ハ右引口当村ニおいてハ尤稠敷合戦御座候儀相見へ申候」(文政二年(一八一九)「峠村国郡志下しらへ帳『佐伯町誌』) 当村(峠村)古戦場の申伝えは、『陰徳記』にあるように、陶の郎党宮川甲斐守が七千余を引率し、天文廿三年六月朔日、廿日市の西折敷畑の

山上に陳(陣)を取り、毛利元就父子が攻め寄せて敵しい合戦があり、宮川は打負け引き退き、吉田勢は「時」を作り、友田、津田、浅原まで追かけ、究竟の頭七百五拾余りを討ち取り、宮川甲斐守も討死したとのこと。すると、引き口に当る当村では激しい戦闘があつたものとみえます。

「折敷畑の戦」についての記述です。「折敷畑之山上二陳ヲ取」の「陳」は「陣」の書誤りだと編者は丁寧に書き直しています。もともと、「陣」を「陳」と書くのはこの資料に限ったことではなく普通に見られることです。例によって、当字だろうと思っていました。辞書に当ると違いました。

【陳】(『漢字源』)

《常用音訓》チン《音読み》チン／ジン(チン)
〔名〕戦闘のための軍勢の配置の形。《同義語》
↓陣。

訂正が要るのは「陳」ではなく、「吉田勢時(関を作り)」の方でした。

決而

「高宮郡庄屋格中嶋村算六儀、諸郡村々測量之儀、同人内願之趣も有之候由之处、此儀相調候得は上二も調法相成候事故、此度算六諸郡廻村測量之儀同人願之趣聞届有之候条、此旨相心得、尤諸入用等ハ全ク算六自分払ニ致候旨ニ付、是等之儀も相心得、村々ニ於て故障無之様役人共へ申談可置者也」(天保二年(一八三一)「鶴亭日記」)

高宮郡庄屋格中嶋村の算六が諸郡村々の測量を願ひ出たが、これができると藩にとつても都合がよいので許可した。諸入用等は全て算六自分払とのこと、村々役人に話しておきなさい。

「各様被成御揃益御堅勝被成御勤役候半と珎重奉存候、然は私共儀此度諸郡村々測量之儀御赦免、明後廿四日出立仕、左之通村々大道筋并賀茂郡境筋測量廻村仕度奉存候間、宜御取計可被下候

一 上下六人宿之儀御願申上候、尤朝夕ハ一汁限、昼飯は弁当にしめ香之物類何ニても所有合之品にて宜、馳走ケ間敷儀決而御断申上候

.....

一人夫六人宿継之事……壹人ハ丁間打手伝、賄方巧者之事、貳人ぢしやく持台持共、壹人雨具弁当持随分達者之もの、貳人ぼんでん持拾五歳以上二候得は子供ニても宜御座候
外ニ壹人案内村々より地名能承知之人御出し可被下候」(天保三年(一八三二)「鶴亭日記」)

皆さま御堅勝にお勤めのこととお喜び申上げます。私この度諸郡村々測量の許可を頂き、明後廿四日出発、左の通り村々の大道筋や賀茂郡境筋を測量して廻りますのでよろしくお願いします。一行六人の宿をお願いします。食事は朝夕は一汁だけ、昼飯は弁当でにしめ香の物など何でも有り合せの品でよろしく、ご馳走がましいことは「決て」御断りします。……………一人夫六人をお願いします。壹人は測量手伝で賄方巧

者であること。忒人は磁石持・台持。忒人は雨具弁当持で達者なもの、忒人は梵天持^{ぼんてん}、拾五歳以上なら子供でもよろしい。ほかに忒人案内、地名をよく承知の人を出してください。

中嶋村算六が藩の許可を得て「村々大道筋」の測量をするため、村役人宛にだした依頼状です。総勢一二名、磁石や梵天を準備した本格的な測量と見えます。

「馳走ヶ間敷儀決而御断申上候」の文言があります。「決而(決して)」の使い方に多少引っかけがあります。

【決して】(『広辞苑』)

(下に否定表現や「ものか」を伴う) かならず。どうしても。絶対に。決して。浮世風呂二「あかえいなどは―おあげなさいますな」。「―行くものか」

ここでは、「絶対にお断りします」の意味です。

致拝啓

「雲州行商嶋屋理右衛門、貴辺へ罷越候由告来二付、一書致拝啓候」(文政十二年(1829)、上田少藏宛、頼杏坪書翰)

雲州行商、嶋屋理右衛門があなたの辺りへ行きますと知らせに來たので、一書を「拝啓いたし」ます。

【拝啓】(『広辞苑』)

(「つつしんで申し上げる」の意) 手紙の冒頭に用いる挨拶の語。謹啓。肅啓。「春暖の候」

「拝啓」とは「手紙の冒頭に用いる挨拶の語」とだけ理解して、「啓」の意味まで考えが及ばなかったため、「致拝啓候」と書いてあると「アレ!」と思ってしまう。

【啓】(『漢字源』)

⑤ケイス(動) もうす(マラス)。口をひらいて

意向を述べる。「拝啓」「啓上」「啓白」

諸国を股にかけて仕事をする行商は、郵便配達を頼まれることも多かったのでしょう。'08/06/21のブログ「幸便」参照。

老衰

「愚老も今春七十七ニ登り候、先ツ無事越年いたし候、耳聾物わすれつよく成候へとも、精神ハ少々残り、詩文も慰ニ致し候日ハ易消候、但歩行むつかしく、少々遠キハ必^{もちよ}籃輿^{らんよ}を命候」（天保三年（二八三）一月二十三日、上田少藏宛、頼杏坪書翰）

私も今年で七十七になり、無事に越年しました。耳は聞えず、物忘れも強くなりましたが、「精神ハ少々残り」詩文を慰みに日を過しています。ただ歩行がむつかしく、少々遠い所へは駕籠を使います。

これは、天保元年（二八三〇）、七五歳で辞職、隠居

した頼杏坪の天保三年（二八三三）の書翰です。天保五年（二八三四）に七九歳でなくなります。

この頃「逐年老衰を覚候」と手紙に書いていますが、物忘れがひどくなってもクヨクヨせずに、「精神ハ少々残り」と言切る……のには感心します。

抜句

「〇広嶋尾長天満宮奉納三千句寄 額上百句

多賀菴宗匠撰 四季乱題

二十句一組入花一匁 但シ一組ヨリ下受不申候

御老人百句御出し之御方ハ抜句無之共、其内ニテ

壺句ハ額上へ出し申候

十月限かたく不延

（御詠草ニ御俳名、同実名
所書まで委しく御印の事）

景物 巻頭エハ 巻 巻軸エハ 絹地ノ画、二番

掛物、三番ヨリ五番マテ 盃、六番ヨリ二十番マ

テ 扇子

願主 渚嵐・圭雨・菴菰・鳳山 清書筵史」（文政

二年（二八一九）一月、「鶴亭日記」）

「鶴亭日記」の主、野坂三益は「柴籬」の俳号で多くの俳句を日記に記しています。その記事中に「句の募集要項」があります。

広島の尾長天満宮に奉納する三千句を募集する。額に掲げるのは百句。選者は多賀庵宗匠(玄蛙)。四季乱題

【乱題】(『日本国語大辞典』)
俳諧の連座で、四季の題をとり混ぜて俳句を詠むこと。また、その題。

二十句を一組として投稿。入花(投稿料)は一匁。

【入花】にゆうか。(『広辞苑』)
(「花」は進物の意。進物には花の枝を折り添えたからいう) 俳句・狂歌などの添削てんさく料または点料。入花料。いればな。

【点料】(『広辞苑』)
俳諧などの、点者の受ける報酬。

但し一組(二十句)以下は受付けない。御壺人で百句を投稿すれば、「抜句」がなくてもその内の壺句を額上へ出す。

【抜句】ぬきく。(『日本国語大辞典』)
秀逸の句を抜き出すこと。また、その句。

投稿期限は十月(延長はない)。御詠草には俳名・実名・住所まで詳しく記入のこと。景品は、巻頭(最優秀作)は巻、巻軸(優秀作)は絹地の画、二番は掛物、三番より五番までは盃、六番より二十番までは扇子。願主は渚嵐(広島)・圭雨(安芸国)・菁莪・鳳山(広島)。清書は筵史が担当する。

川替

「道元橋より正福寺脇へ通り重常へ出ル川筋邪なる故、年々洪水の節ハ堤きれ、田地へ砂石埋ミ毛上

損し、百姓困窮に及ぶ故、御願申上、寛政四年子の春道元橋より重常迄川替仕候」(文政二年(一八一九)、賀茂郡寺家村「国郡志就御用下しらへ書出帳」、「鶴亭日記」)

道元橋より正福寺脇を通り重常へ出る川筋は、年々洪水のとき堤防が切れて田地に砂石が入り、作物が被害を受け百姓が困るので、御願して寛政四年(一七九二)春、道元橋より重常まで「川替」をしました。

「川替」は、古文書では珍しくない言葉ですが、辞書では見つかりません。

「西条辺岐山多御座候ニ付、年々砂石夥敷流出、大川筋竝切明川等埋強、先年も寺家村分土手度々切損、流地等も出来仕候故、寛政三奉願、同四子年大川之内道元と申所より重常と申所迄至て大曲之ヶ所畝替仕、川成相直、其後文化年ニも奉願、切明川之内角田と申所、当三ヶ村寄合にて同九申年川替仕」(文政十一年(一八二八)「鶴亭日記」)

西条の辺は嶮しい山が多く、年々砂石が大量に

流出し、大川筋や切明川では川筋が埋り、先年も寺家村の土手が度々切損し、流地等もできましたので、寛政三年(一七九二)に藩にお願いし、同四年には大川の内、道元から重常までの大曲りの個所を「畝替」して川を真っ直ぐにしました。その後、文化年にもお願をして、切明川の内、角田という所を関係三ヶ村が協同で、同九年に「川替」をしました。

寛政四年の工事は、「大曲之ヶ所畝替仕、川成相直」しており、これを「川替」といっています。すると、「川替」とは「川の通り道を替える」ことなのでしょう。洪水などにより河道が変わるのも「川替」でしょう。「畝替」は耕地を別の使い方にするのだと思います。

下執事

「十月八日の尊翰、近藤泰之進殿より落手、謹て拝見仕候。……頓々首々。

十一月六日

福沢諭吉

九鬼様 下執事」(明治二年(一八六九)『福沢諭吉百通の手紙』)

「九鬼様」は摂州三田の旧藩主(当時は藩知事)、九鬼隆義です。

手紙の脇付で「侍史」はよく見かけますが、「下執事」は珍しいのではないかと思います。

【侍史】(『広辞苑』)

(「史」は書き役の意) ①貴人のかたらわに侍する書き役。右筆。②手紙の脇付の語。侍史を経て差し上げる、すなわち相手に直接差し上げることをはばかるという謙遜の意を表す。侍曹。

「田中一郎様」

「侍史」とあっても、これは単なる形式で、脇付の一種と理解していましたが、相手が「旧藩主」ともなると、本当に「下執事」宛に書くのかと思いましたが、その内容(「尊翰」など)はやはり本人宛のものでした。

「……御序の節大守様え宜敷御機嫌伺被仰上被下候

様奉願候。……拝具。

八月二十一日ペートルスビュルグにて認

福沢諭吉

大橋栄次様」(文久二年(一八六二)『福沢諭吉百通の手紙』)

手紙」)

同書註によると、「巻封じで末尾に「封 木村撰津守様御内大橋栄次様 従伯徳禄堡 福沢諭吉 平安」と記してある。ヨーロッパ巡遊中の書簡。木村撰津守喜毅(維新後芥舟と称す)に送ったもので、当時の慣例に従いその用人大橋栄次に宛てたものである。」とあります。「序のときに殿様によりしくお伝え下さい。」とあるので、用人宛とわかります。

「伯徳禄堡」は「ペテルスブルグ」のこと。「下執事」の「下」は何でしょうか。

我等共

「かやの峠つぶ迄、うね数式ツ平数六ツ、道より下は坂村山組、道より上ハ矢野村山に相極申候

右之通、両村庄屋組頭衆長百姓中并我等共六人出合、相談之上堺相極、新道両村より出合作らせ、うね々に堀切仕置候、為後日証文如件

宝永七庚寅年三月廿四日

坂村組矢賀村庄屋 助左衛門

同仁保村庄屋 半三郎

矢野村組大屋村庄屋 庄兵衛

同 船越村庄屋 源兵衛

中野村庄屋 治右衛門

和庄村庄屋 太郎兵衛「(宝永七年(一七二〇)『広

島県矢野町史』ほか)

これは矢野村と坂村間の首銭山の山論の仲裁覚書の一部です。「うね」「平」「堀切」などの言葉がよく解らないのでどうも困りますが、「新道」を造りそれを境とすることで話がまとまったようです。

坂・矢野両村の庄屋・組頭・長百姓に加えて、仲裁に入った安芸郡他村の庄屋(六人)、合計一二人以上が集って取決めています。文中の「我等共六人」は、この文書を作成した仲裁の他村庄屋です。

通常「我等」は複数を意味しますが、「我等共」なら文句の付けようのない複数です。

【我等】(『広辞苑』)

①(二人称。丁寧な言い方で多く男性が使う)(ア)われわれ。わたくしたち。(イ)われ。②(二人称。同等以下の者にいう)おまえら。汝ら。わいら。

一人称単数にも使い、複数もOK。二人称にも使えるとは！

【我等】(『古文書用語大辞典』)

私。自分。「等」とあるが複数を意味しない。

複数の場合は「我等共」となる。

この辞書によると、「我等」は単数であるとしています。

「我等」は「私たちが」の意味ではなく、「私が」だろうと思います。「(ブログ「親ノ恩送り」(2010/2参照))と書きましたが、辞書が裏付けています。これからは、きちんと「我等」と「我等共」を読分け

たいと思います。

態と

「御紙面忝拝見仕候、然は亡父遺言ニ就郡中医師無之村々人別予防方施薬仕度旨、先達て申出候処、施薬可仕様被仰付、亡父生涯之薄志も相立、私ニ於ても甚以大慶仕候、就夫割庄屋雄平殿より医師有之村々迎も其所之医師施薬不被致候村ハ小百姓・浮過等予防方服用致候儀出来不申候様御心付之御紙面御見せ被下、尚亦愚存申出候様被仰聞、御尤之御儀ニ奉存候、素より前段申上候通、亡父之志ニ御座候間、老入ニても多分施薬仕度奉存候得共、郡中医師中思召之程も如何敷御座候故、態と差扣、医師無之村々と申出候、何卒医師有之村迎も施薬不被致候村々ハ私より施薬致候様高慮宜御取計可被下候、先ハ貴酬計、勿々、以上

十月十九日

三益

庄屋 藤兵衛様「(文政五年(二八三)「鶴亭日記」)

御手紙拝見いたしました。亡父の遺言により郡中無医村の人々に伝染病予防のための施薬したいとお願いましたところ、お許しをいただきました。これで亡父生涯の薄志も立ち、私も喜んでおります。それに付き、割庄屋雄平殿より、「医師のいる村でも、所の医師が施薬しないなら小百姓・浮過など予防薬を服用できないが：」と御心付の手紙を見せていただき、私の考えを聞きたいと言われ、もつとものに存じます。前述のように亡父の志ですから、老入でも多くの人に施薬したいと思いますが、郡中の医師の方々のお考えはどうであらうかと思い、「態と」差控えて、「無医村」と申し出ました。何卒医師のいる村でも施薬のない村は、私から施薬できるようご配慮いただければ幸いです。取急ぎご返事まで。

日本に初めてコレラ(虎狼痢)が発生した文政五年(二八三)の「鶴亭日記」に収録された手紙です。

【態と】(『広辞苑』)

①ことさらに。わざわざ。②格別に。きわだつて。③正式であるさま。本格的に。④故意に。意図的に。⑤心ばかり。少しばかり。

「態と」という微妙なニュアンスを持つ言葉を使っています。事が事だけに他の医師に気を遣い、「意図的に」無医村に限定しています。このとき三益は、賀茂郡三九ヶ村の内、二二ヶ村に対し 一五五五二貼の施薬をしました。

【貼】（『単位の歴史辞典』）

薬を調合し包んだものを数えるのに用いる語。

包・服。一貼、二貼と数える。ちよう

「い才は阿部氏より可申上候得共、一応小生より右の事情申上、御依頼申呉候様との事に付、態と一書を呈し候。」（明治十五年（一八八二）『福沢諭吉百通の手紙』）

詳細は本人阿部氏より申上げると思いますが、一応小生よりも右の事情を説明しお願いをしてくれるようにとの事で、「態と」お手紙を差上

げました。

この手紙の場合は、「ことさらに」くらいの意味でしょうか。なにしろ難しい言葉です。

そろ

「さくじつはおんてがみくだされはいけんいたしそろいつさくやおんかへりのせつびやぼんならびにこがたなおんわすれみぎはいづれもおんあづかりもうしおきそろ」（明治十七年（一八八四）後藤牧太宛『福沢諭吉百通の手紙』）

後藤牧太は、東京高等師範教授、「かなのくわい」の会員で、いつも仮名の手紙を書いており、そのため福沢もこのような返事となったのでしよう。読みにくいので普通の形に変えてみます。

昨日は御手紙被下拝見致候、一昨夜御帰りの節、琵琶笛？并小刀御忘れ、右は孰も御預り申置候。

【琵琶笛・口琴】びやぼん。（『広辞苑』）

玩具楽器。細長い鋼をかんざしのように二股にし、間に針のような鉄を先へ余るほどに付けたもの。もとを口にくわえ、鉄の先を指で弾きながら吹き鳴らす。一八二四年（文政七）ころ江戸で子供の間に流行した。きやこん。くちびわ。

仮名書きのお陰で、「候」をどう読んだかがわかります。

【候】そろ。（『広辞苑』）

①（サウラフの転。室町時代に始まる）…ます。運歩色葉集「候、ソロ」。四河入海「我は子に従て遊と云はれ」

「候 ソウロウと読む。今日の「です」「ます」に当たる丁寧語。書簡ではもつとも頻繁に使われる。文末にきた場合「ソロ」と読むのが当時の慣習。」（『書翰初学抄』はしがき）

「新年の御慶《ぎよけい》目出度《めでたく》申納候《もうしおさめそろ》。……」（夏目漱石『吾輩

は猫である』）

【又候】またぞろ。（『広辞苑』）

またしても。またもや。もう、いいかげんにしてくれというような気持ちをこめて使う。

【宜候・良候】ようそろ。（『広辞苑』）

①舟人のかけ声。また、はやし声。②操船で、取舵とりかじ・面舵おもかじの必要はなく、真つ直ぐに進めという場合の命令語。

「又候」「宜候」は「ようそろ」と読むのは聞き知っていましたが、文末の「候」までも「ようそろ」とは……！ この「慣習」にはどうも馴染めそうもありません。

位下り

「一中々田壱反式畝廿歩 壱石三斗九升壱合
米丸中下にして 源兵衛
内 壱斗式升七合 位下り

残り 壹石貳斗六升四合」（慶応四年（一八六八）高田郡三田村明知坪し帳」、永井弥六『広島藩農村考』）

これは「三田村明知坪し帳」です。「坪し」は「ならし」と読み、「概」「均」の意味（笹原宏之『日本の漢字』）ですから、「坪し帳」は「地概帳^{じならし}」です。

【地均し】じならし。（『岩波日本史辞典』）

江戸時代の田畑の面積・石高の修正作業。地坪・地撫・地平・地並とも記された。検地帳と実態とのズレを是正し、貢租負担の公平化をねらった。村高は固定した上で均す場合と、石高修正にまで至る場合とがあり、また、藩の政策として実施されるものと、村内で内々に行う場合とがあった。藩営の地均しとしては、広島藩・長州藩・鳥取藩・松江藩などの事例が著名。

広島藩では「村高不易」の原則により、村高を變更しないで地概をしました。「検地帳と実態とのズレ」は、検地後、洪水などにより耕地が流失したり、

土砂が流れ込み田の等級が下がることなどにより生じます。

この資料を見ると、検地により源兵衛の田の面積は「壹反貳畝廿歩」、等級は「中々田」と認定されていた。中々田の斗代（反当収量）は、逆算すると十一（壹斗壹升）の様です。これから分米（公定収量）を計算すると、「壹石三斗九升壹合」（1.3933斗）になります。

「中々田」であったこの田は、地概により位が下がって、中下田とされましたので、分米は「壹石貳斗六升四合」と算定されています。これを逆算すると斗代は一つ下がって、十になっていると思われます。結局、「壹斗貳升七合」だけ分米が減ったことになります。

「位下りは掛け下げとも云い、土地の位を下げた場合の検地帳記載高との差額を云うのである。」（永井弥六『広島藩の庄屋』）

「洪水による川の氾濫で土砂が流入し、その田畠の位が低下したために生じた石高の差を「懸下げ高」

と呼ぶ。」(『廿日市町史』補注)

「掛下」は「懸下」とも書きます。資料で「米丸」とは何か分りません。

我が鍋之もの

「三永屋田は私屋鋪続統之事故張込、五百八拾目之入札仕候処、私分高札故落札ニ相成申候。仍テ右水坪ハ式ヶ所共潰し候得共、三永屋田南詰之角ミに小キ出水坪有之、此水を私抱裏田へ取候へは裏田用水不自由故、永久之旱魃愁ヲ免ギ、勿論私不引取してハ外人へ可引取出水ニ無之義と奉存、其段用所受武平殿へ申出候所、我が鍋之ものヲ我が喰のじやニ依て惣体之害障ニ相成義も無之故、随分裏田へ引取候て可然と武平殿より被申聞」(天保十三年(一八四二)「十文字あたらし池引方之儀ニ付水子懸り合一件内済口上書」)

(売りに出された)三永屋田は、私の屋敷続きなので、張りこんで五百八拾目の入札をしました

ところ、私が高札で落札になりました。そこで(三永屋田にあった)「水坪」は式ヶ所とも潰しましたが、この田の南角に小さい「出水坪」があり、この水を私所有の裏田へ取水すれば水に不自由していた裏田も旱魃の心配がなくなると考え、勿論、(私の田にある水坪ですから)私が取水しないで外の人が取水する理由もないはず、そのことを用所受の武平殿へ申し出ると、「我が鍋之ものヲ我が喰のじやから誰の障りになるというものでもない。好きなように裏田へ取水するが良からう」と武平殿が申されました。

雨池の灌漑について村民の間でトラブルになった文書の一部です。「水子」「水坪」という珍しい言葉が見られます。

「水子」は、赤ん坊のことではなく、水利用者をいいます。「田町」と同義と思われます。「水坪」は、辞書によると、「鉾山で坑内の水の溜まっている場所」(『広辞苑』)と説明していますが、ここでは田の一隅に作った小さな水溜でしょう。

古文書で「諺」らしきものを見ることがあります。それを調べてみても、大部分はよく解りません。江戸時代に使われていた多くの諺が消えてしまったのではないかと思えます。ここに出ている「我が鍋之ものヲ我が喰のじや」は、調べなくてもよく解ります。「自分の鍋の食べ物自分を喰らってどこが悪い！文句アツカ」の啖呵が聞えてきそうです。

令承知

一 態申遣ス

其村百姓権助宅へ這入擲伏セ絶命ニおよひ候段、注進之趣令承知、見分しらへとして御人出有之候条、此旨相心得、入念番人等附置可申者也

辰九月十八日

賀茂郡御役所

庄屋亮平」（天保三年（一八

三）「鶴亭日記」）

その村の百姓権助宅へ入った（盗賊を）投げ伏せて絶命に及んだ件についての注進の事柄は「令

承知」した。見分調べとして役人が出張するので、入念に番人等つけて置きなさい。（「御人出」2008/02/01ブログ参照）

「令承知」の言回しは、漢文の表現方法です。

【令】（『漢字源』）

⑦（助動）しむ。せしむ。使役の意をあらわすことば。させる。▽「令＋A（人）＋B（動詞）」の形で用い、「AをしてBせしむ」と訓読する。命令してさせるの意から。平声に読む。（類義語）↓使。

「殿様去ル十五日被遊御登城候处、勢州桑名へ御所替被為仰付候由從江戸申来り候、右之趣可令承知候、已上

閏八月廿二日

〔軀奉行〕馬場又左衛門」（宝永

七年（二七〇）『広島県史』）

殿様（松平忠雅）が、去る十五日に御登城されたところ、勢州桑名へ御所替を仰せ付けられたと、江戸より連絡があつたので、このことを「令承

知」させなさい。

この文書では、辞書の説明どおり「承知させる」の意味です。ところが、最初の文書「注進之趣令承知」は「注進の趣は承知した」の意味だと思います。

【勤番】（『古文書用語大辞典』）

交代で勤務すること。その番にあたること。または諸大名の家臣が交代で江戸や大坂の藩邸に勤務すること。「御勤番之段令承知候」勤番のことは承知しました。

この記述では「令承知」を「承知しました」と説明しています。

「去る廿二日薬師堂前張紙有之二付、申出之趣令承知候、素より外夷交易之儀ハ重き御法度ニ候得ハ……」（元治元年（一八六四）『尾道市史』）

去る廿二日、薬師堂の前に張紙があつたとの申し出「令承知」した。もとより外国貿易は重き御法度であるので……

これも「承知した」です。

「三月廿五日之芳翰着令拝見候」（伊藤仁斎書翰、『近世先賢書簡集』）

三月二十五日付のお手紙が届き、「令拝見」（拝見しました）。

「令」は本来の「させる」という意味からシフトして、「する、した」という意味でも使っています。

索引

【あ】

相聞 174
相組 39
相借屋 18
青木 43
赤木 43
上り金相場 68
上り銀相場 67
上り田 88
安芸郡 52
安芸の「ト脱け」 147
芥川屋・芥川屋 56
悪情 148
芥川貞佐 121
悪田不知 76
上米 78
アサリ 41
足輕 15
足弱 24
西風東風 8
あとの鴈先二成り 116
雨乞 88
有米 28

【い】

家取立 145
家役 26
池月 135
不一応 109
壺人扶持 49
一厘米 25

一六便 117
一作引 135
五ツ物成 78
井手水懸り 45
井手役 166
いもち病 28
いられ子 27, 48
入会 115
煎海鼠 146
入作 130
入百姓 129
入草 166
院家 78

【う】

上田少蔵 138
植え物 153
浮過 26
請々 109
打歩 23, 113
饅飰 125
馬足 142
馬責 82
馬宿 6
うむとん 124
上置 108

【え】

永貫文 68
永年 156
えごのき 126
海老屋 38

遠州御崎 105
塩田 31

【お】

大川かかり 44
大塩の乱 93
太田川 33
太田金右衛門 71
大年寄 11, 56
大目付格 72
大目付同格 72
大割 13
大割方 13
大割銀 13
大割年番 12
御借米 78
合薬 174
怠る 136
御小人 157
押える 144
御刺米 85
御側医師 49
御側医師並 49
御勤ヶ間敷 110
同ク格 72
入御聴 64
達御聴 64
御目見医師 49
思ひ入買 34
御戻米 78
思惑買 34
御甘米 78

御医師格 46, 48, 49
御医師組 49
御人出 7

【か】

改印札 110
買^ベ 34
開春 54
海田市 123
改歩 113
会林 140
返掛 160
書留 50
格 72
格式 73
掛け下げ 190
懸ヶ作 69
水主役 13
かしく 160
[門屋]高 133
金芽木 127
嘉平 55
鎌札 115
借替 100
刈敷 167
川替 184
皮楮 93
皮楮六貫目かへ 95
為替 92
瓦師 142
瓦葺 141
欠 75
干支紀日法 111
願主 140, 160

勘定所物書役並 163
菅茶山 138
巻頭 139
欠米 75

【き】

得貴意 131
承届 171
聞 22
気助 117
気ノツマラヌ 118
気毒 70
幾望 53
既望 54
給人 144
得御意 131
郷保 150
向來 43
切り・限 96
切月 89, 95
切免 164
銀札 23, 110
勤番 193
銀歩 113
金屋 38

【く】

口へ文を吹込み申し候
65
熊谷鳩居堂 52
位下り 190
九六銭 113
郡御用屋敷 156
軍役 78

郡割 11

【け】

芸備孝義伝 171
景物 182
けしからぬ 120
下執事 185
下女あしらい 19
下代 162
決而 180
下人 18
毛坊主 103
現在 43

【こ】

小家 17
小家住居 18
後一日 54
口演書 90
業鏡 85
幸便 173
絞油税 74, 157
広陵 150
肥草刈 166
小貝 40
極銀所 24
国産 24
石代納 143
五組の大年寄 58
備御苦勞 68
柿葺 141
御減石 78, 109
古検地 31
御国産第一 43

御直参 14

越米 93

戸長 107

小使 12

言葉を引下げ 19

小一畝 30

五百掛の令 110

小春 55

小間銀 13

小廻り 156

米納 143

御厄害 154

御用聞酒屋 38

虎狼痢 187

【さ】

采地 78

柴籬 114

朔 53

差合 159

差紙納 143

差次払 143

差縫 151

差許・差免 106

左側通行 167

札場 23

札場 110

参宮の犬 80

三斎月 84

三八便 116

【し】

似雲 175

直宛テ 50

士格 46

直参 14

軸 139

侍史 185

仕出し 21

下弾書出帳 74

下見帳 29

七夕 54

質屋定法 89

七厘米 25

支配人当テ 50

地百姓 129

締め 36

借錢なし 76

社倉法 120

重五 54

巡見使 6

兄鷹 119

帖 36

状かさ 97

定加り 178

上元 54

正五九 84

上巳 54

令承知 192

上納銀相場 67

庄屋 178

庄屋支配 108

庄屋札 115

職人引高 26

女子之業前 98

諸職人水役銀 27

初二 53

白洗木 127

しらせ書 50

尽 54

陳 179

新開組 52

心学 47

人日 54

壬申戸籍 154

新浜 83

【す】

漉桁 81

過楮 93

スベタ 9

摺墨 135

【せ】

正貨 23

情質 149

製酒銘 38

情を出し 149

釈奠 111

善導印鑑 47

【そ】

象 5

凡而 83

送入籍 154

候わゝ 150

候半 151

粉葺 140

束 35

素札 9

そろ 188

損料借 123

【た】

弟鷹 119

代官 52, 177
代官直支配 107
頼杏坪 160
太神宮之御祓新曆111
大炮 74
大吏 150
高内引 134
高掛り取立物 132, 13
5
高付 36
高分り 130
担桶 128
他国米 34
助足 86
立木式搾り機 158
豎紙 81
立砂 128
たでる 167
田徒 166
種かし 76
種朶おろし 76
頼母子 160
田畑之位 36
旅 17
旅住居 16
端陽 54

【ち】

知行 78
竹酔日 54
「知新集」 57
地鳥見 119
地内木 125
中秋 54

仲春 54
貼 188
重九 54
丁錢 113
朝鮮綿 43
重陽 54

【つ】

付廻り 12
著 137
造り酒屋 37
辻押 12
辻賄 175
貫ぐ 102
ツ子 32
粒立 15
積帳面 99
積る 100
つら水 124

【て】

手代 162
手附 162
手次坊主 103
手作手絞 158
出水坪 191
伝正院 84
天水 44
田法 30
天保の飢饉 68
天満屋 57
点料 183

【と】

同格 72

頭書 89
道場 104
当前 43
盜賊 7
概屋 38
所替 192
斗代 29
栩葺 140
苦小牧 116
富鬪 101
取替 91
為取替 91
取弾 74
取葺 141

【な】

内陣 78
流質 95
投出し証文 151
七草 54
坪し帳 190
成方 120
成尺 169

【に】

二月切 96
入花 183
入金一步入 113
庭はへ 86

【ぬ】

沼井 31
抜句 182
抜け紙 94
抜け楮 94

沼田郡 52

【ね】

念 54

年々引 132, 134

年番 10

年番割庄屋 10

【の】

野坂三益 67

【は】

致拝啓 181

梅月 55

令拝見 193

梅颯 53

灰木 127

樋 87

端裏書 137

破船 104

八月切 96

ぱっと 146

放シ追 170

払押 11

払金二歩入 113

腹白米 76, 86

藩医 48

番組 177

半紙壺丸 35

番田子 128

半知 78

半役 26

【ひ】

飛檐 78

引通し 170

引物 134

久太郎 52

美様 50

引越 102

人押 7

一つ書 90

雛形 81

丁の日 110

評判 45

表裏 122

平ラ様 50

平僧寺 77

平野屋 38

広島 32

広島市 52

「広島独案内」 55

広島府 52

広島町奉行 52

分 42

普為知 51

普為聴 46

吹聴 47

封し 9

吹き込む 66

吹綿 43

復月 55

札鎌 114

札纒 101

札屋札 115

仏護寺 103

不都束 172

【ふ】

分 42

分上 99

分丈 98

【へ】

欠り 75

【ほ】

望 54

奉公人 15

法寺 77

ホツト 147

本宿 6

梵天 181

斤度 74

本百姓 17

本役 26

【ま】

牧 115

まいらせ候 159

前一日 54

前島密 71

賄い 161

薪ぞうし 164

枕金 160

又候 189

又者 15

町借押米 143

町奉行所支配 108

丸役 27

丸 35

【み】

見送 66

御笹川 32

三篠川 33

御篠城 33

三篠村 33

水子 191

水坪 191

水役 26

水役銀 27

晦 54

三田川 33

見立 114

見附田畑 36

三原屋 38

三原屋 56

身振 16

身振り 98

身振狂言 99

【む】

結ぶ 175

無高浮世過 17

無高地 133

無地高 132

村囲ひ 119

村調 99

室屋 38, 56

【め】

銘酒屋 37

面木 157

面取立 145

免割 144

【も】

孟夏 55

申聞 22

孟冬 55

孟明 55

木綿収納銀 9

不洩様 20

諸口 35, 81

門徒 103

【や】

焼飯 12

やさら 40

屋敷斗代 36

疾病 168

山県郡 88

【ゆ】

郵便報知 71

甘メ 143

【よ】

養女 102

宜候 189

横紙破り 81

他所向 176

四ツ物成 78

世並屋 172

呼名 138

余間 78

【ら】

頼杏坪 173, 182

頼山陽 53

乱題 183

【り】

流質 89

両替屋 56, 92

兩人庄屋 178

厘 42

厘米 25

【れ】

連々作 36

【ろ】

臘月 55

老衰 182

臘八 54

轆轤木 126

【わ】

我が鍋之もの 191

態と 187

早稲 28

綿座 13, 110

綿座切手 110

蕨粉 45

割庄屋 10

割庄屋格 72

割庄屋同格 72

我等 186

我等共 186

言葉を“面白狩る” 第4集

——広島古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

2008年7月20日 発行

高橋 新一 編集

(Mail: tak10172@gmail.com)

言葉を“面白狩る”

第 5 集

——広島古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

高橋 新一 編

はじめに

広島近世古文書の中から、面白い言い回しや、辞書で見つかりにくい言葉を探し出し、調べています。

近世文書を見ると、解らない言葉が次々と出てきます。すぐに辞書で調べます。電子辞書でたいい用が足りませんが、載せてないときは重い辞書を引っ張り出してページを繰ります。それでも見つからない言葉があると、あの手この手で調べるので、手間が掛かります。

以前は、「辞書は何でも載せている」と思っていました。ところが、古文書を読むようになると、探し物が見つからないことを度々経験するようになりました。考えてみると、これは当然のことで、限られた頁数の辞書に全ての言葉を収録できる訳がない。いや、その前に、大きな言葉の海を相手に全ての言葉が調べ尽くされている筈がない……。

また、見つけ出しても、不適切な解説の場合もある。

ります。辞書の編集者として間違うことがあっても不思議ではありません。

辞書に載せてない言葉でも、辞書を頼りにして、古文書をあさり比較すると、意味が明らかになることがあります。

古文書は、いわゆる歴史用語だけでなく、〈何でもない言葉〉でも、解らないと正確に理解できません。ここに取り上げた言葉は、編者が〈面白い〉と思ったものです。題して、「言葉を〈面白い〉」。

これは、二〇〇八年七月から〇九年五月までの同名のブログを編集したもので、最終の第五集です。

二〇〇九年五月

高橋 新一

主な参考辞書

岩波書店『広辞苑』第五版 電子ブック版

小学館『日本国語大辞典』

学習研究社『漢字源』電子ブック版

岩波書店『岩波日本史辞典』CDROM版

種松

「 覚

一其村御建永寿寺山土地半方北平之方、種松・境松等綿密ニ残置、其余御下ヶ被下候ニ付、引渡し候条、此旨相心得、伐刈中猥成義無之様、火之元別て念入、猶伐仕舞之上早速様子可申出、左候得ハ跡山可致見分もの也

未十月 殖産係」

（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

貴村（世羅郡田打村）の永寿寺山（御建山）の半分、北側の方を、種松・境松などはきちんと残し、それ以外を払下げて引渡すので、気を付けて火の元に注意して伐刈し、伐採が終った跡の様子を見分するので早速連絡しなさい。

これは、御建山（藩有林）の材木を払下げるとの、広島県庁の許可書です。廃藩置県により御建山が県

有林になったものとみえます。

「種松・境松等綿密ニ残」すよう指示しています。「境松」とは境界を示すための松と思われる。幹を「折り曲げ」ると、枯れずに残り、これを目印にするそうです。「種松」は「種を採る松」かと思いましたが、どうも違うようです。

「当村と其村論所へ当ル七曲り道より北東へ引廻シ、上平良村野山境迄之間、此度御定之境目通り兎口申分無御座、則此傍示都合八ヶ所両村出合を以地中へ炭を埋メ土塚を築、種松を植、方限より方限迄之間は谷限り或ハ見通シ境ニ御定被下候ニ付、自今少も退転無之様、双方共境筋手堅ク相守可申候」（文政八年（一八二五）『廿日市町史』）

当村（佐伯郡原村）と貴村（白砂・葛原村）との山論の場所、七曲り道より北東へ引き廻し、上平良村野山境まで、この度の御定めの境目について諒解しました。この傍示（境界点 計八ヶ所、両村立会いの上「地中へ炭を埋メ土塚を築、種松を植」え、境界の点から点までの間は、谷限り

か「見通シ境」とお決めいただいたので、今後は厳重に守ります。

これは、山論所境界を定める取交し証文です。境界の目印に「種松を植」えると書かれています。すると、これも境界の目印の松（境松）かも知れません。穴を掘って炭を埋めます。炭は何年でも残ります。土塚を築き「種松」を植えます。こうすると、何年経っても境界点だと分るのでしょう。なぜ「種」なのか、分りません。

【種】（『広辞苑』）

⑥ 転じて、物事を行うてがかり。よりどころ。根拠。

(2008/07/20)

畑田成

「乍恐」 「字金重中畑三畝」 「湧水有之候
土地柄にて、畑作仕候ては」 「申、年々損毛
仕、甚難儀至極仕候儀」 「ては、荒地ニ相成、

御年貢御上納仕候」 「御座候、色々工夫仕候得共、畑作は出来不申候、去ル卯年、為心見稻株少々植付仕候処、か成ニ出来立申候、用水之儀は外より引取方無御座、畑内より湧水并天水にて引足候ニ付、外用水・溜井・井堰等之差障リニ相成候儀決て無御座候間、何卒格別之御慈悲、御検見之御序ニても御見分被為遊、畑田成被仰付、田方御取米御上納仕候様奉願上候」（『甲奴町誌』）

恐れながら」 「。字金重にある中畑三畝」

「は湧水のある土地のため、畑作をすれば」 「申、年々不作となり大変困っております。」

「では荒地になつてしまい、御年貢の上納にも」 「です。色々工夫しますが、畑作は出来そうもありません。去る卯年に、試みに稲株を少々植付てみると程々に出来ました。用水は外より引くまでもなく、畑内よりの湧水や天水で足りみますので、外の用水・溜井・井堰等の障りになることはありません。なにとぞ格別の御慈悲でもつて、御検見のお序でにでも見てい

ただき、「畑田成」を許可され、田でできた米を上納したいと思います。

これは、天領、備後国甲怒郡福田村の百姓が大森代官所宛に出した愁訴状の一部です。

「畑田成」という言葉だけ見ると、何のことか解りかねますが、この文書を読むと簡単に解ります。

【田畑成・畑田成】（『世界大百科事典』）

江戸時代、田地と畑地の区別は厳重で、かつてに地目を変更することは許されなかったが、用水不足で稲作を行うことが望めなくなった田地を願い出によって畑地に変えることがあり、これを田畑成と称した。逆に、畑地を田地に変えることを畑田成という。田畑成の場合、通常、上田は上畑（こもり）の石盛に、中田、下田はそれぞれ中畑・下畑の石盛に直して石高を算定する。畑は田よりも石盛が低いから、当然もとの石高よりも減高になるが、この分は田畑成石盛違引として高内引（たかうちびき）に加えられ、年貢を免除された。畑田成の場合は逆に増高となるが、これは畑田成

石間出高（こくまでだか）と称し、村高の外に置かれて、村高同様に年貢諸役が掛けられた。なお干ばつの年に田地で臨時に畑作物を栽培したり、逆に用水が余った年に畑地で臨時に稲作を行ったような場合は、それぞれ当毛畑（とうげはた）・当毛田（とうげだ）と称し、田畑成・畑田成とは区別された。（安藤 正人）

（2008/07/22）

「郎」と「良」

「多五郎抱之田地上エ茶屋田、岩次郎抱之田地甚八田と申所境界、拾ヶ年余已前、多五郎町堀致候所、岩次良より申出ニ、私抱之甚八田と申所到て水持悪敷田地ニ有之候と言、町堀差留メ追々差継ニ罷成候趣ニ付」（天保十三年（一八四二）『甲奴町誌』）
多五郎の所持する田地「上エ茶屋田」と、岩次郎所持の「甚八田」との境目論について、拾ヶ年ほど前、多五郎が「町堀」をしたところ、「岩

次良」から、私所持の「甚八田」は大変水持ちの悪い田地なので町堀をやめるようとの申入れがあり、……

「町堀」なる言葉の意味は不明ですが、隣の田地の持主から、「そうでなくても水持が悪いのに、町堀をされるともつとひどくなるので、止めてくれ」と文句が出たようですから、田の一部を掘って池にすることと見当をつけました。

ここで問題とするのは、「岩次郎」「岩次良」の表記です。「三良」と書いて「さぶろう」と読ませるとは知っていましたが、同じ文書内で「岩次郎」を「岩次良」と書いてあるので、「良」＝「郎」と解ります。

【良】（『漢字源』）

《音読み》リョウ／ロウ

【郎】ロウ。（『学研漢和大事典』）

「解字」良は粮の原字で、清らかにした米。郎は「邑^{まち}＋音符 良」の会意兼形声文字で、もとは春秋時代の地名であったが、のち、良に当て、

男子の美称に用いる。

(2008/07/23)

相生橋趾碑

〔表面〕

相生橋趾碑

〔裏面上段〕

広島市猿楽街西臨於篠川処為旧相生橋趾
初明治十年春有志者胥謀以私費架猿楽街
至慈仙寺岬第一橋尋架慈仙寺岬至鍛冶屋
街第二橋於是双橋於慈仙寺岬端相交接是
以有相生之称也其奇構既可知往来之便亦
可想矣当时徵渡銭以償架橋費爾来幾星霜
時加修理昭和七年県当局増設新相生橋於
旧橋之北旧橋日朽月壞至十四年遂撤之頃
者欲建一碑以表礎近使行人懷旧併伝創設
者功績于後世矣建碑有志者囑余記之余謂
世人動輒追新忘旧滔滔皆是而今有此美举
況余亦久蒙其惠沢者為得不喜而記之乎

皇紀二千六百年庚辰十月穀旦

正七位 翠窓 紀本繩 撰并書

〔裏面下段〕

架橋出願者

今村藤藏

岩崎永助

桐原威平

勝田孫三郎

桑原専之丞

木村市良右衛門

米田庄七

磯部清次郎

村尾徳次郎

山県増太郎

久田儀兵衛

竹内清次郎

〔副碑〕

建碑世話人

宮本貞藏

石井市太郎

増田熊市

林義治

笠井伊兵衛

岩崎永助

これは広島、原爆ドームの近く、相生橋東詰に立つ「相生橋趾碑」です。通りかかる度に、何が書いてあるのかといつも気になっていましたが、なにしろ相手は漢文、しかも風化がひどくて読取れず、眺めるだけでした。「皇紀二千六百年」（一九四〇年（昭和一五）の建立とあります。その五年後、爆心地で被爆した石碑なので読取りにくいのでしょうか。

そこで、広島県立図書館レファレンスに相談を持ちかけると、さすが専門家、三田嘉一著『写真集広島碑林』に読下し文があると教えられました。この読下しを参考にして碑文を見ると、不思議なもので、なんとか読めるようになります。読めない碑文も、光の当り工合で読めることがあるので、日が暮れて懐中電灯の光を当てました。効果は絶大、（石碑解説は夜に限る）と思いました。ただ、「県当局増設

新相生橋」の「増」の字はそれでも自信が持てません。

読下しを参考にして原文を（復元）するという、通常とは反対の作業を経て、再び読下し、現代語訳を作りました。

広島市猿楽街の西、篠川に臨む処、旧相生橋趾たり。初め明治十年春、有志者胥謀り、私費を以て猿楽街より慈仙寺岬に至る第一橋を架け、尋いで慈仙寺岬より鍛冶屋街に至る第二橋を架す。是に於いて双橋は慈仙寺岬端に相交わり接す。是を以て相生の称有るなり。其の奇構既に知るべく、往來の便も亦想ふべし。当時渡錢を徴し以て架橋費を償ふ。爾來幾星霜、時に修理を加ふ。昭和七年、県当局は新相生橋を旧橋の北に増設す。旧橋は日に朽ち月に壞れ、十四年に至り遂に之を撤す。頃者、一碑を建て、以て礎を表して近く行人をして旧を懷はしめ、併せて創設者の功績を後世に伝へんと欲し、建碑の有志者、余に之を記すことを属す。余謂ふ、世人動もすれば輒ち新を追ひ旧

を忘ること滔滔たり。皆是にして今此の美挙あり、況んや余も亦久しく其の恵沢を蒙りたれば、喜ばずして之を記すを得たりと爲す。

皇紀二千六百年庚辰十月穀旦

正七位翠窓紀本繩撰并書

広島市猿楽町の西、太田川（篠川）に臨む処が旧相生橋趾である。初め、明治十年春、有志者が相談し、私費で猿楽町から慈仙寺鼻に至る第一橋を架け、ついで慈仙寺鼻より鍛冶屋町に至る第二橋を建設した。これで両橋は慈仙寺鼻の端でつながった。「相生」の名もこれによる。その珍しい形とともに、往來の便も知られるところとなった。当時は渡錢を徴収して架橋費を償った。以来幾星霜、時に修理を加えたが、昭和七年、県当局は新しい相生橋を旧橋の北に設けた。旧橋は日に朽ち月に壞れ、昭和十四年には遂にこれを取除いた。近頃、碑を建てて礎を表わし、近くを通る人に昔を思い起させ、創設者の功績を後世に伝えたいと、建碑有志者が私

に碑文を依頼した。世の人、ややもすれば新を追う旧を忘れる風潮にあると思う。今この建碑の美挙に際し、その恵沢を受けた私としてはこれを記す外はない。

皇紀二千六百年庚辰(昭和十五年)十月吉日

正七位 翠窓 紀本縄撰并書



(写真右は「口設」、地図は「広島城下大絵図」より)

(2008/07/24)

捨子人相書

「去月廿六日夜、広しま革屋町商熊野理助店二年齡二才位之女子壺人捨有之候ニ付、乳持之もの致養育居、右人相書着るい等左之通ニ候間、銘々召仕之末々迄遂吟味、心当り之もの有之候ハ、来月四日迄ニ可申、尤親類ハ勿論、他人ニても存当り又ハ承り及候筋も候ハ、不隱置可申出事

人相書

- 一 顔丸クデビの方 一 鼻ヒクキ方
- 一 月代ウスキ方 一 一耳口常体
- 一 もめんゆかた地襦袢 一 もめんかすり袷尤肩嶋
- 一 ふくりん継交 一 きぬつぎおさる
- 一 結城しまふくりん肩入袷紫縮緬継交
- 一 真わた浅キ帽子首二卷 一 一赤紋敵たび
- 一 守り袋腰二提 以上

壬申二月 広島県庁「明治五年(一八七二)「続波多野家文書」)

先月（二月）廿六日の夜、広島革屋町、商業熊野理助店に年齢二才位の女子一人の捨子があつたので、乳持の者に育てさせている。この子の人相書や着類^{きるい}は左の通りであるので、銘々の召使い末々まで調べ、心当りのものがあれば、来月四日まで申出なさい。親類は勿論、他人でも心当りや聞いたことがあれば隠さずに申出なさい。

人相書

一顔は丸く、デビの方 一鼻は低い方 一月代は薄い方 一耳口は普通 一木綿浴衣地の襦袢 一木綿緋袷、尤肩は縞覆輪の継交^{つぎまぜ} 一絹継ぎおさる 一結城縞覆輪肩入袷、袖紫縮緬継交 一真綿の浅黄色の帽子を首に巻く 一赤紋敵たび 一守り袋を腰に下げている。

広島革屋町といえ、西国街道が通り、今でも広島第一の繁華街ですが、これは、極寒の旧暦一月、満年齢一歳前後の乳児の捨子の手配書です。

「継交」なる言葉は辞書に見ることはできません

でしたが、「継ぎ接ぎ」のこと。貧しい家の子のようですが、重ね着をして、足袋も履かせ、「帽子」を首に巻き、御守を腰に付けてもらっています。「捨子人相書」も色々と読んできましたが、こんなに気を配った例をみません。

面白い言葉が使われています。「デビ」は「出額^{でびたい}」、おでこが出た子供です。（「デブチン」とも言っていました。）「月代」は「額ぎわの頭髮を半月形にそり上げたもの」ではなく、その辺の頭部の名前のようです。「おさる」は「綿入の袖無し（ちゃんちゃんこ）」、「帽子」は頭ののせるものは何でも。「綿帽子」も「帽子」です。

授乳は、ミルクはないので、母乳がどうしても必要なので、大急ぎで「乳持のもの」を探し頼むことになるのでしょう。

（2008/07/25）

放手形

「 覚

一其御村藤兵衛娘たけ、当村庄兵衛嫁ニ縁付、引越候ニ付、放手形御越被成、慥ニ受取申候、当村加帳可致候、依テ受取手形如件

文政四年巳三月 小堀村庄屋市左衛門印

福田村 村御用引受庄七殿」(文政四年(一八二二)『甲奴町誌』)

貴村(福田村)の藤兵衛の娘たけが、当村(小堀村)庄兵衛の嫁に縁付き、引越しをして、「放手形」を送っていただき、たしかに受取りました。当村で「加帳」いたします。

「放手形」は〈送籍通知書〉とでも言うべき公文書で、庄屋から「村御用引受」の担当者を送り、受取った村では「加帳」をしています。

「宗門受手形之事」

福田村藤兵衛娘おたき

右之者、是迄貴寺御檀那ニ御座候処、近来当村拙寺檀家貞兵衛方え嫁に参り罷在居申候ニ付、放手形被遣、巳年より拙寺檀那ニ相詰、宗門印形寺役法用等拙寺にて相調可申候、為後日宗門受手形一

札如件

文政四年巳年三月

小堀村長福寺印

上下村専教寺 知事」(文政四年(一八二二)『甲

奴町誌』)

福田村藤兵衛の娘おたきは、これまでは貴寺の御檀那でしたが、近頃、当村拙寺檀家貞兵衛方へ嫁に來ましたので、「放手形」をいただき、当年より拙寺檀那に加えました。宗門印形・寺役法用等は拙寺にてします。後日のため「宗門受手形」はこの通りです。

この文書は寺から寺へ出した「宗門受手形」です。寺は寺で連絡を取るのとは当然のことでしょう。

この二通の文書は「福田村藤兵衛娘たけ」と「福田村藤兵衛娘おたき」の嫁入りに関するものです。

「たけ」と「おたき」で名前は微妙に違いますが、同一人の可能性もあります。嫁ぎ先も、「小堀村庄兵衛嫁」と「小堀村……貞兵衛方え嫁」と少し違いますが……。貞兵衛の息子、庄兵衛の嫁に來たと思えば辻褄は合います。

(2008/07/26)

可為致

「辱拝見、先日終日御草臥、御噂申候。五枚見事に被成被下、是又人々にとらせ、表具可為致候。」（元禄五年（一六九二）、HP「許六宛芭蕉書翰」）

「表具可為致候…（ひょうぐになしいたすべくそうろう）」と読む。頂いた画は表装致します、の意。」との解説がありました。が、「可為致」を「為し致すべく」と読むのも、どこか違和感を覚えます。

「湊に永く船を繋置く輩あらば、其子細を所の者に相尋ね、日和次第早々可為致出帆、其上にも令難渋バ、何方の船か承り届け、其浦の地頭・代官へ急度可申達事」（正徳元年（一七一）『地方凡例録』）

湊に永く船を繋ぎ置く者がいたら、その理由を所の者に尋ね、日和になり次第早々に「可為致出帆」、それでも出帆しないようなら、どここの船か聞いて、その浦の地頭・代官へかならず連

絡しなさい。

「可致」と書いてあるのなら「致すべく」と読みますが、「可為致」となると、どう読めばいいのか、迷います。

「湊に長々船を掛置輩あらハ其子細を所之者相尋、日和次第早々出船いたすへし」（正徳元年（一七一）『広島県史』）

これは同じ文書（浦々高札）で、ここでは仮名表記で、「いたすへし」と書いてありますが、

「湊に長々船を有懸ケ置輩は、其子細を所之者相尋、日和次第早々出船いたさすへし」（寛文七年（一六六七）『御触書天明集成』）

寛文七年（一六六七）の「御触書」には、「いたさすへし」とあるので、これが「正解」のはずです。（文法から説明するとややこしくなるので、説明は省略）。

芭蕉の書翰も「表具致さすべく候」（表装をさせます）と読むのではないかと思います。（追記…上記のHP「許六宛芭蕉書翰解説」もその後、このように訂正し

(2008/07/27)

算当

「御城下天満町舛屋林兵衛儀、去申年蒲刈島ニおゐて正石灰焼製仕候処、年来焼来り候灰と極吟味仕候て外並ニ勝レ、目方定メ之余分入レ有之、約ル所算当致候得は、代呂物之善悪、秤目等之余分有之事、却て私為筋ニ相成、其上肥ニ相用ひ利目宜敷、彼是弁利ニ相成申候間、近郷近村申値、当年も不相替注文相頼候処、蒲刈島焼竈一条差纏出来、御差留ニ相成候様子承り、夫ニ付ては私共肥ニ難渋仕」(文久元年(一八六一)『廿日市町史』)

広島御城下天満町の舛屋林兵衛が、去年蒲刈島で正石灰の焼製を始めましたが、これは今までの石灰と比較して品質も良く、規定の重量より多く入れてあり、結局「算当」すれば、代呂物(代物)の善悪、秤目等が余分にあるなど、私どもには都合よく、肥料に使つても利目があ

何かと便利なため、近郷近村が相談して今年も注文しましたが、蒲刈島焼竈に関して差^さ纏^づれがおきて製造中止となり、私どもは肥料に困っています。

【酸化カルシウム】(『世界大百科事典』)

化学式 CaO 生石灰ともいう。……工業的には石灰石(炭酸カルシウム)を $900\sim 1000^{\circ}\text{C}$ に熱して製造される。……水と反応すると強く発熱し、水酸化カルシウム $\text{Ca}(\text{OH})_2$ (消石灰)に変化する。「正石灰」とは「生石灰」のことです。乾燥剤として御存知の白い粉です。蒲刈産の生石灰は分量が多く、「算当」すると「為筋ニ相成」と評判が良いようです。

【算当】さんとう。(『広辞苑』)

算かぞえて見当をつけること。見積り。

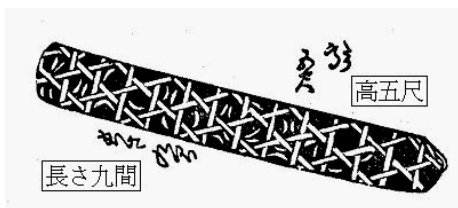
(2008/07/28)

円法・平坪の法

「▲此じやかごの坪数何ほど有ぞといふときに、四坪二合七抄入といふ。

まづ五尺を左右に置、掛くれば二五と成。これにまろき法七九掛くれば一九七五と成。これに長九間を掛くれば一七七七五と成。これをひらつぽの法四二二五をもつて割れば、四坪二合七抄としれ申候也。」
 (『塵劫記』『河ぶしんの事』)

【蛇籠】じゃかゝ。(『広辞苑』)
 丸く細長く粗く編んだ籠の中に、栗石や碎石などを詰めたもの。河川工事の護岸・水制などに用いる。竹蛇籠・粗朶籠・鉄線蛇籠などがある。石籠。じゃい。



河普請に使う蛇籠は円筒形ですから、その容積は断面積×長さで計算されますが、『塵劫記』の円の面積計算は今のやり方とは違います。

この蛇籠に入っている土の体積は次のように計算する。

「まづ五尺を左右に置、掛くれば二五と成」

算盤で計算します。直径五尺を二乗して、

$$5 \times 5 = 25 \text{ 平方尺}$$

二五平方尺を求めます。これは円に外接する正方形の面積です。

「これにまろき法七九掛くれば一九七五と成」

これに「まろき法(円法)」七九を掛ければ一
 九七五になる。

$$25 \times 79 = 1975$$

一九・七五平方尺、これが断面積です。

『塵劫記』では円周率を3.14ではなく3.16として計算するので、「まろき法七九」とは、

$$3.16 \div 4 = 0.79$$

です。これを円積率といいます。円の面積(πr^2)は、円に外接する正方形($4r^2$)の七九%である、との考え方です。

「これに長九間を掛ければ一七七五と成」
断面積に長さを掛けて体積を計算します。一間＝六尺五寸として計算しますのぞ、

$$19.75 \times 6.5 \times 9 = 1155.375 \text{立方尺}$$

の計算の筈ですが、この後、六・五尺で割るのを見越して、省略しています。

「これをひらつぽの法四二二五をもつて割れば、四坪二合七抄としれ申候」

「坪の法」とは、一坪の広さを「平方尺」で表したものです。一間＝六尺五寸として、

$$1 \text{間} \times 1 \text{間} = 6.5 \times 6.5 = 42.25 \text{平方尺}$$

つまり「ひら(ぽ(坪坪)の法四二二五)」です。

「立方尺」を「坪(体積)」で表すには、「六尺五寸×六尺五寸×六尺五寸」で割りますが、さきほど「六尺五寸」を掛けるのを略しているのので、「六尺五寸×六尺五寸」で割って、「四二〇七坪」の答を導いています。

算盤で計算するため位取りが大雑把で、計算の無駄を省いたりしているので、理解しにくいと思います。

した。ただ、「田の面積は外接正方形の七九%(約八割)」は、今でも役に立ちそうな公式です。

(2008/07/29)

畝足袋

「捨子人相書」で、読めなかった文字について知人から教わりました。「二赤紋畝たび」でした。(左図参照)。

【畝足袋】うねたび。(『広辞苑』)

畝刺しに縫ったたび。

【畝刺し】(『広辞苑』)

布を二枚重ねにし、綿を薄く入れ、糸を浮かして畝のように幾筋も刺し縫うこと。また、そのもの。「―足袋」

【畝刺し足袋】(「コスチューム用語集」)

畝刺し足袋とは、木綿足袋の一種。晒木綿を重ねて補強のため、に太い糸で畝刺



し(田畑の畝のように凹凸をつけて縫うこと)にした足袋のこと。畝足袋ともいう。

【江戸時代の足袋】(HP「足袋の歴史」)

天和(一六八一〜八三二)の頃には、畝刺織うねざしという織り方で作られた、畝刺足袋という木綿足袋が流行した。畝刺というのは、晒木綿の布を重ね、補強のために太い糸で田畑の畝のように縫う縫い方である。他にも丈夫な雲斎織が用いられた足袋や、絹足袋も作られたが、江戸中期頃までは畝刺足袋が多く用いられていた。(2008/07/30)

俵廻し

『新編塵劫記一』目録の第十一は、「俵まわしの事」と題して、

「米八百五十石有。但、一石に付三升づゝかん立ち申候時に、右のます目になにほどぞといふ時、升目八百二十四石五斗に成といふ。」(岩波文庫『塵

劫記」)

米が八五〇石ある。ただし、一石に付三升ずつ欠立ち(量目不足)があるとき、右の枡目はいくらか。答、八二四石五斗。

などの記事があります。編集者は、「俵まわし」の「まわす」は換算することと、簡単に解説しています。

「俵廻之儀、念を入、有体ニ仕候様ニ、升取之者へ御申付可有之事」(寛文八年(一六六八)『広島県史』)
俵廻しについては、念を入れて、インチキの無いよう升取の者に申し付けなさい。

これは勘定奉行から御蔵奉行への指示です。

【枡取ますとり】(『岩波日本史辞典』)

年貢米上納に際して計量を行なうこと、またはその役。誤差をなくし大量の米穀を迅速に計るためには熟練を要した。そのため、中世を通じて漸次職業化し世襲化する傾向にあった。江戸時代の農村部においては、村役人兼帯の場合と、

然而

専門職人を雇う場合とがあった。

【杣廻・升廻】（『古文書用語大辞典』）

廻とも。年貢米一俵の容量・重量を計算し、全体の容量を定めること。熟練した升取に委託して容量を決定した。

「俵廻し」とは「杣廻し」ともいい、年貢米上納に際して計量を行なうこと」のようです。

『塵劫記』には「俵まわしの事」の外に、「材木うり買ひまわしの事」「ひわだ（檜皮まわしの事）」「竹束まわしの事」「はく（箔）うり買ひまわしの事」と題する章があります。「まわし」については再度検討する必要があります。（2008/07/31）

然而

「態致啓上候、秋冷弥御佳安可被成御座、玆重奉存候、愚老無事、然而此間一書差出し、其節御頼申候常太郎へ之書状、御達し被下候哉」（天保三年（一

八三二）上田少藏宛、頼杏坪書翰）

わざとお手紙を差上げます。秋も深まり御佳安のこととお喜び申上げます。愚老も無事です。

「然而」このあいだお手紙を差上げ、そのときご依頼しました常太郎への手紙、お渡し下さいましたでしょうか。」

手紙の冒頭で、時候の挨拶や安否をたずねたあと、本題に話を切替えるため、たいていは「然者」（さて）という言葉を使います。

【然れば】しかれば。（『広辞苑』）

①そうであるから。それゆえ。されば。②そこで。さて。

ところが、この手紙では「然而」が使っておりません。

【而して・然して】（『広辞苑』）

そうして。そうであるから。

【然共・然而】（『日本史用語辞典』）

しかしながら。そうではあるが。されども。

「前略、然而彼ノ一条へ附紙押合之義、委細被仰聞当惑仕候」（『宮本愚翁日記抜粹』）

前略、「然而」あ的一条へ付紙を付けることに
ついて詳細をうかがい、当惑しております。

「然而」にも「然者」と同様、「そこで。さて。」
の意味があるのだろうと思います。（2008/08/01）

腹合

「家来〔田川〕虎次郎、今朝腹合悪敷、熱強く困ル、金子玄達を乞、診を頼、格別之事ニは無之旨にて薬を投、何分食事も不致、一通り之事ニも不被考候ニ付宿元へ申遣、夜中為迎権右衛門来、駕籠ニて致下宿也」（明治元年（一八六八）『村上家乗』）

家来の田川虎次郎が今朝から「腹合」が悪く、
熱も強くて困っているので、金子玄達に来診を
頼んだ。格別のことはないとのことで、薬をも
らったが、何分食事もしないので尋常のことと

も考えられず、「宿元」へ連絡し、夜中に権右
衛門が迎えに来て、駕籠で宿下がりをした。

「腹合」は例文を読んだだけで「腹具合」としれ
ます。
はらあひ

【腹合】（『日本国語大辞典』）
腹のぐあい。胃や腸の調子。

『広辞苑』には「腹具合」はあっても、「腹合」
は見当りません。載せるまでもないと思ったのでし
ょうか。

【腹合せ】（『広辞苑』）
はらあわ

①むかい合うこと。対座。②情を通じ合うこと。
③「腹合せ帯」の略。④（九州西海岸地方でいう）
青年等の初寄合いの祝宴、あるいは漁船乗組
員の勢揃いの祝宴。（2008/08/03）

慈君

「慈君此間より少々御風氣、御腹合も悪敷御困被成

候付、昨日より文碩薬を乞」（明治元年（一八六八）『村上家乗』）

「慈君」は此間より少々御風邪気味で、御腹合も悪くお困りの様子なので、昨日より文碩に薬を乞い、

「慈君」とは誰のことかと考えていましたが、次の資料で解りました。

「尊慈君、旧臘より御しつくい被遊候由、嘸々御氣迷被成候事と奉遙察候、何卒御全快被成かしと奉存候。尊厳君、久々の御眼疾、他邦にて御療用の由、万緒足下に叢委し、御心配察入候義御座候、随事御保蓄可被成候。」（文化六年（一八〇九）『頼山陽書翰集』）

尊「慈君」が十二月より「御しつくい」とのこと、さぞご心配のことと存じます。尊「厳君」は久々の御眼疾で、他国で御療用とか、心配事が重なり大変だと思いますが、御健勝にお暮しください。

「慈君」と「厳君」が並べて書いてあります。

【厳君】（『広辞苑』）

他人の父の敬称。父君。

すると、「慈君」は「母の敬称」でしょう。

「御しつくい被遊候由」の「しつくい」は「疾苦」居」かも知れません。
(2008/08/04)

丙丁

「此書御覧の後は火中へ」。

十一月六日 与謝蕪村

田中庄兵衛様（天明初年『蕪村書簡集』）

この手紙、御覧のあとは、火中に投じてください。

本当に火中に投じてしまったのなら、残っていない筈ですが、このような文言のある手紙をよく見かけるのも面白いところです。

「右極秘事も打明申上候義に御座候、何卒御考可被

下奉願候。頓首。

臘十七日

(記名なし)

子幹足下

高覧後丙丁」(文化六年(一八〇九)

野坂梅園宛『頼山陽書翰集』)

以上、極秘事も打ち明けました。なにとぞ御考
えくださいますよう。

十二月十七日

子幹様 高覧の後は「丙丁」。

これは友人の野坂梅園に五両の借金を依頼する頼
山陽の手紙です。これから神辺の菅茶山のもとに身
を寄せるにあたり、「他国へ踏出候事故、少々蓄無
之ては、何事ぞ御座候節、心細御座候故、小子内銀
之内持参可仕存候へ共、今迄之内銀は、今年之蕩遊
に、さつぱり払切申候て、一錢も有余無之」(他国
へ出るとなると、少しは蓄えがないと、何かあつたとき
に心細いので、自分のお金を持参したいとは思いますが、
今年の蕩遊でさつぱりと使い切つて一錢も残つていませ
んと打明けています。文末に、「高覧後丙丁」とあ
ります。

【丙丁】(『漢字源』)

火のこと。▽「丙」も「丁」も五行説で火に当
てることから。

【丙】(『漢字源』)

①「名」ひのえ。十干の三番め。▽五行では、
丁とともに火に当てる。日本の兄弟の「ひのえ」
は「火の兄」の意。

【丁】(『漢字源』)

①「名」ひのと。十干の四番め。▽五行では火
に当てる。日本の兄弟の「ひのと」は、「火の弟」
の意。
(2008/08/05)

すりさげ

「福波徳介といへる御供歩行あり、此者の人品は異
様にて、鬢を大にすりさげ、平常白糸を以て大小
之柄を巻、衣類染色も世並に無之、ゆきたけ短」
其様体甲斐々々敷、立派に出立ぬ、或時、其頭た

る何某、徳介に被尋は、其方事」人並に無之き白柄の大小を帯し、其外異様の出立、何ぞ心得方有之哉、物数寄に被致哉、承置度と被申ければ、徳介答に、差て物数寄と申にも無之、……私式小身の御歩行組は、御上の御目留り無御座故」いか様の御奉公首尾能相勤候ても御目留り無御座哉と乍恐奉存候、私すりさげ」白柄糸大小を帯て相勤候へば、自然御奉公向相勤候節、あの奴らしき者は何と申す奴かと御尋にもあひ申度、……大勢の間共の中にて福波徳介と申す名を達御聴候儀も願はしく奉存候、此存付のみにて、格別好み不申候得共、無抛人並をはづれ候為体に罷在候」（山下弘毅『梅鶴閑話』）

福波徳介と言う御供歩行がいる。この者の服装は異様で、髻^{びん}をおおいに「すりさげ」、いつも白糸で大小の刀の柄を巻き、衣類の染色も世間並でなく、桁丈は短く、その姿はかいがいしく立派ないでたちであつた。ある時、その上司である何某が徳介に尋ねた。「その方は人並でな

い白柄の大小を帯びて異様のいでたち、なにかに考えるとところがあるのか、それとも物好きでそうしているのか」と。徳介は「物好きでしている訳ではありません。……私のような小身の御歩行組は、どんなにうまく勤めても御上の御目に留まることはないと思います。私が「すりさげ」にし、白柄糸の大小を帯て勤めていれば、あの奴のような者は何と申す奴かと御尋もあらうかと……、大勢の間共の中で、福波徳介と申す名がお耳に達することを願つてのこと。こんな格好は好みではありませんが、仕方なく人並はずれの格好をしています」と答えた。

「髻を大にすりさげ」た様子が異様であると見られています。

【髻^{びん}】（『広辞苑』）

頭の左右側面の髪。

【剃^する】（『広辞苑』）

ソルの訛。

【下げる】（『広辞苑』）

① 一方の端または一部を他より低くする。

今流に言えば、揉み上げを普通より長くして、少しだけ剃っている状態だろうと思います。

目立つためのようですが、今、街を歩いてみると、「白柄糸大小を帯」びた人こそいませんが、「鬢を大にすりさげ」「衣類染色も世並に無之、ゆきたけ短く、「異様の出立」の若者が闊歩しています。私も、「異様の出立、何ぞ心得方有之哉、物数寄に被致哉、「承置度」と思います。

(2008/08/06)

小内

「早稲・中田・晩田之出来初(稲)銘々ニ帖面ニ仕立
三冊ニ仕候、又ハ中晩田は毛上一緒ニ見分仕、帖
一冊ニ仕立、小内ニて中晩田分り相見候様ニも仕
候」(『吹寄青枯集』)

これは「升突仕様之事」の一項目です。「小内」という言葉が使っています。古文書では多用され

る言葉ですが、残念ながら辞書には見当たりません。

早稲・中稲・晩稲の出来工合をそれぞれの帖面に仕立て、三冊にする。または中稲・晩稲については作況と一緒に見分して、一冊の帳面に仕立て、「小内」で中稲・晩稲の区別が付くようにもする。

ここでの「小内」は「内訳」と考えられます。

「当御年貢米の儀は兼て米納仕候様被為仰付奉畏、一統出精仕居候得共、当夏方洪水に付候ては川筋流損砂入にて毛損、其外凡て無毛上之分も有之、小内に於ては甚以て難儀仕り居申候間、格別の御慈悲を以て右流損所へ相当る米四拾石差次払御聞届被為遣候はゞ難有仕合に可奉存候」(天保十一年(一八四〇)『広島藩農村考』)

今年の御年貢米については、兼ねて米で納めるよう指示があり、承知しています。みんな精を出していますが、夏方洪水があり、川筋に流損砂入のため被害が多く、そのほか収穫皆無の

所もありますので、「小内」に於ては大変難儀しています。格別の御慈悲をもつて右流損所へ当る米四拾石を差次払（銀納）にして下さるようお願いします。

ここでは、「小内」は「一部の人たち」を示します。

「是は小内（内容）一向存知不申候間、其御心にて御取計可被下候」（文化六年（一八〇九）『頼山陽書翰集』）

これは「小内（内容）」を一向に知りませんので、そのお積りで取り計らってください。

ここでは、編集者が「内容」と注記しています。

「小内」という文字から考えても、「内部の細かい事項・内訳」と考えてよさそうです。（2008/08/07）

御簡易筋

「御建・御留山之義は厚御趣意も有之、毛上繁茂方之義毎々相示し、村方一統相心得居候義ニ候処、

近年御簡易筋ニ付てハ山目附等相廢し、村役人共へ都て締り合制度方之義相委ね置候得共、追々等間ニ相成候義と相見へ、所ニ寄候てハ猥成ル義有之候哉之趣相聞へ、役人共へ委任置候詮も無之、即今下方撫育除害筋専ラ駆引候ニ付てハ、猶以御山所念入可申筈ニ候条、已後屹度相正シ、自然御山所之内、何木ニよらず聊ニても伐取候もの有之候ニおゐてハ、見当り次第ニ相捕、県庁へ可申出候也

壬申二月 殖産係

世羅郡戸長共へ」（明治五年（一八七二）『続波多野家文書』）

御建山・御留山については厚い御趣意もあり、樹木が繁茂するよう度々指示をし、村内皆心得ているところであるが、近年「御簡易筋」のため山目附を廢止し、それに代つて村役人共に全ての取締りを任せたが、段々と等閑になると聞くとみえ、所によつては猥りになっていると聞いている。これでは役人共へ委任しても詮のない

ことである。現在下方の撫育・除害について組んでおり、御山所にも気を配るべきであり、今後は規律正しく、御山所のどんな木でも少しでも伐取する者がいれば、見つけ次第捕えて、県庁へ申し出なさい。

この時代、藩から県へと地方の政治も大きく変化をしています。その一つが「御簡易筋」、行政のスリム化のようです。それまで藩有林の監視を山目附にさせていたのを、村役人の兼務としています。目まぐるしく変る諸制度に対応するだけでも大変なのに、「御山所」の監視などできるはずはないでしょう。今、各地で公共サービスの民間委託が進められています、人出を減らせばそれで良いというものでもないでしょう。

制度は変わっても、人の意識は変えにくいようで、偉そうに「見当り次第第二相捕、県庁へ可申出候」と言っていますが、藩に比べて、県庁は「下方」から軽く見られているように思います。県庁へ提出する書類がなかなか集らず、

「全体何等之訳合ニて斯差出し方及遅候哉、甚不都合」(明治五年(一八七二)『続波多野家文書』)
いったい、どういう訳でこんなに提出が遅れるのか、甚だ不都合……

と、青筋を立てて怒っています。(2008/08/08)

御留山

地方文書に、「御建山・御留山」と併記してあるのを目にしますが、その違いがよくわかりません。

【御留山】(『岩波日本史辞典』)

江戸時代、幕府・諸藩が森林資源保護の目的で領内に設けた占有林。御立山・御山・御林山・御直山などとも称された。御留山では、農民の立木伐採・薪炭生産・まぐさ採取などの利用が禁止あるいは制限された。御留山が広く設けられてくるのは、江戸初期以来の濫過伐によって木材資源の衰退が明確化してくる一七世紀後半

からである。

農民の利用を留めていた藩の占有林との説明には納得しますが、御立山(御建山)と同じと言われると、困ってしまいます。

「凡そ藩内の諸山林を区別して建山・留山・野山・草山及腰林と為せり、建山とは全く官有の山林と為し、樹木の伐採を許さずして専ら之か繁茂を為さしむる名称と為す、留山とは元は公有山林にして妄に斧鎌を入るゝを禁止したるもの、若くは元は一村の共有なりしか隣村等と各種の争論等ありて官に於て之を管理し、惣て人民をして一切之に斧鎌を入るゝを禁止せられしもの等の称呼なり」(『芸藩志拾遺』)

御建山は「官有の山林」(藩有林)です。ただし、「郡方普請入用材木」は許可を得て伐採できます。御留山は、「元は公有山林」「元は一村の共有」であつたものが、事情により「官に於て之を管理し、惣て人民をして一切之に斧鎌を入るゝを禁止」された山林のことです。

『広島県大百科事典』の解説を読むと、「五〇年間伐採を禁じて……」とあり、また解らなくなります。

「御留山は①御建山の立ち木を藩に供した後、五〇年間伐採を禁じて樹木を生育させるために御留山とした場合や、②水源涵養や砂防などの治山の目的で設定した。……」(『広島県大百科事典』「御建山・御留山」)

「五〇年間伐採を禁じて……」については、「広島藩御覚書帖」に記事があります。

「所々御建山より川出等便在之所ヲ積り、御用等之趣ニ随ひ百姓之手透ヲ考、人夫ヲ集、伐出シ申候、但、右之通年々伐尽シ荒候時ハ御留山ニ仕、三五年又ハ其余年数之限ヲ仕、材木之類伐せ不申所も在之、其俣ニて差置候得ハ木立悪敷候付、時々下刈ヲ仕せ、或ハ立枯之諸木ヲ伐除ケ候て、其品ヲ相応ニ御用木・炭薪ニも仕候」(「広島藩御覚書帖」)

所々の御建山から運送の便を考え、農閑期の百

姓を人夫として集め、藩用材を伐り出す。伐り
尽くして荒れたときは御留山にして、三〇五年
か年数を決めて、材木類を伐らせない所もある
が、そのままにしておくの木立に悪いので、時
々下刈りをさせたり、立枯の諸木を伐り除けて、
御用木炭薪にもする。

この資料では、御建山を「御留山」にすることが
記されていますが、これは、当分の間、伐採禁止（「御
留山」）にするという意味で、御建山が御留山に指
定替えになったという意味ではないと思います。

まとめると、御留山とは、「元は公有山林」であ
ったものが、藩の管理下に移され、農民の利用禁止
となった山林と考えられます。

「御建山ト言フモノ、則官林ニシテ、御留山ト言フ
モノハ公有林ノ斧鎌ヲ留メタルモノ、中ニハ一村
共有山ヲ両村ノ境界紛紜ヨリ斧鎌ヲ留メ、則御留
山ニナリタルモノアリト云フ、然レトモ事由不詳
ナルモノ多シ、藩ノ末年ニハ御建山・御留山ノ名
アルノミニシテ、大概同一ノ所分ニナリタリ、既

二版籍奉還ノ際モ一般官林トシテ引渡シナリタ
ル如シ」（「淡交夜話」）
(2008/08/09)

綿秋

「昨日岩崎およし来、桑原之方類焼後、中々容易ニ
家普請抔は出来候事ニも無之候ニ付、仮小屋を今
少取繕、今暫為済度ニ付、銀貳百目、年々綿秋五
拾目宛之返弁ニて取替之義、無心之内談有之候得
共、予迎も近来追々借銀相増、左様之義ハ心底ニ
不相任候ニ付、一応及斷置、猶今日文ニて委細ニ
断申遣也」（元治元年（一八六四）『村上家乗』）

昨日、岩崎およしが来た。桑原の方が類焼して、
その後中々容易に家普請が出来そうもないの
で、仮小屋を少し修繕して、今暫らくはこれ
で済ませたいので、銀貳百目を、毎年「綿秋」に
五拾目ずつ返済するので、用立ててもらえない
かとの内談があつたが、私も近頃は追々と借銀
が増しており、左様のことは出来ない相談なの

で一応断り、今日手紙で丁寧に断った。

「綿秋」という珍しい言葉に出会いました。「錦秋」の間違ではなく「綿秋」でした。

【綿秋】わたあき。（『広辞苑』）

秋、綿の実の熟する頃。綿時。

借金返済時期を表すのに、なぜ「綿」まで出すのか、解りませんが、綿の産地、広島では普通に使っていたのかもしれませんが。

(2008/08/10)

有附

「奴可・三上郡も凡同様と申内、山川の獵鮮く、作毛は、出来も宜多葉粉を多く作る、楮を植、奉書・杉原を漉、第一の芸は鍔山稼なり、耕作は得益なきか、荒地・無毛の土地多く、自然と作人も減、農家至て無数の村有之、田畑荒所多く、去りながら、極たる年貢は百姓とも閭合差出、其外村方入用課役類も悉く有附百姓共閭候故、約る所、銘々

出方増、身前之貢の外に人の貢課役も勤る故、所詮耕作してハ取続難き抔と申立、弥増作人減候故、其取斗方上の御厄介物なり、耕作止候者共ハ、菟角方へ奉公、又は小商ひ、或は獵師・鍔山稼、他国へも行候二付、段々人家減し候、其所二は百姓有附之行ひ専ら也、ケ様之所は、作毛をは猪鹿喰、諸鳥も荒し、彼是以て得作少く有附兼候事」（『郡要集 乾』）

奴可・三上郡もおよそ（三次・恵蘇郡と）同様であるが、山川の獵は少なく、作物としては出来の良い煙草を多く作り、楮を植えて奉書・杉原を漉くが、第一の仕事は鍔山稼である。農業では利益がないためか、荒地無毛の土地が多く、自然と農民も減り、農家のきわめて少ない村がある。田畑の荒所が多いのに、決った年貢は百姓どもが負担し合つて納入し、村方入用課役類もみな「有附百姓」が被くので、結局は個々人の負担が増し、自分の年貢の外に人の年貢も出すため、所詮農業をしていては家が潰れるとい

って、ますます百姓が減る。その取計は藩の御厄介物である、耕作を止めた者は、方々へ奉公に出たり、小商ひ・獵師・鉄山稼・他国へも出かけるので、次第に人家が減り、その所では百姓が「有附」くために懸命である。このような所は作物を猪鹿が喰い諸鳥も荒し、このような理由で得作が少なく、「有附」兼ねている地域である。

『広島藩地方書の研究』では、「作毛は出来も宜」を「この地域における稲作の生産性をむしろ高く評価している」と読んでいますが、「出来も宜多葉粉」（土地に適した煙草）と読むべきだと思います。「稲作の生産性」が高いのなら、「有附兼」することは無いはずですから。

それは兎も角、「有附」という言葉が使っており

【在り付く】（『広辞苑』）

④住みつく。落ち着く。安住する。⑥生活の道を得る。暮しをたてる。⑧望んでいたものを手

に入れる。「仕事に―・く」「やつとめしに―・く」

今では、「やつと飯に有り付く」の使い方が主ですが、この資料では、「④住みつく。落ち着く。安住する。」の意味で使っております。もともと、「安住」は不適當で、実状は「土地にしがみつく」様子が読取れます。

闇かづくとはは「損失・責任などを引き受ける。しよいこむ」ことです。（ブログ「冠米」2007/10/02 参照）。

（2008/08/11）

酒切手

「武田勇殿より、過日馬を用立候謝として芝肴三尾被恵、并ニ僕庄蔵へ酒一樽切手被恵候由にて、今朝森喜久二持参、厚挨拶之伝言申置候由也」（元治元年（一八六四）『村上家乗』）

武田勇殿から、先日馬を用立てたお礼として芝

肴三尾を、また下男庄藏へは「酒一樽切手」を、
町嚙な挨拶の伝言を添えて、今朝森喜久二が持
参した。

御目付武田勇は、奉幣使の広島通過にあたり、手
馬(自分の馬)が差支えたため、当家の馬を借りてい
ました。

【芝魚・芝肴】 しばざかな。(『広辞苑』)

江戸芝浦、品川沖でとれた小魚類。しばもの。

まさか、江戸湾の魚ではないはず、ここでは、鮮
魚の意味だろうと思います。

「酒一樽切手」は酒の商品券(酒券)です。商品券
という言葉は明治年代に生まれ、それまでは切手
とか手形と呼ばれていたそうで、大阪の菓子商虎屋
が寛政五年(一七九三)に発行した饅頭切手が商品券
の最初だといえます。(HP「明治二年の商品券」参照)

「酒一樽」はどれ程の量か分りません。薦彼りの
四斗樽ではなく、柳樽(五合〜五升)程度かな、と勝
手に想像しています。

(2008/08/12)

所払・おろし米

「所払とは、御年貢米御蔵所迄津出ニ不及、其まゝ
所ニて払候ヲいふ也、所払いたす郡ハ、奴可郡・
世羅郡・三谿郡・高田郡・山県郡、此郡々之内、
御蔵所又ハ海川御年貢米津出シ場迄道程八里より
遠キ村々ニ、所払有之也、たとへハ、津出し場迄
十六里之所ハ、百石之年貢ニ候へハ、其内を年内
五十石納、残五拾石ハ翌年へ越て銀納ニいたす也、
道程之遠近ニ応して、所払・津出し米之多少アリ、
右之郡々所払之格式一統ならず、奴可郡は所所残
し置候米ヲ翌年三月六月兩度ニ、上り相場ニて上
納いたす、是をおろし米と言也、郡中ニ鉄山職人
之飯米・酒米、惣して郡中麦なども少ク、郡中ニ
出来候米ヲ不残年貢ニ出してハ飯米も不足いた
し、他所より買候得は遠方不勝手ニ付、所払之米
を直ニ其村之おろし米ニ成也……」(天明二年(一
七八二)「芸州政基」『広島県史』)

「所払」とは、御年貢米を藩の御蔵所まで運ばないで、その所で納めることである。所払をする郡は、奴可郡・世羅郡・三谿郡・高田郡・山県郡で、その内、御蔵所・海川御年貢米津出し場まで道法八里以上の遠い村に所払が適用される。例えば、津出し場まで十六里の所では、百石の年貢なら、その内五十石を年内に納め、残り五拾石を翌年に銀納にする。道程の遠近により、所払と津出し米の多少がある。右の郡々でも所払の仕方は一様ではない。奴可郡は御蔵所に運ばないでそこに残し置き、その米を翌年三月・六月両度に分けて上り銀相場で銀納する。これを「おろし米」と言う。郡中に鉄山職人の飯米・酒米が必要で、麦なども少く、郡中に出來た米を残らず年貢に出してしまうと飯米も不足し、他所から買うとしても遠方のため勝手が悪いので、所払の米もそのままその村の「おろし米」にするのである。……

藩の御蔵所から遠隔の村(道法八里以上)では、百

姓の年貢米運送の負担を軽減するため、「所払」の仕組がありました。資料の計算例では解りにくいので、別の資料を参照します。

「所払之定法割合之事

但、仮ニ高物成ヲ記、所払之分ヲ記し、此里程ハ其村より納所仕候御蔵所迄之里程なり

高百石 十二里 何村

免五ツ成物成五拾石 口米壹石

二口合五拾壹石 是ヲ定物成と号申候

内 三拾四石 津出シ

拾七石 所払

右物成・口米共合五拾壹石ヲ定法十二里ヲ以割候得は、壹里ニ付四石式斗五升宛ト相成申候、是ニ八里ヲ懸候へは津出米三拾四石ト知申候、右之内四石式斗五升ニ四厘ヲ懸候へは、所払拾七石ト知申候」(『吹寄青枯集』)

所払の定法は、次の計算による。ただし、高や物成・所払の分、里程(その村より納めるべき御蔵所まで里程)の数字は一例である。

高一〇〇石で御蔵所まで一二里のある何村の免を「五ツ成」とすると、物成五〇石、口米一石（物成の二%）、合計五一石で、これを「定物成」という。その内、三四石を米で津出し、残り一七石が所払となる。その計算方法は、五一石を定法一二里（里程）で割ると、一里につき四石二斗五升になり、これに八里を掛けると、「津出米」は三四石と知れる。四石二斗五升到四里を掛ければ、「所払」は一七石と知れる。

御田米＝御田米×（八斗・斗）

御田米＝御田米×（八斗・斗）

奴可郡の「おろし米」（卸し米）は、現地に「卸す米」の意味だと思っています。

『吹寄青枯集』の「四厘ヲ懸候へは」は、文脈から考えると「四里ヲ懸候へは」に訂正する必要がある。原本で「四り」と書いてあれば、「四里」と読まず、「四厘」と誤読したのでしょう。

(2008/08/13)

辻堂 その一

「惣て備後・備中の両国には、往還はいふに及ハず、山里までも辻堂所々に有、是亦最明寺殿諸国を廻り給ひし刻、時の諸侯地頭より兼々設けらるゝといふ、又水野日向侯の時よりもいふ、いつれ旅人・乞児などの一夜の雨露を凌ぐ便りあり、風律か紙魚日記とやらんにも此事を載たるよし、勝嶋叔敬語れり」（勝島惟恭『行余紀聞』）

およそ備後・備中の両国には、街道は勿論、山里までも方々に「辻堂」がある。これも最明寺殿（北条時頼）が諸国を廻られたとき、諸侯・地頭がまえもって設けたという。また水野日向侯（水野勝成）が作らせたともいう。旅人や乞食などが一夜の雨露を凌ぐに都合がよい。風律の『紙魚日記』とかいう本にもこの事が載せてあると勝嶋叔敬が語った。

辻堂とは、備後地方の村辻で見かけるお堂です。四つ堂ともいい、三方が開けっ放しの堂で、石地藏が祀つてありました。（写真：HP「へんろ加藤の雑念日記」参照）

旅人の休み場所とはいえ、いつもは子供の遊び場でした。尾道の土堂町の名は、辻堂から来るのではないかとわれていきます。（2008/08/14）



辻堂 その二

「すべて備中国には辻堂あり、備の前後にもあり、仏も何もなくて、只行人の休み所とす、参宮同者

のたくひも、夏天に涼ミ、冬ハ雨あられをしのきて、異境を問ハすこゝろひとつに道の程を談す、恩愛行人におよふハいかなる人かはしめけむ」（明和元年（一七六四）風律『紙魚日記』）

備中の国ではどこにでも「辻堂」がある。備前・備後にもある。そこに仏が祀つてあるわけでもなく、ただ旅人の休み所としてある。お伊勢参りのような者たちも、夏天には涼み、冬は雨あられを凌ぎ、生国は違つても心をひとつに旅路の話をする。誰がこのような恩愛を旅人にまで及ぼすことを始めたのだろうか。

これは多賀庵風律が、明和元年（一七六四）八月、広島を出発して京坂・田子の浦に行った旅の紀行です。

「◎天明元年四月二十九日、多賀庵（一世）風律歿す、風律、家号は木地屋、通称は保兵衛、多賀庵は道場の号、風律は其俳名なり、塩屋町に住す、世々漆器を商ふ、元禄十一年に生れ、人となり矮軀儂背にして、才氣あり、若年の時より、芭蕉の門人

野坂が此地に客遊せるを師として、俳諧を学び、遂に深く之を究め、関西の一人と称せらる、年老いて広瀬村（今の堺町三丁目南裏）油池の辺に草庵を結び簷頭に須磨簾を懸け、園中に桜を栽え、庭に船板を立て、奥州多賀城碑を摸し、地方の里程（去五左々宇八里、去小富士九里、去周防界一百里、去巖島二十里、去三滝峯五里）を列記して雅観とす、因りて多賀庵と称す、門弟少からず、是に至りて歿す、享年八十四、猫屋町教伝寺に葬る、著す所、風雅考一冊、紙魚日記一冊、俳最十一冊、浅緑十二冊、桐話一冊、月花編一冊、笠話六冊、久世物語一冊、さか葉一冊あり、多賀庵は其統の宗匠これに住し、道場となす、多賀庵碑は後ち石にて改遣し、頼春水碑陰に題せり」（『廣島市史』）

（2008/08/15）

米拵

「先達て申触候御蔵納米之事、米拵ハ勿論、縄俵共随分入念村出し可為致候、近年ハ縄俵共ニ龜相ニ仕出候由、於御蔵御吟味被成候、大坂へ御登せ米ニ被成候所ニ、前々より諸色拵悪敷候由」（享保二年（一七一七）『広島県史』）

先頃、触示した御蔵へ納める年貢米について、「米拵」は勿論のこと、縄俵とも入念に調べて村出しをなささい。近年は縄俵とも粗雑になり御蔵で吟味しているが、大坂へ御登せ米にされるのも以前より色々「拵」が悪いとのこと：

「米拵」という言葉があります。本来は「米の調製」を意味する言葉ですが、古文書では少しシフトした意味で使われています。その内容を示す適当な資料があります。

「米拵之事

此儀毎歳手厚申談候処、兎角糲交りくず米多ク、依之ハ御蔵前刻多く相成失却申大形義、夫ニ付甚

疑ひ深キ事ニて難申事ニ候へ共、数ヶ村数多之百姓故、中ニは悪心有之早稲中田之宜キ米貯置、晩田遅出来之下米ヲ交へ納所いたし、夫故くず米多ク事ともニは有之間鋪哉、左候てハ御直段へも相拘り難相済考合いたし候処……」（文政九年（一八二六）『広島県史』）

米拵については、毎年詳しく指示をしているが、年貢米の中に、粳が混じり屑米も多く、これでは御蔵前で「芻米」が多く失費も少なくない。

疑い深い事で言いにくいだが、数多くの百姓の中には悪心でもって、早稲・中田の良い米を貯え置いて、晩田・遅出来の下米を交えて上納する、だから屑米が多いのではなからうか。これでは大坂での御直段にも関わるので、見過しがたいことである。

「米拵之事」の項目で問題にしているのは米の品質です。この項に続いて「縄俵仕立俵形之事」が書いてあるので、「米拵」には「縄俵仕立俵形之事」は含まれないことが分ります。

「淡交夜話」でも、

「米質及米拵（青米・赤米・碎米・粳糠等ノ混入ナカラシムルヲ云フ）」（「淡交夜話」）

青米（未熟の緑色の米）・赤米（大唐米など外来の下等米）・碎米（粳摺るとき粒の碎けた米）・粳糠（粳殼などを混入させないで米の品質を高めることを「米拵」というようです。（2008/08/16）

米払・米入

「去年より御蔵払之村々、刺米御下ヶ被遣候ニ附、割戻方之儀申出候様申附置候処、以来村々米払入用ニ差引仕度旨申出候趣聞届候条、此旨村々へ申付、以来下方疑惑無之様取計可申旨、急度可申付置者也」（寛政二年（一七九〇）「是長村御触留帳」）

去年から御蔵払の村々に対して、刺米を下げ渡すので、割戻し方について申出るように命じたところ、村々の「米払」の費用に差引きたいと

の要望があり、許可したので、村々へ知らせなさい。今後は下方の疑惑がないようにきちんと指示しなさい。

年貢米納入に際し、米質検査のため抜取った米を村に返すことになり、各村から「米払」の費用に一部に充てたいとの要望を許可した文書です。ここで「米払」は、「米を払う(納入する)」の本来の意味で使われています。

「御蔵所所在地へハ米宿ト称フル定宿ヲ設ケ、徴収米ヲ其宿所迄運送シ、俵数集ムルニ至リ米払(コメハラヒト称ス、又米入レトモ言ヘリ、米廩へ納米ヲナスモノナリ、榊ノ扱ニ巧者ナル者ヲ撰ミテ、庄屋ヨリ申附クルモノ)之ヲ米廩ノ庭内へ積立(御庭ハエト云フ)、検分ヲ乞フ」(「淡交夜話」)

御蔵所の所在地に「米宿」という定宿を設け、徴収米を(村から)その宿所まで運び、全部集ると「米払」(「コメハラヒ」または「米入」といい、米蔵へ米を納める者である。榊の取扱に巧みな者を選んで庄屋が申付る)が米蔵の庭内へ積立てる。

これを「御庭ハエ」という。こうして検分を受ける。

「米払」という言葉は、「納入する」から「納入する者」に意味が移っています。古文書では「米入」の方が多く使われているような気がします。「米入」の選定は、「榊ノ扱ニ巧者」かどうかだけでなく、入札で選んだようです。

「租米の蔵払いに関するいつさいのことを、その村から選はれた米入の責任で行わせる米入の制度が始まったのは享保以降と思われる。すなわち村方では、あらかじめ米入志望者の入札によつて租米納入に要する経費の見積りとその人を決定し、落札者の見積りに従つて、米払歩米として取立てるが、この経費で米入の者は蔵払いいつさいを村に対して請負うわけである。」(『新修広島市史』)

(2008/08/17)

小芙蓉山

「松本安美

字は子純、通称は平蔵、家世々広島

堀川町に陶器を売り、家号を伊万里屋といふ、父藤三郎定好、字は子謙、頗る儒学を好み、安美をして読書せしむ、長じて博聞強記、詩文に長ず。

性温厚にして誇らず、世栄を慕はず、自ら坊賈を甘んずれども、道を以て重とし、人に屈せず、常

に酒を嗜めども、終に乱

に及ばず、弟安英も亦秀

異なれども、蚤く死す、

安美遺稿若干巻あり、香

川南浜其小伝を作り、其

美を述ぶ、明和元年年四

十有三にして歿せり」〔芸

備先哲伝〕

香川南浜の「松本安美伝」

の一節には、

「安美不慕榮達、鬻陶器自

給、居貧賤而晏如也、善

飲酒、至斗而不乱、色益



温矣、家架一楼、潮汐往来楼下、因命曰觀潮、樓之所望、小芙蓉山、放鷹橋、神仙坡中橋、乃自題觀潮樓四詠詩」（「知新集」）

安美、榮達を慕はず、陶器を鬻ヒサぎ自から給す。

貧賤に居て晏アンジョ如たり。善く酒を呑み、斗に至り

て乱れず、色益温なり。家に一楼を架く。潮汐、

楼下を往来す。因つて命じて觀潮と曰ふ。樓の

望する所、小芙蓉山、放鷹橋、神仙坡中橋。乃

ち自ら觀潮樓四詠詩と題す。

広島の人学者、伊万里屋平蔵は堀川町で陶器を売っていました。堀川町には平田屋川（運河）があります。

「平田屋川・西堂川ハ浜なり、川にハあらず、余嘗

松安美か伝を作りて平田屋川を平田浜と書り、：

舟を納イルモ者を浜といふなり」（香川南浜「秋長夜

話」）

「家架一楼」とありますので、二階でも増築したのかもしれませんが。そこから眺めると「小芙蓉山」が見えます。

【芙蓉】（『広辞苑』）

①ハスの花の別称。美人のたとえ。

【芙蓉峰】（『広辞苑』）

富士山の雅称。

「小芙蓉山」は広島湾に浮ぶ「安芸の小富士」（似島…写真）のことのようです。「放鷹橋」は鷹野橋、

「神仙坡中橋」は新川場町の中橋でしょう。新川場中橋は平田屋川の橋ですから見えるとしても、鷹野橋は見えたのかなと思います。
(2008/08/19)

懸廻し

「納所之儀、三斗壺俵ニ貳升入、半下米ハ貳升壺合入之積り、俵数懸廻し、軽重貳俵廻し概しニて、惣米算用候事」（文化九年（一八二二）『広島県史』）これは、寺尾弥祐が自分の給知村の百姓に示した条目（給人法）の一部です。前半後半の二つに分けて検討します。

「納所之儀三斗壺俵ニ貳升入、半下米ハ貳升壺合入之積り」

年貢米は三斗俵とし、込米として壺俵に貳升を入れなさい。端米（半下米）には、三斗につき貳升壺合の割合とする。

「米三斗俵ニ仕、入実之儀は凡御蔵納ニ准シ相納可申事、但、三斗貳升壺合ニは相納メ候事、半下米割合同様之事」（天保十三年（一八四二）、渡辺又三の給人法、『広島県史』）

三斗俵の入実はおおよそ御蔵納に準じて納めなさい。但し、三斗貳升壺合のこと。端米の同じ割合とする。

この資料から、御蔵納の俵と給主に納める俵の入実、ほぼ同じと考えてよさそうです。

「懸廻し（掛ケ廻し）」は、「枅廻」と同義だと思います。

【枅廻】（『古文書用語大辞典』）

廻とも。年貢米一俵の容量・重量を計算し、全体の容量を定めること。

「掛ケ廻し候て請取候節、格別重目・軽目之俵を以算用いたし可受取候事」（文政三年（一八二〇）、寺西源三郎の給人法、『広島県史』）

「掛ケ廻し」で受取るときは、特別に重いものと軽目の俵で計算し受取ること。

この資料をヒントにして、前述の文言を解釈すると、

「俵数懸廻し、軽重式俵廻し概しにて、惣米算用候事」

俵を数え、懸廻しで受取るときは、軽い俵と重い俵式俵を平均し、全体の米の量を推計すること。

「納米掛ケ廻し之義は、軽重又は鬪入等にて計り、惣米算用之事」（文化九年（一八一二）、坂田吉太郎給人法、『広島県史』）

納米の「掛ケ廻し」は、軽重か、または鬪入等で計り、全体の米の量を計算すること。

「俵数之節は、鬪廻し式俵廻しニいたし候事」（宝暦九年（一七五九）、望月左忠太給人法、『ふるさとひろしま』第9号）

この場合は、鬪によるサンプルで推計する方法も考えています。

(2008/08/20)

大卅日

文化十年（一八一三）閏十一月十三日、前藩主淺野重晟が亡くなりました。例によって、

「御穩便中故、来正月式注連饅門松等、都て延引仕候事、餅搗同断」（文化十年（一八一三）極月廿六日、『鶴亭日記』）

御穩便中なので、来年の正月の儀式、しめ飾り、門松など全て延期すること。餅搗きも同様。

との厳しい触が出ています。ところが、例外があります。

「在中歳末式之儀ハ、米銀又ハ品物ニても、多クハ年中其銘々預世話候挨拶等ニ相当申候儀、或は家人又ハ出入之者等へ恵ミ遣候様之類、右等致延引候ては其人々之迷惑ニ当候事故、是等格別之儀ニ付、例之趣ヲ以、年内取計可然事
米銀取引ハ勿論、大卅日限と相心得、例之通夫々取計可申事、是等ニ付、借方之者自然得勝手心得違仕申間敷事、扱又於銀主御穩便中故、駈合方之儀、随分穩和二有之度事」(同上)

在中では歳末の慣習として米銀又は品物を贈るが、これは年内に御世話になった挨拶に相当する。または家人や出入の者等への贈物なども、これらを延期してはその人々の迷惑になるので、例年のように、年内に取り計らいなさい。米銀の取引は言うまでもなく「大卅日」限りと心得て、いつもの通りにしなさい。借方の者は勝手な解釈をしてはいけない。銀主も御穩便中

なので、取立ても穏やかにしなさい。

「大卅日」は「大晦日」です。「みそか」は、「ふつか」「みつか」「よつか」……「三十日」ですが、小の月もあるので「月の最終日」を示します。「大晦日」は勿論、一年で最後の晦日です。

【二季払】（『広辞苑』）

盆・暮の二季に支払をすること。盆暮払。

(2008/08/21)

許太

「坂・大屋両村庄屋茂三郎儀は、兼々貞実ニて役方力入厚、御役所より之書状相達候得は、無昼夜六七丁も隔居候用場へ出張、長百姓等呼集メ、其上ニて披封致し、俱ニ其事ヲ相謀、許太候節ハ役無役之無差別長者を先ニ立候様ニ、毛頭役威ニ不乗礼儀ヲ尽し、常ニ愛憐教導筋至極深切ニ取計、都て諸帳面類我家へ不取帰、年貢之足不足并懸り役

等之儀、多少巨細ニ示し合候間、一村之者共其徳ニ化し、無疑念も争論も少ク、一統睦敷農業等相励ミ、……役儀も当年迄卅五年殊ニ厚相勤候ニ就、格別ヲ以左之通御賞被下

一御蔵米拾五俵生涯社倉支配役格

社倉支配役坂村大屋村庄屋 茂三郎

(文化十一年(二八一四)「鶴亭日記」)

坂・大屋両村の庄屋、茂三郎は、かねがね貞実
に役職に励み、御役所より書状が届くと、昼夜
に關係なく六七町も離れている用場へ出かけ、
長百姓等と呼び集めて封を切り、ともに相談し
た。「許太」のときは役 無役の差別なく、長
者を先に立て少しも威張らず礼儀を尽くし、つ
ねに親切に導き、諸帳面類は家に持帰らず、年
貢や懸り役については、こと細かに示し合うの
で、村の者もその徳に感化され、村役人に対し
て疑念もなく争論も少なく、みな睦まじく農業
等に励み……役職も三十五年間精勤したので、
特別に御蔵米拾五俵を与え、生涯社倉支配役格

とする。

坂村茂三郎の業績は

「芸備孝義伝」(第一編

巻二)にも載せてあります。



文中の「許太」(右図参照)には頭を抱えました。

文字を比較してやっと「許太」と読みましたが、意味が解りません。文意からすると、郡役所から指示が来れば、長百姓まで招集して相談し、「許太」のときは無役の長者まで動員したと読めます。

【許多】きよた。(『広辞苑』)

数の多いこと。多数。あまた。

これなら文意にも適います。「許多」が「許太」に文字が変わっただけで、読みは「きよた」に違いはありません。

この文書から〈望まれる庄屋像〉が見えてきます。

(2008/08/22)

致

「町家之者共より諸色買掛り代銀払方等、不取引之儀有之候ては、商人共迷惑筋之儀に付、理不尽之仕形被致間敷候」(文政三年(一八二〇)『広島県史』)

町家の者どもより品物を「買掛り」(かけて品物を買う)をして、代銀を払うとき、「不取引」のことがあつては、商人どもが迷惑をするので、理不尽ことをしてはいけない。

「不取引」とは、例えば代金を踏倒すとか、正常な取引でないことと考えられます。

「理不尽之仕形被致間敷候」は、御存知の通り「理不尽の仕形、致され間敷候」と読みます。「被」があるので読む順が逆転しています。

【いたし そろう】(『日本国語大辞典』)

(動作性の意味を含む名詞に付く。「する」の謙讓表現) いたします。……ました。「仕り候」にく

らべて敬意が軽い。候文の慣用表現。*木因宛芭蕉書簡「延宝九年七月二五日「お手紙忝致拝見候」

丁寧な説明ですが、「致」が「動作性の意味を含む名詞」の前に付くのか、それとも後かが書いてありません。例文をみると「動作性の意味を含む名詞(拝見)の前に付く」ようです。すると、動作性の意味を含む名詞が「致」の前と後にある次の資料は、

「勿論金主・借主申値、相對ニて貸借致約定候義ハ勝手次第」(明治五年(一八七二)「統波多野家文書」)

「相對ニて貸借致約定候義」は、「相對にて貸借致し、約定候義」ではなく「相對にて貸借 約定致し候義」と読むはずです。

勿論、金主と借主が話合つて、納得の上で貸借約定することは自由である。(2008/08/23)

判頭・判下

「近來郡中之者共願之筋有之、御箱訴并投文等いたし候砌、訴狀之名印車判ニいたし差出候村々も間々有之候、畢竟頭取を為隱之仕業、不届之至ニ候、以來右跡之訴狀於差出ニは、五人組判頭之者頭取ニ相究被遂御吟味候間、此旨村々令承知、小面之者共へも不洩様可申聞也」(天明五年(一七八五)『府中市史』)

近頃、郡中の者共が願の筋があるといつて、「御箱訴(目安訴狀)」や「投文(家の外からひそかに投げ込む手紙)」などをするとき、訴狀の名印を「車判(等連判)」にして差出す村々もあるようだが、これは頭取を隠すための仕業であり不届なことである。今後このような訴狀を差出すと、「五人組判頭」の者を頭取として御吟味するので、この事を承知して「小面(こづら 小百姓)」の者共へも洩さぬよう知らせなさい。

「判頭」という言葉が使つてあります。訴狀などに連署するとき、最初に印判を押す者の意と考えられますが、具体的には分りません。

『地方凡例録』の説明によると、「村役人の唱を関東にては名主・組頭と云ひ、五人組の筆頭を判頭と云ひ……」、つまり「五人組頭」を「判頭」といっています。しかし、この言葉は、関東だけではなく、『府中市史』でもよく使われていますし、『広島県矢野町史』(安芸郡)でも見ることができます。

「右之趣年内中ニ五人組判頭之者へ申談、判下之者へも能々行届候様可申聞段、嚴重取計可申候」(文政二年(一八一九)『広島県史』)

右の趣を年内に「五人組判頭之者」へ説明し、「判下之者」へもよく行き届くよう説明させることを必ず取り計らいなさい。

「判下之者」とは、「判頭」に続いて署名する者の意味と思われまふ。

【判頭】(『古文書用語大辞典』)

関東地方において、五人組の筆頭のこと。判を持たない者が五人組頭から判を借りたところからいう。判を借りる者を判下という。

この説明は、「判頭」を「判の持主」と解釈し、「判下」を「判を借りる者」としていますが、本来印判は貸し借りをするものではないはず、どうも納得できません。

(2008/08/24)

手籠

「一扇子・うちハ手籠の品

一女の鬘縊り紙ニても手籠たる品、又ハ目立候品之類

一手掛・前たれ杯を物好成模様の類

一挑燈の火袋紅之彩色、又ハ上の方墨ニてぬり、

其外手籠仕立候品

一甌ひ人形類小ク候ても手籠候品

(中略)

右之類ハ勿論、此外手軽之品たり共無益之工手間等掛り候品仕入売買いたす間敷候、併御所御用等ハ格別之事」(天保十年(一八三九)『府中市史』)

扇子・団扇で「手籠」の品。女の鬘括りは紙製

でも「手籠」た品、または目立つ品など。手掛(手甲か)・前垂^{まえたれ}で物好きな模様の品。紅色の提灯^{ひょうくわ}の火袋、または上の方に墨を塗ったりした「手籠」仕立の品。小さくても「手籠」た人形類。……これらは勿論、その他、手軽の品であつても無益の手間がかかった品物は仕入たり売買してはいけない。もつとも、御所御用の品は構わない。

これは「天保十三壬寅三月京都御触写」と題する京都の触書の一部です。その中に「手籠」なる言葉が使つてあります。「てごめ」と読むと、辞書を引用するのも憚る意味になりますし、「てかご」とすれば小さい籠になつてしまいます。

京都の触書は、倭約令で、「手籠」の品は売つてはいけないとの内容ですから、「手籠」とは「手軽」の反対、「手を込めた(製作に手間のかかった)」の意味だろうと思います。

【手】(『広辞苑』)

④手を働かせてすること。手数。世話。「一

かかる子」

(2008/08/25)

駄賃

「 定

西条四日市

一海田迄 駄賃老駄式百五拾七文、内式拾九文坂のまし、荷物なくしてのら八百六拾八文、人足賃ハ老入百廿八文

一本郷新市迄 同式百六拾九文、内式拾九文坂のまし、荷なしにて乗八百七拾六文、人足賃ハ老入百三拾四文

右、老駄荷は四拾貫目、乗掛之付荷は式拾貫目、若先之馬指合ハ定之駄賃を取、一次は通し申へし、自然此旨於相背は、馬主之儀は不及申庄屋・馬頭迄曲言に可申付者也

享保三年六月日 奉行「(享保三年(一七一八)

「鶴亭日記」四日市駅象魏

これは西条四日市駅しやうぎの象魏しょうぎ(高札)の文面です。西国街道は、……広島(広島市)・海田市(海田町)・西

条(東広島市)・本郷(三原市)と、宿場が続いていました。

四日市駅から西の海田までの「駄賃」は一駄で二五七文、その内二九文は坂があるので割増し料金。荷物なしで乗ると一六八文。人足賃は一入一二八文。

四日市から東、本郷新市までの駄賃は二六九文、その内二九文は坂の割増し。荷物なしで乗れば一七六文。人足賃は一人一三四文。

ただし、一駄荷は四〇貫目まで、(人が乗った乗掛の付荷は二〇貫目までとする。もし次の宿場で馬の都合が付かないときは、定めの駄賃でその次の宿場(二次)まで輸送しなさい。この規定に違反すると馬主・庄屋・馬頭までも処罰する。

積荷の重量制限は、寛永八年(一六三〇)の規定では、「一駄荷ハ米六斗目、乗掛之付荷ハ式斗目」としてあります。昔、一人前の男子は四斗俵(二六貫、六〇キロ)を背負ったそうですが、「米六斗目」なら

二四貫目の計算になります。

「宿駅の重要な任務の一つに、公用旅行者のための人馬の継立てがある。公用の貨客輸送は、宿駅で人馬を準備し宿から宿へ継送る建前になっていたわけで、これを伝馬役といい、歩行役（人足）と馬役があつた。この場合、一宿ごとの継送りが原則で、第一宿から途中の第二宿を通過して第三宿へ直接継送ることは禁止されたが、広島藩では駄賃定の奥書には「若先之馬差合候ハ、定之駄賃を取一次は通し可申候」とあつて（『自得公済美録』巻二二上）、第二宿の状況如何によつては第三宿までの継送りが容認されている。」（『広島県史』）

【駄賃】（『広辞苑』）

① 駄荷の運賃。また、品物を送り届けた賃金。運び賃。② ちよつとした労力に対して与える金銭。つかい賃。特に、子供へのほうび。

「宿駅の人馬は公用を便ずるほかはいわゆる駄賃稼ぎを許されていた。公定の賃金によるべきことは

もちろんであつたが、各宿駅間の独占的な営業が保護されて、それが公用を便ずる反対給付とも考えられていたわけである。」（『新修広島市史』）
「お駄賃」が「駄賃」から出た言葉とは……、面白い。
(2008/08/26)

面割

税などの割付け方の一つに「面割」があります。その解説を調べると、区々の説明で困つてしまいます。

【面割】めんわり。（『日本史用語辞典』）

近世、年貢を農民個々の持高に割付ること。

「定書では、まず山分けにいたつた事情を述べ、村内の全野山の六〇％を面割（戸別割）に、四〇％を畝割（各戸の耕地面積別割）にする方針をたてた。」

（渡辺則文編『産業の発達と地域社会』）

「その年の免が村に通達されると、村では十月中に

免割帳・夫割帳を作成し、これによつて村民個々への下札さげざが作られて交付される。定物成をはじめ、一歩米・厘米等の付加税・小物成・諸役銀等の雑税、郡村の諸経費等、村としての負担額を項目別に書上げて、これを村民に割付ける場合、持高割にするものと、棟割(家別)・面割(人別)にするものとの区別を明らかにしたものが免割帳である。」(『新修広島市史』)

「面割」を、『日本史用語辞典』は「農民個々の持高に割付」(高割)と説明し、『産業の発達と地域社会』では「戸別割」(軒割)、『新修広島市史』は「人別」(人別割)としています。

「面割」の類語と思われる言葉に「面取立」があります。租税を「割付け」て「取立てる」訳ですからので、ほぼ同義です。

「諸税の中には、例えば貢租、小貫銀などの様に全ての住民をその対象として軒別に徴収するものの外に「船床銀」「馬代銀」の如く特定の諸個人のみがそれに関与しその徴収を受けるものとがあつ

た。このように、特定の諸個人を対象として徴収する方法を面取立といった。」(『廿日市町史』)
『新修広島市史』の「面割(人別)」説が優勢です。文字から考えても、「面」＝顔ですから、人別に割付けることでしょう。

「一追込 庄屋出来蔵

与頭直助

同武右衛門

右去冬村内之もの共、不風俗取結ひ候一件遂吟味候処、弥助、新平等頭取いたし、多人数誘立、不当之願筋相企、不風俗相働候段不届ニ付、夫々咎メ申付候、右等畢竟其方共平常示し方不行届より右之次第、不埒ニ付

但、騒立候場合、貸渡し候米銀之内、米方へ当りいまだ不差戻分は早々取立可申候、銀方へ当り候ては其場遣ひ同等之儀と相見候得ハ、最初より人数ニ加者共相除、其余惣人別面割ニて入戻し方取計可申事」(天保五年(一八三四)『廿日市町史』)
去年(天保四年(一八三三))の冬、地御前村の連中

が「不風俗」を取り結んだ一件を取調べたところ、弥助や新平らが頭取となり、多人数を誘って不当の願を企て、「不風俗」を働らいたこと（村方騒動）は不届であるので、庄屋・組頭へも咎（とが）追込（おしこ）を申し付ける。お前たちの平常の指導が行届なため事が起ったので処罰する。

騒動の時貸渡した米銀については、まだ返却していない米は早々に取立てなさい。銀はその時に遣っていると思われるので、最初から騒動の人数に加わらなかった者を除き、それ以外の総人数に「面割」で返させるようにしなさい。

「面割」は「人別割」に違いありません。

「不風俗」とは、騒動・一揆などを指す言葉のようですが、その範囲は判然としません。（2008/08/28）

一つ成上米

「一御家中一つ成上米

但御家中之面々、所付被下候分、高二付一つ成、毎年秋冬之内上納仕候」（『広島藩御覚書帖』、『広島県史』）

御家中の面々が給知を与えられたとき、その高の「一つ成」（二〇％）を毎年秋冬のうちに藩に上納する。これを「御家中一つ成上米」という。

「一壺ツ成上米之儀ハ、其年々趣を以可被仰付候事付、公儀御定之日限、無相違皆済可被仕候事、尤皆済之節は其趣此方へも可被申出候事」（宝暦九年（一七五九）、望月左忠太給人法、『広島県史』）

壺ツ成上米は、その年々に指示があるが、藩が決めた日限に違わず皆済しなさい。皆済したら給主（望月左忠太）へも連絡しなさい。

「上げ米はいわゆる借知のことであつて、家中の知行や切米・扶持米から、一定の率を定めて強制的に借り上げる制度で、家臣にとっては事実上の減俸を意味している。藩財政の補填策として寛永十六年（一六三九）から始められたが、延宝三年（一六

七五)に恒常化して幕末にいたったものである。
享保四年(一七一九)の上げ米が一つ成(すなわち、
年貢率を五つ成とした場合は知行物成は四つ成となる)
から嘉永元年(一八四八)の三つ成(同じく知行物成
は二つ成となる)となつて……」(『広島県史』)

『広島県史』によると、上米(御減石、御借米、借
知)は寛永十六年(一六三九)から始まったそうです。
その率は、「広島藩御覚書帖」の書かれた正徳・享
保期(一七一五年前後)、また「望月左忠太給人法」
の出された宝暦九年(一七五九)には、「一つ成」(一
〇%)です。

『広島県史』は「藩財政の補填策として」始つた
としていますが、小鷹狩元凱『芸藩三十三年録』に
よると、「軍役」(軍時の補給等に備ふる)として官に
納めたと説明しています。

「百石以上領受の者を知行と称し、采地を与へ、所
得五ツ物成いっつもものなりとす、五ツ物成とは例せば百石を領す
る者は現米五十石を得、然れども十分の二は軍役
として官に納めおき軍時の補給等に備ふるを定法

とせり、故に四ツ物成即ち四十石を以て上限とす、
官時に禄中より納むるを御減石ごげんし」又は御借米おかりまいと云
ふ、此給与法に差等あり、同く百石を領する者を
以て例せんに、其所得三ツ物成五歩なれば三十五
石、三ツ物成なれば三十石、而して二十五石を下
限とす、之を五ツ物成即ち五十石に對し半知と唱
ふ」(小鷹狩元凱『芸藩三十三年録』)

「天保七年(一八三六)、知行取りに對する借り上
げ免はついに二つ五分、すなわち半知となるに至
…」(『広島県史』)れば、「藩財政の補填策」が目的
に違いありませんが、その内の「一つ成」分は「軍
役」として借上げた積りかもしれません。

もつとも、消費税で徴収しようとして所得税で取ろう
と、取つてしまえば、どの様に使おうと勝手、「財
政補填」か「軍役」かと議論するのも無意味なこと
かも知れません。

(2008/08/30)

押合

「酒造醬油造税金、左之通去暮差出居候得共、人別取分ケ紛ハ敷ニ付、左之模形通り書分ケ、来月五日限租税課へ可差出候事

御付紙 本文取約メ至急之義ニて、自然押合ニおよひ候様之義も有之、往返手間取候ニ付、右ハ取約候筆者直ニ致持参候様可被申談候事」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

酒造や醬油造りの税金は、左の通り去暮に差し出しているが、人別の区別が紛らわしいので、左の雛形のように書分け、来月五日までに（県庁の）租税課へ提出すること。付紙 本文の取約めは至急のことなので、もし「押合」に及ぶようなら、往返の手間がかかるので、取り約めた筆者が直接持参するように指示しなさい。

【押し合う】（『広辞苑』）

①両方から互いに押す。②押し問答をする。言い争う。

本来の意味は①でしょうが、この文書では租税課

が「照会する」ことを指しているようです。

「八島大学といふ人あり、御馬廻組の御番割をなしける頃、番の割方に何ぞ不当の事や有りけん、ある士、立腹して八島氏に到り逢対して、扨此間の御番触いまだ私の出番には当り不申筈、いかやうなる御割方にて御触付御座候哉と押合ければ、……」（『梅鶴閑話』）

八島大学という人がいた。この人が御馬廻組の御番の割当てをしたとき、番の割方に何か不都合のことがあったのか、ある人が立腹して八島氏の所に行き、「さて、この間の御番触のことですが、まだ私の出番には当たらないはず、どのような割方でそうなったのですか」と「押合」うと、……」

この場合は「抗議をする」に近い意味のようです。

(2008/09/03)

出他

「都下之景況、人之話よりも穏静、本月九夜広沢参議之暗殺より、市中取締殊之外嚴重、昨今ハ暴客も少きよしニ御坐候、併社中之者も勉て用心仕、夜行等ハ見合、私も要用之外ハ出他不仕、出るときハパツチ麻裏ニて鳶口杯携、先ツ両三人之敵なれハ、此方より打倒シ候積、足早ニ往来いたシ居候、扨々六ヶ敷世之中ニ御座候」(明治四年(一八七二)九鬼隆義宛、福沢諭吉書翰)

都下の状況は噂よりも穏静で、本月(一月)九日夜の広沢真臣参議の暗殺により、市中取締りは甚だ嚴重で、昨今は暴客も少ないそうです。しかし社中の者も用心をし、夜行等は見合せ、私も要用以外は「出他」せず、出るときは股引、麻裏を履き鳶口などを持って行きます。二三人位の敵なら打ち倒す積り、足早に往来しています。それにしても、難しい世の中になったものです。

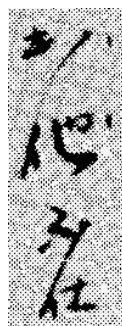
文中の「出他」なる言葉、「他出」なら分り易いのと思う、よく見ると傍点(写真)が付けてありま

した。書誤りに気付き、逆に読んでくださいと付けた記号でしょう。

今なら、文字の入替

えは「S」を裏返した

ような校正記号を使いますが、傍点が当時の「文字入替え」の記号かもしれません。(2008/09/07)



欠画

「御諱恵・統、御名睦之三字、自今欠画不及候事

壬申二月

太政官」(明治五年(一八七二)「統

波多野家文書」)

御諱の「恵」と「統」、御名の「睦」の三字は、

今後「欠画」するに及ばない。

「避諱^{ひき}とは、目上の者の諱を用いることを忌避する、中国など東アジアの漢字文化圏にみられる慣習である。二字名の場合にどちらか一字を忌避・タブーとするため特に偏諱^{へんき}といい、日本では二字名が

ほとんどであるために、偏諱が一般的である。…明治から昭和には日本でも避諱が採用されたことがある。仁孝天皇(恵仁)、孝明天皇(統仁)、明治天皇(睦仁)の諱の内、「恵」、「統」、「睦」がそれぞれ欠画とされた。」(「Wikipedia」)

【闕画・欠画】(『広辞苑』)

漢字の画を省くこと。特に天子または貴人の名と同じ漢字を書く時、はばかってその漢字の画を欠くこと。「玄」を「ㄗ」と書く類。闕字かけじ。

「殿様御名乗茂長公と被為附候、依之長ノ字名并名乗同字ハ用捨可有之候、尤名乗ハ文字違候共唱同様之分ハ用捨可有之候事、但し茂ノ字用捨之儀ハ兼て相達候通ニ候事」(安政六年(一八五九)「国前寺御触留帳」)

殿様の御名乗、茂長公と付けられたので、「長」の字の付く名前や名乗(実名)は遠慮しなさい。名乗は文字が違っても唱えが同じならこれも遠

慮すること。「茂」の字については以前達したとおり用捨しなさい。

茂長と改名したのは、広島藩主浅野長訓^{ながみち}のこと、この場合は「欠画」どころか、「使用禁止」になっています。
(2008/09/08)

御起居被成

「拝啓。益^ご清適^ご起居成られ、珍重斜ならず賀し奉り候。随て小生義海陸滞り無く、先月九日パレース着。同二十九日同所出立、当月二日ロンドン府着仕り候。」(文久二年(一八六二)、島津祐太郎宛、岩波文庫『福沢諭吉の手紙』)

この本は、「候文独特の漢字の語順は、読み下して表記」し、「読みやすく」してあります。そのお陰で、編者がどう読んだかが分ります。

「益^ご清適^ご起居成られ」と編者が読み下した原文は、「益御清適御起居被成」です。ところが、『福

沢諭吉百通の手紙』では、同じ個所に「なされ」とルビを振っています。

岩波文庫『蕪村書簡集』の編者も、「益ます 御安全被成御座」とルビを付けています。私は〈理屈抜き〉で、「なされ」でしょう……と思っています。

無理に〈理屈〉を付けてみると、

【為す・成す】（『角川古語辞典』）

他サ四 ①（ある行為・動作を）する。行なう

【る】（『角川古語辞典』）

助動下二型「活用」れーるーるるーるれーれよ

〔接続〕四段・ナ変・ラ変動詞の未然形に付く。

〔意味・用法〕④尊敬の意を表わす。「給ふ」などに比べると敬意は低い。…られる。お…になる。

【成す】は、サ行四段活用（成さ 成し 成す 成す 成せ 成せ）で、その未然形「成さ」に、助動詞【る】がつながって【成さーる】になり、助動詞が活用して【成さーれ】になったものと素人考えをしています。

【らる】（『角川古語辞典』）

助動下二型「活用」られーられーるるーるるれーられよ 〔接続〕四段・ナ変・ラ変以外の動詞の未然形、助動詞「す」「さす」「しむ」の未然形に付く。〔意味・用法〕④尊敬の意を表わす。「給ふ」などに比べると敬意は低い。…られる。お…になる。

助動詞【らる】ならよさそうですが、これは「四段・ナ変・ラ変以外の動詞」に付くようですから、四段活用の【成す】には続かないのだろうと思います。（面倒なハナシです。）（2008/09/09）

腹書

「堤防橋梁町門并修覆入費ハ、官郡村出方分リ之義ニ付、寄合之義も有之候条、別紙摸形之通古帳ニ照準シ明細取調、往返を除ク之外日数十日ヲ限り可差出候也

壬申三月 租税課

戸長中

雛形

何村

堤防

何ヶ所

長

何十何間

根置

何間

馬踏

何間

此修繕入用諸品

何々官費

何々郡費

何々村費

雨池

何ヶ所

水面

何間四面

堤防

長何十何間

根置

何間

馬踏

何間

腹書右二同

板橋

何ヶ所

……

「(明治五年(一八七二)「続波多野家文書」)

堤防・橋梁・町門などの修理費用は、官・郡・村の分担割合があり、(数ヶ村)協同修理もあるので、別紙の書式の通り、古帳に照らして明細に取調べ、往復日数を除き十日以内に県庁租税課へ提出しなさい。

この「雛形」では、「堤防」は必要事項を全て書出していますが、「雨池」以下では、「此修繕入用諸品」の分担割合の部分が共通なので省略してあり、「腹書右二同」の文言で済ませています。すると、この部分を「腹書」といつているようです。

「電信線柱有税地ノ内ニ有之分ハ其田畑エ一縄ニ打込、内何程電信柱敷地ト腹書ニ致シ置候事」(明治八年(一八七五)「地租改正実地丈量人民心得書」) 電信柱が有税地の内にあるときは、その田畑に含めて記述し、何程が電信柱の敷地であると「腹書」にしなさい。

特別に項目を立てないで、脇に注記することのようです。

「腹書(脇書)」とか「杉樽の腹書(表のラベル)」
という解説をHPで見つけました。(2008/09/11)

見廻

「次郎右衛門様へ年寄善右衛門・与頭中御見廻申上
候」(宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

(新任の御調郡代官、松原)次郎右衛門様へ年寄善
右衛門と組頭連中が「御見廻」申上げました。

「御蔵古米、大阪へ被遣候に付、御蔵奉行戸嶋平助
様・原分右衛門様、今昼御越被成候。年寄善右衛
門・五郎右衛門御見廻申上候」(元禄五年(一六九
二)「橋本年誌」)

御蔵の古米を大阪へ輸送されるので、御蔵奉行
戸嶋平助様・原分右衛門様が今昼尾道にお越し
になった。年寄善右衛門・五郎右衛門が「御見
廻」申し上げた。

「見廻」で辞書を引くと、こんな答がありました。
困ったことです。

【見回り・見廻り】みまわり。(『広辞苑』)

用心・警戒のため、見回ること。また、その人。
巡視。

「御状致拝見候、残暑甚候处、弥無御別条御勤珍重
存候、如來論於蒲刈朝鮮人來帰共無滞相済、致安
悦候、随て為御見廻素麵一箱・鳴戸塩鴨一折預御
音信、遠路被懸御心恭存候、猶期后音候、恐惶謹
言

八月十三日

岡本大蔵

有福新左衛門様」

(延享五年(一七四八)「延享度朝鮮人來聘記」)

御手紙拝見いたしました。残暑厳しいなか別条
なくお勤め珍重に存じます。仰せの如く蒲刈で
の朝鮮人の往来、無事に済んで悦んでいます。

「御見廻」として素麵一箱・鳴戸塩鴨?一折を
遠方からお送りいただき、恐れ入ります。……

通信使の接待のため広島藩の様子を聞いていたものとみえて、岩国家中の有福は「御見廻」として素麺などを贈っています。勿論、「見廻」は「見回り」ではなく、「見舞」です。

【見舞】 みまい。（『広辞苑』）

① 見まわること。巡視。② 訪れること。訪問。

③ 災難をうけたり、病気にかかったりした人を訪れ、または手紙で問い慰め、また金品などを贈ること。また、その手紙や金品。

「見廻」から始まり、「見舞」（訪問）になり、この場合は、「贈物」にまで変化をしています。

(2008/09/12)

罷立

「去月廿六其許罷立、打続風雨に、此方彼方ニやすらひ、漸晦日佐土原まで越着、今月三日從徳之口出船」（天正十六年（一五八八）島津義弘書状、『下蒲刈

町史』）

先月廿六日、そこを「罷立」ち、打ち続く風雨のためあちこちで休泊、ようやく晦日に佐土原まで着いた。今月三日徳之口より出船し……

「八幡宮之義は、先年天正之頃当村庄屋助右衛門と申者、氏神無御座候ニ付西宮御幣を申請罷帰り候、道中ニて荷物之内ニ鎌耒枚有之、不審ニ存、若宿之鎌ニは無之哉、宿ニ残し置罷立候、又次之宿ニても荷之内ニ有之候ニ付、弥不審ニ存、此者申様は、御幣ニ相添我等国元へ御下り被成度候ハ、今一宿御成候へかしと宿の垣ニ差置申候所、又次之宿ニ来り給ニ依テ持下り、御幣ハ西宮八幡宮と祝籠、鎌をは彼庄屋鬼門ニ納、今ニ其所を鎌ケ風呂と申来り候」（文政二年（一八一九）、山県郡木次村「国郡志御用ニ附下しらへ帖」『千代田町史』）

八幡宮は、先年天正の頃、当村庄屋助右衛門と申す者、村に氏神がないので西宮の御幣を申受けて帰りましたが、道中で荷物の内に鎌が耒枚

あるので不審に思い、もしかしてこれは宿の鎌ではなからうかと宿に残して「罷立」ました。また次の宿でも荷物の内にあるので、いよいよ不審に思い、「御幣と一緒に私の国元へ御下りなされたいのなら、この宿に今一宿してください」と宿の垣に差しておきました。ところが次の宿でも鎌が見つかったので、国に持帰り、御幣は西宮八幡宮として祭り、鎌は庄屋の家の鬼門に納めました。今でもそこを鎌ヶ風呂と申します。

「罷出」「罷越」「罷通」「罷寄」などは、『広辞苑』で見ることができますが、「罷立」はありません。文脈から、「罷出」と同じと思われます。

(2008/09/13)

前広

「自分儀、此度石見・備後国にて支配所ニ被仰付、

無程大森陣屋へ罷越候ニ付、村役人共外長立候もの席之節、先格之振合を以目通可申付候、尤其節万一音物等差出候儀も有之候ハ、決て可為無用、縦令先前仕来ニ有之とも、右牀之儀は向後急度相止メ可申、聊之品たりとも一切返納不致間敷候、無益之心構無之様前広ニ申渡置候

(八月)

岩 鋏三郎 印」(天保七年

(一八三六)『広島県史』)

自分はこの度、石見・備後国の支配を仰せつかり、ほどなく大森陣屋へ赴任するので、村役人などはそのとき、以前と同様挨拶に來なさい。その時、音物等を差出すことは無用である。たとい以前の仕来りであっても今後は絶対に止めなさい。いささかの品でも一切返納？してはいけない。無駄な心配をしなくてもよいよう「前広」に申渡しておく。

幕府御勘定役、岩田鋏三郎が石州大森代官として赴任するとき、備後国の天領の村役人に対して出した「音物無用」の達です。「席之節」は不明。

【前広に】まえびろに。（『広辞苑』）

あらかじめ。前もって。（2008/09/14）

夜四ツ七八歩

「栗原新開塩浜天満や正兵衛居宅、夜四ツ七八歩に
出火仕候て、居宅・男部屋迄も不残焼失いたし候、
早速町よりも欠付申候も、手にあい不申候、御下
代衆も御出被成候」（元禄五年（一六九二）八月「橋
本年誌」、『尾道市史』）

（尾道）栗原新開の塩浜、天満屋正兵衛の居宅か
ら、「夜四ツ七八歩」に出火し、居宅・男部屋（下
男部屋）までも残らず焼失した。早速町よりも
欠付（駆付け）たが手が付けられなかった。御下
代衆（代官手付）もお出でになった。

江戸時代の時刻の呼び方に、「四ツ」があります。
時刻の基準は、日の出前や日の入り後の時刻で、こ
れを「六ツ」といいました。昼間を六等分、夜間も

六等分しました。（不定時法）。「六ツ」の次は「五ツ」、
その次が「四ツ」です。次が「九ツ」（真夜中・真昼）
で、次が「八ツ」……。

【四ツ】よつ。（『広辞苑』）

③昔の時刻の呼び方。巳みの刻、すなわちおよ
そ今の午前一〇時頃、および亥いの刻、すなわ
ちおよそ今の午後一〇時頃。よつどき。

一日を一二に分けるので、「一刻」は約二時間。
この目盛では粗すぎるためか、この「一刻」を二つ
に分けたり（初刻・正刻）、三つに分けたり（上・中・
下）、「草木も眠る丑三つ時」のように四つに分ける
こともあるそうです。

ところが、この資料では「夜四ツ七八歩」と表し
ています。どうも「一刻」を一〇等分したものと思
われます。一刻＝二時間＝一二〇分とすると、「一
歩」は一二分、「七八歩」は一二分×七・五歩＝九
〇分。すると、「夜四ツ七八歩」の出火は「午後一
一時三〇分頃」になります。（ブログ「秋分」2007/03
/23 参照）。（2008/09/16）

石州御銀

「一御銀無恙未下刻に尾道へ御着、笠岡屋蔵へ入申候、戸前符之印御宰領様へ窺候処、銀子渡申候上は符印あなたより御被遊間敷候やと被成御意、其段理右衛門様へ申上候へは、理右衛門様御印にて符被遊候」（元禄五年（一六九二）「橋本年誌」）

（十月六日）「石州御銀」は無事に未下刻（午後三時前）に尾道へ御着きになり、宿舎の笠岡屋の蔵に入れました。戸前の封印を御宰領様へ伺うと、「銀子を渡した以上は、あなたがされるのでは……」との返事、御代官米田理右衛門様に申上げると、自分の御印で封印されました。

「石州御運上銀」は（元禄五年（一六九二））十月三日に石州を出発、陸路で尾道に運ばれました。

「合 灰吹銀 七百五拾三貫九百三匁六分九厘
丁銀 貳百三拾五貫六百八拾目三分九厘

但箱数 九拾五箱 端銀共に

内 灰吹銀 拾貫目入 七拾五箱

丁銀 拾貫目入 貳拾三箱

端銀 壹箱 内 灰吹銀三貫九百三匁六分九厘、丁銀五貫六百八拾匁三分九厘

御宰領様

宗岡市之丞様

生駒与左衛門様

大賀儀兵衛様

河島徳兵衛様 中間四人、草履取衆四人

御上下拾貳人

……

一御銀馬 四拾九疋

一御乗馬 四疋

一同 壹疋

一乗掛馬 四疋

一中荷馬 四疋

一余慶馬 四疋

馬数 六拾六疋（同上）

の大部隊でした。迎える尾道でも「御銀通筋掃除」

をし、「月行司当番四人除候而残三拾式人如例十二ヶ所へ辻固に割符仕候而已刻より出置申候」(月行司は当番の四人を除き、残りの三拾式人はいつものように十二ヶ所の「辻固め」を割当て、已刻より出動)の大騒ぎ。

「七日 石州御銀無恙辰上刻に御船へ御積移被成已之中刻に御出船被成候」(同上)

翌日、石州御銀は無事に辰上刻(午前八時すぎ)に御船へ移し替え、已之中刻(午前一〇時ごろ)に御出船になった。

尾道からは、「御銀積御船式艘拾壹端帆拾端帆、御馳走人御兩人御乗船壹艘八端帆、御小早壹艘、四艘」で播州室津まで送り届けています。

馬の名前が多く見られます。御銀馬(銀輸送用)、御乗馬(幸領乗馬用)、乗掛馬(荷物も乗せた馬、中間用か)、中荷馬(荷物専用?)、余慶馬(予備馬)でしょうか。

(2008/09/17)

殿と様

「次郎右衛門様嶋方へ御出被成候、御下代弥一右衛門殿・半六殿御供、年寄善右衛門御見廻申上候」(宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

次郎右衛門様が島嶼部へお出になり、御下代の弥一右衛門殿・半六殿が御供をし、年寄善右衛門が御見廻申しあげました。

「次郎右衛門様」は松原次郎右衛門、御調郡の代官です。「弥一右衛門殿」「半六殿」は、三好弥一右衛門、早見半六で、いずれも下代(代官手付)です。「善右衛門」は尾道の町年寄です。代官が手付を伴って島に出張するにあたり、町年寄が「御見廻」(挨拶)に出向いたという、ごくありふれた記事です。

面白いのは「く様」と「く殿」の使い分けです。代官は「様」、その下僚は「殿」と見事に使い分けています。もともと「弥一右衛門」はいつも「く殿」

付きで書いてあるので、「下代は殿付き」で書くことにしていたものと思われます。

【殿】（『広辞苑』）

〔接尾〕①他人の氏名・官名の下に添えて敬意を表す語。「様」よりも敬意が軽く、また現在ではより公的な用語。
(2008/09/20)

丁錢

「今般旧銅貨品位御改定ニ付ては、一般丁錢ヲ以テ可致勘定之所、宿駅人馬賃錢等、間々九六錢ヲ以取扱候向モ有之趣相聞、不都合之事ニ候、以来都て丁錢ヲ以請払候様可致事

壬申三月十五日

大藏大輔井上馨

（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

この度の旧銅貨の品位の改定について、「丁錢」で勘定すべきところ、宿駅の人馬賃錢などでは間々「九六錢」を取扱う者もあると聞くと不都

合のことである。今後は全て「丁錢」で請払をしない。

この前年の明治四年（一八七一）に新貨条例を公布していますが、明治五年（一八七二）一月には、太政官布告により銅錢の併行通用を認めています（天保通宝Ⅱ八厘、寛永通宝四文錢Ⅱ二厘、文久永宝Ⅱ一厘半、寛永通宝Ⅱ一厘）。

【新貨条例】（『岩波日本史辞典』）

最初の金本位制を定めた法規。一八七一・五・一〇公布。米国の制度に倣い、金本位制を採用し、円・錢・厘という貨幣単位を法令として定め、一〇進法を採用した。本位貨として一円金貨を鑄造、その純金の重量は一米ドルと等価の一五〇〇mgとされた。

【九六錢】くろくぜに。（『広辞苑』）

江戸時代、錢九六文を一〇〇文に通用させた計算法をいう。

【丁錢】ちようせん。（『広辞苑』）

江戸時代、銭九六文を一〇〇文と扱った習わしに対して、銭一〇〇文を額面通りに一〇〇文の価値に用いた」と。

(2008/09/24)

兵衛門

「寛永拾六巳卯年御代官代 知行貳百石西川角兵衛門、同貳百石沢井加兵衛門、但壱ヶ年相勤、同三百石田井貞右衛門、但右同断。」(『新修尾道市史』第二卷)

寛永十六年(一六三九)に御調郡の御代官が代り、貳百石の西川角兵衛門、貳百石の沢井加兵衛門が就任。壱ヶ年間勤めた。三百石の田井貞右衛門も同じである。

これは「御調郡御代官元和五己未年始而被仰出歴代覚書」と題する文書の一節です。文中の「西川角兵衛門」「沢井加兵衛門」の名前に違和感があります。「角兵衛」「加兵衛」ならありふれた名前ですか

ら不思議とも思いませんが、「兵衛門」となると、誤植か誤読かと頭を抱えてしまいます。

「西川角右衛門」の名前なら、寛永十九年(一六四二)と正保三年(一六四六)に「御地詰御奉行」を勤めた人物がいます。(『高田郡史』『五日市町史』)。「西川角左衛門」なら、紀州の頃から長晟公へ仕えたえ者として『芸藩輯要』(旧臣録)に見えます。

「沢井加左衛門」は原勘兵衛組の一人として『芸藩志拾遺』に載せてあります。「沢井加右衛門尉」(三〇〇石)は仙石因幡守組として「元和五年長晟公御入国の年の侍帳」にあります。

「誤植か誤読か」と失礼なことを思うのも、原本ではないからでしょう。そこで、原本で「兵衛門」を探してみました。

「番組熊野直次郎・同立川包次聴訟於四日市本胡屋弥右衛門宅、行候之、直行診上瀬野村野村孫兵衛門母、日暮帰家」(天保三年(一八三二)「鶴亭日記」)

番組熊野直次郎・同立川包次、訟を四日市本胡屋弥右衛門宅に聴く。行きて之を候ふ。直に行

きて上瀬野村野村孫兵衛門の母を診る。日暮れて家に帰る。

安芸郡の割庄屋、上瀬野村の「野村孫兵衛」の母親を往診した記事です。楷書で「野村孫兵衛門」と明確に書いてあり、誤読のしようがありません。「孫兵衛」を「孫兵衛門」と書いたのか、それとも「孫兵衛」の「門」(家の意味で書いたのか、これも分りません。

【兵衛】ひようえ。(『広辞苑』)

兵衛府に属し、内裏の内郭の門を守衛し、行幸に供奉ぐぶした兵士。

【衛門】えもん。(『広辞苑』)

衛門府の略。特に、右衛門うえもん府を指す場合もある。

「く兵衛門」という名前なので、おかしいという方がおかしいのかも知れません。「兵衛」も「衛門」も出所は同じようなもの……とはいうものの、どうも気になります。

(2008/09/24)

案紙

「木村左助様、未極月より当町御奉行に御附被遊候以来、於町方御調物等役人之手前は不及申上、代銀盡御払被遣、則請取手形度々差上申候并為御自分諸色町にても役人共前にても御買物代無滞被遣、一錢之御買掛り等無御座、其外於町方に御非分之儀役人共手前は猶以一円無御座、申年中御勤番当酉の正月御勤番迄何之滞儀一切無御座候、右趣委細之手形御取置被遣度之旨被仰聞候故、為後日書物判形仕差出申候

西正月

尾道町年寄三人

町庄や杢右衛門

中村六左衛門殿(享保二年(一七一七)「橋本年誌」、『新修尾道市史』)

木村左助様は正徳五年(一七一五)十二月より当尾道町御奉行に就任されて以来、町方において御調物など求められるとき、町役人の手前では

勿論のこと、代銀は全てお払いになり、領収証を度々差し上げました。御自分の品物を町でも、役人どもの前でも買物をされるとき、代金はずぐ払われ、一銭の買い掛けありません。

その外町方にて非分な行いは、役人どもの手前は勿論一切ありません。享保元年（一七一六）中の御勤番から享保二年（一七一七）の正月の今まで、何事も滞ることはありません。以上、詳細な手形（証書）が欲しいとのことで、後日のため記し判形をして差上げます。

なんとも奇妙な内容の証明書で、木村左助の使用人、中村六左衛門宛に書いています。この文書の前

に次の記事があります。

「町御奉行木村左助様御内中村六左衛門殿、書付案紙御渡、此通調候而判形仕置候様町庄や杢右衛門へ被仰聞候故、調判形仕杢右衛門より相渡す」（同上）

町御奉行木村左助様の使用人、中村六左衛門殿がお書きになった「案紙」をお渡しになり、「こ

の通りに書いて判形をしてくれ」と町庄屋杢右衛門に依頼されたので、そうして杢右衛門へ渡した。

【案紙】（『日本国語大辞典』）

文案を書いた紙。例文を載せた書類。

（2008/09/27）

厘

「 覚

一廿五匁式分 船十四艘賃銀、一日壹艘三分宛
 一百目八分 同加子四十式人賃、壹人一日二四分宛
 一百三拾六匁八口 米式石式斗六升八合、石六十匁
 かへ

ベ式百六拾式匁八口」（宝永二年（一七〇五）「十四日町年誌」）

船一四艘分の賃銀（六日分）、一日一艘三分ずつとして、

$$0.3 \times 14 \times 6 = 25.2\text{匁}$$

加子四二人分の賃銀(六日分)、一人一日四分ず
こつし、

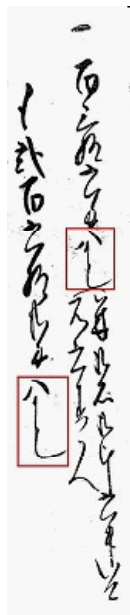
$$0.4 \times 42 \times 6 = 100.8\text{匁}$$

米二石二斗六升八合の代、一石六〇匁として、

$$60 \times 2.268 = 136.08\text{匁}$$

以上合計式百六拾式匁「八?」

左図で□の中の「八?」が読めません。しかし、計算するとその意味が解ります。「八厘」です。「厘」を「リ」と表記するのは見たことがあります、このような字(記号?)は初めてです。これからは理屈抜きで「厘」と読むことにしますが……。



(2008/10/01)

約男

「此節伊勢参宮之者大勢在之由相聞候付、広島町中へ町奉行中より被申付候趣へ、他所へ大勢無斷参候儀は御法度二候、其上幼少之もの共参宮仕、於他所相煩候歟、其外男女二不限他所之約男に罷成候儀出来いたし候は、品より面々可為越度旨被申付候、郡中者末々迄大勢参宮など仕もの在之候は、此旨相得心可申候、相背候もの可為越度事」(宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

この節、伊勢参宮をする者が大勢いると聞いているが、それについて広島町中へ町奉行より次の指示があった。すなわち、他所へ大勢の者が許可なく行くことは御法度である。その上幼少の者まで参宮をし、他所で病気になるとか、男女にかぎらず他所の「約男」になるようなことになれば、品によつてはお前たちが処罰されることになる……と。郡中の者も末々まで大勢参宮をする者があれば処罰するので心得ていなさい。

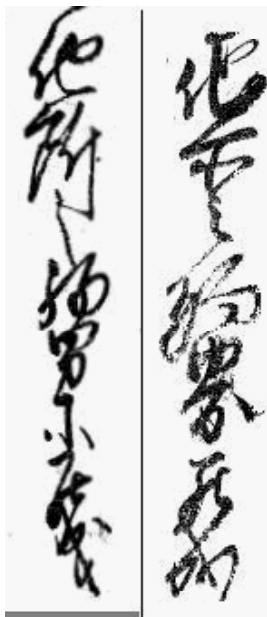
この資料を引用した『広島県史』は次のように解

説をしています。

「庶民の間に流行したいわゆる抜け参宮・おかげま
いりはほぼ六十年毎に、ことに多数の者が集团的
に伊勢に赴いた。この年(宝永二年)はその最初の
ピークであった。」

また「約男」には「ママ」のルビを付けています。
左図左側を見ると、たしかに「約男」と書いてあり
ます。「約男」という言葉に困っていると、少し後
の資料に左図右側の記事「他所之約界罷成」があり
ました。「約界」なら解ります。「やくーかい」(厄介)
です。文意にも適います。

「厄介」が「約界」と宛字を書き、更に誤読？し
て「約男」になったものと思われます。古文書を読



むのは、まるでクイズを解くようで、厄介で面白い
作業です。

(2008/10/02)

御移

「折角今日ハ御待ち致居候処、(西組奉行所へ)出番
にて御来貢被成がたく候段、態々被仰下、御鄭重
之御儀奉存候。遺恨(は)此方ニ御座候。一種珍品
も到来いたし居候処候。小児(支峰四歳、三樹、二
歳)へ何より之御心入之品被贈下、家内大慶仕候、
よろしく御謝辞申上度と申出候。即飢品些々、御
移二入させ申候。」(文政九年(一八二六)、平塚瓢斎
宛『頼山陽書翰集』続編)

折角、今日は御待ちしておりましたが、西組奉
行所への出番のためお出で頂けないと、親切に
お知らせいただき、珍品も一品到来していまし
たのに残念なことでした。子供(支峰四歳、三樹
二歳)へ何よりの御心入のお品を頂き、家内も
大喜びをしています。よろしく御礼をと申して

おります。わずかの品ですが「御移」に入れて
おります。

【平塚瓢斎】（思文閣『美術人名辞典』）

与力。称利助、字士梁、隠居後瓢斎、別号津久
井清影。父節斉について学び所司代に仕う。天
保八年飢饉の際は大きいに救世の事に当る。

【御移り】おうつり。（『広辞苑』）

物をもらったとき、返礼としてその容器に入れ
て返す品。半紙・マツチの類を用いる。

「御移」なる言葉、辞書には載せてありますが、
今まで耳にしたことはありませんでした。言葉が消
えかかっているということは、そのような心遣いも
なくなりつつあるのでしょうか。（2008/10/16）

廻し俵

「一廻し俵之事、俵之厚薄・縄之大小・米之軽重御
見合、斤両二掛、御吟味候て御廻させ可有之候、

但、過分二輕を御廻せ候は、百姓迷惑仕候間、左
様之俵は御はね可有之候」（慶安二年（一六四九）『広
島県史』）

「廻し俵」のことについて、俵の厚薄、縄の大
小、米の輕重を見合せ、斤両に掛け、吟味して
「廻させ」ること。輕すぎる物を廻せば百姓が
迷惑するので、そのような俵は刎ねておきなさ
い。

これは、年貢米収納に関して蔵奉行への指示です。
「廻し俵」「廻させ」という言葉が見えますが、「廻
す」とは、

【回・廻】まわす。（『日本国語大辞典』）

〔方言〕⑥多くの米俵から数俵を引き抜いて検
査する。沓岐。

さすが、『大辞典』です。

【廻し俵】（『単位の歴史辞典』）

江戸時代から明治時代にかけて、米取引所にお
いて計量のため抽出される俵。「廻し」ともい

う。計量の場所に「廻す」ことからきている。

「廻し」は計量の場へ「廻す」ことですから、「枅廻」ともいいます。

【枅回・枅廻】（『日本国語大辞典』）

受渡米について、倉庫内の米の品質や容量を検査すること。

この説明は、頂けません。

サンプリング調査の前に、サンプルを「斤両二掛」けて、重さのチェックしています。

「一廻し欠、三斗入俵二付式合、五斗入俵壹俵二付三合迄欠り有之分は御請取候て、欠米別ニ御請取可有之候、是より過分ニ欠立候は有俵ニ御直せ可被仰付候」（同上、続き）

廻し俵に、三斗俵で式合、五斗俵で三合まで欠り（不足）があるときはそのまま収納し、欠米（不足分）を別に受取りなさい。これ以上の不足があれば、俵を作り直させる」と。（2008/10/16）

届敷

「茸類始め、山野ニ生シ候食物ニ相成草木、郡内最合凌き候処、当年異作ニ付ては専ら堀ひらいたし候処、此砌栗ひらい食物之多足ニいたし候分、素より相互之義故、最合取無差間様御示し合可被成候、并栗木枝等切折ハ勿論、木ふるい等決して不致、落栗分ひらい取候様厚御示し、薯蓣葛蕨之根堀候共、堀口等村々迷惑ニ不相成様、其外右等類し候得物統能堀ひらいたし候様、届敷御談可被成候、已上

〔明治二年〕 巳七月廿七日 当番割庄屋三上

健助」（明治二年（一八六九）『広島県史』）

茸類など山野に生えて食物になる草木を、飢饉のときは郡内で「最合」で採り凌いできたが、当年明治二年（一八六九）の異作（不作）では専ら堀り拾いをしており、栗を拾って食物の「多足」（足し）にするのはお互様であるので、「最合取」

に不都合がないよう指示して下さい。また、栗木は枝を切り折りすることは勿論、実を振るい落すなどけつしてしないで、落栗だけ拾い取るように指導して下さい。なお山芋・葛・蕨の根を掘るとき、堀り口など村々の迷惑にならないよう、その他「得物」をうまく掘り拾いするよう、「届敷」で指導ください。

これは、明治二年（一八六九）の大凶作に際して奴可郡割庄屋の出した「火急内々触」の一部です。「届敷」など（面白い）言葉が沢山出てきます。

【もやい】（『岩波日本史辞典』）

催合・模合・茂合・最合などの字を宛てることもある。共同で仕事をするこゝで、協同労働・平等配分を特徴とする。モヤイ山・モヤイ漁など、仕事場が入会・物有の狩猟や漁業活動において顕著にみられる。ほかに諸藩における家中相互扶助金制度（モヤイ銀）や、田畑の協同経営（モヤイ田作）などもあった。また、もやいは舫の字を宛て、船と船をつなぐこと。

「届敷」は辞書では見付けられませんが、文脈から考えて、「行届いた様子」に違いありません。「とどけしく」とでも読むのでしょうか。（2008/10/18）

仕似せ

「此度御奉行様厚き思召にて、教訓道しるへと申書物を御下被遣候、下方一統へ読聞ス様ニ被仰出、……道しるへと申書物ハ、第一親ニ孝行を致し、目うへ・年かさ成人を尊敬致スすへ之事、并町内睦敷附合をいたし、并子や孫を導てよき人ニ仕立候おしへ方之事、并銘々仕似せたる家業を大事ニ心かけ之事、并道理と不道理と申事有て悪事をせぬ様ニ申、此六ヶ条をさとす事を御かき被成候書物故、何も其所を相心得、御主意之程難有心得て読聞候間、つゝしむて拝聴被致度事ニ存候」（寛政三年（一七九二）『三原市史』）

この度、御奉行様の厚き思召で、『教訓道しるべ』という書物を下方一統へ読み聞かせるよう

にと御下げになりました。……この書物は、親には孝行をし、目上の人を尊敬し、町内睦まじく、子や孫を導き、銘々の「仕似せたる」家業を大事にして、悪事をせぬ様にと書かれた書物なので、御主意を有難く心得、謹んで拝聴しなければなりません。

駄賃伝馬

(2008/10/19)

つぐこと。②先祖代々から続いて繁昌している店。また、それによって得た顧客の信用・愛顧。

この「読書会」は年に四回開かれ、一回で三夜もかかり、一軒から一人は出て、出欠をとられるという大変なシロモノのようです。

「銘々仕似せたる家業を大事二心かけ」とあります。

【仕似せる】しにせる。(『近世上方語辞典』)

①先祖からの商売を絶やさず続ける。②商売を続けて資産をつくり上げる。③本業として継続する。努力を続ける。④仕事が板につく。熟達する。

【老舗】(『広辞苑』)

(動詞「仕似せる」から) ①先祖代々の業を守り

「 覚

御朱印之写遣之

御伝馬 五疋

駄賃伝馬 九疋

内から尻 式疋

(以下略) (宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

これは「從江戸筑後国久留米迄」「為御目付嶋田藤十郎被遣」に際して、各地の「御伝馬宿頭中」宛に出した文書です。「御伝馬」と「駄賃伝馬」が並べて書いてあります。

【伝馬】(『広辞苑』)

通送用の馬。律令制では、駄馬とは別に、各郡

に五匹ずつ飼わせ、公用旅行の官人に使わせた。戦国時代以降は宿駅に備えて幕府・領主の公用に供し、江戸時代には民間の輸送にも従った。

【朱印人馬】（『日本史用語辞典』）

近世、將軍の朱印状によって使用を許可される無賃の人足・伝馬。利用資格をもつのは公家・門跡・將軍名代の使者・巡見使・日光門跡・特権寺院・藤沢遊行上人・宇治御茶御用・備後御畳表・野馬御用・御鷹御用・御簾御用など。人馬数は身分・用務によって異なるが、將軍の權威を笠に着て宿駅を苦しめることが多かった。対応語は駄賃人馬。

「御伝馬五疋」は、幕府の役人として朱印状により無賃で利用した伝馬。役人は無賃で伝馬を使ったとばかり思っていました、有料の馬「駄賃伝馬」も使ったことを知りました。

【駄賃】（『日本史用語辞典』）

江戸時代、駄馬による貨客運賃のこと。本馬・乗掛・軽尻（人間一人と手荷物）の区別があった。

朱印人馬は無賃、役人などには御定賃銭で低率、一般には相対運賃で高かった。（2008/10/24）

一銭三分

「董法草書筆之儀ハ一銭三分ト報条にしるし有之候故、左様と心得罷在候処、琴魚様より唐毛の董法のよしにて、格別高料之方御下し被下候、是又、御心を用ひられ候御儀ニハ御座候得とも、何分愚拙の手に不叶筆ニ御座候故、甚後悔仕候、軸ふとさ筆は、平生細書のミ認候故、一向とり扱ひ候事叶ひ不申候」（文政六年（一八一三）篠斎宛『馬琴書翰集』）

（買って頂いた）董法草書筆は「一銭三分」と報条ちらしにあったので、そのように思っていました、が、琴魚様（馬琴の弟）のお話では、唐毛の董法筆とのこと、格別に高価な方をお送り頂いたようですが、何分私の手にあわず、後悔しています。

平生は細書だけ書きますので、軸太の筆は使いません。

篠斎を通じて上方から購入した筆は、細字を書くのには適さず、馬琴のお気に召さなかったようです。

「一錢三分」とは何か。「錢」は銅貨の単位、「分」は金貨の、「分」は銀貨の単位とと思っているのに、「錢」と「分」が一緒に表記されると困ってしまいます。

「飛白霜製法

鉛三錢八分 水銀一錢三分 右二味銅鍋ニテ火上
二置ヨクワカシ、……」（天保五年（一八三四）「鶴
亭日記」）

「飛白霜」という薬？の製法（鉛と水銀を鍋に入れて……）が書いてあります。「鉛 三錢八分」とは、鉛の重量か、値段か……。処方を書くのなら値段より重量のほうが適当ではないかと思いますが、それとはとかく「三錢八分」という言い方があるのは確かです。

「一錢三分ト報条にしるし有之」の記述は絶対に

値段の表記です。そこで、重量の単位かそれとも値段の単位かと迷わないで、重量であり値段でもあると思えば話は簡単、それは銀貨です。銀はその重量で価値を表します。

【錢】（『広辞苑』）

① ぜに。② 日本の貨幣の単位。円の一〇〇分の一。古代から近世まで、貫の一〇〇〇分の一。文。③ 匁の唐名。

「一錢三分」は「銀一匁三分」の値段、「鉛三錢八分」は「鉛三匁八分」の重さと解釈すれば丸く納ります。
(2008/10/25)

宿割衆

「（二月）廿五日

一中川因幡守様御参勤、中国路御成被為遊候ニ付、御在所豊後国岡二月十九日御発駕被為成、三月三日尾道御泊、御廻状芹河孫作殿より御飛脚にて御差越、則右写御勤番所へ庄屋又右衛門より上ル

(三月)二日

一 中川因幡守様、弥三日御泊り被遊候ニ付、御宿割田能村吉右衛門様・下役磯部九右衛門殿上下九人、今未刻御着、宿秋田や彦二郎所御着、以後庄や又右衛門・筆取罷出候、則御下宿御割帳御渡被成、帳調次第札御打可被成候由被仰候、未中刻御出宿札御打、申ノ中刻御仕廻被成候

(三月)三日

一 御宿割衆、今朝御立、神辺迄御越被成候
一 因幡守様御迎之年寄善右衛門・与頭六郎右衛門・五郎二郎・御宿主彦四郎上下着、御蔵前迄罷出候、今度ハ諸事御用捨被遊候て源助様御儀御迎・御見立ニも御出不被成候、此段広嶋より申来候由
一 因幡守様、今未刻御機嫌克笠岡屋へ御入被遊候、其後源助様為御機嫌窺表座鋪迄御出、御取次二神清右衛門殿と申御方御逢被成、早速栗原や向座敷御引取被成候
一 因幡守様より為御使者芹河孫作殿くり原や向座敷迄御出被成候、其後源助様御礼二孫作殿御宿大入や甚四郎所へ御出被成候

一 今夜、月行司不残一時代り夜廻り、昼火廻之者壹町三組宛出候式度宛廻し申候

(三月)四日

一 因幡守様、今朝五つ御立被遊候、年寄善右衛門・与頭六郎右衛門・五郎次郎・御宿主彦四郎上下着、宮崎町端迄罷出候」(『十四日町年誌』(宝永二年(二七〇五))

豊後岡藩の藩主中川久通(因幡守)が参勤のため尾道に一泊した様子を『十四日町年誌』から抜き書きしました。

中川因幡守様が参勤のため中国路をお通りになり、御在所豊後国岡を二月十九日に御発駕され、三月三日には尾道に御泊りになるとの芹河孫作殿よりの御廻状が御飛脚により届けられた。早速この写しを御勤番所へ庄屋又右衛門が届けた。

御泊の前日、三月二日の昼過、「御宿割」田能村吉右衛門様・下役磯部九右衛門殿など九人の方々が宿舎秋田屋彦二郎の所にお着き、庄屋又

右衛門・書記が出向くとすぐ「御下宿御割帳」をお渡しになり、帳面が出来次第「宿札」を打ちたいとのこと。午後二時ごろ来られて「宿札」を打たれ、四時頃終わった。

御泊の当日、三日朝、御宿割衆は出発され、次の宿泊地、神辺に行かれた。因幡守様を御迎する年寄善右衛門・与頭六郎右衛門・五郎二郎・御宿主の彦四郎は上下を着けて御蔵前まで出向いた。今回は事情があり、御代官山香源助様は御迎え・御見送しもされないと広島から連絡があったという。

因幡守様は午後二時頃、御機嫌よく宿舎、笠岡屋へ御入りになり、その後山香源助様は御機嫌窺いに表座鋪まで御出になり、御取次の二神清右衛門殿と申す御方に会われ、すぐ栗原屋向座敷に引き下がられた。因幡守様の使者芹河孫作殿が栗原屋向座敷に出向かれ、その後源助様は返礼として孫作殿の御宿、大入屋甚四郎の所へ御出になった。この夜、月行司は全員二時間交替で夜廻りをした。昼間は火廻の者が壱町三組

宛出して二度宛巡回した。

翌四日、因幡守様は朝八時御立ち、年寄善右衛門・与頭六郎右衛門・五郎次郎・御宿主彦四郎は上下を着けて宮崎町の町はずれで見送った。

参勤の大名の宿泊は、宿場町尾道の町年寄にとつては仕馴れたことで、大騒ぎをするほどではないとしても、気疲れすることでしょう。『年誌』だけあって、具体的に記述しており、面白く読みました。特に「御宿割」の活躍、前日に乗り込み、現地の庄屋に「御下宿御割帳」を渡し、大急ぎで宿割りをしていきます。仕上げは「宿札」を打つこと。翌朝、次の宿泊地へと向かいます。「御宿割」の責任者、田能村吉右衛門は、田能村竹田から八代さかのぼった祖先だそうです。殿様はいつも「御機嫌克」いようですが、これも大変なことだろうと思います。

岡藩(七万石)の、この時の規模は次の通り。

「 覚

一 御宿数四拾九軒

一 御人数三百五十六人 旅籠錢御壱人二付壱匁八分

宛被遣受取申候

内 四十八人 御侍衆

七人 御医師衆

一 御牽馬三疋

一通し馬五十疋

一通し人足百五十人

一 尾道より今津迄送り馬五十七疋 賃銀被下受取申候

一 尾道より今津迄送り人足三百人 賃銀被下受取申候

一 金子貳両 笠岡屋彦四郎へ被下拝受仕候

一同貳百疋 馬指・夫指へ被下拝受仕候

一同百疋宛 年寄三人へ被下候へとも御断申拝受不仕候

一 銀拾匁 庄や又右衛門へ被下候へとも御断申上拝受不仕候」(『十四日町年誌』(宝永二年(一七〇五))

(2008/10/27)

送り以得御意候

書翰文で、よく見かける文句に「得御意」というのがあります。「未得御意候得共一筆令啓候」(まだお目にかかったことはありませんがお手紙を差し上げます)などと使います。次の文書の「送り以得御意候」の文句は初めて見ます。

「 久我より申来ル状写

送り以得御意候、朝倉藤五郎様、昨十八日之晚福川

御泊り候由申候、今晚御泊ハ未極候

一 馬拾匁疋内外

一人夫五六人

一 御人数九十人程

一 御下宿五軒 内壺軒馬宿

右之通、只今高森より申来候ニ付、御知せ申候、替

趣御座候ハ、追々可得御意候、以上

四月十九日

如此久我より申越候、相替も御座候ハ、追々可申進

候、以上

同日 関戸目代次郎右衛門

同庄屋仁右衛門

小方村庄屋孫右衛門様

右之通順々三原より申来候二付、今津へも知らせ遣申候」(宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

久我(玖珂)岩国市からの書状の写し

「送り以得御意候」、朝倉藤五郎様は、昨一八日の晩は福川(周南市)に御泊りになりましたが、今晚の御泊は未定とのことです。

馬は一一疋位、人夫は五、六人が必要。御人数は九〇人程で、御下宿は五軒(内一軒馬宿)。

このように、ただ今高森(岩国市)から連絡がありました。変更があるとまたお知らせします。

四月十九日

このように久我(玖珂)から連絡がありました。変更があればまたお知らせします。

同日 関戸目代次郎右衛門・同庄屋仁右衛門

小方村(大竹市)庄屋孫右衛門様

この通り順々に三原より届いたので、次の宿今津(福山市)へも知らせました。

この文書には宿駅の名前が多く見られます。情報

がリレーされているからです。これで「送り以得御意候」の意味が解りました。「連絡があつたので御手紙を差し上げます」。

(2008/10/28)

六倍五割増

「態触遣ス

近年物価沸騰、宿村及困窮候二付、是迄割増無之脇往還ニおゐても同様人馬賃錢当辰四月より来巳四月迄一ヶ年之間、当割増ヲ除キ前々定メ有之候人馬元賃錢之上え六倍五割増賃被下候間、京都宿駅御役所より駅々へ被相達候趣ニ付、駅ニおゐても書面之賃錢受取、宿村困窮立直し候様可心得旨、尤別紙御書附写取、人馬所へ張置候様取計可申もの也

辰四月 世羅郡御役所」(慶応四年(一八六八)「波多野家文書」)

近年物価が沸騰し宿村が困窮しているので、これまで割増賃の認められていなかった脇往還で

も同様に、人馬の賃金を当辰年四月より来年四月までの一ケ年間、現在の割増を除いた従来の規定の人馬元賃金の上に「六倍五割増」の賃金を与えると、京都宿駅御役所より駅々へ伝達されたので、各駅でも書面の賃金を受け取り、宿村の困窮を立て直しなさい。別紙の御書附を写し取り人馬所へ張り出しなさい。

宿駅の人馬賃金を「六倍五割増」とするという新政府の触書です。「六倍五割」とは、今なら「六・五倍」とか「六五割」とでもいうのでしょうか。「増」が付きますので、人馬賃金を七・五倍に引き上げるようになります。

熱田桑名間の「船賃之儀、当九月十五日ヨリ元賃金之上へ六倍五割増、都合七倍五割増ニ相定候事」
(太政官五五九号)

(2008/10/29)

文銀

「諸職人日雇人足等賃銀、今度文銀立に相改、御内証御奉行所へ申上、触状遣す

覚

一大工・木挽・桶屋・畳指・壁塗、右工料賃銀文銀
老奴六分つゝ

一石屋工料老奴八分

一日雇賃老奴式分

右之通作料賃銀等相極候条、諸職人并日雇其旨可得相心、自然相対を以高下仕もの有之候は急度可申付候、為其相触候、以上

巳正月

会所

町中」(元文二年(一

七三七)「橋本年誌」『尾道市史』下巻)

諸職人・日雇人足等の賃金をこの度「文銀立」に改め、御奉行所へ内証で申し上げ、次の触状を出した。

大工・木挽・桶屋・畳指・壁塗の工料賃銀は「文銀」老奴六分、石屋の工料は老奴八分。日雇賃は老奴式分とする。この規定と違うときは

処分する。

「文銀」という言葉は『府中市史』にも出てきます。その説明から、元文元年（一七三六）に発行された貨幣のようです。

「文銀ハ元文元年五月十七日ニ京都吹替の御ふれあり」（『府中市史』）

【元文金銀】（『岩波日本史辞典』）

一七三六（元文二）から享保金銀を改鑄して発行された金銀貨の総称。小判・一分金、丁銀・小玉銀が鑄造され、楷書体の〈文〉の極印が打たれたことから文字金銀、あるいはのちの文政金銀と区別して真文字金銀ともいう。品位は享保金銀より低く、金貨の重量も減少したが、江戸幕府は新旧貨の引替に一定の増歩をつけて交換した。改鑄の目的は、改鑄益金の獲得よりも米価の相対的な引上げに重点があつたといわれる。

「銀貨の丁銀・豆板銀は秤量貨幣であつたが、公設

の極銀所で包封したものは、表記貨幣として扱われた。元文元年には、はじめて五匁銀・二朱判・一朱銀・一分銀など表記貨幣としての文字銀貨が発行された。」（『広島県史』近世Ⅰ）

文字銀を略して文銀といったものとみえます。文字銀は旧銀貨（享保銀）に対して五割の増歩をつけて交換していますので、新銀で貨銀を表示する必要があります。

（2008/10/31）

入置米

「免割とは日々々村方諸入用之米銀ヲ秋ニ至りたゞミ上ケて免ニ直し、百姓持高に割賦するをいふ、此諸入用物ハ一步米・厘米・小物成、庄屋・組頭・筆取給、紙墨筆油代・米払之欠米雑用・寺社初穂銀、諸賄用・諸普請・村役人飛脚等之出飯米、未進百姓之かつき米、……何事ニよらず日月々之諸入用を庄屋取替出し帳面ニ記置、……何方モ多クハ八九月十月頃ニ成」月月之諸入用ヲ合セ、

其後年内節季迄唯今よりいか程入用可有之哉と凡積して、入置米又欠米と名付此分も右之都合へ括りゞして、たとへハ高千石之村にて百石之入役ニ候へハ、壹ツ成之免ニゞ土免之外ニ百姓へ割賦ゞ年貢同然ニ取立、右壹ツ成之分は庄屋方へ引取申也、凡米ハ三割之利、銀ハ二割之利を加へ取立る也」(『芸州政基』『広島県史』)

免割とは、日々月々の村方諸入用の米銀を集計し、秋になると免として百姓の持高に応じて割賦することである。この諸入用とは、一步米・厘米・小物成、庄屋・組頭・筆取給、紙墨筆油代・米払之欠米雑用・寺社初穂銀、諸賄用・諸普請・村役人飛脚等之出飯米、未進百姓のかつき米などで、庄屋が立て替えて支出し帳面に記入する。八月十月になると月々の諸入用を合計し、今から年内節季までいくら入用となるかを見積り、これを「入置米」又は「欠米」と名付け、この分も右の合計に加え、例えば高千石の村で百石の諸入用なら「壹ツ成」の免として、

土免の外に百姓へ割賦して年貢と同様に取り立て、「壹ツ成」の分は庄屋が受取る。その際、米は三割、銀は二割の利息を取る。

「該村十月以後十二月末日迄ノ費用及郡割・組合割ノ如キハ免割ノ際ニハ実数ヲ知ル不能ヲ以テ予算ニテ組込ムナリ、之ヲ入置米銀ト云フ、其過不及ハ翌年二月又ハ三月ニ決算ス、之ヲ入置欠算用ト称ス、其欠過ハ翌年ノ免割へ差シ継クナリ」(『淡交夜話』『三原市史』)

村の十々十二月末日迄の費用及び郡割・組合割などは、免割をするときには実数は分らないので予算として組み込む。これを入置米銀といい、その過不足は翌年二、三月に決算をする。これを「入置欠算用」といい、その過不足は翌年の免割で処理する。

「芸州政基」「淡交夜話」から抜書きした「入置米」の説明です。これらの資料は解りやすい解説で大助りです。「入置」とは、「一応、入れて置く」

の意でしょう。「入置米」を説明した次の記述には疑問が残ります。

「村において、年貢米などの運搬諸経費や、郡割銀にあてするために、村入用として百姓から徴収する米をいい、また、奉幣使の通行・参勤大名通行入用等にもあてた。」
(2008/11/03)

熟と その3

「熟与」という言葉について、このブログで二回(2006/08/12・2007/01/17)にわたって書いてきましたが、その意味は勿論、読みでさえ判然としませんでした。今回は三回目の挑戦ですが、そのシツポくらは捕まえたのではないかと思います。

「熟与」を含む文節には、「熟与無之」「熟与難仕」「熟与不仕」「熟与不存」「熟与無御座」「熟与も不致」「熟与申談」「熟与御達可被置」などがあります。が、その殆どが「熟与無之」でした。

「右紙面之趣は、不及申ニ常々銘々ニも具ニ心得被在候事ニ候へ共、示談ジクト無之様ニも風聞ニ付、猶又内意申候間、弥物毎丁寧遂相談其筋立、相違之儀不可有候様ニ可令承知候」(元文二年(一七三三)『広島県史』)

以上の事については、銘々(郡廻り・代官)がいつも心得ていることではあるが、下方への示談が「ジクト無之様」にも聞いているので、再度指示した。今後は丁寧(丁寧)に相談をして、区々な示談がないように承知させなさい。

この資料から、「熟与無之」は「ジクト無之」と読んだと考えられます。

「其浦江波潟境之儀此度相尋候処、江波より西へ五六町程迄は草津潟と相心得、尤江波嶋相しらべニ被成、草津浜際迄ハ江波潟と相心得罷在候段申出双方申分熟と無之候、依之此度潟境相極、地方郡分りニ准し己斐川中筋通りより西全ク草津抱ニ申付候条、此旨可相心得事」(宝暦五年(一七五五)『広

島県史」)

(もめている)草津浦と江波浦の潟境について、草津浦に尋ねると「江波より西へ五、六町ほどまでは草津の潟」と考えており、一方江波島では「草津浜までは江波の潟」と心得ていて、双方の申し分は「熟と無之」様子なので、この度潟境を次のように決める。沼田郡と佐伯郡の境に準じて己斐川中筋通りから西を全て草津抱えとする。

【熟】じゅく。(『広辞苑』)

①よく煮ること。よく煮えること。②よくみること。うれること。③よくなれること。また、十分にすること。

「示談ジクト無之」は「示談が不充分(熟してない)」、「双方申分熟と無之」は「双方の申分が不一致(熟してない)」の意味ですから、両方とも「熟してない」と理解してよさそうです。「熟と」＝「熟して」という当り前の結論になりました。

「熟」の読みは「じゅく」で、拗音の「ゆ」を使つて表します。しかし、古文書では「ゆ」は使いません。多分、大文字で「じゅく」と表記するのだらうと思います。また、一般に「新宿」は「しんじゅく」と発音しないで「しんじく」と言います。「じゅ」が「じ」に置換えられるのなら、「じゅくと」は「じくと」と発音し、表記しても不思議ではないのでしよう。

「手術」を「しゅじつ」と言ったり、「しじつ」とも言います。発音が楽だからそうなるのでしよう。

(2008/11/03)

事すぐれたる科人

「太郎兵衛・三右衛門兄弟・同母親、今度悪心をたくみ申に付只今所を立去り申候、事すぐれたる科人にて御座候付御公儀様へ被仰上候へば早速御法度に逢可申所を、各々より御坊様・御年寄衆中公問侘被成候而命を御のがし、私共重々忝奉存候、

……為後日如件

延宝三年卯十二月九日

太郎兵衛弟松蔵印

同人兄次郎助印

同人おじ太郎七印

ひらき五郎兵衛殿(以下略) (延宝三年(一六七五)

永井弥六『広島藩の庄屋』)

太郎兵衛・三右衛門の兄弟とその母親が、今度悪心を巧んだため只今村から立ち去りました。

「事すぐれたる科人」ですから御公儀様へお知らせになれば早速処罰されるところですが、皆様を始め御坊様・御年寄衆が「公問佗」により命を助けていただき、私共(兄弟とおじ)は大変感謝しています。

年貢未進と借財に苦しんだ百姓太郎兵衛らが郷蔵から二度にわたり米式石余を盗み、結局は村追放になりました。この文書は、残された兄弟・親類が、謝罪と未進・借財の処理を任せるという一札の一部です。

【勝れる・優れる】(『広辞苑』)

「文」すぐる(下二) ①他よりまさる。ぬきんでる。②(多く否定と共に用いる) よい状態である。

「事すぐれたる科人」の「優る」は「過ぐる」であり、「物事の程度を越えて行なう。やり過ぎ」との『角川古語辞典』の説明に納得しました。

【公問佗】くもんわび。(金岡照『広島藩における近世用語の概説』)

公問とは「公文」の意で庄屋を指す。つまり庄屋に侘びる意。犯罪者を代官に訴えないで、僧侶や年寄などが罪を評定して、庄屋に進言し、庄屋がそれによって、罪の処分を決めることをいう。
(2008/11/06)

壁隣

「一体、倅宅ハ、先住の人三分一ヲしきり、東の方ヲ人にかし置候故、そのまゝに買とり、住居致し

罷在候、右之隣人ハ研師にて博徒故、一向つき合不申候へ共、壁隣の事故日々氣に障り候事多く、これも忤か病ひの一つになり候」（文政六年（一八一三）『馬琴書翰集』）

だいたい、忤（滝沢宗伯）の家は、先住の人が三分の一を仕切り、東の方を人に貸しているのをそのまゝで買い取り、住居としました。その隣人は研師で博徒なので、一向に付き合ひはしませんが、「壁隣」のことなので日々氣に障ることも多く、これも忤の病氣の原因の一つになりました。

【壁隣】（『広辞苑』）

壁一重を隔てた隣りの部屋や家。

宗伯の場合は、家を仕切って一部を貸家としていたので、「壁隣」ができる訳ですが、長屋の場合は「壁隣」が普通。落語の「粗忽の釘」が思い出されます。現在のマンション住居は、「壁隣」どころか「天井隣」「床隣」まであります。「天井隣」なる言

葉はまだ辞書では見られませんが、いずれ載せられるかもしれません。（上下左右の「隣」が暖房をしてくれるので、私の家ではほとんど暖房なしで冬を過ごします。「壁隣」のお陰です。）
（2008/11/07）

内割

「近年郡中賄賂私欲超過二候よし相聞候二付、郡御奉行存寄ヲ以此度先壺郡一二ヶ村ツ、遂吟味候処、第一御代官所手附番組・御米蔵下役、其外其郡村々へ懸り合候方角之下役并出郡有之輩之家来共二至迄、右役人共より内割取立ヲ以多分之米銀賄賂取遣候趣相顕レ、其員数一郡二割当り候へハ夥敷義と相見候、素り内割之義は郡中制禁之筋、其上近来段々入役取縮之義御代官所より被申付候処、右之次第甚不届之至二候」（宝暦六年（一七五六）『吹寄青枯集』）

近年、郡中で賄賂が横行しているとの噂があり、この度郡御奉行の指示で一郡に一二ヶ村ずつ調

査したところ、代官所の手附番組を初めとして、御米蔵下役や郡村に係のある方面の下役とか、出郡する者の家来どもが、郡村の役人より「内割取立」により集めた多くの米銀を賄賂として贈られていることが露顕し、その員数も郡全体では夥しいものと思われる。勿論、「内割」は郡中では禁止されており、その上近來経費節減について代官所より指示しているにもかかわらず、このような次第、甚だ不屈である。

代官所番組など農民に接触している下僚が賄賂を受け取っている。それは禁止されている「内割取立」による米銀から支出している……その様な内容が書いてあります。「内割」とはどの様な税の徴収でしょうか。

【内割】（『古文書用語大辞典』）

小割とも。年貢割付状をもとに、年貢負担額を各人の持高に応じて村民に割り当てること。

この解説では、この資料の説明にはシックリしません。

「内割とは、「或ハ事によりて面取立にして免割に出さず、此筋ハ大抵表向へ出し難きを以て内割とも云也」（宝暦六年（一七五六）、賀美永蔵『農制隨筆』）内割とは、表向きには免割には計上しにくい事情があり、「面取立」で徴収すること。

賄賂に当てる費用を予算に組み込む訳にはいかず、内密に村民に割り当てること（内割）を藩が禁止するのは当然のことですが、どうしても必要な社寺の修理費は、禁止されていても内割で集めるほかなかったのでしょうか。

「社寺の修理費を村割に入れることには制約があり、殊に寺院の修理費を村割に入れるのは禁じられていたと云える。免割夫割が厳しく制約され、内割を課することを禁じられ且つ「百姓軒別貫き杯にても役人より取計候はば可為曲事候」と令されては庄屋の諸入役取立ては窮屈なものであった。諸入役の取縮めは庄屋から長百姓え諸入役取立ての権限の一部を委譲するものであった。内割や貫ぬきの

方法によって長百姓は内密に組内から徴収し、これら諸入役の不足を支弁したのである。」（永井弥六『広島藩の庄屋』）

（2008/11/08）

貫

「社寺の修理費を……内割や貫の方法によって長百姓は内密に組内から徴収し、これら諸入役の不足を支弁したのである。」（永井弥六『広島藩の庄屋』）前回の記事に、検討した「内割」と並んで、「貫」という言葉がありました。

【貫】ぬき。（『広辞苑』）

①柱と柱とを横に貫いて連ねる材。②薄くて幅の狭い規格品の板。

【貫】ぬき。（『広島藩における近世用語の概説』）

村入用は、年間必要とした額を、年末に高に割賦して決算するやり方が多くとられていたが、入用の一部を中途で取り立てることがあり、こ

れを貫という。

「宝暦年以来追々御厚恩奉請候村方ニ付、御国恩為冥加之殿様祭祀相催永久執行仕度地浜役人思ヒ立、下方一同感心仕、御祭礼謝物地浜小貫キ定銀社家浦・天野両家へ相詫シ示談決議之上、……」（文化十三年（一八一六）『三原市史』）

宝暦以来追々と藩より御厚恩を頂いた村方なので、御国恩を感謝する「殿様祭祀」を続けて執行したいと地・浜役人が発案すると思、下方一同も感心して、御祭礼謝物を地・浜よりの「小貫キ定銀」を社家の浦・天野両家へ託すことに決まり……。

「貫」という言葉が、「村入用の一部を年度の途中で取り立てること」を意味するのなら、^{つなぎ}續（米銭などを各人各戸から徴収する）とほぼ同義です。これは「つなぎ」と読むので（ブログ 2006/07/29 参照）、「貫」も「つなぎ」と読むのではないか……と思ひ、資料をあさりました。

「葬儀が盛大になるにつれて近親者による多量の香奠も生まれ、また葬費を分担する意味をもつに至ったものと説かれている。なお一般弔問者のうち村内居住者の村香奠をツナギ、ツラヌキ、ヌキとよぶ地方が多いが、これは銭^{ぜに}緡に穴銭を通す意であり各戸同額の抛出を示している。また贈与された半額程度の品を返礼する香奠返しの習俗は、都市部では一般的であるが、いまだ行われていない地方も広く、農村部にみられる喪家主催の忌明けの共食の宴から派生した習俗といわれている。（岩本通弥）」（『世界大百科』）

村香奠を「ツナギ、ツラヌキ、ヌキ」といい、銭穴に糸を通すのでその呼び名があるとの説明、感心しました。すると、「貫」と書こうと「續」にしよう^うと結局は同じこと。「ヌキ」でも「ツナギ」でも構わないとの結論を得ました。意味は「戸別に徴収すること」。

(2008/11/09)

竈数

「 覚

一家壺軒 梁行三間桁行四間、但瓦葺

御調郡後地村 浮過八助

大元忠八

同喜七

同伊八

右者尾道町鰯屋三郎右衛門持分借家、当時万日申候処に御座候処、今昼八ツ時前出火仕候而、早速村役人共人夫召連翔付申内、御帖元世良平次郎様御出被成、並町役人・近村役人共、其外大勢翔付、防留め申候に付、右竈数四軒之内式軒分程並屋祢裏迄余程焼損、残り式軒分も屋祢裏少し焼損し申候得共、瓦葺に而御座候故外えも燃出不申候、其儘相鎮り申候、火元之儀相しらへ申候処、炭桶二階え上げ置候処、消残りの火御座候而燃出候哉、折節八助儀も畠仕事罷越、妻は水汲に罷越申候口

□より燃出候旨申出候に付、段々相しらへ申候処、相違無御座候、全手過と相見へ申候、火用心之儀は兼而稠敷被為仰付置候処、匱相仕村内騒動仕候段恐入奉存候、火元八助儀も恐入相鎮り居申候、右御注進奉申上候、以上

寅正月廿九日 庄屋理右衛門

組頭七郎三

同嘉右衛門

同半三郎

御調郡御役所「(天明二年(一七八二)「橋本年誌」)

家老軒 梁行三間桁行四間、但し瓦葺。御調郡後地村浮過八助・大元忠八・同喜七・同伊八

この家は尾道町鯛屋三郎右衛門持分の借家で、万日という所にありますが、今昼八ツ時(午後二時)前に出火しました。早速村役人が人夫を召し連れて駆け付けますと、御帖元世良平次郎様もお出でになり、町役人・近村役人も大勢駆け付けて延焼を防ぎました。右の「竈数」四軒の内、二軒分は屋根裏まで焼き、残り二軒分も

屋根裏を少し焼きましたが、瓦葺であったので外へも燃え出さず鎮火しました。火元を調べると、炭桶を二階へ上げていたところ、消残りの火があり燃え出したものと思われます。ちょうど八助も畠仕事に出ており、妻は水汲に出かけていたと申しています。調べてみるとその通りで「手過」と考えられます。火の用心はいつも厳しく申し付けていますが、粗相して村内を騒がせ恐れ入ります。火元八助儀も反省しております。以上報告します。

【手過ち】てあやまち。(『広辞苑』)

過失。やりそこない。特に、過失による出火。

【竈】かまど。(『広辞苑』)

(「ど」は場所を意味する語) ①土・石・煉瓦・鉄またはコンクリートなどで築き、その上に鍋・釜などをかけ、その下で火を焚き煮炊きするようにした設備。かま。くど。へっつい。②転じて、身代しんだいの意。独立の生活を立てる一家。所帯。③鞆の、矢を入れる口。

「竈数」は「世帯数」。竈の数で世帯数がわかります。

御調郡後地村は、「当村もと尾道村とよぶ、前を町とし、後を村とするに及で、名を改めしと見ゆ、……南は、尾道町」（『芸藩通志』）と説明していますので、尾道市街の北側に当たる所でしよう。瓦葺きの借屋があるのもうなづけます。三間×四間の建物に四世帯が住んでいますので、一世帯当たりは、間口が一間、奥行き三間の計算になります。一人は「浮過」、三人は「大元」。さて、「大元」とは何でしょうか。

(2008/11/10)

二半

「一筆啓上仕候、私事老母優養仕度より誤て半香義会に感、三月分迄認、跡は二半に相成置候処、追々此節風聞無実之事多、必災至り可申候、然る上は主人安危にもかゝはり候間、今晚自殺仕候、……数年之後一変も仕候はゞ可悲人も可有之や、極

秘永訣如此候、頓首拜具

十月十日

ゝ

椿山老兄」（天保十二年（一八四一）、『日本思想大系』五五）

一筆申し上げます。私は老母に樂に暮らしてもらいたいと思い、弟子の福田半香の計画した書画会について乗って、三月分まで絵を描き上げ、跡は「二半」にしましたが、追々無実の風聞が多くなっているようなので、これは必ずや災となると思います。こうなると主君の安危にもかかわることなので、今晚自殺します。……数年後に変化が起これば、悲しむ人も出るかもしれません。極秘、永別いたします。頓首拜具。これは渡辺崋山の遺書（椿椿山宛）です。

【二半・二判】にはん。（『日本国語大辞典』）

①事柄が、二とも三とも決定しないこと。どちらつかずであること。また、そのさま。

日付の後の署名は「ゝ」です。崋山の別号は「主

「一」、これを略して第一画の「一」だけでは暗号のようなものです。

(2008/11/11)

合口

「私十二歳之時、日本橋辺通行仕候節、わすれも不仕、備前侯之御先供に当り打擲を受候時、子供ながらも大息仕候は、右備前侯御年大体同年位にて、大衆を引御横行被成候事、同じ人間にて天分とは申ながら、発憤に不堪、今より何也と志候はゞ、如何なる義にても出来可申と存、其頃高橋文平と申もの御祐筆相勤候、私小供には候得共、同人合口にて候間、相談に及、……とても学問などゝ申儒者に相成候とて、金のとれ候義は無之、いづれにも貧を救ふ道第一也と申により、爽鳩先生を頼、芝之白芝山と申画工へ入門仕候。此時十六歳之時か。」(天保九年(一八三八)「退役願書之稿」『日本思想大系』五五)

私(渡辺崋山)一二歳の時、忘れもしませんが、

日本橋の辺りを通りかかり備前侯の御先供につき当り打擲を受けました。子供ながらも溜息をつき、備前侯の御年は大体同年位なのに大衆を引きつれ恣に振舞っている、同じ人間なのに天分とはいふものの……。今から志を立てれば出来ないことはなからうと発憤して、その頃高橋文平と申す者が御祐筆を勤めており、私は子供でしたが同人に「合口」なので、相談しました。結局、学問をして儒者になったとしても金の取れる訳でもなく、なによりも家の貧を救うことが第一というので、鷹見爽鳩先生の紹介で芝の白川芝山という画家に入門しました。この時、一六歳でした。

【合口・相口】あいくち。(『広辞苑』)

①物と物とがぴつたり合うこと。容器(身)と蓋ふたとのあわせめ。②(「匕首」とも書く)鐔がなく、柄口と鞘口とがよく合うように造った短刀。③互いに話の合う間柄であること。また、そういう人。

同じ貝の貝殻が寸分の狂いもなく、ピタリと口が合う、これが「合口」という意味のようです。

(2008/11/12)

字消し

「老生も七月初旬より御同症、一週間計平臥、……兼て長与専斎氏の説ニ、毎日身体を摩擦するハ都て好き事なり、其法は乾きたるフラネルを以てすへしとの事ニて、是まで試みたる事も有之候得共、何分面倒ニて長続き不致処、今度病後一寸思出し、フラネル之代りニ羅紗製之字消しを用ひたらバ如何とぞんし、之を用るニ甚タ妙なり、……依て此度一具差上候間御試被下度、御病後ニハ必ス妙ならんと存候」(明治二十二年(一八八九)猪飼麻次郎宛、『福沢諭吉百通の手紙』)

老生(諭吉)も七月初旬より御同症(リュウマチ)のため一週間ほど臥せっておりまして。……長与専斎氏の説によると、毎日身体を乾いたネル

で摩擦することは好いとのこと。私も試しましたがなにしろ面倒で長続きしません。今度病後にそれを思い出し、ネルの代りにラシヤ製の「字消し」を使えばどうだろうかと思いつき、これを使ってみると大変工合がよろしい。……一つ差上げますのでお試しく下さい。御病後には絶对良いですよ。

乾布摩擦健康法の勧めです。馬が毎朝気持よさそうにブラッシングしてもらっているのを見た福沢諭吉は、馬用のブラシのような物はないかと考え、「字消し」を思いついたそうです。

「字消し」といえば、消しゴムを思いますが、ゴムではなく布製(ラシヤ)で、乾布摩擦にも使えるような物とは？ 明治中期の小学校低学年の筆記用具は石盤と石筆で、布で字を消したそうです。現在の《黒板拭》にあたります。この当時はまだノートが使われてなかった……との説明を聞き納得しました。

(2008/11/14)

焼残と焼家の税率

「御免状之写

覚

一高三百貳拾七石四斗九升九合 尾道町

高二付五ツ成

物成百六拾三石七斗五升

去土免壹歩八厘下

口米三石貳斗七升五合

二口合百六拾七石貳升五合

内

高百九十五石壹斗七升一合 焼残

高二付五ツ九分三厘五毛六弗

物成百六拾五石八斗四升七合

去土免二壹歩八厘下

口米貳石三斗壹升七合

二口合百八拾八石壹斗六升四合

高百三拾貳石三斗貳升八合 焼家

高二付三ツ六分貳厘

物成四拾七石九斗三合

去土免二壹歩八厘下

口米九斗五升八合

二口合四拾八石八斗六升壹合

右当土免如斯相究物成

宝永貳年酉三月

松原次郎右衛門
竜神甚太夫」

(宝永二年(一七〇五)「十四日町年誌」)

これは尾道町の免状(年貢割付状)です。三〇〇石余の高に対して「五ツ成」(税率五割)の土免が課せられていますので、この年の年貢と口米(付加税、年貢の二%)は、

$$327.499\text{石} \times 0.5 = 163.7495\text{石} = 163.75\text{石}$$

$$163.75\text{石} \times 0.02 = 3.275\text{石}$$

合計一六七・〇二五石です。ここまでは普通の免状ですが、以下は極めて珍しい。

これを、「焼残」と「焼家」に分けて課税しています。全体としての税率は「五ツ成」ですが、「焼け残った」農家に対しては「〇・五九三五六」、「焼

家」には「〇・三六二」と軽減した税率を代官(松原・竜神)が決めていきます。前年も同様に異なる税率を課しているのです、数年前に大火があったのではないかと思います。「焼家」の高は全体の四割、やはり大火でしょう。元禄十七年(一七〇四)に栗原村で大火があったといいますが、これと関係があるのでしょうか。

(2008/11/21)

水主役

一三拾五匁八分	因嶋
一貳匁分五厘	岩子嶋
一拾三匁九分五厘	西向嶋
一拾五匁三分	東向嶋
一匁匁分	立花
一六十六匁九分	尾道
右は御召船芋綱入用之小縄、此方にてなハセ候賃銀ニ候条、此割符之通銀子可差越者也	
西三月十五日	植木小右衛門

七〇五「十四日町年誌」
松野弥一郎(宝永二年(一

これは御召船で使用する芋綱の材料として小縄を割当てるが、こちらで小縄をなわせたから、その賃銀分を割当てるので納入しなさい。

尾道など、御調郡内の水主浦に対して、御召船で使う芋綱を作るため小縄の納入を求める「御船手」からの文書です。現物で納めるのが本来の姿ですが、領内各地の水主浦から現物を輸送するのは面倒なので、広島で小縄をなわせ、その賃銀相当分を銀納するようです。

「水主役は沿海郡中に何百軒と極り居りて、従前は此役家改めとて船手方より一ヶ年に一回宛巡廻調査せしなり、故に水主役に服役し難きものは為めに他村と入替りを為す者ありし、此水主役に服役する家には壱歩米・厘米をは賦課せず、尤も曩には苦・芋縄手業にて調製し船手方へ呈出せしか、後には現品を止め代銀にて船手方へ徴収せらるゝことゝ為れり」(『芸藩志拾遺』)

この資料は宝永二年（一七〇五）のものですが、すでに現物納から代銀に変わっています。

「水主役」は、その名の通り「水主としての労役の提供」が中心ですが、これとても「此元にて雇遣候加子」に対して支払った「賃飯米」を請求します。（宝永二年（一七〇五）「十四日町年誌」）

（2008/11/22）

竿除き

「川除堤之儀、大土手ハ凡三尺通り竿除きに仕儀も可有之候得共、其所々之格も有之儀ニ候間、能々吟味之上其趣によるへき事」（宝暦六年（一七五六）、賀美真知甫著「農制随筆」）

川除堤の場合は、大土手なら約三尺は「竿除き」にするが、その所によりやり方もあるので、よく吟味して（検地を）しなさい。

これは「農制随筆」から「検地之事」の項の一部

です。堤防そのものは検地の対象にはならないので、この場合は堤防際の田畠・屋敷の検地の「竿除き」のことでしょう。

【竿除き】（『広辞苑』）

検地から除外した土地。高札場・墓地・溜池の類。

「川除境之儀大幸ハ凡三尺通り竿余ニ仕儀茂可有之候とも、其所々之極も可有之候間、能々吟味之上其趣ニよるへき事」（『芸州政基』『広島県史』）

これは「芸州政基」で活字になったものです。さきの「農制随筆」は丁寧に彫られた木版本です。短い文ですが、（上段は「農制随筆」下段は「芸州政基」）

川除堤 川除境、

大土手 大幸、

竿除 竿余、

所々之格 所々之極

などの違いが見られます。どうした訳でしょうか。

（2008/11/24）

令難洪

「土免之義、前年之毛上を能御見聞にて善惡之村々書附置、及暮年貢等令難洪歟不難洪歟を御見計ひ、常々草臥之多少ヲ考、土免之上ケ下ケ差引可有之候」(『吹寄青枯集』)

土免の税率を決めるに際しては、前年の収穫の状況をよく見聞してその善惡を書留めておき、暮になって年貢等の納入に「令難洪」たか、それとも「不難洪」かを見計らい、例年の困窮の度合も考え、土免を上げたり下げたり差図をしない。

「令難洪」という漢文調の言葉が使われています。

【令】(『漢字源』)

《音読み》レイ／リョウ 《訓読み》よい(よし)／しむ／せしむ

⑦「助動」しむ。せしむ。使役の意をあらわす

ことば。させる。▽「令＋A(人)＋B(動詞)」の形で用い、「AをしてBせしむ」と訓読する。命令してさせるの意から。「吾令人望其氣Ⅱ吾人ヲシテ其ノ氣ヲ望マ令ム」(↓史記)

漢和辞典の説明どおりに「令難洪」を解釈すると、「難洪せ令む」と読み、「難洪させる」(使役)の意味になりますが、この意味で資料を解釈するのは不適當です。「令難洪歟」と「不難洪歟」(難洪せざるか)が対になっていますので、暮になって年貢の納入に「難洪した」か、それとも「難洪しなかった」か……のはずです。

【しむ】(『広辞苑』)

「助動」(活用は下二段型) 動詞およびある種の助動詞の未然形に付く。奈良時代に広く用いられ、平安時代以降は主に漢文訓読文や漢文調の文章に用いられた。①使役を表す。…させる。

②多く「給ふ」と共に用いられ、尊敬の意を強める。…なさる。③謙讓の意を含む動詞に付いて、その意を強める。平安後期の用法。大鏡道

長「御寺に申し文を奉らしめんとなん」

【令】しむ。（『古文書用語大辞典』）

「令詮議」のように下から返って読む助動詞。

「せしむ」の「せ」は動詞「す」の連用形。①使役の意で、くさせる。「令吟味」取り調べさせる。「令検分」検分させる。「可令皆済者也」完納させねばならない。②くし申し上げる、といった謙譲の表現に用いる。「令落手候」受け取りました。「令披見候」拝見しました。「令承知候」承知しました。

そもそも「難渋」という言葉は、「使役」や「謙譲」とは相性の良くない言葉です。無理をしないで、「難渋せ令め」と読んでも、単に「難渋する」と解釈すればよいのではないかと思います。

鎌倉時代の「御成敗式目」にも「猶背此旨令難渋者、可被改所職（易）也」（猶ほ此の旨に背き難渋せしめば、所職を改易せらるべきなり）とあり、「難渋するようなら……」と使つてあります。（2008/11/25）

浮過わひ

「不功者の代官ハ家居など繁昌の躰を見るときは土免を上るやうに心得るも有と云、それハ家蔵に免を置と云もの也、必免組と混雜することなかれ、此故に農業の外に浮過わひの働ある所ハ其家其人に就て別に相応宛小物成取立へし」（宝暦六年（一七五六）「農制隨筆」）

不慣れた代官は、農家の家居などの繁昌の有様を見ると、土免（年貢率）を上げたがるというが、それでは家蔵に年貢をかけるようなもので、免組と混同してはいけない。農業の以外に「浮過わひ」の働のある所は、その家その人を対象にして土免とは別に相当の小物成を取立てるべきである。

【生業】すぎわい。（『広辞苑』）

世を渡るための職業。なりわい。生計。

【浮く】（『広辞苑』）

⑥根拠がない。確かでない。あてにならない。

そうすると「浮過わひ」とは、「農業以外の」不確実な生計手段」のことであり、「浮儲」ともいいます。

以前に「浮所務Ⅱ臨時収入」とブログに書きましたが、これは正確ではありません。

「稲作一ト通り之外何社産業ハ勿論、更ニ浮所務方無御座候て、百姓一方ニて渡世仕候郡柄ニ御座候」（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」、ブログ 2008/05/31 参照）

稲作以外の産業は勿論、浮所務（臨時収入）もなく、農業だけで生活する所です。

【所務】（『広辞苑』）

①つとめとする事柄。所管の仕事。役目。②中世、所領の管理・収取などの支配業務。また、それに伴う得分。③財産。遺産。

つまり「浮所務」とは、藩から見た「雑収入」で、

農民にとっての「臨時収入（雑収入）」ではありません。もともと、

「民間にても本業の外に利を得る業を浮所務と云也」（「農制随筆」）

民間でも、本業の外に利を得る仕事を浮所務とっている。

「浮過わひ」によく似た言葉に「浮過」があります。これを初めて聞いたとき、不思議な感じがしましたが、「無地浮世過」の略との説明を聞き、少しは納得しました。分解すると、「無地」浮「世過」。農村に住んでいながら、「土地を持たず」に「不安定な」収入をあてにして「世を過す」人たち。労働者の先輩です。「世過」（生活）の手段が「過わひ」ですから、「浮世過」は「浮過わひ」に近い言葉です。

（2008/11/26）

八分米

「早中晩田毛共大概熟する時々にて随て、村役人頭百姓等相伴ひ日々田道へ出、毛上九反十反歩刈して升付の現米を帳面に記し置、代官并に手代の来たるを待、其後代官手代を引連出、或ハ先手代計り出て升付して右下見帳に必合穂の上りを懸て現米を増、此内早稲にて八分米と称へ、八分方或ハ所によりて九分方、中晩田ハ右増したけ減して積り合せ(早稲ハ大抵上米其上初に余分取立末を易ふす)、いつ限までに米何程上納すべしと奥書して村役人へ渡し置」(宝暦六年(一七五六)「農制隨筆」)

早稲から晩田までの稲がほぼ熟す時分になると、村役人は頭百姓等を伴つて日々田道へ出て、坪刈により収量を九く十段階に格付して帳面に記し、代官、手代(番組)の来村を待つ。その後代官は手代を連れ、または先に手代だけが来て「升付」をして、右の下見帳と比較して「合穂」の増し分から収量を推計する。この内から、早稲で年貢の八割を、残りを中晩田の米でいつまでに納入しなさいと奥書してにて村役人へ渡

す。年貢米の八割を早稲で納入させることを「八分米」という。早稲は大抵が上米であり、初めに年貢の殆どを取立てると後に取立てやすいからである。

この文書を現代語訳すると、色々な(面白い)事柄にぶつかります。

これは版本ですから、人に読ませることを意識しており、筆写本より丁寧にルビが付けてあります。

「現米」には「あり米」とあります。「合穂」は「あわせほ」ではなく「ごうほ」だと解ります。一坪で何合の稲穂が収穫できるかを調べるからです、やはり「合穂」ごうほでしょう。「手代」は、普通「代官手付」「番組」、古くは「下代」といいました。「八分米」は「八歩米」に同じ。

「毛上九反十反歩刈して……」の記述には困りました。「升付」はサンプル調査ですから、「耕地九反く一〇反の坪刈」をするはずはありません。「村方役人并長百姓共相伴ひ日々田道へ罷出毛上見合、格式之通り上中下九段十段之合穂之位を付、畝高を分

ケ有米を積り帳面調置」「芸州政基」の説明から、「九反十反」とは「九段階から一〇段階に分けた収量のランク」のことと理解できました。

どうにも理解できないのは「此内早稲にて八分米と称へ、……」の文言です。「此内」とは何でしょうか。「芸州政基」は「凡升付有米十石二付八石取立是を八歩米といふ也」と説明しています。『白木町史』も「早稲は上米とされ、年貢米はできる限り早稲より徴した。八歩米と称し、升突有米の八割を徴収するのを常とした。」と解説していますが、早稲から「年貢」の八割を（中晩田から残り二割を取立てる、と解釈しないと文章になりません。（2008/11/27）

盗刻

「農制随筆序

予十五年前病を告げて致仕す、……因て是を梓家に入と云

宝暦六年季夏吉日 芸州隠士賀美真知甫著

（印）（印）

右二の押印なき者ハ盗刻とす」（宝暦六年（一七五六）『農制随筆』、東北大学付属図書館蔵）

これは宝暦六年（一七五六）に出版された広島の方書、『農制随筆』の序文の一部です。著者は「芸州隠士賀美真知甫」。

「賀美公臺（一七五五―一八二二、名は通、通称喜和馬）も古学を修めて寛政七年奥詰となっている。その父永蔵（翫古と号す）も学問を好み、地方行政を担当するかたわら地方農政について『農制随筆』二巻を著わしており、……」（『広島県史』）

「賀美永蔵 姓は賀美、名は永蔵、翫古と号す、広島の人、少にして学を好み、壮にして益々研究する所あり、詩章をよくし、常に自ら娛む、其の集を翫古詩集といふ、寺田臨川其の序を作る、性沈黙にして材幹あり。」（玉井源作編著『芸備先哲伝』）
「賀美真知、号ハ鷗渚、著ハす所農制随筆あり、……本藩の士人なり」（享和三年（一八〇三）、勝島惟恭『行余紀聞』）

著者の名も号も判然としませんが、寛保元年（一七四二）ころ病を理由に致仕し、宝暦六年（一七五六）に『農制随筆』を出版（「梓家に入」）しています。序文の末尾に角印が二つあり、「右二の押印なき者ハ盗刻とす」とあります。その一つは「賀？真知」と読めます。著者による検印かも知れません。

(2008/11/29)

助詞の「江」

「兩人江御書即届申候」（天正十四年（一五八六）ころ、稲垣俊次の手紙、増田孝『古文書・手紙の読み方』）
「兩人え御書即届申候」（同書【翻字】）
「兩人えの「え」は、はつきり「江」と書かれています。もちろん「口」などではありません。これが仮名である証拠に右に寄せて小さく書かれていますね。このような書き方はおそらく漢文の送りがない名残の意識なのでしょう。ですから、翻字に際しては「へ」に直すべきでないことはもちろんで

す。」（同書）

これは稲垣俊次の手紙の一部とその解説です。著者は「兩人江」と書かれたところを「兩人え」と翻字をして、「兩人へ」と直すべきではないと書いています。その理由として、「江」は仮名として使われている。（「江」と表記される仮名は「え」である。）だから、「へ」に直すべきでない……という論法でしょう。（）は私の追加した部分です。

この手紙では、助詞の「へ」を、歴史的仮名遣いの方を採らないで、発音通りに「え」と表記してありますが、歴史的仮名遣いで表記しても不都合はないはず。筆者は「へ」にするか、「江」にすべきかを深刻に考えた訳ではなく、当時の一般的な表記「江」を書いただけ……ではないでしょうか。「二階江上ヶ置」「二階へ上ヶ置」の例文があります。（ブログ 2007/04/29 参照）。漢字をつかうときは「江」を、仮名を遣うときは「へ」を使っているように思えます。

もしそうなら、助詞の「江」を仮名に替えるとき

は、「へ」に直すべきだと思っています。

(2008/12/01)

厳島博覧会

「博覧会票告」

今や文明開化日ニ進ミ、人造モ天工ヲ欺ク之精妙ヲ極ム、故ニ其工芸技術ヲ見ルモ亦知見ヲ開ク之一助也、是以西洋各国ニ於テハ時々博覧会ヲ開キ、既ニ自今澳新納府ニ於テモ其設アリ、又御国内ニテハ東西之京都ニ於テ設ラル、等、皆工芸技術之精ヲ見テ人々知識ヲ研シメントノ旨趣ナリ、而テ都会ニ住ム者ハ幸ニ此ノ盛会ニ逢トイヘトモ、辺土僻邑ニ在モノハ終ニ新古珍奇之物品ヲ見ル事アタワザレバ、從テ知見モ自ラセマク、全ク固陋之民タルヲ免レズ、歎カハシキ次第ナリ、依テ官許之上、此度六月十日ヨリ七月十日マデ、厳島千畳閣ニ於テ展覧会ヲ設ケ、同所社寺珍藏之器物ヲ始メ其他各地新古物品ヲ集メ悉ク之ヲ排列シ、独

県内人ノミナラズ、遍ク四方人民之展覧ニ供シ、工芸粗密ヨリ時運ノ変換ヲ推知セシメ、又識者ヨリ博ク品題ヲ受ケ、傍ラ貿易ノ道ヲ開キ、以テ利用厚生之端トナサント欲ス、伏テ願クハ四方之君子所藏之奇品ヲ齎シ来テ各此会ニ臨ミ、溪翁田夫ヲシテ文明之真域ニ進歩、又有無互市之道ヲ明ニセシメン事ヲ冀フ、是此会之本旨也

一 展覧場外構ニ木戸ヲ設ケ雜踏ヲ可防

一 展覧ニ差出ス而已ニテ売却之積ニテ無之物品ハ、其持主国郡村名所由来ヲ記スベシ

一 売物ハ其価ヲ記シ、類物アレバ其数ヲ記スベシ
一新發明之器械ハ其用法ヲ詳細ニシルスベシ

一 展覧・売却共ニ会場ヘ差出ス物品ハ執事之預リ券ヲ渡スベシ、会終ラズト雖モ受取度品ハ何時ニテモ預リ券ニ引換返スベシ

一 売物携来テ自身売買交易ヲ扱度輩ハ、会場執事ニ一応案内之上タルベシ

一 会場ニ於テ売払之物品ハ元価之金高百分之三ヲ去テ渡スベシ

一 売却之積リニテ無之物品ハ終会之節薄謝ヲ可添

一 神庫宝物ハ無料ニシテ展観ヲ許ス

一 展覧之物品若熟視致度輩ハ其宿主ニ示談セバ印鑑ヲ渡シテ熟覧ヲ可許

明治五壬申年五月 広島県博覧会執事（明治五年（一八七二）「続波多野家文書」）

これは明治五年（一八七二）広島県主催の「厳島博覧会」の案内状です。同年六月一〇日～七月一〇日の一ヶ月間、厳島千畳閣大聖院で実施しています。当時流行の「博覧会」の様子を伝える面白い文書です。

「自今澳国新納府ニ於テモ其設アリ」とあります。「澳国新納府」はオーストリア（奥大利）のウィーンに違いありません。ウィーン万国博覧会は、明治六年（一八七三）五月一日から十一月二日までの約半年間開催されました。久米邦武『米欧回覧実記』には、「博覧会場ハ、維納（ウィーン）ノ東北ナル、「ブラーテル」偕楽苑ニ於テ、大円堂、長廊榭（ガल्ली）ヲ建起ス、……」と書いてあるので、「維納」を「新納」と誤記したものと思われます。（2008/12/04）

市場

「宮嶋市此節引候間、うさん成者并遊びものゝ類来事可有之候間、宿借し候儀ハ不及申、一座之参会も仕間敷候、堂宮ニたゝすみ居申儀可有之候間、見廻り追払、村々滞居不申様可仕事」（宝永二年（一七〇五）「十四日町年誌」）

宮島の市がこの節引けるので、胡散臭い者や遊び者などが（尾道に）来ることが考えられるが、宿借しは勿論、一座に参会することも禁止する。堂宮に徘徊する者があれば、見廻りをして追い払い、村に滞在させないようにしなさい。

これは代官が尾道町に対して出した触書の一部です。宮島では毎年、3・6・9月に市が立ち賑わいました。（ブログ 2007/09/02 参照）

この文書では、市が終ることを「引」と書いています。「引く」ではなく「引ける」でしょう。

【引ける】（『広辞苑』）

①（「退ける」とも書く）その日の用務がすんで退出する時刻になる。②気おくれがする。負ける。③遊郭で、引時に遊女が張見世はりみせから退く。

「宮嶋市あかり之時分ニ候間、うさん成船人……」

（宝永二年（二七〇五）「十四日町年誌」）

ここでは「あかり之時分」と書いています。

【上がる】（『現代新国語辞典』）

③物事が終わりになる。

「頃日、宮嶋市立候ニ付、疑敷者并慰もの之類、若忍ひ候て此許へ罷越候共、立宿・一座之出会も堅仕間敷候、野辺ニても見当り次第可追払候、其内不審成跡之者有之候ハ、指留置、早々可申来旨町中末々迄可申聞者也
但、市揚之節も同様可相心得事

未三月 文右衛門」（安永四年（一七七五）

「堀川町覚書」）

これは広島町奉行が五組の大年寄宛に出した触書です。「市揚」と書いています。「市あがり」と読むのでしょうか。
(2008/12/05)

水主役 その2

「 覚

一 拾人 因嶋

一 耆人 岩子嶋

一 四人 東向嶋

一 四人 西向嶋

一 耆人 立花

一 拾七人 尾道

右は此元ニて雇遣候加子ニ候条、三十日分之賃飯米早々可差越者也

西三月六日 松野弥一左衛門

植木小右衛門」（宝永二年（一七〇五）「十四日町年誌」）

因嶋は一〇人、岩子嶋は一人、東向嶋は四人、西向嶋は四人、立花は一人、尾道は一七人（合計七三人）の水主役を割当てるが、実際は広島で加子を雇ったので、その代り三〇日分の飯米を出しなさい。

「 覚

一百廿九人 尾道

一式人 立花

一廿七人 西向嶋

一三十人 東向嶋

一四人 岩子嶋

一六十九人 因嶋

右ハ御用之加子ニ候条、三十日飯米為持用意仕置可申候、追々御用之時分可申遣候間、油断仕間敷者也

四月十二日 松野弥一左衛門

植木小右衛門」（宝永二年（一七〇

五）「十四日町年誌」)

尾道は一二九人、立花は二人、西向嶋は二七人、

東向嶋は三〇人、岩子嶋は四人、因嶋は六九人（合計六五七人）。以上は御用の加子として必要なので、三〇日分の飯米を持たせ準備しておきなさい。近々御用の時に連絡するので油断しないこと。

これは広島藩の船奉行から水主浦に対して「水主役」を要求する文書です。「水主役」は、その名の通り「水主としての労役の提供」が中心ですが、最初の文書は、労役ではなく「此元ニて雇遣候加子」に対して支払った「三十日分之賃飯米」を請求しています。労役に替えて物納・銀納への動きかと思いましたが、二番目の文書は労役を求めています。

この違いは徴発する人数に関係があるようです。少人数の労働力なら雇うこともできますが、御調郡分六〇〇人を越える水主を雇うことは不可能なのでしょう。課役で支払う原則を崩す訳にはいけない理由がここにあるようです。それにしても何のために水主の大量動員が必要だったのでしょうか。（ブルグ「水主役」2008/11/22 参照）（2008/12/06）

過夫・未進夫

「村方にて、普請事見米積り代官已下の送迎・村役人往来付の人足・出家社人盲人類の送り夫等、其外年中万事につき使ふ所の夫役也、此夫役、村中にて廻り／＼人にて出さすべき事ながら、郷中庄屋近所に居るもの、急用其外手廻し能によりて過夫に為りよく、遠所の者へ間に値かたきを以て多ハ未進夫に為る故、畢竟米銀にして免割に入ると也、……治民の職、村里の徭役を省を以て急務と為べき事也、但、饑饉年に飢民を救ふために新開・川除等、其外有用の普請、或ハ山林を伐、材木・薪炭等を出す類ハ隔別也」(「農制隨筆」)

村方では、普請見米積りのため入村する代官以下での送迎、村役人往来の供をする人足、出家・社人・盲人類の送り夫など、年中万事につき夫役を必要とする。この夫役は村中で順番に出すべきことではあるが、急用の際など手廻しがよ

いので庄屋の近所に住む者を夫役として使うため「過夫」になりやすい。遠くの者は急用に間に合わないので、多くは「未進夫」になる。そこで、結局は免割に入れて米銀で納めさせることになる。……村役人は夫役を減らすようにしなければならぬが、飢饉のときは飢民を救うための新開・川除等の普請や山林を伐り材木薪炭等を出すことなどは構わない。

「過夫」「未進夫」なる言葉は、この説明の中で意味が明確になります。割当てより多く夫役に出ることが「過夫」、不足するときは「未進夫」です。

(2008/12/07)

毛上合力

「百姓年貢未進積りたる時ハ、家屋敷・山林・牛馬・家財等迄残なく未進方に引当取立、身すがらにして其家より追出す事、是大法也、是を追上とも、

形付百姓とも云也、……追ひ上て猶も不足あるときは其村中のかづきに為り、免割に入て取立る、是ハ止ことを得ぬと云べし、然るに、毛上合力などゝ名付、頭百姓・役人等相談して追上に為ず、未進の分を村中へ免割に出し取立る事あり、百姓共自分の諸役さへ弁かたきに、他人の未進をかく事、実ハ不同心ながら役人共より定るを以て是非なく同心する事なり」（『農制隨筆』）

百姓の年貢未進が重なると、家屋敷・山林・牛馬・家財等まで全て未進方の引当として取り立て、身一つにしてその家より追い出すことが大原則である。これを「追上」とか「形付百姓」という。……追い上げても猶不足するときは、それを村園かづきにして免割に組込み村中から取立るが、仕形のないことである。ところが「毛上合力」などと名付け、頭百姓・役人が相談して追上にしないで、未進分を村中へ免割に出して取り立てることがある。百姓は自分の諸役にさへ苦勞しているのに、他人の未進まで負担する

ことは、内心は反対であるが役人共が決めたことなので仕方なく従っているだけである。

「村園きは、未進百姓の「引当物」を処分してもなお年貢完納に不足する部分を、「毛上合力」といつて、村中へ割賦して納める方法である。」（『広島県史』）

『農制隨筆』『広島県史』ともに、ある農民の年貢の未進が重なると、その全財産を処分（追上して年貢に充てますが、それでも年貢に足りないときは、不足分を村全体の農民が代りに負担し（園）て皆済すると解説しています。

ところが、「毛上合力」の説明が微妙に違います。『広島県史』は、全財産没収しても年貢に不足するとき村園にすることを「毛上合力」と解説していますが、『農制隨筆』は、追上にせず、未進の分を村園にすること、だとしています。全財産を取上げ追出した後に不足額があれば村で園くのは、藩にとつては当然のこと。しかし、未進百姓は「合力」（力

を添えて助けること)を受けたとは思わないでしょう。『県史』の解説には疑問が残ります。(2008/12/08)

籠旅片

一 覚

一 土井周防守様御三男朝倉藤五郎様、今日暮六つ時
分吉田より御着被遊候、弥町宿御望ニ付御茶屋へ
ハ不被成候事

一 御本陣町宿 御本陣仕廻廿九人

一 馬宿 壺軒 六人

一 侍宿 壺軒 上下六人

一 同 壺軒 上下拾式人

はたこ之分

一 中間宿 壺軒 拾式人

一 同 壺軒 拾式人

一 同 壺軒 七人

右木銭之分

一 はたこ銭晩朝壺匆八分 かたはたこ壺匆、但一汁

三菜

(中略)

右之通荒々申来候、人馬之儀も吉田にて支配仕候通

申越候由候へ共、未爰元へ参不申候、以上

卯月十八日

山県久右衛門

黒杭又右衛門様

右御廻状之通御勤番所へ申上候得共、御宿笠岡屋御
究被遊候ニ付、掃除等申付候」(宝永二年(一七〇
五)「十四日町年誌」)

これは宝永二年(一七〇五)四月二十一日の「十四
日町年誌」の記事です。ブログ「送り以得御意候」
2008/10/28 の関連記事です。

唐津藩主、土井周防(利益)の三男、朝倉藤五郎の
一行が尾道を通過するための先触れです。「今日暮
六つ時分吉田より御着」とあり、なぜ「安芸国」吉
田」を通過するのか、一日で吉田から尾道まで移動
できるのかと悩みました。これは早合点、この文書
は「送り」で、直接尾道宿に宛てたものではなく、
リレーされて届いたもの。すると、唐津から尾道の

間に「吉田」があるはず。「久我」「福川」「関戸」「小方」……と続いていますので、山口県か、調べると下関に「吉田」がありました。宿舎は、

本陣 町宿、二九人

家老宿 町宿か、一三人

馬宿 六人

侍宿 二軒、旅籠、一八人

中間宿 三軒、木賃宿、三一人

御茶屋ではなく、町宿を指定しています。

【御茶屋】（『岩波日本史辞典』）

江戸初期に将軍・大御所が上洛や遊興の休泊用に建てた比較的小規模の施設。御茶屋御殿とも。将軍の上洛が中絶すると、やがて幕府の設置した御茶屋は廃絶。大名の御茶屋は戦国期に始まり各地に設置された。参勤交代の途中の宿に設けられた大名の休憩施設も御茶屋と称し、茶屋本陣ともいった。

本陣・家老宿として指示した「町宿」については、

適当な説明を見付けることができませんが、尾道では「笠岡屋」（尾道御茶屋を予定して、掃除を命じています。侍宿は「旅籠」、中間は「木賃宿」とはつきりと区別しています。

【旅籠屋】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、街道の宿場に置かれた食事を供する宿泊施設。語源は馬飼料を入れる籠。

旅籠銭は朝夕の食事（一汁三菜付で「老奴八分」、片旅籠は「老奴」。

【片旅籠】（『広辞苑』）

一夜旅宿に宿泊して、夕か朝かの一度だけ食事すること。また、その宿料。かたどまり。

【木賃宿】（『岩波日本史辞典』）

中世以降、野宿から食事付の旅籠形式に移行する過渡期的な宿泊施設。宿泊者が米を持参し、薪代として木錢せんを支払うので木錢宿ともいった。江戸時代には安価な宿泊施設をさし、貧しい旅人が利用、明治以降も存続した。

結局、一行は二十三日に三原に泊り、二十四日に尾道には泊らず通過しました。(2008/12/13)

水漬

○八月十日大風雨、北東より巽へ廻る時盛んに成り、雨止まず大水丁場になり、戌の中刻、水四尺八九寸に及ぶ、慈仙寺鼻、畠山主悦殿、掛持屋敷の石垣より崩れ出し、幅九間に長さ四十五間一度に崩れて多門残らず、小山久巴屋敷諸道具とも一度に川へ引込み流れる、尤も死人は無く、町御奉行鳥井九郎兵衛殿の下知にて、家々より古畳出し防げども水留らず、一面に水押しかけ本町へ出る、鳥井殿かくては如何かと思ひ、自身土足にて供をも連れず、唯一人大音声にて、「足弱(婦女)小児を召連れ、誓願寺へ立ち逃げよ」と、本町より湯屋町の間を二三度触れあるき、直ちに東へ御引取り、本町の者どもはこの場を崩しては叶はじと大勢出張り、青竹を切りかけ杭を打ち水中へ土俵を釣り

下げ、色々と働き漸く防ぎ留める、……東西の橋危く相成り、御作事所よりも真棒を数本並べ、大かすがひを以って宙に釣り止め、酒屋々々の半切あまた出して水を汲み込む、柳町中番所の土手四間程われ出す、これを防ぐに大騒動、本町筋は座上水つき、小舟を乗りあるき、老人小児は二階へ上がる、京橋は中より折れる、横川橋落ち流れ、……」(進藤寿伯『近世風聞耳の垢』寛保四年(一七四四)八月の記事)

延享元年(一七四四)八月十日は大風雨。(風が)北東より南東へ廻るころから大雨になり止まず、「大水丁場」になる。午後八時頃、水は四尺八九寸に及び、慈仙寺鼻(現、平和公園北端)の畠山主悦殿掛持屋敷の石垣より崩れ出し、幅九間に長さ四十五間が一度に崩れて多門は残らず、小山久巴屋敷の諸道具も一度に川へ引込み流れる。もつとも死人は無く、町御奉行鳥井九郎兵衛殿の命令で、家々より古畳を持出し水を防ぐが一面に押しよせて中島本町(現、平和公園

北部まで迫る。鳥井殿は「こうしてはどうだろうか」と思い、自身土足で供も連れず、唯一人大音声にて、「足弱(婦女)小児を召連れ、誓願寺(現、平和記念資料館南)へ立ち逃げよ」と、本町より湯屋町(?)の間を二三度触れ歩き、直ちに東へ御引取る。本町の者どもは、ここを崩されては大変と大勢出張り、青竹を切りかけ、杭を打ち、水中へ土俵を釣り下げ、色々と働き漸く防ぎ留める。……東西の橋も危険になり、御作事所よりも「よいとまけ」に使う真棒を数本並べ、大かすがいで宙に釣り止め、酒屋々々の半切(底の浅い盥状の桶)を沢山出して水を汲み込む。柳町中番所の土手が四間ほど割れだし、これを防ぐに大騒動。本町筋は座上まで「水つき」、小舟で往来、老人小児は二階へ上がる、京橋は中より折れる、横川橋落ち流れ……

八月十日の暴風雨・洪水により、広島領の田畑損毛四万八〇〇石余、流失全壊九六軒、死者九人の被害が出たと記録されています。

「丁場」という珍しい言葉が出ていますが、「長丁場」などは今でも使います。

【町場・丁場・帳場】ちようば。(『広辞苑』)

①ある宿駅と次の宿駅との距離。ある区間の距離。また、ある事をなすのにかかる時間。「長――」②夫役に当って運送・道普請などをすべき受持ちの区域。一般に、仕事の受持区域。③馬子・駕籠舁などの溜り場。

「水丁場」は、出水の際川筋堤防の護衛にあたる割当て場所ですから、②に当てはまります。

「座上水つき」は、「床上浸水」と見当が付きます。「水つき」から、「海行かば水漬く屍山行かば草生す屍」の歌を思い出す人はもう少数派になりました。

「流作場の事 是ハ水難之ヶ所ニて、出水之節ハ水漬り、或ハ流畝ト相成候所ヲ云也」(「続波多野家文書」)

流作場とは水害を受ける場所で、出水のときは

「水漬り」したり「流散」となる所をいう。

(2008/12/14)

被下物

「一尾道より今津迄送り馬五十七疋 賃銀被下受取申候

一尾道より今津迄送り人足三百人 賃銀被下受取申候

一金子貳両 笠岡屋彦四郎へ被下拝受仕候

一同貳百疋 馬指・夫指へ被下拝受仕候

一同百疋宛 年寄三人へ被下候へとも御断申拝受不仕候

一銀拾匁 庄や又右衛門へ被下候へとも御断申上拝受不仕候」(宝永二年(一七〇五)三月、「十四日町年

誌」)

これは、参勤交代のため三月三日豊後岡藩主中川因幡守(総勢三五六人)が尾道宿に泊り次の今津宿(福山市)までに送った際、受取った費目を代官に報告

したものです。送り馬五十七疋代、送り人足三〇〇人の賃銀、宿舎笠岡屋拝受二両、馬指・夫指拝受一〇〇疋、尾道町年寄、庄屋は断って受取りませんでした。

「同(金子)貳百疋 馬指・夫指へ被下拝受仕候」の記述がありますが、「(金子)貳百疋」とは、一〇文を一疋として、銭二〇〇〇文＝二貫文でしょうか。

【匹・疋】(『広辞苑』)

① 獣・鳥・魚・虫などを数える語。② 銭を数える語。古くは鳥目ちようもく一〇文を一匹とし、後に二五文を一匹とした。③ 布帛二反を単位として数える語。

「後に二五文を一匹とした」と書いてあると、読む側は大変困ります。

【馬指】うまさし。(『岩波日本史辞典』)

江戸時代の伝馬問屋に出仕した下級の宿役人。宿問屋には問屋とその補佐役の年寄がいて、その下に問屋の奉公人として人馬を直接指図する帳付と馬指がいるのが一般的であった。これに

加え、人足だけを指図する人足指を置いた宿場もあつた。

「夫指」は、上記「人足指」でしょう。

「一尾道より今津迄送り馬拾貳疋賃銀被遣受取申候一尾道より今津迄送り人足四人賃銀被遣受取申候右は朝倉藤五郎様、西四月廿四日今津村昼御休二付、直御送り被遊候人馬御入用如此御座候、尤馬指・夫指へ被下物無御座候」(宝永二年(一七〇五)四月、「十四日町年誌」)

これは肥前唐津藩土井周防守三男、朝倉藤五郎一行(総勢一〇〇人足らず)を尾道から今津に送った報告です。「馬指・夫指へ被下物無御座候」とあります。

「被下物」は代金・料金ではなく、謝礼のようなものかもしれません……。 (2008/12/16)

相多門

「○九月廿七日夜、井上」 「不勝手に付き、御国

を立ち退き候、妻を連れ下女二人、一人は家久しき老女の由、本川にて船を借り切り諸道具も取出し、多門に居り候日雇の者に本川迄持たせ遣はし候、それより屋敷へ返し、この儀必ず沙汰仕らず候やうに申し談じ候故、日雇は帰り臥し居り候、相多門に足輕居り候、その夜泊り番にて翌朝帰り見候ところ、屋敷には誰も居合はせず、右の日雇に尋ね候ところ、必ず沙汰を致さざるやうにと申し付けられ候へども、外ならぬ相多門の事ゆへ咄し申すなりと、右の趣咄し候故……」(宝曆十三年(一七六三)の記事、『近世風聞耳の垢』)

九月廿七日夜、井上」 「(一〇〇石)は生活が苦しいため、御国を立ち退いた。妻を連れ下女二人、その一人は長く仕えた老女とのこと。本川(太田川)で船を借り切り、諸道具も取り出し、多門に居た日雇の者に本川まで運ばせ、それより屋敷へ取って返し、この事は絶対に他言無用といった。日雇は家に帰り横になっていると、同じ多門に住む足輕が、その夜は泊り番で翌朝

帰ってみると、屋敷には誰もいない。そこで右の日雇に尋ねると、他言無用と命じられたが、外ならぬ「相多門」の事なので咄しますと、右の様子を話した。

【相借家】（『広辞苑』）

一つ棟の長屋に、ともに借家をする事。また、その借家人同士。あいだな。あいがしや。

【相部屋】（『広辞苑』）

宿屋などで、同じ部屋に泊ること。部屋を同じくすること。

「相多門」という言葉も、これらの「相」と同じ意味でしょう。多門については「多門」（ブログ 2008/1/21）で検討しました。ここの多門では足軽だけでなく日雇も住んでおり、簡単に「下級武士の住居」とばかり決めつけることはできないようです。

「山肩忠太夫屋敷多門に医者居り申し候」（宝暦十三年（一七六三）の記事、『近世風聞耳の垢』）

「周参見の多門屋根屋伊兵衛と云ふ者」（寛政七年（一

七九五）、『近世風聞耳の垢』）

屋敷の主人、井上何某は知行一〇〇石、「常々不勝手ながら両家（親戚）へ無心などもこれ無き由」とのですが、なぜ勝手不如意で「御国を立ち退」くようになるのか、理由は書いてありません。

（2008/12/17）

引負

「一年貢米引負仕間鋪候、相代官之引負可為同罪事」（寛永十九年（一六四二）、郡中掟筋等のことにつき代官への藩主書付、『広島県史』）

年貢米を引負してはいけない。相代官の引負であつても同罪とする。

これは、広島藩主、浅野光晟が代官に示した書付です。「引負」という耳慣れない言葉が使われています。

【引負】ひきおい。（『日本国語大辞典』）

① 他人に代わって売買・取引を行なったり、あるいは人の金銭を融通したりして、その損失が自分の負債となること。商店の使用人などが主人に代わって取引をして、その代金がどこおって主人に対して負債となること。をた、その負債。② 使用人が主人の金を遊興に使い込んだりして、主人に負債となること。また、その金銭。使い込み。③ 江戸時代、百姓の納めた年貢を名主が着服して上納しないこと。また、その金銭。④ 借金。負債。⑤ 身に損失となるような物事をしよいこむこと。

①～⑤までの意味が書いてありますが、この資料に当てはまるのは、③の「年貢米の着服」です。もっとも、この場合は名主ではなく代官ですが……。一般的には「横領」「使い込み」と考えてよさそうです。

「藍座掛り役人等、小内にては引負ありと世評あり」
(文政十二年(一八二九)『秘語独断』)

藍座の掛り役人等は、内部で「引負」(横領)が

あるとの世評がある。

「相代官」は「同じ郡を担当する同僚の代官」のこと。
(2008/12/18)

水主役 その3

「殿様御迎加子百廿九人被仰付候内、九十人程しく屋吉兵衛方にて雇出し申候、例年御用加子等吉兵衛請相にて不残雇出し候処、今年ハ四十人不足得雇出し不申由、飛脚指越候二付、今夜中年行司三人町中吟味いたし四十人雇、賃銀老人ニ付先拾五匁宛白米壺斗八升四合宛渡し置申候」(宝永二年(一七〇五)四月二十九日記事、「十四日町年誌」)

殿様を御迎えする加子として(尾道に割当てられた)二二九人の内、九〇人ほどは「しわく屋吉兵衛」方で雇うことができた。いつも御用加子等が必要なときは吉兵衛が請合つて全て雇い出していたが、今年は四〇人は雇い入れることが

できないと、飛脚で知せがあつたので、今夜中に年行司三人が町中を探して四〇人を雇った。賃銀は耆人につき先ず一五匁ずつ、白米一斗八升四合を支給した。

この記事は、ブログ「水主役 その2」(2008/12)の続きです。何のために、尾道だけでも一二九人の水主の大量動員が必要だったか不思議でしたが、この記事で解りました。「殿様御暇被進せ、来月(五月)四日江戸御発駕被遊候」という事情がありました。

割当てられた尾道浦の年寄は、いつもの通り「しわく屋吉兵衛」に頼みましたが、割当て全員を確保できないと飛脚が来ています。「しわく屋吉兵衛」は尾道の住人ではなく、「塩飽諸島」(香川県丸亀市)で水主の幹旋する業者かもしれません。不足の四〇人の水主は尾道で集めています。さすが港町です。そのために高い賃銀を払ったことでしょう。

「雇加子四十人船式艘ニて今朝出船、広島へ差下し申候」(宝永二年(一七〇五)四月晦日記事、「十四日

町年誌」)

雇加子四〇人を船二艘で今朝出船、広島へ差下した。

殿様を迎える水主ですから、上方に向けて出発すると思いきや、広島に集合しています。広島で船団を組んで上方まで御迎えに行くのだろうと思います。

「一六七二年(寛文二二)ころ西廻海運が整備されてから、北海道や日本海沿岸の物資を運ぶ千石船が出現し、航路も下関から大坂への最短距離の内海中央部をとるようになった。そのため、これまでの沿岸航路と違って沖乗り航路が発達し、この航路に当たる島々には、安芸国大崎下島の御手洗や倉橋島の鹿老渡など風待ち、潮待ちの港町が出現した。」(『世界大百科事典』)

宝永二年(一七〇五)の参勤交代の航路は、ここにいる沖乗り航路か、それとも、昼間に陸岸に沿い山や地形を目標に航行した地乗り航路か、想像するだけでも楽しくなります。向島余崎に寄港する記事が

あるので、地乗り航路かも知れません。(2008/12/19)

ほしな釣

「○三月十九日夕、中の町松江某方の男部屋へ焼餅売の丁稚這入り、男の差替・脇差等盗み取り、周参見の多門屋根屋伊兵衛と云ふ者をしらべ白状致し候由、当正月二日夜、武田へ盗賊入り知れざるところ、右伊兵衛へ不審懸かり候てこれ有り、然るところ宮田某伊兵衛へ申し候は、その方儀武田失せ物に付きしらべこれ有り、相済む迄は他出留め致し候間、それ以来盗人一円相知れず、先頃以来宮田へ参り申し候は、いまだ御しらべ相済み申さざるか、いよいよ私盗人に御座候はば、御手討に成りとも遊ばされ、さも御座無く候はば他出御免し下さるべく、私儀日々二匁三分づつの作料もそれ以来一向得取り申さず、仲間どもより米一俵もらひ、この節迄は給べ申し候へども、はや飢命に及び申し候、いかが遊ばし下され候やと段々申

し出で候ところ、宮田大開口にてこらへてくれとも、盗人と違ひないとも、何とも得云へずこまり最中の由、さてさて能き気味、これ程の儀もあまりこれ無く、右伊兵衛しらべの内、武田事を口ばしり申し候ところ、一通りには白状致さず、段々申し候ところ白状故、直ちに周参見へ連れ行き、また段々尋問のところまたぞろ口違ひ白状致さず、その夜留め置、翌日手錠を打ち蔵へ入れ置き夕方より漸く白状致し、同夜親元へ遣はし候ところ、右親類中はこの者昨日御手討になりとも成し下され候へば、私ども構ひ申さず、何分私ども迄難儀仕り申すべき由、これは竹腰多門に居り候者なり、丁稚は前かど松江方に奉公仕り居り候者の由、右親ども申すには、この者同類も多く御座候故、御召捕り下さるべく候、その後丁稚召捕られ、ほしな釣に相成り白状の由。」(寛政七年(一七九五)の記事、『近世風聞耳の垢』)

三月十九日夕(広島)中の町、松江某方の「男部屋」に「焼餅売」の丁稚が泥棒に入り、男の「差

替」・脇差等を盗み取ったと、周参見の多門の住人、屋根屋伊兵衛が取調べ中に白状したという。今年の正月二日夜、武田へ盗賊が入り、犯人は誰とも知れなかったが、この伊兵衛に疑いがかった。そこで宮田某が伊兵衛に、「その方儀、武田の失せ物について取調べがあるので、それが済むまで他出は禁止」と申渡した。その後犯人は分らなかった。先頃から(伊兵衛が)宮田へ行っていうには、「まだお調べが済みませんが、もし私が盗人に相違ないのなら御手討にでもされ、さもなければ他出を許可してください。私は日々に二匁三分づつの作料(手間賃)を取っていました、それ以来収入はなく、仲間から米一俵を貰い命をつないできました。が、もう限界です。どうしてくださいますか？」と申出ると、宮田は「許してください」と「盗人に違いない」ともいえず大閉口。「さてさて能い気味だ。これ程のこともあまりないだろう」と思った伊兵衛、取調中、武田のことをつい口走ったが、簡単には白状せず、段々と問い糾してやっ

と白状したので、直ちに周参見へ連れ行き、また段々と尋問するが又候「口違ひ」白状せず。その夜はそこに留め置き、翌日手錠を打ち、蔵へ入れ置くと夕方より漸く白状した。その夜親元へ連絡したところ、「昨日この者を御手討にされていたとしても、私も難儀しますので……」といった。これは竹腰の多門の住人であった。例の丁稚は、以前松江方に奉公していた者だという。右の親どもものいうには、「この者には泥棒仲間も多くいますので、御召捕り下さい」。その後丁稚も召捕られ、「ほしな釣」になつて白状したという。

これは『近世風聞耳の垢』から引用しました。普通目にする古文書は庄屋さんの書いたものなど、(公文書)ですが、『近世風聞耳の垢』は風聞の寄せ集め、それだけに内容も面白く、使われた言葉も多彩です。

【男部屋】(『広辞苑』)

下男などの部屋。

【差替】（『広辞苑』）

（サシガエとも）差し替えること。また、その物。予備。特に刀にいう。

「焼餅売」とはどんな商売でしょうか。普通の餅なら焼いて時間が経つと堅くなってしまうですが……。

「口違ひ」とは、前言を取消し供述内容が変わることでしょう。

「ほしな釣」は辞書に見えませんが、「ほしな」は「干菜」でしょう。「ほしな釣」をしたので白状したのなら拷問のことと思われます。

「江戸時代においては……さまざまな拷問が行われたが、一七四二年に公事方御定書が制定されてからは答打・石抱き・海老責・釣責の四つが拷問として行われた。その中でも答打・石抱は「牢問」、海老責・釣責は「（狭義の）拷問」というように區別して呼ばれ、その危険性の高さゆえ、「（狭義の）拷問」は「牢問」よりも厳しい要件が定められて

いた。」（Wikipedia「拷問」）

農家の庭先に竿にかけられた白菜などとは大違い、人間を宙吊りにする拷問のことかもしれません。

（2008/12/24）

割を入れ

「○三月三日、又助茶屋前にて喧嘩、婦人酒を呑み候より事起り、割を入れ候者と口論、婦人男子の顔をかぐり、男子その手を直ぐに喰ひ付く、婦人手を取りざまに男子の歯をぬき候由、それより連れの者婦人をつよくいため、尤も内々にて相済む。」（寛政十一年（一七九九）三月三日記事、『近世風聞耳の垢』）

○三月三日、（広島東照宮下の）又助茶屋前で喧嘩があった。酔っぱらいの婦人が起したことで、「割を入れ」た者と口論になり、婦人は男子の顔を「かぐり」、男子はすぐにその手に喰ひ付く。婦人が手を振り放すと男子の歯まで一緒に

抜けてしまう。男の連れは婦人をつよく痛めつけた。もつとも事件にはならず内済で解決した。

【割を入れる】（『広辞苑』）

①仲裁者を入れる。調停者を入れる。②衣服や帯などで、他の小幅の布を裁ち入れて縫い合わせる。

単に「仲裁に入る」のではなく、取っ組み合いをしている者の間に「割って入る」のでこう言うのでしょう。

【かぐる】（『広島県方言辞典』）

引搔く、多く爪で搔く。

酔っぱらい婦人の喧嘩相手が誰か、書いてないの
で要領を得ませんが、仲裁に入って齒まで抜かれる
とは、割に合いません。

(2008/12/26)

サツマ風

「○九月下旬より風邪流行、家々残らず煩ひ、中には傷寒の如く熱勢甚だしく、或ひは下痢、或ひは腹痛嘔吐、或ひは衄血頭痛等兼ねる症有り、小児は発搐痘序の如く、実に危篤の症を見はず、然れども二三日または五六日平臥にて熱解し、ただ咳嗽に成り全快す、尤も軽症も有り、達者なる人は押付け平癒するも有り、然れども十に六七は平臥す、実に珍しき事なり、或る老人の咄しに、凡そ三十年以前、薩摩公御通行有り、その風邪流行す、皆人サツマ風と言ふ、又このたびも九月中頃薩摩公御通行あり、依つてサツマ風と云ふ、この頃の狂歌に、「さつまから輿や車で風の来ておす人もありひく人もあり」、右の風邪、十月上旬ころ町家大流行、一家内一時に煩ひ、飯焚き女も茶煎し婆々も無き家も有り、実に筆紙し難く、中頃に至り御家中大はやり、一節は御勘定所にも一席に二人三人出席ありと承る、町中流行の節風呂屋へ行く者無く暫く休みしとぞ、その頃江戸より帰国の人に聞きしに、道中筋大流行、宿屋などにも

家内一時に寝て宿を断るもあり、実に心細く、大坂は猶々大流行、一節は芝居も止み、また晴天十日の角力興行これ有るところ、七日目には見物人なく、その上名取の関取も風邪にて引き籠り、七日切りにて止め、……」（天保三年（一八三二）九月の記事、『近世風聞耳の垢』）

（広島では）九月下旬より風邪が流行、家々残らず罹った。中には傷寒（腸チフス）のように高熱が出、または下痢、腹痛嘔吐、衄血頭痛等の症状もあった。子供は発掻痘序のようで、実に危篤のように見えるが、二三日または五六日寝ていると熱も下がり、咳をするだけになり全快する。軽症の人もあり、達者な人はすぐ平癒する者もあるが、六七割の人は寝込む。実に珍しき事である。ある老人の咄しに、およそ三十年以前、薩摩公の御通行があり、そのとき風邪が流行して、皆「サツマ風」といったとのこと。このたびも九月中頃に薩摩公の御通行あったので「サツマ風」といつている。この頃の狂歌に、

「さつまから興や車で風の来ておす人もありひく人もあり」、この風邪、十月上旬ころ町家に大流行、一家内一時に煩ひ、飯焚き女も茶煎し婆々もない家もあり、実に筆紙し難く、中頃になると御家中でも大はやり、一時は御勘定所にも一席に二人三人出席ありと承る、町中流行のとき風呂屋へ行く者無く、休業したとか。その頃江戸から帰国の人から聞くと、道中筋大流行、宿屋などにも家内一時に寝て宿を断るところもあり、実に心細く、大坂は猶々大流行、一節は芝居も止み、また晴天十日の角力興行も七日目には見物人なく、その上名取の関取も風邪で引き籠り、七日切りにて中止した。

「天保三年（一八三二）冬、風邪流行、……此年琉球人来朝せし故に琉球風といふ（『武江年表』）」（富士川游『日本疾病史』）

まず町屋に流行し、ついで「御家中」に拡がるのはなぜでしょうか。面白い現象です。

江戸では「琉球風」といい、広島では「サツマ風」

怒

と名付けていますが、「琉球人来朝」の一行は海路瀬戸内海を通り、広島には立寄っていません。

(2008/12/27)

怒

「北冥有魚、其名為鯢、鯢之大、不知其幾千里也、化而為鳥、其名為鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲、是鳥也、海運則將徙於南冥、南冥者天池也、齊諧者、志怪者也、諧之言曰、「鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上者九万里、去以六月息者也。」(中略)

北の果てなる暗い海に魚がいて、その名を鯢こんという。鯢の大きさといったら、いったい何千里あるやら分らない。この鯢が変身して鳥になると、その名を鵬ほうという。その背中は、何千里あるやら分らない。この鳥が勢いよく羽ばたいて飛び立つと、その翼はさながら大空の果てまで垂れこめた雲のようだ。この鳥は、海が

大きくうねりだすとき、南の果てなる暗い海めざして移りゆこうとする。南の果ての暗い海とは、「天の池」なのだ。齊諧は、世の不思議を記憶する物知りである。彼がいうには、「鵬が南の果ての暗い海に移るときには、海原を三千里ほども羽打ちたたくと、つむじ風をとらえて九万里の高みに舞い上がり、六月の天つ風に乗って飛び去ってゆく。」(岩波新書 興膳宏『中国名文選』)

『中国名文選』に『莊子 逍遙遊』の冒頭が載せてあります。なぜ、こんなに面白いものを今まで読まなかったのかと、悔まれます。

川端の散歩道で水鳥の〈離着陸〉を観察すると、着水するときは尾羽を広げてブレーキをかけます。飛立つときは小さい鳥でも大変なようで、懸命に羽ばたいても簡単には足が水面から離れません。まして巨鳥ともなれば、「怒」らないと飛立てないようです。著者の解説には、「鵬の羽ばたくさまをいう「怒」とは、強いエネルギーの発散するさまをいう。」

とあります。

【怒】（『漢字源』）

②「動・形」はげむ。はげしい（ハゲシ）。ぐつと緊張していきおいこむ。また、そのさま。「怒而飛其翼若垂天之雲」怒ンデ飛ベバ、ソノ翼ハ垂天ノ雲ノゴトシ」（『莊子』）

「水撃三千里」は水面での助走距離三千里、「搏扶搖而上者九万里」は旋風により「九万里」の高みに一気に登り、「去以六月息者也」は「六月息」に乗り「南冥」を目指して去る、著者の解説では「六月息」は、夏の季節風（モンスーン）です。もともと、別の本によると「去りて六月を以て息ふ者なり」（六箇月の後に〔南の海に着いて〕休息する）と説明があります。

漢文の訓読には長い歴史があり、読みも解釈も“定説”があるように思いますが、本を比較すると多少の違いがみられます。

「怒而飛」を著者は「怒^どして飛べば」と読み、『漢字源』は「怒^{ハゲ}ンデ飛ベバ」と読んでいます。素人考

えでは、「強いエネルギーの発散」に賛成です。

「六月息」を「夏の季節風」ととるか、「六か月飛んで休む」とするか、それとも「六か月間休むことなく飛び続ける」と読むか、意見の分れるところですが、「扶搖」（旋風）が出た後ですから「六月息」（夏の季節風）が（正解）だろうと私は勝手に決めています。
(2009/01/03)

慶長金

「○藤井茂三郎方〔中島組大年寄役、三国屋の事なり〕、この砌り専ら家普請致し候由、去る六月上旬、一類ともそのほか古き別家の者打寄り談合の上、家作に取掛り候趣に御座候、この藤井近來甚だ不印にて、先亭幾三郎も大いに案勞致し、それにてはこれ有るまじく候へども、つひに若死致し憐れの次第に、兼ねて承り及び申し候借銀も、大分出来候やに候へは、皆々打寄り談合のところ、如何とも致し方無く、この時こそ先祖より申し伝

へし用意金を出し、時節を以って入れ戻し致し候へば、先祖への申し訳も立ち申すべしと、やうやうそれに治定致し、この間右申し伝への空蔵を開き候ところ、兼ねて書付けの通り其土三尺三寸堀り候へば、その下に石の櫃あり、その箱に大きな瓶六つ有り、蓋に長の字一字づつ書き付け有り、当主茂三郎あけ候ところ、千両箱数多これ有り候ゆへ、先づ三箱取り出し、後は元の如くにして納め置き、右の金箱を仏前へそなへ、右の趣を申し断り、箱を開き候へば、皆々慶長金のよし、この砌り上方より参り居り候商人、百両所望致し、代金を百九十両出し候由」（安政二年（一八五五）記事、『近世風聞耳の垢』）

○藤井茂三郎の家（中島組大年寄役、三国屋）では、この節家普請をしたそうである。去る六月上旬に親類その外古い別家の者が集り相談の上家作に取りかかった。この藤井の家は近頃はなはだ「不印」で、先代の幾三郎も大いに苦勞し、そのためでもないだろうが可哀想に若死をしてし

まった。借銀も大分できたようなので皆々が相談し、「如何とも致し方無い。この時こそ先祖より申し伝えの「用意金」を出し、都合の良いとき入れ戻しをすれば先祖への申し訳も立つだろう」と決定、近頃、例の申し伝えのある空蔵を空け、書付けの通り真土を三尺三寸掘つてみると、その下に石の櫃があり、その箱に大きな瓶が六つあった。蓋に「長」の字が書付けてあった。当主の茂三郎が明けてみると、千両箱が沢山あったので、先づ三箱を取り出し、後は元のように納め置き、右の金箱を仏前へ供えて経緯を説明し、箱を開けば皆々「慶長金」であったという。上方より来っていた商人が百両を所望し、代金を百九十両出したそうである。

「後日に承り候ところ、土中より堀り出し候事はこれ無く、全く虚説なり、尤も三国屋近年不勝手なれど用意金三千両これ有り、みな慶長金なり、内千両売り候由、……主人茂三郎の直談に御座候」（同上）

後日に聞いたところでは、土中より掘り出したことはなく、それは全くの虚説である。三国屋は近年不勝手ではあったが、用意金三千両があり、みな慶長金であった。その内千両は売ったという。主人茂三郎から直接聞いた話である。

【不印】ふじるし。（『広辞苑』）

不首尾・不本意・不如意などの隠語的な言い方。状態のかんばしくないこと。

【慶長金銀】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代最初の金銀貨で、質的にも最良。小判・一分判は、一六〇〇（慶長五）から江戸の金座を中心に京都・佐渡などで製造され、丁銀・小玉銀は翌年から伏見の銀座で製造が開始されたが、大判の製作開始は不明。〇九年には金一兩＝銀五〇匁の相場が公定され、九五（元禄八）に元禄金銀が発行されるまで全国統一の貨幣として流通した。通用当時は単に金銀とよばれたが、元禄改鑄以降に慶長金銀の名称が定着した。

同じ「一両」でも、時代によりその価値が大いに違うことが解ります。

五年後の安政七年（一八六〇）、国前寺「御触留帳」によると、「慶長金武蔵判百兩二付、代り金五百四十両八匁」、つまり慶長小判一〇〇兩を持参すると、安政小判五四八兩を渡すとあります。

【安政金銀】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代安政年間（一八五四・六〇）発行の金銀貨幣。一八五八年（安政五）、日米修好通商条約が締結され、そのなかで外国貨幣の同種同量での通用が承認された。幕府は翌六年に貨幣の改鑄を実施し、同年六月に安政小判・同一分金・同二朱銀を、ついで八月に安政一分銀を、さらに十二月に安政丁銀・同小玉銀（小粒銀・豆板銀）を発行した。そのほかに、安政三年六月には安政二分金を鑄造した。また安政六年に幕府は洋銀（メキシコ・ドル）に「改三分定」の極印を打ち、国内での通用を認めた。（2009/01/04）

盆の掛取り

「当年五月廿三日雨降り、その後六月九日、廿三日、少々雨そばへ位の事にて、日々早つづき暑気大いにつよし、七月十三日夕、無雷にて大雨降り、諸人大喜悦のところ、十四日夜、掛取り最中大雷雨にて誠に長く、漸く夜半後より雨止み、掛取り往来すれども間も無く夜明けに相成り、掛取り一向約らずと申す事なり、折悪しくて好雨をうとみしとぞ。」（安政三年（一八五六）七月十四日記事、『近世風聞耳の垢』）

今年は、五月廿三日に雨が降ったきり、その後六月九日、廿三日に少々雨が「そばへ」たぐらいのことで、日照り続きで大変暑かった。七月十三日夕、無雷の大雨が降り、みんな大喜びをした。十四日の夜は、「掛取り」最中に大雷雨が長く続き、漸く夜半後より雨は止んだが、掛取りが行き来すれども間も無く夜明けになり、

掛取りは仕事が一向まとまらなかったと、この好雨をうらんだという。

【戯える】そばえる。（『広辞苑』）

① 馴れて戯れる。ふざける。あまえる。② 動物がじゃれる。馬などがあばれ騒ぐ。③ 風がおだやかに吹く。④ 日が照っているのに、雨が降る。（俚言集覧）

【そばえる】（『広島県方言辞典』）

驟雨。

『広辞苑』の説明を見て、「日の照りながら雨が降るアイルランドのような田舎へ行こう」という詩を学校で習ったことをつい思い出しますが、広島では「にわか雨」として使います。にわか雨はすぐ止みますので、「日が照っているのに、雨が降る」とと同じでしょう。

【二季払】（『広辞苑』）

盆・暮の二季に支払をすること。盆暮払。

大晦日の借金取りの活躍はよく知られるところですが、盆の掛取りの様子は知りませんでした。掛取りが動き回るのは十四日の夜のように、除夜の鐘ならぬ十五日の朝になると〈時間切れ〉になるようです。

(2009/01/05)

丁打

「廿六日、戊申、曇、熱甚、先達て御出来之那波列翁大炮搏試有之、見分として朝より船にて参、江波丁打場也」(慶応三年(一八六七)六月、『村上家乗』)

(慶応三年六月)廿六日戊申、曇り。今日は大変暑い。先頃お作りになった「那波列翁大炮」の試射があるので、見分のため朝より船で江波の「丁打」場に行った。

「那波列翁大炮」とは「ナポレオン砲」のことで、一二斤野戦砲。フランスで設計され、一二ポンド(二・四kg)の鉛製椎の実形榴弾を射出する大砲です。
(HP「維新の嵐」参照)

明治二十年(一八八七)発行「広島市街明細地図」によると、江波(広島市中区)には皿山を標的に陸軍の「射的場」が描かれています。現在もその跡が道路として残っています。大砲の試射の話ですから「丁打場」は「試射場」のことかもしれません。

「藤重氏ハ中島流ノ砲術ヲ以テ鳴ルモノ、格之助少小既ニ其門ニ学ブ所アリ、正ニ明年春ヲ以テ堺七堂ヶ浜ニ丁打ヲ行ハントス、丁打ハ即チ砲術演習ナリ」(石崎東国著『大塩平八郎伝』)

【町打】 ちよううち。(『日本国語大辞典』)
距離を定めて的を立て、銃砲の射撃を練習すること。
(2009/01/06)

御透覧

「○六月十五日、夜六ツ半時頃、京橋南側中程より少し西寄りの所、橋柱二本朽ち折れ橋板七八枚たわみ落ちる、今宵この川に御供舟三艘鰯り有りし

が、出汐につれて本川へ乗り廻し候に、橋より下より囃子を始め候ところ、みな人橋の上に集り、南側の欄干へすがりおし合ひせぎ合ひ見物する内、兼ねて橋柱朽ちたりしやら音もなく折れ、橋板ドロドロとたわみ折れたる音は、恰かも雷の耳もとへ落ちたる如く、見物の人は貴賤老若男女、将棋たをしに水中へ落ち入り、大音にてヤレ助けくれ／＼といふ、また老人小児は唯泣き叫ぶ有さま、実に目も当てられぬ有様なり、橋上には甘酒店あまた並び居たりしが、人勢に折りかへされ、かの水中へ落ちたる人の上へ落ちかかり、あま酒の煮へたるにて頭面を焼き、炭火にて背を湯火傷をせし者ありて大さわぎなり、さてまた橋上群集の人は、スハ橋の落ちたるはとて、東西へ遁れ行く人々に、押し倒されたる人の上を踏みて行くあり、踏まれて泣きさけぶ男女の声は山に響きて実には鼎の湧くが如し、その内東西より舟数艘乗り出し、我一と力を出し助け上げたり、……

○当年出船の御供船左の通り「新町組」京橋町・胡町・……右都合十四艘出る、みな囃子有り、十

八日水主町御屋舗にて若殿様御透覧有り。」（嘉永五年（一八五二）六月の記事、『近世風聞耳の垢』）

（嘉永五年（一八五二）六月十五日夜七時ころ、京橋の南側中程より少し西寄りの所の橋柱二本が朽ち折れて、橋板七八枚たわんで落ちた。今宵この川で御供船三艘が飾り付けをしていたが、出汐につれて本川へ乗り廻すため橋の下より囃子を始めたところ、沢山の人が橋の上に集り、南側の欄干へ寄つかかり、おし合ひせぎ合ひ見物するうち、朽ちていた橋柱が音もなく折れ、橋板がたわみ折れ、その音は「ドロドロ」と雷が耳もとへ落ちたやうで、見物の人は貴賤老若男女、将棋倒しに水中へ落ち入り、大声で「ヤレ助けくれ」という。また老人小児は泣き叫び、目も当てられぬ有様であった。橋の上には甘酒屋が沢山店を出していたが、人勢に折りかへされて、水中へ落ちた人の上へ落ちかかり、煮えた甘酒で頭面を火傷をし、炭火で背を火傷をした者がいて大騒ぎとなった。また橋上の群集の

人は、「それ橋が落ちたぞ」と東西へ逃げ、押し倒された人の上を踏んで行く。踏まれて泣きさけぶ男女の声は山に響いて鼎の湧くようであった。その内東西より舟数艘乗り出し、懸命に助け上げた。……○当年の出船の御供船は次の通り〔新町組〕京橋町・胡町……右都合一四艘出る、みな囃子があった。十八日には水主町御屋舗で若殿様が「御透覧」された。

〔厳島明神祭礼御供船之儀ハ、佐伯郡地御前御社旅所ト唱、年々五月五日明神彼社へ渡御、六月十七日厳島還御之節供奉致二付、十六日晚景各町供船紅燈繡幕相逐絲竹金鼓相簇広島川口を出る事有之〕（宝暦八年（一七五八）『廿日市町史』『プログ』2007/07/31 参照）

厳島明神の祭礼（管弦祭）の御供船は、佐伯郡地御前御社を旅所といい、毎年五月五日、明神はその社へ渡御され、六月十七日に厳島へ還御される。そのとき供奉するため、十六日の夕方に各町の供船は紅燈・繡幕で飾立て、笛太鼓で賑

やかに、広島川口を出発する。

厳島管弦祭で御供船が御管弦船の「御供」をするのは一七日ですから、前日の一六日晚に広島を出発しています。その前日一五日は船の飾りや囃しの練習をしたのでしょうか。この時京橋が崩れる「前代未聞」の事故が起きています。

一八日、御供が済んで広島に帰った御供船を水主町で若殿様が「御透覧」しています。

【透き見】すきみ。（『広辞苑』）

物のすきまからのぞいて見ること。のぞきみ。

「御透覧」は「おすきみ」と読むのでしょうか。

（2009/01/07）

尾道御着船

「 十六日

一源助様、夜四つ時分尾道御着船、次郎右衛門様同九つ時分御出船、広島へ御戻り被成候」（宝永二

年（一七〇五）閏四月、『十四日町年誌』）

（宝永二年（一七〇五）閏四月）十六日、（御調郡代官、山香源助様は夜四つ時分（午後一〇時ころ）尾道へ御着船になり、（御調郡代官、松原）次郎右衛門様は同九つ時分（午前零時ころ）御出船になり、広島へお帰りになった。

御調郡の代官二人は、半月ごと交替して尾道で勤務します。陸路を使わず、山香源助を尾道まで送届けた船が松原次郎右衛門を乗せて広島に引返したのでしょうか。夜間に着いて夜中に出船しています。

「中世以来の航法である地乗り（広島藩では安芸路乗りともいう）は、陸岸に沿いながら山や地形を目標に航行するため、自然昼間航海を主とするものであった。しかし近世になると、こうした地乗りに加え、沿岸部を離れて沖合いを航行する沖乗りが行なわれるようになったことは、近世海運史上大きな意義をもつものであった。沖乗りは、内海では中乗りともいわれ、およそ図二七九のように、鞆―田島―弓削島―岩城島―鼻繰の瀬戸―御手洗

―津和のコースをとり、西廻り海運の発展とともにいつそう活発となっていた。」（『広島県史』）尾道―広島間航路は「安芸路乗り」航路と思われるが、夜間も船が動いているのは驚きです。

「十七日……

一殿様今日大坂御乗船二付、源介様余崎へ御出被成候……

廿日

一殿様御機嫌克今夕亥刻余崎へ御船繋り被為遊、同丑刻時分御出船被為成候、源助様首尾能御肴御差上ケ、年寄徳右衛門も如例御肴首尾能差上ケ申候」（宝永二年（一七〇五）閏四月、『十四日町年誌』）

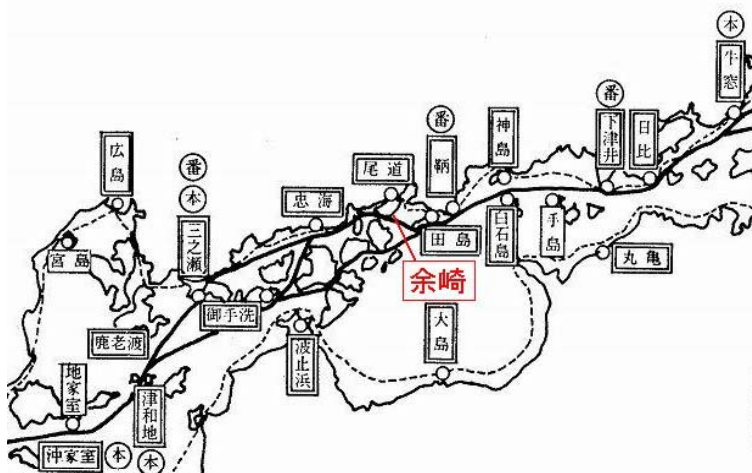
十七日、殿様は今日大坂で御乗船になるので、

（代官）源介様は余崎へ出かけられた。

廿日、殿様は御機嫌よく、今夕亥刻（二〇時ころ）余崎へお着きになり、同丑刻時分（御前二時ころ）御出船になった。源助様は首尾能く御肴を差し上げることができた。尾道の年寄徳右衛門も何

時ものように御肴を差上げた。

図279 内海航路図 (『瀬戸内御手洗港の歴史』)



浅野綱長は参勤交代の帰路、大坂から船を利用しています。尾道の対岸の島、向島の最南端、余崎に船を繋り、一休みして尾道に寄港せずに出船していますが、これも夜間のことです。この船は「沖乗り」でしょうか。北前船のような大型船ではないだろう、するとこれも「地乗り」だろうかと思えます。

(2009/01/09)

御牽馬

「一毛利飛驒守様、御機嫌克巳ノ下刻笠岡やへ御入り被為成候……」

一御宿数三軒

一御人数百八十式人 旅簞錢御壺人二付七十式文宛被遣候

内三十疋人

御侍衆

四人

御医師衆

一御牽馬三疋

一片上通し馬式疋

一同通し人足百十人

一尾道より三原迄送り馬六十一疋

一同人足八十五人」（宝永二年（一七〇五）閏四月、「十

四日町年誌」）

毛利飛騨守様は御機嫌よく巳の下刻（午前二一時前）に休泊所笠岡屋へお入りになった。

御宿数は三軒、御人数一八二人（旅籠錢は一人七二文宛頂いたの内、三一人は御侍衆、四人は御医師衆。

「御牽馬」は三疋、片上からの「通し馬」は二疋、同通し人足二一〇人、尾道から三原迄の「送り馬」は六一疋、同人足八五人。

閏四月十日、毛利飛騨守様（徳山藩の第三代藩主、毛利元次）の御下りの一行が、尾道で「御昼休」をとったときの記録です。馬については、「御牽馬三疋」「片上通し馬貳疋」「尾道より三原迄送り馬六十一疋」を使っています。「送り馬」は「継馬」ともいいます。

【継馬】（『日本史用語辞典』）

次馬とも書き、駄馬・伝馬・継伝馬ともいう。江戸時代、宿に常備した宿次用の馬のことをいう。

尾道宿の駄馬は次の三原宿まで荷物を運びます。

【通馬】（『日本史用語辞典』）

江戸時代、宿駅ごとに継ぎ替えずに、目的地まで同じ馬を雇うべにして通行すること。またその馬。

「片上通し馬」とありますから、片上（岡山県備前市）の宿から徳山まで「通し」で使ったのでしょうか。

【引き馬】ひきうま。（『広辞苑』）

貴人または諸侯などの外出の行列に、鞍覆をかけて美々しく飾り、連れていく馬。

御牽馬は、行列に華を添えるためのものかもしれませんが、本来は殿様用の馬として準備したものでしょう。

（2009/01/10）

汐垣

「今日ハ幸ひ、風もひかた故よろしく、則持帆にて、おんとの瀬戸もぬけ通り、夫より則真とも梶にて、申の方がくをさして、広島の方へ船ヲ向ケ、帆かけながら行けり。地方にハ、大イなるはたを川口ニ上ケてみえけり。夫より地方に、よし村(吉浦)と云あり。此在所ハ家数多し。よき土地と相見へる。扱、地かたのはなを、吉村(浦崎)といへり。沖のはなをたかすと云フ。是ヲ通リて颯行しに、ミの島と云アリ。又小富士島といふあり。右手の方にあたつて、うじ島アリ。地方に芸州のカイタ島といふあり。村にて在家と見へわたれり。又南にあたつて、矢野といふ島あり。夫よりミほのしま、草津島あり。廿日市地の御膳なといふ島、其外無名の島数多かりき。中々筆にも印しがたくぞありけり。扱、たんなぎといふ島、廻り三里計、是ニハ数多人家有之。相応の程よき島なり。是よ

り広島へ壺里有よし。是ハ広島北の方にある島なり。扱、広島の汐垣述、日本へかくれなき名高き島なるよし。与四郎いゝけり。此汐垣と申ハ、海中の瀬の上へ立並べたる竹垣、長サ五丁或ハ拾丁、拾貳、三丁にて、五、六ヶ所も有之事ニ候。沖より見渡スに、川口遙ニして、只海の中に竹の生したるが如くにそ、其汐垣見へ渡れり。いと珍敷もの也。扱、此辺汐干にてハ、凡壺里計も引申スよし。大汐引之頃、此汐がきのきし迄汐干になるといへり。此広島の川口見ゆると、船頭与四郎頼て小はたを立る也。此のぼりの頃にハ、鶏の尾の如く鳥の毛ヲ数多からげ、まん丸に下けて立たるもの也。何れの船にても、此川湊へ入船の時、是ヲともに立て入れハ、川口の難も是なきよし。是ヲまよけ幡といへり。扱、小早にて立たる小はたハ、いづれも白黒の鯨幡也。且広島ハ川湊にして、川口より貳、三丁海の方甚あさふして、塩まちを致さずハ、川口え入船も出来ぬ位に至て浅き所おゝし。尤、川口広き間の事故、船の通ひよき、少しハ深みもあるように見へ候へ共、与四郎殿ハ、あ

まり勝手をもくわしからぬよふに相見へ、めつたに浅き所ヲ通る事也。彼是程なく、広島の川へ入船いたし候。此川の入口に、右の方松生繁りて、小き島一ツ有之。是ヲ丸子島と云い、又丸子鼻共いふ。扱、川ヲ行事、船の居所迄ハ半里也。某等兩人ハ、此川入口より陸へ上り、歩行してそ行ける。広島の中、屋敷町双方にあり。是ヲ通りて行しに、かしばたの方へいらく作り松も多し。是ヲ又余程通り、扱、広島の御城下へぞ出けり。川入口より広島の前迄、道のり半道、宿本川筋、室屋藤左衛門」(佐藤利夫編『海陸道順達日記 佐渡廻船商人の西国見聞記』)

今日は幸いに、風も「ひかた」(西南風)なので、追風をうけて音戸の瀬戸も抜け通り、それより「真臚梶」で、南西の方角を指して広島の方へ船を向け帆走した。陸地には大きな旗を川口に上げているのが見える。やがて陸地に「よし村」(吉浦)という所、家数も多くよい土地とみえる。さて地方の端を「吉村崎」(吉浦崎)といい、沖

の端を「たかす」(高須)という。ここを通過て行くと、「ミの島」(能美島)という島がある。また「小富士島」(似島)というのもある。右手には「うじ島」(宇品島)がある。陸地には芸州の「カイタ島」(海田)という村があり家々が見える。またその南に「矢野」といふ島がある。それより「ミほのしま」(仁保島)、「草津島」、「廿日市」、「地の御膳」(地御前)などという島、そのほか無名の島が沢山あるので書き切れない。さて、「たんなぎ」(旦那)といふ島は廻りが三里ばかりで人家も多く、相応の程よい島である。これより広島へは壹里あるそうだ。この島は広島の方にある島である。

さて、広島の「汐垣」といって、有名な所だと船頭の与四郎がいう。この「汐垣」とは、海中の瀬の上へ立並べた竹垣で、長さ五丁一〇丁、一二、一三丁もあり、五、六ヶ所もあるという。沖より見渡せば、川口は遙か向うにあつてただ海の中に竹の生えたように見える。その汐垣を見渡して通る。大変珍しいものである。この辺

では干潮のとき凡菴里ばかりも海が引き、大潮ともなると、この汐垣の岸まで干潟になるという。この広島川の川が見えると、船頭の与四郎はやがて小旗を立てる。この「のぼり」？の頃には、鶏の尾の様に鳥の毛を数多からげて、真ん丸に下げて立てる。どの船でも、この川湊へ入船の時はこれを艫に立てて入れば、無事に川口を通過できるという。これを「魔除け幡」というそうである。小早船に立てている小旗はどれも白黒の鯨幡である。広島港は川湊なので、川口より二、三丁まで海は甚だ浅く、潮待ちしなくては川口へ入船もできぬほど浅い所が多い。もつとも、川口の幅は広く、船の通りやすい深みも少しはあるように思えるが、与四郎殿はあまり勝手がわからぬと見えて大変浅い所を通る。そのうち、広島川へ入船した。この川の入口に右の方に松の生繁った小さい島がひとつあり、丸子島（江波、丸子山）といい、また丸子鼻ともいう。半里ほど川を行くと、船着き場があるが、我々兩人はここより上陸して、歩いて

行った。広島の家中の屋敷町が両側にあり、ここを通って行く。河岸端は色々の作り松も多い。余程歩いて、広島御城下へ着いた。川入口より広島宿まで道法は半里、宿は本川筋の室屋藤左衛門。

長文の引用になりましたが、これは、佐渡の廻船商人、笹井（浜田屋）秀山による文化十年（一八一三）の旅日記『海陸道順達日記』の一部です。広島湾の様子が詳しく書いてあります。

「汐垣」とは、海苔簀ひのきのことでしょう。

「一九二五年（大正一四）ごろまでは、初秋に河道内や河口の干潟などの浅所に雑木の枝や女竹を垂直に立て、沖から流れてきた（ノリ）の胞子をつけ、生長した葉体を採取する天然採苗、垂直ひび養殖が行われ、漁場も限られていたので、……」（『広島県大百科事典』）

「真とも」という面白い言葉が使っています。

【真面】まとも。（『広辞苑』）

(トは接続助詞ツの転) ①正面で向き合うこと。
ましようめん。「―に吹きつける風」②正道な
こと。また、きちんとしているもの。まじめ。

【真爐】まとも。(『広辞苑』)

①船のまうしろの方向。真向き。②風が船の後
方からまっすぐに吹くこと。

『広辞苑』は二つの言葉をあげていますが、どち
らが本来の意味でしょうか。どうも、帆走に関係す
る言葉のように思われますが……。(2009/01/15)

申試

「春寒殊甚候、御宿痾追々御快方との儀賀慶此御儀
二候、然ハ、あこぎ二候へ共、又々五斗印御所望
申度候、不苦候ハ、此ものへ御恵贈可被下候、是
も御舎弟御咄の趣も有之、御無心又々申試候、よ
ろしくたのみ入候」(岩室家文書『頼家書翰』)

春の寒さが殊に強いこの頃ですが、お困りの持

病が快方にとのこと、おめでたい限りです。さ
て、厚かましいお願いですが、またまた「五斗
印」を頂きたいと思えます。できましたらこの
使いの者にお恵贈ください。これも御舎弟の御
話もあり、御無心をまた「申試」します。宜敷
お願いします。

これは頼春水が広島町大年寄、(室屋)岩室喜右衛
門に宛てた手紙の一部です。「五斗印」とは「五斗
味噌」のことだそうです。

【五斗味噌】(『広辞苑』)

(豆二斗・糠ぬか二斗・塩一斗を搗き合せて造るか
らいう)ぬかみそ。

旧家のぬか床は一〇〇年を経たものもあるそうで
すが、室屋のぬか床も評判だったに違いありません。
「御無心又々申試候」とあります。無心をする
と、相手に心理的負担をかけまいとして、「試しに
言ってみますが……」と婉曲な表現をしています。
今は単刀直入な「下さい」……が幅をきかせている
ようですが、「申試」もなかなか味のある言葉です。

(2009/01/17)

母親の体調のことに逆戻りです。

咲語

「大児至極肥立申候由、大慶奉存候」（寛政六年（二七九四）九月両親宛、頼山陽書翰、『頼山陽書簡集続編』）
大二郎の「肥立」が大変よいとのこと、嬉しく思います。

これは一五歳の山陽が、転地療養先の竹原から両親に出した手紙です。次弟、大二郎はこの年の五月二六日に生まれました。「産後の肥立ち」という言葉で「肥立」を覚えていたので、弟が「至極肥立」したと書いてあると、アレと誤ってしまいます。

【肥立ち】（『広辞苑』）

（「日立ち」の意）ひだつこと。日ごとに成長すること。「産後の―が悪い」

若い人の言い方なら「ソーナンド」というところですが、辞書の例文「産後の肥立ちが悪い」では、

「……先以寒氣弥増ニ御座候所、御揃弥御機嫌宜敷被遊御座候哉、承度奉存候、此地両家打揃無異罷居申候、御安意被遊可被下候、大二郎も殊外丈夫ニ有之、咲語杯も有之、五香劑先便被下候ヲ飲セ居申候、随分能ク飲ミ申候、母親大人追々御快復之方ニ被成御座候」（寛政六年（二七九四）十月、頼春風宛山陽書翰、『竹原市史』）

寒くなってきましたが、皆様お元気でしょうか、承りたく存じます。こちら広島では両家とも無事に過しておりますのでご安心下さい。弟、大二郎も殊の外丈夫で、「咲語」などもあり、先便で頂いた五香劑を飲ませていますが、随分よく飲みます。母上も追々御快復の様子です。

これは山陽が竹原の叔父、春風に出した手紙の一部です。「五香劑」とは医師、春風が処方した薬でしょうか。生後五ヶ月ともなると「咲語」などもあるようです。

【咲】（『漢字源』）

（動）わらう（ワラフ）。えむ。口をすぼめてほとわらう。〈同義語〉↓笑。〔国〕さく。花がさく。《解字》咲はもと、「口十音符笑」で、口を細めてほとわらうこと。咲は、それが変形した俗字。日本では、「鳥鳴き花笑ふ」という慣用句から、花がさく意に転用された。「わらう」意には笑の字を用い、この字を用いない。

「咲」≡「笑」が本来の意味だそうで、手紙でも「御一咲可被下候」の文言はよく見かけます。すると「咲語」は「笑語」のことかと思いますが、

【笑語】（『広辞苑』）

①笑いながら語ること。②笑いばなし。おかしいはなし。

これは当てはまりません。単に「笑う」ことでし
ようか。

「大児芸能日々二相覚申候、御察可被下候、祖叔父様第一之御馳走と相成申候」（寛政七年（一七九五）

九月、春風宛山陽書翰、『竹原市史』）

大二郎も日々に「芸能」を覚えていきます、想像してください。これが祖叔父様には第一の御馳走と思います。

「大児成長家内不残多門之者二至ルマデ之名ヲ呼申候、其聡慧二而喜び申候」（寛政七年（一七九五）十二月、春風宛山陽書翰、『竹原市史』）

大二郎も大きくなり、家内はもちろん多門の者まで名を呼んでいます。その聡慧さに喜んでいきます。

この大二郎は、翌寛政八年（一七九六）五月痲瘡のため夭折しました。

（2009/01/18）

聞ケ不申

「十月廿三日出之御尊書当月七日相達、特ニ私へ之御細書有之感戴敬誦仕候、愈御機嫌宜敷被遊御座

恭喜之至奉存候、其佗両家大小何も御安泰御座候
由大慶奉存候、当地叔父大人様愈御壮健、寒氣ニ
も差て御聞ケも不被成、不絶公私教学被成候、御
安意可被遊候、次ニ私義不相替無異罷在候、此節
ハ寒ニモ入候而、氣候追々嚴凝ニ罷成候へ共、私
義ハ一向聞ケ不申、達者勤学仕居申候」(寛政九
年(二七九七)霜月、父春水宛山陽書翰、『竹原市史』)

十月廿三日出しのお手紙、当月七日に届きまし
た。特に私宛の御細書、有難く拝読しました。

お元氣とのこと喜ばしい限りです。そのほか両
家大小いづれも御安泰とのこと喜んでおりま
す。こちら(江戸)でも叔父様(頼杏坪)は御壮健
で、寒氣でもたいして「御聞ケ」にもなされず、
たえず公私の教学をしておられますのでご安心
下さい。私も相替らず無事です。この頃は寒に
も入り、氣候も段々と厳しくなってきましたが、
私は一向に「聞ケ」なくて達者に勤学しており
ます。

寛政九年(二七九七)、一八歳の山陽は杏坪の上番

に伴われて江戸に行き、昌平黉で学びます。その頃
の父親宛の手紙です。書中「聞ケ」という珍しい言
葉に出会いました。

その意味は何となく解ります。叔父杏坪は寒氣を
あまり問題にしてなく。山陽も寒さに負けず元氣に
勉強している……。これから考えて、「聞ケる」は
「効ける」＝「影響される」と理解したらどうでし
ょうか。

(2009/01/19)

身上為持

「乍恐御願申上ル口上之覚 賀茂郡下市村
一私忝弥太郎儀身上為持大坂へ登せ申度事存候間、
当四月より丑年迄中年二年之間御暇被遣被下候ハ
、難有可奉存候、尤於大坂宿道頓堀幸橋南詰阿波
屋仁右衛門所ニ逗留仕せ度奉存候、此段宜被仰上
可被下候、為其乍恐以書付願申上候、以上
亥三月

年寄

半三郎殿

紺屋又十郎

年寄庄屋兼役正三郎殿

町与頭

徳左衛門殿

三右衛門殿

地方与頭

作左衛門殿

平五郎殿（明和四年（一七六七）『竹

原市史』）

私、紺屋又十郎の忝、弥太郎を「身上為稼」のため大坂へ行かせたいと思いますので、当四月より明和六年（一七六九）まで二年間御暇を頂きますようお願いします。大坂での宿は道頓堀幸橋南詰の阿波屋仁右衛門の所に逗留させます。よろしくお取次をお願いするため恐れながら書付を差上げます。

いうまでもなく「弥太郎」は頼春水です。延享三年（一七四六）生れですから、弥太郎二二歳のときの文書です。「身上為持大坂へ登せ申度」とあります。まるで大坂に出稼ぎに行くような書き方です。「二年之間御暇」をお願いしていますが、他国に「出稼ぎ」をするには年寄の許可を要したのでしょうか。

【頼春水】らしいゆんすい。

延享三年（文化十三年（一七四六）一八一六）。広島藩儒。諱は惟完または惟寛、字は千秋・伯栗、通称を弥太郎、号は春水・霞屋・拙巢・和亭などと称した。延享三年六月晦日賀茂郡竹原下市に生まれる。父は亨翁（惟清）、母は道工助右衛門の女中。本姓は岡本氏。先祖は三原の人で小早川隆景に仕えたが、のち正茂（道円）のとき竹原下市に住し、商人となつて頼兼屋と称した。そののち、姓を屋号の頭文字をとつて中国風に「頼」と改めた。春水は幼い時から学問を好み、竹原照蓮寺の獅絃に学問の手ほどきを受け、同寺の客僧超倫に就いて書を学んだ。次いで郷医塩谷志帥の家塾竹原書院に学び、十四歳のとき忠海の平賀中南に、十九歳のとき大坂に行き、趙陶斎を泉州堺に訪ねて書を学んだ。いったん帰郷したのち明和三年二月、二十一歳のとき再び父の指示に従つて大坂に出て、片山北海の混沌社に入学し、朱子学を修めた。その後は江戸

堀に家塾を開き、三十六歳まで町儒として活躍した。……(井野美津子)、『三百藩家臣人名事典』

(2009/01/21)

門触

「一礪宮神主淡路旧冬之内礪宮境内立木無案内数本元伐り仕、境外御留新宮山之内石をほり取、去ル丑年境内風折木圍ひ置候松材木無案内取散し、彼是我儘不埒之取斗……」

一三町小頭共之内当春礪宮居宅普請ニ付町方合力夫之儀門触ニ仕候内、門触ニ仕候儀者役人差図無之候得者決而不相成事ニ候処、右不埒之仕かた不届ニ付急度可申付候へとも、是又右ニ准し於用場叱り申付……」(明和四年(一七六七)『竹原市史』)

礪宮(礪宮八幡神社、広島県竹原市)の神主淡路が去年の冬、礪宮境内の立木を許可なく数本伐採し、境外の御留山、新宮山から石を掘り取り、丑年に風により折れ保存していた松材木を勝手

に使うなど、我儘不埒の取り計らい……

三町の小頭共のうち、当春の礪宮居宅普請のため町方の合力夫について「門触」をした。役人の差図なしで「門触」をするのは不届であるので用場で「叱り」……

この春、礪宮八幡神社の神主、淡路が居宅普請をした。そのために、許可なく境内の立木を数本伐採し、保管していた風折木を使い、境外の御留山、新宮山から石を掘り取った。また三町の小頭は「合力夫」を募って、役人の許可なく「門触」をした。いずれも「我儘不埒之取斗」である、という訳です。

「門触」という言葉の意味が不明ですが、「門張り」と同じではないかと思えます。

「本藩ニハ毎年三月御代官免状下渡トシテ巡回シ、町村吏ヲ招喚シ、町村各通ニ其年ノ土免幾何ニ定ムル旨ノ書面ト、外ニ庄屋ノ門前ヘ揭示スル剪紙二年号幾年、土免幾何、何郡何村ト書載セルモノヲ下渡セリ(之ヲ門張リト称セリ、庄屋兩人ノ村ヘハ二枚、役場別構ナレハ役場用ヲモ別ニ下附ス、故ニ数

村兼務ノモノハ数枚ヲ門前ニ掲ク……」(「淡交夜話」)

広島藩では毎年三月になると御代官が免状を下
げ渡すため村を巡回し、町村役人を集め、町村
ごとにその年の土免を幾らにするとの書面と、
ほかに庄屋の門前に掲示する剪紙を渡す。これ
には年号や、土免はいくら、何郡何村と書いて
ある。これを「門張り」といい……庄屋の門前
に掲示する。

「礪宮神主淡路」は唐崎常陸介です。

【唐崎常陸介】(『広島県大百科事典』)

一七三七年(元文二)〜一七九六年(寛政八)一一・
一八。竹原下市村礪宮神官(竹原市竹原町)。勤
皇家。初名は信徳、のち士愛、字宝爰、号赤斎。
一五歳のとき伊勢の谷川土清に師事し、七年間
学び、一七五七年(宝暦七)帰郷して子弟の教育
に従った。一七六二年(宝暦一二)宝暦事件に関
係していたということで代官所から閉門を命ぜ
られ、八月二二日藩外へ出ることを禁止された。

この国止めは一七九二年(寛政四)まで三一年の
長きに及んだ。しかし藩には無断で、江戸、京
都、九州などへ行って活動している。一七七三
年(安永二)従五位常陸介に任ぜられる。宋の文
天祥筆の「忠孝」二大字を礪宮境内の千引岩に
刻んだ(県史跡)。高山彦九郎と交際があり、彦
九郎の尊王活動を援助した。一七九三年(寛政
五)彦九郎が自殺するとあとを追ひ、一七九六
年(寛政八)十一月一六日、長生寺の先祖の墓前
で切腹し、一八日絶命した。(墓は県史跡)常陸
介は当時の人としてはまれな行動力を持った人
であつたが、世に入れられず、竹原でも孤立し
た存在で、彼を理解する人は少なかった。神官
としては賀茂郡の注連頭としても活躍し、神社、
小祠の所属をめぐる争いなども裁いている。書
は豪放、詩文、和歌ともに巧み。道工彦文の和
歌集『彦文家集』を編さんしている。郷賢祠祭
神の一人。〈太田裕子〉

(2009/01/22)

露封

「(端裏書)

喜右エ門様

内用露封

万四郎

御全家弥御平安可被成御座候、

乍例御無音申候、貴君御下血

之気味ハ其後如何御座候や……、」(室屋喜右衛門宛、

頼春水書翰)

お宅の皆様も御平安にお過しのことと存じます。いつもの通りご無沙汰をしておりました。

その後、貴君の御下血の具合はいかがででしょうか。

「乍例御無音申候」の「乍例」はどのように読めばいいのかわりませんが、「いつもながら」と読んだらどうでしょうか。

端裏書の内用「露封」の意味について調べました。

「金谷君(遷齋)へ、別書と存候内、人が取に参候故、露封差上候。」(文化八年(二八一)篠崎小竹宛、『頼山陽書翰集』)

金谷君(遷齋)には、別の手紙をと思いましたが、人が取りに來ので、「露封」のまゝ差しあげました。

「広江吉右衛門様

頼久太郎

略封答

露封託 八儀氏」(文政四年六月廿八日、『頼山陽書翰集』)

この手紙、封筒は略して、露封のまま八儀氏に托します。

「封」は手紙の「封」、「露」は「あらわす。あらわれる。表に出す。すけて見える。」(『漢字源』)です。すから、「露封」は「手紙の封をしない」ことでしよう。

(2009/01/23)

割合

「京ハ交道之六ヶ敷所ニ而、壹匁之物を囉へハ必壹匁ニ而かへす所ニ御座候、それか八ヶ間敷故よりすさわらぬ様ニ致風也、それ故人ニ義理を懸置候て望其報が上策と見へ申候、それ故清水の舞台より倒ニ落ると存し芝居をはつみ申候、是ハ其家内を一同ニ招申候故不得不芝居候也、家翁在坂之艱難彼是存合申候、されとも小生も富家之弁慶ニ而登楼などとは息の通フ内ハ致まじと存候、何卒疲臂ながら京師儒習之醜を一変致度存居候、それ故富家といつ方へ参る事ありても必割合ニ仕候幹也、其苦しさ御察可被下候」（文化九年（一八二二）石井豊洲宛、頼山陽書翰、『竹原市史』）

京都は交際の難しいところで、壹匁の物を貰えばかならず壹匁の物で返します。それが面倒なので、寄らず触らぬようにする風があります。ですから人に義理を懸けておいてそのお返しを

望むのが上策と見えます。ために清水の舞台より逆さに落ちる気持で芝居を奮発して招待します。その家族全員を招くので、「不得不芝居候也」、父上在坂時の艱難が思われます。しかし私も富家の弁慶（取巻き）として登楼などは絶対にしません。非力ながら、なんとか京都の儒者の醜惡な慣習を一変したいと思っています。だから金持とどこへ行くことがあってもかならず「割合」にしています。その苦しさをお察しください。

【割合】（『広辞苑』）

② 割当て。わりかん。

「不得不芝居候也」について、次のご意見を頂きました。

「芝居」には「うそをつく」「だます」「ごまかす」の意味もあるので、心ならずも一芝居うって相手をごまかす、おもねる、だますなどの意味かと思えます。したがって「芝居せざるを得ず」くらいに訳しては……とおもいます。」（2009/01/24）

為慰

「拝披、弥無御異状、為慰、玆敷品共一籠賞翫不過之、家内大悦二候」(岩室喜右衛門宛、頼春水書翰)

お手紙拝見しました。いよいよ御無事とのこと、「為慰」。珍しいお品一籠、美味しく頂きました。家内も大喜びでした。

学者の手紙だけあって、珍しい言葉に出会います。「為慰」は「慰と為す」と読めそうです。

【慰】(『漢字源』)

②「名」なぐさめ。まずこれでよしという安心。

「以為小慰＝モツテ小慰ト為ス」

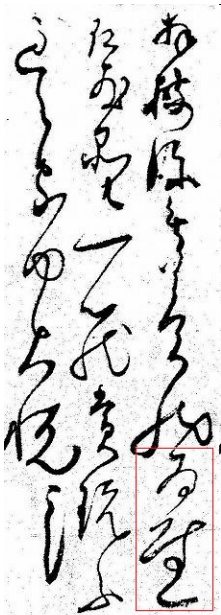
文脈から考えると「安心しました」でしょうか。

「欣慰」もよく使われています。

「手墨披閱、朝夕冷氣弥増候所、無御別事欣慰二候」(同上)

お手紙拝見しました。朝夕段々と寒くなってきましたが、お変わりなく「欣慰」(よろこばしく思う)です。

春水の手紙は〈電文〉のように大変簡潔で、普通なら長々と書くところを「拝披」で済ませています。



(2009/01/27)

泊附

「 覚

一賃人足 五人

一駄賃馬 八疋

右は竹村太郎右衛門儀、肥州天草支配所へ相越候二付、明四日大坂発足申候間、書面之人馬無滞様

御申付可給候、泊り附記之遣候、以上
西五月三日 竹村太郎右衛門内

江原清蔵

服部惣助

幸田半蔵

大坂より西国海道筋小倉まで船大里通り 右庄や
別当中

泊附

一西宮 一明石 一姫路 一三つ石 一板倉
一高屋 一三原 一四日市 一廿日市 一本郷
一とのみ 舟木 一下ノ関

翌朝舟にて内裏まで渡海、此書付於小倉我等共方
へ可被御返候、以上（宝永二年（一七〇五）「十四
日町年誌」）

天草の代官、竹村太郎右衛門嘉茂が、肥後国天
草の支配所へ行くため明四日に大坂を発足する
ので、賃人足五人・駄賃馬八疋を手配して欲し
い。そのため「泊り附」を遣わす。

大坂より西国海道筋小倉まで（船で大里を通る）
の庄屋・別当共へ

「泊附」

西宮から下ノ関まで。翌朝舟で内裏（大里）に渡
る。なお、この書類は小倉で我等にお返し下さ
い。

「泊附」とは宿泊地リストのようです。

「諸家中往来之節、先触差出し候面々、泊附無之趣
ニ相見候、右ニ付、旅行之日割難相知候ニ付、先
触差出候日限を目当ニいたし、宿々人馬寄置候由
之处、右日限之通旅行無之、自から人馬差支候儀
も有之哉ニ候、以来先触泊附書入可被差出候、其
上川支等有之、日割相違之節は、猶追先触可被差
出候」（享和二年（一八〇二）『御触書天保集成』）

諸家中の者で往来するとき先触を差し出す面々
でも、「泊附」を出さないように見受けられる。
旅行の日程が判然としないので先触を差し出し
た日付を日当にして宿々に人馬を集めている
が、思い通りに旅行ができず、結局自分から人
馬に苦勞することになる。これからは先触に「泊
附」を記入し出しなさい。川留のため旅程が狂

うときは「追先触」を出しなさい。(2009/01/29)

被成御入候

「昨日ハ御紙面致拝見候、如仰月迫いつも替らぬ事ニ御座候、弥御安穩被成御入候由欣慰之至ニ御座候」(文化三年(一八〇六)十二月、頼春水書翰)

昨日は御手紙を拝見いたしました。仰せの如く暮も迫りいつも替らぬ事でございます。ますます御安穩「被成御入」候とのこと喜ばしくおもいます。

「御安穩被成御入候」(御安穩お入りなされ候)という言い方は、手紙で見かける言回しですが、「被成御入候」には、解つたような解らぬような気がします。

「其後御安康可被成御入奉珍重候」(山県信七郎書翰)
その後御無事とのこと、めでたい限りです。

辞書でスッキリさせようと調べました。

【御入候】おいりそうろう。(『日本国語大辞典』)
断定の意を丁寧に表現する語。御座候。ございます。近世初期、書簡に用いた慣用語。*浮世草子・好色一代男「今更馴馴しく御入候へ共、たへかねて申まいらせ候」

これが求める答でしょうか。(2009/01/30)

戻り荷物

「乍恐御理り申上ル口上

一 竹原町浜之儀ハ専他国商人船入津之所ニ御座候、今度他国米不被為入候ニ付、塩浜并町中迷惑仕末々之もの迄礪と難儀仕申候間、何とぞ御赦免被為遣被下候様ニ乍恐奉願候

一 塩浜飯米春冬ハ夏も少シハ給申候へ共、あらしこと仕候故米大分給申候、常々地米と他国下米ハ直段よほど違申候ニ付、下直成を勝手ニ他国下米或者たいとう米常々飯米ニ仕候、米売手も世間江売

兼申、悪米ハ塩浜むきとて積参或者塩かへ又者貸付ニも仕候故、当分銀子所持不仕候而も飯米勝手多ク御座候、其上塩かへニ仕候へハ塩之払も能、縦町江南米ニ売申候而も戻り荷物ハ塩買申二付、下直成飯米給申勝手斗ニてハ無御座塩も売申候、……

一 当所之儀田畠ニ不応人数大分故、うきすきのもの多ク御座候、他国船出入仕候得ハ其顔ニ而渡世仕候、船より荷物上ケ銘々宿江取込申時船場より家々迄之日用買取、又者売払申時ハ家々より船場迄持遣ス往来之日用買ヲ家職ニ仕、小身成もの共只今指当り家職ニはなれ申候并上荷船之もの共迄迷惑仕候事

一 見世商家職ニ仕候者共米商を元として、或者塩竈茶たはこ等さしくわへ商売仕候処ニ、他国米より地米ハ高直故、飯米買のものも参不申外之商迄會テ無御座、尤他国米御入被為成候時分ハ、当所ニ而米売払申候得ハ則其代銀ヲ以当所ニ而塩并もめん木わたたはこ酒等諸事西国北国へむき申候商物戻り荷物ニ買申候処ニ、他国米売ニ不参候二付、

左様之売物曾テ不仕家職ヲ失商人共迷惑仕候事」
(元禄八年(二六九五)『竹原市史』)

竹原の町浜はもっぱら他国商人の船が入港する所ですが、この度の「他国米買入れ禁止」のため塩浜や町中が迷惑しており、末々の者まで「確と」難儀をしていますので、何卒許可を下さいますよう恐れながらお願いいたします。塩浜での飯米は春冬は勿論夏も少しは食べますが、荒仕事なので米を沢山食べます。地米と他国下米とでは値段が余程違いますので、安い他国下米や大唐米を常々の飯米にしています。米の売手にしても、一般向けには売れないほどの悪米を塩浜向きにと積んで来て、塩に替たり貸付たりしますので、当面銀子を持っていなくても飯米には不自由をしません。その上塩に替えるので塩も捌けます。町へ商い米として売っても「戻り荷物」に塩を買いますので、安い飯米が食べられるだけでなく、塩も売れます。……当所は田畠に較べて人口が多く、浮過の者が沢山いま

す。他国船が出入すればその御蔭で世渡りができます。船から荷物をあげて銘々の宿へ取り込むとき、船場から家までの日雇賃が入ります。

売るときも、家々から船場まで運ぶことを家職にしておりましたが、今は家職に離れ、上荷船の者共まで迷惑しています。店を構えて家職にしている者も、米の販売を中心に、塩・鰯・茶・煙草の販売もしていますが、他国米より地米は高値なので、飯米を買いに来る者はいません。他に適当な売物はありません。他国米が自由に入っていた時は、当所で米を売り払い、その代銀で塩や木綿・木綿・煙草・酒等、西国・北国向きの商品が「戻り荷物」として売れましたが、他国米を売りに来なくなつたのでこのような売物はサッパリ、家職を失う商人共は迷惑をしています。

《他国米移入禁止令》に対して竹原の役人が「乍恐御理り申上ル口上」を提出しています。「他国米」が竹原にとって必要な理由がよく分ります。こ

の嘆願書の御蔭か、「下市者、以各別飯米迄相調候儀御免二候」（竹原下市は特別に飯米用として他国米の買入れを許可することになりました）。

「戻り荷物」という言葉の意味は文脈から分ります。「戻り船」に積む荷物です。『広辞苑』で「戻り——」を調べると、「戻り馬」「戻り駕籠」「戻り鯉」「戻り車」「戻り梅雨」「戻り道」などがあります。

【戻り舟】（『広辞苑』）

荷物を運びまたは客を乗せて送ったかえり道の舟。
(2009/01/31)

くいてれ

「 覚

一 悪敷れいてんく 壱挺 遣主本町角屋三郎兵衛

一 同皿秤 壱挺 但壱貫六百目掛 右同人

一 同千木 壱挺 但壱貫目掛 遣主同町広嶋や半次

郎

一 同皿秤 壱挺 但壱貫六百目掛 遣主同町三九郎

一同皿秤 尅挺 但尅貫六百目掛 遣主下市三原屋
嘉右衛門

一 れいてんく 棹似せ尅挺 遣主同丁新米や源七

一同 尅挺 遣主板屋小路万屋又次郎

右之通見届符印付置申候、以上

戌ノ十月七日 神善四郎代川崎孫兵衛印

(宝永三年(一七〇六)『竹原市史』)

・不良品の「れいてんく」一挺 使い主本町角
屋三郎兵衛

・同皿秤 一挺(一貫六〇〇目掛) 同人

・同千木 一挺(一貫目掛) 使い主同町広嶋屋
半次郎

・同皿秤 一挺(一貫六〇〇目掛) 使い主同町三
九郎

・同皿秤 一挺(一貫六〇〇目掛) 使い主下市三
原屋嘉右衛門

・「れいてんく 棹似せ」一挺 使い主同町新米
屋源七

・同 一挺 使い主板屋小路万屋又次郎
以上、見届けて符印を付けておきました。

宝永三年(一七〇六)一〇月七日

神善四郎代川崎孫兵衛印

【釐等具】 れいてんぐ。(『広辞苑』)

釐・毫のようなきわめて少量のものをはかるための秤。明治初年頃まで金銀などの貴重品の重さを精密にはかるのに用いた。桿は黒檀・紫檀・象牙などで作った。れてぐ。りんだめ。

【皿秤・盤秤】(『広辞苑』)

量るべき品物をのせる、皿形の器のある秤。

【扛秤・扛秤・杜斤】ちぎばかり。(『広辞苑』)

近世、一貫目以上の重い物の目方を量るのに用いた大桿さおばかり秤。ちぎ。ちぎ。ちぎり。ちぎり。

【秤座】(『世界大百科事典』)

戦国大名が領内の衡制統一のため設置したものであるが、江戸幕府の秤座がよく知られる。江戸幕府は守随家しゆずいの江戸秤座(東三三カ国)、神家じんの京秤座(西三三カ国)を置いて、両家に秤の製作、販売、補修の特権を与えた。……神家は西日本の一五カ所……にでな出店を置き、名代役に支

配させていた。神家初代神善四郎は伊勢国白子の牢人で、京に出て公家に仕え秤座を開き豊後掾に任ぜられ、慶長（二五九六・一六一五）末年ごろには製品を二条城にいた家康に納め、やがて西国・三三カ国を分掌するに至った。秤座では、国や都市単位に約一〇年ほどの間隔で秤改めを実施した。秤改めは本座と出張所、出店の者たちによって地域内のすべての秤を提出させて検査し、正常な秤に改の焼印を押し印料をとった。悪秤は没収破棄したり、補修を加えた。補修も秤座の独占で、勝手に補修したために罪せられることも多かった。また古道具屋が古秤を売って罪せられることも珍しくなかった。

「棹似せ」とは何でしょうか。「似せ」を「偽」と考えることもできそうです。（2009/02/02）

類病

「御頼申上覚 賀茂郡下市村之内大石浦
一当浦獵師近年諸色高直ニ而獵仕入等も得仕不申、
渡世送り兼ひしと難儀仕申候段各様御存之通ニ御
座候、其上去々年之秋より去年中類病相煩大勢病
死仕、弥以難取続御座候ニ付去暮御船手へ痛之御
歎申上候処ニ……」

（享保元年（一七一六）『竹原市史』）
当浦（賀茂郡下市村大石浦）の漁師は近年は諸色高値のため漁の「仕入」などできず、世渡りに大変難儀しておりますことは皆様御存知の通りです。その上去々年の秋（正徳四年（七一四））より去年中に「類病」に罹り、大勢が病死しましたのでますます取続が困難となり、去暮に御船手へ援助のお願いをしましたところ……。

「獵師」と書いてありますが、「大石浦」「御船手」などから、漁師とみてよさそうです。「去々年之秋より去年中、類病相煩大勢病死仕」とあります。辞書で調べると、見当違いのことしか書いてありません。

【類病】（『広辞苑』）

症状が似たやまい。類症。

「大勢病死」なら、当然伝染病が考えられます。

「類病とは伝染病のことで、当時は「疫病」「時疫」

「瘟疫」などと記され、流行性の強い熱性の疫病を総称したものである。」（『廿日市町史』）

江戸時代の簡単な辞書『早引万宝節用集』（嘉永五年（一八五二）発行）でさえ、「るいびやう 類病」と載せてある言葉が現在の辞書にみられないとは、困ったことです。

（2009/02/05）

御蔭参り

【御蔭参り】（『岩波日本史辞典』）

江戸時代、庶民が集団的に伊勢神宮へ参詣した現象。一七〇五（宝永二）、七一（明和八）、一八三〇（天保一）の三回がとくに大規模であり、参加者も一七七一年は二〇〇万人、一八三〇年は

五〇〇万人にのぼった。伊勢神宮のお札が降るのを契機に参宮が開始され、多くは柄杓一本だけを持って参宮したが、中には凝った衣装で参宮する者もいた。彼らの多くは親や主人に無断で出てきた（抜ぬけ参り）であり、封建制社会への不満を表現した行動でもあった。

「参宮之儀人数申合たとへハ百人も存立候ハ、三拾人ほとツ、三切り又ハ二切りか、前後之儀は鬨取二成とも仕せ、前二参り候もの戻候て又差し候様ニ可仕事」（宝永二年（一七〇五）『十四日町年誌』）

参宮について、多人数が申し合せて、例えば一〇〇人が思い立ったなら、三〇人ほどずつ三組にするか二組にして、どちらが先発するかは籤にでもして決め、前に出かけた者が帰ってから次のグループを出発させなさい。

「参宮へ罷出候ハ、一軒之内より壹貳人より外無用二候、其もの罷戻り候ハ、重て残ル者罷出候様可仕候事」（同上）

参宮に出かけるときは、一軒のうちから一人より多く行くことはない。先に参宮した者が帰ってから、残った者が出かけるようにしない。

宝永二年（一七〇五）の御蔭参りの凄まじさが解り
ます。
(2009/02/06)

細物

「口上之覚

一私儀去夏方より細物商売少々仕候ニ付砂糖蘇枋木
めうばん類相添申度奉存候、尤只今迄右之類商売
仕不申候得共細物之方不勝手之筋も御座候ニ付、
此已後者商売仕度奉存候、買先之儀者広島世並屋
甚右衛門方より買請申度奉存候間、此已後右甚右
衛門方買請申候様ニ御赦免被為仰付被遣候様ニ被
仰上被下候者忝奉存候、以上

未四月廿三日

角屋九右衛門

年寄半平殿（以下略）

（享保十二年（一七二七）『竹原市史』）

私は去夏より「細物」商売を少々していますが、
商売が思わしくないので、以後は砂糖・蘇枋木
・明礬なども取扱いたいと思います。広島世並
屋甚右衛門方より仕入れますので許可を頂きま
すよう取りなしてください。

【細物】ほそもの。（『広辞苑』）

①（女房詞）そうめん。②黄金。③細身の太刀。

【小間物・細物・濃物】こまもの。（『古文書用語
大辞典』）

濃物は当て字。日常用いる化粧品や装身具・袋
物など。これを扱う商人を小間物屋という。

色々な「細物」が出てきましたが、「細物」小間
物」のことだと思えます。「蘇枋木」は「蘇枋木」
のことかも知れません。

【蘇芳・蘇方・蘇枋】すおう。（『広辞苑』）

①マメ科の小高木。インド・マレー原産の染料

植物。枝に小さいとげがある。葉は羽状複葉。黄色五弁花は円錐花序をなす。木質・楕円形の、中に三〜四個の種子を含む莢さやを生ずる。心材および莢は煎じて、古くから重要な赤色染料とされた。②染色の名。蘇芳の煎汁で染めた黒みを帯びた紅色。主要色素はブラジレインで、明礬媒染で赤色、灰汁で赤紫、鉄媒染では紫色に染めることができる。③襲かさねの色目。表は薄茶、裏は濃赤。すおうがさね。

【明礬】（『広辞苑』）

硫酸アルミニウムとアルカリ金属・アンモニウム・タリウムなどの硫酸塩との複塩の総称。一般には、硫酸アルミニウムの水溶液に硫酸カリウムを加えて結合させたカリウム明礬を指す。熱すれば結晶水を失い白色無定形の粉末（焼明礬）となる。水溶液は酸性を呈し、収斂しゅうれん性の味がある。媒染剤・収斂剤・製革・製紙など用途が広い。

「世並屋」は広島細工町の薬種商だと思いますが、

「小間物」「砂糖」「蘇枋」「明礬」……。どのような繋がりがあるのか、見当もつきません。

(2009/02/08)

包札

「 覚

一 御領分にて通用之銀札、当霜月朔日より広嶋革屋町札場にて三原屋清三郎三原屋小十郎伊予屋吉左衛門替出候間、金銀銭勝手次第持せ遣し望之札ニ引替通用可有之事、但御領分一円札遣ニ候候故、此後金銀之取遣ひ相止候筋に候得共、当分ハ銀札行渡かたく可有之候ニ付、其内は金銀ニても札ニても有合ニ随ひ通用不苦候、然共手問ニ及候儀も無之候処、態正金銀を好取遣候筋ハ決て有之間敷事

一 札ハ式分三分五分壹匁五匁之五品有之候、尤式分已下は錢遣候事

一 札替候儀銀子百目ニ付札百匁相渡候事、但金子

并銭は其日之相場を以銀に直し札相渡候事

一札を以金銀ニ引替候儀銘々望ニ応し無滞替渡候、

其節ハ札百弍匁ニ付銀百目相渡候事

一上納其外包札入用之節ハ別紙之通判賃相添、札場へ遣シ候者弍百目已上ハ好之通包可相渡候事、但包札取替いたし候節ハ包之上白紙之所ニ渡し方之名印月日を細筆に書付候て取替可在之候、書付いたし処無之様ニ成候分ハ札場へ遣候へハ包賃ニ不及引替相渡候、若包紙損し候敷、或は包之員数替候時者定之包賃出候事

一往来之旅人より金銀銭請取可申候、暫時にても御領分ニ逗留之他国人は札を調遣候様仕向、或ハ札を以金銀ニ引替度と望候類茂随分差閤不申様ニ其引請之方より肝煎遣し可申事

一損札は銀目之多少によらず札老枚ニ鳥目弍銭宛相添札場へ遣し引替申候事

一札場へ用事達ニ参候ものハ帖ニ記置先番次第請引いたし候間、作法宜仕相待候様ニ可相心得事、但毎日諸用朝五ツ時より八ツ半時迄相達候、然とも旅人或者御当地之人ニても無抛急用ニて金銀銭入

用之節ハ、何時によらず其訳札場へ相断候ハ、用事請引可致候事

右之通相心得諸商売其外取遣聊之無滞通用有之様ニ可仕候、遠郡村々等者随分便りを求札を調寄せ通用広く相成候様ニ可相心得候、惣て末々之ものニて当分銀札不見覺取遣うたかハしく存類も可在之間、其所之役人家主別て心を附遣し可申候、若不甘心之人へ銀目をいづわり札相渡候敷、又ハ自分之利徳を存悲分之仕形仕もの於有之者早速可申出候、急度御吟味可被仰付候事、以上

戌十月「(享保十五年(一七三〇))『竹原市史』」

一御領分で通用の銀札、当一一月一日より広島草屋町札場で三原屋清三郎・三原屋小十郎・伊予屋吉左衛門が交換するので、金・銀・銭を持参して望の銀札に引き替え使うこと。ただし、御領分全域で「札遣い」となるので、以後金銀の使用は禁止となるが、当分は銀札が行き渡らないのでしばらくは金銀でも札でも通用させるが、「手問」(不都合でもないのにわざわざ正金銀を好んで取遣りすることは決してしてはな

らない。

一 銀札は二分・三分・五分・一匁・五匁の五種類とする。二分以下の取引では錢を遣うこと。

一 銀札に替えるとき、銀子一〇〇目で銀札一〇一匁を渡す。ただし、金子(金貨)・錢はその日の相場で銀になおして銀札を渡す。

一 銀札を金銀に引替えたいときは、銘々の望に応じすぐに替え渡す。ただし、札一〇二匁で銀一〇〇目を渡す。

一 銀札での上納や「包札」が入用ときは、別紙の通り「判賃」を添えて札場へだせば、二〇〇目以上なら望み通り包んで渡す。ただし包札を取り替えたときは包紙の白紙部分へ渡した者の名印・月日を細筆に書付て取替える。書く余白がないときは札場へ持参すれば包賃不要で渡す。包紙が損じていたり、包の金額を変えるときは包賃を出す。

一 旅人より金銀錢を受取るとき、暫くでも御領分に逗留の他国人なら札を使わせなさい。また札を金銀に引替えるとき差支えないように世

話をしなさい。

一 損札は銀目の多少に関係なく札一枚鳥目二錢を添えて札場へ出せば引き替える。

一 札場へ用足しに來た者は帳面に記入し先番順に應對するので、作法よく待つようにしなさい。受付時間は朝八時より午後三時まで。ただし旅人または御当地の者でも急用で金銀錢が入用なら、何時でもその理由を札場で述べると應對する。

以上のように心得て諸商売など滞ることなく通用するようにしなさい。遠郡村々の者は伝を求めて銀札を取寄せ使いなさい。末々の者で当分は銀札に馴染がないので通用に疑いを持つかもしれないので、所の役人家主は特に配慮しなさい。不案内の人に額面を偽つて渡したり、自分の利益のため不法な仕形をする者があれば処罰するので申出なさい。

享保十五年(一七三〇)幕府が銀札通用を解禁すると、広島藩も早速、享保藩札を発行しました。これはその時の達です。面白いので長い引用になつてし

まいしました。

「包札」のことが書いてあります。この達では、包は二〇〇目以上で、二〇〇目の包なら五匁札として四〇枚を包んだことになります。(2009/02/09)

費用働

「乍恐御歎申上ル口上之覚

賀茂郡下市村

一当稲作、先月已来虫湧候儀、段々夥敷事ニ相成、……弥日々ニ稲かふ絶仕、村中田作之分不残かれ渡り、一向只今ニてハ種籾も無御座仕合ニて御座候故、百姓町人末々浮過之者共迄、昼夜此事耳打寄相歎キ、力ヲ落シ居申段、役人共方へ何角と銘々歎キ願等追々申出候事ニ御座候、然共役人とも力ニ及不申大變ニて御座候得ハ、驚人居申難儀至極ニ奉存候、乍然百姓末々迄、菜蕎麦等之作物乍此上随分気を附申様ニ申聞せ仕置申候……

一当村之儀ハ、近年打続作方商売方ともニ不宜、漸

々及困窮候上、当年麦作格別ニ取実無御座、こなし立候て驚入申処、又々夏作畑物、平年ニ合候てハ当麦作三四歩位之取実ニて御座候故、末々之者共ハ近來より難渋之者数多相見へ申候、当村ニハ両作苅こなし仕候砌者、町場之事ニ御座候得ハ、四五日斗之内ニ男女費用雇立ニ仕、取納候事ニ御座候得は、浮過小身之男女共ニ、自分之事ハ万端指止メ、費用働仕候て渡世之助ケニ仕来り申候処、当稲作一向絶申事ニて御座候得ハ、手ヲ明居申、可仕様ニ無御座」(享保十七年(一七三二)七月、『竹原市史』)

今年の稲作は先月(六月)以来虫が湧き、次第にひどくなっています。稲株も村中の田は全て枯れてしまい、種籾にも困る様子です。百姓・町人や末々の浮過の者共まで昼夜集つてこのことを歎き力を落し、役人共へ色々と歎願しますが、どうにもできず、菜や蕎麦などの作物に氣をつけるようにと申し聞かせるだけです。当村は近年打ち続き作方・商売ともに悪く困っておりま

すが、今年の麦作は特に取実がなく、こなしてみても驚く始末です。夏作物は平年の三四歩位の取実のため、末々の者どもでは難渋の者が増えていきます。当村では米麦の蒔こなしをするときは、町場のことで、四五日ばかり男女の費用(日庸)を雇い、取り納めるので、浮過小身の男女は自分の仕事は後回しにして日庸働きをして渡世の助けとしてきましたが、今年の稲作が全滅となれば仕事がなくなります。

享保の飢饉が始る様子を示す資料です。「浮過小身の者の日頃の仕事が変わります。」

【享保の飢饉】(『広辞苑』)

享保一七年(一七三二)、イナゴによる害で近畿以西をおそった大飢饉。餓死は一人以上と推定される。幕府は被害のない地方から救援米を送らせたので江戸でも米価が高騰、翌正月に打ちこわし起きた。

(2009/02/11)

卒と その二

「……もし兩三日之内、同方御出可被遣哉之御含も候ハ、御同行仕度候、不苦候ハ、御隙御聞せ被遣度候、何卒見合御供仕度候、右御尋迄、卒与如此御座候、以上 十一月二日」(串田弥助宛、頼春水書翰、岩室家文書)

もし二、三日のうち、同方へお出になるご予定でもおありなら、御同行したいと思えます。よかったですらご都合をお聞かせ下さい。なにとぞ見合せてお供いたします。右お尋ねまで、「卒与」このような次第です。

書翰の末尾に「卒与」という言葉がありました。

「そつ」と読めないこともありませんが、それでは意味が通りません。

2006/12/19 ブログで「卒と」を取り上げています。

「志賀之助は四ヶ年計江戸・横浜へ入込洋学執行致、近頃卒与帰候由」(慶応二年(一八六六)『村上家乗』)

志賀之助は四ヶ年ばかり江戸・横浜へ行つて洋学を勉強していましたが、近頃「卒与」帰つたそうです。

この例では、「卒与」は「秘かに」ではなく、「突然に」でした。

【卒】(『漢字源』)

①〔名〕十ぱひとからげの雑兵や人夫。小者たち。②〔形・副〕にわかに。急なさま。突然に。③〔動〕おわる。おえる。締めくくる。④〔名〕おわり。締めくくり。⑤シユツス〔動〕身分の高い人が死ぬ。⑥〔副〕ついに(ツヒニ)。おわりに。とどのつまりは。

「右御尋迄、卒与如此御座候」の「卒与」は「おわりに」の意味のようです。
(2009/02/14)

瀬違

「乍恐御願申上ル口上之覚

賀茂郡竹原下市村・同浜

一 当新町浜之儀者追々困究仕於町方者第一船付入江
二 廻船繫兼居申候処、商人共色々相働北国筋九州廻船是迄相応ニ売買仕申候得共、当年ニ至雨降
続成井川砂出夥數当沖口埋強格別之干潟小船之外
出入難相成必至之差間弥増困究ニ落入仕形無御座
候、百姓方ニて者古地新開より川底高ク相成湿気
強甚難洩仕候、塩浜之儀者古地新開より地ひく之
所砂出強候故、既ニ塩浜土地より川底高サ凡四五
尺余ニ相見へ申候、最早ヶ様ニ川底高相成申候て
ハ浜家業第一ニ相煩困究ニ落入申候事眼前ニ御座
候、併當時御大造成御物入承知乍仕ヶ様之筋御願
申上候段甚奉恐入候へ共、御仕懸ニ相成申候瀬違
御普請被成遣候へ者、多分御田地も出来仕下方困
究之多足ニ茂相成申候へ者、是迄御入込被遊候御

物入引起シ御上不益之筋二相当り候趣御座有間敷
与奉恐察候」(安永元年(一七七二)『竹原市史』)

竹原の新町・浜については次第に困窮しております。町方の廻船を入江に繋ぐのも苦勞しております。また商人共が色々と動いて北国筋・九州の廻船がこれまで相応に商売に来ておりますが、当年には雨が降続き、成井川が大量の砂を運んで当沖口を埋めて干潟になり、小船の他は出入できません。これでは困窮が増すばかりです。百姓にとつても古地・新開より川底が高く、水捌が悪く困っています。塩浜についても、古地・新開より低い所へ砂が溜り、塩浜の土地より川底が四五尺余も高くなっているようです。こうなると製塩業の困窮は眼前のことです。現在、大変な御物入で財政が逼迫していることは承知していますが、工事が未完成になつています成井川の「瀬違御普請」をしていただければ、多くの御田地も出来ることで、下方の困窮の足しにもなります。これまで注ぎ込んだ

費用も生きることになり、御上の不益になることはないと恐察いたします。

ここでは「瀬違御普請」と書いてありますが、次の資料では「瀬替」を使っています。

「成井川瀬替之儀は町浜大益之様二有之候所、御上御慮ヲ以追々普請出来、既ニ来春迄ニは凡成就いたし候趣恐悦之至候、就は兼て見込之通り、七軒堀干潟新開ニ築候ハ、尚又幾々大益ニ相成り可申、依之町浜申合此度御願申上候」

(天明二年(一七八二)「春風館日記」)

成井川の瀬替(流路変更)は町浜にとつて大益になり、御上のお考えで普請も進み、来春には完成しそうで喜ばしいことです。それに関連して予定通り、七軒堀干潟新開に築けば、「幾々」いっそうの大益になると考えますので、町浜の者が申し合せて御願申し上げます。

【瀬替】せがえ。(『広辞苑』)

河川の人工的な流路変更のこと。戦国時代末期

から江戸時代にかけて行われた治水工法の一。
江戸初期、伊奈備前守が行なった利根川・荒川
の瀬替がその代表例。つけかえ。

【瀬違ひ】（『治河要録』の注）

流路の付替え

【幾々】いくいく（『古文書用語大辞典』）

行々に同じ。「幾々難儀ニ罷成」やがて困難な
ことになり。
(2009/02/18)

一七日

「紀伊中納言様、今月十四日御逝去被遊候ニ付、昨
廿三日より一七日之間鳴物御停止ニ候条、末々迄
申聞せ、諸事穩便可仕様ニと御奉行様より被仰出
候ニ付、町中并ニ寺庵へ触状廻し申候」（宝永二
年（一七〇五）五月、『十四日町年誌』）

紀伊中納言様（紀州藩主、徳川綱教）は今月一四日
にお亡くなりになった。昨二三日より「一七日」

の間、鳴物御停止とするので、末々の者まで知
らせ、諸事穩便にするようにと御奉行様からの
指示があったので、町中や寺庵へ触状を出した。

この資料によると、紀伊中納言（紀州藩主、徳川綱
教）の死亡は宝永二年（一七〇五）五月十四日となつて
いますが、「五月十八日」とした資料（「Wikipedia」
など）も多く見られます。広島藩では二三日より「鳴
物御停止」の指示を出しています。江戸？から広島
まで知らせが伝わるには相当の時日が必要でしょう
から、「五月十四日」説の方が正しいのではないかと
思います。『藩史大事典』『江戸時代全大名家事典』
『大日本人名辞書』の説明も「五月十四日」でした。

ここに「一七日」という言葉が使っています。

【一七日】ひとなぬか。（『広辞苑』）

人が死んでから七日目の忌日。初七日。ひとな
のか。

【七七日】なななぬか。（『広辞苑』）

人の死後四九日目。また、その法事。四十九日。
満中陰。なななのか。しちしちにち。ななめぐ

り。

【七日七日】なぬかなぬか。（『広辞苑』）

七日ごとに死者の追善を営むべき日。初七日から四十九日に至る各七日目の法要。

「一七日」と書いていますが、連絡に時間がかかるため、単なる「七日間」の意味になっています。

(2009/02/20)

甘キ

「郡方諸役人中数多有之、往来人馬等其他費之儀有之并村々庄屋役人度々御当地へ罷出数日令逗留、不勝手数々有之旨被及聞召候、就夫今度郡方役人中并村廻り之者共下代御止被成、郡方支配役被仰付、郡之用事於会所被相勤、郡中ニは方角ヲ分所務役人被仰付并頭庄屋御定被成、村々諸用無遅滞聞届、百姓共費之儀無之、甘キ候様ニと被仰出候」
（正徳二年（一七二二）「鶴亭日記」第二卷）

郡方を担当する諸役人は多数おり、城下と郡部を往来する費用も少なくない。また村々の庄屋役人がたびたび広島へ出張して数日間逗留して、不勝手なことも多いと聞かれ、今度郡方役人・村廻りの者ども・下代を廃止して、郡方支配役を仰せ付けられ、郡の事務は会所ですることになった。郡中では地域を分けて所務役人・頭庄屋を任命して、村々の諸用は遅滞なく聞き届けることにした。これにより百姓どもの出費を無くして、「甘キ」候様にと仰せ出されたものである。

「甘ミ」と題してブログ（2006/09/15）に書きました。

「質素儉約筋之義ニ付ては度々触示し候処、近来は何となく相甘ミ、不当之着服等相用ひ、且饗応筋等奢美超過いたし候哉に相聞、甚以心得違ひ之義」

（嘉永二年（一八四九）野間家文書）

質素儉約筋のことについてはこれまで度々触れ

「手紙の日付は、平安時代から室町時代のころまでは、月と日を正しく数字で示した。が、二、三の特例を除くと、桃山時代のころになると、月に異名を用いたり、ただ日付の数字だけをぼつんと簡略に記したり、さまざまな書き方が見られる。」（小松繁美『手紙の歴史』）

手紙に日付だけを書くことはあっても、月だけを書くことはないでしょうから、これは「十二日」と読むと了解しました。

Dも同じ「十三し」ですが、「十三月」はないので「十三日」に決りです。くずし字辞典で「日」の崩しとして「し」は見つかりませんが、Eの例を見ると、「五日」に確定です。
(2009/02/28)

御酒湯被召上

「甚太夫様へ役人共御暇乞ニ罷出候所、備後守様御庖瘡弥御軽ク、先月廿九日御酒湯被召上候由被仰

聞候、就夫年寄徳右衛門・与頭中上下着仕、乍恐御勤番所へ御悦申上候」（宝永二年（一七〇五）「十四日町年誌」）

甚太夫様（御調郡代官、山香甚太夫へ尾道町の役人がお別れの挨拶に出向いたところ、備後守様（浅野吉長）の御庖瘡が確実に軽くなり、先月廿九日には「御酒湯被召上」とお聞きしたので、年寄徳右衛門・与頭どもは袴を着けて、御勤番所へお悦びに参上した。

浅野吉長は当時二四歳、広島藩第五代藩主になる前、庖瘡に罹りましたが軽くなったので「御酒湯をお召し上がりになった」という記事です。

「しょうが湯」は飲物の「湯」、「ゆず湯」は風呂の「湯」と解りますが、「酒湯」となると飲物か風呂か迷います。「召し上がる」のなら飲物だろうと見当をつけると大違い。以前、ブログ「酒湯」（2007/05/14）で記事にしました。

【笹湯・酒湯】ささゆ。（『広辞苑』）

庖瘡ほうそうの癒えた後、酒をまぜてつかわせ

た湯。また、それに浴すること。

「枇杷葉湯」という言葉も古文書で見かけることがあります。枇杷の葉には薬効成分があると聞きますので、これこそは風呂に入れるものと思いきや、

【枇杷葉湯】びわようとう。（『広辞苑』）

ビワの葉に肉桂・甘草・^{がじゆ}莪朮・甘茶などを細く切って混ぜ合せたものの煎汁。清涼飲料として用い、暑気あたりや痢病を防ぐ効能がある。京都烏丸に本家があり、江戸では馬喰町山口屋又三郎の店がこれを扱い宣伝用に路傍で無料で飲ませた。

(2009/03/06)

大なひ

「 覚

一筈九百六十帖 大なひ五十八束

因嶋

一筈五十八 大なひ三束

岩子嶋

(中略)

右は御船御用之苦并藁大なひ割符候条、前書之通念を入当十月限庄や・与頭之内老人相添、持参可仕候、若少二ても滞義於有之は、庄や・年寄・与頭越度可申付者也

六月廿五日 植木小右衛門

右浦嶋 庄や年寄与頭方へ」

(宝永二年(二七〇五)「十四日町年誌」)

これは藩の船手方に苦や大縄・苧縄を納めるよう、浦辺島方の村々に出された指示です。

【苦・篷】とま。（『広辞苑』）

菅や茅を菰のように編み、和船の上部や小家屋を覆うのに用いるもの。とば。

左図を見ると「苦」でなくて「筈」と書いてありますが、誤記ではないようです。

【筈】（『広辞苑』）

①（竹製の）むち。②（文字を書く）竹の板。竹

一筈の板を
大なひ五十八束
因嶋

簡。△「苦」に通じ、「とま」とも訓む。

「たけかんむり」も「くさかんむり」も同じようなものと言われれば、そうかなとも思います。

「苦」を数える単位は「帖」ですが、「チョウ」で辞書をひくと「↓ジョウ」とありました。

【帖】じょう。（『広辞苑』）

（慣用音。漢音はチョウ）①折り手本。折本。帳面。②法帖の略。③折本や帳面を数える語。幕二張を一まとめとして数える語。屏風・楯などを数える語。紙・海苔などの一定の枚数を一まとめにして数える語。

大縄（大綱）のことを「大なひ」と書いています。

縄は「縄^なう」ものだからでしょう。

【縄】（『漢字源』）

《意味》①（動）なう（ナフ）。わらをたたいて、なわをなう。②（動）しめる（シム）。ひもでしめる。

③（名）なわ（ナハ）。

縄を数える単位は「束」ですが、説明を読んでも

よく解りません。

【束】そく。（『単位の歴史辞典』）

たばねたものを数える語。……ものによつてその量は異なり、稲は一〇把を……一束という。ふつうは長さ三尺の縄で縛ったものを一束という。……
(2009/03/07)

不計・不斗

「然ル処、昨日□□通家の仁より、炊の手たすけにとて、十四才ニなり候小女ヲ明神下へ差遣し、下女にいたし、召使ひ候やう被申候故、その意ニ任せ、留め置申候」（文政六年（一八一三）篠斎宛『馬琴書翰選』）

ところが、昨日□□通家（昔から代々親しく交際している家）の人から、炊事の手助けといつて、十四才になった小娘を明神下へよこし、下女として召し使うようにと言われるので、留め置き



ました。

□□に相当する個所は「不計」か、それとも「不

斗」のどちらかですが、どちらで読み取るのがよいのでしょうか。

「不斗」なら、「ふと」（不意に）と読みますが、右図の注釈のように『計』に似てときに通用する」のなら、「はからず」とも読めます。文脈から考えて「はからず」と読むべき個所は、「計」と「斗」の字形の区別が付かないのなら、字義に適する「計」をとるべきだと思います。

【計】（『漢字源』）

《訓読み》 はからう／かぞえる（かぞふ）／
はかる／はかりごと／ばかり

【斗】（『漢字源』）

《訓読み》 ひしゃく／にわかに（にはかに）／
たたかう（たたかふ）
(2009/03/13)

当座賄・手賄

「都て普請ハ入用高少しハ増とも随分丈夫に申付べ

し。入用を厭ひ僅の減じに拘り当座賄に仕立置、出水の時保かひなく流失するときハ田畑も損じ、領主地頭の損亡のみならず、洪水の節ハ、民家ハ勿論人馬等も流失し、百姓の歎少からず。却て不益なり。」(『算法地方大成』)

全て土木工事は少々費用がかかっても極力丈夫に作るようにしなさい。入用を厭つてわずかの費用削減にこだわリ「当座賄」に仕立ててゐると、出水の時堪えられずに流失すれば田畑も損じ、領主地頭の損亡だけではなく、洪水ともなれば民家は勿論、人馬等も流失し、百姓の歎きも少なくない。結局は不益である。

【当座賄い】(『広辞苑』)

一時の間に合せにやりくりすること。

「虚無僧合鑑」枚宛、村々庄屋元へ相渡置候間、合印持参之ものハ合鑑ニ引合、相違無之分は手賄ニて宿之儀役人共へ願出候ハ、宿貸可申事」(天保五年(一八三四)、「鶴亭日記」)

虚無僧には虚無僧合鑑を一枚ずつ、村々の庄屋に渡しておくので、合印を持参している者には合鑑と照合し、相違がない場合は「手賄」での宿泊を役人共へ願ひ出たら、宿を貸しなさい。

【手賄】(『古文書用語大辞典』)

自分で食事を作ること。自分で負担すること。「無余儀是迄ハ御手賄ニて御召連之事と被存候」しかたなくこれまでは自分の負担で召し連れることと思われました。

「賄」の付く言葉はこれまでも話題にしました。

【賄い】(『広辞苑』)

①整備すること。ととのえること。②食事などを調べて供すること。また、その人。まかないかた。③世話・給仕をすること。また、その人。④取りつくろふこと。まにあわせ。⑤出費。

「当座賄」の「賄」は「④取りつくろふこと。まにあわせ」に当ります。「手賄」は⑤の「出費」に該当します。

(2009/03/15)

仮橋

「大渡り仮橋 壺ヶ所 長七拾四間貳尺三四寸
右ハ九月上旬より三月下旬迄掛置キ、夏分ハ引き、
材木朽損之刻ハ材木并大工扶持作料郡割、掛引夫
大工扶作料ハ近村式拾五ヶ村割賦に仕候」(文政
二年(一八一九)豊田郡本郷村国郡志御編集下しらへ書
出帖、『三原市史』)

「大渡り仮橋 壺ヶ所 長七拾四間(一三五^Ⅲ)、
幅貳尺三四寸(七〇^Ⅲ) この橋は九月上旬より
三月下旬まで架けておき、夏分は撤去する。材
木が朽損したときは材木・大工扶持作料は郡で
負担する。架設撤去の費用は近村二五ヶ村で分
担する。

この橋は本郷(三原市)に架かるもので、「大渡り」
の名前やその長さから「大川」(沼田川)を渡るもの
と思われる。 「仮橋」とあるので、

【仮橋】(『広辞苑』)

橋の工事中などに、一時的に架ける代りの橋。

と思いきや、そうではなく、寒い時期の半年間だけ
架けられるものです。夏なら橋がなくても「飛渡り」
で越えることもできますが、冬はそうもいきません。
郡費や近隣二五ヶ村が費用を負担するほどの重要な
橋なのに、なぜ夏期には撤去しなければならないの
でしょうか。

(2009/03/18)

近頃

「室主人

不及書答

餘一

以切紙得御意候、甚寒之砌弥御安全御座候哉承度
御座候、然て当年中ハ段々御世話ニ罷成辱儀ニ御
座候、尚来陽も不相替宜敷御頼申候、何ぞ御礼申
度候へ共、不任心底候候、此壺籠之内は近頃菲薄
之至ニ候へ共進上いたし候、御叱存も候ハ、辱御

座候、先は右得御意度如此候、以上

十二月廿五日」(室屋主人宛頼事庵書翰、岩室家文書)

切紙でお手紙を差しあげます。甚寒の季節ですがお健やかにお暮しでしょうか。さて当年中は色々御世話になりました。来春もよろしく願います。何か御礼をと思いますが思い通りになりません。この沓籠のものは「近頃」大変粗末なものが進上いたします。「御叱存」でもいただければと思います。以上、要件のみ。

歳暮に添えた書状です。「不及書答」(返事不要とあります。品物は何か書いてありませんが、籠に入るものなら魚でしょうか。「此沓籠之内は近頃菲薄之至二候へ共」の中で「近頃」に違和感を持ちました。調べてみると、「はなはだ」の意味がありました。

【近頃】(『広辞苑』)

①近い過去から現在までを漠然とさす語。この頃。近來。②(「近頃になく」の意から)たいそう。はなはだ。すこぶる。謡、鞍馬天狗「これ

は——狼藉なる者にて候」

調べてもわからないのは「叱存」という言葉です。「御歛之験迄致進上候、御叱存も候ハ、本懷不過之候」の例文もあります。

「御取収も候ハ、本懷存候」(お受取りいただければ幸いです)とサラリという場合もありますが、普通は、「御笑納御座候様支度」(苦笑いでもしながら受取ってください)が多いようです。「御叱存」は「つまらぬものを寄こしたと叱りながらでも受取る」ことでしょうか、そこまで言うか……と思います。

(2009/3/20)

二日路

「道中宿々之もの、不埒之儀有之節は、旅人により其所々問屋・年寄等、二日路・三日路も招呼、又は訴訟のために付添ひ参候儀も有之由相聞え候、たとひ宿々之もの不屈之仕方有之候共、問屋・年

寄招呼候ては宿人少々成、御用も差支申事候間、向後は問屋・年寄等招呼候儀ハ不及申、訴訟之ため付添参候事も相止させ、……」(天明二年(一七八二)「春水日記」)

雨乞

道中宿の者に不埒なことがあるとき、旅人によりその所の問屋・年寄等を「二日路・三日路」でも呼寄せたり、または訴訟のため付添いで来させることもあると聞いている。たとえ宿の者に不届の行いがあつたとしても、問屋・年寄を呼びつけては宿で人手不足になり、宿の御用にも差支えるので、今後は問屋・年寄等を呼びつけ、または訴訟のために付添わせることも禁止する。

これは幕府の出した触書の一部です。「二日路・三日路」という言葉が使われています。二日(三日)も要する道のりとのことですよ。

【路^ち】(『角川古語辞典』)

助数(日数に付けて)それだけの日数を要する道のりであることを表わす。「三日」「五日」

「一後地両庄屋より雨乞之儀申来候ニ付、相談之上願状調、ひかへ

願状

一夜焼 三十日、五十日 但、十二焼

一百八焼 一七日

一のほり

一相撲

一おとり

以上

七月廿四日

右五品書付、後地庄屋・同与頭一所ニ、社人衆同道ニて龍王御社前ニて雨乞之御祈祷申上、御鬺改申候処、おとり之御鬺ニて、来ル廿五日より七日まで之内、雨可被為下之由、後地庄屋方より年寄

方へ申来ル」(宝永二年(一七〇五)七月、「十四日町年誌」)

後地村の二人の庄屋から雨乞いについて申入れがあったので、相談して龍王への願状を作った。

これはその控。

願状には、①夜焼 三十日、五十日 但し十二焼、②百八焼 七日間、③幟、④相撲、⑤躍りの五種類を記入し、後地村庄屋・組頭が神主と同道し、龍王御社前で雨乞いの御祈禱をして、引いた御鬺を改めたところ、躍りの御鬺であったので、来る七月廿五日より八月七日までの内雨乞いの躍りをして、雨を下して頂くようにしたと、庄屋から町年寄に連絡があった。

この記事は雨乞いに関するものですが、難しい言葉が多く、何が書いてあるのかよく解りません。関係のありそうな言葉を辞書で調べました。

【十二焼】(『広辞苑』)

年占の一。豆・栗・胡桃くるみなどを月の数だけ焼いて、その焼け加減で天候豊凶を占う。東

北地方でいう。

【百人炬火】(『広辞苑』)

東日本で新盆の家あるいは村共同で焚く松明。

松火。万灯供養。万灯火。万灯。

【竜王】(『広辞苑』)

〔仏〕竜族の王。仏法を守護するものとする。

密教で雨を祈る本尊とする。

【雨乞い踊】(『広辞苑』)

雨乞いの祭に神仏に捧げる舞踊。多くは太鼓を

打ち、蓑・笠をつけて踊る。

【雨乞い】(『世界大百科事典』)

……日本の雨乞いには、鉦や太鼓をうちならし、念仏踊などをして、ひでりをもたらした邪霊を追い散らす雨乞踊のほかに、千焚き、千駄焚きといった、山上に薪をたくさん積み上げ、火を焚いて騒いだり、水神が住むと伝える池や泉の水をもらいうけ、これを氏神や水源地にまいたりする型がある。また百升洗いといって、升をたくさんあつめて、これを水神が住む池で洗ったりすることもある。かつて、牛や馬の首を水

神が住むという滝壺に沈めて、雨乞いがおこなわれたこともあつたが、この風習は、汚いことをきらう水神をおこらせると、水神があばれて雨を降らせるという信仰によるものであつた。雨乞いの祈願にしばしば人形が用いられるが、これは人形に降雨をさまたげる邪霊を追いはらう呪的な力がひそんでいると考えられていたことによる。また、雨乞いのために霊石が用いられたこともある。雨乞石とよばれる牛の形をした石の、鼻にあたる部分の穴に綱をとおして引くと雨が降ったとか、雨地藏とよばれる石の地藏を綱でしばり、これを淵に沈めておくと雨が降ったという伝承が各地にみられる。(伊藤 幹治)

「百八焼」「十二焼」は燈火(焚火)の数を表すものかも知れません。

雨乞いの行事として五つの案を立て、くじ引きで、雨乞い踊をすることに決ったようです。

尾道の近く、沼隈郡の雨乞いについて、次の記事

がありました。

「沼隈郡本郷と申村の雨乞は、八幡宮或は龍王社に、百姓群集し、鉦・太鼓をもち、竹竿に木綿或は紙をつけて幟のことくし、踊りを仕候事、乞候時も降り候も同事に御座候。就中鬼と申て、其面をかふり、紅しほりの襦袢など着し、黒き股引を仕り、四尺計の女竹に赤青の紙を巻き、これを棒となへ、団扇に色紙を付てひらめかし、脇指をさし、鉦・太鼓の拍子にあはせ踊り候。中山南と申には、八大龍王の左右に神燈を明し、前に神酒・御飯なとそなへ、社人は広前にて終日祓をよみ、氏子にはね踊り仕候。其体たらく、一人四斗樽のとき太鼓を、首にかけて脇にはさみ、又一人ちさき太鼓を同しく引かけ、又一人鉦を打、又壺人扇を持て、始め終りの世話する者あり。此四人を壺組と申。凡十五組或は二十組、いづれも小なる竹皮笠に丸ぐけの大紐、或は赤く或は黒きも有之。其扇を持たる男音頭を出すに、扇さしあけ、ゑいゑいおふといへは、鉦・太鼓持たる人人、さんまゐど

ふと答へ、それより太鼓・鉦の拍子を合せ、大庭を四五返はねまはり候。それより踊りになれば、右の扇持たる男、又おんとうを出し候。其うた、伝八兵衛茶屋にこそねつろといへは、鉦・太鼓の人々、茶屋が娘とうたひ、庭を四五返も廻り、踊り申候。還願の時も同断に候。さんまゐとうは、さあまゐらうと申語の叱(訛)音のよし申候。」(備後国福山領風俗問状答、『日本庶民生活史資料集成』)

沼隈郡本郷(現、福山市本郷町)という村の雨乞は、八幡宮か龍王社に百姓が群集して、鉦・太鼓を持ち、竹竿に木綿や紙をつけて幟のようにし、踊りをする。降った時も同様である。その中でも「鬼」といって面を被り、紅絞りの袴、黒い股引を着けて、四尺ばかりの女竹に赤青の紙を巻き、これを「棒」といい、団扇に色紙を付けてひらめかし、脇指をさし、鉦・太鼓の拍子に合わせて踊る。中山南(現、福山市沼隈町)では、八大龍王の左右に神燈をとぼし、前に神酒・御飯を供え、社人は社前で終日祓を読み、氏



子は「はね踊り」をする。その様子は、一人は四斗樽のような太鼓を首にかけて脇にはさみ、又一人は小さい太鼓を同じく引かけ、又一人は鉦を打ち、又一人は扇を持って始め終りの世話する者がいる。この四人を一組として、およそ十五組か二十組、小さな竹皮笠に丸ぐけの赤や黒の大紐、扇を持つ男が音頭を出して扇をさしあげ、「多い多いおふ」と言うと、鉦・太鼓持った人々は、「さんまゐどふ」と答える。それ

から太鼓・鉦の拍子を合せ、大庭を四五回撥ね廻る。それから踊りになれば、例の扇を持った男、また音頭を出す。その唄、「伝八兵衛茶屋にこそねつろ」と言えば、鉦・太鼓の人々は「茶屋が娘」と唄い、庭を四五回も廻って踊る。還願の時も同様である。「さんまゐとう」とは、「さあまゐらう」という語の訛という。

(2009/04/03)

小半酒

「婚礼窮達に適し一定しがたし、相生の松・鵲鴿の台・富貴冥加の押錫飴り・三ツ土器、其略に至ては小半酒に鯛漬、各其財の有無にかなふのみ、しかしいつれも良媒有て目出度相調ふ」（寺家村「国郡志就御用下しらへ書出帳」、文政二年（一八一九）「鶴亭日記」）

（賀茂郡寺家村の）婚礼の様子は貧富により一定

しがたい。金持は相生の松・鵲鴿の台・富貴冥加の押錫飴り・三ツ土器を準備するが、略式ともなると「小半酒」に「鯛漬」を出すだけである。しかし、いずれも良媒があり、目出度く調える。

【鵲鴿台】（『広辞苑』）

（鵲鴿が男女交合の道を教えたという神代紀上の説話による）婚礼の式に供える床飾りの一。島形もしくは洲浜形で、足は雲形。根固めに岩を置き、雌雄一番ひとつがいの鵲鴿を飾る。寝所飾り。

「小半酒」という言葉が使っています。接頭語の「小」は、

【小】（『広辞苑』）

「接頭」⑤半分の意を表す。「一半斤」「一なから」（五合の半分すなわち二合半）

などの意味があり、「半」に「小」が乗つくと、「半分の半分＝四分の一」になります。

【小半・二合半】（『広辞苑』）

① 半分の半分。四半分。② 米または酒の一升の四半分、すなわち二合五勺の称。

【小半酒】（『広辞苑』）

二合五勺の酒。また、少量の酒。

この資料での「小半酒」は「少量の酒」の意味で使われているのでしよう。

【小半】（『漢字源』）

大半（ほぼ三分の二）に対して、三分の一。〈同義語〉 少半。

漢和辞典は「小半」を「三分の一」と説明しています。

「鰯漬」とは「鰯の黒漬」のことでしょうか。「伊予和島の昔の名産品。瀬戸内で獲れた鰯の鰓を削いで塩漬にしたもの。黒くなるので黒漬けという。」

(2009/04/08)

宿送り

「竜神甚太夫様、御用御座候由にて、御郡代様より呼二、御宿送り御状参、松原次郎右衛門様、今日広嶋御立、陸路御越被遊候筈」（宝永二年（一七〇五）八月三日、「十四日町年誌」）

竜神甚太夫（御調甲奴郡代官）様に御用があるとのこと、御郡代様より呼出しの御状が「御宿送り」で（尾道に）届いた。（交替の）松原次郎右衛門様（御調甲奴郡代官）は、今日、広嶋を出発されて、陸路でお出でになる筈。

翌四日、松原次郎右衛門が尾道に到着すると、入れ替りに、竜神甚太夫が陸路で広嶋へ向けて出発しています。

同九日の記事に、「龍神甚太夫殿、御調・甲奴両郡免奉行被仰付」とあるので、代官から御免奉行（郡廻り）に昇進するための呼戻しと思われるす。

「元禄八年（一六九五）十二月、藩は天下送りの業務遂行規定を定めたが、その中で、多人数を要する荷物の場合には村夫の動員を命ずるとともに、「宿

送り」という藩用の通送役を整備し、各継宿に宿送り役をおいて天下送りと抱合せて差配させた。」

（『広島県史』）

「宿送り」とは、「天下送り」とは別に、各宿駅におかれた藩用の通送役です。

「天下送りとは幕府の公用文書通送役のことで、西国街道に沿った宿駅と指定の村々にその職がおかれ、順次荷物を継ぎ送っていた。」（『廿日市町史』）

「御鷹方より郡中へ之御用状村送り法則ニ候処、時切ヲ以被仰出候急御用之分、是迄駅送りニて往返有之候得共、宿送り之儀ハ郡方ニて約束之規合も有之候ニ付、右様急御用之分ハ已來御鷹方役所より飛脚差立、……」（文政十三年（一八三〇）「鶴亭日記」）

御鷹方役所より郡中への御用状の送達は「村送り」が原則であるが、時間指定の急御用状については、これまで「駅送り」で連絡をしていた。しかしこの「宿送り（駅送り）」については郡方

での規定もあるので、今後、急御用の連絡は御鷹方役所より飛脚を差し立て、……。

村から村へリレーする「村送り」より、宿駅からの駅にリレーする「宿送り」の方が早く届くようです。「飛脚」便ならもっと早そうですが、……。

「諸願、諸注進は、今後、飛脚を立てると失費を増すので、格別の事情のない限り、宿送りにすること。」（『新修尾道市史』）

（2009/04/18）

御書答ハ堅御断

「先達ては令弟御昏儀も首尾好御納被成候よし、幾久敷目出度、嚙々御満悦察入申候、……随て此一種、近頃菲薄之至ニ候得共、折ふし見来いたし候ニ付致進上候、聊以使申入候驗ニ御座候、御咲留可被下候ハ、可為本懷候、……尚々、御家内へもよろしく御伝声可被下候、又とうそ御多用中御書答ハ堅御断申候、以上」（室屋喜右衛門宛、頼杏

坪書翰)

先日は令弟の御婚儀も首尾よくお済みとのこと、おめでとうございます。さぞお悦びと存じます。この粗品はちょうど入手したもので、印までに進上いたします。御笑納ください。尚、御家内へもよろしくお伝え下さい。また御多用中の折柄、御書答は堅くお断りいたします。

気軽に手紙を出すことのできなかったことを思うと、「返事不要」とは、細かい心配りです。事情は違いますが、NHKの「気持が伝わるケータイメール術」の番組で、同じような話を聞きました。相手が返事に困るような内容のメールには、「このメールは返信不要です」と書くのがよいと。

(2009/04/23)

町中之貫

「祇園宮并二拝殿・御興殿・稻荷社・熊野伊勢社・

天神社共二、古来より町中之貫を以再興、或修造致来候」(尾道・常称寺文書)

祇園宮とその拝殿・御興殿や稻荷社・熊野伊勢社・天神社は、以前から「町中之貫」で再興したり修造してきました。

「町中之貫」という言葉が使っています。

「貫」に糸偏がついた「纒」なら、「ツナギ」と読み、「米銭などを各人各戸が出しあう」ことを意味する……と、以前、このブログに書きました。

(「纒」 2006/07/27 参照)

「一諸祭祀、諸勧進町方貫物、是迄仕来り候義は志次第新規之貫無用事」(寛政二年(一七九〇)、尾道町への俵約令、『広島県史』)

祭祀や勧進に際して、町方での「貫物」は、これまでの通り志次第とするが、新規の「貫」は許可しない。

この編者は「貫」に「纒」の注を付けています。

【貫】つなぐ。(柏書房『日本史用語辞典』)

續とも書く。つづける、財政維持をいう。

この辞書の意味の説明には頭を傾げますが、読みに関してはその通りでしょう。

「貫」・「續」はともに「つなぎ」と読み、「米銭などを各人各戸が出しあう」とことと理解しました。

『広島県史』は「縹米銀」に「つなぎ——」とルビを付けていますので、「縹」もその仲間に入れてよいでしょう。

(2009/05/01)

出違

「御他領辺相替風聞并ニ村方へ拘ル大事と見聞いたし候ハ、不日時移男女之差別なく早速役人元へ可申出、若役人出違候節、長百姓十人頭之内へ可申出、此段平常家内へ申聞置度事」(弘化二年(一八四五)『広島県史』)

御他領辺で何か変った噂とか、村方に関係する大事を見聞したら、すぐに男女に関係なく役人

元へ申し出なさい。もし役人が「出違」のときは、長百姓か十人頭に申し出なさい。このことは平常家族へも申し聞かせておきなさい。

「出違」は初めて目にする言葉で、早速辞書にあると、ありました。

【出違う】でちがう。(『広辞苑』)

入れちがいに出る。また、人の訪問を避けて外出する。

この文書の「出違」は、「入れちがいに出る」のではなく、「たまたま不在」ほどの意味でしょう。現在でも使われているのでしょうか、面白い言葉です。

(2009/05/03)

他所向 よそむき ④ 176
四日市御茶屋 よつかいちおちゃや ② 34
四ツ物成 よつものなり ④ 78
世並屋 よなみや ④ 172⑤ 149
夜拔 よぬけ ② 12
呼名 よびな ④ 138
余間 よま ④ 78
寄合丸給知 よりあいまるきゅうち ③ 13
四里踏 よりぶみ ② 118
夜四ツ七八歩 よるよつ ⑤ 56
宜男 よろしきおとこ ② 71

【ら】

頼杏坪 らいきょうへい ④ 160・173・182
頼山陽 らいさんよう ② 58③ 161・164
④ 53
頼春水 らいしゅんすい ⑤ 136・159
らる ③ 135
乱題 らんだい ④ 183

【り】

理屈 りくつ ③ 39
利足月老歩半 りそくつきいちぶはん① 110
里長 りちょう ① 118
利留メ りどめ ② 123
利走 りばしり ① 162
竜王 りゅうおう ⑤ 168
琉球芋 りゅうきゅういも ② 166
琉球風 りゅうきゅうかぜ ⑤ 117
流作場 りゅうさくば ⑤ 107
流質 りゅうしち ④ 89
両 りょう ③ 88
両御玄関 りょうおげんかん ③ 79
両替屋 りょうがえや ④ 56・92
猟師筒 りょうしづつ ③ 36
両人庄屋 りょうにんしょうや ④ 178
料理ヶ間敷 りょうりがましい ② 141
厘 りん ④ 42⑤ 62
厘米 りんまい ④ 25

【る・れ・ろ】

類病 るいびょう ⑤ 147
れいてんく ⑤ 145

連々作 れんれんさく ④ 36
「郎」と「良」 ろう ⑤ 4
蠟打 ろううち ② 57
臘月 ろうげつ ④ 55
籠者 ろうしゃ ② 164
老衰 ろうすい ④ 182
浪人 ろうにん ② 19
臘八 ろうはち ④ 54
六倍五割増 ろくばい ⑤ 74
六里踏 ろくりぶみ ② 117
轆轤木 ろくろぎ ④ 126
露封 ろふう ⑤ 139

【わ】

把 わ ② 106
賄賂 わいろ ⑤ 81
我が鍋之もの わがなべのもの ④ 191
訳り わかり ② 168
脇往還 わきおうかん ⑤ 74
態と わざと ④ 187
態飛脚 わざびきやく ② 175
纒敷 わずかしく ③ 154
早稲 わせ ④ 28⑤ 21
綿秋 わたあき ⑤ 25
綿が吹く わたがふく ① 87
綿繰車 わたくりぐるま ② 159
綿座 わたざ ④ 13・110
綿座切手 わたざきって ④ 110
渡辺華山 わたなべかざん ⑤ 86
咲ひ わらい ① 137⑤ 134
蕨粉 わらびこ ④ 45
割合 わりあい ⑤ 140
割庄屋 わりじょうや ② 189④ 10
割庄屋格 わりじょうやかく ④ 72
割庄屋同格 わりじょうやどうかく ④ 72
割を入 わりをいれる ⑤ 115
我等 われら ④ 186
我等共 われらども ④ 186

【その他】

真急 ③ 132
入々 ③ 148

孟冬 もうとう ④ 55
 孟明 もうめい ④ 55
 目論見 もくろみ ① 168
 模形 もけい ③ 78
 文字詞 もじことば ② 77
 モヂリ ② 143
 餅米 もちごめ ② 28
 尤も ごかし もつともごかし ③ 167
 元人 もとにん ① 125
 戻り 荷物 もどりにもつ ⑤ 143
 戻り 舟 もどりぶね ⑤ 145
 物書役 ものかきやく ③ 33
 物囉 ものもらい ① 98
 糲摺り もみすり ③ 137
 糲挽臼 もみすりうす ① 30
 糲摺り 垆合 もみすりぶあい ③ 137
 木綿収納銀 もめんしゅうのうぎん ④ 9
 もやい ③ 127⑤ 67
 萌やし もやし ① 57
 もやしもの ① 56
 貰い苗 もらいなえ ① 87
 不洩様 もらさぬよう ④ 20
 諸口 もろくち ④ 35・81
 紋付 もんつき ③ 169
 門徒 もんと ④ 103
 門張り もんばり ⑤ 137
 門触 もんぶれ ⑤ 137
 匁・文目 もんめ ③ 117
 匁札 もんめふだ ① 142
 門を打 もんをうつ ③ 176

【や】

糶・頓 やがて ② 101
 焼米 やきごめ ① 37
 焼畑 やきはた ② 114
 焼飯 やきめし ④ 12
 焼餅売 やきもちうり ⑤ 115
 役印借 やくいんがり ② 84
 役格 やくかく ② 190
 焼残と焼家の税率 やけのこりのぜいりつ ⑤ 89

兎游貝 やさら ① 97④ 40
 屋敷斗代 やしきとだい ④ 36
 夜食 やしょく ① 190
 夜前 やぜん ③ 47
 家代 やだい ① 54
 弥太郎 やたろう ⑤ 135
 厄害 やつかい ③ 161
 約男 やつかい ⑤ 63
 宿札 やどふだ ⑤ 71
 宿割衆 やどわりしゅう ⑤ 70
 藪入 やぶいり ③ 163
 流鏑馬 やぶさめ ① 143
 疾病 やまいへいなり ④ 168
 山県郡 やまがたぐん ④ 88
 山田 やまだ ② 169
 山の口明 やまのくちあけ ② 134

【ゆ】

湧水 ゆうすい ⑤ 3
 郵便制度 ゆうびんせいど ③ 54
 郵便報知 ゆうびんほうち ④ 71
 雪汁 ゆきしる ② 178
 行成 ゆきなり ③ 156
 甘ミ ゆるみ ① 57⑤ 158
 甘メ ゆるめ ④ 143
 甘米 ゆるめまい ② 108

【よ】

用意金 よういぎん ⑤ 120
 養女 ようじょ ④ 102
 宜候 ようそろ ④ 189
 用場 ようば ⑤ 38
 欲ヶ敷 よくがまし ③ 141
 余慶馬 よけいうま ⑤ 57
 横紙破り よこがみやぶり ④ 81
 横間 よこま ① 16
 余崎 よさき ⑤ 112
 好ミ よしみ ② 69
 余借 よしやく ③ 8
 世過ぎ よすぎ ① 99② 188
 寄せ村 よせむら ① 165
 他見向 よそみ ② 122

水上輪 みずあげわ ③ 140
 水祝 みずいわい ① 167
 水懸り みずがかり ② 83
 水がずる みずがずる ① 84
 身過ぎ みすぎ ① 99
 水子 みずこ ④ 191
 水越 みずこし ① 116
 水帳 みずちょう ③ 34
 水坪 みずつぼ ④ 191
 水野勝成 みずのかつなり ⑤ 30
 水野左近将監 みずのさこんしょうげん
 ① 158
 水刳 みずはね ① 106
 水持 みずもち ② 83
 水役 みずやく ③ 98・101 ④ 26
 水役銀 みずやくぎん ③ 95 ④ 27
 見せ消ち みせけち ② 142
 晦 みそか ④ 54
 三田川 みたがわ ④ 33
 見立 みたて ④ 114
 見立番付 みたてばんづけ ② 102
 道打 みちうち ② 149
 道幅 みちはば ① 85
 水漬 みづく ⑤ 106
 見附 みつけ ② 184
 見附田畑 みつけたはた ④ 36
 三ツ引御印幟 みつびきおしるしのぼり
 ③ 53
 見逃す・見遁す みのがす ② 195
 水内温泉 みのちおんせん ② 93
 三原屋 みはらや ④ 38 ④ 56
 身振 みぶり ④ 16 ④ 98
 身振狂言 みぶりきょうげん ④ 99
 見廻 みまい ⑤ 53
 身持之者 みもちのもの ③ 74
 三宅立續 みやけりつせき ③ 46
 宮沢賢治 みやざわけんじ ② 18
 宮嶋市 みやじまいち ⑤ 99
 宮島市立 みやじまいちだち ③ 20
 宮島の大芝居 みやじまのおおしばい ③ 20

宮島の富 みやじまのとみ ① 152

【む】

麦こぎ むぎこぎ ② 18
 麦こなし むぎこなし ② 18
 麦正月 むぎしょうがつ ① 62
 麦藁焼 むぎわらやき ① 28 ③ 94
 虫送り むしおくり ① 172
 無数 むすう ① 13
 結ぶ むすぶ ④ 175
 無高浮世過 むたかうきよすぎ ④ 17
 無高地 むたかち ④ 133
 無地高 むちたか ④ 132
 無用 むよう ③ 28
 村囲ひ むらかこい ④ 119
 村上彦右衛門 むらかみひこえもん

② 26・91

村借 むらがり ③ 138
 村高不易 むらだかふえき ③ 150
 村継 むらつぎ ① 36
 村調 むらととのえ ④ 99
 村八分 むらはちぶ ① 102
 室屋 むろや ④ 38・56

【め】

目当て めあて ③ 8
 銘酒屋 めいしゅや ④ 37
 著・目処 めど ③ 51
 目と刃 めともんめ ① 127
 面木 めんぎ ④ 157
 免状 めんじょう ① 165
 面取立 めんとりたて ④ 145 ⑤ 45
 面皮 めんび ③ 140
 免割 めんわり ④ 144 ⑤ 76
 面割 めんわり ⑤ 44

【も】

もあひ ③ 126
 孟夏 もうか ④ 55
 申値 もうしあい ① 18
 申形 もうしがた ① 52
 申聞 もうしきき ④ 22
 申試 もうしためす ⑤ 132

北極出地三十四度 ほっきよくしゅつち

② 159

ホツト ほつと ④ 147

殆ト ほとほと ① 173

殆飽果 ほとほとあきれはて ② 88

骨正月 ほねしょうがつ ① 63

本家 ほんけ ① 160

本郷駅 ほんごうえき ② 37

本宿 ほんじゅく ④ 6

梵天 ぼんてん ④ 181

斤度 ぼんど ④ 74

盆の掛取り ぼんのかけとり ⑤ 122

本百姓 ほんびやくしょう ④ 17

本役 ほんやく ④ 26

【ま】

牧 まい ④ 115

まいらせ候 まいらせそうろう ④ 159

前一日 まえいちにち ④ 54

前髪 まえがみ ③ 179

前島密 まえじまひそか ④ 71

前広 まえびろ ⑤ 55

賄い まかない ④ 161 ⑤ 164

賄札 まかないふだ ② 15

罷立 まかりたつ ⑤ 54

薪ぞうし まきぞうし ④ 164

間切帆 まぎりほ ② 100

間切る まぎる ② 100

枕金 まくらきん ④ 160

枕銀 まくらぎん ① 126

信 まこと ③ 121

孫六算盤 まごろくそろばん ① 187

升 ます ② 181

舛欠 ますかけ ① 109

枅掛 ますかけ ① 21

升突 ますつき ② 181

枅取 ますとり ⑤ 15

升廻し ますまわし ① 25 ⑤ 16・36・66

又候 またぞろ ④ 189

又者 またもの ④ 15

町方 まちかた ③ 72

町方水主銀 まちかたかこぎん ③ 98

町借押米 まちがりおさえまい ④ 143

町才覚 まちさいかく ② 30

町中之貫 まちじゅうのつなぎ ⑤ 174

町新開 まちしんがい ③ 73

町宅 まちたく ③ 81

町奉行所 まちぶぎょうしょ ③ 80

町奉行所支配 まちぶぎょうしょしはい

④ 108

町堀 まちぼり ⑤ 3

町門(木戸) まちもん(きど) ③ 177

町家(町屋) まちや ② 16

町家借屋 まちやしやくしゃ ② 16

町宿 まちやど ⑤ 105

松野唯次郎 まつのただじろう ① 144

松本安美 まつもとやすみ ⑤ 35

真艦梶 まともかじ ⑤ 129

真踏 まふみ ③ 125

魔除け幡 まよけばた ⑤ 130

丸 まる ④ 35

丸給知 まるきゅうち ③ 12

丸役 まるやく ④ 27

円法 まろきほう ⑤ 13

円法・平坪の法 まろきほう・ひらつぽのほう

⑤ 12

まわし ⑤ 16

廻し欠 まわしかけ ② 175 ⑤ 66

廻し俵 まわしだら ⑤ 65

廻 まわす ⑤ 65

万年丸 まんえんまる ② 26

【み】

見へ透 みえすき ② 156

水尾 みお ① 67

見送 みおくり ④ 66

御笹川 みささがわ ④ 32

三篠川 みささがわ ④ 33

御篠城 みささじょう ④ 33

三篠村 みささむら ④ 33

見醒め みざめ ③ 14

未進夫 みしんぶ ⑤ 102

拾物 ひろいもの ① 97
 広さ ひろさ ② 173
 広島 ひろしま ④ 32
 広島市 ひろしまし ④ 52
 広島独案内 ひろしまひとりあんない④ 55
 広島碑林 ひろしまひりん ⑤ 6
 広島府 ひろしまふ ④ 52
 広島町奉行 ひろしままちぶぎょう ④ 52
 枇杷葉湯 びわようとう ⑤ 161
 鬢 びん ⑤ 20

【ふ】

歩 ふ ② 41
 歩合 ぶあい ① 142
 普為知 ふいち ④ 51
 武一騒動 ぶいちそうどう ③ 121
 吹聴 ふいちよう ① 187④ 47
 普為聴 ふいちよう ④ 46
 封し ふうじ ④ 9
 風律 ふうりつ ③ 31⑤ 31
 不勝手 ふかつて ① 122
 不勘定 ふかんじょう ③ 123
 吹き込む ふきこむ ④ 66
 吹綿 ふきわた ④ 43
 歩銀 ぶぎん ② 40
 復月 ふくげつ ④ 55
 応ふ ふさう ② 166
 夫指 ぶさし ⑤ 109
 富士川文庫 ふじかわぶんこ ② 111
 夫食 ぶじき ③ 111
 不実場 ふじつば ② 85
 不印 ふじるし ⑤ 121
 不統 ふすべ ③ 124
 蕪村 ぶそん ① 71② 11③ 67
 札鎌 ふだかま ④ 114
 札續 ふだつなぎ ④ 101
 札屋札 ふだやふだ ④ 115
 扶持米 ふちまい ③ 15
 二日路 ふつかみち ⑤ 166
 仏護寺 ぶつごじ ④ 103
 不都東 ふつつか ④ 172

不定時法 ふていじほう ⑤ 56
 不図・風与 ふと ① 96
 不取引 ふとりひき ⑤ 40
 不風俗 ふふうぞく ⑤ 45
 ふ文字 ふもじ ② 78
 振り・風 ぶり ③ 35
 振合い ふりあい ③ 83
 振り売り ふりうり ① 68
 降りみ降らずみ ふりみふらずみ ② 180
 篩 ふるい ② 46
 触 ふれ ③ 61
 布令 ふれい ③ 61
 分 ふん・ぶ ④ 42
 文銀 ぶんぎん ⑤ 75
 分丈 ぶんじょう ④ 98
 分上 ぶんじょう ④ 99

【へ】

江 へ ② 136
 兵衛門 へいえもん ⑤ 60
 丙丁 へいてい ⑤ 18
 へか ③ 143
 別釜 べつがま ③ 64
 欠り へり ④ 75
 偏諱 へんき ⑤ 49
 返毫覚書 へんごうおぼえがき ③ 52
 返抄 へんしょう ③ 52

【ほ】

布衣 ほい ③ 32
 望 ぼう ④ 54
 報恩講 ほうおんこう ① 135
 反故・反古 ほうぐ ③ 61
 可為反古候 ほうぐたるべくそうろう③ 61
 奉公人 ほうこうにん ④ 15
 法寺 ほうじ ④ 77
 傍示 ぼうじ ⑤ 2
 亡所・亡処 ぼうしよ ③ 149
 報条 ほうじょう ⑤ 69
 北条時頼 ほうじょうときより ⑤ 30
 北堂 ほうどう ② 9
 ほしな釣 ほしなづり ⑤ 113

浜 はま ⑤ 35
 早追 はやおい ② 56
 早道ノ者 はやみちのもの ② 56
 腹合 はらあい ⑤ 17
 払押 はらいおさえ ④ 11
 払金二歩入 はらいきんにぶいり ④ 113
 払米 はらいまい ② 62
 腹書 はらがき ⑤ 51
 腹白米 はらじろまい ④ 76・86
 腹やすく はらやすく ② 200
 張札 はりふだ ② 128
 春凌 はるしのぎ ① 76
 春挽米 はるひきまい ③ 137
 春普請 はるぶしん ① 70③ 82
 藩医 はんい ④ 48
 判頭 はんがしら ⑤ 40
 番組 ばんぐみ ④ 177
 晩景 ばんけい ② 194
 判下 はんした ⑤ 40
 半紙壺丸 はんしひとまる ④ 35
 番田子 ばんたご ④ 128
 半知 はんち ② 54④ 78⑤ 47
 判賃 はんちん ③ 178⑤ 151
 半麦 はんばく ① 63
 半麦の飯 はんばくのめし ① 63
 半百 はんひやく ② 8
 半メ はんめ ① 7
 灰屋 はんや ③ 165
 半役 はんやく ④ 26

【ひ】

飛檐 ひえん ④ 78
 東御境 ひがしおさかい ② 59
 ひかた ⑤ 129
 匹・疋 ひき ③ 88⑤ 108
 避諱 ひき ⑤ 49
 引当 ひきあて ② 155
 引き馬 ひきうま ⑤ 128
 引尾 ひきお ① 67
 引負 ひきおい ⑤ 110
 低し ひきし ① 117

引^ヰ ひきしめ ① 185
 引通し ひきどおし ④ 170
 引物 ひきもの ④ 134
 挽 ひく ③ 137
 非工事 ひくじ ③ 37
 飛行 ひこう ③ 54
 秘骨 ひこつ ② 199
 久太郎 ひさたろう ④ 52
 美様 びさま ④ 50
 非事 ひじ ③ 39
 肥立 ひだち ⑤ 133
 引越 ひっこし ④ 102
 筆順 ひつじゅん ② 189
 人押 ひとおさえ ④ 7
 等敷 ひとしく ③ 122
 一つ書 ひとつがき ④ 90
 一つ成上米 ひとつなりあげ ⑤ 46
 一七日 ひとなぬか ⑤ 157
 人宿 ひとやど ① 167
 雛形 ひながた ④ 81
 火札 ひふだ ② 128
 姫宮早稲 ひめみやわせ ③ 93
 百姓代 ひゃくしょうだい ② 9
 百八炬火 ひゃくはちたきび ⑤ 168
 火山 ひやま ① 190
 費用働 ひようばたらき ⑤ 153
 評判 ひようばん ④ 45
 表裏 ひょうり ④ 122
 平 ひら ① 173
 平打 ひらうち ② 149③ 106
 平ラ様 ひらさま ④ 50
 平僧寺 ひらそうじ ④ 77
 艦 ひらた ② 28
 平田船 ひらたぶね ② 29
 平田屋橋 ひらたやばし ② 122
 平塚飄斎 ひらつかひょうさい ⑤ 65
 平坪 ひらつぽ ③ 152
 平坪の法 ひらつぽ ⑤ 14
 平野屋 ひらのや ④ 38
 平原主殿 ひらはらとのも ② 110

人足賃 にんそくちん ⑤ 43

【ぬ】

沼井 ぬい ④ 31

貫 ぬき ⑤ 83

抜け紙 ぬけがみ ④ 94

抜句 ぬけく ④ 182

抜け楮 ぬけこうぞ ④ 94

抜船 ぬけぶね ① 46

沼田郡 ぬまたぐん ④ 52

【ね】

根足 ねあし ② 121

子午改 ねうまのあらため ③ 35

子午の人馬改め ねうまのじんばあらため
② 20

根置 ねおき ① 31

鼠土 ねずみつつ ③ 63

族ヶ間敷 ねだれがまし ① 48

強請 ねだれがまし ① 49

念 ねん ④ 54

年貢米拵 ねんぐまいこしらえ ③ 11

年々引 ねんねんびき ④ 132・134

年番 ねんばん ④ 10

年番割庄屋 ねんばんわりじょうや ④ 10

【の】

野荒 のあらし ③ 76

農制随筆 のうせいずいひつ ⑤ 96

残し米 のこしまい ① 176

歹 のこり ① 185

残り米 のこりまい ① 177

野坂三益 のさかさんえき
① 50 ② 116 ④ 67

延舛 のべます ① 109

野間 のま ② 155

乗打 のりうち ② 95

乗掛 のりかけ ⑤ 43

乗掛馬 のりかけうま ⑤ 57

【は】

者 は ① 104

徘徊 はいかい ③ 128

致拝啓 はいけいいたす ④ 181

梅月 ばいげつ ④ 55

令拝見 はいけんせしめ ④ 193

梅颯 ばいし ④ 53

灰木 はいのき ④ 127

灰吹銀 はいふきぎん ⑤ 57

葉潤 はうるい ① 191

はえ ① 89

撞 はえる ④ 87

羽釜丁稚 はがまでつち ③ 180

馬鹿等敷 ばからしき ③ 122

不計・不斗 はからずも ⑤ 162

秤座 はかりざ ⑤ 146

激ミ はげみ ② 157

箱訴 はこそ ⑤ 41

稻架 はさ ③ 159

端裏書 はしうらがき ④ 137

端 はした ① 104

半下タ はした ② 119

端切手 はしたきって ③ 178

端銀 はしたぎん ⑤ 57

端俵 はしたたわら ① 24

半下米 はしたまい ② 120 ⑤ 36

破船 はせん ④ 104

礮 はた ③ 39

旅籠屋 はたごや ⑤ 105

畑田成 はたたなり ⑤ 3

八延 はちのべ ① 109

八分米 はちぶまい ⑤ 94

初午 はつうま ③ 72

八朔 はつさく ③ 69

ぱっと ④ 146

初穂 はつほ ③ 10

ハデ干 はでぼし ③ 159

放シ追 はなしおい ④ 170

放手形 はなちてがた ⑤ 9

はね ⑤ 65

はね踊り はねおどり ⑤ 170

刎俵 はねだわら ② 62

陌 はば ① 65

馬踏 ばふみ ① 31・168

富籤・富鬭 とみくじ① 152③ 170④ 101
 頓に とみに ② 101
 富元・富座 とみもと・とみざ ① 152
 弔・吊 とむらい ② 98
 土免 どめん ⑤ 92
 兎や角 とやかく ② 36
 取り とり ② 13
 取喰人 とりあつかい ② 24
 取置 とりおき ③ 110
 取替え とりかえ ③ 41④ 91
 鳥飴 とりかざり ① 53
 為取替 とりかわし ④ 91
 取毛 とりげ ③ 104
 取越正月 とりこししょうがつ ① 136
 取越米 とりこしまい ① 136
 取締・取縮 とりしまり ② 41
 取弾 とりしらべ ④ 74
 取なやミ とりなやみ ② 147
 取葺 とりぶき ④ 141
 取り遣り とりやり ② 14
 戸呂平 とろへい ① 127
 兜羅綿 とろめん ② 35

【な】

菜・魚 な ① 93
 内陣 ないじん ④ 78
 内密申上試ないみつもうしあげためし② 27
 菜鰯 ないわし ① 92
 長柄 ながえ ③ 32
 中か俵 なかだわら ③ 11
 中津領の倭約令 なかつりょうの
 けんやくれい ① 120
 中田 なかて ② 74⑤ 21
 中長紙 なかなががみ ① 157
 中荷馬 なかにうま ⑤ 57
 仲ヶ間直段 なかまねだん ③ 47
 中宿 なかやど ① 15
 長屋門 ながやもん ③ 175
 流合 ながれあい ① 96
 流質 ながれしち ④ 95
 投出 なげだし ② 198

投出し証文 なげだしょうもん ④ 151
 投文 なげぶみ ② 129⑤ 41
 被成 なされ ⑤ 51
 泥ミ なずみ ① 129
 菜種油 なたねあぶら ③ 146
 七草 ななくさ ④ 54
 七七日 なななぬか ⑤ 157
 何角 なにかと ③ 70
 何廉 なにかど ③ 71
 何敷 なにしき ③ 129
 何々迄 なになにまで ③ 91
 七日七日 なぬかなぬか ⑤ 158
 那波列翁大炮 なばれおんたいほう⑤ 123
 並 なみ ① 189
 並合 なみあい ① 188
 押 ならし ① 76
 坪し帳 ならしちょう ④ 190
 ならし餅 ならしもち ③ 29
 成方 なりかた ④ 120
 成尺 なるたけ ④ 169
 可成丈・成可丈 なるべくだけ ① 11
 可成程 なるべくほど ① 11
 令難渋 なんじゅうせしめ ⑤ 92
 為何 なんたる ③ 22
 何反帆 なんとんほ ① 20
 何となく なんとなく ① 169
 南蛮樋 なんばんひ ② 153

【に】

二月切 にがつきり ④ 96
 饒津神社 にぎつじんじや ① 143
 二季払 にきばらい ① 134⑤ 38・122
 西向く侍(士) にしむくさむらい ③ 158
 式尺手把 にしゃくたば ② 106
 二半 にはん ⑤ 86
 二毛作 にもうさく ② 171
 入花 にゅうか ④ 183
 入金一步入 にゅうきんいちぶいり ④ 113
 庭はへ にわはえ ④ 86
 人数改 にんずうあらため ③ 34
 人相書 にんそうがき ② 34

手置 ておき ① 69
 手重い ておもい ② 5
 出帰り でがえり ② 145
 手掛 てがけ ⑤ 42
 手紙の日付 てがみのひづけ ⑤ 159
 出替 でがわり ① 130
 出替奉公 でがわりぼうこう ① 130
 出来る できる ③ 59
 手籠 てごめ ⑤ 42
 出捨 ですて ① 74
 手代 てだい ④ 162 ⑤ 95
 出違 でちがい ⑤ 175
 手附 てつき ④ 162
 手次坊主 てつきぼうず ④ 103
 手作手絞 てづくりてしぼり ③ 146 ④ 158
 鉄山稼 てつざん ⑤ 26
 鉄山職人 てつざんしょくにん ⑤ 28
 デビ ⑤ 9
 手便 てびん ① 179
 手間 てま ③ 180
 出水坪 でみずつぼ ④ 191
 点 てん ② 166
 天下送り てんかおくり ⑤ 173
 伝正院 でんしょういん ④ 84
 天井川 てんじょうがわ ① 66
 天水 てんすい ④ 44 ⑤ 3
 天窓 てんそう ② 186
 伝八笠 でんぱちがさ ② 131
 田法 でんほう ② 171 ④ 30
 天保の飢饉 てんぼうのききん ① 143
 ② 44・128 ③ 58・75 ④ 68
 伝馬 てんま ⑤ 68
 天満屋 てんまや ④ 57
 伝馬役 てんまやく ⑤ 44
 天明の飢饉 てんめいのききん ③ 102
 点料 てんりょう ④ 183
 【と】
 同格 どうかく ④ 72
 当毛田 とうげだ ⑤ 4
 当毛畑 とうげばた ⑤ 4

盗刻 とうこく ⑤ 96
 当座 とうざ ③ 24
 東西南北の人 とうざいなんぼくのひと
 ③ 19
 当座賄・手賄 とうざまかない ⑤ 163
 当時 とうじ ① 13
 同日 どうじつ ② 104
 頭書 とうしょ ④ 89
 道場 どうじょう ④ 104
 当前 とうぜん ④ 43
 盗賊 とうぞく ④ 7
 当分 とうぶん ③ 24
 当分庄屋 とうぶんしょうや ② 81
 通馬 とおしうま ⑤ 128
 斗搔 とかき ① 21
 概屋 とかきや ④ 38
 不時飽 ときをあけず ② 160
 兎口 とうこう ② 35
 所替 ところがえ ④ 192
 所付 ところづけ ② 162
 所払 ところばらい ② 118 ⑤ 28
 所払之定法 ところばらいのじょうほう
 ⑤ 29
 年越 としこし ① 164
 年越祝ひ としこしいわい ① 163
 年増 としま ③ 108・109
 怒 どする ⑤ 118
 斗代 とだい ④ 29
 棚葺 とちぶき ④ 140
 ととう ③ 38
 とゝヲ・かゝア ② 168
 届敷 とどけしく ⑤ 66
 殿付 とのづけ ③ 68
 殿村安守 とのむらやすもり ② 5 ③ 5
 飛渡 とびわたり ① 78
 土兵 どへい ③ 65
 十方暮 とほうにくれる ③ 113
 苦 とま ⑤ 161
 苦小牧 とまこまい ④ 116
 泊附 とまりつき ⑤ 141

中 ちゅう ① 78
 中士 ちゅうし ③ 33
 中秋 ちゅうしゅう ④ 54
 仲春 ちゅうしゅん ④ 54
 貼 ちょう ④ 188
 帖 ちょう ④ 36
 丁打 ちょううち ⑤ 123
 町打 ちょううち ⑤ 123
 帳落寺 ちょうおちでら ③ 151
 町儀 ちょうぎ ① 159
 重九 ちょうきゅう ④ 54
 丁銀 ちょうぎん ⑤ 57
 重五 ちょうご ④ 54
 てうさん ③ 38
 丁銭 ちょうせん ④ 113⑤ 59
 朝鮮通信使 ちょうせんつうしんし ② 6
 ③ 114
 朝鮮綿 ちょうせんわた ④ 43
 丁場 ちょうば ① 116⑤ 107
 帖元 ちょうもと ⑤ 84
 重陽 ちょうよう ④ 54
 貯穀 ちょこく ③ 112
 鳥度 ちょうと ① 6
 ちよほくれ ① 141

【つ】

継馬 つぎうま ⑤ 128
 継送り つぎおくり ⑤ 44
 次ぎ親 つぎおや ① 154
 つきたてぼし ③ 160
 突頼母子 つきたのもし ③ 170
 二二 つぎに ② 192
 継交 つぎまぜ ⑤ 9
 付廻り つきまわり ④ 12
 築山為蔵 つきやまためぞう ① 146
 著 つく ④ 137
 造り酒屋 つくりざかや ④ 37
 次ル つぐる ① 73
 付紙 つけがみ ② 66
 付け届け つけとどけ ③ 49
 付荷 つけに ⑤ 43

差火 つけび ① 42
 晦 つごもり ① 80
 辻押 つじおし ④ 12
 辻借 つじがり ③ 138
 辻堂 つじどう ⑤ 30
 辻賄 つじまかない ④ 175
 つゞ・やさら ① 96

つつぽ正月 つつぽしょうがつ ① 63
 包銀 つつみぎん ③ 178
 包金銀 つつみきんぎん ③ 178
 包札 つつみふだ ⑤ 150
 湊 つどう ① 60
 勤崩 つとめくずし ① 75
 績 つなぎ ① 4
 績米銀 つなぎべきぎん ① 4
 繫 つなぐ ① 4
 貫ぐ つなぐ ④ 102
 ツ子 つね ④ 32
 粒立 つぶたつ ④ 15
 坪 つば ① 168③ 152
 坪刈り つばがり ② 181
 積帳面 つもりちようめん ④ 99
 積る つもる ④ 100
 熟・倩 つらつら ② 23
 つら水 つらみず ④ 124
 釣る つる ② 44
 弦掛栴 つるかけます ① 21
 鶴の含穂 つるのふくみほ ③ 92
 弦判 つるばん ① 21

【て】

出合清水 てあいのしみず ③ 46
 手当 てあて ① 70
 手余地 てあまりち ① 88
 手過 てあやまち ⑤ 85
 亭号 ていごう ③ 6
 定時法 ていじほう ② 92
 丁の日 ていのひ ④ 110
 釐等具 ていれんぐ ⑤ 146
 出浮 てうく ① 166
 手馬 てうま ② 99⑤ 28

大唐米 だいとうまい ① 34
 堆肥 たいひ ③ 79
 滞府 たいふ ① 148
 大炮 たいほう ④ 74
 太陽暦 たいようれき ③ 157
 太陽暦換算 たいようれきかんざん ① 22
 大吏 だいい ④ 150
 多賀庵碑 たがあん ⑤ 32
 多賀庵玄蛙 たがあんげんあ ② 29
 高内引 たかうちびき ④ 134⑤ 4
 高掛け取立物 たかがかりとりたてもの
 ④ 132・135
 高付 たかつき ④ 36
 高分り たかわかり ④ 130
 担桶 たご ④ 128
 他国米 たこくまい ④ 34
 助足 たし ④ 86
 多足 たそく ① 124
 佇む・イむ たたずむ ③ 55
 畳肥 たたみごえ ③ 78
 畳む たたむ ① 178
 たたら製鉄 たたらせいてつ ② 48
 多端 たたん ③ 60
 立木 たちき ③ 145
 立退所 たちのきしょ ① 158
 立宿 たちやど ① 14
 田丁・田町 たちよう ② 129
 駄賃 だちん ⑤ 43⑤ 69
 駄賃稼 たちんかせぎ ⑤ 44
 駄賃伝馬 だちんでんま ⑤ 68
 立木式搾り機 たつきしきしぼりき
 ④ 158
 竪紙 たてがみ ④ 81
 立砂 たてずな ④ 128
 立坪 たてつぼ ③ 152
 立・建 たてり ② 14
 建り合 たてりあい ② 15
 たでる ④ 167
 田徒 たと ④ 166
 棚川 たながわ ① 66

手無・袖無 たなし ③ 63
 谷・迫 たに・さこ ② 169
 種卸し・種下ろし たねおろし ③ 134
 種和シ たねかし ③ 134④ 76
 種野友直 たねのともなお ① 141
 種松 たねまつ ⑤ 2
 種籾おろし たねもみおろし ④ 76
 田の実 たのみ ③ 69
 頼母餅り たのもかざり ③ 69
 頼母子 たのもし ④ 160
 頼母子講 たのもしこう ① 125
 田面船 たのもぶね ③ 69
 束・手把 たば ② 107
 庇ふ・貯ふ・惜ふ たばう ③ 164
 多葉粉 たばこ ⑤ 26
 田畑成 たはたなり ⑤ 4
 田畑之位 たはたのくらしい ④ 36
 旅 たび ④ 17
 旅住居 たびずまい ④ 16
 給 たべる ① 6③ 28
 偶・適・会 たまたま ③ 105
 多門・多聞 たもん ① 46③ 174
 多門言葉 たもんことば ③ 174
 駄屋 だや ② 21③ 165
 たる砂 たるすな ① 86
 俵拵 たわらこしらえ ② 143
 俵付米 たわらづけまい ② 28
 俵廻し たわらまわし ⑤ 15
 檀那 だんな ⑤ 10
 端陽 たんよう ④ 54

【ち】

近頃 ちかごろ ⑤ 165
 扛秤 ちぎばかり ⑤ 146
 知行 ちぎよう ④ 78⑤ 47
 竹酔日 ちくすいじつ ④ 54
 知新集 ちしんしゅう ④ 57
 地鳥見 ちどりみ ④ 119
 地内木 ちなあいぎ ④ 125
 因頼母子 ちなみたのもし ① 126
 茶を煮る ちゃをにる ② 152

乃不与焉 すなわちくみせず ② 134

スベタ ④ 9

統べる すべる ③ 125

墨祝ひ すみいわい ① 164

墨付 すみつけ ① 164

数望 すもう ② 102

磨白 すりうす ① 30

すりさげ ⑤ 19

摺墨 するすみ ④ 135

寸暇 すんか ② 11

不得寸暇 すんかをえず ② 11

寸志 すんし ① 192

寸志銀 すんしぎん ① 192

【せ】

正貨 せいか ④ 23

情質 せいしつ ④ 149

製酒銘 せいしゅめい ④ 38

晴天十日 せいてんとおか ③ 42

制度 せいど ③ 75

情を出し せいをだし ④ 149

瀬替 せがえ ⑤ 156

関蔵人 せきくらんど ① 145

石州御銀 せきしゅうおぎん ⑤ 57

関札 せきふだ ① 158

鵲鴿台 せきれいだい ⑤ 171

瀬違 せちがい ⑤ 155

節 せつ ① 78

切切 せつせつ ③ 82

瀬取 せどり ③ 27

瀬取船 せどりぶね ③ 27

背中を押す せなかをおす ③ 26

銭縶 ぜにさし ① 128 ⑤ 84

銭相場 ぜにそうば ② 13

銭取遣 ぜにとりやり ② 13

被為 せられ ③ 135

迫り立 せりたて ② 176 ③ 145

糴約 せりつづめ ③ 144

世話敷 せわしく ③ 107

銭 せん ⑤ 70

千一 せんいち ② 135

仙固紙 せんかし ① 157

船滓 せんし ① 43

洗濯 せんたく ② 35 ③ 163

センタクアルキ ③ 163

洗濯泊 せんたくどまり ③ 163

善導印鑑 ぜんどういんかん ④ 47

先ン取 せんどり ③ 103

【そ】

象 ぞう ④ 5

莊子 そうじ ⑤ 118

凡而 そうじて ④ 83

送入籍 そうにゅうせき ④ 154

惣髪 そうはつ ③ 57

候者 そうらわば ② 138

候わゝ そうらわば ④ 150

候半 そうらわん ① 3 ④ 151

曾我豊後守 そがぶんごのかみ ③ 92

粉葺 そぎぶき ④ 140

束 そく ④ 35 ⑤ 162

素札 そさつ ④ 9

卒与 そつと ① 182 ⑤ 154

袖乞・袋乞 そでこい・ふくろごい ② 128

訴答 そとう ③ 140

外聞 そとぎき ③ 30

戯 そばえ ① 192

そばえる そばえる ⑤ 122

空色 そらいろ ② 35

夫切 それっきり ③ 34

そろ そろ ④ 188

そわい ① 89

損料借 そんりようがり ④ 123

【た】

弟鷹 だい ④ 119

代官 だいかん ④ 52・177

代官直支配 だいかんじきしはい ④ 107

大工卯之助 だいくのすけ ② 38

大俵 だいけん ② 42

大小暦 だいしょうれき ③ 158

太神宮之御祓新暦 だいじんじゅうの

おはらいしんれき ④ 111

出府 しゅつぷ ① 166
 巡見使 じゅんけんし ④ 6
 潤色 じゅんしよく ③ 173
 兄鷹 しょう ④ 119
 帖 じょう ⑤ 162
 定屋大橋 じょうおくおおはし ① 79
 状かさ じょうかさ ④ 97
 正月 しょうがつ ③ 157
 象魏 しょうぎ ③ 38⑤ 43
 定加り じょうくわわり ④ 178
 上下銀 じょうげぎん① 55・178② 10・25
 上元 じょうげん ④ 54
 咲語 しょうご ⑤ 133
 正五九 しょうごく ④ 84
 上士 じょうし ③ 33
 上巳 じょうし ④ 54
 焼失家屋 しょうしかおく ③ 97
 硝石 しょうせき ③ 77
 正石灰 しょうせっかい ⑤ 12
 令承知 しょうちせしめ ④ 192
 上納銀相場 じょうのうぎんそうば
 ④ 67
 正米 しょうまい ① 29
 春米 しょうまい ① 29
 庄屋 しょうや ④ 178
 庄屋支配 しょうやしはい ④ 108
 庄屋札 しょうやふだ ④ 115
 初会 しょかい ① 126
 職人引高 しょくにんひきだか ④ 26
 所作 しょさ ② 157
 諸色・諸式 しょしき ② 79
 助詞の「江」 じょしのえ ⑤ 97
 女子之業前 じょしのわざまえ ④ 98
 諸職人水役銀 しょしょくにんみずやくぎん
 ② 126④ 27
 除帳 じょちょう ① 103③ 16
 初二 しょに ④ 53
 所務 しょむ ⑤ 94
 初老 しょうろう ② 161
 白洗木 しらさき ④ 127

しらせ書 しらせがき ④ 50
 尻を押す しりをおす ③ 26
 士列 しれつ ③ 32
 しわく屋吉兵衛 しわくやきちべえ
 ⑤ 112
 陳 じん ④ 179
 尽 じん ④ 54
 新開組 しんがいぐみ ③ 73④ 52
 心学 しんがく ③ 120④ 47
 新貨条例 しんかじょうれい ⑤ 59
 人氣 じんき ② 34・37
 神家 じんけ ⑤ 146
 塵劫記 じんこうき ② 172⑤ 13
 人日 じんじつ ④ 54
 身上為持 しんしょうかせぎ ⑤ 135
 壬申戸籍 じんしんこせき ④ 154
 親切・深切 しんせつ ③ 148
 身代限り しんだいかぎり ③ 119
 人馬改め じんばあらため ② 71
 新浜 しんはま ④ 83
 【す】
 水滸伝 すいこでん ③ 127
 彗星 すいせい ① 119
 水丁場 すいちょうば ⑤ 107
 末姫 すえひめ ① 141
 居扶持米 すえぶちまい ③ 15
 居風呂 すえぶろ ① 132
 据える すえる ③ 133
 ずえる ずえる ① 76
 巢下ろし すおろし ① 152
 漉桁 すきげた ④ 81
 過楮 すぎこうぞ ④ 93
 透と すきと ① 175
 杉形 すぎなり ① 27
 過夫 すぎぶ ⑤ 102
 生業 すぎわい ② 178⑤ 93
 捨り すたり ② 30
 捨子人相書 すてごにんそうがき ⑤ 8
 捨文 すてぶみ ② 128
 砂浜り すなはまり ② 83

直乗船頭 じかのりせんどう ② 105
然者 しかれば ⑤ 16
敷 しき ① 168
直参 じきさん ④ 14
～敷 しく ③ 154
竺 じく ② 124
軸 じく ④ 139
熟与 じくと ① 19・20 ② 22 ⑤ 78
慈君 じくん ⑤ 17
時化味 しけあじ ① 5
字消し じけし ⑤ 88
時刻 じこく ⑤ 56
侍史 じし ④ 185
寺社帳 じしゃちょう ③ 151
時節柄 じせつがら ② 110
地他 じた ③ 53
慕ひ したい ① 90
随而 したがって ② 191・193
下地 したじ ① 23
仕出し しだし ④ 21
下弾書出帳 したしらべかきだしちょう
④ 74
認メ したため ③ 21
下見帳 したみちょう ④ 29
下宿 したやど ③ 44
下宿割帳 したやどわりちょう ⑤ 71
七十二町一里 しちじゅうにちょういちり
① 8
七夕 しちせき ④ 54
質屋定法 しちやじょうほう ④ 89
七厘米 しちりんまい ④ 25
しつくい ⑤ 18
叱存 しっそん ⑤ 166
実体 じってい ③ 25
実法 じっぽう ③ 112
実名 じつみょう ② 148 ③ 5
地頭 じとう ① 54
為成す しなす ① 50
仕習 しならい ③ 180
地掬 じならし ① 76

仕似せ しにせ ⑤ 67
老舗 しにせ ⑤ 68
死に残り しにのこり ② 44
地乗り航路 じのりこうろ ⑤ 112
支配人当テ しはいにんあて ④ 50
芝肴 しばざかな ⑤ 27
四半・幟半 しはん ③ 66
寺判 じはん ② 73
地百姓 じびやくしょう ④ 129
自普請 じぶしん ③ 87
染々 しみじみ ③ 22
紙魚日記 しみにつき ⑤ 30
令 しむ ⑤ 93
仕向 しむけ ① 179
締め しめ ④ 36
自滅 じめつ ③ 103
蛇籠 じゃかご ⑤ 13
釈氏 しゃくし ② 125
借錢なし しゃくせんなし ④ 76
釈奠 しゃくそん ④ 111
借知 しゃくち ② 109 ③ 70
借屋 しゃくや ② 16
社倉法 しゃそうほう ④ 120
積気 しゃつき ② 140
朱印人馬 しゅいんじんば ⑤ 69
自由 じゆう ② 76 ③ 85
祝儀米 しゅうぎまい ③ 9
十二焼 じゅうにやき ⑤ 168
拾人講 じゅうにんこう ① 126
十歩一銀 じゅうぶいちぎん ③ 42
秋分点 しゅうぶんてん ② 96
宗門受手形 しゅうもんうけてがた
⑤ 10
宿駅 しゅきえき ⑤ 44
宿送り しゅくおくり ⑤ 172
宿水 しゅくすい ② 45
宿継 しゅくつぎ ① 35
守護 しゅご ① 62
出他 しゅつた ⑤ 48
出来 しゅつたい ③ 58

柴籬 さいり ③ 6④ 114
 宰領 さいりょう ⑤ 57
 竿留 さおどめ ① 58
 竿除き さおのぞき ⑤ 91
 竿甘 さおゆるめ ① 58
 境松 さかいまつ ⑤ 2
 月代 さかやき ⑤ 9
 月代剃 さかやきざり ② 112
 左義長 さぎちょう ① 164② 117
 左義長巻建 さぎちょうまきたて
 ② 116
 先乗り さきのり ① 148
 先払 さきばらい ① 90
 先触れ さきぶれ ① 148
 朔 さく ④ 53
 酒切手 さけきって ⑤ 27
 下札 さげふだ ⑤ 45
 笹湯・酒湯 ささゆ ② 150
 刺 さし ① 21
 差合 さしあい ④ 159
 差替 さしかえ ⑤ 115
 差紙 さしがみ ① 156② 32
 差紙立 さしがみだて ② 32
 差紙納 さしがみのう ④ 143
 差繰 さしくる ③ 115
 差心得 さしこころえ ① 32
 差立 さしたて ② 87
 差次 さしつぎ ① 156
 差次・差継 さしつぎ ③ 18
 差次払 さしつぎばらい ③ 18④ 143
 差し担い さしにない ③ 85
 差し火 さしび ① 42
 差引 ム さしひきしめ ① 185
 刺米 さしまい ⑤ 33
 さし持 さしもつ ③ 84
 差縄 さしもつれ ④ 151
 差し許す さしゆるす ③ 57
 差許・差免 さしゆるす ③ 57④ 106
 座順 ざじゅん ② 190
 差寄せ さしよせ ② 86

左側通行 さそくつうこう ④ 167
 札包賃 さつつつみちん ③ 179
 札場 さつば ④ 23④ 110⑤ 150
 薩摩芋 さつまいも ① 124
 サツマ風 さつまかぜ ⑤ 116
 さでる ① 82
 実を操る さねをくる ② 159
 サハイ虫 さはいむし ① 172
 指別 さべつ ① 157
 ざまく ① 100
 様付 さまづけ ③ 68
 様と殿 さまととの ⑤ 58
 侍・侍士 さむらい ① 116③ 32
 座本 ざもと ② 114
 皿秤 さらばかり ⑤ 146
 沢讃岐 さわさぬき ① 146
 サンカ ③ 56
 参勤交代 さんきんこうたい ⑤ 127
 参宮の犬 さんぐうのいぬ ④ 80
 三献 さんこん ① 121
 三斎月 さんさいがつ ④ 84
 栈俵 さんだわら ③ 11
 算当 さんとう ⑤ 12
 三斗俵 さんとびょう ① 25
 三之瀬 さんのせ ③ 114
 三八便 さんぱちびん ④ 116
 参府 さんぶ ① 147
 山林諸荷物 さんりんしょにもつ ③ 41

【し】

時合 じあい ② 109
 地合 じあい ③ 24
 仕当 しあて ① 163
 仕合 しあわせ ② 34
 似雲 じうん ③ 87④ 175
 汐垣 しおがき ⑤ 129
 仕置 しおき ② 129
 直宛テ じかあて ④ 50
 士格 しかく ④ 46
 然而 しかして ⑤ 16
 地方 じかた ③ 72

五七日 ごしちにち ③ 67
五七年 ごしちねん ③ 66
腰付 こしつけ ② 131
御自分 ごじぶん ③ 155
越米 こしまい ④ 93
御祝儀米 ごしゅうぎまい ② 27
五十町一里 ごじゅうりいちり ① 8
小正月 こしょうがつ ① 164
御書答ハ堅御断 ごしょとうは
かたくおことわり ⑤ 173
小尻 こじり ① 24
鑑 こじり ① 24
腰ヲおす こしをおす ③ 26
期す ごす ③ 109
小炭 こずみ ② 48
五節句払 ごせつくばらい ① 134
御前 ごぜん ② 25
御前米 ごぜんまい ② 25
御膳米 ごぜんまい ② 25
社 こそ ③ 39
こだなし ③ 62
御多門 ごたもん ③ 175
東風 こち ① 95
戸長 こちょう ④ 107
小使 こづかい ④ 12
小晦日 こつもごり ① 80
小面 こづら ① 112 ⑤ 41
小体 こてい ③ 168
事ヶ間し ことがまし ① 80
事々敷 ことごとしく ② 184
五斗印 ごとじるし ⑤ 132
事すぐれたる科人 ことにすぐれたる
とがにん ⑤ 78
言葉を引下げ ことばをひきさげ ④ 19
五斗味噌 ごとみそ ⑤ 132
小半 こなから ⑤ 172
小半酒 こなからざけ ⑤ 171
五人組 ごにんぐみ ② 87
好ミ このみ ② 69
小春 こはる ④ 55

小一畝 こひとせ ④ 30
五百掛の令 ごひやくかけのせい ④ 110
御普請 ごふしん ③ 88
小芙蓉山 こふようやま ⑤ 34
胡粉 ごふん ② 46
五平太 ごへいだ ① 44
小間 こま ③ 95
小間銀 こまぎん ③ 96 ④ 13
小間績 こまつなぎ ③ 96
細物 こまもの ⑤ 149
小廻り こまわり ④ 156
込米 こみまい ① 26・150
虚無僧合鑑 こむそうあいかん ⑤ 164
米入 こめいれ ⑤ 33
米納 こめおさめ ④ 143
米拵 こめこしらえ ⑤ 32
米立 こめだて ① 33
米払 こめばらい ⑤ 33
米払歩米 こめはらいぶまい ⑤ 34
米宿 こめやど ⑤ 34
五もし ごもじ ② 78
小家 こや ④ 17
小家住居 こやずまい ④ 18
御厄害 ごやつかい ④ 154
御用聞酒屋 ごようきさきかや ④ 38
御用銀 ごようぎん ① 4・193
御領分追放 こりょうぶんついほう
② 34 ② 59
之 これ ② 6
虎狼痢 これら ④ 187
被下之 これをくださる ② 6
国澁栗 ころり ② 111
今文字 こんもうじ ② 77
【さ】
差 さ ② 88
才覚 さいかく ② 31
西国街道筋道幅 さいごくかいどうみちはば
① 86
西条柿 さいじょうがき ① 58
采地 さいち ④ 78

芸備孝義伝 げいびこうぎでん ④ 171
 景物 けいぶつ ④ 182
 鯨油 げいゆ ③ 113
 けしからぬ ④ 120
 下執事 げしつじ ④ 185
 下宿 げしゆく ⑤ 17
 下女あしらい げじょあしらい ④ 19
 毛上合力 けじょうこうろく
 ② 197 ⑤ 102
 下足 げそく ① 114
 下代 げだい ④ 162
 決而 けって ④ 180
 關所 けつしょ ③ 84
 下人 げにん ④ 18
 下馬 げば ② 95
 毛坊主 けぼうず ④ 103
 玄蛙 げんあ ③ 45
 欠画 げんかく ⑤ 49
 敵君 げんくん ⑤ 18
 軒号 けんごう ③ 6
 現在 げんざい ④ 43
 兼帯庄屋 けんたいしょうや ② 82
 元服 げんぷく ③ 180
 元文金銀 げんぶんきんぎん ⑤ 76
 見聞わらひ集 けんぶんわらいしゅう

① 140

見文字 けんもじ ② 78

【こ】

小 こ ⑤ 171
 小以締 こいしめ ① 85
 小以高 こいだか ① 85
 後一日 ごいちにち ④ 54
 口演書 こうえんしょ ① 41 ④ 90
 業鏡 ごうきょう ④ 85
 合字 ごうじ ① 105
 講中 こうじゅう ③ 165
 口銭 こうせん ② 41
 楮 こうぞ ③ 106
 こうそ ③ 38
 広太 こうだい ③ 71

小内 こうち ⑤ 21
 勾配 こうばい ① 168
 幸便 こうびん ④ 173
 郷保 ごうほ ④ 150
 合穂 ごうほ ⑤ 95
 合米 ごうまい ① 150
 拷問 ごうもん ⑤ 115
 合薬 ごうやく ④ 174
 郷宿 ごうやど ③ 140
 絞油税 こうゆぜい ④ 74・157
 高利 こうり ① 110
 合力 ごうりき ② 196
 合力米 ごうりきまい ② 196
 広陵 こうりょう ① 118 ④ 150
 肥草刈 こえくさがり ④ 166
 肥松 こえまつ ① 190
 小貝 こがい ④ 40
 ごかし ③ 167
 御起居被成 ごききよなされ ⑤ 50
 極銀所 ごくぎんしょ ④ 24
 国産 こくさん ④ 24
 石銭 こくぜに ③ 27
 石代 こくだい ③ 178
 石代納 こくだいのう ④ 143
 石間出高 こくまでだか ⑤ 4
 五組 ごくみ ③ 73
 五組の大年寄 ごくみのおおとしより
 ④ 58
 備御苦労 ごくろうをそなえる ④ 68
 柿葺 こけらぶき ④ 141
 御減石 ごげんこく
 ② 109 ④ 78・109 ⑤ 47
 古検地 こけんち ④ 31
 五合摺 ごごうずり ① 29 ③ 137
 御国恩 ごこくおん ③ 154
 御国産第一 ごこくさんだいいち ④ 43
 小越船 こごしぶね ② 26
 心拍子 こころびょうし ① 195
 警師 こし ② 113
 御直参 ごじきさん ④ 14

既望 きぼう ④ 54
 木村丹波 きむらたんば ① 145
 鳩居堂 きゅうきよどう ③ 162
 休日 きゅうじつ ① 133
 休日の覚え方 きゅうじつのおぼえかた
 ① 133
 給人 きゅうにん ④ 144
 給人法 きゅうにんほう ⑤ 36
 休泊 きゅうはく ① 148
 気動 きゆうぎ ③ 34
 得御意 ぎよいをえる ① 17④ 131⑤ 73
 崎陽 きよう ① 118
 教訓道しるへ きょうくんみちしるべ
 ⑤ 67
 享保の飢饉 きょうほうのききん
 ① 180⑤ 154
 京桝 きょうます ① 26
 向來 きょうらい ④ 44
 曲亭馬琴 きょくていばきん ③ 5
 許太 きよた ⑤ 38
 切り・限 きり ④ 96
 切替畑 きりかえばた ② 114
 切金 きりがね ② 10
 切賃 きりちん ② 146
 切月 きりづき ④ 89・95
 切畠 きりはた ② 114
 切米取り きりまいどり ② 55③ 33
 切免 きりめん ④ 164
 欣慰 きんい ⑤ 141
 銀札 ぎんさつ ① 142④ 23・110⑤ 150
 銀札場 ぎんさつば ③ 177
 銀建 ぎんだて ① 33
 勤番 きんばん ④ 193
 金百疋 きんひゃつびき ③ 88
 銀歩 ぎんぷ ① 142④ 113
 金屋 きんや ④ 38
 【く】
 杭柵 くいしがらみ ② 121
 釘貫 くぎぬき ② 94
 くごし・くぐし ① 29

草稻 くさいね ① 172
 芸る・耘る くさぎる ② 179
 草手 くさて ② 76
 草手銀 くさてぎん ② 67
 草麦 くさむぎ ① 171
 籤親 くじおや ① 154
 鬨帳 くじちょう ② 80
 鬨取札 くじとりふだ ② 79
 籤引き くじびき ③ 169
 具足 ぐそく ② 163
 被下物 くだされもの ⑤ 108
 口過 くちすぎ ① 98
 口違ひ くちちがい ⑤ 115
 口へ文を吹込 くちへふみをふきこむ
 ④ 65
 屈する くつする ② 37
 甘キ くつろぎ ⑤ 158
 工手間 くでま ③ 116
 口入 くにゅう ① 153
 窪処 くぼしょ ② 45
 愚昧 ぐまい ① 101
 愚昧之百姓 ぐまいのひやくしょう ① 101
 熊谷鳩居堂 くまがいきゅうきよどう ④ 52
 公問佗 くもんわび ⑤ 80
 位下り くらいさがり ④ 190
 蔵入地 くらいらち ① 150
 蔵掛ケ屋根 くらかけやね ③ 119
 蔵付・倉付 くらつけ ③ 10
 操綿 くりわた ① 45・46
 車判 くるまばん ⑤ 41
 九六銭 くろくぜに ④ 113⑤ 59
 黒田斎 くろだいつき ① 146
 郡借 ぐんがり ③ 138
 郡御用屋敷 ぐんごようやしき ④ 156
 郡中底引 ぐんちゅうそこびき ② 102
 訓点 くんてん ② 166
 軍役 ぐんやく ④ 78⑤ 47
 郡割 ぐんわり ④ 11
 【け】
 慶長金 けいちょうきん ⑤ 119

被衣初め かづきぞめ ② 77
 閭高 かづきだか ④ 133
 勝手 かって ① 121
 勝手二付 かってにつき ① 121
 鉄判枡 かなばんます ① 21
 金芽木 かなめぎ ④ 127
 曲尺勾配 かねこうばい ① 168
 預而 かねて ① 123
 蚊ふすめ かふすめ ① 28③ 94
 嘉平 かへい ④ 55
 壁隣 かべどなり ⑤ 80
 がましい ② 140
 竈 かまど ③ 168
 竈改 かまどあらため ③ 168
 竈数 かまどすう ⑤ 84
 鎌留 かまどめ ② 133
 鎌札 かまふだ ④ 115
 上向 かみむき ② 154
 賀屋忠恕 かやただひろ ③ 120
 粥之実 かゆのみ ③ 154
 唐竿 からさお ② 18
 唐崎常陸介 からさきひたちのすけ ⑤ 138
 唐樋 からひ ② 153
 借替 かりかえ ④ 100
 刈敷 かりしき ④ 167
 仮橋 かりばし ⑤ 165
 刈干し かりぼし ③ 160
 彼是 かれこれ ③ 46
 河井継之助 かわいつぐのすけ
 ① 8・155③ 122
 川裏 かわうら ① 168
 川表 かわおもて ① 168
 川替 かわがえ ④ 184
 皮楮 かわこうぞ ④ 93
 皮楮六貫目かへ かわこうぞ
 ろっかんめがえ ④ 95
 為替 かわせ ④ 92
 かわもち ① 64
 川除 かわよけ ① 106・168
 川除堤 かわよけつづみ ⑤ 91

川除堤目論見 かわよけつづみもくろみ
 ① 167
 瓦師 かわらし ④ 142
 瓦葺 かわらぶき ④ 141
 かんかんのう ② 151
 鳶木 がんぎ ② 26
 管弦祭 かんげんさい ② 194
 干支紀日法 かんしきじつほう ④ 111
 願主 がんしゅ ④ 140・160
 勘定所物書役並 かんじょうしょ
 ものかきやくなみ ④ 163
 欠立 かんだち ② 174⑤ 15
 菅茶山 かんちやざん ④ 138
 巻頭 かんとう ④ 139
 勘弁 かんべん ① 51
 願解き がんほどき ② 89
 欠米 かんまい ① 150④ 75⑤ 77
 貫文 かんもん ③ 88
【き】
 貴意 きい ① 17
 得貴意 きいをえる ④ 131
 聞き合せる ききあわせる ③ 31
 承届 ききとどけ ④ 171
 聞き逃す ききのがす ② 195
 聞ケ不申 きけもうさず ⑤ 134
 聞 きける ④ 22
 児游貝 きさご ① 97
 帰住 きじゅう ③ 17
 帰城 きじょう ① 147
 帰省 きせい ② 58
 競立 きそいたつ ③ 44
 気助 きだすけ ④ 117
 北平・南平 きたびらみなみびら ① 173
 木賃宿 きちんやど ⑤ 105
 屹度・急度 きつと ② 89③ 7・37
 無屹度 きつとなく ② 89
 寄特 きとく ③ 26
 気ノツマラス きのつまらぬ ④ 118
 気毒 きのどく ④ 70
 幾望 きぼう ④ 53

御戻米 おもどしまい ② 108④ 78
 思惑買 おもわぐがい ④ 34
 御役所 おやくしょ ③ 80
 御屋敷様 おやしきさま ① 40② 27
 御触通 おゆうずう ① 151
 御甘米 おゆるめまい ④ 78
 おろし米 おろしまい ⑤ 28
 御医師格 おんいしかく ④ 46・48・49
 御医師組 おんいしぐみ ④ 49
 恩送り おんおくり ① 107
 隠地 おんじ ③ 131
 御百姓 おんひやくしやう ① 113
 御船手 おんふなて ⑤ 90

【か】

改印札 かいいんさつ ④ 110
 廻国 かいこく ③ 101
 買ヅ かいしめ ④ 34
 開春 かいしゆん ④ 54
 海田市 かいたいち ④ 123
 改歩 かいぶ ④ 113
 買船 かいぶね ① 93
 海陸道順達日記 かいりくどうじゆんたつ
 　　につき ⑤ 131
 会林 かいりん ④ 140
 買う かう ① 15
 返掛け かえしがけ ① 126④ 160
 抱屋敷 かかえやしき ② 61
 抱・拘 かかえる・かかわる ① 91
 賀美永蔵 かがみえいぞう ⑤ 96
 賀美公台 かがみこうだい ⑤ 96
 不抱 かかわらず ① 91
 書留 かきどめ ④ 50
 格 かく ④ 72
 刈机・加杭 かくい ② 49
 かしく ④ 160
 格式 かくしき ④ 73
 客星 かくせい ① 119
 鶴亭 かくてい ③ 6
 かぐる ⑤ 116
 欠 かけ ④ 75

篋 かけい ② 46
 掛送り かけおくり ① 126
 懸紙 かけがみ ② 66
 駆込訴 かけこみそ ③ 142
 懸ケ作 かけさく ④ 69
 掛け下げ かけさげ ④ 190
 懸け造り かけづくり ① 100
 翔付 かけつけ ① 158
 掛渡井 かけどい ② 47
 欠ケ流 かけながれ ② 83
 懸引 かけひき ② 49
 掛ケ引 かけひき ② 50
 懸廻し かけまわし ⑤ 36
 掛持ち かけもち ② 60
 掛持家 かけもちいえ ② 60
 掛持庄屋 かけもちしょうや ② 60② 82
 駕籠 かご ② 115
 水主役 かこやく ③ 98・98④ 13
 　　⑤ 90・100・111
 水主役銀 かこやくぎん ③ 98・99
 重ミ かさみ ① 60
 下士 かし ③ 33
 借付 かしつけ ① 55
 貸付金 かしつけきん ③ 41
 貸本屋 かしほんや ③ 48
 家小 かししょう ② 92
 和す かす ③ 134
 冠米 かずきまい ③ 49
 被く かずく ③ 50
 掠める かすめる ② 193
 風起筵 かぜおこし ② 19
 拵 かせぎ ① 6
 くハタ々々 かたかた ② 122
 かたき売 かたぎうり ① 68
 形付百姓 かたづけびやくしやう ⑤ 103
 片旅籠 かたはたご ⑤ 104
 徒士 かし ③ 32
 加帳 かちょう ⑤ 10
 徒渡・歩行渡 かちわたり ① 78
 村閭 かづき ⑤ 103

大卅日 おおみそか ⑤ 37
 大目付格 おおめつけかく ④ 72
 大目付同格 おおめつけどうかく ④ 72
 大森陣屋 おおもりじんや ⑤ 55
 大門を打つ おおもんをうつ ③ 177
 大割 おおわり ④ 13
 大割方 おおわりかた ④ 13
 大割銀 おおわりぎん ④ 13
 大割年番 おおわりねんばん ④ 12
 御蔭参り おかげまいり ⑤ 148
 於勝殿 おかつどの ② 14
 おがみ ③ 163
 岡岷山 おかみんざん ① 22 ③ 107
 御借米 おかりまい ④ 78 ⑤ 47
 御簡易筋 おかんいすじ ⑤ 22
 沖船頭 おきせんどう ② 105
 沖乗り航路 おきのり ⑤ 112 ⑤ 126
 御銀馬 おぎんうま ⑤ 57
 御銀出 おぎんだし ③ 105
 御蔵所 おくらしょ ② 64
 送り証文 おくりしょうもん ① 121 ② 104
 送り以得御意候 おくりをもってぎよいを
 えそうろう ⑤ 73
 御下代 おげだい ⑤ 56
 怠る おこたる ④ 136
 御小人 おこびと ② 15 ③ 32 ④ 15・157
 御小人賄札 おこびとまかないふだ ② 15
 御小休 おこやすみ ② 33
 押える おさえる ④ 144
 御酒湯被召上
 おささゆめしあげらる ⑤ 160
 御差紙立米 おさしがみだてまい ② 33
 御差次納 おさしつぎおさめ ② 32
 御刺米 おさしまい ④ 85
 おさる ⑤ 9
 押合 おしあい ⑤ 47
 押借り おしがり ③ 121
 押搾 おしならし ① 75
 御仕向 おしむけ ① 180
 惜め々々 おしめおしめ ③ 12

御透覧 おすきみ ⑤ 123
 御側医師 おそばいし ④ 49
 御側医師並 おそばいしなみ ④ 49
 お駄賃 おだちん ⑤ 44
 御建山 おたてやま ⑤ 24
 御為倒し おためごかし ③ 167
 落葉搔取 おちばかきとり ① 81
 御序の御前御用 おついでのごぜんごよう
 ③ 32
 御勤ヶ間敷 おつとめがましく ④ 110
 男部屋 おとこべや ⑤ 56 ⑤ 114
 威・臧 おどし ② 163
 威筒 おどしづつ ② 37 ③ 36
 落し文 おとしぶみ ② 129
 御留山 おとめやま ⑤ 23
 御供船 おともぶね ⑤ 125
 御取替米 おとりかえまい ② 188
 御取越 おとりこし ① 135
 御長家 おながや ③ 175
 同ク格 おなじくかく ④ 72
 御名乗 おなのり ⑤ 50
 御成間 おなりのま ② 34
 御庭ハエ おにわはえ ⑤ 34
 小野川 おのがわ ① 107
 御残し米 おのこしまい ① 177
 御登せ米 おのぼせまい ⑤ 32
 尾道 おのみち ② 41
 尾道御着船 おのみちごちゃくせん ⑤ 125
 御乗馬 おのりうま ⑤ 57
 御牽馬 おひきうま ⑤ 127
 御人出 おひとで ④ 7
 御昼御膳所 おひるおぜんしょ ② 33
 御誉・御賞 おほめ ③ 90
 入御聴 おみみにいり ④ 64
 達御聴 おみみにたっし ④ 64
 御目見医師 おめみえいし ④ 49
 思ひ入買 おもいいれがい ④ 34
 表 おもて ① 16
 表借屋 おもてじゃくや ① 161
 表店 おもてだな ① 161

上田少蔵 うえだしょうぞう ④ 138

植え物 うえもの ④ 153

浮置 うきおく ② 187

萍日記 うきくさにつき ② 28

浮過 うきすぎ ② 187④ 26⑤ 94

浮過わひ うきすぎわい ⑤ 93

浮地 うきち ② 197③ 40

浮儲 うきもうけ ② 187

請々 うけうけ ④ 109

浮け貼り うけばり ② 178

請米 うけまい ① 84・① 93

有残・胡散 うさん ② 97

春 うすづく ① 31

うだり ① 82

内俵 うちだわら ③ 11

打歩 うちぶ ④ 23・113

内割 うちわり ⑤ 81

鬱陶 うっとう ① 71

饅飩 うどん ④ 125

畝足袋 うねたび ⑤ 14

馬足 うまあし ④ 142

馬頭 うまがしら ⑤ 43

馬指 うまさし ⑤ 108

馬責 うまぜめ ④ 82

馬代 うまだい ② 107

馬主 うまぬし ⑤ 43

馬持 うまもち ③ 32

馬宿 うまやど ④ 6

うむとん ④ 124

裏 うら ① 15

裏入 うらいり ① 16

裏借屋 うらじゃくや ① 161

浦辺御蔵所 うらべおくらしょ ② 64

潤 うるおい ③ 173

上置 うわおき ④ 108

浮塵子 うんか ③ 113

運賃米 うんちんまい ② 63

【え】

永貫文 えいかんもん ① 185④ 68

永日 えいじつ ③ 109

永代上限 えいたいあげきり ① 184

永年 えいねん ④ 156

榮耀普請 えいようぶしん ③ 165

えごのき ④ 126

江戸のおかゝ えどのおかか ① 141

江波丁打場 えばちょううちば ⑤ 123

海老屋 えびや ④ 38

絵符 えぶ ③ 180③ 181

猿猴 えんこう ② 20

遠行 えんこう ② 8

遠州御崎 えんしゅうみさき ④ 105

焰硝土 えんしょうつち ③ 63

円積率 えんせきりつ ⑤ 13

塩田 えんでん ④ 31

【お】

御跡慕ひ おあとしたい ① 90

追上 おいあげ ⑤ 102

追揚百姓 おいあげびやくしやう ③ 118

追先触 おいさきぶれ ⑤ 142

御暇 おいとま ① 146

被成御入候 おいりなされそうろう ⑤ 143

御移 おうつり ⑤ 64

大形 おおかた ③ 86

不大形・不大方 おおかたならず ② 39

大川かかり おおかわがかり ④ 44

大塩の乱 おおしおのらん ③ 21④ 93

大塩平八郎 おおしおへいはちろう ③ 94

大炭 おおずみ ② 48

被為御付 おおせつけなされ ③ 171

太田川 おおたがわ ④ 33

太田川の水運と舟宿 おおたがわの

すいうんとふなやど ② 29

太田金右衛門 おおたきんえもん ④ 71

大田南畝 おおたなんぼ ① 8

大東 おおたば ① 154

大体 おおてい ③ 168

大年寄 おおどしより ④ 11・56

大なひ おおない ⑤ 161

大橋主税 おおはしちから ① 146

大橋経登 おおはしつねと ① 132

難有狩 ありがたがる ① 3
 有付百姓 ありつきひやくしょう ① 182
 有付 ありつく ① 181
 有附 ありつく ⑤ 26
 有米 ありまい ④ 28
 現米 ありまい ⑤ 95
 庵号 あんごう ③ 6
 案紙 あんし ⑤ 61
 安政金銀 あんせいきんぎん ⑤ 121
 便輿・安駄 あんだ ① 36② 40

【い】

家取立 いえとりたて ④ 145
 家持 いえもち ② 17
 家役 いえやく ④ 26
 如何し いかがし ② 144
 如何わしい いかがわしい ② 144
 生高 いきだか ① 88
 生高免 いきだかめん ① 88
 息杖 いきづえ ③ 85
 幾々 いくいく ② 142⑤ 157
 幾許 いくばく ③ 19
 池月 いけづき ④ 135
 石打 いしうち ① 139
 医師成願書 いしなりがんしょ ① 10
 伊勢参宮 いせさんぐう ⑤ 63
 惟然 いぜん ② 186
 居船頭 いせんどう ② 105
 已前二認 いぜんにしたため ③ 171
 礮はへ いそばえ ① 88
 可為致 いたさすべく ⑤ 11
 致 いたす ⑤ 40
 板場 いたば ① 170② 58
 市場 いちあがり ⑤ 99
 逸々 いちいち ② 191
 不一応 いちおうならず ④ 109
 一字拝領 いちじはいりょう ② 148
 壹駄荷 いちだに ⑤ 43
 老人扶持 いちにんぶち ④ 49
 一倍 いちばい ② 127
 一分 いちぶん ① 139

一里 いちり ① 7
 一厘米 いちりんまい ④ 25
 一六勝負 いちろくしょうぶ ① 146
 一六便 いちろくびん ④ 117
 厳島博覧会 いつくしまはくらんかい⑤ 98
 一作引 いっさくびき ④ 135
 一銭三分 いっせんさんぶ ⑤ 69
 五ツ物成 いつものなり④ 78⑤ 46・47
 いつ也とも いつなりとも ② 157
 乍例 いつもながら ⑤ 139
 井手 いで ① 65
 井手水懸り いでみずがかり ④ 45
 井手役 いでやく ④ 166
 為慰 いとなす ⑤ 141
 稲子・蝗 いなご ③ 113
 稲星 いなぼし ① 119
 蝗虫 いなむし ③ 113
 稲若丸 いねわかまる ① 118
 伊能忠敬 いのうただたか ② 159
 猪鹿 いのしか ② 37
 命つり いのちつり ② 43
 今中大学 いまなかだいがく ① 145
 いもち病 いもちびょう ④ 28
 いられ子 いられこ ① 34④ 27・48
 入会 いりあい ④ 115
 入切手 いりきって ② 137
 煎海鼠 いりこ ④ 146
 入作 いりさく ④ 130
 入百姓 いりびやくしょう ④ 129
 入米 いりまい ① 26・150
 入置欠算用 いれおきかけさんよう ⑤ 77
 入置米 いれおきまい ⑤ 76
 入草 いれくさ ④ 166
 院家 いんげ ④ 78
 印地 いんじ ① 139
 因の嶋米 いんのしままい ② 25
 印免 いんめん ② 165

【う】

ウィーン万国博覧会 ういーんばんこく
 はくらんかい ⑤ 99

第1集～第5集 総索引

【あ】

相生橋趾碑 あいおいばし ⑤ 5
 合鑑 あいかん ① 153
 合鑑紙 あいかんがみ ① 152
 相聞 あいきこえ ④ 174
 合口 あいくち ⑤ 87
 相組 あいくみ ④ 39
 相借家 あいじゃくや
 ① 54 ② 16 ④ 18 ⑤ 110
 相対 あいたい ① 39 ⑤ 40
 相代官 あいだいかん ⑤ 111
 相対死 あいたいじに ① 40
 相多門 あいたもん ⑤ 109
 合符 あいふ ① 153
 合札 あいふだ ① 154
 可被相触 あいふらるべく ① 12
 可相触 あいふるべく ① 12
 相部屋 あいべや ⑤ 110
 青木 あおき ④ 43
 青毛 あおげ ① 87
 青米 あおまい ③ 160 ⑤ 33
 赤木 あかぎ ④ 43
 垢付 あかつき ② 52
 赤米 あかまい ⑤ 33
 上り金相場 あがりきんそうば ④ 68
 上り銀相場 あがりぎんそうば ④ 67
 上り田 あがりた ④ 88
 上田地 あがりでんじ ② 198
 上り家 あがりや ③ 83
 揚屋 あがりや ③ 84
 上り屋敷 あがりやしき ③ 84
 安芸郡 あきぐん ④ 52
 安芸路乗り あきじのり ⑤ 126
 安芸のト脱け あきのとぬけ ④ 147
 安芸木綿 あきもめん ③ 146
 悪情 あくしょう ④ 148
 悪水 あくすい ① 66

芥川貞佐 あくたがわていさ ④ 121
 芥川屋 あくたがわや ④ 56
 悪田不知 あくでんしらず ④ 76
 上限 あげきり ① 194
 上米 あげまい ④ 78 ⑤ 46
 朝都 あさいち ② 113
 浅野忠義 あさのただよし ② 162
 浅野長懋 あさのながとし ① 155
 浅野長訓 あさのながみち ③ 132
 浅野斉肅 あさのなりたか ② 149
 浅野宗恒 あさのむねつね ③ 29
 浅野慶熾 あさのよしてる ② 148
 朝八字 あさはちじ ② 90
 アサリ ④ 41
 足輕 あしがる ② 15 ③ 32 ④ 15
 足弱 あしよわ ④ 24
 預り申金子 あずかりもうすきんす ② 53
 焦る あせる ② 51
 当前 あたりまえ ② 132
 彼方此方 あちこち ① 95
 西風東風 あちこち ① 95 ④ 8
 噎 あつかう ② 24
 あとの鴈先二成り あとのかりさきになり
 ④ 116
 あの御方 あのおかた ③ 31
 阿部半左衛門 あべはんざえもん
 ① 144
 阿部正倫 あべまささともし ③ 108
 雨池 あまいけ ② 130
 雨乞 あまごい ① 191 ④ 88 ⑤ 167
 雨乞い踊 あまごいおどり ① 192 ⑤ 168
 雨障子 あましようじ ① 56
 雨落 あめおち ① 183
 雨落何坪 あめおちなんつぽ ① 184
 危敷 あやしく ③ 82
 危踏 あやぶむ ③ 65
 改め あらため ② 20

言葉を“面白狩る” 第5集

——広島古文書から——

<http://plaza.rakuten.co.jp/yohgo/>

2009年5月30日 発行

高橋 新一 編集

(Mail: tak10172@gmail.com)